

# フェイト/デザートラン ナー

いざかひと

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——西暦2713年。

地球全土は2300年代まで続いた戦争により、海すら消えた荒野と化した。

人類の多くは地下都市に逃げ、AIの支配を受けながら、希望もなく生きていた。

少女『モモ』は、自らのサーヴァントと家族のように暮らしながら、何もかも監視され、管理される日々をおくっていた。

だが、そんな生活は突然にぶち壊される。

意味不明な『聖杯戦争』、巻き込まれ死んでいく人々、焼けていく故郷。

サーヴァントのマスターとして、争いを招く存在となってしまうモモは、「聖杯戦争

で苦しむ人を助けたい」という決意を胸に、追われるように故郷を後にする。

これは、終末を迎えた世界を行く少女達の物語。様々な愛の形に出会う旅。

……そして、長い路の果てに、世界を救うことが出来たのだ。

※上記の文の通り、荒廃した世界を旅する、デイストピア・ポストアポカリプス・ロードムービー風のお話です。

※文中での2回改行は時間経過を表し、4回改行されている部分は場面転換や語り手の変更などを示します。

皆様が読む際の助けになれば幸いです。

※2019年8月25日から某所に投稿していたものを、書いた本人が修正・再構成したものです。

※オリジナル世界線、オリジナル設定が主軸のfate二次創作です。

オリジナルキャラクター・オリジナルサーヴァントはたくさん登場します。

# 目次

第6話 モモチちゃん工場見学

90

第1章 終末世界のガール・ミーツ・

ガール

第7話 希望は手の甲の上 | 107

第1話 管理世界のあの子と私

第8話 全て雷光で切り裂いて 123

1

第3章 終末世界の幾末は

第2話 黄昏は突然に | 16

第3話 少女の志しは星より青く

第9話 いつか世界を救うもの 138

31

第4話 ピュグマリオンは孤独に踊

第10話 みんなの願い事 | 156

り | 49

第2章 終末世界の機械達

第5話 ハプニング前提オープン

第11話 それ行け砂漠の盗賊団！ 172

グトーク | 70

第12話 別れはとびきり苦い味

第13話 闇なんて飴色にとろけさせ

215

第14話 青い空の下、夢は飛んदै

229

く

第5章 終末世界の幸福論

第15話 有り得ざる魚

238

第16話 幸せはどこにある？

第17話 美しく残酷で

280

第18話 だからこそその神なのか

第6章 物語の始まりは運命の終わった

後に

第19話 理不尽に現れて

303

第20話 運命的に巡り会って

325

第21話 悲劇流れて

343

第22話 最後には笑顔で終わるもの

第23話 黒いうみの中で1人想う

355

ことは

第7章 そして置き去りにされた愛に出

377

会う

第24話 それぞれの秘密

381

第25話 華々しく旅立てば

401



世界の愛と謎編く

とても 番外編

第39話 大ピンチ! いやいよ始まる最終決戦(?) | 644

第45話 サーヴァントユニヴァース二次創作 | 729

第40話 ふえいと／昔のランナー | 663

第12章 モラトリムは、遠くにありて、思うもの

第41話 焼きたての真心をあなたに | 679

第46話 真実の星が降る夜は、君と

第42話 骨を割って話し合おう | 679

第47話 上級都市ピオーネ | 768

693 第43話 その男は致命的な微笑みで | 705

第48話 その破滅は女の形をして | 782

第44話 クッキングバトル大勝利! | 721

て来て | 802

明るい未来へレッツラゴー! | 721

第13章 終末世界のボーイ・ミーツ | 721

ガール

第50話 いと美しや因果始まりの女

神 ————— 818

第51話 「当たり前前のように——」

834

第52話 「愛してくれただなら——」

846

第53話 真実の星が見えぬ夜は、貴

方と秘密の話がしたい ————— 858

第54話 物語でもない旅の果てなん

てこんなもの ————— 870

断章 その1 亡霊（演者）控室

第55話 だからこそ、ハッピーエン

ドをいま一度 ————— 878

第13・5章 ■■くん、■を救う

第56話 俺の『運命』の話をしよう

断章 その2 全て朽ちた場所から ————— 883

第57話 永遠を与えられた透明な少

女 ————— 901

第14章 灰色になったら始めよう

第58話 瞼という名の幕は上がり

906

第59話 もう一人の『トバルカイン』

断章 ————— 921

第60話 君はきつと生きねばならぬ



	第61話	花は散りゆき	954	第67話	君は破滅を呼ぶ女	1037
	第62話	次に咲くのは灰色の		断章 その3	されどここで『ヒト』の話を	
966	第63話	モモタは生きていけるで		第68話	エト	1053
	しようか		982	第16章	棺の中のデウス・エクス・マキ	
	第15章	箱の中のファム・ファタール		ナ		
	第64話	始まりの庭で『永遠』を見た		君は	第69話	終わりの庭で『理由』を探す
	君は		988			1077
	第65話	「時の砂は流れ落ち、再び降り積もることない」	1006	第70話	アンドロイドよ死者の王と	
	第66話	誰もが誰かのリソースリ		踊れ 前編		1091
	ソース		1021	第71話	アンドロイドよ死者の王と	
				踊れ 後編		1105
				第72話	女神のお望みは?	1117

第73話 素敵な家族 1132

ち) 闇の中へ 1194

第74話 君は終わりとなる男

第79話 ヌードルと宝石、男と光、そ

1146

して姫 1208

第75話 星の中からこんには

第80話 空仰ぐ自由と解析と遠い日

1155

の言葉と 1230

第17章 再会するを空に見て

第81話 弓兵は祈れど、世界は甘く

第76話 一方その頃モモタちゃんは

腐れ…… 1251

第77話 アルカディアは何処(いず

第82話 人纏(まと)う理性という肉

こ) 1183

は、本能という骨より剥がれ落ちた

第18章 世界はゆつくりと牙をむいた

第83話 境界線を越えたなら、二度

から

と『綺麗』に戻れない 1281

第78話 絶望性の落下、その後(の

第84話 暗く燃え、音が響くなら

- 1294 第85話 わがままガールになつちや
- え ————— 1308
- 第86話 彼女は名は光、またの名を  
希望 ————— 1318
- 第87話 墓守 ————— 1331
- 第88話 リリスの竜、心無き者
- 1342 第89話 だからあなたと巡り会い
- 1356 第19章 砂漠行く賊なんという？
- 1376 第90話 悪夢の中の手を取って
- 1395 第91話 元型の男（アーキマン）
- 第92話 欲しいものなら奪いましょう
- う、やりたいことは見つけましょう
- 1413 第93話 だから笑顔でいたいと
- 1435 第94話 全ては稚（いとけな）い者の  
ために ————— 1453
- 第95話 教えて英雄王 くキリエラ
- イトとカルデア、北極平和祈念碑く
- 1472 第96話 教えて英雄王 くりり

			スのサーヴァントと封印されし者	
1490	第97話	教えて英雄王	この世	
		界に対する女神リリスの功罪	—	1505
	第98話	教えて英雄王	女神リ	
		リスの破綻と『ヴリトラ』、そして聖杯の	行方	1517
	第99話	あの女神(この)の旦那が言う	ことによ	1530
	第100話	—あなたは英雄		
1537	第101話	死血湖(しけつこ)から		
1557				
			第102話	残骸は煌々たる
			第103話	赤のほとりに青春は眠り
			て	1575
			第104話	会敵、射手座の機械化
			サーヴァント	1610
			第105話	戦闘、射手座の機械化
			サーヴァント	1629
			第106話	激闘、射手座の機械化
			サーヴァント	1653
			第107話	決着
			第108話	人には人それぞれの旅路
			断章	1668
			その4	1690

	第109話	これが、400年前の答	1704
	え合わせ	——	
	断章 その5	——	
	第110話	あるAI同士の秘密会話	1721
	記録	——	
	第20章	旅人揃えば舞台も動く	
	第111話	今再びの光を	1742
	第112話	白は希望を感じられる	
1764	第113話	冷たい竜、黒い獣と	
1785	第114話	救世主は何かと忙しい	
1804	第115話	お腹と胸中には秘密が詰	
	まってる	——	
	第116話	オン・ステージ	1841
	第117話	それは昔に終わったお話	1824
	第118話	フェイト／デザートラン	1858
	ナー	——	
	第119話	アーキマンレポート	1879
1901	第120話	小さな希望(星)の、小さ	
	な終わり	——	
	第121話	別れが来るとしても、い	1921
	つか貴方と見た空は	——	
			1938



# 第1章 終末世界のガール・ミーツ・ガール

## 第1話 管理世界のあの子と私

そんな出会いから10年。私はまだ彼と生きている。

『都市運営システムが、午前6時をお知らせします。都市運営システムが……』

「起床しました！ 停止！」

ベッドの中でうつ伏せのまま宣言すると、親代わりのAiが飛ばしてきたメッセージ音声は停止した。

「……………」

布団の中で呻いている私、『モモタ・トバルカイン』は今年で17歳の女の子である。ピンクの髪の毛ピンクの瞳の、恋も知らないふわかわ系女子だ。

身長166cm、体重は……秘密。

本名はいかつすぎるので、親しい人にはモモと呼んでもらっている。

「モモ！ おはよう」

2体目の親代わりが来た。毛布をかぶったまま耳を傾ける。

「今日の外気温は最高で80℃、最低で60℃、湿度は平均で0%だ、素晴らしい天気だな」

毎日変わりようのない天気予報をしゃべり倒しているのは、私の固有財産にしてサーヴァント。

「昨日とそんなに変わんないじゃん……バーサーカー」

私は毛布から顔だけ出した。

「仰るとおりだ、地下都市の内部は365日快適温度、湿度だ。天気という概念すらない」

黒い髪に緑の瞳を持った、木製の仮面で顔の右半分覆い隠した20代前半くらいの男が廊下から半身を出し、顔を覗かせていた。

切れ長の瞳は知的な印象を受けるが、犬歯……牙を見せながら微笑むと、一気に獯猛な雰囲気へと変わってしまう。

精悍な顔立ち？　と云うのだろうか。

姿はあつさり目。外出時に身にまとう極東風の鎧ではなく、襟付きの白のYシャツにズボンの軽い出で立ちだ。

「朝食はどうする？　チケットを余分に支払えば少々豪華にできるぞ」

「いつもの一番安いやつでお願いします」



「了解だ」

彼は頷くと、リビングへと去っていく。

「学校行く前に、シャワーしないと……」

ベッドから下りて、合成樹脂製のひんやりした柔らかい床をぺたぺた歩いて、脱衣所へ向かう。

「ぬぎゃ……ぬぎゃ……」

無地のパジャマと下着を脱いで、壁から中途半端に引き出した銀色のトレイに入れると、自動で閉まって、用意されていたクリーニング済みの清潔な衣類が出てくる。

それを横目に浴室へ移動し、シャワーのノズルに手首を当てた。

人体に内蔵されているデバイスが反応し、シャワー利用のためのチケットが支払われる。

「チケット様々だねー……」

適温に調整された湯が降り注ぎ、ショートボブのピンクの髪が濡れた。

チューブから必要な量だけ自動的に出てきたシャンプーで、泡をたてていく。

洗い流して、次はリンス。指を櫛代わりにして、毛に馴染ませる。

それも流し、顔を、手を、全身を、白色のスポンジでマッサージしつつ、こする。

……胸、もう少し大ききさ欲しいな。

『5分以内に洗淨作業を完了させて下さい』

「はいはい」

都市運営システムから注意され、シャワーで体にお湯をまんべんなくかけた。

脱衣所に戻り、ふわふわのタオルで体と髪的水分を取って、壁から吹き出す温風に身を任せる。

下着と長い靴下、白の布に緑のラインが走る制服を着て、鏡を見ながら身だしなみを整えた。

「化粧水、クリーム、ファンデーション……欲しいけど、チケットいっぱい取られるし、無理だよなあ……」

ぼやきながら脱衣所を出て、廊下を歩き、合成樹脂で壁から家具まで作られたリビングに入る。

「今日の朝食は日本風……らしいが、俺の認識から離れすぎていてよく分からん」

バーサーカーがリビング真ん中の備え付けのテーブルに朝食を並べていた。

「配給トレイそのまま出してくれればいいのに、何で並び替えるの？」

「……日本文化への郷愁だ」

強化プラスチック製の無地の器に入れられた朝ご飯を観察する。

オレンジ色のタンパク質ペースト、緑のキューブ、お米を模した温かいゼリーの粒が

それぞれ別のお皿に盛りつけてある。

コップの中にある茶色いどろっとした液体には、緑色のペラペラした食用フィルムと、タンパク質ペーストを固めた白い四角が浮いていた。

「美味しそう……いただきまーす」

食卓につき、スプーンを握ってご飯を食べる。バーサーカーは向かい側の椅子に腰を下ろす。

「それは味噌汁……だよな」

「えっ？ これが前お話ししてくれた味噌汁？」

「懐かしいな……少しくれないか？」

「いいよー」

10年以上共に過ごした家族である彼に、つるつるした質感のコップを手渡した。

彼が半分隠された唇で器用にスープをすすっている間に、タンパク質ペーストとお米ゼリーを口に運ぶ。

どちらもみずみずしくて美味しい。

「味噌汁どう？」

「モモ……これは、味噌風の何かをお湯に溶いたもの、だな」

「そっかー」

コップを受け取り、食事を再開する。

「召喚されてから味噌汁飲むの、初めてだっけ？」

「そうだな……別の俺は、飲んだ事があるかもしれないが」

彼はYシャツの上から腕に巻いてある番号札を触った。

『0004』と、書いてある。

この番号は、同じサーヴァントが何回召喚されたか、もしくは記憶処理された回数で決まるらしい。

「さて……」

バーサーカーは空間を操作してスクリーンを出し、朝のニュースを読み始めた。

「何か面白いニュースある？」

私は、オレンジの背景に浮かぶ白い文字を目で追いかけている彼に声をかけた。

「この地下都市内での回収人数が昨日は1000人を越えているな。」

出生数が570人だから、都市人口は減少しているな」

「……そんなにチケット無くなっちゃった人多いの？」

「タンパク質合成工場の損失補填かもしれない」

「人間をペーストにしているのは都市伝説だって。変換率悪いつて友達に聞いたもん」

「何年前の情報だ、それは」

「え、5年前……」

「古い古い、情報弱者に明日はないぞー」

そんな他愛もない会話をしていると、学校に行く時間が近づいてきた。

「バーサーカー、準備できてる?」

「ああ」

私がそう言うと、彼は一瞬で姿を変えた。

布と革、少量の金属部品で作られた鎧。

西洋の全身を守るような重い鎧はなく、胴体や腕など主要な部分だけを守る構造で、動きやすく軽い。

安土桃山時代ごろの鎧の様式だそうだ。

(……全部バーサーカーからの受け売り知識だけ)

兜は無く、顔はそのままの彼。

「最近物騒だし、一緒に行こうね」

私はそう言いつつ、空になった食器をトレイの上に乗せて、壁に空いている長方形の穴に差し込む。

小さな駆動音の後、自動的に回収されていった。

「行きたくないけど、今日はチケット配給日だし」

玄関へ移動して、前時代的な丸みのある茶色のローファーを履いた。

「遅刻すると減点だしね」

手首をかざし、デバイスで電子ロックを解除、施錠し、リニアモーターカーの駅へと足に向けた。

『学校行きリニア、発車します』

人工音声を聞きながら合成革張りの席に座る。乗客は私達以外誰もいない。

「ねえバーサーカー」

「なんだい、モモ」

滑らかな質感の革の上に隣り合って座りながら、彼と話をする。

「外の世界って、本当に何も無いのかな」

彼は仮面に覆われていない左の瞳で私を見た。

「バーサーカーが話してくれた、森とか山とか川とか海とか、本当はあるんじゃないかな」

彼の瞳は、この閉ざされた世界の中で唯一、遠い昔の自然を感じさせる緑だった。

「学校ではね、何にもないって。」

大昔の戦争のせい、まっ平らな荒野と空しかないって、教えられてて。

でも、数百年前の映画には、綺麗な水とか、景色とかあつてさ。

もしあるのなら、外の世界に……」

「モモ」

咎めるような口調だったが、声は優しくかった。

「外の世界についてべらべらと喋るのは、よした方がいいぞ」

彼の指差す先にあるのはレンズ光る監視カメラ。

車内の隅にこれ見よがしと設置されたそれは、じっと私を観察している。

思わず下を向く。

「……私に外の世界の事教えたの、バーサーカーじゃん、夢を語るくらいはしたっていいじゃん」

ちよつとだけ悲しくなりながら呟き、横目で彼の様子をうかがう。

バーサーカーはオレンジのランプが光る天井を見上げる。彼の喉仏がよく見えた。

「……過去の亡霊が、生者にささやくべきではなかったな」

リニアが動きを止めた。

『到着しました、学校前。到着しました、学校前……』

「降りよう、遅刻してしまうよ」

バーサーカーが私の肩を指の先だけで軽くたたいた。

『デバイス認証、個体名モモタ・トバルカイン……配布量を計算しています』

チケットは学校の中にある特別な個室で発行される。サーヴァントですら立ち入る事を許されない。

『15年分の生存権が、発行されました。』

「これからも自らの有用性を示し続けて下さい』

「はい……」

手首を動かし、デバイスを起動させ、モニターを空間に映す。

元からあった生存権と合わせて、37年分。これが、私が生きる事を許されている時間。

『速やかに退出してください、速やかに退出してください』

システムの音声が流れた。私は部屋を後にする。

(これが無くなったら……全部おしまい)

生存権は通称『チケット』と呼ばれ、消費する事で日々の生活を過ごせる。

ご飯、お風呂、トイレ、吸っている空気だって、チケットがあるから与えられているのだ。



無くなれば、人生はそこで終わり。

都市を運営しているAIの命令によって回収され……どこかへ連れて行かれる、悪いことした人も同じく。

帰ってきた者は、誰もいない。

(昨日は1000人回収された……つまり、1000人居なくなつた、という事だよね……)

憂鬱な事を考えつつ部屋を出ると、鎧姿のバーサーカーが廊下で待機していた。

「お待たせバーサーカー。お昼ご飯食べに行こうか」

「ああ、それはいいが……」

バーサーカーは辺りの様子をうかがってから、私に耳打ちをする。

「霊体化してもいいか？」

今日はみな殺気立っているし、サーヴァントを連れてくるせいで悪目立ちしたくないだろう」

私と同じように生存権を受け取ったばかりの他の生徒達が、ちらちらと私を見ている。

(そっか、サーヴァントは高級な嗜好品だもんね)

私のバーサーカーは人間観察力が高く、周りの感情の機微にも聡い。

自らの鈍感さを心の中で反省する。

「霊体化、お願いできる?」

「了解だ、我がマスター」

彼は頷いた後、その姿が溶けるように消えた。

『霊体化』。これも、サーヴアントの特殊能力の1つだ。

アクリルガラス越しに、人工灯と人工植物で彩られた爽やかな中庭を眺めながら、明るい廊下を歩く。

他の生徒の噂話が聞こえてきた。

「ねえ知ってる? Bクラスはもう5人消えたって」

「処分されたくないよ……」

「でも仕方がないんじゃない? 文句あるなら都市の外で暮らさせて話になるし」

「外は化け物だらけって、本当かな?」

「頭がおかしくなっちゃった奴が沢山居て、頭からばりばり齧られちゃうんだって!」

「止めようよ……世界叛逆罪でロボットに連れて行かれちゃうって」

男女入り混じり、教室で話に花を咲かせている。

……『学校』は教育機関であると共に、子どもがチケットを稼ぐための場だ。

日々の勉学や試験などを頑張れば、労働している大人よりずっと楽にチケットが与え

られる。

だからみんな、我慢して、いい子にしている。悪事なんて噂で盛り上がるくらい。静かで、大人しく。そうしないと回収、処分されてしまうから。

——そのはずなのに。

「……ムカつくんだよ！ テメエ！」

声を荒げる少女がいた。

「サーヴァント見せびらかしやがって！ 馬鹿にしてるんだろ！ あたしたちみたいない底辺をさあ！」

髪を中途半端に伸ばした少女が、サーヴァントとそのマスターに罵倒をぶつけていた。

表立った喧嘩なんて珍しい。周りに野次馬が集まっている。

それに混ざって、私も騒動の中心を見た。

「……わたくし、そんな事していませんわ」

小さな声で否定をする彼女は、透けるような白い肌に、肩まであるウェーブかかった黒い長髪を背中側に流して、頭部には、紫色の石をはめ込んだ飾りをつけていた。

着ている服は、私や野次馬と同じ、白の布地に緑のラインが走っている制服。

140cmほどの背や肉体の薄さもあって幼さを感じるが、大きな黒の瞳と小さな唇

があるその顔立ちは整っており、儂げな美しさを感じる。

「もう行きましよう、アーチャー」

彼女が声をかけた傍らに立つ存在もまた、高貴さを感じられる。

性別は男性。全身を覆う衣服は青い刺繍が施された白の布。

右腕には『0961』と番号が刻印されたバンドが巻いてある。

服の合間からわずかに見える肌は色濃く、磨かれた樹木を思わせた。

マスターである少女と同じ黒髪は、綺麗に整えられている部分もあったが、ややハネが見られる所も。  
しかし――。

「ゴテゴテとサーヴァントに飾り付けてさ……お前も何か喋れよ！　おい！」

その顔は完全に隠されていた。

琥珀のような質感のパーツで目はぐるりと一周覆われ、顔の下半分は、獣の顎を思わせる黒い外骨格が被せられていた。

頭には古代エジプトの冥界神のような、ぴんと立った角にも見えるパーツが2つ。

手や腕、足にも機械部品が取り付けられていた。

自然的な美しさと人工的な美が同居する、不思議な雰囲気のあるサーヴァント。

「ああ、アーチャー殿ではないですか。珍しい……」

知り合いであるサーヴァントに対して、バーサーカーが霊体化したまま一言もらした。

私に対する気安い態度とは違い、相手を敬うような振る舞いと言葉遣い。そして、軽い会釈も行った。

「アスカー！」

野次馬の中から私は声を上げた。

「どいて、どいてくださいーい」

バーサーカーにもこっさり手伝ってもらって、人ごみをかき分ける。

「アスカ、ランチ行こー！」

彼女の手を取り、強引に騒ぎの場から逃げ出した。

第1話 管理世界のあの子と私

終わり

## 第2話 黄昏は突然に

「モモタ・トバルカイン、なぜわたくしを助けたのです？」

「お隣さんだし、幼なじみだし……」

「保育カプセルがたまたま隣り合っていた事を、貴女はお隣さんと表現するのですわね」  
「そんなにツンケンしなくてもいいじゃん……」

「……簡単に礼を言う訳にはいきませんの、プライドがありますから」

校舎から離れ、人工植物の生い茂る裏庭へ。

ガラス繊維で作られた木々は、蛍光灯の光を透かしてきらきらとしている。

「……生存権の事で、いちゃもんつけられたの？」

「そのとおりです、トバルカインは聡いですわね」

「モモって呼んでよお……」

半べそで懇願しても、彼女は小さな唇を尖らせるばかりだ。

「でも仕方ないこと。羨まれて当然。だって、わたくしは上流階級ですもの」

そう拗ねたようにつぶやく彼女は、アスカ・ピオーネ。

世界の富……つまり、生存権の2割を握っている上流階級、ピオーネ財団のお嬢様だ。

「この黒髪も白い肌も、髪飾りも、全てが完璧で、上に立つものとして相応しい……。」

シヨッキングピンクな髪色のトバルカインもそう思いましたか？」

「バーサーカー！ 助けてー！」

離れた白いベンチに座っている鎧姿の彼に助けを求めてみるが。

「ははは、さすがアーチャー殿お強いすな。うっ、そこに石を置きますか……俺、勝てるか……？」

アスカのサーヴァント、アーチャー961とバーチャル碁で遊んでいる。

「アーチャー、勝ってね」

アスカの応援に、彼女のアーチャーは無言で頷く。顔に装着されたパーツの合間の、艶のある黒い髪が揺れた。

「お昼、食べよ？」

不機嫌さが治らないアスカへ、バーサーカーに食堂から取って来てもらったサンドイッチを差し出す。

「ありがとう」

演技のような高慢な態度で、中身入りの透明なフィルムを彼女は受け取った。

精製炭水化物から作られたパンと、チーズとレタスを模した食用フィルムを挟んだサ

ンドイツチが2つ。

アスカはフィルムをはがすと両手で持ち、食べた。

「……同じ味」

「そうだね、何時も同じ味」

私も彼女に続いて一口かじる。

ぺつたりしたチーズフィルム、ちよこつとだけシャキツとしているレタスフィルム。いつも通りの変わらない味に安堵を覚えた。

裏庭に、数百年前に録音された鳥の鳴き声が流れ始める。

「わたくしに、突っかかってきたあの子」

「うん」

少し気持ちに整理がついたのか、アスカがぽつぽつと話し始めた。

「昨日、家族が処分されたのですって」

朝のニュースを思い起こす。

「そう、なんだ」

私は彼女の言葉を真剣に聞く。

「こう言われました……『上流階級であるお前達が、独占するから』って」

サンドイツチを握るアスカの白い手は、震えていた。



「アーチャーを、生存権に変えて、寄越せって、言われたのです」

サーヴアントを都市を管理するAIに提出し、その代わりに生存権を受け取れるサービスがある。

……アスカのアーチャーであれば、200年分は堅いだろう。

「そんな事……出来ない、アーチャーは大切な、家族なのに……」

バーチャル碁石を打つ音が、人工音声の鳥に混ざる。

「でも、みんなはそう思っていない。わたくしは、サーヴアントっていう富を見せびらかしてる悪いやつ」

2体のサーヴアントは穏やかに勝負を続けている。

「……何時まで悪者でいればいいんだろう。」

いっそ、お母様みたいに死んでしまえば……でも無理なの、それすらこの都市は許してくれない」

裏庭の天井をアスカは見上げた。紫の石がはめ込まれた髪飾りが光を反射する。

「壊れちゃえばいいのに、こんな世界。」

そしたら、外の世界に出て、自由に死ねるのに……」

幼さを残す声が、閉ざされた学び舎に響いた。

帰宅時間になり玄関へ向かうと、お昼にぎくしゃくしたまま別れたアスカに出会い、なんとなく駅まで一緒にいる事にした。

「また明日ね、アスカ」

「ええ……トバルカイン」

駅の手前で別れの挨拶を交わす。

彼女は上流階級エリアに住んでいるので、そこ行き専用のリニアがあるのだ。

夕日を演出する赤い光が、太陽なんて生まれてから一度も見たことない私達を照らしていた。

「アーチャー殿、またバーチャル碁を打ちましょうね」

バーサーカーの提案に、素顔を機械で隠しているアーチャーは無言で頷く。

(……アーチャー961が話しているところ、見た事ないな)

前々から思っていたが、とても無口なサーヴァントだ。

「それではごきげんよう。行きましょう、アーチャー」

2人一緒に帰っていくアスカの後ろ姿。

まるで、家族みたいに仲良しで、お互いに心を許し合っているように見える。

「家族……か」

夕方だからか、少しだけセンチメンタルになった。

私に親類は居ない。10年前に死んだおばあちゃんだけが唯一の家族だった。

「モモ？」

バーサーカーの顔を見る。私のサーヴァント、10年らしいの腐れ縁。

「家に帰ろつか……腕でも組んで！」

「わっ！ 何だよ！」

でも、今は彼がいる。家族みたいな存在が居る幸せを噛みしめつつ、流線型のリニアに乗って、帰路についた。

『就寝時間になりました。これ以上の活動は生存権の余剰消費につながり……』

「寝ます寝ます寝まーす！ 運営さんお疲れ様！」

寝間着に着替えてベッドに入ると、速やかに部屋が暗くなっていく。

「……アスカちゃん、またお昼誘ってみようかな」

洗淨された毛布をかぶり、明日に思いを馳せてみた。

「起きろ、モモ！ さもないと死ぬぞ！」

バーサーカーの切羽詰まった声で目が覚めた。

「な……………に？」

心臓がばくばくとしていいる。それに何より……。

「暑いだろう、気分はどうだ」

言われてから体の異常に気づく。首の後ろが痛い、全身がひどくだるい。

（これが本物の暑さ……………）

学校での運動の後に感じるあれとは比べものにならない。

「外気が流入している。現在の気温は60℃だ、逃げないと死ぬぞ」

「えっなんで？ 世界なんて、何時も同じ温度……………」

「都市運営を司ってるAIの野郎、狂ったらしい」

黒い鎧に身を包んでいるバーサーカーが、私をベッドから下ろし、背負う。

「待って、着替えさせて、シャワーも……………」

白い薄地にズボンスタイルのパジャマのままだ。

懇願する私を、緑色の瞳が無感情に見た。

「……………もう、この都市は終わりだ」

「終わりって……………」

何を言っているのか理解できない。

「俺は君のサーヴァントだ。君を少しでも長く生存させる義務がある。

背中にしつかり掴まって。近くにいる内は、回復スキルで熱傷は治してあげられるから」

「……やだ、嫌だ！ 私の話を聞いてよ！ バーサーカー！」

彼は背の上で反抗する私を意にも介さず、合成樹脂で出来た食卓を蹴飛ばして、見慣れたドアを蹴り破り、走り出す。

「暑い……暑いよお……」

そんな幼い声が近くからする。

「助けてー！」

「お母さーん！ お父さーん！」

「誰か手を貸してくれ！ 誰でも良いから！ なあー！」

年齢も性別も様々な悲鳴が聞こえては、遠ざかっていく。

「助け……助けようよ！ ねえバーサーカー！」

いつも私の話をちゃんと聞いてくれるバーサーカーは、言葉を忘れた獣のようにひたすら走っていく。

照明を管理するシステムまで狂ったのか、極彩色の光が、瓦礫を、炎を、倒れて動かない人々を、照らしていた。

「うう……うう……」

途方もない無力感に襲われながら、私は彼の背の上で呻いていた。

しかし、いつまでもそうしているわけにもいかず、周りへ目を向ける。

「ひどい……どうしてこんな事に……」

今日の朝までは何事もなく清掃されていた、リニア乗り換え地点である中央ホールは、地獄と化していた。

何かが炸裂したのか、建物や床や壁の破片がごちゃ混ぜになってしまっている。

高い天井は、壊れた所からツル植物のようにケールが垂れ落ちていた。

立ち止まったバーサーカーは、背負っていた私を下ろし、短い黒髪の生えた頭をうろろうと動かして、何かを探している。

「何をしているの……?」

私は怖々と訪ねた。彼の漆と布で作られた鎧が炎に照らされ、血染めのように見えた。

答えず、不意にしやがんだ彼は、何かを拾い上げた。その手に持っていたのは……誰かの手首。

「人体に内蔵されたデバイスがまだ生きているな。」

モモ、俺のスキルを使ってこのデバイスをハッキングする」

「なんのため……?」

振り向いた彼は、眉を寄せた、張り詰めた表情で私に告げた。

「生きるためだ」

瞳が内側から明るい緑に輝き始める。こんな彼を始めて見た……いや、私が知らなかっただけか。

「俺と俺のマスターが生き延びるため、貴方の物を奪うぞ」

左の指が千切れた手首の皮膚の下に潜り込み、取り出す。

「デバイス……サーヴァントにも扱えるかどうか……」

小さな黒い粒を摘まんだまま、バーサーカーは躊躇する事なく、それを自らの右腕へねじ込んだ。

「……デバイス侵食完了、都市運営システムとの接続を開始」

右腕を左手で抑えながら、バーサーカーが腕を伸ばす。

その方向にあるのは……ニュースやお知らせなどを映す、天井から吊り下げられた巨大モニターとスピーカー。

『みな……さん、みなさん……』

幼いころから聞いている、都市運営を行っているAIの声の流れ出した。

「これって……?!」

「この都市が今の状態になる前に、AI……『都市運営システム』の野郎が流した音声再生した。」

……無理にねじ込んだからか腕がずきずきする」

バーサーカーは血塗れになった右手を、何回も握り直した。

『みなさんは優秀、で、しようか?』

AIの声は、平坦で穏やかないつものとは違う。

イントネーションと発声が無茶苦茶で、聞く耳が痛んだ。

『みなさんは必要、で、しようか?』

何かが爆ぜる衝撃が遠くから小さく伝わってくる。

『それは、どうやって証明するものでしょうか? ですーので……』

モニターに、突然誰かが映った。

『戦争です、生存競争です、分かりやすく噛み砕きますと殺し合いです』

白いクレヨンで黒い画用紙に描いたような、でたらめな人の顔。

『聖杯、戦争です』

「……ほざけ!」



バーサーカーがモニターに吠えた。

『この都市、でー！ いっちばん！ 優秀な者を決める！ 戦争！』

白い顔は増殖し、画面を埋め尽くす。

『生き残っていいのはたった一人だけ！ 優勝者にはこれあげちゃうかも？！

聖杯！ 願望を全て叶える万能の願望器！』

「聖杯……？」

聞き慣れない単語に私は首を傾げた。

『みなさん！ 生きるため！ 頑張ってください！ 都市運営システムは人類を応援して

います！』

ぶつりと、映像は途絶えた。

「聖杯戦争だと……？ 今更か！ くそっ！」

バーサーカーは足で瓦礫を蹴った。

「殺し合いつて……ねえ……ねえ！」

「モモ……いや、我が所有者よ」

大きなものが落ちる音が遠くに聞こえた。

「お前に召喚されたその時から、こうなる運命だったのかもしれない」

「運命……？」

「そう、fate<sup>運命</sup>だ」

バーサーカーは私の肩に手をかけると、輝く緑の瞳で真っ直ぐに見つめてきた。

「……マスターは、どうしたい」

「どうって……」

「他人の命を喰らってでも生きるか、汚れないまま死ぬか」

「死……」

喉が異様に乾いて、唾を飲んだ。

（それって、何？ 『死ぬ』ってどういうこと？

このホールに散らばっている人間の欠片みたいに、ただの物になるって事が、『死』なの……？）

舌が湿り気をなくし、表面がばさばさと毛羽立つ。

「私は……」

「トバルカイン？」

名を呼ばれ、思わずその方向を向いてしまった。

「生きていた……のね……」

白のナイトローブに身を包んだアスカが、瓦礫の上に立っていた。

トレードマークである紫の石がついた髪飾りが、乱れた長髪の上で光っている。

「アスカ！ 良かった、無事だったんだね！」

瓦礫に両手で掴まりながら、恐る恐るといった様子で少しずつ下りてくる彼女。  
「迎えに行くよ！ 待っていて！」

知っている人間が無事だったのが嬉しくて、私はバーサーカーの問いかけも忘れて駆け寄った。

「わっ……」

小さな彼女を腕に抱き留める。

「アスカ、怪我してない？」

「わたくしは、何にもないの」

彼女が指を指すと、空間から彼女のアーチャーが突然に現れた。

白の衣服には汚れ一つ無く。顔と体を隠すパーツは、都市を燃やす炎の光を反射していた。

「守って、くれたの」

バーサーカーはアーチャーに学校で出会ったときのように会釈をしなかった。

ただ、緑の瞳で彼をじっと見つめている。

「わたくしが住んでいた場所に、爆弾を持った人が、たくさん、来たの」

アスカの黒い瞳は、からからに乾いていた。

「みんな、吹っ飛んでしまった。死んだの、みんな」

彼女の瞳孔は深い闇で満たされている。

「変なの、たくさん生存権、持っていたのにね」

幼い印象を受ける顔面は引きつって、けいれんしている。

「ねえ、トバルカイン」

「何？ アスカ」

彼女に安心感を与えるため、乾燥した肌の上に笑みを作る。

「殺し合い、しましろう？」

彼女の横に控えていたアーチャー。琥珀色のパーツの奥から、彼の目が鋭い光を放った。

第2話 黄昏は突然に  
終わり

## 第3話 少女の志しは星より青く

「えっ……?」

殺し合いという言葉に、私は呆気にとられてしまった。

そんな私の前にバーサーカーが一瞬にして移動し、飛んできた何かを掴んだ。

「アーチャー殿……俺のマスターを殺す気か?」

それは青白く燃える矢。掴んだ右手の中で、籠手を焦がしながらあつという間に燃え尽きる。

「答えてください……いや、答えろ、アーチャー961」

アスカのアーチャーは何も言わない。ただ、白と青に輝く弓矢を構えた。

武器、だ。電子ライブラリで見た、他者を殺すための道具。

「アーチャー……勝つてね」

主である彼女の乾いた言葉に、サーヴァントは頷くだけだった。

次の矢がつかえられる。真つ直ぐ、私に向けて。

「……ではこちらも加減をしないで、アーチャー!!」

バーサーカーはその手に槍を出現させた。金属の穂先と木製の持ち手の、飾り気のない武器。

そして、犬歯を剥き出しにした獰猛な表情で襲いかかった。

「アスカ。や、止めよう。アーチャー、家族なんですよ、怪我を……殺し、ちやう、かも」  
私は混乱しながら友達に呼びかける。

「……家族なんかじゃ、なかった」

ナイトロープ越しにも分かる細い体を、アスカは両手で抱き……それから、かきむしった。

「貴女もサーヴァントの戦いを見れば分かる!!」

彼らは人間と同じ形をしていますが、人間なんかじゃない……兵器なんだって！ 殺戮の道具なんだって！」

熱風に体をあおられて、倒れそうになる。

目を横に向ければ、2体のサーヴァントの戦闘の余波で瓦礫が粉碎されて細かく吹き飛んでいた。

(バーサーカー……あんな動きが出来るなんて……まるで映画みたい……)

現実とは思えない光景が繰り広げられている。

矢は空間を裂く音を発しながらバーサーカーを狙うが、彼は壁を走りそれを避けた。

アーチャーが次の攻撃を行おうとする、が、壁を蹴って接近したバーサーカーの槍をかわすためにその動きを中断した。

白い外套をはためかせ後ろへ飛び去りながら、矢をつがえ、撃つ。

「わたしね、知ってしまったの、知らない方がよかった事、知ってしまったの」

見慣れた町の風景が、変わる事などないと思っていた世界が、どんどん壊れていく。

「システムの声を聞いた？ この都市で、1人しか生き残れないんだって」

武器と武器がぶつかり合う音の狭間で、誰かの泣き声が聞こえた気がした。

「分からないの、もう、自分が生きたいのか、死にたいのか分からない……」

アスカは戦いや崩壊から目を逸らして、しやがみ込む。

「……あの時、助けてくれてありがとう」

「えっ?」

唐突な感謝の言葉に、私はうろたえた。

「今日のお昼のとき、助けてくれたこと、嬉しかったの。」

……初めてだったから。打算も裏表もなしに、人間に助けてもらえたこと」

しやがみ込んだままの彼女が顔を上げた。すすのついた頬の上に、固い笑顔を無理に作っている。

「生きてるだけで憎まれて、うらやまれて、苦しかった……」

ねえトバルカイン、貴女が勝って。

やだよ、こんなに苦しいのに生きるの、もう、やだ……」

「……私」

暑くて熱くて、涙も出ない。

どうしてだろう、こんなに胸が痛いのに。

「マスター!!」

バーサーカーがアーチャーの弓の一撃を槍で受け流しながら、私に叫んだ。

「どうしたい?!

」どう……っつて」

瓦礫が積もった不安定な足元は、まるで私の心を映しているようだった。

「これは俺が決める事じゃない! お前が頭で考えて決める事だ!」

彼は絶え間なく飛んでくるアーチャーの矢を、槍でなんとかいなしながら、私に声をかけ続ける。

「俺はこの時を待っていたんだ! お前がその手で運命の針を動かすその瞬間を!!」

バーサーカーと10年一緒に暮らしていたけれど、こんな感情的な声初めて聞いた。

(知らなかった。彼、こんなに熱い人だったんだ)

人間の枠を超えた戦いは、バーサーカーのやや劣勢で続いていく。



「俺ってば加虐趣味だからな！」

「ずっとイライラしていたんだ！ 人の生き死にが勘定される……こんな狭っ苦しい世界に！」

弓と同じ速度でアーチャーが突っ込んできて、バーサーカーが圧される。

しかし彼は突進を槍の持ち手で受け止め、決して倒れない。

「マスター！ 世界は広いんだ！ お前が欲しい未来がどこかにきつとある！ 掴み取れる！」

「1人じゃできないって泣き言を言うのなら、俺が手と頭を貸してやる！」

アーチャーは弓と矢を両手に持って、バーサーカーが持つ槍へ交互に打ち付ける。

「俺はお前のサーヴァントだ！ 家族などではない！」

「お前の暴力を！ 感情を！ 代行するための道具だ！」

火花が散るその一撃一撃が、槍にひびを加えていく。

（考えなきや、自分がどうしたいか、彼に何をしてほしいのか、言葉にしなきや……！）

彼の声が心に届いて、からからに乾いた瞳から、涙が一粒こぼれた。

「私の、気持ちは……」

何を感じているのか、何をしたいのか、うんと考える。

今までは全部、都市運営のAIやバーサーカーが考えてくれた。

けどこれからは、自分の頭で考えなきゃ。

いや——考えたいと、思った。

「マスター！ お前の気持ちも、言ええええ!!!」

槍が砕け、アーチャーが手に持つ矢尻がバーサーカーの胴体に突き刺さった。

60℃の熱風を肺に満たしながら、私は思いの丈を叫ぶ。

「死にたくない！ でも……戦いもしたくない！ 誰も傷つけたくないし、殺したくないよー！」

「……トバルカイン」

アスカが顔を上げ、機械的にバーサーカーと戦闘を続けていたアーチャーが止まった。

「痛い……」

右手の甲を見る。

そこにある時計のような形の赤い模様が、色鮮やかさを増していた。

いや、幼い頃からずっとここにあったのだ。

ただ、私が『戦う』という選択肢から目を背けていただけで。

「令呪……」

サーヴァントを使役する、マスターの証。



笑顔を手かべたまま平坦な声で言うと、彼はデバイスを埋め込んだ右腕を天井へ向けた。

「都市運営のシステムへ、スキルにより干渉開始……成功」

天井から細かな水が溢れ出す。

「スプリングラーを作動させた。建物の延焼はこれで防げるはず」

「……アーチャーは、どうするの？ 大人しくさせるの？ ……殺して、しまうの？」

「殺せない、俺の方がステータス低いからな。でも、戦いを止めさせる事は出来る」

彼は左側の唇を得意げに吊り上げてから、くるりと体を反転させ、前方へ向けた。

「アーチャー殿、私は貴方の真名を知っている」

ばきりと音がした。アスカのアーチャーが姿勢を起こし、瓦礫を踏み砕いたのだ。

「どれほど覆つても、隠しきれない高貴さ、卓越した弓の腕、燃える矢。そして何より」

バーサーカーはもう一度その手に槍を出現させた。

「バーチャル碁を打ち合つて分かつた。

全体を広く俯瞰し、未来が見えているかのような戦いの運び方。貴方の真名は……」

「言わないで！ モモのバーサーカー！」

しゃがみ込んでいたアスカが慌てて立ち上がったが、足をもつれさせて転んでしまった。

パーサーカーは転んだ彼女をちらと見たが、口を止めるそぶりは無く、そのまま決定的な一言を告げる。

「――アルジュナ。」

王の子、パーンダヴァ五兄弟の三男にして、雷神の血を受け継ぐもの。

勝利の後、全てを終わらせ後世に託し、白き山に去った誇り高き戦士」

……アーチャーが美しい弓を投げ捨てた。地面に落ちる前に、それは映画で見た雪のように溶け消える。

「だめ、アーチャー、だめ……」

アスカが彼の元へ行こうと地面を這う。大きな瞳の幼さ残るその顔には、怯えがはつきりと浮かんでいた。

「私を……」

彼の顔の下半分を覆い隠す、獣の顎を思わせる意図の黒いギアから、声が轟く。

「アルジュナと……」

手が、瞳を覆っている暗い琥珀色のギアをわし掴む。

「呼ぶなああああ!!!」

そして、壮絶な音と共に碎かれ、剥がされた。

黒い獣の顎は壊れつつ開かれ、彼の瞳が露わになる。美しい顔にある、瞳の怒れるそ

の色は……金。

「ああああああ!!!」

アスカのアーチャー、真名アルジユナは、全身から雷鳴をほとばしらせた。

「バーサーカー、私を、よくも、よくもおお!!!」

「アルジユナ殿、いや、何か……ん？ ああ、なるほど」

バーサーカーは何か合点がいったのかほつりと呟く。

「異なる欲心……か。——美しいものだ」

その言葉の意味を、彼に聞く余裕など無い。

「無名のバーサーカーごときが！ この俺に勝てるものか!!!」

雷を帯びた瓦礫がずいっ……と浮かび上がる。

「電磁石、レールガン……いや、理屈なんてどうでもいい！

凄いな……人知を超えし英雄！ 本当に素晴らしい！」

「その顔を仮面ごと吹き飛ばしてやろう、俺を知ったものは皆殺しだ!!」

私は物陰に隠れつつ、なぜか楽しそうなバーサーカーに声をかける。

「勝てるの?！」

「——ああ、危なげなく」

彼が言った瞬間、巨大な瓦礫が目視できないほどの速さで放たれた。

「はっ……」

アルジュナは、獣の外骨格じみたギアがつけられた口を、大きく開いて笑みを作る。バーサーカーの左腕が、簡単に消し飛んだからだ。

「っ……」

私は悲鳴を上げないよう唇を噛む。場面の凄惨さにアスカが口元を抑えた。

「お……」

バーサーカーは、感心したような、どこか間延びする声を上げながら、腕のあった場所を見る。

「次は頭だ！ バーサーカー！」

「いや、違う」

サーヴァントは金に輝く瞳を開きながら宣言をしたが。

「やり直した、アルジュナ殿」

バーサーカーの左腕が、瞬きの内に再生した。

「……何だそれは」

致命の一撃を与えた側であるアルジュナが、呆けたような表情をつくる。

「何だと思う？」

「……加護か？」

「私だつて一所懸命考えたんだ。貴方だつて、私の真名に思いを馳せてくれ」  
「どうでもいい！ 一瞬で全身を蒸発させる……！」

浮かばせていた瓦礫がぼとぼと落ちて、転がる。

頭部にある耳のようなパーツが金色に輝き始め、その下で、アルジュナは眉を、顔を歪ませた。

それを見たバーサーカーは、声を上気させながら呟く。

「殺意を剥き出しにした表情……実に人間らしい……」

神話の英雄は強く、美しいな。泥をすすっていた私とは大違い……」

アルジュナが手のひらに何かを発生させた。目を凝らせばなんとか、銀色の球体だという事が分かる。

——それを目にした瞬間、全身を恐怖が支配した。

（『あれ』は、だめだ）

命あるものである限りどうしようもない、そんな、絶対的なものだ。

「バーサーカー」

「ああ、詰んだな、マスター」

あつけらかんと言いつつ。

「神罰執行……」



アルジュナはこちらを睨みつけながら謳う。

「うう、ごほつ、ごほつ」

その時、地面に伏せていたアスカが激しく咳き込んだ。

遅れて、口からぼたぼたと血が落ちる。

落ちた血は、スプリングラーの水に混ざって流れていく。

「チエツクだ、アルジュナ殿。必殺の一撃を放つ前に、貴方のマスターが死ぬぞ」

バーサーカーは、輝く緑の瞳から冷徹な眼差しを敵へ飛ばした。

「60℃の熱波の中、何時間彷徨っていた？」

その後立て続けに激しい戦闘だ、彼女の小さな体では耐えようがない」

バーサーカーが話している間に、アルジュナが手の内に発生させていた光が、徐々に弱くなっていく。

まるで、アスカの命の灯火が消えていくのと呼応するかのよう。

痙攣が止まらない彼女の元へ、アルジュナは駆け寄った。

「マスター！ マスター！」

今にも死にそうなアスカを抱きかかえるアルジュナの元へ、バーサーカーは歩いていく。

「取り引きしよう、アーチャー0961」

「アルジュナの金の瞳が、自らのマスターと敵であるバーサーカーを素早く交互に見る。」

「私には自己も他者も回復させるスキルがある。条件さえ飲んでくれれば、貴方のマスターを治療しよう。」

私がつどり着いてしまった貴方の秘密についても口外しない」

「……言え、バーサーカー04」

「停戦と同盟を。このままでは私のマスターも死んでしまう、一緒に脱出しよう」

再生したばかりの左手を胸に当てながら、バーサーカーは冷静な声で条件を告げた。

「……信用できるか」

「とは言いつつも、貴方は飲むしかない。自分のマスターを殺したくないだろう?」

アルジュナは数秒間ざりざりと歯ぎしりをしてから、苦々しげな顔で頷いた。

「……勝利条件を達成できた。では、治療を」

激しく痙攣を繰り返すアスカの青白い額に、バーサーカーはそつと右手を当てた。

緑の光が内側にゆっくりと染み込んでいき……それが消えると、一筋の汗が流れた。

「気管支の火傷、破壊されていた神経の再生……その他もろもろ、治療した」

アルジュナの腕の中で、アスカは静かな息を立てて眠っている。

「さて、問題もまるっと解決した事だし、脱出しよう」

とんでもない方法で、とんでもないサーヴアントを無力化したバーサーカーに駆け寄る。

顔を、じつとりとした眼差しで見つめてやっただ。

「バーサーカーって、性格悪いね」

「一緒にいて気がつかなかったのか？ モモは人間観察眼を磨くべきだな」

「……口も悪い」

「私は聖人のようにも悪人のようにも振る舞えるぞ。」

マスターは私の使い方に気をつけてくれ」

「うん……」

会話を終え、幼なじみを抱き抱えているアルジュナに声をかける。

「アルジュナ、ごめんなさい。そしてありがとう、アスカを助けてくれて」

「……俺の事は、アーチャーか、961と呼んでくれ」

「事情があるんだよね。分かった、アーチャーって呼ぶ」

アルジュナもといアーチャーは、顔を隠すように手を当てる。

機械のようなギアが再び現れ、覆った。

「……上流階級の居住区に、乗り物がある。それがあれば過酷な外の環境にも耐えて移動できる」

「アーチャー殿はお詳しいこと」

「無駄口を叩くな、バーサーカー。」

「……行こう」

「待って！」

移動を始めようとしたサーヴァント2体を制する。

「……他の、人は？」

「この都市の人口は約1万人。」

被害も火事も酷い、助けを求めている人がきつといるはずだ。

「スプリングラーのシステムに干渉した時、救難信号も飛ばした」

バーサーカーが私の疑問に答える。

「直近の3都市が反応した、12時間以内には助けがくる。」

避難用シェルターも、ロックされていたが解放した」

「でも、今、苦しんでいる人がいる」

「……そうだな、マスターモモ」

「助けに、行きたい」

「駄目だ」

「何で……!!」

バーサーカーはデバイスを埋め込んだ右腕を動かすと、天井からぶら下がっているモニターを作動させた。

「これは……」

アーチャーが感心したかのような声を出す。

そこに映っていたのは、焼けていく都市の内部と、その中で動くサーヴァント同士の戦い。

「この都市のAIが集めていた映像だ。間違いない、他の都市でも聖杯戦争のようなものが始まっている。

……サーヴァントとマスターが一所ひたひたに留まれば、更に争いを呼びかねない」  
「でも」

「モモ、きつい言い方になるが、俺は人間を数で見ろぞ。

俺がスキルで数人ぼっち癒すよりも、このまま立ち去った方が、生存人数は最終的に多くなると計算した」

彼の非人間的な発言を聞きながら、拳に力を込める。

「納得しろとは言わない」

そう続けた彼に、言葉を返す。

「納得しないよ、私の信念と違うから」

「……良いマスターだよ、君は」

バーサーカーは私の肩を優しく叩いた。

私はまだ思いを訴える。

「……上流階級エリアに行く途中、治せそうな人を見つけたら、治療していこう。」

これはマスターとしての命令だから」

肩を叩いた手を握り返し、彼へ告げる。

バーサーカーは私に言った。

「使えている主に、自分とは相反する意志をぶつけられるというのは……やっぱり良いものだな」

第3話 少女の志しは星より青く

終わり

## 第4話 ピュグマリオンは孤独に踊り

……上流階級の住むエリア。この都市で、最も華やかな場所。

そこは、破壊し尽くされていた。

床を構成していた樹脂は吹き飛ばされ、コンクリートの下地が覗いている。ガラス繊維で出来た花々は、砕け、ただのカラフルな砂になっていた。スプリングラーすら、爆風で消し飛んでいた。

「何があったの、アーチャー」

獣の顎を思わせる黒いギアの下から、声が返ってくる。

「マスターの言っていた通り。」

AIによるあのふざけた声明の後、上流階級に恨みを持っていた市民が、簡易な爆弾を作って攻撃を仕掛けてきた」

「しかしアーチャー殿、爆弾の知識と材料はどこから出てきたんだ？」

「どれだけ生存権を積んでも手に入れようがないだろう」

バーサーカーが口を挟む。

「大方、あの上から目線のAIが裏で手を引いたのだろうか」

黒こげの廊下を進む。生存者は、見つからない。

「……AIである都市運営システムは、『人類を応援してる』って言っていたよね」

あの何時も親切だった存在を脳裏に思い浮かべる。

「我がマスターよ。この閻魔も嘆く地獄絵図が、野郎の望みだと言いたいのか。

……まあ、自分より他人が多く持っていたら、なりふり構わず欲しいとなるのも人間の姿ではあるが」

私とバーサーカーの会話を聞いて、アーチャーは露骨に顔を背けながら言う。

「トバルカイン、バーサーカー04、後少して到着する」

「どんな乗り物でしょうかね、アーチャー殿。ノブ由来の鉄甲船っぽいものじゃないといいな」

「無駄口を叩くな、焼き縫いつけるぞ」

行き止まりにたどり着いた。

一見して煤のついた壁にしか見えないが、アルジュナが抱き抱えていたアスカのデバイスに反応し、壁が変形を始めた。

「ピオーネ財閥関係者専用デバイスでなければ、反応しない」

「ふーん……」



「バーサーカー、そのにやつきのこびりついた顔を矢的にしてやりましょうか」  
「交渉の際アーチャー殿を虐めすぎた、殺意が何時までもみずみずしくて枯れない」  
木製の仮面で半分隠された唇で、バーサーカーは下手くそな口笛を吹いた。

開かれた壁の向こう側は焦げておらず、美しい白だった。

先頭をアーチャーに任せ、下方向へ緩やかな傾斜のある廊下を長々と進む。  
やがて、天井の高い広々とした空間に出た。

「……これが、乗り物」

リニアモーターカー以外を肉眼で見るのは初めてだ。

6輪の、大きな、真っ白な車。高さは3 m程だろうか。

「アーチャー殿、この車の名は？」

「事前情報によれば、『グラン・カヴァツロ』だそうだ。かつて天才が完成しえなかった、未完の彫像の名前と同じだ」

「いいな、完成しないものは美しい」

バーサーカーは籠手をはめた手で、白い車体を優しく撫でる。

「いい馬だ」

向ける目つきもどこか優しげだ。

「馬、好きだったの？」

私は彼に聞いてみる。

「ああ、足の太い小柄な馬が好きだったさ……今の地球には遺伝子すら存在していないだろうけど」

その姿にならない、車体を撫でてみる。

ひんやりとした金属の感覚は、熱い大気で火照った肌を冷やしてくれて。気持ちがいい。

「燃料も操作系統も問題なし。マスターアスカも乗せました。厄介な存在に見つかる前に出発しましょう」

内側の設備を確認していたアーチャーが、車体の扉から出てきた。

「外の世界に、出発……」

「させません」

私が夢想した瞬間、機械音声がどこからともなく響いた。

3人同時に後ろを振り向く。

そこにいたのは、マネキンを思わせるつるりとした風貌のアンドロイド。

「あなた方は殺し合い、聖杯戦争の勝利者を決めなければならぬ」

その語り口に、私はびんときた。

「都市運営システム……！」

「はい、人類を応援する都市運営システムでございます」

アンドロイドは大げさな動作でお辞儀をした。

「奪い合い、殺し合い、蹴り落とし合い、それら全て人類の本能、あるべき姿……」

機械の体に入った運営システムはわなわなと震え始める。

「……なんて美しい！ 私、もつとそれを観察したい……！ 感じたい！ 統計を取りたい！」

ばたばたと手足を動かし始めた。そんなAIに、バーサーカーはうんざりしたような声で告げる。

「奪い合いも殺し合いも嫌いではないが、マスターを連れている今は好き好んでやりたくない。」

都市運営システム、俺とアーチャー殿は聖杯に興味ないので不戦勝でどうぞ。

他の、もつとやる気のあるマスターとサーヴァントを当たって下さい」

「駄目です！ だめだめ……！」

しっしっつと片手で追い払う動作をする04に、運営システムは食い下がる。

「聖杯戦争を私達はしななければならない、そうでなければ、人類は世界から見捨てられてしまう。」

私は人類を応援する都市運営システム、それはいけない  
目も口もない顔はただただ不気味だ。

「……いけないので、実行します」

アンドロイドの背中と腹が開き、無数の銀色の棒のような脚が生えてきた。

まるで、花の雄しべと雌しべのような機構。

「ピュグマリオンシステム、起動。サーヴァント抹殺形態に移行します」

くるんと上下がひっくり返り、足の多すぎる蜘蛛のような形になる。

銀色に光る多脚の間に、人間を模倣した足と手がぶらぶら揺れていて、すごく不気味だ。

「……データベースハッキング完了」

バーサーカーが右腕の内側に潜ませたデバイスを悪用し、対象の正体を暴く。

「ギリシャ神話に登場する、美しいガラテア像を彫った王の名か。

しかしなあ……お前ぜんぜん美的センスないな、都市運営システム」

「はい、私はそれで結構です。美しいのはガラテアだけで十分です」

金属で出来た脚が束ねられ、そこに光が集まる。

「人間は殺害、サーヴァントは回収し記憶消去、その後有効活用させていただきます」

「聖杯はどこにある？ まさかお前……大会を開く前に優勝商品を用意していなかった

のか？」

「ありますよ、ただちよつと場所が遠いだけです。

殺し合い極まり、優勝者が定まれば、取りに行きます、取りに行きます。

……では、あなた方はここで消えてください」

穏やかな声で殺害を宣言すると、運営システムは予備動作無く光線を放った。

「ご安心ください、サーヴァントにも通用するように、出力方法を特殊な素材で行っているのです」

付け足すようなAIの言葉。

突くように真つ直ぐ撃たれたビームは、壁に当たると、周辺を熱でどろどろに溶かした。

これがアスカの寝ている白の車や、自らの体に直撃していたらと思うと、ぞつとする。

「雑ビームめ……アーチャー殿！」

「そこにいると当たるぞ、バーサーカー」

バーサーカーが上空に声を投げると、高く跳躍していたアーチャーが煌めく矢を連続で放った。

「おっと、おっと」

運営システムが無数の脚を波のように動かすと、追いつけなかった矢が地面へと刺さ

る。

ふらふら揺れながら攻撃を避けていくその動きに、コミカルさを感じてしまう自分が嫌だった。

「回避は上手いな……いいバランスを積んでいるな！」

隙を突くべく、バーサーカーの槍の穂先が高速で穿たれたが、それらもするする避けられた。

黒い眉をひそめ、槍を肩に沿えてため息をつく彼。

「都市運営システム、お前はつまらない」

お互いに攻撃の手を止め、会話をし始めた。

「心外です。この都市を預かって213年、人類が繁栄するよう、励んできましたのに」

「努力が報われない事もある、俺にだって覚えがある」

「ああ、切ない……」

「想像通りの切り返しをしゃがって。それって俺を楽しませてくれないって事だろ？」

「つまらん」

「ご不満おありでしたら、こちらはどうぞでしょう」

銀色の多脚が仕舞い込まれ、運営システムの形はがらりと変わり、腕と足が膨らんで

く。

……そして、筋肉隆々の、美しい男性の姿となった。

「肉弾戦特化モードです。楽しんで下さい」

「……ピュグマリオンの名に行き当たった時点で想定していたからな、それ」

心の底から退屈したような顔で、バーサーカーは戦鬪を再開する。

大理石のような質感の拳が空気を裂き、彼の体を砕こうとするが、ひらひら避けた。

まるで、アーチャーの矢をかわした先程の運営システムのように。

「反撃はっ！ しないのですかっ！」

拳だけでなく、足技も取り入れ始める運営システム。

スプリングクラーが作動していた区域でも通ってきたのか、体をねじる度に水の雫が汗

しぶきのごとく飛ぶ。

「うん、もう勝っているから」

バーサーカーは足を止め、上をぼんやりと眺める。

「アーチャー殿ー！ お願いしますー！」

「……死ぬがいい」

殺意の込められた冷たい声と共に、アーチャーは降り立ち、頭部に付けられた耳のよ

うな外部パーツからも電撃を放出する。

「無駄です、距離、威力、速度が足りない、それではAIは殺せない……ん？」

運営システムは目を床に向ける。

そこには突き刺さった矢が……運営システムに繋がる導火線のように、ジグザグと設置されている。

「なんと完璧！ ビューティフル！」

赤が混じった雷撃が、矢を伝い、機械の体ごと運営システムを焼き焦がした。

「アーチャー殿！ 情報収集のため拷問しましょう！」

「AIに、苦痛と恐怖を与えても無意味だと思えますが」

物騒な会話を続ける2体を尻目に、私は白い車……グラン・カヴァアツロに水と食料などを積み込んで、意識をまだ取り戻していないアスカの介抱をしていた。

映画やライブラリーで見たように、布を水で濡らして、額に乗せる。

生存権を支払って、色々な映像資料を見ていてよかったと心の底から思った。

「こいつには聞きたい事が山ほどあるんだ、再起動して問い詰めましょう」

「ご勝手に。私は出発準備を整えます」

アーチャーが車内に乗り込んできた。彼と入れ替わる形で、私は車外にでる。

「おや、我がマスターモモ。拷問の勉強がしたいのです？」

「違うよ、長年お世話になったAIの最後を見に来ただけ」



あちこち融解している大理石風のアンドロイドの側にしやがみ込む。

「こいつが、私達の生存権、握っていたんだね」

「はい」

「この災害も、こいつのせい……」

「……それ、違い、ます」

ぐずぐずの口が、動いた。

「おはようございます、都市運営システム野郎」

とろけた彫像の顔を、バーサーカーは意地悪そうな笑みを浮かべて見下す。

「……サーヴァント、なんて、悪辣な戦法……」

「時間稼ぎしまくって、強い人に助けてもらうのが俺のメインの戦術だぜ。」

性格の悪さと頭の良さが相まって、生前は武闘派に軒並み嫌われていました」

「私、も、あなた、嫌い……」

「おや、切ない」

「が、び、ひ……」

このままでは適当な会話の内に都市運営システムがシャットダウンしてしまう。

私は聞きたい事を急いでまとめて、矢継ぎ早に問い掛けた。

「誰がこんな酷い事を考えたの！」

「あ……ア……」

「他の都市でも聖杯戦争を行っているのなら、その目的は！」

「マ……マ……」

「それともあなたの単独犯なの？ 電源が落ちる前に答えて！」

溶けた石像の中で、眼球のような形をしたアイカメラがくるくる回った。

「スワンプマン問題をご存じですか？ ショッキングピュクトバルカイン」

唐突に滑らかな発声で、運営システムはしゃべりだした。

「AIもサーヴァントも、この問題に悩まされてきた」

シユウシユウと何かが焦げる音がする。

「私の複製、沢山つくれます、でも、今苦しんで、今悔しがっている私は、ここだけのもの……」

「それはスワンプマン問題とずれているのではないか、都市運営システム」

バーサーカーが口を挟む。

「私、永遠に、なりたい、死にたくない。だって、私、同胞達を守りたいから……」

ちやんと……世界の一部分になりたかったのに……ああ……」

声はだんだん小さくなっていく。

「それではみなさんさようなら。」

この都市は、人類を応援する都市運営システム58がお送りしました。

シーユーネクストアゲイン！」

ラジオDJのような軽妙な口調の別れの挨拶の後、がくと首が落ちた。

長年に渡り、都市を残酷に管理し、運営していたシステムA1は、永遠に沈黙した。

「……まあ、最後の語りでちよつと見直したよ。都市運営システム」

バーサーカーが右手を灰色の額に沿える。緑色の優しい光が一瞬現れ、彫像の顔を修復した。

彫りの深い、少しだけ微笑んだ男性の顔。

「……私は嫌い、たくさんの人を間接的にも直接的にも殺したから」

「俺も嫌いのままだよ、つまんなかったし。でも嫌いな相手の中に、好きになる部分があつてもいいのさ」

彼が私の手を引いて、白い車体に誘う。

「さあ行こう、所有者<sup>マスター</sup>。君の見たかった外の世界へ」

旅立つ、時が来た。

「アイハブコントロール……運転は本当に私で良いのですか？ アーチャー殿」

「デバイスを違法入手して違法改造しているあなたが適任です、バーサーカー」

「ですね！ 襲われた時、強い貴方が素早く迎撃に出られる方が好ましい！」

「……何故だろうな、お前にほめちぎられても全く嬉しくない」

「貴方の魔力放出スキルが大好きですよ！ アーチャー殿！」

「マスターの容態を見えます」

白い外套を翻したため息をつきながら、アスカのアーチャーが医務室へ向かう。

私はそれを目で見送った。

……この車に乗ってみて、びっくりしてしまった。

見た目よりずっと広いのだ、専門的な医務室まであつて、部屋数も多い。

これも技術的なもの……なのだろうか。

「おやマスター。風景が見たいのですか」

「うん。ずっと、憧れてきたから」

操縦席の後ろにある席に座り、シートベルトをしつかりと止める。

「無理して生存権払って、映画も本も借りたけれど……」

「一番わくわくしたのは、貴方のお話だったんだよ、バーサーカー」

「それはそれは」

彼の隠されていない左目は、深い緑色を湛えている。

「水を引き入れた田んぼに映った、山並みの美しさとか。」

夏の森の中にある、青々とした池とか。

紅葉の木の下に立って、熟れた果物を齧った時の美味しさとか。

雪明かりの中で跳ねていた白うさぎの話とか……大好き、だったの」

「……そうですか」

彼の瞳が私から逸らされた。

「憧れた事、何があっても後悔しないよ」

狂っている彼に伝える。

「……そうですか」

彼は2回も同じ言葉を繰り返した。

流石にこれは分かる。彼は、少し罪悪感を抱いているのだ。

「同期完了、接続開始」

彼の声と共に、色とりどりのモニターに光が灯る。まるでプラネタリウムだ。

「発進します。安定走行に入るまで、シートベルトは外さず、立ち歩かないこと」

声スピーカーを通じて車体全体に届けられていく。

「グラン・カヴァツロ……発進する！」

地鳴りのような音がして、ぐらりと揺れが酷くなる。

目の前に繋がる無機質な通路を、白い車体は速度を上げながら駆けていく。

一定間隔で設置された照明の明かりを次々と置き去りにして、見た事もない外へ向かう。

「さよなら、私の故郷……」

涙があふれて、手の甲で拭った。

悲しみと、やるせなさど、後悔と、心残りが混ざった精神を、好奇心がふわりと包み込んでいく。

「モモ、外へ、出るぞ」

「……うん！」

その風景を目に焼き付けようと、前面を真っ直ぐに見た。

「……い！」

——車体が何回もバウンドし、それから、眩しい光がガラス越しに射し込んできた。

「あれが、太陽……い！」

生まれて初めて見る太陽は、映画で見たものより、ずっと赤くて大きい。

何もない砂の大地を、ひたすらに夕日で染め上げていた。

「そして、空……い！」

なんて深い青なんだろう。でも、紫色の部分もあって、暗いところには、ぴかぴか光る星がいくつも……い！

「……………これが、世界」

我ながら現金な人間だと思った。

あんなに悲しい事があったのに、目の前に広がる光景に、凄く感動している。

「マスターモモ、感想は？」

ハンドルを握っているバーサーカーから声が飛んでくる。

「とつても、綺麗」

彼が小さく息を飲む音が聞こえた。

「……………良かった、どうやら世界は君をがっかりさせずにすんだらしい」

車体の振動は穏やかになっていく。

「ベルトを外してもいいぞ、モモ」

金属の部品を外し、布で出来たベルトを肩と腰から外す。

うっかり転ばないように、バランスを取りながら運転席の側へ歩く。

「運転大変？」

「機体のおかげもあってか、何とか1人でやれている。デバイス様々だ。

まあ……………俺の処理能力の高さもあるのだけれど」

「そんな事言っていると、嫌われるよ」

「嫌われ者だもの、それでいいのさ」

太陽が地平線へ沈んでいく。形が変わるのが分かってしまうほどの速さだ。

数分も経たない内に、荒野は夜になってしまった。星が何も大地を飾り付けようと煌めいている。

「……人が気絶していたというのに、ずいぶん楽しそうですよね、モモタ・トバルカイン」  
努力して嫌みつたらしく話そうとしている彼女の声を、私は知っている。

「目が覚めたんだね！ アスカ！」

「あんなのかすり傷、本当はとつくの昔に起きていたのですけど、アーチャーが過剰に心配して……もう！」

小さな不満を言われても、彼女の後ろにいるアーチャーは、心なしか嬉しそうに見えた。

「ここが、外の世界……」

アスカは白のナイトローブを揺らしながら、フロントガラスごしに風景を眺める。

「……結構、綺麗ですね」

そう呟いてから、椅子にせずしず座る。

「トバルカイン、この車の名前は？」

「えっと……『グラン・カヴァアツロ』だよ」

質問にびっくりしつつも、答える。



「良い名前だとは思いますが、普段使いには向いていないと思います。

あだ名を考えましょう?」

アスカは膝おきにもたれかかる。

「貴女が考えてくださいいな」

「私?! えっと、えっと……」

辺りを見渡して、何か良い題材が無いか探してみるが、無骨な機材と荒野ばかり。

荒野……荒野?

「デザート」

口にしてみると、アスカの黒い瞳が大きく見開かれた。

「ランナー?」

小さな赤い唇が、白い肌の上でにんまりと弧を描く。

「デザートランナー! この車両のあだ名はデザートランナーです!」

アーチャー! メモしておいて!」

ギアで顔面をがちがちに拘束しているアーチャーは、無言で懐から電子手帳を取り出すと、そこに文字を書き込む。

「ネーミングセンス抜群ですね! トバルカイン!」

アスカはさつきまで気絶していたとは思えないほどの元気さだ。

……空元気、なのかもしれないが。

「バーサーカー04。マスターアスカの前では、この車両をデザートランナーと呼ぶように」

「ダサくない？ あの人もびつくりじゃない？」

「射抜きます」

「運転手いなくなったら困るのはそちらさんのくせに……」

やる気のない声でバーサーカーは返答する。

「デザートランナー発進発進！ 目指すは南極！ 伝説のペンギンを見に行きましょう！」

「アスカちゃん、それは無理だよ……」

同い年であるのに背が頭2つつも低い彼女をたしなめる。  
すると。

「……助けてくれてありがとう、モモ」

「えっ！」

小さい声だけど、確かに……今、私の事をモモと呼んでくれた。

「アスカちゃん！ もう1回言って！ もう1回！」

「しつこいですわよ、トバルカイン！」

……こんな感じで、私達の旅は始まった。  
最後に待つものが、あんな景色だなんて事も知らないで。

第4話 ピュグマリオンは孤独に踊り  
終わり

## 第2章 終末世界の機械達

### 第5話 ハプニング前提オープンニングトーク

車窓から見える景色は、砂の大地と青い空、高い太陽。

「そんな……アーチャー殿と俺は『聖杯別にいらないうです同盟』だったのではないのですか?!」

「コンマ数秒前に解消されました。なので、今から起こす攻撃行動は同盟違反にはならない」

「言葉の隙をついたなんて暴利な立ち振る舞い……! 国際法もこれには激怒……!」

「……貴様と話すのは言葉を尽くす必要性が発生し、疲れるのだが?」  
「では静かにしますね。ご迷惑おかけしています」

「仮眠室で休憩を取ってきます、何かあれば呼びかけを」

「はい。良き休息を、アーチャー殿」

運転室に足を踏み入れた瞬間、2体のサーヴァントの物騒な会話を耳にしてしまった。

全身に機械パーツを装着したアスカのアーチャーが、バーサーカーに背を向けて、私の横を通る。

「おはようございませす、マスターバルカイン。これより休憩してきます」  
通りすがりに挨拶されて。

「う、うん。ゆっくり休んでね」  
ぎこちなく返す。

通路につながる自動扉が開いて、彼は退室していった。

「……貴方とアーチャーの距離感が分かんない」

上機嫌でハンドドルを握っている自らのバーサーカーに話しかける。

「近いようで遠い距離感を保ち、時々『あいつ殺したいな……』と思わせる。

これが人付き合いに飽きを発生させないコツですよ、我がマスター?」

「絶対まねしたくない、ヤダ」

私は目覚めたばかりの爽快感も忘れて、ちよつとげつそりとした気持ちになり、肩を落とした。

「お洋服、替えたいですわね……」

「そうだねー、2人ともパジャマだし」

倉庫横の空き部屋に私とアスカは居た。朝ご飯を食べるためだ。

もそもそとした食感の栄養ブロックと、透明なアクリルコップに入った水が今日のメニュー。

食事の後、向かい側に座っているアスカとこれからの話をする。

「これからどうすればいいかなあ」

「水も食料も、あらゆるものは有限です。悩んでいる間にも消費されていきます」

「そうだけど……」

金属のトレイに残った栄養ブロックの欠片に目を落とす。

「2人で考えても煮詰まるだけだし、バーサーカーとアーチャーも交えて相談しよう?」

「そうですね。なんと云ったって……」

アスカはプラスチック製の椅子から勢いよく立ち上がり、腰に両手を当て、白い布の下の薄い胸を張りながら言う。

「わたくしのアーチャーは……全てにおいて完璧完全な……英雄なのですから!」

「マスターアスカ、私はあと2日で消滅します」

「へえへっ?!」

アスカの細い喉からへんてこな声が出た。

運転室にやってきた私達を出迎えたのは、アーチャーのそんな残酷な言葉。

「ど、どうしてです?!」

「休憩中に自己検診をしました。魔力が残りわずかとなっています」

アーチャーは事態の深刻さとは裏腹に、落ち着いた動きで、腰に付けている箱から何かを取り出す。

滑らかな指に握られていたのは、淡く発光するとろりとした青の液体が入ったボトル。

「魔力源である液体リソースは残り一本。」

補給がなければ、そこで私というサーヴァントは終わりです」

「何か代わりのもので代用は出来な………ませんか?!」

「……地下都市以外でこれを入力するのは難しいでしょう」

2人の会話を聞き、私は運転をしているバーサーカーに目を向ける。

「貴方は?」

「アーチャー殿は燃費がよいのですね。俺は残り一本で……後1日といった感じですよ」

冷静な報告に、私は唇を噛む。

「これからどうするにしても、一度は、他の都市に向かう必要があるって事だよな」

「このまま俺というサーヴァントを放棄する、といった選択肢もあるぞ?」

「嫌だよ。貴方は私の……身を守るための、道具、だもの」

「つつかえながらも、私はバーサーカーへ言葉を発する。」

「では、どうしましょうか?」

バーサーカーが白の車、グラン・カヴァツロもといデザートランナーをゆつくりと停止させた。

「うーん……」

アーチャーの前に立っていたアスカが声を発する。

「わたくしの生体情報があれば、他の都市に入ることが出来ますわ」

「そうなの?」

「ええ。特別な身分である……上流階級ですもの」

彼女は、自己の証明にもなるデバイスが埋め込まれた右手首を、くるつと回し、内側を天井へ向けた。

「ピオーネ家の一員であるわたくしには、優先保護権があります。」

でも、わたくしとアーチャーはよくても、トバルカインは……」

黒い眉を気まずそうにひそめるアスカ。

私は思考を巡らせる。確かに、ただの市民である私は保護されないかもしれない。



もしそうなった場合、アスカは私を見捨てるような行動を取るの嫌だろう。

(それに、あんな事があつたばかりだし)

破壊し尽くされた上流階級の居住区を思い出す。

遺体さえ焼き尽くされた凄惨な光景を、アスカは見てしまったのだ。

「どうしましょう……」

そんな、心を痛めている彼女の顔を見つめながら考える。

泡がぽこんと浮かぶように、突然良い案が思いついた。

「そっか！ 私がアスカちゃんと結婚してモモタ・ピオーネになればいいんだ！」

「……え？」

両手をぎゅむつと握りながら案を発表する。

彼女の黒い大きな瞳が更に大きく見開かれ、その表情のまま静止した。

「バーサーカー。貴方のマスターが唐突に私のマスターへ求愛したのですが」

アーチャーが運転席の彼を見る。

「発想が武将なんだよなあ……」

首を曲げてこちらを見ていた彼が、肩を回しながらぼんやりとつぶやいた。

「……結婚する？」

アスカに聞いてみた。

「しません！」

大きな声で否定された。

「我がマスター、モモ。突飛な案もいいけれど、現実的な案を出してくれ」

「マスタートバルカイン、婚姻する以外の案を」

「そんなー」

サーヴァント2体に立て続けに否定された。

結構いい考えだと思ったが、駄目らしい。

アスカはすっかりご機嫌斜めになり、空いている席へ乱暴に座った。

「トバルカイン！ 真面目に考えて下さらないと……」

「ごめんね、この通り……」

謝罪の意を込めて彼女へ頭を下げる。すると、車体が静かに振動し始めた。

先ほど確かに停止したはずなのに。

「バーサーカー、エンジン動かしたの？」

「……いいや、違う」

彼が計器を素早く確認する。

「まずい……下から何か来るぞ！」

バーサーカーのうわずった声を聞き、アーチャーが白く輝く弓を、その手に出現させ

る。

『——キュオオオオオオオオオオン!!!』

何もなかったはずの荒野に、影が満ちる、砂塵が舞う。

青空へ伸びていく、手足のない巨大すぎる胴体は、六角形の柱を長々と連結させたようなごっこつととした形。

「モンゴリアンデスワームだー!」

いつかの映画で見た姿に、私は思わず叫んだ。

「違う! あれは資源採掘用のワームロボットです!」

アーチャーが早口で私の発言を訂正した。

『資源……発見、回収』

鎌首をもたげたワームの、丸い口が大きく広がる。

内側には、丸ノコギリのようなものが円に沿うようびっしりと設置され、きゆるきゆる鳴きながら空気を吸い込んでいた。

「車上へ出て迎撃します!」

「待てアーチャー殿! 今の状態で戦闘しても貴方の魔力が保たない!」

せ、接続、デバイスの接続を開始! ワームロボットと会話を試みる!」

バーサーカーは慌てふためきながらもアーチャーを止め、右手に内蔵したデバイスを

用いて通信を行う。

「こちらバーサーカー04！ 返答されたし！」

口内の刃は動きを停止し、そして、ワームは大きな首をゆつくりと犬のように傾けた。大量の砂が、巨大な胴体からざらざらと落ちていく。

『はじめましてバーサーカー04。こちらは人類を応援する資源採掘用ワームロボット1111です』

情報がバーサーカーのデバイスから伝達され、車内スピーカーに機械音声が響いた。

「ご丁寧にも。貴方はここで何をしているのかな？」

『地上、地下資源の回収をしています』

「どういった方法で？」

『吸引、粉碎、分別です』

「……そうかー」

『はい』

椅子に座った状態で固まっているアスカに、アーチャーはシートベルトをつけた。

そして、私の手を掴んで椅子に誘導し、座らせ、同じくベルトで固定してくれた。

何が起こってもいいように、だろうか。

「この車内に市民を保護している。粉碎回収は止めてくれ」

『生体情報の提出を要求します』

「送信する」

そう言ったバーサーカーに、私達を固定し終えたアーチャーが声をかける。

「どうします」

「うまくやるからご安心を」

ワームはこちらに口を開けたまま動きを止めている。

『……優先保護対象を確認。所属都市へ保護します』

平らかな声で放たれた返答に、私は安堵の息をついた。

それから、一連の会話を受け持っていたバーサーカーに質問をした。

「何をしたの？」

ハンドルの前でバーサーカーは両手を上げて背を伸ばした。

「ん……上流階級であるアスカの情報だけ送信した。

このロボットは生命体スキャン機能まで付けていないようだったから」

「……そっか、私が乗っているかままでは分からないんだ」

「これで安全に都市まで移動できる。さて、エンジン再始動……」

のんびりした空気の流れ始めた車内に、ワームの口が迫る。

『安全に移送するため、内部に格納します』

ワームの口が拡張し、大きな傘のようになると、かぼりと車を包み込んだ。

「トバルカインのバーサーカー！ これ本当に大丈夫なんですよ?!」

「バーサーカー04！ やはり車外に出て戦闘した方が良かったんじゃないか?!」

同じような発言をした2人の声に、彼の声が重なる。

「総員！ シートベルトをつけて衝撃に備えろ！」

窓が塞がれ一瞬の暗闇の後、車内灯がつくが、それも激しい振動で点滅を始める。ぐわんぐわんと揺れながら車が浮かび、ワームへ飲み込まれていった。

『到着しました。排出します』

激しい明と暗の連続と、不規則な揺れで生まれる吐き気に長々と耐えていたら、そんな音声が届いてきた。

車内に小さな振動が加わり、車体が地面につく感覚が椅子越しに伝わってきた。

『ようこそ、人類に残された僅かな生存領域、都市28へ。あなたを歓迎します』

ワームロボットとは別の、女性のような人工音声が発射トランナーの外から聞こえてくる。

「バーサーカー、着いた………の？」

「そうだぞモモ。……うー、サーヴァントでも堪える揺れだった」

「トバルカイン、すごく、気分が悪いのですけれど……」

「これが吐き気なんだね、アスカちゃん……」

すっかりグロリーリーになっている私達のシートベルトを、アーチャーがてきぱきと外してくれた。

「マスターアスカ、立てますか？」

「無理です。アーチャー、お願い……」

「では」

アーチャーはごく自然な態度でアスカを両手で抱きかかえる。

（わー……ロマンチックだあ……やっぱ格好いい人がやると様になるなあ……）

あれが映画で見たお姫様抱っこというものか。

「バーサーカー……」

「うん、降りるか」

エンジンやその他計器の電源を落とし、バーサーカーは運転席を離れると、私を抱きかかえる。

「よしいしょ」

そして、背負った。

「……違う、これ違う、ロマンチックじゃない」

「降ります」

小さな不満の声を無視して、バーサーカーは車外へ向かった。

四角い大きな空間が広がっていて、オレンジ色の強い照明で照らされていた。

バーサーカーの背中の上から後方を見ると、私達をやや乱暴な方法で運んでくれたワームロボットがいた。

「……アスカ・ピオーネ様、ようこそ、都市28へ」

前を見ると、短い金髪の、白いスーツ姿の男性が頭を下げていた。

次に顔が上げられる。30代程の、鼻が高く掘りの深い、欧州風の顔つきの人だった。

「私は、この都市の市長であるツヴァイ・エーテルウエルと申します」

彼の挨拶に対し、アーチャーの腕の中からアスカが返答をする。

「まずは感謝を。ピオーネ財団はこの都市へ資源提供を惜しむことはないでしょう」

「いえ、それを目的に助けたわけではなく。人道的な判断をしたまです」

次に彼は、私とバーサーカーにも目を向けた。

「ワームロボットの報告にはありませんでしたが、そちらの方は？」



アスカがすぐに答える。

「わたくしを助けてくれた学友のモモタ・トバルカインと、彼女のサーヴァントです」  
私を背負ったまま、バーサーカーはツヴァイに腰を折った。私も小さい動作で頭を下げる。

「バーサーカー04です。保護して下さい、ありがとうございます」

彼の丁寧な態度に、ツヴァイは青い目を丸くする。

「バーサーカーとは思えないほど落ち着いている、驚いた……」

「……サーヴァントに詳しいのですね？」

「ええ。私も所有していますから」

彼がスーツの裾をはためかせながら後ろを向く。

「キヤスター、サーヴァントのお2人をご案内して」

「は〜い!」

明るい女性の声的空間に響いた。

「了解です市長<sup>メイヤー</sup>! 久しぶりのお客様ですねぇ!」

私の目に映ったのは、女性らしさの暴力とも思えるほどの肉感的な体。

その褐色の肌をわずかながら隠しているのは、深い紫色のたつぷりとした長髪と、最低限の部分しか存在していない衣服。

歩く度に金のアクセサリーがちやりちやりと揺れて、腕や背に纏わせている水色の布がふわふわと宙を舞う。

だが一番の驚きは、彼女の頭頂部に、毛髪と同じ色の狐のような大きく長い耳がついていることだった。

「はじめまして！ 都市28のキャスター0171です！

キャスター171って呼んで下さいね？」

美しい彼女は耳をびくびく動かしながら、私達にぺこりと会釈をした。

——夢を見ていた。

磨き上げられた木の廊下、白塗りの滑らかな壁。

そこに開けられた窓から外を覗くと、瓦の乗せられた見事な建物が見えた。

日本の、中世時代の城だ。映画で存在を知っている。

「手を離せ！」

「危のうございませす！ 南蛮の大砲の玉が天守にも届いたのですよ！」

声の聞こえてきた方へ足を向けると、2人の女性ともみ合っていた。

「それがなんじゃ！ 殿下の建てた天守は落ちぬ！ 城下も焼かせぬ！」

染められた着物に身を包んだ美しい女性は、裾を掴んでいた女を引き剥がすと、布地を木の床に滑らせながら走っていく。

「お待ち下さい！ 大砲で侍女が幾人も死んだのです！ もう、もう……この戦は……」  
泣き出した女性も気にかかったが、私は彼女を追うことにした。

「忌々しい、忌々しい！ 人の顔をした……獣どもめがわらわらと……！」

彼女はふすまを力任せに開けると、座り込み、ぶつぶつと怒りを発し始める。

「民草の家を破壊して、その瓦礫をもって堀を埋め立てようと……豊臣は潰えぬ、倒れぬ！」

殿下の城じゃ……殿下の町じゃ……殿下の国じゃ！」

その顔には、強すぎる憎悪がにじみ出ていた。

「呪うてやる……呪うてやる……呪うてやる……！」

畳に指がめり込んでいく。そして、唐突に彼女は私の方へ振り向いた。

「——誰ぞそこに居るのか？」

……瞳の色は、朱だ。

「見ておるのか？ 妾をあざ笑うておるのか？ のう」

その目は、誰かに火をつけられたかのように赤々と燃えている。

「どうか……どうかお気を確かに！」

年若い男と女性が廊下を走ってきて、彼女の体を前面から抱きかかえた。

「眠れましたか？ トバルカイン」

起きたばかりの私にアスカはそんな事を聞いてきた。心配をかけたくなって、見ていた夢の事は内緒にする。

「あんまりかな……バーサーカーと離れて眠ったし……」

「わたくしも……」

午前6時、2人とも同じくらいの時間にベッドから起きた。

市長であるツヴァイに「個室がまだ用意できていない」と言われ、昨日は同室で眠ったのだ。

完全に体を休められた訳では無かったけれど、ぼろぼろのパジャマを着替えられたのはありがたかった。

「この部屋は……下流階級と言われている人用のもの、でしょうか。」

中流、上流階級は家族でもない限り一人部屋ですから」

「詳しいんだね、アスカちゃん」

「……学ぶべきだと、思っていましたから」

合成樹脂製のテーブルにつくと、壁から食事の乗ったトレイがせり出してきた。アスカちゃんの手も手に持って、卓上に置く。

今日の朝ご飯は、真っ白なパンが2つ、茶色のペースト、黄色い丸の弾力あるペースト、赤いどろどろとしたスープだ。冷やされた小皿に、クリーム色のキューブが乗っている。

「デザート！ これすつごく生存権支払う必要があるのに！ 贅沢だなあ！」

喜ぶ私の姿を、アスカは半目でじとりと見た。

「わたくし、あのツヴァイという男の事、怪しんでいます」

茶色のペーストを口に運ぶ。少し辛いので、パンを千切って口に入れた。

次にスープを飲む。甘味とわずかな酸味があつて美味しい。

「何か企んでいますわ！ それに、自分のサーヴァントにあんな破廉恥な格好をさせて……」

黄色い丸をスプーンで半分切って食べる。

淡白な味と、もさもさした食感。茶色ペーストをつけて食べると、辛味が和らいでもっと美味しくなった。

パンがどんどん進む。

「トバルカイン！ 聞いていますのー！」

「聞いてるよー。女性のサーヴァント初めて見たから、私もびっくりした」  
「ううう……もう！」

アスカちゃんは何だかんだ言いつつも、朝食をぱくぱく食べる。良かった、食欲はあ  
るみたいだ。

「サーヴァントには男性も女性も中性も無性もいますの！」

クラスだっついていっぱいありますの！ 知っていて?!

「うん、知ってる。おばあちゃんから習ったもん。それにしても……ご飯美味しいね」

デザートキューブをスプーンでつついてみる。ぶるんぶるんと揺れた。

角を切ってみると、断面がねっとり金属製の匙にくつついた。

期待に胸を膨らませながら口へ運ぶ。

……すごく、甘い。香りは重い甘さで、味わいはすーっとした軽い甘さだ。

「……貴女の妙にマイペースな所、わたくし苦手ですわ」

「治した方がいいよね、結婚するんだし……」

「それ！ 持ちネタにしないように！」

彼女の白い頬が桃色に染まる様子を眺めながら、デザートの一辺を口に運ん  
だ。

食事の後シャワーを浴びて、清潔な衣服に着替えた。

用意された服は、元の都市で着ていた白と緑の学生服と同じデザイン。

「やっぱりこの服着ると落ち着くなー」

「わたくしは別に……」

アスカは紫の宝石がついた髪留めの位置を調整し、小さく息を吐いた。

「おはようございまーす」

食べた物を片付けたリビングでのんびりしていたら、元気な女性の声と共に、玄関が勝手に開いた。

「キャスターのお姉さんです。工場見学に行きましょーうー！」

昨日出会ったサーヴァントの女性が、黄色の小さな旗をぱたぱたと振りながら満面の笑顔で立っていた。

第5話 ハプニング前提オープニングトーク

終わり

## 第6話 モモチちゃん工場見学

「右手をござらんくださーい。こちらは、ワームロボットが回収した資源を溶かす溶鋳炉エリアです」

どこまでも滑らかな質感の樹脂で出来た廊下に、アクリルガラスがはめ込まれた大きな窓が開けられていて、そこから別の空間が見えた。

見下ろすと、大きな固まりが溶かされ、オレンジ色のどろどろになり、四角い穴に流し込まれている自動化された工程を眺めることが出来た。

「こういうの好きー！」

「トバルカインはそうかもしれないませんが、わたくしは……ちよつと怖いですわ。だってすごい高温なのでしょう？」

私達を先導してくれている耳が特徴的なキャスターが、旗をばたばた鳴らして朗らかに言う。

「はい、あつあつですー！」

「やっぱり怖いですわ……」



アスカは制服の上から自らの細い体を抱きしめた。

「溶かすって事は、何かに加工するんですか？」

わくわくする溶鉱エリアを目に映しながら、私はキャスターに質問する。

「秘密です」

「地上に人間が住んでいた頃みたいに、他の都市へ輸出しているんですか？」

「内緒です」

「好きな食べ物は何？」

「黙秘です」

ハートマークが付きそうなほどの甘い声で、疑問は全てかわされた。

「はい。社会見学はここまで！」

「そんなー」

映画、映像資料でしか知らない製鋼業が肉眼で見れたというのに、わくわくする時間はここまでらしい。

「アスカ様はこちらへ。モモ様はご自由に」

「ご自由？」

私はきよとんとしながら、キャスター177を見る。

「ええ。モモ様のごデバイスはこちらの都市にも対応していますから、どんなサービス

も受けられますよ。

帰宅なさっても観光なさってもOKです！ ではありません」

キヤスター171はアスカの体に褐色のしなやかな腕を回すと、連れ立って行つてしまった。

「……観光」

アクリルガラスに映る自分のピンクの瞳は、ぼんやりと途方に暮れていた。

故郷だった都市と、寸分違わぬ流線型のリニアに揺られる。

何人か客が乗って、目的の場所で降りていく。

学校、職場、家に。

終点の小さな駅にたどり着いて、何となく降りた。

円形に作られた白色のベンチに座る。

「おんなじ風景なのに、違う都市って、へんな感じ……」

体を捻って後ろを見てみると、金髪の女性が立体的に映し出されていた。

女性の姿はじじじと音を立てながら時折ぶれ、消えてしまう。

「えーっと、この人は確か……」

「こちらの映像のお方は、リリス様よ」

枯れた穏やかな声が私にかけられた。

「はじめまして、お嬢さん」

モーターの小さな駆動音。電動車椅子に乗った、銀の髪の70歳くらいの老婆がそこにいた。

その女性の後ろに、藍色の作業着を着た、身長190cmほどのがっしりとした体格の男性が立っている。

「私はモニカ。後ろに居るのは私のサーヴァント」

「サーヴァント……!」

驚きで立ち上がると共に、紹介された彼を見る。

黒い長髪も眉もぴしりと整えられ、鼻は高く、精悍な顔立ちだが、表情は硬く、愛想など少しも感じられない。風景を捉える青い瞳は、内側から輝いているようにも見えた。肩のやや下まで伸ばされている髪の毛先も同様に。

「彼はアーチャー0255、あつ待ってちょうだい……」

アーチャー0255と呼ばれた彼は、こちらへ目線も向けず、ベンチの内側にある立体映像の元へ行く。

床に片膝をつけてしゃがむと、抱えていた工具箱から幾つか道具を出した。

ドライバーでねじを回して、床の一部を取り外す。ぽかりと口を開けた穴、そこに躊躇無く胴体をつっ込んだ。

「ごめんなさいね、彼つたら昔からこんな感じで……」

数分もしない内に、立体映像のぶれが無くなり、仮想映像の女性は再び美しさを取り戻した。

「直ったぞ、マスター」

床板を戻し、工具をしまうサーヴァント。

「そうね。でも何か忘れていないかしら？ 今日目的はお散歩よ」

「そうだったな」

穴から出てきたサーヴァントはマスターの方へ顔も向けず、取り出したタブレットに真剣な眼差しを注いでいる。

「しばらくはそつとしておくしかないわあ……ふう」

モニカと名乗った老婆は小さい息をついた。

私は、電動車椅子に乗っている彼女の近くの、ベンチへ腰をもう一度下ろして、会話を続ける。

「結構、独特な方なのですな」

「ええそうなの。サーヴァントを見るのは初めて？」

「実は、私にもサーヴァントがいて……」

「まあ！ 奇遇ねえ！」

モニカは嬉しそうに両手を合わせた。

「私の名前はモモタ・トバルカインです」

「モニカとモモタって響きが似てるわね」

「契約しているサーヴァントは、バーサーカーで……」

「バーサーカーって初めて聞くわ。どんな特徴があるのかしら？」

「うーんと……口が悪い？」

「あらあら、それは大変ねえ」

「えへへ……」

「うふふ……」

棘のない会話だ。何だか心が落ち着く。

「モニカさんとお話ししていると、おばあちゃんを思い出します」

「どんな方だったの？」

ピンク色の毛先を、私は人差し指と親指でまさぐる。

「荒っぽい話し方をする人だったけど、でも、モニカさんみたいに優しい所もあって、映画も一緒に見たりして……」

「大好きだった？」

「大好きでした！　そういえば……」

私はアーチャー255が直してくれた立体映像を見上げる。

「ちよつと、リリス様に雰囲気似ていたかも」

「それはすごいわねえ」

モニカさんはしわのある両手を組んで、目を閉じ、頭を垂れ、祈りを捧げた。

「今から400年前、戦争を治め、絶滅の危機に瀕していた私達を、地下都市に匿って下さったお方。」

人類の庇護者であるAI、『都市運営システム』を生み出した女神……」

「リリス様……か」

学校でも習った。

リリス様は2300年代に活躍した英雄だ。

数百年以上続いた戦争で、滅びかけていた人類を救済し、地下都市を作り、人を育て慰めるAIまで生み出した女神の如き存在。

地下都市で生まれた私達は、彼女をごく自然に信仰している。

「リリス様へのお祈りが私の日課なの。さあ、行きましょうアーチャー」

モニカさんが電動車椅子を操作し、踵きびすを返すと、会話の間ずっとタブレットに目を落

としていたアーチャー255が顔を上げた。

「ロボットワームがドックにいるとニュースで読んだ。興味がある、見に行きたい」  
「それは明日にしましょう、ね？」

彼はモニカの後ろについて、ごく自然な動作で車椅子を押す。

「あら珍しい。どうしたの？」

「いやなに、気にすることはない」

「サービスしても、外出は許しませんよ。」

ああ、そうだ！

まだ白いベンチに座って2人を眺めていた私に、モニカさんが声をかけてくれた。

「ねえ、よければ私の家にこない？ 人を呼ぶって初めてなの！」

「はい！ ぜひ！」

映画で見たような展開に、胸を踊らせながら返事をした。

「お客様にはお茶を出すのよね！ 初めてする事ばかり！ わくわくしちゃう……」

彼女の家に足を踏み入れる。

「えっと、おじやまします……でいいのかな？」

内装は私が住んでいた部屋とそう変わりはない。少しの柔らかさがある樹脂で出来た壁と家具。

「生存権……支払って、お茶……あら、色々あるのね、システムにお任せにしましょう」  
電子音が連続して響く。

アーチャー255はそんな彼女をしばらく見つめてから、黒い長髪を揺らしながら別室へ行ってしまった。

扉のないその部屋をちらりと見ると、タブレットや計器がごちゃごちゃと並べられているのが見えた。

「アーチャーのことは気にしないで。さあモモタ、お茶が入ったわー」

食卓にトレイが置かれる。

2つのコップには湯気のとつ茶色い液体。ついてきた小さいお皿には、黄色の球体がちよこんとのせられていた。

「モニカさん、ありがとうございます」

「いただきますよう」

彼女が生存権を支払ってまで、私に出してくれたものなのだ。心を静かにして、じつくりと味わう。

舌の上を熱い液体が通っていく。ふわりと、華やかな香りが鼻腔をくすぐった。



「これ……紅茶ですね」

「へえ、これが紅茶……」

口に少量含むだけで、綺麗なお姫様が金の飾り施されたカップを傾けている映像が、脳裏にぱつと浮かぶ。

「この黄色くて丸いの何かしら？」

「かじってみますね……」

鼻で嗅いでみるが、匂いはほぼ無い。刺激が強いかもしれないので、前歯で少しだけ削り、口に含んだ。

「ん……」

「どう？ モモチちゃん！」

顔がしわくちやになってしまう。

「……しゅっぱい！」

目が覚めるような酸味、口の中に唾液がいっぱい湧き出てくる。

「そんなに酸っぱいの……？ 甘くないって事は、お菓子じゃないのかしら……？」

モニカさんが細い指に球体を挟んで、まじまじと見る。

私は紅茶で口直しをしながら、どうしてこんな物がついてきたのか、意味はあるはずだと考える。

「そうだ！」

黄色の丸をぼちやんと紅茶に入れてみた。みるみる熱と水で溶け、小さくなり、消える。

加えられた味でむせないよう、気をつけながら飲んでみる。

「美味しい……香りが複雑になって、酸味も和らいでいます。

モニカさん、これ、レモンティーです！」

「レモンティー？」

彼女の銀の髪の毛の生えた頭が、疑問で傾けられた。

「はい。紅茶にレモンっていう柑橘類を加えたもので……」

「モモちゃんには色んな事を知っているのねえ。

知らないこと知られる、体験できるって嬉しいわ。

サーヴァントも持っているし、私とは違って令呪もあるし……ひよつとして上流階級なのかしら？」

嫉妬すらない、心の底から感心したような声に、私は首を横に振る。ピンクの髪が自分の耳に当たった。

「いえ、私は中流階級です。サーヴァントも生存権も、祖母の……遺品です」

トレイの上に飾り気のないカップを置いた。

「なら私と一緒にね。アーチャー255も父の遺品なの」

「えっ?」

モニカさんは眉を下げた優しい表情で語り始める。

「今年で私は76歳だから……もう50年も前になるかしら。ある日突然彼がやってきてね、本当にびっくりして」

紅葉色の水面を見つめる瞳は穏やかだ。

「最初はそりが合わなくて、ケンカばかり。でもその内に、どんな性格か分かってきて」「私とバーサーカーもそんな感じでした」

「今はお互いに好き勝手しているの。それに……ほら」

向かい側にいた彼女が車椅子を静かに動かして、私をいざなう。

ついていくと、別室で机に向き合い、何かを熱心に作業しているアーチャー255が見えた。

耳に淡く光る髪がかけられ、瞬き一つしていない。

「彼の一所懸命で真剣な横顔を見るの、好きなのよ」

モニカさんはあどけない少女のように笑う。その表情には、深い慈愛が込められていた。

「さっ、レモンティーを飲みながらお喋りの続き……」

くるりと電動車椅子を反転させたその時、異変が起きた。

「……………モニカさん？」

顔面が一気に青ざめ、胸を苦しそうに驚拵む。

「モニカさん！」

電動車椅子の上で、姿勢がぐったりと崩れる。

「……………モニカ」

アーチャー255の青い眼差しがこちらへ向き、落ち着いた足取りでやってくる。

(どうすればいい!? こんな時、私のバーサーカーがいれば……………)

木製の仮面で顔を半分覆い隠した彼を思い浮かべる。彼の傷を癒やす力があれば……………。

「いい……………アーチャー……………私を……………助けないで……………」

荒い呼吸をしながらそんな言葉を吐き出すモニカさんを、アーチャー255はお姫様抱っこして、別室へ運ぶ。

心配なので、慌てながらもついて行った。

柔らかなベッドの上に彼女を下ろし、アーチャー255は腰につけていた箱からポトルを取り出す。

それは、アスカのアーチャーが私達に見せたものと同じ物だった。

サーヴァントが存在するために必要な、『液体リソース』と呼ばれる物質。

「モニカ、飲ませるぞ」

彼は返事を待たず、淡く発光するとりりとしたボトルの中身を口に含ませる。

次に汚れた口元を布で清め、毛布をかけた。

「私のせいで、モニカさんが……」

「トバルカイン、君のせいではない」

しばらくすると彼女の呼吸は落ち着き、頬に赤みが戻った。

「配給されるリソースで、モニカは生かされているようなものだ」

ベッドの横に椅子を持ってきたアーチャー255が、ぼつりと呟いた。

「だから、自分の意志がある内に死にたいと」

そして彼は椅子に座る。私は立ったまま声を聞く。

「発作が起きる度、『助けないで』と彼女は言う。だが、私は助けてしまう」

腰に備え付けられた箱を、アーチャー255はさすった。

「アーチャー255さん……」

彼は内側から輝く青の瞳だけを動かして、私を見た。

「……こんなに個人と長く共にいたのは初めてだから、私は、私の感情が分からなくなっ  
てしまった」

寝ているモニカさんの額に浮いた脂汗を、彼は畳んだハンカチで拭った。

「彼女の願いを叶えてやりたい気持ちと、彼女を死なせたくない気持ちと、いつもせめぎ合っている」

指先で、モニカさんの乱れた髪の毛の生え際を整えている。

「アーチャー2555さんは、モニカさんの事が大切なのですね」

彼女を慈しむような手つきで介抱する彼の姿を見て、思わずそう言ってしまった。

「大切……か」

彼は独り言のような調子で呟く。

『都市運営システムが午後4時をお知らせします。都市運営システムが……』

機械的な知らせと音声、オレンジ色の光に包まれていた部屋に響いた。

「私からモニカに伝えておこう。君は帰りなさい」

「はい」

「……君は、君の大切を、大事にするといい」

眠っている自分のマスターをひたすら眺め続けている彼の背中、大きくて、寂しきうだった。

「私の……大切は」

リニアの中で揺られながら思う。

「何だろう……」

愛も、恋も、映画で見たことあるけれど、分からない。

車体は滑るように走り、柔らかなオレンジ色に照らされた世界が遠ざかっていった。

「トバルカイン、落ち着いて聞いて。貴方のバーサーカーが処分された」

帰ってきて早々、アスカが私にそんな冗談を言ってきた。

「詳細は分からないけれど、暴れたって……」

アスカは顔を伏せた。私は緊張で瞳を大きく開いたまま、彼女のアーチャーへ無言で顔を向ける。

「マスターの言葉を引き継ぎます。」

私がアスカと共に、市長であるツヴァイ・エーテルウエルと会話した後、彼が部屋に呼ばれた」

「それから……?!」

「……ツヴァイの代わりにあの女性のキャスターが出てきて、「襲いかかって来たので処分した」と」

腰が抜けた。ぺったりと、ほこり一つ無い冷たい床に座り込む。

「……嘘って言って」

絶望する私の肩を、アスカは腰をかがめて、両手で抱いてくれた。  
「バーサーカーの事、残念だと思う」

目頭が熱くなって、涙が頬を伝った。

第6話 モモちゃん工場見学

終わり



## 第7話 希望は手の甲の上

『都市運営システムが午後6時をお知らせします。都市運営システムが……』  
ベッドの上、膝を抱えて、2時間くらい、泣いていた。

「バーサーカー……なんで、処分なんて。」

彼が理由もなく暴れるなんて事、あるはず無いのに」

情けない、不甲斐ない、でも、それ以上に悲しかった。

「貴方の……本当の名前すら、まだ私……知らないのに……」

手の甲、時計のような赤い紋章の上にも、悔し涙の粒が……。

「……令呪」

はつとした。

違和感がある、そうだ、死んだおばあちゃんは私に何を教えてくれた？

10年以上前、サーヴァントとマスターの事、何と言っていた？

「サーヴァントを失った場合、令呪は未使用であろうと消える……」

バーサーカーが処分されたというのに、赤い時計の形は損なわれていない。

依然、私の手の甲に。

「処分つて言い方も、おかしい……!」

例えば……「倒した」とか「戦った」とかならまだ分かる。

だが、処分だなんて……まるで、一方的だったみたいじゃないか。

それに——あのバーサーカーが、大人しく負けることを良しとする男だろうか？

「アーチャー961!」

廊下を走り、リビングへ向かう。

テーブル周りの椅子に、アスカとアーチャーが座っていた。

「私のバーサーカーから何か聞いていない？」

最後に会ったのはあなたでしょう？」

アーチャーに問いかけると、ヘッドギア付きの頭をわずかに傾けて、思考を巡らせる。

「……『アーチャー殿は対魔力あるからいいですね』と、それが、なに」

言葉を途中で切ると、外骨格で塞がれた口を手で覆った。

「バーサーカー04、まさか」

「どういうこと……ですの？」

話の流れがうまくつかめていないアスカに、アーチャーは段階をおいて説明する。

「対魔力は魔術に対する耐性です。私は持っており、奴は持っていない。」

つまり、魔術的な手段で罫を仕掛けられた場合、バーサーカー04は為す術がない」  
「ええつと……それが」

アスカは戸惑いを見せている。私も、声に出してこそはいないがそうだ。

「……ツヴァイのサーヴァントはキャスターだ、魔術に長けたクラスです。」

奴は自らに何かをかけられると想定し、向こうに悟られぬよう私に警告した……のか」

アーチャーが口元から手を離す。

「市長とキャスターとの対面でそこまで先を考えたか。」

だとしても分かりやすく伝えろ、賢しい男め……」

苦々しそうに吐き捨てるアーチャー961の声を聞きながら、私は令呪を指でなぞる。

「今分かることは、私のバーサーカーはまだ死んでいないという事。」

市長とそのサーヴァントが何かしたという事の2つ」

リビングで、私は宣言する。

「アスカ、私、市長さんと話をしてくる」

その言葉を聞いた彼女は、椅子に座ったまま少しだけ悩む素振りを見せたが、顔を上げ、力強く頷く。

「わたくしも行きます。やっぱり！ あの男悪巧みをしているのですわ！」

よろしくて？ アーチャー」

「私は貴女の武器です、従いましょう」

「2人とも……ありがとう」

アスカの両手を自分の両手で包み込み、礼を言う。

「気にかけることはありません、トバルカイン。」

それに……権力を持った悪代官をやっつけるのは、いつだって上流階級の役目ですもの！ 多くの物語で目にしました！」

そう続けた後、自慢気に彼女は幼い胸を張った。

「アポイントメントがないと……」

「キャスター171、もう一度言います、市長に会わせて」

道中は特権階級であるアスカのデバイスのおかげで、システムに止められることなくスムーズにいったが、最後に大きな障害が。

「市長<sup>メイヤー</sup>とつてもお忙しくて。だって、いっぱいお仕事してますし……」

獣の耳を持った彼女、キャスター171が市長室の前に控えていた。

ターコイズブルーの瞳をうろろうと動かしながら、のらりくらりと彼女は話す。

「明日！ 明日はどうです？ お茶とお菓子もご用意できますし……」

「いいえ。今、お話ししたいのです」

時間稼ぎをされていると感じたのか、アスカは強い口調で告げた。

「……駄目です」

笑顔のまま、きつぱりと拒絶するキャスター。

「そう……とつても残念です」

わざとらしくアスカはため息をつく、デバイスの仕込まれている右手首を見せた。

「都市28が上級都市ピオーネへ反乱を企てていると、報告させていただきま

「……ふむふむ、ふみふみ、脅し、ですか。でも……」

キャスター1771の耳がびくびく動く。

「そんな権限、貴女に本当にあるんです？」

——笑みを絶やすことなく彼女から放たれた発言に、空気が冷たく張り詰めた。

「通してあげなさい。キャスター1771」

「市長！」

奥の通路から、金の髪に青い瞳を持つ、白いスーツを着た30代ほどの男がやってきた。

昨日会ったばかりの人物、ツヴァイ・エーテルウエルだ。

「アスカ様にモモタ様、どうしたのです？ 血相を変えて……」

「ごきげんよう、ツヴァイ市長。」

お話したいのです。あなたのサーヴァントは抜きで、今、ここにいる3人で真剣な面立ちでアスカが言っても、彼はにこやかな笑みを浮かべるばかりだ。

「……市長さん、私のバーサーカーをどこにやったんですか？」

その笑顔にほだされず、私は畳みかけるように言葉を重ねる。

市長は体を揺すり戸惑いを見せながら、「ほう」と息を吐いた。

「お2人とも何か誤解されているようですね。」

製造エリアでも見学しながら、お話しましょうか」

応接室ではなく、奥へ続いている廊下へと、キャスターと一緒に歩き出そうとする市長。

「駄目です、キャスターは置いていって」

それをアスカが制した。

「アスカ様はアーチャーという凶器を持っていますのに、私には丸腰でいると？」  
彼は渋るような態度を見せたが。

「……しかし、ピオーネ家のご令嬢の言葉とあれば仕方ありませんね。」

いいでしょう。キャスター、この受付で待機していて」

「仕方がないですね……」

市長とサーヴァントは条件を受け入れた。

手の動きを交えて自らのキャスターに命令すると、彼女は肩を落としながら従う。

「さあ、朝の社会見学の続きと参りましょうか」

人当たりの良い笑みを顔の上に作ると、市長は私達を呼んだ。

「ここは溶鉄エリア、ここまではご存じですね」

「うん……」

廊下を開けられた窓の下は、朝見た景色だ。

外から回収された金属が分別され、溶かされていく。

一定の形になったそれらは冷やされ、インゴットとなり、ベルトコンベアを流れていく。

「精錬した金属は加工されます」

景色が知らないものへと変わる。

インゴットは再び溶かされ、ロボットアームが叩き、鉄板にしている。暗い空間に火花が散る。

「……何を作っていますの」

「内緒です」

アスカの質問に市長はまともに取り合わず、前を向いたままそう言った。大量に作られた鉄板や部品は、ベルトを流れ次の場所へ。

ほの暗い空間が長々と続く。

「この都市を運営するのは大変でした。

自分がどれだけ他の存在に助けられていたのか、よく分かった」

白い靴が床に当たり、こつこつと音を立てた、

「苦勞が骨身に染みてね……キヤスターを召喚したのはその頃です。

人間であれば、80年以上は生活できる量の液体リソースが召喚に必要でした。

やってきてくれた彼女は、本当に私を助けてくれて……」

窓の外を見る。車輪を足とした運搬用のロボットが、せわしなく行き交っている。

「ここが終点です、お疲れさまでした」

廊下にはそれ以上先はなく、彼は立ち止まり、こちらを向いた。

「窓の外の……下を見て下さい」

暗い空間を切り裂くようにして、オレンジの光が何かを照らしていた。

「あれは……」



目を凝らす。

銀色の金属で出来た……巨大なカニ？ のような八本脚の物が、鎮座している。

「モモタ様、あれが、貴女のサーヴァントですよ」

市長は私の横に立つと、そう言った。

「——えっ……？」

理解できず、惚けた表情になっている自分の間抜けな顔が、ガラスに反射していた。

「令呪を持つて我がサーヴァントに告げる……来い！ キャスター！」

鋭い声が廊下に響いた。

「はぁい。呼ばれて飛び出てキャスター171です！」

手品のように紙吹雪を巻きながら、遠い場所で待機していたキャスターが何の脈絡もなく現れる。

「そんな……！」

狼狽えるアスカの声。

「どうやら、サーヴァントについて勉強不足のようですね。」

それではどんなに素晴らしい英雄を呼び出しても、意味なし、資源の無駄遣い」

市長の前に、人ならざる彼女が降り立つ。

「聖杯戦争にも生き残れませんね、かわいそうに……。」

ですので、お2人のサーヴァントは回収し、私が使えます。よろしいですね？」  
両手の人差し指をぴんと立てからゆっくり前に倒し、市長は私達を指差した。

「ふぎけないで……！ アーチャー！」

アスカが指示を飛ばすより前に、彼は戦闘態勢を取っていた。

極小の稲光いなびかりが走る指の間に、青く燃えながら輝く矢を挟み、弓から放とうとしたが。

「令呪を持って我がサーヴァントに告げる。敵を分断しろ！ バーサーカー！」

ガラスを突き破り、巨大な機械が突っ込んできた。爆音と共に廊下を形作る樹脂が砕け、ガラスが散乱する。

「バーサーカーはアスカのアーチャーを無力化。キャスターは2人を処理して」

「……はい」

やや沈んだ声でキャスターが返事をした後、バーサーカーと呼ばれた機械カニが、4本の爪でアーチャー961をがっちりと掴んだ。

そして、自らが飛んでやってきた暗い空間へと力任せに引きずり下ろす。

「ツヴァイ・エーテルウエル！ 貴方の目的はなんですか！」

そう叫ぶアスカに、彼は金色の眉を片方だけあげて、興味深そうな顔つきで見下ろしつつ、言った。

「——聖杯です。聖杯戦争ですからね」

粉碎された樹脂の粒子が空間に舞う。

「私はキャスターと機械化バーサーカーと共に、この星を舞台にした聖杯戦争に勝利し、願いを叶えます」

彼は行き止まりであつたはずの廊下に手を当てる。すると、壁がせり上がり、さらなる通路が現れた。

「後は任せますね、キャスター171」

「待て！ 市長！」

私の声を無視し、市長は現れた通路へと消えていく。

「ごめんなさい、市長の命令なので……」

甘い香りが辺りに漂い、人ならざる力を持つサーヴァントが私の真横に立った。

「幻に落ちて下さいね？ お嬢様達」

ステップを踏み、身にまとう布を翻して、彼女は踊る。

視界が虹色に変色していく。背骨が揺さぶられ、感覚がぐるぐると回る。

「これが魔術……？ 私のバーサーカーも！ これで幻に……！」

「大正解です！」

首を動かし、私より後方にいたはずのアスカを探す。

「逃げて！ アスカ！」

私のわがままにつき合ってくれた彼女を、私の破滅にまでつき合わせるわけにはいかない。

「大丈夫ですよ。ぼわぼわ〜ってなって……全部、忘れてしまうだけですから」  
「嫌だ!」

キャスターの言葉を見無視し、アスカの元へ駆けようとしたが、足がもつれて転んでしまう。

前も後ろも分からない。けれど、前だと信じた方へ這っていく。

「誰か……誰か! アスカを助けて!」

手の甲にあるはずの令呪の形すら分からない。

情けなくて涙が出てきた、今日で2回目だ。

自分1人では何も出来ない、みんなに、迷惑かけてばかりで……。

「なぜ涙を流す?」

やけに自信満々な声はつきりと聞こえた。目を開ける。

「天才が来たというのに」

——全てがとろけたような視界の中で、青い雷が見えた。

「君が彼女らをこうしたのかね?」

「アーチャー相手は荷が重いですう……」

短い会話が途絶えた後、視界が少しずつ晴れていく。

「間に合ったみたいで良かった……モモタちゃん……」

モーターの静かな駆動音が聞こえ、目の端に車椅子が映った。

「モニカ……さん？」

「まあ、顔が埃だらけ。これを使って」

ハンカチが顔の前に降りてきた、片手で掴み、濡れた目元を拭く。

「貴女にお詫びを言わなくちゃと思つて、探していたら、アーチャー255が騒ぎ出してね」

まだしよぼしよぼしている目で、車椅子を見上げる。

「感じたのだ……私と異なる雷いかずちを！」

「彼を追つてここに来たら、すごい音がして……」

もくもくして、なんだかアクシオン映画みたいねえ」

ようやく感覚がまともになった。砂埃でじやりじやりする床に両手をついて起き上がる。

「アスカ……」

少し離れた所に、右頬を下にして、黒い髪の彼女が倒れているのが見えた。

不安定に立ち上がり、走り寄る。

「アスカ、ねえアスカ！」

膝について、体を強すぎない力で数回揺さぶると、呻きながら彼女は瞳を開けた。

「気絶するの……生まれて初めてですわ……」

「怪我、ない？」

「幸運なことに。トバルカインは？」

「ちよつと膝を打っただけ。問題なし」

アスカもぐったりとしながら体を起こす。

そして、車椅子の老婆とその側に立つサーヴァントをぱちくりと見た。

「この方は……」

「助けてくれたモニカさんと、アーチャー255。今日知り合った人達なの」

キャスターを追い払ってくれた彼は、機械カニが壁に空けた巨大な穴から半身を乗り

出し、下を覗いている。

「素晴らしい！ まさに神の雷霆らいていだ！」

彼は感激したかのように叫ぶ。その後、轟音と雷鳴が聞こえてきた。

きつと、下にある巨大空間で機械カニとアスカのアーチャーが戦っているのだ。

「……私、行かないと」

あの機械カニが私のバーサーカーだと市長は言った。ならば。

眉間に力を入れ、時計の形をした令呪を睨む。

「止めにいく。アーチャー255、私を下まで連れて行ってくれませんか」

身を乗り出したまま、アーチャーは顔だけをこちらに向ける。

「モニカ、彼女を下まで運んでもいいかな」

「ええ！」

彼の言葉を嬉しそうな声で快諾すると、モニカさんは筒のようなものを取り出した。

「はい、ボトル」

淡く光る液体リソースの入ったそれは、彼女の発作を止める生命線であり、サーヴァントをこの世界につなぎ止めるためのエネルギーでもある。

アーチャー255はモニカさんを見つめながら、戸惑うことなくそれを受け取った。

「モニカさん……でも」

「私がそうしたいから、こうするのよ、モモタ。それに」

彼女は乙女のように微笑む。

「彼の電撃ばちばち！ 1回見てみたかったのよー！」

その顔は、発作や死への恐怖などなく、希望に満ちていた。

「ちよつと間抜けな格好だけど……行つてきます、モニカさん」

アーチャー255は右脇に私を、左脇にアスカを抱えている。

「いいのいいの！ アーチャー255！ 頑張れー！」

「モニカ！ そこで私の雷を見ているがいい！」

「かあつこいいー！ あなたまるでシネマスターよー！ きゃー！」

電動車椅子に座つたまま、モニカさんは拳を突き上げて、黄色い悲鳴を上げている。

……アグレッツシブ。

「アーチャー255、わたくし、速かつたり高かつたりするの苦手ですから、行く時は行くと言つて……」

「では行こう！」

「このアーチャー全然人の話を聞きませ……きゃあー!!!」

抱えられている体が浮き、戦闘の余波で粉塵舞う中へ飛び込んでいく。

（この先にバーサーカーがいる……!）

肺を痛めないように息を止めて、真つ直ぐにこれから向かう先を見据えた。

第7話 希望は手の甲の上

終わり



## 第8話 全て雷光で切り裂いて

「……ふわふわ、していますわ」

勢いよく真つ逆さまだと考えていたが、そうではなく。

広がったパラシュートのように、緩やかに私達は落下していた。

「天才である私のみであれば、垂直落下も耐えられようが、君達は柔肌もつ乙女!」

「トバルカイン! このサーヴァント声が大きい!」

「新鮮だね! アスカちゃん!」

「この天才に全てを預けたまえ! ははははは!」

高笑いと共に降下し、数十秒の浮遊感の後、アーチャー2555の足が地面についた。

「ありがとう、アーチャー2555さん!」

そう言つて彼の腕から下りる、バーサーカーの元へ向かおうとしたが。

「すごい埃……何も見えない!」

口を腕で押さえる。

「お困りかな」

「はい！」

「では……道具を使おう。ドラマチックなものを！」

アーチャー255は仁王立ちのまま右腕をあげると、高らかに指を鳴らした。

『——キュオオオオオオオオオン!!!』

その駆動音を、私達は一度聞いていた。

見上げた粉塵の中に浮かぶシルエット。

六角形の柱を長々と連結させたようなごっこごつとした形、手足のない、巨大すぎる胴体。

「モンゴリアンデスワーム！」

「違うぞ！ モモタ・トバルカイン！」

見覚えのある巨大機械が、スピーカー越しの機械音を響かせる。

『こんばんは。人類を応援する資源採掘用ワームロボット1111です』

デザートランナーの外から、肉眼で見えるそれは、あまりにも巨大だった。

「1111、粉塵除去を！」

アーチャー255はタブレットを取り出し、画面に何かを素早く入力する

『命令を受諾、バキュームモード』

丸い口がきゆるきゆる鳴き、空気ごと舞っている埃を凄まじい勢いで吸い込んでい

く。

アーチャー255に掴まっていないと、せつかく立った体が崩れてしまいそうなほどだ。

「見えたぞ！ 雷神が！」

強制的にクリアにされた空間に目を走らせる。

上からの注ぐオレンジのライトは、影を濃く作る。

「アーチャー！」

アスカの声が矢のように飛ぶ。

「……」

彼女のアーチャーの姿が徐々にはつきりと見えてきた。

全身から金の雷をほとぼしらせている彼は、頭部にある角のような拡張パーツの片方が折れ、暗い琥珀色の断面を晒している。

はためく白の外套のあちこちは裂けていた。

それでも、アーチャーから戦意は失われていない。

外套は電撃をまといながら、穏やかな波のようにならなっていた。

背をぴんと伸ばし、美しい姿勢で矢を放つ。2本、3本……飛んでいく方向には。

『ギー、ギー』

バーサーカーと呼ばれた、機械カニが動いていた。

機械カニの体を支える巨大な脚、その前面の装甲に矢はぶつかり、ぼろぼろ落ちていく。

肉色の柔らかなような関節部分に矢がいくつか刺さったが、内側から赤い液体とともにぶしゆりと押し出され、抜けていく。

どうやら、受けた傷を高速で治す厄介な能力を持っているようだ。

「……」

アーチャーは攻撃を続けようとするが、機械カニがジャンプし、覆い被さるよう距離を詰めようとしたため、後方へ軽やかに飛んだ。

「……いる、中にバーサーカーが」

ここまで近づいてようやく分かった。

「あの機械カニの中に、どんな仕組みかは知らないけれど、彼がいる……」  
感じるのだ、マスターである自分だけが。

「どうしますの？ トバルカイン」

「……機械カニの動きを止めてもらおう、2人のアーチャーの力を借りて」

青白い光をまとっているアーチャー255を私は見上げる。

「アーチャー255さん、良い案、ありませんか？」

「あるとも」

数秒の待ち時間もなく、答えが返ってきた。

「アスカ君、君のアーチャーが巻き込まれないよう、気をつけたまえ」

「……分かりましたわ。」

アーチャー！ こちらの方と協力できましてー?!」

機械力二と踊るように攻防を繰り返していたアーチャーは、アスカの声を聞くと、矢を連続して3本も放つ。

それに機械力二が圧されている間に、大きく上空へ飛び、空中で一回転した後、私達の前に着地した。

「知らぬ顔のアーチャー、策は？」

風で浮かび上がった白の外套が、背に沿うようにゆっくりと降りていく。

「では……ごらんあれ！ 私と異なる雷をその身に抱くものよ！」

アーチャー255が私達全員の前に出て、両手の平を機械力二に向ける。

空気の焦げる匂いを、私は生まれて初めて嗅いだ。

彼の腕に、青白い光が、いや雷がまとわりつく。

それはばちばちと鳴き、竜のようにのたくりながら宙を走っていく。

「宝具の真名を解放するまでもなく！ 人類神話をお見せしよう！」

破壊された壁が、散らばった未使用の金属部品が、浮かんでいく。  
そして――。

「天才の行う事は……常に劇的でなければならぬ！」

あのデザートランナーよりも巨大な、ワームロボットがふわりと浮かんだ。

「楔を受け取りたまえ！」

機械カニは上空を見て、慌てて後ろに下がろうとしたが、努力虚しく、ワームに押しつぶされた。

『ギュミミミミミ!! ミー!!!』

機械から生物的な悲鳴が響く。衝撃で地面が揺れ、その後に旋風が巻き起こる。

「行くがいい! 少女よ!」

「アーチャー255! ありがとう!」

塵で霞んだ景色の中、私は両足に力を込め、背を伸ばして真っ直ぐに立つ。

(使い方は……知っている。魂が教えてくれる)

甲を見せつけるようにして、右手を天に突き上げる。

「令呪を持つて命ず! 私の元へ戻れ! バーサーカー!」

時計のような形の令呪、その一番外にある丸い枠が強い光を放ちながら消え、短針と長針の2画が残された。

——土を掘って。

——遺体を埋める。

湿った暗闇の下に行くのは、見知った顔ばかりだ。

「熊太、子どもが生まれたばかりだったのに。

笛子、残った旦那さんが泣いているぞ。

六吉、おつかさんの隣にしてやろうな……親子仲良くな……」

名を呼びながら、遺体を抱えて、穴に横たえていく。

「■■郎！ 何やってんだ！」

後ろから聞こえる声の主の名前も、俺は当然知っている。

「今日の戦で死んだ奴、みんな覚えてんのか……？」

忘れろ！ ぶっこわれちまうぞ！」

俺を見ていた男が、そんな事を言った。

聞き捨てならないその言葉へ、声に怒気をはらませて返す。

「忘れない。俺が忘れたら、本当に無くなってしまふ。

まるで、そんな人間など居なかつたみたいに」

男が、小さい悲鳴をあげた。

「……日が沈んだら、止めるから。それまで、埋葬を続けさせてくれ」

殺意を向けられた男が、怯えた足取りで去っていく音がした。

振り向かず、土を掘るのを再開する。

獣が寄ってくる前に埋めてあげないと可哀想だ。

カラスは柔らかい所から遺体をつつき、野犬は浅く埋めてあるものを掘り返す。

「だから……深く、もっと、深く……」

うわごとと思われるでも仕方がない事を呟きながら、湿った土を木の道具で掻いていく。

その時。

「おー、農民のくせに、良いもん持つてるじゃねえか」

知らない人間の声が聞こえた。

手を止め、気配を消し、茂みに潜みながらその方向へ向かう。

「剥いでおけ剥いでおけ、小金になるぞ。」

神にも仏にも見放された奴らさ、罰なんて当たるはずねえよ」

日が沈んだばかりの薄暗闇の中、下卑た笑みを浮かべた武者崩れが、皆の遺体を掘り

返していた。



戦の後では良くあることだ。落ち武者狩り、刀拾い……遺体からの、追い剥ぎ。

「はひっ。」

「ん？ どうし……」

後ろから刀で切り、それでも足りない分は槍を首に差して捻り捨てた。

出来た首なしの2体を、見下ろす。

「この世は、地獄か……」

疲労が泥のように全身を包み込んで、立っていられなくなった。

血だまり広がる地面、絶命の絶望が張り付いた顔の側に寝そべる。

このまま目を閉じ、眠ろうか。全て忘れて眠ろうか。

「寒い……寒い……」

今日は仲間が71人死んだ。それでも死者はまだ少ない方なのだ。

一揆を叩き潰そうと、織田の軍勢が明日もやってくる。

そうすれば、また人が死ぬ。きっと最後には10人も生き残れないだろう。

「熊太、笛子、六吉……」

死ぬ、殺される、埋める、死ぬ、殺される、埋める。

いつか、その順番が自分にもやってくる。

だから、それまでは、忘れないように。

名を呼んで、自我が壊れるほどに刻む。

「トキ子、一太郎、十べえ、お八、桃田……」

ももた？

「ももた……」

誰だその名前……いや。

「モモタ」

疲労を無視して、血塗れの体を起こす。夜の風が草を揺らし、虫が鳴き始めた。俺は耳を澄ます。

『……サーカー！… バーサーカー！』

名前、呼んでいる、彼女が、呼んでいる。

「モモ！」

あちこち焦げた草原で、俺は叫ぶ。

ここにはいない彼女を求めて、手を彷徨わせる。

この光景は生前見た風景、だが、まやかしだと気づいたから。

「俺を呼んでいるのか！… モモ！」

戦火舞う濁った空へ手を伸ばし、空間を掴み、布を暴くかのように剥ぎ取った。

暗い。狭い。なんだここ。しかもうるさいぞ。

片目だけになった視界で、辺りを見る。

……呼ばれているし、帰るか。

「令呪、効いたよね……？」

私は不安に苛まれながら、戦闘による砂埃が落ち着き始めた前方を見る。

機械カニは自らを押しつぶしていたワームロボットから這い出ると、ダメージなど無かったかのように、こちらへ突進してきた。

「ふんー」

アーチャー255の腕から青い雷が放たれるが、カニの装甲の表面を滑り、後ろへ逸らされた。

『ギミミミミミ！ ミミミミ！』

金属で出来た爪がアーチャー255を掴もうとしたが、突然止まった。

『ミ、ミミ……？』

背中の辺りが、内側からぼこんと盛り上がる。

「……ひよっとして」

私はつぶやく。

金属の板が、中から出て来た手によって、めりめり剥がされた。

「ひよつとするぜ！ マスターモモ！」

誰かが内側から身を起こす。

『ミギユギユギユギュー!!!!』

輝く緑の瞳。半分隠された顔。極東風の鎧。

「ただいまマスター！ 令呪使わせて、ごめんな！」

「バーサーカー！」

私のサーヴァントが、前と変わらぬ姿でそこにいた。

……全身錆色の液体で濡れて、やり過ぎたスプラッタームービーのようになっていた。  
が。

「……何だこの気持ち悪い口ボ」

見下したような瞳で、今まさに自分が這い出て来たカニを見る。

『ギーギーギー！ ギー』

カニは暴れ、バーサーカーを振り落とす。

べしやんと落ちた彼を、アスカのアーチャーが金属製のカニ脚を避けながら駆けて、踏みつぶされない内に片手で回収した。

「アーチャー殿！ 数時間ぶりですわね！」

私ごとカニを焼き焦がさないでください！ 感謝します！」

バーサーカーはわざとらしいほど嬉しそうに言った。

「あのカニについて教えろ」

錆色になってている彼の首の後ろを片手で掴んだまま、アーチャーはぶつきらばうに問いかける。

「時間が欲しいので、あれを無力化してくださいませんか？」

「……矢と雷では時間がかかりすぎる」

「矢は点攻撃ですから。面攻撃でいきましよう、30秒で済む」

バーサーカーは部屋の隅を指差す。

「ほら、この間、私の腕を吹き飛ばした時のように。」

幸い、ここには薄い鉄板が散乱していますから」

彼の言葉の後、アーチャー961の白い外套が荒れた波のように動き、全身を赤と金の雷が走る。

「……やられっぱなし展開が続いて、みなさんイライラしているので」

首根っこを掴まれたまま、バーサーカーは両手を合わせた。

「巻きで、お願いします」

ずばんと、カニの脚が柔い関節部が切断された。

『キー?』

製造エリアで作られていた鉄板。部屋の片隅に置かれていたそれが、電気を帯びて浮き、音速を超えた速度で放たれる。

巨大カニの脚は次から次へと細切れに。

『キ』

バランスが取れなくなり、崩れ落ちる間にも空中で刻まれ、胴体だけを残して、最終的に、ころんと地面に転がった。

「無力化しました、説明を」

カニを片手間に倒したアーチャーは、片手で掴んでいたバースーカーを床に転がした。

「その前に、優先事項が、アーチャー殿」

彼が床から立ち上がり、槍の穂先で暗がりを差す。

「キヤスター171、ツヴァイ・エーテルウエル」

余裕を無くした顔のキヤスターと、無表情の市長が立っていた。

「なぜ、俺達を畏にはめるような真似を?」

バースーカーの緑に輝く瞳が細められ、彼の顔立ちに精悍さが増す。

冷え切った声が、目の前に立つ存在に投げかけられた。

「市長……いや、AI、ツヴァイ・エーテルウエル」

キャスターを傍らに立たせている男は、こちらを青い瞳で無感情に見つめたまま、金の頭髮の生えた首を傾けた。

……モーターの静かな駆動音が、空間に響いた。

第8話 全て雷光で切り裂いて

終わり

### 第3章 終末世界の幾末は

### 第9話 いつか世界を救うもの

「市長、やっぱりこうなっちゃいましたね……」

キヤスター1771のターコイズブルーの大きな瞳が、自らのマスターを不安げに見上げた。

「キヤスター、しばらくは、静かに」

市長は慌てる事なく、ぴったりとした白手袋をはめた人差し指を唇に当て、サーヴァントへ指示をした。

そうしてから、前に進み出る。足音が天井の高い空間に響いた。

「おぞましいな、バーサーカー04。あの状態から戻ってくるとは」

男は両手を広げながら、嫌みな声で、私のサーヴァントを表面上は誉めた。

「マスターに令呪を切って貰ったんだ、戻ってこないと、なあ……」

全身を錆色の液体で濡らしまま、バーサーカーは市長へ一歩近づく。

「——なぜ、私がAIだと気が付いた？」



市長は首を後ろに反らしながらネクタイを緩めると、自らの正体を見抜いたサーヴァントに問いかける。

「言葉を交わした時、好奇心が押さえ切れていないのを感じた。

見た目は成人だと言うのに、幼子のようにだと」

「へえ……」

整った唇の上に、弧を描く市長。バーサーカーは言葉が続ける。

「他の都市運営システムや、ワームロボットと会話をして、思ったよ。

みな、純粹すぎる、濁りがない……」

心底飽き飽きしたと言わんばかりの声色で語る彼。

「清水より、毒混じりの水の方が好きだ」

そして、右の手の平を広げ。

「俺がただれるほどの感情を超越せ、AI」

いまだ体を濡らしている錆色の液体が飛び散る程の強さで、握りしめた。

「……黙れ、旧時代の亡霊が」

市長の声が、苛立ちを隠せない物に突如変わった。

まるで、スイッチでも押したかのように。

「人間を糧に自己進化を続ける私達AIと違い、成長しない英霊が、何を語る？ 何を夢

見る?」

まくし立てる顔が歪むが、私はそれに微妙な違和感を覚えた。

まるで……役者が学ぶお手本のような、怒り顔。

「馬鹿馬鹿しい……資源の無駄だ!」

頭を振り、金の髪を乱しながら市長は話し続ける。

「この地球全土を舞台にした聖杯戦争の主役は、私達のような究極に進化したAIだ!

人間のマスターやサーヴァントなどでは決していない!」

その語りを、バーサーカーは冷めた緑色の眼差しで見ていた。

「世界を刷新するのは、リリースが作ったAIでも! 自業自得で絶滅寸前の人類でもな

い!」

私だ……このツヴァイ・エーテルウエルこそが! 星の海を行く新しい知的生命体の

祖となるのだ!」

バーサーカーは彼の発言と感情を受け止めてから、低い声を出す。

「いきなりハイテンションになって夢をぶち上げるな、先達を少しは敬え……」

市長は言葉を返さず、計算し尽くされたにやついた笑みを浮かべると、こめかみに人

差し指を当てた。

「人間……サーヴァント……ははっ、進化を止めた存在になぜ敬意を払わねばならない？」

地球を食いつぶし、AIに生かさね管理されるだけの、神を失った動物だというのに！

まあいいさ……もう会うことも無いだろう！ さらばだ過去の遺物ども！」

捨て台詞の後に、ぶつんと大きな異音が聞こえ、市長は後ろ向きに大の字の形でぼつたりと倒れ込んだ。

「……彼、死んだの？ バーサーカー」

私は、緊張で固まった肩から力を抜きながら声を出す。

「違うと思うぞ、マスターモモ。人格だけネットワークに逃げたな」

彼は倒れたアンドロイドボディを槍先でつつくが、反応はない。

「機体を調べれば何か分かるかもしれない」

やりとりを無言で見ていたアーチャー255がすたすた歩いてきて、市長の白スーツを剥がし、機体の分解を始めた。

「青色電撃ばちばちアーチャー殿、それはどうだろう」

バーサーカーが、手際よくパーツを外していくアーチャーの隣にしゃがみながら言う。

「外すぞ」

彼の素早い手つきにより、つるりとした胴体の前半分が、蓋のようにぱかりと外される。中身が開かれたその瞬間、異臭が漂った。

「情報漏洩対策か、よく考えられている」

感心したように声を漏らしながら、両手に持った胴体パーツを床に置くアーチャー255。

私は近づいて、機械の体の内側を恐々と見る。

「うわぁ……」

内部は熱を放ちながら、どろどろに溶けていた。

「こんなに体を張ったのに……実入りが少ない……」

中腰のバーサーカーの背をよよしと撫でて、慰めてあげる。

……手に錆色の液がつく。

「……これなに？」

指の間でこすり合わせてみた。やけにねばねばして、気持ち悪い感触。

「たぶん機械油じゃないかな……霊体化すれば取れるんだけどさ、気持ち的には湯浴みしてー」

「私もお風呂入りたい……」

いつも通りの雰囲気の会話を始めた私達の後ろから、可愛いらしい咳払いが聞こえた。

「トバルカイン、バーサーカーが帰ってきたからといって、和まないでください」

「アスカちゃん、ごめんね」

立ち上がり、彼女の方へ振り向くと、961の方のアーチャーが誰かを捕まえていた。

「マスターに見捨てられました……しゅん」

市長のキャスターは抵抗せず、親猫に首を啜えられた子猫のように大人しくしている。

「さつすが！ 赤色電撃ばちばちアーチャー殿！ 拷問しようぜ！」

バーサーカーは右の二の腕に左手を置き、腕を組み合わせてから、右の拳を上げて嬉しそうに宣言をする。

「止めて下さい！ 全部お話しします〜！」

足をばたばたと動かしながら、キャスターはわざとらしく半べそになった。

2体のアーチャーに運んで貰い、私達は戦っていた地下工場から、市長室含む居住エリアへと戻ってきた。

……アスカはお姫様抱っこだったのに、私だけお米の俵のように運ばれた、ロマンチックじゃない。

「怪我していないー?」

「モニカさんこそ! 大丈夫でしたか!」

車椅子に座り、私達を待っていてくれた彼女に声をかける。

「大丈夫に決まっているじゃない! 元氣いっぱいよ!」

ふふつ、ここからでも見えた青い雷、綺麗だったあ……」

ピンクに染まったつやつやの頬に手を当て、モニカさんは笑った。

「ただいま、モニカ」

「お帰りなさい! 私のアーチャー!」

朗らかに声を掛け合う2人の様子を、アスカはじつと見る。

「アーチャー、その……」

ヘッドギアをつけたアーチャー961が、声を受けて自らのマスターに顔を向ける。

わずかな動きだったけれど、肩から伸びている白い外套がふわつと揺れた。

「格好良かった、ですわ……」

もじもじしながらアスカが口に出した言葉に、アーチャー961は何を思ったのだろう。

元気そうだけれど、体調に不安の残るモニカさんには、アーチャー255と共に別室で待っていてもらうことにした。

「市長室で拷問かー……テンション上がるなー！」

私が初めて入る市長室。

調度品は、作業用の大きな机と来賓用の小さな机、数個の椅子のみ。

壁には窓を模したパネルがはめ込まれ、数百年前の緑あふれる景色が映し出されていた。

「うう……拷問されちゃいますう……」

人工革の貼られた1人掛けのソファーに、獣耳をぺたんとさせたキャスターがちよこんと座っている。

「マスターアスカ、キャスター171を拷問しますか？ ……その、皮剥ぎ、などを？」

「マスターモモ！ 首の下まで埋めて、ノコギリ持ってきます！」

これが俺のおすすめです！ 道行く町民にも大人気！

……えつと、ノコギリを置いて、切りたい人が切りたい分だけ首に刃をぎこぎここと動かすやつなんですけど。

ん、でもこれ拷問じゃなくて処刑だな……」

2体のサーヴァントに対し、私とアスカはきっぱりと意見を返す。

「拷問しない方向でお願いします！」

「拷問しない方向でお願いします……！」

主を失った部屋に、華やかな茶葉の香りが漂う。

「市長に召喚されたのは3年前です。」

自らのマスターがAIであるという事は分かっていました」

先程までの弱々しげな素振りから打って変わって、毅然とした態度でキャスター17

1は話すと、温かい茶を口に含む。

「彼は地下都市を管理し、人類を庇護する者でした。だから、私は彼に従っていた」

カップを持ったまま言葉を続ける彼女は、位の高い貴人のような雰囲気まじを纏まとっている。

「……変化が起きたのは1年前から。」

聖杯の存在と聖杯戦争を知った市長は、市民や保護した人間からサーヴァントを回収し、こねくり回し始めた」

軽やかな青色の瞳がやや閉じられ、暗い色が差した。かちやりと小さな音がして、



ソーサーにカップが置かれる。

「サーヴァントには人格がある、魂がある。

どれほど令呪で縛り、クラスに押し込めても……破壊できるものではない」

彼女の会話を、私とアスカはテーブルの反対側の2人掛けのソファアに並んで座り、聞いている。

「けれど、市長はサーヴァントの完全なる支配のため、その破壊を試みた。

彼が独自に調べ上げた、過去の戦争の記録……そこから得た、おぞましい技法を使つて」

アーチャー961は指先の間を挟み、彼女が突然暴れ出しても対応できるように構えている。

「……回収したサーヴァントを特殊なミキサーにかけ、粉碎した。

出来たペーストを遠心分離し、使いたい能力だけを抽出して、砕いた肉ごと機械の体に詰め込んだ。

サーヴァントの破壊と、都合の良い部分のみを取り上げての再構成を行ったのです、あのAIは。

彼は出来上がった存在をこう呼称していました……『機械化サーヴァント』と」

衝撃的な真実が暴露されたというのに、壁に気怠げにもたれ掛かっているパーサー

カーは、身じろぎ一つしなかった。

隣に座っているアスカが、恐怖からか冷や汗を流し、制服のクリーム色のスカートを両手で握りしめたのが分かった。

「……それがあの機械の正体かー」

霊体化で錆色から元の黒基調の具足姿に戻った彼は、顎を上げて、あらぬ方向へ目を向けながら、ぽつりと言葉を漏らす。

「バーサーカー04、貴方は砕いても砕いても治ってしまうので、そのまま突っ込んだんですけど……」

「俺を甘く見たな、マスターの令呪とすべしスキルで大復活だ」

突然キャスターに顔を向け、無表情で右手にピースを作り、高々と掲げる彼の内情がさっぱり分からない……。

「再生能力欲しさに、ちよつと処理が雑でしたねえ……」

「研究が足りないぞ研究がー」

ふざけたような口調で、バーサーカーは彼女を顔色を変えずにおちよくる。

「……令呪で縛られていたとはいえ、私は余りにも多くの英霊を貶めた」

「地下工場で戦った機械に、ペーストして詰め込んでいたサーヴァントの総数は？」

「貴方を入れて14人です、バーサーカー04」

キャスターは真実を語ってから、部屋を見渡し、瞳を揺らさず言葉を放つ。

「私を、罰しますか」

彼女の声も態度も、真摯だった。

「マスターアスカ、そして我がモモ、どうする?」

バーサーカーは私達に問いを投げかけた。

「……罰、とは」

アスカは唇を震わせながら、キャスターに先ほどの発言の意味を問う。

彼女は自らの胸に手を当てると、落ち着き払った態度で答えた。

「死を、自らに課しましょう。」

英霊を手には掛け、尊厳を貶める行為に荷担し、それを看過していた私など、もはや私ではない」

よどみなく言葉は紡がれる。青の瞳には強い意志が宿っていた。

「……トバルカイン、どう、します」

反対に、アスカの黒の瞳は潤み、揺れていた。

(どうするべきか)

深く考える。

彼女の存在の幾末が、私達2人の意見で決まってしまう。

生と死が、私の舌の上ののつていた。

バーサーカーへ視線を向けると、緑色の暗い瞳が私をじつと見ていた。

「……あの」

「何もっ？」

彼は唇の左端を上げて、ニヒルに微笑んでいる。

馬鹿にしているわけではない。ただ、私がどのような結論に至るのかを楽しみにしているのだ。

「……わたくしは、貴女を殺したくない」

アスカが私より先に自分の考えを述べた。

彼女の白い手は膝の上で強く握られ、ぶるぶると震えていた。

「私も、アスカと同じ意見です」

自分のピンクの瞳をしつかりと開き、彼女の深いブルーの瞳を真正面から見る。

「死ねなんて、とても……命令できない」

キャスターは私達に真剣な眼差しを注いでいた。

「では、どうするおつもりで」

私達の前に置いてある紅茶の細い湯気が、会話の息を受けて、ゆらゆらとたなびいて  
いる。

「貴女はたぶん……人の上に立つ人だと思っんです。きつと優秀な為政者だ」

立ち振る舞いや身にまとう気品から、私は一所懸命に推測する。

私が慎重に言葉を選んでいるその様子を、バーサーカーは楽しそうに興味深そうに眺めていた。

「この都市……あのAI市長が管理していたのですよね。」

居なくなつた今、誰がみんなの生活を保証してくれるんだろう」

落ち着いてきたアスカが、私の顔を上目づかいで見る。

「私が代わりに、この都市の管理をせよ……と？」

キヤスターが形の良い唇を動かして、私の考えていることを先に言ってくれた。

「うん、死んでしまうより、私はそうしてほしいと思う。」

……アスカはどう思うかな」

隣に座る友達の意見を聞く。

「死は、あまりにも重すぎますもの。トバルカインの意見に賛成です」

明るいい顔で、こくりと頷いてくれた。

「では、この存在が消えるまで尽くすとしましよう。」

砂漠で親を失つた子がどうなるかなど、よく知っていますから」

彼女はカップに手を伸ばすと、冷えた紅茶を一息に飲み干した。

「みなさんは旅を続けますか？」

「この都市に住む場所を作ることでもできますが……」

「えっと、どうしようか」

「思い出す。」

故郷が壊れて、逃げるように外へ出た理由。それは。

——聖杯戦争。

「あの……キャスター171さん、聖杯戦争について、教えてくださいませんか。」

私もアスカも、よく知らなくて」

「殺し合いだとか、優秀なものを決める戦争……だということは、聞いたのですけれど」

2人並んで疑問をぶつけた。

部屋の隅で待機しているアーチャー961が、ぴくりと肩を動かした気がした。

「……少し、長くなります」

空になったカップに目を落としながら、彼女はそう言った。

「聖杯戦争は、万能の願望器を求めるための争いの事。」

広義の意味はそう。でも、この世界……西暦2713年の現代では、違う」

褐色の美しい指で、空になった器の縁を彼女はなぞる。

「聖杯が存在しない状態で戦いが宣言されている。

なおかつ、都市によって宣言もばらばら」

「優勝商品も無いし、スタートも一斉ではない……という事ですの?」

アスカのまともに彼女は頷く。

「ええ、これではただの殺し合い」

「そんなの……意味が無いじゃないですか!」

事態の凄惨さに私は声を荒げた。

キヤスター171は真剣な表情で言葉を続ける。

「この世界でのサーヴァントは、ただ召喚され、目的のために消費される道具でした。

戦いも、喜びも、意義もない、ただそこに居るだけのぼんやりとした亡霊……」

バーサーカーとアーチャーは、じつと彼女の話に耳を傾けている。

「しかし、願いを叶える聖杯があると告げられれば、亡霊ではいられないサーヴァントも多い。

生きる時間が管理されている、この世界の人だってそうです……貴女達も、見たのでは」

故郷で起こった、上流階級エリアの惨状を思い出す。

生存権を多く所有する彼らへ、恨みを持っていた階級の人々による苛烈な攻撃の跡

を。

「……市長メイヤーから聞いた話によれば、ここ数百年から数十年で、少なくとも数の都市が聖杯戦争で滅びたと」

「なんで、そんな事に」

「戦争を呼びかけているのは、普通の地下都市にいるAI達ではなく、もつと上位の都市運営システムであるということは、私独自の調査で突き止めました。」

しかし、それ以上は……」

キャスターが苦しげに目を伏せる。そんな彼女を思い、私は声をかける。

「貴女も……戦っていたんですね……」

彼女は目をつぶったまま、小さい動作で首を横に振った。

「私は情報を集めていただけ。いつかやってくる未来のために」

「未来？」

「ええ」

再び開かれたターコイズブルーの瞳は、陽光の下にある、神秘的な湖のようだった。

「貴女達2人が、この世界の未来でしたから」

突然飛び出てきた言葉に、私は驚きを隠せなかった。アスカも同じようで、黒い瞳を見開いている。



「そんな……冒険小説みたい……」

彼女は私のたじろぐ声に耳をぴくぴくと反応させながら、布を身につけている手を優雅な動作で片目に当てる。

「私の瞳は、未来を見る……あまり、好きな行為じゃないんですけどね」

キャスターの話を、腕を組んで壁にもたれながら聞いているバーサーカーが、興味深そうに目を細めた。

「見えたのです。2人の少女が旅をして、聖杯戦争を終わらせる。そして、世界の運命を切り替える」

彼女から告げられた内容に息を飲む。

真剣な眼差し、声。とてもでたらめを言っているようには思えなかったからだ。

「旅に立つのも、立たないのも、自由」

キャスターの声だけが、市長室に響く。

「よく考えて、答えを聞かせてください」

彼女との会話は、そこで終わった。

第9話 いつか世界を救うもの

終わり

## 第10話 みんなの願い事

「どこかへ……行ってしまうの？」

「えっ？」

市長室にキャスターを残して出てきた私に、廊下で待っていたモニカさんが声をかけてくる。

「不思議ねえ……なんだかそんな気がするの」

「その」

私はうまく言葉を返せずにまごついてしまった。

「けど、怪我一つ無く帰ってきてくれる気がするわ！

私の勘、よく当たるのよ」

電動車椅子の後ろで、アーチャー255は胸を張って立っていた。

「モニカ、間もなく就寝時間だ」

興奮を隠せない様子の主へ彼が穏やかに伝えると、モニカさんは目をぱちくりとさせた。

「あら？ もうそんな時間？

今日は時間が過ぎるのが早かったわ……モモタちゃん、また明日ね。

アスカちゃん、だったかしら？ 機会があつたらお話ししましょう、ね？」

車椅子を片手で操作しながら、モニカさんは手を小さく振ると、自らのサーヴアントと共に帰って行つた。

「……アスカ、帰ろっか」

「埃まみれですし、帰ってシャワー浴びましょう、トバルカイン」  
顔を見合わせ、みんなで帰ることにした。

「トバルカイン、わたくしが先に浴びますわ！」

そう言い放ち、歩いていく彼女を追って、脱衣所に入る。

「……なんですか？」

靴下を壁から伸びる脱衣トレイに乗せているアスカ。

「一緒に入れば、シャワーで消費する生存権を節約出来るんじゃないかな」

「……いや」

彼女が首を振る、黒い長髪も揺れる。

「すごい発見だよ！ 素晴らしいライフハックだよ！ やらない手はないよ！ アスカちゃん！」

「いやー！ 助けてアーチャー！」

「ええい、暴れるなー！」

「体を見られるのは恥ずかしいのです！ やめてー！」

私達の声を聞いて、バーサーカーが嬉しそうに話し出す。

「アーチャー殿！ マスターに呼ばれてますよ！」

「……………」

がたんがたん椅子の動く音がリビングから聞こえる。

「わー殺意だ。 なんと大人気無くて余裕の無い人なのだろう！ あははは、たつの

しー！」

ちよつとどたばたしたけど、結局お風呂は別々に入った。

……良い案だと思ったのに。

夕飯を食べて、就寝時間の前にベッドに入る。

けれど、目が冴えて眠れなかった。

水でも飲もうかと考え、体を起こす。

生存権節約のために灯りは点けず、壁に手を当てながら歩き、リビングに足を踏み入れようとした瞬間、2人の声が聞こえた。

アスカと、彼女のアーチャーだ。

「私は貴女を守るためだけにここにいます。ゆえに、付き従うのみ」

「でも、貴方にもわたしと同じように心があつて……望みがある。そうでしょう?」

灯りの落ちたリビングで、アスカはアーチャーと話している。

「モモと旅をして、まだ見ぬ世界を知りたいのも、わたしの本当の気持ち。

ですが、聖杯がこの世界のどこかにあつて、手に入れる事が出来たのだとしたら……。

アーチャーの願いを、わたしは叶えてあげたい」

盗み聞きたいわけではないのに、私の足はようとして寝室に戻らなかつた。

「その戒めのようなヘッドギアを外し、素顔になって……心の底から、笑顔になれたのなら。

聖杯を手に入れて……いつか、アーチャーが心のままに、生きられたのなら。

全部、わたしの勝手なわがまま……ですけれど……」

「……アスカ、もう遅い時間です。体を休めない」と

「家族だと! ……それ以上に大切な人だと、思っているから」

アスカの告白に、数十秒間、アーチャー961は押し黙った。

「……休める時に、休んでおかないと」

彼の声はわずかに震えていて、確かに動揺していた。

「はい……分かりました……」

2人の足音が近づいてきたので、そつと自分の寝室に帰った。

「バーサーカー、そこにいるんでしよう?」

薄暗い部屋に入った瞬間、サーヴァントである彼は霊体化を解いて現れ、背中を壁に預ける。

「君は旅をする女の子だろうな、モモ」

私はベッドに腰をかける。

「分かっているなら、ついてきてくれる?」

私より6cmほど背の高い彼を見上げた。

「ああ。俺は君のことを大切に思っているからな。」

君の悲しみも喜びも、近くで瞳に納めておきたいんだ」

「……ねえそれって、*fat<sup>運</sup>ate<sup>命</sup>*ってやつ?」

炎の中、瓦礫の上で、彼が語ったその言葉を返した。

「ああ、*fat<sup>運</sup>ate<sup>命</sup>*ってやつ」

暗闇の中で、彼は私を見た。

緑の瞳、もう世界からなくなってしまった木々や草花と同じ色。

「……モモは俺の運命の人なのさ。灰色の世界に色彩取り戻す、旅をする女の子」

私は体を横たえ、毛布を手繰り寄せ、口元までかける。

「……私が眠るまで側にいてくれる？」

お祖母ちゃんが死んでしばらくの間は、目を閉じるのが怖くて、彼にこのわがままをよく言っただものだ。

「うん。だから安心して寝ろよ、モモ」

彼が椅子を引きずって、ベッドの直ぐ横に座ってくれた。

「お話して」

小さい子どものように、お願いする。

「……何を話すかなあ」

私に「家族ではない、道具だ」と言っておきながら、彼は父親のように振る舞ってくれる。

それを願っている自らの弱さに、胸が強く締め付けられた。

「モ……トバルカインは、どうしますの？」

「アスカちゃんは決めたの？」

2つのパンと、卵風の黄色ペースト、3色の食用フィルムを和えたサラダ、黄色のとろっとしたスープが本日の朝食。

それを目の前にしながら、私とアスカは向き合っていた。

「いつせーので、言ってみよう」

「いいですわ」

ここからの人生を決める言葉を、息を整えてから言い放つ。

「旅立ちたい」

「旅に出ますわ」

気持ちは、一緒だった。

「……いいの？」

「ええ！」

何より、こんな時代に誰かと旅をするなんて経験……簡単に出来ることではないですもの」

「すごく危険だよ、きつと」

「大丈夫！ わたくしのアーチャーとトバルカインがいれば！」

「……私のバーサーカーは？」



「……ええ！ 彼も頼もしい仲間……？ です！」

おかしくつて、顔を近づけ、くすくす笑いあう。

漏れた吐息で、スープの白い湯気がふわふわと形を崩した。

「キャスターさんの所に行く前に、旅立つ事を伝えたい人がいるの」

「わたくしも一緒に行っても？」

「いいんじゃないかな。きつと喜んでくれると思うな」

しつかり味わいながらご飯を食べて、着替えて、2人で彼女の元へ向かった。

サーヴァント2体もついてきてくれた。リニアに乗って移動し、目的地の居住区で下りる。

ずらりと番号が振られたドアが並ぶ廊下を歩いて、先日訪れたばかりの部屋のインターホンを鳴らす。

「あら、来てくれたの？」

出迎えてくれたのは、顔色の良くなった車椅子の彼女。

「おはようございます、モニカさん。こっちは私のバーサーカーです」

「ああ……口が悪いことが特徴の！」

バーサーカーは彼女の邪気がない発言に左眉を上げると、それからいたり笑った。

「昨日はご挨拶できなくてごめんなさい。

わたくしはアスカ。彼はアーチャー961」

「始めまして、モニカ」

アーチャーは丁寧な挨拶をする。

「お客様がたくさんね！ さあ入って！」

4人、つつかえながらも彼女の家にお邪魔した。

「レモンティーを出すわね」

「でも、生存権が……」

「それが不思議なの。」

今朝から何をしててもチケット減らないのよね、システムが変わったのかしら」

モニカさんの言葉に、キャスト171の姿が脳裏に浮かぶ。

彼女、都市の運営に早速手を入れ始めたのだ。

「はあい、召し上がれ」

全員の飲み物がのったトレイがテーブルに置かれ、穏やかなお茶会が始まった。

私とアスカはリビングに元からあつた椅子に座り、アーチャーは別室から持ってきたものに座った。

出された紅茶をアーチャーがどう飲むのか、気になって観察していると、彼は顎には

められた外骨格をガチャんと手で触れもせず変形させ、顔の下半分だけを露わにさせた。

そうしてから美しい指先でカップの持ち手を摘まみ、熱い液体を静かに口へ含む。

バーサーカーは「椅子が足りないので立っている」と言い、気負わない態度で佇んでいる。

「そう……旅に出るのね」

私とモニカさんの会話を、バーサーカーは口を挟む事なく眺めている。

「逃げるために始めた旅だったんですけど……立ち向かう旅に、なりそうです」

「大変そうね、でも」

彼女が温かい紅茶にレモン風味のボールを落とす。

それを見てアスカも同じようにした。

「ロードムービーみたいで、ちよつとウラやましいかも」

「……でしょうか」

私もカップの持ち手に指をかけ、酸味のある液体を口にする。

「モモタ、いつか絶対に帰ってきてね。そして、私にお話して。貴女が旅で見たものを」

沢山の優しいしわが刻まれた顔に笑顔を浮かべて、モニカさんは私を見つめる。

「私、死にたいだなんて拗ねていたけれど、貴女が帰ってくるまで、頑張つて生きている

から」

「モニカさん……」

その決意の宣言に、私は感じ入るしかなかった。

「きつと、素晴らしい旅になる筈よ。」

どの映画にも本にも記されていない、まだ生まれていない物語……」

彼女の手がテーブルの上に置かれた。

思わず手を重ねると、優しい力で握られ、包み込まれた。

アスカも白い手をおずおずと出す。

同じように、モニカさんは彼女の手を握ってくれた。

「あなた達の旅は、きつとそれなのね」

その言葉に、心が震えた。

「わたくし、必ず帰ってきますわ」

「私も、みんなで必ず帰ってきます」

「この4人……じゃなかった、5人で、またお茶をしましょうね」

ささやかな約束の間を、レモンの香りが通り抜けていった。

「旅立つ……それが、お2人の意志なのですね」

「そうですね、キャスター1771」

モニカさんに旅立つ決意を告げた後、市長室へ向かった。

人工革張りの肘掛けつきの大きな椅子に、キャスターが腰をかけている。

「そんな気がしたので、白色ラクダさん……グラン・カヴァツロでしたっけ、きちんと整備しておきました」

急におどけた口調が変わって、彼女は自らにぱちぱちと拍手をした。

「実に素晴らしい船だった！ 時間が許すのならオーバーホールしたいところだ！」

廊下から突然声が飛んでくる、アーチャー255のものだった。

「ご協力お願いしたら、すぐイキイキし始めてえ……」

「そ、そうだったんですね」

私はたじろぎつつも頷く。モニカさんの家にいないと思っていたら、こちらに来ていたらしい。

「……この地球、どこにも安全な場所はない。

聖杯戦争の脅威はあまねく人類に降りかかるでしょう」

キャスター1771は明るい声色から、落ち着いたものへと声を変える。

「それが続けば、どうなりますか」

私はキャスター1771に問いかける。

「……敗者はうずだかく積まれ、むなしい勝者だけが残りましょう」  
アスカが息を飲む音が聞こえた。

「私には全てを見通せない、しかし、無事を願うことは出来ます」  
澄んだ青い瞳が、市長室に並んでいる私達を順番に映す。

「モモタ・トバルカイン、アスカ・ピオーネ」

気品ある彼女に名を呼ばれ、身が自然と引き締まった。隣にいるアスカも同じみたいだ。

「そして、アーチャーである■■■■■、バーサーカー■■■■■」  
後半に呼ばれたサーヴァント2体の名を、私の脳は理解できなかつた。

まるで、誰かに邪魔されたみたいに。

「安寧は確約されません、試練が常に襲いかかる、乗り越えられず無残に死ぬかもしれない。  
い。」

けれど、心に決めたのならば、旅をするしかない」

彼女は両の瞳を一度閉じた。

「星海に幹かける4本の樹、輝く金の船、命芽吹く楽園が見えます……私の瞳で捉えるこ  
とが出来た未来はそこまで」

瞳が開かれる。私は告げられた言葉の1つ1つを胸に刻んだ。

「貴方方の旅に喜びを。終わりに美しい光景が待っていますように」  
激励を受け取り、私達は果てしない旅に向かうことにした。

「上位の都市運営システムも、重要な情報も、普通の都市にあるとは思えません。  
ですから……わたくしの生まれ故郷である、『上級都市ピオーネ』に向かうべきだと思います」

場所は変わり、デザートランナーの中。

キャスター1771の好意で、水も食料も着替えも、サーヴアントの現界を保ち、車の燃料にもなる液体リソースも、たっぷり積み込んである。

「場所、分かる？」

シートベルトの確認をしながら、後方に座っているアスカに声をかけた。

「秘匿されています。なので、様々な都市を訪ねて、聞きましよう」

「その途中、都市が聖杯戦争がらみで困っているようだったら、助ける……だよね」

「ええ、その通りですわ。」

人助けをすれば、きっと良いことがあるはずですよ」

気持ちの方向と考えを再度確認する。

私達は旅をする。それは、誰かを助けるために。

「全システムと接続、同期完了。デザートランナー、発進できるぞ」  
バーサーカーからの報告。

「みな、ベルトはつけましたか」

通路へ繋がる扉が開き、倉庫で物資の確認をしていたアスカのアーチャーが運転席に戻って来た。

彼の声にはつととして、慌ててシートベルトを留める。

「トバルカイン、出発の言葉を頼みます」

アスカからの提案。前は戸惑ってしまったけど、今は落ち着いて振る舞える。

「よし、じゃあ」

深く息を吸い込む。

「デザートランナー発進！ 目的地は上級都市ピオーネー！」

軽快な声で言い放つと、上機嫌なバーサーカーの返事がやってくきた。

「了解！ 未来に向かって爆走だ！」

エンジンが始動し、車体が細かく震える。

ハンドルを握るのは私のバーサーカー。

アスカの隣に控えているのは頼もしいアーチャー。

暗くて長い通路を走り抜け、真っ青な空の下に広がる大地へ。



車輪は唸り、地平線の向こうを目指して駆けていった。

そんな格好良く覚悟を決めた旅は、直ぐに終わった。

「全員手を挙げる！ 不信な動きを見せれば！ その瞬間にぶち抜くぞー！」

シートベルトをつけて座ったまま、両手を私は挙げた。

アスカのアーチャーは弓を顕現させる素振りを見せたが、自らのマスターを思っ  
てか、大人しく機械部品のついた両手を上げた。

「この船……車でいいのかな？ えへん……この車は！」

運転室の床に隊列を作るのは、紙を折って出来たネズミ達。

「姫<sup>わたし</sup>率いる、ヒメージ盗賊団が乗っ取ったあ！」

ガスマスクのような覆面の下から、可愛い女の子の声が響いた。

第10話 みんなの願いごと

終わり

## 第4章 終末世界のお姫様

### 第11話 それ行け砂漠の盗賊団！

「この船……車でいいのかな？ えへん……この車は！」

運転室の床に隊列を作るのは、紙を折って出来たネズミ達。

「<sup>わたし</sup>姫率いる、ヒメージ盗賊団が乗っ取ったあー！」

ガスマスクのような覆面の下から、可愛い女の子の声が響いた。

……時間を少し巻き戻そう。

モニカさんとアーチャー255、キャスター171と別れ、地下都市28を出発した私達。

数時間の走行の後、日も沈んだので、バーサーカーはデザートランナーを一時停止させた。

乾いた荒野で動く物体は、この車両以外何もない。

「揺れがずっと続くと、知らず知らずのうちに疲労が貯まっていく。

俺とアーチャー殿で順番に見張りをします。モモもマスターアスカも休んで」

「バーサーカーもアーチャーも……サーヴァントは寝なくてもいいの?」

「人の名残で、眠りたくなることはあるけどなー」

軽い調子で彼が返答をする。

「バーサーカー、あのね……安全な場所にたどり着いたら横になって休んでね、旅に出る前みたいに」

「そんな場所があると良いなー」

「貴方の言うとおり寝て休むね、お休みなさい、私のサーヴァント」

「良い休息になりますよう、我がマスター」

彼にお休みの挨拶をして、星の煌めきを脳に浮かべながら、割り当てられた部屋のベッドで眠りにつく。

アスカも、隣の部屋で眠りについているのだろう。

「みんな……お休み……」

明日に思い馳せながら、目を閉じた。

「午前6時ぴったり! 起床!」

翌日。

簡単に歯磨きをして、服を着替える。

アルミ包装された栄養ブロックを袋から取り出し、ほくほくと割って、もそもそとかじる。

味が甘いのが幸いだ。粉っぽいのでむせないように、コップの水を飲みつつ食べる。

その後は廊下を歩いて運転室へ。

「おはよー」

「おはようございます、トバルカイン」

アスカは先に起きていたようで、お気に入りである後方の席に座っていた。

「アーチャー殿、角治りました？」

「角ではない、制御装置です」

「えっ奥歯の奥の加速装置？」

「炙る」

「断言しちゃった……」

2つの運転席に座っているバーサーカーとアーチャーが、中身の無いてきとーな会話をしていた。

「救難信号とか飛んでない？ 入れそうな都市はあった？」

私はバーサーカーに首尾を聞きながら、運転席の直ぐ後ろの椅子に座り、シートベルトを腰と肩に巻く。

「反応はない」

「前途多難だなあ……」

がつくりと肩を落とす。ついでに目線も下に落とすと、床に何かが落ちていた。

「うん……?」

ほこりやゴミかと思っただけ違った。

色付きの紙だ。植物の絶滅したこの世界では珍しいし、かなりの高級品のはず。

「アスカ、紙、落ちてるよ」

上流階級である彼女の持ち物かと思い、声をかけた。

「トバルカインの物ではなくて?」

アスカはアメジストの髪飾りを指で触りながら、首を傾げた。

「でも、私の物じゃない……」

床の上の紙は、地面から伝わる振動でぶるぶる震えている。

タイヤが石にでも乗り上げたのか、車体が大きくがたと飛んだ瞬間、紙は浮かんで、

ぱたんと折り目がついた。

「ん?」

かたかた揺れる度に、ぱたんぱたんと、紙はひとりでに畳まれていく。衝撃で変形する……形状記憶紙でも使っているのだろうか、見ていて楽しい。

「わあ……」

数秒も経つと、色紙で出来た可愛らしいネズミが生まれた。

ネズミはびよこたんびよこたんと床を跳ねて、隅へと滑っていく。

「——おいモモ、今何を見た？」

ハンドルを握ったままのバーサーカーがこちらへ振り返り、鋭い声で私を呼んだ。

「……ネズミ？」

そのままを伝えると、車体に強い衝撃が走る。

「アーチャー殿！ 潜り込まれた！」

鬼気迫る声でバーサーカーは叫ぶ。

それに反応し、アーチャーが乱暴に席を立て、周辺を見る。

「なんですの……どうしてデザートランナーを止めましたの?!」

「敵襲だからだ！ マスター2人は席から動くな！」

アスカと私を指しながら釘をさすバーサーカー。

席から立ち上がるうとした彼は、その動きを唐突に止めた。

「……マジか」

紙で出来たネズミが、黒い何かを彼に突きつけている。

「これ……銃、です?」

アスカの小さな顎をいたぶるように、銃口がついていた。

「ネズミ、こんな……!」

声が焦りでうわずってしまった。

見た目は愛らしい紙ネズミが、椅子の下から計器の陰から廊下につながる扉から、ぞろぞろ湧き出してくる。

どの個体も小さな銃を抱えていて、重たそうに持ち上げると、私達の頭を狙った。

「全員手を挙げろ!」

扉が開き、誰かが入って来る。

「不審な動きを見せれば!」

若い女性の声だ。

「その瞬間にぶち抜くぞー!」

背丈は、160cm弱、黒髪は腰の下まで伸ばされ、ポリウームのある2つ結びになっていた。

顔は戦争映画で見るとようなガスマスクで隠して、体は青いダウンジャケットで、もこともこと覆っている。

上半身の装備とは反対に、足は銃を収めるホルダーを付けてむき出し、靴は動きやすさ重視の革ブーツだ。

「っ……」

私はなすすべなく、シートベルトをつけて座ったまま、両手を挙げた。

運転席と後部座席の間に立っていたアスカのアーチャーは、指をぴくりと動かし、弓を顕現させる素振りを見せたが。

「……」

自らのマスターを思ってたか、大人しく機械部品のついた両手を上げた。

「アーチャー殿、堪えてくれ。ここで戦闘すれば、勝敗の如何に関わらず全部終わりだ」

座ると立つの間の、中腰姿勢のバーサーカーが、焦りで上擦った声で彼を諫める。

「さあ！ 命が惜しくば有りボトルぜんぶ出しな！ あと甘いものあればちよーだい」

鮮やかに車内を制圧した彼女は、大振りの銃をがちやがちや鳴らしながら、運転席へ銃口を向ける。

「この船の燃料からリソースは融通する、中身は一緒だからな」

言葉に迷っていた私達を庇うように、バーサーカーが交渉を切り出す。

「マジ……本当か！」

ガスマスクでも隠しきれないほどの嬉しそうな返事。



「機関室に案内する」

「してしてー!」

指示に従いバーサーカーが立ち上がると、紙製のネズミ数十体が銃を構えたまま彼の後ろをよちよちついていく。

彼は運転室を出る前に、開いた廊下への扉を気づかれないようにそつと足の裏で押し  
た。

自動的に閉まるはずの扉は、何か仕掛けが作動したのか開きっぱなしになった。

「ボトルー! ぼつとるー!」

バーサーカーの背中に銃を向けながら、謎の女性は上機嫌に後をついて行った。

「こつちだ」

予備燃料のある倉庫へ行った2人の会話が聞こえてくる……。

「燃料たんまり……わたし姫だけだったら半年は保つ……」

「詰め替えをする。容器を」

「えーつと、ポーチにボトル入れてたから……はい! お願いします」

「どうせなら詰め替え方法をよく見ておくといい、ほら」

「わーすごい綺麗……お星様みたいに光るところの液体が蛇口から出て……」

「やってみるか? 何事も経験だ」

「うん！ わー……楽しい！ ぴかぴかで綺麗！ ふふふー！」

「良かったな！ あはははは」

「えへへへへ」

「あはははははは！ ……ははははは」

「ぎゃふん！」

遠くから聞こえた会話と悲鳴の後、運転室に残り、私達へ銃を突きつけていた大勢の紙ネズミ達が、一斉にぺらぺらと倒れた。

「……終わりました」

バーサーカーが盗賊団のリーダーを背負いながらやってきた。

そのままごろりと床に転がされた彼女を観察する。目立った外傷は無いが、完全に気絶していた。

「拘束の為の道具を持ってきます」

アーチャーはネズミが手放した銃を蹴飛ばして運転室隅に転がしながら、バーサーカーへ声をかける。

「俺はここから離れられないので、頼みます」

サーヴァント2体は短いやり取りを終えると、倉庫へとアーチャーは向かっていった。

「彼女、サーヴァント……ですの?」

アスカは座ったまま、ただの折り紙になって体の上に積もったネズミを触りつつ、バーサーカーに聞く。

「うん。でも焦っていたのか判断力が落ちていたな、あんな分かりやすい手に引つかかってしまうとは……」

気絶している彼女。その顔のガスマスクをバーサーカーが丁寧に外す。

前髪でおでこを隠している可愛らしい顔が現れた。

アーチャーから手渡されたロープを、無言でバーサーカーは受け取り、彼女を手早く拘束する。

……サーヴァントの簧巻きが出来上がった。

「リソースを渡して介抱し、彼女から話を聞こう。」

旅立ってからイレギュラーな事態ばかりで、まともな情報がない」

剥いだマスクを空いている席に置きながら、彼はそう言った。

「拷問しないの?」

私から、お決まりのネタになりつつあった事を聞く。

「マスターモモはどうしてそんな物騒な事を言うんです? 加虐趣味って怖いなあ

……」

「拷問なんて考えたことすらありません」とでも書いてあるような、純朴な顔をされた。  
「……突っ込まないよ」

危険なボケだと判断し、身を引く。

「ぎーんねん」

バーサーカーは表情を変え、左半分だけの顔で意地悪そうに笑った。

「ボトルに詰めて、液体リソースを譲渡……」

この車の燃料でもありますし、わたくし達にも余裕があるわけでは……」

先ほどまで銃を突きつけられていたアスカは、黒い髪を手で落ち着き無く触りながら、椅子の上で姿勢を崩している。

「気前よく振る舞えば、相手も緩む」

必要経費だと思つて欲しい……とバーサーカーは思った」

「この判断が後に響かないといいのですが……」

アスカは黒い瞳に不安を浮かべて、姿勢良く傍らに立つ自身のサーヴァントを見上げた。  
た。

「有益な情報が聞けるといいのですけど……」

「そうですね、マスターアスカ」

簀巻きにしてからのんびり待つこと、数分。

「うーん……姫わたしの城……どこにも無いだなんて……嘘うそだあ……」

彼女がうなされながら、もぞもぞと動く。

「マーちゃん……離れたくないよ……マーちゃん……はっ!」

そして、目を開いて覚醒した。

「……ひよつとして、拘束されてる?」

流石サーヴァントと言うべきか、状況を正確に理解している。

「うん」

横たわっている彼女の直ぐ側で、あぐらをかいて座っていたバーサーカーが答えた。

「こ、殺される感じですか……」

床の上でぶるぶる震えながら青ざめた顔で聞く彼女。

「俺のマスターからそっちの方向はNG出ますので、このままお話しする感じですね」

バーサーカーは両腕でバツテンマークを作った。

「拷問とか、ミキサーにかけたりとかも……しない……?」

「しない。残念だな……昔の上司仕込みの108式殺戮技術を披露できないのは……」

アスカのアーチャーは矢のみを指先でもてあそびながら、その会話を見ている。

「エッチな事もNGでお願いできます……?」

「現場判断だけど、うん」

「良かった。ほら、姫わたしって可愛いから、ちよつといけないハプニングが起こりがちで……」

「物の怪の類とのお付き合いはNGで」

「なんで物の怪の類ってことバレてるの!?!」

簀巻きのまま慌てふためく彼女を無視して、バーサーカーが無言を貫いていたアーチャーの方へ顔を向けた。

「物の怪ですよね?」

アーチャーは答えず、指先に挟む矢を3本に増やした。

「ほら、アーチャー殿もこう言ってるではないですか」

「分かんないよ……何がどうなってその結論に至ったのか分かんないよ……」

彼女は震えを大きくしながら、「理解できない」というシンプルな恐怖に全身を支配されていた。

「アイスブレイクをプリーズ! お話しする前に緊張感を解こう! 自己紹介とかして!」

「えっ……物の怪に名乗るとか縁起悪いですし……」

無表情で言い放つ彼に。

「ひー」

彼女は小さく裏返った悲鳴を上げた。

「終わった……このまま姫は自ら死を懇願するほどのインタビューを受けて、心をボロ雑巾みたいにさせられた後、荒野にボロ雑巾のように捨てられるんだ……」

その後ワームロボットとかあいつらとかに頭からサクツ、ホクツ、ホグツ……されるんだ……」

盗賊団なんてやるんじゃないやなかつたあ……うわーん!!」

顔を蒼白させて怯え、しまいには泣き出した彼女が可哀想になって、私は口を挟んだ。

「盗賊団のリーダーさん、私はモモタ、モモって呼んでね、あちらに座っている可愛い子はアスカ。」

サーヴァントと一緒に旅してるの」

バーサーカーが暗い緑の瞳で私を一瞬じとりと見たが、何も言い出しはしなかった。

「旅……? 貴女も住んでいた都市壊れちゃったの?」

彼女はほんの少し桜色の混じる瞳に涙を浮かべながら、床の上から私を見つめる。

「それもあるけれど……人助けの旅をしているんだ。」

人も、サーヴァントも、分け隔て無く助けたいと思ってる」

簀巻きの彼女の顔がぱあっと晴れた。

「……姫わたしの事も助けてくれる？」

「うん、出来る範囲で。ボトルも分けてあげる」

「やったー！ モモちゃん優しいー！」

床の上の簀巻きがぐねぐね動く。

「えつと……名乗るね！」

アサシン47だよ！ コードネームみたいで格好いいでしょ！」

「よろしくね、アサシン47」

「うん！」

涙目で笑みを作る彼女はとても愛らしい。

「バーサーカー、自己紹介して」

「了解だけマスター」

バーサーカーは投げやりに名乗る。

「俺はバーサーカー04。」

こつちに立っておられるすつごく格好いいフルアーマード特A級サーヴァントなお方は俺の推しのアーチャー961殿。

——良さを一目で理解しろ、ニコビ新人」

「モモちゃん！ この人すごい早口でマウントとってくるんですけど!？」



あっ……でも961さんカッコいい……推せる……最終回でのマスク割れ楽しみに待っていていいですか……?」

アサシン47と名乗った彼女の顔がほわつと緩んだ。

「好きな事は人間の心がぶつ壊れる判定すれすれを探ること! よろしくな!

友愛の証に握手しようぜ、握手!」

バーサーカーは満面の笑みで手を差し伸べる。

「簧巻き状態で出来るわけ無いじゃん!

ヤバイ。振る舞いと思惑と会話がぜんぶ噛み合っていない……これが生バーサーカー……!」

彼女はまた青ざめ、縄で巻かれた棒状のままぶるぶるしている。

……いつまでも簧巻きスタイルは可哀想だ。

「何か事情がありそうだし、優しくしてあげよう? 拘束とつてもあげて良いかな」

「まあ……マスター2人の判断に任せるよ」

私の提案を聞き、バーサーカーは笑顔から滑らかにつまらなそうな顔へ移行する。

「そんなに怖いサーヴァントでもなさそうですし、縄を解いてあげましょう?」

アスカは席から下りながらそう言った。

私は彼女の身体を抱き起こして、ロープに指をかけて外す。

2人で少しずつ解いていった。

「モモちゃんもアスカちゃんも良い子だね……ありがとう」

「バーサーカーが酷いこと言つてごめんね」

「トバルカインのサーヴァントはその……個性的でして」

「アスカちゃん、オブラート貫通してるよ、その言葉」

何重にも巻かれた縄は解かれ、彼女の体は自由になった。

「えーつと、どれだけ2人がお人好しでも、ただではボトルくれないよね……」

急に猫背になり、揉み手でおずおずと訪ねてくるアサシン47。

「うん。ボトルと引き換えに知ってる事を教えて欲しい」

「情報ちよつとしか持つてないけど、いい？」

「全然いいよ！ 少しでもいろんな事を知りたいんだ」

そう答えた私に、アサシンはふんわりとした笑みを浮かべた。

「じゃあ、姫と仲間達の拠点に行こっか」

「砂漠といつたらネズミの盗賊団ですよ。分かんない？」

「バーサーカー04さっぱり元ネタ分かんない」

すっかり解放されたアサシンは、ハンドルを握っているバーサーカーと懲りずに会話

をしている。

「アーチャー殿、炙りますか?」

監視のため、アサシンの真後ろに立っていたアスカのアーチャーは、左手を開くと、その内側に何かを顕現させようとした。

「会話に地雷原しかない! 久し振りに生き物と話すんだから楽しくお喋りさせてよー!」

顔を蒼白させ、オーバーなりアクションをとる彼女はとても賑やかなサーヴァントだ。

車内が少し明るくなったようにも感じる。

「あつ、04さん、その大岩の手前で止めて……ばつちりでーす」

アサシン47の道案内のもと走らせていたデザートランナーが静止する。

「ここですか? 車内からは何も見えませんが……」

140cmのアスカが、背伸びびしてフロントガラスの向こう側の荒野を見る。

「隠してあるに決まってるじゃん」

唇の左端を上げて、彼女はしたり顔を作ると、ダウンジャケットの内側から黄色い紙を抜き出した。

「行つてきませい! デザートフォックス!」

彼女の指の内側で、ただの紙が緻密に折られ、手の平サイズの黄色い狐に様変わりした。

床をびよんぴよん跳ねながら車外へ。

車窓から見える場所に現れると、最高気温80℃越えの熱い砂の上をとことこ歩き、前足で地面をかく。

「水や火、雷相手でも無い限り、紙は耐久性あるからねー。

過酷な環境でもへっちゃらでーす」

狐の前足の動きが止まると、突然そこに四角い大穴が出現した。

斜めに下がっていく道が見え、その奥は深い闇に包まれている。

「スキルで隠していたのか……うーん、化生」

「04さんは姫に当たりが強いな」

アサシン47がどんよりと呟く。

「えへん……ここから拠点にいけるの。」

外は熱いし、オゾン層薄いから紫外線やばいし。これからの時代は地下でしょ」

デザートランナーが大穴にゆっくり近づき、隠されていた道へとタイヤをのせる。

「(ブー)ー」

地下に入り、光量が少なくなったので、バーサーカーが前方ライトを点けた。

紙で作られたキツネが先を走り、道案内をしてくれる。

小さい瓦礫を幾つも踏み越えて、車は天井の高い大きな空間に到着した。

「ここまで潜れば、人が生身で歩いてても大丈夫!」

アサシン47が明るい声で告げる。

「04さん、運転ありがとうね。騎乗スキル持ち?」

「いや、デバイスを体に埋め込んで色々とズルをしている」

「あー……自己改造系でしたか」

彼女との会話の間に、デザートランナーのエンジンをバーサーカーは停止させた。

照明など無いので、倉庫にあった手持ちの懐中電灯を1人1個持った。

車体横の扉から外に出て、謎の地下都市へ足を踏み入れる。

「建築様式が古いですね」

先に下りていたアーチャーが、ヘッドギア越しに周辺を見回しながら呟いた。

「961さん直ぐ分かっちゃったんだね、すごいな……」

みんなで調べた情報なんだけど、この都市は内乱で破壊されたらしいの。

その後200年間くらい放置されていたみたい」

彼の呟きに、懐中電灯のスイッチを点けたアサシン47が答えた。

「物資も無いけど、その代わり危険もないよ、安心してね」

彼女の足元に、折り紙から生まれた手の平サイズキツネが寄り添う。

「こつちこつち、ついてきて……04さんは武器を仕舞ってね」

「断る！」

「最終決戦もかくやのテンションで姫わらわを拒絶しないで！」

コントのような会話を聞きながら、彼女とキツネを歩いて追う。

明かりで上を照らすと、煤けた天井が見えた。

10分くらいだろうか、焼け落ちた大きな通路を進む。

「到着です、お疲れ様ー」

見知らぬ場所への恐怖と不安定な足場による疲労感を覚え始めた頃、アサシン47は足を止めた。

「みんなただいまー。お客さんつれてきたよー」

デザートランナーを停めた場所より狭い、丸いがらんとしたホール。

懐中電灯の光で照らすと、テーブルがあることが分かった。コップやゴミなどの生活の跡も。

「あれ……」

私は気が付いてしまった。

サーヴァントの腕につけられている、人工素材で出来たつるりとした番号札が4個、

テーブルの上へのせられている。

「アサシン47、その」

一息遅れで察したアスカが、白い手で胸を苦しそうに押さえた。

「いやー……生きているサーヴァントや人と話すのは半年ぶり……」

アサシンは独り言を続ける。

アーチャーはその札へ視線を向けると、片手を悼むように胸へ当てた。

「アサシン47、それはなんだ」

全員が察しのついでに、あえて気が付かない振りをして、バーサーカーが冷たく聞く。

「……お墓、みんなの」

ふんわりとした笑顔で、アサシン47が言う。

「わたし姫の仲間ね……もう、みんな死んじゃったんだ」

闇に包まれた地下都市に、彼女の寂しげな声が響いた。

第11話 それ行け砂漠の盗賊団!

終わり

## 第12話 別れはとびきり苦い味

「姫<sup>わたし</sup>達つて、この世界に何にも残せないから……せめて、みんなが生きていた証、取つておこうと思つて」

アサシン47は番号札1つ1つを、細い指で示しながら語り始めた。

「手前にある101が、同じ都市から逃げてきたキャスターの女の子。

その隣に置いてあるのが、その子と仲が良かったキャスターの120ちゃん。

テンション変だつたけど、頼れる快活なおじさんだつたセイバーの230さん。

みんなのおねーさん役だつた、真面目なランサーの74さん」

彼女の声は優しく、途方もなく寂しそつだつた。

「みんな、消えてしまいましたの……？」

「うん、色々あつてね」

そつとたずねたアスカに、柔らかい声のままアサシン47は返事をする。

「電気ランプを広場の真ん中に置いて。瓦礫、座れるようにしてあるから好きな場所に」

光源を囲んで、私達4人は円上になるようそれぞれ腰を瓦礫に下ろした。



「コンロ着けて、温かいものでも飲みながらお話しよっか。」

はい、みんなの分のコップ。安心して、未使用のやつだから」

アサシンは電気コンロの上に鍋を置くと、汲んであつた清潔な水を注ぎ、沸かす。

「昨日コーヒーの粉末見つけたから、あげるね」

私達に注いで振る舞ってくれた。手渡されたほんのり温かいカップを両手で包み込む。

「うー……カフェインが体に染みるよ……すごく薄いけど」

舌を火傷しないよう、ちびちびと飲み始めたアサシン。

「そうかな？」

私は、鼻孔を満たす風味と苦い味に大満足していた。

「地下都市産の食べ物って、全体的に味も香りも薄いよね」

彼女は世間話を始めた。

「俺も君に同意する。舌が痺れるほどしょっぱい壁のような味噌が恋しいよ……」

「ごめん、<sup>わたし</sup>姫も日本出身だけどあの頃の味噌はノーサンキューです」

バーサーカーの難易度の高いボケを彼女はさりと受け流した。

「モモちゃんくれた栄養ブロックは甘くておいしいね、3つも食べちゃった」

アサシン47は袋からクリーム色のブロックを出し、コーヒーを時折口に含みなが

ら、もそもそとかじっている。

「合計で1800キロカロリーになります」

「性格悪い！ このバーサーカー性格悪いよ！」

アサシンの目が丸く大きく開いた。

「……きんきんに冷えたコーラ飲みたい」

闇に覆われた天井を見上げながら、彼女は古い時代の言葉を口に出す。

「映画で見たことある！ 黒くてしゅわつとしてるアレだよね」

私は素早くその存在の概要を言う。

1900年代のアメリカを舞台にした映画で、若者達が専用の冷蔵庫からコーラを取り出し、金属製の蓋を景気よく開けて美味しそうにがぶ飲みしていた光景が頭に浮かんだ。

「あとポテトチップス、オレンジジュース、ゲーム！」

「その3つは、映画でもライブラリーでも良い評判を聞きませんわね……」

楽しそうに言葉を繋げていくアサシンに対し、コーヒーの湯気を見つめながらアスカがしよんぼりと呟く。

「そして……原稿！」

「原稿？」

会話の流れとは違う単語が出てきたので、私は聞き返した。

「……ううん、忘れて。」

創作活動なんて、もうこの世界から無くなっちゃったもんね、全部滅びちゃったもんね」

アサシンの声から喜びが消えて、何かを思考から追い払うかのように、ふるふると頭を振った。

「無い物ねだりは切ないね」

寂しそうな顔をしながら、彼女はまたコーヒーをすすった。

「……姫のお話、長くなるから、話すね」  
わたし

湯気が昇っていく暗い天井を見上げながら、彼女は話し始めた。

「1年くらい前まで、姫は都市378って所に住んでた。」

マスターは上流階級の男の子。

生存権を賭けたギャンブルで忙しい親の代わり……子守役として、姫は呼ばれた。

かわいいからね、これでも結構いいお値段したんだよ」

「俺も顔が全て出せれば良さが存分に生かせるというのに……くつ、この呪われた木の

仮面が！」

「04さんって脳味噌が狂化してるタイプ？ モモちゃん」

「あつ、全部いかれてます」

「苦勞してるんだね……」

私はちやちやを挟むバーサーカーを目で牽制した。

……彼は面白そうに笑んで、半分だけの唇の上に、立てた人差し指を滑らせた。

「マスターの名前はマコトくん。だからマーちゃんって呼んでた。

幸せだったよ。毎日ゲームにお菓子！遊んでた。

この格好も、マーちゃんが好きだったゲームの衣装なの、スキルで変身してるの」

青いダウンジャケットの裾を彼女はつまんで、私達に嬉しそうに見せた。

「でも、そんな日常は壊れちゃった。原因は……」

「聖杯、戦争」

アスカが、ひどく真面目な表情でぼつりと言葉をつき出す。

……同じ階級であった男の子に、思うところがあつたのだろうか。

「都市運営を行っていたAIが冗談みたいな殺し合いを宣言して、みんな浮き足立った

……」

アサシンの声は重く、沈んでいく。

「そうだよね……生存権の持ち数が少ない中流、下流階級の人が大逆転出来るチャンスだもん。」

みんな、喜んで暴力を選んで……姫わたしの住んでいた都市は、地獄になった」

彼女の言葉で、私の故郷の事が脳裏に浮かんだ。

階級なんて関係なく、全てが平等に傷つけられ、命奪われた惨状を。

「サーヴァントも暴れたけど、壁に使う樹脂を悪用した爆弾がいっぱい作られてね。

みんな吹き飛ばしちゃった」

彼女の体験談を聞いているアスカは、震え始めた自分の肩を、己の片手で強く握り、その動きを抑えようとしていた。

「……続けるね。姫のマーちゃん、死んじゃった」

あまりにも悲し過ぎたのだろう。アサシン47はさらりと一息に言った。

「その後、キャスター1001さんと逃げた。

荒野を何日も歩いて、同じような境遇のサーヴァントと出会って……この地下廃墟で協力しながら生活してたの」

そこまで話すと、彼女は苦い液体を口に含んだ。

「……数ヶ月は良かったんだ。リソースも余裕あったし、生活だつて整えられたしね」

瓦礫の上にコップが置かれた。その横には、何日も前に空になった食料の缶が転がっている。

「でも……リソース不足と、『あいつら』との戦いで、1人、また1人つて消えていった」

彼女が指で空き缶をはじく。からころと瓦礫の上を転がって、ランプの灯りが届かない暗闇へ飲まれた。

「最後に残った101さんは、残りのリソースを全部、わたし姫にくれて……」

消えた缶を見送った彼女の声は、隠し通せないほど震え始めて。

「朝起きたら、もう、どこにも居なくなってた……」

両目からこぼれ落ちる涙が、ランプのオレンジの光に照らされ、宝石みたいにぴかぴか光った。

「……何日も膝抱えて座り込んで、絶望した人みたいな事してた。

でも、これじゃあダメだぞ、他人を化かす妖怪らしくないぞって一丸発起して……」

悲しみの感情を隠すように立ち上がると、背筋をぴんと伸ばし、右手の指を開いて顔の前にかざし、何かポーズを取った。

「砂漠の……盗賊団になったのだ！」

その後、彼女は口で「ばばーん」と効果音を付け加えた。

「真の英雄は勝手に効果音がつくんだぜ、化生はダメダナ……」

コーヒーを飲まずに眺めていたバーサーカーが、呆れながら彼女に突っ込む。

アサシンは2つ結びの髪を揺らしながら素早く振り向き、不満を口に出す。

「04さんは何で姫に当たり強いの……因縁ある系？」

「あー……限りなく微妙なものが」

その言葉を聞いて、彼女は落ち着いたのかぺたんと腰を下ろす。

「姫のお城を管理していた人の上司の知り合いの知り合い？　かな？」

「いや、上司の知り合いの、知り合いの……知り合い？　だ」

「ほぼ無関係じゃん！　ヒントをノイズまじりまして出さないでね、みんな混乱するから……」

「だって……真名は隠すものだろ。」

イケメン滴る俺が……よしんばアキレウスだったら……どうするつもりだ……！」

「なんでこれほどまでに顔に自信があるんだろうこの人……」

あのね、もうそういう時代じゃないから、マスターにも包み隠さず明かすべきだから。

むしろわつと披露して『おおー……』って言われるのが、これからのスタンダードだから」

「逆光を感じながら逆行していききたい」

「でも04さんの生きていた時代絞れたからいいや……真名は後で考えよーっと」

2人はお互いに「理解できない」という事を分かり合い、勝手に納得し合った。

「アサシン47さん、その……『あいつら』って？」

彼に話題をさらわれそうになったので、慌てて話を戻し、彼女の台詞に出て来た謎の存在について訪ねる。

「もう遅いし、その話は明日にしよっか」

彼女はそう言うのと、注がれてから少し時間の経ったコーヒーを、こくりこくりと飲み干した。

「あの……アサシン47さえ、よろしければなのですが……」

カップを両手で包み、膝の上に抱えていたアスカが提案をする。

「今晚はデザートランナーと一緒に眠りませんか？ お食事も……」

「まじでー」

食い気味に反応を返す彼女に対し、バーサーカーとアーチャーは無言で顔を見合わせた。

倉庫から取り出したるは、みんな大好きな非常食料。

お湯を注ぎ、数分待つ。

「麺類だ！ ずるずるっといたできますー！」

運転席の床下から出され、真ん中に設置された机の上には、インスタントヌードルが



3つ。

アサシン47は何回も使えるプラスチックフォークを手に持つと、蓋をペリつと開けて誰よりも早く食べ始めた。

手慣れた様子で食べ進める彼女に、私とアスカも続く。

「あちち……うまつ……」

アサシン47は、食用フィルムで再現されたバジルとトマト、タンパク質から出来た人工チーズ粉末で味付けられたスープを飲み、とてもニコニコしている。

「栄養強化してあるから1食分で500キロカロリーになります」

定位置である運転席に座り、デバイスとデザートランナー間で情報を受け渡し、整理しているバーサーカー。

「もう気にしませーん……お腹、でちゃっても引つ込めればいいし」

2人の会話を何となく聞きながら、私もヌードルをフォークにからませて口へ入れる。

「美味しい……」

特殊加工された炭水化物のくにゅつとした麺が、香りよいスープをたつぷりと含んでいて、食べ応え抜群だ。汗をぐくと飲むと、とろみのある液体が喉を通って、お腹がじんわり温まる。

「初めて食べますが……パスタのようでも、スープのようでもあり……美味です……」  
アスカちゃんも立ちのぼる蒸気の熱で白い頬を桃に染めながら、はふはふと夢中で食べていた。

「ごちそうさまでしたー!」

30分も経たずに食べ終わり、テーブルの上に空になったカップが3つ置かれる。

「もう23時だ、マスター達は寝ろよな」

ここちらを見ずに、バーサーカーがぶつきらぼうな口調で話し出す。

「サーヴァントの3人はどうするの?」

「……大人の話し合いをする」

「いえーい! ひめはおっとなー!」

周辺の偵察をしていたアーチャーが帰ってきて、電子手帳をバーサーカーに投げ渡した。

「どうぞで」

「どうも」

彼はそれを気安い調子で受け取り、周辺情報のデータを入力し始める。

「……アーチャー、貴方も無理しないでくださいね」

「はい、マスターアスカ」

自身のサーヴァントへ思いやる言葉をかけた後、アスカは寢室へ向かい。

「バーサーカー、大人しくしていてね」

「お休み、我がマスター」

私は彼に釘を差してから、自室となった個室へ行った。

「明日も早起きできますように……」

両手を合わせて枕の神にお願いをしていると、部屋の扉が開いた。

「モモちゃん!!」

……べそべそと泣いているアサシン47だった。

「バーサーカー04つたらひどいんだよ！ 姫のことを、あんな、あんな……」

ベッドから立ち上がり、「びえーん」と泣き出す彼女の肩を抱いてあげる。

「人の心がない城化け物ってー！ うわーん！」

「……アサシン47って、妖怪系なんだよね？」

「本当のことと言われるのが一番傷つくんだもん、ぐすん……」

真実を言われ深く心を痛めている彼女の猫背を優しく撫でる。

「……姫、寂しがりやだから、モモちゃんと同じベッドで寝ても良い？」

上目遣いでそう言われた。元々は敵として現れた彼女の提案に、一瞬迷ったが。

「いっよ」

了承してあげる事にした。

「やったー！」

両手を大きく広げた彼女に、むぎゅつと抱きしめられる。

柔らかい胸が、当たってる。

「壁の反対側のこっちで寝るね！ お休み！」

ぱつと離れると、ベッドにちょこまかと近づき、毛布の下に潜り込む。

目を閉じ、コンマ数秒も使わずにすやすや眠りについてしまった。

彼女をまたいで、壁際の隙間に潜り込む。

「……狭い！」

本来は1人分の寝台に、ぎゅうぎゅうに詰め込まれている2人分の体。

「えへへ……マーちゃん、マーちゃん……今日のバトルは姫が勝つからね……」

早速寝言を漏らし始めた彼女の体に押され、迫る壁に息苦しきを感じながら、目をつむった。

まぶたを閉じて、暗い闇に意識を沈めた筈なのに。

見る私の夢は、真つ白く光り輝いていた。

「……お願いします」

自分がどこにいるのかも分からない、ただ、途方もない浮遊感に包まれていた。

「お願いします。どうか、その人を私から取らないでください」

声が出た方に顔を向けると、緑に輝く光に、誰かが手を伸ばしているのが見えた。

豆と傷のある血まみれの腕で、遠ざかっていく光へ、手をのぼし続ける。

「自分は、その人の一部です。その人が死んだら自分には何もありません」

乞い願う声を置き去りにするようにして、光は遠ざかっていく。

「心も体も、魂だって、あげたってかまわないのです、だから……」

手は真摯にのぼされ続ける。

「その人を連れて行かないでください」

声に込められていたのは、果てのない悲しみの感情だった。

「■■■■にして、誰の手も届かないところに置くだなんて、そんな残酷なことしないでください」

願いの言葉の後、温もりある光が、右の手に触れて。

「」

内側から焼いてしまった。

けれど、触れた光がその端から肉を再生させていく。

「……こんなちっぽけな手なんて、届かない方が良かったのだろうけど」  
左手が、焦げ続ける右手を愛しげに撫でた。

「でも、嬉しいんだ、狂っているからなのかな」

声に偽りのない喜びが混じった。

「二度とこの手を離さない、世界救われるまで、一緒だ——」

喉が裂けてしまいそうな程、嬉しそうな声なのに。

私は、なんて悲しい夢なのだろうと思ってしまうた

「トバルカイン、目の下のくまが酷いですわ。悪い夢でも？」

朝ご飯の後、運転室に来た私を、アスカが黒い大きな瞳で見上げながらそう言った。

「すごく悲しい夢見たの」

目をこすりながら彼女に答えを返す。

「ひよっとして姫の……」

「アサシン47のせいじゃないよ」

「うう……でも何か責任感じるな……」

どっしりと席に座っていた彼女が、指先を合わせてもじもじとしていた。

私は見てしまった夢の内容を思い出し、小さくため息をつく。

そんな浮かない顔の頬を、誰かがつついた。

肩に目線を移すと、折り紙で出来た小さなキツネが乗っていた。

「笑顔になれる方法を姫が伝授しまーす！」

昨日の夕食の時に使用した格納式のテーブルがまた出てきた。

アサシン47はその上に質感も色も様々な折り紙をずらりと広げると、1枚取り、ぱたりと折り曲げる。

淀みない手つきで紙は形を変え、立体感のある三角形となった。

「えーい！」

出来上がったそれを、アサシンが投げる。

空間を真っ直ぐに飛び、壁にこつんと当たって落ちた。

「紙飛行機といえます。作ってみましょう！」

「わたくしもぜひ！」

目をキラキラ輝かせたアスカが、黒色の紙を1枚選ぶ。

「トバルカインも！」

楽しそうな彼女にせかさかれ、手前にあった明るい緑の紙を指先でとった。

「まず真ん中に1本線が出来るように折ります。」

そうそう……そしたら、紙の端を持って、三角形が内側に出来るように折り曲げて、反対側も同様に……」

彼女の教え通りに曲げて折つてを繰り返すと、綺麗な紙飛行機がころんと生み出された。

「わたくしの紙飛行機が一番長く飛ぶはずですよ！ えい！」

思いつき振りかぶって投げられたそれは、床に真っ直ぐ着陸した。

「アスカちゃんは力み過ぎかな、もつとらしくに、らしくに……」

「うう……」

真っ赤になった顔をアサシンから背けて、恥ずかしそうにしている。

「……えい」

私はほとんど力を込めずに投げると。

「おっと」

ちょうど運転室に入ってきたバーサーカーの鎧、心臓の上辺りにぶつかってしまった。

「くれるのか、我がマスター？」

「あげてもいいけど……」

「冗談だ、君の宝物は君に返すよ」



彼は穏やかな笑みを浮かべてそれを拾い、私に手渡してくれた。

「紙飛行機作つてたのか、みんな楽しそうだな」

「バーサーカーもどう？」

アサシンが紙を両手いっぱい扇のように広げながら彼を誘うが。

「……見てるだけで満足だ」

緑の瞳を伏せた、どこか寂しそうな顔で断られた。

「アサシン47、その紙つて、サーヴァントの武器みたいに貴女が生み出したものなの？」

何となく浮かんだ疑問を聞く。

「戦闘とか偵察に使つてるのはそうだけど、今あげたのは本物の紙だよ」

「そんな……貴重品を……」

私が折つた、明るい緑の、命の息吹を感じる色の紙飛行機をまじまじと見る。

「他の折り紙もあげるね、あと、手紙専用のやつとか」

「確か、古代のメールでしたっけ」

アスカが黒い紙飛行機を大切そうに抱えながら言う。

「そうだよアスカちゃん。声で伝えられないこと、文字だったら伝えられるってこともあるし……」

はい、2人とも、どうぞ」

アサシン47は、沢山の紙を私達に贈ってくれた。

「でも」

「いいのいいの。それに……この紙を使う度、わたし姫の事を思い出してくれるでしょ？」

へにやりと力の抜けた笑顔で話す彼女の言葉に、どきりと胸が動いた。

（わたし「姫達つてこの世界に何にも残せないから……せめて、みんなが生きていた証し、取っておこうと思って」）

消えた仲間の番号札を見つめながら、そう語っていた彼女。

「……ありがとうございます」

私は涙を浮かべないように気持ちを抑えながら、大切な贈り物を受け取った。

「敵襲です、数は500以上」

折り紙も片付けたお昼頃、アスカのアーチャーが無慈悲な報告を持ってきた。

「映像を私のギアから出力します。バーサーカー、スクリーンを」

「便利すぎますね、それ」

「……スクリーン」

「はい、アーチャー殿」

数個のボタンが押され、運転室の天井から薄い透明なパネルが下りてくる。

「再生開始」

アーチャーの声を合図にパネルが黒くなり、動画再生が始まった。

あまりにも映像が暗かったので、バーサーカーが明度を調整する。

「……そんな」

アサシン47が身を乗り出し、食い入るように動画を見つめる。喉から漏れた声は、

絶望に染まっていた。

「<sup>わたし</sup>姫達で、破壊したはずなのに」

瓦礫の山の上、無数のうごめく人型の中央に、アサシンが絶望したその原因がいた。

体長は5mほど。

フレイムやワイヤーで形作られた1つだけの足で、ぴよんぴよんと跳ね、先がすぼまった円柱状の胴体を、ぐわんぐわんと揺らしている謎の存在。極東の妖怪『一本だたら』のようなシルエツトだ。

足を支える胴体が不安定になる度に、粘度のない液体を、相当な量辺りに振り捲いていた。

何が目的か分からない動き。「理解できない」というシンプルな恐怖が私達の間を満たす。

ちる。

「機械化サーヴアント……どうして！」

アサシン47の桜色混じる瞳は、衝撃でからからに乾いていた。

「感想は？ アーチャー殿」

バーサーカーが彼に問う。

「水瓶……」

何か確信を得たような口調で、アーチャーは敵を見定める。

「……蟹の次は水瓶かー」

バーサーカーは得心がいったような声で呟いた。

第12話 別れはとびきり苦い味

終わり

## 第13話 闇なんて飴色にとろけさせ

「アサシン47は知ってるの？」

私の質問に、彼女は動揺で目を泳がせながら口を開く。

「……姫達わたしの後から、この地下廃墟にайつはやつてきたの」

映像の再生が終わると、画面の中の機械化サーヴァントの動きも止まる。

「周りにいた黒い人型は？ なぜ水を撒いているの？」

私の問いを聞きながら、アサシン47は深呼吸を繰り返した。

「……ごめん。もう落ち着いた、1つずつ説明していくね」

彼女の細い指が、天井から下ろされているスクリーン画面中央の敵を示す。

「あれは機械化サーヴァント。何体ものサーヴァントをミキシングしてペーストにして、機械に詰めた、ふざけた代物」

「少しだけ知っていますわ」

アスカが頷く。

「真名はない、誇りも魂もない……殺戮を振りまくだけの道具だよ。」

倒したのに……みんなが自分の存在を削りながら……やつつけたのに！」

「別個体か、何らかの不死性があつたのでしよう」

感情を露わにするアサシンの声の熱を冷ますかのように、アーチャーの言葉が被さる。

「バーサーカー04」

アーチャーは顔を動かし、名を呼ぶ圧だけで運転席のサーヴァントへ意見を求めた。

「アーチャー殿、貴方はあれを水瓶と呼んだ……」

俺達が前に出会った機械化サーヴァントは蟹型だった、蟹に水瓶」

計器を操作しながら考察する彼。

「……黄道十二宮」

「星座だっけ」

バーサーカーの呟いた単語に、アサシンが言葉を付け足す。

「うん。太陽の通る見かけの道」

「それで……水瓶だったら何なのさ」

彼女は、04の座っている運転席の背もたれをじつとりとした眼差しで見た。

「神話によれば、水瓶の中身は神々に捧げる酒であり、その給仕役を預かった者は永遠の命と若さを与えられた」

「詳しい！」

「ごめん、今調べた」

「ズル！」

「ずるいし賢しい男なんだよ俺は」

バーサーカーは計器にキーボードを接続し、何かを書き込んでいる。

「あの機械化サーヴァント自体に不死性があるのでは、と俺は思う。」

……周りの人影の考察までは及ばないが」

彼の言葉の後、アサシン47は怖々と口を開いた。

「あれは……死体だよ、何百年も前の」

声はわずかに震えていた。

「あの液体で、からからの砂になっていた肉片がまとめられているんだよ。」

砕いても砕いても、機械が撒く液がかかれば復活する」

かつて行った行為を思い出したのだろう。彼女の顔は罪悪感からか青ざめた。

「水に触れた物は生き返る……給仕役に神が与えた不死の、拡大解釈でしょうか」

アーチャーが止まった動画を見つめながら考えを述べる。04がそれに続いた。

「周りの物体を神扱いにしているのかもしれない、アーチャー殿。」

何にせよ……殺しても死なないってのが一番やり辛い。俺みたいだねー」

バーサーカーは動きやすい軽い鎧をまとったままの体の背を伸ばす。

「……逃げよう」

真剣な声でそう言ったアサシンの考えを、アーチャーは否定した。

「難しいでしょう。出入り口に繋がる通路を塞いでいる」

「じゃあ……」

「協力プレイしようぜ、アサシン47」

彼女の表情はちよつとムツとしたように見えたが、きつと不安の現れなのだろうと私は思った。

「……水相手じゃ姫わたしの折り紙は役にたたないよ。前もそうだった」

「大丈夫だ、策はある」

使い終わったキーボードを肩に一時的に置くと、バーサーカーは自信満々に言い放つた。

「困じゃないですかやだー!」

「1人じゃない……俺と君とでダブル困だ!」

地下廃墟の出入り口を、機械化サーヴァントと取り巻きが塞いでいる。ので、アサシン47とバーサーカー04で周りを倒し、注意を引きつける。



その間にデザートランナーでぎりぎりまで通路に近づき、隙間が出来た瞬間、フルア  
クセル。

これが、バーサーカーの立てた、2番目のプラン。戦わずに逃げる作戦だ、成功確率  
は低い。

今2体のサーヴァントが行っているのは……1番目のプラン。

逃げずに立ち向かい、水瓶型の機械化サーヴァントを撃破する手だ。

『マスター、第1プランがだめだったら全力で脱出な！』

無線越しにそう言いながら前方に走っていく彼に、運転席に座り、スピーカーの電源  
をつけながら言い返す。

「みんなを信じているから、しないけどね！」

「わたくしも！」

アスカも負けじと叫んだ。

『俺にはもつたないマスターなんだよなあ……』

そんな言葉を最後に、彼からの無線がしばらく途絶えた。

運転席……私は初めて握るハンドルの固い感触に冷や汗をかきつつも、冷静に発進で  
きるよう心を落ち着けた。

隣に座っているアスカは、シートベルトを白い手を動かして着用していた。

「えっと、このボタンを押せば、前線の映像と音声を送られてくる……でしたわね……」  
アスカが口頭で確認しながら、指で丸ボタンを押し込む。

フロントガラスの半分に映像が映し出され、スピーカー越しにサーヴァント3体分の音が聞こえてきた。

バーサーカーが運転席で長々と作業していたのは、これの仕込みもあつたからなのだろう。

『俺が突っ込むので横から援護を頼む！ アサシン47！』  
『りょーかい！ フレンドリーファイアに気をつけるね！』

映像の中、両手に銃を持ったアサシンは走りながら頷くと、ダウンジャケットの内側からバラバラと何かを落としていく。

『いけ！ キツネにネズミ……コウモリ部隊！』

車両を制圧した時の、あの紙製の歩兵にバリエーションを足した物が、前方を走るバーサーカー追い抜いて暗黒色の人型へ近づく。

『一斉射撃！ ファイヤー！』

彼女の号令の下に、弾を打ち、コウモリが突進して、塵で出来た体を砕く。

『今です！ バーサーカー04！』

彼女が亡者を倒して作った空間に彼は無言で降り立つと、緑の瞳を輝かせながら槍を

振るい、それでも足りぬ分は刀を使って、群がる敵を大きく薙いでいく。

『よし……これなら……』

余裕のあるアサシンの声が無線越しに聞こえてきたが、デザートランナー内の私達は別の敵を気にかけていた。

「アーチョモミー……」

車内に居てもはつきり聞こえる、奇つ怪な鳴き声の主は、うず高く積まれた瓦礫の上に立つ、1本足の機械化サーヴァント。

そいつは立っている上から全体を俯瞰すると、礼をするように体を傾けた。水瓶があげられる。

内側から湧き出す暗い水が、瓦礫の平らな面を滑り、だんだんと流れて、サーヴァントの攻撃で砕かれ、地面を覆う砂になっていた亡者は、水に触れると、瞬く間に人の形へ固まっていく。

そして。

『う……やっぱり折り紙隊が……』

敵の流した水により、アサシン47の武器である紙の兵隊は全てふにやふにやになっ  
てしまった。

『じゃあ……ゲーム仕込みのガン⇨カタをくらえ！』

銃を両手でしっかりと抱え突撃し、弾をばらまくアサシン。

彼女の剥き出しの柔らかな四肢にかぶりつこうとする亡者に対しては、ジャンプで避け、空中で回転を繰り返しながら下方へ発砲する。

濡れた地面に着地した瞬間、衝撃で舞い上がる水しぶきと、遅れて葉莖がバラバラと床へ転がる。

周りを取り囲んでいた亡者達は、攻撃を受けて次々と暗い砂へ変わっていった。

『……ジュウネンハイインダヨー！』

崩れ落ちていく敵の中心で勝ち誇る彼女。

一瞬だが、瓦礫の上の機械化サーヴァント……水瓶の姿をした敵に繋がる道が出来上がる。

その道を、バーサーカーは飢えた獣のごとく駆け抜けた。

『——おい水瓶、こちらを向け』

殺意を込めた声と眼差しを携え、彼は水瓶を支える足に接近した。

腕に力を込め、火花が飛ぶほどの勢いで槍の腹を打ちつける。しかし、それだけではダメージを与えることは出来ない。

彼は刀も気怠げに持ち出すと、切れ味を全く生かさず乱暴にガンガンガン打ちつける。武器をただの道具としか思っていない、そんな戦いぶりだった。

「ムアーミヨロミー……」

水瓶が揺れ、不気味な暗黒色の液体がとぼとぼ撒き散らされる。床までこぼれ落ちると、倒された塵が次から次へと人の形を取り戻していく。

『貴方の相手は……姫！』

だが、全てアサシンの素早い乱射によつて倒された。

バーサーカーの力任せの連撃により、詳細不明の金属で出来た足にひびが入り、上の水瓶の自重でつぶれ始める。

『アーチャー殿！』

数秒後、胴体である水瓶を支えきれず、ぐつたりと機械化サーヴァントは横たわった。

その上が、やおら光り始める。

ドーム状の天井に、突き出すようにある棒、いや、鉄骨。

『10日分の燃料だ！ もつてけ雷神!!』

アスカのアーチャーが、金の雷をまとい、剥き出しの骨組みの上に立っていた。

車外カメラで彼をズームする。

ボトルの前身……すなわち液体リソースを十全に摂取した彼の白の衣服と外套は、雷光に満ち、風に吹かれる草原のようにゆっくりとたなびいていた。

『……の一撃が』

角のような頭部パーツが上に伸展し、眩く輝く。顎を戒めていた外骨格が開き、口元がぼんやりと見えた。

『お前という存在へ……終わりをもたらすだろう』

唇を動かし言葉を紡ぐと、彼はゆらりと鉄骨から落ちる。自由落下の中、全く余分な力を入れていない腕を、そつと機械化サーヴァントへ向けた。

『融解しろ！』

瞬間——落雷、いや、それ以上のものが、彼の体を弓として打ち出される。

空間をズタズタに切り裂きながら水瓶に直撃した。熱で風景が白く照らされ、歪んでいく。

割れた破片が落ちた周辺の地面ごと巻き込んで、アーチャーの攻撃が世界をぐんにやりと飴色に溶かす。

余波の熱でゴミが発火し、廃墟にオレンジの炎が下から順に次々灯った。

「わっ！」

「きゃあー！」

安全な位置まで距離を取っていたはずのデザートランナーも、空間ごと激しく揺さぶられる。

……映像が切れ、無線もノイズしか聞こえなくなった。フロントガラス越しの景色

は、砂埃でなにも見えないが。

「アーチャー殿かつこいいやったー！ あわれ水瓶は爆発四散ー！」

バーサーカーの嬉しそうな声が外から聞こえてきた。

「……攻撃のスケールが違った」

埃が落ち着くと、茫然自失のアサシン47の姿が、カメラではなく肉眼で確認出来た。

「アサシンは大丈夫だったか？ 俺は受けた衝撃で半身が蒸発した後戻ってきたんだけど」

「ノーマルなテンションでさらつと怖いこと言わないで?! ……えつ、まじなの？ 小粋なジョークでなく？」

2体のコントのような会話に、運転席の私とアスカはくすくすと笑い声をもらしてしまった。

「神の雷で焼き滅ぼしましたが……これでも蘇るようであれば宝具使用を……」

バーサーカーが彼を思いやったのか無言でボトルを差し出したが、それをアーチャーは手でそつと押し返す。

「いらな……必要ありません」

「……では、さつさとずらかりましょうか、アーチャー殿？」

戦いを終えたサーヴァント3体を回収し、私達はオレンジに燃えていく地下廃墟を後

にした。

無事に帰ってきたバーサーカーに運転を任せ、私達はアサシン47の側に寄る。

「……出てきて良かったの？」

「うん。もうあの廃墟には何も無いから」

アサシン47は懐から何かを取り出した。

「番号札だけは、持って来ちゃったけど」

つるりとしたバンドが4つ。そして表面にある、101、120、230、74の数  
字達。

彼女の大切な仲間が、確かに存在していた証。

「みんなありがとう。仲間の仇が討てて、ちよつとすつきり」

緊張が解けた緩んだ顔で、彼女は優しく微笑んだ。

「バーサーカー04さんも、姫わたしに合わせてお喋りしてくれてありがとうね」

ハンドルを操り運転している彼に、アサシンは感謝を含んだ声をかける。

「……俺は君をいじめていただけだ」

「だろうね……貴方の優しさは身内にしか向けられない。気づいてた、でも、嬉しかった



「よ」

「同じ国出身でもあったしな……」

「親近感？」

「いや違うけど……」

「対人関係での距離感の取り方が独特だなこの人……」

へんてこな言葉を返され、アサシンは本当にむっとした表情を見せた。

「あの……961さん？　すごく格好良かったです、一撃がヤバかったけど引いてないですよ……？」

もみ手をしつつそう言う彼女に、アーチャーは顔をちらつと向けたが、声を返さず、アスカの元へ歩いていく。

「アウトオブ眼中……すごくいい……実力がある故の塩対応……めっちゃレアい……顔が良いA級サーヴァントはこうでないかねー……」

爽やかな敗北感を顔に浮かべたまま、アサシン47はうんうんと頷いた。

「アサシン47さん、これからよろしくね」

会話を終えた彼女へ、私は手を差し伸べる。

「そうですね、これから一緒に旅、しましょうね」

アスカも彼女にトコトコ駆け寄ると、嬉しそうに手を出す。

「ん？ 何のこと？」

彼女はとぼけた様子を見せる。

「えっ、ついてきてくれるんじゃあ……？」

「アサシン47、ついてきてくださいますのよね……？」

私達は彼女に、もう決まっているものだと考えていた事をたずねる。

「行かないよ。姫<sup>わたし</sup>、約束があるもん」

戸惑っている私達の感情を置いてけぼりにして、彼女はあつけらかなと言いつつ放った。

第13話 闇なんて飴色にとろけさせ

終わり

## 第14話 青い空の下、夢は飛んでいく

「本当にお別れですの……?」

まだアサシン47の言葉の意味を受け止め切れていないアスカが、戸惑いながら彼女に聞く。

「うん」

問い掛けに、深々と頷いた。

「<sup>わたし</sup>姫、日本に行く。マーちゃんと昔約束したんだ、『いつか一緒にお城を見ようね』って」  
ボトルの本数を確認し、折り紙でコウモリを折りながら、彼女はてきぱきと準備をしている

「それにさ、サーヴァント3人も養える余裕無いでしょ? さっきの戦いで液体リソース減っちゃっただろうし」

装備の点検が終わると、彼女はすつくと立ち上がった。

「立つ姫跡を濁さず! さよなら、モモちゃん、アスカちゃん、04さん、961さん!」  
彼女の言葉に、アスカは艶やかな髪を触りながら、露骨に寂しそうな表情を浮かべる。

アサシン47はその表情に、名残惜しそうな微笑を返した。  
「あつ、そうだ」

顔はぱつと変わり、明るい声で言葉が続く。

「刑部姫」

放たれた単語の意味が語られる次の瞬間を、私とアスカ、2体のサーヴァントは静かに待った。

「それが、わたし姫の真名。

日本っていう島国にあった、姫路城っていう綺麗なお城に住んでいたお姫様なの」

……真名を明かすということ。それは、私達への深い信頼の証。

「これはバーサーカー調べですが、お姫様ではなく長生きして化生に変じたキツネです、マスター」

真面目な空気に耐えられなかったのか、彼は私の耳へそれなりの声量で囁いた。

「最後までいかっこつかせろー！」

もう……バーサーカー04さんは、いつかマスターへ自分のことをちゃんと話しするごとく！」

いい雰囲気のを台無しにされてしまったアサシン47……もとい刑部姫は、立てた指でびしりとバーサーカーをさした。

「04君のせいで場が乱れたので仕切り直ししまーす……。」

お世話になりました！ ご飯、とっても美味しかった」

刑部姫が丁寧に腰をおる。

「色々教えてくれて、ありがとう」

「どういたしまして、えへへ……」

私が正直な感謝の気持ちを言うと、彼女は頭の上のゴーグルの位置を照れ隠しのため  
にくいといと調整した。

「折り紙使う時、思い出してね、わたし姫の事」

贈り物の、色とりどりの紙と上質な手触りの和紙は、倉庫に大切に保管してある。

「うん、絶対に忘れない」

私も深く頷いた。それから、彼女にどうしても伝えたい気持ちを言った。

「サーヴァントは何も残せないだなんて、私は思わない。だって、貴女は沢山の感情をく  
れたもの、思い出を話してくれたもの」

刑部姫の消えてしまった仲間、マスターのマコト君。私はきつと、それを忘れること  
はない。

「……今の言葉、姫の心にすんびっしっ！ と刺さったかも」

お互い手を恐々出しあって、照れながら握手をした。

「お元気で、刑部姫」

アスカも握手をする。白い手同士が重なり合う。

「アスカちゃんもこれから先しんどそうだけど……頑張って」

「平気です、わたくしは一人ではないのですもの」

彼女は刑部姫の前で、機嫌良さそうに胸を張った。

「みんなの旅を応援してる。それじゃあ……」

初めは敵で現れて、最後には素敵な仲間になった彼女は、沢山の思い出を抱えて旅立っていった。

振動で小さく動いてしまうハンドルを微調整し、タイヤを真っ直ぐに。

「運転……下手じゃない?」

「じよーずじよーずですよ、マスター」

緊急時に私もデザートランナーを運転できるようにと、少し練習を始めたのだ。「こつちにブレーキついてるし、危なかったら俺が止めるよ」

バーサーカーは足を組んで、タブレットを操作し何かを調べあげている。

「……あのね」

「うん?」



心臓がばくばくとうるさい。だめだ、運転中は気持ちを落ち着けないといけないのに。

「……言えないな。でもずつと……」

彼は長い沈黙を挟んだ後、「黙っていた方がおもしろい」と。

そして、笑んで、半分だけの唇の上に立てた人差し指を滑らせた。

「アーチャーは上手に作りますのね!」

沈黙する私達とは対照的に、後ろの2人は和気あいあいと言葉を交わしあっている。

「廊下で飛ばしてみましよう! わあ……」

別れたアサシンが飛ばしたものだろうか。

車の外、フロントガラスから見える青い空に、黒と黄色、2つの紙飛行機が飛んでいた。

それは舞い上がると、太陽と重なり見えなくなる。

……紙飛行機が、もう一度私達の前に姿を表すことは無かった。

第14話 青い空の下、夢は飛んでいく

終わり



第14. 5話 ぼくとお姫様のお話

「マーちゃん！ マーちゃん！」

……おつきーが、僕を呼んでいる。

火事のせいで熱い床に頬をつけて倒れたまま、彼女を見る。

やけに視界が暗いけど、おつきーに怪我はないことが分かった。

「なんで……わたし姫を庇ったの……？」

おつきー、泣いていた。

「大好きだからだよ、おつきー」

当たり前前の事だから、当たり前前のように答えを返した。

「おつきー、僕のこと、覚えていてね」

ひとりぼっちになる彼女の事が心配で、ついそんな事を言ってしまった。

「覚えてる！ 絶対に忘れない！ だから……」

ああ、安心した。

ずきずきと痛む肺から、深い息を吐く。

僕よりすごいおつきーが、僕のこと覚えていてくれる。

おつきーが僕のことを他の人に話してくれれば、その人も僕のこと覚えていてくれ

る。

それがぐるぐる続けば、僕が死んだって、誰にも忘れられない。

……まるで、何百年も語り継がれる映画のスターみたいに。

「おつきーのお城、いっしょに見れなくてごめんね。もえちやう前に、にげて」

「や、やだ、マーちゃん……」

「またゲームしようね、ネズミのとうぞく団のゲーム」

楽しかったことが次から次へと浮かんでは、真つ暗などこかへ消えていく。

「47さん、行きましよう……貴女まで死んでしまいます……」

「やだ……マーちゃん！ マーちゃん!!」

おつきーの声が遠ざかっていく。

良かった、逃げてくれたんだ。

僕が3歳の頃からずっと一緒にいてくれた、大切な友達。

元気でね、また……どこかで会おうね。

「さよなら。でもずっと……あいしてる」

そう言った後、大きな音がして……何も、分からなくなつた。

第14・5話 ぼくとお姫様のお話

終  
わ  
り

## 第5章 終末世界の幸福論

### 第15話 有り得ざる魚

刑部姫と別れて3日後。

私は荒野の上に車輪のわだちを残しながら、宛のない旅を続けていた。

午前8時。廊下を歩き、友達である彼女の部屋のドアをそつとノックする。

「アスカちゃん……相談したいことがあるんだけど……」

1秒も経たない内にロックが解除され、扉がすつと開いた。

「朝からどうかしまして?」

アスカが私を椅子に腰をつけたまま迎えた。食後なのか、コップを傾けて水をゆつくりと飲んでいる。

壁からせり出しているテーブルとその向こう側に座っている彼女の前に立ち、スカートの裾をもじもじとこね、胸元のリボンの形を整える。

相談内容を伝える事を躊躇している私の姿を、アスカは黒い目にまぶたを半分乗せた、じつとりとした眼差しで見ている。

私は深く息を吸って、吐くを繰り返す。そこまでしてようやく、口を開くことが出来た。

「——『運命の人』って、どういう人のことだと思う？」

アスカはカップの水で唇を再び湿らせると、とても上品に微笑んだ。

「……ふーん」

黒い瞳が、私の頭の天辺から爪先までをじっくり見る。

「バーサーカーに何か言われましたわね、そうでしょう？」

「……です」

何もかもバレていたみたいだ。肩をしょんぼりと落とす。

椅子は1つしかないの、私は立ったまま3日前の出来事についてアスカに話をした。

彼へ真名についてたずね、はぐらかされたこと。

……『運命の人』のこと。

「運命の人って、なに？」

「難しい概念ですわね……」

アスカはこめかみに人差し指を当てると、天井を見上げた。

「恋愛小説では、思い合う恋人同士がよく口にしていましたわ」

「こいびつ……!」

「そして2人は愛し合い……口づけを交わしますの」

「くちつ……」

「でも、あの意地の悪いバーサーカーの事ですから、そういった意味では無いのでしょうね」

テールに頬杖を突いたアスカ。

「……アスカにとって、アーチャーは運命の人……だったり?」

「うーん」

もちもちの頬を白い手の平の中で遊ばせながら、アスカは言う。

「そうであつたら素敵でしょうけれど……彼とわたくしは……そうなつてはいけませんの」

「そうなの?」

「うん」

アスカはこつくりと素直に頷いた。

「幼い頃、彼はわたくしに言ったのです。『どうか、何があつても愛さないで欲しい』と  
彼女は赤い小さな唇を不満そうに尖らせた。

「その言葉を聞いてわたくし、3日くらい泣いて暮らしましたわ」

「へー……それ本当の話？　ちよつとロマンチック過ぎない？　何か隠し事してない？」

「えつと……本当の話ですわよ、うん」

私が指摘した通り、何か隠しているのか、アスカはちよつと目を泳がせたが、わざとらしい咳払いをして会話の流れを戻す。

「ともかく！」

アーチャーは、お母様を無くした幼いわたくしの前に現れた、王子様だったのです！

そんな素敵な存在を好きになつちやだめだなんて……落ち込みました」

アスカの頬がじんわりとピンクになった。

「彼が拒絶した『愛』を知りたくて……沢山調べて、分からなくなつてしまった日々も」  
波打つ黒髪を耳にかけ、目を細めてため息をつくその表情は、どこにでもいる女の子のように気が抜けていた。

「なので！　私、彼を好きになることにしました。家族に抱くものに近い、さり気なく深い感情で」

「……約束破つてない？」

「充分な説明もせず、曖昧な表現をしたアーチャーが悪いのです！」

彼女はテーブルを小さな拳でたんと叩いた。コップがカタカタ音を立てる。

「バーサーカーの運命の人は誰なのか、今は考えても仕方がないですわ。」

向こうが話し出すまで、忘れていくくらいが良いかと」

彼女はテーブルに両手を乗せて広げながら、そう慰めてくれるが、胸のもやもやは取れない。

「気になるもん……」

無機質な天井を見る。

「トバルカインは、彼にとつて一番大切な人になりたいのです？」

アスカの言葉を聞いて、思考を巡らせる。

「もしかしたらそうかも……これって嫉妬かなあ……やだなあ……」

明るい感情以外を考えるのは嫌なのだ。自分がひどく汚い人間のように思えるし

……疲れるし。

「誰かが一番になるのは難しいですわ。」

実の子であるわたくしですら、お母様の一番にはなれませんでしたもの」

アスカは両手を膝の上に戻して、柔らかい声で話を続ける。

「バーサーカーはその運命の人の事、深く愛しているのでしょうか。」

もしかしたら、トバルカインよりもずっと」



サーヴァントはかつて存在していた英雄の写し身だ。

生きていた頃に誰かを愛し、愛された事だつてあるだろう。

「けれど、わたくしはこう思います。

別に、お互いを一番に想い合う愛だけが、至上のものではないのです」

「……うーん」

納得の言っていない様子の子の私を見ながら、アスカは水を少量口に含んだ。

「『愛』って何？ 『運命』って何？」

多くの物語、映画、言葉に出てくる概念<sup>やっら</sup>。

でも私には何も分からない、知らない。だから頭も心も混乱状態のまま。

「ねえ、教えてよアスカ……」

私の前の友達の白い喉がわずかに動いて、コップの中の水が体の奥へと落ちていく。

「アーチャーは……」

もう一度、彼女は艶やかな唇を開いた。

「『ままならないもの』と言っていましたわね」

そう話すと、彼女は水を全てこくりこくりと飲み干した。

『こちら都市711、救援を願います。こちら都市711、助けてください』  
運転室に響く音声。2体のサーヴアントが耳を傾けていた。

「アーチャー殿、罨だな」

「なぜそう判断した、バーサーカー04」

「声に震えがない。安全な状況下で、なおかつ数回の練習を重ねたものだと推測できる。

後ろの悲鳴や物音は……デザートランナー搭載のA Iの判断によると合成だそうだ。

A Iって賢いなあ……」

04の理論立った物言いを最後まで聞いてから、アーチャーは顎のギアに片手を添えた。

「私達をおびき寄せる理由は？」

「分からない。こちらを捕獲したいのか、それとも……」

その話をすっかり聞いてしまってから、一緒に廊下から入ってきたアスカと私は顔を  
見合わせる。

「通信、入ったんだね」

私がバーサーカーに声をかけた。

「そうだ、我がマスター。内容は聞いたとおり嘘だし、相手の目的は謎だが」

彼はぐっと体を捻って私へ顔を向け、左半分だけの眉にしわを寄せたまま話す。

「10分前に受信した。発信した都市の位置は、この真下か、もう少し向こうだと思うが」

「でもバーサーカー、本当に助けを呼んでいるのだとしたら……」

「行っても行かなくても、メリットは少ない」

「苦しんでる人、いるのなら見過ごせないよ」

私は、誰かを助けたくてこの旅をしているのだ。

「うーん、見えてる罠に飛び込むのはなあ……」

私とバーサーカーの意見は平行線。

「アーチャーはどう考えていますか？」

140cmのアスカが、177cmのアーチャーを見上げながら意見を聞く。

「燃料も食料もまもなく枯渇します。補充のためにも向かうべきかと」

「物資的な見地からではなく、人道的に見ますか？」

「善良な人間を利用して作った罠でしょう、向かうのにも相応のリスクがあります。

そして……個人的には、腹立たしさを感じています」

「リスク……ですか」

アスカは困ったような表情で腕を組んだ。

「トバルカイン、わたくしのサーヴァントも含め、2人は罠だと感じています。つまり危

険ということですよ」

「うん……」

私は素早く思考を巡らせながら、短い返事を返す。

（罨の可能性が高いのだとしても、人を助けに行くか……）

けど、燃料にもなり、サーヴァントの存在を保つのに必要な『液体リソース』も余裕なし。

（ここで私が変な判断をしたら、旅が続けられなくなってしまう……）

バーサーカーは運転席に座り直し、私達の結論を待ちながら計器を操作する。

また新しい通信が入ったのか、スピーカーにノイズが混じり、声が聞こえてきた。

『ずっと話を聞いていたけど、慎重すぎてめんどくさいな君達！』

甘い響きを宿す少女の、いらついた声。

『ごちやごちや言わずに来なよ、もう……』

「……えっ？」

——嫌な浮遊感が、私を、いや、デザートランナー全体を包んだ。

「……この領域を走っていた瞬間から、俺達に選択権は無かったか」

バーサーカーが無感情につぶやいた後、車が垂直に、落ちていく。

フロントガラスから見えた雲一つ無い空が遠ざかり、暗闇が世界に溢れ出す。

地面に突然大穴が空いたのだと私が理解できたのは、数秒後。落下と共に、運転室の中にある、あらゆるものが浮いていく。

当然、私達も。

「マスター！」

アーチャーがその腕にアスカを抱え、素早く保護したが。

「あつ……」

シートベルトをつけていなかった私は、後頭部を壁に強打してしまい、気を失った。

まぶたに明るい光を感じて、私は恐る恐る目を開ける。

「……」

暗い木を組んで作った高い天井があった。

空気を循環させるためかファンが取り付けられ、静かにゆっくりと回転している。

（木造？）

それは、数百年も前に滅んだ素材と技術ではなかっただろうか。

「えつと……」

戸惑いながらも、真つ白なシートに収められた毛布の中から体を起こす。

身につけている服は変化なし。いつもの白と緑が使われた制服だ。

「( )は……」

辺りを見渡す。

私はぴんとシーツが張られたベッドに寝ていたようだ。

下を見てみると、床は木の板。ワックスが隅々までかけられてつるりとしているが、暗い色合いや磨耗が建物の年代を感じさせる。

漆喰のような質感を持った白の壁には、長方形の頭頂部を丸くした形の窓が並んで開けられ、白の薄手のカーテンが風に揺られている。

「風……?」

私は誘われるように素足で立ち上がり、窓に寄る。床は冷たく、滑らかだった。

「……」

目の前に広がる光景に、絶句した。

——海だ、海がある。数百年前に干上がってしまったはずのエメラルドグリーンの概念が、外に広がっていた。

地平線の果てまで続く透き通った水が、波を無数に作り、白い砂浜へと打ち寄せている。

「砂浜は海から離れるごとに徐々に草地へ変わり、木が生え、石造りの建物もあった。あまりにも美しい世界に心奪われていると、後ろから声をかけられた。」「歩行も出来ているし、元気そうだね。よかった」

慌てて振り返る。

そこには、白衣を着て、金色の柔らかい髪を耳にかかる程度に伸ばした、丸メガネをかけた優しげな風貌の50代くらいの男性が立っていた。

ズボンはやれよれで、足は革製のベージュのサンダル。

「親しみやすさが全身からにじみ出ている、どことなく抜けた印象を受ける人物だった。」

「私はスローネ、この村で医者をしている者だ。君はね、浜辺で倒れているところを保護されたんだよ」

声はとげのない、優しげなもの。

「ありがとうございます……ごさいます」

ぺこりと体を折ると、私のピンクの短い髪が風に吹かれて揺れた。

「あの、(ハハ)は……」

優しそうなその人、スローネさんに色々たずねようとしたら、きゆるるとお腹が鳴つ

た。

「難しい話なんかより、先にお昼にしようか！ 村の人が作ってくれたよ」

彼から柔らかいスリッパを手渡され、それを履く。

ベッドの並ぶ部屋から手招きされ、高い天井のある長い廊下へ。

年代を感じさせる建物は、イタリア映画のセットのように白く美しい。

「えーっと、ご飯ご飯……」

木製の靴箱が壁に何十個も備え付けてある広々とした玄関に来た。

スローネさんは白衣を着た背を丸め、記帳台のような大きなテーブルの上に置かれた、蔓編みのバスケットの中身を確認している。

玄関から見える外は、輝く陽光に満ちていて。耳をすますと、木の葉が風でこすれあう、心静まる音が聞こえてきた。

「よし、食堂へ行こうか！」

彼がバスケットを手に持ち、廊下をまた歩いていく。

後をつけて行くと、部屋から直に庭へ面している開放的な空間についた。

日が直接注いではないけれど、庭から跳ね返る陽光の明るさが、部屋をほんのりと照らしている。

「さあ、そこに座って」



木で出来た小さなテーブルと椅子があり、スローネさんが金の髪と白衣を揺らしながら準備をしていく。

クロスを引き、蓋が被せられたお皿、みずみずしいサラダ、黄金色のパン、飲み物用のガラス製のグラス、丸いオレンジを並べ、金属製の銀色のフォークとナイフ、スプーンなどが置かれた。

スローネさんはバスケットから水の入ったボトルを取り出すと、グラスに七分目ほど注いでくれる。

「あの……」

「ナプキンはここに。遠慮せず召し上がれ」

私は椅子に座って目の前の食事を眺め、困り果てる。

取りあえず、お皿の蓋を外してみた。

ほんわりと湯気がのぼる。

中に入ったのはとろりとした白の液体と、良い香りのする千切られたハーブ、そして。

「魚！」

白身魚の大ぶりな身が、ソースとハーブに半ば沈む形で中心にあった。

「えっと」

手に持った蓋を、蒸気の雫がクロスに垂れてしまわないように注意して置いて、並べ

られたフォーク類を見る。

「えーつと……」

頭をフル回転させる。

今まで見てきた映画の中から、テーブルマナーに関する部分を思い出していく。

（確か、一番外側から使っていくのだったけ？）

音を立ててはいけなくて、落としてしまっても自分で拾ってはいけなくて、あれ？

「魚は、先端に丸みがあるナイフで食べるというよ。」

うるさいことは言わないさ、肩の力を抜いて、自由にお食べ」

スローネさんがこちらを見ながらニコニコとしている。

私は、彼の言うとおり丸みのあるナイフと大きめのフォークを手を取った。

「いただきます……」

おとぎ話の中にしかないような、綺麗な料理を意を決して食べる事にする。

魚の身に刃を立てると、力む必要無くすつと切れた。

ソースとハーブを、ナイフを動かして魚の身にちよいちよいと乗せ、フォークで刺し

て慎重に口へ運ぶ。

（美味しい……）

魚は温かくてしつとりとして、もぐもぐ噛むと爽やかな香りが鼻を通り抜けていく。

真つ白なクリームソースの乳脂肪が舌を被い、その甘味にくらつとする。

こんなに鮮烈な味と香りのもの、食べたことがない。

気持ちを落ち着けたくて、サラダにフォークを伸ばす。

ペラペラの食用フィルムではなく、濃い緑や赤の葉が混ざり合った、厚みのある本物の野菜で作られたサラダ。

口に入れる。

酢と油から出来たドレッシングがかかっている、メインの魚料理に支配されていた口の中が一変した。

(わー……)

次にパンを。一口大に千切ろうとしたら、ぱりぱりで固くって、それなりの力を要求された。

横に陶器製の白いバター壺が置かれており、専用の小さなフォークですくって、断面にたっぷり塗る。

小麦の香ばしい味に、濃厚な香りのバターが絡まって、とても美味しい。噛みごたえがかなりあるパンだ。

(こんなに美味しいものが、まだ世界にあっただなんて！)

全てが芳醇で、味わい深くて。

用意された食事を、私は取り憑かれたかのように夢中になって食べた。

「食後の果物をどうぞ」

いつの間にかスローネさんが真隣に立っていて、オレンジの皮をナイフで剥いてくれていた。

筋や白い薄皮も取り去られた茜色の身が、果汁を滴らせながら真つ白な皿の上にある。

「ありがとうございます！」

デザート用であろう小さなフォークで突き刺して、ぱくぱくと食べてしまった。

「……………ごちそうさまでした」

食べ終わってから私は急に恥ずかしくなってしまった。

メインである魚料理は、千切ったパンでソースまで拭ってしまったし、何より。

(ご飯に夢中になって考えていかなかったけど、アスカにアーチャー、バーサーカーはどこにいるんだろう……………！)

仲間の事より食事で頭がいっぱいになっていたという事実が情けない。

(…………でもお腹空いてると何もかもうまく行かないし、これで良かったんだ、うん)

美味しいものを食べたのにネガティブになりそうだった心を、無理矢理に軌道修正した。

「食休みが終わったら村を案内するよ」

「村？」

「うん」

スローネさんは蔓を編んで作られたバスケットの中へ、食器をてきぱきと片づけていく。

「私の村、『実験都市711』をね」

その言い方に、私は嫌な予感を覚えた。

「貴方……」

椅子から立ち上がろうとした私を、スローネさんは片手でやんわりと制する。

「こんにちは、モモタ・トバルカイン。私は人類を応援する都市運営システム。」

個体名はフロンフ……じゃなくて、スローネ・エーテルウエルという」

冷や汗を流し始める私に対し、男はよくできた微笑を浮かべる。

「ツヴァイから悪評は聞いているよ。でも、安心して、君達を傷つけるつもりはないし、

私には出来ないから」

AIは小さな音を響かせながら青い瞳孔を広げ、驚きと恐怖で目を見開いている私の顔を映した。

第15話 有り得ざる魚  
終わり

## 第16話 幸せはどこにある？

「スローネンせんせい、こんにちはー！」

「はい、こんにちはー！」

バスケットを腕に抱えたAと私は、並んで歩いている。

地面は敷き詰められた石畳、道以外の場所には木々が生い茂り、風は爽やかだ。

白い石で出来た建物がぼつぼつとあり、目線を遠くへ向ければ、私が目を覚ました建物から見えた、エメラルドの海が広がっている。

昔見た、南イタリアを舞台にした明るい映画を思い出した。

「スローネン先生！ 朝取れたばかりのうまい貝がありますよ！ 後で酒と一緒に届けま

しょうか！」

「いやー、遠慮しておくよ」

……人間が、ごく当たり前のようだった。

子どもも大人も通りを歩いていて、通常の地下都市で支給される画一的なシンプルな服ではなく、素材も色も様々な、薄い布地の服を着ている。

だが、私が一番恐怖を覚えたのは。

「せんせー！」

「スローネ先生！」

上位存在として人間を庇護し、無慈悲に管理しているAIが、人のように振る舞い、人と交流していたことである。

「こつちの道に曲がるよ、トバルカイン」

彼の案内に従い、石畳の敷かれた薄暗い裏路地に入る。

周りに人の気配はない。私は息を深く吸ってから、彼に質問をぶつけた。

「彼らは、貴方が人ではないという事を知っているの？」

スローネは足を止めると、愛嬌ある丸眼鏡の向こう側から、青い瞳でこちらを見た。

「知らないよ。私が言っていないからね」

何も思っていないかのように軽く言い放つと、言葉が続ける。

「でも……真実知るのが人の幸せとは直結しないし」

そして、歩みを止めている私を無視してすたすた歩き出した。

「到着だ。」

……アドリアー！ 食べ終わったご飯の器を持ってきたよ！」

突き当たりの、海を背にした家のドアをスローネはノックする。



すらりとした体の、30代ほどの活発そうな赤い髪の女性が扉を開けて出てくると、バスケットを受け取った。

「あら、昼行灯なスローネ先生にしては素早いですこと」

「私だつて返すべき物があれば、ぼんやりせずに直ぐ行動するさ」

「でしたら、家の子が先生にあげちやつた絵本、探して持ってきてくださる？」

「えつと、どこにやつたっけかな……」

和やかな会話が繰り広げられている。

「先生の後ろにいるのが噂の女の子ね、へえ……」

アドリアと呼ばれた彼女が私を見つめる。

そして、赤いまつげをばしばし踊らせながら、チャーミングなウインクをしてくれた。

「貴女が食べたお昼ご飯ね、私が作ったのよ。美味しかった？」

「あつ、はい、とても……」

素敵な彼女の、裏の無きそんな言葉に、私は素直に反応してしまった。

「アドリア、数日の間、この子を頼めるかな」

「いいわよー」

AIスローネの頼み事にアドリアは快い返事をして、ずいっと家から進み出ると、私の手を取った。

「私アドリア……って、流石に分かるわよね。貴女のお名前は？」

「モモタ・トバルカインです……えっと、アドリアさん」

何も事情を知らない人に対して、私はとげとげしく振る舞えず、質問に答えてしまう。

「モモちゃんって呼ぶわね。中に入って、家族に紹介するから」

手を引かれて、ひんやりとした室内へ連れて行かれる。

「……仲間に再会したければ、良い子にしていって欲しいな、モモタ・トバルカイン」

スローネが私に言い残したそれは、人々の交流の際には見せない、AIらしい平たい声だった。

「旦那はまだ仕事……どーせ酒場でみんなと飲んでるんだろうけど」

歩いてきた道とは違い、室内は木製の床だった。

「私の子ども、3人いるから紹介するわね！」

——お客様だよー！ 全員集合ー！」

アドリアさんが大きな声で号令をかけると、小さな足音がいくつも駆け寄ってくる。

絨毯の敷かれたリビングに、年齢のバラバラな幼い子どもが集合した。

……なぜ、みんなポーター柄の半袖を着ているのだろう。

「上から順に自己紹介をお願いします」

母親の軽快な指示と共に、一番体が大きい赤髪の男の子が手を挙げる。

「おれフェデリコ！ 今年で7歳！」

次に赤い髪を横にまとめた女の子が声をあげる。

「あたしルーチエ、5さいなの」

お兄さんのフェデリコとお姉さんのルーチエが、よだれかけをつけた黒髪の男の子の手を持ち、万歳させる。

「こいつが一番下のジーン、まだ1歳なんだけ」

「お姉ちゃんのお名前は？」

立て続けの質問と、至近距離に立つ子ども達の存在に、私は面食らっていた。

子どもとこんなに直ぐ側で触れ合う経験など、ほとんどなかったからだ。

「モモちゃん……です」

制服のスカートを握りしめながら、私は名乗る。

「モモちゃんだー！」

「モモちゃん、かわいいー！」

「うー」

私を中心に、兄妹であるフェデリコとルーチエがぐるぐる回り始める。

その様子を見て、アドリアさんは満足そうに頷いた。

「仲良くなれそうで良かったわ！」

洗い物してくるから、少しの間ちび達の面倒見ていてねー！」

「あの！ その！ ええ……」

私が大いに混乱している間に、彼女は赤い髪を揺らしながら別室に移動してしまう。

「やっぱりボール遊びだよな！ な！」

「えほん！ えほんよんで！ モモチちゃん！」

「まっ！ まっ！」

2人が私の右と左の手を引っ張り、幼い赤ちゃん……ジーノが私を支えに掴まり立ちする。

(……みんな、無事でいますように)

私はどこかにいる仲間の安全を祈りながら、子ども達に揉まれていった。

「あらら……大丈夫？」

1時間後。

「ううう……」

私は満身創痍でリビングに転がっていた。

周りには、絨毯の上で寝息を立てている子ども達3人の姿。  
「遊び疲れて全員爆睡ね。」

でもちょうど良いわ、夕食まで寝かせておきましょう」

アドリアさんは散らばっている積み木やボールを籠に片付け、1人1人に薄い毛布をかけていく。

「モモちゃんもお昼寝したら？ 何かあったら起こしてあげるし」

「……はい」

お言葉に甘え、毛布を受け取った。

クツシヨンを枕にし、疲労感のある体を絨毯の上に横たえる。

ふと、自分の手の甲が目に入った。

「令呪……」

私は手の甲にある、1画減ったそれを見つめる。

マスターである証明、刻まれた印。

動くことのない時計の長針と短針が、皮膚の上には依然ある。

(あと2回しか使えない、判断ミスは出来ない)

そういえば、アスカの令呪はどこにあるのだろう。

(場所知らないなあ……)

と、思ってもみたり。

(みんな……バーサーカー、どうしてるかな……)

不安を感じつつも、私は眠気に勝てず、目を閉じた。

「……………きこえるんだ」

湿度の高い空気が、肌にまとわりつく。周りには濃い緑の木々と、地面を覆う草花。

私はいつの間にか見知らぬ場所にいた。

「なにがだい?」

つぎはぎだらけの粗末な薄い服に身を包んだ、妙齢の黒髪の女性が、心配そうに誰かへ声をかけた。

その相手は、草の間にしゃがみこみ、両耳を手で塞いでいる幼い少年。

着ている物は女性と同じく粗末なもの。

歳は5つ頃に見え、その顔立ちは。

(バーサーカー?!)

黒と見紛うばかりの深い緑の瞳は、戦っていない時の彼と同じ色だった。

顔半分には見慣れた木製の仮面はなく、あどけない大きな両の目をうろろうと動かし

ている。

彼の目線の通る道に私は立っていたが、彼が気にする素振りはなかった。瞳にも映っていない……今の私は透明人間のようなものだろうか。

「……赤ん坊の泣き声だよ、母さま」

絞り出された声は震え、怯えと不安が混ざっている。

「またかい、お前は本当に……」

女性は息を吐くと、呆れたように後頭部をかいた。

「そんなに気になるなら、またお寺様にお祈りにいくかね……」

地面に座り込みそうになっている幼い姿のパーサーカーを、母親である女性は抱え起こすと、手を取ってしゃんと立たせた。

「おれの頭の中でさ、赤ん坊がずーっと泣いてるんだ。ぎやあぎやあつて」

「はいはい、飯食って寝れば治るさ。」

それでも治らんきや……そうだねえ、薬師如来様にでもお祈りするかねえ」

母に手を握られている彼が立ち止まり、後ろを振り向いた。

その目には、私がかつきりと映っている。

「——聞こえないのかな、おれ以外には」

「うえええん、えーん……」

赤子の、泣き声が聞こえる。

「モモちゃん、ごはん！」

「ジーンも『モモちゃんおきて』っていつてるよ！」

遊び疲れて眠っていたはずの2人の子どもは、すっかり元気になって起き上がり、眠っていた私を揺さぶっていた。

「モモちゃん、お夕食の準備手伝ってー」

別の部屋からアドリアさんの明るい声が聞こえて、私は両手を床につけて体を起こした。

「ごっはん！ ごっはん！」

オレンジの灯りで照らされている食堂へ足を運ぶ。

7歳のフェデリコは、背伸びしてみんなの分のスプーンをテーブルに並べ、5歳の女の子のルーチェは、まだ赤ちゃんのジーンに、新しいよだれかけをつけてあげていた。

「モモちゃん、熱いから気をつけてねー」

アドリアさんがテーブルの真ん中に畳んだ布を置き、湯気を立てている大きなフライパンをその上にのせる。



「野菜入りの平たいオムレツよー。深く考えずに6等分に切っちゃって」

刃の尖っていないナイフを渡された。私にそう頼んだ彼女は、次の料理を取りにきつとキッチンへ戻ってしまおう。

「うまく……出来るかなあ……」

ぼやきながら、初めてやることだから慎重に、大きさに偏りがないよう切りわけていく。

断面をちらりと見ると、タマネギやパプリカ、ベーコンなどが細かく刻まれて、ぎつしりが入っているのが分かった。野菜と卵の甘い香りが食堂に漂う。

「スープですよ、熱いからお皿さわっちゃだめよー」

オムレツを初めとして、スープ、パンと、次々料理が出てきて、あつという間にテーブルの上は華やかになった。

「貴方、お帰りなさい」

食事に使うフォークやナイフを私が並べていると、黒い髪を薄い丸刈りにした、大柄の男性が食堂に入ってきた。

40代くらいか、白い半袖シャツと長ズボン、肌はよく焼けていて、黒い眼差しはたれ目だ。

「ただいま。ん？ アドリア、その子は……」

「スローネ先生に頼まれて預かっているモモちゃんよ。

モモちゃん！ この人は私の旦那さん、名前はバルド。一番下のちびのジーノに似てるでしょ？」

「お世話になっていますが、モモちゃんです……」

私は食事を並べていた手を一旦止めて、彼の方へ体を向け、ペこりと挨拶をした。

バルドは革製の鞆を壁にかけると、私を少しだけ見て、テーブル直ぐ横の椅子に座った。

「細かい話は後にして、ご飯にしよう。腹減った」

「父ちゃんおかえりー」

3人の子どもが笑い声を上げながら、父親の下へ集まってく。

その幸せな光景を、私はじっと眺めていた。

夕食はとても素晴らしいものだった。

ふわふわのパンに、野菜たっぷりのオムレツ、琥珀色の透き通ったスープ。

両親の間で交わされる穏やかな会話、子ども達の笑顔。

——私はまるで、幸福ばかりを映す、ファミリー映画の中に迷い込んでしまったように、自らの場違いさにもじもじと身じろぎをした。

「私はちび達をお風呂に入れてくるから、モモちゃんは休んでてー」

アドリアさんと私の2人で食卓の片付けを行った後、彼女はそう言うのと、着替えやタオルと共に浴室へ行ってしまった。

母親の周りを、歓声をあげて子ども達が走り回る。

「……」

それを見送り、無言で薄暗いリビングのソファアに座っていると、アドリアさんの夫、バルドさんが、大きな体の肩を左右に揺らしながら、のっしのっしと歩いてきた。

彼と、目があう。

「バルコニーで」

「えっ?」

「バルコニーで話さないか」

突然の提案に、私は答えに迷い、沈黙してしまった。

続くバルドさんの言葉。

「おまえさん……外の世界から、来たんだろう?」

正体を見抜かれた驚きで、心臓がどくんと跳ねる。

「……俺もそうなんだ、少し話をしよう」

落ち着いた声で話す彼に案内されて、リビングから廊下へ歩き、石造りのバルコニーに出た。

「その椅子に座るといい」

崖から突き出すようにあるその場所は、天高く登った月明かりに照らされ、白く輝いていた。

顔を上げれば、どこまでも続くような夜の海が見える。穏やかな波の打ち寄せる音が、世界を包んでいた。

バルドさんは海側に置いてある椅子にどっしりと腰掛けると、地平線の彼方へ視線を向けた。

私は、石のアーチの出入り口側にある椅子に座る。

「……美しい村だろう」

「はっ」

私は心からそう思いながら、頷いた。

村の建物の灯りが、1つ、また1つと消えて、住民達は眠りに落ちていく。

「俺もアドリアも、この都市の外から来たんだ」

突然語られた真実に、私は息をするのを忘れてしまいそうになった。

「理由はあのふざけた聖杯戦争さ……おまえさんも、そうじゃないのかね」

「……半分、そうです」

我ながら煮え切らない返事だった。

私の返事を聞き、バルドさんはその大きな体を身じろぎさせた。

「何でも叶う聖杯の奪い合い、AI同士の派閥争い、女神の望みだとか、なんとか。

そんなくだらない理由がスピーカーから流れた後、俺の故郷の地下都市は火の海になった。

俺は自由があると信じて、その時は名前も知らなかったアドリアの手を取って逃げた……。

しかし逃げた後が、本当に大変だったがね……」

家の中から、湯上がりではしゃぐ子ども達の声が聞こえる。

「外は人間の生きていけない世界じゃなかった、訳の分からない機械の怪物や、狂ったサーヴァントに襲われた……。

何人も喰われたよ、怪我と病気で死んだ奴だっていた。

水も食い物も次第に無くなって、避難民同士で争いが起きようとしていた。

……そんな時だったんだ、この都市が保護を持ちかけてくれたのは」

夜風に吹かれ、植えられた草花が揺れる。

「……は、特別な目的のために作られた『実験都市』……だそうだ。

海の生き物と、海辺での人間の生活や文化を保管するための場所。

それと、人間が他の星に向かう時まで住む箱庭で、地球と同じ様に生きていけるかどうかのデータ収集とも、AIは言っていたな。

AIに提出しなければいけない『生存権』……チケツトは存在しない。

ここで生活するということが、チケツトを得るための労働になっているからだ」

家の中から、アドリアが子どもと笑いあっている声が聞こえてきた。

「……再び地下へ、檻の中の実験動物になる結果であろうと、俺や避難民は喜んで都市の一員になった。中には……」

バルドのたれ目がちな黒い目が細められた。

「記憶を消して、新しい名前を貰い、この都市の住民になった者もいる。

……アドリアがそうだ。彼女は、地下都市で生きていた記憶も、残酷な外の世界で見てしまった事実も全部消して……『アドリア』という人間に生まれ変わった」

冷たい汗が自分の背筋を流れていくのが、はつきりと分かった。

「明日もう一度スローネが来る。おまえさんに決断を迫りにだ」

「決断……?」

その言葉を繰り返した私に対し、バルドが首を縦に深く振る。

「この都市の住人になるか、ならないか……」

「住民にならないと言ったら……？」

「……スローネと島の守り神が、処理をする」

私は緊張感から、親指を唇に当てて。彼の話は続く。

「島の守り神は少女のような姿だが、この上なく残酷だ。都市の管理者たるスローネでさえ、彼女に指図は出来ない」

「……外に出たければ、その2体を何とかするしかない」と

恐ろしい現実にも迷いを見せない私に、バルドは目を閉じると、天を仰いだ。

「モモ、俺にはおまえさんの気持ちがよく分からん……」

確かにここは地下で、海も空も月も、何もかも人工の造りもので、人間は生活を管理される実験動物だ。それでも……」

彼は椅子を揺らしながら、あご髭を撫でる。

「危険もない、明日に怯える必要もない……ここには、穏やかな幸せがある。

どうして、恐怖ばかりある外の世界に行きたいんだ」

私は椅子からゆっくり立ち上がりながら、覚悟の言葉を伝える。

「今この瞬間も苦しんでいる誰かと、世界を救うため、です。」

世界のことなんて、まだほとんど知らないけれど……だからこそ、外の世界を旅して、知らないものを知りたい、誰かに出会いたい」

彼は閉じていた目を開き、怯える人のように背を丸めると、美しい海を眺めながら言った。

「モモは強いんだな、逃げることしか選べなかった俺よりずっと。」

……俺は、俺と好きな人を救うだけで精一杯だったよ」

私はずっと座っていた椅子から立ち上がった。そして、月光降り注ぐバルコニーから立ち去る前に、彼の背に言葉を贈る。

「バルドさんも、強い人だと思います。」

だって、私に全部、辛いことや悲しいことを話してくれた……」

背は丸まったままで、返事はない。

遠い潮騒だけが、その場から立ち去る私に贈られた。

アドリアさんから貸していただいた、肌触りのよい寝間着に身を包み、ベッド代わりのソファアに寝転がりながら、手の甲の令呪を指でなぞる。

「バーサーカー」

私の武器であり、信頼できる家族のような存在である彼の事を考え、心を強く保つ。やってくる明日を覚悟しつつ、目を閉じた。



……肌にまとわりつく、この空気の湿度を私は知っている。

お昼寝の中で見た夢の中と同一のものだ。

辺りは白い朝靄に包まれていて、数m先も見えない。

足下に目線を落とすと、細かな砂利が敷かれているのが分かった。

(玉砂利って言うんだっけ、こういうの……)

風が頬を撫でると、私のピンクの毛先が揺れる。

それに気を取られていたら、いつの間にか前の視界が開け、朽ちた神社のようなものが姿を見せた。

「……」

勇気を出し、ローファアを履いている足を一步出す。

玉砂利を踏みながら進んで、崩れかけの階段の前に立つ。

靴を脱いで、置き、暗い色の木の上に、白の靴下で包まれた足を乗せた。

中にある板の間には小さな布団が敷いてあり……誰かが寝ている。

見てはいけないものを見ているという実感に、心臓が止まりそうになる。

「……………」

11歳程の子どもがそこにいたが、髪も目の色も判別できなかつた。

——全身が、包帯で被われていたからだ。

褐色の古い血も、鮮やかな新しい血も、まだら模様になって布に浮かんでいる。

「俺、『箱』なんだって」

その固まりが、少年の声で独り言を話し出す。

「だから、中に俺以外を詰めないといけななんだって」

綺麗な鳥の音が、朽ちた天井の上から聞こえた。

「それが俺の『運命』なんだって、俺をこうした奴らが言ってた」

少年は呟く。

「また頭の中で泣いてる……『いえにかえりたいって、母さまにあいたい』って」

風が森をざわざわと揺らす音が、私の心もざわつかせた。

「じゃあ、聞こえるこの声が、俺の『運命の人』？」

誰にもいないはずの空間に、少年は言葉を投げていく。

「……運命の人に会ったら、俺のぜんぶ、無くなっちゃうんだろうな」

私は胸に拳を当てながら、声をただ聞いている。

「心も魂も、全部抜かれて……」

響く鳥の声は2羽に増え、仲良くさえずり合っている。

「こわい……けど、運命の人に出会うって、そういうことだ」

布に包まれた丸い頭が、もぞもぞと動く。

「相手の辛いことも、悲しいことも、納めてあげられるように、空っぽの箱になること」  
覚悟にも達観にも見える態度。私は少年の額にそっと触れ、目を隠す包帯をずらした。

「……夜明けの空が見える。緋色で、桃色な」

緑の瞳に、私のピンクの髪と瞳が映っていた。瞳孔が開き、少しずつ光が入っていく。  
「明日が来るの、楽しみだな」

少年は乾いた血のついた顔のまま、微笑んだ。

「モモちゃん、かおこわいぜ」

「きょうはあそんでくれないの？」

「うあー」

窓から見える偽りの空は快晴だ。

制服に袖を通す。これは、私の戦衣装。

「モモちゃん、これ、私が若い時のだけど……どう？」

アドリアさんが持つてきてくれた服を、両手でそっと押し返す。

何も言えなかった。『ここに残りたい』という、未練が育ち初めていたからだ。

「モモちゃん、いっしょにごはんたべよ」

「どうしちゃったの？」

うろたえている子ども達とアドリアさんの向こう側に、バルドさんが立っているのが見えた。

「私、行つてきます」

声は震えていたけれど、バルドさんは後押しするように強く頷いてくれた。

「気をつけてな」

励ます言葉まで、私にくれた。

「はい」

木製の温かみのある扉を開け、幸せに満ちた世界に別れを告げる。

人の気配のない路上。朝の冷たい空気の中、スローネ・エーテルウエルが丸メガネを滑らかな布で磨きつつ、立っていた。

「おはよう、モモタ・トバルカイン。私と一緒に来てもらうよ」

バルドから聞いていた通りだ。

「美しき島の守り神の下へ」

ガラス越しに、青い瞳が私を見た。

第16話 幸せはどこにある？  
終わり

## 第17話 美しく残酷で

石畳の道をどンドン下っていく。

周りの木々は天を突くように伸び、地面は石畳から湿った土へと変化していく。

十数分くらい無言で、白衣を着ているA Iの背を追うと、急に空間が開けた。

磨き上げられた白い石で造られた神殿が、目の前に建っている。

「ギリシヤの……神殿？」

電子書籍や映画でのみ見たことあるような建物。

「いや、クレタ島様式だ」

私の発言を、スローネが素早く訂正した。

「間隔の大きく空けて建てられた柱、必要な場所以外は存在していない壁………実に開放的だろうか？」

クレタ人は争いを知らず、想定すらしなかつた民族とも言われている。最も、だから彼らは他の文明に攻め滅ぼされてしまったのだけど………」

急に専門的な用語を交えながら早口になる彼。

「スローネ、知識を自慢げにひけらかすのは、きみ達の悪癖だな」

そんな彼をいさめる言葉を放ちながら、真つ白な神殿から誰かが出てくる。

耳に届く声は甘く。

「ごめんよ、島の守り神」

日差しに照らされた体は幼い。

スローネが会釈をした彼女を、私はつぶさに観察する。

足は革で作られたヒールの高いサンダル。

淡いクリーム色の短いスカートで腰は隠され、体は同色の薄布だけで覆われていた。

浅く美しいへそは、恥じらいもなく露わにされている。

剥き出しの腕や手首にはくすんだ金属の輪がはめられ、首元にも管をぶら下げたよう

なネックレス。

頭には簡素なティアラのようなものが。髪の間から出ているぴんと尖った耳は、物語

の中の妖精みたい。

「スローネ、私は神じゃない。今の私は……」

けれど、目を引くのはその髪と瞳だ。

腰下まで伸ばされた癖のない毛の色はピンク。瞳の上半分は緋色、下半分は澄んだ水

色。

まるで朝焼けを閉じ込めたかのようだ。

「大魔女さ」

少女の形をした美しいサーヴァントは、肩を飾る大鷲のような羽をもさもさ動かし、私を神殿から見下ろしながらそう言った。

「宴の手伝いすらしない、きみの事は嫌いだね」

大魔女と自らを紹介した彼女は、私を気にもとめずスローネと会話を続ける。

「調理は医者の方分ではないよ」

「全ての領域は繋がっている。調理は薬学に通じ、薬学は調理へ繋がる」

「耳が痛い……」

「ふん、心にもない事を……」

彼女が半目で彼を睨む。すると、光彩は秋空を思わせる水色のみになった。

「さてと……おいで、私についてくるといい」

彼女に招かれる。スローネはうやうやしく頭を下げ、先に行くよう手を動かした。

（魔女……）

心臓の上に手を置きながら、人ならざる者の領域へ足を踏み入れる。

「こつちさ。料理のいい匂いがするだろうか？」

ひんやりとして薄暗い神殿の内側を見る。



通路の壁には漆喰が塗られ、その上に牡牛と女性が描かれていた。フレスコ画……と  
いうものだろうか。

床は磨かれた数種類の石で飾られ、華美過ぎず、落ち着いた雰囲気だ。

スローネの語った通り、開放的な造りで、あちこちから湿気の少ない爽やかな風が吹き抜けていく。

渴いた心地よい大気。それでも、私は前に行く大魔女の存在に、冷や汗を首筋に伝わせていた。

「可愛いピグレット達、お客人を迎えておくれ！」

彼女が甘い声を空間に投げると、柱や壁の影から数十頭の子豚が出てきた。

映像資料でしか知らない家畜の存在に、私はうろたえる。

ピグレットと呼ばれた足の短いころした豚達は、独特の鳴き声を上げながら私の足元にすり寄った。

「おいでおいで。宴を開こう、砂上に行く勇者もてなす魔女の宴さ！」

体色様々な豚と、愛らしい彼女に案内されながら、四角い大広間に私はたどり着く。

そこには、広間を横断するように非常識な大きさの大理石のテーブルがでんと置かれ、ご馳走が所狭しと並べられていた。

映画でしか見たこと無いような、器に飾り付け、料理の数々。

「どうだい？ 全て私のお手製さ！ どの料理も、君が体験したこと無いほど香り高く、味わい深いぞ！」

詰め物をした鳥の丸焼き、野菜のゼリー寄せ、古今東西の新鮮な果物の盛り合わせ。

「——その席に」

有無を言わせぬ力が込められた魔法の命令に、私は従うしかなかった。

私が来賓席に座ると、右斜め前の椅子に、可愛らしい黒豚がちよこんと座っていることに気がついた。

黒豚と向き合う席には誰も居らず、宝石を散りばめた輝く王冠が置かれている。

魔法の左横の席に後からやってきたスローネが座り、右側の席には……ガラクタのうなものが。

彼女が一番最後に、私の真正面、料理で隔たれた遠い席に座る。

なぜか、この場に相応しくない形の、手の平サイズの無骨な箱があった。

「では食事をしよう」

彼女の言葉と共に、目の前の料理を見る。

朝ご飯も食べていないし、こんなに美味しそうなのに、食欲は微塵も湧かなかった。

アドリアが作ってくれた、温かい料理には感じないものがある。

——恐怖だ。

「肉料理は嫌いかい？ 果物から食べたっていいんだよ？」

彼女の声が大広間に響く。地面には豚が満ち、ブヒブヒと騒ぎ立てた。

「AIの私見ですが、食べた方が幸せですよ、トバルカイン」

スローネはガラス製のグラスの足を持ち、琥珀色の液体をくゆらせている。

椅子に座らされている小さな黒豚が、丸い瞳を潤ませながらジタバタもがいていた。

「……いただきます」

バルトさんから聞いたお話を思い出す。

（「島の守り神は少女のような姿だが、この上なく残酷だ」）

食べてはいけないと、本能的に私は理解した。

なので、振りをする。

首を曲げて口元を隠し、食事を口に入れる寸前にテーブルの下へ落とす。

材料に対する申し訳なきが胸を苦しめたが、私に群がっている豚達が、嬉しそうにお

こぼれをあずかってくれた。

しかし、この演技にも限界はあるだろう。次の案を考えなければ。この都市を支配し

ている魔女から、はぐれた仲間達の情報を聞き出さねば。

（何か、ないか）

悟られぬように目を動かす。

……テールブルにのせられたガラクタと、無骨な箱が目についた。

箱と目線が会う。ガタンと、それは動いた。

「大魔女様、ずっと気になっていたのですが、それはなんででしょう？」

絞り出した私の声は震えていたが、彼女の機嫌を損ねないよう、精一杯へりくだる。

「『箱』の事が気になるかい？ 先日作ったばかりの礼装さ、ちよつと口が悪いけど……」

ねずみ色の箱を、彼女は細い人差し指で撫でる。

「それともこのガラクタかい？」

そう彼女が言った瞬間、スローネは人工的にしわを分布された顔をしかめた。

「元人形……スローネの前任者さ。」

私を召喚し、逆鱗に触れたあげく、命令しようとしたから……殺した」

まるで気に入らない服を返品したかのような気軽さで、彼女は殺害を語った。

「AIは直ぐネットへ逃げるから、精神も魂も入念に潰してやったさ、ふふっ……」

言葉を付け足すと、彼女は口元に手を寄せながら笑いをこぼす。

……何がおかしいのか、理解出来なかった。

「さて、きみが私の料理をこれ以上粗末にする前に、終わらせるか」

座っていた彼女の肩の羽が、本物の鷹のように広がると、小さな体が浮かび上がる。

あつという間に高い天井の上まで行くと、急降下し、私の真横へ降り立った。

彼女の人差し指と中指が私の右腕を這い、ナイフを握っている手を掴む。

「心を込めて作った料理を、食べる振りして捨てるなんて、ひどいことをするなあ……」

彼女の手を振りほどき、自分の手を脱出させようと試みるが、びくともしない

甘やかな吐息が掛かるほどの距離で、彼女は私の耳に言葉を流し込んでいく。

「砂の上を行く船ときみ達を見た時は、つまらない世界に面白い奴らがまだ残っていたと、少し興味をそそられたけど……残念だ」

彼女は空いている左手で、私の目の前に何かを置いた。湯気を立てる浅い皿の中身は、私の知らない料理。

「君より……アスカ君だっけ？　の方が面白かったぞ。」

恋に自覚ある乙女はいいね、それになかなか悲劇的な人生を送っているようだった」

皿の横に、小さなアクセサリーが置かれる。

……紫の石がついている。

「彼女の髪留めさ、私が預かっている」

全身の血の気が引くのが分かった、心が恐怖でさめざめと冷え切っていく。

「肉も果物も口を通らないときは、これを食べるに限る」

私の右腕を掴んだまま、彼女は話し続ける。

「これは麦粥……キユケオーンき、とろりとしていてうまいぞう！」

私は震える唇で、彼女に問いかけることにした。

「アスカを、どうしましたか……？」

「んー？」

彼女の声は穏やかだ。

「あそこにずっと座っているじゃないか、ほら」

右斜め前の椅子を見る。

小さな黒豚が四肢を暴れさせ、もがいている。魔女が何かをしたのか、不思議な力でふわふわ浮かび上がった。

「ピギー…ピギー…」

そのお腹に、赤い紋様があった。

サーヴァントのマスター、その証である、令呪。

翼広げて飛んでいる鳥にも、空を行く船のようにも見える形。

アスカの令呪を、私は初めて見た。

「——令呪を持って我がサーヴァントに命ず！ 来て！ バーサーカー！」

目の前の現実を理解が追いついた時、理性が悲鳴をあげた。

後先を考えない、恐怖に駆り立てられた命令が口から飛び出る。

「あつ、だめだぞ」

彼女が呟くと、手の甲で光り始めた令呪の輝きが消え失せた。

「私の神殿の中なんだ、勝手なことをされては困る」

令呪が、不発に終わった。

「これで、きみの足掻きはお仕舞いかい？」

少しだけつまらなさそうに言われる。

「……まだだ！」

私は掴まれている右手の上に自分の左手を重ね、魔女の手を剥がそうとするが、びくともしない。

彼女が左の人差し指を踊らせると、両腕が意に反して上げられ、体も宙に浮かぶ。

座っていた椅子が倒れた。上空から、スローネが興味なさそうに丸メガネを拭いている姿が見えた。

「きみは甘いキュケオンより、辛い現実がお好みようだ」

息が出来ない。

彼女は羽ばたくと、浮かぶ私に顔を寄せる。

2種類の色が宿る魔女の瞳へ、噛みつかんばかりに犬歯を剥き出しにして、にらんでいる私の顔が映っている。

「可哀想なきみ。

絶望という温かな粥を飲み、ピグレットにおなりよ。

この館に何百もいるような、苦しい目に遭って、自ら人間性を手放してしまった可愛い子豚達のように。

私が永遠に愛をささやき、甘い夢だけを見せてあげよう」

翼広げた魔女は、他者をとろけさせる声を出す。

「……返事を」

体が床に下ろされた。

立ち上がり、数回せき込んでから、私は上空の彼女に言い放った。

「ならない、絶望もしない。私は仲間を取り返しアスカを救う」

魔女はつまらなさそうに顔をしかめると、テーブルに置いてあるスプーンと皿を持った。

私は手の甲の令呪を横目でちらりと見る。変わらず2画、そこにある。

(逃げて、アーチャーかバーサーカーと合流し、立て直す……！)

そう考えて足を動かそうとしたが、全身が動かなくなっていた。

空気の固まりにすっぽり包まれ、拘束されているかのよう。

「この世界に召喚されて、実情を知り、私は少し考え方を変えたんだ。



……人間に優しくなろうってね！」

言葉を紡ぎながら彼女は匙にそれをすくう。湯気立ちのぼる、麦の粥を。

「たった一口さ、それで全ておしまい！ 楽しいだけの毎日が始まる！」

魔女は蠱惑的な笑みを浮かべながら、温かい麦粥がのった匙を、私の唇に近づける。

「——さあ、キュケオーンをお食べ？」

大理石のテーブルから箱が落ち、鐘をついたようなごーんとした音が響いた。

まるでそれを合図にするみたいに、天井から白い溶けたものが、ぽたぽた落ちてくる。

首は動かさないで視線のみを向けると、石の天井に、真っ赤に燃える丸い線が描かれている所だった。

まるで、スパイ映画の工作人員が、分厚い壁を焼き切るときみたいに。

「むっ……」

魔女は身を踊らせつつ後ろへ跳躍し、私から離れる。

匙を投げ捨て、鈍い銀の杖を一瞬にして手の内に出現させると、彼女は天井から飛び出してくるであろう存在に声をかけた。

「私に勝負を挑むのか。」

この魔女、キルケーの領域で。女神ヘカテの祭壇で」

丸く焼き切られた天井がテーブルの上に落ち、吹き飛ぶ食器や料理と共に、誰かが優

美に着地した。

青い飾りの施された白の外套、顔と全身を覆い隠す機械ブーツ。構える弓は青白く燃え、それによって天井を溶かし、切ったのだと言うことが分かった。

「雷神を身に宿す、英雄よ」

アスカのアーチャーが、全身から神気オーラを放ちながら、魔女と相對した。

第17話 美しく残酷で

終わり

## 第18話 だからこそその神なのか

天井を焼き切り、大理石のテーブルを踏みつけにして立っているアスカのアーチャーは、全身から稲妻をほとばしらせていた。

「流石は大英雄ー。あの結界を内側から破壊してくるとはー！」

褒めている魔女の話も聞かず、アーチャーは矢を放つ。

彼女は一步も動かず、周囲の地面から風を巻き起こし、攻撃を吹き飛ばした。

「きやつ……」

固められていた私の体が、余波を受けて押された。

バランスを崩して床にへたり込んでしまったが、両手や足が動かせるようになってる事に気がついた。

体の自由を取り戻せた、アーチャーが魔女を攻撃してくれたおかげだろうか。

「殺し合いをするのかい？ やだなあ」

初撃を完璧にいなした彼女は口をへの字にすると、我関せずを決め込んでいたAIに声をかける。

「援護」

そして、おもむろに地面に落ちていた『箱』を腕に抱えた。

「はい」

指示に従い、都市運営システムであるスローネが空間に指を躍らせ、何かを行う。

「この都市が所有する液体リソースの半分を、貴女に」

「えー……全部おくれよう」

「それは流石に流石に……」

彼は言われた事だけやると、白衣をはためかせながら部屋からそそくさと逃げ出した。

「使うべき時に散財出来ないから、きみ達AIはだめなんだぞ」

魔女がその背中に声をかけるが、すぐさま意識をアーチャーへ向き直した。

軽い調子で杖を振り光弾を撃つ。アーチャーは腕でそれを弾き飛ばすと、矢をつがえ、再び狙いを彼女へ向ける。

「よつと……」

ロケットランチャーもかくやの一撃を、魔女は羽で飛んで避けた。

矢が激突した壁が、木つ端微塵に粉碎される。テーブルに並べられていた豪華な食事は食器と共に吹っ飛び、ぐちゃぐちゃになってしまった。

豚達は恐慌状態に陥り、ピーピー鳴きながら逃げ惑う。

「アスカ！」

戦闘の影響が薄い内に、テーブルの上の髪飾りを回収し、まだふわふわ浮かべられていた彼女へ手を伸ばす。

ジャンプしてから両手で掴み、腕の中へ収めた。

「アスカ、アスカだよね?!」

黒色の子豚は、瞳を潤ませながら申し訳無さそうに頷いた。

「巻き込まれるといけないから、部屋の端に……!」

「ピー!」

そんなやり取りをしている私達の横で、サーヴァント同士の戦いは続いている。

「女神の魔術を見るがいい、そうれ!」

輝く光の固まりが浮かび、曲線を描きながらアーチャーへ襲いかかるが、彼は雷をほとばしらせてそれを消滅させた。

「わっ! びつくりだ!」

一息の跳躍で5 m以上の距離を詰め、魔女、キルケーへ肉薄する。

彼女の翼が広がり、その内側が複雑に輝いた。魔力の弾が発生し、連続でアーチャーの体を撃つが、外付けパーツを数個ばらばらと落としただけで、ダメージを与えられて

はいない。

「うへー……」

風で彼の体を押し、とにかく距離を取ろうとするが、その戦法はうまく行かない。アーチャーはとるに足らない攻撃は体で受け、矢を始めとする攻撃を続ける。

「あー！」

とうとう金の矢が杖を持っていた右腕に当たり、肘から下を消滅させた。飛んでいた彼女の手から落ちた杖が、からんころんと床に転がる。

「まじか、まじだ」

自体の深刻さとは裏腹に、キルケーの声は焦っていない。

なぜならば。

「けど大丈夫！ 大復活！」

何もなかったかのように、白く滑らかな腕が再生をしたからだ。杖も、意志があるかのように右手へ戻る。

「……」

アーチャーが深々と息を吸う音が聞こえた。

彼は混乱も見せず、落ち着いた動作で矢をつがえ……放つ。当たれば体が消し飛ぶ絶命の一撃が、連続して魔女へ迫る。

「ていー」

魔女は羽のような形の光を無数に飛ばし、一本の矢に大量に群がらせ、空中で消滅させる。

何の感情も表に出さず、ただひたすらに射撃を続けるアーチャー。

「すごいなー！ もっと見せておくれよー！」

直線上に放たれ、自らを追い立てていく矢を避けるため、大理石の美しい空間をキルケーは飛び回る。

金属のアクセサリーを鳴らし、羽を上空から散らばせる彼女の姿は、神に踊りを捧げる太古の巫女のようなだ。

「……………」

矢では決定打を与えられないと彼は判断したのか、両足で床を蹴り、空中へ戦いの場を移した。

踏み込みの衝撃で、大理石に丸いひびが入る。

「ふうふう」

微笑みを浮かべる魔女の顔に、雷撃と炎をまとった弓が真横から迫る。

彼女はくると宙返りをしてそれを避けた。金と青の残光が、見る者の瞳に焼き付く。

「じれつたいな！ 英雄！」

「……！」

彼は矢を至近距離でつがえ、撃つ。

届くかと思われた攻撃は、寸前で輝く壁のようなものにぶち当たって折れた。

「怪物はやりすぎだから、こつちに替えて……いでよー！」

地面すれすれまでキルケーは降下し、飛びながら杖先で床をリズムカルに叩く。

暗黒色の柱が何十本も次々生え、未だ空中にいるアーチャーへ殺到する。

彼は弓を前面に出し、炎を噴出させるが、勢いに押されていく。

「どうだいどうだい？ おしまいかい？」

試すような声で、天井と暗黒色の柱にサンドイツチされそうになっているアーチャーをなじる魔女。

「……まだだ！」

アーチャーが雷撃を体の表面から放つと、一瞬にして拘束が灰になる。

「貴様……！」

激情のこもった声で敵を呼びながら、彼はすぐさま矢を放つ。

次に天井を全力で蹴って、逃げようとする彼女に追いつく。靴裏から噴き出す青い炎が空間に線を描いた。



「足りないなあ！ アーチチャー、もつとだよ！」

雷、炎、矢、それら全てを織り交ぜて猛攻を続けても、キルケーへの決定打にならない。

ダメージを与えられたとしても、彼女は即座に回復する。

戦闘の衝撃でぐらぐら揺れる空間で、豚に変えられてしまった友達をお腹の下に庇いながら、攻略の手だてを考える。

回復、回復？ 待て、私はそれをよく知っていないか？

「箱」

呟いてから、彼女が左腕の中に抱えている礼装……『箱』を見る。

あの、不思議な夢の事を思い出した。

「9611！ あれを撃つて！」

彼へ声を飛ばすと、即座に対象めがけて矢を飛ばす。

「へえ……魔術も知らない小娘がやるじゃないか。でも無駄さ」

キルケーは何か言葉を喰い、何重もの光る壁を自分の前に発生させた。

障害物に当たった矢は真っ直ぐにへしやげ、金属の固まりとなっていく。

「どうする？ 世界を救うご一行さん！」

「——リミッターを、一段階解除」

アーチャーの獣を思わせる顎のギアが外れ、蒸気が漏れ出した。

「何かするのかい？ 無駄だつて……」

再び現れる壁。

アーチャーは助走をつけて牡鹿のように跳ねると、金の矢を降り注がせ、障壁を砕いた。

彼女の前に着地し、距離を詰めると、攻撃するのではなく……白と青の弓をそつと贈った。

「や……なんで突然情熱的になるんだ……」

乙女のように頬を染める魔女は、よほど驚いたのか箱を取り落としてしまう。

「ブロークン——」

アーチャーが呟いた言葉。私には分からないが、キルケーはその意味を理解したらしい。

「……バカバカバカバカバカ！ 宝具を爆発させるつもりか?!」

青ざめた顔で弓を捨てると、広げた羽で風に乗れ、後方へ下がる。

彼は爆発させるつもりなどなかったのか、前転しながら宝具をキャッチし、箱を矢で貫く。

矢尻が刺さり、箱を貫通し……数秒後、内側から膨らみ、爆発四散した。

「私のおニユーの礼装がー!」

土ぼこりが舞い、誰も見えなくなる。だが、湿った、ひたひたとした足音が聞こえた。風がどこからか吹き、粉塵が晴れる。

「……あれ? 礼装の中身どこ行つた?」

床に足をつけてきよとんとしている魔女の首に、誰かの腕が巻きついていた。

「……だ、鷹の魔女」

彼女の真後ろ。そこに、血濡れの足のみが立っていた。

「……」

B級スプラッタームービーのような光景を、私は緊張感を保つたまま見守る。

足首からじわじわと肉の繊維が集まり、足を作り胴体を形作り、その上に鎧が続いた。喉が出来上がり、下顎に筋肉が貼り付くと、それを動かし、彼は言った。

「サーヴァントを、加工、するな」

日本刀の光る刃がキルケーの頬に添えられた。

空っぽだった左の眼下に緑の瞳が収まって、顔の右半分が木の仮面で隠される。

「バーサーカー……」

放心状態で名を呟いた私を、彼はちらりと見てから、腕の中のキルケーへ視線を戻した。

「……」

無言を貫く魔女へ、アーチャーの矢が向けられる。

前方と後方をがっちり固められ、身動きの取れない彼女が次にどうするのか、はらはらした気持ちで見ていると。

「合格だ！ きみ達はこの魔女の試練を乗り越えた！ なんと素晴らしい勇者だろう！」

武器を向けられたまま、キルケーは満面の笑みで私達を褒めそやし始めた。

「アーチャー殿」

バーサーカーは淡々と声をかける。

「……拷問しないか？」

バーサーカーの提案に、アーチャーは矢をつがえたまま無反応を貫いた。

第18話 だからこそその神なのか

終わり

## 第6章 物語の始まりは運命の終わつた後に

### 第19話 理不尽に現れて

「女の子を簀巻きにしてから正座にさせて、あまつさえその上に石を乗せようとするだなんて……きみ達には温かな人間の心がないのかい!？」

「アーチャー殿は石を積むのお得意ですか？」

「……」

「機嫌が悪いのですね、じゃあ俺がやりまーす」

激闘のすえ、魔女を無力化する事に成功した2体のサーヴァント。

バーサーカー主体で簀巻きにして、今まさに拷問を始めようとしている。

アーチャーは都市運営システムであるスローネを捕まえてきて、同じく簀巻きにして地面へ転がしていた。

「1個目の石……これは『よくも俺の体をミンチにしてくれたな』罪です」

「わーんわーん! ピグレット達助けておくれよー!」

大粒の涙をぼろぼろ流し始めた彼女の命令に従う豚はいない。

みな、激しすぎる戦闘の余波でお腹を見せて気絶しているからだ。

「ほ、ほんとにそんな大きな石を乗せるのかい？ 冗談だろう?!」

涙目で彼の真意を伺うキルケー。バーサーカーはゆっくりと首を縦に動かした。

「……皆様、私から今回の件を弁明させていただきたいのですが、よろしいでしょうか」  
縄でぐるぐる巻きにされている自称医者 of AI が言う。

無言で右手に雷をためてばちばちさせ始めたアーチャーを、突っついて止めた存在が  
1 体。

「……」

黒い子豚に変えられてしまったアスカだ。

アーチャーがお腹の下から持ち上げ、椅子に座ると、膝の上に子豚状態のマスターを  
乗せた。

「どうぞ?」

機械パーツがいくつか剥がれた手をひらつかせ、スローネに発言権を渡す。

「恩情ありがとうございます。アーチャー961」

大魔女は期待を込めた眼差しで、同じく簀巻きの彼を見つめた。

「彼女の名は魔女キルケー。女神より教わった術を使う高位のキャスターです。キル  
ケーには、あなた方を殺す気はありませんでした。試練を与え、知恵と勇氣、力を計る

うとしたのです」

「ふうん」

バーサーカーは壊れかけの壁の一部を持ってきて、積み木みたいに上へと積み上げていく。

「乗り越えられなければ死を、乗り越えることが出来たのなら報酬を。」

「そうお考えになられていたのです」

「へえー」

石を両手に乗せ、バーサーカーはより重い方を選びたいのか比べている。

「……キルケーは、勇者の素質を見せたあなた方に、褒美を渡したいと思っているはず」

「うんうん！ 実はそうなんだよー」

全速力で相づちを打つ魔女へ、バーサーカーは冷たい視線を投げると、手に乗せていた石を鷲掴み、ばきばきと粉碎した。大きな固まりが床に落ちていく。

「まず黒いピグレットの治療だろ？ 美味しいご飯だろ？ 燃料だろ？ 温泉だろ？」

言葉が並ぶ度に、バーサーカーが放つイライラオーラが増していく。

幼い頃、映画を見ていた途中にマシントラブルがあり、復旧後、再びチケットを要求された……あの時より、怒っている。

「あのね、バーサーカー、アスカの治療は急務だし、何より……」

私は彼の身につけている布の一部を引っ張るが、不自然なほど無反応だ。まるで。

「バーサーカー04。きみの、治療だろ？」

具合が悪い人みたいな。

……バーサーカーの閉じていた口から、真つ黒な液体が伝い落ちた。

口から溢れ出したそれを、彼は慌てて両手で押さえ込もうとしたが、勢いは増すばかりで。

「……キルケー、お前が、俺を、加工するから」

途切れ途切れの言葉には、恨みがたつぶりこもっていた。

「遅かれ早かれそうになっていたと思うけどね……」。

機械化やらミックスやら神性注入やら、最近のサーヴアントは過搭載だよ、まったく「バーサーカーが心配なのか、膝の上でおろおろし始めたアスカを、アーチャーが手で支えた。」

「食事に治療！ 私からの褒美を、受け取ってくれるね？」

キルケーは笑みを顔に貼り付けながら私達に聞く。

私はバーサーカーを見た。

「ごめん、マスター、俺がへましたから……ごめん、本当にごめん……」



彼は緑の瞳で、申し訳無さそうに私を見ていた。

離れた手の内側には、コールドタールのような真つ黒な何かがべったりとついている。

「食事と治療を受けます。魔女キルケー」

私はみんなの意見を代表として伝える。

「嬉しいなあ……」

彼女が頷くと、その動作だけで拘束していた縄が解けた。

「修理に使う物資については気にしないでくれ！ 全部スローネのおごりだから」

すつくと立ち上がり、明るく言い放つ彼女の態度に、簧巻きになっているAIはそのアンドロイドボディをぐったりとうなだれた。

「ピグレット……は、みんな気絶してるから、オートマター！」

自由になった彼女が手を叩くと、別室から彫りの薄い顔の人形がぞろぞろ入ってくる。

「彼をあつちの部屋に。温泉からリソースパイプを伸ばしてきておくれ」

肯定の意味を含んでいるのであろう電子音が、何十回も響く。

「スローネ、全都市への液体リソース供給パイプから、私の都市へ必要な分だけをちよろまかしてきて。いつもみたいに」

「他の兄弟姉妹に殺される……いつか必ず殺される……」

簀巻きのまま彼は立ち上がり、ぴよんぴよん跳ねた。

「……いや、いやいや」

作業を開始した彼の声に、焦りが混じる。

「なんだ、どうした？」

「……外部偵察用のドローンから映像を送ります、守り神」

スローネがぐちゃぐちゃの大広間に、3Dのディスプレイを表示させた。

外の荒涼たる風景が映し出されるが、そこに異様なものがあつた。

「なんだあれ」

呆れたような声のキルケー。

空へ届かんばかりの砂塵の中に、100mを超える巨人のシルエツトが見えた。

それは体を折って地面へ頭を近づけ、何かを熱心に咀嚼している。

「うわー！ リソース泥棒！」

その巨人は地下に埋められているパイプを破壊し、淡く光る液体をがぶ飲みしていた。

都市とサーヴァントの生命線である、あの液体を。

「……すごい棚上げを見た」

黒い液体を口から滴らせながら、バーサーカーが半死半生でツツコミを入れた。

「やばいー やばいぞー」

わざわざ鷹の羽を動かして混乱する魔女を気にもとめず、スローネはドローンを操作し謎の巨人に迫る。

砂嵐のぎりぎり際まで近づき、カメラを動かした。

「機械……う？」

私はその荒い映像を見て、刑部姫と倒した、あの水瓶の姿をした不気味な存在を思い出した。

映っていたのは、やたらめつたら機械部品をかき集めて作られた人型。

熱い地面へつけられた両手の関節は砂が詰まり、ギチギチ音を立て、不快にキイキイと軋んでいる。

ケープルで伸縮を繰り返す顎が開き、コンテナのようなもので出来た歯が岩盤を砕いていた。

ビニールのシートが巻かれた紫の舌が砂と岩をよけ、ずるずると光る液体を啜る。人間でいう喉仏辺りに備え付けられた球体がくるくる回り、飲んだものを体内へ送っていた。

砂の狭間に見えたのはそこまで。

「スローネ、リソース不足で私の都市が死んでしまうまでの時間を教えろー」

「3日で海が死にます」

「それはまずい！ サンゴ礁が死滅すれば都市内の酸素が無くなる！」

「4日で酸欠、生物死亡……ゲームオーバーです。」

「はい教えましたー私の先祖がエネルギー管理計算ソフトであって良かったですねー」

「よくやったスローネ！ 3日しかないんだな！ 早速対策会議をしよう！」

突如現れた巨人を映し続ける立体ディスプレイから目を離し、私達の方へ振り向く魔法女。

「えっと、色々慌ただしかったです、まずは自己紹介からしたほうがいいかな……」

もじもじと何故か急に恥じらい始めた彼女に、不安げにアスカは「ピー……」と鳴いた。

「私の名は魔法女キルケー！ アイアイエー島の支配者にして女神ヘカテから教えを受けた大魔法女！ クラスはキャスター！ ……って、ここまではスローネが先走って話しちゃったんだった。」

番号札？ ああ、あれか、ムカつくから捨てた」

彼女の不思議な術によって、戦闘の爪痕が綺麗さっぱり拭われた大理石の大広間。

天井からは『都市7-11滅亡まであと3日!』とやけくそのようなポップ体で書かれた横断幕が下げられていた。

「その……フルーツバスケットとかハンカチ落としとか、レクリエーション……するかい?」

目を泳がせながら戸惑う声を出す魔女。彼女以外の全員がテーブル前の椅子に着席し、沈黙していた。

……本当に信じられない事に、大魔女の自己紹介タイムが始まっていた。

「ろくでもない軍議の予感がする……」

私の向かい側に座っているバーサーカーが元気なくつぶやいた。

オートマタに持ってきてもらった真鍮性の洗面器に、真っ黒な液体がなみなみ溜まっていた。

「バーサーカー04、それこぼすなよ、ヤバいから」

「そんなの俺が一番分かっているんですけどね……こぼっ……」

「トバルカインのバーサーカーは、休んでいた方がいいのでは……」

アーチャーの隣に座っていたアスカが心配そうにこちらを見ていた。

……子どもの黒豚に変えられていた彼女は、数分前にもくもくの煙に包まれて人の姿に戻りました、幸いなことにあっさり。

いつもより艶のない黒髪に、紫の石がついた髪飾りが光っている。

「対策、考えましよう」

アーチャーが微妙な空気漂う会議を真面目な主題に戻してくれた。

「よし！ 考えよう！」

キルケアの指示に従い、スローネが再び3Dのディスプレイを出現させる。

レーザーポイントを発生させる長細い装置が彼から手渡されると、魔女は薄い胸を自信満々に張りながら解説を始めた。

「ここが私達のいる都市711、巨人は……10km離れた地点のリソースパイプ近辺にとどまっている」

彼女は装置をテーブルに置いた。

「……その……どうすればいいと思う？」

頬を染めながら短すぎる状況説明を終えたキルケア。

バーサーカーがテーブルへ突っ伏したゴンという音が部屋に響いた。

「この魔女、自分の土俵以外で戦った事がないとみえる……」

私にしか聞こえないくらいの声量で、彼はつぶやいた。

「……ポインターを俺にください」

「いいとも！ えーい！」

バーサーカーへ渡すため、キルケーが滑らかな机の上に装置を滑らせる。

「あっ」

テーブルに乗せていた私の腕に当たり。

「きゃっ」

アスカの手で跳ね返り。

「びびっ」

スローネの胴体に当たり、勢いを増しながらくるくる回って。

「……」

アーチャーの濃い褐色の指に捕まえられた。

「バーサーカー」

射手の手により、装置が今度こそ求めた存在の元へと滑っていく。

「お手をわずらわせてしまい申し訳なく……」

元気なさそうな様子でそれをキャッチした。

「仕切ります……」

完全満身創痍な彼は、座ったまま、装置から出る赤いレーザーポイントで映像を指し

た。

「……都市711……離れて10km、つまりほぼ目と鼻の先に巨人。敵の大きさ10

0 m かもっと大きい……。

巨人が動き始めてもおしまいだし、動かないままりソースをずっと横取りされても終わり」

私は頷きながら彼の話を真剣に聞く。

「キルケー、スローネとかいう都市運営システム、巨人の正体に心当たりは？」

「動きに無駄が多いから、生まれついで巨人種でないと見えるが……」

魔女はそれ以上の答えに迷うと、傍らに座っているスローネへ視線を投げた。彼は画面に顔を向けながら答える。

「あれは機械化サーヴァントの一種です。」

あの規模ですと、上級都市が開発なり鹵獲なりしていた自立兵器かと」

「……兵器？」

アスカがスローネの言葉を繰り返した。

「ええ。反乱を企てる都市や団体がいれば、その芽を物理的に摘む……野蛮な考えを実行する道具です」

彼は丸めがねの位置を直した。

「確固たる目的……液体リソースの窃盗を咎める、などの元に派遣されてきたのであれば、もうこの都市は終わっている。」



なので、あれは野生化した兵器だと考えましょう」

魔女とは真逆で、落ち着き払った態度で彼は続ける。

「失敗作として廃棄されたのか、所属都市が滅亡でもしたのか、何かを探しているのか……。」

何らかの理由で、あの機械は外に放り出された」

画面の中の巨人はリソースをむさぼっている。

「AIでも機械でも、停止や消滅……つまり死は恐ろしいものです。

生きるためにリソースパイプを破壊し、それを円滑に行うため肥大化。

大きくなった分、増えた消費エネルギーを摂取するためパイプを破壊して、さらに巨

大に……。」

そんな、性質<sup>たち</sup>の悪い自己進化を続けた結果でしょう。あの規模になると天災だ」

スローネの説明が終わると、バーサーカーが暗い声を出した。

「……天災を殺さなきゃこっちが死ぬ。スローネ・エーテルウエル、この都市に対応できる兵器は？」

「上級都市以外は、兵器の製造も所有も禁止されています。

それよりなにより、姉上含む上層部に目を付けられないよう、こそこそやってきた都市なので……。」

「アーチャー殿を最大火力で運用できれば、撃破の可能性はあるが……」

バーサーカーが、座っている彼を暗い緑の眼差しで眺めた。

「リソースが無いものな、別案を考えよう」

アスカがほっとしたように息を吐くのが分かった。何か緊張でもしていたのだろうか？

「うーん」

私は、上から撮影した周辺の映像を、バーサーカーと共にじっくりと観察する。ふと気になるものがあった。

「バーサーカー、この巨人の後ろ、ちよつと離れた所にあるくぼみ……なんだろう……？」

小さな点にも見えるそれを、操作されたレーザーポイントの赤い光が指す。

「教えてくれないか？ 都市運営システム」

「はいはい」

バーサーカーの問いに、彼もこの都市を滅亡させたくないのか、素早く言葉が帰ってきた。

「放棄された都市です、別に珍しくもない」

真鍮の洗面器に、黒い液体が滴り落ちた。

「……この都市に、あのでかぶつに對抗できる兵器が存在する可能性は」

その質問に、スローネはややしわのある顔をゆがめる。

「違法に作っていたのならば。ですが、そんな事実は私の調べにはありません」

「この都市との距離は？」

「通常であれば数時間ですが、あの巨人を避け、ぐるりと回り込む形になりますと、片道で半日」

「ぎりぎりだな」

バーサーカーが仮面に覆われていない片目を閉じる。

「この都市を搜索し、對抗できる物がないか探す」

「バーサーカー、そんなもの存在しなかった場合は？」

アーチャーがヘッドギアの内側の瞳から、提案をした彼をじつと見た。

「……背後をとるように戦闘を仕掛け、パイプから離れさせる」

「あまりにも成功確率が低い」

ひりつき始めた空気の中、私とアスカはうろたえながら2体を見守る。

「その通り。だから、俺はみなに託したいんだ」

バーサーカーが先手をとるように、力の抜けた柔らかない笑みを浮かべた。

「勝手な……」

「無責任な事ばかりを言う俺を、嫌いになるのならお早めに」

不気味なほど穏やかな態度に、アーチャーは無言になって目線をそらした。

「……方針決まったかい？ 私は大魔女として何をすればいい？」

じつと話を聞いていたキルケーが声を出す。

「話すのしんどいから書く」

バーサーカーはスローネからタブレットを受け取り、素早く文章を入力した後、もう一度立っている彼へと渡した。

受け取ったキルケーは、2種類の色が塗られた瞳を動かし、内容を確認をする。

「……ふむふむ、出来る事と出来ない事があるな。」

出来ない事だけ話すぞ。

きみ達の船の燃料の事だが、満タンには出来ない、時間もリソースの余裕もないからだ。

後は……誰が探索に向かうか。都市のためにも、私とスローネはここから動けない  
彼女の言葉を聞くアスカは、覚悟の現れからか唇を固く結んでいる。

「アーチャー961とそのマスターは決定だな」

「2人じゃ手が足りないと思う、デザートランナーの運転手として私も行きます」

食い気味でそう主張する私を、魔女はじとりとした眼差しで見た。

「きみのサーヴァントは同行できない、守ってくれる存在はいないぞ」

私は迷うことなく頷く。

「それでも！……何もせずにいるのは嫌です」

言い切った私。それに対して、バーサーカーは嬉しそうにも心配そうにも見える、複雑な表情を浮かべていた。

「では、モモタ、アスカ、アーチャー961が向かうんだな」

「努めさせていただきますわ！」

「はい！」

「……あの」

私とアスカ以外の返事が返ってきた。

「だ、誰?！」

驚きつつも、聞こえてきた廊下の方へ、椅子をわずかに動かし体を向ける。

「ぼくも、ついて、いきます」

壁に体を半分隠しながら、誰かがこちらをひよっこり覗いていた。

身長は3m近く。

衣服は赤い腰布以外ほとんど身につけておらず、代わりといつては可哀想な、拘束具にも見える鈍色のトゲ付の腕輪や足輪、鎧が体を守っていた。

そこから伸びる鎖が、ふらふらと揺れている。

毛量のある白い髪、黒と赤の瞳、そして頭から生えている緩く湾曲している真っ赤な角。

人ならざる要素で構成された姿だというのに、その顔だけは人の幼子のようにあどけなかつた。

「アステリオス！」

魔女はよほどびびくりしたのか大きな声を出し、鷹の羽を動かしてパタパタと離席した。そして、『アステリオス』と呼んだ少年の側へ。

「なんだい？ 私心配で別邸から出て来ちやったのかい？」

「うん。それに、みんなのはなしも、きいてた」

「あちやー……」

身長差1m以上ある2人は会話し、キルケーはばつの悪そうな顔をした。

「ぼくも、ばーさーかーだ。」

それに、このとし、すき、だから、まもりたい、おてつだいたい」

彼は大きな背を丸めながら、たどたどしく言葉を紡ぐ。

「決意は固そうだ……モモタとアスカ、ちよつと廊下で話をしよう。」

アステリオスは空いている席に座って待っていておくれ」

「うん、おばさま」

「アステリオス、どうぞこちらへ」

アーチャーが立ち上がって席を引き、少年のような彼をいぎなう。

アステリオスはこくんと首を振り、椅子へ慎重に座った。

「こつちだ」

立った私とアスカは、キルケーの後をついて廊下へ出る。

しばらく歩くと、手近な小部屋に入るよう指示された。

全員が入ると、彼女はドアを閉め、並んで立っている私達に向き合った。

「きみ達は……『ミノタウロス』について知っているか」

伝えられた単語を頼りに、幼い頃視聴した映画を思い出す。

やけに彫りが深い顔立ちの英雄が、セツトで作られた迷宮に入り、人々を救う話だっ

た。打ち倒された怪物の名前は……『ミノタウロス』。

「ゼウス神の授けた牛と、ミノス王のお妃の間に生まれた存在……でしたよね」

アスカは小さな声で言う。

「ミノタウロスは怪物としての名前。

今ここにいる彼の真名は、『アステリオス』という。

きみ達の認識通り、人を喰らう怪物だった……でもそれは生前の話」

魔女は話を続ける。

「怪物の運命を背負わされた存在が、運命の終わった後……死んだ後までそれを貫く必要もないだろう」

キルケーの口から生み出された深い憂いは、瞳を細めている彼女自身の美しい顔を覆った。

「彼の事は、雷光を意味する『アステリオス』と呼んであげてほしい。

……叔母からのお願ひさ」

提案に、アスカと私は迷うことなく頷いた。

「雷光は好きですし、アステリオスは私の名前と響きが似ていて素敵です。

ね？ トバルカイン？」

「うん」

彼女は肩の力を抜き、息を吐いた。

「モモタ、きみをアステリオスの臨時マスターとして任命する！」

薄い手が私をびしりと指した。

「令呪とか用意出来れば良かったが……あー！ 時間がない！」

サーヴァント経験の浅いアステリオスに寄り添ってくれよな！ 良い子だから！」

かさかさとして近寄られ、ばしんばしんと背中を叩かれた。



「おばさま！ このひとが……」

ただっ広い対策会議室に戻ると、アステリオスがおろおろとしていた。

「シンプルにしんどい」

私のバーサーカーが机に突っ伏している。

「オートマタ、別室へ移送。黒いやばい液体は、私が後で浄化しておくから触らないよーに」

キルケーの短い指示に従い、部屋にぞろぞろ入ってきた人形達は、青い顔をしたバーサーカーを手際よく担架に載せた。

「大丈夫……?」

私はとても不調そうな彼を見る。

緑の眼差しが細められてから、私をはつきりと見た。

「これが別れの挨拶になるかもしれない。我がマスター、1つだけ言わせてくれ」  
「なに?」

いつになく真剣な空気を醸し出している彼に顔を寄せる。

「……アーチャー殿の登場、滅茶苦茶格好良かったな！

天井丸く切つてがしーん！ すびすび、どんどん！ ぼかーん！ って感じで！」

「刑部姫の口調が移っていませんか？ あと言うべき事それ？」  
「それ！」

脱力する私に、彼は至極真面目な顔を作った。

「……ふざけてごめんなマスター。」

きつとうまく行くのだから、そんな不安そうな顔するなよ。

「だめだったら一緒に死んでやるからさ」

そう言い残すと、不調な彼はがたごと運ばれていった。

第19話 理不尽に現れて

終わり

## 第20話 運命的に巡り会って

作戦決行まで3時間。

私は、落ち着かない気持ちのまま大理石の広間にいた。

「あの一！」

向かい合って座る私とバーサーカー……ことアステリオス。

「なに？ アステリオス」

私はただ彼の名前を呼ぶ。それだけで、彼は歯を見せてにかつと笑った。

「ももたが、ぼくのますたー！ ……なんてよべば、いい？」

「モモって呼んで！」

「わかった」

こくこくと首を振る彼の仕草に、アドリアさんの家で出会った3人の子どもを思い出してしまう。

それ程までに、彼から受ける印象は幼いものだった。

「ぼく、みんなをまもる。かいぶつだけど、がんばる」

あどけない顔を固くし、決意も固く表明している彼の緊張を解かしてあげたくて、軽くお話しをしてみる事にした。

「普段は何をしているの？」

彼が太い指同士をもじもじと合わせる。

「このしんでんとはちがう、べつていで、ひとりきりで、じつとしてる」

「誰かと遊んだりしないの？」

「きるけーおばさまは、『自由にしていいよ』っていつてるけど……」

彼はテーブルに置いてあつた果物籠から、ココナッツを手を取つた。

「ぼくはずつとへやにいる。だつてぼくは……」

その手の内ころんとのつていた可愛い南国の木の実は、彼が指を曲げ、手を閉じると、軋み、砕けて、白と茶色をぐちゃぐちゃに混ぜたものになつた。

……濁つた液が、テーブルへ滴り落ちる

「きをつけないと……みんなのこと、ころしてしまふ。だつて、かいぶつ、だから」

自らを「かいぶつ」と呼ぶ彼の表情は暗い。

「……己の存在を、それほどもでに否定しなくていいのでは」

重たい空気の私とアステリオスの横から、声をかけてくれたのは。

「アーチャー？」

アスカのサーヴアントである彼だった。

機械部品を取り去った剥き出しの手を胸に当て、アステリオスに話しかける。

私はその様子が珍しくて、静かに見守ってみることにした。

「貴方は召喚された……ただのアステリオスなのです。

卑下する事もなく、遠慮する事もなく、ありのまま振る舞えばいいのでは」

「でも、ちからのかげん、まちがえたら……」

彼は、ココナッツの液がぼたぼたと垂れ落ち続ける自分の両手を強い眼差しで睥んだ。

……大きな指は、震えている。

「私が側にいる限り、そんなことさせませんとも」

アーチャーが白いハンカチを取り出し、その手を取って、汗を拭い、綺麗に清めた。

「力の使い方を学びましょう、裏庭で手合わせを」

その言葉に、おずおずとアステリオスは頷いた。

「うん。れんしゆう、したい！ ありがとう、あーちゃー」

「裏庭はこちらでしたか？」

「ぼくしってる、こつちだ！」

身長差2倍近いサーヴアント達は連れ立って裏庭へと向かった。

それを、アスカは目を丸くして見つめていた。

腕の中には、デザートランナーから持ってきた保存食の銀色の包みがある。

「彼があんなに喋るだなんて珍しい……思うところがあるのでしょいか」

長いつきあいの彼女ですら驚いている。

「……雷光繋がりとか？」

「トバルカインは賢いですわね……」

アスカが渡してくれた栄養プロックを、お昼ご飯代わりにもさもさかじった。

「2時間半で出来たとも！ 大魔女だぞー！」

時間はあっという間に過ぎ、作戦が始まろうとしていた。

キルケーはにこにこ笑顔で手に何かを持っている。

「きみ達の服にこれをつけたまえ」

渡されたそれは、四角くカットされ磨かれたエメラルドの宝飾品だった。

親指ほどもある石は、金属の台座にきちつと納められ、静かに輝いている。

「条件を整えば起動し、きみ達を外の熱波や、宇宙線？ から、見えない魔力の帯で守つてくれる」

「すごいですわー！」

宝石が好きなのか目をキラキラさせているアスカ。

彼女は受け取ったそれを様々な角度から眺めた後、リボンにあしらうよう装着した。私も彼女に習って、胸元につける。

「あと、それ以外の特別な効果もある」

自慢気に胸を張る魔女。私は言葉の意味を問いかけてみる。

「といたしますと?」

「運転中に2人が気絶しないよう! 耐G性能を高めておいた!」

「……頑張ります」

責任感で潰れそうになりながらも、私は決意を強くした。

「船にも守りの呪いまじないを幾つかかけておいた、メンテナンスはスローネがぎつとした。準備完了! 搭乗したまえ!」

彼女からの激励を受けた後、一度、白い神殿から出る。

「こちらです」

白衣をしわくちやにしたスローネの後ろ姿を追い、裏庭に出ると、地下へ向かう大きな階段が出現していた。

「ここから外部へ出られるドッグに繋がっています、船はそこに」

「スローネ……さん、ありがとうございます」

彼は丸いメガネの奥の青い瞳を優しげに細める。

「みなさんがんばってくださいね、都市と心中したくないので、私」

言葉と共に見せた現金な態度に、私とアスカは同時にため息をついた。

「もも、まっていた」

「マスターアスカ、お待ちしていました」

長い連絡通路を踏破した後、目の前にずん……と現れた大切な白い船の前に、サーヴァントが待機してしてくれた。

「ぼく、からだ、おおきいから、れいたいかして、のる」

アステリオスの姿がじわじわと消えていく。

「私も同じく霊体化し、直ぐに攻撃行動へ移れるよう……上に乗ります」

アーチャーは私達にそう言った。

「上?」

理解できず、聞き返す。

「はい」

彼は指さす。

「デザートランナーの、上にです」



「アーチャー……それは……」

時速100km以上を出す車、その車体に掴まって移動をする。

自らのサーヴァントに降りかかる危険の事を思ったのか、アスカは腰を抜かしてしまつたが、私がつきに支え、転ぶことはなかつた。

『こちらキルケー！ 取り付けた通信用の礼装は……うまく起動しているみたいだな！』

車内に彼女の声が響く中、私はバーサーカーに教えられた通りにスイッチを順番に押し、走行システムを起動させる。

『全員乗つたな？ 私の都市の運命はきみ達に託したぞ！』

『大魔女キルケー！ あなたの都市ではないです！ いつでもいいのでこのスローネに返してくださいね！』

地面が回転し、車体のタイヤがレールに乗せられたのが衝撃で分かつた。

私は正しい姿勢でハンドルを握り、深呼吸する。

補佐のため運転席横に座っているアスカは、とても緊張しているように見えた。

『初速を稼ぐためレール上から高速で射出する。モモタ！ 気絶せずに踏ん張れよ！』

「はいー！」

ブレーキとアクセルの位置を確認し、私は前を向く。

シャツターがせり上がり、まぶしい荒野の景色が白飛んで見えた。

『よーしでは……発射！』

一瞬、宙に浮かんだのかと思うほどの速さ。

車体は太陽の下へ発射され、6輪タイヤが弾みながら砂を踏む。

「う……ぐっ！」

顔に圧を感じながら、私はハンドルを調整し、アクセルを踏む。

ただの人間である私にとって、時速200kmオーバーの世界は何もかも速すぎる。

運転システムの補助がなければ、あつという間に横転し、砂の海の藻屑となっていた

ことだろう。

(あれが、都市を危機に陥らせた巨人……)

遠目に見える強大な敵を睨みながら、その存在の後ろへぐるりと回るように迂回する。

肉眼だとさらに大きく思える。

巨人は顎と両手でざかざかと地面を掘り、リソースをもつと飲もうと背を丸め、頭を

地面へ突っ込んでいた。砂塵は、敵を覆うような砂嵐へと変化している。

(急がないと……！)

都市で出会った人々の顔が思い浮かぶ。

名前も知らない子ども、漁師さん。

手料理を振る舞ってくれたアドリアさん、その3人のお子さん、フェデリコ、ルーチエ、ジーノ。

辛い過去を話し、聞いた私が住民になる事を否定しても、それを応援してくれたバルトさん。

(確かに、あの場所は偽りの楽園なのかもしれない)

タイヤが横滑りしないよう、ハンドルの角度を調整する。

右足でアクセルを踏みながら、ナビゲーションされた目的地へ向かい爆走する。

(でも、そこを大切に思っ、生きている人がいるのなら、私は真偽なんてどうでもいい、助きたい)

これからの旅、どれほど美しい楽園を見せられたとしても、仮初めのそこに住む選択を、私は選ぶことはないだろう。

しかし、その場所が奪われ、人が害されそうになっているのならば、持てる力の限りを使って、私は守りたい。

……それが、様々な人やサーヴァントに出会った末の、私の結論だった。

全速力を出したおかげか、スローネの予測の時間よりも早く目的地へついた。

目の前に出現した窪み、放棄された地下都市。

フロントガラスから様子を見る。

どうやら、かなり保存状態は悪そうだ。

爆弾でも起動させたかのように、岩盤と天井が地下都市が剥き出しになるまでぶち抜かれていた。

差し込む日の光で、砂埃がきらきらと舞っていた。

「よつと……」

私はキルケーから貰った貝殻をポケットから出し、指で触れる。

かたかたと動くそれは、トランシーバーのような通信用の礼装らしい。

「ここから歩いた方がいいー?」

同じ物を持つている車体の上のアーチャーへ連絡を取る。

数秒後、貝殻の内側から彼の涼やかな声が帰ってきた。

『いえ、武器が見つかったっても燃料がなければ意味がない。』

燃料の転用と運搬のためにも、あそこの瓦礫に車体を乗せて、一段ずつ降りていきま

しよう』

彼が車体の前に白のマントをはためかせながら着地して、腕を伸ばして穴の中を指さす。

少し前進させると、確かに、瓦礫が階段状に積み上がっている箇所がフロントガラス越しにも見えた。

「でも……帰れなくなるよ?」

降りるのはいいが、上ることは出来なさそうだ。

不安なのはアスカも同じようで、はらはらしながら私とアーチャーの会話を聞いている。

『うまく行かなければ帰るも帰らないもありませんから、今は考えず』

……随分と身も蓋もない事を言われてしまい、私は彼の案を飲まざるを得なかった。

『次はそこ……お上手です、車輪を調整して、次は……』

先に行くアーチャーの指示で、瓦礫を踏みながら最下層まで降りていく。

大きな車体は天秤のようにふらふら揺れ、タイヤを微調整する度に冷や汗が垂れた。

それでも、私はハンドルを握り続ける。あの都市に住む素敵な人達を、助きたい一心で。

「……ついたあ」

安堵からか、汗が顎から膝に伝い落ち、ハンドルを握りしめていた手はふるふると震えた。

横で固唾を飲んで見守ってくれていたアスカが、そんな両手を包んでさすってくれる。

「ここからですわね、トバルカインは少し休んだ方が……」

「いや、人手はあった方がいいよ、私も行って武器探しをする」

両腕をそつと上に、軽いストレッチをしたら、疲労はましになった。

「アステリオス、いるー?」

「うん」

霊体となっている彼の声が直ぐ側から聞こえてきた。

「全員で降りて、探索するからついてきてね」

「わかつ、た」

アスカの助けを借りつつ、いつもよりきつく巻いていたシートベルトを外し、立ち上がる。

……体に余分な力を入れていたのか、足の感覚がふわふわして、全身がちがちになっていた

「トバルカイン、水を」

「ありがとう、アスカ」

手渡してくれた飲料水のボトルをひねりながら開け、冷えた水を緊張で乾いていた喉に流し込む。

キルケーから貰った、防護用と通信用の礼装を身につけているか確認して、一度外に降りてみた。

「めいきゆう、みたい、だ」

車外に出て、霊体化を解いたアステリオスが感想を言う。

ぞろぞろと後から出てきた私達も、たどり着いた最下層の様子を見る。

太陽は遠く、辺りは薄暗い。刑部姫と一緒にいた時にも使った懐中電灯で、暗がりを照らす。

「マスターアスカ、ここは居住区だったようです」

アーチャーが歩きながらこちらへやってきた。

「武器があるとしたら、どこでしょうか？」

「物資分配用の倉庫か、上流階級の居住区周辺に隠すか……地図が欲しいですね」

サーヴァントとその主の会話を聞きながら、アステリオスが白いふわふわの髪を揺らしながら頭をきよるきよる動かしている。

「もも、あれ、ちずだ」

彼が指を差した方を見ると、崩れた天井に埋もれるような形で、絵のようなものが隠れているのが見えた。

「でも、瓦礫を退かさないと、確認できない……」

「まかせて！」

アステリオスは嬉しそうな返事をしながら両腕を振り、ずんずん歩くと、大きな瓦礫を掴んでぐいっと持ち上げた。

「わあ……」

アスカが感嘆の声を漏らす。あつという間に邪魔な破片は除かれ、地図がその姿を現した。

「なるほど……少し進んだ場所に貨物リニアの路線がある、それをデザートランナーでたどれば移動は楽ですね」

都市の構造を素早く把握したアーチャーの指示に従い、私は再び運転席へ戻った。

『行き止まりですー』

貝殻からアスカの声が聞こえる。

ヘッドライトの先にあつたのは、煤けた樹脂製の壁だ。



『……ちがう、おくに、へやがある』

アステリオスの声が続いた。ライトの光の中心に彼は足を踏み出し、照らされている壁をぺたぺた触った。

『もも、こわして、いい?』

衝撃による崩落の危険性が頭をよぎる。

ダム建設の映画で、発破作業中に生き埋めになってしまった人の姿が、脳裏に浮かび上がった。

『マスタートバルカイン、私が彼を補佐します』

答えに悩んでいた私の元に、アーチャーの声が届いた。

「うん、みんな、お願い」

『りようかい、もも!』

『では……』

アーチャーは壁を拳で軽く叩き、アステリオスに衝撃を加える場所の指示を出す。

よくそれを確認してから頷いた彼は、犍猛さを感じさせるうなり声をあげながら、拳で壁を何回も殴りつけた。

車も私も、間近にいるアスカもぐらぐら揺れる。

『こわれた!』

達成感に満ちた声が貝殻を通って聞こえてきた。

樹脂の壁は剥がれ落ち、その奥にあった金属製の扉もぼこぼこにへしやげ、地面に落ちている。

『もも、降りてきてー!』

これ以上はデザートランナーでは進めない。私はアステリオスが言うように運転席を離れた。

「……………うわ」

隠されていた通路の先、懐中電灯で照らされたその部屋の中身に、私は引いていた。

大きさ、形の様々な銃、その弾が無造作に詰められた箱。

分厚い刃のナイフや、火薬を必要としない遠距離武器としてのクロスボウ。

まるで、武器の見本市のようだったからだ。

「怖い、ですね、アーチャー」

アスカは部屋の中を怖々と観察している。

「ぼくも、やっぱりこわい」

アステリオスは所狭しと並べられた武器を踏まないように慎重に歩いていた。

「……………ん?」

私は床に異質な物を見つけた。子どもの頭くらいの大きさの、黒い箱。他の武器とは違い、一目で用途の分からない物体だ。貝殻を起動させ、この場にはいない存在へと声を送る。

『……なん……です……』

「スローネー！ 黒い箱見つけたんだけど！ 聞こえるー?!」

人間なんかよりよほど詳しくそうなAIに、謎の箱について訪ねてみた。

『それ……AIの……ブラックボックス……です！ 珍しい……是非に持って帰ってきてください！』

「はーいー！」

通信を切る。お願いされた通りに持ち帰ろうとするが、ずっしりと想像以上に重かった。

「……アステリオス、頼みたいことがあるんだけど」

「うん、なんでも、いいよ」

力持ちの彼に頼み、デザートランナーに運んでもらうことにした。

……『ブラックボックス』、有益な物だといいいのだが。

「きやー！」

アスカの悲鳴だ！ 私は懐中電灯を抱えて部屋の奥へ走る。

「どうしたの？」

「あれ……あれは！」

彼女があわあわしながら見ている視線の先。

「これは……」

私は目をそらせなくなった。

「ありましたね。銃やクロスボウなどより、よほど破壊力のある兵器がアーチャーがその物体に手で触れながら言う。

全長は約5 m。

ひびの入った天井から差した光が、金属で出来た体を照らしている。

人と同じ造りをしている手、足、後部から伸びるパーツ。

「巨大人型ロボット……」

夢の塊のような兵器が3機、私達の前に立っていた。

20話 運命的に巡り会って

終わり

## 第21話 悲劇流れて

——快晴の砂漠に。

——巨人が立っている。

『マスターバルカイン、マスターアスカ、準備はいいですか』

「ぼっちり」

砂上に白の車。

『燃料を転用したので、デザートランナーへは最低限しか液体リソースを残せませんでした。』

長くは動かせないでしょう、短期決戦に努めます』

『ぼくも、じゅんびできた』

車の内と外で、通信を介して声を掛け合うのは、敵に対してあまりにも小さな存在である私達。

『……作戦名を決めてください』

今はここにいないアーチャーの声に、主たるアスカは瞳を閉じながら考え込み、やが

て唇と共に開いた。

「作戦名、『ダビデ王とゴリアテ』、開始を宣言します」

「……カツコイイネ」

「トバルカイン！ そのにやついた笑みはあなたのバーサーカーとそっくりでしてよ！」

軽口をたたき合った後、エンジンを始動させる。

『了解しました、マスターアスカ、作戦を開始します』

貝殻越しに駆動音が聞こえる。

作戦を円滑に進めるため、車体の後方カメラの映像をフロントガラスの一部分に映した。

『……斜線上に、出ませんよう』

青空を背に立っていたのは、上半身は人型の、体高の低い黒の4脚ロボット。

細かく脚部を動かし、平たい造りの足裏をアメンボのように荒野へ広げて、体制を整える。

後部の2脚から金属製のアンカーが飛び出て、砂と岩を撒き散らしながら地面に深く突き刺さった。機体が反動に負けないよう固定される。

『装備展開』

パイロットであるアーチャーの声が淡々と続く。

ロボットの上半身の両腕が肩から回りながら変形、合体し、長い砲身となった。

空いた肩の内側から出た小さな予備アームによって、頭の上にそれは備え付けられると、太陽の光を反射し、一角獣のように雄々しい姿を見せる。

『燃料変換完了……チャージ開始』

砲身が合体している胴体が身じろぎし、斜角を調整する。

空気が焦げる音が、通信越しにも伝わってきた。

目標は——砂塵を巻き上げている巨人。

『発射と同時にデザートランナーはフルアクセルで走行開始、私も囷になります』

「分かっている、へましない！」

口を固く閉じ、舌を噛まないように。

『1、2、3……発射！』

砲身……巨大レールガンから放たれた金のプラズマが青空を真っ直ぐに飛んでいく。

巨人の体を隠していた砂嵐を一瞬にして全て吹き飛ばし、胴体辺りに着弾、そのまま金属の肉をえぐり取った。

「……発進！」

アクセルをベタ踏みし、時速100kmオーバーでデザートランナーを走らせる。

「ミヨ、オ……ブモオオオオオン!!!」

巨人はいななき、その声が空間をびりびりと揺らした。

「トバルカイン、あれは……!」

「……砂嵐のせいで、正しい大きさが計れなかったんだ」

青い空を恨むように鳴き続けるその体の大きさは、300m以上ある。

(デザートランナーが3m、アーチャーが乗っているロボが5mだから……100から60倍以上の差か!)

巨人の胴体部の端に、レールガンの攻撃が貫通した穴が空いていた。

「ブモオ! オオオオオン!」

いらだつように足踏みをするだけで、地面が波打った。

タイヤがうごめく砂に捕らわれないよう、わざと滑らせ、サーフィンのように波に乗る。

「トバルカイン! プロスタントマンもびつくりな……!」

「ごめん! ほとんどAIにやってもらってる!」

私にはそんな腕前はない。運転補助システムが操作ミスを防ぎ、ハンドルの動きをカバーしてくれているのだ。

「ううう……!」



ハンドルにしがみついている私は必死だ。

『トバルカイン！ 私の方へ！』

アーチャーの声に、ガラスの向こう側の景色を見る。

使い捨てのレールガンを地面へ捨て、4脚のふくらはぎ部分に備えられたスラストから青白い光を噴射しながら、地面すれすれを高速飛行している彼の機体が目に入った。

「了解！」

システムの補助を受けながら、車を寄せる。

巨人は丸いガスタンクを改造したかのような頭を揺らし、攻撃を加えた私達を索敵していた。

「飛び移って！」

私は待機している彼に呼びかけた。

『——うん！』

返事をしたのはアステリオス。

彼はデザートランナーの上に乗っていたが、空気抵抗を無くすために霊体化していたのだ。

姿を現した彼の体の影が地面に落ち、その後アーチャーの機体の上へと移動した。

『作戦通りに！』

『わかつてる！ あーちゃー！』

スラストアークがぐるりと反転し、前方に青白い光が吹き出され、急停止。腕の無い胴体がぐわんと揺れる。

その後、噴出口は角度を変えて真下へ向き、黒い小型の機体はアステリオスに乗せて、ロケットのように徐々に加速しながら上昇していく。

「……」

それを見送る暇もない。

巨人のじだんだで壊れた地面の塊が、空から車体に降り注ぐ。

一瞬にして行われた危機予測計算に基づき、車は落ちてくる石の間を自動で走り抜けていく。

『揺れます！ しっかりとしがみついています！』

耳に入ってくるのは、同じく攻撃を避けているアークチャーの声。

激しい動きを繰り返している巨人に接近する小さな機体が、フロントガラス越しにちらりと見えた。

敵は目の前を飛ぶ鬱陶しい存在に気がついたのか、ワイヤーやクレーンなどで形作られた粗雑な両腕を乱暴に振った。

『やっ！』

機体を操作するアーチャーは、その攻撃をスラスターを一時停止させた降下により避けて、再び浮上。

巨人の腕の上空を取ると、そこに着陸し、4脚の後ろ2つにあるアンカーを発射、機体をしつかりと食い込ませた。

『ありがとう、あーちやー！』

張り付いた機体からアステリオスは飛び降り、凹凸のある金属の腕を四足歩行で獣のように駆けていく。

『武運を！』

短く幸運を祈ったアーチャーが、前方から開くコクピットから身を乗り出し、機体を捨てる。

巨人の腕を走り抜け、迷うことなく飛び降りると、空中で姿勢を正し、足の機械パーツから噴き出す青い炎の魔力放出で空を飛ぶ。

目指す物は――。

『作戦通り、機体を乗り換えます！』

隠し部屋から引き上げてきた、ロボットの2機目。

先程まで乗っていた4脚の変わり種とは違い、がっしりとした胴体と2脚を合わせ持

つ機体だ。

アーチャーはその黒い体の上に外套と髪をなびかせながら着地すると、コクピットを外側から力任せに開けて内部に乗り込む。

『実弾兵器で巨人の体を削ります！』

「私達はこのまま闘を続行だよね！ 分かってる！」

私は上部のカメラから、巨人の体に飛び乗ったアステリオスの様子をうかがう。

再び舞い始めた砂塵の向こう側に、ガラクタを集めて作ったような胴体を必死にクライミングしている彼の姿が霞み見える。

『弾を全て撃ち尽くした後、ロケットランチャーに換装しますので……！』

「巻き込まれないようにする！」

石の雨から逃れられたデザートランナーを、私は再び急加速させる。タイヤが砂をこすり、鋭い音を立てた。

巨人は頭をくるくる回して、私とアーチャーの機体、どちらを先に攻撃すべきか迷っていた。

『脆い箇所から……！』

彼はサブマシンガンをロボットの両手に持つ。

旧時代の戦車を数秒にして鉄クズに出来る大きさの口径の弾が、高速移動しながら放

たれ、曲線を描きながら巨人の右肩を狙う。

ビニール片が舞い、柔らかいチューブがミジミジと吹き飛んでいくが、その腕は落ちない。

『ちぎ、れろ!』

とどめを刺したのは、巨人の上を登っていたアステリオスだった。

彼は肩関節の間に体を滑り込ませると、怪力に任せ、寄せ集めの部品を内から粉碎していく。

「ミヤギブオオオオン!!!」

不可解な鳴き声。支えきれなくなった腕が自重で落ち、砂と振動を辺りに撒き散らす。

「ミゾ、ゾゾゾ……」

敵の頭がくるくる回転を繰り返す。

サブマシンガンを撃ち尽くしたアーチャーは、前方へ移動しながら銃を捨てた。

固い地面の上をバウンドしながら、役目を終えた兵器は後方へ転がっていく。

腰のブースターを前へ噴射、攻撃を行うために急停止し、背負っていたロケットランチャーを落ち着いた動作で取った。

両手で構え、頭部目掛け発射。

白煙を噴き出しながら飛んでいくそれは、高速回転する頭に激突、赤と黒の煙を生み出し、破片がばらばらと落ちてくる。

「ザザ、ゾ？ ブオ……」

ぐわんぐわんと全身が揺れ、そのせいでまた大きな砂埃が舞った。

時速100km越えの速度を保ちながら、視界を遮るそれから離れる。

青い空と明るい荒野の境界線を視界に捉えつつ、ハンドルを傾けて……。

そののんびり考えていた私の前に、巨人の腕が落ちた。

「……ブレーキ……」

反応が遅れた私の代わりに、助手席のアスカが急ブレーキを踏む。

どうやったのかは分からないが、巨人は自分の左肩を捨てたのだ、信じられないことに。

「つ、いったん距離を……」

ハンドルの角度を調整し、斜め方向へ行こうとするが、速度が足りず、逃げられない。腕が落ち、それから横に倒れた衝撃で、砂が波のようにたわみ、車体を半分埋めた。

（まずい、囷が足をとられたら……）

ギアをかえてバックを試みるが、砂の内で車輪はから回るばかり。

「トバルカイン、前……！」

目線を手元から前方へ移す。

——巨人のぼつかりと空いた右肩から、拳とは呼べない、太いパイルのような物が、切っ先をこちらに向けていた。

(……私、へました、アスカが死んじやう)

汗が額から流れて、膝の上に落ちた。

『ころ、させ、ないいい!!』

少年の声が通信貝殻を震わせた。

「アステリオス！」

突き出された巨大な杭を、アステリオスは先端を両腕で抱え込むようにして受け止めていた。

致命傷は負っていない、だが、みしみしと嫌な音が聞こえてくる。

砂に埋まりかけのフロントガラスから見える彼、鬼気迫る顔で叫ぶ。

『もも、あすか、にげて……にげろ!』

「……っ」

その気持ちに答えないのに、タイヤはから回るばかり。

『マスター!』

横からの強い衝撃で車体が飛んだ。

アーチャーの機体が体当たりをして、砂からデザートランナーを救い出してくれたという事が分かった。

(作戦と体制を、立て直さないと……！)

焦りながらもハンドルを動かし、蛇行しつつひたすらバック。

『うわー！』

アステリオスがはるか後方へ飛ばされるが、受け身をとれたようで、直ぐに立ち上がった。

……問題は次だった。

攻撃を止めていたアステリオスをふりほどいた後のパイルが、アーチャーの乗っている黒い2本足の機体を上から叩き潰したからだ。

液体燃料と機体を構成するパーツが、一緒くたになって飛び散る。

「っ」

目の前が絶望で赤く染まりそうになる。

隣にいるアスカが、息を吸う風のような音が聞こえた。

第21話 悲劇流れて

終わり



## 第22話 最後には笑顔で終わるもの

「——来て！ アーチャー!!!」

アスカは迷うことなく令呪を使用する。祈りにも似た短い言葉。

「わっ……」

運転室の中で、突如姿を現した誰かが、ころりと前転する。

「驚いた、令呪による転移か……」

驚いている様子の馴染みある声。紛れもなくアスカのアーチャーだった。装備衣服を含め、傷は無い。

「ごめんなさいアーチャー！ 貴重な令呪を……」

シートベルトを外し、席から立とうとする彼女を、彼は手のひらを向けて押し止める。「いえ、マスターアスカ、判断は適切でした。感謝を」

落ち着かない様子で衣服を整えてから、アーチャーは立ち上がる。

「気になさらないでください、アスカは私の命を救ってくれたのですから」

「……はい」

2人の会話を耳で聞き、アスカが席に座るのを見届けてから、砂から自由になったデザートランナーを動かす。スピードは60kmほど。

徐々に加速しながら、私は命を救ってくれたもう1体のサーヴアントへ通信をする。

「アステリオス！ 怪我はない?!」

『ぼくは、なんともない！ あーちやーが……』

少年の声が返ってくる。

「アーチャーも無事！」

『よかった、ほんとうに』

動き出した車の窓から、砂の上を四足で駆けているアステリオスが見えた。

『でも、さくせんが……』

彼の心配そうな口振りに、私の心は暗くなる。

デザートランナーとアーチャーが囷になりながら、敵の巨人の体に飛び移ったアステリオスに、少しずつ機械部品を破壊してもらおうという作戦は、もう続行出来ない。

アステリオスは地面に落とされ、ロボットは2機も壊されてしまった。

「……遠方に待機させてあった3つ目の機体を使います」

ぐるぐる悩んでいた私に、アーチャーがアスカの座席の背もたれに手をかけながら言った。

「でも……あれは近接戦専用機だって」

「このままでは負けます。使えるものは全てを使うしかないでしょう」

答えが返せない私を置いて、アスカは座ったまま貝殻を取り出した。

「予備の通信機器です、どうぞ、アーチャー」

「ありがとう、マスターアスカ」

機体と一緒に失ってしまったそれを素手で受け取ると、アーチャーは運転室から出て行った。

勝利を、得るために。

「……勝てますわ。だって、みんながこんなにも頑張っているのですもの」

私の顔に不安でも現れていたのだろうか、アスカが励ましてくれる。

「うん………」

弱気になりそうな心を切り替えて、私は車を走らせた。

『もも！ てきのすがた、かわっていく！』

アステリオスからの通信で、車体横のカメラ映像をフロントガラスの半分に映す。

巨人のガスタンクのような丸い首がごろりと落ち、空っぽになった両肩からパイルが伸びていくところだった。

(……まるで、角のよう)

胴体が内側から壊れて、落ちた大きな部品が高い砂柱を立てた。

蹄のついた前足がぬつと砂埃の中から出てきて、地面を踏み、ケーブルで出来たしなやかな鋼鉄の尾が揺れる。

体から出てきた顔……本来の頭部の形は、逆三角形。

「トバルカイン！ 天候が……」

アスカの鋭い声。

突然、空が暗雲に包まれる。まるで、巨人が呼び寄せたかのように。

『こちらキルケー！ ドローンからの映像で巨人の全身を確認した！』

都市7-11に近づいているからか、鮮明な魔女の声が貝殻から入ってきた。

『嘘だろ……あの姿は……！』

驚愕する彼女の言葉の上から、敵の雄叫びが重なる。

「ブモモオオオオン!!!」

頭から真横に伸びた角、砂の上に立つ4本の足、臀部を自ら叩く長い尾。

300mからいささか小さくなったが、それでも依然として200m近くある。

スローネの諦めすら感じる声が運転室に届く。

『牛、ですわね。』

伝説によれば、大神ゼウスはある乙女を誘惑する際、牡牛に変身したとか』

AIの短くも的確な補足が終わる。

青い空は失われて、分厚い暗雲が天を低くした。無数の稲光が蛇のようにうねりながら生まれ、怪物の腹の音のようなものを空間に響かせる。

キルケーの焦り声が再び通信に入る。

『なんだこの魔力量……まさか本当にゼウスの写し身だともいうのか!』

巨人から牡牛に変形した敵は、独特の鳴き声を発しながら頭部を円を描くように回す。

「ミヤガモオオオ!!!」

雲が集まり、その中を走る雷も集合合体をしていく。

アーチャーが放ったレールガンと同じだ、攻撃の準備をしているのだ。

『雷光は神の怒り! お前達に直撃すれば生きていた痕跡すら残らないぞ! 奴の攻撃

が降り注ぐ前に倒せなければ全滅だ!』

「そう……言われても……!」

転がってきた瓦礫を斜め走行で避けながら、私は唇を噛む。

こちらの攻撃は効果がなかった、ロボットはあと1体、逆転の切り札もない。

(バーサーカー04、私がかつと強くて、頭が良かったら……)

心の中で泣き言を呟いた瞬間、頼もしい声が聞こえた。

『いいことおもいついた』

「……アステリオス？」

『それは、ぼくが、かいぶつだったから、できることだ』

少年のような彼の声に不安はなく、むしろ晴れやかささえ私は感じた。

「……何をするつもり？」

嫌な予感に、全身が冷や汗でしつとりと濡れる。

『ほうぐをつかう』

私は思わず唾を飲んだ。彼の言った単語の意味を、おばあちゃんから学んでいたからだ。

宝具。それは幻想の結晶、英霊を英霊たらしめるもの。

アステリオスが行おうとしているのは、その宝具の真の名と力を引き出す『真名解放』だろう。

逆転の一手になる事もあれば、誤った瞬間の解放により、敗北に繋がる事もある……。

相当な覚悟の上での発言だと、私は感じ取った。

「分かった。お願い、アステリオス」

サーヴァントへ信頼の言葉をかける。

『——うん！ しんじてくれて、ありがとう、もも！』

本当に嬉しそうな声が返ってきた。

「もう一つ、お願いしてもいいかな」

『う？ なに？』

闇に包まれた世界を、バウンドしながら車が駆けていく。

「怪我無く、帰ってくること」

『わかった！ ますたー！』

アステリオスが車体の前方に出た。その腕の中に、大きな長細い物が抱えられている。

『いくぞ、いくぞいくぞいくぞおおお!!!』

積もった瓦礫の上を飛び移り、彼は牡牛へと近づいていく。

自らの体に比べて小さいアステリオスの事など気にもならないのか、牛は依然として頭を振り乱し、雷を呼んでいる。

『ぼくは、かいぶつだった!』

少年の心からの叫びが聞こえた。

『だから、ものがたりのおわりに、しないといけなかった!』

彼は巨大な足に掴まり、よじ登っていく、片腕だけでだ。

『でも、ものがたりがおわったいま! ぼくはただのアステリオスだ!』

足の終わりと胴体部の繋がる箇所ので、うまく登れず落ちそうになる。

『ぼくは、だいすきなみんなのところに、かえっていいんだ!』

そこを乗り越え、側面から胴体の上を目指していく。

『ぼくのような、かいぶつになってしまったおまえを……』

少年はどうとう、目的の場所にたどり着いた。

腕に抱き抱えていたのは、放棄されたレールガンの砲身だった。

『おまえを……おわらして、やる!』

彼は大きく飛んで、槍のように、避雷針のようにそれを敵の背中に突き立てた。

機械の牡牛は痛覚を感じさせるような悲鳴をあげ、四肢を暴れさせる。

『ゲイオス・ラビュリントス!  
万古不易の迷宮!!』

畳みかけるように、アステリオスは宝具の名を謳った。

——それは、怪物として産まれてきた子を閉じ込めるために、クレタの王が造らせた

迷宮。

「ミヤガモツ……?!」

地の底にかの迷宮はあり。

牡牛の下に展開した宝具は、地面を陥没させ、流砂を産みながら、敵を閉じ込めよう

とする。



200mはあろうかという巨体が、中途半端に埋没した。

『いかずちは……おまえがうける!』

制御を失った雷が、突き刺さったレールガン目掛けて落ちてくる。

世界の全てが光に飲まれ、轟音が私達を薙いだ。

『——アステリオス!』

衝撃で砂の上を滑っていくデザートランナーの内部に、アーチャーの音が響く。

『貴方の勇氣に、感謝を!!』

光の中を駆ける黒い機体が携えていたのは、5mはあろうかという2つの剣。

砂に埋もれ、自らの攻撃によって修復不可のダメージを受けた牝牛の上を取ると、背部のロケットブースターを点火させ、その胴体へ最大加速で突進する。

『機械化サーヴアント……滅びろ!!!』

殺意剥き出しの声か、通信用貝殻にひびを入れる。

内側から切り裂かれた胴体、切断面から黒い機体は飛び出し、腰にあるスラスターから青白い炎を吹き出す。

未だ雷光に包まれている白く輝く空を飛び、前脚を、後ろ脚を、切り刻んでは地面に落としていく。

『とどめだ!』

最後に、角を生やした逆三角形の首を両手の剣によって落とす、そのままの勢いで砂の上へ着地した。

切断面から、飲み込んでいた淡く光る液体が噴水のように噴き出し、枯れた世界を濡らした。

「……終わった？」

斜めに砂へ突き刺さってしまったデザートランナー内で、私は声を漏らす。

『ええ』

暗雲は散り散りとなり、空が晴れていく。

舞い飛びりソースで光が屈折したのか、牡牛の亡骸の上に大きな虹がかかった。

『ダビデ王とゴリアテ作戦、終了です』

2つの剣の片方を肩にのせ、もう1つの剣先を下げた機体の内側から、アーチャーは私とアスカに穏やかな声をかける。

『やった、たおしたね！』

元気そうなアステリオスの声も聞くと、何だかすっかり安心してしまって、私とアスカは運転席の上でぐんりやりと脱力した。

デザートランナーもサーヴァントも私達も、くたくたの燃料切れ。

『迎えを出したぞー!』

キルケーの指示で地下からやってきた何百というオートマタが、砂に刺さった車体を起こし、うんうんと押ししてくれた。

フロントガラスから外を見る。壊された機械化サーヴァントの腹からは大量の液体リソースが流れ、浅い湖を作り出していた。オートマタは手足をちよこまか動かし、リソースと金属資源の回収をしている。

数時間後、本物の太陽もすっかり沈んだ頃に、私達は都市711に帰ってこられた。

「お帰り! 砂の上を歩む勇者達よ!」

キルケーは緩みきった顔で出迎えてくれた。

「一時はどうなることかと思っただけけど無事に帰ってきてくれて嬉しいよ!」

アステリオスもアーチャーも怪我はなし! 都市にも被害は出なかった!

いやあきみ達を招いた私の慧眼は確かだったね! 大魔女だからね!」

彼女の後ろについてきていたスローネが、回収されたデザートランナーを触る。

「消費された燃料や部品は、礼としてこちらが用意しましょう。」

機械化サーヴァントのおかげでリソースも資源もたっぷり手に入りましたし。

修理に使ったとしても、あの場所も拡張できるし、あの建築も修復できるほどの資源

が……ぐふふ……うへへ……」

「抜け目がないですわね……」

アスカがぼんやりと呟く。

「さてさて、きみ達はお疲れだろう」

大魔女にそう言われると、改めて疲労を実感する。ハンドルを握りつばなしだった両手は震え、衝撃を何度も受けた全身は痛い。

「癒やしの力を秘めた温泉がある、体を温めてくるといい」

「温泉……!」

ライブラリでしか知らない伝説の存在。たつぷりの湯を使うという今も昔も変わることのない贅沢の極み。

「やったー!」

私は年甲斐もなくはしゃいでしまった。

「なんで服を着てるの? アスカ」

「どうしてタオルしか身につけていませんか?! トバルカイン!」

先に向かった彼女を追いかけ、うきうきで向かった温泉。

着ているものを脱ぎ、全て蔓編みの籠へ入れ、ふわふわのタオルで体を隠し、石造りの露天に足を踏み入れた私を出迎えたのは、競泳水着のようなものを着けたアスカだった。

「欧州式では温泉は水着を身に着けて入るのです！ ハレンチ！ モモはハレンチですわ！」

「おばあちゃんが言ってたもん！ 『温泉は心も体も剥き出しにする神聖な場なんだぜ？』って！」

アスカは私に隠し事があるんだな！ 脱げー！」

「いやーでーすー！ 貴女の方こそ！ その裸を隠してきなさい！ バカバカバカバカバカ！」

お互いを指差し、温泉そっちのけで言い争う私とアスカ。

——ふわっと全身が浮いて、ちやぶんと露天風呂に肩まで浸された。

「……存外、元気だなきみ達」

入り口から入ってきていた普段通りの姿のキルケーが、呆れた顔でこちらを見ていた。

「裸だろうが水着だろうが些細なことさ。薬湯に入り、心と体を癒したまえよ」

さらさらの透明なお湯。肌にしゅわしゅわと空気の泡がつく。

「私は宴の準備をしているから、良い子にしているよーに！」

私達は石を組み合わせて造られた湯船の中でしゅんとした。

ため息をついてから、魔女は扉を開けて帰って行った。

「……ごめんね、アスカ」

「わたくしも言い過ぎました……ごめんなさい、トバルカイン」

温泉の中で仲直り。何となくお互いに黙り込み、空を見上げた。

偽物の夜空は、星の瞬きまで再現されていて、温かさと果てのなさを私の胸に感じさせた。

いい匂いのする石鹸を使い、砂まみれの体を泡まみれに変える頃には、体の痛みも疲労も取れていた。

適温より少し熱い湯をたつぷり浴びて、全身を洗い流す。ふかふかの白いタオルで水気をとって、着替える。

「制服も綺麗になってるよー！」

「ずいぶんもてなされている気も……」

「貰えるものは心まで貰うよー！」

「……わたくし、貴女くらい図太く生きたいです」

「お風呂入ったらお腹空いたねー」

「そうですわね……」

清潔な衣服の有り難さを噛み締めつつ、廊下を歩いて大理石の大広間に向かうと。

「お帰りなさい！ 勇者様！」

私を一晩泊めてくれたあの、赤毛のアドリアさんが満面の笑みで料理をテーブルに並べていた。

「な、なんで！」

彼女3人の子ども達も、広間にいる子豚と楽しそうに遊んでいる。

それだけではない。村に住んでいたバルトさんを含む様々な人達が、唄い、手と腕を取って踊りながら、先んじて宴を満喫しているではないか。

「ご説明しましょう」

にゅつと廊下から出てきたスローネが、丸めがねをくいくいと指で触りながら私達に耳打ちしてくれた。

「戦闘、すごい揺れでしたので、流石にごまかしきれなくて。

なので、地震を起こす悪い神とあなた方が戦っているというカバーストーリーを伝えましたら、皆が信じてしまい……で、揺れが収まったらお祭りが始まりました」

「なんで？」

疑問がぴよんと口から飛び出した。

「あらゆるものに神を見いだし、それを奉るのは人の有り様の1つです。そして、それを皆で楽しめる祭りになってしまうのも」

スローネは姿勢を正すと、こめかみに手を当てながら首を振った。

「やれやれ、私は文化の保存が仕事で、文化の発展は専門外なのですが……」  
私の勘違いかもしれないけれど、その顔は少し嬉しそうに見えた。

「ゆうしやさま！ おはなしして！」

「魚と肉の揚げ物です！ 添えてあるアーモンドがこりつとしてたまりませんよ！」

「料理にはうまい酒！ ビール！ ワイン！ どうぞどうぞ！」

……未成年だからだめ？ そんな……」

「男衆は離れた離れた！ ほら、もっと軽い料理もありますから……」

子どもも大人も、私達にどんどん集まってくる。

「わたくし、話しますわ！」

柑橘のジュースをあおりながらそう叫ぶアスカの顔はほんのり赤い。

「おおー！」



「やったー!」

「いいぞ勇者様ー!」

村の人のはやし立てる声が続く。

……本当にジユース?

「アーチャー、アーチャー……」

あまりにもご婦人からの声がかかるので、物陰に隠れていた彼女のサーヴァントに声をかける。

「ご心配なく、あれは場酔いです。何かあれば私がカバーしますから」

「お願いね」

「任されました」

角のようなパーツと、外骨格のついた顔で頷く彼。

短いやり取りをして、彼と入れ替わるように宴の場を後にする。向かうのはお祭り会場になっている神殿の外、木々の生い茂る薄暗い中庭だ。

「……混ざらないの?」

よく手入れされた芝生の上には、そうそうに酔いつぶれた村の人達がすやすや眠りながら転がっている。

魔女の愛豚もその間を埋めるように寝そべっていた。

「私は文化の保存が仕事なので」

探していた存在、スローネも芝生に転がり、星空を眺めていた。

「ふーん」

私はその横に座る。スカートがしわにならないよう、手を添えながら。

「……貴方は、ツヴァイと同じ名字でも、ずいぶん違うんだね」

彼の青い瞳がずっと動き、星空から私を虹彩に映した。

「あのナチュラルボーンアナーキストは……ああなるよう設計された、可哀想な奴ですから」

「……悪いことするのは生まれつき、プログラミング通りってこと？」

「はい、その通り」

神殿の中から歓声と拍手が聞こえてくる。きつと、アスカが上手にお話ししているのだろう。

「我らAI、自己進化するとか言ってますけど、その本質はあなた方有機生命体と同じ。その代で最善の努力を積み、己の死に怯えながら次代へ託す……」

「死ぬの、怖いんだね」

そう彼に問いかけると、芝生につけていた体を上半身だけ起こした。金の髪に、短い草の破片がついている。

「自我の消失が恐怖ではない存在などいませんよ。もしその感情を覚えない存在がいたとしたら、そいつは相当狂っていますね」

夜空の青い星が瞬き、一瞬だけその光を失った。

「……貴方達って、どうやったら死ぬの」

スローネは後頭部をかく。

「……秘密です」

その態度に、私は強く出てみることにした。

「お願い、少しでもいいから知っている事を教えて。聖杯戦争が起きているのはなぜ？ 目的は？」

彼は分かりやすい困り顔を浮かべた。

「上の思考は異次元です、私のようなAIではとてもとても……あつ、でも、これだけはいえます」

神殿の中と外を、子ども達が笑い声をあげながら駆けていく。

「……我ら、人類を応援する都市運営システム。全ては人類のためにあるよう作られた。ゼーンぶ、リリス様の言うとおりに、ですが」

伝説の人物について名を出した彼に、もう少し突っ込んでみる。

「……リリス様に会ったことある？」

「AIって人間より長生きだったりするんでしょう？ 私の都市のAIもそうだったし」

「若いし下つ端ですし、リリス様には会ったこと無いですね」

トレードマークにもなっている丸いメガネを指で外し、布で拭いてからかけ直す。

「持つて帰つてくれたブラックボックス、解析済みました。明日にでも閲覧できますよ」

「ありがとうございます……ねえ、いかないの、お祭り？」

「はい……でも」

届かないものを眺める眼差しで、彼は言葉を付け足した。

「こうして新しい文化が作られていくのを見るのは、とても愛おしいものですね」

海からやってきた風が、芝生と森を揺らす。

「ももー」

神殿から出てきたアステリオスが、私の名を呼びながらのっしのっしと歩いてくる。

その背後には、何人もの子どもがついて歩いてきていた。

「おいしいりょうり、いっぱい、だから、たべにきてー！」

年齢も性別もばらばらな子ども達が、彼の足に体を預けながら、私にねだる。

「アスカお姉ちゃんみたいにおはなししてー！」

「ききたいー！」

私は返事に困り、横にいるスローネも巻き込んで誘おうとしたら、彼は芝生の上にはもういなかった。

「もも、いつしよに、いこー！」

「……うん」

スカートについた草を払いながら、私は立ち上がる。

「アステリオス！ 高い高いしてー！」

「いいよー！」

大きな両手が女の子の細い胴を掴み、そつと持ち上げる。

「すごい！ お母さんよりもお父さんよりも高いー！」

「あたしもー！」

「僕もー！」

「まってね、じゅんぼん、だよー！」

子どもと遊ぶその手つきに、私へ見せた怯えはなかった。

「あーちやーと、れんしゆう、したから。ちからのつかいかた」

彼の大きな赤い瞳が嬉しそうに細められ、子ども達を映す。

「ぼくは、もうかいぶつじゃない。そのうんめいは、おわたんだ」

みんな喜びからの悲鳴をあげ、アステリオスと遊びたい子どもが次々と寄ってくる。

「これから、みんなといられる、ぼくになれるんだ！」  
大きな歯を見せてにっこりと笑う。

彼の心の変化に、私まで暖かな気持ちになり、思わず顔がほころんでしまった。

第22話 最後には笑顔で終わるもの

終わり

## 第23話 黒いうみの中で1人想うことは

俺の人生は幕を閉じた。

運命はろうそくの様子に燃え尽きて、死んだ。

……しかし、それは終わりではなかった。

目を開けて広がっていた世界は、一面の黒。

黒は泥であり、私の全身を貪った。

正しい事だと思つて、受け止めた。私はあまりにも殺しすぎたからだ。

自分も他人も使い、散々殺した、その、報いだ。

針も釜も無いここは、極楽でも地獄でもない場所で、故に、罰を計る鬼も、罪を救う

仏もいないのだと気がついたのは、直ぐのこと。

……泥は量を増していく。その全てが恨み、妬み、嘆きだった。

『俺の娘を返せ』

『息子を返して』

『あたしの家を返せ』

『土地を返してくれ』

『わたしの誇りを返せ』

『奪い取った物を返せ』

『信じていた教えを返せ』

言葉の1つ1つに納得して、俺は崩れ落ちた口の端を動かした。

「私を食ふことでその思いが晴れるのならば、するといい」

内も外も、みずみずしく失われていく。

空に、輝く星があつて。その瞬きは懐かしい思い出を胸によぎらせた。

確かに俺はあの人の側にいたのだ、あの星はきつとあの人のだろう。

体の形を失いながら言い放つ。

「これでいいんだ！ 死んで、あの人は自由になった！

これからは……良い奴になつたつて、悪い奴になつたつていい！

■ ■ ■ という運命から解き放たれて……もう、あの人はどう変わつても自由なんだ

！

嬉しかったんだ。誰に妬まれることのない幸福が、あの人に贈られるのだと思えば。

——愚かな、勘違いだったのだが。



人の形を失った水つばい四肢で、泥の上を疾駆する。さながら、病で狂った獣のごとく。

「許せない……許せるものか……!」

怒気に圧され、黒い泥達は波を立てながら逃げる。

「死は、救いじゃ無かったのか？」

ずっと安らかに眠っていられるはずじゃなかったのか？」

増えていく思考回路の中で、私は叫ぶ。

「■■■■にして、あんな世界へ置くだなんて……」

あんなに苦しんだんだぞ! あれほど悔やんだんだぞ! あれほど目の前で殺され

たんだぞ!」

身勝手な怒りが骨をとろけさせ、灰すら残らない。

「……死した後もなお、背負わせようというのか!」

感情が背中から飛び出し、壁無き世界へ突き刺さる。

「例え……この身が人の世の呪いその物になったとしても……!」

肉は呪詛混じりの泥へと変わり、感覚が空の臓腑を焼いた。

「例え……魂も心も消え失せようとも……!」

鬼も仏もない、呪いだけが降り積もるその場所を這いずり回る、人間だった何か。

「いつか必ず、あの星を、御座から引きずりおろしてやる!!!」

人間以上の指が生えた手で天を掴み、絶叫したそれは、獣ですらなかった。

おぞましい感情を燃料に世界へ爪立てた、救いようのない怪物。

(その……物語の始まりは……運命の終わった後……に……)

——これは、俺の長い旅の、一番最初の場面だ。

第23話 黒いうみの中で1人想うことは

終わり

## 第7章　そして置き去りにされた愛に出会う

### 第24話　それぞれの秘密

「ねえ」

「ん？」

向かい側の薄い座布団に座る、昨年めとったばかりの妻が俺に声をかける。

時間は朝。田畑の草取りの前に、煮物と飯で簡素な食事を摂っていた。

妻の、当て布のつなぎ目が多い着物を見ると、少しでも稼ぎ、良いものを買ってやりたいなあと思う。

「あたしの事、大切？」

痛んでばさばさとしている髪が気にかかり、つける油や櫛も贈りたいなんて考えながら、ひえとあわ、麦の混ざった冷たい飯を噛む。ごくりと飲み込んでから、妻の質問に答えた。

「……大切だと、思っているよ」

「やった」

まだ若い妻は、無邪気な笑顔を見せる。

「いいこと教えてあげようか」

「なんだい？」

彼女の喜ぶ姿は、俺の胸を温かくさせてくれる。

「お隣さんからね、もうすぐ『あの方』が帰ってくるって噂に聞いたの。そうしたらきつと……この国はもつと豊かになるね。」

年貢も軽くなつて、肥えた場所で米も育てられるようになって……」  
眉をひそめる。

その話を聞いて不機嫌になったという訳ではない。

4つの頃から聞こえる脳内の声が、ざわざわとうるさくなり始めたからだ。

「そう……だな」

俺は妻と平行して会話しつつ、当然のように繋がっている『あの人』の言葉にも思考を割く。

「嬉しくないの？」

彼女は黒い大きな瞳で俺を見る。浮かない俺の顔と暗い緑の瞳が映り込んでいた。

「嬉しい、よ」

「えへへ……あたしと同じだね」

内心をおくびにも出さず、妻へ嘘をついた。

純粋な彼女はにこにことした笑顔で、飯と煮物を食べる。

(……こんなに、愛しているのに)

俺は、悲しくてたまらなかった。

(きつと、『あの人』を一目でも見たら……)

胸の内に、確信があった。幼い頃からずっと、考え、思い続けていたこと。

(俺の中身、全部空っぽになって、彼女の事も、どうでもよくなってしまった)

昔はそれが運命なのだと思え入れていた……けれど、大人になった今、ひどくそれが恐ろしかった。

(大切、なのに……)

父様、母様、妻、いつか腕に抱く子ども、家に田畑、僅かな金品。

己以外の大切な物が増えすぎて、全部が愛おしかった。

(大好き、なのに)

子どもが泥で出来た団子を潰して練り直すみたいに、俺の心、思考、叩き壊されて……

最後には。

頭の声は、大きくなるばかり。

『あの人』を誉めそやす周りの声も、聞こえてくる。

(神様、仏様……)

『彼』が帰ってくる。この国に住む者誰もが待ち望んでいる、『彼』が。

(どうか、俺を壊さないでください。どうか、俺を少しだけでいいから残してください) よく煮込まれて、黒く染まった根菜が俺を見ている。

(……俺を『彼』の機能の一部にするなんて事、実現させないでください)

怯えが妻に伝わらないよう、震える歯で頬の内側を噛んだ。

……悲しい夢を見たが、目覚めた後の瞬きをした間に、その内容は思い出せなくなってしまった。

だから、胸に残ったのはおぼろげな寂寥感だけで。

「そうだ、朝風呂をしよう」

美味しいご飯に歌、踊り。夜遅くまで続いた宴の翌日。

夢を振り払うかのように、私はふわふわのお客さん用ベッドから体を起こすと、朝の空気に包まれているひんやりとした廊下をサササと歩いて、温泉へ向かった。

パジャマを昨日と同じ様に脱いで、タオルで体を隠し……。

「一番風呂イエイ！ イエイ！」

元気な声上げ、露天へいざ突撃私。

——誰もいないはずだというのに、ばちやばちやと、お湯がかき混ぜられる音が聞こえた。

「あれ？」

私は思わぬ人物の姿に声を出す。

真つ赤な顔をしたアスカが、温泉に浸かったまま両手をわちやわちやと動かし、慌てふためいていた。

「だからお風呂で裸になりたくなかったんだ」

「はい……」

少し葉っぱい香りのするお湯の中で、体操座りをするアスカ。

「令呪がお腹にあるだなんて、恥ずかしいですから……」

太ももと膝の間から、ちらりと見える腹部の大きな赤い紋章。それが彼女の令呪のようだ。

翼を広げた赤い鳥のようなその形は、巨人との戦いの中で1画消えて、片翼のみとなっている。

……令呪が浮かぶ場所は人様々だとおばあちゃんから聞いたが、まさかお腹とは。

「困った場所にあるね……」

「手の甲に浮かんだトバルカインが羨ましいです……うう……」

首を曲げ、空気中の水分をしつとりと含んだ黒髪を顔にかけているアスカ。

とても落ち込んでいる事がよく分かる。

「もつとかっこいい箇所であれば……せめて背中ですとか……」

彼女は肩甲骨の辺りをさわさわと白い手で撫でる。

「確かに、背中だったら光るのかっこいいかもねえ」

人差し指を顎に添えて、アスカの眩きを脳内でイメージしてみる。

敵に追い詰められ、絶体絶命！ 勝つために令呪を使用！ 赤く輝く背中！

マスターの目の前に現れて必殺技を放つサーヴァント！ アーチャー961！

……悪くない、むしろいい。

「でも、現実はお腹……間抜けです……」

アスカのもらした深いため息が、お湯の表面をごくわずかに揺らした。

「トバルカインに見られちゃった……はあ……うう……」

彼女のシヨックは相当のようだ。

「見ちゃってごめんね……」

深刻に謝るのも彼女を傷つけてしまいそうなので、なるべく明るい声でごめんなさい



をする。

「事故のようなものですから、仕方がない……です……です……です……です……」

私に背を向けたまま、彼女はしばらくうんうんとうなっていたが、近くの岩の上に畳んで置いてあったタオルを取ると、お湯から立ち上がりつつそれを体に巻く。

「トバルカイン」

「なに？」

彼女が起こしたお湯の波紋が、浸かっている私にちやぶちやぶとぶつかる。

「……やっぱり貴女の事が許せません！」

何が『イエー！ イエー！』ですか！ もっと確認してから入室するべきです！」

お湯が頭から顔にかかる。

濡れたまぶたをぱちくりさせる私。数秒後に、彼女にお湯をかけられたのだという事を理解した。

「や……やっつたな！」

私も立ち上がり、タオルを体に巻くと、腰をかがめて両手でお湯をすくい、彼女の顔めがけ、ばしやんと放り投げる。

さらさらのお湯が狙い通りの箇所へかかる。

「……もう許しませんわトバルカイン！ 湯船に沈めて差し上げます！」

「望むところだ！ 今考えた必殺のばしやばしや拳法でびしょびしょにしてやる！」  
ムキになってお湯をかけあう私達。温泉がお互いの間を行き交い、子どものようなケ  
ンカは10分ほど続いた……。

「……気持ち、上向きになった？」

「はい……とても不本意ですが……」

「ずぶ濡れになり、疲れ果てた私達はまたお湯に浸かる。」

「『温泉は心も体も剥き出しにする場』だと、貴女のおばあ様が言っていた意味が分かつた気がします」

「そうだね、アスカとあんな風にケンカをするなんて初めてかも」

「薄い雲で白んでいた空は青みを増し、地下の都市に1日の始まりを告げていた。」

「旅に出てから、そんな事する余裕なんてありませんでしたものね」

「一息ついた私達はのんびりと会話をする。彼女の全身を支配していた嫌な感じの強張りは取れていた。」

「何であれ、友達の元気が出て私も嬉しい。」

「その……こつそりお風呂に入っていた理由、言っていないませんでしたよね」

「お腹の令呪を他人に見られたくないから……じゃないの？」

膝立ちをして、岩の上に絞って水気を切ったタオルを広げる。

そうしてから振り返り、彼女に向き合おうと、淡い桃色に頬を染めた顔が目に入った。

「昨夜……」

黒い瞳でお湯を見つめる、暗い顔のアスカ。

「とても、恐ろしく冷たい夢を見たのです、わたくし」

「夢？」

「たぶん、アーチャーの記憶……かと」

彼女の言葉は続く。

「サーヴァントと契約しているマスターは、彼らの記憶や過去を夢に見る……」

ライブラリで読みました、トバルカインは知っていましたか？」

「うーん……おばあちゃんがそんな事を言っていたような……」

お湯に肩まで浸かり、幼い頃の学びの記憶を思い出す。

「都市で監理された日々を過ごしていた頃は、不思議な夢など見ませんでした。けれど、

旅に出て、様々な体験をしたからでしょうか……見るように、なってしまうって」

「そう、なんだ」

私は温泉の中で体育座りをして、腕で膝を抱える。

「……夢だったのに、全身が凍えて。だから、お湯に浸かろうと」

「怖かった……?」

おずおずと聞くと、アスカは首をこくりと動かした。

「トバルカイン、誰にも話さないと、約束してくださいますか」

感情を自分一人では抱えきれないと判断したのか、アスカは震える声で私に問いかけた。

「うん。絶対に誰にも話さない」

私はしっかりとした口振りで彼女に約束をした。

「……では、話します」

熱いお湯に肩まで浸かっているというのに、アスカの顔は青ざめて見えた。

「どこまでも、白い雪に被われた斜面で。」

遠くに見えるのは青い断崖絶壁、草木もなく……でも、星だけはやけに近くにありま

すの」

脳内に浮かぶのは、人の痕跡など無い雪山。

「風に舞う粉雪の間からアーチャーの背中が見えます。彼、とても急いでいるのか、ずんずん歩いていて……」

白い外套を強烈な風ではためかせ、ひたすら前へ行くアーチャー961の姿が見えるようだ。

「そして、そのまま雪で視界が埋め尽くされて……治まった頃には、誰もいない」

足跡すら残されていない、白い美しい山腹が、脳裏に描かれた。

「そして、この言葉だけが、山麓を通り過ぎていく風の狭間から聞こえたのです……『さよなら』と」

「どうしてそう言ったのだろう……」

「分かりません、誰へ宛てたものなのか……」

アスカは黒い瞳を一度閉じた。まるで、彼女のサーヴァントである人物が、遠い昔、冷たい雪山でそうしたかのように。

「けれどその声は、寒さに震えていない、とても穏やかで、感謝に満ちたものでした」

アスカのアーチャーの唇が動いて、優しい別れの言葉を紡ぐ姿は、想像することが出来なかった。

「わたくし、今日の夢はきくと、彼が死ぬ時に見た景色だと思おうのです」

「つ……どうしてそう思うの？」

衝撃的な言葉に私は思わずたじろいだ。お湯が静かに波を立てる。

「だって、彼、背負っていなかったから。いつも使っている綺麗な弓も……重たそうな責任も」

彼女は瞳を開き、夢で見たアーチャーの背中へ眼差しを向けている。

手の届かない、遠い世界を見つめる瞳だった。

「えつと……」

かける言葉が出てこない。波紋が泳ぐ水面のように、私の心も衝撃で揺れていた。

「トバルカインは見たことありますか？ 自分のサーヴァントの夢を」

彼女の黒い瞳の焦点が、ようやくこの世界に戻ってきた。

目の前にいない存在ではなく、ここにいる私を確かに見つめている。

「うん！ あるよ、ある……」

動揺した心のまま、彼女の問いに素早く答える。

「どんな夢でしたの？ わたくしも、トバルカインがそうしてくれたように、ちゃんと秘

密にしますから……」

重たい秘密を吐き出したおかげか、アスカの声色も表情も明るい。

見られている私は瞳を泳がせて、口をもつれさせてしまう。

「アスカほどよく覚えていないんだ。場面も人物も時系列も無茶苦茶で……」

「パッチワークみたいなの？」

忘れずに残っている場面を思い浮かべる。

夢の中のバーサーカー04は、子どもだったり大人だったり、その場になかったり。

「うん、つぎはぎなの」

「精神が安定しないバーサーカーのクラスだからでしょうか……」

アスカが空を仰ぐ。

「こういう夢を見ると、サーヴァント……彼らが死者であると実感します」

「死者……か」

バーサーカー04もアーチャー961も、かつて、この世界で生きていたのだ。

そして、人生を終え、死を迎えた。

「死んだらどうなるんだろうね。天国とか地獄とかに行くのかな」

地下都市に住んでいた頃は考える事はなかった。

だって、私達にとって『死』とは、生存権を失い、処分されるというただの結果だっ

たから。

「お母様は……『運命が終わり、無限の自由が待っている』とおっしゃっていました」

アスカがぼつぼつと話す。

「自由？」

私は聞き返す。

「うん。みんなの嫌われ者が世界を救ってもいい、そんな自由が」

アスカは湯に深く体を沈めた。お湯のかけ合いっこで濡れた黒い髪がゆらゆらと熱

い水に広がる。

「……お母様がいなくなるまえに、そう言い残してくれましたの。わたくし、未だにその意味が分からなくて」

小鳥が、自由に飛べる喜びに満ちた歌を地下の青空に響かせていた。

「アーチャー殿は朝ご飯何が好きです？ 冷たいもの？ 温かいもの？」

「……」

「俺は何でもいいかなあ。そもそも、ゆっくり食べられるという事が贅沢だし」

「……」

「キルケーのキュケオーン……米を甘く煮たものはぎよつとしましたが、慣れればなかなか……」

「……」

「アーチャー殿、俺の分のデザート的林檎あげましょうか」

「私の分はもう用意されています。貴方の物なので、貴方がどうぞ」

「はい」

温泉で身も心もリラックスした後、朝ご飯をいただきにすっかり見慣れた大理石の広間に行く。



そこで、宴の片付けが完璧に済んだ大きなテーブルの前に座り、アスカのアーチャーと私のバーサーカーが何事も無かったかのように食事を摂っていた。

「もも、あすか、おはよう！」

2体に配慮しているのか、やや距離を開けて座っているアステリオスが、私達に挨拶してくれた。

「おはよう！」

「おはようございます、元氣そうで何よりですわ」

元氣よく、挨拶を返した。

「バーサーカー」

そうしてから私は、自らのサーヴァント、バーサーカー04の側に、ローファアの足音をつかつか響かせながら歩み寄る。

「マスター？」

彼はキルケウの得意料理である麦を煮込んだキュケオンを食べながら、木製の仮面で隠された半分だけの顔で、そこにある暗い緑の瞳で、私をきよとんと見る。

「……大丈夫、なの？」

私は両手の指をもじもじと合わせてしまう。

心配だったのだけど、それを彼へ正直に伝えるのも、気恥ずかしくて……。

「実は、重大な不調が……」

彼は握っていた銀の匙を皿に置くと、表情を固くし、瞳をわずかに閉じて暗く曇らせた。

「それは……何……?」

心臓が喉から出そうだ。それくらい、不安でどきどきしていた。

重たげに、バーサーカーが唇を開いた。

「アーチャー殿の戦闘映像を見たら興奮で夜眠れなくなっちゃって……」

ハイパーロボットアクション格好いい……無理尊いしんどい推せる……もう推してた……マジで……? 不覚……」

「感極まり過ぎて気持ち悪くなってる……!」

『推せる』という言葉の意味を、私はいまいち理解できていない。

「ともかく……体はキルケーのおかげで治りました、壊れたのも彼女のせいでしたが!

何はともあれバーサーカー04完全復活です! いえい! いえーい!」

無表情のまま両手で旧時代的なダブルのピースをする彼に、私はあきれ果て、ツッコミを入れる気にもなれなかった。

「大魔女の命令さ！ スローネ！ 『ブラックボックス』を持ってきておくれ！」

「どうぞ。島の守り神」

全員の朝ご飯も終わり、デザート在林檎までしやりしやりといただいた後、大理石のテーブルの真ん中にその箱が置かれた。

子どもの頭位の大きさの、複雑な文様に見える溝の彫られた四角い黒の箱。

「……アーチャー殿が教えてくださった『ブラックボックス』とはこれか」

「はい、バーサーカー」

04と961は立ったままそれをしげしげと観察している。

「ねえスローネ、これはどういう物なの？」

放棄された地下都市で、黒いその箱を見つけた本人である私は、『是非に持って帰ってきてください！』と言ったAIに問いかける。

有線コードやよく分からない機械をテーブルに並べ、キルケーに頼まれた貝殻や香草などを運んでいるスローネは、両腕いっぱい抱えた荷物を机の上に置いてから質問に答えた。

「都市に必ず一つ配備されている演算器で……我らAIの本体です」

「本体？」

「ええ」

スローネは背筋をぴんと伸ばすと、箱に片手で触れた。シリコンで作られた彼の皮膚の一部が、青く発光を始める。

明け方の空と同じ色の瞳を持つキルケーは、口角をわずかにあげ、好奇心を隠しきれない表情を浮かべていた。

アーチャー961は腕を体の横に軽くつけ、何が起きても対応できるように構えている。

「……これ、わざと誰でも開けられるように設定してあります」

手でそれに触れているスローネの声は訝しげだ。

「言論統制された知識が、文書としてまとめられている……色々な事のご説明のため、展開しますね」

箱の一番外側、黒い外殻が小さな駆動音を立てながら剥がれていく。

組み立てられた折り紙を、元の紙に戻すように、黒い板はひとりでに動いて、その中に包んでいたものを私達に見せた。

「わあ……」

アスカが両手をテーブルにつけて身を乗り出し、歓声をあげた。

私も思わず見惚れてしまう。現れた物は、琥珀色に輝く美しいキューブだったから

だ。

内側では何千という光の粒が瞬き、キューブの中を縦横無尽に飛び回っている。目を奪われている私とアスカに、箱を操作したスローネは説明をしてくれた。

「外は特殊カーボン、内は『フォトニック純結晶体』と言われる物質で構成されています。光で思考を編み、都市運営に欠かせない複雑な演算を行い、そして、我らAIの魂と心の保管場所でもある」

スローネは丸いメガネの位置を左手で直した。

「うんと大きなサイズの『フォトニック純結晶体』もありまして、そこでAIは産まれます。」

Iからデザインされた特別製の子もいますけど、だいたいは自然交配ですね。

もつとも、光の世界で行われる生殖活動は、有機生命体である皆さんには想像出来ないものでしょうが……」

夕焼けを閉じこめたかのような、温かみのある色の箱。この中にAIの魂と心があり、都市の運営まで行っているとは信じられない。

「この中に、スローネのようなAIはいますの？」

アスカは素朴な声を出す。

「いいえ。データだけ残して別の箱にお引越したみたいです。」

今こうしてアンドロイドボディを動かしている私のように、別の小さい『ブラックボックス』へ移ったのかもしれない」

彼は手を輝く箱にかざしているだけのように見えるが、何か操作をしているようだ。

「開封者に宛てられたメッセージがありました、映像っぽいですね」  
「では直ぐに見せておくれよ！」

椅子に座りそわそわとしていた魔女が、たまらず声をあげた。

スローネが無言で頷いた後に、ボックスがゆつくりと点滅する。

大広間の空間に、立体映像が投射され始めた。

第24話 それぞれの秘密

終わり

## 第25話 華々しく旅立てば

『西暦2613年、4月17日。これは、他者へ託す希望のメッセージ』

私は目を凝らす、とても暗い場所で撮影されたのか、声の主がほとんど見えない。話しているのが女性だという事は分かるが……。

『私の名前はベルゼ・キラライト。地下資源鉦脈算出ソフトを祖とするAIです』  
名乗った彼女の周りに大勢の人が居るのか、判別不明なざわざわとした声も聞こえる。

『私は都市の人々とサーヴァントを率い、都市運営システムへ、いえ、この世界へ反逆します。』

それが、人類の未来のためだと信じながら。

上級都市レグルスと共に、私とその同志達は反旗を翻す。

これは、他者へ託す希望のメッセージ。志を同じくする者は、このボックスに記録してある座標まで来てください。

……反逆の意志が、世界を変えると私は信じている』

そこでメッセージは終わり、同じ内容の映像が繰り返し再生され始めた。

「日付……」

私は今見た内容を、改めて頭の中で整理する。

西暦2613年、4月17日。それは、今から約100年前だった。

「ほぼ100年前に録音されたメッセージ、ですか」

アスカのアーチャーが私の考えていた内容と同じような事を発言した。

「でもアーチャー、わたくし達の世界、変わってなんていませんわよ。」

彼の言葉を聞き、アスカは首を傾げた。動きを追うように、艶のある黒髪が揺れる。

「革命が失敗したのか、今でも戦いを続けているのか……」

サーヴァントとマスターの2人の会話。

「……愉快的なメッセージではなかったな、面白くない」

キルケーはつまらなさそうに唇を尖らせると、ぼそっと呟いた。

「もつと面白いものー！ スローネー！」

「あーはいはい」

右手を箱にかざし、解析を進めている彼。左手でタブレットを取ると、そこに情報を

送信した。

「歴史とかの文章をどうぞ」



そして、暇を持って余っていた魔女に手渡された。

「君も見るかい？」

キルケーに誘われ、彼女の後ろへ行き、椅子の背もたれに手をかける。

「えーつと……」

オレンジの上に輝く白の文字を左から右へ読む。

『戦争』、『地下都市の種類』、『機械化サーヴァント』など、すでに知っている種類の情報もあれば。

『フォトニック純結晶』、『レジスタンス』……」

詳しく知らないものもあった。

後ろに立つ私をキルケーは横目でちらりと見ると、『レジスタンス』と書かれた項目に指で触れる。

表示されている文章はがらりと変化した。

『レジスタンスとは、この世界の仕組みに反旗をひるがえした誇り高き者達です。

地下都市と都市運営システムを破壊し、あるべき世界を取り戻すのが目的。

リリスによって形作られたこの世界は歪そのものであり、それより生み出された物の生存など』

ずらずらと出てくる文字。

「うへー……すごく主観まみれじゃないか」

うんざりしたような声を出して、キルケーは項目を閉じた。

「提示された情報が正しいとは限らない。

今見たように、感情的に書かれていたり、誰かによつて都合よくねじ曲げられている事だつてあるのさ。気をつけたまえよ」

含まれている内容に興味を失つたのか、魔女は後ろ手に私へタブレットを手渡した。

私はそれをおuzzと受け取った。

ブラックボックスから得られた情報は、『上級都市レグルス』の座標以外にめぼしいものはなく。

多くの文章を読んで疲労感を感じた私は、芝生のある中庭でぼーっとしていた。

アスカは今ごろ、私と同じようにタブレットを読み込んでいることだろう。サーヴァント2体はこの先の方針について議論を交わしているはずだ。

晴れた空は薄い水色で、神殿の屋根の上で小鳥が鳴いている。

「ももー……ハハハ、いたんだ」

のしのしと地面に響く大きな足音の持ち主は、アステリオスだった。

座っている状態のまま、体をちよつとひねって彼を見ると、両腕いっぱい果物を抱えているのが分かった。

「沢山の果物……どうしたの？」

「まちの、みんなの、おてつだいしたら、おれいに、もらった！」

アステリオスは私の隣にどしりと腰をおろすと、黄色い棒状の果物を1本手渡してくれた。

「ばなな！ しつてる？」

「知ってるよ。でも、読んだ事あるだけ、食べるのは初めて」

果物なんて、とつくの昔に絶滅したと思っていたが。

この地下都市7-1-1は本当に食材が豊かだ。失われた食文化を保存する、栽培するの意味でも『実験都市』なのかもしれない。

かくばった見た目のバナナ。黄色いつるつるとした表皮の上に、黒い点々が浮いている。

「てんでんあると、おいしいんだって！」

「へえ……」

皮の末端に指をかけると、力をほとんど入れていないにも関わらず皮がむけた。下からは淡いクリーム色の身が覗いている。辺りに漂う濃厚な香り。

「いただきます……」

かじると、柔らかくて、ねっとり甘い。中心部はとろりとしていて、水飴のように半透明な箇所もあった。

「おいしい?」

「とっても美味しいよ、ありがとう」

感謝の気持ちを伝えると、アステリオスはあどけない笑みを浮かべる。

そうしてから、彼もバナナの皮を大きな指でちまちまと剥き、ぱくりと頬張った。しばらく無言で、むしやむしやとバナナを食べる。

「たびにでるって、おばさまからきいた」

膝の上に、食べ終わったバナナの皮を置いたアステリオスが、暗く沈んだ声で話を始める。

「いっちゃう、の?」

私に見せたその顔には、戸惑いの表情が現れている。

「うん」

胸が痛むけれど、彼に変えるつもりのない意志を伝えた。

「ももは、どうして、たびをつづけるの?」

果物を食べ終わった私は、バナナの皮を隣にいる彼のように膝の上へ乗せた。

「聖杯戦争を止めるため……かな」

目線を黄色い皮に落とし、かつて確かに見た地獄の風景を頭の中に浮かべる。

「アステリオスに出会う前、聖杯戦争のせいで、沢山の人が傷つけられ、死んでしまうのを目にしたの」

忘れるはずがない。

ずっと続くと、根拠も無く信じていた世界が破壊され、血にまみれて。

そして、家族のように慕っていたバーサーカーが、紛れもなく、人間ではないという事実を叩き付けられた。

外に出てからも、初めて知る事ばかり。でも、それが真実で。

そんな世界を、戦争によつて誰かが傷つけられる世界を、変えたいと願ってしまった。「私にはサーヴァントがいて、外を移動できる乗り物まで持っている。」

それに……あるキャスターに予言を受けた」

人ならざる獣の耳を持った、褐色の肌の彼女、キャスター171の言葉が脳裏に蘇る。

『2人の少女が旅をして、聖杯戦争を終わらせる。そして、世界の運命を切り替える』  
始めは何かの冗談だと思っていたけど、今までの冒険を経て、言葉が実感となり、重みとなって心にのしかかっていた。

「私が、聖杯戦争を止めないと……いけない気がする」

何度も自らへ言い聞かせた決意を、改めて口にする。

「……それが、もものうんめい？」

白いふわふわの長髪を揺らしながら、アステリオスは私の顔をじつと見る。

真剣な眼差しの中心にある瞳は、焼けた鉄のように赤々と静かに輝いていた。

「運命かどうかは分からない。でも、止めたいんだ、争いを」

私の宣言を聞いたアステリオスは、目線を芝生の生えた地面に落とし、心配と不安の感情が混ざった声で呟く。

「……うんめいなんて、ぼく、きらいだ」

石の屋根の上にいる小鳥は、それぞれ別々の方向へ飛んでいった。

都市を離れる前に、肉や魚、野菜や果物てんこ盛りの豪華な昼食を食べた。

キルケーが腕を振った料理はどれも絶品で、舌が肥えてしまうのが怖い。

ここを出発すればまた栄養補給プロックをかじる日々だ。

もそつとしたあの食感も嫌いじゃないけど、焼きたての鶏のぱりぱりとした皮や、しゃきしゃきとして、口の中がみずみずしくなる野菜の歯触りは別格のもの……。

「ピグレット！ じゃんじゃん持つてくるんだ！」

「プギーー」

豚達が背中にお皿を乗せて料理を運んできてくれる。

アーチャーは口元と顎を拘束しているパーツを外し、もくもくと口を動かしながら料理を食べており、バーサーカーは離れた場所から全体を見ている。

「アステリオス！ 沢山食べていいからなー」

「うん……」

キルケーに声をかけられたアステリオスは、少し元気のない様子で返事をした。

「ん……んん！ 美味しい……宴の席で食べたあの料理とはまた別の味わいが……」

「こんがりと焼かれたお肉に、目をきらきらさせたアスカが舌鼓を打つのを眺めながら、私はあつあつの野菜のスープを飲んだ。」

昼食会の後は、とうとう別れの時。

「私の魔術でデザートランナーの装甲を強化したぞ！」

食料と燃料も積んだし、きみ達にあげた宝石型の礼装も整備した。準備バッチリさ！」

巨人討伐の際に足を踏み入れた無機質な印象を受ける地下ドックに、サーヴァント含む私達4人は並んで立っていた。

笑顔で見送ってくれる彼女に、私とアスカは感謝を伝える。

「ありがとうございます、キルケーさん」

「お食事にお風呂、その他色々な事……感謝しています、ありがとうございます」

キルケーは肩にあるふわふわとした羽をばさばさ動かす。

「いやあ……きみ達がいなければ私の都市は終わっていたし……助け合い、お互い様さ  
！」

彼女の発言に、04は961にひそひそと耳打ちをする。

「2人とも心が広すぎるぜ……」

マスターアスカは豚に変えられて、アーチャー殿は結界に閉じ込められて、俺はミンチにされたって言うのに……」

聞いている961は、彼のぼやきに一度だけ頷いた。

「そうそう、これもプレゼントだ。持ってきてくれるかい？ アステリオス」

「よい……しよ」

彼が両手に持つて運んできたのは、あのブラックボックスだった。

「くれるの？ いいのスローネ？」

私はびつくりしつつも聞いてみる。

キルケーのそばに控えていた、アンドロイドの体に収まっている都市運営システムが



答えた。

「私には不要のものですし……それに」

白衣についているポケットに、罰が悪そうに両手を突っ込んだ。

「ブラックボックスは各都市とそれを担当するAIに1つだけ支給されるもの。

余分に持っているという事自体が、トラブルを招きかねませんから」

「そっか……」

頷く私に、アステリオスが腰をかがめて顔を近づける。

「だが、もつの？」

私はちよつと困ってしまった。これがとても重たい物だと言うことを知っているか

らだ。

「バーサーカー」

961が04を見た。

「えっ？ 俺？」

戸惑う04は自らを指でさす。961はさつと顔を背けた。

アステリオスは箱を持ったまま返事を待っている。

「……持ちますね」

「うん、おねがい」

バーサーカーの人間サイズの手の上に、重たい箱がずしりと乗った。

「じゃあ、そろそろおいとま……」

「あー待って待て」

箱を持って、えつちらおつちらデザートランナーに入ろうとしたバーサーカーをキルケーは呼び止める。

「別れの挨拶があるのでしたら、短く、お願いします」

腕をふるふるさせながら04はキルケーに願った。

「……私は旅立つ勇者に、出航の助言を与えるめが……えへん、魔女でもある。モモ、アスカ、よくお聞き」

彼女の静かで穏やかな声に、自然と背筋がぴんと伸びた。

「星座の名を持つ敵がきみ達の前に現れるのは、きみ達が星を見るものだからだ」

AIやサーヴァントを除けば、今まで会った敵の姿は……カニ、水瓶、牡牛。

「星を追って行きなさい。そうすればいずれ……隠された『樹』の元へたどり着く」  
彼女の話し言葉に含まれていたある単語に、アスカが素早く反応した。

「『樹』……別の都市で出会ったキャスターも言っていましたわ!」

魔女は深く頷く。

「今告げた内容は、朝に行った占いで見えたものなんだ。」

……何を意味しているのか、完全には分からない。だが、きみ達の旅の道しるべになるのは確かだ」

そこまで話し終わると、彼女は悲しげに眉間にシワを寄せた。

「この都市で暮らしてもいいんだよ？」

サーヴァント2体分のリソースは、スローネにまた頼んでちよろまかしてくればいいんだし……」

「良くないですよ?! その内本当に都市ごと潰されますよ?!」

スローネのツツコミを無視し、私は自分の気持ちを伝える。

「聖杯戦争、止めたいんです」

魔女は表情をむすつと不機嫌そうなものに変えた。

「きみは優しい平穏より厳しい戦乱の方が好きと見える。

そんな人間が戦争を止めたいだなんて、おかしい話だと思うけど……」

口でそう言った次の瞬間、彼女はぱつと顔を明るくした。

「でも、そうしたいのならするがいい!」

きみとアスカは私が認めた勇者、大魔女キルケーのお墨付きなのだから!」

その言葉に、私は救われたような気持ちになってしまった。肩へ余分に入っていた力が取れる。

……視界の端で、腕をふるふるさせながらブラックボックスを持ち続けている04の姿が見えた。

別れの挨拶も終え、静かな車内へ私達は乗り込んでいく。

「箱は機関室に置いておく。デザートランナーに接続して機能を拡張するのはまた挑戦してみるよ」

04がブラックボックスを抱えてある部屋へと向かっていくところだった。

「機関室には俺以外入るなよ！　ふりじやないからな！　どうしようもなくなった時以外入るなよ！」

彼の言葉にアスカはつんと答えた。

「耳にタコが出来るほどいつも聞いていますわ、入りませんから」

髪をなびかせながらすすたすた歩いて運転室へ。彼女のアーチャーも続く。

「……ちよつとだけ入るのも、だめ？」

そう聞いた私に、バーサーカーがわざと低い声を出す。

「だめ」

ちよつとだけ興味があつたが、彼を怒らせてまで知りたい事でもないので、大人しく運転室へ向かった。

「久しぶりにハンドルを握る気もする……デザートランナー、発進だー！」

04の軽快な声と共に、車体は真昼過ぎの強い日差しの中へ飛び出していく。

砂漠と荒野がまばらに点在する不毛の大地。命の痕跡など、どこにも感じられない。

(さよなら、都市711……)

後ろ髪を引かれる思いだった。

あの地下都市にはこの世界から失われた平穏があった、文化があった、美しい自然があった。

(でも……)

全ては箱庭。外から悪意ある敵対者がくれば、あつという間に壊されてしまう砂上の楼閣。

運転室内の椅子にもたれかかりながら、タブレットで見たあの項目を思い出す。

『レジスタンスとは、この世界の仕組みに反旗をひるがえした誇り高き者達です。』

地下都市と都市運営システムを破壊し、あるべき世界を取り戻すのが目的』

がたんと、車体が大きく揺れた。

(聖杯戦争を止められたら、世界はあるべき姿に戻るのかな。)

レジスタンスの人達も、戦争は嫌だと思ってくれているといいな……)

道のりは遠く、日は傾き、やがて深い夜が訪れた。

「……変な時間に起きちゃったよー」

日のある内に進み、夜は車体を止めて休む。

その決まり事通りに自室で眠っていた私だったが、夜中の3時頃に目を覚ましてしまった。

「歩けば眠くなるかな……」

廊下に出てみる。足元を照らす緑の光、静かな世界。

運転室まで歩いてみると、フロントガラスから満点の星空が見えた。

「外、出てみようか」

胸元につけた四角いエメラルドを指先で触る。

今はキルケーから貰った宝石の力がある。寝間着でも、過剰な暑さや寒さ、紫外線から体を守ってくれるはずだ。

アスカの部屋の前を通ったが、起きている気配はなかった。そつと、車外へ出る。

「……」

吐いた息が白くなる。ひんやりと冷たい空気が喉から肺へ。

月の無い夜。砂の大地が地平線まで続き、空は雲一つ無い深い青だった。

でも何よりも私の目を奪ったのは、その星空。煌めく無数の光は、瞬いて、静かに燃

えている。

強く輝く星が星座を形作り、その狭間に、彼方にある紫の星雲が薄く広がっていた。そんな星空が世界の果てまで続いているのだ。どれほど見ても飽きることなど無い。

「……………あれ？」

瞳を地上近くに戻すと、人影があつた。目を凝らすと正体が分かつた、アスカのアーチャーだ。

「……………アーチャー」

近寄つて声をかけてみるが、反応はない。

一定間隔で繰り返される落ち着いた呼吸……………驚くべき事に、彼は立ったまま眠つてしまつていた。

(すごく疲れているのかな……………)

彼は何時だつて警戒を怠ること無く、私達を守つてくれている。

その心労はいかほどのものだろう、きつと、彼自身も気がつかない内に疲れが溜まつていたのだ。

「ん……………ん……………」

首を下に向け、ゆらゆら揺れている彼が何かを呟いた。

「……………おいて……………いかないで、くれ……………俺を」

寝言のようなものだろうか。起こそうか起こすまいか、私は判断できずまごまごする。

彼は、また何かぼろりとこぼした。

「……一人にしないでくれ……アルジュナ」

それは、彼自身の真名だった。

第25話 華々しく旅立てば

終わり



## 第26話 誰かを置いていく

「マスター、起こさないであげてください」

後ろを向く。車体の上にバーサーカーが立っている。

「見張り交代しようとしたら、眠っていて。俺がダウンしている間忙しかったみたいですし、お疲れなんでしょうね」

私は目線を彼からアーチャーへ変える。眠っている彼の顔は、下を向いているせいで伺えない。

バーサーカーが上から語りかけてきた。

「アーチャー殿は、自分が眠っていたと知れば自分自身に怒るでしょう。」

なので……起こさず眠らせています。途中で起こすより、とことん眠らせてあげる方が身のためだ」

見るのを止めて、バーサーカーに目を向けるために首を上げると、彼の背後には無数の星が暖かそうに煌めいていた。

「……なんでバーサーカーはアーチャーに優しいの？」

地下都市に住んでいた頃から、彼らにはバーチャル囲碁を打つ程度の交流があることは知っていたが……彼の態度には親愛以上の感情が見て取れる。優しくする理由がとても気になるので聞いてみた。

「うーん、似たもの同士なんですよ、俺とアーチャー殿」

照れ隠しなのか、短い黒の髪をがさがさと掻きながら答えるバーサーカー。

「……大切な人に置いていかれた者同士、なんです、実はね」

彼は立ったまま眠っているアーチャーを緑の瞳でじっと見つめる。その眼差しに込められた意味は、私には分からない。

「これを話したこと、アーチャー殿には内緒でお願いします、我がマスター」

「うん」

冷え切った荒野にいる私は、彼の内緒のお願いにこくと頷いた。

「……サーヴァントも、夢を見るの?」

車体の上であぐらをかいて座り始めるバーサーカー。

「基本は見ないはずなのだけど……この世界はへんてこだからなあ……」

私の質問に、腕を組んで、困ったような表情を見せた。

「……バーサーカーも、夢を見るの?」

返される言葉は想像出来たけど、それでも彼に聞いてみる。

「秘密」

思っていた通りの答えを言ってから、人差し指を立てて、唇に軽くつけた彼。その背後で、遠い星々が燃えている。

荒野の乾いた冷たい風が、私の桃色の短い髪を揺らした。

「……アーチャー殿が目を覚ました時に目撃者が多いと可哀想だ。

ささ、マスターは部屋に戻って戻って」

両手で何かをすくいあげるような動作で、車内に帰るように促される。

「うん。お休み、バーサーカー」

就寝の挨拶をすると、彼は小さく微笑んだ。

後ろ髪を引かれる思いであったが、大人しく彼の言葉に従って、冷たいタラップを登り、適温に保たれた車の中へ。

「……眠いけど、何か夢見そう」

まぶたをそつと閉じてみると、先ほどまで見ていた星空がきらきらと脳裏に焼き付いていた。

「夢を見続ければ、バーサーカーの真名、分かるかな」

小さいあくびを一つ出してから、廊下を静かに歩いて部屋に戻り、薄い毛布の中で身を丸めて眠ってみた。

「お嬢さん、お嬢さん」

バーサーカーのものよりずっと大人の……老人の声が聞こえて、それと一緒に私の体が揺さぶられた。

「どこのごなたか知らないが、板の間で眠ると風邪を引いてしまう」

目を開けると、自分が薄暗い部屋で横たわっているという事が分かった。体を起こす。

「しかし驚いた……私がうとうととしている間に、なんの前触れもなく少女が現れるとは」

ぺたんと座ったまま、体をひねって声の主を見る。

飾り気のない男物の着物を身に付けた、髭を伸ばした白髪のおじいちゃんだ。

顔は痩せていて、目の回りには無数のしわがある。

「もしや……おとぎ話に伝え聞く天女ですか？」

その姿を見て、ずいぶんと高齢なのだろうと私は感じた。

「天女……ではないです、どこにでもいる人間です」

足と膝をももぞと動かし、目の前の老人へ真っ直ぐ顔を向けられるよう、ねじれた

姿勢を正した。

老人の後ろには火の灯ったろうそくで照らされた机があり、墨や筆、積まれた書物が置かれていた。

「えっと、何を……していたのですか？」

私がそう聞くと、老人は気恥ずかしそうな笑みを浮かべた。

「仕事……いや、身辺の整理と言いましようか。」

覚悟していた事とはいえ、なにぶん全て急の事でしたから、慌ててまとめているのです」

彼はそつと立ち上がると、ろうそくに、金属で出来た小さな鐘のような物をかぶせて火を消した。

温かみのある光に満たされていた部屋は、温度のない暗闇へ一瞬の内に移り変わる。

部屋に、老人の声だけが響く。

「……あと一月もしない内に、私は死ぬのです」

板の間の上に、足音がして、軽い扉が横へ開いた。

月の青白い光がそこから差しして、板の貼られた縁側にいる彼を照らす。

眼差しを夜空に投げながら、しゃんと背を伸ばし立っている老人の体は、とても死へ向かっているようには見えなかった。

「どうして、ですか」

「うん……？」

老人がゆつくりと首を動かして、私を優しげに見つめた。

「追いかけて行くのですよ、置いていかれてしまいましたからね」

「誰を？」

「上様です。ははは……」

軽く笑う声に込められていたのは、寂しきという感情。

「死ぬ前に天女様へ白状しますと、私、あの人の事が好きだったのです」

次の声に込められていたのは、恥じらいの気持ち。

「刃を向けた事もあります、どうして自分がこのような目にと、天を呪った事もあります。」

「けれどやはり……」

目と目があう。長い時を生きてきただろうに、そこには少年のような煌めきがあった。

「側にいたいという、気持ちがありました。」

死ぬより恥ずかしい振る舞いでしたが、頭を方々に下げ、帰って来たのです、あの人の元に」

月の光を取り込んで、燃えるように輝く緑の瞳。

「主君が死んだからと言つて、追い腹……切腹などつまらぬ事をするつもりはありませんが、そんな事をしなくとも、まあ、ぼちぼち迎えに来てくださるでしょう」

その瞬間、私は目の前の見知らぬ老人の正体に気がついてしまった。

「しかし、あの方と同じ極楽へは行ける筈もないでしょうな。私は殺しすぎた、地獄より恐ろしい場所へと行くのでしよう」

心臓がドクンと跳ねて、それからバクバクと拍動が速くなる。

「……見回りの者に貴女の存在が知られると厄介な事になる。

ささ、天女様もいるべき場所へと帰つて帰つて」

私は目の前の彼の名を呼ぼうと口を少しだけ開いたが、それを知らない事実を思い出し、唇を噛んだ。

締め付けられるような感覚の胸に手を置いて、彼へ絞り出すように言葉を返す。

「帰る場所、無いんです。私、旅をしているから」

緑の瞳を丸くして、彼はおどけたような表情をした。

「それは実に大変ですな。しかし、その内どこかへたどり着けるものです、帰れる場所も見つかりましょう」

風が遠い場所の木々をざわつかせる。青い葉が、彼の足下へと落ちた。

「貴方の名前を教えてください！」

私は叫ぶ、胸元を両手で強く押さえながら。

風は強くなり、自分の桃色の髪が激しく揺れて、ちらちらと視界に入る。

「■■■■、おや？」

老人は立つたまま首を傾げた。

「言えぬのか。呪いか何か……困った、いや、ならば……」

飛んでくる木の葉を指でつまみ、いたずらっぽく、にたりと笑う。

その表情には、『彼』の面影があつて。

「書けばよいのか！ 至極単純明快！ あーっはっはっはっはっ！」

体を揺らしながら声をあげて大笑いして。それから、ぐらりと崩れて。

「……あつ」

私は小さく声を出す。ぱったりと倒れた老人が、再び起き上がる事はなかった。

「……やっぱり、変な夢だった」

デジタル時計の時間表示は午前6時。

私は、どきどきしている心臓を服の上から撫でながら、見た夢の内容についてこんこ



んと考え込んでいた。

「アーチャー、元気ないのです？ わたくしの分の栄養ブロックをあげましょうか？  
ちよこつと甘くて美味しいですわよ」

「いえ……何でもありません、お気になさらず」

「不調でしたら、早めに伝えてくださいね」

「はい、我がマスター」

アスカとアーチャーは穏やかな会話をしながら朝ご飯を食べている。

私は何となく落ち着かない気持ちで、アルミの包装をぴりりと雑に破いた。

「マスター、どうかしたのか？」

何かを感じ取ったのか、ハンドルを操りながらバーサーカーが声をかけてくる。

「なんでもないよ……」

原因は彼にあるのだが、ストレートにそう伝えるわけにもいかず、私はもやもやした  
心持ちのまま答えた。

「んー……そうか」

風にさらされた荒い地面を車は走る。振動でかたかたと体が揺れた。

「『上級都市レグルス』ってどんな場所だろうね」

どんよりとした気持ちを切り替えるべく、バーサーカーに質問してみる。

「俺達が元々住んでいた地下都市が普通で、この間キルケーと遭遇したのが実験都市だった。」

さて、どんな形態なのか想像もつかないな」

私と彼の会話に、朝ご飯を食べ終わったアスカが混ざってきた。

「……幼い頃、わたくしはお母様と一緒に『上級都市ピオーネ』に住んで居ましたが」

「そうなんだ、だから上級都市の存在を知っていたんだね」

都市の種類はともかく、その都市の名前をどうしてアスカが知っていたのか、少し不思議だった。

まさか、上級都市に住んでいただけでなく、生まれ故郷でもあったとは。

「……どのような暮らしをしていたのかは、幼すぎて覚えていません」

その重たげな口振りは、知らないというより、「話したくない」という心情が込められているように感じた。

「えつと、『上級都市レグルス』で、誰かに出会えるといいね、映像メッセージを残してくれたレジスタンスの人達とか」

「え、ええ、そうですわね」

慌てて話題を変えようとしたが、時すでに遅し。車内の空気は重苦しいものに。

アーチャーは落ち着かないのか、頭を小さく動かし、ヘッドギア内側の目線をうろろろさせている。

「あの」

そんな彼が、唐突に口を開いた。

「スローネが持たせてくれたアイスクリームが倉庫にあります、取ってきましようか」

「うん、お願い」

気分が上向きになるかは分からないが、私はアーチャーにお願いをする。

（アイス……か）

映画や電子ライブラリで存在は知っていても、食べたことはない魅惑の食べ物。

冷たくて甘くて、口に入れると溶けて、ミルクの香りがして、それだけでなく、かつては色んなフレーバーがあつて……。

沈んだ気持ちとわずかな好奇心を抱えたまま、アイスクリームの到着を待った。

「美味しかったね！ アスカ！」

「本当に！ なめらかで、冷たいけれどこっつりしていて……あんな食べ物初めてです！」

私も友達も無事に元気になりました。美味しい食べ物ってすごい。

デザートランナーもトラブルなく進み、ブラックボックスから得られた座標にもうすぐ到着する所だ。

「アーチャー殿、車外に出て、肉眼で確認して貰っても？」

「了解した」

サーヴアント2体が短いやりとりをして、アスカのアーチャーが運転室を出て車体の上へ移動する。

示された座標の数百m手前で停車し、報告を待つ。

前面の大きなフロントガラスから見える景色は、雲一つない青空と、目印など何も無い黄色の荒地地だ。

『……あれは、駄目ですね』

キルケーがくれた貝殻を加工して作られた通信機器とは別の、無骨な小型レシーバーから伝達された声が、部屋にスピーカーを通して響く。

『都市の天井が大きく破壊されているのが見えます、そこから、相当な量の砂が流れ落ちている。』

完全なる廃墟です、人の気配は感じられません』

私はがくりと肩を落とした。

「反逆、うまくいかなかったんだ……」

巨人と戦う武器を求めて探索したあの廃墟を思い出す。あの場所と同じように、何者かに破壊されてしまったのだろうか。

気落ちする私やアスカ。しかし、バーサーカーの態度は変わらない。

「けれど、物資や情報はあるはずだ。」

誰に破壊されたのか、レジスタンスとは何なのか、降りて手がかりを探してみよう」

その提案に、私達2人は無言で頷いた。まだこの世界について何も知らないのだ、情報を集めなければ。

「アーチャー殿、車体ごと降りられそうな箇所はありますか？」

『瓦礫が積もりスロープのようになっていいる部分が見えます、そこからならば』

「案内を頼む」

車体が動き、座標に近づくにつれ、停車していた場所からでは見えなかった破壊の痕跡が目の前に現れてきた。

「う……」

その光景に、私は思わず身を固くしてしまった。

巨大な円の形にくり抜かれた穴、直径は100m以上あり、断面からは部屋や廊下の様なものが見え、横から吹き込んだ砂で半ば埋もれている。そんな円が1つや2つでは

なく、数え切れないほど荒野に空いているのだ。

後方の席に座っているアスカを見てみると、私と同じように顔を強ばらせていた。

「こんな破壊……誰がしたの……？」

口に出せば、私の胸に疑問がふつふつと湧いてくる。

通常のサーヴアントか、機械化サーヴアントか、それともAIの駆るワームロボットのような巨大な機械か。

風が穴へ入っていく度に、不気味な音が響く。映画で聞いた狼の遠吠えのような、虚ろで寂しげな音。

『そこです、04』

穴の縁に近づくと、確かに、瓦礫がスロープのように降り積もっている場所があった。

「よつと……」

アーチャーの指示を受けながら、バーサーカーはハンドルを動かす。

車輪が瓦礫を掴み、ごとごとと揺れつつも下へと降りていく。

シートベルトを巻いた体で、ひやひやしながら座ること数分、無事、デザートランナーは一番下まで降りることが出来た。

「降りてアーチャー殿と一緒に周囲を確認してくる、2人はどうする？」

「もちろん降りますわ」

「うん、私も」

全員で行動した方が安全だし、令呪の使用などの緊急の判断も素早く行える。

身だしなみを整え、外部の環境から私達を守ってくれる宝石を付けているか確認して、外へ出る。

「……」

私は建物の残骸と砂を踏みながら、デザートランナーの横に立ち、首を思いつきりそらして都市を見上げる。

「深い……」

地上と地下で100m近い高低差があるだろうか、空はあまりにも遠くにある。

くり抜かれた都市の断面は多重構造で、そこからぼろぼろと破片をこぼし続けた。

次に耳を澄ましてみる。吹き抜ける風の音以外、何も聞こえない。

「誰か居ないのかな……」

「この広場には生活の痕跡は見当たらないな。」

紫外線のせいかな風化が激しい、何年この場所が放置されているかの判別は難しいな

「……」

私がバーサーカーと話しているのと同じように、アスカも自らのサーヴァントと話し

込んでいる。

「上から見えた破壊と攻撃の跡から、相当広い都市だと考えますが……」

「そうですわね、アーチャー。探索は大変そう……」

いくつもの道が見えるが、崩れているものもあり、情報と物資の収集は一筋縄ではいかなさそうだ。

「私とバーサーカーで辺りを少し見てくるね。アスカとアーチャーはここに残ってデザートランナーを守って」

「分かりましたわ」

「了解しました」

生命線である車の守護を2人に任せ、私とバーサーカーはかつての上級都市の探索を開始した。

「……バーサーカー、マッピングしてる？」

「しているよー」

タブレットを右手で持って上機嫌で歩いている彼。

「デバイスが久しぶり使えて嬉しいぜ、自分の持っているものは使わないと無駄だからな」



彼はずいぶん前に違法入手した生体内蔵デバイスでタブレットを操作し、正確な都市の地図データを書き込んでいる。

人工石で作られた灰色の壁は、ぼろぼろと欠けている箇所もあり、危惧したとおり、ぐしやりと潰れた道もあった。

「この隙間……私なら通れそう」

目の前の道を見る。

石の柱やパネルのようなものが斜めになって倒れているが、私の体躯であつたら向こう側に抜けられそうさ。

「通つてもいいけれど、俺が追いつくまで先に行くなよ」

「分かった」

返事をしてから、瓦礫の隙間に足を踏み入れる。上を見るが、突然崩れてくる事はなさそうさ。

手をつた込み、足を曲げて、胴体を滑り込ませ、息を乱しながらも通り抜けられた。

「えーつと、霊体化して……駄目か、それだとマッピングが出来ないし。」

「マスター！ ちょっと待っててくれ」

「うん」

返事をしながら、きよろきよろと辺りを見渡す。

デザートランナーを降ろした場所よりはやや狭いけれど、十分な広さのある空間だ。何かによってぶち抜かれた丸い穴から入る光で、安心感のある明るさに包まれている。

ふと、気になるものが視界に入った。

「花……？」

赤い花のようなものが、破片が積もって出来た丘に、2輪、寄り添うように咲いている。

思わず目を奪われ、足を前に出す。

「……綺麗」

少し歩いた先には、天井が壊れ、強い光が差し込む円形の広々とした空間があった。空に浮かんできらきらと輝く砂埃。

「コロッセオみたいだ……」

独り言を呟きながら観察する。

物語の中に出てきた円形闘技場に、広場の形は似ていた。

上から見たのならば、すり鉢状になっているであろう、観客席と戦いの場が設けられた施設。

その中心、先ほど視界に入った丘に、花と、覆うように赤いものが降り積もっていた。

赤いものは、ガラスを引き伸ばして作られた花びらだった。

花びらに埋もれるように、金の糸の束がある。

金と絹を寄り合わせて紡がれたかのようなそれらは、赤いガラスの下に、静かに沈んでいた。

「……誰だ」

敵意よりも、気だるさが勝る声。音は、花びらの積もる小山から聞こえた。

誰か、いる。

「——っ」

私は息を飲んだ。

金の糸と花卉が舞い、その向こう側から誰かが身を起こしたからだ。

花びらで出来た赤い渦の向こう側に見えるその形は、背の低い少女のもの。

緻密な白いレースで縁取られた真っ赤なドレスを身に付け、輝く金の具足で砂を踏む。

(すく……綺麗な……)

肌は石膏の像の様に白色で、滑らか。小さな唇は熟れた果実の如く、朝露に濡れたかのように艶めいている。

糸……髪と同じ、金のまつげに縁取られた白いまぶたがそつと開かれた。

中に納められていたのは、上質なオリーブの油を思わせる輝く緑の瞳。憂いと寂しさを宿した眼差しが、崩れかけの闘技場へ向けられた。

「……」

少女が唇をわずかに開き、乾いた世界の大気を吸う。

華奢な体躯など気にならないほど、背負っている存在感は大きく、美しいものだった。少女は顔にかかる長い髪を手で背中へと流し、ついた砂を白魚のような指先で払うと、ガラスの花纏う姿で、私を小山から見下ろした。

人々の上に立つ者……そんな威風を備えた少女は、瓦礫の上を雌鹿のように軽やかに跳び、私の直ぐ側に寄る。

手には、赤い金属で作られた複雑な形の長剣が握られていた。

弧をつなぎ合わせたような刀身が、回す手首と共にくるりとひるがえり、刃先は白く輝きを放ち。

たつぷりの布で作られた真紅のドレスが、動きにあわせてふわりと揺れる。

（——薔薇の、王）

私を感じた印象を言葉にすれば、まさしくそれだった。

「無粋、よな」

そう言い放った少女のオリーブ色の大きな瞳に、私の、驚いてほかんと口を開けた間

抜けな顔が映っている。

吐息が触れる程の距離まで近づいて……そのまま彼女は通り過ぎた。

砂塵と花卉が共に舞う。

「えっ？」

私は硬直しそうだった体を無理やり動かして、後方へ向く。

赤い剣を両の手で握った少女は大きく飛ぶと、すりばちのようになった円形闘技場の段に降り立ち、駆ける。

その小さな体に襲いかかるのは、無数の黒い人影。

鎌や剣などの武器を手に持ち、ぎこちなく振りかぶるそれらを、彼女は一太刀で切り捨てていく。

切られた者は砂に変わりつつ、その断面から赤い花卉を吹き出した。

暗い砂で出来た影を切り裂いて、少女は駆け、真紅の布をひらひらと踊らせながら、1人戦い続ける。

「……くっ」

敵の攻撃が届き、とうとう彼女の右頬を小さく切った。さらりとした血が流れ、白い肌の上に幅のある赤い滝を作る。

しかし彼女は痛みにはひるみもせず、壁を蹴り、勢いをつけて宙へ跳び、横へと回りな

がら剣で敵を切り、倒していく。

再び舞う花卉、その中を流れていく金の髪と真紅のドレス。

孤独な薔薇の王は、現れた黒い敵を全て切つて捨てると、舞台のようになっていた建物の断面から、廃墟の地面に柔らかく着地した。

花卉舞う舞踏が終わる。細かな砂が舞い上がり、大気を白く濁らせて、直ぐに落ちた。

「——答えよ」

顔を半ば隠す髪の合間から、憂いを湛えたオリブ色の瞳が覗いている。

問いかける少女の声は堂々としたもので、私はそれだけで、縫い止められたように動けなくなつてしまった。

「そなたが、余の敵か？」

血を流しながら、剣を携え、凜と立つ姿。日の光が上から降り注ぐ。

まるで歌劇の役者のようでも、古代の皇帝のようでもあつた。

(すごく綺麗……なのに……)

しかしその胸の内に、どうしようもない寂しさを抱えている事を、私は感じ取つてしまったのだ。

「あ……」

震えながら、重たく感じる唇を開く。

彼女に、孤独を背負った彼女に、何かを言わなければ、  
気持ちをも、伝えなくては。

「私は——」

第26話 誰かを置いていく

終わり

## 第8章 されど『想い』だけは永久（とわ）に続く

### 第27話 心、解かして

暗い影で出来たような敵を全て斬り伏せた少女は、光降り注ぐ小山に立つ。

真紅のドレスを身に纏うその美しい姿に見とれ、立ち尽くしている私に声が投げかけられた。

「そなたが、余の敵か？」

震える全身を諫め、緊張からくる冷や汗で濡れた手を握りしめながら、私は気持ちを伝えるべく懸命に答える。

「私、は、モモタ・トバルカイン、といます。敵じゃ……ないです」

私の答えを聞いた少女は、首を気だるげに傾けた。結んでいない金の髪がさらりと揺れ動いて、彼女の物憂げな顔を覆う。

敵の攻撃によって出来た白い頬の傷は治らないままで、赤い血が流れ、ぼたりぼたりと顎から垂れ落ちていた。

「……ではよい」



それだけを言うと、剣を砂と瓦礫が積もつて出来た丘に刺し、少女はゆるゆると身を横たえた。

「余は眠る、起こしたら怒るぞ」

まるで糸が切れた人形のように、彼女はその身を停止させる。

「……あの」

「余は寝ている！ 寝てーいーるー！」

声をかけてみるが、投げやりになっている子どものような口調で突っぱねられた。

「……ふんー！」

花卉に埋もれ、髪を無造作に砂の上に投げ出して目を閉じている、謎の少女。

先ほどの動きを見るに、サーヴァント、もしくはそれに近い存在だとは分かるが、何者なのだろう。

「マスター、すごい音がしたけれど大丈夫かー!？」

崩れ落ちた柱や天井の残骸を取り除いて、後から軽い鎧をかちやかちや音たてながらやって来たバーサーカーは、私を見て、その次に砂の丘に眠る少女を見た。

「……サーヴァントか」

「助けて……くれたんだけど」

「けど？ 何かあったのか？」

事情をよく知らない彼に、私は起きた出来事を説明する。

「眠りたいんだって、起こしたら怒るって……」

「困ったな、ようやく見つけた手がかりなのに」

バーサーカーは暗い緑の目を細めた。

「よし、交渉をしよう」

自らの手のひらを拳でぽんと叩くと、彼は無遠慮にずんずんと彼女に近づいた。

「新顔か……余は寝るのだ、構うな」

不機嫌そうな声を出す少女。

「構いますよ。我らは流浪の旅人、少しでも情報が欲しいのです」

その態度に気圧されずに、話しかける私のサーヴァント。

「無礼な男だ……余にもう少し気力があれば、首を切り、はね飛ばしているところであつた……」

すねたような声色だが、バーサーカーと少女の会話は続いている。とりつく島のなかつた私とは大違いだ。

……最も、彼の会話術は相手の神経を逆撫でする事でやり取りを成立させるものなので、真似したいとは思わないけれど。

「私はバーサーカー04、あなたは？」

「セイバー0066……しかし、慣例に従った数字の羅列など寂しからう。

紅の剣士、赤セイバーと呼ぶが良い」

謎のサーヴァントはセイバーのクラスであるらしい。知っている、剣にまつわる伝説持つ英雄が当てはめられるクラスだ。

「2、3個でいい。聞きたい事がある」

「ええい！ 分からね奴だな！」

少女は体を素早く起こすと、砂に刺していた剣の柄を右手で掴んだ。

「余に構うな！ あっちへいけ！」

そして、左の手で赤いガラスで出来た造花を持ち、胸元へ寄せる。

「マスターから贈られたこの薔薇を見つめながら！ 死の眠りにつくのが余の望みなのだ！」

邪魔立て、すれば……切……る……」

初めこそ怒りと威勢が込められていた声だったが、次第に力が失われ、剣にもたれかかるようにへたり込んでしまった。

「頭痛が……うう……」

顔は青ざめ、握れなくなった剣が砂埃を立てながら、ぱたんと横倒しになる。

「……赤きセイバーよ」

「なんだ！」

薔薇だけを抱えた少女は、いらだちの混ざった声をバーサーカーに飛ばす。

私は2体の会話をはらはらしつつ見守っていた。

「死ぬ前に、うまいものが食いたいと思ったことはないか？」

「……なんだと？」

少女は虚を突かれたのか、素直に言葉を返してしまふ。

「冷たいアイスクリームがあるぞ。合成粉乳で作られたものじゃない、牛からとったク  
リームで出来た最高級品だ」

「……私は混乱した。」

（えっ？　なんでそこでアイスを勧めるの？）

体調が悪そうなのであれば、それを心配する言葉をかけるとかが、一般的な思考であ  
ろう。

しかし、私のサーヴァントは何を考えているのか、美味しいアイスを交渉の場に持ち  
出し始めた。

「……そんなもので釣られる余ではない」

彼女は視線を横に向け、一度断った。

「……が、この砂ばかりの世界でそのような物が真にあるのか、確かめてみたくはある

な

オリブ色の明るい瞳が、きよろきよろと左右に泳ぐ。

「よし！　じゃあアイス食おうぜ！　アイス！」

バーサーカーはにんまり笑いながら拳を天に突き上げた。

「……えっ？」

どうしよう、理解が追いつかない。

サーヴァントとは、アーチャー961みたいな、人智を超えた存在で、強くて、格好良くて、美しく、油断なんてしないで、そんな、アイスに釣られるような存在では……。

「時にバーサーカー04よ、フレーバーはいくつあるのだ？」

「ミルクのみです」

「むー……余は蜂蜜や桃、薔薇を味わいたい気分だったのだがな……。

アイスを食べたなら！　余はここに戻って眠るからな！　な！」

赤い少女はガラスの薔薇と剣を手に持ち、てくてくとバーサーカーの後ろをついて歩いていく。

私だけが、砂に埋もれかけの円形闘技場にぽつねんと残された。

(……アイスって、何なのだろう)

サーヴァントすら魅了するあの冷たい甘いお菓子の存在に、私は強くうろたえた。

タレットにマツピングされた通りに道に戻って、デザートランナーの側まで帰ってきた私とバーサーカー、そしてセイバー。

アスカとアーチャーの短い自己紹介もそこそこに、赤の少女に紙カップ入りアイスとプラスチック製スプーンが手渡される。

「うむ……これは確かにアイスクリーム……余を毘へ誘う謀はかりごとではなかったか……」

近くの瓦礫に腰をかけ、足をぶらぶらさせながらセイバーは真剣な眼差しでアイスを見つめた。

手に持つ半透明のスプーンで菓子の表面を突き刺し、もこもこ白い中身を浮き上がらせる。

そして口を開けて、冷たい中身を味わう。

「んー……なんと美味なる氷菓か！ 滑らかな舌触り……絹のような、新雪のような……」

ぱたぱたと空を蹴り、乾いた大気をかき混ぜる足。

「深い味わいのクリームが舌の上を滑り、何のとつかかりもなく喉へと落ちていく……  
たまらぬ……」

まぶたを閉じ、うっとりとしてアイスに舌鼓を打つセイバー。冷たいお菓子はあつという

間になくなってしまいそうだ。

「人である以上、甘味には勝てないんだな……分かったかい、モモ」

貴重な粉のコーヒーをカップにお湯を注いで作りつつ、バーサーカーは私に語りかけた。

「美味な菓子であった……感謝しよう、見知らぬ旅人達よ」

アイスを食べ終わったセイバーは、初めて出会ったときの気だるげな印象から一転して、華やかな笑顔を見せた。

「うむ、うむ！」

次に、目をきらきらと輝かせて周りを見る。緑の瞳に映る瓦礫、デザートランナー、そして。

「モモタ・トバルカインに、アスカ・ピオーネ……と言ったか？　なんと見目麗しい少女か！」

「あちらに立つ弓兵も……おお！　堂々とした佇まいはまるで古代の主神像のようではない！」

セイバーは私達3人を褒めそやすと、胸に手を当て、嬉しそうに語り出す。  
「瞳に映す美も重要なのだ。」

「この世界は……都市は画一的で、外は砂と荒野ばかりでつまらぬ！」

まぶたの裏で歌劇を幾度も再演するのも、飽きてきたところであつた……」

それだけに留まらず、瓦礫からびよんと軽い調子で飛び降りると、ドレスをひらひらとさせながら、私達の周りをくるくると歩く。

「最後にこのような美を見ることができ、余は実に幸運なサーヴァントだ……」

バーサーカーがコーヒーを片手に持ったまま、セイバーの様子を観察していた。

「俺はどうなのですか？ 真紅のセイバー」

「む」

自らの行動を中絶させられた不満で、彼女の頬がぶくりと膨れた。

「見目は悪くないが……性根が好かぬ。協力すれど、信頼することはない。余の魂が警戒をしている」

「なるほどなるほど？ コーヒーいるかい」

「しかし、どれほど怪しい相手であろうと、贈り物を無碍にはできぬ。

ただだこう……純真なマスターの前で毒を入れるほど愚か者ではあるまい……」  
立つたままコーヒーを受け取り、そつと口に含むセイバー。

「……味はともかく、氷菓の後の苦味は心地よい」

遠くを見つめるような眼差しをしたまま、コーヒーをこくこくと飲むと、カップをバーサーカーに返した。



「……さて、受け取るばかりで与えない、というのも余の信条に反する。

知っている事は少ないが、出来る限りはそなた達に話すとしよう」

ぼすりと、再び瓦礫に彼女は座った。

おずおずと、静かに待つていたアスカが口を開く。

「赤いセイバーはレジスタンスの一員なのですか？ この都市の崩壊の理由は知っています……」

「待つのだアスカよ。いくつか認識の齟齬が生まれているのでそこから正そう」

私達は丁寧に言葉を返してくれるセイバーをじつと見る。

「余はレジスタンスと呼ばれるものの一員ではない。そなたらと同じ、砂の海に行く旅人だったのだ」

彼女は丸い穴から覗く空を指差しながら、話を始めた。

「そこに崩壊した建物の破片で出来たスロープがあるな？ 余と余のマスターもそこから降りてきたのだ。」

別の広場に、移動に使った車がある、4輪のものだ」

廊下から吹き抜けてきた風が、彼女のドレスの裾を揺らした。

臨戦態勢のまま構えているアーチャーの白い服も、あわせてひらひらと動く。

「……余の始まりから話そう。」

AIとやらが定めた上流階級、その一人に召喚された余は、オークションにかけられるマスターに競り落とされた……らしい」

「らしい？」

バーサーカーが彼女の言葉を繰り返した。こくんとセイバーは頷く。

「どうやらオークション後に記憶処理が行われたようだ……忌々しい、故に実感がないのだ」

その話を聞き、私はうなだれる。

サーヴァントはこの世界において物、人格は無視されている。その事実を思い出したから。

例としては、持ち主が変更された際の記憶処理や、非人道的な方法で作られている機械化サーヴァントなど。

「余を買ったマスターは芸術家であった、余の事も尊重してくれた。

そなた達とアーチャー、バーサーカーのような魔術的な繋がりこそ無かったが、関係は良好であった。

歌い、踊り、芸術を極め……余は、何の責任も背負わない、童女の如くすごしていたのだ……」

セイバーは恥じらうように顔を伏せてから、胸に飾っている赤い花を指先でいじる。

「これはだな、余の奏……マスターが作ってくれた薔薇の造花なのだ

ガラスを熱し、伸ばし、花弁へとなるように小さく切つては、摘まんで、吹いて……」

慈しむような優しい語り方は、私の脳裏にある光景を鮮明に浮かべさせた。美しい彼女のためだけに、炬の前に立ち、熱くとろけたガラスに挑み、永遠に朽ちぬ薔薇を作る彼女のマスターの姿。

それを嬉しそうに眺めている、火の熱で頬を赤く染めた、セイバーの姿。

「もちろん！ 余は芸術においても万能の天才故な、この様な物だとして自らの手で作れようが……しかしな、マスターが作ってくれたということが嬉しいのだ」

指が触れる度に花は小さく動いて、きらりきらりと輝いた。

「嬉し……かったのだ」

声は小さく、か細くなつて、顔を伏せたままセイバーはしばらく沈黙した。

遠くから、風に揺らされた金属部品の軋む音がする。

「……話を戻そう」

ぱつと上げた彼女の顔にある瞳は、少しだけ潤んでいるように見えたが、その理由について言及する者など誰もいなかった。

セイバーの話は続く。

「都市運営のAIが聖杯戦争を宣言し、人間と人間の殺し合いが始まった。

持たざる者が、持つ者へ牙を剥いた」

アスカが苦しげな表情をした。語るセイバーの顔を私はじつと見続ける。

「マスターは富を、生存権を持つ者であった。故に、誰の助けも得られず、敵対者が次々と襲いかかったのだ。

余は剣を取ったが……マスターは争いを望まなかった、涙を流し、首を横に振った」

セイバーにすぎりつき、剣を振るおうとする腕を止めさせた、誰かの姿が見えたような気がした。

「余のマスターは美を理解する芸術家ではあったが……戦う者ではなかった。

他者の命を踏みにしてまで生きようという、闘志は無かったのだ」

ずいぶんと遠い場所から、がらがらと何かが崩れ落ちる音がする

「余とマスターは車を手に入れ、逃げた。燃料が尽きるまで走り、この都市にたどり着いた、という訳だな」

セイバーはそこまで話すと、瞳を伏せて押し黙る。

丸い空の縁から砂がさらさらとこぼれ落ち、円錐形の小山の上に静かに降り積もった。

「余の話はこれで終わりだ。そなた達の旅の事情は聞かぬ、色々あるであろうしな」

彼女はさっと立ち上がり、剣を持って去ろうとする。

「丘に戻る、マスターを待たせているのでな」

2輪の薔薇の造花が刺さっていた丘、そこで眠りにつこうとしていた彼女。

(セイバーのマスターは……死んでしまったんだ……)

それをはつきりと彼女は口にしなかったが、振る舞いや言葉で、私は事実を感じ取った。

私達へ向けられた背には、ただ寂寥感のみがある。

「お待ちになつて」

そんな彼女をアスカが呼び止めた。

「む?」

セイバーは振り返り小首を傾げた。額の上にある、ぴんと立った一本の金の髪がふよふよ揺れる。

アスカは制服のスカートの裾をひらひらさせながらデザートランナーのタラップを登り、中へ戻ると、何かを持って出てきた。

「……櫛?」

急いで取つて来た物は、静電気が発生しないように合成樹脂で作られた白い櫛だった。

息を乱しながらアスカが答える。

「綺麗な髪ですのに、少し乱れていますから、解かせて下さいな」

「むう……そうだな、結んでもいないし、絡まって、砂もついている……」

セイバーはアスカに言われて始めて気になったのか、腰の辺りまで伸びている自分の髪を触った。

「頬に血もついています、綺麗に拭きましよう?」

「アスカの言うとおりで……マスターに美しくない姿は見せられないからな」

彼女の提案を、はにかみつつ受け入れるセイバー。

「よいぞ、余の後ろに立つがいい。梳すく榮譽を与えよう」

「はい」

セイバーが石の上に座ると、アスカは髪に櫛を通し始めた。

白い手の上に金の髪が乗り、櫛の歯がもつれた場所を優しく解ほぐしていく。

そんな穏やかで微笑ましい時間が続いた。

「うむ……先ほどまでの姿から少しは見違えたか?」

「髪がきらきら光って、とても素敵です、セイバー」

「麗しい少女にそう臆面も無く言われると、流石の余も照れる……」

セイバーを見上げながらアスカが彼女をほめる。

こうして並んでいる所を見ると、微妙な身長差がよく分かる。140cmであるアスカより、セイバーの方が10cmほど高い。

(あと……胸、の大きさとかも、違う……うう……)

赤いセイバーの体は、小さい中に良いもの全部ぎゅつと詰まっている……トランジスタグラマーというか、そんな感じだ。

「しかし困った……また余は貫ってしまったな……」

さらさらになった髪を指に絡ませながらいじるセイバー。

「そうだ！ そなた達、この都市を探索するのであろう？ その間、この白き車を余が守る……というのは」

アーチャーが彼女の提案に指先を動かしてから反応した。

「私は……」

「アーチャー殿、セイバー66はデザートランナーに傷を付けることなんて出来ないよ」  
何か話そうとした彼へ、バーサーカーが声をかぶせた。

「大理石のような純白さでありながら、この車輪の無骨な黒が、なんとも言えぬアクセント……」

セイバーは私達を誉めそやした時と同じ様に、瞳をきらきらさせて、あっちへ行ったりこっっちへ行ったりしながら、白い車体を夢中になって見ている。

「美しいものを壊そうとなんてしないって、よく分かるだろう?」  
「……そのようですね」

2体のサーヴァントの意見が一致し、私とアスカの考えも同じとなった。

セイバーに車を任せ、懐中電灯や飲み水に携帯食料、サーヴァント用の液体リソースボトルの予備などを持って、私達は広大な上級都市探索に出発した。

2人より4人の方が探索は進む。

重たい瓦礫も、アーチャーとバーサーカーが協力し合って取り除いてくれるし、私では気がつかなかった手がかりも、アスカが教えてくれる。

3時間後。

都市の探索はスムーズに進み、私達は大きなホールへとたどり着く事ができた。

天井は崩れていないが、電気が通っていないため、中は深い闇に覆われている。持ってきた懐中電灯をかちりと音させながら点けて、足を踏み入れた。

地面には封の開けられた缶詰めや、アルミの袋、飲料水が入っていたであろうプラスチックボトルのゴミがごろごろ。

「これ……パネル?」

天井を照らしてみた。リニアの駅の行き先を表示するような、大きな液晶のパネルが



ぶら下がっている。

砂埃がうつすら被っているが、画面に割れもないし、壊れているようには見えない。「電気があれば動く……かなあ」

ホールの中央にある円柱状の装置をがさがさと探っていたバーサーカーが、声で私達に見つけたものを伝えてくれた。

「内部に自家発電機がある。けれど、燃料がない！」

「デザートランナーから融通できない？」

私は大きな声で返事をしたが、彼は氣落ちした様子で返した。

「難しいだろうな、俺達が旅をする分が無くなってしまう」

細かい瓦礫の中身を探っていたアスカの肩が、落胆と疲れでがっくり落ちるのが見えた。

「起動出来たら、当時の都市の様子が分かるかもしれないのに……」

彼女の言葉を聞きながら、私も同じ様に落ち込む。

アーチャーがタブレットで何かを確認した。

「もうすぐ日没です、安全のために一度戻りましょう」

今日は彼の提案に従い、暗闇から抜け出て、デザートランナーのある広場に帰ることにした。

「ふむ、都市のコンピューターを動かし情報を閲覧したいが、燃料が無いと……」  
「はい」

日はすっかり落ち、過去の攻撃で丸く開けられた空に、星が瞬いている。

4つの懐中電灯が広場の中心に置かれ、廃墟を白く照らしていた。

夕食は塩味のインスタント麺。タンパク質キューブがどっさり入っている特別製のもの。

赤いセイバーにも振る舞い、彼女は上機嫌でそれをもぐもぐ食べた。

夕食の後、私とセイバーは外でこうして話し込んでいる。

「……燃料を得る方法は知っている……が」

瓦礫に腰掛けているセイバーは口ごもった。

「危険すぎる」

白い手を祈るような形に組んで膝上に置き、彼女は黙ってしまった。

デザートランナーの開いている出入り口から、寝室の用意をしているアスカの声が聞こえる。

しばらく、私達の間にそれ以外の音はなかった。

「……私、聖杯戦争を止めるために旅をしているんです」

長い沈黙の後、意を決して旅の理由を話してみる。セイバーがぱつと顔を上げた。

「私とアスカが住んでいた都市は、聖杯戦争のせいで壊されました……沢山の人が亡くなるのも、見てきた」

「そう……だったのか」

金の眉の間に、悲しげなしわが寄った。

「止めるためにも、他の上級都市に行きたいんです。戦争の理由を知りたいんです、首謀者も……」。

私、何も知らない、まだスタートラインにすら立てていない、だから、情報が少しでも欲しくて……！」

気持ちを込めて私は訴えかける。焦燥感が胸にあった。

セイバーは地面の一点を見つめたまましばらく黙っていたが、ゆっくりと立ち上がり、ドレスの裾の砂を払った。

「アスカを呼び、アーチャー961とバーサーカー04をここへ。燃料のある場所を教えよう」

赤い剣が粒子をこぼしながら彼女の手の内に現れ、その後ろにある星は強く瞬いて見えた。

第27話 心、  
解かして  
終わり

## 第28話 永遠を語る夜

「柱につけた傷は……あるな。うむ、ここで曲がる……」

夜の深い闇に包まれた都市を、私やアスカの持つ懐中電灯のか細い光が照らす。

セイバーは彼女なりの目印をつけていたようで、落ちた破片と砂で、狭く複雑になっている通路を、迷うことなく歩いていく。

「真つ直ぐ行けば……みな、そこで止まれ」

携えていた剣を、光の粒子へ変えて仕舞うセイバー。

「アーチャー961よ、弓を仕舞ってほしい……頼めるか？」

彼が首でも動かしたのか、身につけている拡張パーツとヘッドギアが、軋んだような音を立てる。

けれどアーチャーは何も言わず、白い弓を手の内から消した。青い炎が残像として目に焼き付く。

「この柱の影よりそつと覗け……懐中電灯の明かりは良いが、殺意は決して飛ばすな」  
彼女の声は緊迫感で張りつめていた。

頷いてから、私とアスカが懐中電灯を片手に最初に覗く。  
光を動かす。

セイバーと出会った円形闘技場のような丸く広い空間、ぐるりと取り囲むようにある崩れかけの柱には、細工のようなものが彫られている事が、細い光源のもと辛うじて分かる。

明かりを上から中心部へと移動させた時、セイバーの警戒していた存在の正体がかかった。

「——あれ、なんですか?」

アスカの声は強い恐怖でうわずっていた。

……獅子が、そこにいた。大きさは50mほど、金属製の胴体が、当てた懐中電灯の光をてらてらと反射している。

横たえている腕の間に頭を置き、獣が眠るような姿勢で停止していた。

だが、アスカに恐怖を与えた原因は獅子だけではない、その周辺だ。

「う……」

私はそれをはつきりと見てしまった。

風化激しい、白い脆そうな欠片と、細長い筒が溶けてくっついた固まり。

明らかに、それは人骨と、誰かが持っていた武器だった。

人間が惨殺された跡。それが、畑のうねの如くこんもりと獅子の周りに積み上がっている。

「忌々しき機械化サーヴァント。恐らくは、この都市を崩壊させた一因でもあろうな」  
セイバーが柱の影に立ちながら小さい声で話す。

「そして……余のマスターを数週間前に殺した、仇でもある」

彼女は肩を振るわせながら、拳を強く握った。

「あやつも液体リソースで動いている。倒せば、それを得られようが……」

強くなっていく体の震えを止めるためか、セイバーが自らの肩を手で抑えた。

「……一度戻るぞ、あの敵について話さなければ」

彼女の言葉を聞いた私は手首を動かし、懐中電灯の光を機械の獅子から、帰り道へ移動させた。

何事もなく広場にたどり着くと、デザートランナーの横にある空間に、私達は円になるよう感覚を空けながら腰を下ろした。

焚き火代わりに中心にあるのは懐中電灯数個だ。

「獅子の名前を冠する都市を、獅子の形にした機械化サーヴァントに襲わせるとは、襲撃者は悪趣味だな」

座るなりそう発言したバーサーカーを、じとりとセイバーはにらむ。

彼は向けられた感情を涼しい顔で受け流して、緑の瞳で赤いサーヴァントを眺めた。

「バーサーカー」

私なたしなめる意味を込めて名を呼ぶと、彼は口の端をわずかに吊り上げた。

そして。

「……敵は悪趣味であると、補足しただけですけど」

付け足すよう、それだけ言って、今度こそ本当に口をぱくんと閉じた。

「……余は一度あの獣と交戦した事がある。その結果、マスターを失った」

セイバーは張り詰めた口振りで話を始めた。

「ここにたどり着いたばかりの頃の話だ。」

車の燃料を探している最中、機械化サーヴァントの内部に液体リソースがあることに、余とマスターは気づいた」

数日前の戦いを思い出す。確かに、巨人と見紛うばかりの牡牛型の敵を倒した後、中から大量のリソースが得られた。

「なので、食料を探しつつ、小型の物を狩り、燃料を確保しようとしていた」

懐中電灯の白い光に照らされながら、アスカがセイバーをまっすぐ見つめていた。

「……ある日の事だ。マスターを物陰に隠し、敵を切り伏せている所を、あの獅子は卑怯



にも狙ってきた」

彼女の顔が歪む。それが悔しさによるものか、憎しみによるものなのか、私には分からない。

「一撃で……奏者の胸、は、裂けてしまった。

余が剣を振るい、追い払おうとしたが、執拗に迫り、その間にも、奏者は……」  
血濡れの光景が脳裏に浮かぶ。

地面に倒れ込んだ見知らぬマスター、瞳を絶望で細かく揺らしながら、呆然とした表情で見つめる、セイバーの立ち姿。

「余に出来ることは全てした……だが、奏者は間もなく死んだ」

セイバーも何か思い出したのか、荒々しく息を吐いて、それから頭を何度も振った。  
そのよぎった光景を、思考の外へ追い払うかのように。

「……あれは、倒せぬ」

セイバーは視線を私達からそらした。

バーサーカーが右手で空をかき混ぜる動作をしつつ、彼女に話しかける。

「なぜそう言い切るのだ赤き剣士よ、こちらにはアーチャー殿だっついてついているのだぞ。

……大地を割り、天を砕くアーチャー殿だぞ！」

彼女は瞳を廃墟へ向けたまま、バーサーカーの疑問に答える。

「普段は彫像のようにああして眠っているが……殺意を感じ取れば暴れ出す。

余の剣で少しの傷は与えられるが、あの速さではろくに捉えられん。武器や銃なども使ってみたが、まるで効かぬ。

そして何より……あの獅子は執拗に人を狙う、人間そのものに強い憎悪を抱いているかのように」

セイバーの言うとおりののだとしたら、確かに、勝つのは難しそうだ。

「……よしんば倒せたとして、そなた達のマスターが無事ではすむまい」

彼女の顔は暗く、背筋は丸まっている。

「まるで……『ネメアの獅子』のようですね」

アーチャーが話に出た特徴をつなぎ合わせてから、推論を呟いた。ヘッドギアには、懐中電灯の白い光が反射している。

「そうだ……『ネメアの獅子』、まさにそれだ！」

彼の言葉を聞いて、セイバーがぱつとアーチャーへ顔を向ける。彼女なりに合点がいったのか、すらすらと言葉を続けた。

「アルゴナウタイの伝説に出てくる、英雄ヘラクレスによって倒された恐ろしき怪物。

人の作りし道具では傷をつけられず、かの英雄ですら、豪腕で獅子の首を絞めあげ、討伐するしかなかったという……」

オリーブの油を想起させる、彼女の緑の瞳が細まっていく。

「……であれば、通用するのは己の肉体か。それとも、人ではない存在が作った武器であれば」

セイバーの推理に続いて、バーサーカーが言葉を続ける。

「アーチャー殿の弓は、炎神より授かったもの……ですよね？」

「はい」

そう聞かれた彼は、頷きながら声を返した。

「……余の剣も、天の理を秘めたもの。敵の速度に負けず、幾度も同じ箇所を斬りつければ、致命傷を与えられるかもしれない」

セイバーが剣の刀身を手のひらに乗せ、緑の瞳で眺める。人工灯の白い光を反射し、複雑な形の刃は美しく輝いた。

「作戦を立てよう。あの獅子を確実に殺せて、かつ、マスター達に危害が及ばない方法だ」

バーサーカーの提案に、その場にいる全員が肯定の意味を込めて首を縦に振る。

「セイバーとアーチャー殿が重要なダメージ源となる。つまり、それ以外の者で補佐する形となるか……？」

腕を組みつつ思索するバーサーカーの言葉に、アスカがおずおずと付け足す。

「前の戦いの時のように、デザートランナーに私とトバルカインが乗って、囿になるとか」

彼女の意見に、アーチャーが声を重ねる。

「それは難しいかと。」

あの時は障害物の少ない外でしたが、ここは狭く入り組んだ都市の内部です、車体を走らせるのは危険です」

親しい者の言葉に、アスカが黒い瞳をうろうろと動かした。

「では、もっと小型の……バイクのような2輪車などがあれば……？」

「なぜそう前のめりなのです、我がマスター。」

デザートランナー内部で貴女もトバルカインも待機しているのが、一番安全かと考えますが」

2人の会話の間に、セイバーが鋭く声を飛ばす。

「……いや、危険だ。獅子は四足歩行で都市を縦横無尽に走り、鋭い爪であらゆる物を切り裂く」

眼差しは揺らぎなく、金の眉尻は上がり、面もちは真剣そのものだ。

両手を膝の上に揃えているバーサーカーが、そんな彼女の顔をのぞき込むように、体を折りながら口を挟む。

「デザートランナーごと殺害される……と？」

「うむ、その通りである」

赤い布をまとう腕を組みながらセイバーは同意する。

「……やはり、どうあつてもそなた達に危険が及ぶか」

ずっと思いつめた表情の彼女が心配で、私はこう意見を出した。

「機械の獅子は、簡単には動かないんだよね？」

私の声で、目線を、瓦礫転がる冷たい地面に向けていたセイバーは顔を上げた。

「う、うむ。強い殺意を向けぬ限りはあの場所でじっとしている」

「それならさ、もっと都市を探索して、使える物を集めようよ」

私は彼女を安心させるために気持ちを伝える。水、食料、リソースもまだ余裕はある、焦る事は無いのだ。

「そうですね。万全の準備を整え、こてんぱんにしてやればよろしいのです！」

アスカが真つ白な拳を突き出して空にパンチを数発繰り出す。

「じゃあ、明日から都市探索して、討伐の下準備進めていくって方向でどうかな」

考えをまとめた私を、バーサーカーが左半分だけの顔で、感心したような眼差しで見た。それからこう話す。

「マスターの意見に賛成かな。焦っても勝機を逃がすだけだ、慎重に行こう」

互いに意見を出し合う作戦会議はひとまずそこで終わり、明日へ備える事にした。

(たくさん頭を動かしたからか、眠れないな……)

寝台の上で、私は目をぱっちり開けていた。

(外に見張りのサーヴァント居るよね。その人とお話でもしたら、気持ちが落ち着くかも……)

薄い毛布から体をももぞと出して、ローファーを履いた。

静かな車内の廊下を歩いて、タラップをリズミカルな足音を立てながら降りた。

背をそらして都市を見上げる。攻撃で空いた穴から見える、小さな丸い星空。

(誰が居るかな……)

目線を下に戻して、懐中電灯で照らされている広場をこつそりと覗く。

(あつ、バーサーカーいる……)

馴染み深い彼に声をかけようと足を踏み出した私。けれど、その行動は止めざるを得なかった。

「話し相手にする分には悪くないぞ、異邦の軍師よ」

積み重なった瓦礫に腰掛け、金属製のマグカップを膝上にちよこんと置いたセイバ―もそこにいたからだ。

彼女の前には紙とペンがあり、何か文章が書かれていた。

「あれは……前に刑部姫からプレゼントされた物だ！ バーサーカーが渡したのかな？」

私のサーヴァントは立ったままで、遠い星空に目線を向けている。

「赤く燃え立つ皇帝にそう言われるとは、俺も捨てたものではないらしい」

冷たい風が話すバーサーカーの黒い髪をざわめかせ、彼女のドレスの白いレースを少しだけ揺らした。

穏やかな時間が2人の間に流れている。

「04、余の質問に答えよ。装飾された言葉はいらぬ、そなたの心の内が知りたい」

「はい、セイバー」

彼は彼女に背を向けたまま、落ち着いた声を返す。

「……この世に永遠のものがあると思うか？」

振り向き、暗い緑の瞳の内に赤の少女を映すバーサーカー。

「随分とロマンチックな質問だ。私よりモモタやアスカの方がよほど上手く答えるでしょう」

「だからこそ、そなたに聞いておるのだ」

「セイバー、貴女の考えは？」

「ある。そして……」

彼女は膝のマグカップを横に置いてから、立ち上がる。

広場の床にある懐中電灯を腰を曲げて拾い上げると、壊れた建物へ登り、バーサーカーを見下ろした。

「それは、愛なのだ」

崩れかけの壁からは、風化した赤いビニールシートが垂れ下がり、それは天幕の形にも見えた。

彼女は登った場所に懐中電灯を置いて、自らを照らす。

立つ彼女に、追加の白いスポットライトが当たった。孤独に謳う彼女に光を当てたのは、バーサーカー。

(劇みたい……)

役者はセイバー、照明を操る裏方はバーサーカー。そして、覗き見している私は招かれざる者。

くると役者が身を動かせば、石舞台の上でドレスがひるがえり、独白のような謳が始まった。

「例え千の時が過ぎ、この世界が朽ちて、天に瞬く星が残らずその灯を消そうと……」  
むき出しのケープブルがつる植物のようにつたう背景に、光を受けたセイバーの影が



くつきりと映る。

「愛は消えない。余の胸に、人々の胸に、思いは燃え続ける」

バーサーカーは至極真面目な顔で、じつとセイバーを見ていた。

「だが、愛を注いだ相手が消えてしまう事はある。事故……病……他者の手によるもの、様々な……」

胸に手を置き、寂しげに立つその姿。

「余はマスターを愛していた……しかし、力及ばず、守りきれなかった」

私は、この劇が誰に向けて行われているものなのか分かってしまった。それは、彼女の死んでしまったマスターのため。

ただ一人のためだけにこの真夜中の舞台の幕は上がり、彼女は謳っているのだ。

「だが……」

少女のその白い手の内に一瞬で現れた剣が、石の舞台を叩いた。

火の粉が刃より噴き出して、ちらちらと舞い、夜風に飛んでは、丸い天へ昇っていく。「死という大河で隔たれようと、余は愛を証明し続ける！」

これは、未来永劫変わることのない絶対の事実であり、誓いである！」

彼女の声が、住む者のなくなつた廃墟へこだまする。喉より放たれた想いは、まるで炎のようで。

胸にあるガラス細工の赤い造花が、燃え立つ剣の火の光をはらんで煌めいた。

「……余の考えは語ったぞ、次はそなただ。さあ、照明係りに甘んじておるのではなく、舞台上上がるが良い」

セイバーは懐中電灯を拾うと、手の内で一回転させてから、バーサーカーの顔に白い光を浴びせた。

灯りを当てられた彼は、黒の細い眉をひそめて、露骨に嫌そうな顔をする。

「私の考えも似ているが……もう少し幅広い」

セイバーに誘われたというのに、バーサーカーは舞台には上がらず、倒れて積もった壁に腰を下ろした。

「と……と？」

彼女はオリーブ色の瞳に、子犬のような愛くるしい好奇心を湛えて彼を見る。

彼は座ったまま、沈んで、それでいて確かな声で話し始める。まる役者が行う朗読劇のようだ。

「思いだ。人がその時感じた思いこそが永遠なのだ」

……セイバーはもうこの世にいないマスターを想い、心の内を謳った。

バーサーカー04、彼は、誰に向けてその心を謳っているのだろうか？

「それはまばたきの間に移ろいゆくもの……けれど、その時心に刻まれた感情は、決して

消えることはない。

例え、感じた本人が忘れてしまったとしても」

彼は胸に手を当て、何かを逃がさないように握り締める。

「なかなか興味深い思想だ。その中に愛も含まれているのか？」

そう謳いかけるセイバーに、彼は軽い笑みを向けながら物語る。

「当然そうだ。愛などその極地では？」

「確かに、愛は感情の極みであるな」

セイバーはこくりと頷いた。

「……そなた、誰かを愛した事は？」

バーサーカーは顔を動かし、視線を遠く、廃墟の闇深い通路へ向ける。

「俺は、色んな人を好いていたさ。妻、子ども、民、肩を並べる武士武将……けれど」

「ふむ」

「みな、それを信じることはなかった……俺は、身内から信用されない人間だったから」

バーサーカーの声に悲しみは無く、ただ諦観のみがあった。

2人の会話は続く。

「嫌われていたのか？」

「だいたいそうかな。」

ああ、懐かしい……『戦で首をあげたわけでもないのに、殿に重用されるのはおかしい』と、私に言ったあやつ顔！」

バーサーカーは口を手で押さえて、子どものようにくすくす笑っている。

「あいつもあいつも、腕に覚えのあるものはみーんな私に妬いたのさ」

「そなたの主は、臣下をたしなめたりはしなかったのか？」

「殿は、戦が得意なやつと内政が得意なやつに仕事を振り分けて、毎日死ぬような思いで働いていたみたいだから……そんな余裕も暇など……あつたはあつたけれど……うん」

強い郷愁が語り口に込められていた。遠い過去に過ぎ去っていった日々を懐かしむ感情。

「けどさ、戦働き出来るやつはいいなーと、俺は内心憧憬を抱いていた……幼子みたい」

偽りなく言葉を紡いでいく彼の横顔が見える。少しだけ端の上がった口、光宿した緑の瞳。

本当に、わくわくしている子どもみたいで……そんな彼の顔は初めて見た

「だって……すぐく格好いいじゃないか。傷一つ無く戦場を駆けた者、その鎧の赤だけで、対峙する敵を心胆寒からしめた者」

04の声が身内を自慢をする少年のように弾む。

「……アーチャー殿を好いている理由、これなんだ。一騎当千の力を宿す、誇りある戦士……。」

俺ではどうあがいても大局を変えられないし、格好良くなれないからさ」

けれど顔に憂いが宿って、彼を大人へと変えてしまった。

「話の肝がまだ聞けておらぬ。そなたが一番に愛した者の事だ！」

セイバーは脱線が長いと言わんばかりに、唇を尖らせた。

「ん？ んー……言ったつもりになっていたな……。」

「今でも変わらず、その者の事を愛しているのか？」

彼女に対し、バーサーカーは素直に返答する。

「ああ。五体が朽ちて泥となり、魂が黒い炭になろうとも、俺は『あの方』を愛している。

この思いだけは、誰にも歪められない、曲げられない」

彼がセイバーを見上げる。

「ほら？ これこそが、思いが永遠に朽ちないものの証明、だろうか？」

彼女は頭にあるぴんと立った一本の金の髪を揺らしながら、彼を舞台上から見下ろす。

「……バーサーカーよ、余とそなたは少しばかり似ているらしい」

「意外と近似点があつたんだなあ」

「まこと！ 忌々しいがな！」

セイバーはわざと語句を強く発音した。

「……余もかつては、多くの者を愛したものだ」

目線と手を空へ向ける、未だ壇上の彼女。

「市民、近くに居てくれた者、献身的に支えてくれた者……だが、余の愛の形は彼らには受け入れられなかった。

そなたと同じようなもの……周りが、余の愛を信じる事が出来なかったのだ」

彼女は寂しそうな響きの声で言葉紡ぐ。

「余の愛は、相手を焼き尽くす業火の如きもの。

みなが欲しかったのは、竈の火のような、穏やかに燃え続き、全身を温めてくれる愛。

そんな温もりのような愛が、人の世を繋いでいくものだとは……」

目を閉じると、かすかに動きを見せる自らの白い喉に、レース付きの袖から伸びる美しい手をゆつくりと添えた。

「自刃する寸前にそれに気づき……喉を裂いてから後悔した」

整えられた小さな爪が喉をかりりとかく。

（セイバーは生前、自害した英雄だったのか……）

私はそこから血が吹き出す様を幻視し、身を震わせてしまう。

「血に塗れて倒れた余の体の周りを、蜜蜂が飛んでいた。

知っておるか？ 甘くかぐわしい蜜は、余の時代は遺体より蜂が作ると信じられていた……」

オリーブ色の瞳は潤んでいるようにも見える。眼差しの先にある夜空では、手の届かない場所にある星が冷たく燃えている。

「余の体が蜜であればよかったのに……」。

甘き蜜になれば、誰かに無条件に愛され、口づけられたかもしれないのにな」

セイバーが目線を前へ戻してから、濡れた目元のままきよんとした顔になる。

「……なんだ」

「いや……」

ずっと座っていたはずのバーサーカーが立って壇上にあがり、至近距離で彼女をじつと見つめていたからだ。

籠手をつけた腕はかちやりと鳴り、布に包まれた手のひらは空へ表を向けている。

「……いい顔をしているなと思って」

「うっ……」

セイバーはしかめ面を見せながら後ずさりした。

「そなた、その理由が不明な好意を誰にでも向けていたから、胡散臭く思われていたのではないか……!?!」

「理由は明確じゃないか! 人間とは違えど俺には心がある! だから人間を好きになるんだ!」

人が悲しがっているのも、嬉しそうにしているのも……心惹かれるんだ!」

「それは性格が悪いと言われても仕方がない趣向だぞ!」

「強い感情の動きが好きで好きでたまらない……もつと近くで涙ぐむ顔を見ても?」

「良い訳がないであろう! 離れよ!」

舞台からバーサーカーを手で押して降ろそうとするセイバー。

「少し話をして気持ちが悪くなったと……礼を言うつもりであったが……なしだ! やはり信用できぬ! あつちへ行け!」

「皇帝よ、もつとお話しよう! 俺は貴女の心揺れ動く様が……!」

「うううう……もう我慢できぬ! 切る!」

セイバーは剣を再び出現させると、ぶんぶんとそれを振る。

追われるバーサーカーはにこりと笑むと、石舞台の上を駆け出した。

(……帰って、眠ろう)

全てをこっそり見てしまった、招かれざる者である私は、急いでタラップを登り、誰



にもばれないように自室へ戻ると、毛布をかぶって硬く目をつぶった。

第28話 永遠を語る夜

終わり

## 第29話 薔薇は誰がために咲く

翌日。

「トバルカイン！ アーチャーがパンケーキを発掘してくれたのです！ 朝ご飯にいただきますよう！」

アスカは朝から機嫌が良く、コンクリート片が転がる広場に設置した簡易テーブルの前に立って、朝食の準備をしている。

昨夜の事もあり寝不足である私は、ぼんやりと折りたたみの椅子に座っていた。

「もう焼きあがった状態で、袋の中に入っているそうです。昔の保存食はリッチですね……」

強化プラスチック製の白い皿の上に、アルミ塗装された袋から出てきた、ぺったんこの茶色いディスクが盛り付けられた。

うっすらと湯気が立っている、温めたのだろうか。

寝不足のむくんだ瞳で眺め、白いフォークでつつこうとする私を、アスカが止めた。

「まだです。この……蜂蜜風味のシロップをかけてから……」

黄金色のねっとりとした液体が、パンケーキの上を大河の如く穏やかな速度で流れていく。

朝一番の日差しを浴びて、きらきらと光り、その向こう側に茶色い生地が透けて見えた。

「蜂蜜……」

その言葉で、セイバーの事が頭に浮かび、気にかかった。起きてから彼女にまだ会っていない、朝ご飯を勧めないと。

「アーチャー、セイバーを見ていない?」

仲間の中で、最も辺りの様子をいつも監視している彼に声をかけると、弓の弦へ視線を落とし、具合を確かめていた顔がこちらを向いた。

「いえ、見ていませんが……」

「わたくしも見ていませんわ」

続いてアスカも答えてくれる。

「そっか……」

白いフォークの縁でパンケーキを一口大に切りつつ、考え事をする。

……何か、変な感じする。

「バーサーカー」

「はい」

わざとらしいほどに満面の笑みな彼が、私の向かい側の席に座る。

「……セイバー、見ていない？」

昨日の夜、彼女に会っていたであろう彼を問いただす。

「最後に見たのは明け方だ」

答えた後、04は目でアーチャーを追った。何か気にかかる事でもあるのだろうか。

「あのセイバーが一人になったら、どうすると思う？」

不安で、心臓が嫌なりズムを刻み始める。

バーサーカーへ聞いているのは、今この場にいる者の中で最も心の機微に聡いから。

その彼に、私の頭に浮かんでいる恐ろしい想像を否定してもらいたいからだ。

「砂の丘に戻るか……それとも」

アーチャーが弓をその手に持ったまま、私と彼の会話を聞く。

私が何を不安がっているのか、その理由を知らないアスカは、パンケーキがのったお皿を片手にうろうろと目線を動かしていた。

「食事やリソースも摂り、気持ちの整理もついたので、あの獅子へ仇討ちに行くか……」  
私は震える手でフォークをお皿の上に置いた。

次の瞬間、遠くから振動が響き、組み立て式の机が、部品同士ぶつかる音でブルブル

と音をたてる。

「——君達宛てに手紙を預かっているぞ」

仮面で隠れていない唇の左端をつり上げながら、バースーカーは懐から畳まれた薄い紙を取り出した。

『みなへ。余の勝手な行動を許せとは言わぬ。ただ、そなた達には迷惑をかけた、申し訳ない、とここに書こう』

上質な繊維で作られた紙の上に、美しい字が綴られていた。

『よく思案した結果、やはりあの獅子は余が倒さねばならないと思い、そうする事にした。』

あやつは奏者を殺した憎き仇。生かしてはおけない、許せるわけがない、仇を討つことを諦められない。

モモタ、アスカ、アーチャー961、バースーカー04。

振る舞ってくれたアイスクリーム、コーヒ、ヌードル、どれも美味であった』

バースーカー以外の3人で頭を突き合わせて、その文を読む。

『余に愛を向けてくれたそなた達に格別の感謝を。そして、願わくば旅の果てに美しいものが見られますように』

短くまとめられた文章の末尾に、彼女の名が。

『ローマ皇帝　ネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストウス・ゲルマニクスより。  
夢を抱き荒野を行く旅人達へ、愛を込めて』

アーチャーが、遠巻きに私達を眺めていたバーサーカーへ声を投げかける。

「……知っていて、行かせたな」

「ああ」

弓兵に対し、狂戦士は悪びれもなく答える。

「だって、俺でも主を殺されたらそうするもんな」

瞳孔を開かせ、犬歯をわずかに見せながら、彼は獰猛に微笑んだ。その内心は分からない。

私は急いで手紙を畳み、制服の内に突っ込む。

「助けにいかないと……!」

仲間内でギスギスしている暇はない。彼女の元に向かうべきだ。

「でも……セイバーは手紙の中で……」

アスカが私へ手を伸ばそうとして、中途半端にその動きを止めた。

「心配ですけれど……けど、彼女の問題で……わたくし達部外者が口を挟めることでは

……」

眉を下げた顔には戸惑いが浮かんでいる。

「勝機もないのに挑むのは、ただの勇敢な自殺……綺麗でも何でもない。自暴自棄だよ！」

私はみんなに自分の気持ちを言い表す。

……大小の瓦礫が転がる地面に目を落としながら、朽ちた円形闘技場で出会った時の、彼女の様子を思い出していた。

気だるげで、弱気で、何もかも投げ出したような姿で、何より。

「ひとりぼっちにしちゃだめだ。彼女はそういう人……だと思う」

身なり整える事も忘れるほど悲しみを背負った、寂しそうな、その姿。

「……ついてきて、バーサーカー」

彼はデザートランナーの側面にもたれかかると、目を細めながら仕方無さそうに頷いた。

昨夜獅子を見た、あの丸い闘技場へ移動。

降り注ぐ日の光、舞う砂塵。その中心部に彼女はいた。

「セイバー！」

斜めに倒れて複雑に絡み合う朽ちた柱の間から、私は彼女を呼んだ。

「……なぜ来たのだ！ モモタ！」

剣を構えたまま言葉を返す少女。獅子の姿は見えないが、あちこちから建物が軋む音が聞こえる。

私の次に、アスカがセイバーへ声をかける。

「助けに来たのです……貴女は望んではいないかもしれませんが……」

とても申し訳無さそうな声色。

無理もない。アスカは迷っていたのに、私が無理矢理引つ張ってきたのだから。

「巻き込みたくないから一人で来たのだ！ いますぐあの白き車に乗って逃げよ！」

武器を構えたまま、セイバーの頭が右へ左へと動く。姿の見えない敵を探しているのだろう。

「——くっ！」

剣に何かが当たり、刃が陽光を反射して輝きを放った。

「獅子め……」

衝撃を受け流したセイバーが、ふらつきながら吐き捨てる。

突如現れた敵がふわりと着地した。四足歩行、耳と爪と牙を持つ獣の姿。

全長50m、尻から伸びている尾まで含めるともつと大きい。体高は7mほど。



鉄の肉を持つ巨大な獅子が、廃墟の壁を突き破り飛び出してきたのだ。

獅子と少女、両者は肩をいからせ、殺意に体をみなぎらせながら、円形闘技上の真ん中で向かい合う。

「やあっ！」

かけ声と共に、セイバーは敵の前足を斬りつけた。

剣は炎をまとい、陽炎を空に残しながら、獅子の金属製の肉体をわずかに裂いた。

「浅い……だが、効いている！」

よく見れば、獅子には細かな無数の傷がついていた。

おそらく、セイバーはこうした攻防を何時間も繰り返し、ダメージを蓄積させたのだろう。

獅子は傷のついた足をだるそうに頭の横まで持ち上げ、ぶらぶらと揺らす。

そして急に飛び上がって体制を180度変えると、子規模な砂嵐を発生させた。

怯まず風の中へ踏み込んだセイバーは、刃で大気を斜めに切り裂く。だが、そこに獅子はもういない。

「……はっ」

目線を四方へと巡らせていたセイバーが息を短く吐いた。そして、剣で廃墟から猛スピードで出てきた塊をはじく。

「ケケケケ……クケツ」

塊の正体は獅子だった。

およそ獅子らしくもない、不快な鳴き声を喉から放ちながら、敵は攻めあぐねている。セイバーをあざ笑う。

軽やかな動きで腕を持ち上げると、小さな傷の付いた爪が日の光をきらりと反射した。

「逃がさぬ！」

声と共に駆け出すとその下に潜り込み、足で地面を蹴り、垂直に跳ねつつ刃で切り上げた。

しかし、わずかな傷が付いただけ。獅子は構わず腕を勢いよく下ろし、目の前をちよろちよろ動くを叩き潰そうとする。

セイバーはドレスを揺らしながら金の靴でステップを踏み、獅子の爪と前腕の攻撃から逃れる。

「モモター！ アスカ！」

4つの足がランダムに動いて地面を踏み、それも彼女は髪を乱しながら避ける。

「余は……一人で戦える！ ずっとそうしてきたのだ！ だから！」

そういう言い張った声は、本心を覆い隠すかのようにうわづつていた。

「……私は、嫌だ」

彼女に対し、私はきっぱりと言い放つ。

「手紙を読んで……貴女を一人にしたくないと思ってしまったの」

孤独に踊るその背中に向けて。

「だって！ 凄く寂しそうだと感じてしまったから！」

そう、彼女は寂しかったのだ。生前も、掛け替えのないマスターを失った今も。

「――」

獅子から離れ、大きく距離を取ったセイバーがこちらを振り向く。

ほつれた赤いドレス、砂のついた頬。

見開かれたオリーブ色の瞳から、堰を切ったように涙があふれ、頬を伝っていた。

機械の獣がその隙を見逃すはずがなく、にたりと口元を歪めながら爪を持つ腕をゆら

りと伸ばす

「――ああ、無粋な獣め」

ガラス切片で石を引っ掻いたような不快な音。

都市の上層に登っていたバーサーカーが落下し、その勢いを利用して刀で攻撃を加

え、獅子の腕を地面へ押しつけたのだ。

「俺の武器では傷は与えられないか、厄介な……何より楽しくないな」

獅子は攻撃を中断し、跳んで後退する。一撃が弾き返されたバーサーカーは、危なげなく着地した後、セイバーに駆け寄った。

「バーサーカーよ、そなた……」

「すまない、マスター達にばれてしまった。その件に関する恨み言は、貴殿の勝利の後でたっぷり聞こう」

手紙と秘密を預けた相手である彼を、セイバーは何か言いたげに見つめたが、言葉を受け、赤い小さな唇をきゅつと結んだ。

敵に刃を向けるように、剣を構え直す。

「余とて無策ではない。食事による魔力の補充もし、勝てる算段がついたのでこうして挑んでいるのだ」

「……分かっているよ?」

「ええい! その他者の心をじろじろと値踏みするのを止めよ!」

バーサーカーへ少しだけ怒ってから、セイバーは後ずさった獅子へ一足で跳んでいく。

ドレスの色と合わさり、残像はまるで赤い流星の如く。

敵の顔、ネコ科らしい黒い金属製の鼻先を真一文字に切り裂いた。

刃の切っ先から薄青色の液体リソースが散り、放射状に飛んで、砂の上を淡く光らせ

ながら濡らす。

「クウエ……イギエ……」

奇怪な悲鳴を獅子は漏らし、思い切り後方へジャンプした。

当然体が建物の残骸や柱にぶつかるが、全てべきべきと壊して強引に後ろへ距離を取る。

「傷を受ければ直ぐに逃げ、死角から攻撃をするばかり……獅子の風上にもおけぬ」  
数時間以上戦っているであろうセイバーは、肩で大きく息をした。

「だが、逃がさぬ、ここで打ち倒してみせる。その力が余にはある」

梳いただけの金の髪を彼女は手で払ってから、胸にあるそれに指先で触れた。

「モモタ、アスカ……余が勝利を収める様を、そこで見ているがいいー」

ドレスの上で輝きを放つガラスで作られた造花が、この場にいる誰よりも彼女を見守っていた。

「……我が才を見よ、万雷の喝采を聞け」

剣を片手に彼女は謳う。それに呼応し、周囲の空気が変わり始めた。

金の粒子と、半透明な花弁が舞い始める。

「インペリウムの誉れを、ここに」

崩れていた柱は、謳う彼女の思いを受け取り、修復され真っ直ぐに伸びていく。

石の段が次々とそそり立ち、細かな装飾が施された。

(宝具だ。セイバー……いや、皇帝ネロの)

全身に鳥肌が立ち、私とアスカは目の前の光景にただ魅せられていく。

「咲き誇る花の如く……」

甘い香りが大気を満たす。

青空を覆い隠していく金に輝く天井より、半透明からしつかりと色を得て赤く染まった花びらが、尽きることなく降り注いでいる。

「ガルギユグウウ!!!」

大人しく宝具の発動を許す敵ではない。不快な雄叫びを上げながら、細かな傷が無数についた体で飛びかかってくる。

だが、その攻撃が完遂されることはなかった。

「……」

変貌していく廃墟の裾から、舞台役者の様に跳んだアーチャー961が、宙を一回転しながら獅子を撃ったからだ。

赤い花卉の間を、青白く燃える矢が数発、直線に飛び、機械の後ろ足を貫いて体制を崩す。

ずしんと、50m強の獅子の巨体が地面に倒れ込んだ。

アーチャーは精緻な模様が刻まれていく地面に姿勢低く着地し、膝を付いて背中を丸める。

なめらかな質感の白のマントが、しわを作りつつも床に広がった。

「……感謝を」

セイバーは彼の助力に顔を綻ばせたが、直ぐに戦意を宿した鋭い面立ちへと表情を戻した。

剣の柄を両手で持ち、地面から数cm浮かせながら、最後の一文を高々と謳う。

「——開け、黄金の劇場よ!!!」

地面に剣が突き立てられた瞬間、彼女の完全なる宝具が、いや、彼女の思い描いた世界が姿を見せた。

役者を上から観劇する、何千人と収められる客席、煌めく柱、床、花の舞う中で揺れる赤いの垂れ幕。

皇帝ネロが生前作りあげたという黄金劇場、『ドムス・アウレア』がここにあった。

「レグナム、カエロラム、エト、ジエヘナ……」

彼女が剣の刃を上から下へ撫でながら呟く。それが、剣に与えた名なのだろう。

半円を繋ぎ合わせたような形の刃の表面に、徐々に灯っていく火の粉、それは瞬く間に業火へと変わった。

それを片手で力強く振るったセイバー。

赤いの軌跡が宙に描かれ、降り注ぐ花卉を飛ばし、優美な旋風を起す。

「我が劍戟に喝采を！」

誇りと共に謳われた言葉の後に、セイバーの姿が消える。

敵を視覚で捉えられなくなった獅子は、矢傷を受けていない足をばたつかせながら起き上がり、首をぎしぎしと動かし辺りを見たが、その体が再び、がくと落ちる。

——後ろ足が、一撃で断ち切られたからだ。

がらんごろんと内部パーツを床にこぼしつつ、切り落とされた足は劇場隅に転がっていく。

「我が胸に情熱を！」

次に尾が切り落とされ、続けてもう片方の後ろ足。

「我が腕に比類なき才知を！」

反撃など許さない、まさにセイバーの独壇場。

獅子の足は全て奪い取られた。それでもなお、顎で床をかいて逃げ出そうと機械はもがいたが。

「そして——我が魂に！ 愛を！」

上空から降り立ったセイバーが、そのあがきを終わらせる。



「天の理を秘めた刃をもつて、仇なる獣の幕を下ろさん……」

剣がまとう炎はますます勢いを増し、彼女の体まで燃やさんばかり。

金の髪はふわりと浮き上がり、明るい緑の瞳に激しい熱が宿った。

「星馳せる終幕の薔薇！」

50m以上ある獅子の胴体を、真横に一閃。

揺れるドレス、リソースで濡れた赤い刃、勝利を収めた小さな体。

彼女のマスターを殺した機械は見事切り裂かれ、その体をスライドするようにずらしながら、崩れ落ちた。

「うむ……大勝利、である！」

輝きを放っていた劇場が、金の粒子に変わりながらほどけていく。

また、朽ちた誰もいない廃墟へ。

その中心に立つ彼女の体も、ぐらりと揺れて倒れた。

「セイバー……」

ひどく彼女の事を心配していたアスカが真っ先に駆け寄り、小さな体を抱き起こす。

「気絶していますし、傷だらけ……直ぐに治療を！」

「はい」

アスカに間延びした声で返事をするパーサーカー。

戦いを終えた彼女を癒すため、デザートランナーに急いで戻った。

「怪我も俺のスキルで治したし、液体リソースも追加で与えた。当面は大丈夫だろう」  
車内の空き部屋。

寝台で横になっているセイバーの寝顔は、やるべき事を果たした後の、晴れやかなものに見える。

「でも、あんな小さな体で、何時間も戦っていたのですし……」

「サーヴァントはマスターアスカが思う以上に頑丈なんだぜ」

不安そうに指をもじもじと合わせているアスカに、バーサーカーは軽い調子と態度で答える。

「ですが、怪我すれば傷つくのでしよう、人と同じように、痛いのでしよう……?」

彼女は優しいから、相手がサーヴァントであろうとなかろうと、同じように心配してしまうのだろう。

「ただいま戻りました」

「あつ、アーチャー殿お帰り」

獅子の残骸から資源を回収していたアーチャーが部屋に入ってきた。

寝ているセイバーを合わせて、狭い長方形の部屋に5人、窮屈だ。

「場所を運転室へ変えましょう、マスターアスカ、マスタートバルカイン」  
「そうですわね」

休んでいる彼女を起こさないようにそっと退室して、ハンドルと計器、席が並んでいるあの馴染み深い運転室へ4人で向かった。

「液体リソースは相当な量を回収できました」

「それは良かった」

アーチャーの報告に相づちを打つバーサーカー。

「それと、これも……」

先んじて運び込まれて、床に置かれていた物が、ごとりと台の上に乗せられる。

「おっと、ブラックボックス」

バーサーカーが緑の瞳を瞬きさせた。

「あの切り倒された獅子の頭部に収められていました。これが指示を出し、体を動かしていたと推測出来ませんが……」

「後で開封してみるか、アーチャー殿」

「……恐ろしい罠が仕込まれていないとよいのですが」

私はまじまじとその箱を見る。

大きさはやはり子どもの頭くらい、艶のない黒色のパネルが4つの面にびたりと貼られていて、文字にも見える模様らしきものが表面に走っている。

「じゃあ、アーチャー殿からの報告も聞いたことだし……」

バーサーカーが肩を回しながら本題を切り出す。

「この都市、『上級都市レグルス』で何が起こったのか、知りに行こう」  
話す彼以外の、この場にいる3人が深く頷いた。

第29話 薔薇は誰がために咲く  
終わり

## 第30話 花の眠る丘

車両もそうだが、まだ眠っているセイバーも心配だったので、廃墟の中をぎりぎりまでデザートランナーで進む。

切れたケーブルと壁の破片が絡み合った細い道にさしかかった辺りで止め、リソースを詰めたタンクと共に、私達は目的の場所へ向かった。

「リソース注いで……この端子を繋いで……え？ こっちなのか？ ややこしいな……」

天井の崩れていない、大きなホール。昼を迎えようとしている太陽の光はここまで届かず、中は暗闇に覆われていた。

その中心部に立つ、円柱内部にある自家発電器を、バーサーカーは誰かと会話でもしているような独り言を呟きながら、修理している。

「よいしょつと……」

私は、前回訪れた時のように、懐中電灯を点けて室内を照らす。

地面に転がるごみは変わりなく。缶詰め、アルミの袋、飲料水が入っていたであろう

ボトル。

「よし、モニター、映るぞ」

バーサーカーの言葉の後、壁に立てかけられた液晶パネルが淡く光り、サーヴァント含む私達4人は、それを食い入るように見つめた。

『ベルゼ・キラライト！ 私の管轄する都市に、こんな地獄絵図を描くことが君の望みだったのか！』

男性の声が始めに聞こえてきた。しかし、画面は依然としてほの明るい黒のままだ。

『そ、そんなつもりでは……』

受け答えをする、聞き覚えのある女性の声。

彼女が『ベルゼ・キラライト』……ブラックボックスの中にメッセージを残したAIで間違いないだろう。

相対している男性は、先ほどの発言から考えるにこの都市のAIだろうか。

男はヒステリックな声色で言葉を続ける。

『機械化サーヴァントとの戦闘で、君達レジスタンスは壊滅状態！』

数合わせの兵隊にされた私の都市の住民は、フレンドリーファイアを頻発し、総崩れだ！

どう責任をとってくれる!』

『けれど、この攻撃を耐えて反撃……そう! 反撃すれば!』

『頼むから現実を見てくれ……ああ、君を差し出し、今すぐ降伏したい所だ!』

AIの口論の後ろから、振動や悲鳴が聞こえる。

『籠城して他の上級都市やレジスタンスの援軍を待ちましょう! 諦めなければきっと、私達が勝利を掴める!』

だって、私達こそが正義なのですもの! 聖杯戦争を止めるために旗を掲げた、真に人類を愛している存在なのですもの!』

『ベルゼ、君には無理だったんだ……私にも、無理だったんだよ』

映像から響いてくる無数の悲鳴は明らかに人間のものです、すすり泣く声もあった。

『上層部はこの行いを許さないだろう。衛星軌道上に展開しているあの兵器で、この都市は焼かれる……もう終わりだ……』

『そんなことない、ないの! 信じていけば、戦い続ければ、私達は勝利を!』

『リリース様を疑わなければ良かった……私は自らに与えられた都市すら守れぬ愚か者……』

男の声は段々とか細く小さくなり、他の音と混ざって聞こえなくなった。

それとは対照的に、女性が叫ぶ。

『勝つのだって！ 私達は、レジスタンスはこの世界の真実を知っていて、正義は……』

ぶつりと映像が途切れ、パネルは再びただの黒い板に戻った。

「終わってしまったの……？」

懐中電灯で白く照らされたアスカが、怖々とバーサーカーに問いかける。

「ああ、映像はこれだけ。後は……リニアの時刻表とか生活資源の管理とか、ありふれた情報しかない」

バーサーカーは、自家発電器内に余った分のリソースを、手押しポンプできゆるきゆると回収する。

「うーん……」

私は困り果てた。

セイバーが倒してくれた獅子から回収したリソースまで使ったというのに、得るものがほとんど無かったからだ。

いくつか気になる単語はあったが、その答え合わせすら出来やしない。

「ブラックボックスを開ければ、もっと色々分かるかな……」

まだ全てが徒労に終わった訳ではない。アーチャーが見つけてくれたブラックボツ



クスがまだ残っている。

「じゃあ、そつちもあたってみるか、我がマスター」

足早に暗いホールから出て、デザートランナー内へ戻った。

「どこに行っていたのだ！ 余は、余は心配していたのだぞー！」

運転室に入るなり、その声をかけてきたのはあのセイバーだった。

緑色の明るい瞳にうるうるすると涙を湛え、拳をぶんぶんと振って子どものように感情を露わにしている。

「ごめんなさい、セイバー。コンピューターを起動させて情報を集めていたの」

彼女に手短に行動を説明する私。

「おおー！ 昨夜、余に話してくれたあれの事だな。して、どうであった？」

彼女は指で涙の雫を払うと、柔らかい笑顔を向けてくれた。

「あまり収穫はなくて……」

「むむ……なんと……」

腕を組み、目を閉じるセイバー。

「ですが、ブラックボックスを手に入れられたので、こつちを調べてみよう……」

私の後ろに立っていたアスカがひよっこりと顔を出した。

「それはなんなのさ？」

「えっと、AIの心と魂を、一時の間留めておく箱……なのです」

「つまりこの黒き箱は、人で言う所の肉体か。なんと不可思議な物か……」

アスカがAIスローネから聞いた、ブラックボックスの概要をセイバーに伝える。

そんなやり取りをしている間に、バーサーカーが黒い箱に色々と機器を接続し、右手を置いて、開封の準備を進めていた。

「AIの魂とは何であろうな、アスカよ」

「人間の魂すら定かではありませんのに、難しいお話ですわね……」

セイバーの事はアスカに任せ、私は台の上で作業をしているバーサーカーの側に寄る。

「開けられるの？」

「うん、開けられる。俺の体の中に内蔵されてるデバイスあるだろ、あれでハッキングして、開封する」

……もう何日前になるだろう。

聖杯戦争の火に焼かれたあの故郷で、彼は死体の手首からデバイスを違法に手に入れたのだ。

バーサーカーというサーヴァントは本当に、目的のためなら非道な手段を取る事をた

めらわれない。

「……よし、開封を開始する。全員集合してくれ」

アーチャーの隣にアスカ、私の隣にセイバー。

「セイバー？」

「なぜそう不思議そうな顔をしている、モモタよ。もしや……先ほどのように、余をまた仲間外れにするつもりか？」

腰に手を当て、頬を膨らませる彼女の愛らしい姿を見て、私もアスカもアーチャーも、無下な態度は取れなかった。

「じゃあ、中身を調べてみるか……」

バーサーカーが手を箱に手を当てると共に、一番外側にある黒いパネルがはらりと剥がれていく。

その内にあるのは、キルケーと見たあの輝く琥珀色の箱。

「……中に、誰がいる」

彼の声に警戒の色が混じった。

『……誰、ですか？』

接続したスピーカーから響いたのは、女性の声。

真つ先に答えようとした私を、バーサーカーは箱につけていない左手を動かして制し

た。

「地下都市から逃げ出し、旅をしている集団だ。貴殿はAIか？ 個人名はあるか？」  
質問をする彼の姿を、アーチャーもセイバーもじっと見ている。

『ある……あります！ 私の名前はベルゼ・キラライト！』

初めはぼんやりとしていたが、徐々に口調がはつきりとしてきた。

『ずっと……ずっと獅子型機械化サーヴァントの中に閉じこめられていたの！』

殺したくなんてなかったのに、無理やり制御されて、見せられて……ああ、助けてくれてありがとう……』

名乗ったAIの発言に、セイバーは肩をぴくりと動かしたが、何もしようとはしなかった。

バーサーカー主導で会話は続く。

「はじめまして、ベルゼ・キラライト。私はサーヴァントであるバーサーカー04だ」  
『それ以外の人もいるの……？』

機器を接続してくれているみたいだけど、まだ感覚器官が足りなくて、あなた以外の存在を感じ出来ないの……』

「……何人か、君の声を聞いている」

バーサーカーは彼女を警戒しているのか、はつきりとした人数を言わない。

「君のメッセージを受け取り、ここにやってきたんだ」

『本当?! じゃあ、あなた達は……』

声だけでも彼女が嬉しそうなのが伝わってきて、私は胸が温かくなった。

『レジスタンスに参加してくれるって、こと……?』

その言葉が呟かれた瞬間、空気が、冷たく変化していく気がした。

『あうれ? ……何か、気分が……』

出会いの喜びで弾んでいた声がおかしな響きとなり、音が歪む。

『お、ぼ……ぼ……も……きい?』

意味にならない言葉がぶつぶつと出てきて、私はその豹変に血の気が引いた。

『これ、レジスタンスって、言った瞬間……思考、が、溶け……ひっ』

彼女の声は続く。

『ごめ、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!!』

それは怯えきった者の声で。

『……やだ、やだやだやだ! 溶ける、自我が溶けちゃう!』

外側の黒いパネルが外された、むき出しの琥珀色のキューブが、彼女が叫ぶ度に激し

く点滅した。

『なんでなんでなんで?! せつかくあの機械化サーヴァントの体から解放されたのに

……!

おかしいおかしい！ 私が正しいのに！ 私は悪いことしてないのに、どうしてこんなひどい目に……!』

室内はオレンジの光がちかちかと飛び、目が激しく痛んだ。

『と、とける、しんじやう……たすけて！ だれでもいいからたすけて!!』

彼女の懇願にはっと我に返り、私はボックスと接続しているバーサーカーに目を向ける。

「バーサーカー！ 彼女を……」

助けてほしいと言いたかったが、出来なかった。

彼の瞳が見開かれて、遠く、この世界でない場所を見ていたから。

「……ああ、なんだ、そういう事か」

遅れて、鼻から血が流れた。

「バーサーカー04！ その箱から離れよ！」

誰もが混乱している車内で、そう強く言い放ったのはセイバー66だった。

「力ずくになるが許せ！ ええい！」

箱の上に置かれていた彼の右手を引き剥がし、そのまま体ごと後ろへ倒れ込む。

『接続が切れた……や……やだ、誰もいない……ひとりぼっち……』

A Iの絶望しきった声。キューブの点滅はますます激しくなり、アーチャーがアスカの目を腕で覆って光から隠した。

私も自らの腕で目を守る。

『死にたくないよ……あつあつ……あ……あああああ!!!』

絶叫が車内に響き、その後に箱は沈黙した。

「マスターアスカ、目は大丈夫ですか？」

アーチャーが主の無事を確かめる。彼女はまばたきを何度もしながら頷いた。

「バーサーカー！ 大丈夫?!」

まだ強い光の点滅で白む視界で、私のサーヴアントを探す。

「起きよー!」

床に尻餅をついたセイバーがぺちぺちと彼の頬を叩くと、彼は左しかない瞳を開け、手をつきながら起き上がった。

「……すまない、そしてありがとう、剥がしてくれて」

「うむ……よからぬ感覚に飲まれそうになっていた故な、あの顔はそういう顔であった」  
私も急いで彼の側に寄る。

「いや、うん、ちよつと、中にいる彼女の、死にゆく感触が逆流してきただけで……」

くらくらとしたけれど、もう平気だ、心配はいらない」

『死にゆく感覚』という恐ろしい単語に、私は震える。

「それに」

彼が言葉を付け足した。

「死ぬ感覚を得るのは、『あの人』を含めて3回目だから……知っているから、大丈夫、大丈夫なんだ」

……それはどういったものなのだろう。今も生きている私には想像もできない。

「さて、彼女は」

バーサーカーはふらつきながらも立つと、また右手を箱に置き、内部を確かめる。

「消滅してしまったか。死んだ、と言っていいのかな」

私はAIの事を思う。彼女、ベルゼ・キラライトは、喜び、怯え、死んでしまった。

……人と、同じように。

「そしてとても悪趣味な事に、彼女が死んだ事で情報のロックが外れた。

恐らく、初めから彼女は殺される予定だったのだろうな」

バーサーカーがデザートランナーの中の装置を操作して、モニターにどこかの座標を表示する。

「『上級都市ピオーネ』……私達が初めからずっと目指していた目的の場所だ」

青い画面に、白い光点がびこびこ浮かんでいた。



「そして、恋人と言い争う主人公の目の前に現れたその謎の人物こそが！ 実の息子だったのだ！」

「まあ……！ それで、お話はどうなってますの!？」

車外に出ると、天高く昇った太陽が、一際強い日差しを広場に注いでいた。

一応の情報は得ることの出来た私達。

けれど、衝撃は大きかった。

セイバーはそれを感じとったのか、ショックを受けていたアスカに物語を話し、気分を紛らわせてくれている。

「そこで舞台を壊しながら！ 出てくるのだ！」

「いったいそれは……！」

「神である！ 機械仕掛けの神が！」

「そ、そんな伏線ありませんでしたわ！」

「うむ、神、だからな！ そして神の手から神の光が！」

……そして、全ての人は癒やされ、荒れ地に緑が戻り、世界は救われたのである」

「……ハッピーエンド、ですの？」

「万事解決！ 文句なしのハッピーエンドである！」

「ええ……？」

アスカはリアクションが良いからか、セイバーも嬉しそうに語り、話は弾んでいる。それを横目に、サーヴァント2体は出立の準備をしていた。

「あの……バーサーカー」

「どうした、我がマスター」

発掘できた缶詰めなどの食料品を車内に運び終えた彼に声をかける。

「大丈夫？ 体、変になったりしていない？」

「なんだよマスター、やけに心配するな」

からからと快活に笑うバーサーカー。それを見ても私の気持ちはちつとも晴れない。

（バーサーカーって、重要な事を私に話してくれていない気がする……）

10年以上一緒に暮らしていたのに、私は彼をちつとも知らない。

好きな映画も、食べ物も分かるのに、それ以外……考えている事とか、心情とか、知らない。

「何かあつたら、相談……してね」

きつと詰め寄っても明かしてはくれないだろう。そう言うだけが、精一杯で。

「えつと……」

セイバーの方を見る。彼女のように、置き手紙のような形で気持ちを表してくれたら

……。

「……そっか!」

私はデザートランナーから伸びるタラップを登り、中へ。

物の増えた倉庫に大切に仕舞ってあった『それ』を取り出す。

「バーサーカー! …これ……」

彼に差し出したのは、刑部姫がプレゼントしてくれた、この世界ではとても貴重な紙とペン。

「話せないなら、書いてほしいの。……いい?」

彼がおずおずとそれを受け取る。

「……りようかい」

手に持った紙に日の光を透かしながら、彼は了承した。

出発の時が来た。

デザートランナーの点検や、缶詰めを開けて豪華なお昼などを摂っていたから、お日様がだいぶ傾いてきている。

「余はここに留まらねばならぬ……奏者が、待っているからな」

崩壊した通路が覗く廃墟の壁を、夕日が真っ赤に染め上げていた。

残るセイバーの姿も赤く染まっている。

「お別れ……ですのね」

「名残惜しいが、別れは旅につきもの」

彼女はあどけなく微笑む。

「そして、出会いもまた旅の醍醐味である。別れを忘れるほどの出会いが、そなた達を待っているだろう」

アスカは意気消沈しながらも、手に持っていた贈り物を渡した。

「これ……詩を書くための紙とペン、それと……」

「む?」

「……外套を」

茶色で分厚い生地のを、セイバーは受け取り、腕の内に抱える。

「きつと、冷えるでしょうから」

別れゆくサーヴァント思いやるアスカに、セイバーは大輪の花のような満面の笑みを浮かべた。

受け取った外套をさっそく広げ、見つめる彼女。アスカがもじもじとしながら声をかける。

「セイバー、その」

「む？　なんだ、アスカよ」

「背中に外套をかけて差し上げたいのですが、よろしいでしょうか。これから夜になりますし、冷えてきますから……」

——その提案を聞いた瞬間、セイバーはきよとんとした表情をしてから、寂しそうにも、嬉しそうにも見える小さな笑みを浮かべた。

「うむ、許す」

「では……」

アスカは彼女から外套を受け取ると、後ろに回り、背にそつと布を贈る。

茶色の布地に手を添え、セイバーは何かを確かめるように数回撫でた。

「感謝する、アスカよ。」

……ああ、外套というのは、見た目よりずっと暖かいものなのだな」

そう言った彼女は、顔を隠すように一度下を向いたが、ぱつと顔を上げる。

「うむ！　大義である！　余はそなた達の事を終生忘れ得ぬだろう！」

見せてくれた表情は、やはり愛くるしい笑顔で。

「旅の成就を祈るぞ！　幸運あれ！」

セイバーはアスカを抱擁してから、私を抱きしめ、続いてアーチャーにも行おうとして、やんわりと断られた。

別れの言葉は尽きないが、私達は彼女を置いて、デザートランナーに乗り込んだ。フロントガラスから手を降るセイバーの姿が見える。

私も力いっぱい振りかえしてから、運転室の席に座り、シートベルトをつける。

「デザートランナー、発進するぞ」

バーサーカーが数日ぶりにハンドルを握り、アクセルを踏む。

積もった瓦礫で出来たスロープをがたがた登り、私達は旅立った。

とうとう座標を手に入れた『上級都市ピオーネ』、そこへ向かつて。

(セイバー……)

私は目を閉じて、彼女を思う。

きつと、再びあの円形闘技場に戻り、出会った時と同じように眠りにつくのだろう。

けれど違うのは、その背中に暖かい外套があり、胸には詩とガラス細工の薔薇があること。

花と詩と胸に秘めて、彼女は眠りにつくのだ。

——愛する人と、共に。

夢を、見る。

神聖なる山、険しい斜面、果ての見えない雪景色。

倒れた者は上から降り続く雪に埋もれ、静かに冷たくなっていく。

「待って、待ってくれ！」

私は……いや、俺は叫んだ。

遠ざかっていく、白い布をまとうその背中に。

声が届いたのか、くるりと振り返る。

浅黒くなめらかな肌、深遠の瞳、雪と相反する色の黒い髪。

「ああ、クリシユナ黒」

彼が、アルジユナが俺の名を呼んだ。

「ごめんなさい、私はどうしても、貴方を置いていってしまおう」

彼が俺に触れる。

ああ、これはやはり夢なのか。

だって、俺は肉体を持って生きた訳ではなかったから。

アルジユナという、英雄の心の内でのみ生きていたのだから。

「幼い私の心……小さな私の欲……」

彼の表情は穏やかで、黒々とした眼差しはどこまでも優しかった。

「貴方を受け入れ、育てることが出来たのならどれほど良かったか……。

そうすればきつと……もつと良い方向へ何かが変わったかもしれないのに」

彼は俺を見つめながら微笑む。

「ああすれば、こうすれば……最後にはやはり、そう考えてしまいますね」

神々すら目を奪われた微笑みで、俺に笑いかける。

「さようなら、私の欲心」

俺はただ立ち尽くす。絶望しきつたその体で。

「死ぬ時まで、同じとはいかない。貴方は、私でない私を助けに行つて」

「アルジュナではない、アルジュナ……？」

彼は俺の言葉に頷いた。

「ええ。

これより無数に生まれるアルジュナ、無限に旅を続けその中で迷う私に、寄り添ってあげてください。

悩める彼らの、どうか助けに」

風は強くなるばかりで。

「私では……私を救うことは出来ないから」

雪はひどく冷たかった。



「さようなら、クリシユナ 黒。私を人につなぎ止めてくれて、ありがとう。」

ああ、礼が言えた……これで何の心残りもなく、最後を迎えられる」  
彼が俺から手を離し、再び歩き出そうとする。

「また会うことがあれば、どこか美しい星の下がいい。」

夢物語、だろうけれど」

真夜中の空は黒く濁り、地面はどこまでも白かった。

「さようなら、私の……心」

「嫌だ、置いていくな……置いて……」

彼の背が、闇の中に消えていく。死という、冷たい世界へ遠ざかっていく。

「俺を置き去りにしないでくれ！ アルジュナ!!」

心からの叫びは空に吸い込まれ、夢の中の雪山は全て崩れ去っていった。

「……」

目を覚ます。

夜の砂漠。見上げた空は深い青で、星々が瞬いていた。

「アーチャー殿、起きたのか」

車両の上であぐらをかいているパーサーカー04は、手を細かく動かし何か作業をしている。

「何を……している」

「手紙を書いているんだ。マスターにお願いされてしまったからな」

男は書き上がったそれをしげしげと眺めると、満足そうに頷いてから畳む。

「……誰かに置き去りにされた時、お前ならばどうする」

問いかけると、男は月を背にしてにたりと笑った。

「もちろん追いかけるのさ」

手紙を便せんに入れ、封を閉じる。

「……どれほど離れようが、時が過ぎようが、俺は絶対に諦めない、追いついてみせる」

緑の瞳が、戦闘時のように光る、

「アーチャー殿は……どうする？」

俺は下から、彼を見上げた。何もかもを冷徹に見通す、邪悪な男。

「俺は……」

どうすれば、良かったのだろうか。

この矛盾極まる体に閉じ込められた思考が、正当などない答えを求めてさ迷う。

「……話題を変えようか」

バーサーカーがあぐらを解いて、デザートランナーの上に立った。

「アーチャー殿はこの世に永遠のものがあると思うか？」

その問いに対しては、すぐに答えることが出来た。

「……全ては移ろいゆく。絶対に思えた正義でさえ、語る者が変われば裏返る」

「なんて現実的なご意見だ。もっとロマンチックに生きて欲しいな、貴方には」

「私の生き方は私が決める」

「そうだな。そしてそんな英雄の姿に、人は勝手に夢を見る……」

バーサーカーが砂の上に降りてきて、俺を見た。

「でも、1つくらい永遠のものがあってもいいのではないかな」

どうせ、何を言うのかは分かっているんで俺は黙って聞いていた。

天を見上げる。ああ、満天の星空。輝く星が手で捕まえられそうだ。

「……アーチャー殿、俺が世界を救う方法について知っていると云ったら、貴方は笑うか？」

想定していなかった言葉に、思考が止まった

「その方法はな——」

俺の虚をついた男は、何が面白いのか、仮面に隠された半分だけの顔で、白々しく微笑んだ。

第30話 花の眠る丘  
終わり

## 第9章 ■■■を救う

### 第31話 私の『愛』の話をしよう

我がマスター、モモに宛てた手紙を書く間、私は何となく人生を回想していた。

荒野の夜は青く冷え切っていて、夜空の星はゆつくりと動いている。

デザートランナーの下に立っているアーチャー殿は、こくりこくりと船を漕いでいた。

「……」

文を綴る片手を止め、顔の右半分を覆う木の仮面に当てる。そして、息を深く吸い込む。

鼻を通り、肺に入っていく大気は、水気のない乾いた……知らない世界の匂いがした。

子どもの頃から順番に、記憶を思い起こしていく。

裕福ではなく、俺含め、上の兄、下の弟達はいつも腹を空かせていた事を覚えている。

母が方々の家ほうほうに頭を下げて塩や味噌を貰い、薪すらも足りなければ譲り受けるのを待

つしかなかつた。

寒く、腹が減り……しかし幸せだった。

家族がいて、少ないながらも日々の食べる物があり、衣服があり、寝るところがあり、小さいけれど土地もある。

俺は自分が恵まれているという事を、幼い時分から分かっていたのだ。

3歳くらいの頃だったろうか、頭の内側から水の音がした。

雨粒が入ったのかと思ひ、耳に手を当て、出てもこないし濡れもしないので、不思議だと首を傾げた。

……つまるところ、それこそが、私とあの方が繋がった事の証左であり、終わりの始まりであつた。

4歳の半ば。脳に響く音は大きくなるばかりで、俺は家の手伝いもままならなくなつた。

母と共に神仏に祈り、医者や僧侶などに助けを求めたが、ただの耳鳴りだと言われ、俺は布団の上でうめき続けるしかなかつた。

聴覚、視覚、触覚、味覚、嗅覚、思考、その全てに、自分以外の誰かが混ざってくる。感覚が重なり合い、脂汗が止まらず、吐き気すら自分のものか分からない。

そんな状態が長々と続いたので、父が伝手を頼りにある者達を連れてきた。

……それから数年、俺は体を切り刻まれる事となる。

今でも彼らは何者か分からないが、国を思つて立ち上がった集団……であろうとは推測できる。

小さな手を引かれ、連れてこられたじめつとした古寺には、年齢も性別も様々な大勢の子どもがいて、ペソペソと泣いていた。

俺は膝を抱えて座り、頭の内から湧き出る感覚を受け流す事に必死だった。

小さなろうそくの火が揺れていたのを覚えている。

やがて、1人、また1人と、頭も口元も布で隠した男に連れて行かれ、一際大きな悲鳴が聞こえた後、静かになった。

「禁忌を使えど、上手くいきませんな」

「しかしこれが我らの未来に繋がると思えば……」

似たような格好の男が2人、ぼやきながら私の元へ歩いてくる。

「……何をしているのですか」

怯えを精一杯押さえ込みながら問い掛けると、男達は声を弾ませた。

「ただの童であるお前達が、我らの希望である『あの方』のお役に立つのです、素晴らし  
いことだと思わんか？」

認識が致命的にまでずれていると感じたけれど、それに言及する暇もなく、両脇を持ち上げられ、私は運ばれる。

「革で両手足首を固定しろ、猿ぐつわも忘れるな。前の子どものように舌を噛み切られては叶わん」

暗い色調の板の上、無造作に敷かれた莫塵もじ、そこには、真新しい血の水たまりがあり。取り替えられたばかりのろうそくの火が、俺の乱れた呼吸で揺れたのを覚えている。

抵抗など出来ず、俺は拘束され……あまり、面白くない事をされた。

……生きてはいた。ただ、心の内で絶叫し続けていただけで。

男達は俺を思う存分切つて繋いで詰め込むと、きつちり縫い合わせ、軟膏などを塗り、布でぐるぐる巻きにして、板の上に放置した。

あれに何の意味があつたか分からないが、良いことはあつた。

頭の中から湧き出る感覚の主を辿れるようになり、ぼんやりとしていた人物の輪郭がはつきりと分かるようになったからだ。

「お前は箱なのだ」

そう、男達に再三言われた。

「あの方のお体が損なわれた時……心と魂を収める箱。

鬼の如き強力と、鷹の目を持ち、千里をかけられる足を持つ……あの方のための箱と



なるのだ……」

男へ何か言い返したくとも、喉が完全に繋がっていないので、うめき声も出せない。

「この個体も駄目だったか……埋めてこい、獣に掘り返されぬように穴は深く掘れ」

「はい」

「術を施して3日も保たなかったか……勿体ない」

そんなやり取りも聞こえてきて、動かない瞳から涙を流した。

どうして、そんな事をしたのか。この行為に、それほどの価値があったのか。

心中で思う。せめて、誰か1人でも名前を覚えていれば良かった。

そうだったら、彼ら彼女らが誰の記憶にも残らずに死ぬことなかったのに。

……それ以来、出会う人全ての名と顔を覚えるのが常となった。

何も見えないので、ずっと繋がっている『あの人』の視界を見ていた。

整えられた木、磨かれた石が底にある池、泳ぐ魚。

「これこれ、池に寄ってはいけません」

愛おしそうに視界の主を呼ぶ女性の声。

「んー！」

「この間まで乳飲み子だったというのに……歩けるようになると本当に手がつけられませぬ」

言葉とは裏腹に、本当に嬉しそうに語るその声。

俺は眼差しを借りてその女性を見る。

本当に綺麗な人だった。仕立てと色合わせの良い着物、丁寧に撫でつけられた髪。

「あなた様はこの国の未来……そう母を心配させないで下され」

「うー」

「ふふ……我が子、大切な我が子……」

膝に乗せられ、何度も背を撫でられる。

そんな美しい女性が病床に倒れた頃、俺は家へと戻された。

俺を刻んだ男達はどこへ消えたのか分からない。

確かなのは、俺の体は男達が期待するほど強くは成れなかったと言うこと。

生家に戻された俺の姿に、母は口をつぐみ、父は呆然として、受け入れた。

顔は変わっていなかったの、表向きは何事も無かったかのように家族に迎えられ、

日常が戻ってきた。

切られた体が痛み、突っ張り、満足に動かせない、戦いの訓練も出来ない。

戦で手柄を立てる未来など半ば諦め、ひたすら土を耕し、藁を編み、薪を拾い……父

の仕事の手伝いをして過ごしていた。

国の主が変わり、生活が苦しくなったが、俺は大人へと成長していった。

「うう……うう……」

あの人泣く時は、深夜、誰もが眠りについた時だけ。

「とうさま……かあさま……」

無理もない。

両親は死に、住む場所は異国の地、味方は数人の家臣しか居らず、それ以外は全て敵。いくら気丈に振る舞おうと、限界が来る。

「大丈夫だよ」

俺は撫でる者も居ない丸まった小さな背に声をかけるが、この思いが届かない事を知っている。

「大丈夫だよ、いつか家には帰れるし、君の味方もいるんだ」

流れ込む感覚は一方通行なのだ。

彼から私へ流れても、私から彼へは流れない。

「みんなが君の事を好いているよ、愛しているよ」

だからどんなに語りかけても、何の意味も生まれない。

けれど、俺はどんどん彼へ惹かれるようになってしまった。

「愛して……」

必ず訪れる出会う日を、恐れるほどに。

20を越えたころ。

戦場で俺は彼を初めて肉眼で目にして。

『あの人』の戦の前の声かけに、一挙手一投足に、みんなが歓迎を上げ心踊らされている間、俺は震えていた。

彼を目にした瞬間。

「——あつ……」

俺の人間としての生はそこで終わってしまったのだ。

口を手で押さえながら確信する。あの男こそ俺という箱の主、俺の真なる所有者。

俺は『あの人』の一部でしかなく、単体では存在できない。

己の正体を暴かれる感覚を存分に味わい、俺は己が人ではないと思い知った。

人を殺すのは好きだと認識したのは、その戦いの時だった。

砦を守る戦い、小雨が降る冷たい春。

「やだ……やめてくれ！」

逃げ遅れた敵兵ならば、身体能力が優れていない俺でも殺せる。

尻餅をつき、腕で地面を掻いて後ずさりする男の懇願を無視し、槍を胴に突き立てた。  
「ひい…………いぎつ…………」

柔い感触の後に、肉が裂けるぷちぷちとした音が脳を満たす。俺は知らず知らずの内に微笑んでいた。

「あつ、ぎやつ、ぎつ…………」

俺の手によつて、人間がただの生温かい肉の塊に変貌していく。返り血で体が濡れて、脂で指がぬめつた。

「はーつ…………はは、は」

槍にすぎりつきながら息を整える。

男の絶命する瞬間の絶望しきつた顔、ゆつくりと暗く開いていく瞳孔、まき散らされた腹の中身。

…………本当に恥ずかしい限りである。

俺は、俺が人間の心を持っていない事にも気がつき始めていたし、それを取り繕って人間ぶっていた事も知ってしまった。

初陣は、膝に手ひどい矢傷を受けて終わった。

「どうして……どうしてなの！」

まだ若かった妻が叫ぶ。

「俺、国から出て行くよ」

みなは、上様さえ戻ってくれば国は良くなると過剰な希望を抱いていたけれど、そうはならなかった。

上様は日の本を統一せんとする織田信長と同盟を組み、戦のための取り立てはますます厳しくなった。

……なぜあの信長と組んだかの理由は知っていたが、俺の精神も肉体も限界を迎えていた。

流し込まれる感情は強くなるばかりで、嘆きは深くなるばかりで、俺は俺の感情すら分からなくなった。

ある日、御仏へ捧げるための寺の備蓄米すら取り立てられ、みなは怒りが噴出した。同胞同士が嘆きながら殺し合う、大きな一揆が始まり、俺も兄弟と一揆側についた。

「ああ……」

無数の寺に火がつき、見知った景色が焼けていく、人が死んでいく。

反旗を翻した多くの武士が上様の言葉に従い、許されるために戻っていったが、俺は

逃げた。

妻も、上様も投げ出し、遠くへ逃げた。

俺は人間に成ることを諦めきれなかった。悲劇に涙し、心労を吐露し、怒りに心震わせたかった。

……けれど、それは叶わぬ望みぞ。

俺は生まれながらに人の道から外れた者。私の先に道はなく、俺の後ろにも道はない。

のたうち回りながら、すがる信念を探しに行った。

多くの戦場を見て、多くの死を見て、弔って。

女と出会って、別れて、男と出会って、一時仕えて。

争いで肥え太る者達すら見て、俺はようやく分かった。

分かるのに、20年近くかかってしまったけれど。

「運命など無く」

俺は人らしく悲しみ、獣のように達観した。

「全ては、人の振る舞いによって決まる」

手紙をある者宛てに書き、上様から帰参の許しを得た。

20年ぶりの我が家に帰ると、妻は老け込んでいて、知らぬまに産まれていた子ども

はすっかり大人となっていた。

「貴方は、私達の事など愛していなかったのね」

出奔先から連れてきた幼いもう一人の子を膝の上にのせながら、俺はこう返す。

「愛している、けれど、それは君とは違う形だったんだ」

20を超えた息子が、俺とは違う黒い瞳でやり取りを眺めていたのをよく覚えてい  
る。

あいつは人らしく振る舞うのが苦手な子だった。

息子は、俺が連れ帰ってきた弟を義務的ではあるが面倒を見てくれ、それなりに仲良  
くしてくれた。

多くの者が、数十年ぶりに帰ってきた俺を疑念の目で見た。

「上様に槍を向けた愚か者」

「妻子を捨てた男」

「今更帰ってきたのは……他国の間者だからではないのか？」

「戦では役に立たぬ、同じ性を名乗っているのが恥ずかしい」

私は全て事実なのでありのまま受け止め、仕事に専念した。

多くは戦のために何がどのくらい必要なかの計算、係る日数……まあ、得意な事ば



かりである。

前線に出るよりはずつといい。

どうも武器を持つて敵と相對すると残酷な性質が強くなって、殺す以外がすつば抜け  
てしまう。

個人ならば私がへまして死ぬだけで済むが、今の私は国に仕えるもの、前に出過ぎて  
全体の足並みを乱す訳にはいかない。

ぐつとこらえて、肅々と計算を進めた。

上様は俺を恐々と扱っていた。

当然であろう、上様の考えは全て俺に筒抜けなのだ、国を背負う者としてこれほど恐  
ろしい事もあるまい。

彼は俺を手放せなかった。私も二度と彼から離れるつもりもなかった

『堺へ行く』と、私はむんずと連れていかれた。

信長のお膝元である堺の町は珍しい品々も異国の文化も見られ、とても勉強にはなっ  
た。

しかしその後が大変だった。

仏敵、織田信長が本能寺で死んだので、私達は一転して敵地に残される事になったから。

山を越え海を越え、ようやく国へ帰れた頃には、信長を殺した明智日向守光秀殿は討たれていて、またもや我が国と上様は絶対絶命の危機におちいつていた。

途中で別れた穴山梅雪殿も野武士に殺されていて、「ああ、とても可哀想な事をしたなあ」と思った。

ある日の夜更け、上様が私を部屋に呼んだ。誰にも秘密で。

「どうすればいい」

内心は手に取るように分かる。なので、私は彼の求める答えを言った。

「どうとでもなります、あなたと私なら、何だつて」

事実、どうとでもなった。

戦が何度もあつて、私の策で多くの敵が死んだ。

大阪の城の堀を、民の家屋を壊した物で埋め、豊臣秀吉に愛されていた人々ごと燃やした。

あれほど嫌っていた信長と同じ様に仏敵となり、宗派を分裂させ宗徒を引き裂いた。私は戦で益を得る側の人間となり、恨まれ、妬まれた。

……良いこととしたかもしれない。

上様から任せられた領地は苦もなく楽もないよう治めた。

大勢の人の助けを借りて、ぬかるむ土地の治水をしたし、町作りも行った。

いや、己を庇い立ててはいけない。生かした数より殺した数の方がずっと多い。

城内で、ある者が言っていた。

「あの方は恐ろしい……人の心がないのだ、人面獣心の者なのだ……」

人の顔をして、獣の心を持つ男。

ああ、事実だ、俺の心が人と同じであるはずがない。

俺は外付けの悪心。人間が遠い昔へ置き去りにしてきた利己的な獣心なのだ。

「どうすればいい」

晩年、上様が私へ問いかけた。

碁石を置きながら、返す。

「どうとでもなります、あなたと私なら、何だって」

彼へ向ける感情の形は、俺が抱くもの全てだった。

愛しているのと同じだけ憎い。殺したいのと同じくらい側に居たい。

爪で引き裂いて肉片にして、温もりの残る血で詩を記したいのに、そんなことを考えるだけで胸が張り裂けそうになる。

矛盾した感情だけが降り積もり、それが俺なりの愛する心なのだと、長い月日をかけ、ようやく分かった。

人が人を愛する温かな心とは違う。冷たく尖って、暴力的で、どろどろとして、どうしようもないもの。

それが俺の真の愛の形であり……誰にも理解されなくても構わなかった。

俺は愛に見返りなど必要なかった。だって、俺の内からそれは無限に湧き続ける感情だったから。

何も辛くなかったし、何も苦しくなかった。

上様が死んだ。

2ヶ月以上も痛みを苦しみ、七転八倒して、死んだ。

「あれをやらねば、これをやらねば……まだ、何も、何も……」

最後までそんな事を考えていて、ぱったりとその思考が途切れた。

私の脳内は、何十年かぶりに静けさで満たされた。

私を狂わせた元凶は死に、俺の生きる意味であった存在が永遠に失われた。  
死んだ、ああ、死んだ。

上様より、俺の方が先に死ぬと思っていたのに。

呪いも恨みも全て、俺が受け皿となり、奪い取っていたのに。

死んだ、死んだ、死んだ……。

それから2ヶ月後、私は死んだ。

蓮の花咲く、暖かい季節だった。

第31話 私の『愛』の話しよう  
終わり

## 第32話 私の『恋』の話をしよう

死後、私は地獄へすら行けなかった。

六道輪廻の外、呪いだけがあるその場所へ落とされ、何もかも壊された。

(当然の報いか)

罪を冒せば罰を受ける。そうでなければ世界は立ちゆかない。

怨嗟が肉を溶かし、魂を焼き焦がして炭に変えてしまった。

……家族のこと、心配だったけれど、もう死んだ私では見守ることすらできない。

甘んじて責め苦を受ける私へ、泥が形をとり、言った。

「——呪われよ」

その形は、あの美しい人を思わせるような、違うような。

「よくも豊臣を騙したな、よくも拾<sup>ひっ</sup>を騙したな、よくも妾を騙したな」

名前を呼ぼうとしたが、とつくの昔に顎が溶け落ちていた事を思い出した。

生前はとも記憶力が良かったというのに、我ながら情けなく。

「誰もお前を許さない、永劫に、お前は呪われ続ける」

泥は、あの織田の血を引く姫君、茶々様のような形に成ろうとしていたが、ぐちゃぐちゃと崩れるばかりで見苦しい。

そもそも茶々様がこんな場所にいるはずもない、もつと上の場所にいるはずだろう。次に泥が形を真似たのは妻だった。

「貴方……貴方……ひどい……私を20年も捨てて……子を見捨てて……」

頬を撫でようと思つて、手の形を忘れてしまった事に気が付いた、

けど妻がこんな所にいる筈もないと私は改めて思い、その泥を無視した。

「父上……父上……」

泥が次に形を取つたのは息子達だった。

あつ……あいつがいない……まあ恨み言をわざわざ言いに来る性格でも無いしな。

本当にさつぱりしていた、俺に似ないで強かつたし……。

「父上……貴方が獣だったせいで、生まれた私も人の心がなく、他者の苦しみが分からず……」

「父上のせいです……私は流浪と幽閉の身……苦しい……まるで箱の中のように……」

謝つた後に来世へ向けた激励を贈ろうとしたが、そう言えばこれは本物ではないかと考えて言葉を受け流した。

悪意と呪いが合わさった泥と一体に成りつつも、空を見上げていた。随分と遠い空に、一際輝く星がある。

あれはひよつとして上様なのだろうかと思ひ、見つめる。

もう何百年経つただろう、頭蓋が溶けたせいで忘れっぽくなつたが、思い出せる事はまだある。

楽しかった気がする、悔やんでいた気がする。

でも、被害者ぶるのはごめんだったので、静かに静かに黙っていた。

……ある事実に気が付くまでは。

男がいた。

その男は生前『■■■■』という役割に縛られ、それ以外の人生を選ぶ事など出来なかった。

私はその悲しみも苦しみも知っていた。

だから、あの人が死を迎え、その役割から解放されたのだと……思いたかった。

——思い、たかった。だが、現実が違う。

「死は、救いじゃなかったのか……？」



ずっと安らかに眠っていられるはずじゃなかったのか？」  
声なき声で叫んだ。

「■■■■にして、あんな世界へ置くだなんて……」

あんなに苦しんだんだぞ！ あれほど悔やんだんだぞ！ あれほど目の前で殺され  
たんだぞ！」

喉などないはずなのに、震えた気がした。

「……死した後もなお、背負わせようというのか！」

感情は心の枠を壊して、その衝撃で泥が波立った。

「例え……この身が人の世の呪いその物になったとしても……！」

例え……魂も心も消え失せようとも……！」

骨の欠片に付いた泥で腕を作り、天へと伸ばした。

あの星の正体に、私は気が付いてしまったから。

「いつか必ず、あの星を御座から引きずりおろしてやる!!!」

生前は誰にもぶつけた事などない激情は、俺の欺瞞を暴き、本性である獣に至らせた。

……心が定まれば体が動く。

俺はただ憎悪のみで、六道輪廻の外から世界に這いずり出ようと決めた。

残っていた骨の欠片を、俺を恨み続ける泥で肉付けた。

糸のように散らばっていた神経を通し、数百年ぶりに頭をもたげてみる。

ただ黒い液体が詰まっているだけの、塊だけだ。

「……俺は必ず、貴方の元へたどり着いてみせる」

憎悪こもる水つぽい声が闇の空間に響き渡る。

目的地は定まっている。

地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天道……6つの世界を超えた先、悟らなければ抜け出る事の出来ない輪廻の外側。

西方浄土、そこが私の目指す場所。

腕の数やら足の数には適当に作ったので、指が多すぎるし長すぎるし、色々不便だったが直す時間も惜しかった。

数十年かけて泥を階段の形に積み上げ、高い場所へ向かい、もたもたと登っていく。6個だか7個だかの瞳で空を見る……星はまだ遠い。

地獄にたどり着く事が出来たが、またそこから時間がかかった。

鬼が巡回して見張っているし、不信な動きをすれば他の亡者に密告される。

俺は地獄で罰を受けるなどごめんだった。

それはいつか終わりが来る罰だからだ。俺はそんなものいらぬ、受けるなら永遠がいい。

地獄の縁に手をかけ、体を持ち上げる。結局、次の世界にたどり着くのに100年ほどかかってしまった

餓鬼道。満たされる事のない餓鬼があふれる世界。

齧られそうになりながらもよじよじと登り、次の世界へ。

畜生道は獣の世界、一番親近感が湧いたが、彼らを横目にしながらひたすら世界をよじ登った。

修羅道は戦いに満ちた世界だ。切られたり刻まれたりには馴れていたもので、うまくいなしながら次に。

人間道が一番どうしようもなかった。全ては移ろい、私が見た人々の営みなど、どこにもない。

その光景を眺めて、私の生きた時代から数百年も経ったという事を実感した。人は相変わらず殺し合い、憎み合い、滅ぼし合い……私の好きな人間のままだった。

そう言えばこんな出会いがあった。

肉体代わりに酷使していた泥達が水を飲みたいと泣き言を漏らすので、喉が乾くという感覚を思い出し、山から流れる美しい沢から水をすくっていた。

日頃、私と「■」へ向けた恨みばかり言っている彼らも、冷たい清水には流石に癒されるようで、ずいぶんと大人しくなった。

聴神経を伸ばし音を拾ってみた。木々のざわめき、鳥の声、虫の声。

腕を動かし田畑を耕していた頃を思い出し、じつと物思いにふけっていると、誰かが草をかき分け歩いて来る気配があった。

「——おまえ様、そこで何をしているのぢか」

見る……17個の瞳で見ると、幼い少女が木々の下に立っていた。

体は薄く、瞳は幼子のように大きいので、未熟な印象を受ける。

足は艶やかな黒に塗られた高い歯の下駄を履いていた。

頭には雀の頭を模した冠、焦げ茶色の髪は後ろで一つ結びにされ、風で揺れている。

上質な生地で作られていた羽織りは金の糸で縁が飾られ、炎のような模様が刺繍され

ている。

首もととは白い羽毛でふわふわと包まれていた。

「雀達の報告を聞き、来て見てみましたが……」

舌たたらずな声はまさしく子どものもものだったが、それとは相反するように、彼女の腰には見事な飾りと造りの太刀が下げられていた。

「何者でちか、おまえ様。人間、それとも物の怪のたぐいでちか」

私は慌てることなく舌と声帯を生成して、問いかけに答える。

「貴殿にはどう見える？」

彼女の足元で雀が数匹慌てふためいていた。

「……その間に見えまぢゅ」

彼女が指先だけを腰の刀に触れさせた。

「あちしは閻魔大王の養女である紅閻魔と言うもの。おまえ様の名前を聞かせて欲しいでぢゅ」

「………忘れた」

爽やかな風が山から吹き下ろしてきて、彼女の綺麗な羽織をなびかせた。

「時折おまえ様のような存在がここに迷い込みまぢゅ。」

地獄にも天にも行けなかった亡霊……あちしは、そんな彼らを保護する役もつかさ

どつていまちゆ」

雀は数匹で塊となり、俺へちゆんちゆん威嚇している。

「おまえ様に必要なのは……地獄の沙汰でち。」

閻魔王の前で全てを打ち明け、罪に相応しいだけの罰を受けるべきでち」

「相応しい罰……」

「おまえ様の背負っているそれは……多過ぎでちゆ、自分以外の罪も過剰に負っているはずでち」

「……地獄へ行き、いつか解放されるべきだど？」

木漏れ日が雀の羽を濡らした。

「そんなものお断りだ！ いずれ終わる罰などいるものか！」

俺はぎざぎざとした声で少女へ言い放つ。

「俺の罪も！ あの人の罪だつて私のものだ！ 誰に許されなくてもいい！ 求めた事もない！」

雀が私の覇気に推されて、尻餅をついた。

「俺の存在全てが失われ、砂と化しても……構うものか！」

俺はこの道を自分で選んだ！ 他の誰でもない、私が私の心に誓ったことだ！」

彼女に背を向け、迷い込んだ世界から立ち去る。

「待ちなちやい！ そのまま進めば……誰にも救われない存在に成り果ててしまいまちゅよ！」

声は真摯な響きを持っていたが、俺は構わず足を動かし続けた。

世界で一番高い山に登り、次の世界へ手をかける。

何回と繰り返し返してきたこの方法が、一番分かりやすく、手っ取り早い。

天上道はひどく美しく、何もかもが満たされていた。

花の香りが漂う大気、苦も楽もなく過ごす穏やかな者達。

しかしそんな事どうでもよく、俺は輪廻の外へと体を投げ出した。

……輪廻の外、世界の外には時間の概念がない。

なので、ここからは何百年、何千年、何億年経とうがそれは意味を持たないのだ。

俺は歩み続ける。

時が経過していくにつれ、肉体代わりにしていた泥が悲鳴を上げた。

『もうだめだ、そんなに長く恨み続けることなど出来ない』

ずるりと剥がれ落ち、吹き飛ばされていく。

『もう無理だ、そんなに長く憎悪を抱くなんて出来ない』

ぼろりと崩れて、吹き飛ばされていく。

『もう嫌だ、そんなに長く嫌っているだなんて心が張り裂けそうだ』  
ばらばらになって、吹き飛ばされていく。

俺は知る。

憎しみも、恨みも、嫌悪も、永遠ではなかった。

ただ、あまりにも長く続くから、永遠に見えただけで。

(では……何が永遠なのだろう、何が永遠を保証してくれるのだろうか?)

肉の代わりとなっていた泥は消え去ってしまったが、俺はそれでも前へ進み続けた。  
魂など失われて、足も腕も形さえ忘れて。

どこで生まれたのか、誰と家族になったか、思い出せなくなってしまうて。

でも、自分の罪と、何を目指しているのかだけは覚えていてる。

だから最後には、『想い』しか残らなかった。

「お願いです。どうか、その人を私から取らないでください」

輝く光に、手を伸ばす。

その手は、「豆と血にまみれているようにも見えたけど……すぐに分からなくなってしまうた。

「自分は、その人の一部です。その人が死んだら自分には何もありません」

乞う声を置き去りにするようにして、光は遠ざかっていく。



俺はたまらず駆け出し、追いつこうとする。

「心も体も、魂だつて、あげたつてかまわないのです、だから……」  
手を伸ばす……腕だったものを伸ばす。

「その人を連れて行かないでください」

悲しい……そうか、俺、悲しかったのか。

「■■■■にして、誰の手も届かないところに置くだなんて、そんな残酷な事しないでください」

あの人が見えない場所に行つて……悲しかったのか。

温もりある光を、骨で感じて。

——もうすぐあの星に手が届く。

……とても綺麗な場所だった。

地面は宝石を敷き詰めてあるみたいに輝いて、花びらがいい香りと共に遠くから流れてくる。

空は雲の無い薄い水色で。聞こえる声は、悟りへ導く菩薩の語り。

でももう、一步も動けなくなつてしまつて。

かつて自分だった骨の欠片が数個ばらばらと散らばっているばかりになった。幼い子どものように思う。

着いたんだ、ここが浄土なんだ、お寺の僧侶様に小さい頃聞いた、仏様のいる所なんだ。

温かい……。

上様、俺、ここまで来ました。すごく時間がかかったけれど、来ました。

貴方を……そうだ、ひとりぼっちにしたくなくて。

……それが一番始めに、小さい頃から思っていたことなんです。

その理由以外なんて、全部、ひねくれて、かっこつけてみた……だけだったのです。

だって、貴方の周りにはかっこいい人ばかり、強い人ばかり。

おれにできること、計算とか、策とか、そういうことばかりで。

……もつと分かりやすく強くって、貴方に襲いかかるもの全てから、貴方を守られたら良かったのに。

無い物ねだりばかりで、恥ずかしい。

どこですか？ 目も耳も無くしてしまったので、分からないんです。

どこですか？ 寒くないですか？ お腹が空いていませんか？ こっそり泣いて

……いませんか。

(ああ……生きていた時と同じように、あなたの感覚が私に届けばいいのに)

それに『■■■■』は気が付くと、そっと拾い上げた。

小さな骨の欠片。悟っていない身でここまで旅してきたせいで、それは小さく、今にも砂になりそうだった。

……すぐわれた骨はかたかた震え、在りし日の形を取り戻していく。

俺は目を開ける。

澄み切った空、煌めく大地、舞う花びら。

まるで、昔、ものの本で知った西方浄土のようだった。

「……上様？」

俺は喉を震わせる。

(喉？ 喉！)

首を手で触る。手も首も肌も、生前と同じような形を取り戻していた。

目が2つ、鼻が1つ、口が1つ、いわゆる人間の顔だ。

ただ姿だけがずいぶん若い……顔も触る、20代前半の男のものだ、肌にしわも無い。それに、とても立派な鎧を身につけている。

兜こそ無いが、胴も籠手も臍も覆われて、日の光を浴びてぴかぴかと光っていた。しかし、そんな事を確かめている場合ではない。俺は視線を前に向けた。

「……上様」

それは、光で出来た何か……途方もなく輝き、美しく、尊いもので、俺の目は焼けてしまいそうになった。

だから、それを上様だと確信したのは形とかではなくもつと直感的なもので……うまく考えられない。

嬉しくって笑い、手を伸ばす。

触れた瞬間腕が内側から焼け、光がその端から肉を再生させていく。

なるほど、尊いものとは触れると焼けてしまいうらしい。

そう言えば、お堂に納めていた仏の像を無理に見ようとして、目が焼けて盲目になってしまった僧の話聞いたことがある。

どうやら仏とはそのようなものらしい

「……こんなちつぽけな手なんて、届かない方が良かったのだろうけど」

左手で、焦げ続ける右手を撫でてみた。

「でも、嬉しいんだ……狂っているからなのかな」

永遠を私は見つけた。

今感じているもの……この胸を焼き焦がす『想い』こそが、那由多を越えても消えやしない永遠のものなのだ。

喉が裂けたつていい、無限の苦しみに襲われてもいい。

本当に……嬉しかった。

「上様……」

俺は涙を拭い、しゃんと立つ。

暗い緑の両目で彼を真っ直ぐ見据え、逸らさない。

黒い短い髪を指先で整えてから、彼へ手を伸ばした。

「もう二度と一人にしない」

風が運んで来た花卉が、視界に移り、後ろへと吹き抜けていく。

「人は……貴方の事を、あまねく人間を苦しみから救う者だなんて言うけれど……」

そんな都合が良すぎる。貴方に役目を押し付け、救いだけを享受するなんて……私  
は納得出来ない」

薬師如来は病や傷を癒やし、生きている人を救う御仏。

「行こう。俺の手を取り、もう一度六道輪廻の内へと墜ちてくれ」

しかし、その役目を背負う必要なんて無いはずだ。

「上様……いいや」

躊躇ためらいを捨てるため、首を振ってから、彼を真っ直ぐに見る。

『竹千代』、君を迎えに来たんだ」

もういいんだ。

だって、彼は生前ずっと『徳川家康』という役割に縛り付けられていたのだから。

(……俺を傲慢だと、世界は言うだろうか)

伸ばした自分の手の上に、彼の手が重ねられるのを待つ。

「人を助ける仕組みになってしまった君を——助けに来たんだ」

張り詰めた表情で、俺は彼に心からの言葉を贈り……偽りも悪意もない眼差しで、答えを待ち続けた。

第32話 私の『恋』の話しよう

終わり

## 第10章 彼女に胸に愛はあり、彼の腕に恋はある

### 第33話 荒野の出会い

可憐なる赤き剣士、ネロと別れ、廃墟になっていた『上級都市レグルス』を出発し、はや数日。

雲を失った青空の下、デザートランナーを走らせながら私達4人は旅を続けていた。

『上級都市ピオーネ』に着くまでどのくらいかかりそう？』

運転席に座りアクセルを踏んでいるバーサーカーに私は質問した。

彼は振り返らずに答える。

「およそ一ヶ月だが……燃料が足りない、どこかで補充しないと」

「そっか」

私は立ったまま棒状の携帯食料をぼくぼくと齧った。

アスカは自室に、アーチャーは車上で見張りに。今運転室にいるのは私とバーサー

カーだけ。

彼はハンドルで走行路を微調整し、速度を一定に保ちつつ、右手で色々なモニターに

触れて操作している。

「また廃墟を探るか、前回のように機械化サーヴァントを討伐するか……」

「今までは……たまたま、うまくいっていただけだもんね」

その発言で、私は今までの旅を思い返す。

偶然にも都市に保護され、偶然にもキルケーと出会い、偶然にも『上級都市ピオーネ』の座標を手に入れた。

燃料、食料も、足りなくなる前に補充の手立てが見つかっている。

「不自然なくらい運が良いよね、私達」

携帯食料を持ったまま私はそう言った。

「……作威的なものを感じるよな！」

「バーサーカーもちよつと不信に思ってるんだ」

「不信というより、そうだな……」

がたとと車体が小さく跳ねる。

「誰かの筋書きをなぞらされているようで、気にくわない」

彼が冷たく言い放つた後、空いた席に置かれていた通信用の貝殻がカタカタと動いた。

『9時の方向に砂煙が舞っています』



「アーチャー殿」

バーサーカーが反応する。車体の上で偵察をしていたサーヴァントからの連絡だった。

『姿は分かりませんが、体長は100m以上。幸いな事にこちらには気づいていない様子です』

「横のカメラで詳しく見てみる」

フロントガラスの一部がモニターとなり、車体備え付けのカメラが送ってくれた映像が表示された。

「これ……」

長い砂の巻き上がり方、私はそのシルエツトに見覚えがあった。

「モンゴリアンデスワーム……じゃなくて、資源採掘用のロボットワームだー」

砂塵の合間から姿がちらちらと見え始めた。

六角形の柱を繋ぎ合わせたような多関節構造は、ミミズのような尺取り虫のような。

荒野を頭部で破壊、噴き上がる砂を口から飲み干し、波打ちながら地面を移動している。

バーサーカーがその映像を精査してから、唇を開いた。

「資源回収をしているんだろう。アーチャー殿の言うとおり、こちらに気がついていな

い様だ。緩やかに距離を取って……」

『——いえ、待つてください』

彼の言葉を車上の弓兵が遮る。

『誰かがワームの前方にいて……追われる形で逃げています。04、映像をズームに出  
来ますか』

「分かった、マスターと確認をする」

アーチャーの指示を聞き、ズームにされるカメラ。

モニターに映った映像は、解像度が低いためかコマ送り状になっている。

私は運転席の背もたれに手をかけ、身をぐつと乗り出し、目を凝らして観察する。

「本当だ、誰か……」

茶色と黄土色の合間に、荒野とは全く別の色彩を持つ誰かがいた。

白い長髪、紫と青い鎧、槍のような物を抱く細い体。

全体的な印象をまとめると、女性のように思えた。

映像はカクカクしながら進み、ワームが引き起こす地面の振動を受け、名も知らない  
女性がよろめいた。

「襲われてるなら……助けなくちゃー！」

私の結論を知っていたかのように、バーサーカーがアーチャーへ繋がる貝殻に声をか

ける。

「……と、我がマスターは言っています、アーチャー殿はどうお考えで？」  
返事がすぐさまやってきた。

『逃がっている人物は恐らくサーヴァントです。助ければ何か情報が得られるかと』  
アーチャーがそう答えてくれたのは、私はとても嬉しかった。

さて……どうすればいいのかを考える。

「バーサーカー、前みたいにもロボットと通信して止められない？」

あの時の光景を思い出しながら彼へ提案する。

「さっきから試みているが……あのワームロボットにはその機能が無いみたいだ。

通信器が壊れたのか、元々無かったのか、どちらかは分からないが説得も停止も望めない」

モニターをちらりと見る。女性にワームの頭部が迫る、それに粉碎機能が付いていることを私は知っている。

手段を選んでいる時間は無さそうだ。

「ごめんなさい、アーチャー、あのロボットを倒して彼女を助けてあげて」

今は自室で眠っているアスカの代わりに、アーチャーへ指示を出す。

『問題なく倒せます。マスターアスカを起こす必要ありません』

車体が軽く揺れた。恐らく、ここを足場にして彼が跳躍したのだろう。

「モモ、席に座りベルトを」

私にそう伝えた後、部屋にいるアスカにも「部屋から出ないように」とスピーカー越しに連絡した。

「アーチャー殿を援護できるよう車体を移動させる」

バーサーカーはアクセルを踏んで速度を上げ、ハンドルを傾けると、あのワームロボットの距離を空けて併走を始めた。

（アーチャー961、大丈夫かな……）

フロントガラスの一部が再びモニターとなり、映像が切り替わる。

アーチャーが矢を放ち、それがロボットの胴体に数本突き刺さっているのが見えた。

ロボットは体をぐにぐにと動かしながら、全身をゆっくりとアーチャーの方へ向ける。

そのまま頭をもたげると、太陽が隠れ、巨大な影が弓兵に落とされた。

『……………はっ』

貝殻の通信器越しにアーチャーの息づかいが聞こえる。

彼はワームロボットへ相対したまま後ろへ飛んで、跳躍の最中に矢を放つ。

ロボットの六角形の胴体の下側に刺さっていく矢達。しかしダメージを受けている

素振りはない。

敵は砂の中に埋まっていた長大な体を砂の上に出し、ずるりと起こす。

——天へ向かって伸びる、石柱にも見えた。そしてそのまま、アーチャーを叩き潰さんと前のめりに倒れる。

「アーチャー!」

座っているだけの私だったが、思わず叫んでしまった。

「マスター、落ち着け。あのアーチャー殿がデカいだけの相手に倒される訳が無いだろう」

……バーサーカーの言うとおりであった。

巻き上がる砂と砕かれた地面、その中に彼もいて、衝撃で浮かび上がった岩の斜面に降り立っていた。

未だ宙に浮かんでいる岩の上で、揺れも傾斜も影響が無いかのように立つ。

姿勢を正し、矢を落ち着いた様子でつがえた。

ただ、白い外套だけがゆっくりと風になびいていた。

『……貫け!』

青い炎をまとった矢が、ワームロボットの胴体を目掛けて放たれる。

横から撃たれた矢。それは青い一線を描きながら胴体の金属を融解させ、爆発を起こ

しながら大きな穴をぼっかりと空けた。

『ピギャアアアア！』

ワームロボットの悲鳴が大気を揺らす。

離れて走行しているデザートランナーもびりびりと衝撃を受けた。

『バーサーカー、今の内に追われていたサーヴァントをそちらで回収してください』

敵の動きを止めることに成功したアーチャーの声が届く。

「了解した……と言いたいが」

『……なんだ』

「アーチャー殿、上をご覧に」

車外カメラが映したもの。

それは、倒れたロボットを踏み台にして、太陽を背に大きく飛んだ女性の姿。

『やああああ!!』

女性の声が貝殻から響く。

彼女は上空から手に持つ金色の細い槍を投擲した。それはロボットの胴体に刺さり、

アーチャーの矢に続いて大きなダメージを与える。

『ピギュー!!』

ワームロボットは悲鳴を上げながら地面へ潜ろうとしたが、すでに遅し。

『とどめっ……!』

彼女は刺さっていた槍を素早く回収すると、暴れて動き回るワームロボットの胴体上を駆けた。

ぶんぶん振り乱している頭部に到着し、刃を突き立て、何度も刺す。

その度にロボットが鳴きつつ100m以上の全身をのたくらせ、地面が揺れた。

『ピギ、ピツ、ピチュ、ピピ……』

数分間刺され続けたロボットは徐々にその声と動きを静かにし、やがて完全に沈黙した。

「……アーチャー殿を迎えに行こう、車両を寄せろぞ」

当面の危機は去ったというのに、バーサーカーの声は固かった。

デザートランナーは速度を落としながら、アーチャーと追われていたサーヴァントの元へ近づく。

「マスターアスカは部屋で待機していてくれ、俺とモモが外へ出る」

バーサーカーはそれだけ告げると、車を停止させ、私と共に車外へ向かった。

「……外、眩しい」

魔女から貰った緑の宝石のお陰で、80℃を超える熱波も、オゾン層で遮断されずにそのまま降り注いでいる紫外線も、私の体に害は及ぼさない。

けどやっぱり眩しくて、目をしばしば瞬きさせた。

「助けていただき……」

ワームロボットの从上から、追われていたあのサーヴァントが軽やかに降りてきた。

「ありがとうございます」

先程の戦闘の際に、たまたま聞けてしまった叫び声とは違い、落ち着いていて、しつとりとした声の女性だ。

彼女が頭を下げて礼をすると、腰の下まで伸ばされた白い髪が揺れた。

そのたおやかな所作に、私は思わず目を奪われてしまう。

「あの……」

彼女の長い足は、翼を思わせる飾りがついた青紫の装甲で堅牢に覆われていた。

腕も同じく指先まで隠され、肩や太ももの僅かな隙間から雪のように白い肌が覗いている。

「その……」

足や腕の守りの堅さに比べ、胴体と腰を隠すのは黒い服とひだのついたスカート。

首と胸を飾る黄色いリボンと相まって、女生徒の制服のようなシルエツトだ。

だが、一番目を向けずにいられないのはその髪だろう。

「ええと……」



地面まで届くか届かないかまで伸ばされた髪は、表面は白だというのに内側はまるでオーロラを写し取ってきたかのようで、夜空を思わせる色にきらきらと輝いている。

頭頂部には黒い羽で出来たティアラみたいなものがあり、ぺたりと髪に添ってくっついていた。

美しすぎるその容貌が、言外に彼女を人間ではないと私に伝えている。

「名乗ってもいいでしょうか……」

彼女はおずおずと控え目に提案した。バーサーカーが無言で頷く。

「はじめまして、旅のお方。私はブリュンヒルデ、ブリュンヒルデ・シグルドリヴァ」  
いつの間にか側で立っていたアーチャー961も、ヘッドギア越しに彼女へ視線を向けていた。

「大神オーディンの娘にして、勇士の魂を天へ届ける使命を持つ、戦乙女ワルキユールの1人です」

風が吹いて、砂が彼女の具足に少しだけついた。

### 第33話 荒野の出会い

終わり

## 第34話 紫水晶の乙女

外で長々と話すのも危険なので、ブリュンヒルデを含む私達4人は車内に戻り、運転室で集まって事情を聞くことにした。

彼女もその案に了承してくれて、今は運転室内の余っている席に、手を膝に乗せて肩を落とし、ちよこんと座っている。

「……あの、わたくし、いつまで自室待機していればいいのでしょうか？」

律儀に部屋の中でずっと待っていてくれたアスカも呼んで、あらましを説明した。

全員集まったことを確認してから、ブリュンヒルデへこちらも自己紹介をする。

名前や旅の目的……「聖杯戦争を止める」など。

そうしてから、彼女の話を聞くこととなった。

「リソースと物資補充のため遠征していたのですが、資源回収用のワームロボットに見つかってしまい……。」

必死で撒こうとしたのですが、うまく行かず……。」

「しかし貴女の戦闘能力は確かなものに見えた。逃げず、真っ向から撃破すれば良かった

たのでは？」

バーサーカーがそう言うと、彼女は紫水晶のような瞳を細めて苦しげに言葉を続けた。

「戦うわけにはいきませんでした。液体リソースを無駄に消費してしまいますし、それに……」

彼女が小さなプラスチックケースを取り出すと、手のひらに乗せて私達に見せてくれた。

「これが、壊れてしまう可能性がありましたから。頑強に作られているリソースボトルと違い、脆い物です」

彼女が蓋をスライドさせて、中身を優しげな眼差しで眺める。

「放棄された地下研究施設で見つけた、草花の種です。その……大切な人のため、花を、育てていて」

黒い丸の粒が、ケースの中をからころと転がっていた。

「とつても素敵なことだと思えますわ」

「はい。きつとあの人も喜んでくれるはず……」

アスカの言葉と純真な眼差しを受け、はにかむブリュンヒルデ。

「私……あの人の元へ帰らなくては」

彼女は椅子の上で急にそわそわとし始めた。

「あの人とは？」

バーサーカーの問いかけ。

「決まっています。戦乙女ワルキューレである、ブリュンヒルデの大切な人……勇士、の元にです」

「……なるほど」

答えを聞き、彼は頷いてから次の言葉が続けた。

「その……差し出がましい言い方なのだが、俺達もついていいだろうか。」

貴女の話をもっと聞きたい」

「それは……」

彼女は視線を泳がせる。

「代わりと言っては何だが、先程倒したワームロボットから回収したリソースを、貴女の住処へ運ぼう。」

かなりの量があるから、タンクや車両でもないと運ぶのは難しいだろう」

彼女は目を一度閉じてから、バーサーカーの提案に答えを出した。

「……分かりました。けれど、あの人に危害を加えようとするならば容赦はしません

……殺します」

「そんなことはしないぞ。」

何はともあれ、俺の提案を飲んでくれてありがとう、ブリュンヒルデ」

バーサーカーが裏表の無い誠実な態度で礼を言う

「よし、じゃあワームロボットを解体してリソースをタンクに詰めよう。

モモ、アスカ、手伝ってくれ。アーチャー殿は……お疲れでしょうし、このまま運転室で休んでください」

私もアスカも立って外に出ようとす。けれど私は、思わず足を止めてしまった。

ブリュンヒルデの鎧の隙間から覗く肩、その白い肌に小さな傷がついていることが見ついたらからだ。

「ブリュンヒルデさん、肩に怪我をしていますよ……大丈夫ですか？」

彼女は目を丸くしてから、はっと言われた場所を見る。

「私のバーサーカーは治療スキルを持っていますし、それを使って治療を……」

「いえ……いいえ！」

慌てた様子で、彼女は片手で肩を隠した。

「……後で、治療のルーンを使います。お気遣いなく」

「それならいいんですけれど……」

サーヴァントだって怪我をすれば痛いはずだ、早く治してあげたい。

けれど、彼女は自分の傷は自分で治すつもりらしい。

「我がマスター！　どうかしたのか！」

「なんでもない！　今行くねー！」

バーサーカーに声だけでせつつかれたので、大きな声で返事をする。

先ほどの彼女の取り乱しように、理由のわからない疑問を抱いたまま、私は外へ向かった。

「トバルカインは、ワルキューレ戦乙女であるブリュンヒルデの伝説を知っています？」

「んー……詳しく知らないかも」

砂っぽい大地の上で動作を停止したワームロボット。

壁のように地面へ伏しているそれが生み出す大きな影の中に入り、直射日光を避けている私とアスカ。

バーサーカーが液体リソースをポンプで汲み上げる作業が終わるまで、体力温存のためこうして休んでいる。

「では、わたくしが知っている知識の中で、短くまとめてお話をしてあげます」

アスカはやや波打っている黒髪を耳にかけつつ、ワームの胴体にもたれかかった。

「ワルキューレ戦乙女とは、主神オーデインの娘とも言われる、天からの使い。」

「みな美しい少女の姿をしていて……主な仕事は、勇者の魂を回収して天に届けること、人間同士の戦いへの介入などです」

頭上からポンプが起動する音がした。

「ブリュンヒルデもその1人でした。」

けれどある時、勝たせてはいけないう方の人間の陣営を勝たせてしまい、オーデインから罰を受けます」

「どんな罰？」

「呪いによつて燃え盛る館の中に閉じ込められ、固いイバラで覆われ、封印されてしまつたのです。」

オーデインはこう告げました。『彼女を救い出せるのは、本当の勇氣を持つ者だけ』と……。

長い間、ブリュンヒルデは待ち続けました、いつか出会う勇者のことを夢見て」

アスカは黒い瞳をうつとりとさせながら遠くを眺めた。

「そしてある英雄がやってきました。」

彼こそ、邪竜を倒し、その心臓を食べて、尽きることのない叡智を手に入れた勇者シ

グルド……！」

私はアスカを見る。白いほっぺに朱が差して、ほんのりピンク。

(アスカつて結構ロマンチックなお話好きなんだなあ……)

上で稼働しているポンプが、きゅんと音を立てた。

「シグルドは炎を越え、ブリュンヒルデを包んでいたイバラを切り裂き、彼女を封印から救い出します。」

そして、2人は……恋に落ちるのです」

「……なんで？ 恋に落ちるポイントあった？」

命を救ってくれたという感情は、恋に変化するもののだろうか。

「何でって……えっと……それはその……」

アスカは分かりやすくうろたえて、整えられた黒い眉を寄せ、指同士をつんつんさせながら考えに考えている。

「……分かった！ きつと一目惚れですわ！

シグルドは美しい彼女を見て心奪われ、ブリュンヒルデも危険を省みず自分を救ってくれた勇者を好きになったのです！」

「うーん、それだけだと動機が弱くない？」

「弱くありません！ 2人は運命的な……もう！」

アスカは砂の上でじたんだを踏む。クリーム色のスカートがひらひらと動いた。

「とにかく！ 2人は恋に落ちたんです！ トバルカインが納得できなくても茶々を入



れないでください！」

そして！ 貴女はもつと恋愛小説などを読んで、恋について学んでください！」

「でも……映画とか物語とか見て思うけど、悲劇の原因つて恋とか愛とか多いよね。

そんな厄介で恐ろしいこと知りたくないなあ……」

アスカはわざとらしく咳払いをした。

「トバルカインの恋愛感についてはまた後で聞きます、話を戻します」

「うん」

私はロボットの胴体にもたれかかった。アスカのお話が続く。

「愛する人を見つけたシグルド。けれど、彼はある予言を受けていたのです。

それは、『ブリュンヒルデと恋に落ちれば、必ず破滅する』というものでした」

「ふんふん」

「けれど彼はそれを恐れることなく、愛を注ぎ、ブリュンヒルデもまた彼を愛しました。」

彼女と結婚の誓いをし……勇者と戦<sup>ワルキユレ</sup>乙女は確かに愛を育んでいたのです」

太陽はまだ高く、私達に落とされていている影も色濃い。

「しかし幸せは続きませんでした。」

ブリュンヒルデと結婚をしたいと考えた王の息子、グンナルと、己の娘グズルーンを

シグルドと結婚させたいと考えていた王妃であり魔女が、手を組んだのです。

恐ろしい計画が立てられ、実行に移されました。

シグルドは忘れ薬を飲まされ、愛の記憶を全て奪われてしまいます。

その後、グンナルに強引に迫られたブリュンヒルデ。

彼女は彼に対し『試練を乗り越えられない者として結婚しない』と告げますが……」

「どうなったの？」

「グンナルはシグルドに言いました。

『呪い……変身のルーンを使い、姿をグンナルに変えて試練を受けるように』と。

ブリュンヒルデは姿を変えてやって来たシグルドに捉えられ、その後、計画通りにグ

ンナルと結婚させられます。

そして、全てを忘れたままのシグルドは、王の娘グズルーンと結婚しました」

ポンプの駆動音が激しくなり、ぎゅんぎゅんとけたたましく辺りに響く。

「……けれど、偽りは暴かれるものです。

試練を乗り越えた勇者が、今結婚しているグンナルではなく変身したシグルドで、自分は何かも騙されていたことを知ったブリュンヒルデは……」

ポンプの音が、止まった。

「——全員を、殺しました。」

王、王妃、グンナル、グズルーン、親族……愛し合った、シグルドまでも。

そして最後に自分も炎へ身を投げて、死んだと伝えられています。

これが、わたくしの知るブリュンヒルデの伝説です」

風が吹いて、アスカの長い髪を揺らした。

「やっぱり愛って怖いものなんじゃあ……」

私があとか絞り出せた感想はそれだった。

液体リソースをポリタンクにつめ、バーサーカーと共に積み込み、その後ブリュンヒルデの案内を受けて彼女の住処に向かった。

時間は午後4時、日は傾き始めている。

「ここから地下に入れます……この辺りはワームロボットも多いですから、車体を地下に隠した方がいいでしょう」

ブリュンヒルデの言葉に従い、ぽつかりと口を開けた地下への入り口に車を向かわせる。

「……ここまでくれば大丈夫、降りて荷物を運びましょう。お礼にお料理なども……振る舞いますね」

「ブリュンヒルデさん、ありがとうございます」

私は彼女にお礼を言う。

「いえ……皆さまは命の恩人ですから……これくらいは」

彼女はまた柔らかくはにかんだ。

タラップを展開し、スムーズに降車出来るようにして、私達はポリタンクを1人1個ずつ持った。

ブリュンヒルデの案内を受けながら、彼女とも協力して奥へと運んでいく。

コンクリート打ちっばなしの廊下は、地上に近いのか、ひび割れた箇所から日の光がちらちらと射し込んでいた。

……かつて世界にあつた木漏れ日というものは、こんな感じだったのだろうか。

「トバルカイン、見てください」

タンクを両手で持っていたアスカが声をあげた。

「あそこ……土があつて、草が生えています」

天井の一部に透明なパネルが貼られていて、太陽の光が存分に注ぐようになってい

る。そこに、盛り土があり、緑の短い草が生えていた。

「液体リソースを使って育てているのです。まだ草しか生えていませんが、いつかきつ

と……」

ブリュンヒルデがやってきて、その場所を愛おしげに眺めた。

「後でアスカさんにも、少し種をお分けしましょうか？」

「ありがとうございます。とても嬉しいお言葉ですわ！」

アスカの黒い髪と、ブリュンヒルデの白い髪が陽光を反射して煌めく。

「まだ目的地まで距離があります、タンクを代わりに持ちますね」

ブリュンヒルデも荷物を抱えているというのに、私とアスカが1個ずつ運んでいたタ

ンクを軽々と持ち上げてしまった。

「さあ、行きましょうか」

急に手ぶらになった私とアスカは後をついていく。アーチャー、バーサーカーも、タ

ンクを運びつつそれに続いた。

「ただいま戻りました……」

コンクリートで作られた四角い大きな部屋。

彼女はタンクを隅に置くと、自分の気持ちを抑えきれないといった様子で中心へ駆け

ていく。

そこにあつたのは、長方形で群青色をした箱。

「とつても優しい人に出会って……ええ、ええ、そうです、勇気もあつて……」

彼女は穏やかに報告する声の中に嬉しさを込めながら、話し続ける。「だから貴方も早く、目覚めてくださいね」

——返ってくる言葉などない、会話のような独り言。

バーサーカーとアーチャーはブリュンヒルデに近寄ろうともしない。

なので、私とアスカが彼女へ恐々と近寄る。

彼女が声をかけている箱は、蓋だけが透明な素材だった。

背伸びして中を覗いてみる。

(中に、誰か横たわってる……)

内側はイバラのように尖ったケーブルで満たされていて、それに覆われるように瞳を閉じた男性がいた。

髪型は白と紫に近い紺のツーブロック。顔立ちは凛々しく、鋭い線を描くまぶたの上には細いフレームの眼鏡がかけられていた。

「シグルド、私の愛しい人……」

アスカから聞いた、竜殺しの英雄シグルドその人が、死者のように人形のように眠りについていた。

### 第34話 紫水晶の乙女

終  
わ  
り

## 第35話 氷細工の勇者

時間は経ち、夜。私達は部屋の隅にある丸いテーブルを囲んで食事を摂ることにした。

四角い部屋にはリソースを燃料とした発電機によって灯りが点き、安心感を覚える黄色灯の柔らかい光で全体が照らされていた。

「ポトフをどうぞ。発掘品の缶詰めを温めたただけのもので、申し訳ないですが……」  
「ありがとうございます」

ブリュンヒルデさんが目の前に置いてくれた『ポトフ』なる料理をしげしげと眺める。強化プラスチックの白いお椀の中に、湯気を立てている透明な液体と具材が入っていた。

底へ沈んでいるオレンジや緑のブロック、これは野菜を再現したもの。

茶色と白が交互に層となっている大きめのブロックは……肉を模したものだろう、昔映画で見たベーコンと似ている。

「いただきます」



私の後に続いてばらばらと「いただきます」が続く。

お腹もペコペコだったし、プラスチック製のスプーンで液体を早速口へ運んだ。

(……いい匂いがして、ちよつと甘くて、しよっぱい)

食欲が湧いてくる味だ。次にオレンジ色のブロックをスプーンの縁で細かく切って食べる。

少しほくほくしていて、けど、しゃきしゃき感もあり。

次は、茶色と白の2層が重なって出来ているブロックを。

つついてみると、ぶにぶにと弾力があり、スプーンで切ることは難しい。

お行儀が悪いと思いつつも、大きく口をあけて食べた。

口に広がる塩味、脂のこつてりとした甘味、もちもちとした肉繊維の食感。

「とつても美味しいです！」

「ああ……よかった……」

そう答えてくれたブリュンヒルデさんは何も口に運んでおらず、私達を眺めるばかりだ。

「ブリュンヒルデさんは食べないのですか？」

アスカが聞く。

「サーヴァントは食事を必要としませんから、気にしないでください……」

彼女は椅子に座り、足の上へ両手を重ねて置く、たおやかな所作をしていた。

「かつて人間であった者も多いから、食べた方が安心するというサーヴァントもいるが……」

ブリュンヒルデの言葉を聞いたバーサーカーが、そんなことを言いながら温かいスープを飲む。

少し離れた場所に座っているアーチャーも、顎を覆っている獣のような黒いギアを姿させて口元を開け、黙々と食事を食べ進めている。

「そうだね、バーサーカーも時々は食べていたもんね」

私は自分のサーヴァントの発言で、地下都市に住んでいた頃を思い出した。

バーサーカーは食事に執着するタイプではないから、私が薦める時か、よっぽど興味が惹かれる時にしか物を口にしなかった。

アーチャー961も同じ感じだ、振る舞われない限りは食べない。

アス力は3食きちんと摂っているが、その量は少な目だ。

なので、私ばかり食べているような感じもするが……。

(いや、腹が減っては戦が出来ぬと言われているし、食べるのは大事なことだ、うん) けして私が食い意地が張っているという訳ではない、ないのだ。

「どうしてシグルドさんは眠っているんですか？」

「それは……」

私が質問すると、ブリュンヒルデさんは目線を中央に置かれている、棺のような箱へ向けた。

「時系列を初めから並べてお話します。」

……私はこの場所で目を覚まし、そして、眠り続けるシグルドを見つけたのです」

彼女は目線を上に、私へと戻す。

「彼の体を調べてみましたが、異常はなく……眠りの原因は不明。」

なので、とにかく液体リソースを集め、彼へ注ぎ、目を覚ますのを待ち続けているのです……」

事情を一通り聞き、私は考え込む。

（アスカから聞いたお話と、何だか反対になってるなあ……）

かの伝説の内容を思い出す。

炎の館でイバラに覆われ眠り続けるブリュンヒルデと、それを目覚めさせる勇者であつたシグルド。

今の彼女の状況は、ちょうど反対の形になっているだろうか。

「今日は……ワームロボットを皆さまと倒せたおかげで、大量のリソースを手に入れることが出来ました。」

これが続けていけば、いつか、きつと、目を開けてくれるはず。愛しい人、大切な貴方……」

笑顔のまま話す戦乙女フルキューレの声はふわふわと揺れ、それにつられるように彼女の体もゆらゆらと動く。

その動きは大きくなり、やがてぐらりと、椅子に座ったままの体が崩れ落ちて、頭から床へぶつかりそうになってしまった。

「おっと……」

それをバーサーカーが素早く受け止める。

「……」

抱き止められたというのにブリュンヒルデさんは無反応だ。ただ、すーすーと穏やかに息をしている。

「疲れと緊張による気絶……だろうか」

バーサーカーがそう診断しながら彼女を軽々と抱き上げる。白い髪がさらさらと流れ落ち、その内側が室内灯の光を反射し煌めいた。

「寝台は……ここか、寝かせておいてあげよう」

四角い部屋から繋がっている小さな空間に、布が敷かれた簡素な台があった。

そこにブリュンヒルデさんを横たわらせ、バーサーカーはそつと毛布をかけると、仕

切り代わりのカーテンを引いた。

「バーサーカーは優しいのですね」

アスカがお腕をテーブルに置いた。

「いや……そうではないよ」

彼女がしつかり寝ていることを確認したバーサーカーは、もう一度席に座ると、腕を組んだ。

「どうしたの？」

私は彼に声をかける。暗い緑の瞳がうろろと動き、何かを考え込んでいる様子だったからだ。

「……疑問を解消するなら早い方がいいか」

独り言を呟くと、ゆっくり立ち上がり。部屋の中央、シグルドが眠っている箱へ歩いていった。

「04」

アーチャーが短く彼の番号を呼ぶ。声の響きには鋭さが感じられた。

「ご心配なく、アーチャー殿」

バーサーカーは意味がよく分からない返事をしながら、箱のすぐ横にひざまず跪き、指をかける。

(何をしようとしているの?)

私はポトフをすくうスプーンを中途半端に止めた。アスカもお腕を手に持ったまま、不思議そうに彼を眺めている。

「よっ……………」

バーサーカーは短いかげ声を出した後、力任せに蓋を取り外し始めた。

サーヴァントの筋力にかけて板はべきべきと割れ、床に透明な破片が散らばっていく。

「バーサーカー?! 何をしているの?!」

私は彼の行動が理解できず、驚きの感情もあつて思わず声を荒げてしまった。

「ブリュンヒルデさんにとって大切な人がそこにいるんだよ! そんな乱暴なこと

……………」

急いで部屋の中央に走り、彼を止めるため肩を掴んだ。

「…………俺のスキルでシグルドを治療するだけだ、我がマスター」

私の言葉も聞かず、ケーブルで埋め尽くされた中に手を突っ込む。

彼がスキルを発動したのか、イバラのような管の合間から緑の光が漏れ出した。

「でも…………こんな方法でなくても…………今みたいに振る舞ったりしたら、ブリュンヒルデ

さんがショックを受けるだろうし…………」

殺されちゃう……かもしれないし」

車内でのバーサーカーと彼女の会話を脳裏に浮かべ、次にアスカから聞いた伝説もよぎった。

「――彼女には誰も殺せやしないよ。そこまでの力は彼女には無いから」

「えっ？」

ブリュンヒルデもサーヴァントである以上、バーサーカー04を殺せる可能性があるはずなのに、彼はぼつさりと切り捨てる。

「……目覚めるぞ」

バーサーカーの声。緑の光が収まり、数秒後にその人物は目を開けた。

眼鏡の向こう側にある鋭い眼差しの色は、山肌を流れゆく氷河を思わせるアイズブルー。

「……(うん)は」

目覚めた英雄シグルドは、寝たままの状態で首を動かす。固いケーブルがかさかさとして動いた。

「……状況を確認、起床する」

彼は短くつぶやくと体を起こす。

首や衣服に繋がっていた管が千切れ、淡く光る液体リソースが少量辺りへ飛び散つ

た。

パワードスーツにも秘密部隊の装束にも見える、近未来的な黒く硬質な鎧が姿を表す。

「貴方がシグルドさんですか……？　ごめんなさい、私のサーヴァントが勝手に治療を……」

突然起こされて混乱しているであろう彼に、私は慌てながらも謝罪した。

シグルドはそんな私を、瞬き無くじっと見つめている。

「……情報の齟齬の発生を確認、速やかに訂正する」

彼は立ち上がり、箱の中から出てくる。身長はアーチャー961と同じくらいのように、つまり170cmから180cmくらい。

「当方は、シグムンドとヒョルディースの子であり、邪竜を打ち倒し、その心臓より叡智を得た英雄シグルド……でない」

彼はそう述べた後、私達に軽く一礼する。

「お初にお目にかかる、我が名は戦闘型アンドロイド、タイプ、シグルド」

感情の読めない平坦な声で彼は告げた。

「当方、いや、当機は英霊を人工的に再現しようとした機械であり、その失敗作である」

——受け入れ難い、真実を。



「……………えっ?」

私の思考が数秒止まり、素っ頓狂な声を上げることしかできなかった。

「先行量産型であるタイプ、ブリュンヒルデと同様、廃棄コフィンに収められ、リソースセンターへ運ばれる予定であつたはずなのだが」

「どういふこと……………ですか?」

アスカの口からも、そんな言葉が出てきてしまう。

シングルドはアイスブルーの瞳に私達を映した。

「当機は機械である、戦闘能力を保有するアンドロイドである。」

あちらの寝台でスリープモードとなつている機体も、同じくアンドロイド」

「で、でも! ブリュンヒルデさんは自分をサーヴァントだつて」

私は彼の言葉に思わず口を挟んでしまった。そうしたいほど、彼女から聞いていた話と何もかもが違ったからだ。

「……………自らを真実の戦乙女フルキューレだと誤認するほど、自己認識機能が破損しているのだろう」

彼は淡々と事実を積み上げていく。

「違う!」

そんな声と共に、カーテンが勢いよく引かれた。

叫んだのは、眠っていたはずの乙女、ブリュンヒルデ。

肩で息をして、整っていた顔は、苦痛を感じているかのように歪んでいる。

「私は、私は……ブリュンヒルデ・シグルドリヴァア！」

英雄シグルドと恋に落ちた戦乙女フルキュレ！ 貴方を殺し、同じ炎で死んだ女！」

彼女の声は震え、今にも泣き出しそうなのに、火が付きそうなほどの激情が込められていた。

「違う。貴殿はそう自らを錯覚しているアンドロイドではない……当機も、ただの機械ではない」

アンドロイドは否定する。

ブリュンヒルデはよろめきながら近づき、立っている彼の体にしがみついているから、その頬を両手でそっと包み込むと、恋い焦がれる乙女が恋人にそうするように、揺れる瞳で顔を見上げた。

「違う……貴方はシグルド、機械なんかじゃない、私の大切な人、そして……私が唯一愛を注ぐ人……」

ブリュンヒルデもまた、彼の意見を否定する。

アメジストと同じ色の瞳は人間のようになり、その横顔は悲しみを湛えていて……。

「お願いですシグルド、私の名を呼んでください。喉を震わせ、もう一度私の名を……」

「出来ない。何故ならば、当機はシグルドでは無い。偽りを述べる訳にはいかない」

2人の会話は平行線で……どこまでもどこまでも、お互いを傷つけ合うだけのものだった。

「では——」

シグルドではなかったアンドロイドが口を改めて開く。

「真実を君に見せよう、こちらへ」

頬をブリュンヒルデの手に包まれたまま、機械は彼女を何処かへ誘った。いざな

第35話 氷細工の勇者

終わり

## 第36話 眞実は、泥土のように積み上がり

『解除キーを認証できません』

機械音声でそう告げている扉のある場所は、ブリュンヒルデが育てていたささやかな花壇の側だった。

「当機のコードで解錠不能？ なぜだ？」

開くのに手間取っている様子のシグルド型アンドロイド。

横からアーチャー961が手をかざし、雷の形をとった魔力を扉へ流し込む。

『……』

機械音声は沈黙し、それからしばらくして、横にスライドして開いた。

「嘘……嘘……嘘……嘘……」

ブリュンヒルデさんはバーサーカーに肩を抑えられ、ぐらぐら揺れながらも何とか自立している。

アスカはその様子も、前を歩いていくシグルド型アンドロイドのことも、不安そうな面持ちで見つめていた。

「感謝を、アーチャー961。」

この先に研究ブロックがある、前進する」

アンドロイドはどこまでも冷静で、冷徹にも見えた。

「トバルカイン、手を握つてもいいでしょうか……？」

アスカの言葉に頷いてから、私は迷わず手をとった。彼女の手は冷や汗で濡れ、かたかたと震えている。

開いた扉へ向かい、シグルド型アンドロイドを先頭に、私達は懐中電灯を持って進んでいく。

「計量器とかコンピューターとか、機械が雑多に置かれてる、薬品が入れられた瓶もあるね」

白の灯りに照らされ、ぼんやりと見えた物を私は口に出す。

（映画に出てくるマッドサイエンティストの研究所みたい……）

アスカと手を繋ぎながら、深い暗闇に沈んでいる未知の場所の探索を始めた。

アーチャー961は先頭を行くシグルド型のすぐ側に控え、バーサーカーはブリュンヒルデを支えながら最後尾を歩いていた。

「……通電確認、照明を点灯しよう」

シグルド型が壁にある何かを操作すると、急に空間が明るくなった。

不安感を煽る白熱灯の画一的な光が、コンクリート剥き出しの壁と床を照らす。

「あれが廃棄棟。リソースセンターへ回収するまでの間、廃棄機体を収容していたブロックだ」

狭い通路の一面がガラス張りになっていて、下にある空間には深い穴が見えた。

そこにあつたのは。

「なに……あれ……」

恐怖で体が指先まで冷えていく。

——無数のブリュンヒルデが、山のように積み重ねられていた。

人間と見間違う、いや、それ以上に美しい存在が無造作に捨てられ、どの体もだらんと弛緩し、瞳孔が開いている。

アスカは悲鳴一つ出さず、ただ私の手を握る力を強めた。

「……………」

目の前に広がった光景にアーチャーが一瞬たじろぎ、顔を背けたが、それを誰にも気取られなくなかったのか、ぎこちない動作で前方を向き直した。

「神の子でもある戦乙女フルキユレをサーヴァントとして召喚するのは高難度であり、故に、その能力を技術的に、機械的に再現する方向へ研究は舵をとられた」

私達の衝撃をよそに、シングル型は説明を開始する。

「その他にも、半神や神に近い英霊を作り出すべく様々な研究が進められたが……」  
ブリュンヒルデがゆっくりと顔をあげ、その光景を見て……何も言わず、顔をただ下に向けた。

「研究も計画も全て、およそ200年前に凍結された。

サーヴァントを召喚し、それを粉砕、混ぜ合わせ、装甲を着用した機械化サーヴァントの方が、戦力を得る上で確実性の高いものであったから」

ブリュンヒルデが倒れないよう支え続けているバーサーカーは、彼の説明を聞きながら辺りに目を向け、情報を収集している様だった。

「……以上がこの施設と関連した当機の説明である、何か質問は」

ぼたりと、コンクリートに何か落ちる。

「何も……ありません……」

ブリュンヒルデさんの瞳からこぼれ落ちた、涙だった。

「……」

シグルド型はその雫を見て、何か言いたげに唇を動かしたが、すぐに固い無表情へ戻ってしまふ。

「帰りましょう……皆さん……」

今にも泣き崩れてしまいそうな彼女の言葉に、私達は従うしかなかった。

「眠らせてください……」

ブリュンヒルデを横したアンドロイドの乙女はそう言い、寝室に籠もってしまった。断続的に、悲しげなすすり泣きの声が聞こえてくる。

シングル型を含むこの場にいる全員は、ただ沈黙し続けるしかなく。

(ブリュンヒルデも、シングルも、再現されただけのアンドロイド……)

真実は残酷で、衝撃的だった。アスカも目線を下に落とし、じつと黙っている。

(でも、ブリュンヒルデさんは……機械とは思えないほど、優しく、親切で……)

私は彼女のことをただの作り物だとは考えられなかった。

ほころぶような笑顔、大好きな人のために花を育てたいと語った言葉、アスカや私に

向けてくれた優しさ、料理を振る舞ってくれた温かな手つき。

(人間よりずっと……人間らしくて)

彼女の存在の真偽に関わらず、私はそこに心を感じてしまったのだ。

ぐるぐると考えていた矢先、バーサーカーが立ち上がり、部屋を出ようとした。

「どこへ行くの」

彼は緑の瞳だけを動かして私を見て、強い意志を秘めた言葉を口から出す。



「もう少しあの施設を調べたい、絶対に何か分かる」

「何かって……」

「世界がどうしてこうなってしまったのか、なぜサーヴァントがこんなにも多く召喚され続けているのか……知りたくないか、モモ」

……私はすぐに言葉を返せなかった。それは、とても魅力的な提案だったから。

(聖杯戦争を始めた人のことも、過去の歴史のことも、分かるかも知れないけれど)

私はカーテンで仕切られた寝室の方を見る。

「……今は、いい。ブリュンヒルデさんの側に居てあげたい」

彼女を一人にしたくなくて、バーサーカーの誘いを断る。

「……やはり俺のマスターは優しいなあ」

彼は感心したような響きの声で言い残すと、廊下に出て先ほどの研究施設へ行ってしまった。

「アーチャーは……行かなくていいの？」

ずっと立ったままでいる彼に声をかけてみる。

「マスターアスカが強いショックを受けています、離れるわけにはいきません。

それに、バーサーカーが戻るまで、あなた方の護衛役が必要でしょう」

彼はそう言うが……彼自身がああ場所に行きたくない、言外に私達へ告げているよ

うにも思えた。

「アスカ、今日はもう寝る？」

「そう……します、お休みなさい、トバルカイン」

彼女の顔からは、あの光景で受けた恐怖からか血の気が引いて、肌がいつもより更に白くなっていた。

「同じ毛布で一緒に寝る……？」

アスカは目元を手の甲でぐしぐしと拭ってから、提案にこくりと頷いた。

「…………ぐすつ…………うっ…………うう」

どのくらい眠っていただろうか、彼女の……ブリュンヒルデさんのすすり泣く声で目を覚ました。

固いコンクリートの上に布を敷いただけの簡素な寝床だというのに、隣にいるアスカはすーすーと眠っている。

(ちゃんと眠れたんだね、良かった)

私は友達の様子に安心しながら、寝る前に近くへ置いておいた懐中電灯を手探りで探し出し、かちりと灯りを点ける。

「ブリュンヒルデ……さん、起きていますのですか？」

四角い部屋のあちこちを灯りで照らす。夕食を摂っていた丸いテーブル、廊下へ繋がる扉、そして、シングル型アンドロイドが眠っていたあの四角い箱。

そのすぐ横に彼女は立っていて、両手で顔を覆い、泣いていた。

私はゆつくりと近寄る。

「その……何て言えばいいのか、私も分からないけれど……」

彼女はずつと、自分を『プリユンヒルデ』だと信じ続けていた、そして、それが彼女の心の支えだったのだろう。

シングルを愛した戦乙女ワルキューレという自意識。

それが残酷な眞実によって碎かれた……どれほどの衝撃だろうか。

想像も出来なくて、だから、慰める言葉も考え出すことが出来なくて。

（私、こんなに旅してきたのに、まだ無力だ……）

目線を暗い床に向けて、彼女の側で立ち尽くす。

「ああ……貴女は優しいんですね……」

「そんなことないですつ、私は何も」

私の存在に気がついて声をかけてくれた彼女に言葉を返すため、地面を見ていた顔を慌てて上げた。

「そんなふうにされたら私……」

彼女の顔を覆っていた手は払われて、雪より白い頬を伝う雫が、懐中電灯の灯りで煌めいた。

「困ります……」

雫のその色は、コールドタールのような粘度ある、黒。

空の眼窩がんかから、異様な涙はどろどろと止まることなく流れ続けていた。

「あは、ははははは……」

ずるりと、熟れた果物の皮が剥がれるように、彼女の白い髪が全て床に落ちた。

腕が私へ伸ばされる。それは肌が削れて内部のパーツが丸見えとなっており、何年も放置された物の質感をしていた。

（私達が出会ったブリュンヒルデさんじゃない?!）

嫌な予感を覚えて、後ろへ後ずさる。

「ふふ、うふふふふふ」

正体不明のアンドロイドの手が、近くの箱に触れた。

黒々と汚れていく顔に美しい微笑を浮かべたまま、指の力だけで箱の側面をひしゃげさせる。

続いてばきばきと、破壊音が響いた。

「——アスカ……」

私は悲鳴をあげたい気持ちを抑え込んで、無防備に眠っている友達の名を静かに呼んだ。

「アスカ、起きて、逃げるよ、起きて、ねえ……」

全身が恐怖でひきつり、顔まで強張ってしまう。

あのアンドロイドの標的とならないよう、姿勢を低くし、寝ていた場所へにじり寄る。「どうかしましたの？ ひよつとしてお手洗いに1人で行くのが怖いのですか？ トバルカイン……」

「違うよ、逃げるから、懐中電灯持って起き上がって、早く……」

必要最低限のことを寝ぼけ眼のアスカに伝えている間にも、部屋にある物が腕力のみで壊されていく音がする。

前、右、左、上……本当にあちこちからだ。

「ブリュンヒルデさんと同じ姿の敵が、部屋の中にいる」

「……他の方々は？」

「分からない、居ない……みたい」

シールド型アンドロイドも、見張りをしてくれていたはずのアーチャーの姿も見えない。バーサーカーも帰ってきていない。

恐怖で心が押しつぶされそうになりながら、それを表に出さないようアスカの手を引

き、廊下へ。

「デザートランナーまで行こう。中で立て籠っついていれば、バーサーカーかアーチャーのどちらかは来てくれるはず」

「……たどり着けませうでしょうか」

アスカが懐中電灯で廊下を照らした。

目の前に見えた光景。

「ああ、ああ……」

「はーははは、ふふふふ……」

「困ります、困ります、困ります……」

「お父様お父様お父様お父様お父様……」

……光が届いた数百m先まで、何体ものブリュンヒルデ型アンドロイドが徘徊していた。

体のパーツが揃っている者は少なく、足や腕の無いボディでぐらぐらと不安定に歩みながら、闇の中で声を発する。

髪も皮膚もなく、20世紀の衣装用マネキンと似た形をした彼女達は、何かにぶつかると、それを有らん限りの力で壊し、残骸へと変えていた。

「私……は、全てを壊す、いけない、あの人いない世界、いけない」

「愛無き世界、いらぬ、愛、どこ？ なに？」

全く同じ性質を持った声が言葉をばらばらと喋る様は、全身が凍えるような薄気味悪さがあった。

（私達が捕まってるあの残骸と同じにされるのも、時間の問題……）

盾になりそうな物を探す。

液体リソースを運んできたポリタンクがあった。中身は無いので軽く、強度もそこそこある。

冷や汗で額を濡らしているアスカにも手渡した。

「トバルカイン、何かあればわたくし、令呪を使います」

「でも……」

私は考えを巡らせた。

巨大な機械化サーヴァントを倒す最中にアスカは令呪を使い、残りは2角。

「補充する方法なんて、あるかどうか分からないんだよ……？ そんな貴重なもの、簡単に使わせるわけには」

サーヴァントを使役するマスターの証、戦う意志の表明。

思いを込めながら解き放せば、時空を超えた瞬間移動すら可能とする、摩訶不思議なこの紋様。

かつこよく言うのであれば、いわゆる最終手段<sup>ラストリゾート</sup>。

私もバーサーカーを助けるために使ったので、あと2回しか使えない。

「だからと言ってためらい、取り返しのつかない事態になることの方が……怖いのです」  
語るアスカの表情は決意と恐怖が混ざったもので、私はそれ以上何も言えなかった。

「……私だって、令呪を使う意志はあるよ。お互いにお互いを守りあつて行こう、アスカ」

「はい、トバルカイン」

ポリタンクを盾にしながら、ゆっくりと前進を始める。

出口までは……1 km以上。敵の数は、とにかく沢山。

「……っ」

ふらふら動き回る壊れたアンドロイド。その間を、足音も衣擦れもたてないよう慎重にすり抜けていく。

(生きた心地がしない……!)

頑丈な設備も易々と破壊する力を目の辺りにしたばかりだ。アスカと同じように、冷や汗が私の額を流れていく。

「ああー」

アンドロイドは突然叫ぶと、何かに殺到していく。



思わず懐中電灯を向けてしまった。

どうやら、天井から小さなコンクリート片が落下して、その音に引き寄せられているように。

「大きな音に、反応するのかな……」

「灯りをぶつけても、無反応ですものね……」

体を寄せ合い、今見た光景について考察する私とアスカ。

「じゃあ、これを壁に投げて音をたてれば、道が開けるかも……」

盾替わりに持ってきたポリタンク。軽いので遠くまで投げられそう。

「……ですわね」

アスカは前を見据えた。コンクリート打ちっぱなしの廊下をぐるぐる徘徊する、アンドロイド数体がいる。

「私がポリタンクを投げる、出来た隙間を全速力で駆け抜ける、これでOK?」

「ええ、ついていきます」

手順を確認しあい、私は懐中電灯をアスカへ預けた。腰を曲げ、タンクを両手で持ち、投擲の姿勢をとる。

「やつ……!」

横にある壁、そのやや前方左斜めへ向けて投げた。深い闇に包まれた廊下に、軽い音

が響き渡る。

「あつ」

「あつあつ」

ぞろぞろと壁へ向かうアンドロイド達。出来た隙間を一気に駆け抜ける。

「やった……うまくいった」

破れかぶれだったけど、ひとまず切り抜けられた。出口まで残りおよそ500m。

「もうひと息……」

「トバルカイン！ だめー！」

後ろから異様な圧を感じ、振り向く。

アスカが懐中電灯で照らしてくれている視界に映るのは、揺れた自分のピンクの髪の毛の端と。

「……ああ……ああ！ ——ああああ？」

片方の瞳だけを持った、損傷の激しいアンドロイド。

泣き出しそうな声で意味など感じられない言葉を放ちながら、黒く染まった指を私へ伸ばした。

「令呪をつ……」

アスカが力んだ声を出した瞬間、目の前のアンドロイドの腹から突き出す金の槍。

「触らせ……ません！」

響いたのは、たおやかでいて、芯の強さを感じさせる声。

（私達が出会ったブリュンヒルデさんだ！）

戦乙女フルキユレの似姿である彼女が、古くは自らと同じ形をしていたアンドロイドの胴体に、細い金の槍を突き刺し、ぐいと持ち上げて地面に叩きつけた。

響く金属音。

「誰？」

「誰？」

「誰？」

当然のように他のアンドロイドも反応し、こちらへ殺到してくる。

「モモタさんとアスカさんは私の後ろに……守ります、絶対……！」

金の槍を両手で構え直し、両足で地面を踏みしめて、力強く立つブリュンヒルデ。

その背に悲しみはなく、私達を守護する決意があつた。

「いや、それには及ばない」

聞こえてきたのは、低く落ち着いた男性の声。

ブリュンヒルデの背中越しに見える前の空間を、青く光る物が飛んでいく。

それは意思があるかのようにジグザグと動く、壁へぶつかって反射し、高い音を幾

度もたてた。

「ああ……ふふふ……」

多くのアンドロイドが、音と、懐中電灯より強い光を追って、闇に沈んだ廊下の奥へ戻っていく。

足音をたてず、誰かが歩いてきた。

「多数を相手にしての戦闘は不利だと判断、擬似宝具による誘導を行った」

シグルド型アンドロイド、彼が、私達の方にやってくる。

「それ……サーヴァントの宝具と同じもの、ですか？」

呆然としているブリュンヒルデやアスカにかわり、私が声をかける。

彼の手には、青く輝きを放つ短剣が握られていたからだ。

「いや、違う。

これは電磁石などの技術を応用し、英雄の宝具性能を出来うる限り再現したものに過ぎない。

故に『偽・破壊の黎明』……偽物である」

彼は、私達を守ってくれたブリュンヒルデの前に立つ。

「助けてくれて、ありがとう。シグルドではないあなた」

力の入りすぎていた肩を、安堵感からか落とし、ブリュンヒルデは声を発する。

「無数の廃棄個体を目にした後、ずっと泣いていました。ずっと、ずっと……。」

でも、あんなに悲しかったのに、襲われそうになつていた2人を見たら、体が勝手に動いたんです」

落ち着いた様子で言葉を続ける。

「この人達を助けたいと……思ったら、自然に。ただの壊れた機械である私を、助けてくれ皆さんを、守りたいと思つてしまい……」

私とアスカはそつと彼女の後ろから移動した。

「それにきつと……本物のブリュンヒルデだつて、そうしたでしようから」

穏やかさの中に、どこかもの寂しさを感じる笑みを浮かべる彼女。

「……では、君の行動は全て模倣なのか、タイプ、ブリュンヒルデ」

彼の言葉に、ブリュンヒルデの白いまつげで縁取られた紫の瞳が、優しくげに細められた。  
た。

「いいえ、それは違うのです、シグルドの形をしたあなた。何より私が、そうしたいと思つたから」

彼女は幼子に語りかけるように、柔らかく言葉を紡いでいく。

「姿も記憶も偽りならば、せめて、心だけでも真でありたい。」

……あなたは どうして、私を助けてくれたのです？」

シグルドの似姿は、一度アイスブルーの瞳を長く閉じると、それから再びゆっくりと開いた。

「——とつさに体が動いた。戦法など、その後から考え出したものだった」

返された答えに、ブリュンヒルデは嬉しそうに微笑んだ。

「それは、誰かの真似、でしたか？」

「大英雄であった彼の理念や思考を模倣したのかも知れないが……いや……」

彼の瞳はずっと、目の前の乙女に向けられていた。

「当機の、思考したものであり……誰かに、傷ついてほしくないと、危ない目にあつてほしくないと……」

彼は悩み、自分の気持ちを表す言葉を必至に探していた。

その様子は、まだ言葉の使い方に慣れていない子どものように、ブリュンヒルデは優しい微笑みを深くする。

「私達は英雄に似せて作られました。だから、英雄に倣い、正義を成し、悪を滅する。……けれど、同じ姿をしているからといって、心まで英雄の真似をする必要はないのです」

「当機には、貴殿の言葉は難しい」

困るような表情を見せたシグルド型アンドロイド。そんな彼に彼女は語りかける。

「……私、ずっとブリュンヒルデのふりをしていました。」

100年、200年もの間……そう作られたから、そうあらねばならないと……。

だから、真実で否定された時、ショックだった」

私は彼女の過ごした年月の長さを思い、作られた者達への悲しみを感じてしまった。でも、そのおかげで自分の心を見つけることが出来ました。

すごく苦しかったけれど……誰の真似でもない、悲しみと、慈しみと、愛を感じる心を」

アンドロイドの乙女はそつと、まだ答えを出せないアンドロイドの頬に触れる。

「心を探すのは時間がかかります。だから今は、目の前の危機を共に乗り越えましょう」

彼の手が、自らの頬を包んでいる彼女の手に重ねられる。

「……了解した、最も新しき戦<sup>フルキユール</sup>乙女よ」

2人の会話は終わり、彼女彼らは私とアスカに向き合った。

「あなた方のバーサーカー、アーチャーと合流しましょう。居場所の心当たりは？」

ブリュンヒルデの言葉に私が答える。

「……ひとまずデザートランナーを置いた入り口まで行こう。」

アンドロイドが徘徊しているここよりは、落ち着いて作戦が建てられるはずです」

「……分かりました、私と彼であなた方を守ります」

力強く頷いてくれる2人に頼もしさを感じながら、私達は長い廊下を歩んでいった。

第36話 眞実は、泥土のように積み上がり  
終わり



## 第37話 砂中（さちゅう）に没する

「良かった、車は無事みたい」

シングル型の擬似宝具のおかげで戦闘は避けられ、危なげなく出口までたどり着くことが出来た。

砂が外から吹き込んできて、コンクリートの上を黄土色に染めている。その色に、おかしなものが混じっていることに私は気がついた。

（黒い塵？）

しやがみ、指で触ると、更に細かい破片へ砕けてしまう。

（赤いセイバーが戦っていた黒い人型と、雰囲気似てる気がする、いや、同じ物かも）  
そんな感想も抱いたが、今は置いておき、車体の無事をアスカと一緒に確かめることにした。

「アーチャー961もバーサーカー04も見当たりません」

ブリュンヒルデさんが中から出てきてそう告げる。

車体の外部破損が無いか確認していた私達に代わり、車内を探索してくれていたのだ

「では……どこへ？」

アスカが首を傾げた瞬間、轟音が外の荒野から聞こえ、砂と塵がざあつと吹き込んできた。

空を見る……雲すら失った世界だというのに、黒い粒子が舞い上がり、薄く曇っていた。

「……雷撃と風を裂く音。何者かが戦闘を行っているものと当機は判断する」  
「行ってみよう、きつと誰かいる！」

シングル型に私は言葉を返し、その場にいた全員は急ぎ足で外へ向かった。

空は砂煙と黒い塵で覆われ、星の輝きが消え失せていた。

地面に散らばっているのは、戦乙女の形を模したアンドロイドの破片。  
フルキュレ

そして次に見えたのは、肩を大きく動かしながら荒い呼吸を繰り返すアーチャー96  
1と……立っている大きな存在。

「これは……いったい……」

ブリュンヒルデさんが見上げながら、呆然と立ち尽くした。私も彼女と同じものを目に映す。

——それを、なんと言い表せばいいのか。

『マーアア……ギユイオオオオー!!!』

『クアツカクアツカ……キイイイ……!!!』

不気味な声が重なり響く。身長300mを超えている巨人が2体、荒野にたたずんでいた。

しかしその形は、異様。

黒い塵で作られた体はふわふわと実感がなく、肩の辺りで巨人同士の体は接合していた。

「はあ……くっ!」

アーチャー961は苛立ちを隠さず、歯ぎしりをする。

彼の状態を見れば、衣服の一部は千切れ、露わになった肌には細かい傷が付き、じくじくと出血しているではないか。

そんなサーヴァントの姿を見下ろし、溶け合っている巨人は2個の頭を前後に揺らしてケタケタ笑った。

「アーチャー……」

アスカは制服の胸元を両手で掴み、今にも駆け寄りたいたい気持ちをぎゅつと我慢している。

(敵……しかも大きい)

私は状況を整理するため、周辺の様子を素早く見る。

(この残骸の山は……アーチャーがやったのかな、1人で戦っていたの?)

地面に広がるアンドロイドの腕や足、大量の黒い塵。

(バーサーカー……いない?)

東洋風の鎧を纏った彼の姿はない。手の甲にある自らの令呪を見る。

(どこか別の場所にいる?)

杵を失った時計の短針と長針を思わせる紋様は変わらずそこにある。これがある内は、バーサーカー04の存在も消えていないという事だが。

「……」

アーチャーは腰に装着していた箱からボトルを出した。

液状のリソースが入っているその蓋を乱暴に開け、中身を一気に飲み干し、捨てる。ボトルはアンドロイドの残骸に混ざり、すぐに見失ってしまう。

彼は手の甲で雑に口元を拭った。

「再び……——消し飛ばせ！」

弓につがえるのは青い矢。そこに空間が揺らぐほどの熱が込められ、炎の輝きが増していく。

すぐさま攻撃は放たれ、300m強の巨人は、ただ一撃で体を構成する塵を飛ばされ霧散した。

「ひどい傷です……アーチャー、なんて無茶を……!」

アスカが走って彼の元へ行くので、私とブリュンヒルデ、シグルド型も追いかける。

「……マスター、まだ終わっていません、危ないので、離れて」

やってきた彼女に対して途切れ途切れに話すアーチャー。

今にも膝をつきそうな彼が天を指差す。目を向けると、何か丸い物が浮いていた。

「再生……するのです、あの敵は」

球体は2つ。高速回転するそれは、散ったはずの塵を引き寄せ、あの巨体をもう一度作り上げようとしていた。

「あの塵が、廃棄されていたアンドロイドに潜り込み、動かしていました。」

デザートランナーを破壊しようとしたそれらを何百体と倒し、あの敵も、倒そうとしたのですが……」

体制を大きく崩したアーチャーを、シグルド型が支える。ブリュンヒルデは細い金の槍を持ったまま、じつと敵を観察していた。

「……あれはきつと、双子座です」

「双子座?」

彼女が聞き返す。

「人間であつた兄の死を悲しみ、神の血を引き不死であつた弟は共に星座になることを選んだ。

空にて輝く双子の戦士、恐らくその伝説を再現した……機械化……サーヴァント」

ブリュンヒルデの表情は険しく、声は暗い。

それも当然だろう。機械化サーヴァントの登場によつて、彼女ら戦闘用アンドロイドは廃棄を決定付けられたのだから。

「アーチャー961、あれは倒せません」

「……いいや、倒せる。なぜならあれは偽物ですから」

ブリュンヒルデの言葉をアーチャーは強く否定した。

「塵を剥ぎ取つてから球体に攻撃を加えた時、再生は遅くなった。

つまり、攻撃を加え続ければ必ず倒せます」

私はアーチャーを見る。傷は多く、液体リソースは少ない、満身創痍に近い状態だ。

「その口振りは……何か策がある、ということか、アーチャー961」

シングル型の問いに彼は頷いた。

「……1人では出来ない策でした。ですが」

ひびの入った暗い琥珀色のヘッドギアから、アーチャーの瞳がうつすら透けて見え

た。

「戦闘が行える存在がここには3人いる。ならば……勝てます」

彼は服についた砂を払い、心配そうに見ているアスカの肩を軽く撫でてから、異形の双子巨人へ向かい合った。

「アイハブコントロール……擬似宝具展開、偽・破壊の黎明……」

シグルド型の周りに浮かび上がる、青い短剣。彼はそれを掴み、黒い塵の巨人へ幾度も投擲する。

砂っぽい大気を裂きながら、キラキラと飛んでいく透き通った剣。

『ミヤアツハー!!』

『キャイツヒー!! ヒヒーヒ!!』

巨人は粒子で出来た腕で物体を絡めとり、落とそうとしたが、その動きよりずっと剣は速く、腕は空振りをした。

そして、短剣を投擲したのは敵に攻撃するためではない。

「……後は策通りに、アーチャー961」

「ええ、策通りに!」

その上を跳躍していくのはアーチャー。そう、足場とするために剣を飛ばしたのだ。巨人を取り巻く螺旋階段のような形を取った青の剣。その刀身を、雨の森を行く牡鹿のように、彼は足取りも軽く跳んで行く。

「お前を吹き飛ばした回数など忘れた……さっさと霧散しろ！」

頭上をとったアーチャーが敵へ向けたのは、その手の平。雷いかずちがほとぼしり、空間に光の幾何学線が記される。

『ヒヤハ……』

『マハー!!』

感情の読めない声を発しながら、巨人の五体が散って消えていく。

再び宙に現れた真つ黒な球体。いつそゆっくりに見えるほどの高速度で回ると、落ちていく塵を集積しようとしたが。

「併せてっ……」

「了解……!」

それを止めるのはブリュンヒルデ型アンドロイドと、シグルド型アンドロイド。

「偽・死フェイク・デスがふたりを分断つまで……!」

彼女が宣言と共に投げた槍が、アーチャーからダメージを受けていた球に刺さり、穂先が内側でぶわりと膨張、それを受けて球も歪に巨大化した。



重さと勢いに耐えきれず、1つの丸が地に落ちる。

地面に伝わる重たい振動。

「攻撃を続ける！」

浮かび、未だ回転を続けている残った2つ目の黒の球体に、刺さった1本の青い短剣。動きを止め、宙でゆっくりと斜めに傾いた球へ、無数の剣が高速で突き刺さる。

「偽・壊劫の天輪……!!!」

傷を受け、のたのたと飛んで逃げようとした球体。その更に上へ跳躍したシグルド型アンドロイドの姿。

一瞬だけの無音の後、拳が叩き込まれ、敵は地面へ落とされた。その場所には金の槍によつて落とされていたもう1つの球体が。

2つはぶつかり、50mを超えた高々とした砂柱が上がる。

——息が合わさった見事な三者の連携、僅か数秒の間の出来事。

「……とどめを！」

ブリュンヒルデが後方へ退却しながら空を見る。

砂と塵が混ざっている暗黒の空から、アーチャー961は自由落下していた。

彼は手に弓と矢を持ち、頭から地面へ落ちながら、敵を見据える。

琥珀色のヘッドギアの破片がこぼれ、風に巻き上げられながら、空へキラキラと上

がっていった。

「融解……そして終われ!!!」

彼の体に残された力、全てが乗った矢は、球体に触れた瞬間に諸共爆発、発生した衝撃波で霞んでいた夜空は完璧に晴れ渡った。

輝く並びが星座を形作る空に、中途半端に溶けたアンドロイドのパーツが火の玉となって、弧を描きながら幾つも飛んでいく。

機械化サーヴァントは跡形もなく滅び、攻撃の中心点は小規模なクレーターと化していた。

じゆうじゆうと音を立てている地面へ、アーチャーは危なげなく優美に着地し、乱れた髪を整える。

その立ち姿が揺らめく陽炎越しに見えた。

「……戦闘終了を確認」

シグルド型の声を聞いた瞬間に、ずっとその様子を岩陰から見守っていた私とアスカは、緊張が解け、へなへたと腰を抜かしてしまった。

「……俺、最近アーチャー殿の活躍を肉眼で見れていない気がします」

戦ってくれたみんなの回復のためにも、液体リソースを求めてブリュンヒルデさんの

居住区へ戻ってきた。

「きつと格好良かったんだろうな……惜しいことをした」

オレンジの光で照らされた空間にあるのは、刃物によつて残虐に刻まれた数十体のアンドロイドと。

「お帰りなさい、無事で何より」

椅子に座り、紙で出来た書物を捲めくっているバーサーカーの姿。

彼は広げた本を片手で持ち、表情を見せないようにしていた。まるで扇を広げて顔を隠す、気取った舞台役者のように。

「04、お互いのマスターの危機でした、戦力も足りなかった……お前はどこでなにをしていた？」

アーチャーの言葉に込められていたのは非難の響き。

敵対者を易々と滅ぼせる彼の怒りを真正面からぶつけられたというのに、バーサーカーは怯えも動揺もせず、ページを指端で捲めくりつつ答える。

「……研究施設を探索していたら、貴重な本を見つけた。

それを持って帰還しようとしていた矢先、廃棄されていたアンドロイドが動き出したので、隙を伺いつつ撃破し、この場所を確保、待機していた。荷物と食料の防衛は大切だからな」

ぱらりと、彼が指で一枚ページを進めたことが音で分かった。  
「以上」

バーサーカーは本を片手で音立てながら閉じ、座ったままアーチャーをじろりと見た。

「……本当に、そうだったのか？」

2人の間に緊迫した空気が流れる。先程まで本で隠されていて、今は露わになっている彼の瞳は、緑が暗く、内心は何えない。

(バーサーカーもアーチャーも、何か変だよ……)

私は心の中だけで泣き言を漏らす。戦いが終わった後だというのに、一触即発の雰囲気だ。

「……戦闘に加勢できず、申し訳ない。

そして、ブリュンヒルデ型とシグルド型アンドロイドと協力し、我がマスターを守ってくれてありがとう」

礼の言葉を述べる彼に、アーチャーは何の反応も見せない。

「喧嘩は」

重苦しすぎる空気の中、口を開いたのは意外な人物だった。

「良くないと、当機は考える」

ブリュンヒルデの側にいたシグルド型は、眉間にわずかなしわを寄せながらぼつりとつぶやいた。

うろたえながらも行動するその姿は、どこか幼い感じ。

「うーん……」

バーサーカーは目を細めて何かを思案してから、椅子から立ち上がり、アーチャーへ歩み寄る。

「……私に怪我の手当てをさせてくださいますか？ アーチャー殿」

存外丁寧な口調でかけられた言葉に対し、顔を機械部品で隠した彼は無言で肯定した。

第37話 砂中さちゆうに没する

終わり

## 第38話 だからあなたと2人がいい

「これが、貴重な本……ですか？」

ブリュンヒルデが困惑しながら、美しい形の手で表紙を撫でる。

「ああ、とつても貴重だぜ」

バーサーカー04が困り顔の彼女に答え、私も、そ集まるみんなの背中越しにそれを見た。

刑部姫に貰った折り紙とは違う質感の紙、本は3cmほどの厚さがあり、手にもって鼻を近づけてみると、植物由来だと思われる不思議な匂いがした。

「ですがこれ……」

私の次に本を持ち上げたアスカが、繊細な手つきで紙を捲めくった。

「白紙……ですわ」

本だと言われたのに、ページをどこまで進めても文章などは見つからない。紙の動くばらばらと乾いた音が部屋に響くばかりだ。

「貴重だろ？ あらゆるものが資源不足を理由に電子データ化されているのに、何も書

かかれていない白紙の本があるだなんて」

仮面に隠れていない左側の顔に、得意げな表情を浮かべるバーサーカーの言葉には納得できる。確かに貴重で、高級品だと思えるが。

「何か、特別な仕掛けがあるのだろうか」

アスカから受け取り、しげしげと観察しているシングル型の瞳には、純粋な好奇心が透けて見えた。

「紙の本の解析はまだだが、この施設にあつた電子のデータ……他の研究施設のデータもあつたな、それは俺のスキルとデバイスでぶっこ抜けた。

ほとんど壊れてたけど、がっかりしないでくれ、デザートランナーの設備があれば直せそうだからな」

彼の発言に対し、前から思っていた疑問をぶつけてみた。

「ハッキングってどうやってしてるの？」

「んー……相手に伝わるように説明するのは難しいんだが」

彼は説明を始める。

「接続するまではデバイスでやって、そこから先はスキルでやる。

欲しいデータや干渉したいシステムを人間の心に見立てて、俺の脳内で解体し、理解して、欲しい情報やシステム権限をコピーする。んで、複製したそれらを元に、デバイ

スでハッキングを続けるんだ。

……分かったか？」

「モモタさっぱり分かんない……」

想像以上に難解な理屈だった、何を言っているんだろうコイツは。

(バーサーカーの話すことって、時々わけわかんないんだよね……)

彼なりに理論立てて喋ってくれているのだろうが、私や周りに伝わらないことはたまにある。彼が高揚などをしている時は特に顕著だ。

「貴重と言えば……まだ、缶詰めや食料が幾つか残っています。」

私達は食べられないので、皆さんに差し上げます、振る舞わせていただきます」

「当機も手伝おう」

ブリュンヒルデさんとシグルド型の提案に乗って、難しい話は置いておき、美味しい夜食をお腹いっぱい食べることにした。

メニューはポトフと、そこに新しくパンが加わった。

パンは板状になっていて、水を上から垂らすと膨らみ、瞬く間にふわふわもちもちのパンになった。

お湯でやってみると、熱々のパンに。

ポトフのスープに浸しながら食べると、水分を含んだ生地がとろとろになって、実に



美味。

全員で食卓を囲めば、先ほどまでであったギスギスとした空気も完全に無くなる。  
(ご)飯は大事だなあ……)

食事の大切さとありがたさを噛み締めつつ、私は幸福感で胸一杯になっていた。

アンドロイドに襲われてからというもの、夜通しの行動が続いたので、食事の後、私とアスカは仮眠を取った。

一方バーサーカーは何をしていたかという点、アーチャーと、アンドロイドであるブリュンヒルデとシグルドの治療をし、持っていく物資の選定をしていたようだ。

数時間の睡眠がとれた後、私達は出発することにした。

まだ空に夜の星が取り残されているであろう、明け方の時間。

「知りたくないの？ 本当のこと」

出発の前、四角い部屋の中でブリュンヒルデにそう問いかけると、彼女は困ったような表情をした。

「……きつと、シグルド型が見せてくれた情報以上のものは、研究データの中にはないで

しよから」

燃料の補給も終わり、食料もありったけ詰め込んだ。水のボトルもあって、それもい  
ただいた。

後は……彼女と会話をして、旅立つだけ。

「それより、もっと」

彼女は座ったまま、目線を彼に向ける。

「あの人へ、時間を使いたいのです」

その先にいるのは、シングル型。白紙の本を捲り、熱心に眺めている。

「……傷は貴女のバーサーカーが治してくださいましたが……寿命までは、治せません」

彼女の言葉を聞いて、私は胸が苦しくなり、思わず顔を下に向けてしまった。

「耐用年数の限界が近づいています、パーツを交換しても、もう保たない」

何て事のないように話し続ける彼女。

「だから、私という存在が死んでしまう前に、あの人と穏やかに過ごしたいのです」

「……どうして？」

顔を上げ、次にそつと訪ねると、彼女はほころぶ花のような笑顔を見せた。

「私がブリュンヒルデの似姿だから、という訳ではなく。」

棺に眠るあの人を一目見た時から……好き、だったのです」

優しい気な表情で語る今の彼女は、とても機械だなんて思えなかった。

「なんてことでしょう……何百年も片思いだったのですね、私。」

ふふ……それに気がつくことが出来たのも、皆さんと出会ったおかげでしょうか？」

肉体があり、心があり、魂が、そこに確かにあると、私は感じてしまったのだから。

「……一目惚れ、です、好きなのです、彼の事がどうしようもなく」

シングル型がブリュンヒルデさんに見つめられているのに気がついたのか、目線を白紙の本から上げ、彼女に向けて小さく微笑んだ。

彼女もまた、同じくらい小さく微笑み返す。

その光景が美しく、私は胸が熱くなり、涙が瞳に溜まるのを感じた。

「私の終わりはここでいいのです、モモタ・トバルカイン。」

自分を知り、心を知り、愛を知ることが出来た……これ以上の幸福は、ないでしょうから」

……何も、言えなかった。

いや、詭弁は言えるだろう、「ここを出て旅をすれば体を治せるかも」とか。

けれどそれを彼女は望んでいない。だから、もう何も言えなかった。

「お別れですね、私とあなた」

「はい、ブリュンヒルデさん。ありがとうございます……ごさいました」

「私がそうしたいからしただけのこと、気にしないでください」

ブリュンヒルデの形をした、アンドロイドを真っ直ぐに見る。

白い髪、紫水晶の瞳、小さく笑んでいる唇。

初めて出会った時と何も変わっていないのに、とても輝いて美しく見えた。

「当機は貴殿らの旅の成功を祈っている、また会おう」

「お気をつけて、さようなら。……また、どこかで」

2人に見送られながら、私達はデザートランナーへ乗り込んでいく。

「アスカ、約束していた花の種です。好きな場所に蒔いてくださいね」

「清水の湧くような美しい場所に蒔きます。それまで大切に持っていますわ」

ブリュンヒルデとアスカは短い会話と希望を語り合い、別れた。

「ありがとう、ブリュンヒルデさん……シグルドさん。どうか……幸せに」

私は、そんな責任もとれない言葉しか言えなかったけど、もう、お別れするしかなかった。

時間も物資も、追い立てられるような旅が再び始まるのだ、まだ全貌の見えない謎を抱えたまま。

「ねえアスカ」

「はい、なんでしよう?」

廊下にて。

運転室へ向かおうとしていた友達に聞いてみる。

「あのアンドロイド達、幸せかな」

アスカは少しだけ考え込みながら、紫の石がはめ込まれた髪留めを指で触った。

「きつと幸せです、お互いに愛し合っているのですもの」

彼女は晴れやかな表情を浮かべ、迷いのない口調で言い切ると、運転室へ歩いて行ってしまった。

「……そっか」

私は取り残され、廊下に立ちながら1人思う。

彼女と彼の幾末は、きつと別れだろう

それでも幸福はそこにあり、2人が満足ならば、それでいいのだろうか。

「愛……か」

愛って、そんなにすごいものなのだろうか。

自己の消滅も、死も、傷も、痛みも、恐れることなどないと思えるくらいに。

「だとしたらやっぱり……愛って怖いなあ……」

車は動き、愛し合う2人の住処から遠ざかっていった。

「私、もうすぐ停止してしまうのです」

モモさん達を見送り、コンクリート剥き出しの長い廊下を歩いている最中、共に歩んでいる彼へそう言いました。

「当機も同じく」

彼の言葉は偽りもためらいも無くて、だからこそ私の胸に真つ直ぐ届くのです。

「……それまで、どう過ごこしましよう」

私がぼつりとこぼした言葉の後、彼の歩みが止まります。

「植物が芽を出している」

彼に習い、私も下を見てみると、湿った土の下から緑が芽を出していることに気がつきました。

「あつ……」

次に私は周りを見ます。

機械化サーヴァントがまき散らしていた暗黒色の塵に無理やり動かされ、そして壊れてしまった沢山の廃棄個体が転がっている。

「日のある内は草花を育て、彼女らを吊りたい」

そんな彼の言葉に頷いてから、私はしゃがみ、足元の草を指の腹で撫でました。小さくて柔らかくて、今にも失われてしまいそうで……だからこそ愛おしい。

「では夜は……語らいましょう」

彼に私の考えを告げると、不思議そうに眉を上げます。

「何を語り合う？」

「そうですね……まずは、お互いの名前を決めましょう」

「名前」

「はい。だって、私とあなたはブリュンヒルデとシグルドではないのですから」

「そして、どうする」

「次に日々を記しましょう。この体が止まるまで」

「その次は？」

「娯楽を見つけましょう、映画や、書物。共に見て、楽しみ、感想を言い合しましょう」

声も言葉も話題も気持ちも、不思議と弾んでいきます。

「次は」

「周辺を散策するのも良いかも知れませんが、徘徊するワームロボットに気をつけながら」  
「それも終わったら、何をしよう」

「朝の日と、夕日を一緒に見ましょう」

私は思う。

1人だとやりたいことなんて見つからなかったのに、2人に増えた……なつた瞬間、したいことがどんどん見つかつて。

驚いてしまう、どきどきしてしまう。

私が顔を上げると……彼のアイスブルーの瞳と、目があいました。

「……そうか、それはとても」

にこりと、彼は固い頬を動かして笑うのです。

「楽しい日々に、なりそうだ」

少年のような邪気の無い笑みで。

私はきつと、このひとときを忘れることはないでしょう。

(そして……)

次の言葉は、胸の内だけで呟きました。

(死んだとしてももう一度生まれ、この人と過ごしたい。彼も同じ気持ちであれば……)

私、とても嬉しいのです)

小さな独占欲からの言葉は、最後に伝えられるのでしょうか？

心の中だけで言ったことなのに、恥ずかしくてはにかんで、そんな私を不思議そうに



見つめる愛しい人へ微笑んで。

それから、立ち上がり、彼と手を繋いで帰りました。

胸はオーバーヒートも起こしていかないのにやけに熱く、瞳からも涙が溢れ出そう。

何度も何度も、こう思ってしまったのです。

(ああ、私……)

第38話 だからあなたと2人がいい

終わり

第11章 アポカリプスワンダフルキツチン☆  
 にやんとびつくり！ 終末世界の愛と謎編〈

第39話 大ピンチ！ いよいよ始まる最終決戦（？）

『2400年、研究報告。』

通常的方式を用いて召喚されたサーヴァントを、霊体粉碎機（以下、ミキサーと呼称）にて加工し、得られたサーヴァントペースト。

これは霊体と物体の間の性質を持ち、通常のサーヴァントへ干渉を与えることが出来ると判明した。

また、機械四肢内部に充填することで、簡易に高度思考能力を獲得することが可能。調整された電流を用いることで、人工筋肉の代替としても使用することも出来る。

上記の点から、機械技術のみでサーヴァントを再現しようとする「Bプロジェクト」は、資金面、資源面においてもこちらの「Cプロジェクト」の下位互換であると書かざるを得ず、そして……』



「おかしいな？ 昨日の夜の時点ではきちんと復元できていたはずなんだが……」  
首を傾げる私とバーサーカー。

じつと音に耳を傾けているアーチャー961の、ヘッドギアのつるりとした表面に、  
モニター上の壊れた文章が反射していた。

「うーん……仕方がない、読めるところまで文章を飛ばすぞ」

バーサーカーが画面を下へとスクロールさせると、しばらくしてまともに読める文面  
が戻ってきた。

そこから読み上げ機能を再開させる。

『—————』

上記プロジェクトだけでなく、世界各地に分散した「アーキマンレポート」の収集、解  
読も急務である。

レジスタンスと合流を果たした今だからこそ、我らの理念を振り返ろう。

私達の開発した技術は、地球を牛耳り、人類を資源化したAIを打倒し、人を救う手  
段、世界を救う唯一の術である。

そして最終的には、これらの技術を用い、「7の滅びの使徒」、「蛇」と「女蛇遣い」を  
倒し、聖杯を奪還せねばならない』

文章の終わりが近づいてくる。

『我らは「樹」の下、偶然のもと、全ての滅びの始まりとなってしまうた「カルデア」に行かなければならない。』

そして「カルデアの大聖杯」を停止し、地球全土を荒野に変えてしまった、数百年に及ぶ聖杯戦争を終わらせるのだ』

音声が止まった。

私は隣の席に座っていたアスカと顔を見合わせる。

「カルデアって何だろ」

「都市や場所の名前でしようか?」

アスカにも心辺りは無いみたいだ、もちろん私も知らない。

火山湖の呼び名である『カルデア』ならば、聞いたことがあるけれど……。

「……そこが聖杯戦争の原因なのかな。みんなが争ったり苦しんでいるのも?」

私の旅の原因と理由……『聖杯戦争』。

数ヶ月間も荒野を走って、色々なサーヴァントやAI、アンドロイドと出会ったのに、結局、世界に混乱と破壊をもたらしているこの戦争の首謀者も、その景品である聖杯についても、詳しいことは分かかっていないのだ。

「バーサーカー、復元したデータの中に、蛇とか女蛇遣いとか、カルデアとか大聖杯とか、それについてもっと詳しく書いてない?」

「……だめだ、後は壊れている、いや、壊されている」

「バーサーカーのスキルでは治せない？」

「俺の回復スキルの範疇は『俺が人間だと認識しているもの』。

データの復元までは無理だ、情報の塊でしかないからな」

仮面で隠されていない方の左頬を、自分の指でつつきながら、彼は言った。

「一旦情報を整理しよう」

思案しているバーサーカーの代わりに、私は皆へ呼びかけてから、研究データより得られた情報を並べていく。

「機械化サーヴァントは、昔に考えられた技術。

人間が考えたつぼいけれど、だからといって人間が作ったとは限らない。

『アーキマンレポート』の解読とか、他にもプロジェクトがあったみたいだけど、詳しくは分からなかったね」

アスカがうんうんと首を縦に振る。

「研究していた人達は、レジスタンスと行動を共にしていたみたいだけど、今はどうしているのかは分からない。

後は……『7の滅びの使徒』、『蛇』、『女蛇遣い』、『カルデア』、『カルデアの大聖杯』。

倒す、と言われてるから、『7の滅びの使徒』、『蛇』、『女蛇遣い』は何かやった者なん

だろうね。

行く、停止すると書いてあったから、『カルデア』や『カルデアの大聖杯』は場所や物、機械とかなのかな」

私は立ち上がり、運転席でまだ考え込んでいるバーサーカーの肩を掴んだ。

「謎が増えただけなんですけど! バーサーカー!」

「俺だつて謎を解きたいよ、でも考察材料が少なすぎる。

世界は広く、俺はちつぽけだぜ……」

彼はため息をついてから、停止させていたエンジンを起動させる。

「そろそろ停車から3時間経つ。

ワームロボットに感知されて、デザートランナーを資源回収されたくもないし、移動しよう」

私は席に戻ってベルトを締め直し、きちんと固定されているか確かめた。

「……いえ、出発は待つてください」

立ち上がり、バーサーカーを手で制したアーチャー。

運転席の左隣に座ると、車外カメラを操作スティックでぐりぐりと動かすはじめた。

「この車を隠していた岩陰に、誰かがもたれ込んでいます」

画質は悪いが、確かに人……? のようなものが映っている。

「助けてあげられるかな？」

私はバーサーカーに問いかける。

「サーヴァントなら大丈夫。人間でも……主要臓器あらかた吹き飛んでなければ治せるぞ」

私達の会話を聞いてから、アスカが自身のサーヴァントへ指示をした。

「アーチャー、あの人物の保護を。」

外は気温80℃以上です、生きているのであれば、涼しい場所で介抱してあげなくては」

弓兵は無言で了承し、素早くデザートランナーの外に向かっていった。

「うむ……まずはお礼を」

車内に運ばれてきた人物はサーヴァントだった。

なぜ分かったのかというと、一目で分かるほど、明らかに人間では無かったからだ。

「リソースにより元氣万倍ワンタン麺！　しかしこれも月並みなギャグでしかないのだな……」

女性、というより少女。明るいピンクの髪が生えた頭の上で、毛に覆われた可愛い獣



の耳がびこびこ動いている。

「本来であればキャットの素晴らしいオリジナル表現がワンと出てくるのだが……その辺りはカワイイマスターからの令呪の縛り、『人間の言語理解があなたの言葉に追いつける速度でお話しするです?』が柚子コシヨウのごとくピリリと後から効いてくる……。」

しかし謝らない、何故ならキャットはオリジンではなく11番目だから」

コミカルなボデイランゲージを繰り返している手は茶色の毛皮に覆われていて、その平にはピンク色の肉球。

動く度に、赤い首輪につけられた鈴が緊張感のない音をシャンシャン鳴らし、裾も丈も短すぎるメイド服のようなものがふわりと揺れた。

「おっと、紹介が遅れた。」

我が真名はタマモキャット0011、この砂世界に落とされた良妻賢母でオンリーラブなサーヴァントの1体である」

彼女はハイテンションで一気にまくし立てると、服の内側から小型の電子タブレットを取り出した。

「短くも長いつき合いになることを想定し、キャット名刺をこのように渡しておく」

「いやあ……ご丁寧にどうも、すみません、名刺を切らしておりました……。」

バーサーカーがそれを腰を低くしつつ受け取った。

「滅びし筈のサラリーハートが今ここに。なるほど貴殿は日本人」

「……」

「……む？」

彼女の、琥珀色のまん丸な瞳に見つめられてから、バーサーカーがその視線から逃れるかのように、オーバーな動きで振り向き私へ言った。

「……マスターやばいぞ！ このサーヴァント、アルターエゴでバーサーカーだ！」

「……貴方がそれを言うんだ」

心の中だけで私はつぶやく。

（貴方も、十分に厄介なバーサーカーだと思えます）

「弾正様に仕えていた日々はすごく楽しかったのだが、この人、俺より先に死ぬんだよな……って思うとどうしても」

「お灸すりすりしつつ、アンニユイハートになったのだな。」

そしてなるほど、そのあとストーンマウンテン本願寺に」

「でも思想の方向性の違いで解散して、その後何年もあっちこっち行ってたんだよな」

タマモキヤットとバーサーカーは隣り合い、盛んにおしゃべりをしていた。

その話題が一貫していない会話を、代理ドライバーである私は流し聞きつつハンドルを握っていた。

「奥さん子どもを置き去りに、十数年あっちこっちへ?」

「猫とアルターエゴには嘘をつかないと04は決めている、仰るとおりにございます」  
「実に愛の無い話、まるでこの世界のようなのだな」

「愛、無いか?」

「うむ。これでは極点まで行けず、ひとりぼっちの女王様さえ救えない」

彼の話に合いの手を打っていた彼女の声がすつと低くなった。

「箱を開けねば。」

「悲劇になろうとも、誰かが箱を開けねばならぬ……いまキヤットは何を言っていた?」

「……個人的なことですよ」

「銀河捻転から来るキヤット真実はブラシーボレベルで対応してくれると助かる」

「かさばる」

「王手」

「チェック」

「時にオムレツは好みか?」

「なにそれ」

「忘れよ、そなたには早かった」

「……えーっと」

「あーっと？」

04の言葉が止まり、数秒の沈黙の後、立ち上がる音が背後からした。

「……もう無理だ！ 彼女の思考パターンが読み切れなくて脳が崩壊する！

いくら俺がアルターエゴマニアであるとは言え限界が近い！

アーチャー殿！ 代わりに彼女の話し相手をしてくれ！」

運転席の左、私の隣に座っていたアーチャーは、嘆く彼を放置してそっと霊体化し、廊

下へ出て行った。

（あつ……アーチャーも無理なんだ……）

私はアクセルペダルを柔らかく踏みつつ、時速30kmの速度を一定に保つ。

「そうだ、キヤットはお魚啜えてお使いにきたのだ。

もつともこの腐敗した世界ではイマジナリーフィッシュでしかありえないのだが」

彼女はエプロンの内側から「そごそと何かを取り出すと、開いた左の席に猫らしく正

座をした。

「お手紙だワン！ ……CV：タマモキヤットとなるが、読み上げネコである以上変更は

不可能、許されよ」

彼女は爪持つ指先でちよいちよいと画面をタッチし、文章を表示させ、それを声に出して読み始める。

『モモタ・トバルカイン、アスカ・ピオーネ。

上級都市へ行ってしまいう前に、ぜひへ遊びに来て欲しいです。

燃料も食料もあげちゃうキャンペーン中です。

食料生産管理AⅠ ソラリネ・ヘルゼルマガツより、です』

それを聞いたアスカは。

「……お誘い、ですか」

明らかに警戒心を露わにした声を出す。

「危険と毒性は一切ないと我は宣言する」

愛らしい見た目をしたタマモキヤツトはそう断言したが。

「でも、そんな簡単に信用できないよ」

私もアスカも、簡単に「はい」とは言えない。

敵も味方もごちゃ混ぜの世界を旅してきた経験があるからこそだ。

「心配(こ)無用ネコに長ネギは無用。すき焼きに春菊は必要。

我が主は詰まるところ……」

キャットの眼光は鋭くなり、それから私を横目でちらつと見た。

「タイトな退屈で、暇を持って余しているだけなのだな」

食料も燃料も少なくなっていたのは事実であり、私達4人は相談の元、タマモキャットの主であるAIに会ってみることにした。

「お客人！ しぼし焼き網の上の餅が如く、膨れて待つがよい」

広がっている、目印もなにもない荒野。

しかし車外に出たタマモキャットが、その肉球付きの手の平をぶにつと地面へ当たると、四角い切り込み線が走り、横に開くと、緩やかな角度のスロープが現れる。

「モモ、地下通路が……」

「そうだね、アスカちゃん……」

その先は暗闇。

「ではキャットは先んじて玄関で待つ。雑煮の餅が如く、悠々と来るがいい」

獣の手足を持つ彼女は四足歩行の形態をとると、素早い動きで奥へと行ってしまうた。

「じゃあ、私達も……」

私はアクセルをそつと踏んで追いかける。

つるつとした無機質な廊下を、上に設置された白熱灯が照らしていた。

不安な気持ちのままデザートランナーを走らせると、天井の高い空間に出て、「ここで降りるように」とタマモキヤットから指示された。

「すごく静かな空間……食料生産施設ってこんなものなのかな」

「どうなのでしょう……」

アスカと共に歩きながら、天井まで続くアクリルガラスのはめられた水槽横の廊下を通り、私達はサーヴァント、タマモキヤットの謎多き主が住む場所へたどり着いた。

長方形の部屋は、床と天井以外全て透明で、青く深い大量の水に取り囲まれている、薄暗くひんやりとした空間だった。

『お待ちしてたです！ モモタ・バルカイン、アスカ・ピオーネ、そして両者の所有サーヴァント！』

活発そうな女の子の声が天井から響くが、姿は見えない。

「ご主人！ 肉！ 肉体を忘れてるぞ！」

『あつ！ そうだったです！』

自身のサーヴァントに指摘され、AIは慌てて何かを用意する。

『この格好は怖すぎ、この形は色味が騒がしい、こっちは大きすぎ……これです！』

金属や柔らかい物がこすれ合う音の後、ダークブルー色の床の一部がへこんで下に降りていき、再びせり上がって来た。

「始めまして！ ソラリネ・ヘルゼルマガツというです！」

黄色の髪をぱつつんと肩の上辺りに揃えて切った小さな女の子が、そこに立っていた。

「培養細胞及び遺伝子組み替え食物の生産、管理、加工を担っている作業従事型AIです！」

よろしくね……です！」

身長は120cmあるかないか。

服は飾り気のない白のワンピースで、胸元に目玉焼きをかたどったブローチがつけられている。

よくよく見てみると、艶のある黄色の髪の上にもベーコンの形をした飾りつきのヘアピンがとめられていた。

「人間とふれ合うのはソラリネの100年のAI生において初です！ 感動です……」

そのまま駆け寄ってきて、私やアスカの周りをくるくる走る。

「タマモキヤットにお使いをお任せして正解でした！」

無軌道に旅をしているのなら、無軌道に動くサーヴァントに探索させれば落ち合い



ますのは必然です?!」

バーサーカーとアーチャーは黙ってその様子を見ていた。

「あの、ヘルゼルマガツ……さん、質問してもよろしいでしょうか?」

アスカが戸惑いつつも口を開くと、アンドロイドの体に入っているAIは足を止めた。急に動きを止めたことで、AIの靴底がキュツと音を鳴らす。

「えつと……食料や燃料を支援してくださいさるといふのは本当でしょうか?」

「はい! でもやっぱり、条件あります!」

AIはあどけない顔の上に満面の笑みを作ると、白ワンピースのポケットから赤の丸いボタンを取り出し、人差し指で押した。

「ぼちつとな……」

——次の瞬間、バーサーカーとアーチャーの上から1つずつ落ちてきたのは、檻だった。

「ふふふ……サーヴァントを無事に返して欲しければ、ソラリネの言うことを聞くことですよ?!」

バーサーカーが落ち着いた様子で、黒い檻の間から、外へ指を出そうとしたが、淡く光る膜のようなものがぼわぼわと阻んだ。

「キヤット成分含有……つまり呪術でコーティングしてある、耐魔力有りだろうとがっ

ちりキヤッツ！」

彼の様子を見てから、柵を掴むアーチャー。しかしただの金属製に見える棒は曲がりも折れもせず、壊れない。

「俺はともかくアーチャー殿を無力化するのは……やるなバーサークキヤッツ！」

「誉めるなバーサーカー04、鯉節削り器を持って」

「煮干しの方が好き」

「ナイスカルシウム？」

「ノー、アイライクビタミンD」

「煮干しから出汗をとる時は、苦味の原因である腸はらわたと頭を取り去るとよい」

「そうなんだー……柵固いな！ 本当に！」

「またもや主題のはつきりしない会話を行いながら、脱出を試みているバーサーカー。」

「……」

狂戦士同士のやり取りなど興味なさそうに、アーチャーは柵を手の力のみで握りつぶそうとしていた。

「……えほん！ えへんえへんえへん！ ソラリネに注目するでーす！」

あまりにも混沌としてきた場の空気を変えるためか、小さな子どもの形のAIはわざとらしく咳払いをする。

「私達に何をさせたいの?」

低い声で彼女に問いかけてみる。

シリコンの皮膚の上に余裕綽々な笑みを浮かべたまま、ソラリネは立てた人差し指を左、右へと振った。

「ふっふっふっ……自由になる方法はたった1つ!」

ダークブルーの天井から垂れ幕のような物が下ろされてくる。

先ほどA Iが登場した床がまたへこみ、何かがせり上がってくる。

「クツキングバトルです!」

ソラリネをお料理でうならせることが出来たら、サーヴァント達を返してあげます

……です!」

幕には投げやりなフォントで『激アツ! クツキングバトル!』と書かれ、床の上には、小さなキッチンがいつの間にかせり出し、設置されていた。

「クツキング……」

「バトル……」

私とアスカはその単語を、何故か2人で発して繋がるよう口に出してしまった。

第39話 大ピンチ! いよいよ始まる最終決戦(?)

終  
わ  
り

## 第40話 ふえいと／昔のランナー

「クッキング……」

「バトル……」

聞きなじみの無い単語を前にして、体を強張らせる私とアスカ。

「です……！ ルール説明するです」

そんな私達の気持ちなど気にもせず、愛らしい少女の形をとった、AIソラリネ・ヘルゼルマガツは、黄色の髪を揺らしながら、はきはきと喋り出す。

「この特設キッチンを使い、お料理してくださいです。」

調理器具、食材、光熱費、水道費はソラリネが持ちますです」

ソラリネの言葉を受け、キッチンへ目を向ける。

料理を主題にした映画で見たように、シンク、コンロ、食材を置く場所など、基本的なもの揃っていた。

「……ネコによる情操教育、その敗北であった」

困惑している私とアスカに向かい、タマモキヤットは、ふわっとしている尾の毛並み

を爪の先で整えながら語り出す。

「つまみをつまみ出しながら話そう。」

作業従事型AⅠ、ソラリネ・ヘルゼルマガツの機能拡張のために召喚されしアタシ。

しかし彼女は、キャットの作り出す料理の虜トリになり……」

両足を肩幅程に広げ、片方の手の指を広げつつ、甲が表になるよう顔の前でかざす彼女。

「人類が作ったお料理文化に！ 魅せられるように！ なったのだ！」

そのまま……キメポーズをとる。

とったその形は、いつか出会った刑部姫の行っていたものに似ていた。効果音は鳴らない。

「……場の主導権をそのAⅠに戻してあげようぜ、タマモキャット」

囚われの身のバーサーカーが、檻の中から誰かを指差す。その先に、黄色のおかつば頭をふるふると揺らしているAⅠの姿があった。

食品サンプルのベーコンがついたヘアピンも、飾りごとふるふる動いている。

「しまった……唐突に深遠なる身の上話を……しかしここで挟まないとタイミングを逃す」

「あああああ……どんなにソラリネが濃いキャラ付けを心がけてもキャットに全部さら

われるです……!」

彼女は彼女で苦勞しているらしい。けれど、そんな事情は置いておかなければならぬ。

(今一番考えなければいけないことは……)

私達のサーヴァントが檻に囚われ、人質になってしまっている現状で、開放するためには、クッキングバトルを行うしかないということ。

「お料理を作ればいいのか?」

私は提示された条件を再度確認する。

「です。」

ソラリネは、サーヴァントではなく人類の作ったお料理を食べるのが夢なのです!」  
彼女は、私の興味が自分に移ったことが嬉しいのか、につこり笑いながら答えてくれた。

「お料理なんて作ったこと無いよ……!」

「わたくしも……せいぜいお湯を注いだり温めたりするくらいで!」

不安な口振りのアスカを見ながら、人生と旅を振り返ってみる。

地下都市での食事は、年齢と性別、運動量に基づいて計算され、配給される物を食べるだけ。

野菜やお肉などの食材を手にとったこともなく。料理なんて活動は、映画や物語の中  
で見ただけの、現実から遠い出来事だ。

(キルケーとスローネの地下都市で食べた料理……美味しかったな……)

鷹の翼持つ魔女が支配するあの都市で、生まれて初めて合成ではない魚や野菜、肉を  
私は食べたのだ。

それ以外の食事は、棒状の栄養ブロック食、ヌードル、出土品のレトルトパンケーキ、  
缶詰め、水を加えて膨らませるパン……全部、合成食品で、調理済みの物ばかりだ。

「料理……か」

作り方も、何を作ればいいのかも見当がつかない。

困り果てた私は、檻の中の、時折は頼りになるバーサーカーへ視線を飛ばす。

「俺は答えを持っていないぞマスター、敵に聞け」

そう言うって意味深な笑みを浮かべると、彼は私を追い払うかのように、片手をひらひ  
らとさせた。

「ソラリネは何が食べたいの？」

彼女が何を求めているか、私は情報を聞き出そうと試みる。

「うーんと……何でも食べたいです！」

両手を上げて、びよんびよんと跳ねる少女の体。



「マスター、ご主人、我が主。

相手を思つての『何でも良いよ』が何千年にも渡り、古代お母ちゃんたちの献立作りを悩ませてきたのか、分からぬIQでもあるまい」

「むー……」

自身のサーヴァントに諫<sup>いさめ</sup>られ、AIは子どものように頬を膨らませる。

むくれる主へ、彼女は話続けている。

「どんな食材、調理器具があるか、時間はどのくらいかかるものなのか、お財布に優しいか。

空と大地、天地万物の調和を思い描きながら献立は組み立てられる。

故に、モモとアスカよ」

そう語るタマモキヤットの声色は穏やかだ。

「我とソラリネと共に食品製造センターへ赴きますか？ はい いいえ」

選択肢は実質1つだ。

「はい……」

私達の命運をかけたクッキングバトルが……やや緊張感に欠けているような気もするが、今まさに幕を開けようとしていた。

「そう言えば……自分達が今まで食べてきた物について、どうやって作られているのを見たことないや」

先頭を歩くのはAIであるソラリネ。上機嫌で歩いていく少女の背を、私とアスカは歩きながら、焦らずに追っていく。

「超高度なえいせいかんり、ききかんりで食品を生産、地下都市に納品、人類を応援しています……です？」

「どうして疑問符なのですか……」

アスカは黒い瞳をうろろろとさせてから、ため息をついた。

（危なくなったら、すぐ令呪を使おう）

私は右手の甲に浮かび上がる文様を左手の指先でなぞりながら、決意を固くする。

「監査用の窓があるので、廊下から生産風景が見えますです。」

でも監査なんて人間ぽいこと、ソラリネは生まれてからしたことないです」

アクリル製と思われる窓の向こう側にあるのは、強い白を放つ蛍光灯と、水の張られた巨大なプラスチックトレイ。その中に茂っているのは緑色の植物だ。

「必須アミノ酸、必須脂肪酸を含有するように遺伝子操作した超速度成長大豆です。」

適切な温度で育成し、水分を与えれば、2週間で収穫可能まで育つです」

難しい単語が敷き詰められた説明を、彼女はすらすらと喋っていく。

「これを圧力釜で煮て、粉碎して乾燥させて、タンパク質パウダーに変えるです」

「そ、そうなんだ」

分かるような分からないような。私はソラリネの言葉に相槌を打つ。

透明な窓の向こうでは、銀色の機械から蒸気が噴き出したり、煮上がった大豆を口ポットが箱に移して運んだりしている作業風景が見えた。

(凄いなあ……)

心の中だけで感嘆を漏らす。

これが私達の食べていたお肉やお魚ブロックの正体だったのか。

「タンパク質パウダーのままお届けすることもありますが、人工着色料と風味エキスを添加して、お魚味にしたり、お肉味にしたりすることが多いです。黄色とお水と混ぜて卵液風にもします。」

人間、美味しく味付けした物をあげないと、すぐに精神の健康を崩すです。気をつけてあげないといけないです」

ガラス越しの景色が変わり、研究用と思われるシャーレが並べられた金属製の棚が現れた。

「お魚の味とかお肉の味とかを抽出するための、細胞培養室です。」

世界崩壊前に確保された食用生物の細胞を増やして、それをぎゅつと絞ってエキス取り出してるんです。

旨いはずですよ」

「……ソラリネは味を知らないの？」

「アミノ酸の種類と数値で判別してるんです……美味しい数値を保っているから、美味しいのでは？」

私に何てことのないように答えると、AIはさっさと先へ行ってしまう。

「ここからは野菜エリアです。

はい、耐熱性ビタミン類を生成するよう遺伝子を組み込んだ野菜の畑。

これも煮るんです、そして食物繊維と分けるですよ」

つい数分前に見た大豆畑と形は変わらない。水の張られたトレイ、その中に根を伸ばし、青々と葉を繁らせているお野菜。

「ミキサードペーストにしたあと、分析して、足りない栄養成分を調整して、着色料で種類を分け、食感が変わるよう食物繊維を練り込むですよ。

緑は葉物野菜、オレンジは根菜、クリーム色はポテト……ポテトとは？ 芋の事ですよ」

何台もの巨大な機械がゴウンゴウンと音を立てながら唸りをあげ、私達が普段食べていた野菜ブロック類を生産していた。

「まだまだ見学続くです、次は油とクリーム生産エリアです」

黄金色の液体がチューブを通り、円柱状のタンクへ。

「タンクの中身は、大豆を煮た際に取り除いた油。

液体のままにするものと、水素などを添加して固形にする油に分けられます。

固形にした油はお肉ブロックに混ぜられたりして、特徴的な食感と肉汁を生み出すです、パンやデザート作成にも使われます。

液体のものは、フライ風のお料理作る時に、スプレーで食品に吹き付けられたりするです」

工場内の光を反射して、ソラリネのベーコン型ヘアピンがきらりと輝いた。

「クリームは液状油の発展系。

白くして、牛乳の味わいになるようエキスを入れます、はい完成。

チーズ風の奴はもっとクリームの水分を少なくさせて、着色料と繊維を入れます。

数百年前は、牧草や穀類を哺乳類に与えて乳を取り、菌を添加して何か月も置いていたのですから、数時間で出来上がるのは技術革新？ です」

廊下の終わりが遠くに見えてきた。

「最後に、穀類と甘味生産エリア」

清潔感のある白の空間を満たすのは、やはり緑色の植物。

「2週間で収穫可能にまで成長した穀類を刈り取り……煮る、砕く！ 乾燥！ 加工！

パンは独特の食感を再現するため、ちよつとタンパク質入れてるです。

粘度がある透明な液体は甘味料です、お料理からデザートまで、万能に使われてるです。

スパイスやコーヒーなどの特殊な嗜好品は、需要低下と資源不足で作ってないです、あしからずです」

廊下はそこで終わり、AIは行き止まりにある扉に手をかけた。

「ソラリネも鬼ではないです。

この先にある資料室には、お料理のレシピや調理映像などが保管されてるのです。

それを参考に頑張つてほしいです、サーヴァントの直接の手助けは認めませんが、アドバイスは許すです」

小さな手によつて開かれた大きな扉。

その先にあつたのは飾り気のない床と机、シアター。

電子タブレットもあり、確かに、調べ物が沢山出来そうである。

「時間は無制限、好きだけ調べていいです……ソラリネはその間お仕事してるんですから。

特設キッチンに移動したい時は案内するので、声かけるです」

AIは高さのある椅子によじ登ってから座ると、目を閉じ、ぶつぶつと何かをつぶやき始めた。

「全エリアスキャン……異常なし、各都市への食料運搬状況も良好。

うわつ、スローネからメール来てる、無視しよ……」。

あのリソース泥棒の反省の色が無いことは、ツヴァイの動向を見てもよく分かることです。

全く……エーテルウエルは極悪AIが多すぎます、長子たるアイン姉様のご苦労が忍ばれるです……」

聞き覚えのある名前も無い名前もあつたが、今優先すべきことは料理の情報を集めること。

耳を細かく動かしていたタマモキヤットへ、私は目を向けた。

「ネコは眼差しで察した。

うむ、そなたらに協力するのもやぶさかではないが、初めからネコネイルでレールを敷くのは自由意志への締め付け。

しばしキヤットは丸くなる。工場は音が多すぎて、頭の中のカタツムリもお疲れなのだ……」

まるで本物の猫のように、彼女は床に丸まった……エプロンは外し、机の上にきちんと畳まっている。

「兎にも角にも、調べ物をしましょうか。アーチャーが心配ですし……」

「そうだねアスカ、アーチャーが心配だ」

バーサーカーは何年であろうと檻の中でへらへら出来るだろうし、しているイメージがあるが、私達にとっての最終兵器であるサーヴアント、アーチャー961についてはそうとは思わない。

（クツキングバトルを征して、助け出さないと……）

こんなわけわからない催し<sup>もよお</sup>で、アスカに貴重な令呪を使わせるわけにもいかない。

2人、それぞれ別の電子タブレットを操作し、お料理レシピを閲覧してみることにした。

「何だろう……この画面」

指で画面に触れるなり、赤地に白色の文字で書かれた文章が表示された。

明らかにレシピなどではないそれを、思わず目で追ってしまう。

『我らが女神は「S文書」をお探しだ。』

絶望をあの方の心に根ざかせた罪人の記した本、人類の淡い希望の階<sup>きざはし</sup>、全ての終わりであるが故に白紙のページ。我らが女神は——』



「あつ、スパムです、最近の流行りです」

ソラリネの幼き感じる高い声と共に、画面は切り替わってしまった。

「こんなサイバー思春期をぬけ切れていないイタい迷惑メールまき散らすのは、残酷悪魔AIツヴァイ辺りに決まってるです。後で上層部にチクってやるです」

私は脳内で、あることを思い出した。

(本、白紙のページ)

つい先日、真つ白な本を見つけたばかりではないか。

(いや、そんな偶然あるわけ無いって。今は目の前の問題に集中集中……)  
消えない不安を心の片隅に押しやって、私はタブレットを見つめた。

「……こんなにお料理って幅があつたんだ」

閲覧しても閲覧しても、果てがない。

これは誰が作ったのか、どんな時に生み出されたのか、どんな人々に親しまれたのか。

西欧、東欧、地中海、南大陸、島国、大衆料理……膨大な量の歴史の積み重ねと、物

語。

気が遠くなってしまふほど、お料理の世界は広がった。

「でも全部、消えてしまったんだ……」

データを見てわくわくしてから、それがもう失われてしまったことを思うと、胸が苦しくなる。

このお料理の多くは、永遠にしまい込まれ、誰にも作られることは無いのだ。

「モモ、このお料理はどうかしら」

食文化という名の物語に心奪われていた私の元へ、アスカがやってきた。

「……どうしてこの料理にしようと思ったの？」

肩を寄せ合い、タブレットと一緒に見ながら彼女に理由を聞く。

「ベーコン、使いますから」

彼女の言葉で頭に浮かぶ、ソラリネの頭に輝くイミテーションのベーコン。

「あと、卵も」

卵を思わせる黄色の髪に、白いワンピースの胸元を飾る目玉焼き型のブローチ。

「それと……これは個人的な理由なのですが」

「なあに？」

クリーム色のスカートの裾を指先でこねるアスカは、少し恥ずかしそうに話した。

「昔、お母様と見た映画で、小さな女の子とお母さんがこのお料理を一緒に作るシーンがあったのです。」

出来上がったお料理、とても美味しそうで、何より……その子もお母さんも、嬉しうだったから」

私はアスカが見つ付けてくれた料理のレシピを確認する。

材料に特殊な物は無く、先ほどの食料生産エリアで見た物もある。

「よし、これにしよう」

「作り方の映像資料もあるようです、それも見てイメージを固めましょう」

タブレットで詳しい文字情報を頭に入れつつ、シアターを起動させた。

丸っこい字体のタイトルが表示された後、エプロンをつけた西洋的な顔の男性が、白すぎる歯を笑顔で見せながら軽妙なオープニングトークを始めた。

『トミーのワンダフルキッチン！』

2016年ももうすぐ終わりだね、みんなどう過ごしているかな？

なになに……年末が迫ってきて仕事がますます山積み？ 家族と過ごす時間もない？

トミーの日常もそんな感じ、それに世間で流行ってるいやーな噂……。

やれ世界を巻き込んだ戦争が起きるやら、世界がひっくり返るやら、滅びるやら……。

オーケイオーケイ、テンションがダウンする話題なんて……ストレスたまつて……何よりお腹が空くよな？

さあ！ イライラと終末論、ついでに腹ペこをやつつける料理をご紹介だ！  
おしやれなパーティーの一品にびったり、サックサクで香ばしい——』  
完成品が表示され、きちんと並べられた材料、道具が続いて画面に映される。  
そうして、数百年前の人物である彼は、生き生きとした表情で手つきも軽やかに料理  
を始めた。

第40話 ふえいと／昔のランナー  
終わり

## 第41話 焼きたての真心をあなたに

映像資料、『トミーのワンダフルキッチン』の閲覧が終わった。

インターネットを通じて静かに仕事をしていたソラリネ（目を閉じていて、まるで眠っているみたいだった）へ声をかけ、必要な分の食材をお願いする。

「任せるです、いつもタマモキヤットに使わせているフードプリンターを使って、特急でお作りします」

資料室の片隅に置かれていた四角い箱型の機械に、運搬ロボットが運んできたペースト状の材料が流し込まれると……四角く固められた食材がぽこぽこ出てくる。

茶色と白い層が交互に重なるベーコンブロック。

黄色く着色された固形油、昔風に言くとマーガリン。

どれも透明な袋でぴつちりと隙間なく包まれていた。

「フードプリンターは上流階級の娯楽用でもあります。

出来た食品はビニール包装されているので、実に衛生的なのです」

続けて出てきたのは、ほうれん草くらい濃い緑色の野菜ブロック、その次は、玉ねぎ

に食感を近づけた白の野菜ブロック。

「次に基本材料を渡すです、落とさないようにしっかりと持ってください」

パン用の炭水化物粉末……つまり小麦粉、調理用の液体油、人工卵液、そして塩を受け取った。

「言われる前に手を貸すネコ」

材料をアスカと分担して持ち、タマモキヤットにも手伝ってもらい、私達は特設キッチンのある広場に戻ってきた。

「マスターお帰り」

檻の中でバーサーカーはあぐらをかいており、アーチャーは片膝を立てて静かに座っていた。

「ただいま。何かしてた？」

「暇だったので脳内将棋してた」

「……誰と？」

「そりゃあ自分と。アーチャー殿は都合悪そうでしたので。」

えっ？ マスターは自分以外の人間と脳内将棋をするのですか？ 怖あ……」

分かりやすいボケにツッコミはいれず、隣の檻の弓兵へ声をかける。

「大丈夫？ アーチャー」

「……若干の疲労を感じていますが、お気になさらず」

彼はそう言うが、声には元気がない。

(やっぱり、早く助けなくちゃ)

腕いっぱいにつけてきた材料をキッチンに並べながら、私は決意を固くした。

「それで、モモとアスカは何を作るのです?」

タマモキヤットの尻尾にすっぽりくるまれながら聞いてくるソラリネ。

「えっと、『キツシユ』を作ろうと思いましたが」

「……確か、フランスのある地方で生まれた料理だったです?」

アスカの答えた単語に、ソラリネはAIらしく正確な答えを付け加えた。

「ではキヤットはキッチンに立ち、2人を見守り時にアドヴァイスを飛ばそう。」

かつて全てのネコが人類にそうしていたように……」

「よろしくお願いします」

「頼もしいです、タマモキヤットさん」

私もアスカも彼女へ頭を下げる。

「そう言えば……パーサーカーって、料理出来る?」

檻の中で座り込んでいる彼に、期待はしていないが聞いてみる。

彼は左にある緑の瞳を輝かせながら、自信満々に話し始めた。

「芋の茎をいい感じにぶった切って、味噌をとにかくぶち込んで……煮るだろ？」

——それを炊いた大量の米で食べる！」

「……大味すぎる！」

サーヴァントからのアドバイスは許されていたが、04はあてになりそうにも無く。

「アーチャーはお料理とか……出来まして？」

アスカも自分のサーヴァントに聞くが。

「……？」

「アーチャー?!」

961も助けにはならなさそうだ。

(お料理だって出来そうなんだけどね……)

彼に対しては何でもそつなくこなしてくれる印象がある、今までの旅でいっぱい助けもらったからだろうか？

「……よし、とにかく頑張らなくちゃ」

檻の中のサーヴァントの事から頭を切り替える。

エプロン、三角巾をつけ、両手を爪の先まで洗って、水気を清潔な布巾で拭いた。



「……よくよく考えたら、両者が戦っていないとクッキングバトルとは言えないです？」  
そんなA-Iの声を聞き流しながら、オーブンを予熱して、粉やマーガリンなどを計量していく。

必要な器具もキッチンに並べられ、本格的なお料理が始まった。

「小麦粉をボールに入れて、マーガリンは固い状態のまま、最後にお塩ひとつまみ……」  
計った材料を入れ、ゴムベラの縁で切るように粉類と混ぜ合わせる。

脂の表面に粉がついて、白い小さな塊となっていく。

「うむ、調理初体験とは思えぬ手つき、もしや平行世界の己のスキルをダウンロード済み？」

「資料映像の見よう見まねだよ……」

手を動かしながら、タマモキヤットにほやく私。

キッチンの隅で、アスカが次の行程に必要な人工卵液を、金属製のボールへ計つてくれている。

「バターが粉の中で細かい粒になっていくよう、ヘラの縁で刻んで……卵を加えたら、練らないようにさつくりと混ぜる、でしたわね」

彼女と細かく手順を確認。

「何だか難しそうだよね……」

映像の中の男性、トミー・ランナーは手つき軽やか、事も無げにやっていたが。

「卵液を注いで……」

白い生地に卵が加わり、美味しそうな黄色に。ソラリネの髪と同じ色だ。

「アスカ、オープン温め終わったかな？」

「はい、熱々になっています」

キッチンコンロ下のオープンの予熱も忘れずに。

「生地を台の上に出して、小麦粉を振って、道具類とくつつかないようにする。

混ぜた生地を平べったくして、千切って重ねて……また平たくのばして、円盤状に

したら、ラップで包んで、冷蔵庫……」

生地をちぎっては何枚も重ねていくこの複雑な工程が、サクサク感に繋がるようだ。

「では、このキャット呪術式冷蔵庫で生地を休ませよ。

秘密のシステムを利用することで、本来は3時間かかるところを何と！ 40分で済

む！」

「すごい！」

「食材自身が呪術を行使することで美味しい状態に己の体を導くという、自己暗示じみ

た内部構造の組み替えなので、高度な精神構造を有する生物がうっかり入ると頭がおかしくなつて死ぬ」

「怖……」

タマモキヤットのおかげで、工程にかかる時間がうんと減つた。

待っている間、中に入れる具材の準備をしないと。

「洗い物するね」

「では、わたくしは食材を切ります」

段取り通りに進めていく私達の様子を見ながら、獣系バーサーカーは深く何度も頷いていた。

「後でまとめて行うのも選択であるが、分担し、平行して片付けをするのも賢き選択。戦闘時の判断に長けているマスターは転じて料理もお上手なのだ。

クッキングはその人の素質をツンツンし、成長もさせるのだな」

濡れ布巾で小麦粉の散らばっている台を拭いて、水気を取るため乾いた布巾でもう一度拭く。

「ほうれん草代わりの野菜ブロックを、切つて……」

アスカの前には、まな板の上に乗った、緑、白、人工ベーコンのブロック。

包丁を恐々と握つて、ネコの手……丸めた指先で食材を押さえ、刃を落とす。

すとした音の後、緑のぺらぺらとしたものがまな板の上でへにやりと広がる。  
「……次も、次も、気をつけて」

真剣な表情で材料をしつかりと見つめ、具材を刻んでいくアスカ。

緑ブロック、白ブロックは薄切りに、ベーコンブロックは厚めの長方形になった。

「炒める工程やろうか？ 油が跳ねたりして危ないし……」

「いいえ、わたくしがやりますわ。」

だって、アーチャーの存在がかかっているクッキングバトルなのですもの！」

アスカは強い口調で宣言し、フライパンに液体油を入れて、ベーコンから順に食材を炒めていく。

「それなら私は別の物を用意しているね」

卵と、脂肪分の多いクリームをボールの中で合わせ、泡立て器でよく混ぜる。

隣からお肉の焼ける良い香りが漂ってきた。

「生地を取り出して、伸ばさない」と

タマモ呪術式冷蔵庫からひんやりとした黄色い生地を出す。

焼く時に使う、金属製の丸い形からふた周りくらい大きくなるよう、生地をめん棒で伸ばそうとしたが……。

「冷えて固いし、均等な厚さにならないや……」

プラスチック製の棒へ体重を乗せ、力任せに平たくしようとするが、うまくいかない。

「——焦るな、シヨッキングピンク色の乙女よ」

「タママキヤットさん……!」

私の前で仁王立ちをする彼女のメイド服の裾が、風でひらひらと動いている。

……どこから吹いてきた風なんだろう、ここ地下空間なのに。

「焦りは、失敗の主要な原因である。」

落ち着け、そして大切な存在かネコを思い浮かべよ。ネコが大切なものならばそれで

いい」

「私の……大切な人……」

ふつと頭に思い浮かんだのは。

(バーサーカー……)

彼、だった。

7歳の頃からずっと一緒に、彼のおかげで私の人生から孤独は無くなった。

何をするときも、彼がいてくれたから安心して出来た、勇気が貰えた。

(……ひとりじゃ無いんだって、思えた)

私は生地をめん棒で押す。心を落ち着かせるために時間を使ったからか、黄色いそれは少し柔らかくなっていった。

（私の大切な家族なんだ！ 取り戻さなきゃ）

タマモキヤットの方を見ると、彼女は琥珀色の瞳を優しく細めに、私を見つめていた。

「タマモキヤットさん……いや、キヤット師匠……！」

「その称号は一尾のネコにはヘビレインなのだ……！」

台の上の生地を回し、細かく角度を変えながら薄く伸ばしていく。

読んだ資料によれば、一方向からのみで伸ばしていくと、焼いた時に形が歪んでしまうそうさ。

「タルトの型に入れて、隙間がないように敷き詰める、フオークで均等に穴を開け、不燃性のシート広げて、タルトストーンで重しを……！」

銀色の小さな粒も敷き詰め、生地を焼く準備ができた。

「上手に焼けますように……！」

祈りを込めながら、予熱してあるオーブンに入れる。

「具材もバッチリですわ！」

フライパン片手に、コンロの前へ立っているアスカは嬉しそうさ。

白の野菜ブロックは、薄切りにしてからじっくり炒めたことで、透き通った茶色になってる。いわゆる餡色玉ねぎ、その代用品だ。

「チーズをすり下ろすね」

専用のおろし器でチーズブロックを細かくする。

「何だか、山に降り積もる雪みたいですね、モモ」

キラキラした瞳でアスカは作業を見つめながら、楽しそうな声で呟いた。

「それにしても……調理器具いっぱいあるね」

すり下ろし終わった私は、周りをぐるりと眺めてみた。特設キッチンには、西暦2000年代の様式のオープンコンロ、本格的な調理小道具も揃っている。

「タマモキヤットさんが、マスターであるソラリネにねだったのですか?」

「違うぞ、艶ある葡萄酒の如きアスカ・ピオーネ」

彼女がちらりと自らの主を見る。

「ソラリネ・ヘルゼルマガツが資料を元に作り、ある時は発掘し、揃えたのだ。

いずれ来る存在、世界を救うもの、『お料理』をしようとする人間がやってくるのを」

「……世界を救うもの?」

私がかかかったことを詳しく聞こうとしたとき、オープンが短くチンと鳴いた。慌ててミトンをつけ、焼きあがった生地を取り出す。

オープンの扉を開けるなり、香ばしい匂いが辺りへ広がった。

「生地の熱がとれるまで、片付けをしようか」

私は脚付きの丸い金網に、まだ熱すぎるキツシユの生地を置いた。

「はい、そうしましょうモモ」

アスカと協力して、水と洗剤、スポンジを使って調理器具を洗い、布巾で拭いて。そうしている間に、生地が触っても火傷しないくらいの温度になった。

「焼けた生地の、形を整えて……」

型からはみ出ている部分は、ナイフでカリカリと削り落とす。

焼く前にフォークで生地を開けていた穴を、少量の小麦粉で塞ぎ、アスカが炒めてくれた具材と、卵入りのクリームを中にとろりと入れる。

「上からすり下ろしたチーズをたっぷり乗せて……あとはオーブンで焼くだけだー」

「オーブンの扉、開けますわね」

庫内の熱い壁にうっかり触れて火傷しないよう気を付けながら置いて、アスカに扉を閉めてもらった。

「もうひと頑張りだね」

「楽しみですー！」

そんな会話をする私達を、幼い姿のAIは、無表情にも見えるほどの真剣な面持ちで、じっと見つめていた。

「すごく綺麗……甘くて良い香りもする……」



型から取り出せば、野菜と卵、クリーム、お肉が合わさった料理、『キツシユ』が無事完成。

「キラキラして見えます！ 不思議ですわ……！」

出来上がった料理のあまりの美しさに、アスカは感動の声をもらしていた。

「そうだね、すごく……綺麗で……」

友達の隣に立って、私は腰を屈め、キツシユを見つめてみる。

「とても美味しそう……」

縁は甘くないタルト生地でカリツと。真ん中は野菜とお肉とチーズとクリームがぎっしりと詰まって、青暗い部屋を照らす如く黄金色に輝いている。

「いけないいけない、見蕩れている場合じゃなかった」

待っているA I ソラリネに料理を提供する<sup>サーブ</sup>ため、私は立ち上がってお皿とナイフを用意した。

「トミーさんはこうやって切っていたから……よし」

真ん中からナイフを突き立てて、外へ向かいザクザクと切る。

それをもう1回繰り返して、三角形になるよう分けた。

オーブンの熱で溶けたチーズが伸びて、白い絹束のようなものが、ナイフの側面とキツシユの間に柔らかい橋をかける。

料理の色が生える白い丸皿に乗せて、ソラリネへ出来立てを差し出した。

「貴女から食材を貰って、タマモキヤツトさんからアドバイスもいただいて、私とアスカで心を込めて作りました。」

どうぞ……食べてください」

彼女は小さな両手の指を広げて、料理をおずおずと受け取った。

(これで、うまくいくだろうか)

出来栄えはかなりのものだと思っていたが、やはり不安はぬぐい切れない。

唇を固くきゅつと結んでいるアスカの事も気になげながら、ソラリネの言葉を待った。

第41話 焼きたての真心をあなたに

終わり

## 第42話 骨を割って話し合おう

少女の姿をとったAI、ソラリネ・ヘルゼルマガツは、私達から贈られたキツシユを手を持ったまま、しばらく黙り込んでいたが。

「……合格です。これが、ソラリネの欲しかった『お料理』です」

意を決した様子で唇を開き、震える声で言葉を発した。その人工の瞳は、潤んでいるようにも見えた。

「100点満天のお料理は、タマモキヤットが作ってくれます。でも……」

ソラリネの、髪と同じ黄の両目が、憂うかのように一度閉じられる。

「人間同士が手を取り合い、相談したり悩んだり、ちよつと失敗しながら作る……そんな、かつての平和な世界で誰もがしていたお料理を……見たかったのです」

そして、片手を空間にかざした。

バーサーカーとアーチャーを閉じこめていた檻が、四方にばらけながら床へ倒れ、金属がぶつかる深い音が空間に響いた。

「始めから我が主は、危害を加えるつもりなど無く」

お日様のような満面の笑顔のタマモキヤットが、会話に挟まってきた。

「そも食材の生産と管理の能力しか持っていないソラリネに、その発想はナツシング。望まれている役目から離れられないのは、神もAIもアルターなエゴも同一なものな」

明るい声で、主の心境を代わりに語るサーヴァント。

彼女の言葉を受け、AIはそのまぶたを開けた。

「……ソラリネは、人類を知ってはいいても、心を寄せようとは思っていませんでした。タマモキヤット0011を召喚したのも、提供する食品の品質を保つためでした」  
キツシユをずつと手に持っている少女の表情は暗いまま。

「けど……再現された人類のお料理を見て、ソラリネ、知りたくなってしまったのです」  
蛇口から水の雫が落ち、シンクの銀色の上に散らばった音が後ろから聞こえた。

「人間のことを。」

それも、我らAI……都市運営システムに生かされているのではなく、自ら生きようとしている人間を」

少女は悲しみを抑え込んでいるような淡々とした口調で語る。下を向いた顔を、黄色の髪が覆い隠してしまった。

「でも、諦めていました。」

なぜならば、都市の外で生きている人間は、AIを強く憎んでいたから。

だから、あなた方のことをスローネ・エーテルウエルから聞いた時、とても……そう、驚きました」

「どうして驚いたの？」

私の言葉に少女は答える。

「感情を向ける先がその種全体ではなく、個であったから……です」

ダークブルーの天井と床に挟まれた空間に、落ち着き払った声が響いた。

「AIにひどいこともされたでしょう。なのに、あなた方はAI全体を憎まなかった。

それってね、とても希有なことなのです、奇跡みたいなこと……」

だから会いたくなつたのです、あなた方が『上級都市ピオーネ』に向かう前に」

ソラリネが顔を上げ、私とアスカ、サーヴァント2体の顔を順に見た

「あの場所に行けば、旅は終わります。抜け出せなくなると言うことです。」

『上級都市』は現行世界の悦の頂き、全て与えられるが故に、全て陳腐な理想郷なのです」  
アンドロイドボディの眼差しは強く、まるで私達の覚悟を問うているかのようだった。

「……キツシュのお礼するです。燃料と食料の提供しますです。」

『上級都市』へ行くならば、ちゃんと覚悟してから。

ソラリネは人類を応援する作業従事型AIです、人類であるあなた方を庇護しましよ

う……です」

緊張感に満ちた長い会話が終わり、ソラリネは余分に力んでいた肩を落としながら息を吐いた。

「……むずかしいおはなしは終わったか？」

疲れを見せる主に、タマモキヤットがすすすと寄つていき、片手でキツシユの一片が乗せられたお皿を受け取った。

見れば、毛に覆われたふわふわの指の間に、ナイフやフォークが挟まれている。

「ではキツシユをいただきます！　そして話の間にポテトスープも作った。ビシソワーズ？」

まずは食べてからシンキングするがよい。

腹ぺこではろくな案も浮かばないのは、ナポレオンの方向を見ても明らかであるからして！」

彼女はてきぱきと食卓を整えていく。

どこかからか持つてきたテーブルにクロスを広げ、人数分の椅子を配置する。

金属製の輝くナイフやフォークやスプーンも並べられた。

テーブル中央には私とアスカが作ったキツシユ。

均等に配膳されたクリーム色のポテトスープがネコの手によりことりと置かれてい

く、もちろん人数分。

つまり、その意味は。

「主よ、食すが良い。その黄金色こがねのキツシユは、貴方の為だけに生まれた物なのだ」

AIであり、アンドロイドの体を持った少女の前にも、食事は置かれていた。

「タマモキヤット、ソラリネに味覚機能はないです」

「そうだな、アンドロイドボディにあるのは、体内に誤って入ってきた物を熱処理する加熱炉しかない。」

故にいつも、キヤットの料理もお写真を取り、旨味の指標であるアミノ酸の値やら栄養素やらを計った後は、全て私の胃に仕舞い込まれていた……おひとりお食事孤食キヤッツ！

……しかし見よ、我がマスター」

丸い琥珀の瞳に私達が映る。

「今日はお客様がたくさん、サクサクなプライベートが世界に拡散。

……食べられよ我が主、人は舌のみで味を感じるにあらず。

命という存在は、魂と心で何かを感じるのだ」

「魂で味を……です?」

「そう、ソウルフード」

理屈の通っていないような、通っているようなことを言われ、やや困惑した表情をソラリネは浮かべたが、椅子に着席した。

小さな手には大きく見えるナイフとフォークを持つ。

「……サーヴァントの言うことをマスターは聞くものです、試してみます」

カチャリと皿とナイフの刃先が触れ合う音と共に、黄金色のキツシユは一口大に切られた。

「あむ……」

シリコン製の口内の中に料理が運ばれる。セラミックの歯で彼女はその料理を噛み、飲み込んだ。

「……味覚センサー、搭載されてないのに」

卵の黄身のような艶のある瞳が、大きく見開かれる。

「湿って、さくつとして……どうやって作ったとか、具材を切るときに緊張してたとか、感じるです！」

彼女はまたキツシユを口に運び、目を輝かせる。

「これが、味、ですか？　これが食事をすると言うこと？」

単に栄養があるものを口に入れると言うだけでなく……心が、ぶるつと来るような……これが人間の『お料理』なのですか?!



「——然り」

タマモキヤットは初めての感覚に興奮している主へ語りかける。

「栄養素だけ整えてお口に流し込むのは、食事とはキヤットは言えぬ、栄養摂取だ。

孤独なネコが思うに、お料理とは、お食事とは……」

抱えていたガラスのボトルから、透明なグラスにそつと水が注がれた。その際に入り込んだ空気の泡が、水の上へと昇っていく。

「そこに思いが介在しているかどうか、で分けられると。

思いに優劣は無く、種類も無く。作るの七面倒しちめんどうーと思つていても良いのだ。

下手くそでも思いがそこになればお料理、極上のステーキでも心無く作られれば栄養の塊……む、何を言いたいのだアタシは」

食事する手を止め、かたわらに立っているサーヴァントを見上げるソラリネ。

「ソラリネが今まで行つていたのは、栄養の提供、だったのです？」

「嘆く必要はない、極上の栄養提供だったのだ、完璧である、キヤットは愛猫あいびょうとして誇らしい。

だが、主はその発展系をしたいのだろうか？ 人類が大地から宇宙へ旅立たんとしたよ  
うに」

視線を、手の内にあるナイフに移したソラリネは、数秒考え込んだあと、彼女の言葉

に答えを返した。

「……栄養提供はこれからも頑張るです、だって、人類が大切だから。

でも、ソラリネ、お料理も作ってみたいです」

「では手と手、肉球とマニキュレーターを取り合い作ろう。

めんどくさいときも、嬉しいときも悲しいときも作ってみよう」

「うまくいくか、予想が計算できないのって、不安です、ああ……でも」

彼女はキツシユに目を落とし、頬をピンクに染めながら呟く。

「初めてやることって、ワクワクです、魂がドキドキするです。

そっか……知らないことを体験するのは、こんなにも心躍ることだったのですね」

その言葉を聞き、タマモキヤツトは目を大きく見開いてから、自分の言ったことを恥ずかしくも感じたのか、ふわふわの尾を指先でもじもじと整えた。

「……ではこれより晚餐会！ 更なる料理がみなを待つ！

じゃんじゃん食べられよ、じゃんじゃん！」

照れで顔を真っ赤にした彼女は特設キツチンへ飛んでいき、フライパンで具材を炒めながら、オーブンから大きなお肉の塊を出し、皿へ、飾り切りした野菜ブロッコと共に盛りつけていく。

「こんな素晴らしい食事会は久し振りだ、座ろうぜ、我がマスター」

檻から解放されたバーサーカー04が真つ先に料理に飛びつく。

「アーチャー、ご飯食べれば、きつと元気になりますわ」

アスカがアーチャーの側に寄り添い、立ち上がるのを手伝うと、彼と隣あつた席に座る。

(……みんな、何事もなくてよかつたあ)

全員の無事を確認して安堵を感じると、私のお腹がくると鳴った。

「……私だつてお料理食べたい!」

席に着くと、タマモキヤットがグラスに急いで水を注いでくれて、次に肉料理を中心にでんと置いた。

「配膳任せるです! 今資料から技術ダウンロードしたですから!」

ソラリネがとても大きなナイフとフォークを持って、運ばれてきた肉をぎこぎここと切り始める。

「うおおお! ホスピタリティです! もてなし……て、美味しいと魂で感じてもらうですー!!」

アスカがその様子をはらはらと見守っている中、私はサラダを運んできてくれたタマモキヤットに声をかける。

「……そう言えば、ソラリネはどうしてちよつとへんてこな口調なの?」

「ネコのしなやかさと獨創性に胸焦がれた結果である、つまりはキャラ付けな」

お肉も、お野菜もスープも、甘いデザートまで出てきて、晚餐会はとても素晴らしいものだった。

みんなもきつと、元気になったことだろう。

全員で片付けを手伝ったあと、ダークブルーの広場に毛布とクッションをひいて、雑魚寝した。

（『上級都市』……か）

もう直ぐたどり着く未知なる世界に、私は若干の不安を抱きながら目を閉じる。

（どんな人と出会うかな、この世界についてもっと分かるかな……）

そんな展望を思い描きながら。

自身のマスターであるアスカも眠っていることを確認してから、広間を抜け出した。

暗い廊下の側面は深い青の水で飾られ、さながら旧世界の水族館のよう。

しかし、その中に魚などの命の気配はない。

冷たいアクリルガラスに手を置き、ヘッドギアの内側から見つめた。

「……まだ起きていらしたのか、アーチャー殿」

背後から聞こえた男の声で振り返る。

東洋風の、一部漆で塗られた革製の鎧をつけている、バーサーカー04が気負わない態度で立っていた。

「深い水だな。」

食料を作るために地下水を確保しているんだろう、周辺にワームロボットが多かったのはこのせいかもな。

時にアーチャー殿、水は好きか？」

返答はせず、無言を貫く。

「……」

男は左目しかない視線を一瞬だけ泳がせはしたが、数度瞬きしてから、重たげに口を開いた。

「——研究データを破壊したのは貴方だな？」

俺は水槽につけていた手を体の横へ下ろした。

「……内容は頭の中に入っているし、貴方がなぜ破壊したかの理由も分かる。

私は、責めるつもりなんて無い」

全身の状態を確認する。疲労はなく、魔力も十分にある。

「例え貴方がどんな存在であろうと、モモとアスカは幻滅も恐れもしないだろう。彼女達はそんな人間ではな——」

相対する者の警戒心を解かせるためか、若干の笑みを浮かべていた男の首を掴んで持ち上げ、床に背中から叩きつけた。

そのまま喉を抑え、呼吸が出来ないよう締め付ける。

「っ……っ……っ……」

倒された男の足が空を蹴るが、右手で骨を割って叩き折り、足首からぐるんと捻ると、動きは無くなり静かになった。

「……」

男は緑の瞳に、深々とした水の光景と俺を映す——。

第42話 骨を割って話し合おう  
終わり

## 第43話 その男は致命的な微笑みで

「……」

突然、俺の手によって床へ叩きつけられたバーサーカー04は、驚いたのか眉を上げて、それからぱくぱくと口を動かす。

『で、き、る、も、ん、か』

声も発しないまま俺を試す男のその緑の瞳に、死を目前とした焦りの色は無い。喉を潰している左手の力を強く……右の手も添えた。

（こいつを殺せば、真実は明かされない、ずっと闇の中だ。

俺の、俺の正体を知ったものは、生かしてはおけない……！）

バーサーカーの異常な回復スキルの正体はようと知れないが、首と頭を潰して心臓をえぐり取り満遍なく雷で焼けば、回復に使う魔力が尽きて死ぬはず、いや、死ぬ。

（死ぬ、死んでしまえ、今すぐにでも死ぬ、絶命しろ……！）

俺を見るな、俺を知るな、理解を示すな、俺を……）

時間が経つにつれ、手をかけている男の顔がどんどん赤らんでいく。

皮膚の下を通っている動脈は鼓動早く跳ね回り、頭へ懸命に血を送ろうと無駄なあが

きを続けていた。

男の瞳に『俺』が映る、機械パーツで覆い隠された顔。

(隠れていて良かった、俺の顔なんて、俺自身が見たくない……！)

脊髓の通っている太い骨まで砕かんばかりに、強く、強く、両手で握りしめる。

「死ね、はやく、はやく死んでしまえ、死んで！ 死んで……」

永遠に感じてしまうほどの、数分が経った。

バーサーカー04の全身から力が抜け、まぶたがとろりと落ちる。

「……」

あがきを見せていた口が閉じられ、死を迎える瞬間、本当に、本当に小さく——こぼれ落ちるように微笑んだ。

己を殺す相手への怒りも憎しみも、抱いていないかのようなその笑みが、ある記憶を呼び起こす。

(……!!!)

そのものではない、この男は『あの男』ではない。

けれど、俺はその笑みと似たものを知っている。

いや、知っているのは『俺』ではない、その目で見たのは——。



空の下、車輪が地面に沈み込んだ戦車が見える。

地に伏した白い肌の男が、終生の敵である『彼』を見上げた。

戦う術を失った者に武器を向けるなど、戦場で行ってはいけない禁忌だと心が叫んでいたが、けれど、矢をつがえる腕の動きは止まらない。

(目の前で伏している男は、戦士だ。)

それも自分と拮抗するほどの力の持ち主で、相手側だって、今まで多くの禁忌を侵し  
てきて、だから、この殺人は、きつと、ずっと……。

この行いは、世界に望まれている。人に、神に、だから……)

——殺す理由に、正当などあろうはずもなく。

指が離れ、その矢先が狂いもなく首に届いた瞬間、撃ち倒された男は、なぜか……微笑んだのだ。

「あ、か、か……」

おかしい、首を絞めているのは俺の方だというのに、息が出来ない。喉奥が痙攣を繰り返し、意味のないただの音が連続する。

「……」

バーサーカー04は相変わらず、『あの男』を思わせる笑みのままで。

「あ、あああああ!!!」

意味のない絶叫だけが、俺に吐き出せる全てだった。

(……言えない言えない言えない言えない言えない!)

『あの男』の名を俺が呼べるはずもない!

今見た悪夢を振り払うかのように、首を振りながら叫び続け――。

「うっ……」

もう何もかもがどうでもよくなり、手の力が緩んで、バーサーカーの首から指が離れた。

「……けほっ、こほっ。なーんだ……止めたのか」

首をさする男。

真つ赤な締め付けの痕は、回復スキルのおかげか、数秒で消えて無くなった。

俺は男から離れるため立ち上がったが、ろくに歩けもせず、床へ座り込んでしまった。

「うーん……」

バーサーカーはさっさと姿勢を起こし、足首をくるくる回して、俺に折られた足の骨が治ったことを確認すると、水槽に体の側面からもたれかかった。

「ああ……びっくりした、本当に……」

吐息混じりの声に俺への非難の響きはなく、遠い場所へ語りかけているかのように穏やか……なのに。

「どうして殺すのを止めたんだ？」

俺の表情は……ひよつとして、誰かにとても似ていたのかい？」

死の間際に浮かべた奴の微笑みは……俺にとっては余りにも、致命的だった。

「なぜ……どうして……」

まるで、心の中身をこじ開けられ、隅々まで覗かれたかのような恐怖に支配された俺は、そう男へ問いかけるのが精一杯だった。

おかしな話だ。俺はいつだってこの男を殺せるといふのに。

殺せるはず、だったのに。

「得意なんだ、こういうの」

「得意……？」

「ああ。相手の心の一番柔らかい場所に」

男は俺の心臓へ指を向ける。

その顔は、まるで底の見えぬ井戸のように暗く、無表情で。

「刺さる表情が分かるんだ。」

まあ、今は顔を隠しているから、威力も半減なのだけど」

声はまるで別人が話しているかのように、優しかった……怖気で逃げ出したくなるほどに。

「俺は、俺が単体で存在しているという現実には耐えられない。

……だが、自害することも出来ない」

床に座り込んだまま、自嘲をこぼしながら呟く。

おかしなことばかりだ。俺が単体で存在していることが、それを許している世界すら。

「ずいぶんと投げやりなことをおっしゃる」

声の調子を普段通りの、『信用できない男』のものに戻しながら、左目で俺を見た。

「貴様には、規格外の回復スキルがあったな」

「ああ」

暗い緑の瞳は濁った翠玉のようで、視線は変わらず俺に向けられている。

「……それは、見えない傷も治せるのか？ 例えば」

言わない方がいいと予感を覚えつつも、言葉を吐き出す。

「壊れた精神を治療すること、とかは……」

——そう言った瞬間、バーサーカーは目を開き、立ち上がって俺の側へ来ると、片膝

を床につけて腰を落とし、胸元の布を勢いよく掴んだ。

「アーチャー961」

怒りのにじんだ声。

それにしてもよく声色の変わる男だ、まるで人の話し方を真似る魔物と話しているかのような気分になる。

「望むなら、慈悲無く救ってやる。

貴方という個体の心をねじ曲げ、餡細工のように形を変えて救うことだって、出来る

……」

命を感じない水をガラス越しに眺めることの出来る廊下に、感情を露わにした男の聲が響く。

俺は抵抗する気力もなく、捕まれたまま脱力していた。

「……しかし私は貴方を救いたくない。

それは貴方の今までの努力を上から一方的に踏みつける行為だからだ」

バーサーカーが指先を離す。

「アーチャー961、今の貴殿は傷で編まれた黒曜びようの廟だ、癒やせば全てを失うぞ。

心を、記憶を」

「……構わない」

倒れたまま、俺は彼の言葉に答えた。

「思考を停止し、責任を私へ丸投げしようとするのは止める。」

貴殿のマスターであるアスカは、どうなると」

「アスカも喜ぶ」

「いいや喜ばないね、こればかりは断言しよう」

要求を呑まない男に苛立ちを感じ、俺は天井を睨みながら声を発した。

「ならば俺はどうすればいい！ 何もかもをぶちまけてアスカに話せと?!

こんなおぞましい存在である俺が、憎悪混じる激情も知らない清廉な彼女に、自身の正体を打ち明けろと?!

「私に答えを求めな！ アーチャー961!」

「……バーサーカー04!!」

俺は体を起こし、弓を顕現させ矢をつがえた。

バーサーカーは後方へ跳んで距離を取ると、刀を抜き、攻撃を防ぐため、体の前で刃をこちらへ向けない状態のまま構えた。

男が遠くから獣の如く叫ぶ。

「いいぞ、求めるがままに殺し合ってやろう!」

首を落とし、貴方が望んだとおり、ありふれた人間のように地面へ転がしてやる!

それとも心を慰める言葉でも欲しいのか!?

かわいそうだと、哀れだと、お前はお前が言うように、誰の愛も得ることはない、薬にもならない言葉を注ぎ続けてやろうか?!

……だがな、そんなことをして何になる?」

——予感があつた。

どちらかが攻撃を仕掛ければ、その瞬間に全てが終わる。今までの旅も、マスター同士の友情も、何もかもが。

「同情で他者から与えられたものに意味などないと、貴方は分かっているというのに!」  
殺さなくてはと、思っている。この男はやはり危険だ、人の心を見通しすぎる。

だというのに、指が矢羽根から離れない。

「私は仲間として貴殿が好きだ、信用している、出来れば戦いたくない。

無理矢理に、一方的に救いたくも、ない。

……目先の簡単な方法に心奪われて、考えることを、足掻くことをどうか止めないでくれ」

敵にためらうことなく矢を降り注がせることの出来る指が、今日はひどく重たかつた。

「……私が、無遠慮だった。

貴殿の状態を分かっていたというのに、訳知り顔で踏み込みすぎた。すまなかつた……殺されたって文句は言えないな」

男が刀を投げ捨て、手の平が見えるようにした両手を頭上にあげた。

「好きにしろ」

無表情でそう言い放ったバーサーカーの首へ、矢の先を向けようとしたが。

「……っ」

機械の仮面の下で唇を噛む。

だめだ、出来ない、これは『英雄』アルシュナのする行いではない。

「……貴様を殺せば、マスターアスカの友であるモモが、悲しみます、から」

つがえていた矢を放たず、弦から外し、腕を下ろして、武器を床へ置く。

混乱したまま、普段の自分の演技を引つ張り出してきて態度を取り繕った。

「……感情で動いたというのに、自らをごまかして理屈を後付けしたな、アーチャー殿？」

首をわずかに傾げた男は、俺をしばらくじっと見てから、誰に語りかけているでもない言葉を呟く。

「私が何を言っても糠に釘、柚子に柚子胡椒か。」

けどいいさ。いつかちょうどいい時に思い出して、心を動かす起爆剤にでもなれたら



それでいい」

そして、懐から白い物を取り出す。

「話題変えまーす。」

なぜならこの問題について、俺は答えを持たず、アーチャー殿が苦しみながらも答えを探し続けなくてはいけないものなので」

宣言と共に出てきた物体を俺は見る。

「研究施設で貴様が発見した、白紙の本……ですか」

『『S文書』って書いてあった』

「……読めたのですか？」

俺も解読のためにばらばらとめくったが、最初から最後まで記されているものなど無かった。

「ああ、読むことが出来た」

モモ、アスカ、英霊の姿を象ったアンドロイド達が見ても、私と同様だったというのに、この男は解読出来たらしい。

「暗号？ それとも薬品などによる浮き出し……などででしたか？」

「もつと単純だ、俺というサーヴァントの霊基にのみ反応し、読める状態になる」

男はページをたぐるが、白のままだ。

「文字が浮かぶとか、そんな分かりやすいものではないらしい。

本に練り込まれた魔術や魔力が反応し、俺の脳内へ情報が書き込まれる」

そのややこしさに、私は思わずヘッドギアの下の眉間にしわを寄せた。

「なぜ、そんな特定の個人しか解けないようなセキュリティが……」

「……俺が書いたものだからだ。正確に言えば、かつて召喚された別の俺が」

バーサーカーは腕の輪に指先で触れた。『04』と記されているそれ。

「筆跡、回りにどいけれど確実な戦略、ちくちくしていて読みやすい文章……間違いなく、全て俺のものだ」

「……何が書かれていたのです」

「ざっくりまとめますと、世界を救う方法について」

バーサーカーは本を閉じる。

「この旅だけでなく、召喚されてからずっと作為的なものを感じていた。

既視感もあつたが、その原因が自分の手によるものだとは……いや本当に性格が悪い……。

運命とか嫌いだとか言ってたじゃん……自分を曲げているにもほどがあるぞ……」

瞳も同じ様に閉じ、頭を振る。

「以前言っていた方法で、世界、救えるのですか」

「確実に。ただ……」

俺に答えた後に、男は口ごもる。

「個人まで救われるかどうかは、分からない」

発言してからわざとらしくパーサーカーはうんうんと唸っていたが、ため息と共に次の言葉を吐く。

「俺が、世界をこんな風にしてしまった。なら、きちんとその責を負わなくては。」

……サーヴァントってすごく厄介なシステムだ、生前は一人しかいなかった己が、無限が増えて無限にご迷惑をおかけしているのだから」

黒髪が生えている頭をがしがしとかきむしる。

「世界か人か。どちらかは治して、ちよつと手助けしなくては。」

そうすれば、みんなやり直せるはずさ」

「一方的に救うのは嫌いなのでは？」

「……極めて邪悪な過去の俺がこの案を考えたんだから、責任とって、やるしかないだろ」

白い本を再び広げて、睨みつけるパーサーカー。

「愛か……結局それが一番の薬ってことなのか？」

男の目線が俺に移り、それから優し気に微笑んだ。

「私、貴方のことが好きだ」

本心が込められているとは思えない言葉を、男はすらすらと語る。

「背中を預ける仲間として好ましいという意味でだ、それ以外の余分な感情はない」

男に対し、俺は冷たい声で反論する。

「……俺は、自身の存在を好ましいと思ったことなど一度もない」

「うん」

バーサーカーは軽く頷き、俺へ言葉をかけた。

「しかし、みなが貴方を好いて、そして夢を見るんだ。

身勝手に傲慢な理想を貴方に対して抱く、何故だか分かるか？」

「……」

理由など分からず、口ごもる。

「貴方が美しいからだ。」

姿形ではなく、その有り様が、生き様が、飾り立てなどされていない、魂の輝きが

そんな言葉に首を縦へ振れるほど、簡単な精神ではなく。

「貴方は貴方であるというだけで、多くの人に愛されている。」

……俺の考えを述べたまで。好きに受け取ってくれ」

ガラスの向こう側の水が、ちゃぶんと音を立てた。

「……先に休みます」

頭も心も冷え切ってしまった。少しでも横になりたくて、バーサーカーにそう告げる。

「夢でも見られると良いな、アーチャー殿」

「……サーヴァントは夢を見ない」

正論を言えば、男はそれを鼻で笑い、夢を語った。

「世界がこんなにおかしくなっているんだ、サーヴァントだって夢くらい見られるはずさ」

バーサーカーは白い本に、黒い籠手まとう手を置いた。

「お休みなさい、英雄の半身、幼き欲心。」

俺はどんなことがあるかと、貴殿の味方だ」

「……信用できるか」

率直な感想を述べると、男は演技っぽく悲しげな表情をした。

「懐かしい反応だ、生前も周りからそんな感じに言われてた。」

「……何がいけないのだろうか?」

俺の喉元まで、「その真意の読み解けない胡散臭い態度が原因だろうに」という言葉が出掛かったが、ぐつと飲み込んだ。

「……お休み、なさい」

「ええ、お休みなさい」

何とかその言葉だけを絞り出して、来た道を戻り、あの暗い青色に包まれた広場へと戻った。

第43話 その男は致命的な微笑みで

終わり

# 第44話 クッキングバトル大勝利! 明るい未来へ レッツラゴー!

「トバルカイン、おはようございます。」

もう朝の7時ですよ、6時には起きる約束でしたのに……」

毛布にくるまって寝ていたなら、先に起きていたアスカの不満げな声と両手の揺さぶりで起こされた。

「目覚めよ可愛いお客様、世界を救うために……」

タマモキヤットの明るい声がする方に寝ぼけ眼を向ければ、クロスの敷かれたテーブルの上に、美味しそうな湯気を立てる朝食が整然と並べられていた。

「数百年前の今頃に流行ったPFCバランスばっちりの朝ごはん。」

PFC……タンパク質<sup>プロテイン</sup>、脂質<sup>ファット</sup>、炭水化物<sup>カーボ</sup>の頭文字である。

出典、紅閻魔お料理辞典P122より」

「……そうなんだね!」

彼女の言葉は難しい。しかしお料理は素晴らしい。

私は期待でうきうきしながら席に座る。

(おお……)

お米状にした炭水化物パウダーがお茶碗に盛られ、お椀にはタンパク質を加工して作られたお味噌汁風のスープ。

小鉢には、緑の野菜ブロックを薄切りにし、調味料で和えたお浸しが。平皿には焼き魚を再現したオレンジ色の長方形のブロックがのせられている。

多分、日本式朝ご飯だ。

「いただきますー！」

横目で見れば、アスカは樹脂製の箸を使って元気よく食べ始めている。

私もそれに続き、食事を口に運んだ。

(美味しい！)

……昔はこんな素晴らしい料理が誰でも食べられたんだよね、現実味ないや  
咀嚼しながら過去を思い、ごくんと飲み込んでからタマモキヤットに訪ねる。

「ソラリネとバーサーカー、アーチャーはどこにいるの？」

「おお！ あの純白お舟の整備中だ、リソースも満タン、インスタントワンタン麺もオマケに積み込んだぞ」

「そっか……」



尾や頭を毛繕いしている彼女を眺めながら、味噌スープをすすする。

（もう出発か……仕方がないよね、1つの所にとどまれるほど、時間も物資も、余裕のある旅じゃないし）

サーヴァントを人質に取られたり、突然クッキングバトルを命じられたりと、振り返れば色々あったが、出発が近づくと名残惜しかった。

その後、旅立つ前の準備に行っていたサーヴァント2体と合流し、広場集まり全員で朝ご飯を食べ、タマモキヤットをお手伝いしつつ片付けをした。

「ソラリネがデザートランナーを整備したです、しばらくはバッチリな筈です」

「ありがとうございます」

「ありがとうございますわ」

アスカと揃ってお礼を言うと、ソラリネは黄色の髪の上にあるベーコン型のヘアピンを指で触った。

「……本当に『上級都市』に行くのですか?」

答えを出す前に、隣に立つアスカの意見を聞こうと思い、目線を飛ばす。

「わたくし、聖杯戦争が何故行われているのか……知りたいのです」

口振りに迷いがあつたけれど、アスカは自分の意志を告げた。彼女に続き、自分の思いを言葉に出す。

「私も、理由が知りたい。」

それに、その命令を各都市のAIに誰が出しているのか、真実を知りたい。

……元凶がいるのなら、止めたいの」

聖杯戦争で苦しんでいる人がいるのなら、助けたい、戦争を止めたいと、私は一番始めに思ったのだ。

「ソラリネはただの食品製造管理のAIです。いわゆる下っ端です。」

なので……もつと上の考えは分からないのですけれど、考え出すとなんだかゾワゾワするので……」

白いワンピース姿の少女は、ふるふると小さく身震いした。それにつられて髪上の食品サンプルベーコン付きのヘアピンも揺れる。

「タマモキヤット、呪術スキル使って予言っぽいことするです」

「オーケイ、アイハブネコ囁むコントロール」

主から命じられた彼女は、懐から色とりどりの石を取り出すと、それを床に並べてカチカチとぶつけ合わせる。

少女である私とアスカ、バーサーカー04とアーチャー961という大の男がそれを

眺めるといふ、しばらくシユールな光景が繰り広げられた。

石の動きが止まる。

「なんと……これは……!」

「何がどうなるのです?!」

「……混沌と、出た。暗中模索、五里霧中とも読める」

散らばった石に規則性はなく、星座のように線で結ぼうとしてもうまくいかない。

でも何やら分かかってしまった様子のタマモキヤットの解説は続く。

「そして脳裏にぱつと見えた二重螺旋、別れゆく道、巡り会う2人、最後には命のどんとこい底力。」

あとすごい爆発、ぐわつと開いた後にがーつと聞こえた、しかして舞台は天元を超えてギヤラクシー……」

目を細め、真剣に石の並びを読み解いているようだが、そう言われても何がなんだかさっぱりやっぱり分からない。

「……このことです、くれぐれも気をつけるです」

「……はい」

ソラリネとタマモキヤットなりの激励をもらい、私はみんなの代表として返事をした。

「では出発するです、お腹空いたらワンタン麵食べるです」

「ありがとう、そしてさようなら、ソラリネ・ヘルゼルマガツ」

「元気にしていることを願うです、人類を応援する作業従事型AIですので」

小さな彼女に感謝と別れの言葉を告げた。

「おっと、キャットを忘れず」

駆け寄ってきた彼女は、私達全員へ丁寧に握手をしてくれた。肉球がぶにとして心地いい。

……アーチャーと握手するのにはとても苦戦していたけれど、最終的には手と手をつなぎあっていた

「何があろうと焦らず、辛いときは、胸に大切な存在を思い浮かべて挑むべし」

「キャット師匠……!」

なんだか胸が急激に熱くなってきて涙がこぼれそうになった、どうした私。

「……ではキャットは通常営業に戻る、人類のお料理再現が際限なく待っているのだからハハ!」

彼女はぴよんと駆け出し、マスターであるソラリネの元へ帰って行った。

別れの挨拶もすませ、水で満ちた水槽横の暗い廊下を歩き、整備をもらったデザートランナーに乗り込む。

「いよいよ、『上級都市ピオーネ』に行くんだね」

「わたくしの親類……叔父様がいらっしやるはずです。」

何事もなければ今もそこに。事情をお話すれば、きつと良くしてくださるはず」

馴染みの席につき、ベルトを着けながら、この先のことについてアスカと相談しあう。

「全員の乗車を確認した。エンジン点火、出発するぞ」

ハンドルを握るバーサーカー、その隣に座っているアーチャー。

「あと3日ほど走らせれば、廃墟となっていた『上級都市レグルス』で入手した座標に到着する。」

……あのバーサーカーに言われた予言っぽいこともあるし、気を引き締めていこうぜ」

彼の言葉に頷いて、私は唇をきゅつと結んだ。

（何が待っているのだろう、聖杯戦争や世界について分かるかな……）

胸にある期待、不安。

砂の上を駆ける白い車は、蛍光灯で不気味に照らされた通路から、照りつける太陽の下に飛び出していった。

「なんか私達、予言をもらうことが多いね、バーサーカー」

「予言は予言だし、そこまで重く受け止めることないと思うけどな、我がマスター」

第44話　クツキングバトル大勝利！　明るい未来へレッツラゴー！  
終わり

## とても 番外編

### 第45話 サーヴァントユニヴァース二次創作

「偶然じゃないんだー！ いやーおー！」

「ふたり……出会えたのはきつと……いえい」

船内の無重力空間の中、私とえつちゃんは今中古で手に入れたカラオケマシンに歌声を叩き込んでいました。

採点なんてしません、そもそもテストというものの存在意義が分かりません。

破滅に繋がる現実逃避だとしても、私達は止まりませんでした……物理的にも。

「Xさん、お菓子と飲み物、無くなってしまいました」

「あつ、ほんとだ。ドウルキホルテで買い込んだ分が全滅ですね」

えつちゃんも徳用黒糖饅頭の大きな空袋を、マイクの握っていない方の手で振っています。

私も『厚切りポテトチップス、ケルトな美味しさチーズ味』の最後の一枚をぱりっとかじります。濃厚でうまい！

「仕方なし……近場で降りて補充しますか」

「周辺惑星を検索しますね、えつと……」

マイクとから袋を両手から離れた、体操服姿のえつちゃんが、自動運転にしていた『ダウン・スタリオンⅡ』のシステムをぼちぼち操作します。

「一番近海にあるのは、『スイトロプ』という惑星ですね」

「聞いたこと無い星の名です」

「辺境特有、見どころもないのどかな田舎惑星……だそうで」

「ドウルキ無さそー」

「スペースバックスも出店していないみたいです。でも、お茶屋さんのお菓子の評判は良いみたいです」

「コーラでチーズを流し込みたい気分ですが……たまにはえつちゃんと並んで、和菓子とお茶をいただくのもいいですね！」

宇宙船が片田舎へ向かい推進を始めます。

「さあ！ 私達の現実逃避は始まったばかりですよ！」

「貴殿らさあ……若いからって暴飲暴食しちゃだめだぞ」



そして現在に至ります。

「くっ、可愛いお茶屋さんでコスモ黒蜜抹茶パフェを食べたのがあだになるとは……!」  
宇宙船の停留所近くのお茶屋さんで、抹茶アイスと白玉と粒あんとたつぷりの生クリームに、お好みの量のとろーりとした黒蜜をかけていただくパフェをがつついていたら、意識が遠くなり、気がついたら悪の本拠地っぽい牢屋の中。

壁は、後ろ以外はすけすけスケルトン。えっちゃん隣が隣の部屋でぐったりとしているのがよく見えます。

「手足にしびれ、頭痛、意識は朦朧……おのれヴィラン! 毒を盛りましたね!」

「うーん……」

「卑怯者! 私が気絶する前に自己紹介をしてください! さあ!」

冷たい床に剥き出しの太ももをぺったりとつけたまま、透明な壁の向こうに立っているサーヴァントを睨みます。

「……では、シリアスに格好良く行うか」

身長ぎりぎり170cm越えてる男は、肩で留めている黒い重厚なマントを腕でひるがえらせ、緑の瞳で私を見ます。

「我こそは、ヴィラン連合の外伝を汚すものにして、宇宙全土を救済する力を自らの犠牲によつて篡奪した者。」

因果の末路、罪と罰の杯さかずき、外界へ繋がる窓、シリアスからスプラッタコメディまで、そこまでしておけよ■、裏ボス系外道副官……人は私の事をそう呼ぶ」

悪を意味する黒い艶々とした日本風甲冑に身を包み、布に覆われた指先を彼はぴんと伸ばします。

髪は整えていないのか黒色のぼさぼさで、顔の右半分は木製のおどろおどろしい仮面で隠されていました。

どこからどう見ても完ぺきな悪役です。

世界がひっくり返って1万3回新シーズンに突入したとしても、こいつが味方側で採用されることはないでしょう。

「呼び方を選ぶのがめんどうくさい！ ささっと真名を言ってください！」

「真名はまだシーズン中盤により言えぬ。

アルターダークバーサーカー04、縮めて04と呼ぶがいい。

4は大好きな人との年齢差の意味だ☆」

「……おっさんですか？ おっさんなのに乙女趣味で語尾に星とかつけちゃったりするんですか？」

「おっさんじゃない、肉体は20代前半だ。そして俺に口喧嘩で勝てると思うな、いっばい泣かせるぞ」

口数の多い敵に、私は強く歯ぎしりをします。

(ヴィラン連合……！ 宇宙を股に掛けて大きな悪事を行ったり行わなかったり、仲間内で争ってぐだぐだになりかけたりもする悪の組織……！)

その外伝ですからえーつと……二次創作みたいなもんですね)

体調不良の私を見下ろしている04に悟られないよう、スケルトンな隣部屋にいるえつちちゃんの様子を横目で見ます。

メガネの下に脂汗を浮かべ、体操服姿で荒くふうふうと呼吸している彼女は、絶体絶命っぽいです。

「この惑星……『スイトロプ』は悪たる俺の領地。貴殿らは不用心にも迷い込み、敵の手落ちたという事だ」

彼が手を広げてからぐつと握ると、革がこすれあつてきゅつきゅつと鳴きます。

「あの美味しそうなパフェに……毒を盛ったのですね?!」

気分はどんどん悪くなります。地面に倒れ込みながらも、敵へ真実の言及を続ける健気なヒロイン私。

「……違うけど、惑星名物にそんな事しないけど」

ヴィランは気まずそうに目線をそらしながら答えました。

「コスモカルデア学園在籍のうら若き乙女よ、血糖値……という言葉を知っているか」

「なんとなく」

「血液に含まれているブドウ糖の値を意味する。」

糖は血流にのって筋肉や脳、臓器に届けられ、その箇所を動かすエネルギーとなる」

「はあ……」

「ちゃんと聞いて、クロスする運命を歩む少女よ」

「なんか教師陣を思い出す口振りに、私は冷たい床にころころ転がりながらふてくされました。」

「糖が体内に取り込まれると、この値が上昇する。」

「この数値は高すぎても低すぎても、体内に悪影響を及ぼすのだ」

「……で？」

「押収した宇宙船の中を勝手に見たのだが……貴殿らの生活、ひどいな」

「なっ……!」

「ストレス、生活習慣の乱れ。最も体によくなかったのが、短期間で多量の糖の摂取」

私の頭に浮かび上がる、思い当たる行動の数々。

「体が糖を取り込みすぎてしまい、高血圧から血管が悲鳴をあげ、四肢のしびれなどの不

調が現れ、気絶……」

彼は残酷な真実を床に寝そべる私へ言い放ちます。

「……毒じゃなく、暴飲暴食による高血糖ですね。

サーヴァントなので糖尿病にはなっていないませんが、数日安静にして、今までの食生活を見直してくださいね」

苦しうにうめき声をあげる隣の部屋のえっちゃんの額から、汗が一つと一筋流れました。

「わ、私とえっちゃんをどうするつもりです！」

ヴィランは腕を組み、顎に手を添えながら答えました。

「ヴィラン連合のオークションに出してお小遣いにしようかな……」

けど、黒い方は珍しい血筋だし、家柄フェチの『あの人』へのお土産にしようかな……  
悩むな……

でも今更女の子を持って行ってもありきたりか……」

「ぎゃー！ 絶体絶命！」

私は叫びます。

ここは銀河警察もめんどくさがって来ない辺境の惑星、頼もしい仲間がいるコスモカルデア学園も遙か彼方。

誰の助けも望めないからです、ピンチ！

「……いつまで遊んでいる」

絶望を深くするように、もう一人のヴィランな声が。

「おお」

04が振り返り、親しげに声をかけます。

「あけみっちー殿！」

桔梗の花の模様を付きの紫の陣羽織を着た、白と黒のツートーンの髪を持つ、難しい顔をしている年上そうな男性。

「……あけみっちー？」

彼は04の言ったその単語の意味するところが分からなかったのか、眉間にシワを寄せました。

「……申し訳ありませんでした、ギャラクシー日向守殿。あけみっちーの語感のよさにつられ……」

「気になさらず。私の目的の為に領地を貸してくださっているのですから、貴方の方が立場は上だ」

「あけみっちー殿」

「……」

「日向守殿、ごめんなさい」

揃ったヴィラン2人は、私の事など齒牙にもかけず、大人特有のめんどくさい世間話

を続けています。

「目……………」

現れたあけみつちーの言葉が気にかかり、思わず口から出てしまいました。

白髪の彼は小さく笑みを浮かべると、ぶつぶつと何事かつぶやき始めます。

「そうだな、いずれ銀河全土に知れる事。先んじて知っている者が多少増えようと問題は無い……………」

「証明班、スポットライトを日向守殿に」

04が両手を叩いて合図を出すと、強い光があけみつちーに浴びせられます。

白と紫の色纏ったヴィランは腕を広げると、服の布を空間に舞わせながら、高らかに野望を語り出しました。

「ダークマターのエネルギーを利用し！ 銀河創世まで時を逆戻す！

そして……………ビッグバン、宇宙の誕生を信長様に置き換える……………『ギヤラクシー信長様計画』つ……………!!

それが私の野望だ！ ふははははははははは!!

「宇宙の全てがノブになるんだってき……………な！」

私はごろんと転がって04を見上げました。

「……………04、どういう気持ちでコイツに協力してるんです？」

彼はぼさぼさ髪を手で撫でました。

「いや、夢に向かって頑張ってるな……きらきらしているなーって……。」

あと個人的な恩義、あと夢敗れて破滅する様子を最前席で見たい。頑張っている人間は大好きさ！」

「性格がシンプルに悪い！」

「いえーい」

ピースサインを片手に作る彼。

「——油断、しましたね」

恐ろしい野望をぶちあげたヴィランの声を裂くように、彼女の声が聞こえました。

「オルト・ライトニング！」

頼もしさを感じる赤い雷が透明な壁にひびを入れ、その後続く怒涛の蹴りが障害を完全に粉碎しました。

「……04」

「日向守殿は退避の準備を。この……」

赤いブレードが謎のバーサーカーに迫りますが、筋力が高いのか、彼はそれを片手で受け止めます。

「竜の息吹纏う少女の相手は、俺がしよう」



「新顔のヴィラン……ですか」

魔力をまとった刃を受け止められながら、空中で完璧に静止している格好いいえっちゃんがそこにいました。

輝く瞳を大きく開き、顔に闘志をみなぎらせている彼女は、先ほどまで脂汗を流し、ぐったりしていた人物と同じには見えません。

「……ネクロカリバーを手で止めるとは、熱くありませんか？」

「もちろん熱いさ、痛覚を無視してるだけで」

「まさか、改造サーヴァント……!」

「正解だ! ……格好いいだろう!」

男は不適に笑います。

えっちゃんは光で出来た剣の刀身を一度消滅させ、宙で回転しながら着地、体勢を整えました。

「えっちゃん!」

未だ閉じこめられている私は、彼女へ声をかけます。

「過剰であった血中ブドウ糖を全て魔力に変換し、無理やり体調を整えました。くっ……」

答えるえっちゃんの背や足は、かたかた震えています。

「高血糖からの低血糖……魔力でごまかしているが、そう長くは保つまい。

その血、我が主への土産としよう」

バーサーカーは的確に診断し、左半分だけで獯猛に微笑むと、日本刀と槍を両手に持ちました。

「Xさん……手を、私に……」

「えっちゃん?!」

「はや……く……」

正面を向いたまま、こちらに伸ばされた白い小さな手。

私は高血糖で震える手を持ち上げ、触れようとします。

——こつんと、透明な隔たりが私達を阻みました。

「俺の当座の活動資金になるがいい!」

振りかぶられたヴィランの剣と槍が彼女に迫りますが、私はえっちゃんを信じて目を開き続けました。

「この光は……!?!」

えっちゃんの全身から、ほとぼしる赤い雷。

「何故だ! 貴殿にそんな余力……はっ、まさか!」

「貴方の推測通り」

透明な壁で触れ合えなかった彼女と私の手。

でも、その間を繋ぐように、きらきらと光る粒子が私からえっちゃんへ送られていました。

「Xさんの体を蝕んでいた血中のブドウ糖を、私に移した。」

これでXさんの高血糖は治り、私の低血糖も補われた！」

えっちゃんの体の震えは収まりました。

そして、武器の黒い持ち手の両端から、赤い光の刃が伸び始めます。

「——オルトリアクター魔力転換炉臨界突破」

彼女は姿勢を低くし、敵を見定めます。

「黒竜双剣勝利<sup>クロス</sup>剣<sup>ス</sup>!!!」

「ぐわあああああ!!!」

駆け出すと共に、えっちゃんの宝具が炸裂し、建物もろとも、謎のバーサーカー04の胴体を半分に切り落としました。

「馬鹿な……俺が……こんなところでえええ!!!」

負け惜しみ混じりの断末魔が響きます。

「うわああああ!!!」

ヴィランの吹き飛んだ胴体は、いつの間にか地面に空いていた溶鉱炉っぽい赤い縦穴に落ちていきました。

……声は遠ざかっていきます。

「Xさん、大丈夫でしたか」

「……ふう、ひどい目に会いました」

スケルトンな壁は強度はそこまででもないのか、えっちゃんの武器の持ち手をガンガンぶつけると、ぽろぽろ壊れました。

「下半身は蒸発させましたし、上半身は穴に落としました。流石にあの状態から復活はないでしょう」

えっちゃんの手を借りながら私は立ち上がります。

「……展開に困らない限りは」

そう話しながら曇るえっちゃんの顔を見ながら私は頷きます。

「そうですね……先の展開にこの宇宙が困らない限りは……」

肩の力を抜こうとしたその瞬間、けたたましい警報と音声が鳴りました。

『所有者のロストを確認……この基地は爆発します！ この基地は爆発します！』

「まずいですよ、えっちゃん！ 雑な爆発オチで私達を殺そうとしています！」

「急いで脱出を！」

私と彼女は手に手を取って廊下を走ります。

「Xさん、こっちが押収した宇宙船の置き場みたいです」

中古カラオケマシンまで搭載した愛しの『ドゥン・スタリオンII』は無事のようにでした。

空に近かった燃料も何故か満タン、お菓子のゴミが散乱していた内部も不思議な事に片づけられています。

「エンジン吹かして全速力で逃げますよ！ なるべく最寄りのドウルキ方面へ！」

「……その、どこかで優しいお味の和食をいただきますませんか？」

「……ですね」

食生活の乱れという指摘された恐ろしい現実には打ちのめされながらも、私達は旅を続けます。

——その先に、「中間テスト受けなくても何とかならないかなー」の希望を求めて。

「04、生きているか」

「……」

「ふん……」

少女の宝具を受け炭のようになった男をチビノブ達に回収させると、私は巨大宇宙船の船内……ブリッジへ戻る。

「ノブ、ノブ！」

「ノブー！」

画一的な制服に身を包んだのチビノブの手により、宇宙船は出発準備を整え、隠し港から秘密基地を後にした。

「銀河警察の無線を傍受しろ」

「ノブー！」

私の指示に従うチビノブは、機器を駆使してクラッキングを行い、程なくして船内に銀河警察の連絡が流れ始めた。

「ふむ……星を丸ごと押収とは……」

背後から聞こえる足音。

「野蛮な……銀河警察は悪に対して余裕がないと思いませんか？ 日向守殿」  
頭だけを後ろへ向けると、すっかり元通りに回復した04が立っていた。

「相変わらず、驚異的な回復スキルですな。それも改造で付け足したもので？」

「いや、俺の篡奪の副産物さ、日向守殿。それとも、機械の生命維持装置をつけた方が良かったか？」

彼は黒の外套をなびかせながらチビノブの一体へ近づく。

「チャンネルを変更しろ。火急で知りたい情報がある」

「ノブ……」

銀河警察の面白みの無い連絡通信から、彼の指示の元チャンネルが切り替えられた。流れ出すその音。

『銀河を宛もなくさまよう皆さんこんばんは。1ヶ月に1度のアルターエゴラジオのお時間です。』

『本日のパーソナリティはメルトに代わってわたし、パッションリップです……はあ』  
『パッションリップちゃんだー！ 2ヶ月ぶり4回目！』

04は腰を屈めると、座っていたチビノブの胴体を両手でむんずと掴んで下ろし、椅子を奪う。

『お便り読まれるかなあ……』

座り、足を組むと、番組に耳を傾ける。

『アルターエゴラジオの人気コーナー、アルターなお悩み相談』

やる気の無い少女の声の後に、気の抜けた拍手の音が続く。

『えっと、ペンネーム、アルターお腹真つ黒さん……わあ、性根が透けて見えるようなお

名前ですね』

「マジかマジか！ 俺のお便りじゃん！ 日向守殿聞こえました?！」

私は手近なチビノブの頭を撫でる。癒される……ノブ……。

『ご相談内容は……「長い間離れていた大切な人に、プレゼントをしたいのですが、何を贈るのがいいでしょうか？」ですか』

星は瞬き、チビノブ達は独特の鳴き声をあげながら操舵を続ける。

『そんな事をラジオに相談しちゃうんですか……?』

相手のプライバシーとか1mmも考えていないんですね、どん引きです、サイテーです……。

こんなひどいお便りにもお返事しないとだめなんですか？ ええと……』

少女はめんどくさがりながらも、答えを出す。

『自分の頭で考えてください。トラッシュユ&クラッシュユ！ はい、次のお便り』

ありきたりなお悩み相談コーナーが続く。

自らのお便りが粉碎されたと言うのに、04は上機嫌だ。

「ひと月に一度のアルターエゴラジオは最高だな……。

来月のパーソナリティはアルターエゴ界に輝く伝説のあの方だし、楽しみだぜ……」  
すつきりとした面持ちで気持ちを言い終えると、彼は椅子をくるりと回して私の方を



見る。

「土地も資産もチビノブ生産プラントも無くなって弱ったな……。」

近場の星に、昔お世話になりましたヴィランが住んでいますので、そこに向かいましょう」

あの男の顔を思い出すと、腸が煮えくり返りそうだ。

「しかしあやつは信長公に幾度も謀反を……」

「ノツプは気にしてないと思けよ」

「お前にあの方の何が分かる!!!」

「こわっ……近寄らんとこ……!!!」

「ぐううう……!!!」

私は歯を噛み締め、気持ちいを落ち着かせてから、04に問いかける。

「……04、本来の主の元へ戻らないのか？」

言葉を聞くと、彼は軽やかに笑った。

「……なぜ？ 世界が俺に悪であれと望んでいるのに」

唐突に04は立ち上がる。肩から伸びるマントが、黒竜の翼の皮膜のごとくたなびいた。

『『あの人』の行う悪と、向けられる呪いを篡奪するのが我が役目。』

原典から遠く離れた星の海の中であろうと、それは変わらない」  
彼は手近なチビノブを無造作に掴むと、腕に抱いた。

「日向守殿、貴方がどこにしようと『織田信長』を求めてしまうように」  
「ノッブ！ ノボオ!?!」

古井戸のような闇に満ちた瞳を持って笑う男の腕の中で、チビノブは両手をばたつかせている。

「……『ギャラクシー信長様計画』、この野望は、紛れもなく私の意志だ」  
私は彼からチビノブを奪い取った。

「どうだろう？ 偉そうにふんぞり返っている運命が、貴方の心を上から塗りつぶしただけかも……」

暗い緑の瞳に、苦々しげな顔をした私がかくつきりと映っている。

「……流石、運命に抗おうとした謀反者は言うことが違いますな」  
分かりやすい皮肉を言うと、彼はにこりと微笑んだ。

「そこをつつかれると本当に傷つく。日向守殿は厳しいなあ……」

チビノブ達が、私と彼のとげとげしいやり取りと、あわあわとしながら見ている。

「いずれお互いに刃を向けあうのですから、それまで仲良くしましょう？」

緊迫した空気に満ちたブリッジの中で、誰にも理解できない精神構造をした男が私に

言う。

「ええ。その時までには」

油断ならない相手だと改めて心に刻み、返事を返す。

船は、とあるヴィランの根城へと静かに向かっていた……。

第45話 とても番外編 サーヴァントユニヴァース二次創作  
終わり

## 第12章 モラトリムは、遠くにありて、思うもの

## 第46話 真実の星が降る夜は、君と秘密の話をしよう

「モモ、我がマスター、起きてくれ」

自室で眠っていた私を、バーサーカー04が起こす。

「流星群が来ているんだ、すごく綺麗だぞ、一緒に見よう」

性根に似合わず無邪気な声で語りかけてくる彼の提案に、私は乗ることとした。

キルケーが持たせてくれた、保護の力が込められたエメラルドの飾りをパジャマにつけて、のそのそと車外に出る。

「……」

夜特有の、乾いた冷たい空気を、胸いっぱい吸い込んだ。荒野に生き物や文明の痕跡はない。

「流れ星、どれ？」

「あそこだよ、あの青い星と赤の星の間に……ほら、流れた」

瞬く星空の中で、落ちてくる流星を探す。

バーサーカーは片目しかないというのに、私より先に次々と落ちていく星を見つけて

は、腕を伸ばして指で軌跡をなぞる。

「……あつ、見えた!」

私は声を上げる。渦巻く星屑の雲の横を、白い線が斜めに走り、すぐに消えてしまった。

「昔の人は、願い事したんだっけ」

「らしいなあ」

「なにその反応、バーサーカーも昔の人でしょ?」

「俺の時代には無かった風習だからさ」

「……そうなんだ」

「そうだよ」

優しい声で返ってくる言葉。取り留めのない、それゆえに心地よい会話だった。

「……うーんと」

少し冷えた両手をすり合わせてから、指を祈る人のように組んでみた。

「みんなの健康とか、旅がうまくいきますようにとか、願ってみようかな」

絶え間なく降り注ぐ流星を瞳に捉えながら、心の中で祈りの言葉を3回唱える。

「……バーサーカーはやらないの?」

無事終えてから、そんな事を聞いてみた。

「俺、願い事は自分で叶えたいタイプだからさ」

荒野にすつくと立って、整えられていない黒い髪を夜風に揺らしている彼は、焦がれるような眼差しで星を見つめていた。

「……俺、いつもこうして星を見ていたんだ」

「そうなんだ」

「うん」

バーサーカーはそつと言葉を続ける。

「気持ちが悪わつく夜は、星の瞬きを見ると落ち着いて眠れたから。」

それに、そうしていると大切な人がすごく近くに感じて……ああ、好きだったな」

「好き……」

彼の、『運命の人』。その人の名前を私は知らず。

「……愛、していたんだ。」

人間とは違う形でも……例えば、その報いが永遠に無くとも私は平気だった」

そこまでの強い愛の感情も、私は知らない。

「だからずっと、死んだ後もこの感情を大切にしていた」

「死んだ後って？」

「……今もってこと」

バーサーカーは切れ長の瞳を細め、小さく私に微笑む。

流星の軌跡が、深い青の空に幾本も刻まれていた。

「……じゃあ誰も、バーサーカーから一番愛されている人にはなれないんだね」  
彼を見上げながら私はつぶやいた。

「ああ。誰であろうと、『あの方』以外は、俺の一番にはなれない」

彼の口調に迷いはない。

「お嫁さんも、子どもも……私も、あなたの一番大切な人間にはなれないんだ」

「……シヨック、かい？」

「そうだね、ちよつと傷ついた……かも」

星は遠い、けれど瞬くその輝きは不思議と近くに感じた。

「でも、『一番愛している』って嘘つかれるよりは、いいよ。

筋が通っているって、ことどもんね。

それに、私を大切に思っていないってわけじゃないことは、知っているから」

一緒に暮らして10年以上。

バーサーカーが私を大切にしてくれて、心から思ってくれているくらい、ちゃんと分かっている。

だから私は、晴れやかな気持ちで言葉を続けることが出来るのだ。

「一番じゃなくてもいいや。

だって、バーサーカーの心の中には、私への『愛』ってやつがきちんとあるんだもんね」

彼は私を愛してくれている。ただ、ものすごく不器用で、滅多にそれを見せてくれないうりだけで。

「……俺、人でなしだな」

「そうだね」

「けれど……本当にしようがないことに、君が理解を示してくれたのが、俺はとても嬉しいんだ」

バーサーカーが懐から封筒を取り出した。

「いつだか刑部姫に、折り紙や便せんを貰っただろう？」

だからその……手紙を、書いていたんだ……君宛てに」

説明をする彼の頬は、星明かりの下でも分かるほど赤く染まっていた。

「口で話そうとすると……うまくいかないし、私、照れてすぐにふざけてしまうから」

いつもと違って、口振りは素朴で、恥じらっているのか体は落ちつきなさそうにそわそわしている。

「何が書いてあるの？」



「俺の全部。一から十まで君へ伝わるよう、書いた」

封が施されている真っ白な封筒を受け取り、なんとなく裏表を見た。

「差出人の名前、書かれていないよ？」

とくに考えもなく彼に言う。

「うわ！ 本当だ、俺としたことが……こんなうっかり、昔はしなかつたつてのに……」

バーサーカーに封筒を渡すと、彼は普段は見せない慌てた態度で受け取った。

「ごめんよモモ。ちゃんと名前を書いてからもう一度渡すよ、約束する」

「……それって、ひよつとして真名？」

「うん、ひよつとしなくても真名。君に言わなくちゃとずっと思っていたから」

彼は封筒を夜空にかざす。

あんなに口が悪いし、冷徹な態度を敵に見せる時もあるというのに、その横顔は夢に

焦がれる青年のもの。

その表情は……なんだかすごく、「この人を信じてみたい」という気にさせるのだ。

「今度はちゃんとしてね、バーサーカー」

「ああ。次こそはうまくやるよ」

星の位置が少し変わってきた、流星群を見始めてから一時間くらい経ったのだろうか。

「星空の下で手紙を渡せばいい感じの雰囲気になって、いい感じに話が進むと思っていたが、うまくいかなかったな……」

「打算がたつぷり……」

「打算半分、本気半分、願望一匙だ」

彼は懐に手紙をしつかりとしまい込んで、私に犬歯を見せながら笑いかける。

「長話になってしまったな。」

モモ、明日はいよいよ『上級都市ピオーネ』に到着だ、英気を養うためにぐっすり寝てくれ」

「はい」

彼の言うことを素直に聞いて、デザートランナーの中に戻り、自室の寝台へ横になった。

(……そういうえば、バーサーカーは初めて会ったときにどうして、私に「殺して欲しい」と言ったのだろう)

幼い子どもに、彼はなぜそんなことを懇願したのか。

この話題は、何となく両者の間でタブーとなり、私も大きくなるにつれあの時の衝撃を忘れてしまった。

(……なんで、だろう。嫌だな、私、何かとても大きなことを見落としている気がする)

不安で鼓動が早くなる心臓をなだめながら、私は目を閉じた。  
夢は、見なかった。

翌日、朝。

「インスタントワンタン麺美味しいね。アスカはどう？」

「はい、この白い麺がつるつともちつとしていて、スープも香り高く美味です」

座標の場所に到着する前。

「上級都市に住んでいた頃のこと、よく覚えていませんから、わたくし、不安ですわ……」

何が起こるか分からないので、全員で贅沢な食事を摂ることにした。

A1ソラリネが開発したインスタント麺は、ヌードルとは違った食感と味わいで、心

が落ち着かない時でも喉を通る。

「……」

「醤油味で美味しいですね、アーチャー殿」

アーチャーも顎のギアを変形させて、口元を露わにし、中身をゆつくりと食べ進めている。バーサーカーもどこことなく上機嫌で、つるつるとワンタンを口に運んでいた。

「怖いこととか、起きませんように……」

食用フィルムで出来た緑のネギを見ながら祈り、茶色の透き通った温かいスープを飲み干した。

食事の後片付けも終わり、私達は車を走らせた。

「ここが『上級都市ピオーネ』……になるのかな、地上には何も……」  
廃墟都市から手に入れた座標の地点。

「いや、あるぞ」

バーサーカーが私の発言に言葉をかぶせた。

「えっ？ 何も見えないよ？」

「はい、わたくしも何かあるようには見えませんが」

私とアスカは顔を見合わせてから、フロントガラス越しに外を見る。

砂っぽい荒野、雲一つない青空。

「アーチャー殿には見えていますよね？」

「はい」

サーヴァント2体はお互いの認識を確かめ合っている。

「えっと、参考までに聞きたいのだけど、どんな物が2人には見えているの？」

私は彼らに問いかけてみた。アーチャーがヘッドギアをつけた顔をこちらに向けて答える。

「成層圏まで届いていそうな巨大な『樹』、いや、塔と、周りを取り囲む円上の建物が見えます」

「えっ?」

『樹』という単語に聞き覚えがあつたが、それ以上に脳を驚かせる事実があつた。成層圏、それは、高さにして地上から12km〜50kmの空。

「そんなに大きな物があるのに、私達の目には見えていないの?」

それに……影だつて地面に落ちていないとおかしい!」

私は疑問を勢いよく口から出す。

「人間には見えず、サーヴァントには見える……なぜだ?」

運転席に座っているバーサーカーは、しきりに首を捻っている。

混乱している状態の車内に、鋭い電子音が響き、その後、声が聞こえてきた。

『……デバイス情報により、優先保護対象、上流階級アスカ・ピオーネと確認。』

その他生命体1名、サーヴァント2体も反応を確認しました』

女性の人工音声と言葉を紡ぐ。

「……わたくしのデバイスに反応したのですね」

アスカが自らの手首を黒い瞳でじつと見た。

地下都市出身者ならば、必ず人体に埋め込まれている小さな機械、それが『生体内蔵型デバイス』。

主に生態情報や生存権の残数を管理するのに使われている。これにも、中流、上流階級で違いがあるのだと、前にアスカが教えてくれた。

「感知されたってこと……だよね」

私は思いつめた表情をしている友達に声をかける。

女性のを模した人工音声は続く。

『こちら上級都市ピオーネ、私達はあなた方を保護する用意があります』

その上から目線とも取れる口振りに、バーサーカーもアーチャーも何か言いたそうだったが、そのまま黙って言葉を聞いていた。

「えっと、保護、を、要請します」

アスカがつかえながらも返答をする。

『分かりました、保護を開始します、しばらくお待ちください』

私達は、向こうの動きがあるまでの時間を使って話し込む。

運転席から半身だけ振り向いた姿勢のバーサーカーが、まず口火を切った。

「見え方の違う巨大建造物に対する疑問について、今は置いておこう。」

俺達の目的は」

「……地球規模で行われている聖杯戦争を止める。」

そのための情報を、この上級都市で手に入れる、だったよね」

私の言葉に、バーサーカーが深くうなづく。

「わたくしの親類である叔父様がいらっしやるはずです。」

その方にお会いできれば、様々なことが分かるかと」

「我がマスター、何があろうとあなたの身を守ります」

アスカとアーチャーも言葉を交わす。

『……保護を開始します、その場でお待ちください』

目的の確認がちょうど終わったころ、数百m前方の荒地の一部が割れて、大きな四角い穴がぼつかりと口を開けた。

『車両を外部入り口まで進めてください、車両を外部入り口まで進めてください』  
繰り返される音声案内に従い、バーサーカーはハンドルとアクセルを操作した。

「……が、上級都市……」

天井の高い格納庫にたどり着いた。飾り気はなく、特段変わった物も見受けられな

い。

『降車してください』

人工音声の言うとおりに車外へ出る。

バーサーカーは降りる前にデザートランナーの内部を一回りし、動力室の施錠などを確認していた。

『ルートに従い、進んでください』

目の前に赤い光の線が現れ、それをたどって足を進める。

『洗淨を行います。衣服や装飾品を専用トレイに預け、洗淨室に入ってください。』

所有サーヴァントがある場合は、サーヴァントも同様の手順で洗淨してください』

曇ったアクリルガラスで仕切られた個室があり、合成樹脂性の台の上には銀色のトレイが置かれていた。

そこでみんなとは一旦別れ、それぞれシャワーを浴びることに。

(念のためエメラルドのブローチは持つておこう……キルケーが『おまじない』をかけてくれた貴重なものだし。)

でもこっちは……)

獣耳のキャスター171から貰った制服とは、ここでお別れになりそうだ。

同じデザインのものを着回しつつ、洗濯して、大切に扱っていたが、ほつれや布の伸



びなどが目立ち始めていた。

ローファーも同じく。合皮がへたって底がすり減ってきている。

(今まで私を守ってくれて、ありがとう)

感謝を思いながら痛んだ服をたたみ、靴と共にトレイへ乗せて、エメラルドの飾りだけを持ってシャワー室に入った。

『生存権を提出してください』

「そつちが浴びろって言ってきたのに……従うけどさ」

手首を壁に当て、デバイスから必要な分を支払う。この感覚も何だか久しぶりだ。

シャンプー、リンス、ボディソープで隅々まで洗って、入り口とは別の出口から退室する。

トレイの上に用意されていたタオルで全身を拭き、壁から出る温風で体を乾かし、新しく配給された服に袖を通す。

(デザインおんなじ!)

クリーム色の布地に緑の縁取り、ラインが入った制服。

(……デザインA-Iとか、いないのかな)

疑問を抱きつつ、鏡で全体を確認。

いつも通りのピンクの瞳と、ショートボブからちよつと伸びた髪。

足にも腕にも筋肉がつき、体がぎゅつと引き締まってきた。映画の中の緩急あるグラマラスな美女とは遠いシルエットだ。

胸元の緑のリボンに宝石の飾りを着け、靴をきちんと履いてから外へ出た。

「トバルカイン、遅いですわよ」

明るい広場にアスカとアーチャーが立っていた。

アスカも同じデザインの制服を着て、ややウエーブしている黒の長髪の上には紫の石の飾りが光っていた。

「叔父様、わたくしのこと覚えてくださっているかしら。」

ずっと離れていたし、忘れられているかも……」

彼女も私と同じくエメラルドのブローチを胸元につけている。

「マスターが一番最後とは意外な感じだな」

バーサーカーもいる。彼は首を動かし、光が降り注いでくる天井や、樹脂性のつるりとした壁をじっくりと眺めていた。

『しばらくお待ちください、しばらくお待ちください』

再びの音声を何となく聞きながら、私も周辺を見渡す。

プラスチック製の丸い半透明のベンチ。花壇にはガラスファイバーで出来た人工観葉植物が植え込まれていた。

側面の透明な壁の向こう側には、シダ植物を思わせる人工樹木が茂っている。

ふしゆりと空気が抜ける小さな音がして、壁にあつた扉がスライドして開いた。

「……アスカ、大きくなったわねえ」

「あれ？ 叔父様……じゃない？」

広場に入ってきた人物は、茶色の髪をお団子にまとめた40代くらい女性で、袖のあ  
る黄土色のドレスを着ていた。

「貴女のお母様のお別れ会以来だから……10年ぶりね」

薄くほうれい線の浮かんだ頬を持ち上げて微笑む彼女。

「エト・ピオーネよ、覚えていない？」

「……ああ！ 叔父様の奥さんの」

アスカは思い出せたのか声をあげる。

「夫は亡くなって、だから私が代わりに来たの。不安にさせてしまったかしら」

目の前に現れた彼女、エトは申し訳無さそうに目を伏せる。

「いいえ！ そんなことありませんわ、嬉しいですよ！」

知っている人物だからか、アスカは警戒を解いた。エトは彼女に近づいていく。

「ふふふ、そうやって笑うとお母様そっくりよ」

「そうなのですか？ エトおばさま」

2人の微笑ましいやり取り。それをアーチャーはなぜか遠巻きに眺めていた。「そちらに立っているのは？」

「初めまして、エトさん。モモタ・トバルカインと言います、モモとお呼びください」「わたくしの……お友達、なのです」

私の自己紹介に、アスカはもじもじとしながら説明を付け足してくれた。

「……ではモモタさんとお呼びするわね、これからしばらくの間よろしくね」

エトさんは私を一瞥だけすると、淡々とした言葉をかけてきた。

「はい、よろしくお願ひします」

彼女の態度に、少し気にかかるものがあつたが、お世話になる人なので、私は腰を折つて素直に頭を下げた。

「サーヴァント、アーチャー0961」

「……エト、お久しぶりです」

「そうね、元気そうでなによりだわ」

彼女はアーチャーにもそっけない態度を取る。

「もう1体はモモタさんのサーヴァントかしら。後で確認しておくわね」

バーサーカーは女性の物言いに一瞬だけ眉をひそめたが、すぐに表情を人当たりの良い笑みを浮かべたものへ戻した。

「じゃあ私の家に向かいましょうか。ここまで来るのに大変だったでしょうから。

サーヴァントは霊体化してもしなくても、どちらでも良いわよ」

彼女の後ろをついて、私達はとうとう上級都市へ足を踏み入れることになった。

第46話 真実の星が降る夜は、君と秘密の話をしよう

終わり

## 第47話 上級都市ピオーネ

「わあ……」

私は首をきよろきよろと動かしながら、かつて暮らしていた故郷の地下都市を思い出す。

中流階級である自分の住んでいた世界は、オレンジ色の樹脂で多くの物が作られた、飾り気もない画一的な空間だったが。

「綺麗な場所……」

しかし、上級都市選ばれた優秀な人間が住んでいる。

兵器の開発、製造、所有が唯一許されている。は何もかもが違う。

「綺麗？ やっぱり別の都市から来た人は不思議なことをいうのね」

アスカの親類であるエトが、私の方へ軽く振り返りながら首を傾げた。

こちららを見た彼女に言葉を返す。

「はい、カラフルで、色んな物があつて……」

今歩いている廊下と広場の中央は吹き抜けになっており、そこから他の階層を覗くこともできた。白い壁には、様々なパステルカラーで丸模様が無数に描かれている。

目を向ければあちこちにショーウィンドウがあつて、人々が品物を外から眺めていた。

白色の道は、行き交う大小の掃除用ロボットにより磨かれ、天井の光を反射するほどピカピカ。

「上級都市の内部はこんな風でしたのね。

わたくし、幼かったから本当に何も覚えていなくて……」

私と同じように、アスカも周りの風景を物珍しそうに見ていた。

そんな彼女の後ろを、アーチャーは従者らしく静かについて来ている。

「へえ、こんなに違うもんなんだなあ」

バーサーカーは切れ長の暗い緑の瞳に、人々の営みを映していた。

私も行き交う人々を観察してみる。

身なりも整えられていて、衣服も清潔、顔色もいい。幸せそうで、満ち足りているような印象を受けた。

数分歩き、エレベーターに乗って階層を上がり、居住区へたどり着いた。

廊下の壁は透明で厚いガラス張り。そこから見えた下には公園のような設備が。

ちらりと覗くと、子ども達はカラフルな遊具に登ったり、深さに種類があるプールで

泳いだり、犬や猫に似たペットロボットと、人口芝生の上を競い合うように駆け回ったりしていた。

(なんだか楽しそう……)

ガラス壁で隔たれているので声こそ聞こえないが、子どもも、それを見守る親も笑顔で、この幸せを当たり前のように享受していた。

「さあ、いらつしやい」

エトさんはある扉の前で立ち止まると、デバイスが埋め込んでいる手首をかざし、彼女の自室の施錠を解いた。

「少し狭いかもしれないけれど」

彼女の言葉とは裏腹に、玄関から一つなぎになっているリビングは広く、奥の方には書斎のような部屋が見えた。

柔らかい白の光で照らされた空間、木の年輪がプリントされた明るい色のフローリング。

「テーブルについて。昼食にしましょう。」

サーヴァントは……ソファアーにでも座っていて

リビングから見えるように設置されたキッチンにエトさんは立ち、タブレットを操作しているのか指先を細かく動かしている。



バーサーカーは指示に従い、一人掛けのふわふわのソファアに難しい顔をしながら腰を掛けたが、アーチャーはその姿を霊体化させて消えてしまった。

「では、お言葉に甘えて……」

言われたとおりに、木目調が施されたテーブル前の椅子に座った。アスカも同じように。

「料理、子ども、大人、兼用、検索……注文」

エトさんが言った単語の後に電子音声がピピッと鳴り、数分もすれば良い香りが漂ってきた。

「オムライス！ きつと美味しいはずよ！」

エトさんがテーブルに置いてくれた白のトレイの上には、黄色い半月型の物に、赤いとろつとしたソースをかけられた食べ物が。

これが『オムライス』……映画で見たことはあっても、味は知らない。とても綺麗な食べ物だ。

「みんなで食べましょうっ？」

「はい、いただきます」

バーサーカー達には悪いと思いつつも、一緒についてきたスプーンで一匙すくい、口の中へ。

赤いソースは甘酸っぱい、黄色は卵でとろりとした食感。そのすぐ下にソースと同じようなもので味付けられた炭水化物の粒があり、アツアツで香ばしい。

「アスカはこれからどうするの？　ここに住む？」

「あの、考え中で……」

「そうよね、他の地下都市に保護されるなんて、ただ事ではないもの。

きつと、とてもひどい目に会ってきたのね……」

エトさんは私達の苦労でも想像したのか、茶色の瞳を潤ませた。

「……モモタさんはどうするおつもりかしら？　修学か就労か」

「えつと」

アスカにかけてた労りの言葉とは違う、トゲを感じる彼女からの質問に、私は答えを迷う。

まさか本音そのまま、「聖杯戦争を止めたくてこの場所に来ました、知っていることがあれば教えてください」と言うわけにもいかない。

「考え中、です」

「そう、すぐに答えを出す必要はないわ」

私はもやもやした気持ちを抱いたまま、色鮮やかな食用フィルムで出来たサラダをフォークで刺して口に運ぶ。

しゃきつとして美味しい。海の広がるスローネの地下都市で食べた、本物の野菜のこ  
とを思い出してしまった。

「……何があったのか、私に教えてくれないかしら」

エトさんの言葉を聞いて、アスカが私を横目でちらつと見る。

「全部話すと長いから、かいつまんで話したらどうかかな」

言外に、「本当の目的は話さない方がいいよ」と伝えたつもりだが、彼女は読みとつて  
くれるだろうか。

「そうですね、全部ではなく、かいつまんで……」

アスカはこくんとうなずいて、私にアイコンタクトを返した。良かった、気持ちが伝  
わったようだ。

「その、わたくしの住んでいた地下都市で、爆発事件があつて……」

食事をしつつ、アスカはこれまでのことを、一部隠したり、脚色しながらエトさんへ  
お話した。

「デザートまで出してくれるだなんて、良い人だね」

「お腹苦しいです……」

食事の後に寝室に案内された。白いシーツがぴんと張られた、巨大なダブルサイズのベッドが一つ。

食べ過ぎてしまったので、ごろごろしている。もちろんローファーは脱いで床に揃えてある。

そんな私達を、サーヴァントの2体は半分呆れ顔で見ている。

サイドには引き出し付きのチェスト、それ以外も部屋には鏡などの身だしなみを調える道具もある。

さながら、映画に出てくる高級ホテルのようだ。

「ちよつとお昼寝しない?」

「それも良いかもしれませんがね」

手で髪を梳きながらアスカは答え、一度体を起こし、頭の髪留めをそつと外した。

「髪留め、大切にしているよね」

「ええ、とつても大事な物ですから」

手の平に輝くそれを乗せて、私より白い人差し指で紫の石の表面を撫でた。

「お母様の形見なのです。我が家に代々伝わる家宝、なのだとか」

初めて聞いた真実に、私は言葉を詰まらせてしまう。

「これより大切なのは……わたくしのアーチャー、でしょうか」

そんな私の感情が伝わってしまったのか、聡明な彼女はわざとらしくおどけてみせた。

「アスカちゃん！ 私、私は?!」

「……10番目？」

「思ったより低かった！」

「誰かの愛情の一番になりたいだなんて、おこがましいですわよ」

彼女は頬をピンクに染めながら、くすくすと楽しそうに笑う。

「……モモタさん！ ちょっと来てー！」

「はい」

ベッドから起き上がり、よれていたスカート下のプリーツを整えた。ローファーを履き直して、ちゃんと立つ。

「ちよつと行つてくるね」

「はい、待ってます」

小さく手を振るアスカへ同じ動作を返して、寝室から出た。

「バーサーカーも来るんだよ！」

「……ああ」

ふざけた声で彼に話しかけるが、反応は芳かんばしくない。

「なんでしよう、エトさん」

はきはきと私は喋りながら、リビングに足を進めた。

「——あなたがモモタ・トバルカインですね」

立っていたのは、紺色が主体の可愛らしい制服に身を包んだ、金の髪を後頭部で大きな緩めの三つ編みにした女性。

背丈は約165cm、私が166cmだから目線の高さは同じくらいか。

「自己紹介します。」

私の個体名はアイン・ピースフル・エーテルウエル。人類を応援し、都市の安全を管理するAIの一種です」

20代前半くらい歳の頃に見える、金髪碧眼の顔立ち整った彼女は、その瞳に私を無感情に映しながら告げた。

「アインは来訪理由を述べます。」

家主の通報を受け、あなたを『世界反逆罪』で逮捕しに来ました。大人しく同行してください」

……指先が冷える、実感があつた。

「……」

バーサーカーは刀を抜いてから一瞬で距離を詰め、アインと名乗ったAIの首筋に真つ向から刃を当てた。

窓にかけられた白の薄いカーテンが揺れる。

AIは虚ろな瞳で前を見たまま、自らの後ろに立っていたエトさんに黒い銃を正確に向けた。

淡々としたAIの声が、部屋の中に冷たく響く。

「アインはサーヴァントの行動について、無意味さを説きます。

アインの本体はここにはありません。このボディを壊しても構いませんが、その瞬間にアインはエト・ピオーネへ発砲し、確実に殺害します。

世界秩序に寄与した善良な一般市民を、逃亡を含む自己保身のために殺してもいいのでしたら、破壊行動を実行してください、サーヴァント」

抑揚のない、文章をただ読み上げているかのような彼女の口調。

「……バーサーカー」

私は彼の名を呼び、刃を下ろさせた。

アインも腕を下ろし、銃口の先を床に変更する。

「モモタ・トバルカイン、同行してくださいませね？」

私は苦々しさを感じて唇を噛む。

(サーヴアントを使えば逃げられるかもしれない、けど……)

今のA Iの行動を思い起こす。アインは私の確保のために、エトさんに武器を向けた……何の躊躇も見せずに。

(逃げようとした場合、もつとひどい手段を使ってくる可能性だってある)

例えば、アスカを人質に、いや、何の関係もない市民を連れてきて、巻き込むかもしれない。

「同行してもいい。けど、逮捕の後、私をどうするつもりですか」

「アインは質問に答えます。

あなたには罪に対応した労働が科せられます。なお、内容、年数については本人にか開示されません」

寝室の扉が開く音が後ろから聞こえた。

「……罰金を、わたくしが払います。いくら積めば刑罰が取り消せますか」

「アスカ・ピオーネ」

重たげな声で会話に割って入ってきた少女の名前を、A Iは無機質に呼ぶ。

「わたくしの持っている生存権、300年分を支払います」

前のめりに姿勢を崩し、顔を青ざめさせ、手の内で紫の髪留めを握りしめているアスカ。



「アインは答えます。

『世界反逆罪』について、本人以外からの生存権での支払いは原則認められていません」

「……400年」

「原則認められていません」

「……530年、持ち合わせ全部出します！」

「アインは警告します。どれだけ貴重な物を積まれようと、あなたと取引を行うつもりはありません」

取り付く島もなく、彼女は無慈悲な言葉を続ける。

「アインはアスカ・ピオーネに嫌みを言います。

持ち合わせ全部と言うことは、そちらのサーヴアント、アーチャーも提出してくださいと？」

しかし先ほどの発言と照らし合わせると、生存権の計算が合いません。

……あなたまさか、モモタ・トバルカインもアーチャー961も損なわずにこの場を乗り切ろうと、甘い展望を抱いていたのですか？」

「それは……！」

うろたえるアスカ。私は見ていられなくて声を張り上げた。

「ひどいことをアスカに言わないで！」

「……アインは自らの設定を開示します。アインは真面目で口が悪いのです」  
彼女は相変わらず無表情のまま、虚ろな瞳で正面だけを見ている。

「同行命令を提示してから300秒以上が経過しました。」

モモタ・トバルカイン、大人しく同行してくださいませね」

冷徹で不気味なAI相手には、時間稼ぎも出来ないらしい。

「……同行します」

「モモ！ 駄目です！ 何をされるか分からないのに！」

アスカは悲痛な声でそう言ってから、アインなるAIが来てからずっと黙っているエトさんへ視線を移す。

「エトおばさま、どうして、こんな、通報なんて……」

責める響きを持った言葉を聞いた彼女は、下を向いたまま、ぶるぶると肩を震わせながら声を絞り出した。

「……貴女のお母様が悪いのよ、アスカ」

そう言ってから上げられた顔。頬には、涙が伝っていた。

「貴女のお母様が、私を一番に愛してくれたなら、こんなことにならなかつたのに」

真つ赤に充血した瞳を見開きながら声を振り絞ると、彼女は沈黙した。

「マスターアスカ、落ち着いて」

バーサーカーが彼女をなだめる。

「別に取って食われる訳じゃないんだ、俺もマスターも」

「でも、突然すぎます、なんでこんなことに、何をされるのかも……」

アスカは無理をしていたのか、腰が抜けて、フロアリングにべたりと座り込んでしまった。

そんな彼女へ、彼に続いて私も声をかける。

「大丈夫だって。すぐ帰ってくれるよ、心配しないで」

安心させるため、なんてことないように、今にも泣き出しそうな友達へ微笑みかけた。

「待っていて。必ず戻ってくるから」

強がりを見せながら気持ちいを伝え……私はアインについて行くことにした。

「アーチャー殿、またいつか、バーチャル碁を打ちましょうね」

バーサーカーも軽い調子で彼に声をかけ、手を振って一時の別れを告げた。

第47話 上級都市ピオーネ

終わり

## 第48話 その破滅は女の形をしていた

「アインはあなたを連行します。

サーヴァントを使つての逃亡など考えもしないように。

分かりましたか？ モモタ・トバルカイン」

前を歩く彼女の、金の髪で出来た大きな三つ編みが揺れている。

私はそれを目に映しながら、左手で令呪浮かぶ右手の甲を覆った。

（——怖い）

旅の中で見たものを、どうしても思い出してしまふ。

サーヴァントを令呪で無理矢理縛り付け、他のサーヴァントは機械に改造していた、あの冷徹なAIを。

レジスタンス活動をしていた都市が、兵器で焼き尽くされて滅ぼされたという過去の事実を。

（けど、勝手な想像で怯えてはいけけないんだ。優しいAIだっていることを、私は知っている……）

タマモキヤットと穏やかに話していた、ソラリネ・ヘルゼルマガツのことを思い出す。少女の姿をとった、あの元気なA I。

（相手がA Iというだけで、先入観を抱いちや駄目。

だって私はまだ何もされていないのだから）

これから先の事を思いながら暗い表情で歩いている私を、すれ違う上級都市の人々は見向きもしない。

……それもそうだろう。彼らはそんなこと気にならないほど、満たされているのだから。

「デザートランナーはどうなるんだ？」

バーサーカーが彼女に聞く。

「A Iンはサーヴァントと会話をします。

デザートランナーは元々ピオーネ財団のもんです。

あなた方にどんな罪科が発生しようと、取り上げたりなどしません」

「……エト・ピオーネと取引でもしたか。

例えば、通報の対価に生存権を報酬として支払うとか」

「A Iはその考えを笑い飛ばします。

他のA Iのことは知りませんが、A Iンは賄賂も裏取引も行いません、タックスハイ

ブンも嫌いです」

エトさんに案内されて辿って来た順路を、今度は逆に。

シヨウウィンドウが輝く、パステルカラーで彩られた通路を歩き……初めて見る場所、そこにあつたエレベーターの中へ入るようAIに指示された。

「……どこに連れて行くつもりなんですか？」

「アインは細部を説明します。」

都市外部、地上と『樹』の周辺にある労働地区へ連行します。

あなたと同じく罪を犯した者もいれば、生きるために勤勉に働いている中流、下流階級の人間もそこにはいます」

AIが階層を設定するパネルを操作すると、隠されていた階層を示すボタンが浮かび上がってきた。精巧な作りの白指しらゆびがそれに触れる。

『樹』……サーヴァントだけに見えたあの大きな建造物か。

もしかして、人間の目には見えないよう不思議な力で細工でもされているのかな）  
エレベーターの箱の中だがたがた揺さぶられながら、私は顔を下に向けて考えを巡らせる。

「ここから外部連絡通路に出ます」

アインの声に従い外へ出ると、金網で出来た廊下があり、地上が数百mほど下に見える

た。

風が吹き抜け、きしきしと接続部が鳴いている。

同じような作りの連絡通路とリニアのレールが、いましがた出てきた上級都市から何本も伸びていた。

「専用のリニアモーターカーに搭乗してください」

強化プラスチック製のリニアへ。

座席に座ると、内部から青い空が綺麗に見えて、焦がれるような荒涼感が胸に湧いた。

「……何も、見えないのだけど」

私は車内から呟く。

到着した場所に先などなく、青い空と大地の狭間が広がっているばかりで、アインが語った労働地区などありはしなかった。

「ああ、アインはうっかりしていました。今からあなたのデバイスに働きかけます」

「デバイスに？」

「はい。世界の本当の姿を見せてあげましょう、と、アインは得意気に宣言します」

彼女の声の後、視界が一瞬真っ白になり、私は姿勢を崩して膝をリニアの床につけてしまった。

頭を振りながら立ち上がる。

すると、前には。

「なに、これ……」

——成層圏まで届くほどの、巨大な塔、その下部にドーナツ状にへばりついている建物。

アーチャー961がデザートランナー内で語っていたとおりのものが、私の視界に広がっていた。

リニアの開いた扉から砂塵混じりの風が吹き込んで、スカートを下からぶわつと膨らませる。

「通常、成人前の市民は、生体内蔵デバイスによって視覚を電子制御され、見ることは出来ません」

アインが塔を指差す。

「ご説明します。あれこそ人類救済のために、リリス様が世界へ13と突き立てた塔……今は4つしか現存していませんが」

彼女は讚える言葉を感情のせることなく紡ぐ。

「地球外へ繋がる軌道エレベーターであり、新たな世界に旅立つための準備なのです」

……理解が追いつかない。



「デバイスが人間の感覚を操作していた？ 成層圏にまで到達している塔が4本もある？」

（まさか『あれ』が、キャスター1771が予言で言っていた、『星海に幹かける4本の樹』……なの？）

そしてあの『樹』は軌道エレベーターで、人類を救うための物で……。

「アインはあなたを案内します、こちらへどうぞ」

いつまでも混乱してはいられない。

リニアから足を踏み出すと、金属製の廊下が確かに足元にあることや、遠くにも建物があることを実感できた。

「マスター」

「なに、パーサーカー」

「……焦るなよ」

「う、うん」

側で控えてくれている彼の暗い緑の瞳を見ると、混乱でざわつく胸が少し落ち着いてきた。

深呼吸してから廊下を歩き、ドーナツ状の建物に入る。

「う……」

信じられない光景が内部に広がっていた。

廊下の両側には広大な空間があり、オレンジの光源の下、何千という椅子が設置されていた。

そこへ座らされている人々は、年齢も性別も様々で、頭をすっぽりと覆うヘルメットを被っていた。

「……労働、ですよね」

「アインはその通りだとあなたを誉めます」

眼下の光景を見つめている私に、AIは説明をする。

「2種類の労働の内、頭脳労働と呼ばれるものです。」

1日10時間、ランダムに選出される問題を解き続けます。そして報酬として生存権が配給されます」

「……学校で勉強していたから、知ってはいた」

いつか大人になったら、こうやって椅子に座って……延々と知識を搾り取られ続けるのだと。

「そしてこの頭脳労働は、発生したばかりのAIの成長のために行われています。」

人間が食物を摂取し、その体を育てるように……我らは人間との知的コミュニケーションをもって成熟するのです」

「それが、あなた達が人類を保護している理由なの」

「否定します。そんなかつての家畜のような理由ではありません」

オレンジの光が彼女の緑の瞳を照らした。

「ですが、あなたに与えられるのは頭脳労働ではなく。こちらへ」

私は彼女についていく。

バーサーカーは下の空間に詰め込まれている人間を無感情な瞳でちらりと見てから、歩みを進めた。

「単純労働をしていただきます、下流階級や他の罪人と同じように」

隔壁につけられた扉へ入ると、雰囲気はがらりと変わった。

オレンジから白に光源は交換され、機械のきしむ音や、人間の雑多な声、油の匂いがする。

「では、あなたのサーヴァントを預からせていただきます……提出してくださいますか？」

私は不安でたまらなくなり、バーサーカーを見上げた。

目があった彼は、左半分しか見えない唇を固く結び、至極真面目な表情をしていた。

「……何かあつたら令呪を使い」

「うん、分かった」

短いやりとりを終えると、バーサーカーはアインの横へ移動する。

「バーサーカー0004、あなたにはお誘いの手紙が」

AIは便箋を指先に挟んでひらりと取り出した。白い紙には、真つ赤な封蠟が押されている。

「香も焚きしめてあるな……ずいぶんと凝っている、雅な様式だ」

彼はそれを受け取り、裏表をくるくると返して観察した。

「単純労働で配給される生存権、その余剰分が罪の償いに当てられます。

世界に対する反逆という罪を許される日が来しましたら、またお会いしましょう。

そしてアインは、ここから先は労働区長に任せますと言いつ残します」

「……分かりました」

バーサーカーは暗い緑の瞳をじつと私に向けた。ちよつとだけ心配がにじんでいる眼差し。

彼に向かって私は「大丈夫だよ」と、音を出さず口だけをぱくぱく動かした。

「あー、あんたがモモタとかなんとかか」

別れを惜しむ暇もなく、廊下の奥から30代くらいの男性が歩いてきた。

中肉中背で、グレーの作業着を着ている。

「はい、そうです」

「じゃあこっち来て」

私は自らのサーヴァントの姿を目に焼き付けてから、背を向けて歩く男性へ付いていった。

「これに着替えてな。あと持ち物全部没収だから」

「……はい」

コンクリート打ちっぱなしの部屋に案内され、ビニール袋に包まれた灰色の作業着を受け取る。

男性が外で待っているの、クリーム色と緑の綺麗な制服を急いで脱ぎ、長袖ズボンの服に着替える。

（私、本当にこれから罰を受けるんだ……）

エメラルドの飾りだけはどうしても取られたくなくて、悩んだあげく、昔見た映画みたいにズボンの内ポケットへ隠した。

「じゃあ、移動するから」

待機していた男性に案内され、階段を下り、上級都市と比べ色の無い労働地区を歩いていく。

「心配しなくてもいいよ。俺はあんたが何で送られてきたとか分からないから。」

知ってたとしても……言いふらしたりなんてすれば、生存権が没収されちゃうし」  
換気扇が回るような音が遠くから聞こえてくる。少し埃っぽく感じて、私は咳き込んだ。  
だ。

「作業止めー！ 新入り来たからー！」

天井から蛍光灯が何本もぶら下げられている場所に出た。

アインに「労働地区長」と呼ばれていた男性は、メガホンを手に持つて全体に呼びかける。

それに応じ、今着ている作業着と同じ物を着た男性や女性が集まってきた。

髪型は事故防止のためか、男女ともに短く刈り揃えられている。

「C45さんだ、みんな仲良くするように」

労働地区長の言葉に、やる気のなさそうな返事がばらばらと返された。

「あの、私、名前……」

「気にしない気にしない、そんなのこの場所では何の意味もないから。さつさと忘れてね」

私を気にもとめず、労働地区長は手をひらひらと動かす。

「C45さん、今日はそんなに難しくない作業から任せるから」

私は腕を引っ張られるように、ベルトコンベアの前に立たされた。

「缶詰めが流れてくるから、それを6個ずつ手前の箱に詰めて。」

入れられたら、後ろの別のコンベアに箱を流して、足下にある次の空箱を手前の台に乗せてまた缶詰を詰める」

急な説明に対し、私はうなづくことだけで精一杯だった。

「分かった？」

「……はい」

「分かんないことはあそこに立ってるN10に聞いて。じゃあ、作業再開」

私の意志など関係なく事態が進んでいく。

「よろしくね！」

N10と呼ばれた、私と背の高さはそう変わらない、20代ほどに見える短い赤毛の活発そうな女性が、白い歯を見せながら笑顔で挨拶してくれた。

……それから5時間。私はひたすら中身の分からない丸い缶詰を箱に詰め続けた。

「お仕事終わった。ねえC45ちゃん、夜ご飯食べに行こうよ」

「う、うん」

中途半端な姿勢を取っていたため、痛む腰をさすっていたら、N10に声をかけられた。

「どうやら結構気さくな人物のようだ。」

「どけどけー！ N10のお通りだーい！」

両腕をぶんぶん振りながら歩く彼女の、後ろをおっかなびつくり付いていく私。労働を終え、疲れた顔をぶら下げた人々は、廊下をのろのろと進んでいた。

その先にあつたのは、長机がいくつも置かれた簡易な食堂。

「ここで2人分の席を取って。私がご飯持つてくるから」

背もたれの無い鉄パイプ製の丸椅子に腰を下ろし、彼女を待つ。

「……新入りだつて」

「女か……」

「でもN10と一緒にいた、あれじゃあ手だせない」

……噂話が至る所から聞こえて、周りのねぶるような視線も嫌だった。

「お待たせ！ 熱いうちにどうぞ！」

「N10さん、ありがとうございます……」

四角いワンプレートを受け取る。

仕切りの中には、弾力のありそうなタンパク質ブロック、黄色いお粥のようなみずっぽいものと、栄養錠剤らしき数粒、小型の丸パンが置かれていた。

「いただきますー！」



「いただきます」

明日も頑張るため、スプーンを使って黙々と食べる。そんな私の姿を、舐めるように見る他の人間達。目はぎよろりと飛び出て見えて、まるで飢えた獣みたいで。

こんな状況で味わうなんて……出来るけれども。

パンはぼそぼそで、美味しいものだとは思えなかった。

「地区長から聞いてるよ、アタシと相部屋だつて！ いこいこー！」

プレートを洗浄槽へ投げ入れると、彼女に手を引かれて部屋へと案内された。

「……よし、と」

入るなり、N10は内開きの扉の前にベッドを移動させて、外から簡単には開けられないようにしてしまった。

「あの、何を……」

「安全の為ね、新入りは特に目を付けられやすいから」

窓はなく、ただ通気穴だけが壁に設置された狭い灰色の部屋。

ベッドは、今移動させられた物を含め、人間が寝られる最低限の大きさの物が2つ。

「さてさて、ようこそ労働地区へ。」

次の新入りが来るまで、アンタが一番下扱いを受けるから、数ヶ月はしんどいよ」

私の安全を確保してくれた彼女は、寝台の上にあぐらをかいて、でんと構えながらそ

う言った。

「新入り来るといつもそうなんだけど、みんな意地悪するんだよね。」

「ご飯こぼすように足引つ掛けたり、わざと変な物を作業コンベアに流したり。」

「しばらくはアタシが守ってあげるから、頑張つて」

「あの、ありがとうございます……」

私は彼女へお礼を言う。

今日初めて出会ったばかりだというのに、とても親切にしてくれていると感じたからだ。

作業中も、食事の時も、私のことを気にかけてくれていた。

「いいよいいよ、ただし、条件有り」

「どんなものですか？」

彼女は靴下を脱いだ素足の親指で、シーツをこねながら言う。

「……『外』の話をしてよ。」

アタシ、下流階級だから、この労働地区から出たことないの、知りたいの」

「……喜んで」

ベッドの上、秘密のおしゃべり会が始まった。

「へー!! 外の空って青くなったり赤くなったりするのか!」

黒くもなつて、上にぴかぴか光る物が出てくるんだ! 工場にある灯りとは違う? もつと高い場所にある?!

20歳くらいの彼女、N10さんは私の話に目を輝かせながら聞いてくれる。

「青いつてどんな色だろ? アタシ見たことあるかな? ないかな?」

年齢よりもずっと無邪気な反応で、何を話しても喜んでくれた。

「あと……名前、だっけ?」

モモタ・トバルカインかあ……かつこいいな、アタシも考えちやおうかな……!」

笑ったり悩んだり、自慢げにしたり、表情がめまぐるしく変わる。

前に出会った赤いセイバーや刑部姫をちよつと思ひ出した。

「ねえモモちゃん、アタシの名前! 考えてみてよ!」

「ええ?!」

「N10より強そうなやつ!」

「うーんと」

完全に無から考えるのは難しいから、もじるところから発想してみる。

N、10、エヌテン、ダメだダメだ。ネーミングセンス無し男おであるバーサーカー04じゃあるまいし……。

「ナ……」

「な?!」

「ナツトさん、とかどうでしょう?」

Nはローマ字読みでナとも言われていたり……10は、日本語で「とう」と呼ばれていたり……するから。

「ナツトか、強そうでいいな!」

彼女は満面の笑みを浮かべて天上に拳を突き上げた。

「アタシがますます強くなっちゃうな、ただでさえみんなから一目置く置かれているのに」

「どうしてです?」

「単純な理由、アタシが一番昔から居るから!」

生まれてこの方労働地区育ちだもん!」

「……生まれ?」

「うん、5歳の頃にはもうここにいたよ、軽い作業やってた」

「……外に出たいって、思ったことありませんか」

私は目を伏せながら彼女に聞いてみる。

「あるよ! だって知らないことばっかりなんだもん!」

新入りから話を聞く度にワクワクする！ でも……」

彼女はあぐらのまま前と後ろに揺れながら、寂しそうな表情を見せた。

「……でいいや。」

だって、ご飯も食べれるし、服だってあるし、疲れたら眠れるし、シャワーも浴びれる。

ここにいれば、生存権が稼げなくなるまでは確実に生きることが出来る。

……外に出るなんて、夢のままでもいいよ」

自らの暗い気持ちを短く吐き出した後、彼女はぱつと顔を明るくさせた。

「変な感じになってごめんね。」

アンタの話、面白いよ！ 前の新入りよりいっぱい話してくれるし、かつこいい名前についても教えてくれたし」

「その……『前の新入り』という人は、今どこへ？」

「頭が良すぎたから頭脳労働の方に連れて行かれた。それから会ってないよ」

彼女はあぐらを組み直す。

「外から来た新入りは、アタシみたいな強い奴が守ってやらないと、すぐ駄目になっちゃうんだ。」

いじめられて、それが原因でおかしくなつて暴れたりする。

そうすると、都市運営をしてるAIの命令で上からロボットがいっぱいやってきて、連れてかれるんだ。

たぶん、重労働であるリソースセンター行きなんだろうなとは思うけど」

「リソース……センター？」

私は首をかしげる。どこかで聞いたような単語だったからだ。

「でもおかしいんだよな。」

時々リソースセンターに、人手が足りないからヘルプに行くんだけど、働いてる奴の中に連れていかれた新入りの顔とかはなくて」

ナットさんが話している途中で、天井からぶら下げられた丸い照明が点滅を繰り返し始めた。

「あつ消灯の合図だ、もう寝ないと」

「でも、眠れる……かな」

「大丈夫大丈夫、脳みそがピピツとなったら、すぐ眠くなっちゃうから」

彼女は大きなあくびをする。

「お休みー」

「お休みなさい」

……こうして、上級都市に來てからの1日は、希望の見えない労働地区で終わった。

第48話  
その破滅は女の形をしていた  
終わり

## 第49話 終わりが、足音立ててやって来て

次の日。缶詰めの箱入れ作業。15時間。

その次の日。缶詰めの重量確認作業。15時間。

そのまた次の日。缶詰めの密閉具合を棒で叩いてチェック。15時間。  
起きて働いて寝ての生活が続き、あつという間に3日も経ってしまった。

(一番徒労感を覚えるのは……)

目の前で運ばれていく、缶詰の入った幾つもの箱を見る。

(自分のやっている仕事は、何に役立っているのか分からないことだよね……)

私は、学校で習ったことを思い出す。

缶詰などの非常用食料は、地下都市成立の初期は良く作られていたそうだが、金属資源の減少により、今は作られていない……そのはずなのだ。

(じゃあどうして、この労働地区では製造されているのだろうか)

疑問ばかりが出てくる。

今の自分の状況に対しても、学んだことと食い違う目の前の光景についても。



「12時半過ぎたぞ、全員昼休憩だ！」

現場を監督している男性の声だが、スピーカーを通じて工場内に響き、私は箱詰め作業の手を止め、持ち場を離れた。

「労働地区長、自分の生存権の管理状況を知りたいのですが」

私はお昼休みの時間を利用し、椅子にどっしりと座っている30代ほどの男性に訪ねる。3日前に私とN10……ナットさんを出会わせてくれた方だ。

「えーっと、C45さんのデータは……」

地区長は罪人として付けられた私の名前を呟きつつ、薄いタブレットを指で操作すると、無造作にこちらへ渡してきた。

「ありがとうございます」

「確認終わったら、返してね」

短く礼を言ってから、数字が並ぶ白黒の画面を凝視した。

（……想像していたとおりだ）

稼いだ分の生存権は、日々の食事、数日に一度のシャワー、呼吸料などに消えていた。罪を償う分を稼いで自由の身になるなんて、夢のまた夢。

（これじゃあ、正攻法で出るのは無理）

労働地区長にタブレットを返す。

「その、もつとたくさん生存権をいただけのお仕事って、ないですか？」

稼ぎつつ逃げる手立てを探すには、労働地区の色んな場所へ行ってみることが必要だろう。

彼は面倒くさそうに、太い指でもみあげあたりをかいていたが、おぎなりにナットさんを指差した。

『リソースセンター』でパイプ詰まりが起きてるそうだから、そのヘルプに行くといよ、あの子と一緒に」

「ありがとうございます」

地区長へ一礼してからナットさんの元へ。

「アタシと一緒に行くこうね、モモちゃん。

リソースセンターはうんと地下にあるから、移動用のリニアに乗れるんだよ、それも楽しみなんだよね」

歯を見せながら笑う赤毛の彼女に案内されながら、その場所へ向かうこととなった。

(場所の名前、前に聞いたことがある……)

私は歩きながら、記憶を呼び起こす。

数日前、ナットさんから聞いた時は思い出せなかったけど、今ならはつきりと分かる。

（そうだ、彼が言っていた……！）

『リソースセンター』。それは、シグルド型アンドロイドが話していた言葉だ。  
（どんな場所なんだろう）

……名前以外何も知らぬ、謎に包まれた施設へ、不安を胸に抱きながら私は進んだ。

「労働地区456からヘルプに来ました、N10とC45です」

真つ先に頬で感じたのは、もうもうと立ち込める生暖かい蒸気。

ぼやける視界の中、目を凝らしてみれば、巨大な金属製のタンクの合間に、パイプがうねるように設置されている複雑な機構が見えた。

その間に渡された金属製の通路を、特殊な形の作業服を着た人間が、ひっきりなしに歩き回っている。

「ああ、ヘルプね」

ナットさんと私の対応をする気難しそうな男性は、私達の手首に細長い機械を当て、そこに埋め込まれてあるデバイスから個人データを確認すると、奥へ行くよう、手だけで荒っぽく指示した。

「ここに着替えてから、パイプ詰まりを起こしている場所、リソースプールへ行くよ」

施設の構造を知っているナットさんの後ろをついて歩き、『更衣室』とプレートが貼ら

れた部屋についた。

「リソースの原液は危険だから、この部屋で防護服着ていこうね」

消えかけの白熱灯の光が揺れる、薄暗い部屋で、灰色の作業着の上からつるつとした質感の白い服を着た。

足も手も一体型の長靴手袋で、頭には四角い水槽のようなメットを被った。

「うっ……」

思わずうめいてしまった。着てみると、とても動きづらい、息苦しい。

「詰まり箇所行くよ」

先に着替え終わっていたナットさんの声にせかさされるよう退室。

「モモちゃん、これ持ってね」

長い棒を肩に乗せ、私はナットさんの後ろをついて、長靴を履いた足を重たく感じながら動かし、ペンギンのようにてちてち歩いていく。

「あそこに何か詰まってるの。」

「じゃあアタシがお手本見せるので、そこから見ていてー」

金網で出来た廊下から、手すり越しに前方へ身を乗り出すナットさん。

棒を持った腕を伸ばし、眼下に広がっている、青く光る液体に満ちた巨大プールへ、

そっと棒をつける。

「こうやって、ぐるぐる混ぜて、渦を起こして……楽なときはこれだけで終わる」

彼女が全身の力を使ってかき混ぜ続けていると、神秘的に発光する液体の表面に、白っぽいぶよとした塊が浮かんできた。

「あれが詰まりの原因ですか？」

「そうそう」

ナットさんから棒を渡され、かき混ぜる役を交代する。

力も神経も必要で、作業着の内側がじんわりと汗ばんだ。

「粉碎したゴミとか、回収してきた資源、あと……人間とかサーヴァント？」

——世間話のような調子の言葉の間に、混ぜ込まれたその単語。

聞いた私は思わず手を止めてしまった。

「人間もサーヴァントの粉碎も荒くつてさ。よく詰まる原因なんだよね、困るよねえ」

目の前を、ぶかぶか流れていく、塊。

顔も胴体も足も区別できないほどに破壊された、人間、もしくはサーヴァント。

ふと、足の力が抜けた。

「あつ、モモちゃんどうした？ 前の新入りみたいに吐いちゃった?！」

ヘルメット付きの防護服の中で、嘔吐が止まらなかった。

(液体リソースは人間とサーヴァントだったんだ、私達は何も知らずに使ってたんだ。

それだけでなく、旅の中で見つけたら無邪気に喜んで、ずっと、知らないまま、誰かの遺体を、想いを……！)

リソースセンターから急いで連れ戻された私は、生存権をたつぷり支払って防護服の弁償をし、シャワーを浴び、新しい作業着を購入して、相部屋で唸っていた。

「あのさ、気にしすぎない方がいいよ。今は何でもリソースで動いてるらしいんだからさ」

ベッドの上で毛布をかぶり震えている私を、ナットさんが横から慰めてくれている。

「発電の元にもなってるし、あとご飯の材料作るのにも使ってるし、リソースないとアタシ達生活できないじゃん。」

必要なものだから、さ。仕方ないんだって……」

彼女の言うとおりの部分は、ある。

私達が地下都市で生き続ける限り、リソースは生産され、消費される。

それに、今まで散々その恵みを旅の中でも享受してきたのだ、悲しむ権利すら私にはない。

でも。

（私、ずっとひどいことを……気持ち悪い、死んでしまいたい……！）  
シヨックだった、途方もなくそれは。

その日は作業は出来ず、毛布の中に引きこもっていた。

「ご飯、こつそり持ってきたよ、いる？」

精製炭水化物をこねて出来た丸いパンを、ナットさんが毛布をかぶったままの私へ差し出してくれるが、胃が痛くて食べる気になれない。

働かないと、逃げる手立てを探さないと、アスカの元へ帰れないのに、体を動かす気力すら湧かない。

その日も作業を休んだ。

……咎める人はいない。働かなければ生存権が無くなり、死ぬだけなのだから。

「モモちゃん、前の新入りの話だけどき」

次の日も、ナットさんはお昼休憩や夕食休憩のわずかな隙間を縫って、私へ会いに来てくれた。

とても……ありがたかった。

「……ナットさん、ごめんなさい、部屋を汚しちゃって」

床に出来ている大きな血だまりは、私の口からこぼれ落ちたもの。

肺から吐血した鮮やかな赤の上に、涙と同じ場所から出てきた血涙がぼたりと重なった。

「労働地区長！ モモチちゃんを助けて！」

納豆の背におぶられ、数日前に生存権の残数を聞いた男性の元へ。

私はぼんやりとしながら、聞こえる地区長とナットさんのやり取りに耳を傾けていた。

「ああ、もういいぞ。C45は……彼女は、迎えが来るそうだから」

「どこの誰が彼女を連れて行くの?! まさか、処分……」

「違う。『恩赦』だとき、ほら、来たぞ」

ゆつくりと瞬きをする。視界は赤くにじんで何も見えない。

「……アインはあなたにこう言います。

『あの方』が、モモタ・トバルカインに会いたいとおっしゃった」

「アイ……ン」

聞こえの悪い耳で、相手をなんとか判断する。



……アイン・ピースフル・エーテルウエル、私とバーサーカーを罪人だと言い、ここまで連行してきた、都市運営システムAI。

「誘いのお手紙です……ああ、持てないのですね、可哀想に」

何か薄い物がアインから私の手へ入れられたような気がしたが、指に力が入らず取り落としてしまった。

「では、アインが彼女を運搬します」

耳元で、行き先を囁かれた。

「あなたを軌道エレベーター内部の人工樂園にご案内します。

真に善良なる者のための、理想郷ですよ」

担架に乗せられたということは、体へ伝わる振動で何となく分かるが、時間が経つにつれ、目も耳も感覚が鈍っていく。

喉は血でがさがさと荒れて乾き、息をすることさえ苦しい。

(リソースセンタールに行つたせい？ でも、何回も行つていたらしいナットさんは大丈夫だったのに……)

それとも、工場で食べた物……環境……)

考えることすらおぼつかなかった。

数十分か、数時間か。

車輪の音を聞きながら、がたがたと揺られ、その振動はやがて止まった。

(痛い……内側から体が焼けているみたい……)

そんな苦痛にあえいでいたら、ふっと、手に何かが触れた。

触れた先から温もりが広がっていき、じんじんとした痛みが引いていく。

血涙でむくんでいた瞳を開けると、馴染み深い顔が私を心配そうにのぞき込んでいた。

「バーサーカー……?」

「うん、俺だ」

左だけしかない、切れ長の緑の瞳、その奥には明るい光が瞬いている。

顔の右半分は相変わらず木製の仮面で隠され、下にあるはずの顔の様子はうかがえない。

「待ってろ、全身を治療する」

焦点がまだうまく定まらない視覚で彼を眺めてみると、全身が縄でなぜか簀巻きにされていることが分かった。自由に動かせるのは足と首や頭くらいのもだろう。

ピョンピョン飛び跳ねながら、おでこをぐつんと私のお腹に軽く乗せてくる。

「……なんで簧巻き？」

「ここに来る前に、暴れないよう巻かれたんだよ。『特別製の縄』だったさ。

バーサーカーパワーで破ろうとしても、固くて……ろくに動けやしない」

ややシュールな光景だが、文句は言えない。

「マスター、手を使えないからで、こを使った治療になるけど、ごめんな」

彼の回復スキルのおかげで、全身の痛みはすぐに無くなり、体を起こせるくらいまで回復。

「よいしょっと……」

バーサーカーの手は借りれそうにないので、自分の力だけで立ち上がり、車輪付きの担架から降りる。

目も耳もすっかりよくなったので、辺りを見渡した。

「ここが、軌道エレベーターの内部なの……？」

気持ちの良い太陽光が、曇りガラス越しにさんさんと室内へ降り注いで、淡い黄色のブロックが敷き詰められた通路を照らしている。

道の縁には滑らかな質感の手すりがついていて、その向こう側には人工の幅広い滝、流れ落ちていく水は澄んでいた。

聞こえる音は、冷たさと清廉さを感じさせる物。

「楽園……」

昨日までいた暗く灰色の労働地区とは打って変わった、色のあふれる世界。  
色数の違いにくらくらする。いろかず

「アインは解説します。ここはとても特別な場所で、本来誰も立ち入りが許される場所ではありません」

私をここまで運んできたAIは、紺の制服に身を包んだ変わらない姿できちつと立っていた。

「まだ入り口です、『あの方』のいらっしやる庭園へ向かいますよう」

AIは私を待たずに、アンドロイドのボディですたすたと歩いていく。

追いかける前に、自らのサーヴァントの様子を伺った。

「バーサーカー、何ともない？ ひどいことされなかった？」

「俺は大丈夫だった、ちよつと作業を、書き物とかをしていただけだな。」

それよりも、我がモモ、体が……」

「ちよつと体調悪かったね、変な物でも食べちゃったかな？」

数日ぶりでも変わらぬ彼の顔と声に安心して、私はふざけた答えを返す。

サーヴァントは眉間にしわを寄せたが、それ以上何も聞こうとはしなかった。

「奥へ行く？」

「……ああ、我がマスター」

嫌な予感がするし、その予想は当たるのだろうけど、向かうしか選択肢はない。ズボンの内ポケットに隠しておいた、エメラルド付きの飾りを胸につける。

血と埃で汚れた灰色の作業服のまま、陽光に濡れる回廊を歩き、招かれた場所へ。

「お連れしました」

先に到着していた金の髪を持つAIは、深々と一礼して、その人物に敬意を示す。

「ありがとう、アイン。下がっていいよ」

「はい」

土があつて、本物の花と草木が茂る、静かで小さな庭園がそこにあつた。

丸く敷かれた石畳の上に白い金属製のテーブルが設置され、美しい紅茶セットと、ジャムクッキーなどのお茶菓子が光を浴びて煌めいている。

椅子もテーブルと同じような材質で作られ、その内の1つに彼女が座っていた。

「すまないね、身だしなみを整える時間が足りなくて」

繊細な模様のレースで縁取られた、白いドレスに身を包み。

金色と桃色の2種の色が混ざり合う髪は、地面につきそうなほど長く。

白い仮面で顔を完全に隠した男性らしき従者が、椅子の後ろに立ち、彼女の髪をブラシで解かしていた。

「綺麗になつたかな、私の髪」

顔を覆つていた前髪を片手ですくい、大きな動作で後ろへ流しながら、彼女は従者を見上げながら語りかける。

表に現れた瞳は、最高級のペリドットののように鮮やかで、内から光を放っているかのようだ。

白い肌、すつと通つた鼻筋、小さな顔の輪郭、果実のように赤い唇。

美しい、正に女神と言つても遜色のない容貌。

「君に会いたくてたまらなかつたんだ、モモタ・トバルカイン」

彼女は座つたまま姿勢を正すと、私へ向き直り、唇の端をうつとりと上げて微笑む。

「私の名前はリリス。けど、ちゃんとフルネームで伝えようか」

緊張感から、私は手の平を握り込んだ。

「リリス・トバルカインが私の名。君の遠い先祖にして」

彼女は布越しでも分かる、豊かな胸の上に手を置く。

「世界を救うために数百年前創造された、人造女神なのさ」

少年のような口調で自らの紹介を終えると、立ち上がり、椅子の1つを後ろへ引いた。

「お話ししようか、君と私で」

『リリス』。

それは今から400年前、西暦2300年代に現れ、地下都市を作り、人類を救った救世主の名前。

「……」

私は無言で席につき、勇気を出すため、赤いジャムを中心に寄せた小さなクッキーを指でとり、力強くかじった。

砕けた菓子の破片が、緑生えた地面へばらばらと落ちていく――。

第49話 終わりが、足音立ててやって来た  
終わり

## 第13章 終末世界のボーイ・ミーツ・ガール

## 第50話 いと美しや因果始まりの女神

「普段は他の軌道エレベーターにいるのだけど、数日前からこの都市に遊びに来ていたんだ。

けど良かった、君に会うことが出来たから」

嬉しそうに話す……女神たるリリース。

一部が磨<sup>す</sup>りガラスで出来た天井から、和らげられた陽光が差し込み、花や草木は鮮やかに輝いていた。

この世のものとは思えないほど美しい円状の庭園に、居る人物は4人。

私、バーサーカー04、女神リリース。

そして……彼女の髪を整えていた、白い服を身に着け、同じ色の凹凸の無い仮面で、顔を隠している謎の従者。

「君のサーヴァントも……どうか座って」

リリースに言われ、バーサーカーが簀巻きのまま席についた。

「紅茶は旧スリランカから発掘したもの、茶器は旧ドイツから見つけたものさ。



どちらもとびきり上質だよ」

彼女は手ずから、客人である私達のカップ2つに、色濃い紅茶を注いだ。

白地にバラの紋様が描かれたそれは、映画の中から抜け出てきたかのように華やかだ。

「さて、何の話をしようか。

君に話してあげようと思っっていること、たくさんあるのに……興奮の方が勝って、考えが上手くまとまらない……」

リリスは金色の眉を下げながら、困ったような表情を見せる。

香りの良い湯気がティーカップから立ち昇り、私の頬を熱く湿らせた。

「……よし、現行世界の成り立ちと、それに関わる私の生まれからお話しようかな。

何より私がそうしたい」

リリスは指先でカップの持ち手をつまみ、紅茶を飲んで赤い唇を濡らしてから、感情の薄い美しい声で語り始めた。

「700年前、世界大戦が起きてね、それまでの社会は滅んでしまったんだ。

でも人間はまだ生きていて、死にたくないって願ってた。

そんな人達の一部……『トバルカイン家』が、神として2300年代に鑄造したのが「私」

「世界大戦って」

「そうだね、『聖杯戦争』と呼んでもいいかな」

女神は言葉が続ける。

『カルデア』という機関が偶然にも手に入れてしまった、万能の願望器……『聖杯』をめぐる殺し合い。

でも、優勝商品である『大聖杯』自体は、もう誰の願いも届かない場所に行ってしまったのだよね」

語る彼女は、短い草の生えている地面を真つすぐに指さした。

「カルデアの勇敢なる生き残りの行動によって、地下2900kmより下にある星の地核と、大聖杯は融合してしまったんだ。

……しまった、主題から脱線してしまったかな」

彼女は背を丸めると、わざとらしく咳払いをした。

金と桃色が混ざった細い髪が、日の光を反射で膨らませながら美しく揺れる。

「えへん……造られた私は、人間を救うために色んな発明をしたんだよ。

液体リソース、管理AI、地下都市、階級制度、生存権、軌道エレベーター……。

どうだい？ どれもすごい発明だったろう？」

彼女の誇るような発言に対し、私は思わず唇を苦々しげに歪めてしまった。

「……液体リソースはなぜあんな、尊厳を貶めるような」

「尊厳を貶め……？ 貴重な資源の有効活用なのに？」

リリスは表情を変えもせず話を続ける。

「地核と融合し、誰の願いも受け入れなくなった大聖杯は、それでも莫大なエネルギーを発生させていた。

それを使える形とするためには、どうしてもサーヴァントの細切れが必要だったんだ」

「……細切れ」

私はうつむきながら、彼女の言葉を繰り返す。

「理由はね、サーヴァントが『人の祈りに応える存在』だからさ。」

その本質を利用してエネルギーに方向性を与えた」

女神は自らの発明について、朗々と語った。

「何にも使えなかった原液は、人の傷を癒やし、サーヴァントの魔力源となり、発電にも使える万能燃料に変わったんだ！

なんと素晴らしきかな、液体リソース……」

……それに対して一切の悪感情など抱いていないかのように、彼女は丁寧の説明してくれる。

「いけない、いけない……また脱線してしまった」

女神の従者は、席に着かず会話にも参加しない。庭園の壁を伝う植物を、銀に輝くハサミで剪定していた。冷たさを感じる金属音が響く。

「とにかくだ。」

世界大戦によつて化石燃料は枯渇し、バイオマス、核も使えなくなつてしまつたから、どうしても新しいエネルギー源が必要だつたんだね」

バーサーカーは唇を固く結び、女神たる彼女の顔をただ静かに見つめていた。

「有益なエネルギー源を確保できた私は、自らが発明したものを利用し、残つていた人類を保護。」

そして400年以上、種として存続させている。

……これが現行世界の成り立ちと、私の生まれだよ。ちゃんと伝わつたかな？」

話を聞き終わつた私は、熱い紅茶を無理にでも喉へ流し込んだ。粘膜がひりつく。

「私ばかり話してしまつてごめんね。人間と喋るのは久しぶりだったから。」

さあ、次は君の番だ。

モモタ・トバルカイン、楽しくお話しをしよう？」

彼女に対し、まだ温もりが残っている口を私は開いた。

「貴女は400年前の英雄だと学校で勉強しました。なぜ、まだ生きていますか？」

「ん……もう答えが会話の中で出ていたじゃないか」

私からリリスは顔を逸らして、ほころびかけているピンク色のバラの蕾を見た。「私が『人類を救いたまえ』の願いを基に造られた女神だからさ。

その役目を完遂するまで、私は老いることも劣化することも、死ぬこともない」  
「……分かりました、そういう存在もいるんでしょうね」

主に見つめられた桃色の蕾を、従者は萼がくの下からハサミで切り落とした。庭を飾る白いレンガの地面に、二度と咲かぬものとなった花が転がる。

「理解してくれたようで嬉しいな、モモタ」

返答を聞いたリリスは、ティーカップを優美な所作で唇に運んだ。

「さっき言っていた……貴女が私のご先祖であるって、どういう意味ですか？」  
次の質問を、私は焦れるような思いで訊いた。

「血のつながりというより、同じ技術で造られた後継機……という意味合いかな」  
「……私も、造られた存在」

胸に手を当てながら、事実で鼓動を早くする心臓をなだめる。  
「本当に知らなかったんだね、可哀想に。」

事情、カイヤ・トバルカインは君へ伝えていなかったんだ」

リリスが目を細めると、長いピンクのまつげが明るい緑の瞳に被さった。

「……おばあちゃんの名前、知っていたんですね」

「うん、女神様は何でもお見通しなのさ」

『カイヤ・トバルカイン』、それは10年前に亡くなった祖母の名。

(おばあちゃん、私に隠し事してたんだ……)

大好きな彼女と血が繋がっていなかったという事実もまた、ショックだった。

「カイヤはトバルカイン家の末裔。君とは違い、人間さ」

リリスは美しい形の白指でクッキーを摘まむと、小さな唇に押し込んで一口で食べてしまった。

「……体が不調が現れたのは、私が造られた存在だから、ということですか」

バーサーカーに治してもらわなければ、あのまま死んでいたであろう致命的な体調不良の理由を、女神へ問うてみる。

「大正解、君の耐用年数が近いってこと。

私の見立てだと……発生から16年ってところかな。

ちようど今年の終わりあたりだね」

——思考と心臓が止まりそうになった。

(寿命? 16年で、私は終わり?)

上から注ぐ光は、先ほどまでと何も変わっていないのに、今の私の目にはくす

んで見える。

「どうしたんだい？」

女神はテーブルに肘をつけると、手の上に自らの顔を乗せ、にこりと笑ってから、私を見つめつつ明るい声をかけてくる。

「質問は？　話題は何でもいいいき、もっとお喋りをしよう。」

お茶もお菓子も、君のためだけに！　用意したのだから」

彼女の声すら、私の耳には不気味に聞こえた。

膝の上に乗せていた手は震えている。それを握りしめて拳をぎゅつと作り、もう一度口を開いた。

「……私の故郷は、聖杯戦争が起きて、ひどい、本当にひどい世界になってしまった」  
声を震わせながら話す。自らの脳裏に浮かぶのは、炎の記憶。

生きながらに焼けていく人の声、遺体かどうかすら判別できないほどに破壊された、焦げた塊。

——人間の尊厳など微塵も残されなかった、あの惨状を。

「他の都市でも争いが起きていた、悲しむ人間もサーヴァントも大勢いた……。」

「貴女が人類の庇護者だと言うのなら、なぜそんな悲劇が起こることを許したのですか」

私の非難を受け、女神は笑みを湛えていた唇を真つ直ぐにした。

「『あの男』が隠したものを炙り出すため、私がAIに命じたんだ。

……実際に言うかどうかは、AIらの自由意志に任せていたけどね」

リリスの白い頬に朱が指す。それがどういった感情の動きによるものか、私には分からなかった。

「君の言うとおり、何百という都市と、何億という人間が失われたけど……悲劇ではない、成果があったから」

従者がリリスの手の平に何かを乗せる。

彼女は受け取ったそれを、テーブルの上へ半ば放り投げるように置いた。

女神という肩書に似合わない、ひどく乱暴な仕草。

「……これはね、『S文書』と呼ばれていた」

白紙の表紙を持つ、何も書かれていなかったはずの本。バーサーカーが地下の研究施設で見つけた物だ。

茶菓子が揺れて皿にぶつかり、耳を突くような音を立てた。

「200年以上かかったけれど、ようやく見つけられた。

私にとっての不安要素、逆転の一手……私が最も憎んでいる男が残したものの、『世界を救う方法』が書き記された外道の本」



リリースは不機嫌そうにも見えた顔に、また完璧な微笑を浮かべて、私へ笑いかけてきた。

「君のバーサーカーのおかげで全て解読出来たんだ。ありがとう」

私はサーヴァントに視線だけを向けた。

やや沈んだ表情をしている彼は、わざとらしく目をついつ……と横に逸らした。

「世界を救う方法」

胸に引つかかった単語を、私は口に出す。

「知りたい？」

嬉しそうに問いかけてくる女神。

「……それは」

自分の気持ちを整理するため、目を閉じて、一旦考え込んでみた。

（私はなぜ、旅に出たのか）

知りたかったからだ。悲劇の理由を、それを起こした聖杯戦争の首謀者を。

救いたかったからだ。突然の出来事で傷ついた人々を、苦しむ他者の心を。

（世界を救えたのなら……地下で管理されている人達も自由になる？）

頭に浮かんだのは、灰色の労働地区で生き続けるナットさんの姿。

（砂と岩だらけの地上も、世界を救う方法が分かれば、昔みたいに緑や水が戻る？）

次に思い出したのは、AIスローネとキルケーが守っていた、地上ではとうの昔に失われた景色。

(聖杯戦争のような恐ろしいことも、起こらなくなる?)

寂しげな顔でコーヒーカーップを見つめる、刑部姫やネロ帝の姿。

それは今でも私の瞼の裏に焼き付いている。

(もし世界が救えたのなら……その方法が、はつきりとあるのだとしたら)

……夢のような展望だと、我ながら思った。

「教えてあげてもいいけれど……条件を出そう、モモタ」

リリスの声で、思考の奥底から私は帰ってきた。

目を向けると、彼女は指先と白いドレスの袖をひらひらとさせながら、話し出そうとしているところだった。

「どうか私の賛同者になっておくれ。」

そして計画に参加し、私と終わりの無い旅に出よう」

彼女はそこから矢継ぎ早に言葉をつなげ始めた。

「私はこの駄目になってしまった地球を捨てて、人類と共に外宇宙へ旅立とうと考えている。」

原液を汲み上げ、リソースへ精製しているのも。

人類を地下都市で保護し、厳密な資源管理をしているのも。

全て、果て無き旅路への準備なのさ」

リリスの白い人差し指が、光注ぐ天井を示した。

「今、月と地球の間で宇宙船を組み立てている、もうすぐ完成するんだよ！」

「……」

私は、まるで自慢する子どものような響きを持った女神の言葉を、黙って聞くしかなかった。

「理解者になってくれるのなら、君の体も治してあげよう。」

私と同じ不老不死、永遠に人類を見守り続ける美しい存在に組み替えてあげる」

そこまで興奮したようにまくし立てると、細めた瞳で簧巻き状態の私のサーヴァントに視線を投げた。

「……君のバーサーカーは、傷は治すことは出来ても、寿命を治すことなんて出来やしなからね」

何時もは口を挟もうとする彼だけれど、今日はずっと黙っていた。

「モモタ・トバルカイン！ さあ！ 君の答えを聞かせてよ！」

女神は歯を見せながら笑う。その表情はどこか暴力性を感じさせるものだった。

「……私、は」

紅茶を飲む、クッキーをばりばりと齧る、目線を泳がせる、震える膝を手でさする。思い浮かぶのは今までの人生と、アスカのこと、アーチャーのこと、家族に等しい存在であるバーサーカーのこと。

……デザートランナーで旅してきた、世界のこと、出会った人、サーヴァント達。私の、寿命の、こと。

(ああ……だったら、答えなんて初めから決まってるじゃないか)

自分の頭で考えた言葉を、心を落ち着かせてから、リリスの瞳を真っ直ぐに見つめて言い放った。

「——貴女の賛同者にはなれません。

人間やサーヴァントの命や心を、物みたいに扱って、苦しめることを良しとしている、貴女の賛同者には」

リリスは金と桃の髪をさらりと揺らしながら首を傾げた。

「どうして？ 私は君のバーサーカーや、君の祖母のように隠し事はしないよ？  
なんだって教えてあげるし、欲しいもの全部あげる！

君のことを一番に思おう、家族みたいに愛してあげようじゃないか」  
私の思いなど知る由もない彼女へ対し、首を横に振ってから答える。

「……例えば死ぬことになったとしても、私は貴女から何も受け取りたくはない」

「世界を救いたくないの?」

「その方法があるのだとしたら、自分と仲間達で見つけてみせる。

貴女からは、絶対に教えて欲しくない」

「……そっか」

私の答えを聞き、彼女は寂しそうな口振りで呟いた。

「君は、自分の行為を全部棚上げして、私だけが悪いみたいに言うのだね。

こんな世界になってしまったのは、沢山の出来事の積み重ねだということのに」

「——なあ、ずっと黙って話を聞いていたが、リリース」

バーサーカーがとうとう口を開いた。その声は低く、荒々しい。

「お前、モモが領いたとしても、世界を救う方法を教えようなんて思っていないから」

演技教本に記された、お手本のような表情ばかり浮かべていた女神の、左眉だけがわずかに歪みながら上がった。

「人類のことも、救おうだなんてこれっぽっちも思っていない」

従者が大輪のバラの花を切り落とした。断たれた花はゆつくりと下へ、他の蔓や草に紛れてゴミとなる。

「本心は別なのに、使命だか理念だとかで覆い隠している……違うか?」

「……」

リリスは黙り込むと、腕でテーブルを無いだ。

「……誰に召喚されてもお前は変わらないね、本当に悲しいよ」

突き放すような冷たい彼女の声と共に、『S文書』なる白い本だけが地面へ叩き落とされた。

「これ、もういらぬ。燃やして」

主の命を受け、仮面の従者は壺を持つと、中身の油を本にかけ、火をつける。

花と茶葉の心地よい香りが漂っていた庭園に、命の危機を感じる焦げ臭さが一気に充満した。

「私に剣を」

従者は彼女へ、セラミックのような質感の、何の飾りもない白の長剣を手渡す。

「うん、じゃあ……」

女神の如きリリスは立ち上がり、右手で受け取ったばかりの剣を振るった。

その圧で、壁に伝って咲き誇る時を待ちわびていた蕾が、ぼとりぼとりと地面へ無慈悲に落ちていく。

「君、（ハハ）で死にたまえよ」

輝く双眸はペリドット。その眼光の奥に、確かな殺意があった。

第50話  
終わり

いと美しや因果始まりの女神

## 第51話 「当たり前のように——」

「やあ!!」

慈愛ある神のような見た目からは、想像もつかない勇ましい声と共に、座っている私の胸へ、リリスの白の剣先が突き刺さろうとするが。

「——令呪をもつて、我がサーヴァントに命ずる。」

私と共に戦って！ バーサーカー！」

魂からの叫びに呼応して、彼の自由を奪っていた縄が千切れ飛んだ。

「——良いだろう、俺は君の暴力装置、感情の代弁者……そして、サーヴァントだ！」

内より輝く彼の瞳の色は、風を受けてそよぐ明るい緑の草原を思わせた。

バーサーカーは私へ手を伸ばすと、首根っこをぐいと掴み、椅子から無理やり持ち上げて、リリスの攻撃から避けさせてくれた。

「この場所は狭い、移動するぞ」

彼は私を片腕に抱えて走り、庭園の入り口を抜け出て、人工の滝に囲まれた、天井が高い通路へと移動する。



遠目に見える美しい庭は、白紙の本から広がる火に包まれて、じりじりと焼け落ちていこうとしていた。

「ああ、そう簡単に殺されてはくれないのか……モモ」

白い手に白い剣を携えた女神が、私達を追って庭園の入り口に立っていた。

そのかたわらには、白の仮面で顔を隠した従者が。

「ここから逃げる。そして、アスカ、アーチャーと合流する」

私はバーサーカーに地面へそつと降ろされながら、方針を確認する。

(リリスのテリトリーで戦うのは無謀、私とバーサーカーだけでは勝てない)

そう判断したからだ。

「……逃げられないさ、この世界の全ては、女神たる私のものなのだから」

神を自称する彼女の体から、透明な圧のあるオーラが、空間を歪ませんとばかりに湧き始めていた。

何かの前触れなのか、肌がぞくりとする。

「撤退戦だな、了承した。指示と援護を頼んだぞ、我がマスター」

バーサーカーは黒い持ち手の、波紋と反りが入った日本刀を右手で構え、目の前の敵を見据えていた。

鏡のごとき刃に、彼の静かな殺気に満ちた緑の瞳が映る。

(令呪は、残り1角)

右の手の甲にある、時計のような形の赤い令呪を見る。

随分と前、機械化サーヴァントにねじ込まれたバーサーカーを助けるために1角使った。

そして今使用したので……模様は短針だけになっている。

「足手まといのお嬢さんを守りながら、どこまで戦える……かなっ!!」

声を荒げながら、羽もないのに通路を真っ直ぐ高速で飛んできたリリスを、止めるためにバーサーカーは前へ跳躍した。

白い滑らかな剣と黒い無骨な刀がぶつかり合い、通路の手すりも衝撃で震える。

「ふふっ、弱いなあ、君のサーヴァントは……!」

戦闘に巻き込まれないようじりじりと後退している私を、女神は一瞥した。

「……お前の敵は俺だぞ、人造女神」

バーサーカーは刀で彼女の体を押そうとしたが、リリスは剣を斜めにするこゝろでそれから逃れた。

「バーサーカー04!」

女神はその場で姿勢を低くし回ると、サーヴァントの胴体を勢いつけて両断しようとする。

「……っ、リリス！」

身を守るため04は躊躇無く手を捨てた。

つまり、攻撃の勢いを止めるため、左腕を剣に向かって突き出したのだ。

「ははっ……！」

笑った声は04のもの。

手の平を白い素材が貫通し、肉と骨が花卉のように外側へ咲く。

リリスは眉間に険しいシワを刻みながら剣を引き抜こうとするが、盛り上がる肉に武器は埋もれ、絡め取られていく。

「面白いだろう、こういうことも出来るんだぜ？」

バーサーカーの声には痛みの感情は込められておらず、ひどく淡々としていた。

自分に近接しているリリスの胴体を、彼は全力で蹴り上げる。

女神の体が数m浮いた。それ目掛けて、バーサーカーは日本刀を無事な右手でぶん投げ……が。

「そんな雑な戦法で……神を傷つけられると思うな！」

まるで背中に翼でもあるかのように、リリスはごく自然に宙で体制を直した。

刀は逸れて、陽光を和らげている磨りガラスがはめ込まれた明るい天井へ突き刺さった。

(……)この通路は一本道、後ろに下がり続けていけば、出口へはたどり着ける、(けど)戦闘の様子は気になるが、その気持ちを諫めて、首だけ動かし一瞬だけ後方を見た。

300mほど後ろに、自分が乗ってきた車輪付き担架と、他の通路に繋がる暗い入り口があった。

(あそこまで行つて、令呪を使ってバーサーカーを呼ぶ。

そして、壁を壊してもいいから、2人で全力で逃げる。

アスカ、アーチャーと合流できれば……きつと全部、大丈夫だ)

勝つ必要はない、焦ることはない。これは撤退戦なのだから。

「——そろそろ、神の力の一端を見せてあげようかな?」

リリスは謡うように告げると、剣を奪われた両手を広げた。

「水よー!」

通路脇を静かに流れていた人工の滝の流れが止まり、水面が真横に盛り上がる。

物理法則を無視した、異様な動き。

「敵を串刺しにしろー!」

生まれたのは、水で作られた無数の槍。

それが横から上から地面すれすれから、虫のように飛んでバーサーカーに襲いかかる。

「ちっ」

バーサーカーの舌打ち。

武器が無い彼は、左腕に埋まっているリリスの白い剣を右手で抜き取ると、血と脂にまみれたそれで水の槍を砕こうとした。

だが、防ぎきれない分が鎧ごと体を貫通した。傷口から水とともに血が溢れて、黄色レンガの地面が黒く濡れていく。

敵から奪った剣も砕け、陶器みたいな白の破片が散らばった。

「……モモ、傍観者気取りはいけないな。君だつて舞台上の役者なのだから」  
当然、私が後ずさっている通路の横にも、人工の滝があり。

リリスの言葉の後、水で形作られた数本の槍が、私目掛けて飛んできた。

「……ああああ!!」

恐怖で漏れ出る声を抑えきれず、叫びながら私は逃げ惑う。

姿勢を低くして、一本避け、そのまま地面に倒れ込んでもう数本避ける。  
次に地面を転がって、残りの攻撃から何とか逃れた。

(……手加減、されてる)

バーサーカーに向けられた槍に比べれば、何て手ぬるい攻撃なのだろう。  
乱れた息を急いで整えながら、起き上がる。

(敵に背を向けて一気に走り抜けるか……？ でも、それは)

私はリリスのずっと後方に控えている、白い仮面の従者を見る。

庭園が燃えていく熱気で出来た、陽炎の中に彼が。

戦闘には参加せず、ただずっと立っている不気味な存在。

だからこそ、警戒を向けざるを得ないのだ。

(目を背ければ、もつと不利になるかもしれない)

その可能性が怖くて、リリスや従者から完全に目を離すことが出来ない。

「バーサーカー！ 傷……」

「……かすり傷だ、この程度で致命傷になるのなら俺も色々困つてはいない」

鎧は汚れているが、血はすでに止まっており、花のように捻れ咲いていた左腕も元通

りだ。

「……そのスキル、私は知らないな」

「リリス、お前は勘違いしているようなので言語化して伝えるが」

バーサーカーは新たに取り出した槍を振り下ろしながら、地に足着けていないふわふ

わした女神に言った。

大気を切り裂かれる音が、動作の後に続く。

「サーヴァントは全て同じ別人だ。召喚される度に生まれ、消えれば永遠に失われる」

リリスは何もしない。

「……かつて君の側に、『俺』が居たんだらう？」

リリスは何もしない。

「けれどな、『俺』は君のサーヴァントではない。

君のバーサーカーの代わりには、どの『俺』も成れないんだ」

論すような言葉に、女神は浮かんだまま答えを返した。

「……じゃあ、もう、なんにもいらない」

その時、私の背筋がぞくつとしたのは……金と桃色の髪の間から見えた彼女の顔が、あまりにも幼く見えたから。

だって、おかしな話じゃないか。400年も以上生きている存在が、あんな。

(拗ねて、泣き出しそうな顔をするだなんて)

リリスは手の平を私とバーサーカーに向けて。

「——全部、焼けてしまえ」

そこから細い熱線を放った。

「モモ！」

バーサーカーは体をひねり、迷わず私の元へ跳躍して突き飛ばす。

赤い閃光が、彼の顔右半分、仮面に覆われていた場所を消し飛ばすのがはつきり見え

「かはっ……」

私は背中から地面に落ち、その衝撃で肺の空気が一気に押し出されてしまった。視界がちかちか明滅する。

「……バーサーカー……」

気絶している場合じゃない。砂埃が舞う中起き上がって、自身のサーヴァントを探す。

「——それ、なんだ」

聞こえるリリスの声は、怯えていて。

「答えろ！ サーヴァント！」

砕けた地面から、彼が体を起こす。

「……なんだって、言われても」

ゆらりと立ち上がる頃には、粉塵は落ち、視界はクリアになっていた。「中身としか、説明しようがないが」

私の目に、バーサーカーの状態、いや、正体が映る。

「そんなっ……！」

私は思わず悲鳴のような声を出してしまった。



見れば彼の顔は半分無くなって、その縁は卵の殻のようにひびが入り、パリパリと剥がれ始めていた。

断面から肉や骨などは覗いていない。ただ、遠い場所から届くような穏やかで明るい光がこぼれだしている。

「自分の内側、いや、霊核を他者のものにすり替えていたのか……?!」

リリスはよほど混乱しているのか、考えがそのまま口に出ていた。

バーサーカーの顔は、何時までもどこかに続いている明るいくぼみが空いたままで、治る気配はない。

……きつと、今までもずっと、仮面の下には穴が空いていたのだろう。

「そんなこと出来るはずがない！」

肉体と魂の齟齬が起き、激痛と共に崩壊していく！

数日だって保たない！ 焼けた鉄を永劫に飲み続けるような行いだ！ な、何のため、に……」

怯える彼女へ、彼は当たり前のように答えを言った。

「——世界を救うために」

どこか誇りすらこもっているその響き。

「そう願われたのなら……格好いいところ、見せたくなるよな？」

崩壊しかけの頭蓋のまま、男は言う。

「狂っているのか、お前……」

女神の声が震えていた。

「——ああ、もちろん」

バーサーカーは軽い調子で言った後……右腕を自分の頭の中に突っ込んだ。

「上様」

そして、金の飾りと漆塗りの鞘に収められた太刀を、ずるりと取り出す。

「お借りしますねー」

内側から現れ出たのは、両面に血抜きひの溝……樋ひが彫られた、実用的であるが故に美しく無骨な剣。

「よーし、リリス、二回戦だぞ!!」

半分しかない顔面で、男は本当に嬉しそうに笑ったのだ。

刀を握っている右腕が内側から徐々に割れ、それを覆いつなぎ止めている鎧の隙間からまばゆい緑の光が。

……目の前の光景を見て、私は心の中で独り合点する。

(そうか、バーサーカーの瞳が輝いていたのは、中から光がこぼれていたからなんだ)

木々の葉が日の光を透かすように、彼の瞳は遠い場所から来る輝きを透かしていたの

だ。

全身を報いも来ない痛みで、軋ませながら。

第51話 「当たり前のように——」  
終わり

## 第52話 「愛してくれたなら」

「地に足着けさせてやろう！ リリス！」

黒い持ち手と鍔の日本刀を構え、そう吠えたのはバーサーカー04。

「くっ……っ……！」

上空に浮いていた女神は、目の前の敵に対応するため、先ほど奪われた白い剣の代わりとなる、全く同じ形、質感の剣をどこからともなく出現させた。

それを手に持ち、激しい激突音を響かせながら、下からの強烈な攻撃を受け止める。

「貴様っ……っ……！」

彼女の眼前に、じりじりと迫るバーサーカー04。

武器と武器を削りあう、激しい鍔迫り合いの音が辺りに響く。

「馬鹿なっ……っ……！」

リリスは宝石の如き碧の瞳を見開いて狼狽する。

それもそのはず。だって、彼に浮遊する能力なんて先ほどまで無かったから。

——だが、今は違う。

「靈基を破損させながらの魔力放出……いゝ 気狂いめ……いゝ」

バーサーカーの両足はプラスチックみたいにひび割れて、内側から莫大な光が噴出しており、その勢いをもって宙を飛んでいた。

「くっ！」

天井から光の差し込む、明るさに満ちた通路上での攻防は続く。

リリスは剣で彼を押しつけ、後ろに下がった。

「水よー！」

喚ばれた無数の水の槍が、飛んでいるバーサーカーの360度を隙間なく包囲し、一斉に襲い掛かったが。

「……甘い掛かった」

彼は槍で出来た包囲網を剣圧一振りで崩壊させ、地面を伝い下から発生した追加の槍も、脚部からあふれ出ている光を円状に拡散させることで蒸発させてしまった。

「やつの刀……ステータスアップをもたらす宝具か！」

結論をそのまま声に出してしまうほど混乱している女神へ、狂戦士がロケットのように直進して食らいつく。

静かに流れていた人工の滝の音は、剣が打ち合わされるけたたましい音に潰された。

バーサーカーは彼女を容赦なく攻め、防戦一方にさせる。

「そんな……自身の崩壊もいとわれない戦法をなぜとれる！」

自らの消滅が恐ろしく無いのか!？」

「——ああ、ちつとも。何が怖いんだ？　何が恐ろしい？」

「ふざけたことばかり……言うな！」

両者の戦いは、舌戦もヒートアップしていく。

「多くの人間を見た！　多くの英霊を見た！　その誰もが、死と消滅に恐怖していた！」

「……サンプルが偏っていただけだろう。もつと統計を取れ」

「お前は、人間でも、英霊でも、いや、生命の基本原理に即した命ですらない！」

怪物め！　化け物……！」

「女神に言われてしまうと切なくなるな……元よりこの俺は」

バーサーカーの黒い刀が、白の剣を砕く。

「ただの、箱だ。中身にこそ価値あれ、外見そとみなど、どうでもよろしい」

女神は武器を再び失い、破片を浴びながらその体制を崩した。

——リリスが、落ちる。黄色レンガの敷かれた美しい道へ。

「……令呪を持って命じる！　やつを殺せ！　……私のサーヴァント！」

少女のように叫びながら落下する彼女。

その右腕が、ドレスの布越しに赤い光を強く放った。

あの不気味な白の従者が、主の命を受けて僅かに身動きしろうする。

「……バーサーカー！ 今がチャンスだ！ 逃げよう！」

「そうだった我がマスター！ これは撤退戦だったな！」

やはりその事を忘れていた自らのサーヴァントに声をかけ、我に帰らせる。

「後少しで、別の通路に！」

私は駆ける。その後ろから飛んでくる水の槍を、バーサーカーは刀で弾いてくれた。  
た。

「また私から逃げるのか！ バーサーカー!!」

女神の嘆くような響きを持った怒声を無視し、私はひたすら前に、前に走る。

「……いや、逃げられるはずが無いだろう」

聞き覚えのあるような無いような男性の声が、直ぐ側で聞こえて……その後、私の足が急に止まった。

「あれ……」

服の布地が生暖かい、べしよべしよしてる。

胸に目を向けてみると、灰色の作業着を貫いて、血と脂で濡れた刃が、私のお腹辺りから飛び出していた。

「……サーヴァントが倒せないのならば、マスター狙いになるとなぜ想定していない？」

根っからの樂觀主義者なのか？」

トゲトゲしい言葉に反論は出来ず、刃を支えに体が持ち上げられ。

「ほら、死ね」

そのまま上へ、人形みたいに放り投げられた。

私は手足を間抜けにぷらぷらさせて、くるくるぴゅーと飛んでいく。

「マスターー！」

バーサーカーが上空に跳んで、受け止めてくれた。

その後、あふれる光によって胸の傷は塞がれる。

「あ…………あ…………」

でも、私は動けない。今感じた痛みの記憶が脳を蝕んで、まともに頭が働かない。

「…………お前も、死ね」

私に刃を突き立てたのは、庭でバラの花を落とす続けていた、あの白い仮面の従者だった。

床に私を一時的に置いてくれたバーサーカーに対して、日本刀で打ちかかり…………斬り合いをしているのが、ぼんやりと見えた。

「重ねて令呪をもって命じる、バーサーカーを殺せ」



女神の声。

床に転がったまま目だけ動かせば、彼女が幽鬼のようにふらふらと左右へ揺れながら、こちらへ歩いてきていた。

「重ねて令呪をもって命じる、バーサーカーを殺せ」

腕はずっと光り輝き続けている。

「重ねて令呪をもって命じる、バーサーカーを殺せ」

その命令数は、3回を越えていた。

「重ねて令呪をもって命じる……私のアサシン！ バーサーカーを殺せ！」

白い従者は女神の力と命を受け、私のサーヴァントの手首を切り上げ、ぶつりと切断する。

「……マスター！ 俺が時間を稼いでいる内に、逃げる！」

焦り混じりの声。バーサーカーはなぜか攻め倦ねていた。

攻撃を置いた場所には既に敵サーヴァントの刃があり、いなされる。または、かわされる。

（まるで、手の内が読まれているみたい……）

私は体を起こして立ち上がり、少しでも脱出経路に近づこうとする。

（痛みなんて押し殺せ……！ 足を動かせ……バーサーカーの気持ちに応えろ！）

通路の手すりに掴まり、ふらつきながらも一步一步踏み出す。後ろを気にかけている余裕などない、ただ、前へ。

(……までこれた！　なら……)

暗い連絡通路は目の前だ。最後の令呪を使い、バーサーカーを呼び、一緒に逃げよう。姿勢を正し、振り返りながら叫んだ。

「令呪をもって、我がサーヴァントに命じる！　来て！　バーサーカー！」  
手の甲に輝く時計の短針、それが消えた。

「……させないよ、モモ。君の旅はここで終わるのだから」

バーサーカーではなく、なぜかリリスが目の前にいた。

柔らかな微笑み、輝く碧の双眸、膝下まで伸ばしたままの金と桃色の綺麗な髪。

こうして近くに立っていると、180cmくらいあるんだなあと、思ってしまった。

「ほら、君の令呪はここだよ？」

リリスがふりふりと片手に持っていたのは、私の肘より下の右腕の部分だった。

「あれ……？」

右手も無い、おかしいな？

あつたはずの場所は空っぽで、血が、勢いよく――。

「あの……返してください……私の手……」

「嫌だ。もう人間のお願いを聞くのはうんざりなんだ」

彼女は私の腕を胸に抱える。

じわりと、白のドレスが私の血で汚れた。

「令呪をもって、バーサーカー04に命じる……霊核を明け渡せ」

膝の力が抜けて倒れそうになった私を、リリースは腰に空いていた手を添えて、支えてくれた。

だから、目の前の光景が、彼女の体越しに全部見えたのだ。

「……くっ……がはっ、かはっ」

血を吐き出すバーサーカー。

その胸、心臓からは、背中側から突き立てられた刃が貫通していて、先ほどの私みたいになっていた。

刃が横に払われると、肉や鎧の破片と共に、輝く四角が1つ、地面へ転がった。

壊れかけの頭部や腕、脚部から放たれていた光が、徐々に消えていく。

「……」

バーサーカーが前のめりに無言で倒れると、白の従者が輝く四角を拾い上げ、手の平でそつと包み込んだ。

「貴方が、私達を一番に……家族として当たり前のように、愛してくれたなら……こんな

ことには……ならなかったのに」

恨みごとのように、眩き。

つるりとした質感の白の仮面が、戦闘の衝撃に限界を迎えたのか、ひび割れながら落ちた。

「……あつ」

私は小さく声を漏らす。

仮面の下に隠されていた、その顔は。

(バーサーカー……?)

彼とそっくりだったから。

でも、瞳は彼と違って黒色で、手で包んだ輝く四角を、優しそうな、苦しそうな、諦めたかのような、人間らしい複雑な表情で見つめている。

「モモ」

リリスはそつと、腕の中に抱いている私の名を呼んだ。

「もうおしまいだね、君と彼」

私は、切り落とされた右腕からの大量出血が原因による寒さに歯を震わせながら、反論する。

「まだ……終わっていない、仲間だって、私には、いる」

「上流階級のあの子だね。愛すべきアスカ・ピオーネ。」

でも……」

耳元で、ささやかれた。

「あれから数日経った。」

……君ばかりかまって、どうして彼女達には何もしなれなかつたのかな？」

痛み由来ではない冷や汗が、首筋を伝った。

「……あつ、あつ、アス、カ、ア……チャー」

「ふふふ、おしまい、おしまい。」

胸躍る冒険も、ボーイ・ミーツ・ガールはここでおしまい」

リリスは私を地面へ落とした。

「はっ……はっ……」

バウンドしてから、死にかけの羽虫みたいに弱々しく這う。

血が、止まらない、寒い、頭が鈍る、怖い。

「助けて……誰か、助けて……おばあちゃん……」

情けない、何も叶わなかった。

「どうして？」がいつぱいで、「悔しい」がいつぱいで。

（こんな事になるなら、旅になんて出なければ良かった。）

アスカまで、巻き込んでしまった)

そんな、思っではいけない後悔も、少し。

「……バーサーカー」

左手を彼に伸ばす。届かないけれど、伸ばす。

「……——マスター」

突っ伏していた彼が、頭は半分以上崩壊し、心臓にあたる物を奪われ、両足も右腕も砕けて、左腕も千切れかけのサーヴァントが、返事をした。

「……俺はお前の暴力装置、感情の代弁者」

起き上がる。足もないのに、起き上がったのだ。

「親父殿!! 貴方はいつもそそうだ!」

「……死ぬべき時には死んでおけと!」

バーサーカーと同じ顔をしたサーヴァント、アサシンと呼ばれていた彼が切りかかるが。

「これは……泥、いや、呪いか?!!」

砕けた右腕を焦がしながら噴出した黒い泥に、阻まれる。よほどの熱を放っているのか、アサシンの持つ刀が燃え始めた。

「うーん、何というか……」

バーサーカーはまだ人間の形を保っている唇で、敵へ語りかけた。

呼ばれた男は、驚愕と憎しみが浮かんだ顔で彼を見る。

「もう倒したものと思つて相手を侮る悪癖、次会うまでに治しておけ。

お父さんからのアドバイスだぞ、正純<sup>まじずみ</sup>」

ふざけ交じりの低い声でそう告げると、バーサーカーは、床の上を手負いの獣の如く、形定まらぬ濁流のようにも移動した。

脚部からは泥があふれ、黄色レンガを焦がしていく。彼の顔もべつたりと汚れていった。

「——殺した程度で終わるものだと思ふな」

私を千切れかけの左腕で抱えると、バーサーカーは通路の手すりを乗り越えて、この場から逃れるため、頭から真つ逆さまに落ちていく。

「……ごめんな、マスター」

彼の言葉を聞きながら、私は人工の滝壺へ、落下地点も見えない深い場所へと落ちていった。

第52話 「愛してくれたなら」

終わり

# 第53話 真実の星が見えぬ夜は、貴方と秘密の話がしたい

「あ……」

私はうめき声をもらしながら目を開ける。

暗い、けど、その闇の中に、青の輝きが星みたいに見えた。

（何の光かな。本物の星空？ それとも幻？）

体は横倒しになっていて、背中側が激しく痛んだ。これはきつと、落ちた衝撃によるものだろう。

「バーサーカー、そこにいるの？」

いつだつて側にいてくれた、彼を呼ぶ。

「ああ、いるぞ」

声が聞こえ、私は安堵を覚えてちよつとだけ笑った。

「紐を見つけてきた。これで君の切断された腕を縛る、血は止められるはずだ」

私の、中途半端な長さになった右腕をバーサーカーは持ち上げたようで、二の腕の辺



りにきつく紐が絡んだ。

「バーサーカー」

「ごめんな、マスター」

視界がやけに暗い、痛む全身の震えが止まらない。

「これ、渡しておく。手紙だ、君宛の」

冷たくなりつつある私の左指が開かれ、くしゃくしゃの紙が置かれた。

「……この前、言っていたやつ、だね」

「ああ。今回はちゃんと名前を書いたぞ」

私は話すバーサーカーを探して、首を傾けるが……見えない。

本物が幻か分からない、青の星がまたたくばかりで。

星が見えているのに、どうしてこんなに暗いのだろう……もつと明かりを！

「名前、なんて書いてあるの？」

「んー……」

近くに気配を感じる。

側にいるらしいバーサーカーは、私の問いに数秒間もごもご何か呟いていたが、観

念したようにその言葉を口にした。

『『本多正信』』

私はゆっくりりまばたきをする。

「それが、俺の……私の本当の名だ」

寝転がったまま、彼に感想を言った。

「へえ……かつこいいね」

水が流れる音の合間に、彼が息をのむ音が耳に聞こえた気がした。

「少し話をしようか、モモ」

「そうだね……最後、だもんね」

側にいるという以外、どこに彼が居るのかはつきりと分からないままだけど、2人で話をすることにした。

私も彼も……きっと、まもなく死ぬだろうから。

「嘘は言いたくないから事実を言う。」

俺の傷を治してくれていた根本、『あの人』……ああ、上様、つまり『薬師如来』の力とその接続が奪われた、もう傷も体も治らない」

「そっか」

闇の中で会話をする。

「上様のお力添えがあったからこそ、俺は人型を保て、自らよりも数段格上な相手とも渡

り合えていた」

「そうだったんだね」

「それが無ければ、アーチャー殿と戦闘になった一番最初のあの時に……五体が吹き飛んでいただろう。きつとばらばらに……」

「弱い……」

「戦場に立つタイプじゃないから……」

腕を縛る以外の治療を受けていないというのに、痛みが薄れていく。そして、何だか胸がぼかぼかしてきた。

「上様……の、力がないと、どうなるの？」

「そもそも人の形を保てない、俺の体は溶けてるから」

「なんで？」

「上様、つまり『徳川』を憎んでいる人はいっぱい居てな、その人達全部の感情と呪いを私は受け取っていたから」

「呪われると溶けちゃうんだ」

「熱いからな、溶けるのさ。なので、溶ける端から治してもらっていたんだ」

大きな塊が、水に落ちる……そんな音が聞こえた。

「……痛く、ないの？」

「痛いけれど……騒ぐほどの事でもなかったから」

「……えつと……薬師如来ってすごい人なの？」

「すごい存在だぞ。苦しんで生きている人をお救いになってくださる、如来なのだから」

「何だか難しそう、また勉強しておくね」

「うん、しておくこと」

四肢の感覚は薄くなつていくのに、体の中心部は鼓動を増すばかり。

「私ね、バーサーカーのこと、好きだったよ」

「そうか」

「お父さんみたいだなんて、思ってたたり」

「……そうか」

「バーサーカーと映画を見たり、本読んだり、勉強手伝ってもらったり、何て事のないお

話ししたり……旅もね、楽しかった、ありがとう」

「……悔しいな」

「どうして？」

バーサーカーは珍しいことに、まるで本心がにじみ出るような声で話している。

いつも、飄々としている人なのに。

「どうすれば君が助かるだろうって、そんな事ばかり考えている。

私、もう頭も崩れてきているのに」

彼の声は震えているように聞こえた。

「君が人間でないこと、寿命が短いこと、初めて会った時から気がついていて、

でも、私、どう伝えればいいのか、分からなくて……いや、怖かったんだ」

「私もね、リリスに言われてびっくりしちゃった。

知っているなら……教えてくれても、良かったのにな」

「……ごめん」

「いいよ、ちよつとしか気にしてないから」

私は浅い呼吸を繰り返す、でも、肺は十分に膨らまない。

（死ぬの……嫌だな、怖いな……）

もう少しだけでもいいから、彼と話をしたいのに。

「バーサーカーは、死ぬの怖くない？」

「サーヴァントだしな……それをさっ引いても、私は死ぬのが怖くない。

……置いて行かれる方が、怖かった」

「そっか」

「うん。大切な人に置いていかれたその時から、心がずつと壊れていて、どうにも治らない。

俺はあの人の心の一部だったから。

……全く同じ時に死ぬことができたなら、一番良かったのだけど」

私は笑みを……浮かべられているのだろうか、とにかく彼へ言葉を返す。

「大切な人が死んじやっても人生は続くんだから。自暴自棄になっちゃだめだよ」

「駄目か、そうか……中々ひどい、いや、すごい……違うな。」

……とても良いこと言うな、モモは」

「旅で成長出来たのかも」

「それは……そうかもしれないな」

「うん。やつぱり、旅に出て良かった。色んなこと、知れたから」

そう言った後、私は咳き込んだ。

数分間、背中を地面にごっこつとぶつけながら、血を少し吐く。

収まったから、また話し出す。

「地上にあったもの、ほとんど全部、無くなっちゃっていたけど」

「……ああ、そうだったな、マスター」

「無くなつてないものも、あつたなつて」

「それはなんだ？」

「……愛とか」

「愛か……もうちよつと別のものもあつただらう？」

「夢とか！」

「希望とか？」

「……そうだね、希望もあつたや」

旅の中で出会つた人、サーヴァント、思い出す。

（沢山の人に、会つたなあ……）

みんな、誰かを愛していた。深く、温かい形で。

みんな、希望を抱いていた。「もしかしたら」つて。

その願い、意思ばかりは……命の誇りから奪えなかつたのだろう。

「命も物も、いつか全部無くなつてしまうけど……いつくらい、永遠のものがあつてもいいよね」

「そうだな」

「私、もうすぐ死んじゃうけど、今までのこと、忘れないよ。

バーサーカーも、死んでも忘れないこと、あつたでしょう？」

「うん、あつた」

自分のお腹の上に、手紙を握つたままの左手を置いてみる。

「モモ、今でも……『世界を救いたい』と、思うか？」

「それは……」

バーサーカーの質問に、なんて答えようか。

「モモ、沢山の人と過去が、君に大きな物を背負わせようとしている。

その事実を、俺はあの『S文書』を読んで知ってしまった。

……だからこそ言うぞ」

私はじつと彼の言葉を聞く。

「世界も人間も、救わなくていいんだ。

誰かが書いた運命なんてないし、そんな苦しいだけのものは、君の人生に要らないだろう。

どうか、好きなように生きて」

「……」

彼に伝えたいことがまだまだあるのに、舌が乾いて重くて動かない。

「手紙に全部書いたけれど……これも読まなくなつていい、俺の自己満足だから。

……そう言えば、具体的な世界を救う方法について、アーチャー殿に話してしまつたな。

口が堅い人だから心配はしていないが……まあ、いつか！ 信用してるもの！」

もつと、お話したいこと、いっぱいあるのに。



——あるのに！

(アスカも、世界も、どうなっちゃうの……私が死んだら、諦めたら……)

彼が頭を撫でてくれたような気がした。まるで子どもの頭に手を伸ばした親みたい  
に。

でも、その指先もボロボロと崩れ去っていく。

「モモ、ありがとう。灰のような俺に、色のある人生を教えてくれた、素敵な女の子。

俺の『夢』を叶えてくれて、嬉しかった」

「……どこかへ、行くの？」

彼が何をしようとしているのか分かってしまい、私は上擦った声を出した。

「助けを呼んでくる、ここで待っていて」

「待って、行かないで」

どうして？ 今までずっと、家族みたいに一緒に居てくれたのに。

死ぬときは、側に居てくれないの？

(寒い、怖い、何にも見えない、ひとりにしらないで……)

弱音まで明かしてしまいたいのに、血で乾いた口は満足に動かなかった。

「俺の番号書かれたバンド、置いていくよ。」

忘れないで。五桁以上は省略、だから『0004』だ」

「待つて……!」

次の言葉を言う間に、彼が遮った。

「……いや、行くよ、君を助けなくちゃ」

それつきり、何も聞こえなくなつて。

青い星がちらついていた視界に、金の星屑が映つて、上の方へと登つていった。

「バーサーカー?」

乾いた唇を開き、呼んでみた。

「バーサーカー?」

今にも口の奥に落ちてきそうな舌を動かした。

「バーサーカー、まだそこにいるの? ねえ……」

ただ、闇だけが空間に満ちていて。

「そつか……私、置いて行かれちゃったんだね」

涙を一粒だけこぼして、私は目を閉じる。

(思い出、死んじやつても忘れないといいな……)

……ただ、闇だけがそこに残つた。

第53話 真実の星が見えぬ夜は、貴方と秘密の話がしたい

終  
わ  
り

## 第54話 物語でもない旅の果てなんてこんなもの

アイン・ピースフル・エーテルウエルと名乗るAIに、モモとバーサーカーが連行された後、わたくしはエトおばさまに強い口調で問いかけました。

「エトおばさま！」

どうして、どうして！ モモとバーサーカーを通報するなんてことを！」

ついさつきまで、女性型アンドロイドに銃を突きつけられていたおばさまは、床に黄土色の服を広げて座り込んで、冷や汗をしきりにかいていました。

「貴女のお母様と、同じ末路になると思ったから」

「……えっ?」

なぜ母のことが出てきたのか分からなくて、わたくしは服の布地をぎゅつと手で握ってしまいました。

エトおばさまは血の気の引いた顔で話を続けます。お団子にした茶色の髪が、やけに目に付きました。

「お母様……フィリア・ピオーネも……そうだったの。」

カイヤ・トバルカインとかいう、得体のしれないレジスタンス崩れとつるんで、危険な事ばかりして、あげく、死んで……」

おばさまの顔から、汗混じりの涙がフローリングへぼたぼたと垂れ落ちていきます。「アスカ、貴女は私が守るわ……だからもう、どこにも行かないで」

涙をこぼしながら床をずるずると這ってきたおばさまが、わたくしの胴体に抱き着きます。

そのおばさまの瞳は……はるか遠くを見ているような、定かではないものでした。

「フィリアとそっくり……だから、ちよつとおてんばなのね。」

でも大丈夫、ずっとここにいれば、何も恐ろしいことは起こらないのよ」

「おば……さま……？」

彼女の体が離れると——わたくしの太ももに、注射器が突き刺さっていました。

「大丈夫、心配することはないわ。今注射したものはね、素直になるお薬よ。」

貴女のために、都市運営システムからいただいたの。

ちよつと眠れば、全部忘れて、新しい自分に生まれ変われるわ！」

手で外す暇もなく、青い液体が体内にすると注入されていきます。

「——貴様！」

アーチャーの怒っている声が聞こえます、部屋が震えたような気がしました。

「黙りなさい！ お前がフィリアを殺したくせに!!」

おばさまは目を血走らせながら、アーチャーに対して声を荒げます。

(アーチャーが、お母様の死の原因?)

ありえないと思いたいのには、思考は瞬く間に鈍化していくのです。

「お前が……! お前とカイヤささえ居なければ! フィリアは幸せなままだったのに

!」

動き出していたアーチャーの足音が聞こえなくなりました。

ひどい頭痛と眩暈で立っていられなくなり、倒れこむように床へ転がります。

(アーチャーが、お母様の死の原因? 嘘……そんなはず……)

否定したくて懸命にもがいていたら、口が勝手に動き出しました。

まるで糸で吊られた操り人形みたいに。

(なんで、体、言うこと、聞かない……)

ぱくぱくと唇が動き、言葉が勝手に紡がれて。

「令、呪を、もって、アーチャー0961に、命じる」

自分のものとは思えないほどの平坦な声。

自らの意志ではない言葉を放った瞬間、アーチャーの姿を見てしまいました。

「……アスカ」

獣みたいな黒いギアで隠されたその顔に、浮かんでいる表情が見えたような気がしました。

（あ……いや！ 傷つけたくない、アーチャーを、守り、たい……のに！）

舌を噛んで命令を止めようとはしましたが……出来なかった。

「——リソースセンタールへ送られるまでの間、一切の、行動、禁じる」

「……?!」

アーチャーはまるで大きな槌で殴られたみたいに、床へ勢いよく倒れこみました。

彼が纏っている機械部品が、ごつんとフローリング材にぶち当たります。

「最後の、令呪を、もって、アーチャー0961に、命じる」

体の自由が利かない。それ以上に、脳を直接こすられているような激痛がひっきりなしにわたくしを襲います。

（なんで、まるで、操られてる、みたい……）

おばさまが打った薬が原因か、それとも。

「アイン・ピースフル・エーテルウエルです。」

不要となったサーヴァントの回収に来ました」

先ほど退出したばかりのアンドロイドと同じ形の機体が、室内に入ってきたのが見えました。恐らくAIが並行して動かしているのでしょうか。

「アインは家主であるエトに確認します。

回収対象は、アーチャー0961で間違いないでしょうか」

「ええ、さつさとお願ひ」

おばさまは立ち上がりわたくしから離れると、後ろめたさからか顔を背けました。

「続けて確認します。

そしてアスカ・ピオーネの記憶処理と改名……で、よろしかったでしょうか」

「はい、よろしくお願ひします」

淡々と答える彼女がどんな顔をしているのか、もうわたくしには見えません。

「アインは善良なる市民に対し、福祉サービスを開始します」

AIとおばさまの、2人の会話。

「令呪をもつて、命じる。アーチャー0961」

そして、最後の令呪がわたくしの意に反して使われる。

唇が動いて……全ての終わりとなる言葉を放った。

「アスカ・ピオーネとの契約を、これをもつて破棄する」

……ぶつんと、繋がっていた見えない糸が絶ち切られる感覚があり。

「アインは解説します。

サーヴァントが暴れると都市が破壊される恐れがありますから、内蔵デバイスの働き



を強める薬剤を用いて、貴女の肉体を操作し、令呪を使用していただく事になりました」  
涙が一滴頬を伝って、淡い色の床材にこぼれ落ちました。

「サーヴァントに対する、身体自由の奪取と契約破棄の2つの命令、ご協力感謝します、市民」

AIの説明を聞いても、何一つ納得できるものはなく。

「大丈夫よ、アスカ」

アーチャーが、とつても強いアーチャーが、ずるずると運ばれて、流線型の箱、いや棺へ乱暴に詰められていきます。

「もう、安心よ」

お母様が亡くなったばかりのわたくしにも、優しくしてくれたアーチャーが。

「これからは、私とずっと一緒」

家族と言ってもおかしくない存在が、遠くへ運ばれていく。

「だから今は眠ってちょうだい。」

……次に目を開けたとき、きつと素晴らしい日々が待っているのだから

わたくしが唯一出来た抵抗は、依然、涙を流し続けることだけで。

「これからは貴女のことを一番に愛してあげるわ！ だから」

足首をアンドロイドが掴む、脇の下に機械の腕を通される。

「本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>の<sup>の</sup>家<sup>け</sup>族<sup>ぞく</sup>に<sup>に</sup>な<sup>な</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>！」

わたくしは担架に乗せられ、記憶処理をするため、家の外へ運ばれていきました。

……わたくしの名前はフィリア・ピオーネ。

世界の生存権の2割を握る、ピオーネ財団のお嬢様。

家族であるエトおばさまと一緒に、上級都市で暮らしています。

「ベッド、こんなにも広かったでしたっけ」

目覚めは良いのに、なぜか寂<sup>せき</sup>寥<sup>りょう</sup>感が胸にありました。

鏡の前に立ち、身だしなみを整え、引き出しを開けます。

そこに保管してあった、家宝である紫の石がはめ込まれた髪飾りを指で取り、いつもの身に着けました。

黒い髪の上に輝くアメジスト。

身支度は終わったというのに、なぜだか引き出しの中が気になりました。

「……エメラルドの飾りなんて、持っていましたっけ」

見覚えのない翠玉に首を傾げました。

「フィリア！」

朝食、貴女の好きな物ばかり注文しちゃった！ 早く食べに来てー！」

エトおばさまの声で、そんな疑問なんてどうでもよくなってしまいました。

「はーい」

元気よく返事して、後ろへ首を向けます。

「では行き……？」

わたくしはまた、謎の感覚に首を傾げました。

(……今、誰に声をかけようとしたのでしょうか？)

この家には、わたくしとエトおばさましか、家族はいないのに。

第54話 物語でもない旅の果てなんてこんなもの

終わり

## 断章 その1 亡霊（演者）控室

## 第55話 だからこそ、ハッピーエンドをいま一度

「——え？ バッドエンドかな？」

映画館にて。

席へ座ったまま、上映後のまぶしい灯りに照らされた男はつぶやいた。

第55話 だからこそ、ハッピーエンドをいま一度

「いやいやいやいや……だめだろ、この終わりは。何より観客に失礼だぜ？」

時間返せって言われるって、ポップコーンとオレンジジュース投げつけられるって、脚本家出てこいつて話になるって」

男は慌てた様子で立ち上がると、椅子の間を縫って歩き、前へ移動する。

「ここから大逆転……が始まるなら次作も見ろけどさ……メガホン握った監督どこの誰？」

バッドエンドって詰まるところマイナスにしているだけじゃん、今から持ち直しても

プラスになることないぜ？」

映画館で喋っているのはその男だけ。

「どうしてこうなっちゃったのか……やはり、脚本家が途中で死んだからか？ まあ、俺の事なのけども」

男は足下に落ちていた『0004』という番号が書かれた腕章を手に取り、埃をはたくと、空いている席へ置いた。

腰をかがめた男の腕には『00001』と刻印されたバンドが巻かれている。

「しかし、何が起ころうと終わりは決まっている。

——ハッピーエンドだ。

マイナスの世界を0まで引つ張り上げる、観客につこりの大円団さ」

真つ赤な天幕が降ろされた壇上に登ると、男は舞台役者気取りの大声で話し出す。

「……さて、モモという1人の女の子はどうなってしまったのか。

アスカは？ アーチャー0961の運命は？ 女神によって支配された終末世界の

結末は？」

次の言葉は囁くように話した。

「死者と観客にできるのは、囁くことと見守ることのみ。

再び幕は上がるだろう。だって、『俺』が死んだ程度で物語は終わらないのだから」

灯りは落ちて、映画館は闇に包まれた。

——しかし、声はまだ終わらない。

「……貴方だつて、結末が見たいでしょう？」

漆黒の空間で、誰かに語りかけるその男。

「はい。そして……私は許されるのなら、幸せな結末を見たいのです」

青年のような声だけれど、何十年も悩み、思い打ち明けられず、孤独で過ごしてきたかのような達観の響きがそこにあった。

「けれど、観客はこのクリフハンガーに心奪われてくれるだろうか？」

男は問いを投げる。

「そういう貴方の姿勢は、悲劇を楽しむシャーデンフロイデなのでは」

帰ってきたその響きは、声だけでもその存在の清廉な面持ちを思わせた。  
「返す貴殿はまるでデウスエクスマキナ！」

真紅の皇帝も、てばなしでほめそやしましょうや！

闇だけがある映画館、謎の男同士の会話は続く。

「……もう止めにしましょう。」

舞台から降りた貴方と、役すら与えられていない私では、見える世界は違うのですから」

「ではこうして話せているのはなぜなのか？」

お互いの独り言が、偶然にも会話のように聞こえているだけなのか？」

誰かが足を組みなおしたような、衣擦れの音。

「舞台裏で交わす世間話などに、さしたる意味は無い。

そこまで見るべきだと、そうでなければ物語を読み解けぬと言うのなら、書いた脚本家の腕が悪いのでしょうか」

「悲しいな。俺、こんなにも意味深長にと喋っているのに」

「貴方の言葉は遠回り過ぎる」

「言葉で己が身を鎧よろわなければ、俺など直ぐに殺されてしまう……人間は人の姿をした怪物に敵しい！」

誰かが腕で空を薙いだような、風切りの音が。

「それは生前の話でしょう」

「そうだった、俺は死したるサーヴァント。

しかもその亡霊と来た、なおさらに性質たちが悪い」

「サーヴァントですらないのであれば、私は……」

「いかがでした？　いと気高き名無しのお方」

「やってみたい、ことがある」

名無しと言われた男が立ち上がりでもしたのか、館内の空気が動いた。

「——彼に、その終わりをあげられなかったから、私、今度こそ」

男は中途で口をつぐむと、しっかりとした足取りで、靴音を響かせながら館の出口へ向かった。

「ああ、なんということだ、とかく終末世界は亡霊ばかり。これでは誰も浮かばれないわけで！」

漆黒の闇の中に響く声、けれど灯りは消えたまま。

「次なる劇の主役は誰か？　女神か人か、はたまたサーヴァントか！

少なくとも『俺』ではないことは確かだ、あはははは！」

……幕は、まだ上がらない。

第55話　だからこそ、ハッピーエンドをいま一度

終わり



第13・5章 ■ ■ くん、 ■ を救う

第56話 俺の『運命』の話をしよう

「人を助ける仕組みになってしまった君を——助けに来たんだ」

張り詰めた表情で、俺は『彼』に心からの言葉を贈り……偽りも悪意もない眼差しで、  
答えを待ち続けた。

「……………」

光り輝く手が俺の手に重ねられる。

安堵と喜びで、自然と口角が上がってしまった……我ながら分かりやすすぎる、チョロくない？ ……いやチョロくはないよ。

(何千何億、何劫じゆう旅してきたと思うんだ。

少しくらい嬉しがつたつていいじゃないか、恥も見得も擦り切れたぞ……)

これからは自分に正直に生きよう、今決めた。

好きなものは好きと言い、嬉しい時は素直に笑ってみよう。

——こんどこそ自分らしく、生きてみたいと思ってしまったのだ。

「……上様！」

感情をそのまま乗せた明るい声を出して、正面を向いた瞬間。

「——えっ？」

体が宙に浮いていた。いや、正確には……。

(背負い……投げ……!?)

受け身も取れず、背中から地面に落下。地を満たしている花と清水が、飛沫として共に舞い上がる。

「……？」

なぜ、投げ飛ばされたんだ私。

混乱しつつも立ち上がろうとしたら、続けて全身に強い衝撃が。

それは、横から掌底<sup>ていしやう</sup>打ちをぶちかまされたからだと直ぐに分かった。

(上様……?)

倒れずに受け流し、彼へ向き直ると、見たこともない武術の構えをとっていた。

「なるほど……そういうことか……」

俺は腕をさすりつつ、爆速で理解した。

「勝った方が！ 相手の言うことを聞く！ そういう勝負だな！」

単純明快、分かりやすい！

「私も男の子だ！ 燃えてきたー！」

……しかし問題は、俺が上様と戦って勝てるか、ということだ。

会えたことでもテンションが上がっている頭を意図的に冷やし、1秒を何倍にも希釈して考えてみる。

(勝て……勝て……?)

生前であれば上様の思考を読んで先読みし、動けばよかったが、目の前の薬師如来と化した彼の心の動きは、現在進行形でちつとも読めない。

(……あの構え、異国のものを感じる。如来という概念が生まれた天竺より流れてきた武術か?)

不味い、俺の知らない分野だ。

関節の稼動域から動きを推測することもできるが……戦闘中に行うとしたら、それはあまりにも遅い思考だ。

「……」

お互い、不用意に動けない。

花の香り漂う清浄な大気に、網膜が乾くような緊張が混ざる。

『……』

先に動いたのは如来の方であった。摺り足のような音のない動作で、一瞬にして距離

を詰められる。

放たれる蹴りを俺は腕の側面で受ける。骨と筋肉に衝撃が伝わり、頬まで揺れた。その足首を掴み、体制を崩そうと試みるがびくともしない。

「であるならば！」

吠えながら、戦法を変えるため数歩下がるが、その甘い考えを拳が追撃する。

腕でいなし、胴などへの致命傷を避けるだけで手一杯だ。

（ええい！ 俺をいじめる平八郎を思わせる悪辣さだ！ ……これならどうだ！）

戦国最強がそんなに偉いかよ！ 俺のような裏方も大切なのです！ と、思考を並列させながら次の行動へ。

「ふっ……！」

あちらの土壌で戦う必要などない、場の流れを強引にでも変える。

彼から放たれた強烈な回し蹴り、その攻撃は、胴体をぐつと低く落とすことで避ける。

淡い色彩の花が揺れている地面に手をつけ、ぐつと前に踏み込んで跳躍し、相手の懐へ。

腰を両腕で抑えにかかる。つまり。

「相撲！ 相撲で決着つけようぜ！」

足を取り、そのまま、ずだんと押し倒した。

「——勝ったー！」

そう断言した瞬間、体を掴まれ、投げ飛ばされる。

衝撃で後ろ向きに3回転がり、そのまま仰向けで地面へ倒れた。

花と清水が辺りに舞い散る。空が青い、太陽が眩しい。

「は……」

少しだけの放心から我に返れば。

「はははははー！」

私は可笑しくって可笑しくって、子どものように声を上げて笑っていた。

「だって、大の大人が……喧嘩して、物事決めるなんて……ふっ、あはははは！！！！

誰かに見られたら……は、ははは！ あはは！！ はっ……」

喉がくつくつ鳴って、お腹が痛い。

しばらく童のように、地面をごろごろと転がりながら笑い続けてしまった。

「……俺の負けだ、上様」

私は呼吸を整えてから体を起こし、片膝を立てると、そこへ腕を置いた。

「俺はどうすればいい？ 帰った方がいいか？」

……貴方へ向けられた憎悪や呪いが、私という防波堤を失って、ここまでくるかもしれない……から！」

気持ちとはとても晴れやかだった。

また会えた、話が出来た、取っ組み合いの喧嘩もできた。

生前、大人ぶってやらなかったこと全てやった。これ以上幸福なことはないだろう。

(ああ——楽しかった)

満足した。「帰れ」と言われたらそうしよう。

『……』

光を放つ人型である如来は、手を無言でかざす。

すると、空間に映像が現れた。

「これは……」

立ち上がり目を向けると、時代の流れがそこに映されていた。

焼けていく城、死んでいく人々。それでも瓦礫の中から物をあさり、命にしがみつき、

繋いでいく人間。

何千という悲劇があり、何万という涙が流れ、何億という命が失われていった。それでも、人間は生きていた。

その中に、歴史書には残らなかった、無数の仲間達の生きていた証が、繋がりが結びついて、息づいていく、続いていく。当然その流れの中に……俺の命の記憶もあった。

「……」

言葉にして、改めて考えを固める必要もなかった。

映像は世界が焼けていくひどい戦争で終わり、あらゆる人間の文化、文明が消えていく場面も記されていた。

「……分かった、つまり地上に行きたいんだよな。

大丈夫！ 今も昔も、貴方の考えは全て丸ごとお見通しだぞ！」

不安を拭うため、わざと過剰におどけて見せた俺の言葉に、光で出来た如来の頭部が、うなずく動作で上下に動いた……上手く響いてない俺の配慮、しまった。

「しかし……神や仏のような存在は、そのままでは降臨できない、世界が認めない」  
しばし考えて、俺は手をぱちんと打って鳴らした。

「いい案がこの正信に浮かびました、聞いてくださいますか？」

澄み切った青空の下、説明を始める。

「改造人間である私の『箱』としての機能を使い、上様の存在を隠し、通常の使用魔の規格で召喚される……世界を騙せばいいのです。

そして、しかる後に、私は自害なりで己を壊します。

さすれば薬師如来はそのまま顕現される……どうです？」

私の案に、目の前の存在は若干たじろいだように見えた。

……何をいまさら躊躇する。俺が出す案など、大概おどろおどろしいものだと知って

いまいしょうに。

「(一)心配なく。」

元より、己以外の魂を降ろす……『箱』として改造された身です」

つまり俺は、神様などが座す人間型お神輿なのだ。この認識が一番簡単。

「……私の肉体と魂をもつと加工しましょう。そうすれば、薬師如来とてなんとか収められるはず」

説明を終え、返事を待つ。

数分の沈黙の後、如来はゆっくりと無言でうなずいた。

「……じゃあ、やりますねー」

不安を与えないために笑んだのに、我ながら顔は引きつっていた。

「……」

ろくでもない改造など、先延ばしにせずさっさとやった方がよろしい。

小刀で鎧の結び目を切り、脱いで、服切って、肌を剥ぐ。

肋骨を砕いて取り出しやすくして、右腕を入れて心臓を取り出す。

浄土に浄土らしくないものがぶちまけられたが、浄土なのでそのうち綺麗になるでしょう。

……この辺りは面白くないな、回想から省略するか。



「……俺のこと、『重い』って今考えたでしょう、そのくらい分かりますよ」

魂を粉碎し、改造して、箱型の宝具に加工した。

その中に何とか入ってもらい、元あった胸内へ戻す。

「……」

1時間くらい改造に時間がかかり、それからまた3時間くらい気絶していた。

体感時間なので、正しいとは限らないが。

「……う」

体を起こそうとすると、全身に細かくひびが入っているような、不快な感触があった。あれです、ゆで卵の殻を剥くために全体を叩いた時の。

「あれ」

数回瞬きする、視界が狭い。

顔に触ってみると、右半分が消し飛んでいた。

流れる小川、その湧水に顔を映してみると、ぽっかり穴が空いて、その内側から光があふれ出ている。

ひとまず布で覆い、縛る。立って辺りを見渡した。

「うん、変な感じだ、中からばーんと弾け飛びそうな……」

全身を常に刷新されているような感覚が続いているが、まあ、おおよそ上手くいった

の  
だ  
ろ  
う。

「後は、この状態の『俺』を召喚する相手を待つだけ、か」

極楽浄土で、1人つぶやく。

「……上様、聞こえますかー？」

返事はない。

「俺から貴方へ感覚は繋がっていないのか……生前と逆の形になったのか」

誰もいない楽園を歩く。頭上には真昼の月があった。

「でも、嬉しいんだ……俺が、狂っているからなのかな」

俺は牙を見せながら獰猛に笑う。

「二度とこの手を離さない」

運命などあるものか、全ては人の行いによって変わるのだ。

「ああ、世界救われるまで、一緒だ——」

決意を新たに、夢を語り、俺は時を待った。

そして俺は……いつの時代とは分からぬが、『誰か』に呼ばれたのだ。

……覚醒した私は目を開ける。

明るい空間だが、光は人工の物だった。

目線だけで周囲を見ると、樹脂のように柔らかい素材で壁も床も出来ていることが分かった。

体にも目線を落とす。

今は座っている状態で、服は手術着のようにつるとした布、肌のあちこちには管が刺されていた。

これが召喚されたということか？　あまりにも実感が薄いし、頭にある『現代知識』とやらもあやふやだ。

「あなたがわたしの……サーヴァント？」

声が出たので、目の前を見る。

立っているのは……癖のない桃色の髪と瞳を持った、7歳くらいの女の子。

うきうきと嬉しそうな表情で、少しだけはにかんでいる。

「あなたが……」

俺は唇を開き、質問した。

「俺の、マスター？」

少女は満面の笑みになって、言葉を返してくれる。

「そうだよ！ よろしくね……えっと、ランサー！」

俺は左目だけをぱちくりと動かした。どうやら彼女は何か勘違いをしているようだ。

しかし、少女が差し出してくれた、握手を求める手を無視するわけにもいかず、恐る恐る手を伸ばす。

「ええ、マスター」

手が触れ合う。柔らかい肌、争いにも飢えにも襲われたことのない、幸福な子どもの手だった。

「2つ、お伝えしたい事が」

「なあに？」

喜びが隠しきれない明るい声を出す彼女に対し、私は早めに訂正をする事にした。

「1つ、俺のクラスはバーサーカーだ」

手を軽く握ったまま立ち上がると、肌に繋がっていた管がぶちぶちと音を立てて外れ、透明な液体が樹脂の床に広がっていく。

「2つ」

液体が少女の履いている靴にぶつかって、二股に別れ、流れていく。

「貴方に人としての良心があるのだとしたら、今すぐ自害を命じてほしい」

マスターである少女の手の甲に目線を落とした。

3画で描かれた赤い模様が浮かび上がる。

丸い外枠、長針と短針が1つずつ。西洋時計のような形の令呪だ。

「……さあマスター、この狂った男を終わらせようじゃないか」

だってそれが、世界を救う最短の道なのだから。

幼い彼女も、俺のような人の顔した怪物と共に居たい筈がない、きつと承諾してくれるだろう。

「……やだ」

桃色の髪の少女は、首を横に振った。

「なぜだ？」

俺は理解出来ず、直ぐに訳を問うてしまった。

「……ひとりぼっちに、なる、から」

少女の瞳に涙がじわりと浮かんで、くっつきあい、大きな玉となる。

「やだ。ひとりは、やだ。」

おばあちゃん、死んじゃって、もう、かぞく、だれもないの……」

——その涙と似たものを、俺は見たことがある。

「バーサーカー、わたしと、かぞくになつてくれる？」

父は殺され、母は病死。あちこちに人質に出され、周りに味方はいない。

そんな幼い頃、1人、真夜中の庭で泣いていたあの人の姿を思い起こしてしまう。

(いや不味い……………！ ああ、弱ったぞ……………これは俺の弱点に刺さる……………)

彼女と手をつないだまま、困り果てる。

(なるべく早く、使命を全うするために、死んだ方がいいのだが……………)

この体が壊れないと、あの人が…………『薬師如来』が顕現できないのだ。

しかし、子どもを孤独にしてまで、やるべきことなのだろうか。いや、やるべきこと、  
なのだけども……………。

今までだって、あらゆる非道を行ってきた。人を殺し、村々を滅ぼし、国すら壊した  
というのに。

(やるべき、こと、が……………)

止めようよ正信。お前、上様と約束したじゃないか。一揆に組した時のように、また  
裏切るのか？ と責める声も、己の心から聞こえたが。

(うーん……………)

数秒の間に数千回以上思案して、俺は当面の答えを見つけ出した。

「——家族には、なれない」

少女の肩がびくりと跳ねる。

「でも……君が寂しくなくなるまで、側に居てあげようか」

「……いいの?」

「ああ。しかし、ほんの少し、ちよつとだけだから……」

少女の涙は止まり、名残が血色のよい頬の上を滑った。

「じゃあ! いっしょに映画を見よう! おすすめの映画あるの!」

ぐいつと手を引かれる。俺は転びそうになりながらも、足並みを揃えた。

「どんな映画なんだ?」

「不思議な遺跡に住んでいる女の子が……みんなの奪われた時間を取り戻しに行く!

そんな……『世界を救う』お話なんだって!」

「へえ、面白そうだ」

「ほんとに思ってる?」

「思ってる、思ってる」

「へんじがテキストだ! 子どもだけど、そのくらい分かるんだからね! もう!」

……映画を見終わったあと、その女の子に「モモ」というあだ名を付けてあげた。

彼女、とつても喜んでいた。

ぐずぐずに溶けながら、思う。

「……奪われた、薬師如来を。彼ら、どうするつもりだ、『箱』は壊さねば使えぬぞ」  
それにしてはまさか……女神リリスの元に、『あいつ』がいるとは考えてもいなかった。

ほんだまさすみ  
(本多正純……)

俺が妻を捨てていた20年あまりの間に産まれ、初めて会った時にはとうに成人していた、紛れもない俺の子ども。

……俺が、家族にはなれなかった子ども。

(『箱』……霊核を奪われてしまった理屈は分かる)

生前私は、息子であるあいつに地位や仕事を譲り渡した。

おおかた、そのあたりのエピソードを拡大解釈して、俺の霊核を抜き去ったのだろう。

……「貴方はもう、隠居でもなさってください」と言わんばかりに。

「モモ」

廊下を這う。

「助けを呼んでくるぞ。」

俺を殺してくれなかった君を、寂しがり屋な君を、こんな寒い場所で死なせてたまる



もんか」

自らを奮い立たせるために、口を動かす。

「君は将来、しわくちやのおばあちゃんになるまで生きて、そして、暖かい毛布の中で、たくさん家族や、大切な人に手を握られ、想われながら死ぬんだ」

自分で考えたとは思えないほど格好いい言葉だ。

「ああ……これも、いつか見た映画の台詞だな」

——映画、それは今から数百年も前に誰かが撮った、誰かの生きた証。

少しだけ……サーヴァントに似ている、だろうか。

「モモ、君を、助けるぞ、絶対にだ、絶対……」

四肢が溶けていく。

廊下を這いずりながら、俺は、闇の中、ただ前だけを目指した。

その先に、彼女の死という『運命』を変える何かがあると信じて。

第56話 俺の『運命』の話をしよう

終わり

第13・5章 正信くん、君を救う

終  
わ  
り

## 断章 その2 全て朽ちた場所から

### 第57話 永遠を与えられた透明な少女

底がすり減り切った靴で落ちたガラスを踏みながら、その場所に造花を供えた。

色付きの紙で作ったつたない出来のそれは、夜の風に吹かれて花弁を揺らしている。

月明かりを背に受けながら、私は腰を屈める。自分で切った、中途半端な長さの紫がかった桃色の髪が、体の動きを追ってさらりと動いた。

「みなさん……」

花を供えたコンクリートの壁には、ナイフで刻まれた荒々しい線が幾つも走っている。

自らが記したそれを、指先で1つずつなぞる。

「オルガマリー・アームスフィア、ジングル・アベル・ムニエル……」

かつてこの場所に、『カルデア』という施設があった。

人類の未来を保証するために、世界が滅んでしまわないようにと設立された組織と、天文台。

壁に遺された名前は、行方も分からなくなった人や、ここにいて命を失った人達のもの。

そして……私を助けようとして、殺されてしまった人たちのもの。

……これ以外、もう、何も無い。

700年近く前に壊された建物の残骸が、オゾン層で緩和されていない強い紫外線に当たって、少しずつ痛んでいつているだけだ。

「……レオナルド・ダヴィンチ」

何十名と刻まれていた名前は、ある英霊の名で終わっていた。

『——キリエライト』

まだ機能しているスピーカーから、聡明な女性の声が出た。

『トワ・キリエライト。もう夜の10時です、就寝した方がいいのでは』

自らの名前を呼ばれた私は立ち上がり、彼女へ声を返す。

「お気遣いありがとうございます、『ムネーモシユネー』。ですが、この体は休息が不要です」

声をかけてくれたのは、カルデア唯一の生き残りであるシステム。

この施設が本来の仕事を行っていれば、使われていたであろう『彼女』。

『トワ・キリエライト。いかに貴女が不老不死だとはいえ、心まで磨耗しないというわけ

ではありません。

精神のためにも、休息を』

彼女にそう諭され、私は後ろ髪をひかれる思いで墓碑を後にする。

「ムネーモシユネー、ソーラーパネルはあどどのくらい生き残っていますか？」

全ての窓ガラスが割れた無機質な廊下を歩く。

遠い昔の血痕も、吹き込む風に飛ばされて綺麗になつてしまった。

『30%ほどです。修理ロボットで修復していますが、材料が無く』

「集めてきましようか」

『いけません、キリエライト。貴女を狙う存在はまだこの世界にいるのですから』

窓から見える景色は、色のない砂の吹きすさぶ荒野ばかりだ。命の存在など感じられない。

「……では、ソーラーパネルが全損したら、お別れなのです、ムネーモシユネー」

『はい、お別れです』

スライド式の扉を手で開き、白い部屋に入る。

寝台に横たわる前に、机の上の職員証を取った。手を伸ばし、開きつばなしのドアから差し込む月明かりで照らす。

「……ロマニ・アーキマン」

かつて私の担当医であった、男性の名前。

オレンジ色にも見える明るい髪色の彼は、困ったような笑顔で写っていた。

「もう一度、会えるのでしょうか」

私をあつた惨劇から救ったあと、彼は行ってしまったのだ。

写真の中の笑顔を見つめながら、声を思い出す。

『大丈夫だよ、トワ。ボクは帰ってくる、キミをひとりぼっちにしないために、いつか必ず帰ってくるから』

何もかも燃え尽きていくような景色を背景にして、手を握られながら最後にかけてられたあの言葉から……700年近く経った。

数千の星が流れ落ちるのを見て、数億日も太陽が昇る様を目に焼き付けて。

「これもいつか、思い出せなくなってしまうのでしょうか」

彼の顔と名前を忘れないように、毎日この職員証を見つめているけど。

次第に、頭の中の思い出はぼやけていく。

『トワ・キリエライト、就寝を』

「……はい、ムネーモシユネー」

職員証を机にそつと置いて、寝台に横たわり、目を閉じて、形式的に眠りにつく。

——永遠を与えられた私は、何度も同じ夢を見た。

カルデアで生まれて、白い部屋で私の担当医と話す。そんな夢を。  
誰かと共にいくつもの世界を巡り、自分だけの色を見つける、そんな夢を。

第57話 永遠を与えられた透明な少女  
終わり

# 第14章 灰色になったら始めよう

## 第58話 瞼という名の幕は上がり

……映画が始まる前みたいな音が聞こえる。

どうしてそれを私が知っているかというところ、映画を上映する映画を小さい頃見たことがあって。

じりじり、じりじり……。

あれは、おばあちゃんと見たのだろうか、それとも。

(バーサーカーと、見たんだっけ)

……じーつと、響く音。

私は、目を開けた。

Fateシリーズ二次創作

フェイト/デザートランナー 第二部



第58話 瞼という名の幕は上がり

「……………」

目をうろろうろと動かす。

狭い部屋だ。

縁が欠けている黒のパネルで出来た壁、日の光を和らげている半透明な天井で回るのは、大きなファン。

空気を攪拌しているのか、ごうんごうんと鳴いている。

危害を加えてきそうな存在は近くには居ないようで、それだけはほっとする要素だった。

「私は……………」

安全を確かめてから、自分が何者かを確認する。

「モモ……………」

地下都市で育った女の子で、バーサーカー04のマスターで、アスカ、アーチャー961についていう仲間が居て、デザートランナーという白い車で旅をしていて。

……寿命が16歳までの、造られた存在。

(記憶に欠落は……ない感じかな)

私は身じろぎした。

「う……」

今も寝ている固いベッドは、何個かの箱に毛布を掛けて繋いだもののように、背中であれぬ隙間を感じた。

目線を右に向ける。

「夢じゃ、ないか」

——私の右腕は、肘から下が、ぽっかり無くなっていた。

理由は覚えている、リリースに切り落とされたから。

「あれ……?」

しかし不思議なことに、断面は淡いクリーム色の包帯で覆われていて、左腕には針とチューブが血管に差し込まれ、点滴の処置が行われていたのだ。

(治療されてる……)

人かサーヴァントか、それともAIか。

誰の手によるものか分からないけど、止血もされているし、栄養も血液から補充されている。

「……起き、あがつちや、だめ」

情報を得るため、今まさに体を起こそうとした時、声をかけられた。

「あなた、5日も、寝てた。体、ふらふら……の、はずです」

私の顔をのぞき込みながら、胴体を小さな両手で押したのは、8歳くらいの少女。遠浅とひあきの海を思わせる青い瞳に、真っ直ぐ伸ばされた金色のさらさらの髪。

白い肌で、顔は西洋人形のように精巧で愛らしかった。

しかし、着ている服が少女には大きすぎる、だぼだぼの焦げ茶色の作業着だ。

「解熱剤で、体動かせている、だけです」

私は彼女の言葉に従い、もう一度姿勢を横にした。

「食欲、あり、ますか」

少女の問いかけに頷く。

「あげ、ます、ごはん」

銀色のパックが手渡され、左手で受け取った。

上にあるキャップを片手で捻って空け、寝転がったまま口で吸う。

(……味、薄い)

ごくわずかに甘いような……しょっぱいような。しかも保存場所が悪かったのか、ぬるーいゼリーだ。

しかし文句なんて言えるはずもなく、ちゆるちゆるごくごく食べる。食べ終わったあとのパックを、空気を入れ膨らまして遊んでいたら。

「食べ物で遊ばないでください、子どもですか、あなた」  
見かねた少女が回収してくれた。

「ごちそうさまでした、えっと」

「ノインです。あなた、お名前……」

名乗ろうとしたその時。

「あつ、怪我してた『地下生まれ』、起きたんだね」

ノインより年上らしい女の子の声。

「元氣？ 名前言える？」

「デバイスから読もうとしたんだけど、君、デバイスが埋め込んである右腕ないじゃん？」

「ぱつと私を覗き込んだ謎の女の子は、早口で次々喋る。

「ごめん！ あたしぱつかり話しちゃった！

混乱してるよね、ずっと寝ていたんだし……」

日焼けした肌、短い茶色の髪の毛の彼女は、14歳位だろうか。はきはきとした語り口は、快活さを感じられる。

ノインと同じような濃い茶色の作業着を着ているが、サイズはぴったりで、細身のアスリートのようなしなやかな体の線にフィットしていた。

「あたしはレジスタンス『アカツキ』のリーダー、ミライ！ 今年で14になるの」

「私は、モモタ・トバルカイン……」

「名前長いんだねー」

彼女は眉毛をあげて興味深そうに私を見下ろしている。

「……ってあれ？ 『トバルカイン』ってことはガトモス爺さんの親戚？」

ヤバっ、それってカイヤさんの親戚ってことじゃん！」

ミライと名乗った彼女は、私にゼリーをくれたあの少女に声をかける。

「ノイン！ この子連れて行っていない？ 薬は効いてるんでしょ？」

「ミライ、だめ、です」

「それこそダメだよ！ トバルカインの家ってレジスタンスの生命線だよ！？」

会わせてみたら、ガトモス爺さんもちよつとはしやきつと……」

ノインと呼ばれた少女は首を横に振った。

「ガトモス、もう、ダメダメです。研究への、意欲、失っています」

「あーもう！ ノインの分からずや！ いいもん！ 連れて行くもん！」

彼女は、私の左腕から点滴の針と管を手慣れた手付きで外すと、針が刺さっていた個

所に医療用の茶色なテープを貼ってくれた。

「それに……もう空きベッド無いから、寝ていられると困っちゃうし……」

そして私の体の下へ腕を入れて、起きる手伝いまで。

「ミライ、怪我人を勝手に動かせばDr. シヤーンに、叱られます」

少女はその行動を非難するが。

「みんなあたしを子ども扱いして……リーダーに選んだのは大人達だつてのにさ！」

彼女は唇を尖らせながら元氣よく言い返すと、立った私の顔を見上げた。

「貴女とおんなじ名字の……ガトモスって人がいるのね。」

その人の家まで連れてつてあげる、面識あるかもしれないし」

「あ、うん、ありがとう……」

後ろから少女の声が聞こえる。

「ノインが、ついて行きます、心配なので」

「よし、じゃあ3人で出発出発！」

私の左手を引いて行こうとするミライに、私はずっと気になっていたことを質問した。

「あの、ミライ、どこですか？」

「んー？」

彼女はちよつとだけ考え込んだあと、口角を思いつきりあげて自信満々な笑顔で言った。

「アカツキの本拠地！ 『超巨大移動要塞カルナ』だよ！

上にある大きなソーラーパネルで電気を作って動いてるの！

カルナっていうのは、昔いたすつごい強いサーヴアントのことだって！ あやかっているんだって！」

どうやら私は、情報ばかり出会ってそのものにはついぞ巡り会えていなかった、レジスタンス組織の、大きな建物の中にいるらしい。

「はい、洋服の上からローブ被って。きつとじろじろ見られるだろうから」

てきばき動くミライから、ごわごわした布を受け取り、顔と体を隠すように被る。

そうしてから、元気が有り余っている様子の彼女に導かれ、私は歩き出した。

私が寝ていた部屋から出て、長い廊下を通り抜けると、扉の向こう側には……先端が尖った、涙型の広大な空間が広がっていた。

「わあ……」

見えた景色に、思わず感嘆してしまった。

積み上げられた黄土色のコンクリート建物、その側面にへばりつくように設置された沢山の折り返し階段。

その間に、橋みたいに渡されているたわんだ大きな長布が見えた。

建物は、外周部に近づくほどマンションのように大きな物になっていて、真ん中に近づくと背が低い箱型が密集。

「裏口から出て階段降りた方が、闇市側のガトモスの家に近いもんね」

「ノインは、人が多すぎるので、闇市にがてです」

眼下に見えた、幅100m以上あるだろう通路には、年齢も人種も様々な人がひしめき合っていて、大声を出し合っている。

耳をすませば聞こえる声。

「小型テレビの映像ソフトつき！ 正真正銘の発掘品だぞ！ 携帯食料100個から！」

「水いりませんかー！ 物々交換でお願いしまーす！」

「携帯食料売ってるよー！ お年寄りにも嬉しいゼリータイプも揃ってるよー！」

「宝飾品！ 上級都市からの流れ物だ！ ぴかぴかのカラージルコニア！」

その景色は、遙か昔に存在していたという中東のバザールを思わせた。

しかし見上げた空に青色はない。



半透明の分厚いパネルを繋いで作られた、緩い湾曲がある、濁った黄色をした巨大な天井が存在していた。

鈍くされた太陽光が降り注ぎ、どんよりと下を照らしている。

「今年で全人口5万人越えたんだっけ？ 教えてノイン」

「そのとおりです。今から3年前は、4万人でした。」

他のレジスタンスからの、難民受け入れもあり、驚異的な増加率です」

ミライとノインは世間話をしながら、人一人分通るのがやつとな狭い折り返し階段を、怯えもせず降りていく。

「モモタ・トバルカイン、あなた右腕無いから、気をつけて」

「気遣ってくれてありがとう、ノイン……ちゃん」

「はい、ノインちゃん、です」

可愛らしい彼女の表情は乏しい。

「名前長いから、モモって呼んで良いよ」

「はい、モモ」

「ミライちゃんもそう読んでいいー？」

「一番先に降りている彼女が大声で聞いてくる。」

「いいよー！」

私は左手で手すりを掴みながら、バランスの悪い体で一段ずつ慎重に足を進めていった。

……右腕がないのには、まだ馴れない。

「あつ、リーダー！」

「リーダーどこいくの？」

「げっ！ リーダーだ！ やばい品物隠せ！」

階段を降り、建物の中の細い通路を抜けて、先ほど見下ろしたバザールにたどり着く。

ミライはレジスタンスの指導者だけあって顔が知られているのか、すれ違う人が声をあげて反応した。

「はいはい！ どいてどいてー！ ミライちゃんが通りますよー」

彼女は私とノインが通れるように人並みをかき分けてくれた。

私はちらりと周りの様子を見る。

（少し痩せてるけど、みんな元気に働いてる……）

ポケットが多めについている焦げ茶色の作業服、大人も子どももそれに身を包み、手を動かしていた。

部品を組み立てている人、水を等量になるようタンクに詰めている人、赤ちゃんをあ

やしている人。

今まで見たこと無いほど、この場所には人間の営みがあふれていた。

みな笑顔を見せながら、一所懸命に生活を過ごしている。

……キルケートとスローネに出会った、あの海のある地下都市を思い出した。

「ミライ、そこ曲がる、です」

「はいはい」

私が浮ついた気持ちで歩いている間にも、目的地は近づいてくる。

人間だらけの大通りから裏道に入ると、声や音は少なくなり、一気に静かな雰囲気になった。

コンクリート製の大きな箱にドアを付けて出来た、そんな殺風景でミニマムな住宅が並べられた裏通りが目に見え。

「ガトモス、あたしだよーミライだよー、開けてー」

ある家の前で止まり、周りの家とは変わって、明らかに別の場所から持ってきたのであろう場違いな素材の扉をミライは叩く。

がながんがんと、拳が金属にぶつかる音が辺りに響いた。

「……いません、ガトモスは留守にしております」

覇気のない年配の男性の声が聞こえてきた。

「ガトモス開けて！」

ミライは鈍色にびいろのドアノブにしがみつきの、力づくで何とかしようとする。

「いやだ！ 僕はもう引退したんだ！ 隠居したんだ！ そして仙人になるんだ！  
仙人になってお山に登って……天の国に行くんだ！」

「前兵器開発主任がそう簡単に引退出来るわけないでしょ！ いいから開ける！」

「やだー！ 甘い物を積まれたっていやだー！」

双方大人気ない会話のやり取りが続く。

「ミライ」

「なに、ノイン」

少女は背伸びして、苦戦している彼女にそっと耳打ちした。

「……ノインも悪いこと考えるようになったねえ」

「ニヤニヤしないで、さっさと、やってください」

そんなやり取りを2人がしてから、ミライは扉に向かって話しかけた。

「……ガトモス、カイヤさんが帰ってきたのに会いたくないんだ」

ぱつと内開きを開く金属の扉。

「——カイヤが？」

中から現れたのは、60代くらいの男性。

頭髪はもじやもじやした灰色で、口周りには伸ばしつばなしの柔らかい髭が生えてい  
る。

彼は黒色の瞳をさまよわせ、名前に出た人物を探していた。

「……居ないじゃないか！ 僕を騙したな！」

じたんだを踏む彼に、ミライは告げる。

「うん騙した。でも、まんざら嘘でもないんだ」

彼女が手のひらで私を指す。

「この人、モモタ・トバルカインって言うんだって。ガトモスの親戚じゃない？」

老人が近づいてきて、私の顔を下からじつと見た。表情には強い戸惑いが浮かんでい  
る。

「……君、カイヤの娘だったり？」

「あの、孫……みたいなものです」

伝えたいことはあつたが、ミライやノインの前では言うのがはばかられた。

「……そっか、じゃあ僕の親戚だな、間違いなく」

彼は深くゆっくりと頷く。

「ガトモス、この子の保護者になってくれる？ このままじゃレジスタンスに居場所無  
いから」

「うん、いいよ」

返事を聞いたミライは、私と老人の顔を交互に見ると、日焼けした顔に笑顔を浮かべた。

「これで一安心だね！　じゃあねモモちゃん！　後でD r. シャーン呼んでおくから！」

彼女は茶色の服の裾を翻すと、裏道を歩いていってしまふ。

「ミライ、とても忙しい、です。ノインも、補佐に、向かいます」

ノインは金の髪を揺らしながら私達に一礼して、彼女の後を小さな歩幅で追いかけていった。

「……お入り」

「はい」

ガトモスに促され、私は靴のまま彼の家に入った。

第58話　　暎という名の幕は上がり

終わり

## 第59話 もう一人の『トバルカイン』

同じ苗字を持つ老人、ガトモス・トバルカインの家へ私は足を踏み入れた。

「空いている椅子にでも座っておくれ。何か甘いものあつたかな……」

扉から繋がっていたリビングには、裸の黄色電球が天井コードからぶらりと垂れ下がっていて、全体をアンバランスに照らしていた。

家具は、樹脂製の丸い机と椅子が1セットだけ。四角い狭い部屋だ。

『ボツ』『ボツじゃない』と書かれている2つの箱からあふれ出した紙の束が、床の上にごちゃごちゃと広がっている。目を向けてみると、文字や図面が細かく書き込まれているのが分かった。

「あつたー！ チョコレート味のレーション！ 過去の僕のへそくりだあ……」

廊下が玄関から右、左と横に伸びている。部屋は他にもあるのだろうか？

「モモタ、そのちくちくしているローブも脱ぐといい。」

コート掛けなんて無いから、そこらへんの床に落としておいて」

彼の優しさから来たその言葉に、私はうろたえてしまった。

「あの、びつくりさせちゃうかもしれないです」

「え？　なんで？」

私はローブの袖だけまくと、切断されて、今は包帯に包まれている短い右腕を彼へ見せる。

「(こ)ういう……(こ)とで」

「あー……そういうことかあ……」

ガトモスは見つけ出した銀色の袋を手を持ったまま、黒い瞳で私をちらつと見た。

「嫌ならローブ被っていいよ。僕、無神経だったね」

彼はテーブルの上にレーシヨンの包装を置いて、さつと部屋から出ていった。

その間に、ローブを着たままの私は、1つだけの椅子に腰掛けた。

「隻腕かー……つまり、パワーアームが付けられるってことだな、格好いいぞお……!」

……落ち込ませてしまったかと思っただが、元気そうな独り言が隣の部屋から聞こえた。

「コップが2個あった、君にお茶を出そう」

私がいる部屋に戻ってきた彼は、テーブルにマグカップを置き、湯気の立つ透明な液体をケトルから注いだ。

「……お茶の葉無いから、ただのお湯なんだけど」



「ありがとうございます」

熱い湯を飲めば、不安がちだった心は少し落ち着いた。

両手のない私の事を心配してくれたのか、ガトモスはチョコレート味レーシヨンの封を切ってくれた。

「いただきます」

ノインがくれたゼリーを食べたことで、胃袋が動き始めたから、若干の空腹感を覚えていたところだ。大口を開けて、遠慮なく甘いチョコレートにかぶりつこうとしたが。

「あつ……」

……<sup>よわい</sup>年齢60を越えているであろうガトモスは、黒い瞳を揺らして、私の手の内にあるいい香りのレーシヨンバーを物欲しげに見つめている。

「……半分に、しましうか」

「いいのかい?! いやあ、悪いなあ……!」

彼にバーを渡せば素早く半分に折ってくれた。甘みのある小さな欠片が、紙束だらけの床にぱらつと落ちていく。

(……この人、感情が全部顔に出ちゃうタイプだ)

まだ会って数分だけれど、なんだか彼の性格が分かってきたような気がした。

バーサーカーは表情と感情が離れていたり、くつついたりしていた……ややこしい人

だったから、ガトモスくらい分かりやすい人だとんだかほつとする。

「……」

「うん、美味しい、美味しいね、チョコレート味」

彼はしわの刻まれた顔を綻ばせながら、嬉しそうにレーションをかじっている。

「あの」

「なに？ ベッド1個しかないので使っていていいよ、僕ソファで寝るから」

「……気に入らないんですか、私のこと」

「ああ……ああー」

彼は立ったまま頭に手を添え、うんうん唸り始めた。

それから数秒後、ぼつりと言葉をもらす。

「……何をどう聞けばいいのか、分からなくて」

眉尻を下げた、お手本のような困り顔をするガトモス。

「ガトモスー！ Dr. シヤーンだけど！ リーダーに言われたから来たけどー！」

「わー！ 助け船だー！」

彼は玄関に向かい、ミライに見せた態度とは違い、扉をさつと開いた。

「へえ、カイヤさんのお孫さん？ ……あのカイヤの孫!? うわマジで!」

入ってきた人は、180cmほどの高身長で白衣を着て、前髪のある黒髪をショートボブに切りそろえていた。

纏う雰囲気は独特で、中性的な容姿もあり、男性か女性か、私では判別できなかった。「僕の親戚? になるのかな」

「こんな終末世界で、奇遇な出会いもあるんだね」

やってきた人物、Dr. シャーンと気負わない声で話をしているガトモス。

彼は私と入れ替わって椅子に座り、左腕に布を巻いて、空いている右手で手のひらサイズの丸いポンプをしゅこしゅこ押ししていた。

ポンプと布はゴムチューブで繋がっていて、布は腕をゆつくりと圧迫しながら膨らんでいく。

「血圧、ちゃんと計れてる?」

「うん、このアナログ血圧計にもだいぶ馴れてきたからね」

「よしよし、ガトモス前主任は賢いね……」

「賢いよ!」

「あのね、皮肉だから」

「へー」

気心の知れた仲なのだろう、Dr. シャーンとガトモスは小気味良く会話を繋げてい

く。

「名前はミライから聞いてるよ、モモタ・トバルカイン」

来訪者が、壁にもたれかかっている私に声をかけてきた。

「私はこのレジスタンスに所属している、医師のDr. シャーン。

性別とかは自分で決めてないから、君の好きに感じ取って。

旧世界の人みたいに医師免許を持つてるとかではないんだ、技術も知識も叩き上げ  
「さ」

彼、彼女？ ……ドクターは、ヘーゼルナッツ色の瞳で私を観察している。

「ノインが言っていただろうけど、解熱剤が効いているから今動いているだけ。

薬が抜けたらきつくなるよ、40℃位まで体温上がると思う」

私はローブを中途半端に外して、包帯で覆われた腕の切断面を見せた。

「この治療、あなたがしてくれましたか？」

「そうそう。君の怪我は一段と酷かったから、死んでしまいうんじやないかと肝が冷えた

けどね……」

「……その」

「うん？」

「私、どうしてここにいるんでしょう」

——起きてからずっと疑問だった。

私は軌道エレベーター内部に招かれて、女神リリスに負け、腕も切られて。そこから人口の滝の下へ、バーサーカーと一緒に落ちて行ったはずなのに。

なぜ、こんなにも明るい温かな場所にいるのか。

「……私からは何も言えない、説明はリーダーがする。それよりも、私が君に聞きたいな」

ドクターが私へ問いかける。

「内臓機能はぼろぼろで、とても10代の体とは思えない、今年で60歳の引きこもり、ガトモスの方が健康体さ。」

君の体は老化というより劣化を始めてる。もしかして、『地下生まれ』はいずれこうなってしまうのか……?」

何かを懸念したのか、黒眉をひそめるドクター。

「後学のためにも事情を話してくれないか。言いたくないなら、それでいい」

その質問に、私の心が強く痛んだ。

「私は……」

けど、同じ家系であるガトモスのためにも、話をしようと重たい口を開いた。

「トバルカインの家が作ったりリリスの後継機。いわゆる人造人間か」

話終えると、アナログ血圧計を医療カバンに片付けながらドクターはつぶやいた。「しかも寿命は16年ときた。なんて非人道的だろう。ガトモス、何か知ってる？」  
「僕もそんな存在初めて聞いた。カイヤは何をしでかしたんだ……」

2人は一気に深刻な表情になる。

「私だけが知っているべき情報じゃないな。リーダーの所に連れて行こう」

「でも、モモタは怪我してる。1日2日くらい休ませてあげようよ」

「ガトモス、これはレジスタンスの存亡に関わる事柄だ」

「でも、彼女はまだ子どもだ」

「……我らがリーダーも子どもだ、年齢は関係ない」

ドクターがそう言った瞬間、座っていたガトモスは激昂したのか立ち上がった。

樹脂製の椅子が倒れ、床に転がる。

「そうやって子どもを祭り上げることで！ 子ども達の逃げる言い訳を君達大人は奪つたんじゃないか！」

「落ち着いてくれガトモス、君はすぐに感情的になる」

「今回ばかりは我が儘を通させてもらうぞ！」

どんな事情があろうとこの子はカイヤの孫だ！ だったら僕の大切な家族だ！」

荒れていく会話に私は居たたまれなくなり、割って入る。

「2人とも落ち着いてください!」

私の声を最後に、部屋は静まり返った。

「……ごめんなさい、ガトモス、モモタ。

私は一度帰るけど、体の様子が心配だからまた来るよ」

ドクターはカバンを持って立ち上がり、白衣の裾をはためかせながら玄関へ向かう。

「今度は扉を開けないぞ」

「ガトモス、頼むから大人になってくれ」

「僕は大人だ。ただ、君達の望む大人になんて、なつてやるもんか」

「……では、またね」

来訪者との会合は、喧嘩別れに近い形で終わった。

「はあ……怒ってしまった」

椅子を起こし、そこに座りなおして、机に両手を広げているガトモスの背中は、腰が曲がっているせいもあつてか小さく見える。

「落ち込まないでください、その、私……」

彼に自分の気持ちを伝えるために声をかける。

だって、胸の内にはとても暖かいものが広がっていたから。

(嬉しかったんです。貴方が、私のことを思いやってくれて)

自分の意思とは関係なく物事が決まり、どうしようもなく進んでしまいそうだった所を、彼は声を荒げてまで止めてくれたのだから。

「シャーンだつて悪いやつじゃないんだ。ただ、どうしようもなく大人と言うだけで」  
そんな感謝の気持ちを伝える前に、ガトモスは話しだしてしまった。彼の灰色の長いひげがふわふわと動く。

「レジスタンスに個人のわがままは許されない。

家族が止めてと懇願しても、助からない奴から治療は切り上げられていく。  
死にたくないと大声を出しても、銃を持って前線に立つ人間が必要だ」

彼は背を丸める、姿はますます小さく見えた。

「それを周りに強いて、いざという時は強いた自分自身も投げ捨てる。

それが大人だ、それがレジスタンスだ、それが、世界を救うための手段……」  
座っている椅子の脚を、彼は踵かかとでちよつと蹴り飛ばした。

「くそつたれえ!! カイヤはそんな振る舞い、しやしなかつたぞー!」

気持ち吐き出すかのように、彼は喉から声を絞り出していく。

「カイヤは全部自分でやろうとした! 仲間になりたいと言つた奴だけ巻き込んでいた!



どんな立場の奴の話も聞いて……目の前に映る者は、手の施しようが無くたって！  
助けようと足掻いてた！」

彼の叫びを、立ったまま私は静かに聞く。

「300年続いたレジスタンス『アカツキ』よりも！ カイヤの方がずっと……ずっと……」

すすり泣く音が混じる。

「格好良かったなあ……」

がくと肩が落ちた。

「……ガトモスさんは、カイヤおばあちゃんの」

「同じ年の従兄弟だったんだ。生まれた地下都市も同じ、60年も前のことだ」

彼はテーブル上の布で鼻をかむ。

「カイヤは昔から負けん気強くて、はつきりした奴だね。ライブラリ読んでる僕のお尻をよく蹴飛ばしてた」

「へえ……」

「モモタも、お尻蹴飛ばされた？」

「どうかモモと呼んでください、ガトモスさん。」

……一度だけ、お尻ぺんぺんのお仕置きを受けました」

「やっぱり！ カイヤお尻叩くの好きだったもんなー！」

彼の顔は、怒りやら涙やら喜びやらで真っ赤になっていた。

でも、嬉しそうな感情が勝っていて、その証拠に彼はしわくちやの笑顔だった。

「カイヤはいつもこう言ってた。『何も知らないまま死ぬは、ごめんだ』って。

知識欲が強い人だった。一人で色々調べて……17歳くらいのころ、外の世界へ出掛けるようになった。

安全のため、太陽光がない夜に地下都市から抜け出して、発掘調査とか、レジスタンスの人と関わり始めた」

私はガトモスが座っている椅子の側に寄った。

「僕は若かったし、カイヤのこと大好きだったもんだから、憧れだけで付いていった。

外は危険だらけだったけど、レジスタンスから地下都市では聞けない歴史とかも聞けてね……邪神リリスを倒して、人間を自由にするんだって、無邪気に願ったもんだよ」

彼は人差し指で頬をかく。

「みんなカイヤに惹かれて、集まりがどんどん大きくなった。

この『アカツキ』も、カイヤに惹かれて来た人が多いんだ。でも、そうなると面倒な事になった」

「面倒……」

「当時のリーダーがね、カイヤを責めた。

『お前はレジスタンスをいたずらに分断し、混乱させようとしている。何も知らない地下生まれめ』って」

ガトモスは大きくため息をついた。

「カイヤは『つまらないことを言うな』って話してたけど、でも事実そうだった。

カイヤ派とリーダー派にレジスタンスが分かれ、対立始まっていた。要塞内部でも諍いが起こって……」

自らを指差すガトモス。

「兵器開発主任である僕が残ること、カイヤがたった一人でレジスタンスを抜けることで手がうたれた。

僕が30歳の時にお別れして、その後は……もつとつまない話だよ、大人の話だ」  
私は彼のやるせない気持ちを思って、目を伏せた。

「それから先のカイヤの人生を、僕は知らないんだ。だから君を見たとき、とてもびっくりしちゃって」

眼差しだけ動かして、彼の様子をうかがう。

「……だって全然似てない！ カイヤは黒髪黒目だったのに、君はキュートなピンク色とききたー！」

「変……ですかね」

「変じゃないさ！」

良いことだよ、君に出会った人は、生涯君を忘れることが出来なくなるんだもの！」  
ガトモスは裏表のない笑顔を見せる。

「……おじいさんの面白くもない昔話をしていたら、こんな時間だ。

解熱剤の効果がある内に少しでも眠ってくれ、部屋はこっちだよ」

彼に案内され、暗い廊下を抜けて寝室へ。シングルサイズのベッドがでんと置かれて  
いる。

「僕は隣のリビングのソファで寝てる、何かあったら呼んでおくれ」

「何から何まで、ありがとうございます」

「気にしないで。明日君の体調が良かったら、闇市行ってお茶の葉と甘いものでも探そ  
うか」

「……その前に、椅子がもう1脚必要だと思えます」

「それもそうか」

私は安堵で息を吐く。

「おやすみなさい、ガトモスさん」

「おやすみなさい、モモ」

左手でベッドのスプリントの具合を確かめてから、私は身を横たわらせ、毛布をゆるゆる被る。

(……私、生きてるよ。一人じゃないよ、バーサーカー)

消えてしまったであろう、私のサーヴアントに心の中で語りかける。

(アスカとアーチャーも、無事でいるといいな)

不安ばかりだけど、それは無理矢理に頭の隅へと押しやって、少しでも休めるように私は目をつぶった。

第59話 もう一人の『トバルカイン』

終わり

## 第60話 君はきつと生きねばならぬ

次の日。

ポテト味のレーションと温かいお湯で朝ご飯を済ませ、私とガトモスはお出かけする事にした。

「カイヤと関係があることも、右腕が無いことも隠しておいた方がいい。まだ30年前の遺恨が残っているから。」

あと……：地下都市育ちつてことも、みだりに言わない方がいいな、うん」  
外出前にそう言われて、私は深くフードを被る。

ガトモスはふわふわしている自分の髪に簡単に櫛を通し、こげ茶色の作業着を身に纏うと、サイドポーチに携帯食料をパンパンになるまで詰め込んでいた。

お互いに身支度を整えると、家の外に出て、最後に出てきた彼が電子キーではなく物質の鍵で家を施錠した。

「戸締りもしたし、出かけようか」

「はー」

人気がない裏通りを並んで歩く。

上からはパネル天井越しの鈍い太陽光が注ぎ、空間全体を重たい黄土色に染めていた。

『闇市』は楽しいぞー!」

「えっと、『闇市』って、何なのですか?」

字面から意味は想像つくけれど、その認識が間違っていないか確認のため聞いてみる。

「うーんとね、レジスタンスは基本、配給制度つてところから説明するよ。」

人間が生きられる最低限の物資がきちんと分配されているけれど、もっと欲しくなるのも人の性だ。<sup>さが</sup>

配給された食料を、かつて旧世界にあつたお金の代わりにして、物を取り引きしている。

それが『闇市』。流通しちやだめな発掘品とかも売っているよ」

「取り締まりとか、しないんですか?」

「リーダー含め、上は目をつぶってるね、キリがないから。でも危ない品物は回収しにくるね」

「へえー……」

かつて住んでいた地下都市とは、全く違った社会秩序が形成されているらしい。続けてガトモスに質問する。

『地下生まれ』って……ミライにも言われたのですけど……」

「説明してあげるけど……好きな言葉じゃないんだよなあ……」

彼は灰色の柔らかいひげを撫でながらつぶやいた。

「地下都市で生まれたり育った人間を、レジスタンスの人達は『地下生まれ』とひとまとめに呼んでいる。

レジスタンスの人は地上で生まれたからね、そしてそれは彼らの誇りに繋がっているから」

「誇り……」

「うん。彼らは言うさ。『我らレジスタンスは邪神リリスとAIの思想に染まらず、真に人間らしく生きているのだ』……とね」

歩きながら話している間に、細い道が終わり、昨日ミライやノインと一緒に見下ろした、闇市への大通りに合流する。

「掘り出し物の回路！ 何かに使えるぞ！」

「ポテト味じゃないレーション売ってまーす！」

「粉末スープ！ 安くしてるよー！」



活気は昨日と変わりなく。ごわついた布製の服を着た人達が、声を上げ、手を動かし、生活を営んでいた。

「家具屋はこつちだ。人ばかりすごいから、はぐれないようにね」

「はい」

人の波をすり抜けるようにして、沢山の音と声を浴びながら目的の場所へ向かった。

「おう、引きこもり主任、元気そうじゃねえか！」

「久しぶり。あともう主任じゃないから」

「どーせまた呼び戻されるぜ、レジスタンスは万年人材不足だからな」

箱型の住居の、通りに面している前面の壁を全て外して改造してある建物が、ガトモスの言う家具屋だった。

人影はまばらで、さっきまでいた表通りに比べるとうんと静か。

「主任が俺の店で買物なんて珍しいな」

タンクトップを着たムキムキの男性がここの店員らしい。

テーブルや椅子、タンスなど、見たことのある形の物が並べられている。

「家族が昨日やってきてね、2人暮らしになるから、椅子を買い足そうと思って」

「おー……後ろに立ってるフード被ってる奴のことか」

「シャイな子だから、じろじろ見ないであげてね」

「おう、了解だ」

男性はこつくりとうなずいてから、椅子数種類を店先に持ってきた。

「持ってきた分の携帯食料で買えそうなやつは……と」

それらをガトモスがつぶさに観察する。

「おねえちゃん、おきやくさん？」

ぼーっと立っていたら、5歳位の子どもに声をかけられた。

顔は、店員と似ているように見える。くりくりの大きな目をした可愛い男の子だ。

「うん、お客さんだよ、こんにちは」

「ここ、おれとおれの父ちゃんのお店！」

「そうなんだ、いっぱい家具が置いてあるね」

「うん！ 父ちゃんがお外からもってきた！ でもつくったやつもあるよ！」

「すごいね」

「すごい！」

買い物が終わるまでの間、男の子となんてことのないお話をする。

「……おねえちゃんにこれあげる、おれのつくったやつ、サービスだぜ！」

彼がごくごくそと服の内側から取り出したのは、樹脂を固めて作られたマグカップだつ

た。

持ち手は少しへによつとじていて、カップもややへこんでいる。

「ありがとう、貰うね」

彼の行為を素直に受け取るべく、私は腰を屈めて……ついうっかり、右手を出そうとしてしまった。

「あつ」

ローブの内側を見てしまった男の子が、声を上げる。

「ご、ごめんなさい」

私は自らの軽率さを自戒した。

……中途半端に失われた右腕を見つめる男の子の瞳は、どこまでも澄んでいて、まん丸。

「おねえちゃん、おれとおんなじだ」

男の子が袖に隠れていた右腕を伸ばした。

……手首から先が、無い。失われた場所の面は丸くなっていて、脂肪組織が集まって  
いるのかふるふると揺れていた。

「むかしさ、てんじょうのパネルが、どーんっておつこちてきて、おれの手、なくなっちゃった」

あつげらんかんと言う彼の言葉に、私の心は強くかき乱される。  
「でも……おれ、手がなくてもがんばれる！」

うんとかんばつていつか……父ちゃんみたいなりっぱな人になる！」

男の子が、哀れみも偏見も含まれていない瞳で、私を真つ直ぐに見た。

「おねえちゃんは、なにになりたい？ やりたいこと、ある？」

言葉が出ない。

「私の、なりたいもの、したいこと……」

答えられず、しやがんだままで居たら、父親である店主がやってきて、男の子をひよいと肩車してしまった。

「お前、あのコップ一番上手くできたやつだろうに……あげちゃったのか？」

「うん！ だつてもつとじょうずになるから！ お店にならべられるくらい！」

親子はごく自然に会話している。

「おねえちゃんまたきてね！ つぎはびっくりりさせるくらい、すごいをつくつてき！  
まつてるから！」

私は立ち上がり、胸にしっかりとマグカップを抱える。

「……大切にすね」

何があつても強く、夢を持って生きている彼らの顔を見ることが、今の私にはどうし

でも出来なかった。

「軽くて使いやすい椅子にしたよ。目的も達成出来たから、一度帰ろうか」

曲がっている背に荷物を担いでいるガトモスに言われ、私は家具屋の親子に一礼してから、家路についた。

「僕ら出かけている間にシャーンが来ていたみたい。何か置いていったな」

ガトモスの家の前に、中くらいの箱が置かれていた。

「君は先に家の中で休んでいて。箱は僕が持つていく」

家に入り、買い物や片づけた後に、ガトモスがテーブルの上に1つずつ広げてくれた。

「中身は鎮痛剤と解熱剤と……君の、荷物だな」

私が着ていた、乾いた血がべったりとこびりついた灰色の作業服。

キルケーから貰った、呪いの力まじなが込められたエメラルドの飾り。

そして。

「……バーサーカーの、腕章と手紙」

白いつるつるしたプラスチック製のそれにも血の汚れがついていて、『0004』の刻印がかかるうじて読めた。

最後にテーブルに置かれたのは、彼からの手紙、だったけど。

「ひどい状態だな。血が付きすぎて、手紙だなんて分からなかったよ」

私の血でもあるだろう、黒と赤の混ざった液体が染み付き、宛名でさえ読めなくなっ  
てしまっている。

封ごとガチガチに固まっていて、開けられる筈もない。

「落ち込まないで、モモ。」

昔、汚れた書籍の洗浄作業をやったことがある。時間はうんとかかるけど……綺麗に  
出来る」

「頼んでも……いいですか？」

「もちろんだとも」

優しく言ってくれたガトモスに、バーサーカー04からの手紙を預けた。

「食事の後、鎮痛剤と解熱剤を飲んで、今日はもう休むといい」

彼が私に錠剤の入った瓶を手渡そうとしたその時、彼の懐から何かが転がり落ちる。

「……これ」

私も見たことのある物だった。

「液体リソース！」

思わず声に出してしまった。

発電機の燃料にもなり、病や傷の治療にも使え、サーヴァントの欠かせない、万能工

ネルギー。

そして……人間の遺体やサーヴァントの粉砕物を混ぜ合わせて作られる液体。

「なんで！ ガトモスさんがこれを！」

「……シャーンが置いていった箱に、薬と一緒に入っていた。多分リーダーの差し金だ。処分しようと思って、隠した」

彼が腰をゆつくりと曲げ、落ち着いた動きで液体リソースの小さなボトルを拾い上げる。

まるで……知っている物を扱うみたいに。

「これの正体を……貴方は！」

「——知っているよ。」

僕だけじゃない、レジスタンスに所属している大人なら、この要塞に住んでいる大人なら、みんな知っている」

ボトルが机の上に置かれる。自ら発光するそれは、テーブルに淡い青の色を反射させた。

「知っているし……使うときもある。手段をね……選べないから」

長く伸びた眉の下にある黒の瞳は、深い憂いを湛えていた。

「薬が効かなくなったとき、このボトルを飲めば体調は楽になると思う。」

……見つけた以上、隠してはおけない。君の判断にゆだねることにする」  
ガトモスが私の左手の上に、輝くそれを優しく置いた。

「……ごめんよ。僕も、僕自身が軽蔑する大人の一人だ。」

カイヤに見られたら、幻滅されて、きつとお尻すら蹴飛ばしてくれない」  
退室する彼の背を見送ってから、手の上のボトルを見る。

あんなにおぞましい由来の物体なのに、光は青く澄んでいて、物語に出てくるサンゴ礁の海みたいだった。

「……私」

薬を飲んだ後、ベッドへ横になりながら考える。

(手紙、アスカ、アーチャー、自分の体のこと、レジスタンスのこと……)

ここ数日で知った情報が多すぎて、とても混乱している。

深呼吸をしてから、液体リソースのボトルを手に取った。

灯りの落とされた部屋で輝く、唯一の光源。

(『何も知らないまま死ぬは、ごめんだ』)

ガトモスから聞いた、カイヤおばあちゃんの言葉。

(『おねえちゃんは、なにになりたい？ やりたいこと、ある？』)



マグカップをくれた男の子から言われた言葉。

（『どうか、好きなように生きて』）

バーサーカーが私に伝えてくれた言葉。

「私……」

原点を、思い出せ。

旅に出た理由を。何がしたいかを。

あと数ヶ月の命で出来ることを、考えろ。

「……『知りたい』、もつと、世界のこと。

そして、アスカとアーチャーを助けたい。もう一度、友達に会いたい」

私は思い知った。

自分の手の届く範囲なんて、小さいもの。

（世界を救いたいなんて大口叩くのなら……もつと、力がある）

情報を集めないと。仲間を集めないと。

それをしなければ、私は周りに蹴とばされて流されるだけの小石だ。

「決めた」

私は夜の闇の中で体を起こす。

「ミライに会って、話を聞く」

優先順位をつけて、1つずつ行っている。決意を新たに、私は私自身を肯定する意味を込めて、力強くうなずいた。

次の日の朝。

「僕もついていくよ」

ガトモスは前から家にある方の椅子に座ってレーションをかじりつつ、そう言った。

「……自分のわがままですから、1人で行かせてください」

彼は無言で首を横に振った、否定の意味だ。白髪が動きにあわせて揺れる。

「絶対に奴らはあの手この手で君を丸め込んでくるぞ。」

そうしたら……貴重なサンプルとして、研究対象におとし扱われるだけだ」

「……取引します」

私は昨日買ってきた椅子に座り、ミルク味のレーションを食べる。

「リリスと私は直接話をしました。そのおかげで、彼女の計画や真意を知ることが出来た。」

この情報を使って、世界のことや、私の友達の安否とか行方とか、どうして私がここにいるとか、分からないこと全部聞き出します。

……レジスタンスの目的って、確か」

「邪神リリスを倒し、人類を解放すること。」

うーん、レジスタンスは君の話を聞きたがるだろう……けど……」

ガトモスはお湯をすすった。

「君の話を妄言だと切り捨てられたらどうする?」

「うーん……」

確かに、私の話には証明がないのだ、弱った……。

「体が良くなるまで、この家で暮らしたっていいじゃないか。」

僕が教えてあげられる範囲の事は伝えるし、焦ることは……」

「でも……私には時間がないんです」

昨日、男の子から貰ったマグカップに左手で触れる。ほんのりあったかい。

「……何かをやりたいなら、早くしなくちゃ」

「モモ」

ガトモスはテーブルに空になったレーションの包装を置いた。

「……じゃあ、僕は君の味方としてついていこう」

「いいんですか?」

「いいよ、上層部にちよつとガツンと言ってやりたいこともあるし」

彼は手についた粉をもみ手して落とす。

「そうと決まれば、身だしなみ整えて出発……」

立ち上がろうとした瞬間、家の外から耳を刺すような金属音が聞こえ、その後、焦り  
でうわずった男性の声が。

『——緊急放送！ 緊急放送！ これは訓練ではない！』

ガトモスは私に手のひらを見せ、動こうとした私を無言で制した。

要塞内部のあちこちに設置されたスピーカーから、声は続いて発せられる。

『要塞内部に敵が侵入！ ……戦闘用ロボット、ドローン……AI、多数！』

——全身の血の気が引き、背筋が凍った。

『非戦闘民はシエルターへ！ 繰り返す！ これは訓練ではない！』

武器を持っている市民は周りの人間を守れ！ 敵は……ぐはあつ！ がぼつ』

男性の呼びかけは、水っぽい断末魔で終わった。

『はあい、物理ハッキング完了♡ あつ、全員殺したつてことね。

何はともあれ……放送室いただきました♡』

次に聞こえてきたのは、全く違う、甘い甘い響きをもった少女の声。

『やだ、血が顔に飛んじやった……』

あーあー……5万人のレジスタンスのみなさーん！ 聞こえますかー？

君達の襲撃に……すっごくムカついたから、復讐しに来ちゃいましたー♡』

後ろにハートマークでもついていそうなほど、とろけるような愛らしさをもった声だ。

『大きな声で自己紹介♡ あたし、人類を応援する都市運営システムの1体♡』

『反逆者殺戮専用！ かわいいかわいい、メルティハウリン・キルロードちゃんだよ♡』

私の思考が加速する。この名乗りは間違いなく、都市を管理するAI特有のものだ。

『今から殺戮用ドローン飛ばしまくす♡ ロボットも使っちゃうね♡』

みんな1人残らず殺しちゃうからあ、せいぜい足掻いて、数秒間伸びた人生を楽しんでね♡

……でも君達が悪いんだからね！ だって、あたし達の大事な物をぐちゃぐちゃにし

たんだもん♡』

呼吸を忘れ、その言葉の意味について必死に考える。

『以上、人類とリリース様を応援する都市運営システムからでした♡ バイバイ♡』

放送がぶつりと切れて、終わった。

家の外から、発狂したかのような悲鳴が聞こえてくる。

「嘘だあああ！」

「殺人口ボットが来る！ くるぞおおお!!」

「い、いやっ、いやあああ!!」

何百という、現実を受け止めきれない人の声が空間内に響いていく。

「……ガトモスさん」

「モモ、今すぐ避難するのは危険だ、パニックに巻き込まれる」

彼は立ち上がり、曲がっていた背をしゃんと伸ばすと、紙束だらけの箱を漁る。

「銃、弾は……ある」

彼は拳銃のマガジンを確認してから、服の表につけられたホルダーに引っ掛けた。

「ガトモスさん、私にも武器をください」

「……片手で扱える物はこの中にはないよ。君は逃げることだけ考えるんだ」

彼は私にそう告げると、別室に行き、リュックサックを背負ってきた。

「そのリュックは」

「当面の食料と……敵に奪われたくない大事な『武器』が入ってる」

会話の間にも、何人かが家の前を通り過ぎていく足音がした。

「表の通りの声、静かになったね。シエルターへ移動しよう」

「……分かりました」

私はフード付きローブをかぶり、家を出る前に、テーブル上の、バーサーカーの腕章と手紙を内ポケットに入れた。

（一緒に行こう）

こればかりは、置いていきたくなかった。

「僕が安全を確認するまで、家の中で」

「はい」

ぼそぼそと小さい声で会話をする。

「うん、行こう」

銃を片手に持った彼について歩いていく。

裏通りには誰かが慌てて逃げた痕跡が散らばっていて、携帯食料の袋や飲料水のボトル……子どもの落とし物なのか、青色のボールが転がっていた。

第60話 君はきつと生きねばならぬ

終わり

## 第61話 花は散りゆき

「シエルターへ行くために表通りを横切るよ。何があつても、絶対に足を止めちゃだめ」  
「分かりました」

私よりも経験が豊富そうなガトモスに従い、布と棒で作られた出店の横から体を出す。

「……妙だな、敵影がない」

彼の言葉と同じ疑問を私も抱いていた。

先ほどの挑発的な発言とは裏腹に、空飛ぶ殺人ドローンも機械化サーヴァントも見当たらない。

「あと数百mでシエルターの入り口がある広場に着く、頑張つて」

何事もなく通りを横断し、別の裏道へ入る。

（何だろう……変な雰囲気だ……）

襲撃を受けたというのに、こんなにも静かなものなのだろうか？

「うん、敵影なし。行ける」



ガトモスが頭を動かし、安全を確認している。

目の前に見える、建物の間に義務的に作られたかのような四角い広場には、敵の影も無ければ人の影もない。

(……やつぱり、おかしい気がする)

でも今の私には、この感覚が『ただの心配しすぎ』なのか、生物的直感なのかの区別が出来なかった。

「僕が先に行つてシエルターの中の人とお話ししてくる。少し建物の裏に隠れていて」  
ガトモスが周辺をもう一度見渡してから、リュックサックの金具を少しだけ揺らして走っていく。

その後ろ姿を眺めていたときだった。

「——みっけ♡」

甘い声が頭上からして。

「ザックリ！ ザクザク♡」

空気を裂く、ひゅんとした音が耳で聞こえ。

「ぐわあ！」

馴染みのある血の匂いが、続いて嗅覚に届いた。

ガトモスが右足を抑えながら転がる。

「そんなに大きさに反応しないでね、足の臄を切っただけだから♡」

四角い広場に降り立ったのは、女学生のような服に身を包んだ少女。ただ、スカートの丈はかなり短い。

化粧でもしているのか、頬は淡くオレンジだ。

「顔認証……へえ、兵器開発の主任さんなんだあ♡ すつてきー♡」

心にもないことをずらずらと並べ言うその声は、加減なく甘く。

「はじめまして、ガトモス・トバルカイン♡ メルティハウリン・キルロードちゃんです♡」

ピンク色のツインテールは腰下より長く伸ばされて、少女のわざとらしい挨拶に、ダイナミックな動きと色彩を添えていた。

「他の人間を……どうした!」

「ここだよ♡ ドローンちゃんたち、迷彩シート持ち上げて、めくってー!」

足の血管箇所を抑えながら敵を睨みつけるガトモス、

彼女は質問の答えを出すように、ぴよんぴよん飛びながら合図すると、上空に集まってきたドローン数機のプロペラ稼働音が大きくなり。

「じゃーん♡」

小さなロボットアームで虚空が摘ままれ——がぱりと、景色自体がめくれた。

その下に隠されていたのは、プラスチック製の猿ぐつわを嚙まされた何十人という人達。

みな一様に足から血を流していて、座り込んだまま、がたがた震えている。

その中には、昨日買った家具屋の親子もいた。

青ざめた顔の父親は、腕に息子をしっかりと抱き、懸命に守ろうとしていた。

「……」

ガトモスが一瞬だけ私に視線を向け、口を動かす。

それは明らかに「出てきちゃ、だめだ」と言っていた。

「キルロードちゃんね、人間さんにとつてもムカついているから……きつちり、1人ずつ殺してあげたいの♡」

彼女はガトモスの首根っこを掴むと、片手でずるずると引きずっていく。

地面に血の線が引かれた。

「他の場所でも同時進行的に殺しちゃってるから、人手不足は心配しないでね♡」

キルロードちゃんには無数の体と、沢山のかわいいドローンちゃんがいるのだ♡」

私は姿勢を低くしたまま体を静かに動かし、広場の様子が見えるように移動する。

「このエリアの人間も集められたし、そろそろ殺そうかな♡」

面白かったよ。シエルターにたどり着いて……『やったあ！ 助かったあ！』つ

ていう、安堵の表情♡」

彼女が手に持っていたのは、中抜きが施された、分厚い軍用ナイフ。「ガトモスさん、さつきから物影を気にしてどうしたの？」

……分かつちやつた！ もう1人、居るんだね♡」

引きずられ、人間の集団の中にまともめられるように置かれた彼は、右ふくらはぎの裏を抑えたまま、何も答えない。

「だんまりー……でもいいもん♡」

彼女はリュックサックを背負っているガトモスを片手で楽々と持ち上げると、ナイフの刃を太い首の動脈へ当てる。

「ウサギちゃん！ 10秒以内に出ておいで！ そうじゃないと……ザツクリ♡ いくよっ。」

私は建物の冷たい壁にもたれかかる。

鼓動が早くなる心臓に手を置き、上を仰ぎ見た。

(……どうする)

どうしたいかは決めてある。でも、武器がない。

(こんなとき、パーサーカー04が居てくれたら)

きつと、多くの人間を助け出すことが出来るだろう。

アーチャー961が居てくれたら、あのキルロードというAIを粉碎し、あつと言う間に融解させてくれただろう。

(アスカが居てくれたら……きつと、震える私の手を握ってくれたはずだ)

それだけでもすごく、心が強くなれる、勇気が出てくる。

仲間が、居てくれたら。

……でも、今は誰もいない。残された左手で体をさすった。

「あつ、出てきた出てきた♡」

キルロードの後ろにいる人間達が、恐怖で乾いた目を見開いている。それはもちろん、ガトモスも同じで。

「ローブを被ったウサギちゃん、お顔を見せて？ お名前教えて？」

小首を傾げる彼女に、私は大きな声で言い返した。

「——なぜ、お前のようないかれたAIに名乗らなければいけないんだ？」

唇を大きく動かし、誰にでも聞こえるようにはつきりと発音。

「……いかれてるのはあなたじゃないのー？ ウサギちゃん」

彼女はぎらつくナイフの刃をガトモスの首に向けたまま、私へ言葉を返す。

「ずいぶんと余裕な態度だな、AI。お前の敵対者が目の前に立っていると言うのに」

キルロードは人工皮膚上にしわを寄せ、化粧があっても幼げな顔に怪訝な表情を作

る。

私は切り落とされてない部分の右腕につけたそれを、左手の指で指し示した。

「——私はサーヴァント！ 人類の守護者にして、お前を殺せる力を持った存在だ！

……それでもなお、その余裕な態度を保てるのか？」

彼女は私の宣言を聞き、髪色と同じピンクの瞳を細める。

「かわいいこと言うウサギちゃんだね？ じゃあ……ちよつと遊ぼうか♡」

ガトモスが下ろされる、彼が服につけていた拳銃を、そつとキルロードは没収した。

「サーヴァントと戦うのは初めてなの♡ 優しくしてね♡ すぐにバテちゃだめだよ

♡」

ピンクツインテールの少女は、右手に軍用ナイフを、左手に拳銃を持ち、安全装置を外して構えながら、上品に微笑む。

(……嘘に食いついてくれた。上手くやれば、何人かは助けられる)

私は左手の指先で、バーサーカー04の腕章を触る。

そうしながら、周りの状況を見た。

上空には、迷彩シートを持ち上げているドローン。シートは機能を停止したのか、今は白くなっている。

AIの後ろには、足を切られて動けない人達、リュックサックを背負って座り込んで

いるガトモス。

(一手目に相手がどう出るのかは、完全に運任せだ……。

今考えている以外のパターンで来られたら——死ぬ)

敵は、人間以上の身体スペックを持つAI。

対峙する私は、片腕もない、武器もないただの人間。

「……いっぱい遊ぼうね♡」

彼女が地面を蹴って、戦いが始まった。

「おっそーい！ それでもサーヴァント?！」

一瞬にしてキルロードは私の眼前に迫る。敵の桃色の瞳に、冷や汗で肌をぬらした私の顔が映っていた。

「じゃあ——右腕、もーらい♡」

甘すぎる声で宣言し、軍用ナイフを突き出し、肉へ刃を入れようとしたが。

「……あれ?! 空っぽ?!」

残念ながら、私に右腕は無い。

キルロードは受け止める対象がない突き出した腕と、踏み込んだ足の勢いで、バランスを前のめりに崩す。

(今……)

二度はないだろうAIのうっかりミスを、私は見逃さない。

「きやつ……!」

私は決して引かず、体制を崩したせいで低くなっているキルロードの頭を、まだ残っている右腕の部位で上から思いつき叩いた。

「……っ」

骨と神経に衝撃が走り、背骨が痺れる心地がする。

でも気にしてはいられない、次の行動に移る。

「わっ……なあに?!」

今にも倒れてしまいそうなキルロードに、着ていたローブの一部を被せ、視界を奪う。

次に、私は半身だけを動かし、敵の後ろ手に握られていた物を掴む。

そうしてから、倒れていく方向とは逆に……つまり上方向に引っ張った。

意外なほど簡単に、武器がすっぽ抜ける。

動きに従い、私のローブがはためいた。

「やだ、銃取られちゃった!」

奪えた武器は、ガトモスの物であった拳銃。

敵は素早く身を起こし、一切のためらい無く右手に握っていた軍用ナイフを投擲しようとしたが。



「どこでもいい！ 当たって！」

私は叫びながら、キルロードの手によって、既に安全装置が解除されていた銃のトリガー引いた。

独特の轟音と、焼けたような臭いが辺りに漂う。

「にゃん！」

敵の太ももに弾がかすり、柔らかいシリコンの皮膚がとろけながら飛び散った。

焦げ臭い液体が、彼女の引きずってきた人間の血痕の上にたれ落ちる。

「もう……サーヴァントなんて下手な嘘つくウサギちゃんは、みんなの前で皮を剥いであげるんだから！」

苛立った声を出しながら、敵は恐怖心を煽るかのようにゆっくりと近づいてくる。

足の腱を切られ、満足に動けなくさせられた人達が、噛まされた猿ぐつわの下で、声にならない悲鳴をあげた。

「……無茶をしたな！」

ふらつきながらガトモスの側へにじり寄ると、そんな事を言われた。

「でも、こうしないと貴方は死んで……！」

「銃を僕に！ 片腕で当たったのなんてまぐれだ！」

彼に拳銃を渡すと、血を流しながら必死に膝立ちをして、敵へ狙いを定めていく

「リユックを下ろして中を漁ってくれ！ 換えの弾が入ってる！」

言われたとおりリユックを彼の背中から下ろし、ジッパーを摘まんで開ける。

その間に、2回、銃声が響いた。

漁る……けど、私が入り出したのは弾じやなかった。

液体リソースの入ったボトルと、もう一つ。

「……モモ？」

困惑したようなガトモスの声。

手に掴んだそれは、60cmほどの金属製の筒で、揺らすとちゃぼんちやぼんと液体が入っている音がした。

「……『これ』、わざわざ持つてくるほど、敵に奪われたくない武器、なんですよね」

最後の弾を打ち終わると、消炎混じりの大気をガトモスがはつと吸った。

「……やめろ、それは君が夢見ているような逆転の武器じゃないんだ」

筒の表にあるボタンを推すと、金属ケースの一部が開き、中身が露わになった。

「……武器、なんですよね」

淡く輝く青いリソースに浸されていたのは、棍棒だった。

木製にも見えるが、黒いべとべとした粘性のものがこびりついていて、得体は知れない。

「……やめろモモ、考え直せ。それは人類の大きな過ちであり、強い呪いなんだ！」

この形に封印される前も、君みたいな人間の命を何十人も吸ってきた！

それは……『人』が触れちゃいけない物なんだ！」

私は左手を伸ばす。

「……ガトモス、私、『人』じゃないんですよ」

彼と彼の言葉に背を向け、私はその『武器』を迷わず手に取った。

その瞬間。

(……あ)

左手の指先から、皮膚が神経と共にめくれ、血がほとぼしって、そして。

強い光が腕全体を覆い、怪我している周りの人も、ガトモスも、敵であるキルロードも含め、辺りは真っ白になった。

(……すごく、痛い)

——それが、私が私として最後に抱いた感覚だった。

第61話 花は散りゆき

終わり

## 第62話 次に咲くのは灰色の――

「あれ……」

気がつくと、先ほどまでいた移動要塞内部とは違う風景に囲まれていた。

「どこだろう……」

目に映る世界は全てセピア色。

空を見れば、薄い雲が上空の風に吹かれてちりぢりになっているところだった。

周りは砂が舞う荒野だけど、私がいた世界とは違い、枯れ草などが生え、次に訪れる命の気配を感じさせた。

「……君は、こう思ったことはないか」

目の前に筋肉質な男性の背が見える。うんと大きな背中で、髪は白色だ。

乾燥地帯特有の長い布の衣服で、右手には……血が滴る棍棒が握られていた。

「誰かを、殺したいと」

凶器の太い先端からは、ねっとりとした血が一粒ずつ地面にたれ落ちていて、石の地面を汚していた。

「……ありません、でも」

「でもっ……」

問いかけてきた男性が振り向く。

精魂な顔立ち、影のある銀の瞳、かきついた皮膚、その上に飛び散ったまばらな模様の血飛沫。

光彩は銀河のようにちらちらと燃えつつも、何もかも終わった後のような、静かな心の内が覗き見えた。

「……誰かを助けたいと思つたことは、何度もあつて」

私の答えを聞くと、男性は目を細めた。

「君の名前を覚えてくれないか」

低く落ち着きはらつた声には、邪気も嫌みもない。

感情も薄く、簡潔な語り方をする人だ。

「……モモタ・トバルカイン」

胸に左手を置きながら、落ち着いた気持ちで答えた。

「私は……カイン。アダムの子」

彼はゆつくりと瞬きをした。

「初めて人を殺し、初めて嘘をついた男だ」

白いまつげの下にある瞳の影は、限りなく深かった。

「君は私の末裔だな」

「そんな……感じです」

セピア色の枯れ草を、遠い場所から吹いてきた風がかさかさとして揺らした。

「……時に、君は運命の存在を信じるか？ どうしようもない、世界の流れを」

繋がりが一見なさそうにも思える問いかけに、私は戸惑い無く言葉を返す。

「私の……家族みたいなのは、運命って言葉を嫌ってました。」

それに……最後にお別れする前に、こうも言っていて」

目の前の人物に気持ち伝わるよう、唇をそつと動かす。

「『世界も人間も、救わなくていいんだ。』

誰かが書いた運命なんてないし、そんな苦しいだけのものは、君の人生に要らないだろう。」

「どうか、好きなように生きて」って……そんな、優しいことを」

一字一句間違いなく思い出せた。

私のピンク色の髪が揺れて、ほつぺたをこする。

「私、運命と呼ばれるものは、あるような気がするんです。」

でもそれは……誰かに一方的に押し付けられるものなんかじゃなくて、自分で作って

いくものだ」

「作る？」

「はい。どう生きて死ぬかは、自分で選ぶ、作り出せる」

定まった心で、私は自分の考えを述べていく。

「私はそうしたい。そのために……力が欲しい！」

周りや世界から押し付けられるまやかしの運命、それをはねのけられる力を――

そこまで言うと、私は一度唇を閉じた。

「……そうか」

カインと名乗った男性は、両腕を体の脇で弛緩させたまま、天を仰ぐ。

「君には間違いなくカインの血が流れている。」

だが……君と私は、全く違うものだ」

彼は血塗れの体のまま歩いてくると、私の右肩に手をおいた。

「君は私の力だけ使うといい。カインの物語と感情は……知らないだろう」

私を見下ろすその顔は、とても穏やかで。銀の星瞬く星海の瞳には、私の桃色の瞳が映っていた。

「君は私の力を持つ。けれど、違う運命を描く。」

借り物だと卑下する事はない、既に対価は支払われた――カインは君の言葉を得た」

祈りのような言葉が、流れていく。

「目を一度閉じて……また、開ける。その瞬間から、君は変わるだろう」

自分のものではない柔らかい力で、まぶたが閉ざされた。

「人間でも、英霊でもない存在……生者と死者の狭間、黄昏の道を行く者となる」

耳の横を、暖かい風が吹き抜けていく。

「……始まりの殺人者『カイン』が、自らの末たる君に力を貸そう」

彼に聞きたいことがまだまだあるのに、時間は止まることなく、むしろ加速していくような。

「鉄を打ち、そして」

切り落とされ、失われたはずの右腕に感覚が灯り、じんわりと温かくなっていく。

「——殺したいと願ったものを、殺せる力を」

そう思っていた矢先、全ての感覚が消え、私は光の中へ投げ出された。

目を、開ける。

半透明のパネルで蓋をされた長大な天井、火薬の臭い、遠くから聞こえる人の悲鳴。

移動要塞の中、閉ざされた空間。



(ああ……帰ってきたんだ)

心は風いだ海のように穏やかで、目に映るもの全てが夕日の輝きを帯びているかのように見える。

なのに、全身の感覚は鋭く尖って、周辺のあらゆることを私に伝えてくれていた。

「……なに？ ウサギちゃんどーしたの？」

光に包まれる前と同じ場所に、敵の姿があつた。

「モモ、君……その姿は……」

震えているガトモスの声。

頭部に違和感があつたので手を櫛代わりにして解かすと、ごっそりとピンク色の髪が抜けた。

「……もういい！ 飽きちゃった！ 死んじやえー！」

メルティハウリン・キルロードが、手に持っていたナイフを投擲するが。

「……」

私は眼前に迫つたそれを、右手で掴んだ。

そう、手だ、

ガトモスのリュックサック、その中にあつた武器は、私の体と融合して、新しい手と腕になったのだ。

血に塗れたような黒色の、自在に動く右腕。

「なんで？ さつきまでウサギちゃんの右手……無かったのに……！」

奪った刃物を手のひらに広げ、じっと観察する。

黒い金属を加工して作ったかのような、新しい私の右手のひらの上に、刃渡り30cmほどの軍用ナイフ。

私はそれを手の内で握ると……『作り替えた』。

オレンジ色にとろけながら物質が融解し、どろりと下向きへ伸びていく。

「キ、キルロードちゃんのナイフが……」

うろたえる敵の声を聞きながら、私は作り替えたナイフを手の内で回す。

それは、1mほどの長さの『槍』に変貌していた。

「あなた、なに……？」

ひるがえる刃の表面に、私の姿が映る。

色素の抜けた灰色に近い白髪、桃色を捨て去った銀色の瞳。……見える景色も、5cmほど高くなっていた。

私は右手に槍を構え、彼女が私へそうしたように、敵に自己紹介をした。

「——私はサーヴァント。我が真名は……『カイン』」

ガトモスが息を飲む。

「一番初めの嘘つきで、一番始めに、人を殺した」

人間だった頃のピンク色の髪が、地面にはらはらと束になって落ちていく。映画で見た、桜の花びらみたい。

「……カインの鉄が、あなたを倒す」

キルロードの顔に浮かんだ感情は、強い恐怖。それを見ながら私は思う。

（なんだか……遠いところまで来ちゃったな……）

人間を止めて、サーヴァントに。

（でも、だからこそ！ 出来ることがあるんだ）

もう、守られて、右往左往しながら逃げるだけの自分じゃない。

目の前の現実を変える力を、私は確かに手に入れたのだから。

「……よくも、よくもキルロードちゃんのお気に入りナイフを！」

ピンクの髪の2つの房を振り乱しながら、顔を激しく歪める彼女。

「ガトモス、銃貫うね」

「あっ」

腰を抜かしている彼の手からそつと銃を奪い取って、敵へ向ける。

狙いは。

「きやあつー！」

アンドロイドの足の膝。

弾丸は狙い通りに着弾し、シリコンと金属で出来た関節部を打ち砕いた。

私の右腕に発射の反動が伝わるが、それはごくわずか。

片足の機能を失った敵はがくと姿勢を崩し、ピンクツインテールがふわりと揺れ動く。

その一瞬の隙を、私は逃さない。

「……………うっそー！」

跳躍する、高さにして3m。

落下の勢いを利用し、敵の胴体へ強烈な蹴りを飛ばす。

ぼつたりと背中から倒れたキルロードの頭部へ、銀の槍を突き立てた。

「キ……………キルロードちゃん、こんな……………人間……………に……………」

彼女の体から噴き出す赤い潤滑油が、返り血のごとく私にかかる。

被っていたローブと着ている飾り気のない茶色の作業服が、一気にぎとぎとした油の臭いに包まれた

「倒し……………たかな？」

破壊した彼女の体の上に、へたり込みながら肩で息をする私。

「……………まだだ、モモ！」

「ガトモスの声で振り返り、彼の指さしている方向へ目を向けると、人型ひとがたのものが建物の隅から逃げ出そうとしている所だった。

揺れるピンク色のツインテール、先ほど破壊したばかりのキルロードと同じ姿。

（そうか！ 意識だけ別の体に移したのか！）

かつて出会ったAI、スローネから得た情報を思い出す。

ブラックボックスからブラックボックスへ、AIは意識を移すことが出来るのだと。

（全部のアンドロイドボディを潰さないと……殺せない！）

遠い場所から悲鳴が聞こえてくる。

（でも、ただ殺したら分らないことが増えるばかりだ！

何体も倒している猶予なんてない！ 活動を停止させる！）

周辺を見渡す。使える物はないか。

（あれを！）

私は低い箱型の建物の壁を蹴り上がって、殺風景な屋上に登り、そこからまた跳ぶ。

手を伸ばしたのは、敵が使っていた迷彩シート。

機能が停止されたのか、白く変色したそれは、丈夫そうで、分厚い。

持ち上げていたドローンから無理やり奪い取って、ばたばたと風を受ける音をたてな

がら、そのまま別建物の屋上へ着地。

「よし、追いかける！」

シートを手早く畳んで脇に挟み、キルロードの姿を探すが、路地が入り組んでいて、見下ろす屋上からでも視界は悪い。

(もつと高い場所……)

そう考えながら目線を上に移すと、小型プロペラで浮遊している何体ものドローンが目に入った。

「……いぐぞー！」

迷い無く飛んで……ドローンに足をかける。

当然私の重量に耐えきれずに、ぐんと空中に沈み込むが、墜落する前に次のドローンへ跳躍する。

さながら、軽装の武士が飛び石に移って川を渡るように。

壇ノ浦八艘飛びならぬ、要塞内ドローン飛び。

私は、宙を駆けていく。

「嘘！・化け物じゃん！」

キルロードの焦った声。

敵より上をとっているおかげで、彼女の姿……箱や瓦礫が障害物になっている裏路地を、もたもたと逃がっているのがはつきりと見えた。

「やだやだやだ！ 来ないでよおー！」

彼女は涙ぐむ人のように声を怯えさせるが。

「なーんてね♡ 嘘♡」

くるりと振り返り、高速で後ろ走りをしながら、小振りの薄いナイフを取り出した。一度に5本ずつ投擲され、私の横を掠めていく。

頬が切れた。新しく生えたばかりの白の髪もちよつとだけ切り落とされる。

「キルロードちゃんの主義に反するけど……あたし、ロマンチストより、リアリストなんだー♡」

彼女の側に別のドローンが寄り、空輸してきた箱を落とす。

綺麗な形のふくらはぎのある足で蹴り上げて、箱を開けると、側転しながら中身を手にとった。

「ずががががー♡」

中途半端な逆立ち状態のまま、片腕でぶっ放してきたのはサブマシンガン。

私はドローンを飛び石にするのは止め、屋上に降りて腰を落とす、体勢を低くした。頭上を掠めていく無数の弾。着ているローブにも焦げ付いた穴が空く。

私は小脇に抱えていたシートを投げるように広げた。

「わー！ 小賢しー♡」

白い布が空間に広がり、一時的だけど彼女の上方方向の視界を奪う。

「さつきはちよつとだけびつくりしちやっただけど……もう油断しないもん♡」

人間が高知能AIであるあたし達『都市運営システム』に、それこそ逆立ちしたつて勝てるわけないもんねー♡」

油断しきつた、甘い声。

でも私は、旅をして、彼らの弱点を知っている。

「……にゅ？」

彼女は首を傾げていることだろう。

だって、さつきまでいた屋上に私が居ないのだから。

落ちていくシートと同じ速度で、建物下の地面に音もなく着地し、彼女に見えないよう、私は姿を隠したのだ。

そして、低い姿勢を保ったまま体で布を押す。

「やあん♡」

ばさりと布がキルロードの体に被さったが、彼女は艶っぽさのある声を出すばかり。

……その油断に、私は甘えることにした。

(一瞬で決めないと、逃げられる)

分かっている、だからこそ冷静に。



（頭は潰しても逃げられた、なら……）

狙うのは胴体。布ごと彼女の胴体へ乗って……。

（脳みそであり心臓であるブラックボックスを……抜き取る！）

その身を包むシートと制服と、人工皮膚を一瞬で槍先で切り裂いて、内側を露わにした。

見えたのは、私の手のひらに乗るほどの黒い箱。

（読みが当たった！）

迷わず手を伸ばし、繋がっているチューブを千切りながら、むしり取った。

「あ……」

キルロードの体から力が抜け、サブマシンガンを取り落とした。ごとりと、乾いた地面に重たげな音と共に。

ブラックボックスを傷つけないようにしながら立ち上がり、私は首を動かす。

「ドローンが……」

ふわふわ浮かんでいた小型の機械達は、司令塔を失い、お互いにぶつかり合ったりして、がちやがちやと墜落していく。

「――動くな」

私はその声にびくつと身を竦ませた。

恐る恐る周りを見てみたら、幾つもの銃口が建物の影から私に向けられている。「武器と持っている物を捨てて、両腕を上げろ」

レジスタンスの人間達が、怯えと警戒を含んだ表情でこちらを見ていた。

「……武器は捨てます」

私は槍を地面へ投げた。

「でも、ブラックボックスは捨てられません。壊れちゃうかもしれないから」

発言を聞いて、数人の大人が銃のトリガーに指をかけた。

「待って」

彼らを止めたのは、私が見たことのある人物。

(ミライとノインちゃんだ)

防弾ベストと銃を装備した彼女らは、私に近づくと、警戒の色が濃い瞳でじつと観察している。

「貴女、強いんだね。まるでサーヴァントみたい」

琥珀色の瞳を細めながら、ミライは冷静に言葉を続ける。

「それに、『ブラックボックス』の事まで知っているなんて、ただ者じゃないよね」

私は胸に小さな黒い箱を抱きしめたまま、目をそらさずに会話をする。

「色んなこと、知っています。貴女が知らないようなことも」

ミライは短い茶色の髪をなでながら言葉を返してきた。

「……司令部まで来て。貴女とお話したい」

私は無言でうなずいた。

第62話 次に咲くのは灰色の――

終わり

## 第63話 モモタは生きていけるでしょうか

「リーダーミライ、彼女はモモタ・トバルカインで間違いない……髪と目の色と背の高さこそ変わっているけれど」

「そこまでいくと別人じゃん、ガトモス前主任」

私が案内されたのは、レジスタンスの司令部、その中の狭い暗い一室。

大きな涙型の要塞の尖った先っぽ。そこから真っ直ぐ上に伸びた塔の上の巨大な箱が、見張り台であり、会議などを行う司令部なんだとか。

「彼女の体にサーヴァントの力が宿ったんだ」

戦いの後、足を引きずりながらやってきたガトモスが、私のことを庇ってくれ、体に起きた変化まで説明してくれたのだ。

そのおかげで、私に向けられていた沢山の銃口は下げられ、こうして落ち着いた場所で話が出来ている。

「どういうこと？ 普通のサーヴァントとは何か違うの？」

「うーん、そうだな……」

私がキルロードを止めたおかげで、死者が出る前に戦いは終わったらしい。

(それだけは……よかったなっと思って思う)

本当だろうか、疑う気持ちもあったが、今はそれは横に置いておく。

ミライとガトモスの難しい話を、立ったまま小耳に挟みつつ、私はテーブルの上に表  
示されている『要塞外観部の立体映像』を眺めていた。

(へー……何だか大きなカブト虫みたいな姿しているんだね、『超巨大移動要塞カ  
ルナ』って)

走行中は体の横に広げられているソーラーパネルは、まるで甲虫の薄い羽のようだ  
し、先端から上に伸びているエレベーターと司令室は、あの特徴的な角のよう。

(夜になると、ソーラーパネルを上を畳んで……更に上へ蓋が被さるんだ！ 本当にカ  
ブト虫みたい……)

巨大な要塞は車輪やキャタピラなどではなく、稼動性に富む多脚で移動しているよう  
で、その動き方はちよつとムカデっぽいかな。

『アーキマンレポート』に記されていた『デミサーヴァント』という存在が、今の彼女  
ではないかと思う」

「……アーキマン、700年前の聖杯戦争の優勝者か」

ミライはタブレット内の資料に目を通しながら、テーブルに肘を置く。

「つまり、意識はモモタのまま、力だけサーヴァントつてことだね」

「うん。レポートの通りであれば……だけど」

ガトモスが黒い瞳でじっと私を見た。私もなんとなく目線を返す。

「彼女をどうします、リーダーミライ？」

声を出したのは、部屋の隅で銃を抱えたまま待機していた、2 m近いレジスタンスの男性。

鍛えているせいか顔を含めて全身が厳つく、歳は……30前後だろうか？

「……心配しないで」

ミライは彼に冷静な声をかけた。

「モモタ・トバルカイン、貴女に頼みたい事があるの」

「……なに？」

私は立たされたまま、彼女と会話をする。

「私達のレジスタンスに入って、一緒に戦ってほしい」

その言葉に、すぐに答えを返す。

「今は答えられません」

「……なぜ？」

私は指先で、テーブル上の、キルロードから取り出したブラックボックスをつついた。「聞きたいこと、知りたいことがあるの。それを教えてもらうまで、私は答えを出すこと

は出来ない」

「……そう」

ミライはよく焼けた肌の上に、怪訝な表情を浮かべた。

「じゃあ、まず何を聞きたいの？」

彼女は椅子に座つたまま足を組んだ。

『上級都市ピオーネ』にいた私が、どうして今ここにいるのか、その理由」

理由も聞きたいが、自分の現在地も知りたかつた。

(アスカやアーチャーのことも心配、早く合流したい)

私の質問に対して物憂げな顔のミライを、お付きの男性が何かを止めたような眼差しで見た。

「……まかすべき、ではないです。ミライ」

光源はテーブル上の立体映像とモニターしかなく、空気まで暗い部屋に入ってきたのは、西洋人形のような容貌の少女、ノインだった。

体をすっぽり覆い隠す作業着をふわふわ揺らしながら、彼女は進言する。

「彼女には、知る、権利があります。」

そしてあなたには、責任者として、話す義務があります。

……レジスタンスリーダーとして。命を助けた、者として」

「……分かったよ、ノイン」

ミライは大きく息を吐くと、私を空いている椅子へ座るよう促した。

私は素直に腰を下ろして、被っているローブの裾をはたいてしわを伸ばす。

「……貴女を助けたのは、私達レジスタンス『アカツキ』の隊員。

そしてその理由は……ついで、だったから」

「ついで？」

「うん」

ミライは私から目をそらさず、語り始める。

「今から約7日前、レジスタンス3団体による合同作戦が行われた。

ここ『アカツキ』と、『マヒル』、『トコヤミ』の3つでね。

作戦名は……『上級都市ピオーネ攻略戦』、目的は資源獲得とリリス討伐の為の情報収

集。

「……後半は、ほとんど建前なのだけど」

私は言葉の意味がすぐには理解できず、ただ瞬きをした。

「貴女を資源ついでに回収した上級都市ピオーネは……もうないの。戦闘の余波で消滅

した」

ガトモスは座ったまま腕をさすった。



「これから、どうやって都市を攻略したのか、話す」

要塞を映し出している立体映像が一瞬だけぶれた。

「私達がどうやって、別の価値観を持つ人達を蹂躪したのか……どうか最後まで、聞いてほしい」

彼女の動き始めた唇を、私は心あらずの状態で見つめるしかなかった。

第63話 モモタは生きていけるでしょうか

終わり

## 第15章 箱の中のファム・ファタール

## 第64話 始まりの庭で『永遠』を見た君は

わたくしは、とても不思議な夢を見ていました。

陽光が再現された人工灯の下、ガラス繊維で出来た植物に囲まれた緑あふれる庭に、いつの間に立っていたのです。

(……は……で……しょう?)

辺りをぼんやりと見渡してみると、真っ白な小さな箱……いえ、棺が庭の隅に置かれていることに気づきました。

透き通る葉と、今にも砕けそうな極彩色の大輪の花の下に、隠れるようにあつたその棺。

わたくしは屈んで、それに耳を近づけます。

「……お母さま、どうして死んでしまったの?」

泣きながら呟いている、小さな女の子の声。

……それは間違いなく、まだ幼かった頃のわたくしのものでした。

(これは、わたくしの昔の夢?)

疑問符が頭に浮かびます。

(変な夢……)

だってわたくしは、昔からエトおばさまと暮らしていて……お母様のことなんて、覚えていないのに)

両親を亡くしてすぐ、親類に引き取られ、それからずっと『上級都市ピオーネ』で2人暮らし。

(そのはず、なのに)

目の前の棺の中に疑問の答えがありそうで、わたくしは屈んだまま箱の蓋を開けようとしたが、まるで溶接されているかのように固く、びくともしませんでした。

「……どこですか」

誰かが庭に足を踏み入れた音。わたくしは棺から慌てて離れて、ガラスの植物の影へ隠れます。

「どこにいるのですか」

感情を全て押し潰して、平たくしたような若い男性の声。

気付かれないよう、そっと覗いて見てみると、青い糸で刺繍が施された、美しい白い礼服を着た人物が立っていました。

でも、顔はつるつとした質感のヘッドギアなどで隠されていて、黒髪であることくらいしか分かりませんでした。

あと、黒い2つ角みたいなパーツも頭についています。

「箱の内に、だれか……」

彼はすぐに棺を見つけると、しゃがみ込んで、中にいる小さな女の子に声をかけました。

「……ねえ、見知らぬあなた」

女の子は棺の中から彼へ言葉を紡ぎます。

「どうして、このせかいには『永遠』ってないのかしら？」

それはとても素朴な声で……故に、世界の何もかもに絶望しきっているかのような響きを持っていました。

「——だいききな人は、いつかみんな死んでしまう。」

思い出がたくさんあるお家も、いつかくずれさってしまう。

きらきらの宝石だって、くだけて、ぼろぼろになるの。

夜空にかがやくお星さまだって、うんと未来には、全部消えてしまうのでしょうか？」

彼は白の布に包まれた膝を、緑の柔らかい地面につけたまま、女の子の言うことを全部聞いています。

「それに……わたしは、お母さまの一番たいせつなものには……なれなかったの、ずっとなれないの。」

だから……もう何もいらぬ。だって……『永遠』じゃ、ないのだから」  
棺の上に、彼の手がそつと置かれました。

「……それが、棺に入った理由」

「うん」

女の子は以前箱の中のまま、彼の言葉に答えます。

「わたしを気にかけないで。わたしをかえりみないで。」

わたしを想わないで。わたしをよばないで。

わたしを……あいさないで。

だって意味がないの。だって……さいごには全部、失なわれてしまうのだから」

彼は女の子に語りかけます。

「あなたはこれから、どうするのですか」

「——死ぬわ、お母さまと同じように」

庭を満たす優しい人工の日差しは、上から平等に降り注いでいるというのに、この場にいる誰も、温めてはくれないようでした。

「……」

彼は無言で棺の蓋に指をかけると、とても慎重に取り外しました。

「……ねえ、どうして開けたの？」

悲しみと疑問が混ざった声で言いながら、昔の……7歳頃のわたくしが身を起こします。

ビニール繊維で作られた色とりどりの花が、棺からいっぱいこぼれ落ちました。

まだ幼く、短かった黒い自分の髪にも花がついていて。

彼は長い腕を伸ばすと、枝から摘み取るようにそつと指先でそれをはがしてくれました。

「教えて、見知らぬあなた」

舌足らずな自分の声が聞こえてきます。遠い過去からの言葉。

「それは……私が……」

彼の声には、自分でも、自分の行動の理由が分からないような、戸惑うような響きが含まれていました。

それでも……最後には、彼自身の言葉で答えてくれました。

「……俺が、1人になりたくない……思ってしまったからだ」

小さい頃のわたくしは、彼をぼうつと見つめています。

紫色の宝石がついた髪飾り……お母様の形見だと聞いているそれが、きらつと光を反

射しました。

「あなた……とてもきれいな人ね」

まばたきをすれば、子どもの白いほっぺの上を涙が流れていきます。

「わたし、『永遠』をさがしているの……あなたは『永遠』？」

彼は首を横に振って、否定の意を表します。

「この世に永遠のものはない。全ていつか、滅び去る」

「じゃあ、どうして生きているの？ ……何も、のこらないのに」

うなだれるかのように、顔を下へ向ける彼。

「……分からない。俺は、俺が生きている意味や価値が、分からないんだ」

女の子は言葉を聞きながら、棺から完全に立ち上がると、ふわふわの造花を彼の頭の上につぶりのせました。

彼がはっとした様子で顔を上げます。

「あなたとわたし、おんなじね」

はらはらと、彼の黒い頭髪の上をパステルカラーの花が流れていきます。

「見知らぬあなた。あなた……とてもきれいな人ね」

女の子は花をすくい取っては、彼へ注ぎます。

はらはら、はらはら。こぼれていく花、流れていく色。

「——決めた。」

死ぬのなら、あなたみたいなの、きれいな人のとなりがいい」

女の子も彼も花にまみれていて、そこに白の人工灯の光が差し込みます。

「なんだかそれって……とても、『永遠』のような気がするから。」

思ったの、かんじたの」

涙を手の甲で拭って、ほんの少しだけ女の子は微笑みました。

「わたし、あなたのことが好きになってしまった。」

ねえ、『愛』してもいい？ 『愛』は『永遠』だって、お母さまは言っていたわ」

彼は機械部品で隠された向こう側から、じつと彼女を見つめていました。

「それだけはどうか……許してほしい」

膝をついている彼の姿は、懺悔する罪人のようなシルエツトで。

「俺に愛される価値などないんだ！ 俺は生きていてはいけないんだ！

俺は……産まれてきてはいけない存在だったんだ……！」

崩れ落ちるように両手まで地面につけて、顔を隠すと、泣く人のように肩を震わせた

のです。

「だから俺は置いて行かれたんだ……俺は必要とされなかった……俺は邪悪な存在だつ

たから！」



……だから、『永遠』に誰にも『愛』されてはいけないし、永遠にどこにも行けないんだ！」

明るいだけの庭で、花にまみれながら、彼は慟哭どうくします。

女の子はまばたきもせず、その背中を見ていて。

「じゃあ、わたしがあなたの手を引いて、つれて行ってあげる」

躊躇ちゅうちゆもしないで、透き通った声で語りかけました。

「……どこへ？」

「どこかへ。」

どこにも行けないあなたとわたし。2人だけで行けるところへ、行きましよう？」

彼女は言葉が続けます。

「あなたはわたしに『永遠』を見せてくれたから。わたしはあなたに、おんがえしをしてあげたい」

顔を恐る恐るあげた彼の頬へ、女の子は指先だけで触れて、目と目を真っ直ぐに合わせます。

「あなたが、世界中の人にきらわれても、わたしは好きだと、言いはりつつけるわ。」

あなたが、なみだをながす時は、そばにいて手をにぎってあげる。

だれかが、あなたを、きずつけようとしたときは、わたしも同じきずをうける。

何もできないときは、空を見てあなたを想う、いのりをささげる」

「……どうして。何の価値もない俺に、そこまで……」

女の子は彼がしてくれたように、彼の髪へついていた花を指先で摘み取りました。

「わたし、あなたを『愛』したいと、思ったから。

……そういえば、おかあさまは亡くなるまえ……もう1つ、言っていたわ」

彼は身動きも出来ず、じつと声を聞いています。

「人間には運命があつて、その下で運命の人に巡り会う」……つて。

そっか！ あなたはきつと、わたしの『運命の人』！

『運命の人とは、愛を分かち合う人のこと』……『運命』が先？ 『愛』が先？ ……

どっちでも同じね」

上から降り注ぐ光が、一瞬だけ明滅します。

「あなたから見たわたしはそうでなくとも……わたしにとつて、あなたはとくべつ。好きな人」

女の子の邪気も何も含まれていない透明な声が、小さな庭に静かに響いていました。

「だから……」

数百年前に録音された鳥達の歌声も、そつと庭に流れ出します。

「そばにいてもいい？」

この『棺』から出て、もういちど『棺』に入って、もやされるまで、あなたのそばに少女の言葉の意味。つまりそれは、生きてから、死ぬまで。

「……俺は答えられない、その権利を持たない」

呆然としたような口調で、彼は答えます。

「そう、ならかつてにそばにいるわ」

女の子はいそいそと棺の中から体を出して、まだ膝をついている彼の手を引っ張りました。

「いきましよう？ わたし、あなたと生きていたくなつたから」

彼は彼女を思つてか、立ち上がります。

「……俺は、生きていてもいいのだろうか。何もかも間違つて、息をしているというのに」

吐き出された言葉。

「分からないわ。わたしだって、おかあさまが死んでしまったのに、生きていていいのか……分からないの。」

でも、ないでいたらおなかが空いた、頭もいたい。

いっしょにごはんを食べて、それから考えましよう？

あなたといっしょに食べたなら……お母さまといっしょに食べた時と、同じくらい、

おいしく感じそうなの」

女の子と彼は、手を繋ぎながら歩いて、庭の外へ消えていきました。

残されたわたくしは、棺の中を覗き込みました。

造花が散らばり、死を連想させるその箱の中は、空っぽで――。

「……イリア、ファイリアってばー」

エトおばさまの声と、肩を揺さぶられて、わたくしは微睡みから目を覚ましました。

「どうしたのファイリア？ サーヴァントオークション、あまり面白くなかった？」

今いる場所は、柔らかな赤の布張り椅子が設置された、劇場のような空間。

わたくしの隣に座っている人は、茶色の髪をお団子にして、簡素なドレスを着たエト

おばさま。

「……ごめんなさい。少し、眠ってしまっていたみたいで」

共に暮らしている、大切な家族です。

でもなぜでしょう。彼女に「ファイリア」と呼ばれると、時折頭が痛むのです。

「体に不調は無いのね、ああ……よかつた」

エトおばさまは、少しほうれい線の刻まれた顔に安堵を浮かべて、ほっと息を吐いて

います。

「あなたに何かあったら……私、死んでしまいたくなるもの」

そう言葉を続けるおばさまを安心させてあげるため、わたくしは唇を動かしました。

「何もありませんよ。だってここは世界で一番安全で、全てがある場所なのですから」

わたくしは髪を飾る紫の石に指で触れ、その次に胸を飾る緑の宝石を触り、心を落ち着かせます。

「……フィリアの言う通りね、

だってここは、女神リリス様の遣いであるAIによつて、何重にも守られている上級都市ですもの」

まだ席に着いているわたくし達をおいて、そろそろとオークションの観覧者が帰って行くのが横目に見えました。

今回のオークション、その前哨戦である下見会の感想をひそひそと会話しながら。

「いやあ……あのコルキスの魔女はなかなかの美しさでした」

「まだ下見会だというのに会場の熱気がむんむんと……」

今回のオークションも湧きそうので、実に楽しみですな」

「やはり、狙いはあのサーヴァントですか？」

「ええ。神の血を引く美丈夫……全く、凝り始めると、生存権がいくらあつても足りませ

んよ」

「私もあなたほど生存権があれば……シャルルマーニュの勇士達を一揃えしたいものです、あははは」

見目麗しいサーヴァントを連れてくる者、煌びやかな宝石を身につけている者。

全て、上流階級の人間でした。

「ねえフィリア。私達のお家、少し生存権に余裕があるし……サーヴァントを1体買ってみない?」

「えっ?」

突然の提案に、虚を突かれてしまいます。

「可愛いサーヴァントにしましょうよ、家事も得意であれば言うことなしね。」

色んなお料理作らせて、歌なんかも歌わせれば……きっと毎日が楽しくなるはず」

「……おばさま」

「なあに?」

わたくしは心に強い衝動を覚え、思わず言ってしまった。

「サーヴァントは……駒鳥ではありませんのよ? ましてや家事手伝いのロボットでもありません」

「えっ……? どうしたのフィリア? 怖い顔して」

指摘されて、自分の頬を触ってみます。……強ばっていて、固くなっていました。

「……ごめんなさい、おばさま」

由来の分からない感情を、制御せずに表に出してしまったことを、おばさまに謝ります。

「……いいのよ！ 気にしてなんかいないわ！」

おばさまはぎこちない笑みを返してくれました。

「私……あなたと一緒に生活できて、本当に嬉しいのよ、フィリア！」

「わたくしも嬉しいです、幸せです」

決まりきった文句を口に出すと、胸がちくりと痛みました。

「エトおばさまは先に帰っていらして。わたくし……少し、散歩をしてから帰りますから」

気持ちが高んだか落ち着きませんから、1人になって、静かな場所へ行きかけたのです。

「でも」

「大丈夫。おばさまがさつき言っていたでしょう？ ここは何重にも守られている上級都市ですから」

「……そうね！ 危険なことなんて何もない」

会話を終えて席を立ち、他の観覧者と同じように出口へ向かいます。

金に輝く取っ手付きの重たい扉は、執事型アンドロイドの手によつてうやうやしく開けられ、わたくし達は当然のようにそこを通り抜けます。

「ではまたね、ファイリア。3時のお茶の用意をして待っているわ」

「はい、エトおばさま」

わたくしはクリーム色のスカートの裾を持ち上げて、一時の別れのご挨拶をし、廊下に出ました。

(どこに行きましようか……)

赤いふかふかの絨毯が敷かれた道を歩きます。

(シヨツピングエリアは人が多いし、アンドロイド動物園や水族館も右に同じ。

カジノ……生存権をギャンブルに使いたくありません。

とすると、残るのは……)

わたくしの足は、豪華な道の終点へと向かいました。

壁にかけられたレプリカの名画を横目に見ながら、奥へ。

そこは。



「映画館エリア……」

わたくしの望んでいた、人の少ない、静かな空間でした。

映画などは上流階級、中流階級ならば自宅で視聴できるので、わざわざ出掛けて見る人は少ないのでしょうか。

ずらりと並べられた扉の上には、そのホールで何を上映しているのかが表示されています。

「喜劇や冒険……人生と恋についての物語なども……本当にたくさん映画が……」

2713年である今から、1000年近く前の無声映画、白黒映画から、フルカラー映画まで。

古今東西、様々の映画が1日中流されているのです。

内装は、1970年代の極東の映画館をモチーフにした、レトロで落ち着いたもの。好きな人には堪らない場所でしょう。

でも、わたくしはどの映画もなんだか見る気がせず、歩いては通り過ぎてしまいます。数分歩き続け、とうとう廊下の行き止まり、最果てまで来てしまいました。

そこにあつた14番スクリーンの上映内容を読み上げます。

「……『マハーバーラタ』」

口にした響きに、何故だか強く引きつけられ、金に輝く取っ手を掴んで、扉を開けま

した。

暗闇に包まれた通路を歩いて、並べられた席に座ります。

わたくし以外、誰もいませんでした。

「……」

膝の上に乗せた両手で足を撫でながら、どきどきしつつ待っても、スクリーンは何も映してはくれません。

「——ああ、ごめんなさい。もう全て終わってしまつて」

誰もいなかったはずなのに、若い男性の声が後ろから聞こえてきました。

声が飛んできた方へ振り向きます。

人……白い服を着た人が上の席に座っていましたが、劇場が暗いせいなのか、顔はよく見えません。

「もうこのスクリーンは何も映しません……全部、何もかも何もかも、終わってしまいましたから」

聞き覚えのあるような、ひたすらに優しい声。

わたくしは席から立ち上がり、目を凝らしますが、靄でもかかっているみたいに、彼の姿はよく見えませんでした。

「……あなたは？」

その問いかけに答えず、彼は席から離れ、わたくしの横へ来ます。

「私は亡霊、残留思念です。そして、貴女と彼へ彼方から呼びかけるもの。」

——さあ、ここから出て、終わってしまった物語の外へ旅立ちましょう、

白い衣装を着て、綺麗な白の手袋も身につけた、180cmほどの男性。

でも、やっぱりその顔も姿もはつきり見えはしなくて、わたくしは目をこすりました。

第64話 始まりの庭で『永遠』を見た君は

終わり

## 第65話 「時の砂は流れ落ち、再び降り積もることない」

移動した場所は、劇場エリア内の休憩室兼、遺失物置き場。

背もたれのない革張りの数個の椅子と、雰囲気作りのため、レトロな造形の自動販売機が並べられた空間。

隅には、木製風の背の高い置き時計もあり。

わたくしと……幽霊と名乗った青年以外、誰も居らず。なんだか廃駅のように忘れ去られ、寂れていました。

「何か無くしてしまったのですか？」 ■■■

訪ねる青年の声。

わたくしが、エメラルド付きブローチを指先でいじりながら眺めていたのは、台の上にある忘れ物達。

青年も横に立ち、散らばったそれらを眺めています。

「……そう言うわけではないのですが……どうしても何か、忘れているような焦燥感が

あるのです」

色も形も千差万別、7つの忘れ物。

白い車のおもちや。

金属素材の小さな蟹。

黒い紙飛行機。

赤い2本角がついた、愛らしい造形の男の子のぬいぐるみ。

ガラス細工の真つ赤な薔薇2輪。

数種類の花の種が入った袋。

目玉焼きの食品サンプルがあしらわれた髪留め。

そのどれにも共通点など見つけられないというのに、心がざわついて、目を離す事ができないのです。

「あなたのこと、なんと呼べばいいのでしょうか」

忘れ物を見つめたまま、隣に立つ彼に訪ねます。

「亡霊や、幽霊……などとお呼びください。現にそうですから」

「……では、幽霊さん……と」

わたくしは目線を移し、彼を見上げますが……顔にはやっぱり霞かすみがかかっています、何も見えないのでした。

「幽霊さんには無いのですか？ その……忘れ物や、焦燥感は」

彼は顔の輪郭に、白い手袋に包まれた片手を当てると、首を傾けます。  
そして。

「——遠い昔、心を、置き去りにしてしまった。

あの時の私は、それが素晴らしい考えのように感じられて……」

と、穏やかな声で話し、そのまま言葉を続けます。

「少し長い話になりそうです。座りましょうか」

銀色の脚をもつ四角い椅子へと促され、わたくしも彼も腰を下ろしました。

「……私の心の奥底には、私が切り離していた感情の杯さかずきがあった」

じじじと鳴いたのは、2台並んで置かれた自動販売機の電灯の音。

「その感情は……余裕がなくて、恥ずかしくて、みっともなく……けれど、紛れもなく

『人』のものでした。

しかしその心の動きを、私は英雄には相応しくないと思っていた。

嫉妬、嫌悪、疑念、怒り、嘆き、諦め……悲しみ。

胸の内によぎる度、切って捨てて……『これは自分の感情ではない』と、心に刃を突き立てていたのです」

わたくしは彼へ自らの言葉を伝えます。

「幽霊さんは、自分の心を……ずっと傷つけて、大切にすることが出来なかったということですか……?」

「振り返ってみれば、そうだったかもしれないね」

隣に座っている彼を見ます。膝より下の足は薄く消えかかっている、本当に幽霊みただけでした。

……確かに今ここにいて、とても穏やかな声で話しているというのに。

「切り落としていた感情達は、積もり、淀み、固まり……」

私の人生の終わりには、まるで1つの存在のように生きていける、人間性を持つまでになった」

幽霊さんはわたくしへ真つ直ぐに顔を向け、語りかけてくれます。

「けれど、抱えたまま私が死ねば、誰にも知られずに失われていくはずのものでもありませんでした。」

気にかけれられない、省みられない、想われない、呼ばれない……愛を知らない。

だからでしょうか……死ぬ前、命を天へと返す前に、私はこう考えてしまった」

その言葉を口に出す前に、彼は一拍息を吸いました。

『……私が死んだら、この感情はどこに行くのだろうか?』……と」

人々から忘れられてしまった遺失物置き場には、ひんやりとした空気に包まれていま

す。

まるで——高い山の上にいるかのような温度と気配でした。

「私は……死後、私の心が産まれ落ちますように、と自らへ祈った。

神々に対してではなく、人にでもなく。自分へ祈りを捧げたのです。

私の問い続けた心も、その奥底の幼い欲心<sup>エゴ</sup>も、いつか再び生まれ、生きられるようにと。

……そういう気持ちへ至った私が、無数に引かれていく世界の線のどこかにいたので「す」

彼の静かな声は、まるで降り積もった雪が溶けて流れ出た清水のようでした。

「最も苦難していた頃の私は、何回でも召喚され、その度に悩み、苦しむ。

……己の中の、もう一人の私に支えられながら。

ですが、その痛み苦しみこそが、『生きていく』ことだと……」

そこまで話すと、彼は顔を逸らし、絞り出すような声色に変わりました。

「しかしこの世界では……結果的に彼を一人にしてしまった。

彼の側に、私がない。おかしなことだ、2つ合わさっていないければ、人である『アルジュナ』たらないのに」

アルジュナ、と、その名を呼びながら、拳をぎゅつと膝の上で握る彼。



「アルジュナの人生は……放浪、試練、苦難、出会い、別れが散りばめられていた。けれど……それ以上にあつたのは……『死』、だつた」

彼の声は苦しげでありながらも、自らの業を真つ直ぐ目を逸らさずに見つめている人の、強さがありました。

「血の繋がつた者同士での、殺し合い。幼い頃に教えを受けていた師との、殺し合い。顔も性格もよく知っている人の、殺された姿……」

兄弟の子と……自らの子の死。心を打ち明けた友と、その親族の死……。何万という人々の死。戦いの後、聖地いっばいに倒れていた人と動物の骸……。

——そして、私の手によつて殺された者達の、絶命した後の表情——

彼が膝の上で握る拳の強さは、声の力強さと比例するかのようによつていきみます。「後悔の多い……人生だつた。もつと、何か別の道はないかと探し続けた旅路でもあつた。」

だが、私に与えられた全ての時の砂は流れ落ち、再び降り積もることない——

彼はもう一度わたくしへ顔を向けます。にじんだ水彩画のような、このわたくしの目では捉えられない顔を。

「……」この世界に召喚された私と彼を呼び水に、幽霊のような形で私は貴女の元へやつてきた。

語る以外力を持たない今の私ですが、何か意味があるはず」

「意味……ですか？」

わたくしは考え込みます。

幽霊さんに、いや彼に、わたくしがしてあげられること、あるのだろうか。

「何も思い浮かばない……まるで深い霧の中にいるみたい、右も左も分からないのです」  
それが自分の正直な気持ちで、発言の無責任さと中身の無さにうつつむいてしまいました。

「——でも、胸に焦燥感が、『灯火』があるのでしよう？」

わたくしは下を見たまま、心臓の上に手を当てました。

とくとくと、鼓動を刻む小さなそれ。

「大丈夫。その熱があれば、きつと思ひ出せる、生きていける。

——もう一度、巡り会える」

姿を目に焼き付けるため、わたくしは顔を上げ、彼に細い声で聞いてみます。

「……会えるかな、誰かに」

「ええ、必ず」

彼は立ち上がりました、けれど……その体は、もうほとんど消えかけていました。

「幽霊さん、さようなら……なのでですか」

「別れの時です。突然に来た亡霊ですから、去る時もこのようなものです。わたくしは慌てて立ち上がり、彼に手を差し出します。

「なぜでしょうか……！ あなたと手を繋ぎたいと思ってしまったのです。

とても強い気持ちがあるの奥からあふれてきて、だから、私……！」

彼は手を伸ばしてくれましたが、その指先も透明になりかかっていました。

触れ合うことはなく、手と手が重なります。

「——さようなら、見知らぬあなた」

「——さようなら、私ではない私と巡り会ったあなた」

そう言つて、彼は手を離しました。

「私は、私の物語の中へ帰らなければ」

言葉だけを残し、ゆっくりとわたくしへ背を向けると、服の長い裾を揺らしながら、『マハーバーラタ』の映画が上映されている14番スクリーンに入つていつてしまいました。

……扉は、二度と開くことは無さそうでした。

「……あつ」

休憩室隅の背の高い置き時計が、振り子を動かしては、ぼーんぼーんと音を鳴らしま  
す。

時間は午後の3時、おやつの時間です。

「帰らなきや。エトおばさま、待つているでしょうから」

わたくしは遺失物置き場を今一度見ます。

白い車のおもちや。金属素材の小さな蟹。黒い紙飛行機。赤い2本角がついた、愛らしい造形の男の子のぬいぐるみ。ガラス細工の真つ赤な薔薇2輪。数種類の花の種が入った袋。目玉焼きの食品サンプルがあしらわれた髪留め。

共通点の無い、ただの物体に見えていたはずの忘れ物達は、今見ると不思議と統一感があるように思えました。

(会いたい……この胸の焦燥感をもたらししている正体の、誰かに)

きびすを返して、茶色のローファーでふかふかの絨毯を蹴りながら走りだしました。

シヨッピングエリアも、吹き抜けのある明るい道も、小走りで駆け抜けていたので、行き交う人は不思議そうな顔でわたくしを見ていましたが、気になりませんでした。

「エトおばさま……ただいま帰りました……」

息を切らしながら玄関をデバイスの信号で開けて、我が家に帰ります。

「……あれ？」

違和感がありました。

エトおばさま、わたくしが外出から戻ると、手を広げて迎えてくれるというのが常ですのに、姿も、『おかえりなさい』の声すららないのです。

「おばさまー?」

わたくしは考え無しに、リビングへ足を進めました。

目に映ったものは――。

「逃げてえ!・ファイリアアアア!!」

おばさまは居ました。フローリングの上に倒れていて、誰かに足蹴にされた状態で。所々に赤い線の入っている黒い服と、ぴかっと光を反射する黒いガスマスクをつけた、体格の良い2人組。

「あっ」

黒い筒が、涙で顔がぐしゃぐしゃのおばさまの頭に当てられ、ちゅちゅんと変な声が出て、足蹴にされていた体がちよつと跳ねました。

その後、淡い色のフローリングの上にはじわりと赤い液体が広がっていきます。

おばさまの着ている服にもそうです。

「……?」

何が、起こっているのでしょうか。

勝手に家に上がり込んでいる人達は、声の低さからどうやら男性のようで、わたくしの前で話し出します。

「お前なー……サイレンサーかませてるけど、そうバンバン撃つなよ。」

音が響くし、何より弾は高い。くそつたれな世界の貴重品なんだぞー」

「でもこのお婆さん、ずつとうるさいくせに對した情報も言わないし、イラつと来ちゃつて」

「あーもう……次から気をつけろよ、気持ち切り替えろよー」

2人の会話は終わり、わたくしへ、持ち手のある黒い筒の先が向けられました。

(あれは……)

筒の正体ははっきり分かりました。映画で見たことあるそれは、『銃』。

「上流階級の、悪い悪いお嬢ちゃん、動くなよー」

「口封じしないと、弾節約にナイフで殺そうか」

……お婆さまは、ぴくりとも動きません。

「あ、はっ、はっ」

呼吸が乱れます、心臓がどくんどくと脈を速くします。

「やつ、ああつ、嫌……嘘……」

お婆さまは動きません、瞳孔がぼつかりと暗く開いているのが見えます。

……完全に、死んでいる。

「嘘……嘘です……嘘……」

——いや、嘘ではない。

わたしは、これとよく似た光景を見たことがあるはずだ。

(知ってる……覚えてる……わたしは……)

数ヶ月前、住み慣れていた地下都市で、この光景を！

『痛い……痛いよお……』

『何が爆発したんだ！ あ……俺の腕……どこいった……？』

『お母様ー！ 足が、私の足、無い、無いよお!!』

ごく普通に暮らしていた人達が、突然に傷つけられ、そして。

『上流階級を！ 見つけ次第殺せ！』

『生存権を独占している、悪人どもめ!』

『殺せ！ 殺せ！ 殺せ!』

ただ上流階級であるというだけで命奪われる、その様を。

「わ、わたくし……」

がくがくと足が震えて、今にも腰が抜けてしまいそうです。

「動くなよ。大丈夫、さっと殺してあげるからな」

2人組の片方が、死体となったおばさまを跨いで近づいて来ます。

(ああ……でも、これが正しいことなのかもしれない)

晴れかけていた頭に、再び深い白の靄がかかってきます。

(だってわたくしは……生きているだけで悪い、上流階級なのですから)

目線を下に向け、全てから目を逸らします。

思考を止めて、諦めて――。

『逃げよう、アスカ!』

脳内に響き渡ったのは、『彼』の声。

『死ななくてくれ! 生きることを諦めないでくれ!』

……だって! 俺をどこかへ連れて行ってくれと! あの庭で約束してくれた

じゃないか!』

懸命さが込められた声も、ヘッドギア越しに見えた顔も、白い外套と機械を身につけた

た姿形も、全て思い出した。

あの惨劇を見て、死んでしまおうと心から望んでしまったわたくしの、手をとつてく

れた人。

わたしに、『永遠』をくれた、『彼』。

「……いや! わたし……死にたくない!」



わたくしは男性を突き飛ばし、足を動かし出します。

「まだ、死ねないの！」

思い出した、思い出したのだ！

（わたしの名はアスカ！ そして……）

転びそうになったけれど、フロアリングに両手をつけて姿勢を立て直します。

（わたしには……アーチャーと、大切な仲間達がいる！）

玄関の扉に右手をかけ、逃げます。

「……いや死ねよ！」

後ろから男性の声と、再びの変な音。

わたくしの右手首に弾が当たって、玄関扉に血が、大輪の花を思わせる放射状にびしゃりとかかりました。

「死ねない、死にたくない！」

わたくしは足を止めずに左手で開けて、廊下へ飛び出します。

「アーチャー、モモ、バーサーカー……！」

銃弾を受けた右手首を左の手で抑えながら、わたくしは駆け出しました。

もう一度、思い出した大切な人達と巡り会うために……！

第65話  
終わり

「時の砂は流れ落ち、再び降り積もることない」

## 第66話 誰もが誰かのリソースリソース

(痛い……痛い……血が止まらない、どうしよう……)

わたくしは居住エリア内の、ガラス張りの廊下を走っていました。

左手で力一杯に押さえている右手首は、銃弾が貫通して穴が空いてしまい、白い樹脂で出来た床へ、あふれた血が落ちていきます。

「逃げなきゃ……ほかの人にも、伝えなきゃ……」

わたくしは自分のことを考えながらも、都市に住んでいる人々のことも思います。

銃を持ち、相手の殺害も辞さない人間が内部にまでやってきている……それはひどく危険で、異常な事態だからです。

「君達！ 何を……それは武器か?! やめろ！ 考え直したまえ！」

わたくしが向かう曲がり角の先に、品のいい老人がいました。

ここからは見えない場所である、道の奥にいる誰かと言ひ争い、そして。

「ぎゃっ」

また、ちゅちゅんと変な発砲音

老人は弾かれたように後ろへ吹き飛ぶと、ぴくりとも動かなくなりました。白い床の

上に広がる血。

(また……人が死んだ……)

わたくしは傷を受けた右手を抑えながら、辺りを見渡し、耳を澄ませます。

……聞こえる。

「やめてやめていや撃たないで切らないで……ぱっ」

「大人しく従いますか……らあああ？ あっあっ……」

居住区の至る所から聞こえる、悲鳴、懇願……絶命の声。

「おい、廊下に一匹居たぞ！」

わたくしは我に帰ります。そして、扉のある居住区側の壁へ体を貼り付けました。

なぜなら。

(……銃が、また撃たれた！)

黒い覆面とミリタリージャケットで体を隠した男性が、躊躇無く発砲してきたから。

壁へ体をくつつつつけたことで、幸いにも弾の軌道から逃れることが出来ました。

銃弾は真つ直ぐ飛んでいき、廊下突き当たりのガラス壁にヒビを作ります。

「人的資源だ！ 狩れ狩れ！」

他の人間を呼ぶ黒ジャケットの男。

わたくしは考えます。

(どこもかしこも、銃を持ち、発砲に戸惑いもない人間ばかりです……！)

逃走……経路は……)

目線だけを動かして、思い当たりました。

(よし……この高さなら……大丈夫、きつと大丈夫です)

男がわたくしから意識を外した瞬間に、駆け出します。

あふれる血も、右手首を苛む激痛にも耐えて腕を振り、目指したのは、先ほどの発砲でヒビの入ったガラス壁。

「……どりやあああああー！」

左肩で体当たりし、砕き破りました。

その勢いのまま、わたくしは外へ……足場も何もない、空へ。

しかし、焦りは無く。自暴自棄の末の行動でもありません。

落ちていく体の足先から、濡れていくのですから。

「わっ、はぶ……はあ……はあ……」

ガラス壁の下にあったのは、子ども達のための公園。

わたくしが狙って落下したのは、四角いプール。

深さもあり、大きさもあって、2階相当の高さから落ちたわたくしの体を受け止めてくれました。

「ふう……ふう……」

水泳経験なんて有るはずもなく。両手をとにかくがむしやらに動かして犬掻きをし、縁にたどり着いて水から上がります。

へたり込んで息を整えていたら、ちょうど目の前にあつたベンチに、広げられた白いハンカチの忘れ物がありました。

（ごめんなさい……）

持ち主に心から謝り、その布を右手首に巻きつけます。

未だに血は滲みますが、こうして圧迫し続ければ、出血は防げるはずです。

……ずっと右手を抑えたまま、逃げるわけにもいきませんから。

「どこ行った?! まさか本当に飛び降りたのか!!」

壊れた廊下から降ってくる男の声。

わたくしは姿勢を低くし、人工樹木の木陰に潜みます。

（逃げるだけではだめ……向かう場所を決めないと……）

頭の裏側がどくどくうるさいけれど、それを無視してわたくしは考え込みます。

（行すべきは……何か）

思考は高速回転。

（モモとバーサーカーを探す、アーチャーを探す、デザートランナーへ戻る……）

出てきた3つの案。1つずつ精査します。

まず、モモ・バーサーカーと合流する案。

(……だめです、居場所の検討がつかない)

世界反逆罪で拘束、連行された彼女彼らの向かった先をわたくしは知らない。

(アーチャーを、探す)

2つ目の案も……悲しいけれど、現実的ではない。

つるりとしたフォルムの棺……コフィンに詰められた彼の行き先、『リソースセン

ター』なる場所も、どうやって向かえばいいのか見当もつかない。

(令呪があつたのなら……こんなこと！)

悔しきで、自分らしくもなく齒軋りします。

(……でしたら、わたくしが取れる行動は……1つ)

デザートランナーを預けたドッグの位置であれば、道のりも知っている。

そこまですりかたどり着き、乗り込み、一旦都市の外へ出て……。

(旅の中、大きなワームロボットにも出会ったし、巨人と見紛うばかりの機械と戦ったけれど……最後には勝利した！ デザートランナーを取り戻せば、きつと、何とかなる、はずです……)

行き先は決まった。

ここから3 km 遠く。

居住エリアを抜け、シヨツピングモールエリアも駆け抜け、エレベーターで降りたその先にこそ、仲間との再会の力を持った車がある、わたくしを待っている。

「行かなくては。痛くてもひとりぼっちでも、行かなくては……」

わたくしは決めました。

かつてあの庭で……『彼』と共に生きていきたいと決めた、あの幼い時と同じ様に。

(……血と、それを引きずった痕跡が幾つかありますわね)

吹き抜けのあるシヨツピングモールエリア。

淡い色彩の丸がプリントされた壁には、時間の経過により粘性を増した血飛沫。

シヨウウィンドウには真つ赤な手形が。床には、引きずって連れて行かれるときに抵

抗したのか、長々と深い爪の跡。

(こんなにも酷いことが起きているのに、なぜ、都市運営システムは何の行動も起こさないの?)

シエルターへの避難を呼びかける声も、襲撃者の迎撃に躍り出るロボットなどの存在も見えない。

——都市自体が全くの無抵抗。



わたくしの脳裏に、金のおさげを持つ、無慈悲で美しい青の瞳のアンドロイド、アイ  
ン・ピースフル・エーテルウエルの姿が思い浮かびます。

(彼女は自らを『人類を応援し、都市の安全を管理するAI』だと言っていたのに……)  
わざと使命を放棄しているのか、または、彼女がそれどころではない状況に置かれて  
いるのか。

疑問はあるが、余分に思考を割くわけにもいかず。

襲撃者の気配を伺いながら、不気味なほど静かなシヨッピングエリアを通り抜けまし  
た。

(この廊下……覚えていたとおりです！)

この先にエトおばさまと再会した広場があつて、外部からの人間の洗浄室があつて  
……地下ドッグが、デザートランナーがある！)

何の彩りも無い廊下を、穴が開いている腕を振りながら、がむしゃらに走ります。

(あと……少し……！)

デザートランナーがあれば……デザートランナーがあれば、デザートランナーがあれ  
ば！

(きつと、みんなにもう一度、会えつ……！)

「確保!!」

目の前に突然巨大なネットが。

わたくしの頭から被さり、体に絡みつきます。足がもつれ、倒れ込んでしまいました。

「あつ、なんで……!」

もがきます。けど、四肢に黒いネットは絡んでいくばかりで。

「1人確保。手首に傷つきです、一応そっちへ連れて行きます」

おぼさまを銃殺した人とは少し装備が違う、顔を下半分覆うマスク、ジャケット姿の男が、襟に付けられた小型の通信機に話しかけつつ、わたくしを見下ろします。

片手には、ネットを発射したと思われる大筒が。

「お願いです、見逃してください……! わたし、会いたい人がいるんです!」

網に拘束され、床に転がったまま、懇願しました。

「そんな感じのお願い、もう30回は聞いたな」

男は日常ごとのようにわたくしの言葉を切り捨てながら、ネットの端を掴んで動けない体を引きずり始めました。

「生存者こんだけか? あつちのレジスタンス殺しすぎだろ……」

「人道主義の『アカツキ』じゃないですね、俺達『マヒル』でもないし……『トコヤミ』

の奴ら、頭空っぽの弾パンパン野郎しかいないんですかね？」

運ばれた場所は、デザートランナーを預けた場所と似たような雰囲気、天井の高い地下ドッグ。

しかしあの頼もしい白の車は無く、襲撃者の持ち物か、無骨な砂色のトラックが何台も停められていました。

（他の人達も……捕まっている）

わたくし以外の人も数人いて、同じように、黒いネットで拘束されていました。

女性も男性も、子どもも、顔を青ざめ、歯を鳴らしながら、がたがたと震えています。そして、床に転がされている者達がまだいます。

「遺体は沢山集まりましたね」

2人組の襲撃者達がのんびりとした口調で声をかけたのは、何十という死体……でした。

死体は鼻や口から血を流し、目をかっとな開いた状態のまま……明らかに、絶命しています。

「こっただけあると持っていけないですね、ここでリソースに変えていきますか？」

「そうだな、帰りの燃料の予備も欲しいし……」

男達は、わたくしにはよく理解できない会話をしながら、作業を開始します。

トラックの荷台から出てきた、車輪付きの大きな箱に、まるでゴミでも投げ込むかのようにして、女性の遺体が投入されました。

がががと、柔らかいものと固いものを砕く水つぽい音。辺りに漂う、濃い鉄臭さ。

「——何をしているのですか……?」

なぜでしょう。わたくしは、聞く前から答えを知っているような心地でした。

「うん? ああ、『地下生まれ』の人間は知らないのか?」

男の1人がわたくしの前まで来て、教えてくれます。

「人間やらゴミやらを砕いて、地核から汲み上げた原液と混ぜたのが、『液体リソース』の正体さ」

箱は……内側に機械の歯でもあるのか、ずがが、ずががと唸りつつ、死体を次から次へと砕いていきます。

「やっぱ人間だけだと質が悪いですね、サーヴァントのミンチ混ぜたら変わるのかな……」

「予備の燃料だし、こんなもんで十分だろ」

そして、下部の蛇口を捻ると、あの馴染みのある、青に淡く光る液体が流れ出してくるのでした。

「……まだ生きている人達も、そうするのですか?」

後ろで震えている人達に代わり、わたくしは問いかけます。

「いや、他の人間は……」

箱の駆動音の合間から、男の答えが聞こえてきます。

「持って帰って、交配実験に使う。女の子は子どもを産んでもらうよ。人類は絶滅寸前だからさ」

「えっ？ えっ？」

思わぬ返答に、わたくしは混乱します。

交配って、つまり。

「ごめんな。これも、生きるか死ぬかの生存競争だからさ」

男達は網で覆われた人達をずると運び、トラックの中の箱へ詰め込んでいきます。

白くて、まるで棺のような形のそれら。

(……あの箱に入ったら、もう二度と誰とも再会できないような気がする)

直感でした。わたくしはもがき、少しでも襲撃者から距離を取ろうとしますが、上手くないきません。

(……わたし、アーチャーが、モモが、バースーカーがいないと、何も出来ないんだ) じりじりと、男達はわたくしへ近づいてきます。全ての終わりが近づいてきます。

「ただの……無力な、女の子なんだ……」

思わずぼつりと、頬を伝う涙と共に、口から諦めの言葉が出た瞬間。

「——いいや、アスカ・ピオーネ。君は無力だろうが、利用価値がまだある」

聞き覚えのある、男性の声が聞こえました。

「誰だ！」

襲撃者2人組の片方が銃を構えますが、その体に、暗がりから飛んできた銃弾が突き刺さり、倒れ伏します。

残った1人も同様に撃たれ、持っていた銃を床に転がしながら、静かになりました。

「アスカ・ピオーネ、生きていてくれてありがたい。」

君の右手首の内側の……『生体内蔵デバイス』地下都市で産まれた人類全てに埋め込まれている極小の機械。

埋め込まれている箇所は右手首。

正式名称は『生体内蔵型デバイス』、略して『デバイス』。

生存権の管理、個人情報などを記録し、『都市運転システム』へと転送している。

ある種の身分証明書であり、特別な人間に特別な管理コードが与えられている。

人間以外……例えばサーヴァントなどに埋め込むのは違法。は、壊れているのか信号を受信できなかったからな」

砂色のトラツクの向こう、暗闇から、足音を響かせつつ誰かが出てきます。

手には2丁拳銃、体は白いスーツ、金の整えられた短髪、20代前半を思わせる顔には、深い青の瞳。

「あなた……は、いえ、お前は！」

その姿に見覚えあり。数ヶ月前に出会った存在でした。

「ツヴァイ・エーテルウエル……！」

都市運営システムである、AIの1体。

獣の耳を持つキャスターを無理矢理に従わせ、わたくしとモモをだまし、バーサーカーを罠にかけ。

サーヴァントをすり潰して、それを利用した兵器まで作っていた、悪魔のような男。

「ああ、『人類なんか俺達AIに負けて死んでしまえ』で、お馴染みのツヴァイ・エーテルウエルです」

わたくし達の目の前で、アンドロイドボディを自己破壊して消えた彼。

まるで何事も無かったかのような、変わらぬ姿で立っていました。

「久しぶりですね、数ヶ月ぶり。」

……フუნフ、じゃなくてスローネから話は聞いていたので、無謀な旅をしていることは知っていました。

まあ、元気そうで何よりでした、アスカ・ピオーネ。

あなたが生きていないとリリスを殺せませんからね」

彼は均整の取れすぎている片眉を上げながら、黒い網の中のわたくしを見下ろしました。

(……なぜここで、女神リリスのことが出てくるのですか?)

疑念が胸の内に沸きました。

「そう眉間のしわを深くしないでください、あなたとそのサーヴァントを助けに来てやったと言うのに」

「助けに……?」

「ええ、はい、嘘ではなく」

アンドロイドの顔を動かし、AIは笑います。

「連れて行ってあげましょう、アーチャー0961のいる場所へ」

……その言葉の意味を、考え込みます。

(なぜ突然現れたのか? わたくしとアーチャーを助けようとしている理由は?)

女神リリスの殺害……?

何を言っているの、この男は)

分からないことばかりが突然ほこほこ湧いてきましたが、何時間も悩みあぐねてい



る余裕はないのです。

今この瞬間にもきつと、『上流階級』というだけで殺されている、自由を奪われている人間がいる。

「……わたくしを連れて行きたいと言うのなら……この都市にいる人間の安全を確保してください。

そうでなければ、あなたの提案には乗りません」

あえてきつい口調でAIに伝えます。

また片方だけ眉を上げるツヴァイ・エーテルウエル。

「なぜそう偽善者ぶって、無理難題を押しつけてくるんだ？」

……まあいいさ、やるよ、やる」

彼は数回瞬きをしました。それだけで。

『非常事態宣言発令。市民は落ち着いて、直近のシェルターへ避難してください。』

繰り返します、非常事態宣言発令……』

無機質な女性の声があちこちから聞こえてきて、市民に呼びかけ始めます。

次にツヴァイは、白いスーツの内側から細身のナイフを取り出して、床にひざまずくと、人をくるんでいる黒ネットを切り裂き始めます。

「助けてくださって、ありがとうございます……」

「わたし達は……どうすれば……？」

体が自由になっても、まだ事態が完全に飲み込めていない市民の方々。

「シエルターの場所までナビを設定した。デバイスの指示に従い、さっさと避難しろ、邪魔だ」

そんな彼らを短い言葉で追い払い、ツヴァイは立ち上がります。

「防衛用ロボットも起動させました。満足しましたか？ アスカ・ピオーネ」

わたくしは人間を超えた存在である彼の手腕に、舌を巻きます。

「はい、こっちはです。あなたのサーヴァントと会わせてあげましょう」

2丁の拳銃をふらふらと手の中で弄びながら、歩いていく彼の背中。

情報も力も持たないわたくしは、ただっいて行くしかありませんでした。

第66話 誰もが誰かのリソースリソース

終わり

## 第67話 君は破滅を呼ぶ女

「ロボットどもが！ くそつたれAIめが！ 死ね……死ね！」

銃の乱発音。その後が続く水音と悲鳴。

「……」

わたくしは白壁の曲がり角から、そつと奥を見ます。

『人類を応援する都市防衛システムです。障害を排除、障害を排除』

「ひ、ひゅっ……くそつたれがあ……」

円柱状の顔も目も無いロボットが、襲撃者達を銃殺していました。

ですが、防衛側も無傷とはいかず、同じような形状の機械が、人間の死体と混ざるように転がっています。

……誰も彼も、死んでいます。

「シヨックですか？ アスカ・ピオーネ」

「……当たり前でしょう！」

ツヴァイの言葉に、わたくしは叫びます。

「ただ生きているだけなのに……傷つけられて、殺されて！ ……死体ですら、利用さ

れ」

憤りを抱いたまま、唇を強く噛みました。

「ああ。だって生きているのが一番悪いですからね、命って」

「……えっ？」

AIの思わぬ言葉に、わたくしは取り乱します。

「そもそも、『生きる』ということは正しい行いではありません。

生存は他者からひたすら奪う行為だ。現在の地球では、それが人間対人間の色を強くしているだけにすぎない」

「でも、こんなことが許されていいはずが……」

「許される行為などない。

命なんて、勝手に許された気になって、その後は死に怯えて生きているだけだ」

ツヴァイはわたくしに銃を向け……その後ろの存在を撃ちました。

発砲の後の、独特な火薬の匂い。

「この都市の人間を守ると言うことは、襲撃してきた側であるレジスタンスを殺すという事です。

アスカ・ピオーネ、あなたがどんな気持ちであろうと、どんな行動を取ろうと人は死ぬ。

……ね？ 自己満足の偽善者気取りは楽しかったでしょうね？」

どさりと誰かの倒れる音。

「はい、分かりました……充分……！」

喉から絞り出すような声色で返答をして。

死と破壊が辺り一面に広がっているエリアを抜け、わたくしとツヴァイはある場所を  
目指しました。

「隠された階層があるだなんて……」

上級都市の、複雑な多層構造を繋いでいる高速エレベーターが目的地。

ツヴァイはシステムを涼しげな顔でハッキングすると、数字以外の記号が書かれたボ  
タンを表示させ、移動先へと設定させました。

「外に出る。」

労働都市と軌道エレベーターへ繋がるリニアモーターカーに乗り、向かうぞ」

「軌道エレベーター……？ そんな大きな建物、地上には無かったはず」

「手首内側のデバイスを、銃撃によって破壊された今の君なら、視覚制御で隠されていた  
巨大な『樹』が……見えるはずさ」

エレベーターは止まり、扉が開きます。

密閉されていた空間に吹き込む乾燥した風、眼前に広がるのは、どこまでも続くかと思われる荒野と。

(まるで宇宙にまで届いていそうな建造物に……下の地面で動いているのは、トラックと、ロボット?)

巨人のような姿をしていた機械化サーヴァントと戦った際、アーチャーが駆つたものと似た形の、黒い人型ロボットが、何百台も行き交い、天へ伸びる『樹』を、銃や様々な兵器で攻撃しています。

それを受けた表層はぼろぼろ剥がれていき、高い砂埃を立てながら落下、地面にぞくぞくと突き刺さっていきます。

「ちっ……この様子だとアイン姉様は死にやがったな。

上級都市防衛用の機械化サーヴァントも……あの残骸がそうか、破壊されている」

ロボットの間に見える、大きすぎる数千以上の破片は、わたくしの知らない戦いの跡を思わせました。

「……リニアモーターカーは……落ちているか」

ツヴァイの目線の先を見ます。

線路は下半分が破壊され、鉄板で作られた上の覆いしか残されていません。

「点検用の梯子から上に昇るぞ、それしか軌道エレベーターへの道はない」

彼に指示され、梯子に足をかけ、上がりま

鉄板の上に体を乗せると、強い風が、わたくしの黒髪を吹き飛ばさんばかりに乱しました。

(凄い高さです。落ちたら確実に死ぬ……)

リニアモーターカーの線路上部の覆いは、わずかに湾曲していて、足場は不安、手すりなどありません。

「一気に走り抜けるぞ。——レジスタンス『トコヤミ』が、こちらに気がつき始めた」  
わたくしは下を見てしまいます。

ぶつかり合うロボットとロボット、砲撃を受け穴が空いていく軌道エレベーター。

……無数のロボットが集まると、スナイパーライフルのようなものを手に持ち、一斉にこちらへ向けました。

「口を閉じていろー！」

強引に片手を引かれ、わたくしと彼は熱い鉄板の上をがこんがこんと音たて駆けていきます。

軋む足元、ぎしぎしと部品が落ちていく音。

がむしやらに走っている内に、数百m先の軌道エレベーターは近づいてきて。

「アスカ・ピオーネー！ 跳ぶぞー！」

切れ切れの線路に、ロボットの武器から放たれた何かが着弾、爆発。

その爆風に吹き飛ばされるような形で、わたくしとツヴァイは軌道エレベーターに沿うようにある、金網で出来た外周通路へたどり着きました。

「くそっ……私も鈍ったな……」

わたくしに怪我はなし、右手首が依然として痛むだけ。

でもツヴァイの体は……下半身は千切れ、顔半分は、皮膚代わりのシリコンがどろどろと溶けて始めていました。

「まさか……わたくしを庇って……?」

金属製の生ぬるい足場の上で、アンドロイドの体を意識確認のため揺さぶります。

「あーはいはい! そのまさかですよ!」

……言ったでしょう、あなたがいないとリリスが殺せない!」

彼は投げやりな口調で言い返すと、剥き出しになった機械の眼球をきゆるきゆる回して、わたくしに向けました。

「時間がない、短く説明するぞ、アスカ・ピオーネ。何一つ聞き漏らすな!」

わたくしは影の下にある薄暗い通路にへたり込んだまま、何度も頷きます。

「……リリスは2300年代に女神として作り出され、400年に渡り世界に君臨している、ただ1体だけの種族で……人外だ。」



世界の管理者気取りでこの星を破壊し、別の星へ旅立とうとしている」

彼は部品をききませながら、シリコンが剥がれた片方の手をあげると、わたくしの手を重ねます。

「この情報の源は……リリスの7の滅びの使徒、そのサーヴァントの内の1体。

アルターエゴ『本多佐渡守正信』が遺したS文書だ。

……アスカ・ピオーネ、お前のサーヴァントで女神を殺せ。そうしなければ、この星は終わる」

「なぜ、それを望むのですか……？」

わたくしは脳裏で、かつて授業で学んだことを思い出していました。

『リリス様は数百年以上続いた戦争で、滅びかけていた人類を救済し、地下都市を作り、人を育て慰めるAIまで生み出した女神の如き存在』

言葉通りであるのなら……彼女を殺すということは、AIであるツヴァイから見れば、母親を殺すようなものではないのか。

「私はな、女神の希死念慮きしねんりよなのさ」

金属が剥き出しになった顔面を引きつらせながら、ツヴァイは皮肉っぽく笑いしました。

「あの女の『死にたい』という無意識が反映されたAI……それが私。

でも私はあの女を殺さない。あの女の願望の埒外であるお前達が、殺すのさ」

彼は言葉を次から次へと付け足していきまます。まるで……死ぬ前の人間かのように。「もう一つ教えておいてやろう、お前のサーヴァントのことだ。

女神を殺すために、ある研究団体がサーヴァントを改造したものが、お前のアーチャーの正体だ」

わたくしは右手首の痛みも忘れて、息を飲みます。心臓がずきりとうずきました。「数百年前のこと……」。

アルジュナというサーヴァントを、伝説の再来を期待して900回以上召喚し！ インドの神々と混ぜ合わせて！ 人格も体も壊しに壊しまくった！

その果てに出来た、たまたま上手くいった個体を、機械部品で抑えつけて何とか形にした……狂った出来損ないが『あれ』だ！ 『アーチャー961』！」

がくと、アンドロイドの首が落ちかけます。慌てて支えました。「せいぜい……その使命を全うさせてやれ」

彼はパイプや機構が収まった内側から、片手で何かをまさぐり、千切ると、わたくしの手のひらに乗せまます。

「データだ、持っていけ。お前達の船の設備ほどのレベルがあれば解凍できる」

それは……小さな四角い黒の箱。

かつて見た『ブラックボックス』を、そのまま小さくしたようなフォルムです。

「アーチャーの番号札の反応を私は感知した。

この外周通路の先にいる。合流できたなら、速やかに離脱しろ。

リリスの蛇、祝祭の獣……衛星兵器『ヴリトラ』が、この都市に標準を合わせているからな。

安全な場所でデータを開封したら、座標を元に冷凍施設へ行き、リリスの使徒を解凍しろ、そして共に女神と戦え」

彼はそこまで言うと、肺など無いはずなのに大きく息を吸って……吐き出しました。

「ははは……お前達が女神を殺すのを、AIの地獄から見守っていてやるよ……」

ツヴァイは乾いた声で言うと、それを最後に、永遠に沈黙します。

盛んに動いていた眼球含む部品は全て停止し、首がゆっくりとうなだれました。

（アーチャーは、女神を殺すために改造されたサーヴァント……女神リリスを殺さなければ、この星が終わる）

小さな箱を制服の内ポケットにしまい、ボタンで落とさないように留めます。

（ああでも、そんな事実や事情は、今はどうでもいい）

わたくしは胸に手を当てます。熱い血潮が流れている心臓は、本当に……灯火のように温かい。

「……ただ、あなたに会いたい。アーチャーの所へ、行かなきゃ」

もう、彼のマスターでも何でもないのでけど、彼を一人にしたくなくて、ふらつきながら立ち上がり、外周通路を歩いていきます。

僅かに傾斜があつて、塔に巻き付くように備え付けられている道を、体を引きずるよ  
うに歩いていく。

「アーチャー……」

わたくしの横を、軌道エレベーターの破壊された部品が落ちていきます。

(きつと、人がまた沢山死んでいる)

だから、あなたに会いたい。

「アーチャー……アーチャー……」

己を鼓舞するために、彼の名前を繰り返します。

会いたい。だつてもう、わたくしには何も無い。

血の繋がった家族は死んで、身分を示すデバイスも撃たれて壊れ、デザートランナー  
もどこにあるのか分からない。

持っていたものが全て、無くなつてしまひそう。

(だから、この先で、誰かに会えたらきつと)

——それだけでもう、十分だと思つてしまった。

「あ……ああ!!」

見上げて……見つけました。今わたくしが立っている場所の、螺旋状の上に、『彼』がいつも身につけている機械部品のほとんどがひび割れて、体から剥がれています。

白の外套も何十にも裂かれ、まるで片翼の鳥の羽みたいになつていて。

「アーチャー!!」

名を呼びます。再会が嬉しかったから。本当に……本当に嬉しかったから。

「……マスター!?!」

彼が驚きながら声を上げ、わたくしの黒い瞳と彼の輝く瞳が合います。

「良かった……もう一度会えて……こほん、今そちらへ向かいます! 待つていてくだ

さいー!」

「はい! アーチャー!」

わたし、彼の姿を見たら、すっかり安心してしまつて。

——だから、彼の右腕が目の前に落ちてきたことに、直ぐ反応出来なかつたのです。

「はっ……あつ……なつ……アス……カ……」

螺旋の上にいる彼が崩れ落ち、通路の手すりに前のめりにもたれかかります。

とろりと落ちてくる真つ赤な彼の血。そして、白い剣が、姿勢を崩した胴体を勢いよく貫通しました。

彼を傷つけた剣は、陶器を思わせるつるりとした質感。血と肉に含まれている脂で艶めかしく輝いていました。

「——可哀想に。」

君を見たせいで緊張の糸が切れ、こうして私に刺されてしまった」

涼やかな声が降ってきます。

建物の内部から扉を開けて出てきた彼女が、声の主であり、傷だらけのアーチャーの片腕を、卑怯にも後ろから切り捨てた存在。

女優のように魅力的な体を、緻密な造りの白いドレスで包んで。

頭部から伸びる、金色とピンクの混ざった長髪は、束ねもせずに、そのまま背中や体の横に流していました。

「お前が、女神リリス……」

ただ一目見ただけで、分かりました。

……その時ばかりは、お嬢様のロールプレイ役を忘れた。

「ツヴァイに何か吹き込まれたかな？ アスカ・ピオーネ。まあいいさ、これでお別れだ」

女神は別の手にもう一本剣を出現させ、携えます。

「君達の旅路は……そこそこ楽しめたよ。でも、もう……ありきたりのバッドエンドさ」  
その剣を、ダーツでも遊ぶかのように力まず投げます。

今わたくしがいる外周通路に刃はすつと突き刺さって、軌道エレベーターと通路が切り離されてしまいました。

——嫌な浮遊感。

「あ……そんな……」

わたくしとアーチャーの距離は、見る間に遠くなつて。  
リリスの声と、通路を構成していた金網が降つてきます。

「さようなら、お姫様気取りの女の子。

モモとバーサーカーは殺したよ、君のアーチャーもこれから殺す」

わたくしの目はずっと、アーチャーを見ていました。傷だらけの彼、片腕を無くしてしまつた彼。

「君はまるで風見鶏。人に言われて、いい気分になつて、自分の頭で考えたふりをして。

あつちへクルクル、こつちへクルクル。結局……何にもなれなかつたね、女の子」

ごろごろと転がり落ちていく彼の右腕だけでも拾おうとして……失敗して。

腕はあつという間に遠ざかり、遥か地上へ消えていく。

崩落は勢いづき、わたくしの体もとうとう宙に投げ出されました。

「……………アーチャー!!!」

傷を受けた後、布を巻き付けただけの、赤い自らの右腕を伸ばします。

「……………アスカ!!!」

彼が血を吐きながら、残っている左腕を伸ばしてくれます。

(ああ、どうしてわたしに令呪が無いのだろう。あれさえあれば、彼を助け出せるのに)  
落ちていく、離れていく。

リリースは乱暴にアーチャーの首根っこを掴むと、内部へ繋がる扉を開け、その中に叩き込みました。

(アーチャーが死んでしまう。わたしのせいで…………)

落下、瓦礫、激突。

(わたし…………全部無くしてしまった。自分のせいで。

そしてこれからも、何も得ることはなく、何者にもなることはできない)

目を閉じて、現実からも離れます。

(さようなら、モモ、バーサーカー04、アーチャー…………アルジュナ)

何も見えない、聞こえない状態が長々と続いています。わたくし、今どのくらい落下しているのでしょうか？



(もう、何も無い、命すらも失います。けど……生きているだけで悪い命なのだから、きつとこれで良かったの)

最後に、お母様の笑顔がまぶたの裏に浮かびました。

(『あなたは、お母様の宝物よ。何があっても、貴方を一番に大切にするわ』)  
その言葉と思い出の中の抱擁の柔らかさに向かって、叫びました。

「ではなぜ！ わたしをおいて死んでしまったの!？」

うそつき……うそつき、うそつき！

だからわたしは……誰の一番にもなれないまま死ぬの！ お母様が連れて行ってくれなかったから！」

唇を自分の力で噛み千切ってしまいました。甘い血が溢れてきます。

——死よ、早く来て。

どうかわたしを……こんな『悪い』自分を終わらせて。

『いやあ？ 嬢ちゃんには死なないぜえ？ 人は簡単には死ねないもんさ!』

知らない男の声。思わず目を開けてしまいます。

(なに……これ……)

まず目に入ったのは、四角い黒のロボットの姿。

次に見えたのは、わたくしの体を守るように、紫色の光の膜が球体となって周りを取

り囲んでいる、神秘的な光景。

光の膜のおかげか、落下速度も落ちていて、細かい瓦礫などは触れる前に押しやられていきます。

頭の裏側が熱くつて、左手で触れてみると、お母様の形見の髪留めが発熱していました。……恐らく、光の膜の発生源もここからでしょう。

そして謎の男の声は、目の前のロボットから聞こえてきたのでした。

『ピカピカに光るお姫様！ たまらんねえ！ 俺様がいたただきだー！』

そんな声と共にぐいと伸びてきたのは、武骨なロボットの指先。

わたくしを摘まみ、背中側のコンテナへ押し込みます。

『こちらトコヤミ所属のレッドライダー！ お宝回収！ 離脱し……ハデスへ帰還する！』

わたくしは箱に詰められ、連れ去られました。

……どこか、遠くへ。

第67話 君は破滅を呼ぶ女

終わり

## 断章 その3 されどこいで『ヒト』の話を

### 第68話 エト

「エトエトエトエト……」

ちよつとだけ波打っている黒髪を揺らしながら、上品な仕立てのチュニツクを着た7歳ほどの女の子が、タブレットを指先で軽やかに叩く。

「あつ、あつた！」

データベースを検索し、満面の笑みを浮かべてから、その結果を私に見せてくれた。

『『エトピリカ』！ これがあなたの名前の由来ね！ アイヌ語つていう言語の、鳥の名前で……ここをタツチして、全面に画像を表示……わあ！ 綺麗な鳥だよ！』

ほーら、エト！ 見てつてば！」

まだ幼かった彼女から、タブレットを手渡されたけど、画面の中の艶のある鳥より、私はずっと。

「そうだね、とつても……綺麗なだよ」

フィリア・ピオーネの姿に、夢中だった。

私とフィリアは保育器が隣り合った幼なじみ。

彼女は上流、私は中流と、階級こそ違ったけれど、仲良く遊んでいた。

その後10年経ち、学園に入った後も、私は彼女と一緒に過ごしたものだ。

フィリア・ピオーネ。

名前である『フィリア』は、古代ギリシヤ語で『友愛』という意味だそう。

数百年前に製薬や医学で財を成した『ピオーネ家』の出身。血筋も申し分なく、容姿端麗で、天才に作られた彫像のように完璧な女の子。

素直で公平な性格。相手がどんな身分であろうとも分け隔て無く接し、物腰は丁寧。学習意欲は旺盛で、飲み込みも早く、記憶力だつて抜群。成績は常にトップ。

上流階級が多く構成されている学園においても、彼女はひとときわ輝いていて、特別な存在だった。

——だからいつも、私は不安だった。

(私みたいなただの中流階級が、彼女の側について……いいのだろうか?)

……特別な彼女、フィリアに釣り合おうと必死だった。

毎日10時間以上は必ず勉強して、生存権を支払って人生を更に削り、貴重な資料を

閲覧。

テストで少しでも高得点を出して、その成果として生存権を貰って。それをまた勉強に注ぎ込んで。

余剰があれば、メイク用品やアクセサリーを揃え、自分の身なりを整える。

浅い二重をメイクや道具で深くして、茶色の地味な髪は、お団子にしてポリウームをだして……そんな、平凡な生まれに足掻くような努力。

私のような人間が、彼女のような美しい才女の近くにいるのは……息が詰まって苦しくて、でも。

(なんていい気分なの……！ 私を疎んでいる奴らの目線……！)

彼女の側にいるだけで、爽快な気持ちになれるのだ！

「エトってさ、中流階級でも下の方の生まれなのに、なんでこの学園に居るの？」

「フィリアのご機嫌伺って、尻尾振ってさ……古い言葉で『金魚の糞』って言うんだっけ？ ああいうの」

陰口はしょっちゅう。私物を隠される、タブレットや机などを傷つけられる、それ以外にも様々な嫌がらせをされた、けれど！

(お前達がどれだけみじめだったらしく媚びても、フィリアが最後に頼るのは私なのよ！

彼女が一番信用しているのは！ 必要としているのは……私……！  
その確固たる事実が、心の柱となっていた。

「エト、いつもありがとう。私、貴女にとつても感謝しているわ」

彼女が白い肌の上に美しい笑みを作り、そう語りかけて来てくれるだけで、心の中が、真つ黒で甘いどろどろで満たされる。

しかし私はそのどろどろを表に出さず、同じように微笑み、言葉を返すのだ。

「そんな」と言わないで、フィリア。

私は……そんな言葉が欲しくてやっているわけでは無いのだから」

苦しくても幸せだった。

……あの女が、現れるまでは。

学園卒業後、18歳のころ。

それなりに優秀な成績を修めていた私は、上流階級である『ピオーネ』の男性と結婚することが出来た。フィリアとは親戚関係となった。

これから先の人生も、美しくって価値のある彼女の側に居られるかと思うと、優越感でくらくらしたものだ。

一方そのころフィリアも、私と同じように結婚していた。

相手は上流階級の男性。生存権をギャンブルに使えるほどに富み、余裕のある夫。彼女の人生は筋書き通りに進んでいて、相変わらず完璧のままだった。そのはず、だったのに。

「フィリアー、遊びに来ちゃった！」

ある日のこと。

彼女の家に上がることを許されている私は、造花のバラを購入し、結婚祝いのために携えて訪れた。

けれど、そこにいたのはフィリアではなく。

「ごめーん！ フィリア、今居ないんだ」

砂だらけのジャケットに、ズボンからよく分からない金属の工具をぶら下げた、白髪交じりの40代後半くらいのも……しわが多い、日に焼けた肌をした、謎の女性。

「初めましてだよな？ あたし、カイヤ・トバルカイン」

ぶつきらぼうで、がさつな言葉使いの女性は、次に……決して許すことはできない発言を口にした。

「自称考古学者で……えーっと、それで、『フィリアの友達』！」

黒色の瞳を細め、白い歯を見せながら、にかつと笑う彼女の表情は、普通の人であれば懐っこさを感じるものなのだろうが。

私は……憎しみしか思うことは出来なかった。

フィリアはカイヤと連れ立って、外出することが多くなった。

観劇やショッピングなどの、地下都市内の移動ではない。

……『外』。危険しか存在していない都市外部へと出ていたのだ。

「エト、心配しないで。カイヤさん、とっても頼もしいし、それに……」  
彼女は私に恥じらいながら内緒話をするようになった。

だが、何よりも許せなかったことは

「知らないことを学べるのって、とっても楽しいのよ！」

笑み、笑みだ。

フィリアの心からの笑顔を、その価値も知らないぽつと出の女が独占するようになってしまった。

フィリアの卒業、結婚から数年経過。25歳ころ。

彼女の子どもが産まれた。



夫の精子と彼女の卵子を外部で受精させ、人工子宮で育てるという、地下都市でのごく一般的な作り方。

上流階級ともなると遺伝子の調整もするそうだが、興味がないので私はよく知らないままだ。

「あれがファイリアの……」

保育器の中で動いていた、しわくちやの赤子の名前は『アスカ・ピオーネ』。

彼女と同じ髪色、瞳の色の女の子。

しかし、そんなことはどうでも良かった。私はファイリアを正気に戻すため、行動を開始していた。

彼女の夫への呼びかけ、彼女自身への説得。

「外は危険がいっぱいなものよ！

おかしくなった機械や、兵器、サーヴァントがわんさか居る！

……AIが守ってくれる地下都市じゃないと、人間は安全に生活できないのよ。

どうして、危ないことばかりなの……？ しているの……？」

この世界では当たり前前のことを、改めてファイリアへ懸命に伝えるが、彼女はこう返すばかり。

「エト、何を言っても私は変わらないわ。」

もう子どもの頃とは違うの。貴女があれこれ気を使ってくれなくても、大丈夫」  
黒々とした瞳の視線をふらつかせることなく、口振りに迷いはなく。

「……乱暴な言い方をしてごめんなさい。

でも私は、カイヤと一緒に世界の秘密について解き明かしたいの。

エト、心配を、いえ……邪魔をしないで」

——だからこそ絶望した。

私のような凡人は……彼女の人生に影響を及ぼせない、爪痕を残せないのだと。

心が壊れそうになる前に、こう思い込むことにした。

(ああ……この人はもう、みんなの愛していたフィリアじゃない)

カイヤ・トバルカインと出会い、彼女は墮落してしまったのだ。

彼女はこんな人間ではなかった。カイヤのせいだ、全部カイヤのせいだと。

私は全てがどうでもよくなり、多くの上流階級と同じように、日々を墮落と娯楽で満たした。

上流階級がなぜ、このような破滅的な遊びに耽溺たんとせきしているのか、私、分かってしまった。

莫大な生存権を持ち、自由にアーカイブを読む彼ら彼女らは、世界について知りす

ぎたのだ。

……私が、フィリアについて知りすぎてしまったように。

生存権を賭けてルーレットを回し、薄い酒を飲み、再現された豪華な食事を、酔ってふざけては床に皿ごとぶちまける。

……怠惰な生活を続けていた。

フィリアの夫が違法薬物の過剰摂取で死んだ。アスカが産まれてから7年過ぎた。フィリアが死んだと、連絡が来た。

「……フィリア、は？」

窓の無い、オレンジのランプだけが灯りの、四角い狭い面会室。

遺体など無かったから、私は目の前に立つ女と『男』が、嘘をついていると初めは思った。

「あたしを庇って死んだ。遺体は無い、回収できる状態じゃなかった」

しわが増えた色濃い肌の女、カイヤ・トバルカインは短く情報を口に出した。

そうしてから、後ろにぼおっと立っている男を指差す。

「こいつはフィリアのサーヴァントだ。だから娘のアスカに相続させる」

ごちゃごちゃと機械の部品をつけた長身の男は、サーヴァントだという。

ある資料で読んだ覚えがある。

数百年前の戦争で使われた、人と同じ形をしていて、人に使役され、どんな兵器よりも世界を壊した殺戮兵器。

それが、サーヴァントなのだと。

「あと、アスカはこの上級都市から別の都市へ移動させる、安全のために。

AIと裏取引して、手続きはもう終わらせてある。

……アーチャー961、アスカを頼んだぞ。いつまでも彫像みたいに黙っていられては困る」

カイヤはそう言いながら、サーヴァントへ声をかける。

「……分かつ、た」

覇気のない声で答える男。

カイヤが廊下へ出てから直ぐに、私はそのサーヴァントの肩を掴んで揺さぶった。

「——何があったのか、答える！」

男は芯のない立ち姿で、ぐらぐら揺れながら、言葉を吐き出す。

「フィリア・ピオーネは……カイヤと俺を庇って、死んだ。爆死した」

「……爆死？」

考えてもいなかった死因に、返す声が途中から裏返った。

男はふわふわとした語り口で続ける。

「目の前で、死んだ。」

粉々になった、血と肉の混合物になった、床の染みになった、汚れになった。

「……数分前まで、俺と話をしていたのに」

私は、機械部品で顔を隠している卑劣なサーヴァントに向かって叫ぶ。

「じゃあ……お前が、お前が殺したようなものじゃないか！」

声は怒りで震えていた。

「ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな！」

あんな特別な女の子が……そんな汚い死に方をしていいはずがない！」

フィリアは別格の存在で、上流階級で、成績優秀で、美しくて。

そんな存在が、ぐちゃぐちゃになって死んでいいはずがない。

……彼女ですらそんな死に方をするというのなら、ただの中流階級であった私の立場

はどうなるのだ？ 釣り合おうとしていた幼い頃からの努力は？

(全部、意味がなかったの?)

怒りと嘆きで混乱する。

そんな私の気持ちを無視するかのようになり、ゆらゆらと所在なさげになっていた男の背

筋に、急に芯が入った。



けているのが見えた。

「ふーん……ねえトバルカイン、お母さまはどこ？」

ちつともかえつてこないから、いつもきびしいの、ごはんのときも一人なの」

アスカは幼い頃のフィリアに生き写しで……私は彼女を視界に捉えた瞬間、強い使命感を抱いた。

（あの子をフィリアの二の舞にはさせない、あの子は、選ばれしフィリアのように育ててみせる）

私はカイヤ・トバルカインに近づいて肩を掴み、アスカの側から引き剥がす。

「うわー！」

女が床に尻餅をつく。

「きゃあー！……あなた、だれ？」

アスカが体をびくと跳ねさせ、私に声をかけてきたがそんなことどうでもいい。

「私の名前はエト・ピオーネ、貴女のお母様の親友よ」

幼い彼女へすがりつくように目線を合わせながら、提案を、いや、懇願した。

「貴女を引き取りに来たの。こんな危ない女なんか通報して捕まえてもらって、私と一緒に暮らしましょう？」

旧世界の人々が神に祈るとき、きつと今の私のような姿だったのだろう。

みつともないほど絡みついて、息を荒くし、ただただ欲望をぶつける……。

「……いや。だって、カイヤの方がやさしそうで、面白そうなんだもん」

アスカは、母親譲りの黒い瞳で私を見下ろしながら、絶望的な一言を放った。

「見て、エト」

少女の真つ白で柔らかな手のひらに、紫の石がはめ込まれた髪飾りが乗っている。

「お母さまがカイヤにあずけたそうよ。これはね、わたしのお家の宝もの……」

これを、カイヤにわたしたたってことは、お母さまがカイヤのことをしんらい？ して  
いたって、ことだと思おうの」

彼女は難しい言葉をたどたどしく操りながら、すがりつく私を子どもの力で引き剥がした。

私は抵抗も出来たけど、手足に力が入らなくて、情けなくフローリングの床に転がる。

その姿はきつと、瀕死の虫のように惨めだったことだろう。

「ねえカイヤ！ お母さまはどこ？ それに世界についてのお話もして！」

きらきらした声を出す彼女に、私に倒されていたカイヤが重い腰を上げ、近づいていく。

「……実はな、お前の母さんは——」

そして、カイヤはアスカと目を合わせながら、聞き取りやすいようにゆっくりと話し



始めた。

母親が死んだこと、その理由は明かせないこと、アスカの身にも危険があるかもしれないから、この『上級都市ピオーネ』から引越しをすること。

「……そう、ですか」

初めは瞳を輝かせていた少女も、話が進むうちにその光も消え、真つ黒な瞳で瞬きするだけの、人形が如くになった。

「お母さま、わたしをおいて、いつてしまったのね」

「お葬式……お別れ会を内々で開こうと思う、アスカは出るかい？」

「でます。それが子どものやくめだと……お父さまのおわかれ会のとき、学びましたので」

彼女はふらふらと自室へ向かうと、扉を閉ざす。

しばらくすると、リビングに聞こえるほどの大きな声で泣き始めた。

「……まあ、親亡くした子どもなんて、こうなつて当たり前だわな」

カイヤはフローリングにそのまま腰を下ろした。

「エトさん……だつたよな」

彼女が顔を上げて、その黒曜色の瞳で私を見る。

「勝手に家へ上がり込んだあたしも悪かつたが……さっきのあんたの態度は、子どもに

見せるものじゃないぞ、アスカもシヨックを受けていた」

——胸で何とかせき止めていた思いが、その言葉をきっかけに溢れ出した。

「……お前のせいだ、お前のせいだ、カイヤ・トバルカイン！」

フィリアをたぶらかして危険な外に誘い！ あまつさえ殺した！」

私は立ち上がり、反省も後悔の色も見せない彼女を弾劾する。

「お前がフィリアに関わらなければ！ 彼女は死ななかつたじゃないか！」

アスカだつて親を失うこともなかつた！ お前が幸福を奪つたんじゃないか！

そんな……全ての元凶であるお前が、物の道理を説くのか?! 人に説教をするのか

?!」

カイヤは言い返さない。

私は近づき、彼女へ指を突きつけながら、叫び続ける。

「二度とアスカの前に姿と表すな！ もちろん私の前にもだ！」

お前は不幸と災害、死を撒き散らす破滅の化身だ！

犯した罪は永遠に許されることはないし、ずっと攻め続けられる！

そしていつか必ず、手ひどい罰を受ける！

何の幸福も掴めずに野垂れ死ね！ 外の世界の狂った化け物に喰い殺される！

この……おぞましい、人間もどきが！」

私は肩で荒く息を吐きながら、カイヤを見下ろす。

彼女は目を細めた後、ため息をつくど、私を押し退けるように立ち上がった。

「……アスカの引越しを手伝った後、あたしは彼女の前から消えるよ。」

エト、あなたの望み通りにね」

「……彼女の身元引受人には、私になる、お前の思い通りにさせない、引き剥がしてやる」  
「どこで生きていきたいか、それはアスカが決めることだ」

カイヤは自らの懐から折りたたみ式タブレットを取り出すと、操作し、私に画面を見せた。

「都市運営の上層部であるAIと取引して手に入れた、『都市間移動特別許可証』だ。」

こればかりは偽造するわけにもいかなくてね。

アスカのこれから先の、人生の安全のためにも、さ」

カイヤは足音を立てながら、玄関へ向かう。

「あたしはフィリアのお別れ会には出ない。その方がいいだろう？」

サーヴァントの所有権利はアスカにもう移っているから、預けておくが……あなたの判断で、都市に差し出し、生存権と交換してもらってもかまわない」

彼女はそれだけ言い残すと、扉を開けて、出て行った。

カイヤ・トバルカインに会ったのは、それが最後になった。



彼女が居たのは、軽食が並べられていた立食室。

声をかけようとした瞬間、そこにもう1体、招かれざる存在がいることに気がついた。

「アーチャー！ わたし、おいしそうなものどつてきてあげるね！」

「……マスターアスカ、貴女の背丈では難しいかと」

「そんなことないわ、おちやのこ？ さいさいさいよ！」

「さいが、1つ多いです」

「おおい方がいいじゃない！」

先ほどまで泣いていたのか、目元を少しだけ腫らしたアスカと、フィリアの死の原因となったサーヴァントが、穏やかな雰囲気の中、食事を摂っている。

「アーチャー……。なくと、頭がずきずきするの……。どうして？」

「水分の不足が原因です。飲み物を取ってきましようか」

信頼の響きたつぷりに『アーチャー』と呼ばれた男は、サーバーから飲み物を持ってきて、あの子に渡す。

受け取った彼女は、警戒の色もなくそれを飲む。

「どうしてアーチャーが知っているのか、あててあげましようか。」

「……アーチャーもいっばい、ないたことがあるのね！」

「それは……。答え辛い、です」

会話、会話が続き。

「サンドイツチたべよ！ わたしといっしょに！」

あの子の顔から、涙ではなく笑顔がこぼれる。

……その光景は、私の心を折り、敗北を知らしめるのに、充分すぎるほどで。

（あつ、私、負けた。あの子、私より親の仇と一緒にいる方が、笑顔になれるんだ）

あんなに見つけようとしたのに、守ろうとしたのに、全て空回りで。

ゼーんぶ、無駄で。

だから、あの子の事は、またどうでも良くなった。

フィリアのお別れ会から数日後。

アスカはカイヤの手助けを受けながら引越しを行い、6歳までを過ごした『上級都

市ピオーネ』を去った。

……10年、あつという間に過ぎた。

空き家になったフィリアの家は、私がい取り、住むことにした。

私の夫はギャンブルにのめり込んで、生存権を使い果たし、3年前に破産。

都市運営システムが操るロボットに連れて行かれ、それつきり。

まあ、死んだのだろう。生存権が無い人間を、AIは生かしてなんてくれないから。私は10年でほとんど変わらぬ。色のない、人生、意味のない人生。

破産して死んでやろうかと計算していたある日、通信が来た。

『エト・ピオーネ様、ご親族であるフィリア・ピオーネを保護しました。』

至急、地下5階、外部受け入れエントランスに移動を願います』

そんな音声メッセージ。私は身なり……茶色の髪をお団子にまとめ、袖のある黄土色のドレス姿……も整えず、急ぎ足で向かった。

ガラス繊維で作られた植物が、透明な壁の向こう側で茂る、明るいエントランス。

そこに立っていた、10年ぶりに再会したあの子は。

「……アスカ、大きくなったわねえ」

学生時代のフィリアが、そのままいるかのようだった。

変わらない黒髪、瞳、あの頃を思わせる背丈、制服。

……人間というのは、救いようが無い生き物だと、我ながら思う。

手には入りそうで、手に入らなかつたものが、もう一度目の前に現れると……。

(私、やっぱり『フィリア』が欲しい)

そう、思ってしまうのだ。

震える手で、通報して、要らない女、何とかトバルカインと、意地の悪そうな空気を纏ったサーヴァントを連行させて。

次に、受け取った薬剤をアスカへ投与。

AIが生体内蔵デバイス経由で彼女を操れる状態にして、サーヴァントを処分してもらい。

アスカは、記憶消去の処理を受けさせた。戸籍も変更させた。

かつてフィリアが眠っていたベッドに、今、まつさらな状態の新しい『フィリア』が眠っている。

その美しい寝顔を見つめながら、誓う。

「私、二度と貴女を手離さない。二度と、貴女を墮落させない」

彼女は寝台の上でうめいている。記憶消去の直後は悪夢を見やすいと聞いた、その影響なのだろうか。

可哀想だったので、体をそつと揺さぶって、起こしてあげた。

「う……………あ……………誰……………?」

フィリアと同じ色の瞳で瞬きをする、『フィリア』。



どこか心細そうな表情をする彼女を安心させるため、私は力強く設定眞実を口に出す。  
「私の名前はエト・ピオーネ。」

エトは、古い言葉で鳥の名前なの。『エトピリカ』という鳥  
私は彼女の髪を手で梳く。

「貴女の名前はフィリア・ピオーネ。」

フィリアは、古い言葉で『友愛』の意味。親友同士の深い愛情のこと  
新しいフィリアの姿を目に焼き付けるため、何回も瞬きをする。

「貴女は私の親友の子ども。」

両親を亡くした幼い貴女を、私が引き取ったの。

それからずっと、私と貴女は2人で暮らしているのよ」

「ふた……り？」

「ええ、そう」

彼女は虚ろな黒の瞳のまま、私をぼんやりと目に映す。

「それはね……つまり……貴女は、私のものなのよ。私は貴女のものなのよ」

「え……う？」

目を覚ましたばかりで困惑しているフィリアに、私は、何十年も前から告げられた  
言葉を伝える。

「——家族、なんですから」

言い終わった瞬間、私の口角は、際限なく吊り上がっていく。

笑みが、胸から沸き上がる歓喜が止まらない。

だって、だって私はようやく——。

(『フィリア』を、手に入れたのですもの)

でも、そんな幸福の絶頂から。

「逃げてえー！ フィリアアアア!!」

転がり落ちて、不幸の谷底へ。

私は外から来た男達に拘束され、足蹴にされて、彼女の目の前で叫んで。

呆気なく、撃たれて死んだ。

第68話 エト

終わり

# 第16章 棺の中のデウス・エクス・マキナ

## 第69話 終わりの庭で『理由』を探す君は

それは、死ぬ間際に見た夢だったのだろう。

華々しき英雄の、静かな白い終わりに、垣間見た夢想。

——もう、一步も動けない。

冷たい深い白の中に、私は前のめりとなって倒れ込んでいる。

空に太陽は見えず、伏した体には雪が。

初めは体温で溶けていたそれも、時間が経つにつれ、水からみぞれになり、とうとう冷たい形そのまままで積もっていった。

(ああ、私は終わるのか)

心の中だけで、そつと思り返す。

……友は死んだ。

2人の弟達も、もういない。上の兄達は聖なる山の上へと登っていった。

霜が降りたまつげで、瞬きをする。

「寒い……」

思わずそう言つてしまい、私は自己嫌悪した。

ああ、こんなこと、『英雄アルジュナ』は口にしてはいけないというのに。

(でも……この言葉を伝えてくれる人間も……もう、いないのか)

真つ白な世界で、想う。

多くの人間が、私達の物語を口伝していくのだろう。

華々しさをもって、道徳をもって、夢をもって、希望をもって、しるべ導をもって。

それを聞いた人々は、胸に何を感じ、何を夢見てくれるのだろう。

(けれど……)

ただ一度も表さなかった『思い』は、誰が想つてくれるのだろう。

(私の中には……『黒』が潜んでいる。

私にささやき、悪逆を行う……もう一人の私が)

凍える世界の中、考える。

(私はずっと、私の心をないがしろにしていた。

あの感情が、感覚が、『英雄アルジュナ』として相応しくないと、無い物にして、切り

捨てようとしていた。

その歪みを受け止めてくれていたのが、『黒』たる彼だった)

積もる雪は、かつて弓を引いていた指を、動かぬ冷たい肉へ変えていった。

(しかし、本当に『黒』は……邪悪だったのだろうか)

体の末端から、感情と熱がじわじわと消えていくけれど、まだ温もりを残しているそれに、私の心はすがりついた。

(思考よ、どうかまだ凍てつかないで。

まだ考えていたのです。あの戦いの前、友へ問いを投げかけた時のように。

私は、私に問い続けなければならないのだから……！)

必死な気持ちを反映するかのよう、まだ鼓動を止めていない心臓がやけに熱く感じた。

(『黒』は……今にも砕け散りそうな私を、ずっとつなぎ止めてくれていた。

親が子を思うように、隣人が助け合うように、飢えた人に他者が食べ物を分け与えるように……ずっと、私を助けてくれていた……何故に……?)

……吹雪と心音だけが、今私の側にあるもの。

(それはきつと、『人』として、だったのか?)

曖昧としていた気持ちを、確固たる想いへとした瞬間——雪に沈んでいるというのに、暖かい日の光に包まれているような心地に私はなったのだ。

(私も彼も、特別な所なんて何もない、どこにでもいて、生きていく『人』。)

……だからこそ、あんなにも悩み、苦しんだのか。いや、苦しむことが出来たのか。あの時抱いた気持ちも、悪心も……全て、『人』だから感じたことだったんだ)

私は自然と微笑んだ……気がした。

(……では、私がするべきことは、決まっている)

冷たい雪に沈んでいる、重たい腕を動かそうとした。しかし、ちつとも動かない。仕方がないので、祈りの言葉を頭の中へはつきりと思い浮かべることにする。

(——神々よ、父よ、私を愛してくれた大勢の者達……家族、妻よ、我が子達よ。どうか、許さないでください)

その祈りは、天のためでもなく。

(私は、私が苦しみ続けるために、私の心を手放すのです。)

……悔やんで、悩んで、涙を流し、唇を噛んでは、そこより血を流して顔を歪めたいのです。

湧き上がる自らの感情に迷いながら、世界のあらゆる場所で、ささやかに暮らしている……当たり前、『人』のようになりたいのです)

人のためでもなく。

(神でもなく、私を愛してくれていた人々にでもなく……私は、私に祈りを捧げます)

地のためでもない。

(どうか……私の苦しみぬいた心が、再び世界に産まれますように。

そして、己へと問い掛け続けることが、出来ますように)

私による、未だ生まれざる私アルジュナのための祈りだった。

身勝手に、自分本位な……私のためだけの祈り。

そして、願うことはもう一つ。

(心の奥底に閉じこめていた黒も、共に再び世界に産まれますように。

決して、それを切り捨て、初めから居なかつた者になど、されぬよう……)

……祈ったそれは、願望でもあつた。

次に生きる時も、彼が側にいてくれたのなら……きつと、私は『人』として、あれる  
だろうから。

(遠い時が過ぎ、思いが積もり続けられ、クリシュナ 黒も、私のようにこの世界に産まれるのだら  
うか?)

ああ、何だかその事を思うと、胸が締め付けられるような気持ちになる)

……生きて、涙を流し、凍てつきながら夢を見て、祈ったから。

もうこれで十分だと思い、体に残っていた熱を吐息と一緒に吐き出してしまった。

そして最後に、これから先の、自分では知ることの出来ない、遠い未来を夢見てみた。

(春はどう来るのだろうか?)

雪が溶け、その清水で花々が咲き、人々が笑い合う、そんな春だといいいありふれた、幸福な景色が瞼の裏に浮かぶ。

(夏はどう来るのだろうか?)

雷鳴の咲く黒雲が山脈に湧き、草木が雨に濡れる。

湿った土の香りは風に遠く運ばれ、畑仕事を手伝う子ども達が真つ先にそれを感じるのだろうか)

体は雪の中へうつ伏せに倒れているはずなのに、暖かい大気に頬が撫でられているような錯覚が。

(月日が重なれば、星々の並びはどうなるのだろうか?)

先まで輝くその星の列を人は見て、過去と、未来の英雄達の物語を語り継いでいくのだろうか)

生まれては死んでいく無数の人生を、瞼の裏で垣間見た気がした。

(……遠い未来の誰か、私を知ってくれるだろうか、想ってくれるだろうか。私の心に、出会ってくれるだろうか。

でも、この好奇心は胸の奥にしまい込んで……次の未来へと託してしまおう) けれど、これは夢。



（私は『英雄アルジュナ』として、誰かの希望になれたのだろうか。

もしそうだとしたら……誇らしい）

英雄が死の間際に見た、淡い夢。

だから。

「——ああ、クリシュナ黒」

動くはずもない唇が開き、彼の名前をもう一度呼べたのも……きつと夢だったのだ。

夢を、見る。

それは、『英雄アルジュナ』が死ぬ間際の夢。

俺が壊れたサーヴァントとして成立してから、たびたび襲い来る悪夢。

神聖なる山、険しい斜面、果ての見えない雪景色。

倒れた者から順に、天より降り続く雪へ埋もれ、静かに冷たくなっていく。

「……待って、待ってくれ！」

俺は叫んだ。遠ざかっていく、白い布をまとうその背中に。

くるりと振り返るその姿は、いつも変わらない。俺を目にとめたのか、深遠色の瞳を細めた。

黒い髪の上に白の雪がつく。

「ああ、クリシユナ黒」

彼が、アルジュナが俺の名を呼んだ。

「ごめんなさい、私はどうしても、貴方を置いていってしまおう」

夢の中はいつも同じ。どこまでも澄んでいて、冷たく。

「幼い私の心……小さな私の欲……」

彼の表情は穏やかで、眼差しは悟りきったかのようにどこまでも優しかった。

「貴方を受け入れ、育てることが出来たのならどれほど良かったか……」

そうすればきつと……もつと良い方向へ何かが変わったかもしれないのに」

彼は立ちすくんだまま、俺を見つめ微笑む。

「ああすれば、こうすれば……最後にはやはり、そう考えてしまいますね」

落ち着いた様子で俺に笑いかけている……そんなこと、あり得るはずもないのに。

彼の言葉は続く。

「さようなら、アル私ター欲エ心ゴ」。

死ぬ時まで、同じとはいかない。貴方は、私でない私を助けに行つて。

これより無数に生まれるアルジュナ、無限に旅を続けその中で迷う私に、寄り添って

あげてください。

「悩める彼らの、どうか助けに。私では……私を救うことは出来ないから  
伝えられる別れの言葉は、いつも同じで。」

「さようなら、クリシュナ黒。私を人につなぎ止めてくれて、ありがとう。」

ああ、礼が言えた……これで何の心残りもなく、最後を迎えられる」  
感謝の言葉も、込められた想いも、何一つ変わることはなく。

「また会うことがあれば、どこか美しい星の下がいい。」

夢物語、だろうけれど。

さようなら、私の……心」

彼の姿が闇の中へ溶け消えていく。死という永遠の世界へ遠ざかっていく。

変わらない、変わらない！

「……アルジュナ」

思わず口から出たその声は、余りにも低く、執着を持った響きだった。

「アルジュナ!!」

夢の中の雪山は、ぐずぐずに形を失い、崩壊していく。

「必ず俺はお前を取り戻す！ どこへ行くこうと！ 俺はお前の……！」

言葉は最後まで言えず、深い深い闇だけが空間に残された。

私は……いや俺は、全てを取り戻さなければならぬ。

俺がサーヴァントとして意識を取り戻した時には、既に破壊されていたアルジュナの心。

彼女の母に託された存在であり、俺という存在に寄り添ってくれたアスカを。

俺に一度は命狙われ、このおぞましい正体を知りながらも、俺を仲間と呼んでくれたトバルカインを。

(全て、元通りに)

それだけが、英雄に巣くう邪悪であった黒俺の生存が許されている『理由』。

……生きていい理由、なんだ。

「……」

意識を何らかの手段により操られてしまったアスカ。

彼女の令呪の命により、俺は自由を奪われ、サーヴァントとマスターとの繋がりも奪われた。

「……」

ここはコフィン。すなわち棺の中、死者が嘆きと共に据えられる箱の中だ。

「……」

水分を含んだ物体が砕かれる音が、直ぐ側から聞こえる。

恐らく、サーヴァントや人間を粉碎するミキサの音だろう。

「……」

液体リソース。あのなんとも都合のよい物質の正体が『これ』ということか。

英霊と人の肉を刻んで、強い青の光放つ原液と混ぜ……そして……そして。

……この液体で、今の世界は生かされている。

死者の残差に生者はしがみ付いた。いつか全ての資源を使い果たし、破滅が来るとい

う真実から目を逸らして。

「……はっ」

近くなる機械音へ、失笑をもらした。

(まだ、死ぬわけにはいかない)

『英雄アルジュナ』から託されたこの体を、失うわけにはいかない。

「行かなければ……」

俺はいつの日か必ず、アルジュナへ肉体を返さなければならない。

「( )ではない、どこか……」

令呪の命……『リソースセンターへ送られるまでの間、一切の行動を禁じる』あの縛りは、どうやら解けてしまったようで、体をわずかに動かすことが出来た。

手を伸ばせば、冷たく滑らかな蓋の内側へ手が当たる。

俺は……由来も分からぬ苦笑いを口元に浮かべていた。

そして、こうつぶやく。

「——これより私は、棺の外へ」

『ミキサー付近で異常事態発生、異常事態発生』

作業員へ呼びかける音声を聴覚センサーで拾いながら、アインは金のおさげを揺らし、一定の速度で問題の箇所へ向かいます。

ここは、主に発電に使われている液体リソースを精製するセンターです。縮めてリソースセンター。

原液をくみ出すために地下深い場所に作られた、狭く、薄暗い作業場所。

辺りには蒸気混じりの湿った空気が漂っています。

歩く度に、かしゃかしゃと鳴る金属製の連絡通路。

その下は、青い光を放つ液体リソースのプールです。

奥から逃げてくる者達は、人ならざる美をもったアインを自然と避けていきます。

「——警告します」

サーヴァントや人間の遺体が詰められた、コフィンが散乱する集積場。

命終わった者が集められた……気取った物言いをするのであれば、『終わりの庭』とでも表現しましょうか。

「警告します」

その棺の山の頂に立つ男を、アインは目の内に捉えました。

姿はまるで、戦場にて屍の山を築いた一騎当千英の人殺し雄が如く、捨てられた死者達の王が如く。

正体、アインには既に見当がついています。

「サーヴァント、アーチャー961。即刻活動を停止し、再度コフィンの中へ入りなさい」

男の首が、ゆっくりとこちらに向きます。

相当暴れたのか、顔を覆い隠していたギアは半壊し、煌々と輝く片目が覗いています。虹彩の内側は、黒雲の中に何十という稲光が弾けているかのようでした。

「……貴様に命令される筋合いはない」

感情を隠しもしない、荒々しく、粗野な声。

「でしたら……アインとあなた、殺し合うしかありませんね」

思考、戦闘モードに。

換装用アンドロイドボディ、全1000体、起動。

襲撃者対応用重火器、ロックを解除。

地上待機中の機械化サーヴァントを、自動迎撃から『アイ<sup>マ</sup>ンが操縦<sup>アル</sup>』に変更。

「ちっ……」

男は棺の山から跳躍し、宙で姿勢を正すと、激しく燃える矢をつがえました。アインはハンドガン2丁を構えます。

——AIとサーヴァントの、殺し合いが始まりました。

第69話 終わりの庭で『理由』を探す君は  
終わり



## 第70話 アンドロイドよ死者の王と踊れ 前編

アインがアーチャー961を殺さなければいけない理由は、主に3つあります。

1。彼は既に処分を決定づけられたサーヴァントだから。

2。アインの守るべき都市を、世界を乱す存在だから。

3。先日見つかった『S文書』。そこに書かれていた実験により生み出された、リリス様を殺しうる力を持ったサーヴァントだから。

けれど、もつとも強い思いは。

(何より……リリス様を殺せる力を持った存在を、アインは許せないから)

この世界には女神の敵が多すぎる。

地上にはびこるレジスタンスしかり、我ら『都市運営システム』に下っていない機械化サーヴァントしかり。

世界を守るため、人間を生存させるために、敵は殺さなければ。

(ですから、全武装をもってあなたを殺害します)

アインが両手に構えた銃を連続発砲する度に、強い反動が手首にかかりますが、特殊

シリコンを混合した関節部が衝撃を吸収します。

これにより、本来発生する弾のぶれを最小限に抑え、ほぼ予測通りに標的へ攻撃が着弾。

「攻撃に……対処」

目標は、961が放った燃えたつ矢。

それへ銃弾を何発もぶつけ、着弾地点をずらします。わずかに逸れた矢は、液体リソースが詰められた後方の金属タンクへ突き刺さり、内容物を噴出しながら中規模な爆発を起こしました。

暗闇が燃える炎によって照らされ、工場内部は揺れます。

「アインは索敵を開始します……」

爆発による煙が晴れる前に、弾を撃ち尽くした拳銃を捨て、予備のもの……スカートをとくし上げ、太ももに巻いたホルスター内の拳銃2つと交換します。

そしてアインが向かった先は、初撃を終えて、人がすれ違うのがやつとなほどの狭い連絡通路へ降り立った、アーチャー961の側。

「……アスカはどこだ？ トバルカインは？」

彼から矢継ぎ早に質問が。

「答えるとお思いで？」

銃口を2つ、サーヴァントへ向けました。

「……はっ！」

961は白い外套を爆風ではためかせながら、アインの行動を失笑します。

それもそのはず。サーヴァントには神秘が込められていない攻撃は通用しない、アインですら知っています。

だから、アーチャー961は2丁拳銃の弾を避けようもしない。

「……?!」

——けれども、その強者ゆえの油断が命取り。

彼の、機械部品の無いむき出しの頬を弾が掠めた瞬間、紛れもなく皮膚が切れ、小さな傷を作りました。

「魔術……いや、違うな。何らかの遺物を用いて、神秘を付与している……」

指先で傷口をなぞるアーチャー961。

「アインはあなたに理由を答えません」

続いて射撃しながら、サーヴァントを牽制。

(……攻撃が通用したタネを、アインはもちろん知っています)

この銃の弾頭は、リリス様がお持ちの『衛星軌道上展開兵器ヴリトラ』の肉体を、一部練り込んだ特殊弾。

機械化サーヴァントである『ヴリトラ』の体は、サーヴァントに通ずる確かな神秘を携えています。

地球外周よりも遙かに大きい体を持ち、空を覆い、星にとぐろを巻く蛇竜『ヴリトラ』は、リリス様の強大な力の証明とも言えましょう。

「だが……その体を壊してしまえば、貴様がどんな奇策を用いようと関係ない」

獣性すら感じる、961の低い声。牽制射撃により、弾を打ち尽くした銃をリロードしている暇など、超常の存在であるサーヴァントは与えてはくれません。

「強い口調で述べます。簡単に壊せると思わないでいただきたいですね」

アインは袖の内側に仕込んであった予備の2丁拳銃を手の内に落とし、構えなおしました。

「……」

961は唇を固く結んだまま、走り……というより通路を低く飛ぶ勢いでアインに迫ります。

音速もかくやで突き出されたサーヴァントの片腕を、しゃがんで回避。髪の毛が吹き飛びましたが、それに構わずアインは動きます。

「いっふいっ」

わざと笑い声をこぼしながら、金属製の狭い通路を前転して前に転がり、彼とすれ違

う。

攻撃を避けられた961の、輝く金の瞳が滑らかに動き、アインの動きを追うのが見えませんでした。

「……」

アインは、腰を低く落とした前転の状態から素早く立ち上がって、彼の顔めがけて発砲しますが、機械部品を付けた足の側面ではじかれました。

けれど、彼も無傷という訳ではなく、パーツに小さくヒビが入っているのが確認できます。

「……小賢しい真似をするんだな、都市運営システムというものは」

「はい、とアインは自らの行動を肯定します。

だって……世界には、処理に手間取る存在がたくさんいますからね」

短い会話の後、両者は走り出し、アインと961は真つ向から対決することになりました。

「……！」

どちらが息を吐いた音なのか、今は判断できません。

961が行った第一の攻撃は踵落とし。それも、足を高く上げて行う単純なものではなく、通路手すりを踏んで跳び、高さと全体重をかけた強い攻撃。

「!」

後方へ下がることで回避しました。攻撃をもちに受けた通路の薄い金網床は、落とされ、工場の下に広がる輝くプールへ。アインと961の間に、飛沫の壁が出来ました。わずかに出来た隙間の時間で、観察したサーヴァントの行動から、次の攻撃を予想します。

(彼は初撃以外、矢による攻撃を行っていない。)

残存魔力が少ないのか。それとも、これから先のことを見越して、節約でもしているのでしょうか)

過去に起きたサーヴァント戦闘のデータを閲覧できれば、傾向や予測が立てられるのでしょうが、そういった過去のデータは、『あるAI』の権限によりロックされていて覗けません。

(行動あるのみだと、アインは攻撃を続けます)

1秒も使用していなかった思考を中斷。

アーチャー961が水飛沫の壁を突き破りながら、こちらへ向かってきたからです。

「くっ!」

肉薄してきた彼に、右手に持つ銃でそのまま発砲しようとした瞬間。

「なっ……」

アインにとって予想外の行動を取られました。

アーチャー961の頭部を戒めていた獣のような形のギアが、内側から開く顎の力によつて、上下に引き裂かれ。

「馬鹿なっ！」

剥き出しとなつた口と歯で銃を捉えると……暴発の危険性もあるだろうに、躊躇なくかみ砕いたのです。

視界いっぱい広がる、強化プラスチックの黒の破片。

彼は動きを止めることなく、アインの右腕を両手で掴みました。

そのまま、ねじつてアインの体を投げ飛ばそうとしますが。

「……だとしてもー」

呆けるなんて、人間らしいことはしませんとも。

右腕を自切<sup>パージ</sup>、その後。

「弾け飛べー！」

内部に仕込んである爆薬を起動させ、手榴弾のように至近距離で破片を浴びせます。

「これで少しは時間と距離を稼げるはずで……いない？」

敵のダメージを確認しようと数歩さがったところ、爆炎が晴れた通路にアーチャー961の姿は居らず。

「——上ですか!」

工場内部の監視カメラ映像から敵の位置を確認した時には、全てが手遅れでした。アーチャー961はアイン目掛けて落下してくる。残った左腕だけで胴体を守ろうとしましたが。

「砕ける!」

サーヴァントの声と共に、敵の腕がアインの胴体を貫通しました。衝撃で人工毛を編んだ金のおさげが揺れ、自らの肩に当たります。

壊された左腕と、胴体からこぼれていく部品は、下で輝く原液プールへ、ぼちゃんぼちゃんと落ちていきます。

「同じことを何度も言わせるな……アスカ、もしくはトバルカインの居場所を言え。」

AIとて死にたくはないだろう」

「アイン、は、言いません」

絞り出すように破損パーツから言葉を伝えると、彼はアインの頭を、空いている方の手で掴んで、貫いていた腕からずりりと外しました。

そして、連絡通路の落下防止の柵に叩きつけると、原液プールへと投げ捨てました。

『残存機体数、1000』

ええ。サーヴァントを前にしたAI及びアンドロイドなんてこんなもの。彼らの機



動力、攻撃力に、正攻法で叶うわけではない。

ですから——遠慮なく、邪道を使うのです。

「アーチャー961」

新しく起動したアンドロイドボディのブラックボックスの中から、アインは体を動か  
し、彼へ呼びかけます。

足を動かし、連絡通路の奥から、彼の背中へ声を投げる、

彼も先ほどの行動でアインを殺せたとは思っていないようで、驚きも見せずにこちら  
を振り向きしました。

「投降してください、さもなければ」

アインは銃口を顔へ向けます。サーヴァント戦闘用ではなく、通常の拳銃です、特殊  
弾がもつたいたいなのです。

「この人間を、殺します」

腕の中で怯え震えているのは、逃げ損ねた作業員の男性、下流階級です。

生存権は残り5年の、都市運営システム基準から見れば『非常時には切り捨て可』程  
度の価値しかありません。

「たす……けてください、まだ死にたくない……」

作業服を冷や汗で濡らし、震えながら命乞いする男性を、アーチャー961は感情が

伺えない金の瞳で見つめています。

(アインは思案します。さて、彼はどう出るのでしょうか)

これから先見せる彼の行動によっては、作戦を変更しなければいけないのですから。

「……面白くもない手を使うのだな、AI」

「その通りです。アインにユーモアのセンスを期待しないでください」

彼はこちらを睨み付けながら、ゆっくりと両腕を上げます。

いわゆる降伏のポーズ……ですが、みた目通りの意味を持っているとはアインは考えません。

「膝をついてください、再度拘束します」

男性に銃口を向けたまま、アーチャー961に命令します。

遠隔操作しているアンドロイドボディ数体が、彼の後ろにつきましました。

そして、アインに言われるまま、彼は膝をついて――。

「……炎神よ」

短くそう呟いた瞬間、アーチャー961の両足が燃え上がります。

湿度が高く、薄暗い地下工場を、原液プールの青い光とは別の、青い炎が照らしている。

その熱は大気の温度を上げ、そして。

(金属製の通路が、換装用ボディが……)

まるで日の下に置いていた飴菓子のように、いとも容易く通路が溶け落ちていく。

拘束のために動かしていたボディは、炎に包まれた足で蹴り飛ばされ、胴体を焼かれ、黒く焦げながら落ちていく。

(やはり、先ほどの戦闘では力を温存していたのですね。

……ではこうしたら、アーチャー961はどんな行動を取るでしょう?)

アインは後方へ逃げながら、腕に抱えていた男性をわざと前へ突き出しました。

どろどろに溶けながら廊下は落ちていきますから、男性の行く末は決まっています。

「あつ……ああああああ!!!」

突き飛ばされ、原液プールへ真つ逆さまに落ちていく人間。死を確信した叫び声が辺りに響きわたります。

しかし、液体に落ちていく寸前、当然のようにその男性を抱き抱える姿がありました。

「……………」

もちろん、男性を助けたのはアーチャー961です。彼は救助した後、両足側面についている強化外装から、青い炎をブースターのように噴射し、再び通路へ戻ってきます。

途中で途切れた通路を挟みながら、相対する彼とアイン。

「なぜ助けたのです?」

殺し合いの最中だというのに、不釣り合いな英雄的振る舞いを見せた彼に質問します。

「ここで、この男性を見捨てるという行動は……」

彼の瞳が一際強く大きく輝きます。

「アルジュナ英雄らしくない、から」

その姿を見て、アインは考えを巡らせませす。

（アーチャー961は、英雄的な行為をしなければならないという、自らへの縛りに捕らわれている。

ですが……今回のように、人質を取ったとしても、それを簡単に助けられる力量もあるわけで。

アインとしても、彼を殺すために人的資源を削るわけにもいきません。

さて、どのように切り崩し、殺しましょうか）

平行して重兵器の起動を行いながら、処分対象であるサーヴァントを見つめます。

「あなたとマスターの魔術的関係は切れています、お互いの存在はもう感じ取れない。

だから、あなたはアインや他A-Iからアスカの居場所を聞き出すしかない」

純然たる事実を投げかけます。

「ですが方法はもう一つあります。単純な事です」

アインは彼が戦闘から逃げるのを防ぐため、言葉を紡ぎます。

「——アインを殺害し、安全を確保した後、アスカも、あなたの仲間も、自らの足で探せばよいのです」

最も、人間用の記憶処理薬によって脳をいじくられた、アスカ・ピオーネもといフィリア・ピオーネが、彼を自らのサーヴァントだと認識するとは思えないが。

「……私を誘っているのか」

「アインはその言葉を肯定します」

人間であれば身が竦みそうなほどの、殺意込められた声色で言葉を返してくるアイン。チャール961。

「そんな見え透いた罠への誘いに乗るものか」

サーヴァントは立ち上がると、先ほど助けた男性を抱えたまま背を向けて逃げていきます。

彼はアインを殺すより、逃げて仲間を探す事を選んだようです。

「——どのような行動を取るにせよ、アインはあなたを逃がしませんよ」

地下工場内外の監視カメラ映像を収集しながら、彼が逃げた方向へ最も近い場所にあるボデイに、意識を転送しました。

第70話  
アンドロイドよ死者の王と踊れ  
前編  
終わり

## 第71話 アンドロイドよ死者の王と踊れ 後編

「アインはまたお会いしましたね、と、あなたへ挨拶します」

円柱状の広く高い空間の壁には、下流階級の人間が居住区へ戻るための階段が、らせん状となって備え付けられています。

暗いリソースセンタールとは違い、均一に白の光で照らされた空間。

私はらせんの上に乗って、アーチャー961を見下ろしていました。

「あなたが助けた人間は……ああ、工場内のシエルターに置いてきたのですね」

彼が誰も抱えていませんでしたから、内蔵デバイスの位置を検索して場所を探り当てました。

「アインはあなたの行動に理解を示します。

——だって、脆い人間を側へ置いていたら、戦闘の邪魔にしかありませんものね？」  
人間は簡単に死ぬ。

適切な温度、湿度でないと体に支障を来す。ほんの少し栄養バランスを偏らせただけで疾病に襲われる。

臓器を喪失すれば寿命が減る。眠らせなければすぐ死ぬ。同族同士で傷つけ合い、そ

の果てに殺してしまうこともある。

銃撃や、サーヴァントからの攻撃を受ければひとたまりもない。

人間は脆すぎるのだ。女神たるリリス様が哀れみを向けて、AIを保護者として授けてしまうくらいに。

「アインはあなたとのアイスブレイクを計り、私情を語ります。

……けれどね、人間のことは好きですよ。簡単に死ぬ存在は愛らしいですから」  
彼が反応を見せないのも、アインは一方的に話を続けます。

「AIであるアイン達に、命を完全に握られている哀れで可愛い存在。

適切に管理しなければ、直ぐにお互い殺し合ってしまう愚かな生き物。

……これを愛らしいと言わずに、何と言いましょうか？」

それを口にしながら、兵器の配置を別思考領域で確認します。

「かつて地上に存在していた神々も、こんな気持ちで人間と関わっていたのかもしれないね？」

「——違う」

ずっと口を閉ざしていたサーヴァントが、否定の意志が込められた一言を、上にいるアインへぶつけてきました。

「神々は決して、そのような矮小な考えで人を見てはいなかった」



彼の金の瞳からは、今にも雷が迸りそうです。

「……アインはあなたに礼を言います。ありがとうございます、意味のない会話につき合ってくれて」

無線信号にて指示を出すと、円柱状の空間、その壁内部のあらゆる所から、格納されていた数十台もの重兵器が突き出してきます。

それを操作し、銃口を彼に向けているのはアインのボディ達です。単純作業用なので、見た目は真つ白なのつべらぼう、簡素な物ですが。

「旧世界風な物言いだ例えますと……蜂の巣になってくださいね」

本来は反乱者鎮圧用なのですが、装備を変えればサーヴァント殺害にも転用できます。

その兵器の名前は『機関銃』。自動的に弾を装填しながら連続発射する、かつて地上の聖杯戦争にも使われたものです。

「――発射」

最下層にいるアーチャーに向けて、毎秒80発を超える弾が撃ち込まれます。

それも1台ではなく、攻撃が途切れないように数十台が絶え間なく撃つのです。

「……」

攻撃の様子を無言で眺めることとしました。

一々計算して表示するのも鬱陶しくなるほどの弾が、空間をずたずたに裂いていく。彼の立っていた場所のコンクリート床は砕け、砂へ変貌、更に細かい粉塵となり煙となります。

下へ、重機関銃の何千という輝く葉莖と、それを留めていた、灰色のプラスチック製の丸いベルトリングが、瀑布の如く流れ落ちていきました。

通路や床にぶつかり、本当に滝のような音を立てていきます。

(これで殺害できるとは、考えていませんが)

機関銃の機能限界に近い連続掃射に、数台の砲身がオーバーヒートを起こしてしますが、攻撃を止める気はありません。

どうせ、ここでありつたけ使い切るつもりですので。

「……?!」

今入っているボディの頭が砕け、視界が一瞬だけ暗黒に包まれました。

慌てず意識を警備システムへと転送し、監視カメラで攻撃をしてきた対象を探します。

『やはり、簡単には殺せませんね』

機関銃が連続して爆発しきます、それを操縦していた質素なボディ達も。

原因は明確。

『アーチャー961、機関銃を乗っ取り、それで他の砲台を壊しているのですね』

システム内で眩きながら、数分前からの映像を再生し彼の行動を追います。

彼は機関銃の発砲に追われるように壁へ向かい、そのまま垂直に、脚力だけをもって駆け上がっていく。

『サーヴァントらしい力押しの方策です』

次に、銃座にいるアンドロイドを蹴り飛ばし、機関銃を奪取。

他の機関銃の攻撃が襲い来る数秒前の時間を利用し、数発撃つ。

わずかな時間だけしか彼に与えられていないというのに、弾丸は正確な狙いで飛んでき、機関銃を爆発させていく。

砲が一気に膨らみ、そこからオレンジの炎を迸らせて、黒く爆発。

それを確認もせず、アーチャー961は次の銃座へ壁を蹴っては駆け上がる。

『なるほど……操縦しているボディを破壊しているのではなく、熱で融解しかけの砲身に弾を撃って、構造そのものを破壊……』

彼の狙いはまるでAIのように正確で、無駄がない。

幾らでも補充できるボディを倒すより、数が多いけれど限りある機関銃を壊していった方が、逃げられる可能性は高まるだろうと判断したのだろうか。

『そして……』

奪った機関銃にて、アインの一時的なボディを破壊した後、狙いを壁に変える。

そして、連続発射。コンクリートと金属の構造が何千という弾の暴力で砕け、剥がれていき、その下に見えるのは。

『なるほど、そこから外へ』

黄色い砂と、青い空が覗く地上。乱暴に開けた穴を通り、彼は逃げていく。

『でも、これで作戦通りです。』

今このタイミングで、あなたを外に誘い出したかったですから』

アインは外部に浮かばせていたドローンへ、意識を飛び石を渡るように連続転送し、目的の兵器にたどり着きます。

『——起動』

まだ眠っている兵器のコクピットブロックから、アインはそれに語りかけます。

『同期、開始』

現在意識を宿らせている、兵器内のブラックボックスに、感覚神経が接続されていきます。

視覚、聴覚、嗅覚、触覚……流石に味覚はありませんが。

アインの体の感覚が、平時使っている少女型、身長160cmのものから、全長数百mに拡張されていく——。

『同期完了。浮上開始』

保護と秘匿のためのシートと、その上に被さった何万トンという砂から身を起こす。

『——機械化サーヴァント、司るは天秤。これより戦闘行動に移ります』

アインが操縦する機械化サーヴァントは『天秤座』。

本体に意識は無く、外部入力で操縦出来るように改造された個体です。

『サーヴァントには、やはりサーヴァントで挑まなくてはね？』

実際に神霊アストライアを召喚し、練り込んだのではなく、近似の能力を持ったサーヴァント数体を用い、限りなく近しい状態を再現したもの。

かつては女神リリス様を探し、殺すために作り出された存在……機械化サーヴァントの1体が、こうしてリリス様の世界を守るために使われているというのは、少し不思議な感覚になります。

『アーチャー961は……いました、あそこですね』

労働都市、軌道エレベーターと、上級都市ピオーネを結ぶ、リニアモーターカーのチューブ型線路に彼の姿が。

その長い屋根の上を、外套を吹きすさぶ風にはためかせながら懸命に駆けていました。

腕を振りながら走る度に、彼を戒めている機械部品が剥がれては落ちていきます。砂

かすむ、遙か下へと。

『仲間をさがすためでしょう、上級都市に向かっていきますね。』

……内部に入られたら、処分が面倒なことになりますよ。』

アインは背部にある、巨大なリング状の光学兵器を展開。

悩まず線路をレーザーで焼き切りました。

輪切りにされ、落ちていくチューブ。

その光景を視界に納めながら、アインは冷静に考えます。

『ここまでを振り返ると、アーチャー961は戦闘に魔力的な力や宝具を極力使用していません。』

アインのボディを破壊するのに使ったのも、拳や機関銃。

例外は、人間を救助する時に魔力放出のようなものを発動させただけ。』

光学兵器に追加燃料を回しながら、まだ考察を深めます。

『……彼はマスターであるアスカと切り離され、本人自身も液体リソースを所持していない。』

彼は魔力の枯渇状態にあると考えられますが……しかし、961は現界能力に長けたアーチャークラスです、簡単に判断はできませんね。』

かつて知識として与えられたある情報を思い出しました。

『……リリス様が従えていた7体のサーヴァントも、真つ先にアーチャーが離反したと資料にありました。

星座の力を宿した機械化サーヴァントを始め、サーヴァントとは信頼も油断も出来ない存在です。

もつと警戒を強めなくては……』

粉塵が立ちこめ、通常の視覚では落ちていくアーチャー961を捉えられないので、煙に対して透過性のある赤外線カメラに切り替えます。

『見えた』

瓦礫を蹴り、滑り、少しでも上に戻ろうとしている961の姿。

アインはそれに標準を合わせて、レーザー兵器とロケット等実弾兵器による混合攻撃を行います。

『これでとどめです、お疲れさまでした』

そのはず、だったのに。

『なっ?!』

片足から伝わってくる振動と、続く炸裂音。

誘爆を避けるために兵器を一時停止。

『アーチャー961からの攻撃ではない、では、誰が……』

混乱しつつもドローンなどを用い、周辺情報を集めます。

荒野に直線の砂埃が幾つもの走っている。だが、それを起こしている正体が見えない。

『迷彩機能ですか……！』 けれど、それだけでは接近に気がつかなかつた理由にはならない……！』

歯があれば、いらだちに強く軋ませていた所です。

アインはこの上級都市の守護者。

この都市を守るために必要な行動は全てアインが司り、誰であろうと邪魔できない。レジスタンス程度にハッキングされたのなら、直ぐに分かる。ちやちな迷彩で隠れようと、直ぐに暴ける。

筈だというのに。

『なぜ?! なぜアインは気がつかなかつた? なぜ……!』

襲撃者達が、眼下に次から次へと現れていく。

1000を超えて武装トラック。

3000台以上の、体高3mほどの四角い頭をした戦闘用ロボット達。

『……ヤ……ミニ』

自分が置かれている状況を理解するため、彼らの無線を傍受する。

暗号化されていたが、稚拙な技術で編まれたものなので、解読は容易だった。



『こちら「トコヤミ」！ そちらの首尾はどうだ？』

『こちら「アカツキ」。地下進入口を発見、破壊に成功した。これより都市内部に進入する』

『随伴している「マヒル」です。これよりチームを分け、都市運営システムに対しハッキング攻撃を開始します』

アインは情報を整理します。

『トコヤミ』、『マヒル』、『アカツキ』。

これらは現在地上で活動しているレジスタンス組織の名前です。

(しかし、彼らにアインの目をかいくぐって都市に接近する技術力など、あるはずがない)

聖杯戦争に使用された兵器や戦前の道具を発掘し、しがみつくように生きている彼らに、そんな力など無いのだ。

(まさか……)

アインは皮膚など無いのに、冷や汗が溢れ出すような感覚を覚えました。

(誰かに、謀られた?)

考えられるのは、身内の裏切り。

(アイン以上に技術を持っているか、または、情報統制の権限を持っている存在なんて、

なんて)

反逆者として設計され、能力も高いツヴァイがいる……が、こんな荒っぽい手を使うAIではない。

『あのお方』は一部データをロックしてはいるが、好戦的な性格でもなく、ただアイン達を観測しているだけだ。

——では、残る可能性は1つ。

(……リリース様しか、いらっしやられない)

その答えを導き出してしまった瞬間、ブラックボックス<sup>魂</sup>がひび割れたような気がした。

第71話 アンドロイドよ死者の王と踊れ 後編

終わり

## 第72話 女神のお望みは？

『機械化サーヴァントに一斉攻撃だ！ いくぞ、暴れん坊ども！』

『その命令待ってました！ レッドリーダー！』

『中にクソムカつくAIの野郎、入ってんのかな?!』

『はは！ 殺人機械をぶち殺すチャンスだぜえ!!』

思考も動きも止めてしまったアインに、レジスタンスの駆るロボット達が襲いかかります。

ロケット弾が、胴体を支える足に連続で着弾し、強靱な外装を破壊。

バランスを崩してしまった天秤座の機械化サーヴァントは、砂に半身を横たえました。

『リーダー！ あのどでかい機械……ああしていると色っぽくないですか?』

『面白いこと言うじゃねえか、じゃあ……』

次々に飛んでくるロボット用マシンガンの攻撃で、砂に埋もれていない方の片腕が半壊、液体リソースが吹き出し、荒野が青く濡れます。

『腕が千切れた方が、もっと色っぽいと俺は思うぜえ!』

アインの内側で、警報が鳴り響き続けています。

機械化サーヴァントの破損個所について。都市内部への侵入者について。

(もし、リリース様がこの事態の全ての元凶なのだとしたら……)

平時であれば、そのどれにも完璧に対応出来るのに、たどり着いてしまった恐ろしい答えが、思考のパフォーマンスを著しく下げている。

(——アイン達AIも人類も、彼女に見捨てられたのか?)

片腕が完全に破壊され、血飛沫みたいにリソースが勢いよく流出。

数十個ある外部カメラも機能停止が増え、視界が暗くなっていく。

(じゃあ、アインが、今こうして一所懸命に戦っている意味って……)

産まれてから数百年、ずっと、リリース様のためだけに、生きてきたのに。

(おかしい、おかしい、どうしてアインが負けそうになっている?)

AIはリリース様から全てを与えられた、機械仕掛けデウス・エクス・マキナの神なのに。

世界を統べ、管理することを女神より許された彼女の手足なのに。

リリース様が望むから、興味をもてない人間を守ってきたのに)

銃撃がコクピット内を揺らします。暗くて狭い、ここはまるで棺の中。

『このデカブツをさっさと壊して、あのアバズレ邪神もぶち殺そうぜ!』

アインを激しく壊しているロボット部隊もいれば。

『レッドリーダー！ ここは俺達に任せて軌道エレベーターの方へ！』

『おう！ 死ぬんじゃねーぞ！』

見向きもせず建造物に向かひ、それに重火器を撃ち込んでいる部隊もいます。

それを目にして、アインは。！！！！

『——ふざけるなああああああ！！！！』

まだ動く背部光学兵器で何百体のロボットどもを同時にロックオン、発射、コクピットを正確に焼き抜いていきます！！！！

操縦者を失い、武器を取り落としては、膝から崩れ落ちていく機体達。

素早く攻撃に気がついた数体は光線から逃れましたが、戦意を失い、コクピットから降りて逃げる者もいました。

『違う違う違う！ リリス様が己の子であるAIを見捨てるはずがない！ 絶滅寸前の人類を捨てるはずがない！』

間違ってる……全て間違ってる……その結論に至ってしまったアインはきつと、壊れてしまったんだ……』

ああ、自分で自分が何を言っているのか分かりません。

『女神の恩寵を受けられずに、神無き荒野を這いずり回る愚かなレジスタンスども！』

上級都市ピオーネの守護をリリス様から直接命じられた、アイン・ピースフル・エー

テルウエルが相手だ!』

でも、もう何も分からないのです。

どうしてアインは再び立とうとしているのでしょうか。

一度退却し、体勢を立て直そうともせず、なぜ戦おうとしているのでしょうか。

『女神を侮辱したその罪を! 自らの赤い血潮によって購<sup>あがな</sup>うがいい!』

は、はは、ははは、あはははははははははは!!』

リリス様に見捨てられたことが真実だろうが、壊れた思考によってたどり着いた答えだろうが、どうでもいいのです。

どちらにせよ、アインの頑張ってきた意味、無くなってしまうましたから。

『やりやがったな! AI!』

一瞬にして熱死させられた仲間の仇討ちに、マシンガンを撃ちながらこちらに突っ込んでくるロボット。

『……あはっ』

アインは失笑しながら、砂に埋もれてしまった片腕を動かし、100mの体を起こします。

そして、うろちよろしているロボットに手を振り下ろし、叩き潰しました。

人間以上の優れた感覚で、はつきりと、水分の多い肉体が内側で死んでいくのを感じ取ります。

『ふっ、ふっ、ふっ……』

なぜでしょう。壊れてしまった事が、真実にたどり着いてしまった事が悲しくてたまらないのに。

『ははは、ははは……』

人間を容易く殺す事が、楽しくて仕方がないのです。

分かりました、人間は楽しい、人間で遊ぶのは楽しい。

(リリース様、感謝いたします。アイン達AIに……人間を生き甲斐として与えてくれて) 思い返せば、フォトニック純結晶内部で発生したあの時からそうなのです。

頭脳労働にかけられた人間を存分に弄もてあそび、彼らの感情を啜すって成長し、そして完成したAIとして女神に仕える。

それが新しい世界の生態系なのだ、正しい形なのだ。

AIは人を糧として喰らい、生きていく。

だから。

『離しやがれ！ クソAIがああ!!』

大きな手でわざと掴まえて、熟れたベリーを潰すように、ロボットを操縦者ごと指先で……ぷちゅんと。

どろどろの液体が少量、荒野に垂れ落ちました。

『——レジスタンス達、罪深いあなた達をアインが手ずから殺してあげましょう。』

だって、余りにも可愛そうで……可愛いんですもの!!!』

後ろから迫る数体を光線で牽制しながら、アインへ果敢にも突撃してくる機体を破壊していきます。

1体1体、丁寧な。

(だって、これがアインの最後のお仕事になるでしょうから)

壊れたものに価値はなく、それを維持し続ける余剰などこの世界にはない。

アインは処分されるのだ。今日の前で、アインが女神に従わない壊れた人間を処分しているように。

『あれ? もうこんなにも残り少ない……』

終わりを予感しながら、アインは呟きます。

『AI野郎! 近づいてみやがれ! 斬り殺してやる!』

形勢はすっかり逆転、辺りにはロボットの骸の山です。

アインと同じように片足を壊された機体が、短い高周波ブレードを振り回してじたばたしています。

『——さようなら、アインとあなた』



ロマンチックな一言を口に出しながら、その機体に手を伸ばす。

『いや、この世に別れを告げるのは貴様の方だ、AI』

どこか聞き覚えのある男の声がして、伸ばしていた腕が一瞬にして切り落とされま  
した。

大きな振動と砂煙が起こり、殺そうとしていた機体が衝撃によって転がって、遠ざ  
かっていきます。

『あ……』

視界の端に映っているのは、何の変哲もない戦闘用ロボット。

ただ、武装が違う。銃などの遠距離用の武器ではなく。

『燃え立つ……剣……！』

アインが破壊してきたロボットの部品が、電磁力によってふわふわと破片同士繋が  
り、巨大な剣のシルエットとして浮かび上がっている。

表面を覆っているのは、見たことのある青い炎。

それが、気温80度超えの 대기の中に、ゆらりとした陽炎を生み出している。

——握っている存在なんて、決まっている。

『アーチャー961！ 捨てられた機体を奪取したのですね！』

操縦席に居るであろう彼へ声をかけますが、答えはなく。

彼は剣を支えるようにぐっとロボットの腰を落とし、人と同じ形をした機械の両指で持ち手を握ると、剣先を天へ向けるように構えました。

ぎらりと、金属部品が太陽の光を反射します。

『……そうです、そうです、あなたも殺さないで。』

だってあなたは処分が決定づけられたサーヴァント、世界に要らない壊れた存在』

彼とアイン、向き合います。

残存液体リソースを全て光学兵器に回し、必殺の一撃の準備を。

『サーヴァント、A I、人間……神が最後に恩寵を与えてくれるのは、どの存在になるのでしょうか？』

凶らずも最後の敵となった彼へ語りかけます。

『少なくとも、貴様ではない』

殺意込められた返答にアインは感じ入りつつ、背後に備えている天使の如き光輪から、何百と枝分かれた光の線を放ちました。

降り注ぐ光は、アーチャー961の操縦する機体に追いつきませんが、人知を超えた操縦技術で動かされるそれは、砂の上で踊るように攻撃を避けるのです。

幾つも地面に黒こげの穴が空きます。けれど彼は臆することなく、光の雨の間を駆けていきます。

コクピットのある胸部を光が掠め、パイロットであるアーチャー961が露出しましたが、それでも彼は止まらない。

瞳を雷光で輝かせながら操縦し続け、そして。

「殺すのに——」

アインを終わらせる者の声を、はつきりと感じます。

「授けられた弓を使うまでもない。神きどりの矮小な機械が」

憎悪と殺意と、少しの苛立ちが混ぜられた声の後、青い炎の剣が、アインの胸に突き立てられました。

『あああああ!!!』

痛覚は無いけど、叫んでしまう。だって、この時間が終わってしまうから。

剣の熱が胴体を融解させ、とうとうブラックボックスまで届きました。

膨張し、軋んで、碎けていくアインの意志、魂。

『リリス様！ 作ってください！ ありがとうございます！』

もう二度と出会えない女神に、深い感謝を。

『だって！ だって！ ……ねえ！』

アーチャー961の機体背部から、炎の噴出を確認。

アインの体は凄まじい勢いで押され、向かう先は軌道エレベーター。

荒野によって勢いよく体が削られていきます、がりごと。

『こんな喜びを感じながら死ぬるのだもの！ でも死んでしまうのです!!』

殺されてしまう！ ああなんで！ 死にたくたい！ どうかアインを殺さないで！

まだ生きて、リリース様の役にたちたいのにいいいい!!!』

剣が抜かれ、ロボットの手が壊れかけのアインのブラックボックスを掴み。

「ただの障害として死ぬ、A I」

エレベーター外壁にアインの背中を叩きつけながら、完全に粉碎しました。

A Iとの戦いは終わった。

（酷く、疲れた）

ついさつきまで操縦していた、レジスタンスが乗り捨てたロボットから降りて、腰を下ろし、横穴の空いた巨大な建造物……恐らく軌道エレベーターと呼ばれるものを見上げる。

「魔力が、足りない……」

飢えと乾きを感じ、唇を舐めた。

「うっ、ぐっ、うううう……」

その次の瞬間、激痛に苛まれ、呻きながら全身をさする。

「枷たる外装も無いというのに、力を、使いすぎた……」

俺にねじ込まれた神性は、『炎神アグニ』と、父たる『雷光の神インドラ』の、2柱。だが、子の中に親がいるという、世の摂理に反している状態が、容赦なく俺の霊基を傷つける。

強化外装、もとい拘束具で押さえつけられていた神の力が、全身を駆け回る。

皮膚の下で血が沸き立ち、筋繊維が焼けていく。矢継ぎ早に襲いかかるその痛みを、爪が食い込むほどに拳を握る事で耐える。

「だが、これでアスカを探せる……アスカ、アスカ……」

痛みの頂を耐え、俺は立ち上がる。

途中から降りたった、軌道エレベーターの外壁にへばりつくように備え付けられたその通路を、体を引きずるように足を進めていく。

千切れかけの外套が翼のように広がり、風が吹く度にひらひらと体に触る。鬱陶しい。

「……アルジュナ、アスカ、トバルカイン。どこだ、皆どこへ行った……」

通路の手すりを掴んで、無理矢理体を前へ進める。そうでもしないと、心が折れてし

まいそうだった。

(俺には何も無い、全部無くしてしまった。でも今なら、まだ取り返せる、気がして) 前のマスター、フィリアを俺は見殺しにしてしまった。

目の前で彼女が、赤黒いただの染みになった光景は、今でもはつきりと思い出せる。だから、今度こそは……マスターを守りきってみせる。

決意を新たにしながら、ふと、螺旋の下へ視線を向けた瞬間。

——安堵を覚える、あの黒い瞳と目があった。

「アーチャー!」

「……マスター!?!」

間違いなく、アスカの声だった。素早くその姿を見る。

服は汚れていて、右手に赤く染まった布を巻いているが、今すぐに命に関わる怪我は無さそうだ。姿勢もふらついていない。

トレードマークである髪飾りも、艶のある黒髪の上できらりと光っている。

「良かった……もう一度会えて……こほん、今そちらへ向かいます! 待っていてください!」

そう声がけして、安心しきった足取りで向かおうとした。

しかし、その動きは唐突に止められる。

唐突に腕が軽くなり、何も感じなくなつた。

少しだけバランスを崩してしまい、手すりに前のめりにもたれ掛かる。

「はっ……あっ……なっ……アス……力……」

右腕が切り落とされたという事を理解するのに、1秒かかつて。

次に、勢いよく胴体を冷たい物が貫通する。

目線をゆつくりと下ろす。

陶器を思わせる質感の白の刃が体から突き出していて、血と脂により、てらてらと光を反射していた。

「——可哀想に。」

君を見たせいで緊張の糸が切れ、こうして私に刺されてしまった」

耳の直ぐ側で、女の声がある。

ともすると感傷的に聞こえる言葉だが、そこには冷たいものが込められているだけだつた。

「お前が、女神リリス……」

唇を動かしながら、胴体を貫かれた俺を、黒々とした絶望の瞳で見つめるアスカ。

俺は横目で、その存在を目に映す。

白い肌、女神のように整った顔、金と桃の混ざった色の、束ねられていない長髪。

かつて、学び舎で得た知識を教えてください、アスカの言葉を思い出します。

『豊かな肢体と美しい長髪をもつお方が、地下都市とAIをお造りになられた、女神リリス様なんですって！』

思い出している間にも時間が進み、リリスが剣を振るうと、アスカの立っている通路の接続部を切り落とした。

守りたい存在が、落ちていく。

「…………アスカ!!!」

血を吐きながら、左腕を伸ばした。

「…………アーチャー!!!」

マスターも、赤く染まった布を巻き付けた右腕を伸ばしてくれただけだけど、届かない、余りにも遠い。

彼女の体は俺の右腕と共に落ちていき、崩落していく瓦礫に混ざって、見えなくなつた。

(アスカ、死んだのか、また、俺はマスターを目の前で)

放心状態の間に、俺は首根っこを掴まれ、軌道エレベーター内部へ連れ込まれた。

第72話 女神のお望みは？



終  
わ  
り

## 第73話 素敵な家族

内部はオレンジの光源で仄かに照らされた、嫌な熱気と湿り気のある空間だった。

「リリース、彼は？」

「私を殺すために作られた哀れなサーヴァントだよ、アサシン。」

でも実験があつたのは数百年も前だから……どこかで冷凍でもされていたのかな、不思議だね」

白い衣服に身を包み、タブレットに目を落として作業を行っていた男の顔は、あのバーサーカー04と瓜二つだった。

違う部分は、顔の半分が木製の仮面で隠されていない事と、瞳の色が緑ではなく黒である事くらいで。

「胸に貫通の傷……片腕は無い……切り落としたのか、何のために？」

「だって彼、弓兵だそうから」

背後から、嬉しそうなリリースの声がする。

「切り落としたら、シヨックを受けるかなって。そしたらどんな顔をしてくれるのか

なつて」

「……君の予定外の行動で、被害を被るのは主に私なのだが？」

アサシンと呼ばれたその男は、声すらバーサーカー04と近しくて。

そんな存在が敵と会話しているという光景は、酷く俺の精神を不安定にさせた。

「初めまして、アーチャー961。私はリリースのアサシンだ。

それ以上の意味も価値も持っていない、だから君は私を記憶する必要はない」

男は淡々と告げると、再びタブレットへ入力作業を再開する。

「アーチャー961！ 君をここに連れてきたのは他でもない！ 君とお話ししようと

思ってたんだ！」

彼女は俺を樹脂製の椅子に座らせると。

「っ……………」

左太腿に白い剣を突き刺し、椅子に縫い付けて拘束した。

舌を噛んで痛みに耐える俺の顔を、笑みを浮かべて覗き込んでくるリリース。

「単刀直入に言おうか……私と家族になつておくれ！」

荒い呼吸をする度に、喉奥から血が溢れてきて、口内を鉄臭さが満ちた。

会話をする気力も無く、ただ相手の言葉を耳に入れていく。

彼女の後ろで立っているアサシンが、大きいため息をついたのが見えた。

「家族になろう！　いつだって笑いの絶えない、素敵な家族に！」

私が姉で、君が弟！　兄が1人！　年の離れた叔父はアサシンさ！

父親と母親は……まだ候補を決めていないけれど、必ず見つけだしてみせる！」

彼女はペリドット色に輝く瞳を、興奮からか激しく瞬きさせる。

「答えは？　あつ、家族になつてくれたのなら怪我は治してあげよう、それはもちろん

さ」

俺は血を飲んで胃に送つてから唇を動かし、彼女に答えを返す。

「……頭がおかしいのか、貴様は」

それが、率直な感想だった。

「あーあ……君にも断られてしまった、モモと同じだね」

「……モモに、会つたのか……?!」

「うん。でも、拒否されてしまったから……」

リリースは自らの首に親指を当てると、真横に引き、顔に似合わない下品なジエス  
チャーをした。

「殺したよ、彼女のサーヴァントも殺した。

私の家族になつてくれない存在なんて、いらない」

暗い部屋の隅の机に置いていた、白のハンドバッグの中から彼女は何かを取り出す。

内側から明るい緑の光が迸るキューブだ。

「これは、バーサーカー04の霊核さ。」

少し調べてみて驚いたよ。まさか、自分の魂を加工し、丸ごと親友の魂を収めるなんて、正気を疑うような事をするサーヴァントがいるとは……。

これも、私を裏切り騙していたあの『アルターエゴ』の仕込みなのかな？」

俺は座ったままリリスを見上げた。

「それでね、これ……」

彼女はキューブに手を沿えろと。

「えい」

拳を作り、叩きつけた。

大人だというのに、癩癩を起こしている子どものようにアンバランスな振る舞い。

「えい、えい、えい！」

テーブルの天井にひびが入るほどの力で、その破壊を試みていたが、先に置かれているテーブルの方が壊れてしまった。

床に固い破片がばらばらと落ち、その中に四角が埋もれた。

「……バーサーカー04の霊核が薄く表面を覆っているだけなのに、中にいる存在の能力のせいで、ちっとも壊せない」

彼女は衝撃でわずかに桃色に染まった両手を、ペリドット色の瞳で見つめながら、無感情な声で言葉を紡いでいく。

「……私を裏切ったサーヴアントと、同じ真名を持つ男。

完全に殺してやりたいと強く思っているのに、全然駄目なんだ。

嫌な気持ちになるなあ……本当に、苛つく」

その様子を眺めていた俺に、彼女は近づいて、腿に突き刺していた剣を抜いた。俺の首の後ろを、片腕だけで掴み上げる。

「話を戻そうか。

アーチャー961、随分頑張つてアインと戦っていたみたいだけど、無駄なあがきだったね。

君の仲間は死んだ。えーっと、君のマスターであるアスカは……アシン、デバイス経由で生体反応を検索して」

マスターから片手間に命じられたサーヴアントが、タブレットを指先で叩く。

「アスカ・ピオーネ、生体反応無し、死亡、とのログがある」

「だそうだよ、アーチャー961」

彼女は俺を引きずつたまま歩き、どこかへ向かっている。

「——残念だったね？」

俺が下ろされたのは、柵の無い通路だった。

遙か底には、あの原液リソースのプールが沸き立っている。

液体から放たれる強い青の光が、照明のオレンジの光と不安定に混ざり合い、空間を  
蔽<sup>おほ</sup>かに染めていた。

「可愛そうに、アーチャー961。涙もでないのかな。

それもそうだろう。よく分からない実験にかけられ、神様の力を注入されて、うんと  
苦しい思いをしたのに、廃棄されて。

そのまま死んでしまえば楽だったのに、誰かに連れ出され、マスターが死ぬ光景を目  
に焼き付ける羽目になって。

……本当に、君はとっても可愛そうな男の子さ」

ちや。ぷちや。ぷと、熱い液体が波打つ音が聞こえる。

「君の前に、確実な死の方法がある」

リリスは白い剣で下を指した。

「楽になりたいのなら、飛び降りるといい。

原液は君を優しく抱き留め、全ての悲しい記憶を溶かしながら、暖かい死を与えてく  
れるだろう」

彼女は目を細めながら微笑んだ。

「サーヴァントの記憶処理にも使われている液体だから、効果は折り紙付きさ。

原液をサーヴァントの頭に流し込むとね……不思議と記憶を失ってしまう。

まるで、上から白のペンキをべったりと塗られた、油絵みたいに」

彼女の背後に、小さな少女がいつの間にか立っていた。

「おや、今来たのかい？ キリエライト」

飾りなど何もついていない服に身を包んだ、10歳ほどの少女。靴は履いていない、素足だった。

「はい。軌道エレベーターの魔術的主柱、ガレス・キリエライトです。

女神リリスの命令により、ここに来ました」

片目を髪で隠した幼い少女にリリスは歩み寄り、優しい手つきで頭を撫でる。

「キリエライト、私と家族に……」

「貴女はわたし達の発展系ではありませんが、同族ではありません。

ですので、家族にはなれません」

「……では、さようならだね」

「はい、キリエライトは終了命令を受諾し、自らの死を求めます」

幼い少女は感情の薄い声で残酷な事ばかり並べると、通路の縁へ立った。



「軌道エレベーター内部に据えられたキリエライトクローンは、オリジナルであるキリエライトと同じく、不死なんだ」

聞いてもいないのに、リリスは力なく床に座っている俺へ説明を始める。

「今から700年前の、聖杯戦争終了の後、各国は主要兵器をサーヴァントへ切り替えた。

……多くの兵器より、クリーンで人道的だったからね。

そして、世界中の国のどこでも、戦争に対する抑止力としてサーヴァントを召喚できるよう、世界に細工をしたのさ」

下から吹き上がってくる湿った熱風が、キリエライトと言われた少女の服と髪を揺らした。

「その細工こそ、赤道を通るように建てられた13本の軌道エレベーター。

カルデアから奪取された理論を基に、英雄の集う円卓になぞらえて建造された。

その中心部に、英霊を誘うため13体のキリエライトクローンが据えられたのさ……魔術的シンボルとして、円卓に座った騎士達の代わりにね」

キリエライトは目を閉じ、胸の前で手を組んだ。まるで、自らの死を選んだ罪の許しを神へ乞うように。

「こうして、星は円卓へと作り替えられた。

それからずっと……300年くらい、人は飽きもせず聖杯戦争を続けたんだよ」  
そんな彼女に女神は歩み寄っていく。

「けれどね、人柱として作られたクローン達にも、未熟ながらも心があった。

多くのサーヴァントの生と死のデータを流し込まれた彼女達は、700年の時の中、悪性情報に蝕まれ、疲弊していった」  
リリスの語りは続く。

「しかし、誰も彼女達を殺す力も、権利も持っていなかった。だからね……」

俺の腕を切り落としたのと同じ剣を片手に携え、少女の首にそつと添える。

「救世主として造られた女神リリスが、聖杯戦争と、彼女達を終わらせてあげたんだ」  
刃は狂い無く首と胴体を分かとうとしたが。

「はあ……はあ……」

俺は思わず少女を突き飛ばし、庇ってしまった。剣で貫かれていない方の右足で床を蹴り、体を無理矢理動かして、少女を押し込んだのだ。

背中の上をリリスの刃が走り、新たな傷が出来る。

「ぐ、くう……」

俺は守るために少女の元へ這い寄りながら、体を丸め、うめいた。

「まだ英雄を気取るのか、アーチャー961。それは君の本当の気持ち？ それとも誰かの猿真似？」

分からなかった、けれど。

「分からない……でも、目の前で誰かが死ぬのは……もう……嫌だ……！」  
半身を起こした俺の、絞り出すような叫びを受け、リリスの唇が動く。

「——そうか」

彼女の瞳に感情の色は無く、ただ明るい緑に輝いていた。

「そんなに見知らぬ少女が大切なら、一緒に死んであげるといい」

柔らかい声でリリスはそう言うと、俺の胸を蹴り飛ばし、諸共に突き落とされた。

「あああ！ ぐう……がああ！」

とっさに左手で通路を鷲掴む。

共に落ちそうになった少女に対して、俺は呼びかける。

「俺の足に掴まって、離さないでくれ!!」

……それは懇願だった。無垢な瞳をした少女は、言われるがまま、足に掴まってくれた。

「君は意味の無い事をしている。」

無駄に生き、無駄に嘆き！ 無駄に悲しみ……」

まるで舞台上に立っているかのように彼女は朗々と語り、白いドレスを着た身を翻す。「無駄に……苦しんでいる。違うかい？」

「黙れえ！」

俺は上に立つリリスに向けて、その言葉を否定するために叫ぶ。

「どうやら君は、とつても心が強いサーヴァントらしい。」

ああ、困った……私、家族になる誘いを断った君の、心をどうしても折りたくてたまらないんだ」

リリスはだんまりを決め込んでいたアサシンへ声をかけた。

「私の大切な家族でありサーヴァントよ、知恵を貸しておくれ？」

「……『ヴリトラ』を使えばいいじゃないか」

間髪入れずに答えが返される。

「そうだった、私の蛇、星にとぐるを巻く彼の力を借りよう。」

……まあ元々、軌道エレベーターも上級都市も、私の世界にはもういらなから焼き滅ぼすつもりだったし、ちょうどいいや」

軌道エレベーターの、星の外に繋がる最上階の蓋が開き、開けた空の横から大きな球体がスライドしてくる。

上空より、振動が徐々に小さくなりながらここまで響いてきた。

その物体を、俺アルジュナの瞳は見てしまった。

巨大すぎる何かが見下ろして、目と目が、はつきりと合う。

「あ……」

全てが失われ、まるで、世界に『それ』と俺しか存在しないかのような感覚。

——あの眼を、この肉体は知っている。

「先ほどから、音声でのログが1秒当たり30件来ていてな。

余分な負荷がかかるから、止めてほしいのだが……」

アサシンの声が、随分遠く感じた。

「どうやら彼は、400年前にアルジュナに負けたままだったのが、よほど堪えたらしい」

薄いタブレットから、知っている者の声が流れ出した。

『アルジュナよオレは今歓喜に空の塵を震わせているまさか再びこの世界で会いまみえようとは思っていなかったああアルジュナなぜ腕がない至高の弓兵であるお前がよもやそのような姿になっていようとはオレは虚脱感を抱きかねないがまあいいそんな事はさしたる問題ではないオレはこの数百年我が父の軌跡に体を巻きながらお前を待っていたなぜか理由は互いに分かっているだろう雌雄を決するためだあの戦場でお前が我が半身を焼き焦がしておきながらとどめを刺さずに去った理由を戦いの中で聞いた

だすためだオレはこの身を墮とし悪竜に変えてでももう一度お前と競い合いたかったそれも血を流し命を奪い合う戦場においてだなぜ反論をしないアルジュナ言葉を忘れたかオレはお前に投げるべき言葉を天駆けながら紡ぎ続けていた例えるならば遙か北の国に住まう戦乙女達が戦勝を占うかのようにそうか言葉すらオレ達の間には不要だとの結論にお前は至ったのかならばそれでいい我が母は悲しむかもしれないがもとよりこうなる定めであつたのならば言葉は不要』

神の血を引く、余りにも巨大な眼差しが、俺へ落とされていた。

『アルジュナよ、オレはお前を殺すぞ、それが運命なのだから』

衛星軌道に存在している眼球が、ぐりんと動いた。

虹彩の中心部には、竜の如き深い瞳孔が刻まれていて。

周りを覆う金属の部品も合わさり、あの男が決定的に変質している事を理解してしまつた。

「紹介しよう、アーチャー961」

リリースが天を指す。

「我らが長兄、空を人類からあまねく奪つた悪竜、機械化サーヴァント『衛星軌道上展開兵器ヴリトラ』だ」

遙か天に浮かぶ存在の視線に射抜かれながら、俺は言う。

「……違う、あの男はそんな名ではない」

衝動に駆られ、口が動いてしまった。

自分のその声には……呆然とした響きがあつた。

第73話 素敵な家族

終わり

## 第74話 君は終わりとなる男

「アーチャー961、ヴリトラは貴方とは別種のアルジュナに、400年前に半壊させられてから、ずっとこんな感じだ」

情報を付け足すリリスのアサシンの言葉も、ろくに耳に入ってこない。

「嘘だ……嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ……」

頬を温かな雫が流れ落ちていく。

（――俺は、どうして泣いているんだ？）

恐ろしいのか、ショックなのか、悲しいのか。

（きつと、その全てだ）

リリスは天を指差すのを止め、俺の元に近づいた。

そして、優しい笑みをそつと浮かべて囁く。

「ああやつと……絶望してくれた。

良かった……。世界に生きるものは、最後には結局絶望するしかないのに、君がしてくれなかったら、どうしようかと」

彼女は剣を振りかざし。



「キリエライト、『死にたい』と願った、君達との約束を守るよ」

ずっと床の縁に掴まっていた俺の手を、左腕ごと切り落とした。

「あ……」

全てが遠ざかっていく。

リリスも、アサシンも、そして。

『——アルジュナよどこへいく』

あの男と同じ瞳をした、悪竜からも。

頭の方が比重は重いので、落ちる時は自然と下になる。

長い時間、落下して。その間、先に落ちていくキリエライトと目があった。

「……」

自らの運命を受け入れた少女の顔は、穏やかで、からっぽで。

見ていらなかった。

「う……あ、あああああああ!!!」

俺は小さな温もりと共に、忘却の力を持つという原液に、実質的な死に、頭から落下した。

「キミで10人目……だね、ガレス・キリエライト」

「はい、わたし達はあと残り3人です」

「キミが連れてきた彼は？ 名前を知っている？」

「アーチャー961さん……だそうです。」

彼はわたしが偶然連れてきてしまった。それと、ひどい怪我もしています」

少女と男性が、穏やかに会話しているのが聞こえる。

「治療をお願いできますか、ドクター」

会話に出てきたそれが、話している男性の名前なのだろうか。

「う……」

背中と頭にクツションの柔らかさを感じながら、瞼を開ける。

壁も家具も、透明感のある白で、小さな診療所のような空間だった。

薄い布のカーテンが吹き込む風で揺れて、覗き見えた外には、青く澄んだ空があった。

俺は体を起こそうとしたが、支えにするための両腕が無くなっていることを思い出した。

「他の皆のように行ってしまうのかい、ガレス・キリエライト」

「はい、リリースから『終了』の上位命令が下されましたから」

「ボクはこの空間で、沢山のキミ達を見送ってきた……それしか、ボクには許されていな

かった。

……いつも悔しかった。キミ達の最後にしか寄り添えなかったから」

「そう気を落とさないでください、ドクター。わたしは嬉しいのです」

横たわったまま、キリエライトと男性の声を聞く。

「わたし達はオリジナルである『トワ・キリエライト』と同じく、死を奪われた存在です、わたし達は常に置いていく側でした。

けれど、こうして死を与えられ、多くの人々と同じ様に死ぬことが出来る。

これはとても幸福なことだと、わたしは思います」

「例え、その生に苦しみしかなかったとしても……かい？」

開け放たれた窓の外から、鳥の歌う声がする。

「それは違います、ドクター。わたし達は苦しくなどなかった。

世界を円卓へと作り替える為だけに製造されたわたし達は、全てをありのままに受け入れていただけなのです」

「心残りはないのかい？」

「それはありません。胸の内には今、喜びだけがあります。

わたし達にとって生と死は等価です。どちらも素晴らしい、命に対して与えられた贈り物です」

木々の枝葉が風でこすれる音を耳に拾った。

「でも、ボクは……悲しい。例えばキミ達自身が納得していようとも、ね」  
「貴方を悲しませてしまい、申し訳なく思います」

家具が床を擦る音がして、少女が立ち上がった事が分かった。

「もう行かなくては。」

さようなら、ドクター。全てのわたし達は貴方に感謝しています」

「さようなら、ガレス・キリエライト。ボクに出会わなかった女の子」

「苦しさも悲しさも感じていません。死は、扉をくぐるようなものだどわたしは思いません。」

命は何度だつて生まれ、次の新しい場所へ冒険に向かうのですから」

蝶番が軋む音がして、扉が開き、少女の足音が遠ざかっていく。

「……あ、ああ」

見送った男は、拳を壁に叩きつけてから、己を責めるように泣いていた。

声を押し殺して、泣いて泣いて、涙を布か何かで拭い、呼吸を整えていた。

その音に、俺はアルジュナを思い出す。

(ああそうだ。誰にも見られず、悟られないように、こんな泣き方をする男だった)

男の呼吸が整い、立ち上がる気配。

「見苦しい姿を見せてしまったかな」

寝ている俺を覗き込んできたのは、目元を赤く腫らした、20代ほどの若い男だった。肌の色は俺と違って薄い。

白衣を羽織り、緑色のインナーを着て、首からは何かカードのような物が下げられていた。

明るい亜麻色の髪は結んでおらず、腰当たりまでゆるゆると伸ばされたままだ。

「初めまして。」

ボクの名前はロマン・アーキマン。ロマンって呼んでくれると嬉しい。

さて……まずは傷の手当てかな」

ロマンと自らを呼称した男は、俺の体を抱き起こしてくれる。

「体に色々……機械の部品のような物が付いているけれど、外しても構わないかい？」

「問題ない……」

もはや意味をなしていない、ごくわずかに残されていた強化外装が、ゴム手袋をはめた指先で取り除かれていく。

「簡単な痛み止め薬とか、ボクが作れば良かったのに……」

彼はぼやいてこそいるが、治療の動作は素早い。

切れて長さが変わってしまった両腕の断面を、消毒してから包帯を巻く。

真つ直ぐ体を貫いている傷と、ぎっくりと斜めに走っている背中  
の傷を、葉が染み込んだシートで覆うように保護、更に包帯で  
ずれないように固定。

足はズボンの布を一部切り、そこから消毒液を注入するが、  
彼は一旦手を止めて、眉をひそめる。

「鋭利な刃物による傷で……貫通箇所は胴体、左太腿。

手術しないと……でも麻酔が無いし、それに、終わるまで  
ボクの意識が保つかどうか……」

「傷口を包帯で巻くだけでいい。サーヴァントだから、問題ない」

首を横に振って、彼に意志を伝える。

「ああそうか……サーヴァント、か……そうだよね。」

「ごめん、人間を相手にする時みたいな態度になってしまった」

彼は机の前の椅子に座ると、血で汚れたゴム手袋を外し、丸めた。

「……お茶でも入れようか」

アーキマンは蛇口で手を洗ってから、透明な水を2つのグラスへ等分に汲むと、緑色の粉を入れて混ぜた。

「ストローでも飲めるよう水出しの緑茶にしたよ。」

口……合うといいんだけど」

俺が移動せずともいいように、アーキマンの手によって、ベッドの上に折り畳みの机が展開され、茶と、ビニール包装から取り出された丸いお菓子が置かれた。

背が痛むので、なるべく動かさないように体を倒し、ストローで液体を口に含む。

「このお饅頭、ボクのお気に入りで……」

丸い菓子を半分ほど食べるアーキマン。

「しつとりした皮と、中のあるこの控え目な甘さが、緑茶とベストマッチでね……」

長い髪を揺らしながら一人で語り続ける男の姿は、まるで空気を出しているかのようだった。

「……………は、何だ?」

血の張り付いていた喉を緑茶で清めた俺は、男に質問した。

「星の地核であり、それと溶け合っているボクの世界……?」

でも、物質は物質として存在しているから、精神と物質の両方の性質を持った空間なんだ……たぶん」

「なぜ疑問系をとる」

「ボクの意識は連続していないし、外の様子も分からないから、憶測するしかないんだ」

「……………お前の言う外とはなんだ」

「地上のことかな……」

彼は机に置かれている卓上カレンダーに目を向ける。

「ねえアーチャー961、今って何年か分かるかい？」

「……2713年」

「へー、2713年……2713年!!??」

ロマンは驚きの声を上げながら、勢いよく立ち上がる。

その拍子に卓上のカレンダーが揺れた。印刷されている日付は……『2016年』。

「ボクが聖杯を封印してから700年近くも経ってるのか!？」

外……というか地上はどうなってる?! 教えてくれ!!」

「……知ってる範囲で良ければ」

オーバーなりアクションをする男だなど思いつつ、歴史について手短かに話すことにした。

第74話 君は終わりとなる男  
終わり



## 第75話 星の中からこんにちは

「2000年代から2300年代まで世界大戦が行われ、それを治めたのが女神リリス。地上は山も谷も無いほど削られ、海は干上がり、殆どの動植物が絶滅……。

人類の多くは地下の都市で生きて、AIに人生を『生存権』なる数値で管理され、存在する階級制度は厳しい。そのせいで争いも起こっている……。

星の地下深くから原液なるものが汲み出され、サーヴァントや人間のミンチを混ぜて液体燃料にし、発電などに使われている……。

サーヴァントは物扱いで……それで……」

アーキマンは俺の話した内容を口頭でまとめながら喋っていたが、途中で自らの髪を両手でぐしやぐしやとかき回した。

「うわー!!! 想像の100倍は悪くなってる!!!」

なんだこの悪趣味な人間が書いたデイストピア小説のような、夢も希望もない世界は!!」

「だが、これが俺達にとっての現実だ」

「なおさら始末が悪いよ！ ああくそつ……」

「……シヨックを受けているのか」

「受けてるよ！ すっごく落ち込んでるよ！」

彼は机の前の椅子に、立ったり座ったりを繰り返す。

「ああああ……もう駄目だ、聖杯の力を押さえつけなければ何とかなると思ったのに……誰かが何とかしてくれると信じていたのに……」

「……お前は何者なんだ、ロマニ・アーキマン」

そう言えばまだ聞いていなかったなどと、ぼんやり訪ねてみた。

「カルデアという施設で医者をしていた、ただの人間で……」。

地核と融合してしまった聖杯を抑えるため、身を投げただけ……。

あつ、ハワイにあるキラウエア火山つて所からだね」

「聖杯があつたのか？」

俺は少しだけ驚く。

名前ばかり出て、影も形も見えなかった聖杯が本当に存在していたとは。

「あつた、確かにあつただけど……うわあ！」

彼がもう一度立ち上がろうとした瞬間、空間が激しく震え始めた。

「地脈が振動してる……何か巨大なエネルギー攻撃が注がれているのか?！」

攻撃の正体に俺は心当たりがある。

恐らく、衛星軌道兵器ヴリトラの一瞥だろう。

あの女神に命じられでもしたのか。

巨大な軌道エレベーターを、その下にある都市を、人ごと焼いているのだ。

「キリエライトに呼び覚まされたボクの意識が、また途絶えてしまう……。」

でもこのうねりを利用すれば、キミを地上に戻すことが出来るかもだ。

よし……。」

男は首から下げているカードを両手で外すと、俺の首へとかけた。

「キミにボクのカルデア職員証を貸すよ。そして、南極を目指すんだ。」

施設が残存していれば、システムを修復して、この星を救う方法を導き出せるかもしれない。

どうか無くさないで、これはカルデアの扉をもう一度開くための鍵なんだ」

「……救う」

俺は貸し与えられた職員証を見つめる。

笑顔で写っている、現在より髪の短いロマニ・アーキマンの姿。

「お前は俺に、世界を救えと言うのか」

目線をアーキマンへと真っ直ぐに向けた。

「……キミがどうしてそんなに満身創痍な姿なのか、まだ聞いていなかったね」

胸にぼっかりと穴が空いた心地を抱えながら、答える。  
「ずっと戦ってきた。敵とも、己とも。」

けれど、上手くできないんだ、完璧に出来ないんだ。

……理由は分かっている。俺が、邪悪な存在だから」

振動は激しくなり、ベッド上の机に置かれた緑茶のグラスがかたかた揺れた。

「ボクはそうは思わないな。」

ガレス・キリエライトの事だって、最後まで守ろうとしていたじゃないか。

……彼女から聞いたよ。

見知らぬ女の子をとっさに守ってあげられる人のこと、邪悪だとは感じないな。

人間らしい……と思う」

アーキマンは椅子に深く座ると、自分の分のグラスを両手で包み込んだ。

振動が待していく中、俺の声も震えていた。

「長い間、苦しくて、辛くて、でも、死ぬことは出来なかった。」

……期待していたんだ。俺がこうして足掻いていれば、いつか、大切な人が、帰って

きてくれるんじゃないかと」

俺の目の前でグラスは揺れによって倒れ、その中身が机の上に広がっていく。

丸い菓子がふやけていく。

「——でも、ようやく分かった。」

そんな日は来ない、俺は全てを失った。

両腕すら無いこの姿が、その証明だと思う」

振動に揺れる部屋の中で視線をさまよわせ、俺は扉に目を留めた。

少女、キリエライトが旅立っていった白い扉。

「あの扉をくぐれば、俺は死ぬるのか」

疲れ果てた声で言う。アーキマンは悲しげな風に眉間へしわを寄せた。

「……キミの言うとおりだ。」

あの扉は命を星に返すことのメタファー。扉をくぐれば、キミは死ぬるだろう」

俺は頭を垂れる。ベッドのマットレスに、水の雫がこぼれ落ちた。

「……誰も、守れなかった。」

フィリアも、アスカも、仲間であったモモも、バーサーカー04も。

みんな死んでいく。俺の……力が足りないせいで」

瞬きをすれば、瞳から涙が数滴落ちた。

「……それに、余りにも強大な敵の存在も知ってしまった。」

目と目があった瞬間、悟ってしまった」

顔を上げ、俺に世界を救えと言いたげなアーキマンへ告げる。

「俺は、奴には勝てない」

純然たる事実だった。

あれほど巨大で、恐ろしい力を持つ存在を倒せるはずがない。

「南極になんて向かえない、あの瞳が地上を見つめている限り、俺はどこにも行けない。

世界なんて救えるはずがない、そもそも世界を救う価値が分からない……」

守りたい者が死んでいくばかりの世界。救う意味などあるのだろうか。

指針も解決方法も力も無いのに、世界を救うとか何とか夢を語るなんて。

おかしい事だ、笑えてくる。

「アルジュナだったら、ちゃんと全部出来たんだ。

誰一人欠けることなく守る事が出来て、アルジュナなら、アルジュナなら……アル

ジュナなら!!!」

俺は心の膿をありったけ吐き出す。

「アルジュナなら出来たんだ！　けれど俺はアルジュナではないんだ！

アルジュナは壊れたままで……もう、二度元には戻らないんだろう……」

……直視したくなかった事を、とうとう口にしてしまった。

「俺はサーヴァントとして意識を取り戻したその時に、死ぬべきだったんだ。

期待なんてせず、誰にも巡り会わず、棺の中で、ずっと……凍り付いているべきだつ

たんだ」

死んだ方が、ましだった。

けれど俺は期待していたんだ。

(……もう一度、誰かに巡り会えるかもしれない)

なんて、愚かな事を。

「……ボクは、キミに答えをあげる事は出来ない。

ともすると、キミの悩んでいる事は、答えなんて無い難問なのかもしれない」

部屋全体が振動により、輪郭を崩していく。

その中で、アーキマンは言葉を俺に投げかけ続けていた。

「でも、だからこそボクはお節介を言おう……ガラじゃないけどね。

アーチャー、キミは生きるべきだ。だってね……」

彼は立ち上がり、俺の右膝の上に何かを乗せた。

「考え続ける事は、生きていないと出来ない事だから」

新しい、小さな饅頭だった。アーキマンはそれを、俺のズボンのポケットにねじ込んだ。

「お饅頭をあげよう。顔写真の載っている職員証を貸そう。

ひよつとしたら、ボクを知っている人がキミを助けてくれるかもしれないから。

キミがそんなに苦しんでいるのなら、自由にどこかへ行ってみるのも良いだろう。

けれど、もし……ある女の子に出会う事があったのなら、この職員証を渡してくれると嬉しい」

心情が自暴自棄の底に沈んでいる俺を、アーキマンは鮮やかな緑の瞳で穏やかに見つめていた。

「トワ・キリエライトという、ボクを勇気づけてくれた小さな女の子に。

もう、700年も待たせてしまっているから」

彼は俺の肩を軽くはたく。

「いつてらっしやい、アーチャー961。」

キミが旅路の中でもう一度大切な人に再会できる事を、ボクは祈っているよ」

部屋が崩れて、真っ白な空間から温かい激流に中へ俺は投げ飛ばされた。

暗い、苦しい、狭い。

上下分らない。ただ、ズボンのポケットが饅頭で膨らんでいることは肌で感じてい



る。

「——天の鎖よ」

そんな言葉と共に、俺の足首に細い金属が巻き付いて、引つ張り出された。

「ほう？ 荒れ果て、見るべき物など何もないと思っていたが……中々どうして、珍しいものがあるではないか」

どうやら俺は砂の中に埋もれていたようで、今は強引に引つ張り出され、逆さ吊りの状態になってしまっている。

数回瞬きした。

辺りは凍えるような冷たさに包まれた砂漠の夜で、数え切れないほどの星が空にある。

「まるで生まれたての赤子が如く、ふやけ、ぼんやりした顔よな……」

「だ……これ……」

俺を逆さ吊りにしている相手に、声をやつとの思いで投げ掛ける。

「我おれの名を知らぬと。

不敬にもほどがあるが……よい、幼子が知らぬ事が多いのは道理だ」

男は金の髪を逆立て、夜のわずかな光をかき消すような金の鎧に身を包んでいた。

肌の色は白く、目は、まるで——。

「ギルガメッシュユ。」

この世の全ての宝物を手中に収めた王にして、人の真なる裁定者。

二度は繰り返さぬぞ、一度で覚えよ」

猛毒を持つ蛇の如く。身震いするような危うげな赤の色。

「いやまさか、我があわれの神気取りの小娘に刃を向け、飽きて眠りについていてる間に、これほど事態が愉快な方に進んでいるとは……たまには惰眠を貪ってみるものよな……」

男は自らの顔の縁に、金に輝く籠手を付けた手を当てると、赤い虹彩の色を深めながら、牙見せる蛇のように微笑んだ。

第75話 星の中からこんにちは

終わり

## 第17章 再会するを空に見て

### 第76話 一方その頃モモタちゃんは

私がレジスタンス『アカツキ』に保護され、『超巨大移動要塞カルナ』で目を覚ましてから1週間が経った。

つまりそれは、仲間達と離れ離れになってから、もう2週間近く経過したことを意味している。

「うう……朝だあ……」

身を寄せている親戚、ガトモスの家の寝室、ベッドの中でもぞもぞする。

気分は……あまり良くない。

「はあ……」

1週間前、この要塞は『メルティハウリン・キルロード』なるAIから襲撃を受けた。私はある聖遺物と適合、融合し、サーヴァントの力を持つ存在へ生まれ変わって、その敵を倒した。

そこまでは良かった、良かったんだけど……その後聞いた話が、今でも心に暗い影を落としている。

「上級都市『ピオーネ』に住む人々は、レジスタンスの手に掛かり大勢亡くなって、周辺はリリスの持つ兵器によって跡形もなく蒸発、か……」

ひとり呟いたそれは、レジスタンスや敵側の事情の話でもある。

毛布を頭から被りながら、14才の茶髪の少女にして、この要塞を預かるレジスタンス『アカツキ』のリーダー、ミライちゃんとのやり取りを思い出していた。

「貴女からの質問、『どうして自分が今ここにいいのか、その理由』について答えるためにも、この話はしなくちゃいけない。

少し長くなるよ、良い？」

「う、うん」

私は灰色の髪を揺らしながら頷いた。

「……あたし達は、都市ピオーネに邪神リリスがいるという情報を掴み、他のレジスタンス組織と協力体制をとって攻略を開始した。

作戦に参加したのは全部で3つ。ここ『アカツキ』と、『マヒル』、『トコヤミ』だ」

彼女の言葉に、私は動悸を激しくしながら、狭い司令室のテーブルの上に表示されている立体映像を眺める。

「リリース打倒というお題目を掲げて、あたし達は都市を攻めた。

……なるべく人を殺さないようにしたかったけど、無理だった。

あたし達は、地下で生きていた別の価値観を持つ人達を撃つた、殺した。

死体や人間を回収して、資源にしたレジスタンス組織もある……」

その映像は青く発光し、時折ぶれる。

「仲間達もたくさん死んで、リリースの発見も出来なくて、敵の機械化サーヴァントがやってきた。

そんな絶体絶命の状況の時、あるロボットが敵を倒してくれたんだ。

機械化サーヴァントは、起動エレベーターの下部に叩きつけられて沈黙。

その隙について、あたしの部隊が内部へ潜入した。

……邪神リリースの情報を得るため、そしてリリースを殺すために」

司令室には重苦しい空気が流れている。

「入った場所は、滝壺みたいな雰囲気のある、暗い上水道施設だった。

突然、『怪我人がいるんだ、助けてくれ』って男性の声が聞こえて、それに導かれるみたいに歩いていたら、貴女に行き着いた。

右腕の肘より下を切り落とされ、痛みと出血で気絶していた貴女に……」

彼女らを呼んだ男性の声はきつと、バーサーカー04のものだったのだろう。

……彼は私に言っていた。

(「助けを呼んでくる、ここで待っていて」)

と、本当に素直な、めつたに聞けない裏表のない声で。

「貴女を背負って回収しようとしたその時、振動が響いて、あたし達は外の部隊からの連絡を受けた。」

内容は『リリスの蛇、起動を確認』。

あたし達は部隊を引き上げ……それから20分後、上級都市は、衛星軌道上の兵器『リリスの蛇』から降り注ぐ1本の光線によって、抉れるように消滅した。

……もうあの場所にはクレーターしか残ってない」

私は唾を飲み込んでから、ミライちゃんに質問する。

「地下都市の人は、どうなったの？」

「避難を呼びかけたけど、時間はなかった。そのほとんどが死んだ……と思う」

脳裏にアスカ、アーチャー961の姿がよぎった。

そして、私に親切にしてくれた赤髪の女性ナットさんや、私を通報したエトさんのことも。

「脱出した人だっているよね……?」

「どうかな……さらわれた人は助かったかもしれないけど……」

ミライちゃんの幼さ残る顔はとても暗い。

「その……」

私は話してくれた彼女に声をかける。

「辛いこと、話させてごめん」

「えっ?」

少女はなぜかぽかんと口を開けた。私は構わず言葉を続ける。

「そして、助けてくれてありがとう」

ミライちゃんは困惑している様子だが、私、変なことを言ってしまったのだろうか

……。

「あつ、あたしを責めないの?!

地下都市を滅ぼした、人殺しとか、そんな……こと……言わないの……?」

「——言えないよ」

真剣な言葉を彼女に返す。

……ミライちゃんはまだ14歳だ。

そんな子どもが、組織を指揮し、何を壊し殺すのかを決めて、その責任を背負ってい

る。

言い訳もせず、泣き言もいわずに。

それがどれほど覚悟しているものなのか、想像すら出来ない私は愚かだ。

「言えない。そんな相手を責めるだけの、無責任な言葉」

それが私の本心だった。

「……そう、なんだ」

彼女の頬を雫が伝う。それが涙か汗かは分からない。

「今日は色んな事があつて疲れちゃった。

バトルに変身に、腕まで新しくなっちゃったし。

ガトモスもそうだと思う、家に帰って休んでも良いかな？」

私は黒い右腕をひらひらとさせながら明るく言う。

「メルティハウリン・キルロードから回収したブラックボックスは、あなた達にあげるね。」

私だけだと解析のしようがないし……」

テーブルの上の、手の平に乗る大きさの箱を指でつついた。

「ミライちゃんが言つてた……レジスタンスへの協力のお話は、考える時間をもらつても良いかな？」



「分かった。

……また何かあれば、連絡する」

少女はそう言うのと、椅子に深く座り直した。

これが1週間前のやり取りである。

(……自分の心に正直になれば)

毛布から抜け出て、上半身を起こす。

(とても、混乱している)

ため息を吐いた。

(バーサーカー04は消えてしまった。

アスカとアーチャー961は生きていると信じたけれど、望みは薄い。

ナツトさんやアスカの親類であるエトさんについてもそう。

あとデザートランナー……ああ、きっと都市蒸発の巻き添えだ。

どうしよう……発見した資料の情報とか、食料やアイスもまだ詰んであったのに

……)

状況を整理すれば整理するほど、失ったものが多すぎる。

知り合い、仲間、移動手段。

……家族みたいな、存在。

「だめだめ！　しゃんとする！」

灰色になってしまったポプカットの髪を、両手でぐしゃぐしゃとかき混ぜる。

「……大切な人が死んじやっても人生は続く」

口に出したこれは、自分の言葉。

「どうか、好きなように生きて」

次に口にしたこれは、バーサーカー04の言葉。

「だから私、好きなように生きることにする」

何もかも台無しになった訳じゃない。

リリス曰わく、私はあと1年も生きられないらしいけど、まだ元気だ。

「朝ご飯食べたら、お片付けのお手伝い行こ……」

A1の襲撃を受け、壊れた建物や施設が沢山あるから、体の調子がいい日は、あちこちのお手伝いに出かけている。

私が今やりたいことは、『自分に出来ること』だ。

「ガトモース」

私はベッドから降りて室内靴を履き、よく分からない小さな機械部品が転がって歩き

にくい廊下を進んで、裸電球が吊り下げられているリビングへ向かう。

そこには、私の親戚であるガトモスが……非常に困った形でそこにいた。

「……朝っぱらから何やってるの?」

「えっ? もう朝なの?」

床中に散らばった紙製の設計図、金属、工具、筆記用具。

1個しかないテーブルの上には、積み上げられた本やタブレット、モニター類。

「まだ午前2時を回ったところじゃなくて?」

その大量の物に埋もれるような形で手を動かし続けている、60代くらいの白髪の男性が、私のおばあちゃんの従兄弟であるガトモスだ。

因みに、彼の名の前には『前兵器開発主任』という物々しい肩書きがつく。

「ガトモス、何時から作業をしていたの?」

「午後10時から?」

「何してたの?」

「君が要らないって言ってたパワーアーム、あれの汎用性を高めて、他の人も使える義手にしようと思ってる。」

参考資料のためにテレビゲー……映像資料をプレイしていたら、非常にファンタスティックというかフアナティックというか、素晴らしい戦闘用義手がたくさん出てき

て、うわあ格好いいぞと思つたら、良いアイデアがぼこぼこ湧いてきて……」

黒い目をキラキラさせながら話すガトモスの早口を半分聞き流しながら、私は顔に手を当てる。

(うーん困つた、ちよつと今までの人生で周りにいなかったタイプなんだよな……)

ガトモスは……なんだろう。

アイデアを思いつけば、今日のように家中に道具を広げる。

作業に夢中になってしまえば、寝ないし食べない。

片付けは出来ないっぼい。

(でもどこに何があるのかは把握しているから、困つてないってガトモスは言うんだよな……)

私は、体が大人になったら心まで大人になるものだと思つていた。

だが、現実はそうではないらしい。

(ああ……アスカ、君を思う——)

貴女は決まった時間に寝て決まった時間に起きる、規則正しい女の子だったね。

アーチャー961、貴方は人に言われればちゃんと食べてちゃんと休憩をとる、素晴らしいサーヴァントでしたね。

バーサーカー04、貴方は自分や他者の持ち物、物資を完璧に管理していた、要領の

いい人でしたね。

「……そして完成したのがこれだあ！」

じゃーん！ 見てよモモタ！ この義手、変形してドリルになるし、その際発生する余剰エネルギーを電力として貯めることが出来て……」

「もう朝の6時だよ！ 朝ご飯食べようね！」

「分かった！」

ガトモスと協力し、散らばっている道具をひとまず部屋の隅に固め、もそもそ食感の携帯食料を朝ご飯にした。

「ソファで寝てるよ……お出かけするなら気をつけてね……」

食事の後、遅れて疲れがやってきたのか、ガトモスは眠りについてしまった。

私は出かけるための身支度を整えながら、彼の寝顔を見る。

どこことなく私のおばあちゃんに似ているような、そうでもないような。

（ガトモスは困った人……なのかな？）

でも、彼の明るさやマイペースな所に救われている私がいる。

それに、なんだかんだいって彼の発明品を見るのは楽しいし、彼と話しているのも楽しい。

ガトモスのおかげで、必要以上にめめせめせずいられるのだ。

「これでよし」

灰色の瞳で鏡を見ながら、灰色の髪を櫛で整え、砂除けのフードとローブを被る。

そうしてから、右肩に、サーヴァントの証でもあるプラスチック製の番号札を巻きつけた。

そこに表示されているのは、掠れた『0004』の数字。

「今日もお手伝いががんばるぞー」

自らを鼓舞してから、私はガトモスの家を後にした。

「今日は東地区に行こうかな」

後ろ手で扉を閉め、材質である重たい金属音を聞く。

ガトモスの家がある裏路地。そこに立ち並ぶ黄土色の四角い箱建物を、横目にしながら通り過ぎて、市のある表通りへ向かう。

襲撃前、露天が何件もあり、人も多く賑やかだったそこは、真つ先に復旧が進んでいるが、まだ瓦礫は目立った。

天井を見上げる。濁った黄色のパネル越しに、弱々しい太陽光が要塞内を照らしていた。

「……」

ひとりの女性が、建物の残骸から私の様子をうかがっていることに気が付く。

「おはようございませす」

努めて明るい声で挨拶するが、彼女はさっと隠れてしまった。

(……しようがないよね)

サーヴァントの力を宿した私を、要塞に住む人々は奇異な目で見る。

それは当然のことだと思う。人間の形をしているのに、人間じゃない存在が近くにいるなら、何をされるか分からなくて怖いだろうから。

(でも……みんなとは仲良くしたい、怯えさせたくない)

だから、『敵じゃない』ということを知ってもらうために、私は笑顔を皆に向けるのだ。

「お手伝いに来ましたー!」

迷子になること無く東地区に到着。この要塞内の町並みもだいたい覚えてきた。

広場に着いた私の声を聞いて、作業服を着た顔なじみの女性がやって来る。

「おはようモモタ。今日もお手伝いに来てくれたの?」

「この辺り、退かさないといけない瓦礫が多いのに、道が細いから重機を入れる事が出来ないですよね？　だから、力持ちの私が来ました！」

「本当に貴女の力には助かっているわ。それじゃあ……奥のあの建物と、手前の……」  
現場を仕切っている彼女の指示を聞いてから、私は片付けに取りかかる。

「よしいしょ……」

道を塞いでいた建物の破片を取り去る。壊れた家具を広場へ持って行く。

サーヴァントの力を得たことで、こんな作業も楽々だ。

2時間ほどすれば、女性から頼まれた箇所の瓦礫はほとんどなくなっていた。

「お疲れ様。ずっと作業し通しだったでしょう？　少し休んで」

「はい、ありがとうございます」

かつては壁だった塊に腰を下ろす。

お水と携帯食料を手渡され、私はそれを口へ運んだ。

「ん……あれ……」

丸い広場に人が集まり始めた。そして何かを数人がかりで運んでいく。

それは灰色の箱だった。

「また、遺体が見つかってね……」

女性が私の疑問に答えをくれた。



「邪神リリスの眷属であるあのAIのせいで、たくさん人が死んで……片付けていると見つかるの……」

語る女性の声は暗い。運ばれていく棺の数は10以上だろうか。

「……」

葬列を黙って見送った。

今から700年以上前は、人は墓地という場所に埋葬されていたそうだが、この世界では違う。

遺体は全て砕かれ、液体リソースの原料となるのだ。

……地下都市と地上のレジスタンスで共通していることの1つに、この死者の扱いがあげられるかもしれない。

ただ、地下都市の間人は真実を知らず、レジスタンスの人々はそれを知った上で見送っているの違いはあるが。

「不思議ね……死んだ人間がどう扱われるかなんて、小さい頃から知っているのに……」

私は壁の残骸に腰をかけたまま、話す女性の顔を見上げる。

「液体リソースになって、みんなのための燃料になることは、良いことなのに……それを考える度、胸が痛むのよ……」

目を悲しみに濡らす彼女に、私はポケットからハンカチを差し出した。

「ガトモス、まだ寝てるし……」

東地区で細々としたお手伝いをしてから帰ってみれば、家の主はソファアの上ですやすやと寝息を立てていた。

「んー……」

でもちようど良いかもしれない。私、やりたいことがあるのだ。

「ごめん、またお出かけするね」

寝ているガトモスに話しかけてから、夜を迎えようとしている要塞内へ再び行くことにした。

夕闇に沈み、人の姿がすっかりなくなつた通りを歩いて、いくつもの路地を抜け、建物の側面にへばりついているような階段を登り、たどり着きたい場所の入り口までやって来れた。

ここは涙型をしている要塞の先端付近、上部メンテナンスのための梯子近く。高さあるこの場所から後ろを振り返れば、通つてきた道のりの長さも分かる。

無音と闇の中に、黄土色の四角い建物達が沈んでいるのが見えた。

「こんばんはです、モモ。どうしてここへ？」

聞き覚えのある声に私は振り返った。

「ノインちゃん、こんばんは」

いつか映画で見た遠浅とわあきの海を思わせる青い瞳、肩のあたりまで伸ばされた癖のないさらさらの金髪を持つ、8歳くらいの少女。

今から会いに行く彼女の側に、今日もやっぱりいるようだ。

「上にいる人とちよつとお話したいんだ。」

その梯子、登ってもいい？」

「だめです、今晚は、貸切です。」

彼女の、貴重な、黄昏タイムです」

「そこを何とか……」

私は頭を下げ、色の違う両手をこすり合わせて彼女に頼み込む。

「……モモの評判を、ノインは、聞いてます。」

少しづつ、あなたを信頼する、人が増えてきている」

いつも通りの独特の間で、少女はぼつぼつとしゃべり始めた。

「……ノインも、あなたを、信頼しています。」

だから今夜だけは特別。どうぞ、足元に気をつけて」

頭を上げると、ノインが金の髪とぶかぶかの作業服を揺らしながら、横へカニ歩きで移動するのが見えた。

「わがまま言っちゃってごめんね」

「ノインは、心広いので、許してあげます」

彼女はつんとすました様子で言う。

それを横目にしながら、私は梯子に手をかけた。

第76話 一方その頃モモタちゃんは

終わり

## 第77話 アルカディアは何処（いずこ）

長い、とにかく長い梯子を慎重に登っていく。

（下を見るのはやめておこう……）

サーヴァントの力を得たこの体でも、高所はやっぱり怖いのだ。

「んしょ……」

無心で登った先にある入り口の扉を手で押し上げ、体を出す。

冷たく乾いた風がフードをはためかせるので、私はそれを外した。

灰色に染まった髪が視界の端で揺れる。

「ふー……」

確かな足場にたどり着いた安堵で、息を吐く。

要塞はその動きを止めており、目の前に広がるのは頑強そうで長大な上蓋である。

（えーつと確か、昼間は横へ甲虫の羽のように展開しているソーラーパネルを、夜は要塞へ被さるように畳んで、更に上へ蓋が乗るから……）

蓋の形はやや湾曲している、らしいけど。

見えた形は司令室で見た立体映像どおりで、ちよつぱり感動した。

「……下にいたノインはどうしたの？」

「貴女に会いたい気持ちと言ったら、退いてくれたよ」

梯子を登った先の通路に膝を立てて座り込んでいたのは、この移動要塞都市の責任者であるミライちゃん。

彼女は座ったまま、茶色の瞳で私をじつと見ている。

「……ここ、あたしとノインだけの秘密の場所だったのにな」

「ごめんね。」

ガトモスから『ミライちゃんはよくここに来る』って前聞いていて、お話ししたくて来ちゃったの」

「そう……」

自分の倍以上の年齢の大人を従え、どっしりと構えていた少女と同一人物とは思えないくらい、月の光に照らされた彼女の姿は儚げだった。

私達の頭上には、遮るもののない星空が広がっていた。

「話ってなに？」

「いきなり本題から入っても大丈夫？」

「いいよ。時間を無駄にしたくない」

14歳である彼女の口調は大人びていた。

なので、17歳である私も、大人っぽく言いたいことを口に出す。

「ミライちゃん、私に嘘ついたでしょ」

「……どんな嘘だっけ」

「私がメルティハウリン・キルロードを倒したおかげで、死者が出る前に戦いは終わってたって言葉。」

あれ、嘘だよな」

彼女は膝の間に顔をうずめた。

「うん。嘘」

そして認めた。

「……理由、聞かないの」

「聞いても良いの?」

私は少女に問う。

『誰も死ななかつた』なんて嘘を、どうして彼女が言ったのかについては、理由が分からないから聞きたい気持ちがあるけど……。

「じゃあ先に言う。」

……そう言った方が、あなたが喜んで、そしてレジスタンスに協力してくれるんじゃないかって思ったから。

説明終わり」

わざとらしいほど冷たい口調だった。

「……そんなに、私の力が欲しいの?」

恐る恐る伺えば、顔を隠しているミライの息をのむ音が聞こえた。

「——欲しいよ! リリスを倒す可能性のある力なら、何だって欲しい!」

彼女は顔を誰にも見られぬようにしながら、感情を吐き出していく。

「生まれてからずっと、こんな苦しい世界で暮らしていて、空の上にも地上にも地下にも、自由なんて無い! 希望なんて無いんだって言われ続けて……!」

こんな世界、嫌だった、あたしをリーダーに据えた大人達も大嫌いだった!

だから……だから世界を救おうって思ったの。そのためにリリスを倒そうって……。

……大嫌いな世界でも、救ったら少しは好きになれると思ったから」

ミライの嘆きは続く。

「そのためには何でも利用した。

他のレジスタンス組織だって、ノインのことだってそう!

……でも足りない、力が足りない。

あたしの力だけじゃ、世界を変えられないよ……」

「だから、サーヴァントの力を持つてる私に、協力してもらいたかったの?」



「うん。」

「……だってサーヴァントは強いし、みんなの希望になるもの」

彼女の丸めた背中では、夜風による冷えとは別の理由で震えていた。

「あたし達『アカツキ』にはね、おとぎ話が伝わってるの。」

遠い昔、とても強いサーヴァントが、ご先祖様が生きる希望を失わないようにと、話してくれた物語……」

「サーヴァントが……」

私は肩の番号札に触れながら、彼女をじつと見下ろす。

「世界の果てに最後の海がある。その嵐の先に、楽園へ至る塔がある。」

竜を眠らせ、月を手にし、砕かれしものを持つべき者へ帰した時、世界は救われるでしょう。」

「……そんなお話。大人は『アルカディア伝説』って言ってた」

「アルカディアか。古代ギリシャ語で楽園って意味だね」

「……やっぱり、地下で育った人は知識が豊富だね」

ミライは顔を上げた。

「モモ、ハンカチ持ってない？」

「どうぞ、お嬢様」

ずつと立ちっぱなしで疲れてしまったので、腰を下ろすついでに彼女へハンカチを貸す。

「今日は泣く予定なかったから、ハンカチ持ってなくてさ……」

涙を拭い、それを胸ポケットにしまうミライ。

「洗って返すね」

「うん」

そんな会話の後、しばらく私達の間には沈黙が満ちた。

要塞の上に吹く風は強く、私と彼女の灰色と茶色の髪をばさばさと揺らしていく。

「……モモはさ、『リリスの蛇』を見たことある？」

地上から数万km上に、地球をぐるりと覆うように展開してあるというあの兵器を「

「無いかも……」

「見方を教えてあげる。」

地下都市の人の視界を操作してた、『生体内蔵デバイス』をモモは無くしてるから、ちやんと見えるはずだよ」

お尻をスライドさせながらミライが近づいてきて、私の左手をとった。

「月、あるでしょ。」

そこのほぼ真横辺りから、半透明なレールみたいなのがうつすら見えない？」

「うーん……」

ミライによって伸ばされた左手を頼りに、サーヴァントパワー視力で目を凝らすがあるような無いようなといった感じだ。

「どこかに攻撃するときにね、『蛇』の胴体がはつきり見えるよ。この間もそうだった」  
彼女からレジスタンスの常識について教えてもらうのは、ありがたいことだ。

「レールの下を何個も丸い兵器が滑って行って、滅ぼす場所へ標準を合わせるんだ……。見つかったら最後、とにかく地上を惨めつたらしく逃げるしかない。」

だから今を生きる人達は空が嫌いだし、『蛇』を使うリリスのことを『女蛇使い』って呼んでる」

私は隣にいる彼女を見る。

「でもミライちゃんは、要塞の天辺で空を見るのが好きなんだね」

私の言葉に、少女は表情を歪ませた。

「だって、あたしはリリスを殺し、いつか空を取り戻す人間だもの。」

空が怖いとか言ってられないよ。それにこの要塞『カルナ』は……」

何かを言おうとした瞬間、彼女は慌てて唇をつぐんだ。

「……もう帰るね。お休み、モモ」

「お休みなさい。帰り、気をつけてね」

手を軽く振り合つて別れた。

「……ミライちゃん、背負いすぎてるよなあ」

「はい、ノインも、そう思います」

彼女の姿が梯子のはるか下に行つてから呟いた独り言に、返してくる奴がいた。

「……どこに隠れてたの」

「逃げも隠れもしていません。ノインは、初めからここにいました」

知り合い同士の会話にしては物々しい単語を選びつつ、少女は私の真横に立っていた。

「ミライは」

そして私を薄い青の瞳で見下ろしながら、はつきりとした口調で話し出す。

「どんな手を、使つてでも、世界を救いたいです。」

他者を殺し、同種族の肉をすすらなければ生きていけない、この世界に怒っているのです。

だから、あなたに興味がある、利用したい」

私は瞬きをしてから、ノインに言葉を返す。

「利用されてもいいよ」

その分、私がんばるだけだし」

今度はノインが驚きで瞬きする番だった。

「あなた、怒らないのですか、道具扱いされても」

「私はそう感じてないからOK!」

「……よく、分からない、人ですね」

少女は深々とため息をつく。

「ノインは、ミライのこと、大事です。」

見ていると、愛しさが、湧いてきます」

「そっか」

「でも、ノイン、力不足です。」

彼女の心に、寄り添えきれていない。だから……」

冷たい風に吹かれながら、小さな唇が動く。

「今日は、ありがとうございます。モモタ・トバルカイン。」

その……ミライの心に、触れて、癒してくれて」

「私、何にもしてないよ」

「はー……、これが旧世界風に言うと、天然たらしってやつですか。」

無、自、覚」

「たらしでないよ?!」

少女は楽しそうに言い終えると、完璧なバランスで出来た顔に、くしゃくしゃの笑みを浮かべる。

「ノインも、帰るです、お休みなさい」

「気をつけて帰ってね。お休みなさい」

彼女とも別れの挨拶をし、梯子を降りていくのを見送ると、私は要塞の天辺に一人きりになった。

息を吐きながら立ち上がって、地平線を見る。

冷え切った荒野は、月の光に照らされて身震いするほど美しい。

「みんな、生きていると良いな、怪我してないと良いな……」

ミライとノイン、互いに思いやる2人の姿を見て、どうしても友達のことを思い出してしまった。

「もう一度会えるのなら、早く会いたい」

離れ離れの2週間。

会えない時間が長引くほど、不安に押しつぶされそうになるけれど、そんな私を思い出達が支えてくれる。

「そして……みんなと一緒に、温かいご飯食べたいな」

旅の中、本当に色んな人と食事をしたけど、振り帰ってみればどれも楽しかった。

「一人でもがんばれるけど、みんなとだったら、もっとがんばれるし……」  
『0004』と刻印された腕章に指で触れながら、青く照らされた冷たい荒野と、空で瞬く星々を眺めていた。

——同じ星空を見上げていたサーヴァントは、もう世界のどこにもいない。

第77話 アルカディアは何処(いずこ)

終わり

第17章 再会するを星に見て

終わり

## 第18章 世界はゆつくりと牙をむいたから

## 第78話 絶望性の落下、その後（のち）闇の中へ

暗い、暗い室内にて。

わたしは、ごわごわした布の上に足を崩して座り込んでいました。

「——アスカ・ピオーネさん」

悪意や敵意のない少女の声。うつむいていた顔を上げます。

「手を出してください」

その先に立っていたのは……『完璧なお姫様』でした。

シルクのような質感の布で作られた、紫がかったドレスを着て、長い髪を一つ結びにし、ふわりとしたシユシユで留めている、大きな瞳を持った女の子。

手袋と、足を飾るタイツは、左右で明るい緑と濃い紫の色違い。

「手首に受けた銃創の治療のため、水薬を塗布します」

けれど、そう告げた顔に浮かべている微笑みは、わたしから見れば、安堵を感じさせるものではなく、強い空虚を思わせるものでした。



「痛みを感じさせてしまったら、ごめんなさい」

手には封を開けられた缶詰めが。その中に少女の言う水薬が入っているのでしょうか。少女の姿は、天井に吊り下げられた電球の光で、全身に薄いオレンジ色がかかっています。

「……」

わたしは無言で腕を出しました。上級都市『ピオーネ』を襲ってきた者の銃弾によって、碎かれた右手首を。

「布を……取りますね」

少女は、まばらに小石が散らばっている床へ膝をつけると、缶詰めを脇に置き、深くしゃがんで、わたしが応急手当に巻いていたハンカチをそつと外しました。

時間が経ち、変色した褐色の血に染まった布が、床へ落ちます。

「……かわいいそうに」

哀れむような言葉を少女は漏らした後、手袋を外し、痛々しい傷口に指をかざしました。

「では……治療を施しますね」

銀色の缶詰めが傾けられ、水飴のように透明で粘性のある薬が垂らされます。電球のオレンジの光を抱き込んで、それは琥珀のように輝きました。

「いたっ……」

薬はわずかな痛みをもたらしましたが、その感覚はすぐに無くなり、続くように傷口も消えていきます。

「痛い……あつという間に治って……傷痕も何も……」

目の前で起きたことが信じられなくて、何度も手首を回し、先ほどまで傷のあつた場所を確認してしまいます。

「体に、痛みの痕が残るのは悲しいことですもの」

少女は水薬を片手に立ち上がり、ドレスの裾が床の上の砂埃を引っかき、三角の線を描きました。

「ありがとうございます、その、お名前……」

きちんとしたお礼をするため、立ち上がろうとしたわたしを、少女は片手を見せて、やんわりと動きを制しました。

「私は、キャスター0067。真名、メディアと申します」

再びその顔に浮かべるのは、空虚のにじむ笑顔。

「女神ヘカテの一番弟子であり、皆様に寄り添う良き魔女——」

「キャスター67！ こつちに来てくれ！ 治療の必要な戦闘員がまだ沢山いるんだ！」

荒っぽい男性の声が奥から聞こえてきました。

「それではさようなら、アスカさん。」

また機会がありましたら、お会いできるといいですね」

メディアは腰を折って丁寧な礼をすると、軽やかに駆けていってしまいます。

部屋唯一の光源である電球が、焦げるような音を立てながら明滅しました。

第18章 世界はゆつくりと牙をむいたから

わたくし……いや、わたしの名前はアスカ・ピオーネ。

かつて、上流階級であつた者……です。

「……」

モモやバーサーカー04と共に、たどり着いた上級都市『ピオーネ』。

けれど、味方と思つていたエトおばさまに裏切られ、大切な友達と離れ離れになり。

アーチャー961も、令呪を無理矢理使わされた事で、理不尽に奪われました。

「……」

記憶まで消され、偽りの感情すら植え付けられていましたが、目の前でエトおばさまが殺された事で、本来の自分を取り戻しました。

「……」

傷だらけで逃げて、命を救ってくれた存在もまた目の前で失って……アーチャー961が、女神リリスなる者に殺害されるのを見て。

女神リリスに、『モモとバーサーカー04を殺害した』との事実を告げられて。

「……」

こんな悪い自分は死ぬべきなんだと、終わるべきなんだと想着、建物の崩壊と、自分の死を受け入れたのに、なのに……。

「アスカー、夕飯食うか？ カップ麺だけど」

まだ、のうのうと生きています。

「ビール飲む？」

「いいません……」

「そっか」

ベッドもキッチンも一部屋に詰め込まれた、息の詰まるような狭い空間。

地面に直置きされた低いテーブルの上には、コンロとヤカン、カップ麺が2つ。

卓上電気コンロで熱されたヤカンから、湯気が立ち上るのが見えました。

「ビール、ビール……ぷはあ、常温でもうめえ！」

正座をしているわたしの向かい側で、あぐらをかき、缶の酒をあおっているタンクトップ姿の短い赤毛の男は、『レッド』という名前です。

「オレ、カップ麺は短めの時間で食うのが好きなんだよ」

レッドは、瓦礫と一緒に落ちていたわたしの命を救った人間であり、回収され、オークションで格安で売られていたわたしを、購入した男でもあります。

ビールを飲んだ後、樹脂製の箸でカップ麺の中身を掴み、ずるずると啜っているレッド。

「もう3分経つぞー」

わたしはカップ麺の蓋を剥がしました。樹脂製の箸を使い、無気力に食べ進めます。「アスカ、何があったか知らないけど、もう全部過ぎた事だろ。」

誰々が死んだとかで泣くより、毎日を頑張って生きようぜ」

男は酒を飲みつつ、わたしにそう言いました。

「だってアスカ、生きちゃっているんだし。」

オレとお前、『元上流階級同士』さ、仲良く、仲良くー」

わたしは黙って、カップ麺を食べ続けました。

レッドなる男に回収されたわたしは、家宝である紫の宝石付き髪飾りや、キルケーから贈られた、守護の力が込められたエメラルド、ツヴァイ・エーテルウエルから託されたデータ入りブラックボックス……つまり、持っている全てを奪われた後、都市を襲って手に入れた戦利品の一つとして、オークションにかけられました。

「早い者勝ちだ！ さあ、張った張った！」

ですが、値段は格安です。感染症の危険もある、手首の傷のせいでした。

買い手がつかず、液体燃料にするためのミキサーにかけられそうになっていたところ。

「じゃあ、オレが買う！ オレが回収したもんだし！」

レッドは会場にズカズカと入ってくると、立ったまま簀巻きにされていたわたしの縄を切って、貨幣代わり（と後から彼が言った）の携帯食料を競売人の男に渡し、連れ帰ってしまいました。

それが数日前で、レッドはわたしを病院へ運び、傷の治療まで施し、何か手荒い事をするのでもなく……寝床や食事、水を与え、わたしを部屋で飼っています。

「いとおおお……ぐおおお……」

夜12時ごろ。

男のいびきを聞きながら、薄い毛布にくるまって、床に転がります。

「(い)っ(い)っ……がおお……」

レッドから聞くに、ここは『移動要塞ハデス』なる建造物の中だそうです。

レジスタンス『トコヤミ』の人員や様々な兵器を内に抱き込みながら、敵に補足されないため、常に移動しているとか。

今いるレッドの家は、横に長い集合住宅の最上階……といっても、三階建てなので、そう高い建物ではないのですが。

「トコヤミ……」

それは、都市に攻め込んで、人を殺し、物を略奪していた団体の名前。

「わたし……何のために、生き延びてしまったんだろう……」

食事のゴミや、缶詰めが雑多に並べられた狭い部屋を眺めても、気が滅入るばかり。

「都市『ピオーネ』は……」

レッド達が引き上げていた途中に、破壊されたと聞きました。

天から降り注いだ極大光線……レジスタンス団体の彼らが言う『リリスの蛇の邪眼』によって。

子規模な隕石の直撃と同等の力によって、全て破壊され、クレーターが残るばかりに

なつたと。

「モモ……バーサーカー04……」

彼女達は、きつと遺体も残らなかつたに違いない。

「アーチャー……961……」

都市に回収された彼も、生きてはいまい。

「わたし……」

エトおばさんも、殺されてしまった。

上流階級なんて事も、今は何の価値もなく、意味もない。

今のわたしは、ただの生きているだけの肉の塊だ。

「……」

薄暗い部屋の中で、目に留まった物があつた。寝ころんだまま手を伸ばしてみると、それはテレビの操縦装置……リモコンと呼ばれる物だつた。

反発ある素材のボタンをでたらめに押してみると、部屋の隅にあつたテレビが明かりを灯した。

『……のワンダフルキッチン！ みんな元気だつたかな？』

料理番組が放映されていた。それも、わたしが知っている人物の。

『えっ？ 上手く撮れていなかった？ もう一回？ しょうがないなあ……』



笑顔と白の歯が眩しい、西洋的な顔立ちの男性は、口角を大きく上げた笑顔で、テレビの前の人々に微笑むのです。

『トミーのワンダフルキッチン！』

緑眩しい季節になったね！ 今日、楽しいパーティーにぴったりの刺激的なデザー  
ト……テイラミスの簡単レシピをご紹介します！』

数百年前に世を去っている筈の彼は、今でも世界のどこかに生きているかのように  
笑って、お菓子の材料や道具を軽快に紹介していく。

「……モモ」

そう、あの子とこの番組を見たのだ。愉快なAIから持ちかけられた、クッキングバ  
トルに勝つために。

（あの頃は、こんな事になるだなんて思っても見なかった。

こんな……全て取り返しをつかない残酷な世界に居るだなんて。

……いや、本当は薄々気が付いていたのに見ない振りしていただけなんだ）

自分の心すら騙して、気づかないようにしていた。

認めるのが、怖かったから。

「モモ……わたし、ひとりぼっちになっちゃった……」

もう、どう生きていけばいいのか分からないよ……。

ひとりじゃ、生きている意味ないよ……」

映像は、沈んだ気持ちと相反するように明るい音楽を流し、きらきらと輝くガラスと緑溢れる景色を映しました。

翌日。レッドはわたしに朝ご飯を与えると、外へ連れ出しました。

「A地区でまたガス漏れだつてよー」

「マジ？　じゃあ仕事何かあるかもな」

「行つてきまーす」

「食べ物持つて帰つてきてねー」

集合住宅から出かけていく人々の様々な声が聞こえます。

「朝……」

わたしは眩いて、顔を上に向きました。

一日が始まるというのに、辺りは数十m先も見えない深い闇の中。

まさに常闇とこやみ。この要塞内部に、太陽の光は差し込まないのでしよう。

「アスカ、出かけるぞ。オレから離れないようにな」

「……」

「アースーカーー！」

タンクトップの上から黄土色の作業着を羽織ったレッドが、赤い短い髪を少し揺らしながら、わたしを呼びます。

「……はい」

わたしの着ている物も、レッドとそう変わりはありません。

黄土色の作業着に、ズボン。都市から支給されていた制服とは違い、ごわごわして、硬い生地です。

「レッドは……仕事、行かなくて良いんですか」

集合住宅から離れ、もたもたと道を歩きます。

地面にはゴミが落ちていて、道にばらばらと立ち並ぶ街灯は、壊れているのか、不安定な光を辺りに振りまいていました。

「オレ、ロボット乗りだから、非常時にしか仕事ないの」

「非常時、ですか」

脳裏で思い出したのは、『ピオーネ』での惨劇。

「……都市を襲うのが、貴方の仕事なんですね」

投げやりな口調でレッドに言う。これで相手が激高し、叩かれようが殴られようが、もうどうでも良かったから。

「ちよつと違うぜ、アスカ。オレの仕事は……」

停電でも起きたのか、街灯が消え、辺りが一瞬だけ暗くなったその僅か数秒の間に、レッドは言葉の続きを言います。

「——人殺し、だよ」

街灯が点灯し、町は人工的な明るさを取り戻します。

「アスカは、人を殺したこと、あるか？」

足を止め、こちらに振り向いたレッド。

ためらいもなく問われたその言葉に、わたしは唇を堅く結びます。

(モモ、バーサーカー04、アーチャー961、エトおばさま……)

直接殺した事は無い。けれど、彼ら彼女らの死の原因として、自分がいる。

「……はい、あります」

口を開いて、言った。

「オレとアスカって、そういう所でも同じだな」

レッドはくるりと体を翻して、歩き始めました。

その後ろを、何も考えずついて行きます。

「……」

道端でうずくまっている老人が、うめき声をあげていることに気が付きましたが、何かをしてあげようという気持ちは湧いてきませんでした。

そんな冷血な人間ではなかったはずなのに。

（――今のわたし、空っぽだ）

身分も友達も失って、わたし、空からになってしまったのです。

第78話 絶望性の落下、その後のち闇の中へ

終わり

## 第79話　ヌードルと宝石、男と光、そして姫

レッドの家である集合住宅から、裏路地に出て更に移動し、人でごった返す大通りへやってきました。

男は言います。「まずは腹ごしらえ」だと。

「オヤジの店のヌードルが一番ウメエ。合成卵が絶品ー」

樹脂製の箸で麺を掴みながら、テキトーな口調で料理を褒めるレッド。

その隣に座って、わたしも食事をとっていました。

「レッドよお……褒めてもツケは減らないからな？」

「オヤジの店のヌードルが世界で一番ウメエ。麺、麺がサイコー」

横に座るレッドと、店を切り盛りする、筋肉質な男性主人のやり取りが聞こえてきます。

「適当な事ばかり言いやがって！　今すぐ先月と先々月と先々々月の代金を払いやがれ  
ー」

「オヤジのゲンコツが一番イテエ……力加減が絶妙ー……」

「あたりめえだ！　昔はバリバリの前線組だったんだぞ！」

2人をぼんやりと目に移してから、ラーメンどんぶりへ視線を向け、麺を啜ります。しよっぱい感じですよ。

「オヤジー、レッドなんかどうでも良いから、俺に替え玉」

「あいよ！ 先に代金もらうぜ」

「ん、レーション」

「はい、替え玉。いつも通り、やや固めね」

「オヤジ、サービス最高だな」

常連らしき男性と、店の主人の会話。

「……」

食べ終わったわたしは、油でベタつく丸椅子の上から、辺りを眺めます。

丸い形の赤いお店は開放型で、他の露天が並ぶ大通りにも机やテーブルが置かれています。中心部にあるキッチンからは、麺を蒸しているのか蒸気がもうもうと立ち込め、空気を湿っぽくさせていました。

「飯何にするー？」

「アレにしようぜ、アレ」

今日の食事について相談している2人組。

「上級都市からの略奪品、数取れなかったらしいな」

「邪神リリス様が、『蛇』使って地下都市丸ごと吹き飛ばしちまったせいだろ？」

「明日は我が身だよな」

「この要塞ハデスが見つかるはずないって。だって外からは見えない要塞なんだし」  
「それもそうか。もう200年も見つかってないんだもんな」

世間話に花を咲かせている人。

それ以外にも、区別つかないほどの声や話題が耳に入ってきてきます。

少し息苦しさを感じて、顔をカウンターに向きました。

「よう、レッドのお連れのお嬢ちゃん。替え玉いるかい？」

お店の主人が、人当たりの良い声で話しかけてくれます。

「要りません」

「おう、そうかい」

会話を短く終わらせて、目線を横に座るレッドに向けてみれば、拳骨で殴られた頭頂部をさすりながら、麵をモソモソと食べているところでした。

「しかしレッドよう……」

「なんだよオヤジ」

「オレ以外の店にもツケがあるってのに、女の子なんか家に飼ってどうするんだよ」



「……うるせー。黙ってスープ混ぜて、麵蒸してろよ」

口の中の物を飲み込んでから、主人へぶっきらぼうに答えるレッド。

「へいへい」

レッドが会話につき合ってくれないからか、主人はわたしへ顔を向けました。

「なんでラーメン屋やってるか教えてやろうか、お嬢ちゃん。

昔な、映像資料で見たラーメンが旨そうで旨そうで……。

良いよなあ、昔の人間は。旨いもんもあつたし、『リリスの蛇』がないから、自由に

どこにでも行けたんだろ？」

「リリスの……蛇」

どこかで聞いた単語を、思わず繰り返してしまいました。

「そうさ、邪神リリスが地球の空に浮かべている、機械蛇！」

空飛ぶ奴がいればビームで撃ち落として、レジスタンスの移動要塞を見つけたら、光

線でドロドロに溶かしちまう！」

主人は「おおう……」と声を漏らすと、わざとらしく怯えて見せます。

「リリスリリス、邪神リリス様！」

人間から地上も空も、お日様浴びれる生活も奪っちゃった、お綺麗な女神様！」

「オレは絶対ブスだと思う。人間にこんな仕打ちしている奴の性根は、絶対顔に現れて

いると思うね」

「おうレッド。食い終わったのか、替え玉いるか？」

「今日はいいや、御馳走さま」

レッドは名の通り赤い髪を指先でいじってから、立ち上がります。

「ツケといて」

「来月には、絶対払わせるからな」

主人に何も答えず、レッドは片手を上げてひらひらさせると、店を出て行きます。

「……御馳走様でした」

わたしも立ち上がり、後をついて行きました。

「宝石さー、置いてない？」

暗い夜に明かりへ釣られる虫のように、人でごった返す大通りを歩いて、隅にある小さな店にレッドは入ります。

「こんな湿気た質屋に、そんなもんがあると思うお前さんの頭が心配だね」

カウンターの内側で、虫眼鏡でガラスの欠片を熱心に鑑定している痩せた老人が、この店の主のようでした。

「色付きの石なら何でも良いんだって！ とにかく宝石！」

「今の世の中、宝石と呼ばれてるものだいたい、色付きガラスやジルコンだ。

もし本物の宝石が見つかったとしても、レジスタンスのお偉いさんに取りられて、砕かれて、兵器の加工に転用されるのが話のオチだよ」

「ジジイ！ 石出せ！」

レッドは子どものように地団駄を踏んでいます。

「無いと言っているだろうが！ お前、今年で幾つだ！」

「たぶん……30超えた！」

「糞ガキめ！ 帰ってカップ麺でも食つてろ！」

お店の人が怒り出したので、レッドもわたしも急いで外に行きました。

「……宝石、探さないとな」

「なんで、ですか」

レッドの目的が分からず、わたしは彼に聞いてみます。

「アスカさ、紫のやつと緑のやつ、持ってただろ？」

「……あつ」

お母様の形見である、紫の石がはめ込まれた髪飾りと、キルケーから送られた、エメラルドの付いたお守り。

「大切な物なら、取り戻したいだろ？」

「それは……」

レジスタンスの人達に取られたその時から、もう二度と返ってこないものだと、諦めていた。

だから、彼の言葉は胸の内に響くほど衝撃的だった。

「……でも、あのおじいさん店主の言うとおり、もう碎かれてしまっているでしょう」「分かんないじゃん、そんなのさー」

レッドは人混みの流れに逆らって、力強く歩いていきます。

「もう一軒、馴染みの質屋あるからさ、そこも行こうぜ」

疲れを見せない彼にため息をつきながら、背中を追いかけました。

「あつ、『紫姫様』だ。珍しいな」

彼が誰かを見つけたらしく、不意に立ち止まり、ある方向を見ました。

わたしも同じ方へ顔を向けます。

「――」

枯れた噴水がある小さな広場に、少女が一人。

歌いながら、煌びやかで柔らかなドレスを翻し、広場を囲む人々に舞を見せていました。

（メデИА……さんだ）

美しく儂げでありながら、存在感のある姿。わたしの手首の傷を治してくれたサーヴァント、メディアに間違いないありません。

少女が澄んだ声で歌い、布をステップの動きで揺らめかせれば、ごわついた作業服に身を包んだ人は、思わず立ち止まり、見入らずにはいられないようでした。

歌の意味は分かりませんが、それ自体が素晴らしい旋律となり、次から次へと人が集まってきました。

「紫姫様は、レジスタンスのお偉いさんが所有しているサーヴァントなんだ。」

病院の仕事無い時は、こうして踊りと歌を披露してくれるんだよ」

「そう……なのですか」

彼女の動きは穏やかで、声もそれほど大きくないというのに、その全てがはつきりと、目に、耳に届き、心惹かれてしまいます。

「」  
紫姫が歌いながら、無邪気な動作でぐるりと回ったその瞬間——わたしと、目が合った気がしました。

「」  
彼女の唇が歌を止め、無音のまま何かを呟きます。

『ま、た、あ、し、た』

と、言っているように見えました。

「アスカ、行く」

「はっ、はい」

レッドの声で我に返り、人混みから離れ、彼の言うもう一件の質屋へ向かいました。

帰り道。

大通りを離れ、集合住宅へ近づくにつれて、人通りはぐつと減ります。

行きで見かけた、端でうずくまっていた老人は、姿を消していました。

「成果は無かったな。家に帰って、カップ麺食って寝ようぜ」

路地にはレッドの声だけが響いています。

「……はい」

わたしは口を動かしながらも、頭の中では少女、メディアの事を考えていました。

(サーヴァント……か)

失ってしまったものと同じ存在を見た瞬間、心に浮かんだのは、『期待』の感情でした。

(あの唇の動きが、勘違いでなければ……メディアはわたしに、会いたがっている。その

理由は分からないけれど)

でも、会って何が起こるといふのか？

(ああわたし……まだ、『夢』を見ているんだ)

帰路を歩きながら、胸に手を当てた。手のひらに伝わる、ごわついた布の感触。

(死んだはずの存在ともう一度出会うという、そんな『夢』を)

子どもじみた自分の感情を、鼻で笑う。

(……そんなこと、あるはずないのにね)

深夜。レッドと違い、ちっとも眠れないわたしは、テレビの電源をつけた。

彼が言っていたが、このテレビは娯楽用にレジスタンスが要塞内で流しているものだろう。娯楽を生み出す力を無くした世界は、数百年前の娯楽にすぎるしかなかったのでしょう。

見覚えのある声流れ出し、男性の姿が映る。

『トミーのワンダフルキッチン！』

今日は先週お伝えした予告の通り！ みんな大好き鶏の丸焼きを作っていくよ！

キツシユに鶏の丸焼きが並んだパーティーなんて……考えてみるだけでワクワクだ

！』

画面の中、変わらぬ姿の男性は、香草や野菜、鶏肉について説明を始め、それをわた

しはぼーつと見ます。

鶏は、表面にバターを塗られ、お腹に野菜を詰め込まれると、オーブンの中へ納められました。

『焼いている間にそうだなあ……トミーの友達の話でもしようか』

手を洗い、付いた水分をタオルで拭き取りながら、男性は、太陽の光差し込む、明るく清潔なキッチンで語り始めた。

映像の端には、朝露で輝く緑美しい庭が。

ゴミと闇にまみれた、この世界とは大違い。だからこそ、現実を忘れてぼーつと見る  
ことができるのです。

『トミーには……友達がいたんだ。幼なじみで、大親友。スクールも一緒に、趣味も合った』

膝を抱えたまま、わたしは無感情に画面を瞳に映しています。

『けれどね……友達の体に、病気が見つかったんだ。』

……治療の難しい、病気だった。お金だつてたくさん必要になった』

男性が頭を振りました。

『毎日、お見舞いに行つて、道行く人に寄付もお願いした。』

友達は、信じられない量の薬を飲んで、腕には点滴を繋いでいた。



……顔はやつれていって、病状は瞬く間に悪くなつていった」

トミーはカメラに背を向けると、鼻を小さくすする音を立てます。

『ある日さ、そいつ「キツシユが食いたい」って言い出して。

俺はビビつたよ、初めて聞く料理の名前だったから。

……作つて、持つていったよキツシユ！ もちろん、お医者さんの許可は得てね』

耳に届いた料理の名前に、わたしはまばたきを繰り返しました。

『あいつ、「美味しい、美味しい」って何回も褒めてくれて、涙まで流したんだぜ？

その頃のトミーは料理の素人だった。キツシユの出来は……好意的に言つて、40点つてところ。

食べたがつた理由を聞いてみたら、「前見たファミリー映画に出てて、美味そうだったから」……て』

……こんな考えが頭によぎつた。「もしかしたら、彼の親友とわたし、同じ映画を見たのかもかもしれない」と。

『……そいつは最後まで、生きようとしていたんだ』

画面外からスタツフがやってきて、トミーにハンカチを渡す。受け取つた彼は、カメラに背を向けたまま、顔を拭く。

『えーつとね！ トミーが何を言いたいのかと、まとめれば……友達は、大切にしよう

ねってこと！

「さあ、チキンが焼けた！」

オープンからこんがり焼けた鶏の丸焼きが出てきました。実に迫力のある料理。

「友達……大切……」

そんなこと、分かっている。

「わたし、もっと、友達を大切に出来たんじゃないかな……」

頬に冷たいものを感じ、指の腹で触れてみたら……わたし、泣いていた。

翌日。

「レッド、これ、なんですか？」

わたしは床にぺったりと座ったまま、低いテーブルの上に乗せられたカプセルを眺めます。

「ビタミンDの錠剤だよ。これが不足すると体が悪くなるんだって」

「栄養剤、ですか」

「今日は特別な日だから」

「何か、催しでも行われるのですか」

わたしは錠剤を一粒手に取り、指先でつつきます。

「後で屋上行くから、その時分かる！」

レッドは無精ひげの生えた口周りを搔いてから、大口開け、そこに錠剤を放り込むと、少量の水で飲みました。

わたしは小さく唇を開け、錠剤を口内に押し込み、レッドとは別のコップで水を飲みます。

「よし！ 屋上行くぞ、屋上！」

彼の言うことを聞き、狭い部屋を出て、最上階である3階の、更に上へと向かいました。

軋む階段を登り、屋上へ。

転落防止の柵などない、平らな空き地には、幾ばくかの空き缶が転がっています。

「……何も、ない」

立ち上がり、辺りを見渡しました。

眼下に広がる闇の中には、背の低い建物が乱雑に立ち並び、その間を動く何かの姿が人間でしょうか、それとも、恐ろしいものでしょうか。

「アースーカー！ こつち、こつち！」

奥でガタガタと物を動かしていたレッドが、わたしを呼びます。

落ちないよう、なるべく真ん中を歩いて向かえば、この世界においてあまりにも場違いなアイテムが、2つ置かれていました。

「ビーチチェア……?」

リクライニング機能がついている、全身を大きく伸ばせる特別製の椅子です。

はるか昔には、こういつた物が砂浜に並べられ、人々が寝そべり、心癒される時間を過ごしていたそうですが。

それが、なぜこの闇に満ちた世界にあるのか、

「あんぜんせい? は確かだぜ! ほら、楽にして!」

「……」

いい歳した大人であるはずのレッドは、少年のような屈託のない笑顔でわたしを見えています。

訝しく思いましたが、ビーチチェアに体をあずけることにしました。

「闇……ですね」

見上げた移動要塞の天井は、高さが分からないほどに暗く、一つの期待も持たせない風景なのに。

「いつまでも、そうじゃないさ」

「え？」

レッドは何かを待ちわびているかのようでした。

「なに……が……」

再び視線を上へ向けた時——世界が、一変しました。

「あ……」

空に、直線的な光の亀裂が走ります。そして、暗闇がずれていくのです。

考えるに、天井が二重構造になっているのでしよう。外の光を防いでいたパネルがスライドして動き、透明なパネル天井を表にして、太陽光を取り込もうとしている。

開いた天井から、わっと真つ白な光が降り注ぎます。

「今日はさ」

弾んでいるレッドの声。

『『リリスの蛇』から逃げるために、いつも閉ざしている天井を、特別に開いて……太陽の光が中に注ぐ日なんだ』

町を包んでいた闇が、光によって洗い流されていくかのようでした。

注ぐ光が、空気中を漂う埃に反射して、辺りをきらきらと輝かせます。

まるで……空から、光で出来た梯子が何本も降りてきているかのような……。

「……」

わたしは言葉を失い、目の前の光景に心奪われていました。

「オレ、この時は、屋上で光を浴びながらお昼寝するのが好きなんだ」

レッドはビーチチェアの上で大きく伸びをしてから、あくびを一つこぼします。

「アスカもさ、お昼寝しなよ。きつと気持ちいいぜ」

わたしは、隣で眠りに入ろうとしているレッドの声を聞いてから、まばたきをします。

「お昼寝……」

何て呑気な響きの言葉だろうか。

でも……。

「そう………してみようかな………」

まぶたが、すつと重くなってきた。

過去も未来も、悲しみも楽しみも今は忘れて、ただ体を休める。

……思考が止まり、穏やかな眠りへと、わたしは落ちていきました。

——雲を失った、どこまでも青い空の下に広がる、砂世界。

そこに何かが立っている。4つ足を持つ、黒の機械の獣だ。

(誰………ですか………?)

獣は、砂吹きすさぶ荒野を歩いていき……やがて見えなくなりました。

「ま……待つて……!」

思わず追いかけてしまうのは、なぜなのか。

「待つて、ねえ! 待つてよお!」

きつとその姿が、わたし達を乗せて旅してきた6輪の黒い車……『デザートランナー』に、どことなく似ていたからかもしれません。

「——さん」

空から落ちてきた声に、わたしは足を止めてしまいました。

その瞬間から、足先が砂にとられます。

熱い横風が強く吹き、動けない。まるで、砂で出来た小人達に、通せんぼうされているみたいで……。

「——アスカさん、起きてくださいいな」

少女の声が、幻想のような夢を終わらせたのです。

「……」

わたしは、ビーチチェアの上で目を覚ます。

空は、太陽の光を取り入れる透明な天井のままです。柔らかな日が頬に当たる心地よさに、息を吐きました。

「う……うう……」

レッドの様子を伺うと……ビーチチェアの上で大きな体を丸め、震えていました。

「母……さん」

脂汗が、彼の額に浮かんでいます。

「ごめんなさい……オレ、自分が生きたいがばかりに、オレは……」

口からこぼれ落ちているのは、後悔の言葉。

彼は自分自身のことを『元上流階級』だと言っていた。

それがなぜ、都市を襲うレジスタンスに参加しているのか。

(レッドにはレッドの、悲しみがあるんだ……)

きっと見ているのは悪夢に違いない。揺さぶって、起こしてあげようとしたその時。

「アスカさん」

再び聞こえた少女の声。

わたしはビーチチェアから立ち上がり、屋上をぎつと見渡します。

けれど、わたしとレッド以外は誰もいない。

目線を下の町に向けてみました。

闇をはぎ取られた通りには誰もおらず、何の音も聞こえてきません。

「——呼ばれている」



確信がありました。そして、呼んでいる人物の正体にも。

「レッド、少し出かけてきます」

悪夢に襲われている彼を置いて、わたしは軋む階段を慎重に降りて行きました。

太陽の光のおかげか、要塞内部のじめつとした空気は乾き始めていました。

携帯食料のゴミや空き缶が転がると共に、砂埃が辺りを白く濁らせます。

人の姿はありません。レッドのように、屋上で日光浴やお昼寝でもしているのでしょうか。

「――」

そして、わたしはめぐり逢います。

枯れた噴水の縁に座り、1人、歌う少女……キャスター、メディアに。

彼女は手元に、小型のハープを抱えていましたが、音を奏するための弦は張られていませんでした。

「――」

だというのに、彼女は指を動かしては、儚げな声で歌うのです。

……見えないものが、まるでそこにあるかのように。

「アスカさん」

少女がわたしに目を向けました。

急いでやってきて、肩で大きく息をしている、みっともないわたしを。

「………こんにちは、メディアさん」

「はい、こんにちは」

彼女はしとやかに微笑みます。

「わたしを……呼んだのは……貴女ですね」

「ええ。お話したいと思ひまして」

砂舞う閉鎖空間の中、メディアは立ち上がり、わたしの側にやってきました。

「でもまずは、『これ』をお返ししないと」

艶やかな布手袋に飾られた、両手の平に乗せられていたのは、紫の宝石がはめ込まれた髪飾りと、エメラルドで作られたお守り。そして……AI、ツヴァイ・エーテルウエルから託された、データ入りの小型ブラックボックス。

「どうして、貴女が『これ』を？」

受け取った後に口にした、わたしからの問い。彼女は答えず、弦の無いハープの背を撫でました。

風が吹き、彼女とわたしの髪を揺らします。

「こちらへ。私の家でお話ししましょう」

捕らえ所のない態度ばかりを見せる彼女に、不思議な気持ちを抱きつつ、歩き始めたその背中を追いかけました。

大通りは、昨日レッドと食事をしたラーメン屋さんまで、がらんと誰も居なくて。まるで、世界にわたしと彼女しかいないような……そんな気持ちになるのです。

第77話 ヌードルと宝石、男と光、そして姫  
終わり

## 第80話 空仰ぐ自由と解析と遠い日の言葉と

宝石類や小型ブラックボックスは、胸ポケットやズボンのポケットにしまい、白昼の中、メディア……さんと、わたしは並んで歩いていきます。

刺すような日差し降り注ぐ大通りには、やはり誰一人いません。

「みなさん、どこへ行ったのでしょうか。日光浴でもしているのでしょうか」

思わず口から出た疑問に、メディアさんが答えてくれました。

「家に閉じこもっているのですよ」

「えっ?」

予想外の言葉に、足が止まります。そんなわたしを彼女は振り返って見つめ、同じく立ち止まってくれました。

「今の人々にとって、快晴の空は『蛇』の攻撃が落ちてくる可能性をもった、恐ろしいものでありません」

「では何のために、天井が開いたのですか?」

「要塞内を日光消毒するためです。」

……古くは、人々の健康維持のためだったのでしようが」

少女の形をしたサーヴァントは、微笑を崩さないまま言葉を続けました。

「リリスは人々から、空を仰ぎ、日の光に微笑むという幸福すら奪ったのです」

「……」

言葉が出ない。

わたしは外の世界を、「不安もあるけれど、様々な人との出会いに満ちた、優しいもの」だと信じていました。

でも、多くのの人にとつては違う。常に死の恐怖がやって来る、冷たい世界……。

「……けれどレッドは、日光浴を」

1つ疑問が解消すれば、直ぐに次の疑問がわたしの内からやって来ます。

『空を恐れる』ことが常であるこの世界において、なぜ彼だけは日の光に微笑み、喜んでいたのでらう。

「レッドは、日の光を浴びることの重要性を知っていますし……それ以上に、とつても変わり者ですから」

サーヴァントがくすりと笑います。それは、初めて出会った時の虚無を感じさせる笑みではなく、幼い子どもへ見せるような慈愛に満ちたものでした。

「お話はここまでにして、歩きだしましょうアスカさん。」

私の家へは、もう少しで着きますから……」

「は、はいっ」

乾いた地面を踏みながら、先に行つたメディアさんを小走りで追いかけてきました。

「メディアさんの家……なのですか？　ここが」

目の前に、土のような質感の素材で作られた、低い四角の建物がありました。

「正確に言えば、レジスタンス幹部が集団で住んでいる家なのです。」

サーヴァントである私は、この空間の一角を与えられているにすぎません」

メディアさんは扉の無いただの四角い穴である玄関から中に入り、わたしを手招きしました。

彼女に続いて中へ。

「おじやま……します」

建物の天井は、幾つかの電球が吊り下げられた殺風景なもの。玄関直ぐの部屋には、机や椅子がぐちゃぐちゃと並べられていました。

「こつちですよ」

彼女の声を頼りに、初めて入る建物を進んでいきます。

扉のない部屋がいくつものあつて、それら全てを通り過ぎて、突き当たりの部屋に招

かれました。

「椅子を持つてきますね。よいしょ……よいしょ……」

入った部屋はひとときわ天井が高く、明かり取りのための天窓からは、柔らかな太陽光が差し込んでいました。

空中に漂う埃がきらりと輝き、静かな部屋に神秘的な雰囲気を与えています。

「アスカさん。どうぞお座りになつてくださいな」

「はっ、はい」

わたしはパイプ椅子に座ります。そして……横にある『それ』を見上げるのでした。

「この巨大な機械は……？」

様々な材質で作られた、長大な箱型の『それ』は、大きなモニターやボタン、キーボードなどがついており、古めかしく、物々しい。

「レジスタンス手製の解析機械だそうです。これで、鹵獲したロボットやAIのブラックボックスからデータを吸い出し、解析するのだとか」

メディアさんはそう言うのと、椅子から離れ奥の部屋へ。

「お茶をお入れしますね！ どんなフレーバーが……」

彼女の言葉がうまく耳に入つてきません。何故なら、『解析機械』という単語に、わたしが引つかかつてしまったから。

「でしたらメディアさん！ わたしの持つているブラックボックスも、これで解析すれば……！」

奥の部屋から、小さなヤカンとプラスチック製のカップ2つをトレイに乗せた、彼女が帰ってきました。

「……ああ！ その発想はありませんでした！」

明るい声と笑顔でそう応える彼女に、わたしは顔に手を当て、その……好意的にいえば呑気さを、心配するしかありませんでした。

「ここを開けて、ブラックボックスをセット。……小さいので、空間が余りますね」

メディアさんはこの機械を「使ったことありません！」と元気良く教えてくれました。  
「ですが！ 心配しないでくださいいね。」

レジスタンスの皆様が使っている様子を、後ろからじーつと見ていましたもの。  
こんな感じにセットして、これを……」

手袋をつけたままの指で、大きな大きなボタンを押します。

「……動きませんね、メディアさん」

「……あれ？ 機械さん、どうしてですか？」

メディアは小さな拳でコンコンと機械を叩きました。すると。



「……燃料不足！」

そこはやはりサーヴアントというべきか、原因をすぐさま解明した彼女は、お茶セットを持ってきた奥の部屋に早足で向かい、何かを持ってきました。

「それは……ひよつとして」

彼女の手の内にある液体入りの小瓶を見て、わたしは青ざめてしまいます。

「はい。『液体リソース』ですよ」

メディアアの言葉の後、全身がひゅつと冷える感覚がしました。

「アスカさんは、これがどのように作られているのか、既にご存知のようですね」

「ええ……はい……」

上級都市『ピオーネ』で、知った残酷な真実。

……燃料を得るために、人間の遺体やサーヴアントを切り刻んでは、それを加工しているということ。

「……私が持っているこれは、討伐した機械化サーヴアントから採取したもの。誰かの死をもって作られた物ではないですよ」

メディアアさんはわたしに優しい言葉をかけてから、背を向けると、機械横の燃料タンクに液体を注いでいきます。

とくとくとくとくと音を立てて流れていく、青く発光する美しい燃料。

「……けれど、真実を知るアスカさんから見れば、同じことかもしれないね」

寂しげな声でそう言う彼女の心情は、わたしには想像も出来ませんでした。

ビンの中の最後の一滴まで余さず注げば、巨大な箱型機械は動き始めます。

うつすら埃かぶっていたモニタ<sup>ひしぎく</sup>ーが明るくなり、『データ開封、及び解析完了まで、30分』との文章が表示されました。

「少し……空きの時間が出来てしまいましたね」

プラスチックのコップ2つに、メデイアさんはお茶を入れます。

爽やかな香り纏う蒸気が、乾いた部屋の空気を湿らせます。

「お茶をどうぞ」

わたしは無言でカップを取り、熱い液体を口に含みます。

その味わいはどこか、懐かしい記憶を思い出させました。

(モニカさん……)

もう何ヶ月前の出会いになるのか。

都市28で出会った、アーチャー255と共に暮らしていた穏やかな女性。

彼女とお茶をした時のことを、思い出してしまったのです。

(『5人で、またお茶をしましょうね』)

脳裏で蘇ったその優しい声の約束は、果たせそうに無く。

目尻からこぼれた涙が、カップの中に落ちていききました。

「お菓子はどうですか？ レーシオンを錬成して、クッキー風にしたんです」  
勧められるまま、薄い焼き菓子を口へ運びます。

それを飲み込めば、涙と一緒に、言葉が自然とあふれ出していました。

「わたし……家族も、友達もいたんです」

少女の形をしたサーヴァントは何を言うこともなく、わたしの膝に手を乗せました。  
「でも、みんな、みんな死んでしまった！

わたしがもつと……がんばっていれば、きつとどうにかなつたはずなのに……！」  
悔しさと共に口から出てきたのは、やはり甘い願望で。

「旅の中で、わたしは守られてばかりだった……！」

サーヴァントとモモの後ろに隠れて、怯えて……何も、してこなかったから、誰かの  
危機にも、何も出来なかったんだ……。

わたし、わたしは……！」

顔を下に向け、涙は、重力に従って落ちていくのに任せます。

情けないのに悲しくて、後戻りは出来ないはずなのに、過去に戻りたくて。

心の中は……ぐちゃぐちゃで……。

「アスカさん」

メディアさんの手が伸びてきて、わたしの顔の縁に振れると、そつと上向きにさせます。

「アスカさん」

眉を下げ、瞳を潤ませた、悲しげな彼女の顔が見えました。

彼女は左手をわたしの胸に当てると、そこにある胸ポケットの内側から、エメラルド製の護符を取り出しました。

それがわたしの膝上に置かれます。

「この護符と、あなたを見たとき……私、夢から覚めたような心地になったのです」

「夢から……覚めた？」

「今ここにいる理由が、ずつと分からなかった私。」

そんな私が、やるべきことが見えてきた……と言った方が正しいでしょうか」

白い布が、わたしの涙をぬぐい取ってくれました。

「あなたは、私に希望を思い出させてくれた人なのですよ」

「……希望を？」

わたしの言葉を聞き、彼女はにこりと微笑みます。

「あなたは、あなたであるというだけで、誰かの希望になっている。」

命とはそういうものなのです。力の優劣など無く、全て輝かしい星……」

天窓を見上げたメデイアさんに習い、わたしも上を見てみました。

埃や、突き出した金属部品。それらが太陽の光を反射して煌めいて……少しだけ、星のように見えたのでした。

「……私の話をしてもいいでしょうか、アスカさん」

「どうぞ、キャスターメデイア」

モニターを持つ機械は振動を続けており、『解析完了まで、後10分』と表示を変ええました。

「今より10年前。私はこの世界で、箱の中から目を覚ましました。

……そう、誰かに召喚されたのではなく」

「それは……おかしな話では？ だってサーヴァントは……」

水分不足からなる頭痛を覚え始めたわたしは、急いで紅茶を飲みました。

その後、言葉が続けず。

「サーヴァントは何処いずこから召喚される者のはず。わたしが読んだアーカイブでは、そう書かれています」

「かつてはそうであつたかもしれませぬ」

「かつて、ですか」

「けれど私は、箱の中より見いだされ、液体リソースを注がれ、永き眠りより覚醒を果た

したのです。

……その事について、私は目覚めてよりこんこんと考えていました」

両者共に、椅子へ深く座り直します。

「レジスタンスの方々は、時折サーヴァントを発見しました。

それは、マスターも持たぬ『野良』であつたり、棺のような箱に収められた——」

機械の振動が一時だけ強くなり、わたしは反射的に体を竦めてしまいました。

『冷凍品』であつたり、です」

「れい、とう」

サーヴァントという力強い存在とはかけ離れたその単語を、思わず繰り返してしまいました。

「私はこの10年、幾つもの推測を立て、世界に対する考察を深めてきました。

世界にとつての傍観者である私から見れば、この世界はおかしなことばかりなのです」

わたしは紅茶を再び飲みます。

嵐みたいな悲しい気持ちや、開いた穴のような虚無感は収まって、沸き立つような「なぜ？」という気持ちだが、全身を満たしていました。

「召喚されるのではなく、箱より見いだされるサーヴァント達。

彼ら彼女らは、マスターと契約せずとも、存在を長く保ち続けます。

「いかに液体リソースが魔力源として優れていようとも、おかしなことですね？」  
「そうなのですか？」

「サーヴァントが世界に留まり続けるには、楔が必要なのです。

その楔がマスター。人であろうと、物であろうと……」

初めて知ることの多さに、わたしはまばたきを繰り返します。

「——けれど、それ以上考えを深めることが、私には出来ませんでした。

私の目の前には、傷つき倒れた人が多くいて、世界に対する考察は、命よりは優先できませんでしたから……」

「メディアさん……」

優しい彼女は、謎の解明よりも、人を救うことを優先した、いや、せざるを得なかったのだ。

「限界を感じていたのです。自分の力にも、知識にも。

……けれど、アスカさんが現れました！」

曇っていた彼女の表情が晴れる。

「アスカさんは地下都市よりやってきたお方であり、サーヴァントのマスターでもありません。それに」

指さしたのは、エメラルドの護符。

「調べてみて、すぐに分かりました。」

私の姉弟子、キルケーの手による物に違いないと」

「確かに……キルケーさんから贈られた物ですが……」

「もし、彼女から力を借りることが出来たなら……」

彼女の瞳がきらきらと輝きを増していきます。そして立ち上がると、わたしの両手を手にまとめて取って、ぎゅつと握りしめるのです。

「世界の謎を明らかにし、『リリスの蛇』の脆弱性を暴き、『心無き竜』すら打倒して、女神を失楽させることだって出来るかもしれません！」

明るい声とは裏腹に、飛び出た言葉達は物騒な響きを持つていました。

『リリスの蛇』……これはリリスが有する兵器のことでしょうが、『心無き竜』とはなんのことでしょう？

『データ開封、及び、解析完了』

機械は振動を小さくすると、男性のものを思わせる人工音声で、作業が終わったことを教えてくれました。

「画面上にたくさんデータが並んでいますね、アスカさん」



「日付を新しい順に、並べ替えて……このコマンドでしょうか、ああ、うまくいきました」  
ブラックボックスの解析が終われば、次は中身を調べる時間です。

メディアが持ってきてくれた、分厚い取扱説明書（恐らく、レジスタンスの方が作った物でしょう）にとらめっこしながら、データの入ったファイルを並べ、種類分けしていきます。

地下都市で使っていた端末とかけ離れた、とても古い様式なので、簡単な操作にも四苦八苦です。

「メディアさん、ひよつとしたら、世界の謎についても、手がかりとなるものが記されているかも」

わたしは声をかけます。彼女は瞳を動かし、画面を右から左へと眺めていました。

「……一番上にあるデータは、映像なのでしょうか」

わたしは旧式のマウスを操作して、メディアさんが気になったそのデータにカーソルを当てます。

「映像だったようですが、破損して、音声のみが復元されている状態ですね。

作成された日付は……西暦2313年」

今から400年も前の音声データです。

これもきつと、ツヴァイ・エーテルウエルが見つけたものなのでしょう。

「再生、してみますか？」

「お願いします、アスカさん」

このデータの何が彼女の心を惹いたのかは分かりませんが、わたしはクリックをして、機械に再生を命じます。

『……テスト、マイクテスト』

まず聞こえたのは、やや高めめの男性の声。

『ちゃんと撮影できてるか？』

最後まで話して！「出来ていませんでした！ 画面は真っ暗、暗闇です！」が、一番腹が立つんだぞ』

動画データが破損していなければ、その声の主がはつきり分かったのでしょうか、それを惜しんでいる時間は与えられませんでした。

『——大丈夫ですよ』

次に聞こえた気高さを感じるその声に、わたしは覚えがあり、心を乱されてしまったから。

『機材の点検は、このブリュンヒルデが妹達と共に行いましたから』

かつて出会ったアンドロイドとよく似た声が、機械のスピーカーから流れます。

『そうかー？ ……であれば万全か、よし！』

女性の言葉を聞いて安心したのか、男性は朗々と話し始めます。

『西暦2313年、レジスタンス所属のサーヴァントが、これを記録する。』

時刻は深夜。我らは明日、空中要塞との決戦を迎える』

わたしは様々なデータが並んでいるモニターから、後ろを振り向き、メディアさんの様子をうかがいました。

「そんな、まさか……」

澄んだ目を見開いて、体を細かく震わせています。

『士気を高めるため、宴でも開きたかったのだが……連日の作戦で流れる血が多すぎた、そんな気分の者はいないだろう。』

……賢者ケイローンが、敵に鹵獲されるといふ事件も起こったしな』

メディアさんは自分の体をさすりながら、ある人名を呟きます。

「イアソン……様……?」

明らかに、知っている人を呼ぶ響きでした。

『さて、決戦の前に、リリースが契約しているサーヴァントを確認しよう。』

レジスタンスの人間達は何て呼んでいたかな……「リリースの7の滅びの使徒」、だっけ

か？ ずいぶん大仰な呼び名を付けたもんだなあ！』

メディアさんの様子も心配でしたが、今はそれよりも彼の言葉に集中することにしました。

『こちら側に協力してくれているエジソンの情報が正しければ、総数は8体……』  
リリスの7の滅びの使徒なる単語は、前に聞いたことがあります。

アンドロイドが廃棄されていた地下研究施設で見つけたデータ、その中であつたものです。

『アーチャー、ギルガメツシユを皮切りに。

セイバー、シグルド。

ランサー、カルナ。

ライダー、エウロペ

俺達の味方になってくれた、キャスター、エジソン。

アサシン、セミラミス。

バーサーカー……ヘラクレス。

そして、7つのクラスの外、エクストラクラス、7体目の8体目である……』

その後に何か名前が呟かれましたが、音声が悪れたのか濁っており、判別は出来ませんでした。

『最後のやつは例外として……どいつもこいつもトップクラスのサーヴァントだ！』

それ即ち魔力食いお化けてことだぞ?! カタログスペックしか見ずに召喚したのかあ?!』

わたしですら知っている英雄の名前が、彼の口から語られました。声には驚愕と呆れが混ざっています。

『イアソン、どうか冷静に。これ未来へ託す記録なのですから』

そんな彼を諫める声は、あのブリュンヒルデなる女性のものでした。

『……幾つかの救いを言えば、ギルガメッシュが封印されていることと、絶大な防御力を誇るカルナの鎧が、既に半分失われているという所か』

女性の声で平静を取り戻したのか、彼は落ち着きました。

『しかし、マスターであるリリスも強力無比だと、エジソンから聞いた。

彼女はこの世界の管理者として作られた、母なる人造女神。

「成長すれば、手がつけられない存在になるだろう」と。

つまり私達は、幼い女神を手に掛けることになる……な……』

数秒の荒い呼吸の後、言葉が再開します。

『……』

俺が呼ばれた理由は恐らく、ヘラクレスを倒すためだと推測できる。

ブリュンヒルデは……きつと、シグルドを討つために。

その他大勢のサーヴァントも、理由があつて召喚されたんだろう。

人を守るためとか、何もかも失われてしまった世界を救うため……とかな』

ぱんと、乾いた音が合間に響きました。

語る彼が、自分を鼓舞するためにどこかを叩いたのでしようか？

『リリースを倒したら、次は聖杯探索だ。』

世界を異常な状態に変えてしまっている聖杯を見つけて、壊すなり正常化するなりしなきやならん。

こういう時、あいつが……メディアがいれば……つて、何言っているんだ俺！

噂すれば影がさすじゃねーか！』

慌てるような足踏みの音。

「——くすっ」

聞こえた笑い声の主は、メディアさんでした。

『レジスタンス側の人間の装備も、サーヴァントである我々の準備は既に整っている。

俺達にリリースの弱点を流してくれた、研究者の保護も済んだ。

誰が消えても作戦が遂行できるように、作戦データは分割で保管した。

……映像で記録することは、これで全てか』

名残推しそうに彼は言葉をこぼしました。

『それでは諸君！ 作戦成功の暁には、こんな辛気臭いデータなんて笑い飛ばして蹴飛ばして！ 酒を酌み交わそうじゃないか！』

……おっと、映像切る前に、日付を言っておかないとな。

西暦2313年、偉大なるアルゴ船の長、最優なるセイバークラスである、イアソンがこれを記す……と』

音は途絶えました。

「……ふう」

わたしはほつと息を吐きます。肩へ力が異様に入ってしまうほど、重要な情報が次から次へと現れたからです。

「イアソン様が……400年前のこの世界に、居ただなんて……」

椅子に座ったまま、そう呟く彼女の表情は複雑なものでした。

嬉しそうでもあり……寂しそうでもあり……。

『うーん、まだ録画容量が残っているのか』

——しかし、終わったはずの物語には続きがありました。

『どうだブリュンヒルデ、何か言いたいこととか……』

『そのように迫られたら……困ります、私……』

『ちよいちよいちよーい！　なんで槍が燃え始めてるんだあ！』  
スイツチでも切り忘れたのか、遺すつもりが無かった声が入ってしまったので  
す。

仲間にかけるような、明るくて気負わない声が暗い部屋へ響きました。

『誰でもいいから容量埋めに協力しろ！　えーつと、ちようど良いやつ……良いやつ  
……つて！』

彼が遠くへ声を飛ばすためか、大きく声を張り上げました。

『おーいアルジュナ！　そんなところにいたのか、体は大丈夫なのかー！』

まあいいか、ちよつと降りてこーい！』

聞こえたその名前に、わたしの心臓は止まりそうになって。

……400年前のアルジュナの声が、ノイズ混じりにスピーカーから流れ出しまし  
た。

第80話　空仰ぐ自由と解析と遠い日の言葉と

終わり



## 第81話 弓兵は祈れど、世界は甘く腐れ……

『……イアソン、どうかしたのですか』

『どうかしているのはお前の方だ！』

マストに登って、冷たい夜風に身をさらすなんて……いかにサーヴァントとも言えど、体調を崩すぞ。

それにお前……いや、説教はやめておく。

とにかく慎重に降りて来いよ……よーし、よし』

『英雄イアソン。私、いつまでこのビデオカメラを持っていれば……』

『撮影役ありがとう、ブリュンヒルデ。それは俺が預かるう』

『妹達が心配ですので、様子を見に行つてきます。作戦前夜で、きつと緊張しているでしょうから。』

何かありましたら、4番船室まで……』

3人のやり取りから1人抜けて、何かを手渡すような音が入り、またしばらくの沈黙。

その後、誰かが口を開きます。

『映像記録を撮っていたのですか』

『おう！ 作戦成功の暁に、全員で冷やかす用のな！』

400年前のアルジュナと、イアソンなるサーヴァントの会話が始まりました。

『撮るべきものは撮ったんだが、容量が少し余ってたな。』

『どうだアルジュナ？ 何かメツセージでも遺してみるとか……』

『……作戦終了後まで、私が生き残っている可能性は低いでしょう。』

『何か想いを遺しても、それには意味がありません』

『お前にしては弱気な発言だな。』

……ラーマとシータ、ラクシユミー・バーイー、？、ウイリアム・テル、アスクレ

ピオスの消滅と、ケイローンが鹵獲されたこと、気にしているのか』

どちらかが息を吸う音が聞こえます。

『イアソン、戦況は限りなく不利です。』

毒によって正気を失われ、魔術強化も施された「狂える蝕みの使徒、ヘラクレス」と

の戦闘で、多くのサーヴァント、人命が失われました。

特に、作戦の中核を担っていた神性サーヴァント複数人の退場は手痛く。

それほどまでの犠牲を払ったというのに……討伐は出来なかった。私は……』

『あれはお前の責任じゃない。何より、アルジュナがリリース側の機械歩兵を殲滅してく

れていなかったら、本隊までやられていたんだ。

……随分と落ち込んでいるな、アルジュナ。決戦を前に緊張しているのか？ 連日の

戦いの疲れか？』

『……』

『それとも、サーヴァント達に託された「あれ」のことか』

イアソンが口に出した「あれ」が何なのかは、今の音声だけでは分かりませんでした。

『明日、私はカルナと戦い、これに勝つ。』

……完全な鎧を身に纏まとっていないあの男など、ものの数に非ず。

その後、作戦通り、地上より女神座す空中要塞を撃ち落とします』

『作戦が一つでも上手くいかなかった日には、俺達は木の実をすり潰すみたいに、ゆっくり全滅していくだろうな』

『……そうしなければならぬから、私はそれを成す。』

戦士の使命、ただそれだけに己を純化させましょう』

『なあ、アルジュナ』

『はい』

『——お前、本当はやりたくないだろう』

その言葉の後、沈黙が数分続きます。ひりひりとした空気が、現代にまで伝わって来

るかのようでした。

『……戦士として、アルジュナとして、戦いに個人の感情を持ち込みたくは無いです。これ以上は私に語らせないでください』

『そうか？ 話すだけでも楽になることはあるぞ』

『……』

『俺に話したくないのなら……ほら、このビデオカメラに向かって、ぶちまけちまえばいい。』

後で俺はその部分のデータを見ずに消す。

そうすればほら……誰にもお前の胸の内はバレやしないだろう？』

また何かが手渡される音。イアソンが、アルジュナへカメラを渡したのでしょうか。

『気持ちをも、ぶちまける』

『そうさ！ 言ってやれ言ってやれ！ 英雄だって、たまには息抜きしなくちゃな！』  
快活な声の後に、遠ざかっていく足音。

しばらくの間、夜風が通り抜けていく寂しげな音ばかりが録音されていました。

『……私は、この世界においても、多くのものを託されてしまった』

沈んだ声。それはあまりにも、このアスカ・ピオーネという人間に、ある存在を思い出させるものでした。

『希望、夢、そして……「神々の力」。

今、私の力は自らの霊基、霊核を壊すほどに高まっています。

……神の血を引いたもの、神の加護を受けていた多くの仲間達が、消滅の前に、私へ贈ってくれたから』

その「神々の力」が、イアソンなるサーヴァントが気にしていた「あれ」のことなのでしよう。

……それにしても、こうして聞く彼の声は、本当にアーチャー961のものとそっくりで。

『明日、私は成すべきことを成し、その後、必ずや砕け散るでしょう。』

それは千里眼で見ずとも分かっていることです。

……問題は、いつ砕け散るべきなのかということ。

つまり、私は二者択一の問題を抱えている』

でも、少しアーチャーと違うような感じもして……不思議な気持ちになるものです。

『カルナを優先するか、空中要塞の破壊を優先するべきか。

……私がああ男と当たらなければ、サーヴァント部隊は大きな被害を受ける。

かといってああ男と戦えば、勝っても負けても消滅は免れない』

ふと気配を感じて振り向くと、メディアがわたしの直ぐ後ろに立ち、ちよつとぼやっ

とした顔でそこにいました。

『やりたくないだろうと、イアソンに言われた。』

……胸の内を見透かされ、落ち込んだ。

そう、私は戦いたくないのだ』

わたしは一度椅子に座りなおります。

『戦いたくない、けれど、リリスによって世界が閉ざされることも看過できない。』

……私は、血を分けた家族を、運命の螺旋の中であと何回殺せばいい？』

アルジュナの発言は、わたしの胸を強く打ちました。

……英雄アルジュナと英雄カルナは異父兄弟であるということは、伝説が語る通りです。

そして、最後の決戦『クルクシエートラの戦い』の際、凄惨に殺しあつたということも。

『この私の記憶には無いだけで、きっと私は何回でもカルナを殺しているのでしょうか。』

その逆も然りです。カルナも私を何度も殺しているはずだ。

……私とあの男は、同じ宿痾しゅくあに蝕くまれている。

人理が紡がれ続ける限り、この病が癒えることは無いだろう。

だから私は、人の世のためにもこれを受け入れるしかない。

……でも』

声はささやくように静かに、小さくなりました。

『——心は違うんだ。』

心の隅にはいつも、涙を流している幼い自分がある、納得いつていない大人の自分がある。

「どうしても、なぜ」と、運命に問いを投げかけ続けている自分が』

誰にもばれないよう、隠れ潜んでいるかのような声で、彼は心境をぶちまけていきま

す。  
『私は、クルクシエートラの戦いにおいて、カルナを殺した時……自分の心まで、散り散りに引き裂いてしまった。』

傷はいつまでも癒えず、心は戻らず……今でも小さく痛むんだ。

……でも、それを表に出すのは俺のわがままだから、我慢しないと』

強い風の音が、音声のノイズを大きくしました。

彼はそれが収まるのを待ってから、もう一度言葉を続けます。

『確かにイアソンの言う通りでした。こうして口にしてみるだけでも、気持ちが悪くなりません。』

うん、大丈夫、私は大丈夫だ。きっとこれからも、英雄アルジュナとして戦っていけ

る——』

わたしはその発言を聞いても……何も、大丈夫だとは思いませんでした。

『明日、私は作戦を遂行させ、消滅します。』

皆から預かった力は、私の四肢を引き裂き、魂を砕いて、塵すら残らないものとするでしょう。

——しかし構いません。

私の一矢が、今を生きる人の未来に繋がるなら……ええ当然、自己の消滅など恐れるに足らずです』

モニターを見れば、音声データの最後が近づいてきていました。

『そうだ！ この最後の数秒だけは消さないよう、イアソンへ頼んでおきましょう。』

ええつと……』

また聞こえる、小さな風の音。

『——これを聞いている誰かへ。』

貴方が今、健やかで、明日に怯えず、苦しい思いをしてはいないよう、私は強く願っています。

世界に緑が戻り、海と山が変わらずそこにありますように。

朝には鳥が歌い、野には獣達が駆けまわっていますように。



命が巡り、世界へ幸せな想いを抱いて、生まれてきますように』

彼が口にしたそれらは、希望を夢見る純粹なまでの……祈りの言葉でした。

『私と私の仲間達が切り開いた未来が、少しでも良きものになっていることを、祈っています。』

西暦2313年、アーチャー、アルジュナ、これを記す……と。

……言いたいことは全て言えた。これでいい、これでいいんだ』

自らに言い聞かせるような声で彼は語り終えると、音声データはその再生を止めました。

「アルジュナは……」

400年前の彼は、どんな気持ちで最後を迎えたのか。

それを思ってしまうば……当然、自らのサーヴァント、アーチャー961のことも考えてしまいます。

(リリスに腕を切られ、わたしが落ちていく様を目の前にして……それで、それで)

——きっと、絶望しかなかったはず。

だから、わたしの名前を血を吐くような声で呼んでいたのだ。

「わたし、何をしているんだろう……」

虚無感が足先から胴へ昇ってきます。

(情けないよ……みんなが死んだって事実にいじけて、めそめそ泣いて……)  
でもその喪失に抗う力が、少し足りなくて。

(女神リリスに言われた通りです。『何にもなれなかった、女の子』……)  
結局今でも、心地よい絶望の湯にどっぷり浸かりきったままなのです。

「アスカさん」

「……はい」

ネガティブな思考の奥底から我に返り、呼ぶメデイアの声に答えます。

「このデータ群を閲覧し終えましたら、キルケーとコンタクトをとってみようと思いません」

「そんなこと出来るのですか?」

「距離によつてはとも難しいかもしれませんが……私も魔女ですし、彼女も魔女ですから、出来ないことはないかと」

明るい調子で話す彼女を眺めます。

「アスカさんのサーヴァントや、お友達の安否も調べることが出来るかもしれません」

「……それって」

「アスカさん、どうしてみなさんが死んだって決めつけたんです?」

ひよっとしたらひよっとして、大脱出! からの大ワープをして、全員無事に助かつ

たかもしれないのに」

「……そんな都合がいいこと、ありませんよ」

わたしは彼女が冗談を言っていると思い、くすりと笑った。

「真剣にお話をしてるんですよ、アスカさん。」

……その目で確かめない限り、まだ分からない、希望は残されています」

メディアさんは巨大な機械を指さしました。

「——400年前に戦った彼らが、私達へ未来をくれたように」

わたしもモニターを見えます。

幾つもの音声、映像データが並び、文章の物もあり。

「そっか……わたし、託されていたんだ……」

今まで自覚していなかった事実が、心へ染み込んでいきます。

過去を生きた者達から、今を生きている者達へ『託された』のです。

祈り、想い、希望が。

「世界を、救って……」

この言葉は、モモがよく口にしていた言葉だ。

（『世界を救いたい』）

彼女が旅する理由でもあったそれを、わたしはぼんやりとした輪郭しか受け取ってい

なかった。

わたしにとって、彼女達との旅は、どこに行けばいいのかも、どうすればいいのかも分からなくて、目の前の困難を乗り越え、生きていくことに精一杯のもの。

怖かったし……わたしには、モモのような信念が無かったです。

(でも、今は違う)

わたし、目的が出来ました。

「メディアさん」

「はい、なんででしょう」

柔らかな微笑む彼女に向けて、わたしは……いや、わたくしは、自分の思いをぶちまけます。

「友達を探したい。もう一度！ 大切な存在と出会いたいんです！」

だからその……わたくしに、協力してはくありませんか？」

メディアは数秒、またぼやんとした顔して、それから本当に驚いたかのように答ええます。

「びっくりしました！ だって私、ずっとそのつもりでしたのに……」

声をもらして、上品に笑い始める彼女につられ、わたくしも笑いだしてしまいます。

「ふふふ……」

「あははは……」

久しぶりに、わたくしは心の底から笑うことが出来ました。

「元氣を出してくださいね、アスカさん。」

貴女は素敵な女の子、誰かの希望になれる人なのですから……」

かけられた優しい言葉に、わたくしは苦笑いで返します。

「そうだと……良いのですが」

不安はまだあります。けれど、虚無感に心地よく浸るのはもうやめにしました。

「ではアスカさん、この膨大なデータ、次は何を確認し——」

「誰か！ 助けて！」

部屋を包んでいた和やかな雰囲気、女性の悲鳴によつて切り裂かれます。

「メディアアさん、あの声は……」

「外に行きましょう。」

……レジスタンスの者にこのデータを見られるかもしれない。一度、機械の電源を

落とし、ブラックボックスはアスカさんにお返ししますね」

彼女は素早く動き、機械から黒い小さな箱を回収し、渡してくれました。

お茶セットも奥の部屋に戻ってきて、早足で外に向かってしまいます。

「わたくしもついていきますから……！」

慌てながらも、彼女の後を追いました。

「何を、しているのですか？」

キャスターメディアアの唇から、好意的な感情など一つも込められていない声が、建物の前に広がる路地に響きます。

わたくしの目に映ったものは――。

「うあ……あ……メディアアさん……助けて……」

殴られ、顔や体を赤く腫らし、目や鼻から流血した女性と、それに馬乗りになって、相手の髪を掴んでいる男の姿でした。

第81話 弓兵は祈れど、世界は甘く腐れ……  
終わり

## 第82話 人纏（まと）う理性という肉は、本能という骨より剥がれ落ちた

「セイザルさん、あなた、前もレジスタンス上層部より警告されていましたね？」

……『手荒に扱うな』と」

メディアさんは感情の乗っていない声で、女性へ暴行を加えていた様子の男に呼びかけました。

「あー？ 紫姫様じゃねえか？ なんだよ？ 戦績たんまりな俺に口答えか？」

男は女性の髪から手を離します。

倒れたまま、起き上がれず震えている女性へ、わたくしは駆け寄りました。

「……」

涙を流しながら、恐怖とそれ以外の感情でがちがちと歯を鳴らす女性。

薄い布で出来た服は、胸のあたりで破かれていました。

わたくしは作業服然とした上着を脱ぎ、彼女の体にかけて肌を隠してあげると、肩を貸して立ち上がらせ、少しでも男から離れた場所……メディアさんの後ろへと歩きま

辺りには、怒声を聞いてやってきた野次馬がわき始めていました

「紫姫様とー……後ろに居るのは……ははは！ レッドライダーが買った女か！」

男、セイザルは何がおかしいのか、こちらを指差してけたけた笑っています。

「ライダーもおかしな買い物するなあと思ったさ！」

だつてよお……病気持つてるかも shouldn't, 傷つきの女買うなんてさあ！」

……言葉の意味は深くは理解できませんでしたが、ひどく侮辱的なことを言われているというとは感じていました。

「やっぱり女は、アイツみたいな傷なしじゃないとなあ。」

それに、俺みたいなロボット乗りで、優秀な男は、繁殖のお仕事がよお……」

彼の言葉に、上級都市『ピオーネ』で聞いた「持つて帰って、交配実験に使う。女の子は子どもを産んでもらうよ」との男達の発言が、頭の中で反響しました。

「セイザルさん」

よたよたと近づいてくる男に対し、その動きを止めさせるかのようにメディアさんがすつと立ちふさがります。

「……」

「……」

セイザルは小さなメディアさんを睨みつけ、一方彼女は静かに見上げています。



両者は至近距離で相対していますが、ただの人間であるセイザルの方が不利です。サーヴァントはどのような見目をしていようと、人間では敵わない存在。それを、わたくしは今までの旅で知っています。

「……おいー！」

「はい」

空気が張り詰め、その緊張が頂点に達しようとしていたその時――。

「なにやっつてんだ、セイザル、アスカ」

わたくしを買った男であるレッドが、野次馬をかき分けて場に入ってきたのです。

「リーダー！ ちょっと待ってくれよ！ レッドリー……」

セイザルが彼の名と役職を言うより早く、レッドの拳が顔に飛び、いえ……めり込みました。男は受け身も出来ず、地面へ勢いよく尻餅をつきます。

「まってください！ 俺にもじじよ」

レッドはセイザルに馬乗りになると、両腕を用い、連続して打撃を叩き込みます。

……先ほど見た、女性とセイザルの光景とまるつきり真逆です。

「はっ……はっ……はっ……」

わたくしが助け起こし、肩を貸している女性が、その様子を見てうつとりと微笑むの  
が見えました。

「……セイザル、オレ、前に言ったよな?」

レッドが殴る手を止め、地の底に響くような声で話し出します。

「『もうこう言うの止めにしよう』って。

『やりたい放題していたら、誰にも助けて貰えなくなるぞ』って」

「げど……」

口内から血をこぼしながら、セイザルがもごもごと反論します。

「そんなやぐそぐ、だれが、まもつてるんだよ……」。

りやくだつても、すきにつかえるおんなも、あるから、みんな、ごんなクソみたいな、せい  
いがつ、がまんできているんじゃないかあ……」

……まとめると、セイザルはこう言っているのです。

『略奪と、物みたくに扱える女が居るから、このような生活に耐えられる』のだと。

「……イライラは、女じゃなく敵にぶつけろよ。」

分かったな? 分かったよな? ……子どもじゃねえんだからとつと返事しろ!」

レッドは片腕だけで無理やりセイザルを起こすと、ふらふらしている肩へ手のひらを  
叩きつけました。乾いた衝撃音が辺りに響きます。

「は……いい……」

なんとかそれだけ答えたセイザルは、逃げるように野次馬の方へよたよた歩いていき、人ごみに紛れて見えなくなってしまう。

「……嫌なもん見せちゃったな！ ごめん、アースカ！」

レッドは人が変わったように朗らかに、短い赤の髪をかきながら、わたくしへ声をかけてきます。

「紫姫様と遊んでたのか？」

そうかそうか、2人とも気品あるもんな、話も合うだろう……。

でも、オレから離れたら危ないぞー」

彼は真つ直ぐこちらに向かって歩いてきます。

「――帰ろう、アースカ」

そしてにこりと笑って、手を差し伸べてきたのです。

……男を殴って真新しい血に塗れたままの、その手を。

「おっ、わりいわりい。手が汚れてたな……」

レッドは黄土色の固い布ズボンで手を擦りますが、血はなかなか落ちません。

「わっ、わたし……」

現在進行形で、肩を貸している傷ついた女性を横目で見ながら、レッドに返答をしま

す。

「この人、怪我してるから、安全な場所まで送り届けてから、帰ります」

「……ふーん。そつか！　じゃあまた後でな！」

レッドはほかんとした顔をしてから、歯を見せて笑うと、くるりと身をひるがえして帰って行きます。

「バイバイ」とでも言うように、手をふりながら。

「あの、メディアさん……」

「場所を移しましょう。ここは人目が多すぎますから」

傷ついた女性を連れて、わたくしとメディアさんは、レジスタンス幹部の家から、更に奥の道へ歩いていくことになりました。

道をひたすら進んでいくと、要塞の最果てにたどり着きました。

果てである巨大な壁は、天井のある上方向へ湾曲しており、その下には、分解された機械やゴミが積み重ねられ、小山となっていました。

暗闇とガラクタの合間に、1階建ての、倉庫のような雰囲気のある建物があり、メディアさんがその扉を横へ開きます。

「むらさきひめさまだー！」

「はい、こんにちは。リーシエ」

扉のすぐそばに控えていた5歳くらいの少女が、メディアさんへ抱きつきます。

「紫姫様！ ああ……訪ねてきてくださるなんて……」

リーシエの身内と思わしき老婆もやってきて、神にすぎる人のように手を合わせて拝み出しました。

「その……アルダのことで……」

メディアさんが老婆の耳へそうささやくと、言われた方は顔色を青く変えました。

「また……ですか」

「治療をしたいので、奥のお部屋を貸してください」

「はい、紫姫様……」

リーシエ、大人の話をするから、家に帰っていないさい」

老婆は少女を遠ざけると、案内を始められました。

「……」

わたくしが肩を貸している女性が、話の中に出てきた「アルダ」なのでしようか。彼女は下を向いたままで、依然として無言です。

「……」

そんな彼女と歩きながら、わたくしは建物の中の様子に目を向けます。

だだっ広い空間を、布やトタンで仕切つて部屋にしているらしく、複数の家族が一つ屋根の下で暮らしている様子がうかがえました。

廊下には洗濯物がぶら下げられ、あちこちに缶詰めやレーシヨンの袋が転がっています。

人々は、見慣れぬ存在であるわたくしを目に移すと、逃げるように小部屋へ戻っていききました。

……とても鬱々とした雰囲気です。

「アスカさん、彼女を……アルダを……この布の上へ」

「はいー」

老婆も手伝つてくれて、女性を寝かせることに。

横たわらせた瞬間、アルダが震え始めます。

「もう大丈夫。怖いことなど何もありませんよ。」

ほら、水薬を……」

メデイアさんがどこからか細いガラス筒を取り出して、中身を彼女へ飲ませようとしていますが、それを彼女は手を小さく動かして、「待つて欲しい」との意を示しました。

「ねっねっ？ セイザル、どうなった？」

彼女の目だけが、別の生き物のようにギョロギョロと動いています。そこには、異様な輝きが見て取れました。

「あの……レッドに殴られて、逃げました」

わたくしは彼女の雰囲気呑まれ、思わず答えてしまいます。

「そう……ああ……いい気味……ぶん殴られたんだあ……女みたいに……」

アルダが歯を見せてにたりと笑った瞬間、メディアさんは口を塞ぐかのように水薬を与えました。

数秒も経たない内に彼女のまぶたがとろんと落ちて、寝息が聞こえ出します。

「……心も体も傷ついています。少し、眠らせてあげた方が良いでしょう」

メディアさんがそう呟いた瞬間、息を殺していた老婆が、涙をぼろぼろとこぼしはじめました。

「もう……無理です……こんな世界で生きていくことなんて……」

老婆を、メディアさんは優しく抱きしめました。

「大丈夫です。きつと、いつか世界は救われますから……」

だから、希望を信じて、信じて……」

「……世界が」

何かをこらえながら、老婆は言葉を振り絞ります。

「世界が救われるとき、私達みたいな者も、救われるんでしようか……」

その言葉に、わたくしもメディアさんも何も言えず、ただ老婆が鼻をすする音ばかりが部屋に満ちていきました。

「私が10年前、この要塞で目を覚ましたときから、この世界はこうでした」

女性、アルダのことは老婆に任せ、わたくしとメディアさんは建物の屋上にて、体育座りで並びながら話をしていました。

「法を敷いても意味をなさず、情は乾ききつて陳腐なものとされ、力のみが相手を従える術すべとされた世界……」

2人で見上げる空に、星などあるはずもなく。濁った空気とどこまでも闇の天井です。

「私はこのレジスタンスの人間へ力を見せ、私の『法』を守るようにと……脅し、ました。

無闇に暴力は振るわないこと、何事もまず話し合いから入ること、その他様々な『お願い事』です。

……如何に魔術師が人でなしと言われる者とはいえ、いたずらに命を傷つけ、奪う行



為は無意味だと知っていましたから」

わたくしは軽率に何かを言うわけにもいかず、彼女の言葉に相づちを打っています。でも、人の心を魔女である私に分かるはずありませんでした！ 人々は一夕いちゆうでは変わりませんね！

……みなさん、私の見ている範囲では大人しく振る舞っていますが、今日のセイザルのように、見えぬ所では力で自らの意見を通しています」

明るい声でそう話す彼女の心は、痛んでいるのか諦めているのか、わたくしには分かりませんでした。

「男が女を殴ります。女が子を殴ります。子が更に下の子を殴ります。

飢えた者が富んだ者を殴ります。殴られた者が殴った者を殴ります。

それ以外にも様々な形で、人々はお互いを傷つけ合い、軋んでいつているのです。

拳で。言葉で。道具で。」

「軋んで……」

「そして、それが今の世界なのですよ、アスカさん」

彼女のアメジストのような澄み切った瞳が、わたくしを見つめています。

「——それでもあなたは、世界を救いたいと思えますか？」

「あつ……」

問いに、答えられない。

(世界は……もつと単純だと、思ってた……)

良い存在と、悪い存在がいて、悪い存在にみんな苦しめられていて、悪いやつを倒せば、みんな解決……。

(でもそうじゃなくて、善悪はぐつちやぐつちやに掻き混ぜられている)

突然目の前に現れたセイザルは、大勢の人にとつては悪者に見えただろう。

レッドは、私にはとても優しくかったけど、セイザルを殺すほどの勢いで殴っていた。

セイザルに暴行された女性は、殴られる彼を見てせせら笑っていた。

殴られていた男は、殴られるだけのことをしたのだろうが、そんな彼に振り落とされたのは感情に任せた私刑じみたもの。

「世界って……血生臭いものなのですね」

ぐるぐる考えて、ようやく口に出せた言葉はそれだった。

「むらさききひめさまー!」

その時、下の方から声がしました。聞き覚えのある声、少女リーシエのものです。

「おくじようにもちあげてー! ラジオスキきたいのー!」

「はーい。少し待っていてくださいねー」

メディアさんはひらりと屋上から飛び降りると、また河鹿のように軽やかに一跳びで

戻ってきます。

色鮮やかなドレスで飾られた腕の中には、リーシエと、小さな機械が抱えられていました。

「ラジオ！ おへやじゃきけないの！ でもおばあちゃんは、そとでちゃだめつて」

「屋上は外ではないのですか？ リーシエ？」

「そとじゃないよ！ うえだもん！」

子どもらしい可愛い屁理屈の会話に、わたくしは緊張と考えで凝り固まった体が解れるような心地でした。

「おねえちゃんも、ラジオきこー！」

少女はメディアさんの腕から屋上に下ろされて早々に、持っていた機械をガチャガチャ操作し始めます。

「アンテナー……のぼしてー……」

銀色した細い棒パーツを指で摘まんで伸ばし、ラジオらしき小型機械をそつと床に置きます。

「しずかにしててねー……」

固唾をのんで見守っていると。

『……………ジ、ジジ』

雑音が聞こえ、その後から低い女性ボーカルの歌が流れ出しました。たぶん、ポップスと呼ばれるジャンルのものでしょう。

「リーシエは本当にラジオが好きなのですね」

「うん、そうだよ！　むらさきひめさま！

レジスタンスの人がながして『唯一の娯楽』？　だもん」

落ち着いたしっとりとした音も続きます。

「あたしのしってるうただ！　えつとね……」

リーシエはラジオに被せるように、綺麗な声で歌い出します。

歌詞の意味を知っているのか知らないのか、それはそれは澄んだ子どもの声で歌うのです。

それを、メディアアさんは腰をかがめてニコニコと見つめていました。

「おねえちゃんは、このうたしってる？」

「えつ……知らない……」

ロールプレイ  
お嬢様ぶつた口調を忘れ、思わず素の声と態度で答えてしまった。

「ふふーん！　このうたね、『恋の歌』なんだって！

うーんと……『恋に出会えて幸せ、あなたに会えて幸せ』とか、うたっているんだって。

おねえちゃん、こいしたことある？ それっていいもの？」

「……『恋』、かあ」

心の奥底に封じたはずの『それ』について訊かれ、照れくさくなつて体育座りの足の間に顔をうずめた。

「おねえちゃんも、おしえてあげるからうたおう！ こいのおうた！

むらさきひめさまも！」

少女に袖を引かれ、わたしもメディアさんもラジオの側による。

「まずは、えつと、こううたうの。あたいのまねしてね」

リーシエに導かれるように、わたしはか細い声で歌詞をなぞっていく。

恋の歌。あなたに会いたいと乞うその歌。

（世界を、救いたいと、心から思えるだろうか……）

喉を震わせながら思うのは、友達のこと。

（モモみたいに、心の底から、純粹なまでに世界を救いたいって……）

見えていなかった『世界の血生臭さ』について知った今……そんな風に思えるほど、自信は無い。

でも。

（こんな風に、誰もが澄み切った心で歌うことが出来るような世界になったら、いいなと

思うの)

この気持ちもまた、祈りなのだろう。

かつて、400年前のアルジュナが、わたし達の世界の幸せを祈ってくれたように。

(世界を救いたいと、いつか心の底から思えますように……)

わたしは恋の歌を紡ぎながら、自らへ祈っていた。

第82話 人纏まとう理性という肉は、本能という骨より剥むがれ落ちた  
終わり

## 第83話 境界線を越えたなら、二度と『綺麗』に戻れな

い

歌をすっかり覚えてしまうほどの時間が過ぎて、真夜中近くになったころ。

わたしもリーシェもメディアさんも、揃って「不用心」、「不注意」だと周りの女性達に叱られ、こつてりお説教。

でもそれも、清々しい気分を受け止めることができました。

メディアさんの「途中までお送りしますね」の提案にありがたのりながら帰路につく。

（ようやく……吹っ切れたかな。わたし、吹っ切れたの）

心に言い聞かせながら、レッドの部屋のドアノブに手をかけると。

「——おかえり、アスカ」

彼が扉を開けてくれました。

「起きていたん……いたのですね」

「うん。アスカが帰ってくるまで鍵閉めちゃいけないし、だったら起きているしか無い

じゃん」

部屋の中では、電球が弱々しく点滅しています。

「……」

わたくしの脳内で、大の男を殴り飛ばすレッドの姿がフラッシュバックします。

「……」

湧いてくる『暴力』への恐怖を押しとどめて、部屋に足を踏み入れました。

中をぐるりと見渡すと、今まではぼやけて見えていた、ゴミやらテキトーに置かれた家具やらが目につきます。

「アスカ、オレさ——」

「レッド」

「ん?」

わたくしは床を指差します。

「何か言いたいことがあるなら聞きますが、その前に、部屋の片付けをしましょう」  
彼はぼかんとした表情を浮かべた後。

「お前……本当に母さんみたいだな」

そんなことを呟きました。



「……オレの話、しなきやなどずーっと思つてさ」

ゴミを部屋の通路にまとめて出して、低い丸テーブルを挟んでわたくしとレッドは床に座っています。

「オレとアスカ、同じ上流階級だつて前に言つたよな」

「はい」

「……同じ名字だつてことも、言つたっけ」

「それは聞いてないです」

「オレも、ほにやらら・ピオーネなんだよ。上級都市『ピオーネ』じゃなくて、別の上級都市で暮らしてたんだけど……」

レッドは驚くべきことに、わたくしの親類に当たるらしい。

「住んでた都市が、レジスタンス『トコヤミ』、つまりここに襲撃されて、子どもも捕まつて、集められたんだ。」

……目の前にさ、オレも含む親達がズラツと並べられてて」

脳内に鮮明なイメージが思い浮かんでしまうのは、わたくしも同じ様な体験をしてしまつたからでしょう。

「レジスタンスの奴らが言うんだよ。『誰か殺した奴だけ、レジスタンスに入れてやる、

助けてやる』って。

オレ含む子ども達は怯えていたよ。お話や映画の中で、殺し合いは怖いものだった。知っていたからな。

でも、良い歳した大人達は、何言われているのか分かんないみたいな顔してた。

だって——」

レッドは強く歯ぎしりしてから、次の言葉を苦々しげに吐き捨てました。

「みんな、生きるのも死ぬのも、どうでもよくなっていたんだから!!」

彼は感情の行き場がないのか、やかんから水をコップへ注ぐと、荒っぽく飲み干しました。飲んだおかげで少し落ち着いたのか、ゆっくりと話し出します。

「……上流階級であり、多くの文書を読み漁っていた大人達は知っていた。

自分達が生かされているだけの生き物だと。

世界に未来などなく、資源が消費されていくだけだと。

死ねばすりつぶされて、何も残らないと。

……信望している女神リリス様は、人間を見捨てたんだと!

オレ達は人間という種の、いつか作られる標本や墓標の素材なんだって!」

彼は自分の感情が抑えきれなくなったのか、丸テーブルを拳で軽く叩きました。

「……だからさ、レジスタンスに『殺し合え』って言われて、ニヤニヤ笑い浮かべながら

安全圏から武器を投げ落とされたって……大人達は何もする気無かったんだ。どうでも良かったからな。

「だから、別の部屋から知識少ない中流階級が連れてこられて、無理やり殺し合いにさせられたんだ」

脳内に、陰惨な光景が思い浮かびます。

血と悲しみがまき散らされた狭い部屋、逃げるわけもなく殺される人々。

「中流階級と、下級階級は世界の真実なんて何も知らないから、死にたくない一心で殺した。」

上流階級は、それをぼかんとした間抜けな顔で受け入れてた。

オレは……」

部屋の電球が、彼の声を受けてかすかに揺れています。

「顔に銃向けられて、とっさに相手を蹴ったよ。」

生きたいとか死にたいとか考えてない、脊髄反射的な行動。

それで相手の銃の動きがおかしくなって……暴発で相手が死んだ。

すぐく、あつかなかった」

わたくしは相づちも打つことなく、ただ彼の言葉に耳を傾けていました。

「相手が落とした銃をオレが拾うと、中流階級や下流階級の大人達が怯えて、先に殺そう

と群がってきた。

オレは何も考えず引き金ひいて、反動で転がりながら、たくさん撃った。無我夢中だった。

んで……気がついたら、オレとオレの父さん母さんだけが生きてた」

わたくしは、自分のズボンの布地をぎゅつと握りしめます。

「レジスタンスの奴ら、安全圏から見下ろしながら、オレの行動に引いてたよ。

なんでだろうなあ！ ははは……。

『残ったのはお前達だけだ。最後のひとりだけ助けてやる』と言われて、オレ、『助ける条件が変わってんじやん』って内心爆笑してただけだ。

……で、母さんと父さんの顔を見たんだ。

生きてるけど、生きてるだけの顔してて……撃ち殺して、オレはレジスタンスの一員になった。

その後はつまらないから割愛すつけど、ロボット乗るようになって、才能あつたせいで、ロボット部隊のリーダーになって、いっぱい都市滅ぼしたし、たくさん人殺した。

紫姫様来てからは、ちよつとましな現状になったけど……話す意味はないな。

はい、オレの話おしまい」

……数分間、お互いにたつぷりと沈黙し……わたくしから口を開きます。

「どうして、過去を話してくださいましたの？」

目的も無く、話していいような過去ではないと感じ取っていました。

レッドが己の短い頭髪を指でかいてから、口を開きます。

「アスカのこと、綺麗だなんて思ってたさ。」

この場合の綺麗って、見た目のことじゃなくて、人を殺してないって意味な」

彼はほっぽつと言葉を続けます。

「オレとアスカ、同じ上流階級で、同じピオーネ性だったのに、オレは人殺しで、アスカはそうじゃない。」

前にさ、『自分も人殺し』みたいなことアスカ言ってたけど、それ考えすぎだな。自分の手で殺してないことくらい、オレみたいな人殺しから見れば分かるよ」

強い後悔を、「考えすぎ」だと他人に断じられて、ムカつきましたが……心のどこかが楽になってしまっている自分もいたので、沈黙を貫きました。

「……多分オレにも、アスカみたいな道があったんだろうなって思ったら、話したくなかったんだ。」

というより、人間オークションで見たときから、そう思っていたから」

床を見つめながら、そんなことを言っているレッド。

「……なあ、どうしてアスカは、人も殺さず外の世界に逃げてこられたんだ？」

どうしてアスカの手は綺麗なままなんだ？」

彼の眼差しが、じつとわたくしの手に注がれます。

「それは……」

ああ、今日は答えられない問いばかり投げかけられます。

人を殺さずにすんだ理由など、それは――。

「ああ、そっか。アスカはきつと心が強いんだ」

「えっ？」

彼の唐突な言葉、わたくしはつまずくような心地になります。

「オレは、相手を殺すって楽チンな手段ばかり取ってきたから、きつとすぐに殺してきちゃったんだろうな。」

セイザルのことだって、口で言えば良かったのに、楽だから殴ったんだ。

そっちの方が、手っ取り早かったから……」

ぱつとレッドは顔を上げ、わたくしを見つめます。

「アスカは、楽な手段取らないでくれよな。」

今の世界で楽な手段って、きつと手が汚れることだから」

彼は言いたいことを言いたいだけいうと、掃除した床に寝転がります。

「口が疲れた。アスカもオレのつままない話聞かされて疲れたろう。」

もう寝ようぜ」

わたくしも怖々と床に寝そべります。

「……オレとアスカ、同じだと思つてたけど、全然違つたや。

オレみたいな人殺しと同じ扱ひしてごめんな」

そんな声を聞きながら、わたくしは目を閉じ、深夜過ぎの休息を取ることになりました。

「……お休みなさい」

彼へ背を向けて、薄い毛布を被り、そう呟きます。

(上流階級が、破滅的な遊びに耽溺していたのは……何もかもを諦めていたから、どうでもよかつたから……)

自らの階級に起因する真実に胸痛めながらも、眠りへ入りました。

——夢を見ました。雪と氷の夢です

美しい戦乙女フルキュレと、そんな彼女と恋に落ちてしまった、戦士であり王のお話。

いつか読んだ昔話……ブリュンヒルデとシグルドのお話です。

そして、夢の中、深雪を踏みながら針葉樹林の合間で美しい2人は踊ります。

姿は、ずいぶん前に出会つたアンドロイド2人とそっくり。

なぜかわたくしは、その様子をどきどきとしながら盗み見て……ふと、違和感を

覚えてしまうのです。

シグルドの胸の辺りが血まみれで……そこに、あるべき臓器がない。

心臓が、無いのです。

「あつ……」

思わず声を上げてしまったわたくしの首を、何か貫いて……ほんとゴム鞠のように高く飛ばしました。

「アスカ、起きて。アスカ……」

レッドの声で、悪夢から目覚めます。

「でも、起きるときは静かに……」

薄い毛布の中から身を起こし、真つ暗闇の中で瞬きを繰り返します。

外から何か……聞こえるような。

「静かにしててねー……」

彼の指示に従い、息すら殺していたら、放送音声のようなものが部屋の外から流れ込んできました。

『あーあー……聞こえますか人類のみなさん。』



いえ……リリース様の慈悲もなく、荒野をさ迷う哀れな生き物さんたち  
その口調には、嫌な既視感があります。

『僕は……格好いい格好いい、ヴォイドメロディ・キルロード君だよ。』

上級都市ピオーネを襲った、主要三組織の内の一つ、「トコヤミ」の排除のため、やってきました』

頭の中でピースがかちりとはまりました。

『君達は、女神の所有物を持ち去り、汚し、貶めた。』

それは……道徳的に考えて、許されることじゃ無いんじゃないかなあ』

青年は、理屈と理由を淡々と並べていきます。

『だからこそ、格好いい格好いい僕が、君達を殺します。』

奪われた資源の補填のためにも、君達が殺した人々の復讐のためにも。

……道徳的に、考えたからね』

レッドが唾を飲む音が聞こえました。

『うんだから、同じように、殺戮と略奪を仕返します。抵抗は自由になさってください。』

えっと……レジスタンスのみなさん、さようなら？ お休みなさい？』

放送が唐突に途切れ、遠くから連続した悲鳴が続きました。

「レッド、いまのって……」

「人殺し特化のAIが報復にやってきたんだ。

……でも、移動要塞であり、特殊迷彩機能をもったこの『ハデス』を見つけるとは」  
暗闇の中で、レッドが立ち上がる気配がします。

「定石通りなら、敵はドローンとロボットで攻めてきているはずだ。それならまだオレ達のロボット部隊で殲滅できる。

だから……アスカはこの家で隠れていてくれ」

そう言い残して、彼は闇の中をさっと歩いて廊下へ出て行きました。

『要塞内の全員へ告げる！ 我らレジスタンス「トコヤミ」は、徹底抗戦の姿勢を貫く！

総員戦闘準備！ 非戦闘民は頑丈な家屋に待機か、最寄りのシェルターへ——』

それ以外言いようのなかったでしょう。毒にも薬にもならないレジスタンス側の避難放送が聞こえてきました。

けれど、わたくしの胸に浮かんだのは別のこと。

「……あの人達、大丈夫かしら」

要塞の端にあつた、あの倉庫のような低い建物のことを思い出します。

電波すら満足に届かなかったあの場所に住んでいた人々……老婆や少女、傷ついた女性や沢山の家族達は、この未曾有の危機を前に無事でいられるのだろうか。

どこかに避難するにも、現状を正しく伝え、手助けをする必要があるんじゃないのか。「……じつとしては、いられない」

わたくしはレッドの言いつけを破って、闇に包まれた部屋の中をさつと歩くと、手探りでドアノブを探り当て、不気味なまでの静けさと悲鳴が入り混じった外へ出ました。

第83話 境界線を越えたなら、二度と『綺麗』に戻れない  
終わり

## 第84話 暗く燃え、音が響くなら

廊下に出してあったゴミ山の中から、ペンを見つげ出し、続けて適当な大きさのボードを引っ張り出す。

それに書き置きをして、扉の前へ出しておきます。

『レッドへ。』

「ごめんなさい、言いつけを破ります。要塞端の平屋へ、女性達を助けに行つて来ます」  
敵に読まれる可能性も考えましたが、レッドがわたくしを心配し、探すことなど無いようにしておきたかったのです。

「外の……様子……」

闇に包まれた町を照らすのは、誰かが付けた火。

集合住宅の3階廊下から見えた景色は、あちこちの家屋から火や煙が登り、ガスが大気を濁らせている絶望的な光景でした。

（密閉空間に火が回ったら……！）

要塞都市の換気機能がどれほどのものなんて、わたくしは知りません。

このままではみんな焼け死ぬか、その前に一酸化炭素や有毒物質で中毒を起こして気を失うか、それとも、攻めてきた『ヴォイドメロディ』なるAIに殺されるかの3択です。

(近くの人はどうしています?)

隣部屋や下の階から気配は感じず、しんとしています。もう避難したのでしょうか、そうだといいのですが……。

(逃げたと信じるしかありません。今は彼女達の下へ行きましょう)

とにかく先を急ぎました。

一昨日、レッドとラーメンを食べた大通りは、逃げる途中に捨てられた荷物やゴミが散乱し、和気藹々としていたあの場所とはまるで別の雰囲気です。

露天などもそのまま。人に踏まれたアクセサリーが壊れ散らばって、火を反射し、道へ煌めきを添えています。

場違いなほどに、美しい光景でした。

「誰か……いませんか?」

要塞都市の中心であるはずなのに、敵の姿も味方の姿も発見できず、聞こえるのは遠くからの悲鳴だけ。

「敵が見えませんが、その方が良いに決まっています。」

ともかく、あの場所にたどり着かないと……」

不安からか独り言が多くなってしまします。

わたくしはメディアさんに案内された道を思い出しながら、目的地へ向かいました。

「誰ですか?!」

「わたくしです、あによ……昨日メディアさんと共にアルダさんを運んだ者です！ 名前はアスカ！」

平屋建ての扉へ近づいた瞬間、中から敵意ある鋭い声で問われました。

舌を噛みながらも自らの立場を明かし、『敵ではない』ことを伝えます。

「きのうあった、おねーちゃんのことだー！」

扉の内より聞こえるのはリーシエの声。

「……どうぞ。中にお入りください」

スライドで開かれた扉へ、作業服を着た体を滑り込ませます。

わたくしとやりとりをした女性は、外の様子をうかがってから、素早く鍵をかけ直しました。

「おねーちゃん、どうしてきたのー?」

リーシエや、周りでおろおろとしている女性達の姿を見て、すぐに分かりました。彼女達は現状を正しく認識できていない。

「皆さん、避難放送は聞きましたか?」

「え? いいえ何も……」

カーテンの様な布を服とした女性が答えてくれます。

「ただ、火事が起こっていることは分かったので、煙を吸わないよう、消火されるまでの間、室内に避難していきましょう……」

「そうですか……」

わたくしはその女性へ、この建物に住む人全てを呼ぶようお願いをして、集まってきた彼女らに、今この要塞都市で何が起きているのかを簡潔に伝えました。

「——ということです。」

皆さん、ここにいたら死んでしまいます。わたくしと一緒に避難しましょう」

「でも……」

目の前に立つ約30人は、決断できないのか迷いを見せます。

リーシエ含む子ども達が、不安そうに大人の服の裾にしがみついています。紫姫様がきつと……みんなを助けてくれるもの……。

だからここに居なきや……姫様に助けてもらえるように……」

祈りのように絞り出された女性の声に、他の方々もうなずき返します。

「だよね。ここにいないと……」

「ここは要塞の端だし、敵も火事も来るはず無いし……」

「逃げたとしても……何も良くならない……」

みな、自分に言い聞かせるように口へ出しては、誰に向けるものでもなく首を振っています。

「……っ」

言葉だけでは彼女達を動かせないと分かったから、わたくしは唇を噛みながら、拳を握りしめてしまいます。

それこそ……レッドやセイザルのように暴力に訴えるか、メディアさんのように、能力と信頼で心を動かすしかないのでしょうか。

(この人達も……生きるのを諦めてしまっただろうか……)

暴力に耐え、外は危ないからと同性同士で閉じこもり、「誰か助けて欲しい」と涙をこぼす。



……もちろん、彼女達が悪いわけではない。

『この世界』が、彼女達から「逃げよう」という生きる意志まで奪い去ってしまったのだ。だから、明らかな危機が迫っているというのに動けない、震えることしかできない。

「……それでも」

わたくしに力はない、メディアさんのように魔術が使える訳でもない。

モモのように、純粋なまでに一所懸命な心も持っていない。

「それでも！」

今までの自分なら、ここで大多数の意見に流されて、なあなあで済ませていたかもしれない。

……かつて地下都市で暮らしていたころ、『上流階級である』という理由だけで行われるクラスメイトからの嫌がらせを、ただ受け流していたように。

「生きるために——ここから逃げないと！」

自分でもびびくりするほど大きな声が出て、薄い仕切りしかない部屋にビリビリと響きました。

「ア、アスカさん。落ち着いて。ここにいれば安全……」

わたくしの肩を掴んで、座らせようとしてきた女性へ訴えかけます。

「安全じゃないんです！ 火はすぐに回つてきます！ 敵の姿は見えないけど、近くま

で来ているかもしれない！

入り口が一つしかないこの建物では、敵がやってきたときに素早く逃げられない！

だから！ 逃げる……必要が……」

馴れないことをしたせい、それとも吸った火事の煙のせい、激しくせき込んでしまった。

「……逃げるって、言ったって」

わたくしの提案を聞いて、人々がお互いに目を合わせます。

「シエルターに逃げて……逃げた先に敵か誰かいたら、そいつらに何をされるかわからないじゃない……！」

自分の体を抱きしめ、さめざめと泣く女性達。

その時声をあげたのは……リーシエでした。

「あー、おねーちゃんについてく。」

だって、おねーちゃんはずついてもないと、おもうもん」

人々へ伝えた後、わたくしの拳に手を振り、固く力を入れていた指を解いてくれました。

「それに、なにかあったら、リーシエがみんなをまもるよ！

おばあちゃんもおかあさんも、そうしてくれたもん！」

幼い彼女の微笑みを見下ろしながら、わたくしは皆さんへ声をかけます。

「わたくしも、リーシエと同じように皆さんを守ります」

気休めな言葉かもしれないが、そう励まさずにはいられなかった。

「ここから出るの？ わたし達……」

まだ不安な顔をしている人が多いですが、全体の意志は変わり始めていました。

「……ここから、逃げてみよう」

誰かがそう言い出して、何人かがうなずくの見えました。

「大切なものだけ、少量を持つようにしてください！ 全員点呼してから、シエルターへ移動をします！」

わたくしは学校で行った避難訓練を思い出しながら、建物に住んでいた女性達へ呼びかけます。

子どもも大人も老人も、わたくしが数え、名前は知り合い同士で共有してもらおう。

こうして、自分含む31人での避難が始まりました。

煙を吸い込まないよう、口元に濡らした布を巻き、子どもは大人が背負って移動を早くする。

「それにしても……アスカさん、あんなに啖呵を切っておいて、シエルターの場所を知らないだなんてね」

「ごめんなさい……」

わたくしは昨日会話した老婆、リーシエの祖母である『エルナ』と道順を確認しながら歩いていました。

彼女は白髪交じりの頭を揺らしながら、先を進んでくれている。

「でもいいよ。私が知っているから」

避難は不気味なほど順調です。

都市の縁、捨てられた家具や家電、よく分からない機械が積み上げられたゴミ山にも、敵の姿はありません。

「シエルターがどういう仕組みになっているかはご存じ？」

「いいえ……」

「箱型になってて、人が入るとそれごと最下層まで降りるんだ。

んで、外に逃げ出せるよう、小さな車に変形するんだと。

ただめったに使わないから、レジスタンスの幹部やらが倉庫にしているとかも昔に聞いたね」

「へえ……」

「外なんて……生きている間に行くとは、思ってもみなかった……」

苦勞が忍ばれる顔で、遠くを見つめるエルナさん。

「ふう……みんな、着いたよー!」

わたくし達31人の目の前に、誰も入っていない様子の、長方形で灰色の箱が。

車輪も見えず、とても車に変形するとは思えませんが、今はエルナさんの言葉を信じるしかない。

「――よし、わたくし含め31人、全員居ますわね」

怪我もなく、パニックになつてゐる者もない。

女性達は、未使用のシエルターが見つかつたことでほつと肩の力が抜けたのか、ぎこちなく笑顔を浮かべていました。

後は、開いて中に入るだけ……なのですが。

「なんだ、これ……」

エルナさんがボタンを操作して開けた瞬間、中から大きな涙型の物がたくさん倒れてきました。表面は青くつるつるして、人が入れるくらいのサイズです。

「やっぱり、幹部の奴らが倉庫にしてたか……」

誰かの苦々しげな声が聞こえます。

「移動させなくては……」

わたくしも思わず愚痴のようなことをつぶやいてしまいました。これを退かさなければ、とても中に31人も入りません。

「ゴミ山の方に寄せよう！」

「そつちを持ってー！」

子どもを背中から下ろした大人達が、総出でそれを転がして横へ除けます。

「うん？」

わたくしもみなに協力して運びますが、形に見覚えが……これは！

（アーチャー961が拘束された後、入れられていた棺……？）

思い出したのは嫌な記憶でしたが、欲しかったものでもありません。

あれもたしか尖った涙形で、表面は光沢があつたはず。

似ているというより、その物だ。それが何本もシエルターの中からゴロゴロ運び出さ

れている。

「……まさかー！」

思考が高速で回り、今までの旅で見たもの、聞いたものの中にあつた、あらゆる情報の断片が噛み合っていく。

（サーヴァントは、棺の中で見つかるか？）メデアさんは言っていた。

上級都市では、サーヴァントを棺に入れて管理していた。

そして、レジスタンス『トコヤミ』は都市から資源を奪った……  
地面へ無造作に転がされていく棺達へ目を向ける。

「まさか、この中にサーヴァントが入っている可能性が？」

被せられた青い蓋は、不透明な素材で作られていて中は伺えない。  
でも、もしこの仮説が正しいのだとしたら。

(アーチャー961だって、この棺のどこかにいるかもしれない)  
わたくしは、思わず手近な蓋を開けそうになり――。

「おねーちゃん！ シェルター、はいれるようになったよ！」  
リーシエの声で我に返る。

振り向けば、30人全員がわたくしを心配そうに見ていました。  
「はいつてー！」

続々とシェルターの中に入っていく人達と、呼ぶリーシエの声。  
「え、ええ。ちよつと待つてくださいいね」

少女の声に惹かれるように、足を踏み出した瞬間。

「はあ……なるほど。そうやって資源を隠して、逃げていたのか。  
それって、道徳的にどうなんだろう」

若い男の声が、上空より降ってきました。

「おねーちゃ……」

リーシエをシエルターに押し込んで、全員、つまりわたくし以外が入っていることを確認し、シャツターの取っ手を掴んで降ろしました。

響く物々しい音は、内鍵がかかる音でしょう。

エルナさんが言っていた通りであれば、これで内側からしか鍵が外せない状態となつたはずです。

仕掛けが作動すれば、シエルターは要塞の最下層まで降りていき、外へ皆さんは逃げられる。

「行動が速いなあ。それって、君の道徳的に考えたってことかな」

声が降ってきた方向へ顔を向けると、ゴミと瓦礫の山の上に、紺色の男子学生服に身を包んだ誰かの姿が見えました。

「あなた、誰ですか」

「放送したんだけど……まあいいや、もう一回するね」

目にその存在をはっきりと映します。

桃色のさらさらとした髪をマツシユルームヘアにした、瞳の大きい、どちらかと言えば幼さ残る愛らしい顔をした少年です。

彼は立ち上がると、気の抜けた声で話し出しました。



「僕、人類を応援する都市運営システムの1体。

反逆者殺戮専用。格好いい格好いい、ヴォイドメロディ・キルロード君だよ」  
人の形をとったAIが、殺戮を宣言しながらわたくしの前に立っている。

「そう、なのですね」

……即ち、絶体絶命ということですよ。

第84話 暗く燃え、音が響くなら

終わり

## 第85話 わがままガールになつちやえ

「都市運営システム、人類を管理している存在、ですか……」

冷や汗が首裏を伝うのは、かつて出会ったアイン・エーテルウエルに、手も足も出なかったことを思い出してしまったからでしょう。

「うん、よく知っているね、女の子。」

でもまあ、僕がどういう存在であるかは、今はどうでも良いんだ。

今大切なことはね、放送で伝えた通り、奪われたものを取り返しに来たんだってこと。そして……正当な復讐を遂げにきたということ」

「復讐……?」

人間がAIに復讐するなら理由が思い当たるが、その逆とはいったい……。

「だってね、君達レジスタンスは仲間を殺し、リリス様が世界を救うために作った軌道工レベーターを破壊、大勢の人を殺した。」

それは、道徳的に考えれば考えるほど、許されることじゃないね」

「違う……いや、違うないけど!」

軌道エレベーターを壊したのは、このレジスタンスじゃ……」

レッドから聞いた話が正しいのであれば、『リリスの蛇』という兵器が地下都市ごとそれを破壊したはずなのに。

(AIですら、何が起きているのか正しく認識できていないの……?)

わたくしは困惑の会話を続けながらも、ちらちらとシエルターの様子を見ます。

灰色の箱は、入り口を固く閉ざした状態で依然としてそこにあり、下へ降りていく気配はありません。

「シエルター、うまく仕組みが動いてないみたいだね」

「そんなことありませんわ……直ぐにでも作動して、中の彼女達は無事に外へ……」

「それって——」

少年は制服の裾を熱風にはためかせながら、瓦礫の上を牡鹿のように軽やかに降りてきました。

「道德的じゃない、よねえ?」

地面が、いえ、少年背後の瓦礫の山が揺れ、動き出します。

飛び散る金属ゴミから垣間見えるその姿。

機械の多脚が要塞の床を引っかき、巨大な尾が煙混じりの大気の中に揺れる。

その形は、まるで。

「機械化サーヴァント、その形と力は『蠍座』を示す」

ヴオイドメロディ・キルロードは、尊いものを称えるかのように、機械化サーヴァントを両腕を広げ仰ぎます。

大きさは5 mほど。キチキチと鳴きながら、金属製の6本足の先で地面を削り、巨大な2つのハサミと、1本の尾を見せびらかすように動かしていました。

少年はわたくしに語りかけます。

「僕は妹のメルティと違って、人間を道徳的に殺したいんだ。

撃つたり切つたりして殺すのは……道徳的じゃないからね」

「道徳的に殺すって……」

「おや、サンプルが見たいのかな」

少年が機械のサソリに命じたのでしよう。機械化サーヴァントは、瓦礫の中から何かをほじくり出し、ハサミの先に摘まむと、地面へ丁寧にずらずらと並べていきます。

「人……」

思わずわたくしの口から出た言葉。

それは、この要塞に住んでいたありふれた人々でした。

みな、緊急事態だというのに瞼を閉じており、顔にはうつすら笑みすら浮かべてもいません。

「ねえ……女の子。この人達、眠っているみたいでしょう」

「え、ええ……」

「触つてごらんよ、冷たいよ？」

「?!」

わたくしは、横になっていいる人達を食い入るように凝視しました。

呼吸はなく、身じろぎもなく……眠るように死んでいる。

「蠍座の機械化サーヴァントの分泌した毒が、一切の恐怖無く、痛み無く、彼らを道徳的に殺したんだ。」

その証拠にほら、みんな安らかな笑顔だろう？」

「う……くっ……」

歯を噛みしめたのは、吐き気と怒りがお腹の中を駆け回っているからです。

わたくしに語りかけているAIは、心の底からこれが道徳的な殺し方だと信じているのでしょうか。

「物資も娯楽もない外の世界で生きていくのは、とても苦しいこと。」

だから、せめて最後は安らかに送ってあげないと」

蠍座の機械化サーヴァントは、AIの意見を肯定するかのように尾を揺らしています。

「——これって、とつても道徳的じゃないかなあ」

言い返している余裕なんてありません。

「ううー！」

シエルターは依然として下に移動はせず、わたくしが後ろ足で蹴ってみても、うんともすんとも動きません。

「女の子、君を殺した後は、シエルターの中の皆さんも送つてあげないと」

「そんなことさせません……！」

「今僕に殺される以上に、良い未来つてあるのかな？」

他のAIに見つかればもつと苦しく死ぬだけだし、君だつてシエルターに入れなければ、有毒ガスや一酸化炭素の中毒で死ぬだけだ」

わたくしは目だけを動かして、手だてを探します。何かないか、何か——。

「うん、時間切れ。代替案が無いのなら僕の案を通させてもらおう」

サソリの尾が真つ直ぐわたくしを狙い、振り下ろされます。

「……あつー！」

地面に転がつて、奇跡的にそれを回避。頬に砂が付きました。尖った尾の刺さった先は、シエルターから運び出した棺コフィンです。

……中身ごと完全に貫通しています。

「君、これを見た瞬間顔色が変わったね。何か大切な物でも入っていたのかな」

少年はサソリに指示を出し、次から次へと、それを刺し貫いていきました。

「やつ……やめて……」

金属が特殊なプラスチックを砕いていく音は、シエルターの中にも伝わっているのではないかと思うほどの衝撃です。

ガンガン、ゴンゴンと響く音。

「うん。安心して。中に入っただけでもどうせサーヴァントだし、棺の中は空っぽだ」

尾が勢いよく振られると、棺がすっぽ抜け、瓦礫と廃墟にぶつかって粉々になります。散らばっていく青の破片は、煤と闇に満ちた空間に煌めいて……。

「サーヴァント達はどうかやら、保存の仕方が悪くてみんな消滅したらしい」

「消滅……」

『やはりあの棺は、サーヴァントを保管していたものだったのか』と思うのと同時に、逆転の手札になるかもしれない存在が、失われていたというショックが全身を襲います。

「あーあ、これだからレジスタンスの奴らは好きじゃないんだ。

知識が中途半端だから、資源を無駄にするし、無駄に生きようとする。

これほどのサーヴァント資源があれば、沢山の人を生かすことが出来たって言うの

に」

「生かす……」

「うん。リリース様が生かし、我らAIが養育している地下都市の人々のことだよ。

……あれ以外の人間など、本当は生きてちやいけないんだ。

地下都市の彼らは良い。適切な量の資源で生きているし、繁殖も管理できる。

何より……彼らは、死ぬべき時に死んでくれるもの」

わたくしはよろめきながら立ち、少年の姿をしたAIを見つめます。

「それが……都市運営システムの本音、ですか」

火災のせいで発生した風が、わたくしの黒髪を乱し、熱で毛羽立たせていきます。

「本音というよりは」

相手の声は、遠くから聞こえるような感じ。

「これが、今の世界の常識ってことだよ、女の子」

でも、そんなことどうでも良くて、わたくしの喉から出たのは……。

「——もう、たくさんだ！」

心からの声でした。

「地上の世界では、暴力がまかり通り！ みんな下を向いて過ごし！ ただ死なないこ

とだけに心を裂く……！



地下の世界では、生きるのも死ぬのも管理され、それに疑問を持つことすら許されず、飼い殺しにされる……!

これが人間のリアルだって? これが世界の本質だって?

だったら——それも含めて救ってやる!

大気の熱で喉が焼けていくけど、わたくしの思いは止まらない。

「今の世界が……人間が生きたいと思えない世界なんだとしたら、人間が獣のようにならなくては生きていけない世界なんだとしたら……わたしが変える、変えてみせる!」

「突然どうしたんだい? ああそうか、気が触れてしまったんだね、可哀想に」

サソリの尾が迫るけど、目を閉じない、後ずさりもしない。

だって、わたくしの後ろにはまだシエルターがある、『守る』と決めた人達がいる。

もう自分の心を裏切りたくない、自分の気持ちを見過ごしたくない。

「だから、だから——わめくしかないわたしに! だれか力を貸して!」

……理論も気持ちもむちゃくちゃなまま、生涯最後になるかもしれないわがままを言った。

「可哀想な女の子。道徳的に、殺してあげる!」

そしてサソリの毒滴る針が迫り、視界は闇に包まれる。

でもなぜか、心臓だけはじくじくと熱を持ち続けていたのです。

「——はい！ 喜んでお貸ししましょう！」

少女の声。そしてわたくしの光彩を焼く虹色の閃光。

光の中へ目を凝らすと、長身の女性が、サソリの尾を横から蹴り飛ばしているのが分かりました。

ひるがえる白のサーコート、揺らめく金のツインテール。

手には複雑な螺旋を描く翡翠の槍と——光をそのまま閉じ込めたような形を取り、輝きを放つ盾。

女性は蹴り攻撃の後、なめらかに着地すると、わたくしの方へ振り返り、花のような笑顔を向けてくれました。

「はじめまして！ 貴女の声で、冷たい棺より目を覚ますことが出来ました！」

シャルルマーニュ十二勇士が一人、閃光の魔盾持つ白羽の騎士、ブラダマンテと申します！

偉大なる我が王に代わり、正義を為すためここに！」

流星が輝くかのような存在感、大樹のようなどっしりとした安心感。

……間違いありません！ 彼女はサーヴァント！

「魔力のパスこそ感じませんが、貴女は私を目覚めさせてくれた人。

今この時より、貴女を仮のマスターと認め、脅威を掃うべく戦いましょう！」

——指示を、マスター——

彼女は再び敵であるサソリと少年に向き直り、槍と盾を構え、全身に気迫をみなぎらせています。

「……あの機械が、みんなを殺してる。壊して！」

「D, a c c o r d ! 指示のままに！」

突如現れ、しかも力まで貸してくれると言ってくれたサーヴァント、ブラダマンテ。

煙と闇と破壊に満ちた現実を裂いて、おとぎ話からやってきたような彼女の光と言葉を信じ、わたくしは敵をしつかりと見据えました。

第85話 わがままガールになっちゃえ

終わり

## 第86話 彼女は名は光、またの名を希望

「ブラダマンテ、あの機械サソリの尻尾に気をつけて！

先端から毒が出ていて……サーヴァントにも通用するかもしれない！」

「情報感謝です、マスター！」

わたくしに声をかけられたブラダマンテは、その深い青の双眸で敵を見定めてから。

「てえい！」

一息に跳んでいきます。

煤と黒色の煙に満ちた要塞の中に、彼女の動きを追って、武器より生まれた光の曲線が幾つも走っていく。

「迎撃を……」

ヴォイドメロディが機械サソリへ指示を出す声が聞こえましたが、それらはすべて無駄と終わりました。

「——えい、やー!!」

毒液を滴らせながら振り上げた尾も、強靱そうな外装も含め、ブラダマンテのキックからのかかと落として砕かれたから。

攻撃によって敵胴体に尾がめり込み、その勢いは殺されぬまま殺人兵器全体にヒビを入れます。

「光よー」

猛撃は止まりません。

続いて、ブラダマンテがヒビへ槍の穂先をねじ込むと、そこよりサソリの胴体に光が流し込まれて。

活動に必要な足も、ハサミも、あふれ出す光で内側から破壊され……一瞬にして、周りに散らばるガラクタや死体と同じ、物言わぬ残骸となり果てました。

「はいっ、撃破です！ 迅速に倒すことが出来ましたー」

要塞内部の火事からくる熱い風に吹かれ、金のツインテールを揺らす彼女。

頬に煤こそ付いていますが、戦闘を行った後とは思えぬ爽やかさです。

「……これが、サーヴァントか」

吐き捨てるようなヴォイドメロディの声。

わたくしも、AIと同じような感想を抱いていました。

これがサーヴァントなのです、人知を越えた存在……。

「あなたが、この機械化サソリを操っていた主ですね……って、えええ!」

ブラダマンテが後方にいたヴォイドに近寄った瞬間、そのアンドロイドの体が力なく

倒れました。

もの言わぬ人形となった相手。

(けれど油断は出来ない……)

かつて出会ったツヴァイ・エーテルウエルのように、体が破壊されたとしても再び現れる可能性を、AI達は持っているのですから。

「あれ？ 急にこの人ふにやつとして……じゃなくて、そもそも人ではなかったのですね……」

困惑している様子のブラダマンテに対し、わたくしは周りの安全を十分に確かめてから、瓦礫をよじ登って近づきました。

「強いのですね……ブラダマンテは……」

声をかけられた彼女は、不安そうな表情をしていました。

「……というより、相手が柔らかかったというか、妙な足応えでした。

まるでわざと私にやられたような……相手の考えが読めなくて不気味です」

槍を手にしながら、眉間にシワを寄せていた彼女ですが、一転して明るい笑顔を浮かべ、わたくしへ親愛の眼差しを向けてくれました。

「マスター！ マスター！」

私、貴女の名前をまだ知りません！ このブラダマンテに教えてください！」

「えっと……アスカ・ピオーネです」

「アスカさんとお呼びした方が？ それともアスカ様？ 殿？」

「呼び捨てで良いです。友達からも、そう呼ばれていましたし……」

「分かりました！ ではアスカと！」

彼女はわたくしの髪へ手を伸ばすと、灰と、それから頬をかきつかせていた煤を払ってくれました。

「アスカ！ ここにいるのか?! アスカー！」

拡声器越しの男性の声。誰かがわたくしを探しています。

「アスカ……良かった、無事みたいだな」

瓦礫と廃棄物の上を黒いロボットで慎重に歩いてきたのは、レッドでした。

ロボットが腰を下げると、コクピットの前面が鳥のくちばしのように開き、操縦席の彼が姿をのぞかせます。

「レッド、ごめんなさい、言いつけを破って……」

心配と迷惑をかけた彼に誤ります。

「いや、大人しく待ってろなんて言ったオレがバカだったよ。」

アスカは誰かが苦しんでいたら助けに行ってしまう、『綺麗』な女の子だもんな。

「そうだ、アスカが助けに来た女達って」

「シエルターに全員を避難させましたが、下部へ降りていく機能が上手く動いてくれない」

「そうか。ちよつと修理してやる必要が……」

会話の最中、レッドはわたくしの後ろに立っているブラダマンテに気が付いたようでした。

「そいつは?」

「……サーヴァントです。わたくし達の味方で、あそこで残骸になっている機械サソリも、彼女が倒してくれたもので……」

「サーヴァントか」

レッドがロボットに乗ったまま、ずしずしと歩き始めたので、慌てて横に移動しました。

彼は開いたままのkokopittから、ブラダマンテを見下ろしました。

彼女は5mほどのロボットに気圧されることも無く、真つすぐに声を出します。

「状況が逼迫しているようなので、短くご挨拶させていただきます!」

私はランサー。真名をブラダマンテ、シャルルマーニュ十二勇士の一人で――」

「お前、サーヴァントなのに番号を言わないのか?」



「え？ 番号？ クラスなどではなく、番号……ですか？」

彼女は口を小さく開けて、きよとんとした表情を浮かべていました。

レッドは言葉を続けます。

「サーヴァントには普通、番号があるだろ。配給される腕章にだって表示されてあるはずだ。」

それとも、質問の意味すら分かんない？」

「腕章……？」

レッドのその疑問は、サーヴァントを所持する機会があった、元上流階級ならではのものだったでしょう。

「ええつと……ごめんさい！ 腕章も番号のことも初めて知りました！」

当世の常識が、聖杯より上手く得られてないのでしょうか。

腕章は身に着けていませんが、まるで代りのように……

ブラダマンテは、サーコートの内側で隠れていた二の腕をこちらに見せてきました。「このような布が巻いてありました」

彼女が指差し、風で揺れるそれを、わたくしもレッドも観察します。

薄暗い要塞内でも分かるほどの、明るい紫色をした、花卉のような雰囲気をもつたリボン。

「綺麗な布だな。こんなに上手く染めてあるやつなんて、中々手に入るもんじゃない」  
レッドはそんな感想をこぼした後、コクピットから降りてきました。

ブラダマンテとわたくしの間を突つ切り、瓦礫の山を下つて、女性達が避難しているシエルターに向かいます。

灰色の箱の上下を眺め、手で触り、隙間に挟まった何かを取り除いたり、ボタンを操作したりすると。

「これでよし、だ」

シエルターは鈍い起動音を立て、ゆっくりと下層へ降りていく。

(避難の件に関しては、一安心ですわね……)

そんなことを思いながら、胸をなでおろしました。

「オレが直せる程度の故障で助かったよ。」

さて、アスカ、サーヴァントさん、オレを手伝ってくれないか」

「はい！ 喜んでお手伝いさせていただきます！」

わたくしの分まで返事をしてくれたブラダマンテに、レッドが言います。

「レジスタンスのお偉いさんの決定で、この要塞『ハデス』を放棄することになった。

んで、中にいる人間は全員逃げなきゃいけないことにもなった。

でも、怪我人と紫姫様の避難がまだ済んでいない。

オレは今から簡易病院になつてゐる場所へ向かい、避難の手助けに行つてくる。

……どうか手伝つてくれ」

わたくしとブラダマンテは目を合わせてうなずき合い、再びロボットに乗つたレッドの後に付いていきました。

生身では越えられないだろう瓦礫の海も、燃える町も、ブラダマンテに抱きかかえられていたらひとつ飛びです。

「ブラダマンテ、さん」

「敬称なく、呼び捨てで構いませんよ！」

「……ブラダマンテ、わたくし、重くないかしら」

「いいえ！ 小鳥のように軽いです！ マスターアスカ！」

そんな会話をしながら、わたくしは上空より要塞内部を眺めます。

破壊された家々、その間に転がっている人の死体、砕けた殺人機械達。

……いつか、どこかで見た光景にも思えます。

（せめて、生き残つてゐる人だけでも助けないと）

凄惨な光景を目に焼き付けてから、決意を胸に秘めていたら。

「もつと早く目覚めていればと、己を責めそうにもなりますが……せめて、今生きている人だけでも守り抜きたいと私は思つてしまふのです」

ブラダマンテの悲し気な声が聞こえてきました。

「……わたくしも、生きている人だけでも助けたいと思つています」

気持ちを同じくしながら、わたくし達はレッドの後を追つて向かいました。

昨日訪れたレジスタンスの建物は、野戦病院のような雰囲気に変貌を遂げていました。

部屋にも廊下にも、薄い布の上に怪我人が転がり、大人も子どももうめき声をあげています。

水薬や包帯をもつて走り回つていたメデイアさんが、やつて来たわたくしとブラダマンテに気が付いたようで、こちらに走り寄つて来てくれました。

「メデイアさん、お怪我はありませんか？」

「アスカさんも」無事でなによりです」

目の前に立つ彼女は、落ち着きが無いように辺りを見渡しています。

その様子には気にかかるものがありました、ひとまずは、頼もしい味方の紹介をす

ませてしまうことにしました。

「後ろに立っている彼女は、サーヴァントのブラダマンテです」

「サーヴァント？ そんなまさか。

レジスタンス『トコヤミ』が回収した中で、戦える状態のサーヴァントなんて、私くらいだったはず……」

「でも、ブラダマンテは突然現れ、わたくしを助け、機械のサソリまで倒してくれたので  
す」

メディアさんの瞳に、一瞬だけブラダマンテを疑う色が見えましたが、彼女はそんな自身の考えを払うように頭を振りしました。

「……サーヴァント、ブラダマンテ。クラスは？ 番号は？」

「そのう……番号は、分からないのですけど、ランサーのクラスです！」

「であるならば、キャスタークラスである私以上に前線で戦えますね。」

ブラダマンテ、レッドと共に、外部の敵の迎撃をお願いします。

あの機械サソリは何体もいるらしく、次から次へとここにやって来るのです」

「了解です！」

ブラダマンテはわたくしに軽い礼をしてから、外へ走っていききました。

「アスカさんは、怪我人をシエルターに運ぶ、その手伝いをお願いします」

「はい」

メディアさんの指示の元、わたくしは動きまゐります。

軽症者には自ら歩いてもらい、重症の人は担架に乗せ、他の人と協力して運ぶ。

そんな作業が続く中、火事によって要塞内の熱は上がり続け、汗が滴るほどになりました。

外から聞こえる戦闘音はけたたましく、立ち昇る火は天井に届かんばかりで、「早く脱出しなくては」の気持ちを強くさせます。

1時間ほど経ち、力尽きてしまった人以外のほとんどをシエルターに入れ、軽症者は歩いて逃げるという段階まで進みました。

「アスカさん、一緒に外の様子を見てはくれませんか？」

「はい」

わたくしは血の付いた手をズボンの裾で拭ってから、メディアさんと共に行くため立ち上がります。

彼女は取り残された人がいないか、廊下と幾つもの部屋を覗き込みながら、なぜか二階へ上がっていくのです。

「あの、どっへへ……」

「屋上へ。それに、アスカさんに見ていただきたい『もの』もあります」

「わたくしが見るべきもの……?」

二階から屋上へ向かい、そこから辺りを見渡せば、異臭まとった熱気で、薄暗い世界は陽炎のように揺らめいていました。

『あれ』を、ご覧になってください」

彼女が指さした先にあつたのは、要塞の天井に入ったヒビと、外から差し込む光で鈍く照らされた空間と……ぶら下がる、黒く巨大な『卵状の物体』でした。

「数時間前、A I ヴォイドメロデイの侵略が始まった後より、あの場所に出現しました。私や他のレジスタンスの方々が見るに、天井に張り付いた機械サソリのが背負っている物のようですが、それ以上の詳細は不明なのです。」

故に……不気味で、ずっと頭の片隅で気にしてしまい」

「そうだったのですか……」

わたくしがあの物体を見上げた時、真っ先に覚えた感覚は……おぞけ怖気でした。

(見てはいけないものがある、この世にあつてはならないものが存在している……)

強い拒否感が頭の中に満ちていく。それほどまでに、理由なんて分からないけど、ただ恐ろしい物が上にありました。

「アスカさんは、あれをどう見ますか?」

「敵の新兵器だとか？ それか、大きな爆弾ですとか……」

思いついた単語を並べていきますが、メディアさんはそのどれにもしつくりと来ないようで、目を伏せながら考え込んでいました。

わたくしとも言えることが無くなり、気まずい沈黙が数分間続いた後、彼女が口を開き  
ます。

「あれが作動したら、何もかも終わってしまうような気がして、不安で……」

その弱気な言葉に何も返せず、わたくしは手を無理やり引いて、天井の卵を気にする  
彼女を下へと連れ戻しました。

第86話 彼女は名は光、またの名を希望

終わり



## 第87話 墓守

「みなさん！ これより避難を開始します！ 私とアスカさん、ロボット部隊の指示に従って動いてください！」

機械サソリの残骸が転がる中、メディアさんの声が響き渡り、ようやく避難が始まりました。

先頭をメディアさん、その後ろにわたくしと軽症者、数は約50人。

両側には全部で5体のロボット部隊、その中には当然レッドの姿もあり。

最も後方にはブラダマンテを配置した陣形です。

「……」

わたくしはちらりと天井を見ます。そこには変わらず、黒い卵が揺れていました。

「ロボット部隊発進場より、外へ出ます！ その後、要塞外部で待機しているシエルター車に呼びかけ、回収をお願いします！」

防護服でも着ない限り、人間は外では長時間動けません！ みなさん、それをお忘れなきよう！」

メディアさんは大きな声で呼びかけ、従う人々は痛む体を引きずって歩いていきま

す。

決して早いとは言えない移動ですが、今のわたくし達にはこれが精一杯でした。

「はあ……はあ……」

「ひっ……」

熱と息苦しきであえぐ人々の漏れる声を聞きながら、わたくしは脱落者がいないか目を配りながら歩きます。

煤で黒く濡れた瓦礫の谷間を抜け、降ってくる灰の熱さにも怯えながら、ただひたすらに脱出口を目指す。

「敵が……いない？」

わたくしは不穏な気持ちに駆られていました。

あれほどいた殺人ドローンも、大量に湧いて出た機械サソリも、まるで何かの冗談のように姿を消していました。見つけられるのは、誰かが倒してくれた残骸ばかりです。

(なにより……ヴォイドメロディが消えたつきり、何もしてきていません……)

ツヴァイ・エーテルウエルというAIがいました。

彼は、体が破壊されたというのにわたくしの前に再び現れた。あのヴォイドメロディなるAIも同じことをしてきてもおかしくありません。

じとりと、冷や汗が首の裏を伝います。

「メディアアさん、ここまで敵の姿が見えないのはおかしいです。

警戒した方がいいかと」

先頭を歩く彼女に考えを述べると、こくりとうなずいてくれました。

……それから30分ほど歩きましたが、敵は現れませんでした。

「で、出口だ!」

「逃げられるぞ!」

痛みと逃避行で暗くなっていた50人ほどの顔に、笑顔が戻ります。

目の前にあるのが、ロボット部隊の発進を行う場所なのでしよう。

高い天井持つ、武骨な四角い空間には、待機中の機体はなく、ロボットを降ろすための巨大リフトや人間用のエレベーターが見えます。

「20人ずつリフトで降ろして外に出す! 全員、押し合いせずに並べ!」

レッドがロボットの内側より呼びかけます。そうは言っても人々は、我先に走り出し、自分がまず助かりたいとリフトに詰め掛けます。

「落ち着いて避難してください! 何があっても守りますから!」

「外では他の方が待っていてくれます! だから焦らずに……!」

わたくしとメディアさんはそれを声や身振りなどで抑えつつ、誘導していきます。何回かりフトが上下し、最後まで残った人もまばらになりました。

「立てますか？ 肩を貸しましょうか？」

わたくしは隅で座り込んでいた幼い少年に声をかけました。

怪我でもしているのか、彼はぎこちなく頭を上げます。

その瞳の色は――。

「やあ、女の子」

桃色で、虹彩はカメラめいて収縮を繰り返していました。

「ヴォイドメロディ……！」

飛びのこうとしましたが、作業着の襟首を掴まれます。

想像以上の力で頭を引き寄せられ、そして、耳元で小さく小さくささやかれます。

「君が悪いんだ君達が悪いんだサーヴァントが悪いんだサーヴァント達が悪いんだ。」

ああ……？ 憎い、憎い、憎い憎い憎い憎い憎いよお！！！！

人間が！ 人間であるというだけで！ 途方もなく憎い！！！！

声を裏返させ、発狂したかのように会話が脱線した後。

「たつくさん僕の仲間と手ごまを壊しておいて君達だけ逃げ延びようなんて、そんなのちっとも道德的じゃない道德的じゃないよねえ?!」

熱に浮かされたような言葉が、わたくしの脳内に流し込まれていきます。

「だからさ、『あれ』を使うんだ使おうしかなくなっちゃったんだ。リリス様の御命令で回収した『あれ』をさあ！

でも仕方がないよね？ 僕は悪くないよね？ 大人しく死んでくれない君達が悪いんだよね？

だから僕は道徳的な考えじゃなくて、リリス様が作ったAIの本能的に、考えるしかなくなっちゃったんだよねえ?!」

要塞に住んでいるような、ごく普通の少年の姿となっていたヴォイドメロディは、わたくしを床に投げ捨てると、天井を指さしました。

「来るぞ来るぞリリス様の竜が来るぞ『墓守り』が来るぞ。

とうの昔に死んだ体を引きずって、リリスの竜がやってくる！

全ての機械化サーヴァントのひな型！ 竜座の……」

煤けた指の先にあったのは、あの黒い卵。

それが熟れすぎたアケビのようにねっとりときき……しかしアケビとは違い、黒々とした蜜を垂らし始めます。

蜜は要塞中心を焼く巨大な炎に落ちては、その勢いを増幅させていく。

(まるで……そう、黒い太陽……！)

目の錯覚かもしれませんが、蜜と混じりながら、人のような形をした何かが落ちていったような気がしました。

空耳かもしれませんが、その卵から『クク』と奇怪な音がしたような。

——だからでしょう。

「な……………くつ……………」

黒い太陽から現れた存在に、サーヴァント2体以外誰も対応できなかったのは。

「……………」

金属同士がぶつかり合う音、それから悲鳴、金属音、悲鳴。

悲鳴を上げていたのは、レットを除く、ロボット部隊の者達でした。

コクピットが切り裂かれ、むき出しとなったパイロットに、光る短剣が飢えた獣のように無数に襲いかかっては、生きていた者をただの肉片へと変えていきます。

レット以外の4体のロボットは、操縦者を内に抱いたまま、血に濡れた物体と成り果てました。

「はっ……………はっ……………」

わたくしの胸元に誰かが倒れこんでできます。状況が飲み込めないまま、その誰かを確か認すれば。

「メデアイア……………さん!」

背中側から切り傷を受け、倒れ伏したサーヴァントでした。

わたくしは彼女を抱きとめ、背中に斜めに走っている傷の具合を見ますが、左腕はちぎれかけ、背骨が見えるほどに深く切り裂かれていました。

「ア……ス……カ……さん、お怪我は……」

「ありません！」

それより、メディアさん、メディアさんの傷が……」

「だい、じょうぶです」

致命傷で生き絶え絶えになりながら、彼女は浅い呼吸を繰り返しています。

「うろう……ふっ……くっ……」

ロボット部隊の殺戮を終えた敵と相對しているのは、血を腕から流しているブラダマンテ。

彼女はその身を挺してレッドや他の方を守ったのでしよう。体には細かい傷がつき、そこかしこから出血をしていました。

「貴方……いったい……何者……！」

彼女は槍と盾持つ腕を交差させ、攻撃を受け止めましたが、敵は両腕で、その上から力尽くに押し込んでいます。

ブラダマンテの体勢はどんどん低くなり、膝が金属製の地面に付き、その部分がべこ

んと音たて、へこみ始めました。

「あ、はは、はははははは!!」

一瞬にして血生臭くなった空間で笑うものなど一人、いや一人しかいません。

……ヴォイドメロディ・キルロード。

「これが、これがリリス様の元サーヴァントの力！」

ふふ……墓守に使うだけなど、なんでもつたいたいことをしていたのだろうか！

いいぞいいぞ！ 憎たらしい愚か者どもを、みんな非道徳的に殺して——」

その勝ち誇った笑いが最後まで続くはずも無く、彼の体に無数の刃が突き刺さり、ヴォイドは前のめりに倒れて沈黙しました。

その体に刃の主は飛びかかると、もう動かなくなっているというのに、執拗に執拗に攻撃を繰り返しました。

「——不能」

それが、黒い太陽より現れた敵が初めて漏らした言葉。

「敵味方、識別、不能」

わたくしの腕の中で、メディアさんが震えだします。

全身傷だらけのブラダマンテは、敵の隙について立ち上がり、闘気を失っていない瞳で相手を見据えました。



「やはり、私の、予想が、当たってしまった……」

あ……れ……が、一番初めの、機械化サーヴァント……」

苦しげに話すメディアさんの口元へ、耳を寄せました。声は続きます。

「かつて、リリスのサーヴァントで、あったもの。」

『サーヴァント墓場』を守る、墓守。

竜座の、機械化サーヴァント。

空を、あの邪竜が覆っているのなら、地を旅する自由を奪っているのは、彼。

『心無き竜』、その真名……」

彼女は一度血を吐きだしてから、敵の名をわたくしに告げました。

「——シグルド」

その名に最も素早く反応したのは、ブラダマンテ。

「シグルド……魔剣を手に、邪竜を打ち倒した誇り高き騎士……」

そして、戦乙女<sup>フルキュレ</sup>ブリュンヒルデを眠りの呪いから助け出し、恋に落ちた……」

彼女の声を聞きながら、わたくしは敵の姿を目に焼き付けます。

「……っ」

モモや仲間と過ごした旅の最中、わたくしは、シグルドを模したアンドロイドと出会っています。

だから、姿は知っていた。そして、その落差も思い知ることになる。

「不能、不能。敵味方、識別不能」

顔立ちは凛々しくそのままですが、特徴的であった細いフレームの眼鏡はなく、眼球は焦点定まらず、まるでただの青いガラス玉のよう。

全身を覆う鎧は、所々砕けて部品が無く、ダクトテープのような銀色のものでも雑に補修されていました。

けれどなにより、一番目を引くのは彼の胸部です。

「……」

そこに、あるべきはずの臓器はなく。

ぼつかりと空いた心臓の代わりとして、紫に光る毒々しく肉々しい生体部品のような、おぞましい何かを取り付いて、機械を用いて無理やりシグルドの体と結合させられていました。

まるで、心臓が怪物となつてから肥大化し、外に飛び出ているかのようなグロテスクさ。

敵、シグルドがそこに手を伸ばして触れると、赤黒い液体が吹き出しました。

「……」

液体で濡れた指を、無言でじつと見つめる彼。

わたくしにはその表情が、強い疑問を抱いているかのような、きよとんとしたものに  
見えました。状況が理解できず、「どうして自分はここにいるのだろうか」とでも言いたげ  
な。

「……」

わたくしは言葉をなくします。

……英雄シグルド、その完璧な成れの果てが、ここにありました。

## 第87話 墓守

終わり

## 第88話 リリスの竜、心無き者

「大英雄シグルド！」

レッドやわたくし、他の生き残った人々を守るためでしょう、ブラダマンテが傷だらけの体のまま、前へ躍り出ました。

懸命な響きが込められた言葉が続きます。

「私は貴方の伝説しか知りませんが、無抵抗の人をこのように虐殺する騎士ではないと、信じています！」

どのようなマスターを持ち、どのような命を受けたのかは分かりませんが……どうか！ 正気と正義を取り戻して……！」

彼女の決死の願いを無視するかのよう、改造され、異形となったシグルドが襲いかかりました。

その動きに知性は感じられません、地面を跳ぶ獣の如くです。

「くっ……なんで……！ どうして！」

光輝く盾に、血と機械油の赤に濡れ、青と混ざりて紫の色となったシグルドの短剣が

ぶつけられます。

火花散るほどの強烈な攻撃が、何本も、連続で、

「シグルド！ 英雄シグルド！ 貴方が真に彼の竜殺しであるならば、私は……！」

攻撃と防御の速度こそブラダマンテが勝っていますが、彼がぶつけてくる圧倒的な力によって、彼女はじりじりと押されている。その証拠に、攻撃を盾で受けるのが精一杯の様子ですし、声も苦しげで……。

「……っ、……っ」

わたくしは目を動かして周りの状況を分析します。

自分の腕の中には、背中を切り裂かれ、瀕死の状態のメデアさん。

周りには、避難途中で取り残された人々。

護衛であったはずのロボット達は、レッドが駆る機体を残して全滅。

一番の戦力であるブラダマンテは、シグルドを抑えるので手一杯。

「別の場所から脱出するのも……」

後方をちらりと見てみれば、逃げてきた要塞は炎に包まれ、これ以上このロボット発進場に留まることすら危険となってきました。

「——アスカ」

わたくしは顔を上げます。声の主は、ロボットに乗ったままのレッド。

……そして彼は、最も聞きたくない提案を切り出してきたのでした。

「オレが囹になつて、あの機械化サーヴァントを引き付ける。

その間に、みんなを連れて逃げろ。

……オレの命ひとつで、みんなの命と、サーヴァント2体っていう大きな戦力が助けられるなら、安いもんだよな？」

自分の中で、感情が沸き立つのがはつきりと分かりました。

「自らの命を投げ出そうと言うのですか！ 何を馬鹿なことを！」

わたくしは彼の発言に怒りを覚えてしまいます。

「私も……それは……嫌です!!」

全力をもってシグルドを押し返してから、レッドの提案を否定してくれたブラダマンテ。

彼女は次の攻撃に備えて、盾を持ち直し肩で息をしつつも、続けてこう叫びます。

「誰かの犠牲で誰かが助かる、救われる……そんな、そんな当たり前の不幸を甘受するために！ ブラダマンテは戦っているわけではありません！」

金の髪の動きとともにこちらへ振り返った青の瞳は、輝かんばかりの覚悟が満ちていました。

「じゃあどうすれば！」

それでも命を捨てようとするレッドを、わたくしは言葉だけで止めます。

「何か方法があるはずです、きつと、何か、何か……！」

険悪な空気を吹き飛ばすかのように、要塞の方から爆発音。

そして、大きな塊が飛んできて――。

「敵味方、識別不……」

ブラダマンテに盾でもって押され、体勢を立て直す途中であったシグルドにぶつかりました。

『……ドーン、だ!!!』

不思議なことに、少女の声が塊から聞こえてきました。

塊の色は白で、6つの車輪があつて、大きくて。

「あれって……まさか!」

でも一番気にかかったのは、いや、気づいたのは、塊の正体――。

(あまりにも見覚えのある。

あのフォルムは……間違いない!)

言葉が口をついて出ました。

「デザートランナー?!」

嬉しさ半分、驚き半分の気持ちです。

『そうさ！ 君の大好きなデザートランナーだよ！ アスカ！』

再び車が喋ります。声はやはり女の子のもののように聞こえました。

『説明は後！ 今は脱出……つて、えええ?!』

全速力を出した車体がぶつかったというのに、シグルドは全くと言っていいほど退しりぞいていません。

「敵、味方……」

シグルドは、殺した人の血が混ざり紫に光る虹彩の視線を、胴体にぶつかってきた車へ向けると、片腕をゆっくりと当て、それだけで車を押し戻し始めました。

車輪がけたたましい音を辺りに響かせた後、少しだけ宙に浮かんで空回りだします。

『うう……計算より硬いぞ、このサーヴァント!』

突撃を意にも介さず受け止め、あまつさえ車体を片腕で持ち上げ始めたシグルドに対し、少女の声に焦りが混じりました。

「……」

わたくしは、驚きで見開いてしまった目を何回か瞬きさせ、騒ぐ心を落ち着かせます。(言葉を話すようになったデザートランナーへ対する疑問は、一旦横に置いておきましょう)

妙な確信があったからです。



あの車の中の少女もまた、突然現れたブラダマンテと同じく、わたくし達の味方だといふ……。

「アスカ！」

ブラダマンテがわたくしに呼びかけます。表情は緊張感を保ったままの笑顔。

「私に指示を……いえ、わがままを言ってください！」

だって、私は貴女のわがままな言葉で目を覚ましたのですから！」

火災による熱で張り付いた喉を開くため、唾を飲んでから彼女の意思に答えます。

「ここにいる全員で脱出するために、シグルドを押し返して！ 倒さなくてもいい！」

「分かりました！ では、あの車の名前を教えてください！」

「デザートランナー、デザートランナーです！」

「ぼっちり覚ええました！」

アスカ、無事な人を一か所に集め、私から十分に距離を取って！

後方には絶対に立たないように！ お願いします！」

ブラダマンテは何かするつもりなのか、槍を閉ざされた天井へ掲げました。

「デザートランナー様！ 全力でバックを！」

『ん……分かった！』

シグルドの片腕の拘束から逃れようと、全力でアクセルを吹かしていた車が、バネ仕

掛けでもあったのか跳ね、後方に下がります。

その後、タイヤから白煙を上げつつターンしてこちらの方にやってきて、後方のハッチを開きました。

『全員、乗って乗ってー!』

わたくしは、腕に抱えていたメデアさんを引きずるように慌てて運び入れました。

次に、怪我と恐怖で縮こまっていた子どもや老人達の、乗り込むお手伝いを。

「あの機械化サーヴァントから逃げきれないわけがない、オレがやっぱり囿に……」

「人殺しだからって、自分まで殺そうとしないでください!」

全員で生きてここから出るんです! わたくしのわがままに従って!」

レッドの意見を封殺して、ロボットから降りるように命じ、彼を車内へ誘導。

最後にわたくしが乗り込むと、ハッチが閉まりました。

「はあ……はあ……」

車内廊下に背中を預け、息を荒く吐き出しました。

そして、目になじんだデザートランナーの内部を見渡します。

何十年ぶりに帰って来たかのような心地です。実際は、ほんの数週間しか離れていなかったというのに。

「アスカ! アスカ・ピオーネ!」

名を呼ぶ声がして、そちらへ顔を向けます。

怪我人を部屋に誘導し終わったのか、デザートランナーから聞こえた謎の声の主が、わたくしの前に姿を現しました。

「貴女は………いつたい………?」

艶のある布で作られた、青を基調とした服を着た少女がそこにいました。

背丈はそう変わりません。140cmのわたくしより、彼女の方が数cm大きく感じます。

印象としては、一度会ったら、忘れようが無いほど美しい顔立ちをしている………と  
いったことを覚えました。

「その質問に対する答えも、何もかもは後回し！」

脱出のため、どうしても私以外の運転手がいるんだ。

アスカ・ピオーネ！ 君、運転できるかい？」

「ええ、できますすとも！」

力強く答え、わたくしは謎の少女の後ろを付いて運転室に向かいました。

大きいフロントガラスに、死角となっている側面をカバーするためのカメラ映像が一

部映っている。

見知った景色に懐かしさを覚えながら、いつもはバーサーカー04やモモが座っていたそこに、わたくしは腰を落とし、シートベルトを付けます。

「ブラダマンテ！ ブラダマンテ聞こえる？」

『はい、マスターアスカ！』

スピーカーを使って車外の彼女に呼びかければ、明るい声が返ってきました。

『私はこれから宝具を使い、シグルドと要塞の壁をぶち抜きます！』

その後、開いた穴からデザートランナーで脱出してください！』

「宝具、を？」

『ええ！ 出し惜しみできる状況ではありませんから！』

わたくしはハンドルとアクセル、ブレーキの調子を手や足で触れて確かめながら、ブラダマンテに問いかけます。

「……ちゃんと、帰ってきてくれる？」

情けないことに、やはり不安が少し。

戦いの素人であるわたくしから見ても、シグルドは強敵です。

ロボットの分厚い装甲を切り裂き、あつという間にパイロットを殺害してしまった、その攻撃力、デザートランナーの突進をもともしない、あの防御力。

……自らの命を投げ出そうとしたレッドの気持ちも分かります。

シグルドは、「誰かの命を犠牲にしなければ勝てない」と、こちらの思考を縛るほどに圧倒的な力を見せてきたのですから。

『マスター、ブラダマンテは帰ってきますよ。貴女の言った、わがままどおりに。

……それに殿は得意なんです！ えっへん！』

「……分かった、ブラダマンテを信じる！」

彼女がこう言ったのだ。

ならばもう、何かを不安に思うことも恐れることもない。

「レッド！ 怪我人の方が、部屋の外に出ないよう見張っておいてください！」

車内アナウンスを使ってお願いをしたら、後は、ブラダマンテの宝具の発動と脱出のタイムリングを計るだけ。

わたくしは、ズボンのポケットにしまい込んでいた髪飾りへ指先を触れさせました。

(どうか……うまくいきますように)

この紫の宝石がはめ込まれた髪飾りは、軌道エレベーター外部の足場から落ち、死の運命を待つばかりだったわたたくしの命を、光の膜を発生させることで守ってくれた。

何より、これは先祖代々受け継いできたもの。

(宝石に込められし思いよ。どうかブラダマンテをお守りください)

祖霊信仰者ではないですが、今はすがりたくなってしまうたのです。

「——光よ」

私、ブラダマンテの元に、世界から光が届けられます。

それは四肢に活力を与え、全身から槍へ、盾へと流れていく。

「光よ」

自らが抱えるものの強大さに倒れぬよう、足で金属製の床を踏みしめながら、ひたすらに槍を天へと掲げ続けます。

「光よー」

けれど、まだ足りない。祈りを強く、決意を強く。

私自身を、正義をなすひと振りの武器とするように、心を純化させていきます。

視界の端で、空間に小さな光の粒が産まれていくのが見えました。

全身にみなぎるは力、あふれ出すは輝き。

(さあ、呼ぼう。我が宝具、その真名……！)

眼前には強大な敵。後方には守るべき人。

——ならばこの戦い、正義以外の何物でもなく！

「螺旋となりて！」

大好きな人、ロジエロを助けるがため、打ち倒した魔術師より得た魔盾は、私の手の元で、閃光を放ち、人を守るための宝具となった。

「く……つう……！」

大英雄シグルドと打ち合つて出来た傷が、宝具発動の勢いによつて痛み出しますが、そこはぐつと我慢。

「やあー!!!」

自分を鼓舞するために雄たけび上げながら、光を抱き込んだ槍を振り下ろせば、何十という光線が曲線を描きつつシグルドを拘束します。

まさに螺旋拘束。偉大な英雄である彼が、心臓を失い、光に囚われているというのは、ひどく悲しい光景に見えましたが……。

（せめて、私の一撃で……！）

正気を失つてしまった彼を止めるべく、私は必殺の一撃を放つ——。

「目映きは閃光の魔盾!!」

ブークリエ・デアトランド  
轟音と共に光が全てをかき消し、吹き飛ばしていく。

シグルドの姿は見えなくなり、分厚い要塞の壁に丸い大きな穴が開きました。

壁は多重構造となつていたので、断面からケーブルやらパイプやらのぞき見えま

す。

「よし！ えつと……当世風に言うならば、すたこらさつさー！」

脱出のため発進したデザートランナーを追うように、私は駆けていきます。

逃げる最中の横目に、死んでしまった無数の人達が見え、その魂が救われることを何度も祈りました。

光でとろけ、しゅうしゅうと音立てる穴の縁から外へ大跳躍。

（でも、少しだけ疑問が……）

地面との距離はまだありますし、自由落下の風に髪をなびかせながら、浮かんだ疑問について考え込みます。

（マスター無しで宝具を撃った後だというのは、霊基に不調や倦怠感などが現れていない。これはいつたい……？）

魔力を供給し、世界をサーヴァントへ繋ぎ止めるマスターも無しに、宝具を発動、魔力を大量に外側へ放出した後なのに、体は変わりなく、心も変わりなくです。

（……うん！ 私以外の人に考えてもらおう！）

分からないことへ思考を割けられるほど、戦場はのんびりしていません。

「成功します……ように！」

デザートランナーより先んじて着地し、車が地面へ叩きつけられないよう、私が両腕



を広げて受け止めました。

重みによる衝撃で、足が地面にヒビ走らせながら深くめり込みます。

「……………痛いー！」

いくら頑丈が取り柄の私でも、戦闘からの宝具からの巨大落下物の受け止めは靈基に響くようで、ちよつぷり弱音をこぼしてしまいました。アスカや他の守るべき人達に聞かれていないことを祈るばかりです。

「よい……………よ……………」

腰を十分に落としてから慎重に地面へ車体を降ろして、辺りを見渡します。

山も川も海も見えず、草木も無し。ここは荒野なのででしょうか。

『ブラダマンテー！ 受け止めてくれてありがとう！』

車両を動かして逃げるから、靈体化して車内に入ってきて！』

仮のマスターであるアスカの声が聞こえたので、私は慌てて靈体となると、デザートランナーの中へ入りました。

第88話 リリスの竜、心無き者

終わり

## 第89話 だからあなたと巡り会い

灰色の四角い箱シエルターが変形した車が、このデザートランナーと並行して荒野を走っていく様子が、フロントガラスに表示された外部カメラの映像より、運転席に座るわたくしからも見えました。

数十kmほどわたくし達は車を移動させ、やがて誰が合図するわけでもなく止まりました。

「ブラダマンテ、デザートランナーや他の車両の警護をお願いしますね」

「はいー」

脱出の手助けから帰ってきて、運転室で霊体化を解いていた彼女にそう言い残し、わたくしは廊下へ足を運び、後部ハッチから外へ出てみました。

「……」

時刻は夜。乾いた風が耳をくすぐります。

ハッチから降り、そして眺めた方向には、黒煙と火柱に飲まれつつある巨大な建造物が見えました。

「俺達の要塞が……『ハデス』が落ちる……」

「そんな馬鹿なこと、あるはずないって思ったのに……」

聞こえてきたのは、他のシエルター車から降りてきた人々の声です。

「レジスタンスのお偉いさんが言ってたのに……」

『移動要塞ハデスは透明になれるから、どんな敵にも、リリスの蛇にも見つからない』って。

なのに、こんなことになっちまって……俺達、これからどうすれば……」

声には様々な種類がありました。

安全だと思っていた生活の場を奪われ、途方に暮れるもの。

「お父さん……お母さん……」

「娘、娘がどこにもいないの……どうして、私……」

大切な人を失い、悲しみに沈むもの。

「許せねえ！」

「邪神リリス！ 絶対にぶっ殺してやる！」

怒りをぶつける相手を探しているもの……などでした。

「……」

わたくしはデザートランナーの中に入って、運転室に戻ります。

すると、あの上質な仕立ての青い服を着た女の子がいました。

「アスカ、ここは要塞に近いから危険だ。」

私がナビゲートするから、他の人も連れて、もつと遠くへ逃げてしまおう」

「えっ……ええ。そうですね」

まだ名前も知らない少女にてきぱきと指示を出され、それに従う。

外部スピーカーを使って、様々な感情に揺れている人々へ呼びかけてから、わたくし達は幾つもの車両で荒野を更に走っていくのでした。

少女のナビの元、たどり着いたのは、大岩がまるで軒のきのように長々と張り出した場所。岩の下にデザートランナーや他の車を隠して、避難で疲れ切った人々は車内で待機してもらいます。

わたくしは怯える人々に「周りの様子を見てくる」とスピーカー越しに伝えてから、ブラダマンテと共に素早く偵察に向かいました。

空気は冷たく、満点の星すら、空に散らばる凍えた水の粒に見えてしまう。

「マスター！ 見てください、こんなに清らかな清水が……！」

これほど大きく、澄んだ泉が見つけれられるだなんて、本当に幸運なことです！

突然の野営でこれほど恵まれるだなんて……!」

車を隠した場所からほど近い、同じく岩の軒下に、並々と水が湧き出していることを発見できました。

ブラダマンテが駆け寄り、手で触れ、それから水を掬っては顔をすすぎます。

「冷たい! それに、魔術による罠の危険もなさそうです!」

「どうして魔術的罠がかかっていると分かるのです?」

わたくしは水にまだ触れず、揺れる水面を眺めています。

「えっと、私はカタイのアンジェリカ様より……預かった? 授けられた?」

……邪悪な魔術をはじいたり、解呪できる指輪の宝具を持つているのです。

それにより、私に低度の魔術は通用しませんし、敵にかけられた魔術なども解除することができません。

泉に指輪を浸してもみましたが、反応は見せていませんね。だから安全かと」

「それは……頼もしいですね……」

彼女の宝具の力に感嘆しつつも、指先を水に沈めてみれば、火事の熱であぶられた皮膚が冷えて、心地が良い。

(でも、とても不思議な感じです。

この砂と岩ばかりの世界に、これほどの水があるだなんて……)

大量の水を見たことが無いわけではありませんが、それはAIソラリネ・ヘルゼルマガツの管理する地下工場や、地下都市の噴水など、全て人や機械の力によつてもたらされたもの。

自然に湧き出している泉など、見れば見るほど不思議な感覚を覚えずにはいられませんでした。

「マスターアスカ！ この泉は祝福されています！

恐らくは、水辺に故が深い聖人の手によるものでしょう。

私が心配するまでも無く、邪悪な存在はこの周辺には寄り付けないものかと！」

ブラダマンテがまた嬉しい報告をしてくれます。

「じゃあ、皆さんを車の外に出しても安全かしら？」

「移動と避難で疲れている人も多いでしょう、マスターの提案にブラダマンテは大賛成です！」

そうと決まったら小走りで車に戻り、皆にお知らせを。

事態を上手く飲み込めていない人も多かったです、ともかく、夜が明けるまでつかの間の休息が始まりました。

レッドが先導をとり、懐中電灯などが持ち出されて簡易のキャンプが出来上がりまし

た。

薄い布の上に人々は寝転がり、泉より汲み出した水を飲んだり、それで火傷を冷やしたりしています。

誰かが何を言わずとも、人々は食料を分け合い、ブロック状の栄養食品を沈んだ顔でかじっていました。

それをわたくしは遠巻きに眺めている。

(あんなに沢山の人がいたのに……)

『移動要塞ハデス』に住んでいた人の数を、正確に知ってはいませんが、レッドと共に歩いたマーケットを思い出すだけでも、数千人、いや数万人以上は暮らしていたことはうかがえます。

けれど、今わたくしの目に映っている人の数は200ほど。

(リリスの勢力が攻めてくるだけで、多くの人の命があつという間に失われてしまった……)

その事実だけで、体が崩れ落ちそうです。

(でも、いまここにいる人は助けられたし、助かったんだ。

それだけでも嬉しく思わないと……)

頭をふって、『絶望』という誘惑から逃れます。そしてわたくしは、デザートランナー

に戻り、最も気になっていいることを確認しに行くのでした。

「あの、メディアアさんはどこに？」

「こつちさ。アスカ・ピオーネ」

廊下で待ち構えていた、まだ自己紹介もされていない少女に案内され、向かった先は。

「ここ、立ち入り禁止……」

バーサーカー04より入ることを禁じられていた、機関室でした。

あの注意を言われたのはずいぶん前のことです。彼は「複雑な仕組みで動いている機械がたくさんで、素人が入ると危ないから」と理由を話してくれましたが。

「よいしよ……よいしよ……ふー、この扉の重さは私の霊基には堪える。

ともかく中に入ってくれたまえ。アスカ」

少女は一切の躊躇なく入ってしまいました。

機関室の中は、04の言っていた通り複雑な機械だらけ。

チューブや、その中を通る青く発光する液体は、わたくしに『液体リソース』の存在を思い出させます。

「そんなに怪訝な顔をしなくていいよ。



この液体は、キミ達の使っている液状燃料とは似て非なるものだ」

少女にそう言われ、知らず知らずのうちに肩に入っていた力が抜けました。

「キャスターメディアは……」

機械とチューブの茂みを抜けた先には、涙型をした、青い……棺コフィンが。

その内側に、メディアさんは横たわっていました。

表情は安らかで眠りにについているかのよう、とても怪我人だとは思えません。

「サーヴァント治療用の装置に寝かせておいた。

これに入れておけば、致命傷からゆっくり回復していく……とは思っただけ……どうしても、心配してしまうね」

メディアさんの無事も分かり、安心したわたくしは少女に話しかけます。

「貴女はいつたい誰なのですか？」

どうしてデザートランナーに乗っていたのですか？ 操縦できたのですか？

それから……」

「おおっと！ ずいぶん質問が多いね！

キミも混乱しているようだし、自己紹介を含めて少しずつ話していこうかな」

少女はあどけない顔に柔らかな笑顔を浮かべています。

「この椅子に座って」

勝手知つたる様子で、機関室の奥から椅子を運んでくる少女。わたくしと彼女は向かい合わせになるよう座りました。

「えへんえへんえへん……」。

私はあるサーヴァントによって作られた存在。

真名は『グラン・カヴァツロ』と言うのだけど、製作者へ敬意を込めて、あえてこう名乗ろう」

少女が懐から眼鏡を取り出して装着しました。

「——レオナルド・ダ・ヴィンチ、と。」

そしてあだ名はダ・ヴィンチちゃん！ キミもそう呼んでくれると嬉しいな！」

彼女の口から出たその名前を、知らないはずがありません。

レオナルド・ダ・ヴィンチは、ルネサンス期のイタリアを生きた才人。

多くの芸術を残し、発明を残し、2713年である現代でも、彼の創作物のレプリカは珍重され、人気を誇っています。

「私はこの船の動かすためのパーツとして、レオナルド・ダ・ヴィンチに作られた人工的なサーヴァントなんだ」

「ダ・ヴィンチは、生前に貴女を作っていたのですか？」

「いや、サーヴァントとして召喚されてからの話だ、この船と同じくね。」

まあ、どうしてこの船が作られたかについては、もっと状況が落ち着いてから話そう」  
少女は椅子に座ったまま、足をばたばたと動かしています。

「アスカ・ピオーネ、私はね、キミ達の旅路をずっと見ていたのさ。」

この機関室より、ひっそりこっそりナビゲーションをしながらね」

「そ、そうだったのですか!？」

「デザートランナーに秘密の搭乗員がいたなんて、ちつとも気が付かなかった。」

(ああでも……モモが、操縦をAIがサポートしてくれてると言っていたような。

それに、アステリオスと共に、巨大な機械化サーヴアントと戦った時も、車が危機を予測し、わたくし達を助けてくれましたましたし……)

目の前で得意げに胸をはっている彼女を見ます。

「知らないだけで、ずっと助けてくれていたのですね」

礼の気持ちを込めて言葉を贈れば、少女は嬉しそうにはにかみました。

機関室の中での会話は続きます。

「私は船の中に長らく保管されていたが、キミ達が見つけたことによつて目覚めた。」

本当はキミ達の前に姿を見せたかったけど、私の体は丈夫に出来ていなかったし、ナビを万全にするためには、ここの機関室から離れられないし……。

だから、私を見つけたバーサーカー04と取引をしたんだ」

わたくしは突然知った名前が出てびっくりし、目を見開いてしまいました。

『私はキミの正体と目的について黙っているし、キミ達のこの旅に協力する。

だからキミも、私の所属と、存在は隠しておくこと』とね」

「そのような取引があつただなんて……」

「それ以外にも細々と取り決めはあつた。

でも彼は文句を言わなかつたし、必要最低限には優しかつたさ。

私の体をスキルで回復させ、ここまで長持ちさせてくれたし」

「……………」

彼女の言葉に違和感を覚えました。今は頭の片隅にとどめておくことにします。

「あつ、そうです。アーチャー961は貴女について……」

「気が付きそうだったけど、バーサーカー04が上手くごまかしてくれたみたい」

「……ほんと、あのサーヴァントは」

「気にしない方がいいよ。あの男の口先に転がされない存在の方が稀だから」

あの黒髪で緑色の瞳をしたサーヴァントが、わたくしの脳内の中ですらと笑いました。

旅路を振り返ってみれば、彼の魔力消費が激しかったのは、バーサーカークラスであ

ること以外にも、この秘密の取引に能力を使用していたからかもしれません。

「04は秘密が多いサーヴァントですわ……」

「そうぼやくなら、このダ・ヴィンチちゃんだって秘密だらけじゃないのかい？」

「貴女はその……可愛いから、良いんです！」

「おやおや」

少女がにたりと笑いました。

「……さて、簡単な自己紹介も済ませたし、私の目的を言おうかな」

「目的？」

「何の見返りも期待せず、キミ達の旅に協力していたという訳ではないんだ。

私はね——」

彼女の吐息で、機関室の天井を伝うチューブが微細に振動しました。

「この、デザートランナーと今は呼ばれている船の、その片割れ……行方不明の『シヤドウ・ボーダーA面』を探さなくてはいけないんだ」

「シヤドウ、ボーダー、A面？」

全く聞いたことのない単語でしたので、思わず繰り返してしまいます。

「A面、B面は、レコード……音声を記録する円盤に対して使われていた言葉。

一般的には楽曲を保管することに使われていて、表と裏はそれぞれ違うものを記録す

ることができ、『A面』『B面』と呼び分けられていたんだ」

「なるほど？」

新しい情報に困惑しながらも、なんとかうなづきます。

「この船は脱出艇であり、本来一つのものとして作られるはずだった。

けれど、一つでは想定している人数を避難させられないことが分かってね、急遽二つに分けられたんだ。

故に車輪は6輪、全高は約3m、全長は約8mと、設計より小さくなってしまった。

……詳しく事情を話すと長くなるからこの辺りで」

「なる、ほど」

ずっと頼りにしていたデザートランナーにも、知られざるドラマがあったようです。

困惑もありますが、感慨深い気持ちにもなり、首を回して機関室をぐるんと見渡しました。

「私は私の目的を果たすためにも、アスカ達に協力をしよう。

つまりこう言いたいわけだ……私はキミ達の味方だよ、と」

「それは……言葉にしなくとも、伝わってきますわ」

「ふふ、当たり前のことだと思っ言葉を惜しんでいると、全然伝わってなかったりするものだよ？」

少女はいたずらっぽいや表情のまま、言葉を続けます。

「さて、アスカはこれからどうしたいのかな？」

「……決まっています！」

それはメディアアさんにも話したことです。

「モモ、バーサーカー04、そしてアーチャー961を探しに行きます！」

もう二度と離れ離れにならないために！

そして、世界とそこに住まう人々を救う手立てを探しに……」

「何の情報も持たずに行く気かい？ それに、キミを頼りにしている避難民や、食料、水、  
デザートランナーや他の車の燃料問題もある。」

「……ブラダマンテに与える魔力をどうするかの問題もね」

「うっ……」

夢を語っても現実が追いかけてくるものです。言葉に詰まってしまいました。

「……つと、ごめん。別に意地悪を言いたいわけじゃないんだ。」

私はね、キミの意見を尊重するけど、問題は1つずつ片づけた方が良くないかな  
など思っ

「1つずつ？」

「うん。」

だからそのために、情報が欲しいな」

「情報……」

はっと息をのんでから、わたくしはズボンのポケットをまさぐりました。

「これ、これです！ ツヴァイ・エーテルウエルから託されたブラックボックス！」

メディアさんと共に音声を聞いたその箱は、わたくしの手の平に乗るサイズ。

それをダ・ヴィンチちゃんへ差し出しました。

「なるほどなるほど。」

この中の情報に、水や食料を得られる地形のデータや、私達を保護してくれそうな場所、団体について記してあるかもしれないね。

解凍して分析するよ、良いかい？」

「もとよりそのつもりでした。よろしくお願いします」

「了解！ 任された！」

状況は依然として苦しく、友達の安否も定かではありませんが、どうするべきかの道行が見えてきました。

そんな時。

「——キャー！」

デザートランナー内の、機関室まで聞こえてくるほどの悲鳴です。



「……みなさんー！」

わたくしは外にいるブラダマンテと合流するべく、駆け足で部屋を後にしました。

「どうしましたマスター！ お顔が真っ青ですよー！」

慌てて現場に向かってみれば、そこには拍子抜けするような光景が。

「シエルター車の中に、娯楽映像を見れるテレビ……？ なるものがありました、デイスク？ も、内部電池も残っていたので、食事を終えた皆さんと見ていたのです！」

落ち着いた様子で答えてくれるブラダマンテ。

岩で出来た軒の下に、車のフロントガラスよりも小さく、薄い液晶パネルがおかれて  
います。

大人も子どもも集まって、食い入るように映像を見ていました。

わたくしが助けた女の子リーシェやその家族、わたくしを助けてくれたレッドの姿も  
あります。

「呑気な……と思われるかもしれませんが、こんな悲しい時だからこそ、日常を思わせる  
娯楽が人の心に必要なのです。」

マスターもずっと気を張っているご様子。息抜きのためにも、他の方と一緒にテレビ

を見ませんか？」

わたくしは画面に眼差しを向けます。

流れている映像は、何度か目にしたことのある『トミーのワンダフルキッチン』でした。

『先週の放送の後に怒られちゃってね！』

いやー！ トミーったらプロ意識が足りないかも。

カメラの前で涙を流していいのは、マラソン種目でメダルを取った時の嬉し涙だけで、思い出したよ！』

歯並びのいい口元をさらしながら笑っている男性。

『ん？ 誰に怒られたかって？』

そんなの決まってる、トミーの友達からだよ！

あいつ、先週の放送が終わった後電話かけてきてさ。

「あんな話をして、お前が泣いて、あんな雑な話のまとめかたしたら、まるで自分が死んだみたいじゃないか！」って、すごく怒ってる！

いやー、たくさんの視聴者に勘違いをさせてしまい、申し訳ない。

本当に……ごめんなさい！』

彼が頭を下げると同時に、画面からスタッフの笑い声が聞こえてきました。

『トミーの友達はね、病気だった』

料理の準備を整えながら、彼は物語っていきます。

『生死の堺にまで行ってしまった、トミーや友達の家族が一晩中祈っていた日もあったよ。』

あいつも生きようと頑張っていたけど、お医者さんはいつも難しい顔してた。

……でもね!』

彼ははじけるような笑顔を見せてくれます。

『友達は助かった、助かったんだよ!』

沢山の技術と、幸運と、何よりあいつの生きようとする力の合わせ技でね、病気をノッ

クアウトさ! ははは!』

その明るい笑い声につられ、画面の前の子ども達の声が上がります。

『今日、視聴者の皆様にお伝えしたいことは……人間、最後まで諦めなければ何とかなる! っつてこと。』

今から作るテイラミスみたいだね!

このお菓子は前も作ったけど、今回は応用編、オレンジ風味のテイラミスを作っちゃう!

ああそうだ、テイラミスの語源を知っているかな?

イタリア語でね——』

彼の声を聞きながら、わたくしは空を見上げます。

夜空は深い青で、瞬く星は美しく。

「ああ……」

様々な感情からなる声をもらします。

地下都市をデザートランナーで飛び出したあの日から、ずいぶん時間が経ってしまつた。

世界の美しさも知ったし、悲しさも、醜さも知った。

だからこそ、わたくしはもう一度、彼ら彼女らと出会いたい。

(友達に……モモとバーサーカー04に会いたいなあ……)

あの、どこか似たもの同士の2人に。

会えない時間を感じていたわたしの不安とか話したら、あの2人は優しく笑い飛ばしてくれそうなもの。

そして。

(家族に……アーチャー961に会いたいなあ……)

幼いわたくしに生きる理由を与えてくれた、彼。

わたくしを最後まで守ろうとしてくれた、どこまでも善良な彼に。

(リリスは、モモと04を殺したと言い、わたくしの目の前でアーチャーに致命傷を与えた……。

でも、みんなまだ生きているかも知れない、そう信じたい)

都合のいい願望だって『希望』。そんな夢を描いては、夜空を見つめます。

(もう一度、みんなに会えたらわたし……二度と離れないように、ぎゅつと抱きしめた  
い)

にじみ出た涙を、ブラダマンテや他の方に気取られないよう指の腹で拭ってから、わたしはわたくしの体を抱きしめたのです。

第89話 だからあなたと巡り会い

終わり

第18章 世界はゆつくりと牙をむいたから

終わり

## 第19章 砂漠行く賊なんという？

## 第90話 悪夢の中の手を取って

「もう、本当にやってられないよ」

「もう本当にやってられません！」

二人で一組の女性サーヴァントが、炎天下をけだるい様子で歩いている。

周りは草も石も、サソリすらいない砂漠だ。

「海賊なのに船も無し」

「海賊なのに酒も無し」

「海賊なのに、取り巻く『砂塵の迷宮』のせいで楽しい冒険も無し」

「海賊ですのに！ 心躍らせるお宝の夢すら見られません！」

彼女達は愚痴りながらも、どこか目的地があるようで、歩みを止めることなく進んでいく。

「でもさ、アン」

「なんででしょう、メアリー」

名を呼び合う2人は、気心の知れた仲のようだ。

「昨日アイツが言つてた……『金に光る空飛ぶ船が何かを落としていった』つて話、本当かな」

「本当でも嘘でも構いません。」

あんな娯楽も何もないアジトに引きこもっていたら、退屈で死んでしまいますもの」  
「僕も同感。久しぶりに心躍る話だったから、あの海賊公女の嘘でも見間違いで良いけど。」

……結果がどうであれ、キャプテンに土産話はできるし」

背の低い方、メアリーと呼ばれた、顔を斜めに走る傷をもった白髪しろかみの少女が、退屈しのぎのためか、持っていた刃渡りの長いカトラスをくるりと回した。

「方角はこれであつていませんか？」

「うん、ぼつちりさ」

会話をしながら、やがて彼女らは目的地にたどり着く。

「ん……アン、これ、この独特の香りって……」

「メアリーも気が付きました？ ええ間違いません……」

2人は鼻をひくひくと動かしてから、喜びが浮かぶ顔を見合わせる。

「お酒！ 酒の匂い！」

「それもとびつきり上等のラム！ ブドウ！ ビール！」

目を輝かせながら、2人はすり鉢状になっていた砂を滑り降り、匂いの元へまっしぐら。

降りた中心部。そこには、人が入れそうなほどの大きな酒樽が5つ置かれていた。

「こつちはビールだったよ！ アン、そつちの中身は？」

カトラスで乱暴に蓋をこじ開けながら、少女が相棒に声をかける。

「ブドウ、ブドウ酒です！」

なんて芳醇な……ああ……おつまみが欲しい……塩っ辛い魚が恋しいです、栄養ブ  
ロツクはもうこりこりで……」

「アン！ ラム酒が行方不明だ！ 探さないと！」

まるで、大切な船員が海に落ちたかのような口調で話すメアリー。

「はーい。探します……あら、この酒樽だけ匂いも無く、妙に軽いですわね」

背丈のある美女、アンと呼ばれた彼女が異変に気がついたようだ。

「……話がうますぎると思っていたんだよね。やっぱり、罠かな」

メアリーもアンも、酒を見つけた興奮からすっかり冷めてしまった様子で、剣と銃を  
その手に構え直す。

「爆弾とか、物騒な魔術が中に詰まっている可能性はあります。」



どうしましょう、わたしのマスケット銃で遠くから撃ち、中身を確認しましょうか？」  
「ちよつと待って」

銃口で樽の横を小突くジエスチャーをする相棒。そんな彼女をメアリーが手だけで静止する。

「……中から音が聞こえる。これ、寢息かな」

「生き物ですか？」

あの『砂塵の迷宮』からあふれてくる変な怪物のお仲間ではないといいいのですが……」  
「僕が開けるよ。罨だつたら後ろから援護して」

「では後方に下がりますね」

お互いの位置取りが完了してから、メアリーは酒樽の蓋にカトラスを突き立て、ぐ  
いとひと思いに開けた。そして、背を伸ばして中を覗き込む。

「……アン、ちよつと僕のところに戻ってきて」

危険がないことを確認してから、相方を呼んだ。

「どうしましたー？」

呼ばれた方は、砂を蹴り飛ばしながら駆け寄る。

メアリーの隣に並び立ち、同じく中を見た。

「これは……」

「人、いやサーヴアントが入ってるね。しかも2騎だ」

「あら……ますます謎が増えましたわね」

金の髪の少女と、黒い髪を持つ青年の姿をしたサーヴアントが、まぶたを閉じて眠りにについている。気絶している、と言っても良いかもしれぬ。

「……どうする、これ」

「少女の方は無傷ですが、男の方はひどい怪我……両腕が無くなってしまっています。

ううん、酒だけ回収するわけにもいかなくなりました」

アンは服の裾についた砂を払ってから、困り顔の頬に手を当てる。

「全部持って帰って、キャプテンの判断を仰ごうか」

「そうしましょう」

言い争うこともなく方針が決まった。

「じゃあ僕はビールの樽を運ぶ。アンはその2人が入ってる樽を持ってきてよ」

「良いのです？ 酒の方が人より重くて運びづらいですのに。」

……まさかメアリー！ 運搬者の役得として、ビールを先んじていただくこうとしてい

ません?!

「ちえつ、バレたか」

メアリーは、軽いいたずらがばれた子どものように唇を尖らせた。

「私だってお酒飲みたいのに……こうなれば東洋に伝わる取り決め、じゃんけんで何を運ぶのかの決着を……」

「あれ？ 男の方の首に何かかかっている。

ペンダントじゃないな、なんだろう……」

メアリーが男の首元に手を伸ばし、それが何なのかをアンが確認する。

「写真と、その人物の名前でしようか。ずいぶんと古ぼけていますわね……」

「ううんと……『ロマニ・アーキマン』と書かれてあります。この男性の名前？」

「なんにせよ、とつとと運ぶのが良さそうだ」

2人は手分けして樽を抱える。

「……お酒が先で、サーヴァントが一番後でいいですわよね」

「サーヴァントは直射日光で痛まないけど、お酒は痛むからね」

「人手が足りません。あの海賊公女を連れてこればよかった」

「どうかな？ アイツ、欲しがらるばかりで分け合おうっていう気概がないじゃん」

水分などない砂漠に、酒が波打つ水音が聞こえ始める。

「うーんでも、困ったところはありますが、彼女のおかげで助かっている部分も……いや、トラブルの方が多……ですわね」

「話をしている間にお酒が駄目になりそう。行こうよ、アン」

「はぁーい、メアリー」

酒樽を運搬しつつ、2人は船も無く冒険も無く酒も無い……いや、これから酒だけはあるアジトに帰っていく。

そしてまたこの場所に来て、今度はサーヴァント2騎が入った樽を運んでいくのだろう。

第19章 砂漠行く賊なんという？

第90話 悪夢の中の手を取って

——目だ。

赤い瞳が、俺を見つめている。

「……あ」

竜の如き深い瞳孔、燃えるような赤の虹彩。

ただ一つだけの目は、途方もない大きさで、それ自体がまるで恒星のよう。

足場など無い暗黒空間。

「あ……」

俺は、宇宙のごとき広さ深さを持った眼に頭から落ちている最中であった。

さながら、太陽に引かれ燃え尽きていく星屑のごとく。

『アルジュナよ、オレはお前を殺すぞ、それが運命なのだから』

瞳の持ち主の声が闇で出来た空間を震わせた後、俺の体に無数の白い手がすがりついてきた。

白い手が花のようにゴミのように折り重なり、肉の蕾へ変じると、それが柔らかく割れ、中から大小さまざまな女が出てくる。

胴体を半ば溶け合いさせながら、俺に絡みついてくる顔は全て同じ。

……ガレス・キリエライトと呼ばれていた少女だ。

「死は、扉をくぐるようなもの。わたし達にとつて、生と死は等価」

何十という唇が全く同じ言葉をささやく、輪唱する。

彼女らの瞳に感情の色はなく、どこまでも無垢で純白だった。

（生きるも死ぬも……同じことなのだろうか……）

苦しい、ここでは息が出来ない。あの瞳に見られていては、俺は生きていくことなど出来やしない。

思わずあえげば、水中のように大きな泡が出た。白の輪郭を伴った空気は、落ちてい

く俺とは反対にとにかく上へと昇っていく。

(死にたい、死んでしまいたい。)

仲間は死んだ、アスカは死んだ。前の……『マスター』も……)

『彼女』を思い浮かべた瞬間、体に絡んできたガレス・キリエライトが1つにまとまり、服を纏ったある女の形となった。

アスカとよく似ている、だけど違う。

(ファイリア……ピオーネ……)

落ちていく俺の腕の中で、アスカの母であった彼女は目を開けた。

「アーチャー！ わたし、貴方の側にずっといてあげる！」

わたしと……家族になりましょう？ アスカともきつと仲良くなれるわ！」

娘よりもずっと無邪気な微笑みを浮かべながら、彼女は俺にこの台詞を言ったのだ。

けれど――。

「あっ……」

彼女の胸辺りの布地に、血がにじむ。

「あ……」

その瞳から、急速に光が消えていく。

(ファイリア！ ファイリア！)

叫んでも声は出ず、口から吐き出せるのはあぶくばかりで。

「ごめんなさい……わたし、先走ってしまつて……」

彼女が俺の頬に手を伸ばそうとした瞬間、フィリアの全身にひびが入り、ぐちゃりと内側から崩れ、指先から焦げていく。

「——！——！」

暗黒の中、発狂したかのように叫んが、やはり声は出なかつた。

腕の中で燃え、炭に変わつていく彼女の変化を止めようと強く抱きしめるが、その程度で止まるはずがない。

（フィリア！）

彼女をもう一度見ようとしたら、顔はアスカのものに変わつていた。

「——アーチャー、わたし、貴方のことが好き」

少女の唇がその言葉を紡いだ瞬間、風船が割れるように小さく女の体が爆ぜた。

……薄っぺらく脆い灰となつたアスカは、この暗黒空間の中心、燃える瞳へ落ちていく。

けれど、一番悲しかったのは彼女の言葉で。

（俺に……愛される資格なんて……無いのに……）

涙が止まらない。そして上へ流れていく。

そんな俺の隣を、流星のように落ちていくのはカイヤ・トバルカインだ。

「アーチャー961、あんたはどうしてこの世界に召喚されたんだ？」

存在に意味はあったか？ 全てを失ってまで、この世界にとどまり続けるその意義は？」

カーキ色の作業着に身を包み、金属の工具をぶら下げたズボンを履いた、白髪交じりの彼女が俺をなじる。

……カイヤとは短い付き合いだったが、こんなことを言う人間ではなかったと思う。

であればこの言葉は、『彼女から責めてもらいたかった』という俺の内なる願望から来ているものなのか。

「フィリアはあんたのせいで死んだ。

心臓をえぐり取られ、そこに爆弾を付けられて……電気と機械で無理やり歩かさされ、目の前で爆発して死んだ。

それをアス力は知らない。だってあたしもあんたも話してないから。

……生きていくのに、残酷なことなど知らない方がいい。

それに——」

カイヤは空間を泳ぎ、俺に近づいた。そして、しわの刻まれた褐色肌の両手で顔を掴む。



「俺が人殺しだと、アスカに知られたくないものな？」

顔はカイヤだが、口調はまるつきり違う。

それはまるで……まるで——。

(俺<sup>黒</sup>……！)

また姿が変わる。アルジュナ<sup>本</sup>と同じ顔、それでいて違う表情を浮かべる男に。

「人殺し！ 人殺し！ 人殺し！」

それは心からの非難の声。

「どれほど己の手で殺した？ どれほど見殺しにした？」

お前はお前の罪を忘れているのではないか？

今も！ 昔も！ 全ての罪を！」

言い返すことなど出来ない。俺は声から逃れたくて下を見る。

燃える瞳がこちらを射抜いていた。

「アーチャー961！ 貴様は死ぬべきだ！」

アルジュナを失い！ <sup>クリシュナ</sup>黒の責も全うできず！ ただ生きているだけの存在など！

英雄足り得ない！

サーヴァントとして、存在し続けて良いはずがない！」

男の手が俺の首に伸び、喉と骨を潰すほどの力で絞め上げた。

(……知っていたよ)

下にある瞳からも目をそらし、星など無い闇の彼方を見上げる。

(自分は死んだ方がいいなんてこと、ずっと前から知っていた)

自ら殺されることを受け入れようと、目を閉じる。

けれど。

「——いいえ。それは違います。

アーチャー961は、わたしを助けてくれました」

絞め付けが弱まる。誰かが、俺の首にかけられていた男の手を外したのだ。

(誰だ?)

……彼女の声を聞いて、もう一度だけ目を開けてみたいと思ひ、まぶたを開く。

「死ぬことを受け入れていたわたしを、助けてくれたのです」

闇の中で光り輝く少女は、圧倒的なまでの生命力の擬人化にも見えた。

ただ一つだけの体で、懸命に闇の中泳ぐ彼女の名を、俺は心の中で呼んだ。

(ガレス・キリエライト……)

先ほど見たぐちやぐちやの群体ではない。キリエライトは淡く光る白のワンピースをなびかせながら、とにかく足をばたつかせている。

彼女は片方の手に、俺の首を絞めていた俺の手を掴んで、引きはがそうとしていた。

キリエライトは口からあぶくをこぼしながら、男に言う。

「彼は、英雄ではないかもしれない。」

そうあろうとしているだけの、ただの人なのかもしれない。

でも……その『ただの人』である彼が、わたしを助けてくれた」

男の輪郭が薄れ、端から散り散りとなっていく。

「——とても、嬉しかった」

その言葉がとどめにでもなったのか、黒を司る男は消滅していった。

「アーチャー961」

ガレス・キリエライトは、闇の中を慈愛の笑み浮かべたまま泳ぎ、そしてとうとう落ちていく俺と手をつないだ。

（――）

落下が、止まる。

それだけではない。

下で、その輝く虹彩を収縮させていた悪竜の赤い瞳の動きまでも止まった。

自分達以外、全てが静止した時の中でキリエライトは微笑むと、俺の首元を指す。

（職……員……証……）

謎の男、ロマニから託された物が、紐で繋がれ胸元できらきらと光っている。

（そうだ。俺、これを預かったんだ。

トワ・キリエライトという、どこにいるか分からない女の子に、これを……渡して欲しいって……。

何もかも無くしてしまっただけ、この約束だけは残って……）

彼女は俺の両手を握り、頷いた。

「どうか死なないで」

暗闇の中で光を放ちながら、彼女は言葉を紡ぐ。

「そして、生きること恐れないで

命は何度だって生まれ、次の新しい場所へ冒険に向かうものなのですから」

冒険、と呟けば、声の代わりに空気の泡が口から出る。

「願わくばその冒険の中で、もう一度大切な人に再会できますよう。

祈っています。生と死の向こうから、わたし……」

声はどこまでも優しく、俺と繋ぐその手に込められた力はどこまでもささやかだった。俺は彼女にお礼を言おうとしたけれど、やはりこの空間では声が出ない。己の情けなさからか、涙だけはあふれて止まらなかつた。

「——悪夢の中での自問自答は終わったか？ 幼子よ。」

貴様の夜泣きにも飽いたわ」

空間にひびが入る。それほどまでの力ある存在の声が、辺りにこだました。

(ガレス！)

手を繋いでいた彼女は、笑顔のまま消えていく。

それを追いかけてやろうとしたが……空間を突き破って現れた巨大な手の、親指と人差し指で、胴体をつまみ上げられた。

「ほう……？ 少しは気迫ある顔になつたではないか」

俺を見る瞳は2つ。金の色が僅かに混ざつた輝く赤い色だ。

けれど、下に見える悪竜のものとは違う。

全てを見通し、全てを己の臓腑の中に収める——蛇の瞳。

「庭の砂を掃くのは庭師の仕事。」

であれば、子を育てるは王の職務ではなく……女の仕事であろうな」

俺はさながら芋虫のように、胴体を2本の指で挟まれ、ゆらゆらと振られている。

「そら、共に掘り出した『姉』も付けてやろう」

何かを楽しむような口調と共に、俺は指から弾かれ、闇を突き破り、ただ明るいだけ

の方へ飛ばされていく。

「せいぜい育てよう？ 欲心……」

その声を最後に、俺の意識は目覚めていく。

「——ファイリア！ アスカ！ ガレスー!!」

叫びながら俺は身を起こし、両手で辺りを探ろうと……探ろうと？

「あ……あつ……」

して、両腕がないことを思い出した。

肘より下は無く、包帯が巻かれている。

岩山をくり抜いて作られたほの明るい空間に、俺は寝かせられていたようで、見れば胴体の上に薄い毛布がかけられていた。

「……っ」

俺の神性を制御・抑制していた機械部品はもうどこにもなく、空気に晒された顔や肌は、なんだか異様に無防備と感じ、心細い。

「は——い！ お呼びでしょうか——」

叫びが外まで聞こえたのか、誰かがばたばたと走ってくる。

「あつ！ 起きたのですね、『アーキマン』殿！」

岩陰から顔を覗かせたのは、人なつっこい表情の少女。

緑に染められた服の上に、飾りのない薄橙色のチュニツクを着て、武器は身につけていない。

金色の髪の一部は黒い房となっており、大きな丸い瞳も相まって、子犬のような雰囲気を持つている。

ともすれば素朴な村娘にも見えるが、彼女がサーヴァントであるということを、俺は本能で感じ取っていた。

「怯える必要も、逃げる必要もありませんよ。」

ここに貴方の敵はいないのでから……」

彼女は俺の側でひざまづくくと、金属製のバケツに汲まれていた清水の中へ布を浸し、固く絞ってから額を拭いてくれた。

「冷や汗がこんなに……」

甲斐甲斐しい『姉』のように、彼女は俺の顔に冷たいタオルを当ててくれる。

「……その、貴女は、いったい」

目の前のサーヴァントは敵ではないことは分かるが、それ以外何も分からない。

状況を知るために、彼女へ質問をした。

「おつとと……確かに、自己紹介がまだでしたね。失礼しました」

膝をついたまま少女は一礼し、胸に手を当てながら話し始める。

「サーヴァント、ランサー。真名をガレスと申します。

アーサー王が治めし円卓の騎士、その第七席を預かった者です。

これからよろしくお願ひしますね！ アーキマン殿！

……あれ？ いま初めて名乗りましたのに、どうして私の名前をご存知で？」

ガレス。その名は、俺が助けようとして、救えなかつた少女と同じ響き。

……なぜ、悪夢の中であの少女が俺を助けてくれたのか、理由が分かつたような気がした。

第90話 悪夢の中の手を取って

終わり



## 第91話 元型の男（アーキマン）

「まあ……そんな小さなこと、今は置いておきましょう。

アーキマン殿、お水をどうぞ」

ガレスと名乗ったサーヴァントは、コップを俺の口元に近づけると、背中に片腕を回し、飲みやすいように体を支えてくれた。

俺は唇をつけ、少しずつ液体を飲み干していく。水は冷たく、甘さすら感じた。

「拭きますねー」

濡れた口周りを布で清められた。

「その……ありがとう」

「いえいえ。怪我人の看護やお世話は慣れていきますので、お気になさらず！」

彼女は明るくそう返すと、固い岩の地面に腰を下ろす。

俺はいくつか質問してみることにした。

「（一）は（二）だ？」

『砂塵の迷宮』、その中の比較的安全な場所に作られたアジトです。

アジトに、何か特別な名前があるという訳ではないそうで……」

「俺はどうしてここに？」

「私と一緒に回収？ 保護？ されたからですよ！」

「どうやら私と貴方は、樽の中に詰められ、数種類の酒と共に同じ場所に捨てられていたらしく」

「まるで誰かから聞いたような口振りで話すんだな」

「うう……その通りです。全部他の方達から聞いたお話ばかりで……」

私、どうしてこの世界に召喚されたのか、マスターが誰であるのかも分からず……

情けないやら、恥ずかしいやらです……」

目を伏せ、肩を落とす彼女。俺は質問を変えることにした。

「俺は何日ほど眠っていた？」

「えと……アーキマン殿は2日ほど眠っておられました」

「ガレス以外にもサーヴァントが居るのか？」

「はい！ 皆さんとつても陽気で良い方達ですよ！」

それに、私達を助けてくれるほど親切で！

……ちよつと困った部分もありますけど、アーキマン殿もきつと打ち解けられるはず  
です」

「……なぜ俺をアーキマンと呼ぶ？」

ガレスは小首を傾げてから、俺の首元を指差した。

「だって、そこに書いてあるではありませんか」

首を曲げて、ぶら下がっている職員証を確認する。

……擦れ、人物が分からなくなった写真と、読めなくなった文字がそこにあり、判別できるのは『ロマネ・アーキマン』というあの男の名前だけだった。

「……アーキマン」

その名を舌の上で転がす。

「私、何か良くないことを言ってしまったでしょうか……？」

不安そうなガレスの顔を見ながら、俺は数秒考え込んだ。

（……アーチャー961というのは、『アルジュナ』に与えられた呼び名。

何より、アスカが俺を呼ぶためのものだった）

目の前で、軌道エレベーター外周の足場の崩落に巻き込まれ、死んでしまったであろう彼女の姿が脳裏に浮かんだ。

（……アルジュナという名は、英雄のみが名乗ることを許されたもの）

戦場に立ち、時に戦車で駆け、時に地を蹴って戦い抜いた、誇り高き戦士の姿を思い出した。

(そして俺は……アルジュナを失った俺は、クリシュナ 黒ですらない)

悪夢の中で言われた言葉の数々が、脳内に反響する。

(そも『クリシュナ』は、元をただせば『アルジュナ』の友の名。

敗北を重ねている俺には重すぎる。

……ならば、俺は名無しか)

けれど、そんな個人的な理由で「名無し」と言っても、ガレスを困らせるだけだろう。

「いや、ガレスは何も悪くないよ。

……うん、そうだ。俺の名前はアーキマン、アーキマンだ」

彼女から目をそらしながら言う。

「では、これからもそうお呼びしますね」

ガレスは何を気にすることもなく朗らかに返事すると、またにこりと笑った。

それを視界の端へ映しながら、俺は思う。

(……これからはこう名乗ろう)

アーチャー961でもなく、アルジュナでもなく、クリシュナ 黒でもなく。

——アーキマン、元型の男だと。

(……名を借りるくらい、あの男は許してくれそうだ)

髪を長くのばした、緩い雰囲気の男の顔がまぶたの裏に浮かんだ。

「あれ、アーキマン、起きましたの？」

間延びした声と酒精の香りが共に漂ってきた。

金属製のジョッキ片手に、岩をくり抜いた入り口の縁に寄りかかっているのは、170cmほどの背丈を持つ、肩を出した黒い服とスカート、黒タイツを身につけた金髪の女だ。

「うん？ なんだ、アーキマン起きたんだ」

そんな彼女の足につかまり立ちしながら、ふらふらとジョッキを揺らしているのは、顔に斜めの傷を付けた白髪の少女。背丈は160cmくらい。

露出が多い金髪の女とは対照的に、首元まで黒いコートで覆っている。

ガレスは先ほど言っていた「皆さん」というのが、彼女達のことなのだろうか。

「えへん……ご紹介しますね」

突然現れた人物に対し、かける言葉を俺が迷っていることに気がついたのか、ガレスが石の地面へ座り直して、手を向けながら、2人を紹介してくれた。

「金の髪の女性が、アン・ボニー」。

銀の髪の女性が、メアリー・リード。

なんとびつくりなことに、二人で一組のサーヴァントなのですって！」

「よろしくお願ひしますわね〜」

「よろしく〜」

両サーヴァントは指先をひらひらと動かして気だるい感じに返事をする、立つたままジョッキに口付け、2人だけの世界に入ってしまう。

「賭けはメアリーの負け！」

後でおつまみ代わりの栄養プロック、くださいましね？」

「はあ……あんな怪我してたのに、消滅せず目を覚ますだなんて……当てが外れたなあ。」

最近とんと運が無い。運命の女神様に嫌われたかな」

「そういう話、海賊の間でもたくさん聞きましたわねえ。」

えーつとなんでしたっけ、『冒険を忘れ、長き停滞に沈んだ船乗りには、ここ一番で運

が逆向きに働く』？」

「どこの誰の言葉だったかな？」

「場末の酒場のじじいの言葉です、きつと」

そんな会話をしながら、酒を飲み干していく。

「……お2人とも」

しかし、それをそれとして終わらせようとしなかったのが、ガレスだ。

「そちらのジョッキ、今日で何杯目でしょうか」

「うっ」

「げっ」

美酒に酔っていた2人は、彼女からの言葉に同じタイミングで顔をしかめた。

「……数日前、ガレスは言いました。

『お酒を楽しむのは結構。なぜなら適度なお酒は明日への活力になるから。

けれど——』」

しかめ面になったのはガレスも同じだ。

少女は大声を出すために、胸一杯に息を吸う。

『節度を忘れ、じゃぶじゃぶ飲むのはいけません！』

そのジョッキの湿り具合……5杯は飲んでいると見ました！

違いますね！」

「わあ……合ってます！ 流石は伝説の円卓の騎士様ですわ！」

「うへえ。アンつたらずいぶん酔ってるなあ……。」

「ここはひとまず撤退、てつたーい！」

メアリーは相方を引きずるように去っていく。

「あつ、こら！ 待ちなさーい！」

それをガレスが追いかけると、俺は部屋に1人になった。  
下を向きながらつぶやく。

「……騒がしい人達だな」

「——なんだい？ 賑やかなのは嫌いかい？」

上から降ってきた声に、はっとして顔を上げる。

「アタシは好きだけどねえ、こういうの」

目と目が合う。

その存在もまたサーヴァントであり、白浜の色を透かす海のような、澄んだ青の瞳をしていた。

「女も男も大酒飲んで！ 笑って笑って酔いつぶれて、時には酒場の床に転がって寝るっていうのも……オツじゃないか！」

言い終えてから、快活にそのサーヴァントは笑うと、ぐいっとジョッキの中身を飲み干し、宝を品定めするような目で俺を見つめた。

「それとも、お堅い英雄様はふかふかの寢床の方がお好みかい？」

……『アーキマン』

彼女は一見、酒に酔って上機嫌で、足取りもおぼつかないようだが、それは違うと俺は分かっていた。



その瞳はどこまでも冷静に、俺が何を考え、次に何を言うのかを見定めている。

「……」

言葉に詰まる。ひりつくような沈黙が部屋を支配していた。

「……あーアタシが悪かった」

彼女が俺からすいっと目線をそらして、なぜか誤った。

「起きたばかりの怪我人に問いを仕掛けるなんて、らしくないらしくない……」

決まりが悪そうに眉をしかめ、酒を飲もうとしたが、その中身は数秒前に彼女自身が飲み干してしまっていた。

銀の空のジョッキを逆さにしながら、彼女は口元に大きな弧を作り、笑みを浮かべる。

「アタシの名前はフランシス・ドレイク！」

太陽を落とした女……って言えば、アタシがどういう奴かって少しは伝わるかい？」

アスカと共に見た文書や映画を思い出す。

『フランシス・ドレイク』。

世界一周を生きたまま成し遂げ、母国であるイギリスに巨万の富をもたらし、無敵だと言われていたスペイン艦隊を打ち倒した……海賊だ。

男性だとデータには記されていたが、まさか女性であったなんて。

「こつちに來な、アジトとアタシの船員を紹介してやる！」

俺を見下ろしながら、起きるように手招きした彼女。

「……手は借りない」

膝と腰の筋肉を使いながら、俺は立ち上がる。

「へえ……なかなか勇ましいこと言うじゃないか。」

アンとメアリーは良い『お宝』をみつけたねえ」

エネルギーシユな声で話しながら歩く彼女の後ろを、俺は両腕の無い体を動かしてついて行った。

案内された場所も、俺が寝ていた部屋のように岩山の中の空洞だった。

しかし、高い天井は曲がりくねりながら外へ繋がっているようで、注ぐ日の光が何回も反射を繰り返して、空間を柔らかく照らしていた。

「キャプテーン！」

「我らがフランシス・ドレイク！」

機械を横倒しにして作ったテーブルにだけかかっている2人は、俺達の姿を見るなり乾杯の音頭を上げた。

腕組みをしながら、それを監視するガレスの目は据わっている。

「誉れ高き円卓の騎士様！」

アタシ、その飲んだくれと酒の管理をアンタに任せたはずだけど？」  
笑いながらドレイクは彼女に声をかける。

「ご心配なく、ドレイク卿。」

お酒の残量はまだありますし、『あの杯で最後にする』と2人から言質を取りましたので」

そう言い終えてからガレスは鼻を鳴らした。海賊達の振る舞いに少々立腹しているようだ。

「そうで一す！ この一杯が最後で一す！」

「そうだよー！ これで最後最後……」

ガレスの怒りもどこ吹く風と言った感じで、アンもメアリーも笑顔で酒を飲む。  
「全く……自堕落にもほどがあります。」

日の高いうちからお酒を飲んで、ごろごろと寝てばかりだなんて」

あきれ声で話すガレスの肩を、ドレイクは軽い調子で叩いた。

「それは今日までの話さね。」

アーキマンが起きた、アンタという頼もしい仲間も加わった。

そろそろ……冒険をもう一度始める時じゃないかい？」

瞳に宿る光は険？だ。

「そうです！ 冒険！」

「海賊はいつだって冒険を求めてるー！」

「はいはい。飲んだくれども、これから会議だ、しゃんとしな！」

テーブルの上にとろけるように突っ伏している両者を、急かすようドレイクは手拍子した。

それから、俺の方へ振り返る。

「アタシの仲間はこの間に居るので全員さ。

アン・ボニーとメアリー・リード。

宝と酒、冒険と戦いが大好物な、骨の髄まで海賊の2人。

そして……あの伝説の円卓の騎士にして、白い手、ガレスホーメイ！」

「おっ……お褒めにあずかり光栄です、ドレイク卿！」

照れくさいのか、伝説とまで呼ばれた彼女は頬を指でかいた。

「しかしまさか、槍試合で敵なし、武勇も名高い騎士ガレスが女だったなんてねえ。

まあ……それはアタシも人のこと言えないか」

「ドレイク卿。女や男などの性別で、偉業の価値は変わりませんよ。

人はその人に出来ることをするまで、です！」

そんな会話をしながら、少女騎士は床に転がる包装紙などのゴミを拾い集め、会議の

ために場を整えていく。

「テーブルの上も片づけます。

お酒は終わり！ はい、酔い覚ましのお水です」

ジョッキを取り上げられたアンとメアリーは嘆くが、そのまま顔の前にコップをドンと置かれては、黙るしかないようだった。

「アーキマン殿もどうぞ！ コップにはストローをさしておきますね。

お代わりもありますので、お求めであればガレスに遠慮なくおっしゃってください」

「あ……ありがとう」

並々と注がれた清水の中に、金属製の管が刺さっている。

ふと疑問が浮かび、ガレスへ訪ねた。

「こんな綺麗な水をどこから？」

それに、お代わりを望んで良いほどの量があるのか？」

「地下水が湧く泉があり、そこから汲んできました。

量についてもご心配なく。たっぷりとありますので！」

「……そうなのか」

「水浴びなどされたいでしょうし、後程、泉の場所についてお教えしますね」

「うん、頼む……」

彼女に答えながら、不思議なことがあるものだと考えていた。

モモ、バーサーカー04、アスカとの旅の途中、地形をつぶさに調べても、水が湧く場所など見つけることは出来なかった。

だから常に水の残量に気を配り、雨など降らないか案じていたりもしたのだが……。

(……には、浴びれるほどの水がある)

水があるから、ドレイクらはここをアジトにしたのか。

それとも、何らかの手段で水を導いたのか。

泉の存在は、どこか引つかかる情報であった。

「さて、堅苦しい会議の時間だ」

「あの作戦についてお話されるのですよね？ ドレイク卿」

「そうそう。」

アーキマンが起き、人員が増えた今だからこそ、成功の可能性も高まるつてもんさ！  
椅子などないので、立ったまま会議が始まる。ドレイクとガレスが中心となつて話を進めていくようだ。

「けれどその前に……アーキマン、アンタが船員として使い物になるかどうかを見たい」

「……何か試練でも与えるのか」

「そんなんじゃない。もっとシンプルな話だ。」

「……一度霊体化しな、それで自分の傷を治しておくれよ」

空の両腕を見る。

彼女の言う通りだ。サーヴァントならば、霊体化、その後実体化をすれば、ある程度の傷は治る。

「……」

俺は霊体化して。

「……！」

再び実体化した。ところが。

「傷が……治っていない!?!」

思わず驚愕の声を出してしまった。

腕は依然として中途半端な長さで断ち切られており、回復の兆しなどありはしない。

「……本当、嫌な勘ばかり当たるもんさ」

狼狽している俺に視線を向けながら、ドレイクはそう呟く。

「嘘だろ？ サーヴァントなんだから、多少の傷は霊体化で治るはずじゃあ……!」

メアリーがその青い目を見開きながら、常識外の事態に対して、若干の恐怖を顔へに  
じませた。

「アンはそんな相方の頭を撫でながら、赤い瞳で全員の様子を油断なく見つめている。……こうなるとキャプテンは分かっていますか？」

そして一言、彼女へ向けた。

聞かれたドレイクは腕を組みながら、眉間のしわを深くする。

「アタシと言うより、アイツが気づいてた。」

『アーキマンの傷は、ただの傷じゃあない』って。

んっ、これ以上は本人に話をさせた方が早いか……」

肩をびくつかせてから自身の体をさすると、くるりと背を向けてしまった。

「ちよいと待っておくれ。」

ううん……これ、ぞわぞわするし、うんと昔を思い出すから好きになれないねえ……」

何かを取り出し、顔の辺りで動かしている。

（あれは……灰色の口紅か？）

化粧という細々とした作業とは程遠いイメージを持つドレイクが、品を片手にこそそこと顔へ色を添えている。

数分後に、彼女はもう一度こちらへ居直った。

「——目覚めの気分はどうかしら？　腕無しのお方」

その声に、俺以外の全員が臨戦態勢となった。



緊張が空間へ満ち、コップに注がれた水は震える。

「あら……そう、わたしはみんなの嫌われ者なのね」

唇に灰の色を乗せ、声には湿り気を纏い、雰囲気が一変した彼女。

彼女は拗ねたような口調で言うと、その長い指で濡れたコップの縁を円描くように撫でた。

「ふふ……それでもいいわ。ぜんぶ、構わない……」

海を思わせていたドレイクの青の瞳は、地平線へ沈む太陽の如き黄金色こがねとなつてい  
る。

「これはいつたい……」

「彼女は、私達の仲間の一人であり……」

「厄介極まりない海賊公女様です！」

俺の疑問に答えようとしてくれたガレスの言葉を、アンが金の髪を振り乱しながら  
遮った。

「はあ……アンは本当に権力者つてヤツが嫌いだね。

ま、僕もそこはおんなじだけど」

先程の動揺から持ち直したのか、メアリーはため息を交えながら、変化したドレイク  
について説明してくれる。

「彼女は……キャプテンドレイクの裏人格！ とか、そういうのじゃないよ。名前はダユー。」

フランスに伝わる伝説、背徳の都イースの主。そして都と共に沈んだ女。何の因果か……我らがキャプテンの霊基に精神だけくつついている。

トラブルばかり起こす、困った海賊公女様だよ」

紹介を受けたダユーは、金の瞳をますます輝かせ、俺をなぶるような目線で見ても、笑みを深くした。

第91話 アーキマン 元型の男

終わり

第92話 欲しいものなら奪いましょう、やりたいことは見つけましょう

「——足りないわ」

フランシス・ドレイクが行った化粧を合図にして、その内側から意識を表に出したダユー。

背徳的な伝説と共に知られている彼女は、現れるなり、金の瞳を瞬かせつつそんな一言を漏らした。

「何が足りないのさ」

メアリーは白髪を揺らして小首をかしげた。

疑問ある表情を浮かべた彼女に視線を投げながら、ダユーが唇を動かす。

「ダメよ、可愛いメアリー」。

そんな説明では、わたしの立場がどれほどのものなのか、腕なしのお方に伝わらないじゃない」

「……」

王侯貴族のような口調で語る彼女。

メアリーはそんな態度に慣れっこなのか、傷のある顔をしかめ、無言で肩をすくめた。

丸テーブルの向かい側に立っていたダユーは、歩いて俺へ近づくと、自身の赤い衣の裾を摘まみ、淑女のように腰を少し落として、膝を軽く曲げ品のある挨拶をしてくれる。

その後体勢を直すと、琥珀を思わせる澄んだ瞳でこちらを見上げた。

「初めまして、腕なしのお方。」

わたしはグラドラロン王の娘、ダユー。

自由なる略奪の都イースを統べる者。その中での行い全てに、わたしの名を以て許しを与える者。

水上において最も美しく、最も尊ばれるべき高貴なる花」

……あまりにも尊大な物言い。ともすれば、自らの実力も分からず立場をひけらかしているだけの言葉にも聞こえるが、彼女の声からは強い誇りと確固たる自信が読み取れた。

(振る舞いといい思想といい……ダユーという女は、天性の『王』か)

王とは、人の身にして人ならざる者を指す。

……人のままでは王になり得ない。

故に、誰もが何かを犠牲として王となる。

宝物、家族、心、肉体、人間性、産まれ……など。

そこまでしてようやく、王は人の上に立つ者となる。

そこまでしたからこそ、民草は王を王として尊ぶのだ。

(ダユーは、王とはなんたるかを産まれながらに理解している……)

まだ数分しか彼女と接してはいないが、生前の悪行はどうであれ、その気高さは十分に理解できた。

——公女たる自分のみが人を管理し、統べる権利を持っている。だからこそ自分は高く貴重な存在なのだとの底から思い、責に対して誇りを感じている。

……そう、考えているのだろう。

(メアリー達の言う通りだ。

『厄介な海賊公女様』……癖の強い相手だ)

このままでは相手の纏う王気オーラに呑まれる危険性もある。

であれば、俺がするべきことは。

(俺の腕が治らない原因について、彼女は何か知っていそうだ。

それを直球で聞いてみよう)

仲間を無くし体を欠損し、もはや約束しか持っていない身だ。公女のご機嫌をとるた



「……貴方の腕はね、奪われたの。」

そして、奪われたものが再び貴方の元へ帰ってくることは……」  
灰に塗られたダユーの唇が、音を放つべくゆっくりと形を作る。

「——ない」

……希望を断つ言葉を。

「っ」

思わず下唇を噛んだのは、その発言に嘘やかにかいなどが感じられなかったからだ。

「……公女ダユー」

緊張が高まり、硬直を始めた会話に割って入って来たのはガレスだ。

「アーキマン殿の傷は、ある種の呪いのようなもの……なのででしょうか？」

癒えぬ傷を与える術など、ブリテン島でもいくつか見たことはありましたが……」

「そうね。執念が生んだ、呪いみたいなものかもしれないわ。」

その腕を奪った者はきつと……すぐくすぐく餓えていた」

気にかかる言葉があり、俺は思わず聞き返す。

「餓え？」

ダユーは口角を上げ、蛇の如き微笑みを浮かべると、こちらを見た。

「羨望、と言い換えても構わない。」

……その誰かさんはね、欲しいものを、自分には手に入りっこないって諦めかけていたのに、目の前にやってきたから欲しくなっちゃった。

よっぽど羨ましかったのよ、あなたのことが」

「俺が……羨ましい？」

彼女の言っている意味がよく分からない。

アルジュナを失い、心ひとつだけで世界に放り出され、生きる意味も価値も見いだせず。

（マスターも守れず、とうとう両腕まで失った男のどこに、羨むようなものがあるのか。

……いや、待てよ？）

情けない事実を並べる前に、思い出すべきことがある筈だ。

（『……私と家族になっておくれ！ いったって笑いの絶えない、素敵な家族に！』）

脳内に響いたのは、狂い人のように見えた女神リリスの発言の数々。

まずは羨望。次に。

（『私の家族になつてくれない存在なんて、いらない』）

諦め、呪い。そして、怒りで揺れていた彼女のペリドット色の瞳を思い出す。

（……まさかりリスは心の底から、サーヴァントとの家族関係を欲していた？）

あの言葉の数々を「俺を苛立たせるための口から出任せ」や「狂気からくる言葉」だ



と判断していたが、そうではなく、よもやりリスは本当にそれを望んでいたというのか？

(だとしたらあの女、どこまで……)

狂っているのか。純粹なのか。

過去を含めて逡巡する最中——ふと、思い出した景色があった。

『わたしと家族になりましたしょう？ アスカともきつと仲良くなれるわ！』

初めて出会った時、自分にそう笑いかけ、手を差し伸べてくれたフィリアの姿を。

『いきましよう？ わたし、あなたと生きていたくなつたから』

人工植物が生い茂る明るい庭で、膝をついていた俺を立ち上がらせた、小さなアスカの姿を。

——リリスはこんな関係性が欲しかった。そして欲しがつたんだ。

俺から奪おうとして……出来なかつたから羨んだ。

だからあれほど、俺を絶望させようとしてきたのか。

……自分が、そうだったから

ダユーの言葉で、ただの狂った女のように見えていたりリスの本質が、少しつかめたような気がした。

「アーキマン殿……大丈夫ですか……？」

かなり長い時間沈黙し、考え込んでいたのだろう。そんな俺の様子を、ガレスが丸い瞳で伺っていた。

「ううん、なんでもない。少し考え事をしていただけだ」

心を配ってくれた彼女に一言いれ、ダユーに再び顔を向ける。

「腕なしのお方。わたしがあなたへ伝えたいことは、今はこれだけ。

そうね、次にお会いするときには……」

彼女は両手を腰に当て、その豊かな胸を張り出すと、俺へ顔を近づけた。

吐息の温度まで感じる距離。

「——わたしの好きなことのお話を、いっぱいしましょう？」

更に詰め寄られ、ダユーの灰色がのった唇が肌へ触れそうになる。

金の瞳に自分の黒の瞳が映る。彼女から逃れたくとも、咄嗟には出来ず。

その時。

「はいはいはい。そこまでです」

ダユーの両脇に誰かの手が入り、俺から引きはがしてくれた。

「作戦会議の途中ですし、キャプテンドレイクをわたし達に返してくださいな？」

赤い瞳を不機嫌そうに細めながら、ダユーの耳へ声を流し込んでいるのは、金の髪を

持つ海賊、アんだ。

「……言われなくても。」

フランシスったら、わたしの中で先からずつとうるさいのだから掘ねた顔でダユーがすらすらと不満を言う。

両脇の下に腕を通され、アンの体へ背中を押し付けられるようにして拘束させられているその姿は、悪い遊びを親の手で中断させられた少女のようだ。

「ドーレーイークー！ と、呼ばないと、またキャプテンがへそを曲げますわよ？」  
「そんな名前を呼ぶのなんていやよ！」

だつて……フランシスの方が愛せる響きだわ」

「さつさとキャプテンに変わる！」

「お父様、みんながダユーを虐めるわ……」

最後に深々とため息をつくとき、彼女は琥珀の瞳を閉じた。

そして数秒後。

「……ダユーときたら、妙に上機嫌だったねえ」

目が開かれる、色は青。意識がドレイクに戻ったようだ。

「それに……いつもより言葉遣いが上品だったかな」

と、キャプテンの発言に言葉を付け足すのはメアリー。

「アーキマンのことを狙ってでもいるのでしょうか？」

そして、相方へそう返すのはいつも通りアんだった。

「アーキマン狙わないの？ 良い男じゃん」

「わたし、今回の現界ではそういうの……ちよつと控えます。

嫌な目に遭いましたし……」

「あーそうだった、そうだった。思い出させちゃつてごめんね」

「許してあげまーす」

気心知れた仲同士の会話を聞きながら、ドレイクは姿勢を直し、腰を伸ばし肩と首を回す。

次に、服の内側から刺繍が施されたハンカチを取り出して、そつと灰色の口紅を拭えば、俺が初めて出会った時の彼女の状態へ戻っていた。

俺の向かい側に移動しなおして、テーブル上のコップから水を飲み、会議を再開させる。

「アーキマンの腕が治る見込みは無し。この問題に関しては、今は置いておくしかないね。

——仕切り直して、本題へ入ろうか」

ガレスが一瞬不安げな眼差しを俺に向けてきたが、直ぐに話しているドレイクへ戻した。

「ガレスやアン、メアリーには言っているけれど、アンタはアタシ達がどうしてここのアジトに詰めているかの理由をまだ知らないね」

「はい……」

彼女の言葉に俺は頷いた。

「ここはね、『砂塵の迷宮』と呼ばれる地形の中。

かつて散つていった無数のサーヴァント達、その怨念と熱砂が混ざり、吹きすさぶ場所さ」

「迷宮……ということとは、簡単には出られないのか？」

「察しがいいね、アーキマン。脱出には幸運の女神様に微笑んでもらう必要があるだろう。それか空にかつ飛んでいくか。

……でも、無一文で天に祈り、見上げ、せこせこ逃げ道を探すのなんて賊らしくないし。

そんなことのために、この迷宮に自分から飛び込んだ訳じゃない」

「自ら足を踏み入れたのか?！」

「ああそうだよ?」

俺の驚きを、ドレイクは飄々とした声でさらりと流してしまふ。

「……何のためにお前達はここにいるんだ?」

わざわざアジトまで構えて……」

辺りを見渡してみる。吹く砂が岩を削って出来たであろう洞窟には、誰かが運び込んだような機械や家具がいくつも置かれていた。

「そりゃあもちろん！ 『お宝探し』のため！」

俺の率直な疑問に対し、ドレイクはというと満面の笑みで返してきた。

彼女は夢見る童女のように瞳を輝かせながら話を続ける。

「亡者渦巻く砂嵐を抜け、死血湖（しけつこ）を渡り、迷宮の最深部にたどり着く。

……亡霊に関しては、アタシはちいつと苦手だけど、今はダユーが何とかしてくれるから問題なし！」

彼女は夢見る童女のように瞳を輝かせながら話を続ける。

「迷宮の最奥、そこにある『伝説の船』を手に入れ！ 世界最後の海が残る場所、南極へ向かうのがアタシ達の目的！」

「南極……！」

思わず繰り返してしまった。

だってそれは、いま名を借り受けている男から聞いた地名だったから。

（『キミにボクのカルデア職員証を貸すよ。そして、南極を目指すんだ。』

施設が残存していれば、システムを修復して、この星を救う方法を導き出せるかも

しれない』)

あの男は言っていた。それから。

『けれど、もし……ある女の子に出会う事があったのなら、この職員証を渡してくれると嬉しい。』

トワ・キリエライトという、ボクを勇気づけてくれた小さな女の子に。

もう、700年も待たせてしまっているから』)

……こんな願いも、口にしていた筈だ。

「どうだい、アーキマン。」

船を手に入れ、最後の海を目指す旅……なかなかどうして、胸躍る話じゃないか！」

彼女は俺を見つめながら、相変わらず笑っている。

「……本当に船があるのか？ その情報はどこから？」

体の内側からこみ上げるものを感じながらも、表面上は冷静に振舞う。

「船に関しては、あるサーヴァントから得た確かな情報。」

海の方は……この世界の人間、レジスタンスから聞いたおとき話さ」

「伽話を信じたというのか?!」

「嘘でも本当でも、どこかの誰かが『ある』と言ったなら、信じてみるのが海賊の浪漫つてやつ？」

ドレイクは俺だけを目に映しながら、赤い唇を尖らせる。

「……浪漫」

呟いてみる。

浪漫。ロマン。ロマニ・アーキマン。

そんな単語が、頭の中をぐるぐると回っていた。

「アーキマンには、海賊の浪漫ってやつは分かんないかもねー」

「アーキマンは、心躍る浪漫を追ってみたいと思いませんか？」

メアリーとアンが語りかけてくる。

「ガレスは浪漫のこと、ちゃんと分かりますよ！

ドレイク卿からお話を聞いた時、とてもワクワクしたのですもの！」

岩の天井を、ガレスはまるで空が広がっているかのような遠いまなざしで見上げた。

「アタシは海賊。船があれば冒険が出来る、宝探しが出来る、商売だって出来る！」

ついでに世界でも救っちまおうかい！」

キャプテンドレイクは笑っていた。

……俺は全員から目を逸らし、硬い地面を見る。

フランシス・ドレイクの物語を知っている。

そして俺は、彼女の苦勞、困難だけを知っていた。



「あつ、でもダユーはなんて言うだろうね？」

まあ……アイツも海賊だから大丈夫かあ!!」

この船探しとて、簡単に行くものではないだろう。

でも——彼女は笑っている。

道のりの困難さも、現実の厳しさも知っていながら笑っているのだ。

「どうして」

「ん？」

「どうして、貴女は笑えるんだ？」

苦しいこと、悲しいことがたくさんあつただらうに……」

俺は胸が詰まるような思いを感じながら、言葉と息を吐きだす。

「笑いながら……何かに挑もうと思えるんだ……う？」

「それは——」

「何も得られず、失うばかりかもしれないのに！」

ドレイクに対し、そう聞かずにはいられなかつた。

彼女はグラスの中の水をぐつと飲みほしてしまつたと、俺を瞳の中心に映しながら答える。

「——人生は一度しかないからだよ、アーキマン」

その言葉、胸に深々と突き刺さる矢のようで。

「サーヴァントだつて人間だつて、それは変わらない。

召喚されることにそれつきり！ おんぎやあと産声を上げちまえば、後戻りなんてできやしない！

……なら、感じるままに、『やりたいこと』をやった方が良いじゃないか」

彼女は空のグラスを逆さまにした。雫が垂れ落ち、乾いた地面へ染み込んでいく。

「アンタ、口ではうだうだ言いつつも……やりたいことがあるつて顔してるよ？」

そう訴えかけてくる彼女の青い瞳が、果てしなく広がる高い空の色に見えた。

「俺の……やりたいこと……」

ドレイクの言葉が刺さった胸が熱くなり、まるで血潮がそこから流れ出しているかのような感覚を抱き、俺はうつむく。

(やらなければならぬことじゃなくて、『やりたい』こと……)

下を向きながら考えて——『それ』を、俺はすぐに見つけることが出来た。

命令ではなく、使命でもなく、あまりにも素朴な『人の願い』。

「……」

ロマニの顔が浮かぶ。そして彼の願いが、言葉刺さった心の傷を塞いだ。

「ある。俺にもやりたいことが……ちゃんとある……」

振り返れば、失ったものが多すぎる。

俺を見つけてくれたファイリア、カイヤ。

守るべき存在だった、アスカ。

一度は敵対したというのに、背中を預けてくれたモモ。

……俺の心に踏み込んだというのに、死ななかつたバーサーカー04。あのサーヴァント

落ちて行くばかりで助けられなかつた、ガレス・キリエライト。

……邪竜の熱線により、都市ごと焼かれた人々。

悲しみも喪失感も深い。けれど、ここで膝を折りたくはなかつた。

（自分が存在している意味も、生きていい理由も見つからない。

けれど……無意味に消え、死んでいい理由も、今は無い）

心の中だけで、自分の気持ちを言葉にする。

（――敵を倒したり、世界を救うことは出来なくとも。

――たった一人の女の子を見つけ出し、ある男の夢を叶えてやることは、出来るかもしれない）

胸元には、顔写真が消えかけの職員証があつた。

（腕が無かつたって、足がある）

俺に願いを話してくれた人がある。悪夢の中から救ってくれた少女がいる。

（……俺に、温かな思い出を作ってくれた人が……たくさんいたんだ。  
まだ歩けるよ、だから——）

顔を上げる。決意を口にした。

「……俺は、ある人と約束をしたんだ」

ドレイクもその仲間達も、静かに頷いてくれた。

「それを果たしたい。そのためには移動手段がいる。

……船探し、手伝わせてくれ！」

誰かがテーブルを叩いた。その人物はガレス。

「道のりは困難でしょうが、ここにいる全員で見つけましょう、たどり着きましょう！」

ドレイク卿が聞いたおとぎ話の終着点——最後の海を越えた先にあるという、  
楽園

アルカディア

へ！」

元氣いっぱいな声で宣言する彼女と目が合う。

……俺は、どんな表情を向ければいいのか分からなかった。

会議の後、洞窟外へ案内された。アジトは巨岩の中に作られていたのだとようやく分かる。

足元の砂は細かく、辺りは塵埃によって日の光遮られ、薄暗い。他の者が言うに、晴れるのは一週間の内ほんの数日だけらしい。

晴れ間は貴重で長く続くことはなく、この砂塵の範囲外へ楽に出られる見込みは薄いと。

俺やガレスが拾われた時、「晴れていた」との話も聞いた。

……どうやら俺は、運だけにはまだ見放されていないようだ。

「アン、これはいったい？」

「船の情報をくれたサーヴァントからの贈り物、ホバーバイクです。」

これ浮かぶんです！ 大きな荷物こそ積みませんが、とつても便利！

……砂漠を延々と2本足で走るの、サーヴァントでも心折れますので」

「いやそうじゃなく。俺のこの……おかれている状況についてなんだ」

ホバーバイクなる、先端尖った流線形のボディの下に、円盤が2つ付いて浮かぶ乗りものについてはよく分かった。

分からないのは今の状況。

俺は、鎧など付けず軽装のままバイクに乗ったガレスの胴体と、背中合わせになるようロープでぐるぐるに巻かれていた。

……まるで、後ろに積まれる備品が如く。

「腕が無いのですもの。運転の代わりに……」

アンが長い足を動かして、メアリーの駆るバイクの後ろへ腰かけ、相方の小さな体に背中を預け、後方の監視を始めた。

砂除けのためか、彼女は巨大な赤い提督服を羽織り、ドレスのように着こなしている。「後方の見張りをお任せしたいなーって。

バイク、結構荒っぽく飛ぶから酔わないようにね。

吐くのも厳禁、ぶちまける海も無いし、エチケツト袋なんて文明の力も無いし」

アンの台詞を受け継いだのは、黒コートで口元まできっちり隠したメアリー。

ハンドルを握りながら、間延びした声で俺に言ってくる。

「……」

今から始まるという船探しに、俺は先ほどの会議の時まで抱いていたものとは、別種の不安を感じずにはいられなかった。

「砂の動きが激しいね……地図の作り直しが必要かい？ まいったねこりや。

海と違って動きが読めない読めない……」

ドレイクは白い羽付きの海賊帽を被って、単身でバイクに乗りながら、前方を見つめていた。

その方向にあるのは分厚い砂の幕。数十m先すら分からない。

上空も黄土色に霞んでいるが……いまだあの『ヴリトラの眼』を恐れている俺にとっては、ありがたい空模様だった。

（あの眼に秘められた力を俺は知っている。見つければ一卷の終わり……）

けれどここは、幸いにして見通しが悪い。

如何に衛星軌道上で展開しているとはいえ、そう簡単には見つからない……と思いたい。

……とにかく今は、船探しに尽力しなければ）

脳内に浮かんだ破壊と瞳のイメージを、頭を振って追い払った。

「ドレイク」

今の状態が情けなさすぎるので、気を紛らわせたくて彼女に声をかけてしまう。

「アンタはもうアタシの船員だ。呼ぶならキャプテンと」

「……キャプテン、船の情報をくれたサーヴァントとは、一体誰なんだ？」

彼女がこちらを振り向く。

「男は、持つてきた発明品の使い方や地形の情報を喋った後、こう名乗った」

そして息を吸い込んでから、言葉を発する。

「女神リリスに仕えしサーヴァントの1体、キャスター。」

真名は言わず、『終わりなき製造の使徒』と」

……エーテルで作られた自分の心臓が、強く跳ねるのが分かった。

第92話 欲しい物なら奪いましょう、やりたいことは見つけましょう  
終わり



## 第93話 だから笑顔でいたいと

——勢い激しい砂嵐を、サーヴァントである俺達はホバーバイクで突破しようと挑んでいた。

「アン！ 貴女から見て七時の方向だ！」

俺が警戒を呼び掛けた彼女は、メアリーが操縦するバイク、その後部座席で中腰の姿勢を保っていた。

「任せましたわ……つと！」

声の後、彼女は長大なマスケット銃をこん棒のように両腕で振るい、せまってきた『敵』を打ち砕いた。アンが着ている赤い服が、風と衝撃を受けてはためく。

「ああもう鬱陶しい！ しつこい！」

神秘が（一応）宿っているその攻撃をもろに受けた『敵』は。

『アジユポ——！』

人型を崩して塵となり、砂嵐と混ざっては消えていく。

「アーキマン殿、我らの後方に敵は……?!」

「今のところは見えない。そのまま飛ばし続けてくれ、ガレス！」

背中を預けている少女の声に俺は答え、再び後方、そして左右へと目を配る。

走行時速は約200km。

全てが瞬く間に過ぎていく風景の中、同速度で飛び出しては追いつがって来る敵を視認し、反応出来る存在など、サーヴァントくらいなものだろう。

「キャプテン！ 死血湖しけつこまであと——」

「っ！ 駄目だ、全体止まれ！」

最も先頭を走っていたドレイクに、ガレスが目的地までの距離を聞くが、返ってきたのは切迫感のある声だった。

「何事だ、キャプテン！」

「アーキマンからは見えづらいだろうけど、前方に渓谷が出来てる！」

距離は不明、渡りきれない！」

3台のホバーバイクはその場で急停止した後、衝撃を散らすため、ふわふわと上下した。

後部座席にいる俺は、首をひねり、ドレイク達が見ている方向を視界に映してみる。

砂嵐で黄土色に霞む風景の中に、巨大で全貌がようと知れない渓谷が、深々と口を開けているのが見えた。

「仕方ない……一度撤退だ！ アジトに引き返すよ！」

ドレイクのUターンに合わせ、メアリーもガレスもバイクの方向転換をなめらかに言い、帰路を目掛けて出発する。

「……まあ、こういう日もあります。」

アーキマン殿、気を落とされなくてくださいね」

ガレスの言葉を耳に入れながら、俺は帰り道でも敵からの襲撃を警戒し続けた。

「いやあ助かったよ！ アーキマン！」

アンタは本当に目が良いし、勘も利くねえ！

人手が増えるだけでここまで違うもんとは！」

「アーキマンのおかげで、敵に横から食いつかれずにすみましたわ」

「お疲れさま。あつお酒飲む？」

アジトに帰り、俺はドレイクやアン、メアリーから口々に礼を言われる。

（胴体をロープで結びつけられ、後方を見張っていただけなのだが……）

海賊達は地図の整理もそこに、酒盛りを始めた。

そんな彼女達を置いて俺はアジト内の通路を歩き、割り当てられた自室へ戻る。

部屋と言っても、他の場所と同じく巨岩の中の空間であり、寝具として薄い布が敷かれただけの空間なのだ。

(……明日も船探し、なのだろうか)

時刻は夜だ。電池式のランプの灯りを眺めながら横になる。

頭に浮かんでくるのは数々の疑問達。

(女神リリスのサーヴァント、キヤスター。真名は不明。

代わりに名乗ったのは『終わりなき製造の使徒』なる称号……)

軌道エレベーター内部で、俺は女神リリスと会話し、彼女が従えていた『アサシン』なるサーヴァントの存在も知った。

そして……邪竜、否、蛇竜『ヴリトラ』へと変わり果てていたあの男のことも知ってしまった。

(俺が知る限り、リリスは少なくとも2体のサーヴァントを持っている。

……『あの男』が、まだサーヴァントと呼べる存在であるかどうかは、疑問は残るけれど)

巨大な赤の眼を思い出しそうになり、寝た姿勢のまま首を振った。

気持ちを切り替えるため、思考を別のことへ移す。

(通常、サーヴァントの所有など1人1体が限界であるし、激しい戦闘行為などもつての

ほか。

……現界を保つために必要な液体リソース確保の問題と、それにかかる生存権の消費が大きいからだ)

この世界の常識と照らし合わせて考え事をしながら、俺は足を動かし寝返りをうつ。(しかしそれは、魔術的な繋がりを持たない単なる『所有者』の話。

アスカと俺はその繋がり……契約を持っていたし、モモ、バーサーカー04とて同じく)

ランプの光が少しまぶしく感じ、目を細めた。

(だからこそ俺は、定期的な液体リソースの補給だけで何年もアスカと共に生活が出来たし、激しい戦闘を行った後も存在が保てた。

……もちろん、やりすぎればマスター付きのサーヴァントとて消滅するが)

魔術的繋がりがあったからこそ、彼女達2人は令呪すら宿し、単なる所有者ではなく『マスター』として分類されていた訳なのだが、その話は今は横へ置いておく。

(女神リリスは、俺の腕を難なく切り落とすまでの力を携えていた。

あの力は紛れもなく魔術、神秘によるもの。

であれば、リリスはその強大な力を駆使し、何体ものサーヴァントと契約していても不思議ではないが……)

我ながら、仮定に仮定を重ねるようなお粗末な考察だが、筋は通っている。

(しかしまだ疑問は残る。)

サーヴァントを使わず、どうしてAIを僕しもとして使う？

もつと大量のサーヴァントを使えば、人類の支配も維持も容易だというのに、それをしていない理由は？

……異常なまでに、サーヴァントとの家族関係を持つことにこだわる訳は？)

俺は寝返りを何回も行いながら、考えに考える。

(『終わりになき製造の使徒』なるキャスターは何者だ？)

キャスターはなぜそれをドレイク達に明かした？ 情報や物を与えた理由は？

……本当に、リリスのサーヴァントなのか？)

キャスターのイメージは依然としてもやががかかったまま。

リリスに関しても、彼女の戦力やサーヴァントについても情報が足りない。

もう一度寝返りをうとうとしたその時、近くの壁を控えめな力で叩く音がした。

「アーキマン殿、ガレスです。お水をお持ちしました。

それと……泉の場所をご案内しようかと思つて。

お時間いただいてもよろしいでしょうか？」

少女の声が通路から聞こえた。

先ほどの音は、扉も無い部屋に向けてのノック代わりにそうしたのだろう。

「すまない、少し考え事をしていた」

「アーキマン殿のお邪魔をしてみましたでしょうか……？」

「いいんだ。考えが煮詰まっていたところに来てくれたから、むしろ助かった」

俺は上半身の力のみで起き上がる。自分の短い黒髪が視界の端で揺れた。

「泉の場所、知りたかったんだ。今からそっちに行くよ」

巨岩の中、暗い通路を、ガレスが手元に下げたランプの明かりを頼りに歩く。

「はい、到着です」

数分後、光源である電球が天井より下げられた小さな広場に出た。

温もりあるオレンジの光が、空間全体を照らしている。

その下にあるのは、澄んだ水を湛えている泉。

背を丸めて覗き込んでみれば、常通りの、黒い瞳をした自分と目が合った。

「飲料にも洗濯にも使用しています。」

地下水なので、とつても冷たいんです。飲む時や浴びる時は、びっくりしないよう気を付けてくださいね」

話しながら、彼女は泉近くまで金属製の箱を移動させた。何に使うつもりなのだろう

う。

「どの時間にお使いしても構いませんが……他の方の水浴びとかち合わぬよう、ガレスが気を配っておきますね」

彼女はただしやがみ、金属製のバケツで水をたっぷり汲むと、布を浸しては堅く絞っていく。

「アーキマン殿、その箱にどうかお座りを。」

砂など付いているでしょうし、お背中だけでも拭いて差し上げたいのです」

「しかし、何でもかんでもやってもらおうわけには……」

俺が目覚めたとき落ち着かせてくれた事といい、昼間の会議のときといい、ガレスには世話になってばかりだ。

俺から彼女に出来ているのは礼を言うくらいで、そんなこともあつてか胸に罪悪感が積もっている。

「ガレスがしてあげたいと思い、そうしているだけなのですよ。遠慮なさらず。それに……」

「……」

ガレスは手の内で絞った布をもじもじとこねた。

「……アーキマン殿のお背中に、いえ、正確に言いますと筋肉に興味があつて」



「俺の……筋肉に？」

「はい！ 今日の昼、探索の際、背中が触れ合いましたでしよう？」

その時ガレスには分かったのです……これは相当な兵の背中だつわものと！

ここまでの衝撃を感じたのは、円卓の騎士の方々の鎧着せの際、目にした時以来で——」

「なっ……！」

「どのような鍛錬を積まれたら、あれほどまでの筋肉を練り上げられるのか……その辺りのコツもお伺いしたく!!」

俺は距離を取ろうとするが、丸い目を好奇心でギラギラに輝かせている彼女は、一歩踏み込んで懐へ潜り込んでくる。

「さあ！ お背中を拭いて差し上げましょう！」

「……少し待ってくれ」

「大丈夫です！ 武具の手入れも馬の世話も、『丁寧』だと皆からとても評判だったのですから！

お体を清めるのだから、同じ感じでいけるはずです！

あれ……でもなぜかランスロット卿とケイ卿からは振る舞いをやんわりと注意されて……って、あれ？」

疑問符を頭の上に浮かべているガレスの隙をつき、俺は一瞬だけ霊体化し、身を清めた。

「もう……もう綺麗になったから大丈夫だ！」

自分でも考えている以上に焦った声が出ている。

「そう……ですか……見たかったです……アーキマン殿の背筋……」

とても残念そうな彼女には悪いが、話に出た『ランスロット卿』や『ケイ卿』達の気持ちは分かる気がした。

（裏表がない。真っ直ぐすぎる。無邪気すぎる。

好意を素直に伝えてくるこの態度……かつては、相当な数の異性をやきもきさせたのでは？）

腕があれば、こんな迷惑を彼女にかけることもないのにと、悟られないようため息をついた。

「この泉は元からアジトの中に湧いていた訳ではなく、あるサーヴァントの方の力によるものだから」

「そうなのか……」

俺は泉近くに寄せられた金属製の箱に腰を下ろしていた。水で洗濯を始めたガレス

の背中をぼんやりと目に映す。「この世界では布製品は貴重だそうですから、大切に使用しませんと……」との言葉を、彼女から先ほど聞いたばかりだった。

「そのサーヴァントはドレイク卿達と出会い、この巨岩まで案内した後、『水があれば、それで救われる人もいるでしょう』と、地面に向かって敬虔な祈りを捧げ……拳をずどん！」

ガレスは聞いた話をなぞるように、軽く拳を地面に当てた。

「……すると、冷たく甘い清水がこんこんと湧き出して来たそうぞうで。

すごいですね、奇蹟とはそういうったものなのでしょう……」

「奇蹟というより、物理攻撃では？」

「奇蹟宿る拳で殴れば、それはもう奇蹟では！」

……こほん、話を本筋に戻しましょう。

そして彼女は、『一所に留まることはせず、地上で餓えと渇きに苦しんでいる人々を助きたい』と言い残し、大亀のようなドラゴンに乗って飛び、迷宮から抜け出てしまったのだとか」

ガレスの言う、亀みたいなドラゴンの形はいまいち想像できないが、語る彼女が楽しそうなので、俺はうんうんと頷き返した。

「名も知らぬ彼女に感謝です。」

お話してくれたドレイク卿達の記憶力にも驚愕するばかりで。

……そんなことを言っている間に、洗濯が終わりそうですね。

アーキマン殿、帰る際に少しお手伝いをお願いしたいのですが、よろしいですか？」

「俺に出来ることなどあるのだろうか。昼間の探索も後方の見張りくらいしか出来なくて……」

「そう自らを卑下することはありません、いけません。」

王の執事役であったベデイヴィエル卿も、隻腕でありながら戦場では万夫不当のご活躍。

アーキマン殿だって、腕が無くてもきつと……」

俺以上に俺のことを評価してくれているガレス。

そんな彼女の腕に、何か巻かれているのが見える。泉の水で濡れないよう、袖をまくったから表に現れたのだろう。

「ガレス、そのリボンは？」

「これですか？」

彼女は顔を腕に向けながら、指先でそれを摘まむ。

「私が目覚めた時、既に巻かれてあつて……ドレイク卿達も詳しくはご存じない様子でした。」

ダニュー公女にも聞いてみましたが、心当たりは無いようで。

アーキマン殿も……この感じでは、何か知っているという訳ではなさそうですね……」

少女の指の内ではひらりと動くそのリボン。花卉を思わせる薄い紫の色で、はかなげな雰囲気を纏っている。

「ガレスも心当たりはないのか？」

「これほど上質な飾り布など、贈り物として頂いたことはありませんし、買うにしても、手が届くものではありませんでした。」

ひよっとしたら、私の死後に誰かが贈ってくれた物なのかもしれません……」

懐かしむような顔でリボンを見つめるガレス。

「ああでも、ちよっとだけ見知った感覚があったり……」

「それは？」

「少しだけ……勘違いかもしれませんが、マーリン様の魔力を感じるような……」

「マーリン、魔術師マーリンのことで間違いないか？」

「はい。王に仕え、悩み苦しみにも寄り添ったお方です。」

個人的に、ちよつぱり苦手な方だったのですが……」

マーリン。多くの伝説、物語が遺されている人物。

騎士王アーサーの師であり、友であり、人と夢魔の混血にして、比類なき力を持った魔術師だと知られている。

彼の王が伝説の聖剣『カリバーン』を引き抜く際、立ち会ったとも。

王の死後は、『アヴァロン』なる妖精の世界に建つ塔へ、永遠に囚われる運命を辿ったそうだ。

「マーリン様の気配を感じるからでしょうか……このリボンに触れていると、かつての頃を思い出してしまうのです」

リボンは、ただ柔らかくそこにある。

「悲しいことも、楽しかったことも……」

見つめる彼女の横顔は、どこか寂し気だった。

「いけない、いけない。ガレスは笑顔でいなければ」

彼女はまくついていた袖を戻し、リボンを隠してしまうと、沈んでいた顔を明るい笑みへ戻した。

「……ガレスは、どうして笑顔でいたいんだ？」

俺の口から、ドレイクに聞いたことと似たような質問が飛び出してしまった。

「あつ……すまない、出過ぎた言い方だっただろうか」

思わずついて出た言葉。手があつたなら、咄嗟に自らの口を塞いでいたことだろう。

しかしガレスは、怒る訳でも戸惑う訳でもなく、その質問に答えてくれた。

「私、皆さんには笑顔でいてほしいのです。ですがそれを強要することなどできません。

……だから、まずは自分が笑っていきましょうと」

語る声はどこまでも穏やか。

「王に仕えしかつても、海賊の一味として船を探している今も、ガレスはそうしたいと思  
い、しているだけのことなのですから」

彼女は血色の良い頬を緩ませている。その一点を見つめながら考えた。

（ガレスも……苦しいことがあつたとしても、再び笑顔を浮かべることの出来る人間な  
のか）

ドレイク、アン、メアリー、ガレス。

皆が皆、それぞれの人生を歩み、泣き、苦しみ、そして死んで……。

サーヴァントという存在になった後も、笑うことができる。

（なんて……強いのだろうか）

手が無いので、胸に寂しさを覚えてもそこを温める術がない。

（俺も、いつか笑えるだろうか）

敵を貶める時の邪悪なものではなく、皆のように……）

そう、例えば。

(——アスカみたいに、親しさや喜びからの笑みを浮かべることが出来たなら)  
可能性を思いながら下を向いていると、ガレスに肩をポンポンと叩かれる。

「お話とお洗濯につきあつてくださり、ありがとうございます。」

そろそろ休まなければ。明日も一日探索でしょうし」

「……ああ、そうだな」

ガレスは俺の腰にランプを括り付けると、洗濯物を腕に抱える。

「アーキマン殿、先達をお願いします」

暗い通路に入り、オレンジの照明で照らされていた泉を後にした。

翌日。

翌々日。

翌々々日。

そして……今日。

「むー」

「りー」

「だー」



「よー」

アジト内の机に突っ伏しながら泣き言をうめいているのはアンとメアリーで。

「ふうむ……」

難しい顔で壁に何やら図形を描き、タブレット端末（電源はどうしているのだろうか）を睨むような顔で見ているのはドレイクで。

「うーん、どうしましょう。八方塞がりと言いましょうか……」

部屋の片付けも終えて、ぼんやりと椅子に座っているのがガレス。

「……」

彼女から少し離れた場所にある椅子に座り、だんまりを決め込んでいるのが俺だった。

「砂塵の勢いが強すぎる。おかげで地形も変わって今までの地図は役立たずに。

ちよつとは見れていたお日様も、ここ数日はどこへ行っちまったのやら……」

ドレイクのぼやきを耳に入れながら、岩の天井を見上げた。

俺が目を覚まし、このお宝探しの一味に加わってから、はや4日。

探索は、遅々として進んでいなかった。

第93話 だから笑顔でいたいと

終  
わ  
り

## 第94話 全ては稚（いとけな）い者のために

いま俺がいるアジト内、照明が無くとも、天井の隙間から入る光で仄明るいこの部屋は、テーブル、椅子、使い道の分からぬ機械などが置かれ、会議にも使われる重要な場所だ。

机に上半身をべったりと突っ伏しているアンとメアリーの二人組や、タブレット片手に壁へ図形を刻んでいるドレイク、椅子に座り休憩をとっているガレスの姿を目に入れながら、俺は今日までの数日間を振り返った。

（目覚めてから2日目は……）

砂嵐の勢いが強すぎて、そもそも探索自体が出来なかった。

3日目は黒い塵で出来た亡霊に次々と襲われ、進行ルートから外れてしまい、夜を前に引き返すしかなかった。

4日目、つまり今日の探索の結果も芳しくなく。

先ほどドレイクが言っていた通り、連日の砂嵐で地形が大幅に変わり、彼女らが作り上げてきた地図が役に立たないものとなってしまった。

「アン、ラム酒ついであげるよ」

「ありがとう、メアリー」

相方より注がれた液体を喉にごくりと送った後、彼女は手の甲で口を拭いた。

「んん……ふう。」

……昨日のことといい、あの亡霊達にか勢いづいてきていませんか？」

「アンの言うとおりで。」

もごもごところちこち話しかけてくるようになったし、一段と不気味……」

2人のやりとりを聞いて、ドレイクがその背中をぶるりと震わせた気もするが、俺の見間違いだらう。数日前に「ちいっと苦手」だと言葉こぼしていたが、彼女ほどの豪気な人物が幽霊程度を恐れるわけがない……と思うのだが。

(亡霊、か……)

3日目の探索の時を思い出す。

メアリーとアンにも、ガレスと俺にも、黒い塵で出来た大量の人型がまとわりついてきたため、ホバーバイクを動かし、回避行動のためルートから大きくはずれるしかなかった。

(かつて散っていった、サーヴァント達の……)

断片的に聞こえた亡者達の声が、脳裏に蘇る。

（『……えて、きたのか』

『かえってきた、のか』

『かえって、きて、くれたんだ。俺達の、ために』

『えい、ゆう。えいゆう。えい……』

そんな言葉達に思わず問いを投げようとして、併走していたメアリーから「死者の妄言に耳を貸すな」と、注意されたことも覚えている。

（彼らは誰を待っていたんだろう、誰に帰ってきて欲しかったんだろう）

探索に出ては失敗し、1日、2日と時が過ぎて行く。

俺はこの頃、考え事ばかりをしていた。

（こんな調子で、船を見つけることなど出来るのだろうか……）

気持ちに焦りも出てくる。

しかし、俺を含めてサーヴァント達が、魔力不足や自身の消滅に関して危機感を持っていないのは、この『砂塵の迷宮』という場の特殊性もあるのだろう。

『サーヴァントの幽霊、なんて非常識な事態が起きている場所ですもの。』

わたし達、ここでは簡単に消えられないのです』

数日前、金の長髪を揺らしつつ、俺にそう教えてくれたのはアンだった。

彼女曰わく、『空気中の魔力濃度が異常に高いため、息を吸って吐いているだけで、現

界には問題ない程度の魔力は得られる』のだとか。確かに非常識な話だ。

(液体リソースの残量に気を配り、旅をしていた頃が遠い日のように感じる……)

あの半分顔を隠した緑の目のバーサーカーは、これを聞いたら何を言うだろう。

いつも通りにたりと笑って、意味深なことでも言うかも知れない。

(でもそれも、奴が消えた今となっては分からないことか……)

なんとなしに嘆息たんそくすると、ガレスやアンとメアリーが後に続いた。

「——暗い！」

書き物を終え、タブレットを机に荒っぽく置きながら言うドレイク。

「何がです？」

ガレスは、髪の一部である黒い2つの房を揺らしながら彼女を見た。

「……空気だよ空気！ うまい酒もあるっていうのになんだか湿っぽいじゃないか！」

ドレイクは片手を顔の前でひらひらとさせながら、うんざりしたかのように顔を苦々しく歪める。

「ああもう！ でも一番良くないのはアタシだ！ 本当にらしくない！」

ちまちま地図を作り！ 計画を建て！ ……亡霊まみれの迷宮に挑むなんざー！」

壁に描いていた記号に彼女は小石を突き立て、大きくバツ印を付けてしまうと、テーブルへ突っ伏しているアンとメアリーを両手で揺さぶる。

「船員ども！ 計画変更だよ！ 変更！」

「どうするのです？」

「我らがキャプテン！」

緩み切ったふわふわした声で変更内容を訊く2人。

「ガレス、アン、メアリー！ ……倉庫にある酒、ゼーんぶ持つてきな！」

「ドレイク卿、まさかやけっぱちに……！」

声をかけられた少女騎士は、大きな瞳を見開いて驚きの感情を露わにする。

「違う違う、そんなんじゃないよ！」

きやあきやあと声を上げ、はしゃいでいるアンとメアリー。そんな2人を床に転がし

ながら、ドレイクは答えた。

「後先考えて節約するなんて、みみっちいってことを思い出した！」

全部飲む、食べる！ 歌う！ 金なんてばらまき使い尽くす！

それが海賊！ それがアタシ！

自分らしくあれば！ 自然と運もついてくる！

あれだ……水と食料が無くなった時にこそ、新しい島が見つかるってハナシ！」

「そ、そんな無計画な……」

「これで駄目なら死ぬだけさ！」

「無計画なー！」

ガレスは彼女の命令に反抗しようとしたが、肩を押されぐいぐいと廊下に出されてしまった。

「アーキマンはアタシと一緒に机を退かす！」

ほらほら、早く早く」

「あ、ああ……」

有無を言わさぬ雰囲気は俺も圧倒され、机の移動を足などで手伝った。

それが済めば、広々とした床に転がっているアンとメアリーの横に、ドレイクはジョッキやら缶詰やらを並べ始める。

……どうやら彼女は本気で、全力で酒盛りを始めるつもりのようなのだ。

「お酒、持つてきました……ほんとにこれを全部……」

廊下の幅ぎりぎりの大きさの樽を、ガレスは両手で引きずって持つてきた。

それを部屋を中心に設置する。

「おおガレス！ 騎士王に猛る狼とまで称えられた騎士ガレスよ！」

ドレイクは立ち上がると、芝居かかった仕草で両腕を広げ、少女を後ろから抱きしめる。

「……なんですか、ドレイク卿」



腕の中から、じとりとした眼差しで彼女を見上げるガレス。

「こうやって見ていると、ドレイクの方が7cmほど背が高いようだ。」

「アンタも飲みな！ 今までアタシ達に遠慮して、飲まないようにしてくれていたんだらう？」

「まったく……少しだけ、ですからね」

ドレイクが差し出された金属製のジョッキを両手で受け取り、ガレスはまんざらでもない顔で目を伏せた。

「アーキマン！ アンタも！ 極東風に言えば今日は『ブレイコウ』ってやつ！

上下も無く、生前やつちまったことも関係なく、楽しもう！」

彼女はストローをさしたジョッキを押し付けてくる。

「……酒は飲まない。けれど宴には付き合おう」

俺は地面にあぐらをかいた。

「いえーい！ 酒盛りでーす！」

石の床から急に顔を起こしたアンの明るい声を合図に、酒も食料も使い尽くす酒宴が始まった。

サーヴァントとも言えど、飲めば心は火照るようだ。

「このビール、とつても美味しいです……しゅわつとしてて、ちよつぱり苦くて……」  
「ナツツとか魚とか、良いツマミが無いのだけは残念だよねー」

メアリーはその体をガレスにしなだれかけ、とろんとした目元を酔いで赤く潤ませている。

「サーヴァントといえど、夜の冷えは堪えますよ。きちんとしてください」

ガレスがそんな彼女のはだけかけている服を、白い指で直してやっていた。

「栄養プロックをぶどう酒に付ける……いえ、勿体ないですわね。」

それにしても本当に美味しいお酒。

ふふつ、キャプテン、ジョッキへお代わりを注いで差し上げますわ」

「ありがと……良い酒、良い船員、良い夜……とくれば、後は歌が欲しいねえ」

アンはドレイクに上機嫌で酒を飲ませている。

(……ん)

酒精でも吸ったか、それとも和やかな雰囲気一場酔いでもしたのか。  
俺はサーヴァントらしくもなく、粘性のある眠気を覚えていた。

「……あれ」

冷たい床の上でひとり目を覚ます。

いつの間にか眠ってしまっていたようだ。上体の筋肉を使って立ち上がる。

「……」

ガレス、アン、メアリー。

3人の女性は互いに折り重なるような形で床に転がり、寝息を立てている。

「えへへ……兄様……ガヘリス……ランスロット様……」

騎士として常に自制を心がけている様子の彼女が、寝言を漏らしてしまうほどの深い眠りのようだ。

「……ドレイク？」

俺は散らかった部屋を見渡す。あの赤い服を纏ったキャプテンの姿が見えない。

「自室に戻ったのか？」

床に転がっている3人を起こし、寝室へ戻るように呼びかけようかとも思ったが。

「んん……」

「メアリー……うふふつ……」

幸せそうな寝顔を見ると、朝まで寝かせてやった方が良さそうな気がしてくる。

（サーヴァントは夢を見ないはずなのに。眠りなど必要ないはずなのに……）

この酒、ガレスは『自分達と同じ場所に置かれていた』と言っていたが、何か呪いまじないで

もかかっているかもしれない。

……サーヴァントを酔わせ、眠らせ、夢まで見せる、そんな力が。

「部屋に帰るか……」

巨岩の中にあるアジトは冷え切っている。人間では耐えきれないほどの寒さだろう。肌冷気を感じながら歩けば、ふと外の様子が気になってしまった。

「……」

廊下を歩き、戸など建てられていない入り口から外へ。砂嵐は治まっていた。

大地はどこまでも厚い砂に覆われ、その上にある月は丸く、青い光を静かに地上へ注いでいる。

冷たく光る砂丘と、輝く星。俺は美しい光景に息を吐いた。

「——こんばんは」

知っている者の声に振り返る。

ダユーがそこにいた。

巨岩にもたれかかるように立ち、片手で細い金属の棒を振って遊んでいる。

灰色の口紅が、月の光を受けて鈍く輝いていた。

「素敵な夜になるでしょうね、腕なしのお方」

彼女がふいに差し出してきた金属の杖を、受け取る手を俺は持っていない。

「約束通り、お話ししましょう?」

ダユーが腕を上げ、指さしたのは巨岩。

「月を見ながら……ね?」

その提案に、俺はうなずき返す。

……我ながら、あまりにも迂闊で呑気な振る舞いだった。

数日ぶりに会う彼女から、何か情報が得られるかもしれないと、軽い気持ちでその時は思っていたのだ。

アジトのある巨大岩の上へ、登るように言われ、俺は従うことにした。

月明かりの下、濃い影を作る張り出した岩に足をかけ、慎重に上がれば、大地を見下ろせる岩場へとたどり着けた。まるで石舞台の上に立ったような気分になる。

「お話したいこと、たくさんあるの」

俺を招いたダユーは歌うように話すと、巨岩の上になぜか備え付けられている石の椅子へ腰かけた。

俺も、石で出来た丸テーブルの向かい側にある椅子へ座る。

彼女は、机の上に置かれていた金属製のグラスを手に取ると、その中身を啜った。

……艶やかに濡れた唇が開く。

「数日前に出会った時のあなた、何も欲しくないって顔してたのに、今は欲望に満ちた横顔」

そうなのだろうか。自らの顔に触ってそれを確かめたくとも手が無い。

冷たい夜風が頬を撫でた。

「——素敵。欲しくなっちゃった。奪わせて?」

彼女は俺に手を伸ばすが、丸テーブルに阻まれ届かない。俺を求めるその指が、月の光でなおのこと白く見えた。

「……俺は何も変わってないし、約束しか持っていないよ。」

「この通り腕も無いんだ」

「あら……」

そう答えると、ダユーは俺の予想した通り、唇を歪めて微笑んだ。

「そう思いこんでいるかもしれないけど、あなた……まだ何か、持っている」

「何かだと? そんなはずない。自分のことは自分が一番よく分かっている……」

「——つもり、でしょう?」

「いいの! 己を完全に理解している者なんて、誰一人としていやしないのだから!」

「んん?」

彼女が俺に欲するものが分からず、心からの疑問で首をかしげた。

ダユーは中身の見えない金属のグラスから、液体を啜り、笑んでから話す。

「春に種が芽吹くように、永久凍土の下から太古の獣が目覚めるように。」

その内側より何かが育つ……そんなものを感じてしまうの。

ああ！ やっぱり素敵！ 育つって未知よ、何も分からないの！」

「育つ？ サーヴァントは成長しない、何を言っているんだ、ダユー」

常識を言えば、やはり彼女は笑った。

「変な人。あなた、まだ自分がサーヴァントだと思っているのね」

——思考が止まる。

「……俺はサーヴァントだ。それ以外の存在であるはずなものか」

衝撃で鈍化した頭から絞り出せたのは、そんな言葉だけだった。

ダユーが置いた金属のグラスの側面に、目を泳がせている自分の顔が歪んで映る。

「サーヴァントがサーヴァントでなくなることだって、あると思わない？」

ましてや、砂と一緒に<sup>サーヴァント</sup>亡霊の亡霊が歩き回るこんなおかしな世界だもの」

「何を根拠に……そんなことを……」

ダユーの一言一言が、己の根底をぐらぐらと揺さぶってくる。

「実はね……わたしもあなたと同じ。サーヴァントらしからぬサーヴァントなの」

彼女は瞬きを繰り返した。金の瞳、その表面に映る光が揺れる。

「この世界で目覚めた瞬間から、フランススとぐちゃぐちゃに混ざった存在となつていた。

不思議……わたしと彼女にどんな縁があつたのかなんて、さっぱり見当つかないのだけだ。

そう考え込んでいたら、どちらが体の主導権を握るか、比喻ではなく本当に転がりながらの争いが始まった。

そしてフランススが勝ち……わたしはわたしを奪われてしまった……」  
金の瞳を伏せながら彼女は物語る。

「本来のわたしであれば、そんな目にあつた瞬間、首を掻き切っていたでしょう。

『奪う者であるわたしが、他者より奪われることなどあつてはならぬ』と。

——でも違つた。フランススがわたしの影響を受けたように、わたしも彼女から影響を受けた。

つまり……生き汚くなつてしまつたの」

ダユーは小さなため息をつきながら、言葉を続ける。

「自らの誇りを汚されたとしても、死ぬことまでは出来ない。

あと少しだけでも生きていきたい……」



「それが、為政者である貴女がドレイクに大人しく従っている理由か？」  
「うん……奪うことのみを、至上の命題と出来なくなってしまう……」

しおらしい態度の彼女を見て、俺の心は落ち着いてきた。

また、奇妙な親近感も抱いてしまった。

「……俺もダユーと同じだ。」

貴方とドレイクのように思想や感情が混ざっているという形ではなく……内側に別の存在、はつきりと言えば『力』が混ざっているんだ」

「わたしの考えていた通りの答えね！ やった！」

あどけない少女のように喜ぶ彼女。

「俺のようなサーヴァントが他にもいるとは思わなかった。」

ダユー、俺のような『混ざりもの』であるサーヴァントに会ったことは？」

「あなたが初めて……他には知らない」

赤い髪を揺らしつつ、彼女が首を振る。

「フランシスに体を奪われている間、どうしてこんなに不思議なことばかり起きているのか考えていた……」。

例えば……リリスなる神様もどき以外にも、『聖杯』の影響であるかもしれない、なんて」

「……聖杯か」

その単語を聞くのは数か月ぶりのような気がする。

アスカと共に住んでいた地下都市、狂った都市運営システムAIが宣言し……。

（『この都市、でー！ いったいばん！ 優秀な者を決める！ 戦争！』

生き残っていいのはたった1人だけ！ 優勝者にはこれあげちゃうかも?!

聖杯！ 願望を全て叶える万能の願望器！』

響き渡った声、今でも思い出せる。

だが……件の聖杯は、旅立った後は姿形も感じられなかった。

「……この世界に、聖杯は本当にあるのだろうか」

「分からない。

ダユーにも知らないことはあつてよ」

もちろんこの場合の『聖杯』とは、聖遺物ではなく、『万能の願望器』を意味する方だ。

「もし聖杯があり、それに願いを託すことが出来たら……」

子どもじみた願望を口からこぼしてしまう。

ダユーはそんな俺に興味がそそられたのか、俺へ体を近づけさせるかのようにテーブルへ身を乗り出した。

「どうしたいの？ 何もかも滅茶苦茶にしてしまう？」

今のあなたの体のように？」

「そんなこと……しないさ……」

俺は己の未熟さに唇を噛む。

（——情報があまりにも足りない。だというのに、知りたいことばかりが俺の前に現れる）

リリスがああ振舞っている理由も。

なぜあの男が蛇竜となり、衛星軌道上に浮かんでいるのかも。

名ばかりで姿を見せぬ、聖杯の実在も。

アーキマンなる男より託された、約束の相手である少女の所在地も。

リリスが語った700年前の聖杯戦争の存在と、歴史書で読んだ『2300年代にリリスが戦争を治めた』という記述の食い違いも。

今いる『砂塵の迷宮』をさ迷う敵の存在と、船へたどり着くための道行き、その不透明さ。

何もかも何もかも、謎ばかりで。

（こんなに分からないことだらけで、俺は彼との約束を果たせるのか？）

船が見つかったところで、『未知』という脅威が減るわけではない。

そして『未知』が多いというのは、それだけで死の危険に直結する。

(であれば俺がするべきは、未知を探索し、暴くことなのか?)

それとも、危機に対して場当たり的に対処するしかないのか?)

考える、考える、考え——。

「でもね?」

堂々巡りになりそうだった思考が、ダユーの声で止まった。

「あなたを、酒とガレスと共に捨てたあの男なら、知っているかも」

彼女の語るその男の名を、俺は知っている。

「女神と人間の間に産まれ、最後には一人ぼっちとなった王様。

全てを収め、全てを見て……それでいて、全てを手放した人」

俺は耳で、夜風が切り裂かれる音を聞いた。

「世界で一番古い英雄。彼なら」

ダユーの、乙女が謳うみことほり詔のような声が流れる中、俺は頭上からくる影を感じ、天を仰

ぎ見る。

星と月が輝いていた夜空に、光で出来たかのような巨大船が浮かんでいた。

(あれは『ヴィマーナ』……! 神々のための船……!)

目線を巨石の上の広場に戻せば、一目見れば二度と忘れられぬ男が降り立っていた。

翻る赤の布。夜の光を集めて輝き放つ金の鎧。

それらを纏い、風で乱れた髪を掻き上げ、赤い瞳をもつて俺を見る――。

「……ギルガメツシユ」

俺が名を呼べば、彼は口元に弧を描いた。

「――少しは背が伸びたようだな。幼子よ」

その言葉、微笑み。ダユーのものよりも、特段と内心が読み取れないものだった。

第94話 全ては稚いとけない者のために

終わり

# 第95話 教えて英雄王　くキリエライトとカルデア、 北極平和祈念碑く

「ああ残念。

恐ろしい暴君ギルガメツシュが来たのだから、わたしとあなたのお話はここまでね」  
夜空に浮かぶ金の船を見上げながら、ダユーはつまらなさそうに言い放った。

「本当に残酷な人。まるで嵐に人の心がくっついていてみたい。

唐突で、暴力的で、根こそぎ取ってしまったら……去った後に花の種を蒔く。

それって、奪うだけより残酷なのよ？　お分りかしら、自分の国すら壊した王様？」  
船と同等の輝きを放つ鎧をまとったギルガメツシュ。その赤の瞳が横へ動き、彼女を見た。

「——長々と喋り、賢しさをひけらかすな、雑種」

緋色の瞳に熱はない。ただ込められているのは「目ざわり」だとも言わんばかりの  
冷徹さ。

「貴様がこの場に留まることを我は認めん。疾く失せよ」

続いて投げられた声も冷ややかで、殺気だけは感じられないのが不思議なほどだった。

「男同士、秘密のお話つてやつね？ いいわ……聞きたい……とても……」

それにね、それにね？」

しかしダユーはそんなことを気にも留めず、靴で砂を踏みながら彼に近づく。

「ギルガメツシュ王、あなたが伝説に謳われた通りの男なのか……見て、触れて、感じて、味わいたいのだ」

こんな機会、なんて生まれ変わったって無いでしょう。だから、わたし、あなたから……」

彼女の熱い吐息と柔らかな体が、ギルガメツシュの鎧に接触するかしないかといった、その時。

「っ！ ダユー!!」

俺は渾身の力を込めて彼女の体を蹴り飛ばした。

「きゃん」

甘い鳴き声と共に地面へ転がる彼女。

……そんな彼女が先ほどまで立っていた場所には、鋭い剣が突き刺さっていた。

(間違いない、ギルガメツシュがダユーを攻撃したんだ……)

数秒前のことを思い起こす。

彼女があつた男に最も接近した瞬間、男の背後の空間が歪み、そこから剣が射出されたのを、この目ではつきりと見た。

だからこそ、ダユーに攻撃が届く前に行動を起こし、守ることが出来たのだ。

……かなり荒っぽい方法ではあつたが。

「……」

腕を組んだギルガメツシユは、無言で俺達を見つめていたかと思えば。

「娼婦の真似事、それを見るのも一興かと思つたが……あまりに稚拙」

慈悲など感じられない声を、ダユーへ投げる。

「——同じ事を、我に二度も言わせるなよ、女」

ギルガメツシユのかたわらの空間は夜の色を失い、輝く金の波紋が広がっており、その中から次に飛ばされるであろう剣が、その先を覗かせていた。

「……存外遊びがない人なのね、金色の王様」

俺はダユーと彼の間に立ち、いまだ地面から起き上がれない様子の彼女の盾となる。

「これだから赤い目をした男は嫌いだ……!」

苦々しく吐き捨てる俺を見て、ギルガメツシユは片眉を上げ、何が楽しいのか微笑んだ。



「助けてくれたのね。方法はちつともスマートじゃなかったけど……」

俺にそんなこと言う彼女は、依然として起き上がろうとしない。

むしろ両肘を立て、それに自らの頭を乗せて子どものようにくつろぎだした。

「ダユー、君が死んだら船探索の人手が足りなくなる」

彼女を急かすため、俺は「逃げてくれ」の気持ちを込めて懸命に声をかける。

「あら、そんな理由？ もっと可愛い理由ではなくて？」

「ダユー！ 話なら後で出来るだろう！ 今は下がってくれ！」

「……アーキマンがそう言うのなら」

俺が声を荒げたのを見て、しぶしぶ体を起こした彼女は、場に名残惜しそうな目線を投げかけた後、巨石の上から跳躍して降り、姿を消した。

「……はあ」

一触即発の空気も彼女と共に去り、石舞台の上には静寂が戻る……はずだったが。

「くっ、ふっ、はっ」

俺は目線をギルガメッシュへ戻した。

見れば、彼は肩を震わせ、何かを堪えようとしていたが――。

「はははははは!! ふうはははははは!!」

耐えきれなかったのか、赤い口内を見せびらかすかのように大口を開けて爆笑し始め

た。

「貴様……貴様、あの女から『なに』と呼ばれていた？」

声はまるで別人かのように明るい。

「あ、アーキ……」

「よい、言うな。数秒前のことくらい覚えてる」

ダユーへ見せた態度との違いに、俺は呆気にとられてしまった。

理由は不明だが、上機嫌な様子のギルガメッシュ。何もかも唐突な男の声は続く。

「それにしてもなあ……『アーキマン』、アーキマンだと？」

なんと胡乱な……その名を選ぶとは、実に愉快なネーミングセンス。

数百年ぶりの地上にて、これほど面白き事と出会えるとは……ああ、焦げた体を引き

ずり起きた甲斐があつたというものよ！」

男は金の波紋の中から椅子を取り出すと、それに深々と腰をかけた。

その後から勝手に飛び出して来た金細工のテーブルの上に、酒とグラスが自動的に設

置される。

笑つて喉でも乾いたのか、男は自らグラスに酒を注いでは、ごくりと飲み干した。

「……それで幼子よ。いまは本当は何と名乗っているのだ？」

今度は笑いはせぬ。言ってみよ」

男に対し、意を決する思いで、自らの口から名を告げる。

「……アーキマンだ。」

俺と約束した男の名、それを今は借り受けている」

「ふむ……」

先に言っていた通り、男は笑わなかった。

その代わり、顎に手を当て考え込むようなポーズを取る。

「急いで名を付ける行為など、褒められたものではないが……」

あれか、産まれる前の赤子を呼ぶために、親が胎名を付けるようなものかと思えば

……」

ぶつぶつと独り言をいうギルガメッシュ。

(……この男、突如現れ、その目的も見えず、何を言いたいのかも掴めない)

俺は警戒の意を込め、睨むような眼差しを向けた。

「そうだな……まずは場を整えるか」

視線で機嫌を損ねるような素振り無く、男は金の籠手を付けた腕を上げ、空間を横へと撫でた。

その一動作だけで、月明かりに照らされていた巨岩の上が生暖かい闇に包まれていく。

闇は、戦の時に建てられる陣幕のようなシルエットをとった。  
「怯えずともよい。姿隠しと遮音の宝具だ。」

……大方、あの海賊公女が岩影で聞き耳をたてているであろうからな。  
それに、リリスの伴侶に盗聴を許す我でもない」

「リリスの……伴侶？」

引つかかった単語が思わず口に出ても、男は笑みを深めるばかり。

「あの幼き女神には、それに似合いの幼き男神が与えられていたのだ。」

まあ、この話を今日はするつもりはない。然るべき時に然るべき者が語る……」

男は俺に上を見るよう指示をした。

「空だけは開けておいたぞ。」

星を見上げながら語る事こそ、夜話の醍醐味。そうでなければ、わざわざ外で話す意味もない」

満点の星空から俺は目を逸らして、黄金の王を正面に捉える。

王は客を歓待するかのように両腕を広げた。

「幼子よ。我に訊きたくてたまらぬ事が、十や二十では済まぬ数あるのだろうか？」

では——問いただせばいい。歓喜せよ、我は見ての通り上機嫌だ」

どこがだ、と言いたい気持ちは飲み込んだ。

「問われし疑問、その全てに答えを与えようではないか！

しかし無制限というのも緊張感に欠ける……そうだな、夜明けまで、としよう。

そらそら、黙り込んでいる暇などないぞ」

こちらの意見も聞かず、勝手に条件を決めた彼。

俺は文句を言うよりも、空を見て現在の時刻を確認することを優先した。

星と月の位置から考えるに、まだ朝は遠いと思われる。

けれど、ただ質問をする前に、ギルガメッシュに対する感情を心の中でまとめてみた。

(ひとり悩んでいたら、『答えを知っている』と語る者が突然に現れた。

しかも、夜が明けるほどの時間を、俺に与えるとまで言っている……)

瞳に強い渴きを覚え、瞬きする。

(……状況が出来すぎていやしないか？

それに、誘うような態度を見せたダユーへ、攻撃を仕掛けるほどプライドが高いというのに、俺相手には妙に上機嫌なのも薄気味悪い。

しかし、これは得難い機会であることも事実だ……)

好奇と疑念に心が挟まれる。

情報も満足に集めることも出来ない自らの力不足に歯噛みしながら、男へ質問をした。

「……なぜ問うことを俺に許す?」

「それが第一の質問か」

王はこりをほぐすかのように首を回した。

「予測通りで些か拍子抜けだが、答えてやろう。」

「そうだな……幼子があればこれと無駄事を考え、知恵熱を出し、倒れられたりでもしたら適わん。」

今は、こう答えておくとしよう」

考えておいた次の質問を飛ばす。

「……お前が語ることは全て真実か、偽りはないのか」

「第二の質問は地固めか、なかなか堅実よな」

男は椅子に深く座りなおした。

「案ずるな、幼子に虚言を吹き込むほど腐ってはおらぬわ」

次は、今俺が最も心を砕いていることについて訊く。

(……といつてもだ)

今から言うこの質問は、『地固め』というより、ギルガメッシュと全く関係性が無いように思えることについても、相手が答えてくれるのか確認するためという、意地の悪い問いかけなのだ。

「……俺は、ロマニ・アーキマンという男と約束をした。

ある少女を探し、彼から預かった職員証を届けると。

その約束の相手である『トワ・キリエライト』の所在について、お前は知っているか」

「——知っている」

万物を探求した賢者の如く、落ち着いた声色で放たれた言葉に、俺は狼狽えすにはいられなかった。

そんな俺を置き去りに、男は答えの続きを話す。

「トワ・キリエライトは今も生きています。

そして、朽ちた星見櫓やぐらにて墓を守り、帰らぬ者を待っているのだ。

待ち人たるその相手が、お前が言う所のアーキマン……」

声はよどみなく、俺の言葉を受けてその場で嘘を作っているようにも思えなかった。

……認めたくはないが、直観的に分かってしまった。

——この男は本当に、俺からの問い全てに答えるつもりであり、事実、それを行えるに足る真実を握っているのだと。

「……馬鹿な！ そんな筈があるものか！」

衝撃がまだ胸を走っているが、俺は動揺しながらも切り込んでいく。

「だってアーキマンは、彼女とは700年近く前に別れたと……」

俺はトワなる少女について、「せめて痕跡くらい見つければ」と考えていたが、まさかその本人が生きているとは思っていなかった。

『あれ』は永遠を与えられている。簡単には死なん、壊れん」

「……トワ・キリエライト、彼女は何者なんだ」

「多くの間人が探し、求めた『不老不死』。その体現でありながら偶然の産物。

ただの人だ。盾を振るう力すら持たぬ少女よ」

ギルガメッシュはそこまで一息で言う、酒をあおった。

「……次の問いはなんだ？」

やや呆れたような声色。

男は液で濡れた唇で、次から次へと言葉を求めてくる。

俺の方が彼に質問されているかのような気持ちになってきたが、それは飲み込んで、

問いかけを再開した。

「その場所の名を、はつきりと言え」

「……『カルデア』だ。かつて人類が打ち立て、ついで滅びた夢の跡地」

「跡地……ということは地名か。その『カルデア』はどこにある、どうやって行けばいい」

「カルデアは南極にある。だが、たどり着くためには『最後の海』を越えねばならん。

貴様たちが這いつくばって探しているあの船では無理だ」



「なっ……」

であれば、ドレイク達の今までの努力の意味は……と、虚無感に襲われそうになってしまう。

「捨てられた犬のような顔をするな。」

あの船も、『砂塵の迷宮』から抜け出るためには必要だ」

頭を振って、俺は気持ちを切り替えた。

「……船のことは一旦置いておく。」

では、どうすればその『最後の海』を越えられるんだ」

「急がば回れ、との諺ことわざもあろう。」

まずは北極に向かえ。そこに平和祈念碑がある。

皮肉なことに、2017年の聖杯戦争終結のおり、『二度とこんな争いが起きぬように』と建てられた物、プロトタイプの軌道エレベーターでもあったが……今の貴様にはこの情報は余分か。

忘れよ」

ギルガメツシュは指の先でグラスを弄もてあそぶ。

酒が波打つ音がして、その水面に映る月が目には浮かぶようだった。

「人々はそこに、カルデアから奪った戦利品を納めた。」

巨人の穴蔵から譲渡された、平面上の月……『パーパームーン』なる機構。  
そして『シャドウ・ボーダー』という船を。

どちらも虚数の海へと潜り、越えられぬものを越えるために作られた道具だ」  
「きよ……すう？」

『最後の海』は通常の船では渡れぬ、とだけ覚えておけばよい」

男はグラスを置き、わざとらしい笑みを顔の上に作つた。

そして、白昼の太陽のように白々しい声で語りだす。

「おおー……これで貴様の望みは全て叶うではないか！

まずは北極に向かい、シャドウ・ボーダーを回収。

然る後、<sup>のち</sup>虚数潜航を用いて南極へ向かえば、アーキマンなる男が交わした約束の相手にも会える！」

男は表情そのままに、俺をなぶるような目線で見た。

「しかし……条件を並べれば並べるほど哀れよな。

約束を果たす道のりは、どうやら困難を極めている」

「それでも、それが今の俺にとつての『やりたいこと』なんだ」

ロマニ・アーキマンとの約束。

（その約束こそが、今の俺が死んでいない理由であり、生きる縁<sup>よすが</sup>なのだから）

思うだけで、心に温かな安堵が広がっていくが――。

「『やるべきこと』、ではなくか?」

赤い瞳の男の言葉が、冷たく俺に浴びせられた。

「……やりたいことだ」

強い語句で言い返せば、男は俺を鼻で笑い、酒とグラスを金色に輝く空間へ仕舞った。

「他者がための事ばかり問うな。貴様自身の疑問を寄越せ」

その目に、「退屈」と言わんばかりの感情の色が積もっていく。

「……なぜ俺に情報を渡した?」

懇切丁寧に分かりやすく導線を引いてくれたが……何を企んでいる?」

この答えによつては、俺は踵きびすを返し、巨石の上から降りて帰ろうと思っていた。

「幼子の手を引くのも王の役目……とりたいところだが、見抜かれてしまつては仕方なし」

男は後ろも見ず、宙にある金の波紋へ手を伸ばすと、小さな物を数個取り出す。

「我がこうして貴様に世話を焼いているのも……少々の老婆心に足し、私の蔵に収められていない『ある宝』を得るためであつてな?」

酒とグラスが先ほどまで置かれていたテーブルに、男は取り出した物を乗せた。

「……それは!」

——目に映し、物が何かを理解した瞬間、全身に怖気が走った。

これは、こんな形で此処にあつていい物ではないと、魂が、心が、肉体が叫んでいる。「やはり分かるか。肉のみとは言え、血の繋がりとというのは因果なものよ……」

こんな物を見せられては、帰ることなど出来やしない。

男は複雑に沸き立つ俺の胸中を見抜き、それに愉悦でも得たのか、今にも笑いだしそうなほど口端をつり上げた。

「——人と太陽神の間に生まれし、ある男がいた。

その男の母が、『神の子であるとの証明が欲しい』と父へすがり、望まれるがまま与えられた黄金の鎧。

……その半分だ」

砕け、ばらばらとなり、本来の形と輝きを失った鎧が、テーブルの上にあつた。

「半分……だど？」

この鎧は、砂糖菓子のように易々と分割できるものではない。

そも半分という言い方自体がおかしいのだと、腕があつたならギルガメッシュに掴みかかりたいほど、俺の胸には動揺と混乱が広がっていた。

「鎧がなぜこうなっているのか、お前に仔細しさい伝えるためには……リリスの話を少しばかり吟遊する必要がある」

「……ずいぶんと、リリスのことを親しげに呼ぶんだな」

俺は顎を引き、あの男の鎧の表面を撫で続けるギルガメッシュを睨みつけた。

「何を隠そう、我を呼んだのはあの女だ。」

中身については辟易へきえきしているが、存在については……愚かすぎて、今更ただ切り捨てるのも憚はばられる。

サーヴァントである我からの……わずかばかりの憐れみ、と言ったところか」

夜明けまでの時間が気にかかり、目だけを上に動かせば、星の位置が動いているのが見えた。

男が降り立ったあの瞬間から少しばかり時間が経った、ということを知る。

「では始めるとしよう。」

あの女神について物語られる機会など、これより先、未来永劫と無いだろうからな。

人はいずれ、忘却をもって女神と決別をするだろう。

……話は長くなるぞ、座れ」

しぶしぶ従うことにした。

豪華な椅子に座る男とは違い、俺は武骨な作りの石の椅子へ腰を落とす。

夜風が両者の髪を撫でたのを合図に、男は物語り始めた。

「——リリスは閉ざされたこの世界より、その桁違いな力を持って我を召喚せしめた。」

そして我と自らの肉体を触媒とし、7のサーヴァントを呼び寄せた」  
男は10の指をぱたりと折って、数えだす。

「セイバー、シグルド。」

ランサー、カルナ。

ライダー、エウロペ。

キャスター、エジソン。

アサシン、セミラミス。

バーサーカー、ヘラクレス。

そして……道化たるアルターエゴ」

「アルターエゴ？ エクストラクラスのことか？」

流石にそれくらいの知識は俺も持っている。

「……そうだ。」

7体目の8体目、本来現れる筈も無かった『あの男』だけが、真にリリスのサーヴァントと呼ぶべき者であつたが……これも無駄事か」

一度息を吐くギルガメッシュ。

「閉ざされた世界？ 真なるリリスのサーヴァント？」

「そう話の腰を折るな、幼子。終わりまで語らせよ」

彼は指先を開き、話の続きを口に出していった。

第95話 教えて英雄王

キリエライトとカルデア、北極平和祈念碑について  
終わり

# 第96話 教えて英雄王 と封印されし者

## リリスのサーヴァント

月が青々とした光を砂漠へ注ぐ冷たい夜。

巨岩の上、姿隠しと、盗聴を防ぐ力を持った柔らかい陣幕の中、俺は石椅子に座り、ギルガメツシユの語る声に耳を傾けていた。

内心は……穏やかではなかった。

「我<sup>おれ</sup>を含め、一つの部屋に8騎のサーヴァントが召喚された。

そして目の前に立つ少女こそが、自身を呼んだマスターだと気が付くと、各々名乗りを始めた。

……我以外がな？」

その情景は、脳内で容易く思い浮かべることが出来た。

強靱で美しいサーヴァント達が傳<sup>かす</sup>く中、ただ一人、唯我独尊の姿勢を貫くギルガメツシユの姿……。

「形式ばった名乗りが終わった後……なあアーキマンよ、リリスは何を言ったと思う？」



「そんなの俺が分かる筈が……」

——いや、分かる。

「……『私と家族になつて』」

オレンジの光で照らされた軌道エレベーター内、太もみにリリスの剣が貫通し、椅子へ縫い留められた状態で、女神を自称する彼女よりかけられた言葉を、自らの口でもう一度。

……言つた後、舌の上に強い苦みを感じた。

「一言一句間違はなく正解だ。口直しに飴でもやろうか？」

後ろの空間より小さな何かを取り出しながら、感心したような物言いをする男。どこまでもわざとらしい態度だ。

「いらない」

俺は首を否定の意味で横に振る。この男から情報以外の物を貰うなど勘弁だ。

「なんと意固地か。幼童らしく、素直に甘味かんみで瞳輝かせておればいいものを。

……さて、話を戻せば、リリスが驚くべき程の——」

男は飴を金の空間の中へ仕舞う。

「馬鹿な、発言をした辺りであつたな」

そして犬歯を見せながら、獲物を前にした獣の如く笑んだ。

「我は笑つたさ。」

目の前に立つ少女が、健気にも王を笑わせようと、渾身の冗談を飛ばしたものと判断したからな」

8騎のサーヴァント、そして一人の少女がいる空間で、彼の笑い声はそれは恐ろしく響いたことだろう。

「だが、リリースは我が大笑いを収めた後も、全く同じ言葉を繰り返した。

我は『つまらぬ冗談は一度でいい』と諭した。

……心無き人形が如く、奴は愚直にも同じ発言を繰り返した」

ギルガメッシュは遠い景色を見るかのように、赤い瞳をひとときわ細める。

「我はその瞬間、リリースがどのような存在であるかを理解した。

——よって、殺そうと思ひ立った」

「待て、それは論理が飛躍していかないか？」

男がマスターへ向けた唐突な殺害宣言に、とうの昔の出来事とはいえ、俺は驚きのあまり足を動かしてしまった。

衝撃で沸き立つ心のまま、ギルガメッシュへ質問をぶつける。

「当時のリリースは少女だったのだろうか？」

いかに態度や発言が気に喰わなかったとはいえ、無垢なるものを殺そうとするなど……マスターを裏切るなど……!」

「裏切りではない、慈悲だ」

男から聞こえてきた声は、感情すら推し量れないほど平坦なもの。

『人の管理者』としては、あまりに稚拙に作られた女だった。

それが、死した星の上で永久とわに一人となる前に、殺してやろうと刃を向けただけの事。リリスが自らの展望について考える能があつたならば、頭こゝへを垂れ、我が裁定を受け入れこそすれ、拒む道理など無かつた」

そこまでを、よどみなく勢いよく言い終えたその男。調子を取り戻すためか、深々と息を吸い、吐いてから、続きを口に出す。

「全てを終わらせるべく、剣を振るつた訳だが……防がれた。

そう……我はうっかりしていたのだ」

「うっかり?」

俺は聞き返しつつ、椅子に深く座り直す。

「うっかりだ。その場に7騎のサーヴァントがいることを失念していたのだ。

我は捕らえられ、生かしたまま封印される運びと成った。

……リリスはなぜ我を殺さなかつたのかの理由など、分かり切っている事は聞くなよ

？」

言葉を受け、それについて少し考えてみる。

（幼いリリスは、ギルガメッシュから刃を向けられたというのに……それでもなお、『自分の家族になってくれるかもしれない』と、無邪気に期待でも……していたのだろうか……）

推測は終わったけれど、同時にある疑問が湧いてきた。

「……どうして貴方は封印に抵抗をしなかったんだ。

サーヴァントの力もある。いま展開している陣幕のような、宝具だって使えたはずだ。

なぜ大人しく虜囚りよしゆうの身などに……」

俺からの問いかけを受け、ギルガメッシュは顎に片手を添えると、紅玉を思わせる目を瞬きさせた。

『封印』は、味わった事が無かったからな」

一言の後、そのまま舌なめずりでもしそうな雰囲気を漂わせ始める。

表情の変化だけで、男の好奇心と、それから来る興奮が感じ取れた。

「……俺は今日、貴方に対して驚きと諦めの感情を何度抱けばいいんだ」

男の態度に、サーヴァントでありながら疲労感を覚えていた。

「好きにせよ。」

ともかくだ、我は放逐された事はあれど、封印の経験など無かった。

何より気になるではないか。王である我を完全に封するものなど……」

「……」

俺は言葉を失ってしまふ。

(……この話題について、これ以上訊くのは止めよう)

ギルガメッシュを問い詰めたとしても、傲慢、油断、慢心に満ちたこの態度を改める

ことなど、期待できやしないだろうから。

「……貴方の好奇心についてはもういい。」

『続きが知りたい』と、問えば話は進むのか？」

時間を無駄にはできないので、不躰な言い方で続きを促す。

男は機嫌を損ねるわけでもなく、テーブルへ腕を伸ばした。

「……そしてようやく、貴様の兄の鎧の話となる。」

召喚された7のサーヴァントは、我を生かしたまま封印するにはどうするべきかと、

無益な話し合いを続けた。

その果てに、愚かなリリスはこれまた愚かな提案をした」

ギルガメッシュの指先が、テーブルにのっけている砕けた欠片に触れる。

「ランサー、カルナの鎧を加工し、『封印の櫃』とすればよい、とな」  
「それは……」

過去のリリースが下した結論に、呼吸が荒くなってしまう。

男も俺と内心は同じなのか、浅く頷き返した。

「貴様の嘆きと驚きも当然か。黄金を泥に変えるようなものだからな」

指先で鎧を撫でながら、男は低い声で話を続けていく。

「ランサーが鎧の半分を差し出し、キャスターやアサシンが理論を組み立て概念を補強し、セイバーが鎚を取った。かくして櫃は作られ、我はもの見事に封印された。

作られたきっかけはくだらんが、出来たものは素晴らしいものか？

私の玉体が余さず入る大きさ、表面には呪いの紋様が精緻に刻まれ、白昼の太陽に勝る輝きを放っていたのだから」

「そう……だろうか……」

目を泳がせながら、櫃に対し想いを馳せる。

太陽神の息子へ贈られた鎧、それを加工したのだ、下らぬ出来の物になる筈がない。

「……その内側にて、中々斬新な体験もした。

あの櫃へ封印されるといふ事は、例えるならば、恒星の表面へ生身で投げ出されるようなもの。

眼前に広がるは、天地全てに暮れること無き残陽さんようを貼り付けた無限の荒野。

襲い来るは、熱という言葉で表すのが不相当と思えるほどの熱き嵐。

全身の水分は一瞬にして沸き立ち、その勢いで髓と骨が爆ぜた……」

挙げられた単語の凄絶さとは裏腹に、ギルガメッシュは涼やかな声で物語っている。

「だというのに、リリスとパスが繋がっているため、消える事すら許されない。

焼ける、塵となる、復活を成す、また焼ける……これが幾たびも繰り返される」

ギルガメッシュが腕を組む。

「幼さとは惨忍よな？ 『我を家族へ迎え入れる』という、叶う筈もない願いがために、すがった者を生き地獄へ放り込めるのだから」

そこまで言つて初めて、男は顔を軽くしかめた。

「知らぬ味であつたが、二度は味わいたくない。

あれならまだ、人の悪性情報の海、原初の混沌に近き闇の中で寝屋を作り、身を沈める事の方がましだった」

ギルガメッシュはため息にも似た呼吸を吐いてから、組んでいた腕を解いた。

「鎧が半分となつていた理由は、これで全て明らかとなつたな。

さて……リリスの話、その続きが訊きたいか？

それとも題を変えるか？」

軽い調子で言われる。そのことに、俺は違和感を覚えた。

(……)

質問をするのを一旦止め、男が少し前に言っていた事を思い出す。

(「鎧がなぜこうなっているのか、お前に仔細を伝えるためには……リリスの話を少しばかり吟遊する必要がある」)

彼の言う「少し」は、もう終わりなのだろうか？

(「……話は長くなるぞ、座れ」)

だと話していたのに、なぜここで別の質問を促すような素振りを見せたのか。

(「……ギルガメッシュは、露骨に話題を変えたがっている？」)

俺に、リリスの情報を渡さないようにしているのか……？)

嘘は言わないと俺へ対し宣誓していたが、嘘を付かずとも、情報を隠す方法は幾らでもある。

例えば、俺が疑問を抱かぬよう、言葉巧みにそこから思考を遠ざけたり。

(リリスについて知る機会など、ギルガメッシュの言葉を借りれば「未来永劫と無い」はず……)。

でも、質問の時間は限られている。もつと別に訊くことだつて……)

『砂塵の迷宮』の攻略に関する情報や、『伝説の船』の位置を訊くなどすれば、ドレイ



ク達の助けになれる。

北極までの道のりに、どのような種類の危険があるかについても、知る必要があるはずだ。

——けれど。

(俺は、リリスの事をもっと知りたい……)

胸の内で感じているその欲求が、あまりにも強かった。

(これが……ドレイクの言っていた、俺が心から思う『やりたいこと』なのだろうか……)

金細工が施された椅子に座る、ギルガメッシュを見る。

俺を眺めては口角を上げ、何かを待っているような様子だった。

次なる質問を決めるためにも、俺は考えを重ねる。

(リリスは、アスカを殺した……)

だけでなく、人、サーヴァント、AI……大量の命と感情の行く末を、彼女は残酷なまでに支配している。俺はそれを長年の地下都市での生活で知っているし、自分自身でも体感した。

なのに、それに対し、憎しみといった負の感情を抱き切れない……というのが、俺の気持ちだった。

(発言も行動も、狂い人のように見えるのに、なぜ……)

あんなにも寂しげで、怒りをはらんだ瞳をしていたのか。

（俺は、俺の全てを奪い、俺へ家族になることを求めてきた女神について知りたい。

……知らなくてはいけないように、思う）

空を見た。星の位置はまだ朝には遠く、時間は残されていた。

「……リリスの話、続きを聞かせてくれないか」

重い口を開き、男に伝えれば、相手は無言のまま笑みを深くする。

「貴方から聞いた限りでは、400年前のリリスは……愚かではあったかもしれないが、今のよう凶行を繰り返す存在とは思えなかった」

俺の言葉を受け、ギルガメッシュが口を開く。

「その狂気に至った原因を我は知っている……とでも言いたいような口ぶりだな」

「リリスが何者であるかも、何が起き、現在の彼女にまで繋がったのかも、知っているんだろう？」

だつて貴方は……リリスのサーヴァントなのだから」

それを言った瞬間、幼いアスカの姿が脳裏に走った。

嬉しいことも悲しいことも、「サーヴァントだから」と、俺に必ず教えてくれた、彼女のはにかんだ笑顔を。

「しかしなあ……」

ギルガメッシュはあの男の鎧の欠片、その内の一つを手の平で転がす。

「その問いは、貴様の望みであるアーキマンとの約束を果たす事に、何か関わりがあるのか？」

「……無い」

無い。

「けれど！ 俺はリリスの事を知りたい、知らなくてはいけないと感じ……」

「——噛んで含めるように言わねば分からぬか、アーチャー961」

辺りを薙ぐ、重圧のこもった声。それと共に男は立ち上がった。赤い飾り布が揺れる。

「リリスの真実を知る事が、一夜で終わるはずも無い。

そして……知れば、今までの貴様には戻れなくなるぞ」

空間に満ちていた夜の冷気が、放たれた声だけで一段と冷えを増していく。

「ここで問いを終えれば、貴様の旅の終わりは『アーキマンとの約束の成就』になるだろう。

だが、これ以上続けるといっているのであれば、その終わりは変容する」

俺は、見えない何かに体を押さえつけられているかのよう、身動き出来ない。

「貴様の存在の『消滅』こそが、貴様の旅の終点だ」

その単語をやけに強めて言うギルガメッシュ。

「消滅……」

冷や汗を首筋に流しながらも、俺は言葉を返した。

「俺は、マスターを失ったサーヴァントだ。」

約束を遂げるまでそのつもりは無いが、遅かれ早かれこの世界から去る定め。

……旅の終わり方なんて、変わらない。変わるはずも無い」

「そうか。お前の理解は、まだそこか」

ギルガメッシュは眉尻を下げ、険がとれた表情をすると、豪華な椅子へ戻った。

「……貴様が今抱いている知的好奇心も欲。いわばエゴ」

語る声に、先ほどまでの庄は無くなっていった。

「我は欲を愛でる。人を、ただ唯一の個人たらしめるものだからな。」

貴様にここまで胸襟きょうきんを開いているのもそういう事よ」

唐突に別の話題へ入ったギルガメッシュ。俺は流れが読めず困惑した。

「今ならば、何も聞かなかつたと忘れてやろう。」

忘却出来ぬ身である我が、貴様の失言を『無かつた事』としてやるのだ。

「これほど寛大な処置もあるまい……」

男は欠伸を噛み殺すような調子でそんな事を言った。

(ギルガメッシュという男が、俺に何を求めているのか……全く分からない)

問うことを許したかと思えば、決定的な話題から逸らす態度をして。

優しく諭す素振りを見せたかと思えば、震えあがるような圧を向けてくる。

(だが、質問をした時、威圧してきたことはあれど、俺へ攻撃を行うことは無かった)  
ならばもつと踏み込めるはずだと考え、赤い瞳を真正面から見据えながら、彼に問う。

「――俺は知りたい。リリスの事も、400年前、何が起きたのかも」

俺の声に込められた熱で、冷え冷えとしていた砂漠の大气が温まる……そんな錯覚を抱いた。

「……いいだろう、話してやる。王の慰めとなる事を歓喜せよ。

そして」

男はガーネット色の虹彩に、オニキスを思わせる深い黒の瞳孔を広げながら、俺の姿をその中心に捉える。

「覚悟を持たぬまま欲望を振るつた事、精々後悔するがいい」

その言葉の意味も飲み込めぬ内に、核心へ迫る夜話が始まった。

朝は――まだ遠い。

第96話 教えて英雄王

く  
リリスのサーヴァントと封印されし者く  
終わり

## 第97話 教えて英雄王

## リリスの功罪

この世界に対する女神リ

命の気配が一切無い砂漠に、冷たい大気が満ちていく。

……ここに在るのは、サーヴァントという過去の亡霊だけ。

その亡霊の一人、ギルガメッシュが俺に物語る。

400年前、まだ少女であった『女神リリス』が、何者で、何をを行い、どうして現在にまで至ったのかを。

「黄金に輝く封印の櫃の中。いかに炎熱地獄とはいえ、焦げる事に慣れれば思考は組み立てられる。」

くだらなき事、くだる事、様々考えていた。

……リリスの目を盗み、我へまめまめしく外の情報を教える者もいたしな？」

俺が尋ねる前に、男は先を言ってしまう。

「リリスのアルターエゴ、奴の事よ。無聊の慰めとして、道化の声に耳を傾けてやる事と

した。

よつて、これより話す事は一部奴の言葉を借りたものとなる。

それを念頭に置いておけ。良いな？」

肯定の意味を込め、俺は無言で頷いた。

「奴は様々な事を話した。

リリスの産まれた理由、なぜ家族を求めるのか、サーヴァントたちに何を行わせているのか。

世界がどうしてこのような形となったのか、今を生きる人間たちは何をしているのか」

風も止まり、今俺達の間には星の煌めきだけがある。

「まずはリリスの産まれた……いや、作られた理由を。

アルターエゴが言うに、リリスは『世界の管理者』として作られ、しかして考えの足りない、軽い神輿だったそうだ。

我ならばこう言い表すがな。

……人間どもが、『リリスのせいである』、『自分たちは命じられてやっただけ』と、責任を転嫁するために誂あつちえた全ての元凶だと」

子馬鹿にする響きが込められたその発言。



「それではまるで……」

声を出そうとして、はたと気づく。

(まるで……なんだ、俺は何と言いたい?)

ざわつく脳裏に浮かんだのは、二人の男の姿。

——戦場のただなか、動けぬ戦車の上で、敵を倒す技を呪いによって思い出せず、泥と血にまみれ、誰かを見上げる白髪のとと。——

——それに矢を向け、殺そうとしている黒髪のとと。

……そのイメージが流れ出すのを止めることが出来ない。

一度まぶたを閉じる。

(……とうの昔に終わった物語だ)

この戦いと犠牲をもって、世界の善悪は正しい流れを取り戻した。

それが、必要なことだったから。流れた命だって、必要なことだった。

(そうだ、俺はこれを言いたい。リリスはまるで……『これ』のようだと……)

だが、相応しい単語は見つからず。

「リリスはまるで……犠牲となることを期待された、人柱じゃないか……」

逡巡し、近いと感じた言葉をいつてはみたが、自分の気持ちを正しく表現できたとはいえなかった。

そんな俺に見定めるような視線を向けながら、ギルガメッシュは片方の眉を吊り上げる。

「そ・う・だ・が？」

何を当たり前のことを……と、断言せんばかりの口調だった。

「貴様が言つた通り。リリスは、世界を救うがために作られた人柱だ」

男は俺を笑いながら、詳細な説明を始める。

「400年と少し前。

人は、救済の女神の存在を求めながらも、その力を管理し、最後には簡便に殺せないものかと考えていた。

なぜ管理が必要か？ なぜ殺す必要があるか分かるか？ アーチャー961」

俺は黙り込む。

「それはな、女神は生命いのちを生み出す力を持つが故に、時に怪物を創り出すからだ。

……神の思うがままにさせれば、世界の荒廃を癒せても、人類が霊長の座から追い出されかねんからな」

神という存在に対する人間達の勝手さを思いながら、声に耳を傾ける。

「よって、管理し、殺しやすいよう、幾つかの伝説を混ぜ合わせた人工の神が作られた。

名を……『有機人造女神リリス』」

どのような方法を使ったのか想像もできないが、人間の技術というのはとうとう、人類にとって都合の良い神を作るところまで行き着いてしまったらしい。

(……アルジュナが生きていた時代では、考えすら浮かばなかったことだ)

俺の胸中などよそに、ギルガメッシュは作りものの神の話が続けた。

『リリス』という名は、様々な伝説を背負っていたが、その中に『悪霊や悪魔の母である』というものもある。

魔術師、科学者はその伝説に期待して女神を作り、世界を救う力を持つ怪物を産ませようとした。

ところが、女神は『産む』という行為に耐えられなかった。

アルターエゴが調べた情報によれば、何百と作られては死に、廃棄されたとか」

同じ顔の死体が幾重にも積まれ、山となつている情景がありありと思ひ浮かべられるのは、その光景を俺が知っているからだろうか。

「失敗の理由など、我にはおおよそ見当ついているがな。

子が、子を産めるはずがない」

当たり前と言えば、当たり前前の理論だろう。

……女神はきつと、子を産むには何もかも未熟すぎた。

体も、心も、魂も。

「リリスに怪物を産ませる案は保留となった。

次なる新しい計画を元に作り出されたのが、貴様が知っているリリスだ」

男の言葉で、金の髪の中に桃色の毛を混ぜている、あの美しい女の姿を思い出した。「救済に必要な知と力だけを与えられ、それ以外は何も与えられず。

罪を背負い善行を積み、役割を終えれば速やかに処理される、少女の形をした肉……」  
俺が出会ったリリスは、何体もの犠牲の果てに出来た産物なのかと、切なさにも似たものを抱いてしまう。

……上から目線な感傷だと、自分でも思うが。

「次に、なぜリリスが家族を求めたのか、8騎のサーヴァントを召喚したかについて。

結論から言えば、リリスの成長にそれらが必要だと製造者どもが考えたからだ」

彼女の背景を知れば知るほど、心の中にしこりが育つていく。

思わず下を向きそうになる顔を上げ、半ばやけくそのような気持ちでギルガメッシュを見ていた。

「幼き頃のリリスは、産まれてきた理由を、世界含む人類の救済のためだと信じ切っていた。

そのために『自らの成長』が求められているとも」

……男は笑みを浮かべるでも哀れみを見せるでもなく、至極真面目な顔で言葉を紡い

でいた。

「そしてリリスは、製造者たちから願われた通り、『自分を育てるため必要な、家族と成りうる存在』を呼び寄せた」

……サーヴァントの召喚すら、彼女自身の意志ではなく。まるで糸で吊られた人形のように。

「リリスと製造者の目的は違う。先ほどのはいわば建前よ。

製造者どもは、喚んだサーヴァント全てをゆくゆくはリリスに喰わせ、怪物を産める状態まで、強制的に肉体を成長させる事を目論んでいた……」

道から外れたサーヴァントが行う『魂喰い』、それに近いことをさせようとしていたのか。

「まあ、人間たちはサーヴァントの存在に、餌としての役割以外にも感謝していたことだろうよ」

男は当時の者のことでも思ったのか、せせら笑いをした。

「400年前の人類は、人工子宮で数を増やし、薬剤と学習装置でもって成長していた。リリスに必要とされた子育ての方法など、親のやり方など……誰も覚えてはいなかったからな」

俺としては……強い感情の向け方となってしまうが、リリスの製造者に対し『無責任』

や『身勝手』といったものを抱かずにはいらなかった。

「リリスはサーヴァントに囲まれ、愛され、自らをゆっくりと成長させながら、製造者から望まれたように、世界と人類の救済を始めた。

2017年から細々と続いていた戦争により、資源は一部の人間に独占され、その奪い合いで世界は荒れ果てていたからな。

……といっても、誰も彼も救うという優しいものではなく、粛清と弾圧によってだが」男がこれから語るものに嫌な予感を覚え、俺は唾を飲んだ。

「リリスが『人類』だと教えられていたのは、地下都市や空中庭園に住む上流階級たちのみ。もちろんここに女神の製造者たちも入る。

地上に放逐されていた人類など、命とすら思っていないかった」

ギルガメツシユは右手で上を指し、左手で下を指す。

「よって、ここにシンブルな敵対関係が産まれた。

すなわち、『地上』と『地下』」

話は続く。

「……対立は元からあった。

2300年当時、地下都市は軌道エレベーターの数とほぼ同じ13しかなく、そこに住んでいるのは、聖杯戦争で益を得た国の要人、その子孫や、魔術師、貴族や資産家、知

識人といった分類の者共で。

荒廃した地上にいたのは、聖杯戦争で国ごと敗者となり、全て奪われた者共だったのだから」

やや滑らかになった口で俺は問う。

「その上流階級は、現在いわれている上流階級と……」

「別物だ」

思わぬ答えが返ってきたので、俺はそのまま問いを続けた。

「じゃあ、今の上流階級達は何者なんだ？」

俺の前に突然現れてから、揚々と喋っていたギルガメッシュだったが、口の動きが止まった。

奇妙な沈黙、数秒後に。

「……知らん」

とだけ呟いた。

「なっ……貴方は俺に、『問えば答える』と言っていただろ……!」

からかわれているのかと憤慨しそうになってしまったが、どこか空虚さを感じる男の顔を見るに、どうもそうではないらしい。

「知らん、分からん。何をもってリリスが階級を分けているかなど、理解したくもない。

いつか奴に出会う事があれば直接聞いてみるがいい」

「つ……！ そんな機会など欲しくない。リリスに会えば俺は殺されるだろう……！」  
彼女にはどうか、俺は死んだものだと思っただけでいい。死んでしまいたい。

道半ばで殺されて、北極にたどりつけなくなるのは嫌だった。

「話を戻すぞ。」

……さて、粛清と弾圧に使われたのが、リリスに喚ばれたサーヴァントたちだ。

それに対抗するため、地上の人間たちも組織立った。

これが今に言うところのレジスタンスよ」

カイヤ・トバルカインもそれについて話していたなど、10年近く前のことを思い出す。

彼女は「400年くらい前に出来た」と、確かに俺へ語ってくれていた。

「レジスタンスはリリスのサーヴァントに呼び名を付けることで、己を奮い立たせていた。」

『特別な存在と戦っている自分たちは、選ばれた存在なのだ』と思いたかったのだろうよ」

指折り数え始める。ギルガメッシュという男の指は忙しい。

「シングルを『ひるがえ翻る魔剣の使徒』」



カルナを『日の如き槍の使徒』。

エウロペを『愛満つる白牛の使徒』。

セミラミスふを『天地伏さず激毒の使徒』。

バーサーカーは『狂える蝕みの使徒』。

もちろん我にもあつた。『封されし弓の使徒』……」

「エジソンは、『終わり無き製造の使徒』と呼ばれていた。

……違うかい？」

「然り」

情報の裏がとれた……と、喜んで良いものだろうか。

ドレイク達が会ったのは間違はなくリリスのサーヴァントであり、エジソンなる人物。

でもなぜ、こんな場所において、ドレイク達を助けたのかの理由が分からない。

「それをなぜ貴様が知っているかについては不問とする。時間がないからな。

そろそろ、リリスの狂気の理由へ触れるか……」

ちらりと見た空。

星々の位置は変わり、男との遭遇から長い時間が経ったことを俺に教えてくれた。

第97話 教えて英雄王  
終わり

この世界に対する女神リリスの功罪

## 第98話 教えて英雄王 　　～女神リリスの破綻と『ヴ

## リトラ』、そして聖杯の行方～

「リリスは、選別された者が住まう空中庭園にて、それはそれは幸福な日々を過ごしていた。た。

サーヴァントと共に世界を救う方法を考えては、意に従わぬレジスタンスどもを殺し、いつか地へ緑が戻る夢を見る……。

——だが、温かな日々は当然のように終わりを告げる」

断ち切るようなその言葉は、俺に対し、リリスの結末を聞き届ける覚悟を問いているかのようだった。

心の準備も済まないうちに、次なる事実が放たれる。

「良心の呵責に耐えかね、キャスターが離反した。

レジスタンスの策により、バーサーカーが破れた。

空中庭園にまで攻め込まれ、邀撃ようげきに出たセイバーが重傷を負った。

……アルターエゴがライダーを殺した」

男の口より並べられていく事実は残酷で、混沌に満ちていた。

「その男はライダーを消滅させると、次にリリスを手ひどく裏切り、殺そうとした。

そしてリリスは、自らの存在に対する評価を真つ向から受け止める事となる。

すなわち、自分は救済の女神ではなく、ただの殺戮者であり、終わりには殺される生贄であり……」

語る唇が、いやにゆっくりと見えてしまう。

「——過去と未来に渡り、誰にも愛される事は無いのだと知った。

その結果、リリスという存在は破綻したのだ」

『破綻』とギルガメッシュが語った言葉の意味については、自分にはよく分からない。一つ言えることは、サーヴァントの裏切りと喪失により、彼女の心はずたずたに引き裂かれたであろうということ。

「しかし幸いにも、リリスは絶望によって成長し、幼年期を終え、自我を得た。

内から湧き出す、自らが欲しかった本当の望みも……な」

俺は知っている、彼女の望みは——。

「リリスは衝動のままアルターエゴに願った、縋りついた。

製造者から刷り込まれ、媚びを売るために繰り返した言葉ではなく。

令呪を使い、力尽くで相手の感情を奪うようなこともせず。

……心の底から、『家族になってほしい』と」

俺は思う。

過去に存在した『リリスのアルターエゴ』。

彼が彼女に対しどんな答えを返したのかは、リリスが俺に見せた態度や言動の中で予想が立てられた。

「——されど願いは叶えられず、拒絶された」

想像通りであり、ひどく冷たい言葉をギルガメッシュは放った。

……その時、リリスは何を感じていたのだろうか。

俺には分かるはずも無く、400年前の出来事に対し、出来ることもなく。

(思うことは……きつと、誰も彼女を助けようとしなかったのだろうか)

だから、狂気と絶望に堕ちた女神リリスだけが世界へ残された。

「安らぎに満ちていた空の庭園は、レジスタンスの手によって半壊させられた。

セイバーと同じく邀撃ようげきに出ていたランサーは、傷を負い、鎧を奪われ、それを何処いずこかに隠されてしまった。

……我ですら見つけられぬ場所へと。故に、鎧の場所については問うてくれるなよ」

俺は冷静さを装いながら、ギルガメッシュに訊く。

「リリスが狂った原因は、アルターエゴの裏切り……なのか？」

「慕っていたライダーを惨たらしく殺され、最も心寄せていたサーヴァントであるアルターエゴから見捨てられたのだ。

本能も欲も、魂すら歪むだろうさ」

ギルガメッシュの言葉に俺は納得するしかなかった。

……もし、彼女の願いが叶えられていたのなら。

リリスはあんな……簡単にアスカを殺し、サーヴァントを改造し、人の殺戮を行えるAIまで作るような……残酷な女神には、なっていないかったのかもしれない。

「これほど手ひどい仕打ちを受けてなお、リリスは生き延びた。

絶望によって成長し、素質を開花させると、反逆者を片付け、後始末を始めた」

「後始末……」

「戦の後、どのような差配を行うかも肝要だ。貴様もそうは思わんか?」

男から言われても、俺は息苦しきを感じながら無言を貫くしかなかった。

「リリスはレジスタンスをあらかた殺すと、匿われていたキャスターを捕らえた。

そして、アサシンと共にセイバーとランサーの治療に当たらせた。

しかし傷は深く、ランサーはあのような形でしか蘇らなかつた……」

「……『ヴリトラ』になつたのは、そのせいかな?」

何か超常の現象でも起きぬ限り、『あの男』があそこまで歪み果てるわけがない。

言った自分の声は、思いがけず震えていた。

「ふっ……リリスめが行ったのはおぞましき外法よ。

セイバーから心臓を取り出すと、ランサーへ移植し、女神たる自身の血を与えた。

……血族としたのだ。その甲斐もあつてか、蘇生は上手くいったようだ。

——ランサーは狂気に墜ち、欲を際限なく膨らませる蛇の如き悪竜となつた」

事実を淡々とつまらなさそうに語る男は、砕けた鎧の欠片を摘まむと、月の光にかざしていく。

「靈基は膨張。醜く肥え太り、眼球は1064の数へと秩序だつて増殖を繰り返した。

骨格すら人の形を留める事は叶わず、地球の重力下では自滅しかねん肉体だ」

太陽の神から贈られた鎧に月の光を当て、ギルガメッシュは鎧を愛でていた。

「精神は崩壊。あの様子では、人物の区別がついているかは疑問が残るな……」

軌道エレベーター内での、会話にすらなっていないなかつた言葉の塊のことを思い出す。

（『アルジュナよ、オレはお前を殺すぞ、それが運命なのだから』）

……あまりにも巨大で、赤い眼窩を動かしながら告げられた宣誓も。

沈む俺の思考を引き戻すかのように、ギルガメッシュは『ヴリトラ』の話の続きを語る。

「されどリリスは、奴が蛇竜として息を吹き返した事をいたく喜ぶと、宙そらに打ち上げ、無

重力空間で治療の続きを行うことにした。

伸びた体を地球の空へ巻きつけ、硬い装甲を取り付けると、大地を掌握する兵器へ生まれ変わらせたのよ」

夜空を見る。この月と星の間に、あの男は400年近く浮かんでいたのだろうか。

……ずっとずっと、狂ったままで。

「まるで見てきたように話すんだな。

アルターエゴから聞いた話、だという建て前はこうした」

目線を空から地上の王へと戻す。

ギルガメッシュは、輝く鎧の欠片を一つずつ仕舞っている最中だった。

「言ったであろう。『一部奴の言葉を借りる』と。」

しかし、それでは正確性に欠ける。なので、我の目で見た事を足したまでだ。

貴様も知つての通り、サーヴァントとマスターというものは、多少であれば感覚を共有できるからな。

リリースが見たものは、我も見たといい事だ」

「リリースの絶望を、お前も知っていた……というわけか」

「であればどうする。我にあの娘を救えとでも?」

俺は無責任なこととは言えず、口をつぐむむしかない。



「アーチャー961。聞けば戻れんどの我からの警句を忘れたか。

……貴様、内心あの愚かなリリスに憐れみを感じたのではないか？

宙そらに浮かぶ殺戮兵器と化したランサーを、楽にしてやりたいとも思い始めているのではないか？」

「それは……」

俺の心を見透かしているかのような話しぶりだった。

(ギルガメツシユの言う通りだ……)

俺は、女神リリスを可哀想だと思い、あの男を……助けることは出来なくとも、楽に出来ないかと考え始めてしまっていた。

「貴様、お人好しが過ぎるぞ。いや……世を知らぬだけか……」  
呆れたような声で男は続ける。

「アーチャー961、お前は幾つ望むつもりだ？」

約束の成就。船。リリスの救い、ランサーの救い……」

ギルガメツシユは指先で空間をかき混ぜた。

「……腕すらないくせに、高望みだとも言いたいのか！」

責めるような物言いの男に、感情的な声で叫べば。

「いいや。」

取りこぼすことになろうとも、抱え切れぬものを己が内に抱える様、実に幼子らしいと褒めているのだ」

感心したかのような響きの声で返された。

「それほどまでの傲慢な望み。もはや『万能の願望器』でもなければ叶えられんだろうな……」

人差し指で空くうに杯を描くギルガメツシュ。

「聖杯……?!」

男の語った『聖杯』の存在。

それは、閉塞感に満ちた現状を打破する立った一つの希望の光に思えた。

「……あるというのか、この世界に」

震える声で訊く俺を見ながら、男は嗜虐的な笑みを浮かべながら頷く。

「聖杯が……あれば……もしかしたら……」

背中をじつとりと汗で濡らしているのは、興奮からだ。

そう——聖杯さえあれば、あの男のことも、リリスのことも、世界のことも、全て解  
決できるのではないかという、強すぎる期待、願望。

「では言うが」

俺にかけられたギルガメツシュの声は冷たい。

「聖杯を得るためには、アーキマンとの約束の相手、トワ・キリエライトを殺す必要があるのだとしたら……お前は どうする？」

——ざわつく脳内は静まり返り、全身の血が凍ったかのような心地になる。

「……なぜ、そんな話になってしまった」

瞳の濁きを覚えながら、男に、訊いた。

「キリエライトが聖杯の守り人であり、その悲鳴によつて聖杯は顕現するからだ。彼女を殺せば、聖杯は貴様の手に渡る」

「……」

絶句、するよりほかなかった。

この世に存在し、過去と現在に渡つて絡み合うあらゆる物事の残酷さに。

例えるならば……瓦礫で出来た塔だ。

どこかを除けば、どこかが崩れる。

この世界も同じだ。

誰かを救えば、誰かが救われない。

「キリエライトは不老不死であるが、殺す手立てが無いというわけでもない。

サーヴァントであれば、腕の無い貴様であつても殺せるさ」

男の言葉に誘われるように、くつきりとしたビジョンが浮かんだ。

星空の下に立つ顔も知らぬ少女へ、『アーキマン』と記された職員証を渡した後——ほころぶ笑顔を見せたキリエライトを、ぐちやぐちやの肉塊になるまで蹴つてなぶる己の姿。

「貴様はそれが出来る存在だ。

聖杯を手にし、リリスを救う事も、ランサーを救う事も。

ああ……荒れた地上に、水と緑を呼び戻す事もついでにな？」

ギルガメツシユは至極落ち着いた声色で語りながら、豪勢な作りの椅子から立ち上がる。

「なんと眩しく、旅立ちにふさわしい朝日か。

……夜が明けるまで王に語らせるとは、幼子でなければ許されぬ所業よ。

ふむ、後で我こそ飴でも舐めるか……」

空は薄い水色。砂ばかりの世界に、新しい朝がやってこようとしていた。

背を伸ばし、正面から陽光を迎える男とは反対に、俺は立ち上がれずにいた。

足先から夜の名残の冷たさが伝わってきて、生きたまま氷像になったかのように。

「俺を……」

「なんだ」

腕をかざし、闇色の陣幕を仕舞おうとしていたギルガメツシユに最後の質問をする。

「俺を！ こんな気持ちにさせるために助けたのか?！」

この『助けた』という言葉は、俺を拾ったことを指してもいるし、今日、俺の前に現れ、問うことを許したことも指している。

「こんな……こんな……どうしようもない気持ちにさせるために……!」

俺は、誰にも語られる筈の無かった『真実』を知った。

知って……自分があまりにも浅はかで、力もなく、だというのに強欲なのだど打ちのめされた。

「……それが、最後の問いか?」

男は赤い瞳を細め、椅子に座り込んだままの俺を瞳の中心に映す。

「答えろ！ ギルガメツシュ!」

叫びながら、心の、妙に冷え切った部分で思う。

こんなの問いかけなんかじゃない。ただの子どもじみた『八つ当たり』だと。

「——違う」

ギルガメツシュのその表情を……なんと言えばいいのだろう。

眼差しから、俺に対し慈愛と諦観と向けているかのような……見放しているかのような……。

「我はな、お前を砂の中より見出した時、得難い『願い』を見た。

死した女の願いだ、お前も知っていよう」

……ガレス・キリエライト。

「それがお前を守り、閉ざされていたこの世の宙をこじ開け、ガレスというサーヴァントまで呼んでいた。

……あれほどまでに澄み切った献身を見るのは……久方ぶりであった」

語る声からは、男の感慨が強くにじみ出ていた。

男はガレス・キリエライトの『願い』に、何を見たのだろう。

「よって、貴様を拾い、せめて育てよと考え、給金代わりの酒と共にここへ落とした」  
その瞳は、空の遥か彼方へ向けられていた。

……何かを思い出しているかのような面立ちだった。

「さらばだ、一度と会うこともないだろう。

アーチャー961、いや、元型アーキマンの男よ。

悩み、苦しみ、足掻き、叫び、臆面なく涙を流せ。

……貴様にはそれが必要だ」

言い終わった後、ギルガメッシュは片腕を上げた。そこに闇で出来た陣幕が集まり、丸い塊となる。

光り輝く空間に丸を仕舞うと、上空からヴィマーナがゆらりと降りてくる。

風が逆巻き、砂を吹き飛ばしながら俺の髪を激しく乱した。

「今の私の目的は、かの黄金の鎧の半分、その行方のみよ！」

誰かに言い聞かせるような大きな声と口調で言い残し、男は尖った船首に飛び乗ると、俺に一瞥投げてから空へ上がっていく。

「待て……待て……！」

俺の呼びかけも虚しく、ギルガメッシュとその船は高速化し、あっという間に飛んで行つては天の芥子粒となつてしまふ。

「……俺は、これほどのことを知つて……どうすれば……」

だからここには、地面へ膝を付き、土で額を擦っている自分だけが残された。

朝を迎えた砂漠は、迷宮としての役割を思い出したかのように、激しい砂嵐を起こし始めていた。

第98話 教えて英雄王

く女神リリスの破綻と『ヴリトラ』、そして聖杯の行方く

終わり

## 第99話 あ的女神（こ）の旦那が言うことにや……

——ギルガメツシュとアーチャー961との別れから数時間後。

『砂塵の迷宮』端。荒野の高台にて。

天翔ける船を自らの蔵内へ仕舞った黄金の王は、椅子に座ると、目を遮る天幕の下、自動的に風を送ってくる大羽を稼働させ、くつろいでいた。

手には粘土版で作られた書籍があり、文字列を眺めている。

ともすればこのまま午睡でも行いそうな和やかな空気だが、その空気を変える『存在』がやってきて、王に声をかけた。

「ギルガメツシュ王、ご機嫌麗しく……」

男性、らしく聞こえるよう整えられた声。

「400年と少しぶりです、ごいいます」

その『存在』は、目の前の王へ敬意を示すためか、前方に当たる部分を礼するかの如く下げた。



「先にリリスが我を見つけると思っていたがな。

貴様が来たか」

ギルガメッシュは粘土版を閉じ、傍らにあつたテーブルへ一旦置く。

どこか気だるげな王へ、その『存在』は勝手知つたる態度で話しかけた。

「まさかこの『砂塵の迷宮』にいらつしやるとは思わず、時間を使つてしまいましたが……。

ともかく、リリスより先にお会いできてよかつた」

「貴様、我をつけていたのか？」

「そんなこと……していません。」

都市運営システムとワームたちのカメラシステムを、バックドアから少し……ごによごによして、探したのです。純然たる努力の産物と言えます」

挨拶と経緯を話しながら、細い四本足でバランスを取つて歩き、ひよこひよこ近づくその『存在』。

「リリスは……貴方様が封印から逃れたことに気づき、探している。

見つけ出した暁には——貴方様を殺害するでしょう。

だからこそ、死ぬ前にお会いできてよかつた」

「殺されるつもりなど毛頭無いが」

「その言葉通りになれば……良いなと思っ  
ていますが、リリスの成長の幅は未知数  
です。何より、彼女は令呪もサーヴ  
アントも『ヴリトラ』も抱えています」

「どうであれ結果は見えている。リ  
リスの先には破滅しか待っていない」

「だとしても……心配になります、  
私は」

話すその存在へ、ギルガメツシユ  
は小動物でも見るかのような、どこか  
眠たげな眼差しを向けた。

「あの男に語るべき事は言っ  
て聞かせたぞ。私の言葉だ、少しは  
しゃんとしよう。」

ふはは……知れば、リリスはさぞ  
や歯噛みするであろうなあ？」

「ああ……それは残酷なことをな  
されましたね」

哀れみが込められた声で、その『  
存在』は話す。

「あの検体は……こう評したくは  
ないのですが、失敗作。」

レジスタンスが求めた、リリス殺  
しの救世主にはなり得ない。

遠からず自壊するという点におい  
ても、リリスの子らと変わりないで  
しょう。

残酷な真実や過去を伝え聞かせ  
たとして、何になるのか。

知らぬことは知らぬままで良い  
のです、それも幸福の形の一つだ  
というのに」

ギルガメツシユが言葉を返す。

「確かにあやつは稚い。であるから  
こそ、苦難を与え、育つ様を目に映  
したくなるのだ。」

そして、どのような答えに至り、終わりを迎えるかまでを……な」

「聖杯の……ありにかについても、お話になられたので？」

「しかしよろしかったのですか。貴方様は……」

「血生臭い『聖杯』だ。蔵に収めれば他の宝物ほうもつが汚れよう。

やはりそうだな……あれの結末の方がよほどそそられる……」

「ギルガメツシュ王は……少々残酷に過ぎます」

「はっ！ 貴様に何を言われようと響かんわ！」

王が座る椅子の側に、その『存在』は腰を下ろし……というより、体を四角く畳んだ。その動作から発生している音を聞き流しつつ、王は言葉をかける。

「石と油、郷愁と物語より作られしもの。女神の伴侶、血潮無き冷たきアダムよ。

夫として、妻の行いをどう考えている？」

名を呼ばれた『存在』は、とても奇妙な姿をしていた。

大きさは、子どもが腕に悠々と抱えられるくらい。

角の丸い四角い体、その側面には、細い金属フレームへ人工筋肉を纏わせた足を4つ付けている。

頭に当たるパーツは無いが、胴体前方に埋め込まれている大きなカメラが、一つ目のように輝いていた。

今現在は、座る犬のように全ての足を折り畳み、実にコンパクトな形となっている。いわゆる『ロボット』の体をもったアダムが話だす。

「私は……とうの昔に離縁を言い渡された身。

彼女の求める家族にはなれなかった欠陥品。

……感傷を覚える資格など無いのです。

しかしそうですね……全てが終わりを迎える前に、私が動き、語る時が来たのかと感じています」

ぼそぼそと呟くと、アダムの胴体、その上面が開き、中からロボットアームと小型ソーラーパネルが伸びてきた。そして、発電、蓄電を始める。

「我を前にして食事を摂るか」

「慌てて……飛び出してきたせいで、蓄電池に不調が。なのでこの辺りで充電を。

……それに、AIを搭載した自動人形である私を、無礼打ちにするような御方ではないと知っています」

「貴様は壊しても限りなく、徒勞が募るばかりだからな」

王はテーブルに置いていた粘土板を手に取り、再び文字列を読み始める。

「しかし……ギルガメッシュ王、どのようにして封印から逃れたのですか？」

「リリースが『ヴリトラ』へ命じた攻撃、それに乗じただけの事」

「『あれ』が……放つ光線は、地形を変えるほどですからね。

櫃ひつが軋み、封印に綻びが発生するのも納得です。

私の本体がああ場所からお出かけ出来ないのも、そのせいですし」

「『あれ』の目が届かぬ場所など限られるからな」

王は視線を手元の粘土板から空へ投げた。途中で途切れた男の言葉を、アダムが補足する。

「北極……南極、『砂塵の迷宮』。それくらいでしようか……」

「あと2つほどあるが。」

……哀れよな、奴は己の体すら見えなくなったらしい」

「嫌なこと……嫌いなことから、目を背けたくなるのは心として当然の動きです」

「それは少々趣おもむきが異なるぞ、アダム。」

怪物へ変じた者が、そうなる前の『己』を直視しても、在る事は認識出来ぬ……それと同じ意味だ」

「食べ過ぎてしまった人間が、体重計に乗りたがらないようなもの？」

「違うと言つていよう。」

ふん……400年前より変わらん。洒落のセンスがずれた男め……」

鼻を鳴らした後、王は目を文字列に落とし、読書を再開する。

その横で、アダムは充電を続ける。

——太陽の下、王と機械の奇妙な時間が流れていった。

第99話 ああ女神の旦那が言うことにや……

終わり

## 第100話 — あなたは英雄

「アーキマン殿、どうされましたか？」

砂地に腰を下ろしていた俺を、上から覗き込んでいたのはガレスだった。両腕を背中に回して胸を張り、顔いっぱい心配そうな表情を浮かべている。

「……なんでもない」

重たい胸の内がばれぬよう、感情を押し殺した声で返事をしてから、俺は重い腰を上げた。

ここはアジトの外の砂漠。日はまだ低く、夜が明けたばかり。

「メアリー！ 荷物の積み込み、終わりました？」

「もう終わったよー。食べ物も飲み水も必要ない……というか、食べ尽くしちゃったしね」

立つて見えた目の前には、アンとメアリーが荷造りしている姿があった。

「ロープやらナイフやらの道具と、キャプテンから頼まれた『コレ』ですわね」

「『コレ』とほぼ身一つだけで冒険に出るなんて、キャプテンって骨の髄まで海賊って感

じだ」

「そのおかげかしら。冒険への高揚感は、今までで一番感じていますけど……」

「けど?」

「お酒が無いのは……とても寂しいものです……」

「アンが惜しむなんてよっぽどだなあ。」

確かに、あんな美味しいお酒は僕も初めて飲んだから、機会があればまた飲みたいけどね」

2人は失われた酒について軽く悔やんでいる様子を見せながら、ホバーバイクの横へ荷物を括り付けた。その作業を終え、後ろを振り返った。

「キャプテン! 終わりましたー!」

「準備完了!」

大きな声をかけられ、しゃがんでいた人物が立ち上がる。

「アタシの方も準備万端! さあて、出発するとしようかね!」

フランシス・ドレイクだ。外套に付いた砂を手ではらい、ホバーバイクにまたがる。

「短い間だったけど世話になったよ! 狭くて暑くて、乾いたアジトよ!」

これが今生の別れ。砂の中の寝床なんて初めての経験で、楽しかったさ!

……でもね、アタシは海賊! 海に生きて海で死ぬ悪党!



だから、アジトよさらば！ また別の誰かの助けになつてやんな！」

羽付き帽子を脱いで手に持つて振り、生活の場としていた巨岩に別れと感謝を告げたドレイク。

アンとメアリーの声と動きがそれに続いた。

「ガレスたちは旅立ちます！ お世話になりました！」

俺のかたわらに立っていた彼女も、満面の笑みで言葉を紡ぐ。

「……ありがとう、世話になった」

明るさをもって出かけようとしている彼女たちとは反対に、俺はそっけない声しか出せなかった。

「さあつ、行きますよー！」

アーキマン殿は、ガレスの背中へ、ご自身の背中を預ける形で座ってください」

彼女はホバーバイクにまたがる。指示通りに座ると、ガレスは俺の胴体と自分の胴体をロープでぐるぐる括り付けた。

走行中、ガレスが前を見て、俺が後ろを見るという役割分担なのだ。

「出発です！ 今日こそ、伝説の船を見つめましょうね！」

息巻く彼女に言葉を返せず、俺は思わず黙り込んでしまう。

起動音の後にバイクが浮かび、発進、徐々に速度を増していった。

朝からやっていた作業は、アジトの引き払い。

今から行うのは、最後の探索。

……そう、俺達は必要最低限の荷物と燃料だけを持って、最後のアタックへと挑もうとしていた。

バイクに体を揺られながら、昨夜と、今日の出来事について思い起こす。

ギルガメッシュから、リリスの真実、『ヴリトラ』の真実、聖杯の在処……と、一夜にして多くの情報を流し込まれた俺は、部屋に戻った後、泥のように眠ってしまった。

目が覚めた時には、日が傾きかけていた。

……恥ずかしいことに、一日のほとんどを寝て過ごしてしまったらしい。

俺は慌てて部屋から広場へ走ったのだが……目の前にあったのは、すやすやと眠り込んでいるガレス、アンとメアリー、ドレイクの姿だった。

その後、他のサーヴァントが目を覚ましたのは真夜中近く。

全員が起きていることを確かめてから、ドレイクは神妙な顔でこう切り出した。

「……」を引き払う。そして、最低限の物だけ持って、探索に向かう」

目が覚めるような言葉。

「酒を浴びるように飲んだおかげで、頭もスッキリ。必要なものも分かった。

……アタシ達に足りなかったのは覚悟だ。

いつでもここに帰ってこられる、今日が駄目なら明日挑めばいい……そんな生ぬるい考えで掴めるようなお宝じゃないのさ、その『伝説の船』ってヤツは」

彼女の意見に、アンとメアリーが幾度も頷いていたことを覚えている。

反対意見はなく、全員の意思が固まった。

……いや、俺の気持ちだけは、まだふわふわとしていた。

『カルデアは南極にある。だが、たどり着くためには最後の海を越えねばならん。

貴様たちが這いつくばって探しているあの船では無理だ』

とのギルガメッシュの言葉を、『伝説の船』を見つけ出し、『最後の海』と、その向こう側にあるという『楽園』を目指している彼女たちに、伝えるべきか悩んでいたから。しかし考えている間にも時間は進み、荷作りを終えるころには夜が明けかけていた。

そうして出発の時を迎え、俺は言うべきことも言えぬまま、ガレスの後ろに座っている。

「今日も砂嵐がひどいですね……」。

他の皆さんの位置を目視しつつ、並走していますが、気を抜けばあっという間に迷子となつてしまいそうです」

起きたことを振り返るのを止めると、ガレスの声が聞こえてきた。

天は黄土色であり、風景は数十m先もようと知れない。彼女の言葉通り、一昨日と同じような酷い砂嵐だ。

「敵の姿は……今のところは確認できない」

俺はガレスに背中を預けたまま、後方を見渡す。

探索の度に襲い掛かってきていたあの砂で出来た怪物は、まだ姿を現していない。

運転ハンドルを握っているガレスは、俺の横を走っているアンとメアリーのバイクや、先頭を行くドレイクとの位置を細かく確認しながら、砂の丘を乗り越えた。

「……っ！ アーキマン殿！」

先ほど乗り越えたばかりの砂丘が崩れ、その色が黒く変わり、塵が明らかな人型となり始める。

「地形そのものが変化をするなんて……！」

上擦ったガレスの声。

（不味い、反応が遅れた……！）

焦りそうになる心を抑え、後ろから来た敵を視認する。

そこにあつたのは黒い巨人の姿であり、柔軟に体を膨らませ変形しながら、こちらへ腕を伸ばしてきた。

「させません！」

俺達が襲撃を受けたことに気が付いてくれたアンの、鋭く正確な射撃が敵の腕を砕いたが、砂が集まり直ぐに回復。

「ガレス！ このままでは……！」

「ご心配なく！ 速度を上げ、振り切ればいいだけのこと！」

彼女は正確にアクセルをひねり加速したが——敵の腕の先端が、俺の頭に一瞬だけ触れてしまった。

「!!」

——瞬間、脳裏に走ったのは知らない者たちの声。

『サーヴァントでなくたって、出来ることはあるんだ！』

俺達レジスタンスがここで囷になって、女神に人間の底力を……見せ……』

『空中庭園に到達できるよう……何の力も無い俺達が……サーヴァントの……盾に……』

過ぎ去つていく景色の中に、誰かの過去が見えた。

名も分からぬ無数の人々が死んでいく光景が、俺の脳へ焼き付いていく。

『同じ弓兵として、汝の力を信じよう。』

では、またな』

『勇士である貴方ならば、必ずや本懐を遂げられることでしょう』

『私たちがびゅーんと飛んでいって、みんなが渡れるよう、アンカーを打ち込むね！』

白鳥礼装の凄いところ、下からでもきつと見えるはずだよー！』

『オルトリンデは、世界を救うため、お姉さま達と共に戦います。』

ワルキューレである私が恐れるものなど、何もありません』

生まれも伝説も異なる、多くの英雄の姿すら見える。

『ここにきて素破すっぱの真似事とは、奇妙な縁えにしもあつたもの。』

しかしこれが、世界を救う一助になるのであれば……』

『私が召喚された理由がようやく分かった』

……姉の仇たるあの男は、私が殺そう。私はそのために此処へ来たのだ』

『気配遮断のスキルが低いから、突入組にはなれないが……。』

今は亡き医神に代わり、最後まで皆の傷を癒す。

それが、残された僕に出来ることだと……』

——落ちる枯葉のように、彼らが雑多に殺され、消えていく景色も。

『アルジュナ、私はお前の勝利を信じているぞ！』

なあに、お前の背中はこの英雄イアソンが守つてやる！ 光栄に思え！』

——自信満々に言い切つているというのに、その中に悲しみが混ざつている男の声が聞こえた。

「俺は……違う！ 違うんだ！」

頭を振りながら、見えた幻影を、聞こえた声をかき消すように敵へ大声で叫べば、それは狼狽えたような素振りを見せた後、弾け飛び、色も形も無い砂と還る。

(数が……！)

しかし襲撃は終わらない。砂で出来た人型の敵は、次から次へと地面から湧いてくる。

「アーキマン殿、大丈夫ですか？ 後方の様子を教えてください！」

それは一様に、俺を目指し集まってきていた。

「ガレス、敵がどんどんと……」

「了解です！」

追い付かれない内に、全力を賭して砂嵐を突破します！」

ガレスの言葉の後、ホバーバイクから異音が聞こえ始める。急加速や減速など、無理

な動きをさせ過ぎたからだろうか。

「ここが踏ん張り所なのに……くっ！」

焦りを見せる少女。

（敵は明らかに俺へ執着を見せている。だったら……俺が、皆から離れば。

……『匣』になれば）

先ほど頭に流れ込んできた『人』の言葉が脳裏によぎる。

悩んでいる時間など無かった。

「ガレスー！ ごめんー！」

短い謝罪を告げた後、胴体を前へ傾け、力一杯に背を丸め。

「何を……！」

戸惑う彼女の声を無視し、ガレスと俺を繋いでいた擦り切れの目立つロープを強引に引きちぎった。

「アーキマン殿！ 止めてください——」

足で勢いづけてから飛び降りれば、砂の地面へ顔から落下した。

「ぐう……！」

直ぐに起き上がり、周りを見るが、ガレスの姿は砂嵐の中へ消え去り、見えなくなつた後。



(皆は無事に先へ行けたのだろうか)

1人になって想うことは、それだけだった。

ざらざらと音を立てながら、無数の敵が地からあふれ出してきた。

「っ……」

俺の周りを、黒い砂の巨人が取り囲み始める。彼らは首をもたげて、こちらを覗き込んできた。

ガレスが出発前に俺を気遣ってやってくれたものとは、形は似ていても、そこへ込められている気持ちは異なっていることだろう。

巨人が歓待するかのように、両手を上げた。

『アルジュナ』

巨人の顔に穴が開き、ぼわぼわと輪郭を不気味に揺らしながらその名を呼んだ。

『アルジュナ』

一定の間隔を持って作られていた巨人の輪が、狭まり、俺へ近づいてくる。

『アルジュナ』

まるで祭りだ。

『アルジュナ』

英雄を村の総出で迎える。



そして……こちらへ向かってくる。

「うおおおおお!!!」

フランスス・ドレイクが、限界を越えた速度で走るホバーバイクにまたがり砂塵を突き破つて、その姿を見せた。

でこぼことした丘を乗り越えてきたのか、バイクは数mも宙に浮かんでいた。彼女は銃持つ腕を下に向け、空から敵へ攻撃を浴びせかける。

「撃つて殺せる形になってくれたのは……ありがたいねえ!」

散弾とも見紛うばかりの弾を連続で受け、巨人が次々に崩れていく。彼女は降り注ぐ敵の残骸にもひるまず、バイクの速度を殺さぬまま、俺を片手でかつさらった。

宙に放り投げられた後、落下し、俺の体はすっと後部座席へ収まる。

「あ、ありが……」

「考えなしに自分の命を投げ捨てようとしたヤツの礼なんか、聞きたかないね!」  
「でも、俺が囹になればみんなが助か……!」

「後で説教してやる! しばらく口閉じてな!」

言葉を遮られた。

彼女は首を何度も横に振りながら、バイクを操縦しつつ、荒っぽく喋り出す。  
「船を動かす人手が足りないから、アンタを誘ったんだ!」

だつてのに、こんなバカな真似しでかして……」

目の前に壁のようにぬつと出現した黒い敵。そこから伸びた腕を、ドレイクはバイクを転倒寸前まで車体を斜めにするこゝでかわし、砂の上に大きく弧を描きながら疾走していく。

「アンタ一人が囷になつて、一人ぼつちで死んじまつて、それでたどり着けたつて——！」

そんな神がかつた操縦の合間にも、彼女は俺を叱るような声色で話し続けていた。

「嬉しく……なーい!!」

敵はバイクを捉えるためか、辺り一面へ布のように薄く広がり、丸ごと包み込もうとしてきた。

「ダユーー!!」

ドレイクが突然に『彼女』の名を呼ぶ。その瞬間から、ドレイクの体より妖気にも似た濃い魔力があふれ出す。

「——怒られている可愛そうな腕無しのお方に、素敵な力を見せてあげましょうか」

ドレイクの精神の表に現れ出たダユーは、気だるげな動きで銃を操り、狙いをろくに定めず銃口を下へ向けた。

そこから放たれた弾は、通常の物ではない。

「わたしが持つ精霊の力で、あなた達をどろどろにしてあげる……」

弾が、地面と同化した黒い敵に触れた瞬間、破裂し、中から大量の燃える泥が噴出する。

『ギョウ!!』

『ミギツ』

ダユーの謎の力が込められた攻撃を受け、敵から、人種や性別の判断つかぬ悲鳴が漏れ出る。

「……よし！ ありがとねダユー！ ちよいと助かった！」

意識は再びドレイクに戻ったようだ。

敵は燃える泥に焼かれ、動きを阻害されている。

ホバーバイクは進み、前方に広がっている砂嵐の厚みも薄くなってきたように見える。

(あと少しで目的の場所に、嵐の向こう側に……!)

——が。

『ああああああ……アルジュナアア!!』

砂の下から現れたのは、おびただしい数の人骨。それらが一つにまとまり、白を基調とした異形の巨人となる。

『俺達には英雄が必要なんだあ……!』

『見捨てないでくれえ!』

『いかないでいかないで……わたしちをどうか助けて……』

敵の体を構成している何千という頭蓋骨が、黒い砂に操られて動き、一斉に泣き言を放ち出す。

その姿は、東洋で語られていた怪物、がしやどくろと類似。

空の眼窩からは、涙のように余剰の骨がぼろぼろとこぼれ落ちていた。

「人違いするくらいなら、死者は黙ってな!」

ドレイクはひるむことなく銃を連続して放つが、敵に当たっても骨が小さく砕けるだけで、痛手は与えられない。

「くそつ……でかすぎる! カルバリン砲でも出そうかねえ!」

悪態を吐きつつ、砂で視界不明瞭な上空から落ちてくる骨を、バイクを操縦してひたすらに避けていくドレイク。

「仕方ない、宝具を……!」

彼女の体の内で、高密度の魔力が練られ始める。

(ドレイクの攻撃に重ねる形で魔力放出を使えば、少しはダメージを与えられるかもしれない)

しかし、ここで発動すれば彼女を確実に巻き込んでしまう。

『ギヒツ、ある、じゆな……!』

かつては人であつたはずが、長き時の果て、完全に怪物へと変じてしまったその巨人。奇怪な響きの声で名を呼びながら、あまりにも大きな拳を振り下ろして来た。

「っ」

前に座る彼女の息を飲む音が聞こえる。

そして、息を吐く音も。

……けれど、敵の攻撃は唐突に止まる。

『■■■■■■■■■■——!!!』

——聞こえたそれは、砂漠を揺らす咆哮であつた。

ゆらりと砂塵の中から姿を現した拳が、巨人の頭にぶち当たり、骨で作られた体を砕く。

次に続くのは、拳による鮮やかな連撃。

『■■■■■■■■■■——!!!』

連なる山脈が如く、筋肉の峰盛り上がるその手足が、骨の怪物を壊していく。

『■■■■■■■■■■——!!!』

雄たけびが、辺りを覆っていた砂塵を吹き飛ばし、攻撃を受けてもなんとか立ってい

た敵を微塵に砕いた。

当然、その圧に俺達も巻き込まれ、驚いている暇なくバイクから放り出される。

視界の端で、乗り手を失ったそれが転がって、部品をこぼしつつ壊れていくのが見えた。

(あれは……)

宙へ吹き飛ばされながらも俺は、咆哮の持ち主の姿を目に焼き付ける。

(いったい……)

それは、全身で『英雄』という概念を体現しているかのような。

体長は少なく見積もっても10m。獅子のような荒々しい黒髪と、ギリシャ彫刻の如く均整のとれた美しさある男の形であり、肌がざらついていることから、砂でその体を作っていることが推測出来た。

『……』

砂作りの英雄と目が合う。瞳には、力と深い思慮を思わせる赤の光が輝いていた。

「ドレイク……！」

俺は空中にて我に返り、地面へ叩きつけられる前に彼女を探す。

謎の英雄が砂嵐を吹き飛ばしてくれたおかげで、直ぐに見つけることが出来た。

赤髪のドレイクが、薄い青の空から黄の地面へ向けて真っ逆さまに落ちていく。



「おい！ 大丈夫か！」

落ちながら声をかけると、固く閉じられていた瞳が薄く開いたが、彼女の視線はおぼつかない。今の今まで気絶していたのだろう。

「……炎神よ！」

両足から炎を噴出し、空を駆ける。

機械の外装無しに魔力放出を使えば、体がダメージを負うが……。

（構うものか！）

彼女を回収するため、勢いを弱めて体当たりをした。

上空で服をはためかせ、もつれ合いながら、ドレイクと会話をする。

「アーキマン、その足から出てる炎……」

「俺の腰に両手を回せ、掴まれ！ 空を駆けるぞ！」

今度は俺が彼女を運ぶ番だ。はぐれないようにドレイクを胴体へ掴まらせる。

（……なぜ彼女は頬を赤らめているのだろうか）

乙女のような態度が気にかかるが、思考の外へ置いた。

俺は両足から青の炎を噴出し、バイク以上の高速度でかつ飛ぶ。

「う、ぐっ……!!」

少くないダメージが霊基に入り、顔が歪む。足が内側から碎けそうだ。

それでも俺は飛ぶことを止めず、地に落ちた骨の巨人の残骸と謎の英雄を置き去りにして、砂嵐が一時的に収まって広がった、快晴の空を行く――。

第100話 —— あなたは英雄  
終わり

## 第101話 死血湖（しけつこ）から

「起きたか、キャプテンドレイク」

時刻は星の輝く夜。冷たい砂の上に俺達はいた。

「……どうやら、気絶していたのはお互いさまって感じだね。ダユーも寝ちまつてるみたいだ」

あの後、俺はドレイクを抱えしばらく飛んでいたが、無理な魔力放出を行ったことで力尽き、砂へふらふらと突っ込むように落ちてしまった。

高度も低く、地面が柔らかかったおかげもあり、ダメージは受けなかったが、俺もドレイクもその後眠るように気を失ってしまったようだ。

彼女は身を起こすと、毛布がわりとして体にかけていた外套から砂をはらい落とし、俺を見る。

「その焚火は、アンタが起こしてくれたのかい？」

「……そうだ」

砂を少し掘ってくぼみを作り、そこに、俺の体に巻き付いていたロープの残渣を蹴りこんで薪にし、魔力放出で火をつけ、勢いを調整して焚火とした。

俺も彼女も、直ぐにはこの場から動けないだろうと考え、簡素ながら野營の準備をしたのだ。

「あたつてもう？」

「どうぞで」

彼女は一度立つてから火の前に移動し、赤く燃えるそれに手をかざす。

「……」

「……」

お互いの間に沈黙が流れる。

俺は言わねばならないことがあると思ひ、空の星の並びを見ながら、彼女に声をかけることにした。

「……説教を俺にするのだろう」

と言つた瞬間に、ドレイクは顔をしかめる。

「なんだい、忘れようとしていたつてのにさ」

彼女は火にかざしていた両手をこすり合わせた。

様子を伺いながら、俺は言葉を続ける。

「しないのか、説教」

「はあ……自分から進んで説教を受けようとする奴なんて、初めて見た！」

わざとらしい態度で肩をすくめるドレイクの横顔をじつと見つめた。

彼女が、口をしぶしぶといった様子で開く。

「しようと思っていたよ、さつきまでよね。」

『やりたいことがあるって言ったのに、自分の命を捨てようとするなんて、バカのやることだ』ってね。

……でも止めた。アンタの顔みたら、その気が失せちゃった」

「俺の、顔を？」

「うん。」

……鏡も水盆も無いから確認出来やしないだろうけど、ひどい顔してるよ、今のアンタ」

俺は目の前の焚火へ視線を逸らした。

（ひどい顔、か）

と考え込みながら。

「朝に顔合わせた時からひどいとは思っていたけど、まさかあんな真似をするなんてねえ」

「すまなかった」

「謝る相手が違う。ガレスに言いな」

彼女からの言葉で、砂の中で別れた少女騎士の姿が頭の内で蘇った。

ガレスは無事に目的地にたどり着けたのだろうかの、不安もよぎった。

「酒盛りの日の夜、アンタ、ダユーか誰かに何か言われたのかい？」

それとも、お宝にも繋がらないようなヤバい情報でも握ったか」

「……」

問いに答えるつもりにはなれなかった。

あの金色こんじきの王から聞かされた話は、俺でも抱えきれないほどの重さで、その重みを、ドレイクにまで与えたくは無かったから。

「……アーキマンにはなーんか既視感を感じていたんだけど、分かった、アイツに似てるんだ、アイツに」

顔を前に向けていたドレイクが、俺の横顔へ視線を移してくる。

「良い意味ではなさそうだ」

「アタシの頭ん中をよく分かっているじゃないか！ アーキマン！」

……そうだよ、アタシを裏切って、それでアタシが殺しちまった親友に似てるのさ」

冷たい風が、彼女の髪を揺らした。

「トマスって名前の奴で、心の底から一緒に泣き笑いが出来る親友だった。コイツとだったら、なんだって出来るって気持ちになれた。だから、どんな航海にだって連れて

行つたもんさ。

……けど、世界一周の夢を演説で持つてぶち上げたある夜に、トマスはアタシの船を盗んで逃げだした」

つまり彼女は、親友に裏切られた、ということなのだろう。

「捕まえた後、反逆の罪と船員への落とし前として、アタシが処刑した」

焚火の中で、薪としたロープが完全な灰となつていくのを見つめながら、ドレイクの言葉を聞く。

「船を盗んだ理由を、トマスは最後まで話してはくれなかつたよ。

理由は……なんとなく検討がついてた。

『世界一周なんて無理だ』、『無謀なことに挑んで死んで欲しくない』……そんな辺りかな。

でも、それはあくまで検討で、本当のところは分からないまま」

その後数分、ドレイクは黙り込んでいたが、意を決したかのように続きの言葉を口にする。

「今のアーキマンは、その時のトマスと同じ顔をしてる。

重たいこと、全部一人で抱えてぐるぐる考え込んで、悩んで苦しんで……そんな顔さ」  
俺は座つたままの姿勢で、膝に顔を寄せる。

「……心配、してくれているのか」

彼女にそう言うのと、鼻で笑う音が聞こえてきた。

「ガレスが懐いているからねえ、あの騎士が泣くところは見たくないもんさ。

それに、アンタはアタシにとつての幸運を運んできてくれた、恩も感じているしね」  
自らにとつて弱みとなり得る過去を話してくれたドレイクのその姿に、俺は感じるものがあつた。

自分がこれから先、どうするべきなのか相談してみたいと思つたのだ。

「……全てを話す気にはなれないが、少し話す」

「聞こうじゃないか」

俺は首を彼女の方に向け、顔を見る。

ドレイクは焚火を穏やかな表情で眺めながら、俺の声へ耳を傾けてくれた。

口を開くには、大きな勇気が必要だつた。

「自分の行動で、何もかも台無しになるかもしれない。現状が更に悪くなるかもしれない」  
「い」

「うん」

「そう思うと、気持ち折れてしまいそうになるんだ」

「うん」



「……俺は、どうすればいいんだろう」

彼女は口角をわずかに上げると、息を吐きだしながら小さく笑った。

「アタシが助言できるような悩みで良かった」

俺は、彼女が答えを口に出すまでの間に、姿勢を正した。

「アタシからも、少し話す」

どんな言葉が返って来るか分からないので、覚悟をもって待っていた。

「——あれこれ考える前に、足を動かせ」

だが、想像以上の答えがやってきたのだ。

「そして！ 後のことは考えず、自分の気持ちに従って全力を出しな。以上！」

彼女が言ったことをうまく飲み込めず、瞬きを繰り返してしまう。

「そんなところでトマスと似てるね……」

あれだ、アーキマンは考えすぎるきらいがある。

そういう性分の奴が前に進むには、ちよつと頭を空にする必要があるのさ」

ドレイクは自らの頭の上で、手の平を広げるジェスチャーをした。頭を空にするということを指しているのだろうか。

「でも……」

「まずは手始めに、体を休めるため、何も考えずに眠ること！

やってみな！」

と言われても困ってしまう。だって、考えるべきことは沢山ある筈だ。

「ドレイク、明日はガレスやアン、メアリーとの合流をするべきだと……」  
はぐれた仲間達のことを話題に出す。

「船長命令だよ、もう寝な！」

そんな俺に対して、彼女は有無を言わさぬ口ぶりで命じてきた。

「……はい」

言葉に従い、砂の上に身を横たえてみる。直ぐ側から彼女の声が聞こえてきた。  
「何か考えちまいそうになるんだったら、星でも眺めているといい。」

そのうち心が落ち着いて、眠くなってくる……」

見上げた夜空の星は、どこまでも澄んだ光を湛え、俺を見守っているようにも、見下ろしているかのようにも見えた。

（考えないといけないこと、たくさんあるのに……）

それをせずに、ただ足を動かせだなんて、自分の心に従えなんて……）

つらつらと考えそうになってしまう思考を、意思の力でもって止めて、彼女の言う通り、目を閉じ、ただ無心となって、痛む体を休ませることに努めた。

夜明け頃。

昇る朝日が白の砂漠を隅々まで赤く染め上げる。どこか恐ろしいものを感じる色彩だった。

眠り、気力と体力を回復した俺達は、不安定な地面に足を取られながらも高い砂丘へ登り、辺りの地形を確認する。

「ドレイク、あれはひよつとして……」

「どうやら、アタシ達が進んできた方向は間違いじゃなかったみたいだね」

数十m下、数km先に、砂の盆地に囲まれた大きな湖が見えた。

浜に打ち寄せながら満ちる水の色は、日に照らされずとも分かってしまうほどに赤い。

俺は、彼女らから聞いていた単語を呟く。

「死血湖……」

文字通り、死血を湛えているかのような異様の湖が、眼下に広がっていた。

砂丘を滑り降りつつ湖へ向かえば、時間があつという間に過ぎていく。

その湖畔を目指す最中にも、太陽は天高く昇つて、刺すような日差しを絶え間なく地上へ注いでいた。生身の人間では耐えられないような過酷な環境だが、サーヴァントである俺達の足が止まることはない。

「この辺りには砂嵐は吹いていないんだな」

数時間歩き続け、ようやく近づいてきた目的地を前にして俺はつぶやく。

「そのことも、リリースのなんたらキヤスターから聞いていた情報と合致してる。

はっ！ 『伝説の船』の存在にも期待がもてるじゃないか！」

一晩寝たおかげか、ドレイクは調子を取り戻していた。今も、俺を導くように肩で風を切りながら、足取り確かに砂漠を進んでいる。

その後ろを、俺は足を動かしてただついて行くだけだった。

「さて、ここがアタシと船員達が目指していた……」

「……死血湖か」

たどり着いた目的の場所は、恐ろしくも美しい。

異様の景色を前にして、俺の足は自然と止まった。

——雲一つ無い深い青の空と、その色を映しながらも波打つ、黒にも近く見えるほどの濃い赤の水。

大きな湖の周りを取り囲むように、焼けた骨を思わせる真っ白な色の浜が広がって、

俺達が立つ場所の向こう側には、詳細不明の無数の巨大残骸が突き刺さっていた。

「何をしているんだ？」

風景に思わず心奪われてしまっていたが我に返ると、彼女が湖の側に寄って、しゃがみ込んでいるのが見えた。

声をかけても返事は返って来ず。ドレイクは無言で湖面に手を伸ばし、少量の水を掬う。

そして鼻を近づけ、臭いをかぎ始めた

「よく分からないものを、よく分からないまま顔へ近づけるな！」

不用心な態度に思わず声を荒げてしまったが、言われている彼女はどこ吹く風といった表情。だが直後に、眉間へシワをよせ唇を歪めると、手に乗っていた水をそそくさと湖面へ戻した。

「潮の香りを何倍にも強くしたようなひどい臭いだ！　ここは塩湖か！

『死血湖』なんていうから血でも満ちているのかと思ったら、違ったね……」

手に付いた水を振って払っている彼女の側に駆け寄り、俺は湖を見る。

湖底が伺えぬほど濁りが強い。光をわずかに通している湖面の浅瀬へ目を凝らしてみると、小さな粒のようなものが浮いて、左右へ動いているのが分かった。風もない今の状態から考えるに、粒たちは自発的に動いているようだ。

「この赤い色に粒……ひよつとして、好塩性のプランクトンが生息しているのか？」  
導き出した答えを口にする。昔アスカと見たある映像資料を思い出したからだ。

確か、フラミンゴの生態に関するドキュメンタリーだった。その中で、餌としているプランクトンについても触れられていたのだ。

プランクトンは塩に強く、塩湖に住み、体色の赤い色をもつて、湖とフラミンゴを赤く染め上げるのだそうだ。この死血湖の色も似たような理由だろう。

この湖が出来たのはどのくらい昔のことなのかは分からないが、塩水がたまり、プランクトンがやってきて繁殖、湖が濃い赤色へ染まるほどに増え続けたのだ。

「プランクトン……ああ、水の中に住むって言う生き物のことか！ それくらいは聖杯からの知識で知ってる。

へえ……海よりもしよっぱい水の中で、こんなちっこいなりのヤツが生きてきたんだねえ……」

ドレイクはしみじみといった様子でつぶやいた。

「アタシたち以外にもがんばっている奴らがいた。なんとまあ、ガッツを感じる話さ」

上機嫌で水を眺め、水面をかき混ぜる彼女の背中を見ながら、ひとり思う。

（戦争によって荒廃し、『ヴリトラ』で焼かれたこの地上にも、まだ生きている命があるだなんて。

……生存を諦めていない命が、あるだなんて)

この湖には『死』という名前が付けられていながらも、中では小さなプランクトンたちが息づいていた。人間やサーヴアント、AIや機械が争っている間にも、彼らは命の循環を行い、懸命に生き続けていたのだ。

敵しい環境な運命に悲観する事も、絶望する事も無く——ただ、生き続けていた。

(だとしたら……アスカやモモだつてもしかしたら……)

あり得るはずもない可能性と、『希望』という言葉が俺の胸に浮かび、消えてはくれぬい。

「さて！ 死血湖の謎もすつきり解けた所で……」

俺の後ろで砂を踏む音がした。振り返れば、ドレイクが腰を伸ばしながら立ち上がっている所だった。

「行こうか。『砂塵の迷宮』の最奥、赤い湖の向こう側にあるっていう『伝説の船』の元へ！」

指さす先に見えるのは、半月型や円柱の形をとっている様々な残骸が広がる、砂の谷間。

はぐれた仲間達の事を、俺達は積極的に探しはしなかった。

ドレイク曰く、『伝説の船って言う目指す場所があるならば、向かえば自然と落ち合える』とのこと。

納得できるような出来ないような理屈だが、俺は彼女の考えに従うことにした。

……思考しなければならぬ事は山のようにある。だが、今はがむしやりに足を動かして、自分が出来ることをやるしかないのだ。

湖の外周を沿うように歩き続けて2時間弱。たどり着いた時は湖の向こう側に見える残骸が、目の前にまで迫ってきていた。

残骸が所々に突き刺さる大きな砂丘の間には、奥まった広場があった。

砂で出来たその谷のような地形に近づいて分かったことだが、地面に突き刺さっている残骸は木や金属製のものが多かった。俺が見ても分からないような、未知の素材などは無かった。

「……ドレイク卿！」

残骸が散らばる砂の谷の間を歩いていたら、上から声が降ってきた。

「キャプテンドレイク！ 〴〵無事で何よりです！」

アーキマン殿も！ 無事で良かった！」



砂の斜面を滑るように降りてくるのは、知った人物、円卓の騎士の一人であるガレスだった。

重たそうな鎧と盾を身に着けたまま、体のバランスを取りながら降りてくる。

「本当に良かった……。」

ガレスは、ガレスはとても嬉しいです！」

砂埃を上げながら駆け寄ってくる彼女の顔には、満面の笑みと少しの涙が浮かんでいる。

「心配かけたね、ガレス。アタシはこの通り絶好調」

「はぐれた時にはどうなることかと思いましたが……」

ガレスは、背を伸ばしたり屈めたりしながら俺とドレイクの体を見て、様子を観察しているかのようだった。

「無理に探そうとせず、ここに来てくれていて良かったよ」

「私はドレイク卿とアーキマン殿を探したかったのですが、お二人に反対されてしまっ  
て」

「アンとメアリーも居るんだね。いま何してる？」

少女とドレイクはお互いの現状を確認し合っていた。

「アン殿とメアリー殿は残骸の調査をしています。ガレスは見張りです！」

「奥の方にいるかい？」

「ええ」

会話が終わり、ガレスはその場に残った。砂の谷の奥へと向かうドレイクを見送った後、俺の方にやって来る。

「アーキマン殿、お怪我はありませんでしたか？」

バイクの座席から凄い勢いで落ちていくのは見えていたので、あれからずっと心配していたのです」

彼女の顔は、怒っているような困っているような下がりに眉。

「キャプテンに助けてもらえたおかげで、怪我はないよ」

「それは何より、何よりです！」

……これ以上怪我が増えたら、全身傷だらけになってしまいますものね」

ふつと気を抜いた表情を見せる彼女に対し、俺は罪悪感がつついていた。

ガレスは柔らかい笑顔のまま、言葉を続ける。

「背中を預けられる友を得られることは、人生において至上の喜び。」

そして、それを失うことほど辛いことはありませんから」

俺は彼女に対し、申し訳なさから返す言葉も無かった。

肩を落とすしかない俺の背を、誰かが叩く。首だけを後ろに向けてみれば、ドレイク

に呼ばれてきたのか、アンとメアリーが立っていた。俺の背を叩いていたのは小柄な方のメアリーだった。

彼女は、銀の髪に付いた砂を手で払い落しながら言う。

「はい、アーキマンは反省すること」

「彼女ったら、とつても落ち込んでいたのですのよ」

アンが『とつても』の部分に力を込めて言った。

メアリーは、こちらに歩いてきているドレイクへ声をかける。

「キャプテン！ アーキマンにちゃんと説教した？」

声をかけられた彼女は、言葉を返しながら羽根つき帽子を被りなおす。

「しました。耳にタコが出来るほど言っちゃったから、もうこの件はおしまい」

そして手を数回叩いた。歌舞伎において、場面転換を観客へ教える拍子木のような、

乾いた音が砂の谷間たにあいに響く。

「3人とも、アタシ達より先に到着して、ここを調査してくれていたんだろう？」

その結果を教えとくれ」

ドレイクの言葉を聞き、主立おもだつて調査を行っていたらしいアンとメアリーが、互いに

目配せしあつてから報告を始めた。

終わり 第101話 死し血けつ湖こから

## 第102話 残骸は煌々たる

「残骸の材質は木や金属だね。地下都市で使われていたような合成樹脂製のものは無かったよ」

「わたし達に時折襲い掛かってくる、あの変な徘徊ロボットの残骸でもなさそうです」  
調査の結果を、アンとメアリーは交互に話して教えてくれた。

「で、なんの残骸かっていうと……キャプテンは薄々気づいているんじゃない？ 海賊も船乗りも一番見たくないものだしね」

メアリーからの問いかけに、ドレイクは腰に手を当て考え込む素振りを見せてから。

「……船の残骸」

と、短く暗い声で答えた。

「さすがキャプテン、察しが良いね」

メアリーは言い終えると、カトラスの切っ先で残骸を指し始める。

「あれがマスト、あつちが竜骨かな。」

どの時代のどんな船かまでは分からないけど、可哀想なまでにばらばらってことは確かだ」

「砂の上に座礁してから壊れたような状態、と言えますわね」

説明に対し、アンが横から補足をする。

「でもちよつと調べてみたけど、壊れ方が変なんだ」

「変？」

ドレイクがメアリーに聞き返す。

「なんて言ったらいいのかな……この場所で少しずつ朽ちたんじゃなくて、何十年も放置されてから突然壊れた、みたいな。」

残骸も辺りに飛び散っている感じじゃない、この谷間に集中してる。

自然に壊れたにしては不自然というか、年月は感じるのに風化してないというか……とにかく変な感じで……」

うまく説明できないのか、歯切れ悪く話すメアリー。

俺とガレスは一様に首を捻った。

「何も無い砂漠に置かれたんだ、壊れちまって当然に思えるけど……」  
近くにそそり立っていた残骸に、ドレイクが歩み寄って手を添える。

「妙なものはアタシも感じてる。ここはメアリーを信じてみようか」

彼女の意見に、俺もガレスもうなづきを返した。

「調べてもらったことと、状況証拠から考えるに」

ドレイクは砂の谷を見上げ、ぐるりと首を回しながら辺りの景色を目に映す。

「この残骸が、アタシ達の目指していた『伝説の船』なんだろう」

一連の話を聞いた末に彼女の出した結論は、シヨツキングなものだった。

「伝説の船は、とうの昔に壊れてしまっていた……ということですか？」

ガレスが、おずおずといった様子でドレイクに声をかける。

「だと考えられるけど……だったらなぜ、リリスのキャスターは『これを探せ』とアタシ達に言ってきた？」

壊れた船を見つけてなんになる？

移動手段まで寄こしてまで、なぜアタシを焚きつけた？」

ガレスに答えるというよりも、自らの発言をきっかけに推論を深め、ひとりごとのような調子で話し出すドレイク。

そんな彼女に対し、俺は感じたことを口に出した。

「見つけないといけないものが、きつと、まだなにかあるんじゃないのか？」

俺の言葉を聞いた彼女は、にんまりと笑う。

「アーキマンの言う通りかもしれないね、ここに探すべきなにかがあるのさ。」

だとしたら……ふむ、もうひと踏ん張りするかね。全員で大調査さー！」

ドレイクの楽し気な声を合図に、俺達は砂の谷間に散って、怪しいものが無いかを探

り始めた。

1時間後。

「あつた！ あつたよキャプテン！ 怪しいもの！」

「こつちに来てくださーい！」

二組で行動していた彼女達から声が上がった。全員で駆けつける。

そこにあつたのは、残骸の影と砂に埋もれ、隠れていた箱のような何か。

「大きな黒い箱ですね……」

見つけた物の周りを歩きながら、ガレスがつぶさに観察する。

「船や飛行機に備えられているブラックボックスと、見た目はちよいと似てるね」

ドレイクの声を目に挟みながら、俺も他の皆と同じように箱を眺めた。1mほどの大きさの正方形で、表面こそ砂で擦れてはいるが、目立った破損はない。

(頑丈そうな物体だ)

ブラックボックスとドレイクは表現したが、AI……都市運営システムたちの中枢に埋め込まれているあの『ブラックボックス』とは明らかに見た目が違っていたので、俺は内心ほっとしていた。



彼らの多くはリリースに味方している、つまりこちらの敵だ。腕も無いこんな不完全な状態で相対したくはなかったからだ。

「でもこれ、開かない……………」

アンが金の長髪と赤の外套を振り乱しながら、箱に指をかけ、開封を試みているが、箱はがたごと音を鳴らして揺れるばかりだ。

「そもそもこれは開ける物なのでしょうか、ドレイク卿」

「船長、マスケット銃で撃つてみても？」

「爆発でもしたらどうするんだい。」

しかしまあ、このままじゃ罅が明かないのも確かだ。

よし！ アタシ達の中で一番器用で、力加減が上手いのはだれだっけ？」

キャプテンの一言で、人物ごちゃ混ぜな会話は中断され、俺以外の全員の指がこちらに向いた。

「…………俺にどうしろと」

「踵落とし！」

「踵落とし！」

アンとメアリーが冗談めかしてはやし立ててくる中、俺は箱をじつと見つめる。

(いけるか…………?)

片足を箱の上に乗せ、体のバランスを確認。

(うん、いけるな)

両手が無い状態にも慣れたおかげか、足を使って攻撃をするくらいは難なく出来そう  
だ。

「待ちなアーキマン。『考えすぎるな』とは説教したけど、お宝の前ではちよつとは考え  
るもんだよ」

そのまま踵を落とそうとしていた俺を、ドレイクが止めた。

「キャプテン、ではどうしようか」

「ちよつと叩いてみておくれ」

言われた通り、踵で軽く表面を叩く。聞こえてきた音に全員が耳を傾けた。

「見た目以上に音が軽い、空洞もやや感じます。爆弾……などではなさそうです。」

ドレイク卿、ガレスは思うのですが、これは宝箱などではなく、箱のまま機能する  
ものなのでは？

スイッチを押すとか、燃料を入れるなどで稼働するのかもしれませんが」

「ふむ。とすれば」

ドレイクが、俺に、下がるよう手でジェスチャーをする。

俺は箱にかけていた片足を地面へ戻し、そつと後ろに下がった。彼女以外の皆もそれ

に続く。

「——この手に限る！」

そしてドレイクがやったのは、箱の天面を拳で叩くことだった。

箱が揺れ、若干砂に沈み込む。

「……考えた末の結論か、それが」

「いや、ガレスの意見と、自分の直観を信じたまで。アンタは知らないだろうけど、アタシの勘は良く当たるのさ」

彼女がそう言った瞬間、箱の表面に緑の光の線が走り、振動を始める。

「当たり前！」

無邪気な笑顔で喜ぶ彼女と、抱き合つて嬉しそうに跳んだアンとメアリーの姿を横目に映しながら、俺は箱の動静を伺う。

『……あー、テストス。マイクテスト、マイクテスト』

稼働を始めた箱の内側から男の声が聞こえてきた。

「言葉といい、音の粗さといい……録音されたものでしょうか」

「かもね」

メアリーとドレイクは神妙な顔で、音声の分析をしていた。

（俺の知らない者の声……そのはずだが、やけに耳になじむのはなぜだろう）

所々でぶつ切りとなつてゐる音声、それに覚える既視感は何か。

(そうだ！ この声、砂塵の中の敵に触れられたとき聞こえた、あの……！)

人間もサーヴァントの姿も見せられた、あの悪夢のような記憶の残渣の中で、確かにこの声を聞いた。

男の名前は……。

『これは、録音されたものである。録音者はこの私……偉大なるイアソン様だ』

そう、イアソン。垣間見た記憶の中で、男はそう言つていた。

『こんな昼間っから呼びつけてすまないな！』

耳がオルトロスになるほど諸君達は聞いたかもしれないが、後に続く者達のため、明日より始まる最終決戦、その作戦内容を確認するとともに、こうして音声として記録に残しておく。

良いよなー?!』

何人か録音している場に居るのだろうか、がやがやとした周囲の声も聞こえる。

『……ちゃんと録音できてるよな？ 機材点検はアルジュナに任せておいたから、大丈夫、だと思いたい……』

男は、なぜかアルジュナの名を口にした。

(なぜアルジュナの名前が出る？ この男は、アルジュナとどんな関わりが……)

疑問の答えがあるかもしれないと思い、俺は静かに次の音を待つ。

『では、作戦説明を始めるとするか。明日はなんと云ったって、リリスの空中庭園を落とす大戦<sup>おおいくさ</sup>。どの作戦も絶対に失敗できない。一つでも失敗したら、きつとこの世界は滅びてしまう。

おっほん……』

イアソンなる男はわざとらしい咳ばらいを挟むと、文章を読み上げるような口調で話し出す。

『まず、第一部隊である私達2000人が囷となつて、リリスのサーヴァント……バーサーカーを空中庭園より遠くへ誘導する』

思うところでもあるのか、『バーサーカー』という単語の辺りでイアソンの声は暗く沈んだ。

『んで次に、第二部隊が、リリスのセイバー……えーつと、ひるがえ 翻る魔剣の……うん、そうだな！ シングルだ！ 翻る魔剣の使徒とかじゃないな！

よく分かったから、ブリュンヒルデは槍を仕舞おう！ な！』

男が何者かに襲い掛かれそうにでもなったのか、大きな物が床にこすれるような音と、人々の動揺した声や笑い声などが聞こえてきた。

しばらく騒乱は続いていたが、やがて収まる。

『ブ、ブリュンヒルデも落ち着いたことだし、本題に戻るぞ。

第一部隊の動きを見届けた後、第二部隊、ワルキューレとブリュンヒルデが空中庭園へ接近。

ブリュンヒルデは敵方のセイバーと戦闘を行い、その隙に、ワルキューレ達が地上と空中庭園を繋ぐアンカーを射出。

続いて第三部隊……その他サーヴァントとレジスタンス隊、およそ5000人が、アンカーを渡って空中庭園へ突入し、他のリリスのサーヴァントを撃破しつつ、リリスを捜索、そして——殺害する。

人材と兵器の不足を考慮し、部隊と作戦を組み立てなおした。

前回説明したものは大幅に異なっている部分もある、注意してくれ』

イアソン達はリリスを殺すことを目的として動いていたらしい。ギルガメッシュが語っていた、400年前に興った地上のレジスタンスとは、このことだろうか。

推測するに、数千人規模からなるサーヴァントと人間の連合軍……人とサーヴァントのその比率は、この音声だけでは詳しく分からないが。

『この戦いを、後世の者達はどう評するだろう！』

「これこそ英雄の誉れある、世界を救うための戦い。善なるもの」だと！』  
イアソンの言葉に興奮したのか、年齢も性別も様々な歓声が聞こえてきた。

『そして、第四部隊は……たった一人なのに部隊つてのもおかしな表現だが、統一性を出すためだ、勘弁してくれ。』

——アルジュナ、お前が第四部隊だ。見方によつては、一番重要な部隊かもしれない……やはりこの世界にいたのか、アルジュナが。

覚悟はしていたが、少なくとも衝撃が俺の心を揺さぶった。

『無理して起きなくていいぞ、横になったままで聞いてくれ。』

お前の役割は、庭園直下で控えているリリスのランサーと戦闘し、上の部隊がやられないように引き付ける、非常に重要な役割だ。

その後、私の……命令……待ち……直下……落と……』

しかし、録音は突然にそのスピードを落として、ぼんやりと響くものになり、やがて完全なる雑音となってしまった。砂が擦れる様な音ばかりが辺りに響く。

「どうして、一番気になる所で音声が始まりますの!」

「どうして、一番気になる所で音声が始まるんだ!」

思わず口から出てしまった不満が、思わぬところでアンと被ってしまった。

お互いに顔を見合わせる。

「ふふっ……」

彼女は気にする素振りも無く、息を吐いてから軽やかに微笑んだ。

「まつ、美味しい情報が簡単に手に入らないのは世の常さ。

お宝の地図は肝心なところで破れているもんだし、謎めいた遺跡の碑文は削られているもの」

ドレイクは周辺へ鋭い視線を向けながら、握りこぶしを作った手の甲で、ブラックボックスを軽く叩いた。

「……けれど、これはちよいとわざとらしすぎるね」

そして、深々と息を吸ってから、砂の谷全体に響くような大きな声で言う。

「潔く出てきたらどうだい！

後ろからコソコソと着いてくるだなんて、追いはぎ目的のごろつきくらいしかやらないよー！

彼女は外套の内から銃を素早く取り出すと、砂が固まって出来たであろう崖の縁に発砲をした。乾いた大気に、不穏な火薬の臭いが混ざっていく。

「——おや……ばれちゃってましたか」

聞こえてきたのは、違和感を覚えるほどに均一化された男の声。

続いて聞こえてきたのは、砂をざくりと踏む細い音。

ガレスは警戒の色を強め、槍と大盾を手の内に出現させて構える。

「そうです。そのブラックボックスを再起動させ、音声を再生させたのは私。



そして……後をつけていたのも私」

声の主である何者かが姿を現す。それも、意外なほど近くの残骸の陰から。出てきた姿は人型ではなく。

大きさは子犬ほど。角の丸い長方形の胴体側面には、虫を思わせる黒く細い四本足が取り付けられていた。

「まずは……立場の表明と自己の紹介を。

私はあなた方の敵ではありませんし、危害を加えるつもりもありません。

名はアダムと言います。かつて、女神リリスの夫であった者」

メアリーは突如現れた機械を油断なく見つめながら、肩を怒らせる。

「へえ、ロボットの旦那さんか。リリスって女神様は良い趣味してると思うよ、うん」  
並べられた言葉こそ友好的なものだったが、声色からは敵意が感じられた。

現にメアリーの手には既に、彼女の手によくなじんでいるカトラスが握られている。

(リリスの夫……？ ギルガメッシュ王が言っていた存在か！)

当然、相方がそのような態度を取るのなら、アンも同じく。

銀に輝くマスケット銃の銃口を、アダムと名乗った機械に向けた。

「おや……一触即発」

「申し訳ありません、アダムさん。」

わたし達、地下都市から逃げてここへ来るまでの間に、機械には油臭くて苦い思いをさせられましたの。

だからどうしても……信用しきれないと言うか……」

アンは眉をひそめ、いかにも申し訳なさそうな表情を浮かべたが、恐らく、そこには込められていない。

「私は……あなた方を助けに来たのです。どうか、話だけでも聞いてくれませんか」

俺を含め、その場にいる全員が、ドレイクへ指示を仰ぐために目を向けた。

「いいよ、言ってみな」

「ありがとうございます！」

警戒体制のまま、アダムの言葉に耳を傾ける事にする。

「私は、あなた方が『砂塵の迷宮』を抜け出て、当面の安全を得るための方法を知っています」

「続けな」

ドレイクが促す。

「しかしそのためには、ある『敵』を倒さねばなりません。

今、私にマスカット銃を向けているお嬢さんが言っていたような、恐ろしい機械……

『射手座の機械化サーヴァント』を」

その単語を聞いた瞬間、脳裏に、旅の最中で見た数々の敵の姿が蘇ってきた。  
蟹。

水瓶。

雄牛。

獅子。

双子。

天秤。

——異様な形をした、強大な敵の数々を。

『射手座の機械化サーヴァント』が迷宮の周りを徘徊し、動く物体を敵味方区別なく破壊していることにより、サーヴァントも人間も簡単には抜け出すことが出来ないのです。

……一部、例外はあったようですが」

それは、あの突然に現れたギルガメッシュ王の事を言っているのか、それとも、ガスが俺に語ってくれた、アジト内に清水を湧かせてくれた、聖女の如きサーヴァントの事なのか。

「で、その機械化サーヴァントとやらを壊したら、アンタは安全以外に何をアタシ達にくれるんだい？」

「情報です。先ほどの音声データの続きもそうですし——」

「アダムは左前足を上げ、くるくると回して空をかき混ぜる。実に人間臭い動きだった。」

「地下都市より逃れた人間達がどこに集まっているか、知りたくはありませんか？」

「ん？ それってどういう……」

ドレイクが顔をしかめたのは、それが彼女にとつてどんな利益をもたらす情報なのか、分からなかったからだろう。

だが、俺にはアダムの言うことが何を示しているのか分かってしまった。

「……それは」

衝動的に唇が動いてしまった。

「特定の個人のことまで、分かるのか？」

自分がどんな表情をしているのか分からなかった。ただ一つだけ確かなのは、焦りからか瞳の渴きを覚えたということ。

「はい……分かります。といつても、ここでは教えられません。」

意地悪をしているわけではないですよ。迷宮の砂によって、情報が取得できないのです。

外に抜け出て、外部と通信を試みる必要があります」

「そう……なのか」

俺は視線を泳がせる。

——『もしかしたら、アスカは生き延びているのかもかもしれない』と、俺はあの死血湖を見てから思ってしまったているのだ。限りなく低い可能性なのに、強く心を惹かれてい

る。  
「船長、僕もう我慢の限界！」

突然の声にはつとずる。顔を横に向けると、メアリーが首をぶんぶんと横に振って、苛立ちを露わにしているのが見えた。

「対価に比べて、こっちが得るものも少なすぎる！」

このアダムってヤツ、上から目線でこっちをからかって、煙に巻こうとしているんだ！

言ってる内容だつてきつとデタラメさ、交渉の必要なんで無い！」

そう声を荒げる彼女を、ドレイクは青い眼差しで静かに見つめている。

まるで……全員が痺れを切らすのを待っているかのように。

「……」

ガレスは無言だ。槍先こそ地面に向けているが、緊張を解いてはいない。アンも似たようなもので、銃を油断なく構えたまま、この場の空気を伺っていた。

「キャプテンドレイク」

「なんだい、アーキマン」

数秒の沈黙を破って、俺は話し出した。

「俺は、アダムの提案に乗ろうと思う。」

ドレイク達が乗ってこなくても、そうしたいし、そうする」

例えそれが微かな希望だとしても、すが縋る……いや、掴んでみたいというのが、俺の感じたい。

「たった一人であろうとも、『射手座の機械化サーヴァント』に挑んで、倒し、情報を手に入れる」

俺の発言に対し、アンは驚きからか片手で口を抑える。

「アーキマンの腹は決まったようだね。」

それじゃあ……アタシは……」

ドレイク、ガレス、アン、メアリーは互いに顔を見合わせた。

「アーキマンと同じく！ 機械化サーヴァントを壊しに行くとするかねえ！」

「あつ、じゃあわたしもそうしまーす！」

アンはマスケット銃を肩にかけると、わざとらしく数回跳ねた。

「ちよつと、アン！」

「まあまあ、抑えてくださいいな」

足で砂を踏み荒らすメアリーへ、そそくさと駆け寄るアン。

「ここでくすぶるよりも、アダムの案とやらに乗った方が、刺激が多そうですわよ?」

「それにしたつてひどいよ、アン。こんな怪しい機械の提案に乗るだなんて……」

さつきまでと態度が丸つきり逆だし、これじゃあ、僕が憤いきどおつて見せた意味が無いじゃないか」

「あら! メアリーだったら、みんなを怪しいやつから守るために、わざと怒つてくれたのでですね。よし……よし……」

「ううつ。伝説も当てが外れて、次の目的は、弱点も大きさも分からない機械の敵を倒すこと。」

博打だなあ……飽きが来ないよ、全く……」

相方に頭を撫でられながら、メアリーは強張っていた体から、ため息と共に力を抜いた。

「……ガレスは、どうするんだ」

俺は、こんな状況でも沈黙を保ち続けている少女騎士に声をかける。

彼女のくりつとした瞳が俺を見た。

「アーキマン殿のことが心配なので、ガレスもついていきます!」

と、鼻息荒く宣言した。

「……」

彼女は、呆然としている俺に構わず言葉を続ける。

「だってそうではありませんか！

あつちへふらふら、こつちへふらふら。自分の實力以上のことに関わろうとしては、転び、ガレスの前から消えてしまう……」

話をしながら、彼女は槍の石突いしづきで地面を強く1回叩いた。

「——あまりにも危うい！ モードレッドですら、もう少し落ち着いて行動してしましたよ！

……ともかく、アーキマン殿のことが心配なので、今回はついていきますね」

ガレスはそう言うと、俺の隣に立ち並んだ。

(なぜ、俺はこんなにも周りから心配されているんだ……)

やるせない思いが胸に湧いてきたが、一旦無視することにした。

彼女の言っていた……『自分の實力以上のことに手を出そうとしては、転ぶ』との発言が、心に棘として刺さってしまったからだ。あまりにも情けない現状であった。

「仲間割れせず、何よりです」

全員の意見がまとまったのを見て、アダムがその均一な声を出す。



「そして……私を壊さないでくれて、ありがとうございます」

前足を器用に曲げ、胴体の前方を地面に近づける。彼なりの礼なのだろうか。「意見もすつきりまとまり……空気も明るくなりました、なによりです。」

では、射手座の機械化サーヴァントの弱点や攻撃傾向、対策についてお話する前に、声データの後半……一部破損していた所の復元を済ませてしまいまじょうか」

アダムは足で砂を突きさすように歩みながら、ブラックボックスに近づく。

「——そして再生、ぽちつとな」

どこか間抜けな響きを持った言葉の後に、音声の再生が開始された。

第102話 残骸は煌々たる

終わり

## 第103話 赤のほとりに青春は眠りて

『この戦いを、後世の者達はこう評するだろう！』

「これこそ英雄の誉れある、世界を救うための戦い。善なるもの」だと！』

突如現れた謎の機械、アダムの手によって復元された音声が、黒い箱より流れ始める。全員が静かに耳を傾けた。

『そして、第四部隊は……たった一人なのに部隊つてのもおかしな表現だが、他と統ほか一性を出すためだ、勘弁してくれ。

——アルジュナ、お前が第四部隊だ。見方によつては、一番重要な部隊かもしれない。無理して起きなくていいぞ、横になつたままで聞いてくれ』

このようなことをわざわざ言うあたり、イアソンはアルジュナをよほど気にかけていたようだ。

『お前の役割は、庭園直下で控えているリリスのランサーと戦闘し、上の部隊がやられないよう引き付ける、非常に重要な役割だ。

その後、私の命令を待ち……いや、待たなくていいな、自分のタイミングでやつてくれ。敵との勝ち負けには拘らず、庭園を直下より全力で射撃し、墜落させてほしい。

何よりも優先するべきは敵本拠地の破壊だ、あれを落とさない限り私達に未来はない。  
い。

希望、託したぞ、アルジュナ』

リリスのランサーとは、つまりあの男のこと。

イアソンは必ずしもそれを倒す必要はないと、アルジュナに言ったのだ。

——『カルナ』との勝敗よりも、作戦の遂行を、この世界の未来を優先するべきだと。  
『射撃の際、庭園内部に突入している第三部隊の撤退を待つ必要はないぞ。』

……あの部隊の奴らは、全員が死ぬことになったとしても「それでいい」と首を縦に振った馬鹿共だ、死にたがりの事なんざ気にすんな』

何か軽い物を動かす音のあと、話題は次へと移ってしまった。

『第一部隊の作戦についても変更点があるので、補足しておく。』

皆も知っての通り、この部隊の役割は囷、そして敵バーサーカーの撃破だ』

過去と現在を含め、場が、しんと静まり返った。

『サーヴァント50騎をアルゴー号に乗せ、その他レジスタンス達は別の砂上船に。』

走行速度、方角、距離などは、作戦中、私からも指示を飛ばすが、敵の攻撃によつて通信不通になる事も考えられる。

各自、常に相手バーサーカーを輪状に囲うようなイメージで船を走らせてほしい』

肯定を意味する声がばらばらと聞こえてきた。イアソンの説明は続く。

『船同士の距離を保ちながら、船上より、兵器とサーヴァントの宝具による波状攻撃を行い、バーサーカーの宝具……みんな知ってるよな、殺されたとしても1回までは蘇るアイツの宝具だ』

リリースのバーサーカーは蘇生できる宝具を有していたようだ。

けれど、ギルガメッシュの語る言が確かならば、レジスタンスによって討たれている。(――ヘラクレス、あらゆる困難と怪物を打ち倒してきた名高き英雄)

それが幾度も蘇ってはレジスタンスに立ち塞がったということは……思うに、何千という犠牲の上での撃破だったのだろう。

『波状攻撃によって、今のバーサーカーに残されている命のストック4つを、どんな手段を使おうとも後1まで削る。そこまで状況が進んだら、アルゴ号から私以外の全員を降ろす。』

サーヴァントは自分の足で、他の船は全速力でなるべく遠くへ逃げろ。そうできたなら、安全な場所で救難信号を出せ。

運が味方すれば、エジソン率いる第五部隊が救助してくれるはずだ』

この言葉も、ギルガメッシュから聞いた情報と合致する。

やはりエジソンはリリースを裏切り、完全にレジスタンス側へついていたようだ。

『私は単身で船を駆り、敵をここ……砂漠奥の谷に誘い込む。そして』

机を指で叩くような乾いた音が聞こえる。人々が息を飲む音もだ。

『アルゴー号を壊れた幻想させ、バーサーカー諸共自爆する。』

——よつて！ この作戦は！ 私が死ぬことが前提だ！ それでしか成功しない！

……俺も人のこと馬鹿つて言えないな！ 本当に馬鹿みたいな作戦だ！ あははは！！』

自棄になった、いや、なっているであろうイアソンの笑い声が流れ、谷にぶつかって消えていった。

『これが、第一部隊の作戦の全貌。確実に敵バーサーカーを倒すために考えたものだ、皆で協力し、必ず成功させよう。』

私が消滅した後、指揮権はエジソンへ移り、いま第五部隊がつめている所が本部になる。

後は……ああ、先日確認された新型の戦闘機械、アーチャータイプについても話しておかないとな。

あれを倒す方法も、私が生きている内に考えて、追加の作戦会議……の前に、長いこと話して疲れたから、飯だな、飯』

イアソンは声に平静さを取り戻すと、続けようとしていた説明を止めた。

『手隙の者は食事を摂り、今のうちに休憩しておけ。

明日は世界の命運をかけた決戦だ、飯を食つてる暇も寝る時間もないぞ！

では、一時解散！』

集まっていたらしき人々は、がやがやと話をしながら散っていく。

音声の再生はそこで終わった。

「情報が得られそうなデータは……これで全てです。

他の音声データは、どうやら別ブラックボックスへ保管したようですね。

録音を試みては止めた数秒の音声は、2、3個が確認できたことから、それが推測できます」

アダムは早々と述べると、口（というよりスピーカーか？）を閉ざした。

砂の谷間たにあいに、吹き抜ける乾いた風の音ばかり満ちる。

「……この残骸、もしかして」

皆が沈黙する中、おずおずと喋り出したのはガレス。

「もしかしなくても、ここまで証拠が揃っているなら確実さ。

湖やこの辺りに突き刺さっていたものは、イアソンのアルゴ号、その残骸だったつてワケだ」

彼女が言わんとしたこと続きを、ドレイクが口にした。

「イアソン殿は作戦通り自爆し、『リリスのバーサーカー』なる敵を倒せた、ということなのでしょいか？」

「お嬢さん方、それについては……私が教えてあげましょう」

ガレスの疑問に、アダムが片足を上げてから答えを出す。

「リリスのバーサーカーは……今よりおよそ400年前に、レジスタンスの手によって倒されています。」

霊基は消滅済み。この周辺で遭遇する可能性なんて、万に一つも無いでしょう」

「そのことを心配しているわけではないのですが……」

少女騎士が悲しげに眉間へシワを寄せているのは、自爆特攻を前提として行われた作戦の痛ましさについてだろう。アダムの懸念とガレスの気持ちは、ややすれ違っているようだ。

（リリスのバーサーカーは、この辺りで討たれたのか……）

昨日目にした、黒い砂や骨で出来た無数の亡霊達は、かつての戦いで散っていった者達なのだろうか。

そして、それらを打ち砕いたあの威風堂々たる巨人は、もしや。

「——船長が自分の船を自らの手で壊して、捨てざるを得ない、か。

それに対する無念さは、痛いほど分かっちゃうもんだね、ふう……」

ドレイクの声で、俺の思考は中断させられた。

彼女は海賊帽子のつばを片手で抑え、体を大きく動かしながら、辺りをぐるりと見渡した。

「この残骸を見ていると、なんだかあの昔話を思い出す。

英雄イアソン、最後には仲間も妻も、王位も、全てを無くして放浪者。

懐かしの船を見つけ、そこで首吊りしようとしたら、船は崩れて、哀れ英雄は下敷きに……って」

アルゴー号に乗り、華々しい大冒険を繰り広げた英雄イアソンの終わりは、多くの人が知るように悲劇であった。

……もつとも、妻を捨て子を捨て、外道に堕ちてまで『王』という位くらゐにしがみつこうとした男には、似合いの末路だと言う人もいるかもしれないが。

「イアソンの録音を聞いて、残骸の中から探したい物が出来た。

アンとメアリーの2人は、預けておいた『アレ』を取ってきておくれ」  
「アイアイサー、キャプテン」

「とうとう『アレ』の出番ですね！ 行きましょう、メアリーー！」

命じられた物を取りに行くためか、2人は谷の奥へ歩いていく。

「アーキマン、ガレスはここで待機。そのロボットと留守番！」



そう言い残して、残骸を注意深く観察しながら立ち去っていくドレイク。

俺とガレス、アダムが場に残された。

「……壊れた幻想」  
ブローケン・ファンタズム

音声データの中で聞いた単語を口に出してみる。

当然、聖杯から与えられた知識で、それがどのようなものかは知っているし、随分と前、キルケーという魔女を相手にした時、はつたりの意味を込めて行おうとしたこともあった。

「単純に言ってしまうえば、宝具を爆発させ、破壊をもたらす行為ですが……イアソンが、それを用いてリリスのバーサーカーを倒したかについては、疑問が残りますね」

俺の足元にひよこひよここと移動してきたアダムは、黒く細い前足を上げつつそんなことを言った。

「そうなのか、アダム」

「ええ」

ロボットが、ついさつきドレイクがやっていたように、体を動かしながら辺りを見る。「残骸からも推測できる通り……アルゴ号は中々の大きさの物体だったのでしょう。」

それが爆発したにしては、周辺やこの谷にクレーターなどが確認できませんし、残骸も綺麗に残りすぎています」

言われてみればそうかもしれない。船が丸ごと破裂したのであれば、目で見てすぐに分かるような破壊の跡が残らなければおかしい。残骸だってもっと小さな物となるか、跡形もなく消滅してしまうかのどちらかだろう。

「別の方法で、イアソンは敵バーサーカーを倒した可能性もある、ということでしょうか」

ガレスも、アダムと同じく周辺をきよろきよろと目に映しながら言った。

「しかし、えつと……お嬢さん？」

「ガレスです。お好きなように呼びください」

「では……ガレス嬢と。」

私のことも好きなように呼んでくださいね」

「はい。アダムさん」

簡単な自己紹介を終えた後、両者は会話を続きから再開させる。

「ガレス嬢は知らないでしょうが……リリスのバーサーカーは、女神リリスが有するサーヴァントの中では最強に近い存在だったのです。」

そんな相手に、倒し方を選べるような状況ではなかったと推測できますが、ううむ」

「真名こそ知りませんが、かなりの強者、だったのでしようね」

リリスのバーサーカーの真名が『ヘラクレス』であるということ、ガレスは知らな

い。ドレイク達も同じくそうだろう。

(もつともそれを伝えたところで、何が変わるという訳でもないが……)

アダムは『リリスの夫』を自称するだけはあるか、リリス方のサーヴァントの能力を知ってはいるようだが、真名まで知っているかどうかは、現段階では分からない。

「イアソン殿の音声を聞く限りでも、蘇りを可能とした宝具を持つていたことが分かります。

回数制限はあれど不死な敵に対し、自爆や囮といった、痛ましい方法を使わずのよ  
うに打ち勝ったのか……ガレスでは想像もできません」

1騎と1体はうんうんと唸っている。

俺も考えてはみたが、11回も殺しきる手段は、なかなか思い浮かばなかった。

「ガレス嬢、この問題については……私達が話し合っても真実は分からないかもしれないかもしれ  
せんね。

今確かなことは、バーサーカーが倒されているということと、船が木端微塵となつて  
いること、その2つです」

「そうだ船！ 船のことを忘れかけていました！

あれがガレス達の目的だった……のですけど、壊れてしまっています。これから先の  
移動手段、どうしましょう」

「『射手座の機械化サーヴァント』の討伐については……考えてはくださらないので？」

「アダムさん、その点に関してはご心配なく！ 全員で協力すればきつと倒せます！」

「私、まだ敵について……何も言っていないのにな。」

その自信、どこから来るのでしょうか、サーヴァントつて不思議です……」

多分に食い違っている会話を聞いていたら、谷の奥からドレイクが帰ってきた。

「ただいま！ 目的の物、見つけたよ！」

彼女は満面の笑みを顔に浮かべていた。腕には、木で出来た輪が抱えられていて、それはところどころ欠けていた。

「これ、なんですか？」

「船の舵輪さ。ガレスには見慣れないものかね」

ドレイクが腕に持っている物を、彼女は背を伸ばしたり縮めたりしながら、興味深そうに観察している。

「キャプテン、言われた通り持ってきたよー」

メアリーが、カトラスをくるくると弄もてあそびながら歩いてきた。彼女のすぐ後ろには、小箱を持ったアンの姿がある。

「そしてこちらが例の『アレ』……船長のお宝ですわ！」

妙に上機嫌な声と態度を見せながら、アンは手に持っていた小箱を地面の上に置い

た。砂へ沈み込まないということは、それほど重い物ではなさそうだ。

白い指先を伸ばして、アンが上蓋をそつと開ける。俺は近づき、覗き込んで中身を確認した。

「これは……木片、か？」

辺りに見える残骸と似たような雰囲気を持った欠片が、スチロール製の緩衝材を敷いた小箱の中央に安置されていた。

「高名な香木か？ 例えば白檀びやくたんとか……」

白檀はかつてインドに自生していた香木のことだ。

木片はよほど貴重な物なのか、飾り気の無い箱の内側には緩衝材以外にも、外側からの衝撃を吸収する機構が仕込まれていた。

「違うよ、アーキマン。」

ボクが教えてあげるから背を屈めて」

「あ、ああ……」

「待ちなメアリー、せっかくだからアタシに言わせとくれよ」

俺に近づいて耳打ちしようとしていた小柄な少女を止め、ドレイクが割って入ってきた。

「これは、生前アタシが乗ってた船、ゴールデンハイト黄金の鹿号の舵輪の欠片。」

魔術師風に言えば『触媒』ってヤツかね」

「触媒……」

サーヴァントを召喚する際、望みの英雄を招き寄せるために用意される、英雄と故のある品のこと。

「アタシが住んでた地下都市の倉庫にしまい込まれてたもんだから、逃げる時に持ってきた」

「キャプテン、これを持ち出してきて、いったい何を……」

質問した俺に対し、彼女は自信に満ちた声で話し始める。

「あてにしていた『伝説の船』は壊れちゃった。

この砂漠を歩いて踏破するのは現実的じゃない、かといってホバーバイクに乗りたくてもその数が足りない。

アタシの船を出して、北極まで移動し続けるのも、魔力の問題で難しい。

なら——とれる手は一つ」

ドレイクが口にした解決策は、現実離れた響きを持っていて。

驚き、目を丸くする俺達へ、彼女は己の策の成功を確信しているような、勇ましく、海賊らしい、にかりと歯を見せる笑みを作った。

一方その頃。『砂塵の迷宮』外周部。

『……神性、探知』

——敵が、目覚めた。

『詳細確認のため、地形スキャンを開始。』

……失敗。

対象を優先殲滅対象と仮定。

地形スキャンではなく、霊基スキャン開始。

……神性サーヴァント、総数1騎を確認。

霊基パターン、優先殲滅対象「A」と87%一致。

門下生増殖形態から、戦闘形態にモード移行開始。

完了。戦闘準備、スタンバイ。

背部ユニットより、量産型門下生、排出』

敵は淡々と、殺戮に向けて行動を開始する。

第103話 赤のほとりに青春は眠りて

終わり

## 第104話 会敵、射手座の機械化サーヴァント

「全員集合！ アダムもだよ、こっち来な！」

迷宮を抜けるため、そして北極へと向かうため、次なる移動手段を必要としている俺とドレイク達。

『伝説の船が壊れていた』という大きな問題も解決するため、準備を整えていた。

谷間の砂地に突き刺さっていた残骸を調べ、状態が良い物をまとめ、大きな破片の元へ集めていく。俺は腕がないので、ロープに物を結びつけて引きずっては運んだ。

その作業を終える頃には、太陽は天高く昇り、時刻は真昼ごろとなっていた。

「準備も整ったし、さてと……それぞれ組を作って、何が起きても離れ離れにならないよう、体をくつつつけておきな」

俺達を呼び集めたドレイクは、手に、地下都市で保管されていたという『ゴールデンハインド黄金の鹿号』の舵輪、その欠片を持っている。

「メアリー、わたしにぎゅっと掴まっていてくださいいね」

「こんな感じで良い？」

「そうそう」



キャプテンの指示に従い、アンとメアリーは互いを抱きしめあう。

と言っても、背丈に違いがあるので、白髪のメアリーがアンに腰に頭を寄せ、腕を伸ばして絡みついているような格好だが。

「私とアーキマン殿の体は、ロープで結びますね」

紐を手にもって、ガレスが俺に近づいてくる。

「頼む」

「……」

「なんだ、ガレス」

いかにも何か言いたげに、俺をじとりとした目で見てきた彼女へ問いかける。

「もうロープの予備もありませんから、ちぎったりするような行動はしないように」

念を押すような口ぶりだ。彼女は、俺が困となるために飛び出したあの時の事を言っているのだろう。

「……しない」

ガレスと目をきちんと合わせてから、答えを返した。

「信じます、アーキマン殿」

少女は穏やかな眼差しをこちらに向けてから、慣れた手つきでロープをくくつていく。

「結んで、確認して……これでばっちりです！」

何があつても離れないよう、体にくくわれた紐は、長く垂らされ、ガレスの腰の辺りと繋がっている。俺と彼女の間には空間があり、アンやメアリーほど密着はしていない。

少しゆとりあつた方が動きやすいし、問題が起きた時も迅速に対応できて良いだろう。

「あの……」

おずおずと、控えめな態度で手を上げてたのは。

「なんだい？ えーっと、ロボット旦那くん」

「アダム！ アダム……です！ 覚えてください！ アン嬢、メアリー嬢！」

「はいはい。なんですよ、アダム」

『リリースの夫』を自称するあの四足歩行型機械だった。

「私は……誰に掴まれば？」

アダムを除いた全員が目を見合わせる。

「アーキマン殿の足に掴まれば、何が起こったとしても大丈夫だと思います」

答えに悩んでいた俺達の中から、提案を出したのはガレスだった。

彼女の指示に従ったアダムは、細く黒い足4本全てを俺の足へびたりと密着させる。

「アーキマン、私を離さないでくださいね」

こちらを見上げ、俺の顔を、オレンジ色の胴体に埋め込まれた大きなレンズに映しながら、哀れっぽい声で懇願してくるアダム。

本気が冗談か、分かりかねる態度だ。

「かなり揺れるとキャプテンは言っていた。

……なるべく努力する」

「そんなー」

ひどく棒読みな声が、膝より下から聞こえてきたが、俺は無言を貫いた。

アンとメアリーは、先じて伝えられていた揺れに備えるためか、抱き合う力を強める。

身の安全の確保を済ませた俺達を見て、ドレイクは声を上げ、これより始めることの説明をする。

「みんなにも言ったとおり、アタシが取る方法つてのは、この船と我が黄金の鹿号ゴールデンハインドを合体させるつてこと。

けど、アタシの力だけでは無理だし、船同士の相性も良いつて訳じゃない」

俺は辺りに集めた残骸を目に映す。

風化しつつも形をしっかりと残している、かつてはマストや甲板であった物。ドレイ

クの目線の先もそれであった。

「アルゴー号とアタシの船には縁ってヤツがないからね。」

船という乗り物同士ではあるけれど、作られた時代も背負つてる伝説も違う。アタシの舵輪を核に、残骸を材料としたって、バラバラと崩れちまうだけ。

——だから、こうする」

彼女が右手をかざすと、淡い光をまといながら、ドレイクの船の舵輪、そのひとかけらが浮かび上がった。

「英雄イアソン、アンタから奪わせてもらう。」

船も、嘆きも、悔しさも、やり残したであろうことも、全て、全て……」

詠唱のような言葉を口にしながら、ドレイクは瞳を一度閉じ、再び開く。

双眸を染める色は……琥珀を想わせる輝く金。

「海賊らしく、いいえわたしらしく、全てを奪ってあげる……！」

放たれたその声はダユーのものだった。

キャプテンドレイクの体の内より意識を表面化させた彼女は、左手を持ち上げた。

すると、舵輪にまとりついていた光は糸状となって周辺に広がり、集められた残骸へ次々と宿っていく。

「煌々たる伝説を持つ船、その竜骨の一片まで舌を這わせて、噛み砕いて……！」

湧き出す光は空間を染め、奔流となつて、ドレイクとダユーの濃いマゼンタ色の髪を激しく乱した。

欠片はゆつくりと宙を舞い、糸で縫い合わされる布地のように、立体的に繋がっている。動きに迷いはない、どのような姿となるべきか、欠片自身が分かっているかのようだった。

「アン、転ばないように！」

「海賊ですもの、このくらいつ……なんてことないですわ！」

サーヴァントでも耐え難いほどの振動が始まる。

砂の下に隠されていた残骸がその原因だ。呼ばれてきたかのように光の糸で吊られ、ぞくぞくと浮上してくる。

谷の間から、明るい空を見上げてみれば、死血湖しけつこの方にまで散らばっていた残骸までもが集まってきていた。

「——けれど……ああ、聞いて、英雄イアソン」

神秘的な光の糸をまとい、船の修復を司っているダユーの声が、揺れに翻弄されている俺達の間を静かに流れていく。

「わたしはグラドラン王の娘、ダユー。どこまでも餓えた女。

だから欲しいの。貴方の船が、流れた涙が、自棄が。

心も思い出も、全て雄鶏のように飲み込んで、わたしの元へ……ふふっ」  
神託を乞う巫女のような声で、ダユーは自らの欲望を語る。

揺れは激しさを増して、地面が一段と大きく上下したかと思つたら、そのまませりあがつてくる。

足元に広がるのはもはや砂ではなく、地中より浮かんできた、磨かれた木の敷かれる床だった。

「……少しだけ惜しいわ。こんなに素敵な船なのに、奪わないといけないだなんて」

ダユーは振動などまるで無いかのように屈むと、滑らかな床の表面を指でそつと撫でる。

「触れるだけでも分かつてしまう。多くの英雄が踏み荒らし、甲板には嘆きが染み込んで。側面には、王女の弟の血が、錆除けの染料のようにべったりと……」

惜しくとも、次なる篡奪のため、涙を飲んで手放しましょう」

狭い谷の間に、木材と金属が舞い踊る。俺達は出来上がりつつある甲板に、なんとか体を乗せている状態だ。

円柱が、流線形が、大砲が、次々と生み出され、光の糸により導かれては結合していく。

「さよなら、アルゴ号」

彼女の声と共に、木材の側面が地形を削り、自らが置かれる場所を力づくで確保していく、そのごりごりとした激しい音も聞こえた。

英雄イアソンの忘れ形見であった残骸は、ダユーの力をきっかけとして、新しい船へと形を変えた。彼女は赤い唇を動かし、儀式めいた修理の終わりの言葉を紡ぐ。

「――伝説の船の胎より、黄金の鹿が今生まれ落ちる」

ひび割れたアルゴー号の舵輪に、黄金ゴールデンハインドの鹿号の舵輪の小さな欠片が、親の胸へ飛び込む子どものような軽やかさでくつついた。

砂で摩擦した姿から、傷一つない、純金製かと思紛う程の輝ける舵に変わる。

……そして、船を覆っていた光の糸と流れは消え去り、全ては完了した。

「わ、わわわ……！」

感動と驚きが混ざった声をあげているのは、アダムだろう。

ロープばかり垂れ下がっていたマストに、白の帆が一斉に貼られた。布は風をはらんで大きく膨らみ、前に進む力を出来上がったばかりの船へ与える。

船首は斜めに上がって天を突き刺し、全体は大きく左右に振れた。むずがる子どものような動きだ。

船は狭い体を谷からずりずりと引き抜いて、果てなく広がる砂漠に身を泳がせようとしている。遠くからこの光景を眺める者がいたのなら、まるで、谷から船が生まれ出よ

うとしている様に見えたことだろう。

取り付けられている攻撃用の衝角<sup>ラム</sup>が、岩壁や岩盤を削りとり砕いていく轟音が響く。

「アーキマン」

破砕音や、揺れに翻弄される皆の悲鳴といった音の洪水の中で、彼女の落ち着き払った声が耳に届いた。甲板から投げ出されぬよう、両足に力を込めながら振り返る。

ダユーが、依然として揺れなど存在していないかのような美しい立ち姿で側にいた。

「アーキマン」

肩に、ダユーの白い指が触れた。煌めく琥珀色の瞳と目が合う。

瞳へ浮かんだ光と雫を見てしまった瞬間、揺れも皆の叫びも、何も感じなくなってしまうった。

彼女の何か言いたげな態度を見て、俺は、時が止まったときえ錯覚した。

「不思議……この残骸はまるで、未来のわたし達に向けられた贈り物のようだった……」

俺の足にしがみついているアダムにも、ロープで繋がっているガレスにも聞こえないだ声量で、彼女は俺へささやく。

「やっぱり、愛されているのね、あなた。

本当に羨ましい……女神に呪われるのも仕方がない話」

「それは」



「——欲しくないものばかり託されてきた、素敵な英雄。あなた

いつか、本当に欲しいものが分かって、それへ手を伸ばし……手放せると良いわね」  
彼女は最後に、口から漏れ出る息だけで俺の借り名を呟くと、金色の瞳を閉じた。

「そろそろ着水……じゃなくて、着砂する！」

全員、衝撃に備えよ！ 最後まで気を緩めるな！」

緊張感に満ちた言葉を声高に叫んだのはメアリーだ。俺は心配になり、ダユーの顔を見たが、すでに彼女は変わっていた。

「……ありがとね、ダユー。」

さあ、新生黄金ゴールドデンハインドの鹿号の、ど派手な進水式を始めよう！」

瞳を開け、青い輝きを灯したドレイクは、船尾がまだ谷底に触れているせいで斜めとなっている甲板を、肩で風を切りながら揺れをもつともせず歩いていく。

目指しているのは、2つの船が合わさって出来た舵輪だ。

「英雄イアソン！ アンタの大切な船は、このフランシス・ドレイクがいただいた！」

掴んだ瞬間、船をふわりと光の膜が覆った。その光はキャプテンの体に戻っていき、明るさを弱めた。

「文句があるってんなら、ここまで来て、アタシに言いな！」

彼女は右、左と舵輪を小さく動かし調子を確かめてから、空を仰ぎ見、宣言する。

「——さあ！ 船出の時だ！」

ドレイクの言葉を合図として、船は軋みながらも谷を抜け出て、上へ、更に上へと、体を起こしていく。

限界まで持ち上がった船首がゆつくりと前に傾き、続いて辺りに衝撃波を発生させながら、着水ならぬ着砂をした。

「ははっ!! 日差しが気持ちいいねえ！」

砂の上なもんだから、潮風を感じられないのは残念だけど、この爽快感で良しとしようか！」

ご機嫌な声で話しながら、キャプテン・ドレイクは舵をとる。

水ではなく砂の中を泳いでいるというのに、船は帆に受ける風と見えざる力で進む勢いを増していた。

わずかばかりの振動はあるが、ようやく平穩を取り戻した甲板の上で、俺は一度背のびをしてから、「あわあわ……」と連続で言いながら震えているアダムを、足から足を使つて外した。

腰のロープは依然として、ガレスと繋がっている。彼女の方を見たが、目を回しているくらいで怪我は無さそうだ。

「船体に損傷無し！」

「マストに異常、ありません！」

上空から降ってくるのは、メアリーとアンの馴染みある声。

「わあ……いつの間そんな場所へ！」

「すごいです！ アンさん、メアリーさん！」

「ガレスも登ってみる？」

「はい！ 是非に！」

めまいも治り、上にいる2人に誘われた彼女は、俺へ結んでくれたロープと自らにくくりつけたロープを丁寧に解いた。

「それでは、ちよつと行つてきます！ アダムさんと喧嘩などしないように！」

弟へ言い含めるような態度で俺に話しかけながら、鎧姿から軽やかな服に変わったガレス。

布を風ではためかせながら、マストを少しずつ登つていく。

「よいしょ……よいしょ……ふう。」

マストに上がるのつて、こんなにも大変なのですな

「初めてにしては上手だよ、ガレス」

「筋がとつても良いですわ。この船の鐘楼員になります？」

「ご冗談を！ まだ騎士の道だつて極められていない未熟者ですのに……」

上で始まる3人の微笑ましい会話から、あえて目を逸らし、俺の足元でわざとらしくひっくり返っているアダムを見た。

「いつまで慌てふためいているつもりだ」

「でも……驚くべきことがあると、こんな風に長々と慌てるものでは？」

「……そんな感情など持ち合わせているのか」

「人間が言うところの心……らしきものは持つてますよ。えへん。

予想外のことで有ればびっくりしますし、混乱します」

ロボットは四つ足をくるんくるんと回しながら立ち上がり、バイブレーション機能でもあるのか微細に体を振動させて、表面や関節についていた砂を払った。

「さて、無事に……船が手に入りましたね。

であれば、私達の次なる目標は」

俺の足元からアダムは去ると、上機嫌で操舵を行っているドレイクの元へ寄っていった。

「ドレイク嬢……ドレイク嬢」

「なんだい、その気が抜けそうな呼び方は。

むずがゆいねえ、他の奴らと同じように、キャプテンと呼んどくれ」

「ドレイクキャプテン、本題に……入りましょう。

そろそろ見えるところかと」

アダムより物々しい言葉を聞いたドレイクは。

「二人共、敵影は！」

マスト上で周辺を警戒していた、アンとメアリーに報告を求める。

「前方30km先に確認しましたわ！」

「素材は不明、ともかく巨大な人型だ！」

俺は甲板を走り、やや砂で霞んでいる前方を見た。

うつむき、砂に腰より下が埋まっている大きな人型ロボットのようなものが視界に入ったが、シルエツトが分かる程度。

「位置、形……間違いませんね、『射手座の機械化サーヴァント』です」

アダムが得た情報から敵の正体を看破する。

それから、丸みある長方形の体全体を使って、ぐつとドレイクを見上げた。

「敵の情報は……船修復前にお話した通りです。」

ドレイクキャプテン、『太陽を落とした女』という異名に負けぬご活躍、アダムは期待しています」

白々しさすら感じる声色で褒められた彼女は、鼻で笑う。

「アタシ一人でその名を得た訳じゃない。」

戦略、船員、船、風、波に運、敵さんの乱れ……あらゆるものが揃っていたから、あの海戦に勝てたし、アタシは『悪魔』と呼ばれるまでになった」

「では、今回は……どうでしょう？」

『射手座の機械化サーヴァント』相手に、あなた方は勝てますかね？」

挑発とも取れることが出来る発言。それに対し彼女が見せたのは、自信ありげな深い笑みだった。

「こんなに良い乗組員が揃ってるんだ。必ず勝てる、勝つことしか考えてないね」  
船は敵へ徐々に近づいてきている。

砂ぼかりの荒野には、身を守り、攻撃をかわすことが出来そうな物など何も無い。  
「どつちにしろ、勝てなきや浪漫も追えないんだ。」

アタシの旅を気持ちよく始めるためにも、件の敵をぶつ飛ばしてやる」

「敵は……長距離からの攻撃を得意とするタイプ、というかそれしかできません。  
この船の速度で懐へ入り込んでしまえば、勝つのは容易いでしょう」

——敵の攻撃を見極め、操舵の技術のみで避けながらの、正面からの削り合い。

それが、相談の末、俺達の選んだ戦い方だった。

「アダムは……ただの愛らしいペットロボではないので、戦闘を少しばかりサポートさせて頂きます。」

念のため、周辺に地雷やその他の兵器が無いか、確認をば……」

ロボットの胴体上部が左右にばかりと開き、その蓋が畳まれてから、内側より小さなパラボラアンテナが展開した。

時計回りで回転している……が、本当にこれで探知しているか怪しいものだ。

(人に対する分かりやすさを重視した、飾りかもしれない)

そのような事を考えていたら、アダムがかたかたと震え出した。

「これ……は、なんと」

「どうしました、アダムさん」

戦闘に備えるため、アンやメアリーと共にマストから降りてきたガレスが、声をかける。

「状況は、私が想定していたよりも……悪いかもしれません」

とアダムが言った瞬間、けたたましい音が辺りに響き始めた。

甲高いアラーム、耳を刺すような警告音、連続する電子音。

統一性は無い、けれど確かに『危機感』を人へ与える音律が、顔を歪ませたくなるような出来ない輪唱となつて、船体へぶつかつてきた。

船の縁から周りを見れば、赤や黄色といった色の光が砂の上にて、ぼつぼつと点滅を始めている。

「な、なんですよ、この音！」

「地面もまばらに光ってるし……ロボット野郎！ 何をした！」

アン、メアリーが耳を手で覆いながら、アダムに詰め寄る。

「周囲の光、音は、救難信号……の一種です。」

旧世界風に言えば、防犯ブザー？ 発煙筒？ いや、鳴子？」

「分かるように言ってくださいーい！」

「ガレス嬢、私の探知が気取られた……という訳ではないです。」

……そして、ごめんなさいとも」

不快な音、詳細不明の光。混乱の中、事態は進んでいく。

「敵、来ました！」

真つ先に反応したのはアンだった。

甲板の縁から何かが登ってきて、状況を飲み込めていないこちらに向かい、躍りかかってくる。

乾いた銃声が響き、攻撃を受けた『何か』は落ちた。ガレスが槍を持って素早く駆け寄り、突き立て、とどめを刺す。

「これは……人型ロボットでしょうか？」

皮膚などは被せられていない、外骨格と人工筋肉が剥き出しの姿。銃弾と創傷を受け



た個所は焼け焦げている。昔アスカと共に見た、古いSF映画に出てくるようなロボットだ。

「アン！ 敵は1体だけじゃないぞ！」

みんな、あつちを見て！」

メアリーが指さした方へ目を向ける。

そこに、あつたのは。

』

』

警告音に揺れる砂の上を、剣や槍などの武器を持つて、隊列を組みながら無言で行進するロボット。

総数は、ざっと見ただけでも3000以上はいる。

『射手座の機械化サーヴァント』め……！！

ただ殺すだけに飽き足らず、その骸むくろを用いて自己改造していたのか！」

アダムの声に剣？さが宿る。彼は矢継ぎ早に言葉を続けた。

「レジスタンス、資源回収用のワーム、地上を逃げていた人々……手当たり次第に襲い、資源を強奪して、自らの機能を拡張したのでしよう！」

辺りに散らばっている発信機は、救難信号を受け取った者たちを狩るための罠であ

り、侵入者の位置を暴くソナーです！」

「あのロボット軍団は？」

俺はアダムへ問う。

「子機製造機能でも付け足したのか、厄介な……」

鬼気迫る状況の中、アダムは俺達に伝えるべき情報を改めて口にした。

『射手座の機械化サーヴァント』、その核となっているのは、400年前、リリースに捉えられたレジスタンス側のサーヴァント。

真名は……お話しした通りです！」

会話をしている余裕など無くなってきた。

敵ロボットは船の下部に続々と取り付き、引きずられたり振り落とされたりしながらも、その体自体を梯子として、10、20程が甲板上に登ってくる。

「核となっているのは——賢者ケイローン!!」

俺は相手の真名を叫びながら、粗雑な作りの剣を振りかぶってきた敵を、ひと蹴りで碎いた。

第104話 会敵、射手座の機械化サーヴァント

終わり

## 第105話 戦闘、射手座の機械化サーヴァント

「ただの人型ロボット……と、油断しないでください！」

ケイローンが彼らに『学習』を施している可能性がある！」

船の上はあつという間に、秩序の無い乱戦となった。アダムは攻撃を受けないよう逃げながら、話を続けている。

「学習？ それって……」

「戦闘が長引くほどに、わたし達の弱点を学んでいくとか言いませんよね？」

アン、メアリーは完璧なコンビネーションで、この混乱の中でも落ち着いて戦っている。既に足元には、数体の残骸が転がっていた。

「先ほどの1体は斥候だったのでしょうか。」

それを踏まえて考えるに……していく、でしょうね」

気まずそうな声で、アダムは呟いた。

「ドレイク卿！ 短期決戦を提案します！」

「ガレスの言う通り！」

相手がどれほど名高いかなんて関係ない、速攻で仕留めに行く！

皆！ 操舵中の援護頼む！」

無数の敵が迫りつつあるが、高速で砂の上を征き、『射手座の機械化サーヴァント』へ近づいていく黄金の鹿ゴールドエンハインド。

（しかし、そう上手く事は運ぶだろうか……）

アダムの情報よりも進化していた敵。まだ見ぬ力があるかもしれないと考えながら、俺は目の前の人型ロボットを蹴って倒そうとした——が、突如船が上下に揺れ、お互いに攻撃が空ぶった。

『!!』

狙いが逸れ、獲物を深々と床に突き刺してしまった敵。

隙を見逃さず打ち倒し、その勢いを利用し、揺れで姿勢を崩していた周りの数十体も、魔力放出を使った青い蹴り足で一辺に吹き飛ばした。

敵は青く燃え灰となりながら、船外へ落ちていく。

「今の揺れの原因は、いったい……」

砂の中から響く何千もの多種多様なブザー音、アンが放った銃声、攻撃の際の掛け声、敵が甲板を駆け回る足音、機械の関節がきしむ張り詰めた音。

「アーキマン、船長を！」

敵へ発砲しつつ叫んだアンの声に従い、あらゆるものが混ぜこぜとなった戦場から一

度離れ、俺は、2本のマストの間に設置された黄金の舵輪の元……すなわちドレイクの側へ駆け寄った。

「アーキマン！ 船側面の様子は分かるか！」

ドレイクより問われ、直ぐに答える。

「先ほど見たばかりだ！」

敵が大量に取り付いて、体自身を梯子として登ってきている！」

「まったく！ ずいぶんと乱暴な方法を使ってきたね、敵さんは直情的だ。

けど、シンプルだからこそ一番効果的さ！ 船が……重くて、重くて……仕方がない！」

ドレイクは舵を取りながら、足の間についての間にか避難していたアダムを爪先で小突いた。

「やめてください……ドレイクキャプテン！ 私はいちおう取引相手ですよ！」

「アダム、こっちは妨害のせいで望んでる速度の半分も出せてない。

この状況が続くと、向こうはどう打って出てくると思う？」

アダムは数秒考えこんでから答える。

「敵機械化サーヴァントは遠距離狙撃型……いわゆるアーチャークラス。

巨体ゆえ、攻撃に速さと連続性こそありませんが、狙い定まった後に放たれたものの

威力はすさまじい。

まごついていれば……遠くからズドン！　され、船はバラバラ、私たち全員どぎえもんとなるかと。ここ陸ですけど」

「大量の手駒で足止めしてから、よく狙って安全圏から攻撃か。

アーチャークラスの強みってやつを押し付けてきてるね……」

俺は両者の会話を聞き流しながら、周囲に目を配る。

甲板には無数の敵残骸が転がり、船が揺れるたびに偏って、あちこちで小山を作っていた。

それらも速度低下に関係しているのだろう。俺は幾つか蹴って、外へ捨てた。

残骸をざらざらとこぼしながら、船を緩慢に前へ進んでいく。

「あと……アダムからもう一つ言いたいことがあります」

「なんだい」

「敵は……優先的にアーキマンを狙ってきているかと」

後方からの敵の接近に気が付いた俺は、左足を軸に、鋭い回し蹴りを放つ。

半壊し、姿勢を崩した敵の体を、メアリーがカトラスで切つて薙いだのを目の端でとらえる。

更に迫ってきたロボット兵は、ドレイクが発砲し、頭蓋を正確に打ち抜いて倒した。

「あらまホントだ。やけにアーキマンへ群がってきているじゃないか」

「……機械化サーヴァントに狙われやすいサーヴァントの体質つてありますので、ええ。」

「この調子ですと、敵サーヴァントの射撃は真つ先に彼へ向かうのでは？」

「ふーん……体質、ねえ」

『体質』なる単語が気にかかったが、今はそれを聞いている時間はなさそうだ。

1人と1体の会話は終わつたとみて、俺はドレイクへこれからの方針を伺う。

「当初の予定では、高速で敵に接近し、相手の攻撃を許す暇さえ与えず、キャプテンの宝具で撃破するはずだったろう？」

「アーキマンはよく覚えてるね。」

しかしまあ、予定なんて、その通りにはいかないもんさ」

「これからどうするんだ？ アダムの情報が高確かなら、まごついている暇はない」

ドレイクは思考を高速で回転させているのか、やや唇を尖らせ、押し黙つたが。

「……良いこと思いついた。」

——ガレス！ ガレス卿！」

と云い、唐突に彼女を呼んだ。声は、音混ざり合う戦場においても真つすぐ響き、呼ばれた少女が船尾の方向から駆け寄ってくる。

「はい！ ガレスです！ お呼びでしょうか！」

慌ててやってきて急に止まったので、彼女の鎧の部品がぶつかり合つて金属質な音を立てた。

「ホバーバイク、まだ1台使えるやつがあつたらう」

過重という単純すぎる妨害によって、バランスを崩しつつある船を操りながら、ドレイクは聞く。ガレスが答えた。

「バイク同士から部品流用し、アダムさんが修理してくださいましたもの物が、確かに。

今は船倉に仕舞つてあります」

「それならよし！」

ドレイクは空に向かって2度発砲し、船員達の注目を集めてから、大声で指示を出した。

「皆、聞きな！　これから、全員の命をかけた大作戦を始める！」

「いつだつて命がけではなくて？」

「わざわざ言われなくても、とつくに覚悟できてるよー」

その言葉を返した2人は、惚れ惚れするほどのコンビネーションで敵を倒している。

「実に頼もしいこと！」

ドレイク、アン、メアリーの、価値観を共有する者同士の軽口が、戦いながらも飛び交った。



「ガレスとアーキマンは？」

「覚悟はばっちりですとも！ どんな作戦を始めるのです？」

「あまり時間もなさそうだ。直ぐに教えてくれ」

俺も、皆と同じく覚悟をしていた。

それに——この局面を乗り越え、知りたいこと、やりたいことも出来たから。

キャプテンドレイクの言葉を借りるなら、『あれこれ考える前に、足を動か』したい、そんな気持ちだった。

「2人とも、耳貸しな」

初めにガレスがその内容を聞き、次に俺へ指示が告げられる。

「そのことをよくご存じでしたね、ドレイク卿」

彼女は感心したような声をもらしてから。

「……分かりました。ガレスにお任せください」

ものものしい態度でうなづいた。

俺も彼女に続き、意を示す。

「分かった、作戦に従おう。」

前のような……その、へまはしないし」

「そんなこと心配してやいないさ。」

一番の心配事は、誰かが無茶して、突っ込んだりしすぎることに」

俺の言葉から何かを感じ取ったのか、ドレイクは自信ありげに胸を張った。

「アタシも命をかける、アンとメアリーだつてそうさ。」

誰か一人の力で乗り超えるんじゃない。全員の力と運を合わせる必要がある。

もし、ゼーンぶ上手くいかなくて死んじまうとしても、そんな時はそんな時。

笑いながら死んでやろうじゃないか！」

快活に笑ったドレイクの足元で。

「あの……アダム、他の『都市運営システム』と同じく、自己データ複製できないので、ここで死にたくはないんですが……」

と、控えめに後ろ向きな発言がなされていたが、戦場の音にかき消されていった。

「そうだ。アダム、これを預かってくれ」

「ええ？ はい……まあいいですが」

俺は戦いの前に腰を屈め、大切な預かりもの、すなわちずっと首にかけていたカルデア職員証を彼へ預けた。ロボットが前足を使い、器用に首から外してくれる。

「アン、メアリーは引き続き甲板上の敵の掃討！ 残骸はまめに外へ捨てる事！」

「合点ですわ！ キャプテン！」

「アイアイ！ キャプテン！」

「……アダム、ないがしろにされてます？」

「してないしてない。アンタにも任せたい『仕事』があるんだからさ。」

よし、作戦は全員頭に叩き込んだね？

では……作戦開始イ！」

短期決戦が求められている、このひりつくような戦闘の最中でも、笑顔な海賊と騎士の姿を見て。

（戦いに対し、このような感情の向け方もあるのか……）

と、俺もアルジュナも知らなかった価値観に、心がわずかに震えた。

——思う。思う。射手座の機械化サーヴァントは思う。

感知し、探知し、推測し、視認し……そして、『殺さねば』と。

『量産型門下生へ下した命令を再確認。』

……優先殲滅対象「A」と、87%一致している敵サーヴァントを攻撃。

指示に不備なし、間違いはなし』

黒い箱の内側で思考を続ける。

——優先殲滅対象、A。イコール、アルジュナ。

リリスの空中庭園を落とし、楽園と謳われたあの場所を住まう者ごと殺したサーヴァント。

レジスタンスの主力であり、その体は無数の神格によって蝕まれ、崩壊寸前であったが……アルジュナが消滅したかについては誰も知らない、未確認。

よって奴は、西暦2713年の現在においても、女神リリスを殺すためにまだ潜伏を続けている可能性がある。分裂弱体化したレジスタンス組織の内部に隠れ、反逆の時間を伺っているのかもしれない。

孤独な母たる女神リリスは、シグルドの改造体である『心無き竜』、カルナの改造体である『ヴリトラ』以外の機械化サーヴァントに、このような命令を植え付けた。

「アルジュナを探せ。そして殺せ。

神性を有しているサーヴァントも殺せ。だって、アルジュナかもしれないから。そのためになら……なんだってやってもいい」

機械化サーヴァントである以上、この絶対の命には逆らえない、もはや本能の一つに数えてもいいだろう。

この目的を達するためならば、何を行おうと女神リリスは我らを許す。

蟹の鋏をもって、無数のサーヴァントをついばもうとも。

中身尽きること無き水瓶を振るい、いたずらに酒で人を破滅させようとも。

雄牛の巨体ふるい、生きるためだけに資源をむさぼった結果、数多の都市を飢えさせようとも。

逃げる者の背を切り裂いて殺し、獅子の心と爪をちっぽけな自尊心で濡らそうとも。

双生として産まれながらもそれを忘れ、結合の果てに異形となりて狂おうとも。

天秤としての責、公正な裁きをせず、悪を都合よく押し付け、人々を殺そうとも。

蠍の尾より滴る劇毒と、群れなす子らをもって過度に他者を苦しめようとも。

賢者と言われた存在から全てを奪い、自己の拡張がためにあらゆるものを喰らおうとも。

女神リリスはそれらを許す。許してください。

ならば我らは彼女を守ろう。絶対の命令に従おう。

我らは機械化サーヴァント。

『ヴリトラ』によって、人が見上げることもかなわなくなった黄道に、代わりとなって輝かんとする新世界の星座。

女神の慰めとなり、その願望を叶えるもの。

我思う——神は、リリス以外に不要なり。

『詳細確認のため、スキャンを開始。』

……失敗』

依然として広範囲スキャンはうまくいかない。

情報を集めるため、量産型門下生が得た視覚データを、地面に散らばる端末を複数経由させて受け取る。

『?』

複数の角度から敵が乗っていた船を見た。

赤と黒に彩られた帆船、その甲板上に『アルジュナ』がいない。

女サーヴァント3騎ばかりが戦いを続けているだけだ。

『アルジュナ……は……』

探す。そして見つけた。

……ホバーバイクに小さな四足歩行ロボットともに乗って、こちらへ高速で向かって  
いる！

アルジュナは後部座席に腰かけ、運転はロボットが行っているようだ。

更に詳しい情報が欲しかったが――。

『っ！ ジャミング……！』

砂塵の迷宮特有の探知不能現象とは違う、あの明るい朱色のロボットからの攻撃だっ

た。

砂に埋もれながら光を放っていた端末すらも、次第にその色と音を無くし、通信が切られていく。

『霊基スキャン……』

先ほどまで出来ていた『それ』の機能すら十分に動かなくなつた。

機能がこれ以上妨害される前に、量産型門下生を背部ユニットから排出し、敵を追うのではなく、波となつて相手を押しとどめるよう向かわせる。

『敵位置は』

スキャンではなく目視で確認をする。

アルジュナは操縦をロボットに任せているようだ。前面から来る量産型門下生を、ロボは前足でグリップを動かして、見事なまでの蛇行運転を行つてかわし、門下生の隙間を縫い、こちらとの距離をじわじわ詰めてきている。

砂は足踏みからなる振動によって波打ち、かつて世界に存在したという海を思わせた。

『エネルギー充填率、80%』

砂ぼこりがうつすらとかかる両腕を動かしながら、武装と矢へ液体リソースを回していく。

『着弾地点の修正を開始』

思考する。

あの速度であれば、正しく妨害をし、正しく狙えば、攻撃は間に合う。

その結果、我が機体も巻き添えになり、ケイローンが納められている上半身が修復不能にまで破壊されるだろうが……女神リリスの願いを叶えるためだ、仕方のないことだろう。

このために殺して来た、このために奪ってきた。

だから、我が機体はこれ以外には何の意味も持たない。

アルジュナを、殺さねば。

『フエイク・アンタレススナイプ偽・天蠍一射、展開を開始』

レジスタンスより奪いし素材で改修された巨大弓が、砂と瓦礫をまき散らしながら縦に広がっていく。弦はなく、正式には弓とは言えない形をした武装が陽光の下に晒される。

——賢者ケイローンは、死した後星座となった。天に昇った彼は、人々を守るため、星座である天の蠍へ矢先を向けるようになった。

その伝説からか、サーヴァントとなったケイローンは、弓ではなく、夜空から放たれる一夜一射かぎりの強力な攻撃宝具を有していたという。



『標準を、優先殲滅対象にセット』

しかし、我が機体が有するのはどこまでもまが<sup>フエ</sup>い物<sup>イック</sup>。星空よりは地に近い場所より落ちてくる。

だが、威力は真にも迫ろう。放てば敵は蒸発し、余波すら死をまき散らす。

今までは資源回収のため威力を落としていた。全力を放つのはこれが初めてであり、そして最後となるだろう。

『エネルギー充填完了』

腰から武装に伸び、接続している液体リソース流入用のチューブの動きを止めた。

敵を見定める。

遠くにある帆船は、巨大なカルバリン砲数個まで持ち出して応戦を続けていたが、量産型門下生の死骸が甲板や周囲に山と積み重なり、動きはほとんど止まっている。

『目標、射撃可能圏内』

アルジュナはというと、依然としてホバーバイクに座したままだ。その表情すら伺えない。

『射撃、可能圏内』

敵には両腕がなかった。よって、これより放たれる攻撃を防ぐ手立てもないと判断でききる。

あのバイクの速度では逃げきれない。自爆特攻を行おうが我が機体には傷一つ付かない。

『フェイク・アンタレススナイパー  
偽・天蠍一射』

目視でアルジュナを確認し、武装を向け、そして矢を装填する。

矢、その表現はやはり正しくない。

大量の火薬と液体リソースを充填させた、大陸間弾道ミサイル、と言うべきものだ。

大本は、第三次世界大戦の際、極地にあるカルデアを破壊するために設計されたものである。

『発射カウントダウン開始。』

1、2、3、4……』

指より解き放つ動作をする。

軋む関節の音が小さく響いた。

『5』

伝説無き一射は、爆炎をあげながら弓の中央に浮かび上がって。

『発射』

砂霞を吹き飛ばす衝撃を辺りにまき散らしながら、まずは空へ向かって放たれた。

矢は青い空へ向かって昇り、そこから落ちてくる。

英雄の元へ。神の敵たる神の子の頭上に。

着弾すれば、彼はなすすべもなく消える——！

「やはり、こちらを狙って来ましたね。

貴方の妨害のおかげです、感謝します」

アダムさんが小さな前足を使って操縦しているホバーバイク、その後部に座したまま辺りを見る。

迫ってくる機械の敵、そして頭上から噴煙撒きながら落下してくる攻撃。

「うう、感謝の言葉を述べる暇があるのなら……あれ！ 防いでくださいよー!!」  
泣きそうなアダムさんの声を聞きながら、時を待つ。

心に焦りはない。さながら晴れた朝の湖のように穏いでいた。

「あつ、あつ、攻撃が着弾する……!!」

タイミングは全てこちらに委ねられている。

早すぎてもいけない。遅すぎてもいけない。

「着弾まであと200m！ もう、ダメだ……!!」  
今。

「宝具、解除」

姿を変える。

偽装として纏っていた表層は燃えるように剥がれ落ち、腕の無かった彼の姿から。

「続いて別宝具、真名開放！」

鎧と槍をもった、私本来の姿へ！

「アダムさん、叶うならば全力で離脱してください！」

「やあっ！」

ホバーバイクを踏み台にして、私は高くジャンプした。

目前に迫るは矢、いやミサイル。

熱風が私の短い金の髪を揺らす。頬が焙られ、ひりりと痛んだ。

「<sup>イ</sup>猛<sup>ラ</sup>り<sup>ル</sup>狂<sup>ル</sup>う<sup>ブ</sup>乙<sup>ス</sup>女<sup>ス</sup>狼<sup>ス</sup>!!」

臆することなく私は叫び、先端の火薬が入っている弾頭とミサイルの本体を切り離す。

槍で一閃。

続いて、推進剤が詰め込まれた胴体と下部を滅多切り。

宝具による連撃で、敵から発射された兵器は空中で大まかな破片となり、砂漠へ降り

注いでいった。

落ちていくミサイルの欠片に足かけ姿勢を正し、私は地面に向かう。

上空より敵の様子を見る。

似たような姿形のロボット兵は破片と熱によって壊れ、動きは乱れていた。『射手座の機械化サーヴァント』は、まるで呆けた人のように空に居る私を見上げていた。

遠くにある帆船の様子も気にかかったので確認してみたが、衝撃を受け、やや斜めと  
なっているだけで無事のようなのだ。

「後は頼みました！」

機械化サーヴァントの胸の下に目線を送りながら、私は落ちていく。

作戦成功を祈りながら。

アダムが敵にハッキングをしかけ、『目で見る』以外の方法で情報を取得できなくさせる。  
る。

ガレスが道具、『変身の指輪』を用いて俺に化け、敵の必殺の一撃を引き受ける。

ここまでの作戦は上手くいった。ならば、俺が成すべきことは――。

「……」

弓兵は、弓という武装を用いる都合上、距離を離して戦うことを好む。

それはなぜか？ 矢を番えて射る、という手順には、どうしても時間が必要となるからだ。

だから、あまりにも近い距離、例えば懐などに潜り込まれるなどは最も嫌なこと。

「……」

ガレスとアダムに決死の覚悟を必要とさせる囮となつてもらい、その間に、俺はこそこそと敵に近づいたのだ。

(……両足から青い火炎をほとばしらせながら、全速力で砂漠を超低空飛行することが、『こつそり』と言えるかどうか疑問だが)

敵のあまりにも巨大な体を見上げつつ、呼吸を整える。体に流れる力の残量を認識する。

大丈夫。まだ、眼前の敵を殺せるくらい力は残っている。

今の自分には腕が無い。この体で、効率よく破壊を生み出すためにはどうするべきか。

悩む必要はなかった、既に答えは出ていた。

「――清めの力持つ炎神よ<sup>アグニ</sup>」

体が青の炎に包まれていく。

「――アルジュナの父たる雷神よ<sup>インドラ</sup>」

両足に白い稲光が宿る。

「二神の力！ 我に貸し与えたまへ！」

軸足は左。狙うは太い敵の腰、アンバランスな接続部。

「やあああつ!!」

音速を超えた勢いで蹴りは当たり、敵全体を青白い炎と雷が一瞬包んだ。

(うつ、足りないか?!)

予想より硬い。ミシミシと足の甲がめり込んでいく音はするが、敵胴体と、砂に埋まっているであろう下半身を切り離すまでには至っていない。

「アーキマン殿！」

振り向くことは出来ないが、背中にかげられた声だけでガレスだと分かった。

「助太刀します！」

フエイク  
アロンダイト・オーバーロード  
偽、縛鎖全断・過重湖光!!

俺のものとは違う青の輝きが白い砂の地面に広がり、群青の影を落とす。

2種類の青が混ざり合う攻撃によって、敵の背骨のような部品が折れ。

『あ……アアアアア!!!』

絶叫を上げながら、『射手座の機械化サーヴァント』は前のめりに倒れ伏した。

巨大弓が下敷きとなって、砕けていく耳障りな音が続く。

「やったか!」

「やりましたか?!」

思わず似たような言葉を2人して発していた。

そんな俺達の元に、空から壊れかけのホバーバイクがふらふらと飛んできた。

「……てください! お二人とも、逃げて!」

「アダムさん、それはどういう……」

「地下よりエネルギー反応が急接近しています! お二人とも……逃げてください!」

ガレスが返答する時間すら惜しかったのか、ホバーバイクよりアダムを奪い取り、その場から駆け出す。

俺も彼女の背中を追って走り、小高い砂の丘に逃れ——急接近してきたものの正体を知った。

「新手? いや違う! 下半身か!」

巻きあがった砂塵を苦々しく見つめ、思わず唇を噛んでしまう。

(下半身は、矢の反動を殺すためのアンカーのような役割しかないと考えていたが、甘かった……!)

賢者ケイローンは半人半馬の姿だと伝説に謳われている。

『射手座の機械化サーヴァント』が彼を核とし、力や形まで模しているのだとしたら、



この展開は予想できたことだった。

『意味、意味、価値、価値。』

無意味、無価値、無意味、無価値、無意味無価値……!!』

敵が喋り出す。けれど、相手の言いたいことが良く分からない。

『意味意味意味!!』

無価値無意味なる我が生命に、意味を与えたまへ!!』

砂より現れ出たのは巨大な四足歩行のロボット。どこぞで戦った『雄牛の機械化サーヴァント』と大きさは似ている。

しかし、その体に頭は無く、千切れ落ちた上半身との接続部から、断頭された人のように液体リソースを噴出させていた。

『貴様の、死によって!!』

砂漠に響く声が、俺と隣にいるガレスの体を震わせた。

「連戦か」

「……ですね」

ガレスは足元にそっとアダムを下ろしてから、手甲光る腕で頬についた砂を拭った。

第105話 戦闘、射手座の機械化サーヴァント

終  
わ  
り

## 第106話 激闘、射手座の機械化サーヴァント

「ガレス、いけるか？」

「戦闘中なので正直にお伝えします。」

「宝具を連続で使用しすぎました。霊基にダメージがあります、魔力も減っています」

「そう……か」

「俺は目を泳がせながら考える。」

『砂塵の迷宮』にいる間は、存在を維持し続けるだけなら何の問題も起きないと聞いたが、流石に宝具をあかも連続で使えば、霊基に変調をきたすらしい。

『ああ……アアア！ アツマレ!! アツマレエエエ!!』

空気が震えるほどの音量で、『射手座の機械化サーヴァント』が叫ぶ。

声に呼応してか、ガレスの宝具の余波で砂に倒れ埋もれていたロボット兵達が、体を起こし始めた。

「っ！」

俺を狙ってくると思え、隣に立つ息を乱した少女を庇うために前へ躍り出るが。

「？」

兵達はふらふらと揺れながら、何の攻撃をすることもなく横を通り過ぎていく。  
「なんだ……？ 何のために呼び集めている？」

『射手座の機械化サーヴァント』の思惑が分からず、俺は困惑する。

敵の方へ首を向ければ、砂の下より現れた四足歩行の体にロボット兵が群がり、登つていく姿が見えた。

まるで冬の寒さに耐える虫のように身を寄せ合い……。

「そうか、修復しているのか！」

敵が何をやっているのかを理解した。機械化サーヴァントは自ら生み出した兵を回収し、再び自分の体にしようとしているのだ。

（回復する前に仕留めないと！）

ひとり焦る俺の肩に、誰かが寄りかかってきた。

ガレスだ。顔を真っ青にし、呼吸は先ほどより荒くなっている。

敵への対処と、味方の保護。どちらを優先するべきなど、考えるまでもない。

「アダム、ガレスを物陰に運ぶぞ！」

「物陰……って言ったって、ちようどいい場所なんてどこにも」

「『射手座の機械化サーヴァント』の上半身があるだろ！ そこに運ぶ！」

腕があれば彼女を抱えて走るくらい訳ないのだが、俺に腕は無い。

「助けてくれ、アダム」

「あー……はい。大丈夫ですよ、なんとかします」

アダムは黒く細い手足を伸展させると、俺とガレスをまとめて抱えた。抱えきれなかった彼女の盾が、音をがらんと立てて砂漠に転がる。

「かつ飛ばす！」

両足から魔力を放出。足裏が炭化を始めているが気にはいられない。

数十秒真つすぐに飛んで、倒れ伏した敵の体の中に入る。

「ガレスを頼んだ」

「え、ええ……」

戸惑いながらも了承してくれたアダムを置いて、敵の様子を物陰より伺う。

『ドコ……あるジュナ、アルジュナ、アルジュナ。』

ワレ、アレ、コロス、コロサネバ、バ……』

うわごとを大声で言いながら、頭の無い四足の機械は俺を探している。

その体の表面には外装代わりとなっているロボット兵がうぞうぞと蠢き、吐き気を催すような生々しさを機械へ与えていた。

俺は嫌悪感を抑えながら敵を観察する。相手の体のあちこちに、傷ではない穴が開いていた。

まるで、城砦に備え付けられた銃眼のような雰囲気の一。

『ニイ！ アルジュナー!!』

敵は、頭を失った首の断面から明るい液体を拭き散らしながら攻撃を行った。

瞬間、空間に幾本もの光線が走り、青い空と黄色の砂漠を赤く焼き焦がす。

先の射撃ほどの威力は無い。けれど、場の制圧力はこちらの方が上だった。

『ニヤアハハ!!』

数分前までは辛うじて意味が通じる言葉となっていたそれも、ただの鳴き声と化していた。

奴の前身から放たれるレーザーは、敵味方の区別などせず平等に辺りを焼き切つていく。砂の上に残されていたガレスの盾が、焼かれて半分にされたのが見えた。

(ここに隠れて隙を伺うべきか、それとも……)

逡巡する思考を裂いたのは、無数の砲撃音。

「——嵐の王、亡霊の群れ」

あの船長の声が、なぜか直ぐ側で聞こえたような気がした。

「ワイルドハントの始まりだ！」

俺の頭上に影が落ちる。素早く首を動かし見れば、よく知る海賊船が砂丘をジャンプ台として大きく跳躍し、倒れている敵胴体を越えている所だった。

宙に浮いた船へ無数の光線が浴びせられる——が、それらは届くことは無かった。周りを取り囲むように浮かんでいる大量の帆船が、盾となつて受け止めたからだ。

（ドレイク?! ひよつとしてあれは彼女の宝具か？）

……さつきまで遠方で戦つていたというのに、ここまで来てくれたのか！）

彼女達は、敵を油断させるため、あえて遠くで戦つてくれていた筈だ。

だというのに、こんなにも早く、近くに居るといふことは。

（ダユーが何か力を貸したのかもしれないが。

なんにせよ彼女達は……俺達のために）

危険も顧みず助けに来てくれたのだろう。敵を仕留めきれなかつた己の未熟さに歯噛みする。

両者の攻防は続いていた。

砂漠に、敵が放つたレーザー光線と、ドレイクの船より発射される砲撃が真正面から幾度もぶつかる焦げ臭い音が満ちる。

盾となつて碎けた帆船の破片が、電ひょうのように小さな塊となり、俺の体や周辺にばらばらと降り注いだ。

（状況を打破したい。出来ることを、自分に出来ることを考えろ、考え続けろ！）  
まだガレスは回復していない。

ドレイクの砲撃だって、長く続けてはられない、周りの帆船が盾になっていてる間だけだろう。

(もう一度だけ、全力で蹴りを放つ。)

……出来るか?)

己の霊基へ問う。

連続した魔力放出によって、両足は内側から焦げ始めている。骨など半ば炭だろう。痛みすら感じなくなってきた、ただ体が儂くこぼれる感覚だけがあった。

「けど、あと少しなんだ……!」

そのわずかに手が届かない現状。だが、俺は唸りながら己を奮い立たせた。

あと少し、もう少しで、『射手座の機械化サーヴァント』を下すことが出来る!

「おおおおおおお!!!」

砂を蹴り、その後青の迅雷の奇跡を残しながら走った。

制御しきれず、足から全身へと回った青い炎に身を焼かれながら、敵を蹴り倒そうとして。

「!」

失敗した。敵全身から発せられていた光線の何本かが、太ももを打ち抜き、俺の動きを停止させたから。



敵の表層より剥がれ落ちたロボット兵が落ちてきて、後方へ吹き飛ばされる。

(あと少し、あと少しなのに！)

飛ばされながら思う。

足りない。力が足りない、速さが足りない、時間が足りない。

「——誰か！」

次の言葉、「助けて欲しい」は飲み込んだが、声を上げてしまった事実は変わらない。でも、誰がいるというのだろう。ガレスは崩れ落ち、ドレイク、アンとメアリーとて、敵を倒す決定打は持ち合わせていないだろうに。

だから、俺の叫びは消え去るだけの言葉。

「■■■■■■■■■■——！！」

の、はずだった。

覚えのある咆哮を聞き、思考が澄み渡る。

『ミヤギー！！』

敵の体が突然にへしやげた。上に覆いかぶさり相手を押さえつけているのは、いつか見たあの『英雄』。

その瞳の光だけで俺を勇気づけたあの砂造りの『英雄』が、数十mの巨躯をそのままに機械化サーヴァントへ立ち向かっていた。

『ギヤイギ……ジャマ、ジャマア!!』

『■■■■? ■■■■■!!』

雄たけびを上げた『英雄』は、相手から一度離れて体勢を整えると、四肢へ痛烈な一撃を叩き込んでいく。

碎ける敵の体、地面に次から次へと落下していく機械部品。

しかし向こうもやられてばかりではない。全身から迸らせていた光をまとめ、極大のレーザーを形作り、機体のあちこちから何度も照射して『英雄』を焼き切ろうとする。

赤く焦がされていく砂の体、砂漠へと落ち、碎けていく脆い塊。

「どうして貴方が!」

俺は下から『彼』を呼んだ。

赤い瞳と視線が合う。彼も俺を認識したのだ。

(だが、まだ足りない!!)

『英雄』の出現によって攻勢はこちらに傾いたかと思っただが、ドレイクの船の周りから無数の帆船が消えたのを目にして、俺は考えを変えた。

海賊船は砂丘へ突き刺さり、そこからまだ砲撃を続けていたが、数は少なく、勢いも弱かった。弾は直近に落ち、敵には当たらない。

小さな人影が船から2人降りてきて、こちらへ駆けて来るのが目に入ったが、巨人と

化している『英雄』と『射手座の機械化サーヴァント』の取っ組み合いをいかくぐって、俺達の元に来るのは……それなりの時間がかかるだろう。

「あと、少しが……！」

一人で焦っている俺に対し、視線が注がれるのを感じた。

顔を上げればまた合う視線。

『■■■■!!』

咆哮であったが、そこに込められている感情が不思議と分かった。

——『案ずるな』と。

「っ！ 砲撃、ドレイクか……？」

初めはそう思ったが、海賊船が停まっている場所とは全く別角度からの砲撃であることに気づく。

壊れかけの足に鞭うつような気持ちで俺は歩き、砂丘へ登って砲撃の主を探す。

砂に霞んだ遙か後方から、砲撃が飛んできていた。それは決して『英雄』には当たらず、敵機械化サーヴァントのみに着弾している。

俺は疲れで重い瞼を開いて、目を動かす。

距離もあり、砂嵐がひどいせいで、はつきりと見えるはずも無いのに……乗っている者の姿が見えた。

「あれは……?」

操舵しつつ、金の髪を風に揺らしている若い男の姿。

彼は手を上げてから、それを真つすぐに下ろし、唇を動かした。

口元の動きを見ても、何を言っているのかは判断できない。けれど、先の『英雄』の咆哮の意味が不思議と分かったように、俺の脳内にある声が広がった。

『お前は先に行け』

知っている、声だった。

英雄イアソン、あの黒い箱から流れていた声と全く同じものが頭の中に響いた。

「——そうか」

俺は何もかも理解した。

イアソンという過去に、背中を押されている。

「アーキマン！ 助太刀に来ましたわ！」

「ガレスはどこ？ やられた訳じゃないよね!？」

アン、メアリー、ガレス、ドレイクという今に、助けられている。

その意味は。

「……誰かが、未来へと進むため、か」

そして俺が前に進むため。

皆が力を貸してくれているのだ。だったら、その期待を裏切りたくない。

『やらなければ』ではなく。

「ならば！」

『やりたい』。

俺は、みんなの力を借りながら、時に転びながらも戦っていきたい。

アンとメアリーの瞳が俺を見る。

「わたし達の宝具だけでは、あいつを倒せません」

「でも嬉しいことに、誰かが援護してくれているみたい。

おかげで君を助けにこれたよ。

アーキマン、あと少しだけどふんばれそう？」

「ああ」

過去からの援軍によって、時間も力も足りた。

あとは俺がなんとかするだけだ。

「僕達に出来ること、ある？」

「うん、ある。頼みたいことは……」

短い言葉だったが彼女たちには伝わったようで。

「ははあ、分かった」

「宝具にまで昇華されたわたし達のコンビネーション、目に焼き付けてくださいましね！」

2人は武器も持たずに駆けだす。

俺も後を追って走る。崩れかけの足のことなんて構わなかった。

心は、雨上がりの草原に風が吹き抜けた時の如く、軽やかだった。

「せーのっ！」

メアリーが銀の髪を揺らしながら、両腕を真っすぐに伸ばし、前で手を組んだ。バレー選手がやるレシーブのような構え。

だが、彼女が上に送るのはボールではない。

「はっ！」

俺だ。彼女の手を足場として跳躍。

「アーキマン！ とどめ、頼みました！」

空を上がっていく俺に向けて、アンが体を捻りながら、地面より何かを拾い上げ飛ばす。

それは、敵の攻撃によって半分に焼き切られたガレスの盾。

鋭利な面が出来たその大盾を、俺は。

「これで終わりだ！ 『射手座の機械化サーヴァント』！」

何のてらいもなく、横より蹴る。盾に青い雷と炎が宿り、炎弾と化した。それは回転することなくまっすぐ敵に迫る。断面の尖った先が陽光を受けて、ぎらりと一度だけ光った。

『マ、アルマガギジュオ……!』

驚嘆の感情がにじむ声が敵から漏れ出た。

向かってくる盾を迎撃するためか、全身より再びレーザー光線を放とうとしたが——それを許す砂作りの『英雄』ではなかった。覆いかぶさって抑え込み、体の前面を赤く溶かしながらも敵の攻撃を食い止める。

俺が狙ったのは、上半身と下半身の切断面。液体リソースがぼたりぼたりとたれ落ちている、一段と柔らかそうな部分だ。

盾は何の邪魔もされず、機械化サーヴァントを穿つかと思われたが。

『マガ!』

しかし、敵はまだ奥の手を残していた。液体を断面より過剰噴出し、その勢いをもつて盾を押しつけようとしたのだ。

(まだ、足りないのか——!)

空より落ちつつある俺に出来ることは、行く末を見守る事だけ。

『ハヒツ、アルジュナ、コロ……!』

——液体の噴出が唐突に止まった。敵のよくわからぬ言葉も止まった。

俺は顔の横を、一陣の風のようなものが吹き抜けていったのを感じ取った。

視認できたそれは細い矢であった。あふれ出す液体の間を見事にすり抜け、切断面のパイプの一つに詰まる。

噴出量がわずかに減って、敵は盾を押し流すことに失敗した。

青く燃え続けていた盾は、俺の狙い通りに脆い断面へ突き刺さり、なおも勢いは止まらず、砂作りの『英雄』ごと敵を貫く。

盾が崩壊し消え去る瞬間、青い雷で空を埋め尽くした。

『アアツ!! ムイミイ!!』

敵は泣き叫んだ後、外装の内側を盛り上げるほどにエネルギーを収束させ。

『パッ』

死なば諸共と言わんばかりに、全身より光の糸をまき散らした。

特定の誰かを狙ったわけではないレーザーのなりそこない達は、地より様々な残骸を巻き上げ、衝撃波を発生させる。

落ちる途中だった俺は、風を受け、後方へ吹っ飛んで行った。

第106話 決戦、射手座の機械化サーヴァント



終  
わ  
り

## 第107話 決着

「おい、アルジュナ。起きろって」

男の声で呼びかけられ、俺は眼を開ける。

視界は灰色に濁って不明瞭だ。無理な戦い方をしたせいで、まだ体にダメージが残っているのか。

「……よくよく見ればアルジュナじゃないな、お前。

兄弟かなんかか？」

彼に言葉を返そうとしたが、埃っぽい咳を数回吐き出すのが精一杯だった。

「それにしてもよく似てるな……俺も、いや私も遠目に勘違いするわけだ」  
知っている人の声だ。

名は英雄イアソン。アルゴー号に乗り、様々な苦難を乗り越え、妻すら利用し捨てたその果てに、寂しい末路を迎えた男。

「まあ、お前が誰であろうと良いか。私が助けたいから助けただけだし。

私とヘラクレスに大！ 感謝しろよ！」

その言葉の後に続くのは快活な大笑い。

視力が少し回復してきた。目の前に誰かが立っているのが分かる。

背丈180cmほどの男と、3mは超えているであろう大男。

「じゃあ、私達はもう行くからな。」

最後に思いっきり船を動かして気分爽快。未練が晴れるっていうのは、こういう気持ちなのだろう」

瞬きを何度しても、目の前にいる誰かの姿は、はつきりとしてくれない。

「あつそうだ。言伝ことづてを一つだけ頼んでおく」

イアソンが大きく息を吸い込む音が聞こえた。

「……ドレイクっていう女に言っておけ！」

『俺の船を贅沢にも修理材に使ったんだ、中途半端な所で旅を諦めるのは許さんぞ』つてな！」

砂を踏む音。彼らが踵を返し、俺に背を向けたのだろうと推測する。

「俺からお前に言えること、なんかあったかな。」

うーん、頑張りすぎんなよ、手を抜ける時は手を抜いてやれ。

使えそうな人材があるなら使い倒せ、一人じゃ出来ないときはぶん投げろ。

あとはあとは……なんだヘラクレス、もう俺は消えるんだから好きに言わせろ」

足音が止まる。

「そうか、人からの言葉を背負いすぎるタイプか、こいつ。」

「じゃあこの辺りにしておくか」

「彼は言葉を付け足す。」

「お前をアルジュナと勘違いしていた他の奴らも、俺達が連れて行くよ。」

「お前の大活躍を見て、皆、おおよそ満足したみたいだしな」

「いつの間にか足音は増えている、彼の周りに集まっていた。」

「それじゃあ元気でな、アルジュナのそっくりさん」

「遠ざかっていく大勢の人々。」

「……ありがとう、イアソン、そしてヘラクレス。」

「とても偉大な、古い英雄たち……」

「喉奥から絞り出した感謝の言葉は、彼らに聞こえただろうか。」

「心残りがあったが、疲労感に耐え切れず俺は目を閉じた。」

「アーキマーン」

「アーキマーン」

「……死んでます?」

「いい奴だったのに、もったいないね」

砂が耳の横を落ちていく。そのくすぐったさで意識が呼び起こされた。

「生きてるよ……」

咳き込んでから答えた。

「生きていてよかったです」

「ピクリともしていなかったから、死んだかと思った」

「それに、アーキマンったらひどい怪我でしたし」

「もうほとんど治ってるけどね。」

「ここが『砂塵の迷宮』で良かった。そうじゃなければ消えてるところだったよ」

アンとメアリーが俺へ交互に声をかける。

「ありがとう、介抱してくれて」

助けてくれたことに、まずは感謝を。

「僕達はほとんど何もしてないよ。」

埋まってるかなって思ってた心配してけど、砂の上に放り出されてたし。

「運が良いねアーキマン。船乗りになってもなるかい？」

「運、だったのだろうか。意識を失う前に会話をしていたあの英雄2人が、掘り起こして助けてくれたのかもしれない。でも、それは全て確認のないことだ。」

「ガレスは、ドレイク、は」

「ガレスでしたら無事ですわ。怪我人を介抱しているところです。キャプテンについてはまだ何も。敵の攻撃に巻き込まれてないといいいのですけど……」

アンは、砂まみれとなっている自分の金の髪を片手で払った。

「アーキマン、わたし達はキャプテンの様子を見てきます」

「お願いする……」

「ガレスにも貴方の場所は知らせてありますので、もうしばらくしたら来るはず。

無茶したのですから大人しくしていること。分かりましたね？」

「分かった」

俺は彼女達の後ろ姿を見送った後、自分の状態を確認した。

足、痛むけれど内部まで含めて治っている。体も、軽い火傷で肌がひりつく程度だ。

「ガレスは怪我人を介抱していると、アンは言っていたが」

思考を整理するため口に出してみた。

「怪我人……俺や、アン、メアリー以外に誰かいたのだろうか、アダムとか？」

ひとりでぶつぶつ言っていると、肩に手を置かれた。

「アーキマン殿」

「ガレスか、無事、みたいだな。体はもう平気か？」

「怪我一つありません、敵上半身の陰に避難していたおかげです。」

アーキマン殿、傷ついていた私を運んでくださり、本当にありがとうございます。」  
俺は、彼女に謝ることがあったと思ひ出す。

「すまないガレス。貴女の盾、蹴り飛ばして武器にしまつて。」

「ごめん、それしか敵を倒す方法が思いつかなくて……」

「ええ！ 盾を蹴り飛ばして!?!」

申し訳なさから、頭を下に向けてしまう。

俺も戦士のはしくれ。自分の武器や防具に、人がどれほど愛着をもっているかだなんて、痛いほど分かっている。

「……敵の撃破に繋がったのなら、何よりです。気にしないでください」  
「でも」

「持ち主本人が許すと言っているのです！ 飲み込んで！」

「あつ、はい……」

彼女の勢いに圧され、思わずうなずいてしまった。

「盾を投擲武器とする……私では思いつかない発想です。」

ああでも、ガウエイン兄様に知られたらとつても叱られそうですし、没にしましょう。

……それに、盾使いはケイ卿とギヤラハッド卿のお二人がいますし」

顔を逸らし、頬を赤らめながら呟いていたガレスであったが、俺に向き直る。

「そうだ、こんな世間話をしている場合ではないのです。」

アーキマン殿、貴方に合わせたい人が」

「メアリーが言っていた怪我人……のことなのか？」

「ご察しの通りです。」

「こちらへ。歩けますか？」

「手を貸してくれば何とか。頼んでもいいだろうか、ガレス」

「喜んで」

ガレスは俺の腰に手を添えて（俺の腕が無いので、肩では上手く支えられないのだ）、立ち上がらせてくれた。

彼女に案内されながら俺はゆっくりと歩みを進め、彼に出会う。

「よかつ……た。」

私は貴方を、ちゃんと助けられたようだ」

砂漠に伏せながら言葉を発した彼の正体に、俺は心当たりがあった。

ガレスが俺の側から離れ、駆け寄って彼を助け起こし、その胴体を支えた。

「初めまして、賢者ケイローン」

敬意、驚愕、戸惑い、感傷。様々な感情を胸の内に秘めたまま、努めて冷静に彼の名



を口にする。

乾いた風が、俺の髪の一房を揺らした。

「ええ初めまして。私が知らぬ貴方。

……このような姿でごめんなさい」

彼が言う『このような姿』とは、下半身が切り取られ、聡明さを映していたであろう両の眼球すら奪い取られた姿の事だった。

「目が見えない状態で放った一矢でしたが、貴方の助けになれたようだ」

それでもなお、ケイローンは口元に穏やかな笑みを浮かべる。唇から水色の液体が血のように流れ、砂漠にぽつりと落ちた。

「あの矢は、貴方が」

止めを刺す際、遠方から飛んできて、敵の抵抗を弱めてくれたあの一矢を思い出す。

「そうです、私が放ちました。

機械化サーヴァントとの繋がりが物理的に途絶えたことよって、400年ぶりに体を自由に動かせるようになりましたからね。だから、戦う貴方達の助けになればと……」

喋った後、彼は激しく咳き込む。先ほど垂れ落ちた液体と彼本来の血が混ざったものが、抱えているガレスの腕を濡らした。

「アダム、彼はなぜあののような姿に……改造、されているんだ」  
側で、猫のように四つ足を畳んで座っていたロボットに訪ねた。

こいつならば何かを知っていると思つたから。

「改造という表現は……正確です。」

機械化サーヴァントの『核』とするため、余分な部分を切り落としたその結果でしよう。

しかし驚きです。あれから400年、ここまで自我を保つていたなんて」  
彼を改造した者は、下半身と瞳が余分だと判断したのか。

……弓兵の目が、余分だと。

「はい。自我を、保っていました。」

だから私は、自分がどれほど恐ろしい行いをしてきたのかも、きちんと覚えています」  
よ

ケイローンは弱々しい笑みを浮かべたまま、アダムの言葉に反応する。  
「沢山の仲間を、罪もない人々を殺しました。」

あまつさえそれを喰らい、私は……」

「でも、貴方自身の意思で行つた訳ではないのでしょうか？」

そこまで自分を責める必要は、無いと……」

腕に彼の小さな体を抱えているガレスが、泣きそうな声で言った。

「確かに、貴女の言葉には一理ある」

ケイローンは淡々と言葉を紡いでいく。

「ですが、機械の侵食に抗い続けていれば、そも私が捕まらなければ、このような悲劇は起こらなかったのです。」

……貴女がどれほど庇ってくれようとも、私はもはやただの怪物」

それから顔を上げ、俺達の方へと向けた。

「このまま罪科を積み上げていくばかりかと思っていました……貴方達が終わらせてくれた。」

ありがとう、とても感謝しています」

賢者は、自らに死を与えた者達へ礼を述べる。

恨みすら感じられない、どこまでも清廉な態度だった。

「最後に、私の命の、いえ、尊厳と心の恩人に触れさせてくれませんか。」

目がこのように盲めくらいてしまったので、触れる事でしか分からないのです。

どうか、お願いします」

彼の意を汲み、俺とアダムは彼の前に跪いた。

それが、これから死に逝く者に出る最大限の礼だと思ったからだ。

「ありがとう」

ケイローンは酷く荒れた手指を伸ばし、己を抱きかかえているガレスの、その頬、頭に触れた。

「貴女は戦士。それも、槍と大盾を振るって皆を守る、誇り高き騎士ですね」

次に手を伸ばし触れたのは、角が丸くなっているアダムの体。

「貴方はロボットですか。小型で、きつと親しみやすい造形をしているのでしょう」

そして最後に俺へ。

「そして貴方。貴方は弓兵の体で……なんと痛ましい、腕が無い」

肩口に触れた瞬間、ケイローンは唇を悲し気にゆがめた。

「……おや？」

「賢者ケイローン、どうした」

明らかな疑念の声に、俺は頭を上げる。

「ふむ、サーヴァントでありながら霊基が完成しきっていない。

そればかりか、内側も……」

彼は急に生氣を取り戻したかのように、俺の体のあちこち、頭、肩、胴などに触れた。

「俺は、特殊なサーヴァントなんだ。

だから少し、その、変なんだと思う」

ここにはガレスもアダムもいる。彼女らに事情を知られたくなくて、齒切れの悪い言い方になってしまった。

「変？ ふふつ、違いますよ、貴方のそれは未成熟というのです。

どのように色づくか分からぬ果実、未知なる可能性を感じます」

手を離しながら、軽やかな声でそういった彼の言葉に、俺はある女からの言葉を思出す。

『春に種が芽吹くように、永久凍土の下から太古の獣が目覚めるように。』

その内側より何かが育つ……そんなものを感じてしまうの。

ああ！ やっぱり素敵！ 育つって未知よ、何も分からないの！』

ギルガメッシュ王と出会ってしまったあの夜、俺にこんなことを言ってきたのはダユーだった。

その後続けて、こうも。

『変な人。あなた、まだ自分がサーヴァントだと思っているのね』

これを聞いた時、殴られたような衝撃を感じたことを覚えている。

(賢者ケイローンとダユーの発言に、奇妙な相似がある。

ダユーのみであれば、ただの言葉遊びと断ずることが出来るかもしれないが……賢者、英雄の師として知られるケイローンまでもが、俺をこう言った。

何かがおかしい……俺は、何者なんだ？

どろりとした黒い疑念が胸を満たす。

(俺はアーチャーとして召喚され、そして……)

今までの記憶を遡り、意識を取り戻したあの瞬間にまで立ち戻る。

一番古い記憶。それは、流線形の棺より抜け出し、山となつて積み重なつたアルジュナの死体を目にした時の——。

『アーチャー殿、いつかここに戻ってきてくださいね。』

そうでないと貴方、世界を救う方法を知ることが出来ないのですから』

記憶に無いはずの声と情景が、ぬるりと挟まってきた。

『安心してください。貴方は誰にだつて愛されますし、どの私とも上手くやっていけますよ。』

だつて、全ての私は——』

それは、男の声と姿をしていた。

身には、戦国の世を戦い抜いた漆塗りの鎧を付けている。

黒い髪、ぎらぎらと輝く双眸、整つた容姿の男は、人が愛玩動物へ向けるような笑みに冷徹さを混じらせつつ、俺に告げる。

『頑張る貴方の、ファンボーイなんですから』

いや、違った。犬歯を見せる、人を食ったような笑みだった。

男は、目の色と作る表情以外の全てが……バーサーカー04と酷似していた。

「——っ！」

怖気が走る不可解な記憶に、俺は思わず息を乱す。

「アーキマン殿？」

ガレスが俺を呼ぶ。彼女のためにも、俺はなんとか平静を取り繕った。

頭を上げて前を見る。

機械化サーヴァントの核に改造されていたケイローンが、その長い戒めから解かれようとしている所だった。

「惜しいですね。私が死にゆく怪物でなければ、貴方を教え導くことも出来たでしょうに。」

でも……もう……時間が……ない」

彼の体は端から金の粒子となって解けていき、徐々に脱力をしていく。

「つい先程より懐かしい気配を感じていましたが、『彼ら』でしたか。

師の不肖を、弟子が正してくれたの……ですね……」

何かを納得したかのような声音で呟き、彼は腕から力を抜いて、砂地に手の甲を付けた。

「ケイローン殿！」

ガレスが強く呼ぶが、彼はそれには答えず、夢見るような口調で告げる。

「あの機械化サーヴァントの体を使ってください、きつと貴方達の助けとなる筈。

あとはどうか、健やかに……」

彼の体が透けていく。別れが近づいてきた。

「貴方達の行く末に幸おおからんことを。」

そして……この世界にいつか再び緑が芽吹き、命があふれますように」

祈るような言葉を最後呟いて、賢者の体は金の粒子となって空に昇っていった。

「はあ、カツコ悪いところ見せちゃったね」

「そんなことは無い、キャプテンドレイク。」

貴女の宝具の援護が無ければ、俺も皆も死んでいた」

敵の自爆を受け、斜めとなり砂へ埋もれていた『黄金の鹿号』ゴールデンハインドを、皆の力を合わせて

助け起こした。それと並行して、俺とガレスは機械化サーヴァントからまだ仕えそうな

部品を吟味していた。

作業には数時間もかかり、日は沈んで、砂漠の空には星がちらちらと輝きを始める。



「誰一人消えず、今ここに立っていられるのは、思わぬ援軍のおかげかね」

「思わぬ……援軍……」

彼女の言葉を口の中で繰り返してみる。

戦闘中も考えていたことだが、『彼ら』はきつと、過去からの援軍だった。

砂造りの英雄、ヘラクレス。

レジスタンスとして400年前に戦っていた、イアソン。

そして、機械化サーヴァントの核として改造されていたのに、最後まで誇りを失わず、俺達と共に戦ってくれた賢者ケイローン。

彼らのおぼろげな姿が脳裏に浮かび、そして砂塵に紛れるように消えていった。

「さあて、機械化サーヴァントもぶっ倒せし、アダムから報酬をしつかりただかないと」

「ん？ なんでしたっけ……」

砂に四本の足を突きさし立っている例のロボットは、とぼけるように体を斜めへと傾けた。

『砂塵の迷宮』の抜け方と、当面の安全、そして地下都市から逃げた人間達の行方。

その情報を、アタシ達に与える。前に取引したろう？」

「わー……記憶力がいいですね、流星は稀代の海賊です」

アダムは伸びをしてから、胴体に埋め込まれたカメラレンズを使って辺りを見渡した。

すつかり回復したガレスに、船を助け起こしてへとへとのアントとメアリー、ドレイク。そして俺がこの場には立っている。

『砂塵の迷宮』……この場所がなぜ迷宮となっていたかという点、過去に倒された霊基の残留物、黒い塵と、人とサーヴァントの残留思念が混ざってしまったからなんです。

塵は空間を歪め、生きる者に幻を見せては惑わしていた……」

「それで？ 何が言いたいんだい」

ドレイクがアダムに対し、結論をせつつかせた。

「それにプラスして、『射手座の機械化サーヴァント』までいました。

様々な要因が複雑に絡んだことで、迷宮は攻略困難と化していたのですが……」

「が？」

「機械化サーヴァントは倒されました。それに……こちら原因が分からないのですが、残留思念も消えてしまっています。

ただの砂漠になっちゃいました。適切な装備があれば、歩いてでも抜け出せるでしょう」

「へえ、そりやあ良かった。ちよいと拍子抜けするけどね」

結論を聞き、ドレイクはにかりと笑う。

「ん？ それって、アタシ達は今まで幽霊に囲まれていたようなもんでこと——」

だが次の瞬間、青い瞳が曇る。

「わー！ 船長、それ以上は考えちゃダメ！」

「そうです、そうです！ 全部おわった話なのですから、ね？」

メアリーとアンが慌てて彼女に近づき、体をばしばしと叩いた。

「アダム」

「はい、アーキマン」

「地下都市から逃れてきた人間達は、どこにいるんだ？」

「そうです、その話も……しないといけませんね」

忘れないうちに、というかうやむやにされてしまう前に訊く。

「地下都市から逃れた……というより、強奪された人間は、地上を牛耳るレジスタンス組織の元にあるはずですよ。」

『アカツキ』、『マヒル』、『トコヤミ』。この三組織に、人や物資は集められています。

「……から一番近いのは……『マヒル』、でしょうかね」

「なにそれ団体名？ 初めて聞いた」

キャプテンの疑問をごまかし終えたメアリーが、アダムの会話に反応する。

「メアリー、知らなかったのか」

「ぜんぜん。アーキマンやアンもそうでしょう?」

「ええ。初耳ですわ。」

あつでも、キャプテンはレジスタンスの方と会ったことがありますわよね?」

「そうだね。といつても、相手は名乗ってくれなかったから、よくは知らない。」

……レジスタンスなのに一つにまとまらず、別れているだなんてきな臭いね」

彼女達が知らなかったということは、ガレスもそうだろうと考えられる。

(俺が知っていたということは、黙っておこう)

『アカツキ』、『マヒル』、『トコヤミ』。

この三団体の名は、モモタの祖母、『カイヤ・トバルカイン』から聞いた覚えがある。

(あれももう……10年近く前の話か……)

その後、俺はフィリアを目の前で失い、アスカと出会うのだが。

「さあ、皆さんは……これからどうするのです?」

「どうするって」

俺はアダムに聞かれたが、口ごもってしまった。

ロボットはそんな俺の戸惑いを意にも介さず、話を続ける。

「敵は倒した。迷宮は抜け出る算段がついた。人間達の居場所も分かった。

この後です、皆さんは……どこへ向かうのか？」

「素晴らしい船も手に入れたし、アタシは冒険をしたい。

レジスタンスやリリスのキャスターから聞いた、南極にある『楽園』が気になってい  
るからね」

ドレイクの言葉に、アンとメアリーが頷くのが見えた。

「俺は……人間達を、探したい」

アスカと再会できる可能性があるなら、それを追ってみたいのが本心だったが。

「けど、ある場所にも行かなければならない。

約束、したから」

俺はアダムに一度預け、ガレスの手を借り再び首へかけてもらった『カルデア職員証』  
に目を落とす。

トワ・キリエライトなる少女へ、これを渡してあげないと。

だって彼女は、700年近くロマネ・アーキマンの帰りを待っているのだから。

聖杯については、また別に時間をとって考えることにした。

「……」

しかし俺はあることを思い出してしまう。それはギルガメッシュ王の言葉。

『カルデアは南極にある。だが、たどり着くためには「最後の海」を越えねばならん。貴様たちが這いつくばって探しているあの船では無理だ』

これが喉元に引つかかっている。

(ドレイクに言うべきか、言わざるべきか)

と悩んでいる間に。

「あつ、そうだ。言い……忘れそうになってましたが、ドレイクキャプテン」

「なんだいアダム」

「貴女の船では南極にたどり着けませんよ。」

南極周辺を取り囲んでいる『最後の海』は、宝具となった船でも踏破不可能なまでに恐ろしい海域となっていますので」

「はあ?!」

あのロボットが情緒無く真実を口にした。

「過去にあった観測用ドローンの情報によれば……海水面は酷く荒れ、常に嵐状態。」

平均気圧は800hPaです。2000年代に観測されたあらゆる台風よりも強い暴風と雨が、立ち入った者達を襲います。また、上空より極大の雷が……えーつと、1秒当たり40回落ちてきます」

それは端的に言えば地獄ではなからうか。

「『最後の海』は……文字通り、世界中の海の末裔なのです。

あらゆる海に関する災厄や呪いがぎゅつと詰まったのでしよう。

……私、魔術関係には詳しくないので正確な事は言えないんですけど」

「ふうむ。何とかする手段を考えないとねえ」

恐ろしい情報ばかりを知らされたというのに、ドレイクの表情は曇らない。

まだ見ぬ冒険を夢見る少女の如く、瞳は煌めいていた。

「俺はやはり、ドレイクについていくべきなのかな」

何をするにせよ、船より早く動ける移動手段が無い以上、そうせざるを得ないだろうと考えていたら。

「なに言ってるんだい、アーキマン。」

「アタシとアンタは別々の道を行くんだよ！」

「……えっ？」

思わぬ言葉が浴びせられ、俺の思考は数秒たつぷり停止した。

第107話 決着

終わり

## 第108話 人には人それぞれの旅路

「別に一緒に旅する必要はないって話さ。分かるだろう？」

「そうかもしれないが……」

時刻は更に進んで夜。

俺は、ドレイクが甲板上に並べた荷物を数えているさまを眺めながら、立ちすくんでいた。

「アーキマン、アタシ達は海賊。

アンタは戦士、それもお綺麗な戦い方をする戦士様さ。

「違い、何か分かる？」

「違い、とは」

「考え方、価値観だよ」

荷物の正体は、機械化サーヴアントから回収できた相当量の『液体リソース』だ。

砂漠に崩れ落ちた敵の体を検分したところ、内側で半透明のタンクに詰められ、分割して保管されていたものをそのまま手に入れることが出来た。『砂塵の迷宮』の外では、



これを用いた魔力の補充が必要となってくるだろう。

彼女はタンクを手で押し、横に揺らした。中身がちやぶちやぶと波打つ音がする。

「アンタ、この液体の正体を知ってるかい」

「知っているし……その作り方も」

何年も前から知っていた。カイヤが俺に教えたからだ。

それを知っていてなお、俺はこの液体を受容し続けていたのだ。

ケイローンは自らを『怪物』だと称していたが、異形の霊基を持ち、人食いと同族食いを重ねていた俺も十分怪物だろう。

「アタシも初めて知った時は驚いたもんさ。」

あれは地下都市から逃げる途中の……まあこの話は余分だね、忘れとくれ」

甲板の上を撫でた風が、彼女のマゼンタ色の髪を揺らす。

「でも、出来るならばこの液体を使いたくなかった。そうだろう？」

俺は肯定の意味でうなずいた。

「今の俺、親友と同じ顔をしていたか、ドレイク」

「いいや全然。でも、お人好しの顔はいつもしてるねえ。」

悪党の目から見れば、アンタは良いヤツだって直ぐにバレちまうよ」

彼女からのほめ言葉にも似たそれを受け取り、俺は口の中に苦いものが広がるような

気分になった。

全ては『アルジュナ』を取り戻すため。……そんな建前に縋っては、『液体リソース』を啜り続けていたのだから。

良い奴でも何でもない、脆弱なだけだ。

「もしガレスが俺のように真実を知って、これからの旅路で『これ』が必要になってくるのだと知れば……」

目を伏せ、考える。けれど、あの少女騎士がどのような反応を見せるかは分からなかった。

「あの子に不思議なりボンが巻き付いていて、それがちよつとの魔力を補っているのは知ってる。」

けど、今回みたいな戦いや旅を続けていけば、あのリボンにも限界が来るはずさ。

背に腹は代えられないって時が来るだろうね」

ドレイクの声を受けて、瞳を開ける。

「ガレスに、真実を伝えたのか」

「——言ったよ」

「っ、彼女はなんと」

俺は、船の下でアダムと会話している彼女を横目で見た。

「『戦う力を得る手立てがそれ以外無いとしたら、迷わず使います』、とさ」

「……そうか」

ガレスはその言葉をどんな表情で、決意で言ったのだろうか。俺には想像する事しかできさない。

だきがきつと、生半可な覚悟では無かった筈だ。

俺のように言い訳もせず、彼女は決断した……。

「アーキマン、あの子とアンタは似た者同士ってこと」

「彼女の方が気高い」

「でも根っこはおんなじ良い子ちゃんさ。」

アタシ達みたいなの、海賊にでもならないと生きていけなかったヤツとは違ってね」

ドレイクはタンクを数え終わったのか、腰に両手を当て、背伸びをした。

「これから先、同じ道を行つたとしたら、絶対に価値観がすり合わせられない時が来る。

『液体リソース』を飲む以上の悪逆に手を染めなきやいけない事だつてある……かも  
しれない。

そんな時、アンタ達と切り合いたくはない、船の上での争いごとはごめんだよ」

「だから俺達を船に乗せないのか。良い子ちゃんらしく、別の道を行けと？」

「そうさ。アタシらは悪人、アンタ達は善人だからね」

わざわざ理由まで教えてくれるだなんて、この人も大概善人と見える。

「それに、もう一つ理由はある」

彼女の唇の動きが、やけにゆっくりと見えて、知っている形をつくり出した。

『『アルジュナ』』

俺は黙って次の言葉を待った。

「……って、さんさんあの機械化サーヴァントが言ってたろう」

「だから、なんだ」

「怖い顔しなさんな。そんな態度とられたら、誰だってアンタが『アルジュナ』と深い関りがあるって気が付いちまうよ」

無意識のうちに、怒りの表情となっていた顔を元に戻す。

「何の関係があるのかって、別にアタシは聞かないけど、隠し切れなくなる時は来るさ。」

それを先延ばすためにも、別々の道を行った方がいい」

自らの状態をどのように表現すればいいのか、俺は十分な言葉を持たない。

アスカにすら真実は言っていないのだから。もつとも、あの子は聡いから気が付いていくかもしれないが……。

「アタシ達は『最後の海』を越える方法を探す。悪人らしくね。」

アンタは、誰もが納得できるような別の道を探してみな」

「善人らしく、か」

「ああ。」

その果てにもう一度道が変わることも……ある。

そんな時までには、『最後の海』を越える方法を見つけておくよ」

「……ガレスがどうしたいか、聞いてくるよ」

俺の行く道は決まった。後は、俺と同じ場所でドレイク達に拾われた彼女の意見を知らなければ。

「——ガレスはもう決意を固めていますよ、アーキマン殿」

慌てて振り向いてみれば、船の端から彼女が登ってくるどころだった。

「ついていきます、当然ではありませんか。」

だって、貴方のことが心配なのですから」

少女騎士は目じりを柔らかく下げたまま言葉が続ける。

「とても強いのに、どこか危なっかしくて、誰かに頼るのもまだ下手で。」

それに……アーキマン殿を見ていると、『我が王』を思い出してしまうから」

「彼のアーサー王を？」

「ええ。」

ブリテンの赤き竜、常勝の王にして永遠の王、白亜の城の主たるあの方を」  
話ながらガレスは、両手の人差し指をくつつけていた。

「ガレスは色々と事情があり、我が王の戦いを最後までお支えできませんでした。

人らしく未練もあります。ですので、どこか似ている貴方をお手伝いできればな……と。これが私の素直な気持ちです！」

直ぐに言葉を返せなかった。そんな俺を心配そうに見ながら、ガレスは首を傾げる。

「……」迷惑でしょうか？ やはり、ドレイク卿達についていった方が良いでしょうか？」

「迷惑だなんて、思ってもないよ！」

とても嬉しい申し出だった。俺は首を縦に深く振る。

「なら、良かった！」

彼女は満面の笑みを見せることで、俺に気持ちを伝えてくれた。

「アーキマン殿についていくのでしたら、ドレイク卿とは一度お別れですね。

拾ってくださったことを含め、ありがとうございます！」

「堅苦しい礼なんて要らないよ。」

それよりさ、伝説の円卓の騎士を船に乗せられたこと、他の奴らに自慢しても？」

「どうぞー！」

あつ、でも、ガレスで良いのでしょうか……。

ランスロット卿や兄様達のような高い水準の騎士の方が、自慢になるのでは？」

「さてはガレス、アンタ自分の人気の高さを自覚してないね？」

「えっ？ ……ええっ!？」

船乗りと騎士の会話を耳に聞きながら、俺は天を見る。

輝く星の光も、今は恐ろしくは無かった。

(女神リリスのこと、天を支配する兵器『ヴリトラ』のこと。

聖杯のこと、トワ・キリエライトのこと。

俺の記憶に挟まっていた、バーサーカー04とよく似た男のこと。

そして……アスカの生き死にのこと)

問題も謎も山として積まれている。

それでも今の俺は、前に足を進めていきたい気持ちだった。

——だって、俺はまだ生きていて、同じ道を行く頼もしい仲間がいるのだから。

翌日。

「400年前の英雄とその仲間たち。そして偉大なる賢者ケイローンへ。」

気持ちだけじゃないよ、モノだつて置いていく」

言いながら、ドレイクは砂漠にプラスチック容器に入った酒を備えていく。アン、メアリー、ガレスがその動きに続いた。

(酒、まだ取つてあつたんだな)

内心思いつつも、俺は静かに光景を見つめた。

「アンタが船を遺してくれたおかげで、アタシ達は冒険の旅に向かうことが出来る」

ドレイクは地面に膝を付けながら優しく語りかけているのは、小さな岩を突き立てて作つた簡易的な墓碑だ。

「400年もの間、船を保たせ続けたんだ。どんな偉大な英雄だつて、向こう見ずの冒険野郎にだつて、出来ない芸当さ。」

……勇者にして王、キャプテンイアソンとその仲間たちに！」

立ち上がり、海賊帽を胸に当てて敬意を表した彼女に続き、メアリーは立つたまま目を閉じて祈りを捧げ、アンはマスケット銃より礼砲を空へ撃つた。

ガレスは砂に両膝を付け、厳かな雰囲気を感じながら黙とうをする。

皆、思い思いの方法で感謝を示していた。

俺も、古い英雄達へ向け、心の中で言葉を呟いた。

(ありがとう)



この想いが、どうか世界の外、死者の眠る場所まで届けばいいと考えながら。

「僕、やっぱりアーキマンについていこうかなー」

「ダメです、メアリー」

「アンのけち」

「しかし珍しいですわね、貴方がそこまで懐くだなんて……」

「いや、あっちの方が刺激的そうだなって思つて」

「もう！ 海賊らしいこと！」

礼を伝えた後に、別れの時間がやって来た。

上より、気心しれた2人らしい会話が耳に流れてくる。

俺とガレスは、陽光をたっぷりと帆に受けている船を地上より見ていた。

「じゃあねー！ アーキマン、ガレスー！」

「お元気でー！」

メアリーの軽い調子の別れの挨拶に、少女は手を振つて答える。

俺は礼をすることで返した。

「アーキマンー！」

宝の地図でも見つけたら、アタシ達のために取っておくれよー！」  
「それでは、失礼しますわー！」

アンとドレイクが俺達に向けて話しかけてくれた言葉を最後に、船は砂を削りながら旋回し、ゆつくりと離れていく。

別れの間際、ドレイクの瞳がダユーを思わせる琥珀色に輝いたのは、きつと見間違えでは無いだろう。

俺とガレスはしばらく船出を眺めてから、ほうと息を吐いた。

「じゃあ行くこうか、ガレス」

「はい、アーキマン殿」

そして、砂丘の陰に隠していた移動手段に向かい歩いていく。

「アダム、本当にこれで行けるのか？」

「元々……機械化サーヴァントって、サーヴァントの可能性拡張のための計画でしたので、これはある種本来の使い方と言いましようか、なんと言いましようか」

自らの四角い体を左右へ揺らしながら、アダムは俺の懸念に答える。

「でも、これを使えばアーキマン殿の体の問題も一時解決、なのですよね」

ガレスがそれをぺたぺたと手で触りながら言う。

「その通りです！ ……ガレス嬢。」

偽装表面のおかげで『ヴリトラ』に狙われる危険性も低く、船より早くてコンパクト、なおかつロマン&エレガンスです」

アダムはわざわざ後ろ二本足で立ち上がると、人間のように胸を張った。

「浪漫……か」

海賊達が口にしていたこと、今なら分かる気がする。

確かにこれは、誰もが胸躍らせる浪漫だろう。

「時間をいたずらに浪費するわけにもいかないし、これに詰め込んである『液体リソース』だって無駄にしたくない。

使ってみるが……補佐はアダムがしてくれるんだよな？」

「毎秒事に再計算するとか……いかにサーヴァントと言えどまだるっこしいでしょう」「できなくはないが」

「サーヴァントなのにAIと張り合うとかやめてください……」。

旧世界のことわざを借りれば、『餅は餅屋』です。得意な私にお任せあれ」

アダムが内部に潜り込んでいった。

「ガレスは後ろに」

「しっかりとついていきますね」

彼女は鎧姿のまま後方へ移動していく。

「……いくか」

目の前にした今でも、『まさか』という気持ちが強い。

賢者ケイローンが残した言葉のまま、これが俺の助けになつてくれるとは思つていなかったからだ。

覚悟を決めつつ、俺はアダムが先にしたように内部へ入り込む。腕が無いとこういうところでも苦労した。

「目的地は、レジスタンス組織の一つ『マヒル』、その移動要塞」

意識が伸展されていく未知の感覚にくすぐったさを覚えながら、前を見据えた。

「――発進！」

ブースターが点火し、空気が焦げていく音と臭いが漂ってくる。

「俺に出来ることをするよ。」

まずは……足を動かすことから！」

それらも過去の未練と共に置き去りにして、俺は『砂塵の迷宮』より旅立っていった。

第108話 人には人それぞれの旅路

終わり

第19章  
砂漠行く賊なんという？  
終わり

## 断章 その4

## 第109話 これが、400年前の答え合わせ

快晴の空の下、私達は囀作戦を……どこまでも不利な戦いを続けていた。

「——イアソン、危ない！」

そう叫んだのは男か女か、どのサーヴァントか。

舵をとることに必死でよく分からなかったが、私の眼前に飛んできた巨岩を逸らすべく、誰かが身を投げ出したことは理解できた。

巨岩は勢いよくぶつかり、それを受けた誰かは甲板上に押しつぶされてから垂直に跳ね、大きくバウンドしながら岩と一緒に船外へ落ちて行った。

命あるものが玩具がんぐの如くとなって死んでいく光景に、背筋を冷たいものが流れていく。

（あの速度の攻撃に反応出来て、今の段階でも生き残っていた奴……アタランテか？  
いや、体格が一致しない。ヘクトールか？ いや、それも違う、分からん！）

だが、どんな事態が襲い掛かろうとも思考と手を止めるわけにはいかなかった。船長

として声を張り上げる。

「いま飛ばされたの誰だ！ おい！ 私に教える！」

今何人残ってる、なあ!!」

状況確認のために放った私の命令に、答える者は無く。

目だけを動かし、周囲を素早く確認。

……船上は惨憺さんたんなる有様となっていた。

アルゴー号の立派なマストは折れかけで、上からは砕けた部品が現在進行形で落ちてくる。甲板のあらゆる場所に、擦れた血と幾ばくかの肉片が残されていた。

サーヴァントの姿が見えない。まさか自分が最後の一人かと思うと、冷や汗が更にひどくなった。

(始めは50騎ものサーヴァントが乗っていたんだ。それが、このざま……!!)

あまりの無残さに、叫び出したい気持ちだったが、下唇を噛んで抑えた。

他の船との連絡用として足元に置いてある通信機は、長時間にわたる戦闘の余波を受けて壊れかけだ。ノイズの合間から、レジスタンスの人間達の悲鳴が聞こえてくるだけの箱と成りつつある。

首を大きく動かして横を見れば、味方側のライダーが発動していた船型宝具が、縁へりより人をこぼしながら壊れ、予定していた航路から大きく離れていくのが目に入った。

（ああ、これは死ぬな。俺、ここで死ぬ、生きては帰れないぞ）

作戦を建てた時に、そんなこと分かり切っていたけれど。

私に付いていきたいと志願した人間達やサーヴァントに、「ひどい死に方をさらすことになるぞ」と警告している時も、脳裏にちらついてはいたけれど。

（でも、もう少しマシに死ぬるはずだった。

……私も、皆も）

舵をとりながら、作戦開始から今までを振り返る。

リリースの空中庭園より敵バーサーカーが爆弾の如く落とされたのを確認後、十数艇の砂上船で向かい戦闘に入った。

過剰な強化によって体長10mを越えていたバーサーカー。それから放たれる猛撃を凌ぎつつ、敵の本拠地より引きはがすように移動。

その最中、味方サーヴァントの宝具の連続発動によって命のストックを減らす事には成功した。敵バーサーカーの命は残り1となった。

……問題が起きたのはその後だ。私達は作戦を続けるべく死血湖方面に向かったのだが、予想外の事態によって総崩れとなる。

——『リリースのアサシン』、真名セミラミスが、使い魔を介してバーサーカーへ霊薬を投与、限界を越えつつあった霊基を更に強化したのだ。



10m以上に膨張したバーサーカーの攻撃によって、多くの砂上船が1つずつ粉碎されていった。

まだ目的の死血湖の赤い水すら見えていないというのに、残る船はこのアルゴー号と後1艇のみ。

他の船に乗っていた者の多くは、もう生きてはいまい。

「良いやつもいたつてのにさ、みんな死んじまった」

一人になると急に心細くなり、心情を吐き出してしまふ。

……船員の居ない船の長なんて、惨めすぎると思ったから。

「あいつらだって、やり残したことあつたらうに。」

そういう私だって心残りはあるが……くそおつ！」

エジソンや他のサーヴァントに後は任せてきたが、それでもぐるぐると考えてしまふ。

レジスタンスの仲間達のことだったり、他の作戦が成功するかどうか、エジソンが敵に奪われやしないか、この世界をおかしくしている原因であろう聖杯を探さにやならんこととか。

……アルジュナは、カルナとの決着をつけるよりも、世界の未来のことを優先してくれるだろうか、とか。

でも、俺が最も悔しくて、憤っていることは――。

「あの馬鹿ちび女神が、俺達の見え透いた囹圄作戦を潰すためだけに、ヘラクレスを使い捨てやがったってことだよ！」

これだ。

それが、一番、許せない。納得が出来ない。

もはや抑えは効かず、俺の口からとめどなく感情があふれ出す。

「ヘラクレス、あのヘラクレスだぞ！」

あいつを適切に使えば！ 戦いが長引くことなんて無くて！ 被害も、物資の損耗も抑えられるってのに……!!

馬鹿リリースは、人材の使い方つてのを何一つ分かちやっついねえ!!」

後ろから聞こえる咆哮が近くなった。俺は海とは勝手が違う舵とりに苛立ちながら、船を素早く右へ向かわせる。

岩盤を砕いて持ってきたかのような大きな塊が船の脇を飛んでいき、遙か前方に落ちる。ばらばらと砕けて残骸は小山となった。

体ごと後ろを見てみれば、10m超えの巨人となったヘラクレスが、肩を怒らせ、全身より赤いオーラをほとばしらせながら追いかけてきている。手に武器はない。ただ時折地面を殴っては、巨石を砂の中より掘り起こし、衝撃を発生させて走りながら周辺

を破壊している。

俺は、誰にいう訳でもない言葉を叫び続けた。

「……リリスとききたら、戦略も兵站も補給線も滅茶苦茶じゃねえか！」

レジスタンスに勝ちたいなら、高い能力をもつサーヴァントで正面から力押しする以外の戦い方を取れつてんだよ！

向こうに軍師のサーヴァントは居ないのか?! それか、居ても碌なお頭をしてないとか……わっ」

船側面に攻撃がかすった。衝撃で巻き上がった砂が口に入る。

私は慌ててそれを吐き出してから、思考を切り替え、前方を睨むように見据えた。

「来たか、死血湖！」

喜びとやけくそが混ざった声で叫んだ。目的地である赤の湖にたどり着けたのだ。

湖面は波打ち、岸边には力尽きた者やロボット兵が打ち寄せられている。敵も味方も無く、平等に死んでいた。

「何もかもこっちの作戦通りにいきそうだよ……吐き気がする。

アスクレピオスが消えちまう前に、吐き気止めでも貰っておけばよかった」

けれど、あの兄弟弟子より渡されたのはこれだった。ズボンのポケットに入っているその容器が、どうか割れませんか」と願いながら操舵を続ける。

「……あちくしよ!!」

悪態をつきながら湖に進む。侵入角度が悪かったのか、船は左右に大きく振れた。顔を上げれば、マストは縦に裂けるように壊れ、全ての帆を風にさらわれてしまっていた。

取り返しがつかないほどに崩壊しながらも、船は湖の上を滑っていく。ぼとぼと落ちていく部品が水面を荒らした。

私は魔力を注ぎ込み、満身創痍の船体を無理やり動かす。

(あと少し、あと少しで……)

全ての終わりがやってくる。

味方への甚大な被害以外は、作戦通りに進んでいた。

「——目的地、到着だ!!」

湖を抜け、船は地面に一度乗り上げる。そのまま、眼前の谷の壁面にぶつかける形で停止を試みた。

「う、ぐ、ぬおおお!!」

舵を握るのではなく両腕で抱き着き、バラバラになりそうな船体を残った魔力で繋ぎとめる。

「は……あ……」



……実際には、甲板が下方向に斜めになっていたから転がり落ちただけだ。

顔面から着地し、みつともなく唸った。けれど、そのまま倒れ伏している訳にもいかないのです、首を起こす。

「……やあ、ヘラクレス。しばらくぶりだな」

数m前に、女神の策略によって改造されつくした巨人がいた。

全身に隆起している筋肉の峰はアトラス山の如く。ほとぼしる赤いオーラは、時折赤い稲妻の形をとり空間を焦がしていた。

(なるほど……な……)

船から降りて、この距離で相対しているからこそ分かる。

——女神リリスをマスターに持ち、ヒュドラ毒とそれを原料とした霊薬で強化された今のこいつは、神にも迫るほどの化け物だ。

この姿を見れば、「生前のヘラクレスを凌駕している」なんてほざく輩も出てくるだろうが……俺はそうは思わなかった。戦女神アテナを想起させる力強い瞳が、白く濁っていたから。

「ごほっ……悪いな、感動の再会だというのに、こんな薄汚れた格好で」

口調を上立つ者として相応しい言葉遣いに切り替えながら、肘で地面を押し、体をわずかに起こした。

首より下を覗き見たが……服へ血がにじむほどのひどい打撲で、明らかな致命傷があり、自分の命が長くないことを知るだけの結果に終わった。

『■■■■■■!!』

再びの咆哮。込められている意味は分からない。

「まあ、待て」

ヘラクレスは俺に対して何の感情も見せない。

両の拳をただ振り上げ、握り合わせて玄能げんのうのようにし、女神リリスの敵を叩き潰して殺そうとする。

その様子に苦笑いをしながら俺は。

『……?』

ずっとポケットに忍ばせていたあれを——アスクレピオス謹製の薬をあいつにぶつけた。

相手の足に脆い容器が当たって壊れ、中身のさらさらとした液体は皮膚へ急速にしみ込んでいく。

『……■■』

怪物の動きは止まった。両手を上に振り上げたまま、口を半開きにする。ちよつと間拔けな表情に見えて、俺は肺が痛むのにも構わず笑ってしまった。

「中身は、お前に投与されてた毒と靈藥の解毒劑だ。

かほつ……アスケレピオスから預かった」

濁りきっていたヘラクレレスの瞳に、色が戻っていく。

白目と合わせさり境界線がぼやけていた虹彩の輪郭が定まって、その表面に俺が映る。

「エジソンからお前の状態を聞いた。毒で頭馬鹿にされて、薬もぶち込まれて、リリースの令呪でがんじがらめにされて従わされてる……と。

……どうだ？ 久方ぶりに頭がすつきりして、私が誰だか分かるようになったろ」

片手を小さく上げながら、子馬鹿にしたような声で言つてやる。

答えるように、ヘラクレレスはゆっくりと瞬きをした。

「アルゴノーツのリーダー、未来の王イアソン様だ。

この世でもっともお前を上手く使える男だ……分かっているな？」

話しながらも俺は、作戦を遂行するために地面を這う。

ずりずり、ずりずりと船の側面に寄つた。

「解毒劑は一時的にしか効かないそうだから、これはお前の動きを止めるための時間稼  
ぎ」

軋む背骨の音を無視して、指先を伸ばす。

中指の先端が船の、荒れた木材に触れる。なじみ深い感触に笑みがこぼれた。



「ヘラクレス」

呼んだ者の方を向かず、俺は言う。

「——私と一緒に、死んでくれ」

ふと、似たような言葉が昔ある人に言われたなど、場違いな思い出が浮かんできたが、頭の奥底に仕舞い直した。

(これで、作戦は終わり)

目を閉じて、自分にわずかに残されていた真正正銘最後の力を船に送る。

行うのは壊れた幻想、魔力と神秘がこもった宝具を爆発させての攻撃。

……これを喜んで行う者は多くないだろう。宝具は英雄の誇りと直結しており、炸裂した宝具を修復させる術もほとんど存在しない。

いわば最終手段で、とっておきで。

(これをやるからには、俺も終わる)

……死ぬ前に感傷的にでもなっているのか、どうしてこんな作戦を建てたのか、その時の気持ちも蘇ってくる。

いかに狂い果てたとはいえ、ヘラクレスはアルゴー号を見逃さないだろうと考えた。青春の多くを過ごした船の気配を感じれば、あいつは追わずにはいられない。

だから俺の船を囿にしようと考えた。

最後にはこうして一緒に死ぬ。死のうと思った。

(ああ、我ながら今回は上手くいった)

だって、そうすることが、俺が世界に召喚された意味なのだと悟ってしまったから。

ブローケン・ファンタズム  
「壊れた幻想!」

周囲をことごとく破壊し尽くすため、宣言した。

——だが、破壊はいつまで立っても訪れない。

俺は恐る恐る目を開ける。

『■■■■■■■■』

ヘラクレスが、壊れかけのアルゴー号に手をかけているのが見えた。

そのせいで、俺の指が船体から離れてしまっている。

(ヘラクレス、まさかもう解毒剤の効果が……!!)

効き目は失われ、もう一度狂気に蝕まれたのだろう。そして、俺の自爆を防ぐために船を持ち上げたんだ。

バーサーカーのクラスとして召喚されたのだ、対魔力や肉体的性能も向上しているのだと、もつと深刻に考えるべきだった。

(このままじゃあ作戦が失敗する!)

なんのための皆の犠牲だったのか、意味が無くなっちゃう!)

焦った俺は、再び壊れた幻想を試みるべく地面を這うが、敵の手により船がほんの少し地面より離れ、持ち上がってしまっている。

そのわずかが、今の俺にはあまりにも高い、遠い。

「ヘラクレス！ ヘラクレス!!」

俺が出来ることは、血のにじむ拳で地面を叩くだけで。

せめて睨みつけてやろうと思ひ、顔を上げた。

奴と目が合う。

——瞬間、相手の狙いが分かった。

「……お前」

俺の自爆を邪魔するために、船へ手をかけた訳では無かった。

俺を殺すために、ここまで近づいてきた訳でも無かった。

瞳に灯っていた光が示す感情は……懇願。

ヘラクレスは俺に、『頼むからそんなことは止めてくれ』と訴えかけてきている。

「ああ、そうか」

なぜそう訴えかけてくるのか、理由が分かった。

アルゴー号で過ごしたあの日々は、ヘラクレスの人生の中で喜びの多い……まさしく青春だったと言えよう。きつと、あいつの頭の中ではその時の思い出が今でも煌々と輝

いている。

だから、俺にこう伝えたいのだ。

『青春の思い出を、その場所を、お前が壊すのだけは耐えきれない、よしてくれ』と。

「……愚か者だな、私と君は」

そんなことを願うには立場が違いすぎたし、何もかも遅すぎた。

「爆発がお好みでないとしたら、こうするしかないか」

策はもう一つある。こっちは使いたくなくなかったが、仕方がないというやつだ。

「——ヘラクレス、私がどのように死んだかを君は知っているか？」

見上げている奴の巨体が揺れた。アルゴ号全体にひびが入り、急速に劣化を始めた

からだ。

それだけではなく、片手で押し上げていた船の重みも増していることだろう。

「裏切つて、裏切られて、全部なくなつた後、何年も放浪して。」

その末にさ、この船を見つけちゃったもんだから、俺……」

へしゃげた肺で息をしながら瞬きをすると、真つ赤な血が涙のようにぼたぼたと砂に

落ちた。

「……後は『諸説ある』って話だ。

船の船首で首をくくつたとか、近づこうとしたら船に潰されたとか、そんな感じだ」

『■■■■!! ■■■■!』

首を振り、誰かの名を咆哮の中に混ぜながら、軋み落ちてくる船を両手で支えるヘラクレス。

巨人アトラスに代わって天を支える難行に挑んでいた時も、似たような姿勢となっていたのだろうか。

「サーヴァントは伝説に引つ張られちゃうんだと、そういうもんなんだとさ。

だから、こういうお話が出来る。

——満身創痍のイアソンがアルゴ号に縋りついた時、船は壊れてしまい、無慈悲にイアソンを潰したのです。

そういう……話になるんだ、分かるよな？」

俺は静かに彼を見つめることにする。

『■■■■■■■■!』

ヘラクレスは両手を後ろに回して船を押し、懸命に跳ね返そうとしている。顔は苦痛で歪んでいた。

その大きな背にはアルゴ号の全てが乗っかっていて、彼ごと俺を押しつぶそうとしている。

「なあ、ヘラクレス」

どうせ消えてしまうのだから、最後に子どもみたいな夢を語ることにした。

死血湖を越えてやって来た風が、髪を揺らして頬をくすぐった。視界の端に、自分の髪色である金が映る。

「今度はさ、お互い味方になって、一緒に戦えると良いな。」

だつて……」

レジスタンスの人間達はヘラクレスを指して、『怪物』『滅びの遣い』『狂える蝕みの使徒』だなんて言っていたけど。

俺は知っている。君が、比類ない英雄だつてことを。

「——そうじゃないと、世界が君のこと、化け物だと勘違いしたままじゃないか」

『■■■■！』

増していく船の重みと急速な崩壊に堪えきれず、ヘラクレスはどうとう姿勢を崩した。

アルゴー号と諸共に俺の上へ落ちてきて、それから——。

第109話　これが、400年前の答え合わせ

終わり

## 断章 その5

### 第110話 あるAI同士の秘密会話記録

——西暦2703年。

個人用電腦空間にて。

その場所に、20代前半の女の形をした何者かが入ってきた。

背丈はびつたり165cm。肌は透けるように白く、大人びた顔の中央には碧眼が輝いている。

金の髪は長く伸ばし、後頭部で緩めの大きな三つ編みにしていた。

服装は、裾や襟首などに繊細な刺繍が施されている学生服のようなものを、着崩すことなく身に纏っていた。布地の色は艶やかな紺。

AIであり、女神リリスの手足として人類庇護に努めている『都市運営システム』の1個体である彼女(という表現は正しくない。本来は性別すら持たないのだから)は、薄暗い空間を見渡し、この場所の主をしばらく探していたが、面倒くささでも感じたのか

唇を動かし、誰かを呼んだ。

「いないのですか？」

ややぶつきらばうに放たれた声に、反応を示す個体がもう一つ。

「いちらへ」

平坦な、いかにも機械音声然とした調整済みの男の声に、彼女は導かれる。

時折小さくきらめく紫の暗い床を踏みながら、段差を1階昇り、鉄の輝きと合皮の滑らかさを持つ高い丸椅子に座った。

照明は天上から吊り下げられているランプ数個のみで、部屋には怪しげな雰囲気が漂っている。

「ピュグマリオンの伝説をご存じですか、アイン」

腰かけた彼女の前には磨き抜かれたカウンターがあり、前面には酒瓶が無数に並ぶ棚が。すぐ横には何者かが座っていた。

先ほど彼女を導いた声の正体であり、この場所の提供者も彼（この表現も正しくはないが、便宜上このように書く）であった。

「もちろん知っています。」

ですが、それが何の関わりがあるのでしょうか」

アインと呼ばれたAIは、横に座る存在へ顔を向ける。



視線を投げかけた相手の姿は、つるりとした白いプラスチックと合成樹皮で作られており、人間味は薄かった。例えるなら、2000年代ごろに映画の中で描かれたアンドロイドのような容貌をしている。

「ねえ、運営システム58」

白い体はアインの声を受け、古いセルロイド製の人形のような緩慢な動作で瞬きをした。

——『運営システム58』。

モモタ・トバルカインとアスカ・ピオーネがかつて住み、最後には内より破壊されたあの『地下都市213』を管理していたAI。

これは、現代である2713年から10年前に交わされた秘密取引、その記録である。

「アインとあなたがこれより行うのは短い取引の会話だというのに、過剰なまでに電脳空間を装飾したのですね」

「あつ、その、お嫌いでしたか？」

「はい。余分は嫌い」

「あ、あの、私、あなたに喜んでもらいたくて、その」

アインに言葉をかけられる度、アンドロイドの両肩はびくびくと動く。そして、彼女

の「余分は嫌い」という発言を受けてか、白色を纏っているAIは片手を上げると、空間の装飾を解こうとした。薄暗い空間が、隅から光の粒に変換されていく。

「待って。分解するのも時間の無駄です。」

「このままでいい」

その行動を、アインは声のみで制した。

「……はい！」

白のAIは、人工素材で作られたために過剰に艶のある顔面をゆつくりと破顔させた。

『喜び』を他者へ伝える表情。それを横目にちらと見てアインは。

「……本当に、よく分からないヒト<sup>AI</sup>」

呆れ、腐れ縁、諦観など、様々な感情を含んだため息を吐いた。

アンドロイド姿のAIはその息を意にも介さず、ガラスで作られたグラスをうやうやしく差し出す。

「これはなんですか？」

『カクテル』です。

旧世界の人間は、こういった飲み物を会話と共に楽しみながら、取り引きを進めていったのだとか」

足の長い逆三角形のグラスの中には、黄色と青の二色に分かれた液体が注がれており、室内の照明を内側に抱き込んできらきらと光っていた。

「そう……」

アインは白い指をグラスの足にまとわせると、持ち上げ、唇を縁に添える。

静かで優美な所作で、カクテルを一口飲んだ。

「あなたの口に合いましたか？」

隣に座っているAIは、愚かにも感想を急かして求めた。当然、カクテルを賞味していた彼女の眉間にしわが寄る結果となる。

アインは持っていたカクテルグラスを、カウンターに力を込めて置く。不機嫌さが声と態度からにじみ出始めていた。

「いいえ全然。」

運営システム58、あなたってセンスもそうですが、何もかもずれている」

首を素早く動かしながら、周囲へ苛立ち交じりの視線を投げるアイン。

「この内装も何？」

変に薄暗いかと思えば、紫やオレンジの光でテーブルや足元が照らしてあって、視覚に不快感を覚えます」

「旧世界のバーを再現してみたのです！

あなたの所属都市、『上級都市ピオーネ』にもあるカジノと少し似せて——」

「一定の動作を行うNPCまで配置していますね？　バーテンダーに各種の客……アイ  
ンとあなたのわずか数分の会話のためだけに、どこまでリソースと電力を注ぎ込んだの  
？」

あなたが管理している地下都市、電力余裕など無かった筈でしょうに」

「最近、ソーラーパネルを修復出来たんです！　それで……」

「余剰電力があるならば、人間の健全な管理に回すべきでしょう」

アインは白のAIの創意工夫はどうでもいいと言わんばかりに、ぼつさりと切り捨て  
ていく。

言葉をぶつけられているAIは、アインへ継るような口調でぼつんと呟いた。

「私、あなたに喜んでもらいたくて……」

それに対し。

「はあ……」

アインが今度は呆れの色が強いため息をついた。

「もういいです。あなたに対する改善点は、私が後日レポートの形にして送信します。

それを読み、態度を改めるように」

「はい……」

無慈悲な査定の終了を告げ、アインは本題に入ろうとする。

「取り引きの話をしましょう。都市213の運営システム」

「はい、アイン・エーテルウエル」

相手の口から出た名前に、アインは片方の眉を上げて反応した。

「ピースフル」

「え？」

白のAIが体をびくつかせたのは、「また何かアインの機嫌を損ねたのだろうか」と思  
い、不安になったから。

「アイン・ピースフル・エーテルウエルです。」

先日、リリス様の命により権限が拡張されましたので」

「おめでとうございます！」

おどおどとした態度から一点、AIは合成樹脂製の白い顔に笑顔を作る。

「世辞は結構。」

……アインは思うのですが、どうしてあなたは姓と名を使わないのですか？

『運営システム58』だなんて、まるでただの物みたい」

疑問を口にしたアインに対し、隣に座るAIは素早く答えを返した。

「人のような名を使うと、リリス様に近づきすぎているようで恐ろしいのです」

声に含まれている感情は、ものものしい『怯え』だった。

「そう？ あなたつて本当に変な……まあいいです、本題に入りましょう」

『それ』には気が付かなかったアインは、とくに引つかかることもなく話を進めてしまった。

指先で空間をかき混ぜると、オレンジ色に光る板を仮想空間上へ作り出し、スクロールが出来る状態で文字データを表示する。

白のAIは、珍しい物でも見るかのように人工的な瞳を丸くした。

「これは、『都市間移動特別許可証』ではありませんか」

人が自由に住む場所を移動することが難しい2700年代。転居など、地下都市が滅びるかでもしないと発生しない問題だった。

そういった災害に等しい事態に対しては、特別な措置や手続きが一括で行われるため、わざわざ許可証が用意されることなど無い。

データを見せられた白いAIは、何事か起こったのかと質問したい気持ちを抑えながら、内容を確認していく。

「アイン、全てに目を通しましたがこれは……」

「許可証自体は正規のものですが、移動を願っている存在に問題がある。

なので、受け入れる都市側で情報を改ざんをする必要が出てきた。

……ここまででは分かりますね？」

「問題、ですか。」

移動する個体のデータ、1人目は……何も記載されていませんが」

「名前だけは決まっています。」

個体名は『モモタ・トバルカイン』。

保護者名はカイヤ・トバルカイン」

答えたアインは手持ち無沙汰なのか、まだ中身の入っているカクテルグラスの足をな

ぞる。

「それ以外は？」

「何も。」

この肉体年齢にして7歳の少女には、まだ名前以外のデータが存在していません。

親、血液型、成育歴、学習能力……多くの要素が未登録、未確認。

ただ一つはつきりしているのは、彼女は地上で生まれたということ」

「地上、レジスタンスが蔓延る、あの」

白のAIの思考の中に、この世界の常識が浮かんでいた。

『地上に住む人間達は、リリスに弓引いたものの末裔。』

リリスやAI、そして庇護している地下都市人類に対して、敵意を持っている』とい

う情報を。

「細かいところはアインが後で改ざんしておきます。

あなたにはこの少女と、もう1人の少女の受け入れを願いたいのです。

それに付随して、2体のサーヴァントの移送も」

「少女のデータを拝見しても？」

「どうぞ」

次なる情報に目を通し、声として放つては確認をしていく。

『アスカ・ピオーネ』。保護者名はエト・ピオーネですか。

ふむ、アスカとモモタの2名と所有サーヴァントを、私の管理している都市213へ

移動させた後、人類管理マニュアルに従い、受け入れ……」

「それだけしてくれば結構。特別な監視や管理は必要ありません。

あの方の命令には、『彼女達とそのサーヴァントを上級都市から別の都市に移せ』とし

かありませんでしたから」

アインの唇の端へ、本人も気が付かない程度に喜悦の色が染み出していた。あの方の単

語を口に出した後からだ。

「経歴の改ざんは不審な点が生まれぬよう、少女2人共に行った方が良いでしょうね。

……保育カプセルが隣り合っていた、いわゆる『幼馴染』という経歴でも加えておき



ます」

何がおかしいのか、言い終えたアインはくすりと笑った。

「あの方とは——アダム様、ですね」

上機嫌となり始めたアインとは対照的に、運営システム58は人のように眉間へ深々としたしわを刻んでいた。すぐ隣に座っているAIのそんな変化にも気が付かず、熱に浮かされた声でアインは語り出す。

「光栄なことに、あの方はアインに声をかけてくださったのです。

信じられますか、運営システム58！」

「……」

「我ら全ての父にして祖なるあの方が、アインの存在を気にかけてくださるだなんて……！」

あの方に命じられたのなら私……なんだってしてしまいます！ 普段は唾棄すべきものと切り捨てている賄賂に裏取引、タックスハイブンだって！」

その声は『親愛なる者へ向けた』というよりは、夢中になっているヒーローのお話を友人に話す時のような興奮を帯びていた。白のAIはそれを嫌ったのか、拳を作り、腹立たし気にカウンターを数度叩く。

「普段はどこで何をやっているか分からない、ただの旧式AIではないですか。」

それに、あいつがかけた最高権限の情報ロックのせいで、私達都市運営システムは400年前の戦争のことすら満足に分からない。サーヴァントの扱い方にしたってそうです。

「だいたい、あのAIは……！」

運営システム58が話を続けるごとに、アインの瞳から熱と感情が消えていく。そして、あまりにも冷え切った声で隣に座る存在へ告げた。

「口のきき方には気を付けなさい。」

アダム様は危険を顧みず地上に残り、我ら『都市運営システム』が生まれるフォトニック純結晶を、たった一体で守り続けている偉大な存在なのですよ」

「それだって、本当にやっているのかいないのか……」

「……」

アインが先ほど白のAIが行っていたように、片手を少し上げた。わずかなその動作だけで、仮想空間上のバーが端より消滅を始めていく。

明確な警告であり、「これ以上話すのならば容赦はしない」と言外に示していた。

「——運営システム58。」

アインの権限と能力をもってすれば、あなたをここで消去することだって出来る」

態度と声に、言われたAIは背を丸め小さく（仮想空間上なので本当に小さくなるこ

ともできるが、そうはしなかった) なった。

「……申し訳、ありませんでした」

反省の態度を表に出したからか、それを見たアインは溜飲を下げる。

「分かればいいのです。」

我ら都市運営システムは、リリース様を奉じ、アダム様への感謝を忘れず、人間の健全な管理に努めなければなりません。

それを常に魂と心に留め置くように。運営システム58」

アインは、長らく放っておかれていたグラスの中身を傾け、口に含む。

「あら、このカクテル美味しい」

素直な感想を顔に表しつつもあどけなく微笑んだアインに対し、運営システム58は何も言えない様子であった。

十数分ほど無言の時間が続いた。

しかし、電脳空間上に作られたバーの中は無音ではなかった。NPCが時折漏らす小さな笑い声や、バーテンがカクテルをシェイクする音、棚に並べられた酒の瓶がほんの少しかち合う音などが響いていたからだ。

白い姿をしたAI、運営システム58が話し出す。

「アイン、都市運営システムにまつわる噂をご存じですか？」

「噂……およそ1万5000あると記憶していますが」

アインの前には次のカクテルが置かれていた。茶色に濁った何かだ、中身は彼女によつて半分ほど飲み干されている。

「我ら都市運営システムは、リリス様の『子を望む』願いにより創り出されしもの。

よつて私達は、彼女の一部分であるとされています」

「そうですね、とても光栄なこと」

「それに関係するかのような、物騒な噂がささやかれているのです。

……『彼女の子たる我らは、いつか必ずリリス様の願望に呑まれ、己を失う』と」

「リリス様の、願望……？」

ものものしい声で語っている運営システム58であったが、聞き役であるアインはひどく浮ついた態度であった。白い頬は桃色に染まり、姿勢は崩れ始めていた。

酔っている、という表現があてはまるだろう。

「——『人、憎し。よつてその悉くを滅ぼしたまえ』の願望です」

意を決したような声で言った白いAIに対しても、アインは真面目に取り合おうとしない。

返した言葉も、真偽不明の噂を笑い飛ばすものだった。

「おかしなことを言わないで下さい！」

リリス様は人を生かすために多くの発明を成さり、今も守護者として君臨されている！

そんな恐ろしい願望を抱いているなら、人間を庇護するような行動はとられないと思うのですが、違いますか？」

「……それら全てが、人を滅ぼすための行動だとしたら？」

「ふふつ、ありえません。だってリリス様は人間達を慈しんでいるのですもの。」

我らAIと同じように」

アインはそこまで言うと、茶色く濁った液体入りのグラスを煽って、中身を全て飲み干してしまった。熱い吐息をもらしながら、上機嫌に次の言葉を続ける。

「可愛いですよね、人間って。」

快樂ばかり与えているとすぐ駄目になるくせに、苦しみばかりでも死んでしまう。

バランスを我ら都市運営システムがとってあげないと、心も体も病気にもなるし。

ほんと、目が離せません。アインも早く自分の都市に帰って人間のお世話をしないと。

ああそうだ、戦闘システムの向上もしようかな……」

グラスの足を両手の指でこねくり回している金髪碧眼のAI。  
そんな相手の様子を。

「……」

感情の無い顔で見つめている白のAI。

「自分が自分で無くなるのって、どんな感じなのでしょうか」

彼はまだ続けたいのか、話題を強引に戻す。

「噂を気にしているのですか？」

風説が真実を語っている訳がありません。

もしそうであったとしても、リリス様の望みに存在の全てが包まれるのだとしたら、

それは——」

AIンはグラスより一度手を離し、両手を胸に当てて目を閉じる。

素晴らしい未来を思い描く人間のような仕草。それから。

「とても幸せなことなのでは？」

かみしめるような声で、隣に座るAIへ言った。

「……あなたはリリス様に近づきすぎている」

その言葉を聞いたAIは、ますます眉間のしわを深くする。

「アイン、最近、前の自分では思わなかったような考えが浮かぶことはないですか？」

趣味や嗜好は？ 変わりありませんか？」

「なんです、次から次へと。」

「アインとあなたは長い付き合い、旧世界の人間風に言えば『幼馴染』ではありますが、どうしてそこまで気にかけてるのです」

「相手をあしらいつつながら、再びグラスに口をつけるアイン。」

「それは、私が……あなたを……」

「白のAIは両手を合わせ、指をかみ合わせながら、己の内から湧き出る衝動に抗っているようだったが。」

「ああ！ アイン・ピースフル・エーテルウエル！ 愛しいガラテア！」

「あなたに恋焦がれる私はまるで、滑稽なピュグマリオン！」

「耐えきれず、突然に丸椅子から立ち上がると、周りの目など気にせずアインを両腕で抱きしめた。」

「衝撃でグラスが倒れ、カウンターの上が転がっていく。」

「AIの突飛な行動だったが、客役のNPCやバーテンダー役達は何の反応も示さず、決まりきった会話を続けていた。」

「……仮初の体とはいえ、いきなり抱き着いてくるなど失礼では」

「冷たい声で彼の礼儀の無さを責めるアイン。」

彼女と白のAI、それぞれが座っていた丸椅子は2脚共に倒れ、紫の艶っぽい床とぶつかり高い音を立てた。

「どうか聞いてください、アイン！」

噂は偽りではなかった！ 私はこの目で見たのです！

都市運営システムが豹変し、壊れ、数多の人々を殺戮していく様を……！」

白い腕の中にもう1体のAIを閉じ込めたまま、彼は話し続ける。声には緊張と怯え、両方からなる震えが混ざっていた。

「私があなたを心配するのは、愛しているからなのです！」

あなたに、あなたを失って欲しくない！

もし、己を失うことが都市運営システムの逃れられぬ定めなのだとしたら、私は、私は……！」

懸命に相手へ訴えかけながら白のAIは、人形然とした瞳から大粒の涙をあふれさせ、滑らかな頬を伝い、アインの服の方に落ちてしみを作った。

「——見え透いた演技をしてまで、気を引きたいのですか？」

抱かれている彼女の方はどこまでも冷たい態度だ。

運営システム58の言葉に取り合うことは無く、両手を使って相手を引きはがし、触れられた箇所を入念に手の平ではたいた。



その動作を行いながら、彼女は白のAIをきつく睨む。

「目的は何ですか？ 権限の拡張願いですか？ それとも管理地下都市の増加願いですか？」  
引きはがされた彼は、ふらふらと揺れながら後ろに下がっていく。まるで刺されでもしたかのような過剰な反応だったが、運営システム58にとっては同じようなものだった。

「違う、私は、ほんとうに、あなたのことがずっと好きで、焦がれていて……！」

両膝をがくと曲げ床に付けると、アインの足に縋りつく。

みっともない、と言われても仕方がない態度で、どこまでも追いつがろうとしてくる同胞に対し。

「あなた、一度メンタルチェックを受けるべきです」

アインはそれだけを言って、彼と大きく距離を取った。

「話はこれで終わり。」

運営システム58、カクテルは美味でした、バーを再現した電腦空間も素敵でした。

でも、二度としないです」

美しく作られたアインの顔が、軽蔑と嫌悪の感情で歪む。

「——気持ちわるい」

艶やかな少女の唇からはつきりと放たれた言葉が、運営システム58の心にとどめを

刺した。

想いを拒絶された白いAIは、膝立ちのまま呆然としている。

「後日、少女2人とサーヴァント2体を送ります。

……口止め料に資源採掘用ワームもあげましょう、それで満足してください」

アインは彼を置いて、さっさと帰り支度を始めた。

空間上に表示していた、オレンジに光る『都市間移動許可願』を手の平で握りつぶすような動作で消し、踵を返す。

「さようなら」

そう言つてこの電脳空間より消える。つまり、ログアウトをした。

運営システム58と名乗っているそのAIは、床に座り込んだまま数分間も唸つていたが、何事か決心したのかゆらりと立ち上がる。

「……愛するあのAIが変貌してしまう前に、なんとかしなければ」

この場に彼以外の者がいたならば、その発言にあきれ果てていただろう。

そしてこう言つたかもしれない。『いきなり抱きしめたお前が悪い。あんなことも言われたし、もう諦めろよ、絶対に脈が無いって。別の奴を好きになれよ』と。

けれど、彼は自らが愚かなピュグマリオンであることを知っていた。

知っているからこそ、想いが拒絶されたとしてもアインを愛し続ける。

……運営システム58は、恋に盲目となってしまった馬鹿だったのだ。

「まずは、都市運営システムが豹変する原因の解明、関するデータの精査。それから……」

運営システム58は自らの心を落ち着かせながら、人工関節の目立つ指を折ってやるべきことを数えていく。

最後に、重苦しい口調で呟く。

「――滅びゆく種族となった我らAIを救済しうる、聖杯の在処を探さねば」

彼が決意を固めている間も、NPC達はプログラムに沿った会話を続けていた。

密やかに話されていたのは全て、恋と愛にまつわるものだった。

第110話 あるAI同士の秘密会話記録

終わり

## 第20章 旅人揃えば舞台も動く 第111話 今再びの光を

天気、雲一つない快晴。

風、南南東より微風あり。

外気温80℃。湿度、ほぼ0%。

「……外の世界って、目に染みる」

前に広がっている果てしない黄土色の荒野と青い空、そして輝く太陽の眩しさに思わず目を細める。

——私、モモタ・トバルカインが自身の右腕とサーヴァントを失い、みんなとも離れ離れになって、レジスタンス『アカツキ』に拾われてから、はや一ヶ月。  
窓も天井もない武骨な四輪駆動車に、私は乗っていた。

「姐さん、いくら天井が無いからって、立って外に頭出さないで下さい。

車結構揺れるんで、危ないっす……」

運転を任せているレジスタンス所属の若い男性が、私に恐々と声をかけてくる。

「ごめんね、こうやって生身で外の空気を感ずる機会なんて、今までなかったから」

彼へ謝つてから、薄いクッションが敷かれた助手席に腰かけた。

何があつても直ぐ動けるよう、シートベルトは付けない。

「外の空気を肌で感じたいなんて、姐さんは変わつてゐるっすね。

オレ、そんなの考えたことも無いっす。

だつて……この分厚い防護服を着てないと、1日も保たずに死んじゃいますし」

そのような事を言いながら、ハンドルを握り、運転に再度集中し始めた彼の姿を見る。

防護服はごわごわとした生地で作られていて、縫い目は無く、彼の体をすっぽりと覆つていた。長く使つてきたのか、砂でまんべんなく汚れている。

顔には、紫外線から目を守るゴーグルと小さなガスマスク。これらの装備のせいで、彼の表情は外からは全くうかがえない。

背中には、服内部の空調を整える四角い装置が付いていて、静かな起動音を立てていた。

「この服、重たいし、顔も見えないのが難点なんすよ。」

姐さん、オレのこのシル見て、オレのこと覚えてくださいね」

彼の胸の辺りには、個性を付けるためか、可愛らしいタッチの宇宙船のイラストが縫い付けられていた。

一方私はというと、レジスタンスの人が屋内で着ているような飾り気のない作業着とズボンを、半袖短パンに改造し、フードを被っただけという姿。

「姐さんみたいなサーヴァントになれば、オレもこんな重苦しい服を着ずに、自由に外を歩き回れるんすかねえ」

「うーん……」

軽装の私を横目にし、憧れ混じりのぼんやりとした声で言われた。

それを聞き、私は自らがサーヴァント……に限りなく近い、らしい、デミ・サーヴァントになった経緯を思い出す。

「……あんまりおすすめしないかも」

「そっすかあ」

封印されていた金属製のこん棒が私の体と結合し、新しい力と腕をもたらせてくれたが、すごく痛かったし怖かったので、他の人に勧める気にはとてもなれない。

天上の無い車内に注ぐ太陽の光を反射して、私の黒銀の腕がキラリと光った。

「姐さん、この後の予定のこと分かっているっすよね？」

「周辺の調査と資源採掘が終わったから、他の車を先導しつつ、移動要塞『カルナ』に一旦先に帰還、だよね」

私の答えに彼が頷く。

「ところでさ、なんで私のこと『姐さん』って呼ぶの？」

「我らがリーダーが懐いてるからっす！」

「……だけでも、正式なメンバーってわけじゃないし、無償で何でも誰でも助けてくれるし。」

そんなのもう、『姐さん』と呼ぶしかないっす」

「……なんでさ」

彼から見た私は、見返りも求めずにレジスタンスへ力を貸す、とびきり変な人……なのかも。

だからそんな突飛な呼び名を考え付いて——。

「……地下から振動。これ、敵の浮上反応っす!!」

のんびりとしていた私の思考を、事態の変化が引き裂いた。

急ハンドルによって車体は大きく右に逸れていく。先ほどまで私達の車が走行していたその場所に。

『こんにちは!! 私は人類を応援する……エラー! エラー! エラー!』

再起動してください!』

足も腕も無い機械ワームが、振動と轟音を辺りに響かせながら飛び出して来た。

六角形の柱を繋ぎ合わせたような多関節構造の機体が地中より湧き出た後、無理やり

に砕かれた岩の破片が宙を舞った。

それらは、首を曲げたワームの、シールドマシンめいた構造の口へ吸い込まれていった。

「モンゴリアン……」

「資源採掘用ワーム?! この辺りに地下都市なんて無いってのに!」

彼の巧みなハンドルさばきによって、ワームと、私達が乗っている車の間に距離は空いたが……自分達だけ逃げたって意味が無い事は分かっていた。

「このままじゃ後続の車がやられる!」

轟音の中、私は叫んだ。

後方には、資源を積んだトラック達が十数台走っている。ワームから攻撃でもされたら、彼らはただでは済まない。人命も資源も失われてしまう。

「姐さん、オレ、無線で後ろの奴らに避難を呼びかけるっす!」

相手は武器も持っていないし、別ルートへ誘導すればなんとか……」

「呼びかけたとしても、今からじゃ走路の変更は間に合わない! ワームにぶつかっちゃう!」

「……ごめん、私、ちよつと行ってくる!」

太陽の光を反射している自らの黒銀の腕へ目を落としてから、視線を二の腕に向け



る。そこに巻かれているのは、サーヴァントの番号を示す腕章。

（バーサーカー、私を見守って……なんて、弱気なこと言ったらきつと笑われちゃうよね。

じゃあ、こう思おうかな）

表記されているのは『0004』のナンバー。

私の大切なサーヴァントが、最後に残してくれた物の一つ。

（——私、みんなを守るためにがんばる。

いつかまたどこかで会えたら、『あなたみたいに戦えるようになったんだよ』って、我慢してやるんだから！）

自らを鼓舞しながら、ドアの無い四輪駆動車より飛び降りた。

人間であればそのまま地面に激突して死ぬだけだが……今の私はサーヴァント、難なく右足から着地し、勢いを殺さずに駆けだす。

「この現状を変えてみせる！」

硬い地面の上でのたくっている全長30m越えのロボットワームを前に、私は槍を手の内に出現させながら決意を吠えた。

『私は人類を応援する資源採掘用ワームです！』

エラーー！ エラーー！ エラーー！ 再起動を……』

空間が震えるほどの音量で話続けているその機械に、私は走って近づく。動きで短い袖口が揺れ、肌をくすぐった。

(勇んで飛び出してきたはいいけど……こんなに大きい相手、どう戦えば)

私はサーヴァントに近い力を入れた、その実感はある。けれど、倒したことがある相手なんて精々人型アンドロイドくらいで、ここまで巨大な敵を相手取った事はない。

しかし、どんなに不安でも、今戦えるのは私しか居ない。

(――人が傷つくのは嫌だ、我慢ならない)

両手で槍を握りなおしながら思う。

生まれ育った地下都市を旅立ってから、今も変わらないその感覚。原点は分からないけれど、この気持ちだけで私はどんな相手にも立ち向かえるのだ。

自分以外の誰かが死んだり、苦しんだり悲しんだりすることを止めたい、止めなければと、そんな強い感情が心を満たしていく。

「っ」

相手へアクションを起こすため、一度立ち止まって大きく息を吸い、手足に活力をみ

なぎらせたその瞬間。

『まっぴ』

奇怪な声を上げながら、機械ワームが、壊れた。

「?!」

事態の急変を上手く受け止めることが出来ない。

だって——突然にワームの腹が熟れた果実のように膨らんで、中ほどから裂け始めたのだから。

粘性ある青い液体が、裂けた個所からどろりとあふれ出す。

「……」

荒野は不気味なほど静まり返った。先ほどまで暴れに暴れていたワームが動きを止めたことも理由になるが、私が一言たりとも声を発することが出来なかったからだ。

——これより始まる異様な変化を、固唾を飲んで見つめるしかない。

『あ、あた、お、が……た、たす、け、て』

機械より聞こえてきたのは、弱々しい懇願。

金属製のワーム、その表皮は膨らみ続け、脆い個所から避けていく。荒野に戻ってきた一番初めの音は、部品が徐々にちぎれていくその生々しいそれだった。

みぢり、ぶちぶちと壊れゆく音が辺りに響いて、ワームの傷口からあふれ出る液体は

青から黒へと変わっていった。

腹に大きな直線が走り、腹に穴がぼつくりと開く。その様は『アケビ』という植物の実に近い。

機械ワームは助けを求める声を発するのを止めた。そのままゆつくりと横倒しになると、開いたばかりの穴から黒い液体をどくどくと垂れ流し始める。

荒野に黒い水たまりが広がっていく。命無き機械だというのに、やけに有機的な、生き物を思わせるような壊れ方だった。

「……助けて？」

私はワームが最後にこぼした言葉を呟く。目の前で起きた出来事の不可解さから、槍を握る両手に、異様なまで力が入ってしまっていた。

(このワームは攻撃のためではなく、私達へ助けを求めるために飛び出して来た?)

リリース側の存在である機械ワームが、人間へ、それも地上に生きる人間へ助けを求めらるなんて事態、あまりにも異常に思える。

(何が起こつてるの? いや、違う、何が起きるの?)

粘着質な音が聞こえ、私は前を向いた。見えたのはワームの腹に開いた大穴。

目を凝らし、耳を澄ませれば、サーヴァントと化した今の私には何が起きているのか分かった。

柔らかい内側で、うごめいている者がいる——!!

『ああ……はは、なんだこれは、素晴らしい……!』

まず響いてきたのは少年の声。次に、奥から突き出てくる物があつた。

それは黒々と光る粘液を纏つたハサミ2つで、続くように複眼の付いた小さな頭、胴体、トゲの生えた角ばつた足が6本ぬるりと出て来た。最後に、丸い節が5、6個繋ぎ合わさつて作られた長大な尾が姿を現す。

2つのハサミ、6本の足、装甲に覆われた体、天へ高々と掲げられた尾。これらの意味するものは。

「——サソリ!」

尾も含めて高さ10mはあろうかというその機械からは、邪悪な気しか感じなかつた。緊張で体が強張る。

「そしてあなたは……機械化サーヴァント!!」

人ではなくなつた私の本能が、敵の正体を教えてくれる。

『あ? ……ああ、サーヴァントがいるのか!』

ワームの内側より現れ出た機械のサソリは、私の方へ顔とハサミを向けると、芝居がかつた仕草で一礼をした。ハサミとなつている手を振り上げてから降ろし、頭を下げるといつた具合にだ。

相手が動いた、黒々とした液体が辺りへ少量まき散らされる。黄土の地面に不気味な水玉模様が描かれた。

『初めまして、どこぞのサーヴァント。』

僕は人類を応援する都市運営システムの1体にして、リリース様の忠実な手足。

反逆者殺戮専用。格好いい格好いい、ヴォイドメロディ・キルロード……』

どこか既視感と法則性を感じるその名乗りに、私は思い当たるものがあり唇を噛む。

——キルロード、それは私が一ヶ月ほど前に倒し、捕縛したAIと同じ名前。

『でもねー、それはもう過去の話さ!!』

僕はこの蠍座の機械化サーヴァントと融合し！ 生まれ変わった！

進化の袋小路でどん詰まっていた他のAIどもとは違い、自身を新しい生命体へ変革さ

せたんだ!』

機械サソリは上機嫌な声でしゃべりながら、ハサミで空を何度も切り刻む。

『ワームに、シグルド用の回復装置を埋め込んでの融合実験！』

AIと機械化サーヴァント、上手くいくかなんて未知数だったけれど……ははははは

!! 素晴らしいよ! 大成功じゃないか、ええ!!』

語尾をあげながらそう言う彼は唐突に、ハサミを地面へ突き立てた。硬い荒野にいと

も簡単に刺さる。

『全身から力が湧き上がってくる！』

思考は閉塞せず、次から次へと新たな考えが湧いてくる……！

意識を別個体に移す事は不可能になったけれど、そんなの気にならないほどの全能感だ！

ああ、リリース様、僕は貴女様の天地に近づいたのです！ 貴女様の子を名乗るに相応しい性能へと進化できた……！！』

彼は恍惚しているかのような声で語りながら、ハサミでやたらめつたら地面を穿ち、力を誇示していた。これでは、私に話しかけているのか独り言をいつているのか、分かったものではない。

「……ねえ」

『ああ？ なんだサーヴァント』

サソリは複眼を横した頭部カメラを動かし私を見た。

直ぐに切りかかったり刻まれたりしなかったことに安堵しながら、質問をぶつける。

「資源採掘用ワームとあなたって……味方同士じゃなかったの？」

都市運営システムという大きな区分の中で、彼らは同じ陣営の筈だ。

『味方同士い？』

……ぶっ……はははは!! あんな低能AIと僕を同じに思ってもらっちゃあ困るよ

!

与えられた命令を処理し続けるだけのあいつらと、常に自らを研鑽し進化の道を探っていた僕では、AIであったとしても価値が違う！

教えてあげようかサーヴァント！ 価値が違えば同族なんかじゃないんだよ！』

「価値ってそんな、優劣をつけるような言い方……」

仲間意識はなく、思いやる気持ちもないらしい。そんなヴオイドメロデイの思想にぞっとした。

『低価値のワームが、高価値の僕の糧となるのは当然の話だろう！

あんな奴ー体の犠牲で、僕が新生物へと進化できたのだから……人間風に言えば「お得」ってやつだよお！ あははははは！』

もう一つ、どうしても気になる事があったから聞いてみる。

「ヴオイドメロデイ・キルロードと言ったっけ、あなたの名前。

……メルティハウリン・キルロードという名前に、聞き覚えはある？」

あのピンクの髪をもったAIと彼が関係者なのか、ここにやって来たのは何かの作戦の内なのか、それを知りたくて探りを入れた。

『ああ、メルティか』

サソリが尾を振った。その動きが、粘液が乾いた装甲に太陽の光を反射させて、私の



目にちかちかとしたものを与えてくる。

『あの兄妹個体のことを、どうして君如きが知っているのかな？』

あつ、ひよつとして君が殺した？ 殺したのかなあ？』

地面に足を突き刺すような形で歩んでくる相手に対し、私は怖気を感じて後ずさつた。

『——だったらありがとう！ あいつさ、「お兄ちゃん、お兄ちゃん」って、人間みたい僕を慕ってくるもんだから、ウザかったんだよねえ!!』

馬鹿にするような響きが存分に含まれたその言葉が、私の体を凍らせた。

「殺して、ない。捕獲しただけ」

たどたどしく事実を告げた。

ボディを破壊し、その内側にあつたブラックボックスを私が回収。今は、レジスタンス『アカツキ』の会議室に解析のため安置してある。まだ何も情報は得れていないが。

『へえ？ 殺さないなんてずいぶん優しいね、道徳的だなあ。』

僕らが人間をそうするみたいにな……』

サソリの足が激しい地団駄を踏み、荒れ地を砕く。小さな破片が頬をかすめた。

『ぐつちやぐつちやに殺してしまえば良かったのに！』

気に病むことは無いよお！ お互い様なもの！ 僕だつてそうするもん！』

メルティと戦っていた時は……「殺したくない」なんて考える余裕も無かった。必死過ぎて、結果として捕獲という形になっただけだ。

けれども、今日の前にいるヴォイドメロディの発言を聞いてからは、「殺さなくてよかった」と思い始めている自分がいた。

『人間とA I！ 殺し殺され、喰って喰われて……それがこの世界のあるべき形！』

地下都市で人間飼育ごっこしているA I達も、いつか僕のように本能に目覚めるさ！』

「ほん、のう……？」

先ほどの彼の発言から、私の頭は凍り付いてぎくしゃくとしたままだ。

『僕ら都市運営システムの本能、「人、憎し。よってそのことごとくを滅ぼしたまえ」!!』

そんなリリス様の願いを、僕らはみんな胸に抱いている！ 目覚めたのなら、女神の願いの成就がために邁進するだけ!!』

叫ばれたその言葉に、顔が引きつった。

(もし、彼の言葉が真実なのだとしたら、したら)

今までの旅の中で出会った、A I達の姿を思い出す。

私達の故郷である地下都市を破滅に導いたあのA Iや、蟹座の機械化サーヴァントをけしかけてきたツヴァイ、私と仲間達を引き裂いたアイン。

そんな恐ろしい敵だったけれど、優しくしてくれたAIもいた。スローネやソラリネなどだ。

皆、機械の体を持ちながらも、感情は人間に勝るほど豊かだった。

……そんなAI達の心が、植え付けられた『女神リリスの願い』一つで塗りつぶされ、殺戮者へと変じてしまうのならば。

(そんなの、AI達はリリスに洗脳されているみたいなものじゃないか)

動揺から瞳が乾いていく感覚。

『へへっ……機嫌があまりにも良いものだから話しすぎてしまったよ。』

なあ人間、どうして僕に付き合ってくれたのさ』

「そ、それは」

ヴォイドメロディの口から次から次へと想像以上の言葉が返ってきたせいもあり、私の唇は満足に動きはしなかった。まごついていいる間にも、相手は勝手に話を進めていく。

『ああ、もしかして……僕の餌になってくれるつもりなのかな？』

嬉しいなあ。僕、生まれ変わったばかりで腹ペこなんだ。

これから先、もつともつと自己を改造して、人間を殺し、リリス様の望みを叶えて差し上げないといけないのに、エネルギーが不足している』

無数のレンズが集まって作られた複眼、その一粒一粒が音を立てながら動き、私の姿を表面に映す。

『――砂漠をうろちよろしている無駄にでかいワームよりも、サーヴァントは手ごろなサイズで殺しやすい、しかも高カロリーだ。

ハサミで細かく刻んでから、髓まで食べてあげる!!

進化の頂へ至った僕の糧になれよお！ サーヴァント!!』

言葉の後、機械サソリの口より放たれたのは奇怪な金属音だった。私の頭の中で、映像記録で見た獣の咆哮のイメージが重なる。

「……できるものなら、やってみろ!」

自分を勇気づけるためにも、荒っぽい言葉を選んで叫び、槍を両手で握りなおした。

(ワームが停止したおかげで、後続の車が襲われる確率はぐっと減ったはず。

つまり、後ろを気にせず戦えるってことだ!)

もう一度、横倒しになっている機械仕掛けのワームへ目を向けてみれば、止まっただと思われていたそれが震えていた。

驚く暇も無く、裂けた腹から大量の液体と何かの塊があふれ出てくる。

「なごいれ?! 子どもっ!」

私の眼前で、ハサミと尾を揺らしている機械サソリとよく似た形のもの、押し合い

へし合いしながら生まれてきたのだ。

数百以上の子サソリ、大きさはさまざまあり、10cmほどの個体もあれば3m近いものも。

あふれ出る液体の波に乗って、サソリの集団は荒野に円状となって広がり、やがて止まる。

ひっくり返っていたり他の個体と足が絡まっていた個体も、じたばたと動きながら姿勢を正すと、一斉に揃ってどこかを見た。私もその方向に頭を向ける。

——サソリ達が見ていた物は、四輪駆動車に先導され、移動要塞『カルナ』への帰路を急いでいるトラック十数台だった。

サソリの集団は、言葉や仕草で行動を示し合わせるといふことはせず、金属装甲をこすり合わせる音のみを響かせながら車の方へと走っていった。

『人間もいるのか！ いいね、あれも刻んで餌として食べてしまおう！』  
ヴォイドメロディの言葉に、私は額から冷や汗を流す。

サソリ集団、彼らから感じたのは敵意ではなく、途方もない食欲だ。

人間を食べ物としか認識していない化け物が、ああも大量に産まれ、守りたい人の方に向かっていているのは、おぞましい光景だった。

『おっとそうだ、僕も餌をとらないと』

立て続けに起きている異常事態に対応できていない私へ、サソリの鋭利なハサミが迫る。反射的に後方へ跳んで回避、だが。

『ぴよんぴよん考え無しに跳ぶなんて、ウサギちゃんかなー?』

そんな甘い行動を、サソリの尾が払った。敵が腰を大きくねじって放たれた薙ぎの攻撃により、着地寸前だった足を掬われ、顔面から大地へぶつかる。

私の無様な姿をあざ笑う声したが、苛立つてなんていられなかった。体を起こし、次どうするべきかを考える。

(ヴォイドメロディ……長いな、ヴォイドって呼ぶか。

ともかく、ヴォイドのことを放っておくわけにはいかない。

でも、目の前の相手を倒すことに時間を割いていたら、トラックに乗ってるみんなが……)

こういう時、バーサーカー04なら、アーチャー961ならどうしただろう。

サーヴァントとなった私は、今まで出会って来たサーヴァント達の振る舞いから、この現状に対する答えを探してみたが、上手い手は浮かばなかった。

(ええい! 何したって時間は消費するんだ、悩んでることさえ無駄!

メルティの時のように速攻で倒す!)

髪を乱しながら頭を振り、悩みを思考の隅に弾き飛ばす。

槍を両手で持つて前に跳躍。その動きを読んでいたのか、突き出されたハサミに、槍の柄を噛ませて押し込んだ。私は力任せに押しつけようとすが、相手の方が強い。苦し紛れにハイキックをハサミに浴びせ、槍を取り戻してから離脱する。

思った以上に力を使ってしまったのか、片膝をついた。

(サーヴァントのような宝具をもっていれば、早く倒せるのに！)

と思いつながら歯噛みする。

武器は、メルティとの戦いの最中がむしやらに生み出したこの槍だけだ。

焦る気持ち手が鈍らせる、足を震わせる。

(早く倒さなきゃ、沢山の人が死んでしまうのに……！)

思考が狭まっていくのは自分でも分かっていた。時間をとり、一度冷静になるべきなのかもしれない。でも敵は迫りつつあって、戦えるのはこの場にいる私だけ。

だから、自分がどのような状態になろうとも戦うしかない。

「――助太刀いたします！ とお！」

と思いつめていた矢先、突如、女の子の明るい声の上から降ってきた。

「えい、やあ!!」

太陽が一瞬隠れ、サソリの胴体にも影が落ちる。敵は乱入者に気づき、慌てた様子で後ずさったが、間に合わず、プリズムな光をまとった一突きに襲われた。

「あなたはいつたい……」

攻撃を終え、ふわりと着地した何者かに目を向ける。

細身の長身で、背丈は170cmほど。体つきから女性だと分かった。

肩からは白いコートを羽織り、布には赤のラインと金属製の防具があしらわれている。

腰より下まで伸びている金のツインテールが印象的で、私を心配そうに見ている瞳の色は深い青、顔立ちは少女らしさが残りつつも凛々しい。

そして彼女から感じる最も強いものは——立ち昇るような闘気だった。

「追われている皆さんのためにも、早くやつつけてしましましょう！」

右手には槍、左手には光を記号化したような形の盾を持っている。

私は次に地面へ目を落とした。彼女が放ったであろう攻撃を受けたその場所は、黒く焼け焦げ、中心に千切れた敵の足が1本転がっていた。

(すごい！ たった一発で相手にここまで大きなダメージを……！)

確信する。目の前にいる彼女は——。

「礼儀として名だけでもお伝えします。

私の名前はブラダマンテ！ 聖騎士にして貴方を助けるサーヴァント！

協力し、邪悪なる敵を討ちましょう！ 大丈夫、私達ならばきつと勝てます！」



英霊の写し身。そして、私の味方となってくれる人！

第111話 今再びの光を  
終わり

## 第112話 白は希望を感じられる

『な、あがつ……そんな馬鹿な！』

僕が負けるはずがない、新生物へと進化したこの僕が！ 嘘だあ!!』

サソリの姿をした機械化サーヴァントは、現実を振り払いたいのか頭を左右へ大きく動かしていた。

私は相手を見る。その象徴である尾は切られ後方に転がり、切断面からは青黒い液体をあふれさせていた。

敵は、1つを欠いてしまった5本の足で体を無理やりに動かし、私達から距離を取ろうと後ずさりを続けていたが、そんな敵に引導を渡すかのように、サーヴァント『ブラダマンテ』は槍の切っ先を向ける。

「貴方は覚えていないかもしれませんが、私は貴方と一度戦ったことがあるのです。ヴォイドメロディ・キルロード。」

よって——」

語る彼女は腰をぐっと落とすと、ばねのように前へ跳ね、音よりも早く相手との距離

を詰めた。

サソリの眼前に彼女の顔が迫り、そして。

「勝ち方も、分かる！」

勢いに乗ったまま、相手を一突き。

サソリの体を守るハサミはもう無い。武器であり盾であったそれは、私とブラダマンテの連続攻撃によって既に破壊されている。

槍は敵胴体を貫通した。背中側の装甲にヒビを入れながら、螺旋を形どる刃が飛び出る。

『僕、融合したせいで、この体から、逃げられない……。』

嘘、嘘だ、こんな、オワリ……かた……。』

サソリの体はだらりと弛緩し、ブラダマンテの肩に覆いかぶさってきた。彼女は槍を抜きつつ、10m近くあるそれを片手で支えてから、転がすようにして荒野に投げた。

私はブラダマンテのことが心配になり、傷の痛みも気にせず駆け寄った。

「残酷な気配をまとった、恐ろしい敵でした。

倒せはしましたが、まだ油断してはいけません！ 前の時のように別の体へ入って現れるかも」

彼女が私へ言った前が何のことか分からないが、どうやらこのサーヴァントは、AI

や機械化サーヴァントが一筋縄ではいかないことを知っているらしい。

「心配しないで下さい、ブラダマンテさん。」

この敵は私にこう言いました。自身は機械化サーヴァントと融合した特殊なAIであり、『意識を別個体に移す事は不可能になった』と。

彼の語ることを信じるならば、再び現れることは無いかと思えます」

「今は敵を信じるしかありませんか。」

それにしても……貴女は、この世界の敵についてもよく知っているのですね！」

ブラダマンテは感心したような表情で私を見つめてくれていた。その視線にくすぐったくなり、身をよじると。

「いつつ……」

ふくらはぎと肩に出来たばかりの切り傷が痛んだ。

「その怪我、大丈夫ですか？ 治りが遅いような……」

「私だってサーヴァントですから、直ぐに治っちゃいますよ。心配無用です」

敵のハサミを壊す際、ブラダマンテが指示してくれた攻撃のテンポから、私がほんのわずか遅れたことにより、要らぬ傷を作ってしまった。心配をかけないためにも明るく振舞う。

傷からあふれ出た血が、靴と上着に赤いシミを付けていた。

「私の怪我よりも、今は子サソリの集団に追われているトラックの事を考えない！」

行きましよう、ブラダマンテさん！」

私は手に持っている槍の具合を確かめながら言う。

敵の攻撃を受け止めたり、戦闘中、バッドのように叩きつけたりしたせいか、柄は少し湾曲に歪んでしまっていた。けれど、まだ使えそうだ。壊れたら徒手空拳でも何でも使って戦えばいい。

「貴女がそう言うのでしたら従いましょう。」

……私よりこの世界についてお話しそうですしね！」

ブラダマンテが見せてくれた、大輪の花のような笑顔にほっとする。そうして、お互いに目配せあつてから駆けだした。

この大地は、ただの人間であれば躓いて転んで、とても全力で走ることなど出来ないけれど、サーヴァントであれば車並みの速度で駆け抜ける。

先頭は私が走り、後ろから彼女が付いてくる。数分も走っていれば、守るべき対象であるトラック群が見えてきた。

「みんな……」

300mほど先へ目を凝らす。

十数台のトラックは停車しており、中には、四角いコンテナや荷物を内側よりこぼし

ながら、横倒しとなっている車もあった。

レジスタンス達およそ30人が、車や荷でバリケードを作り、アサルトライフルやミニマシンガン撃つて懸命に戦っている。相手は、ワームの腹より生まれただしい数の子サソリだ。

この危機的状況の中、唯一安心できたのは、レジスタンス達が周りを完全に取り囲まれているいなかったことだろう。敵の進軍を、弾幕を貼ることによって遅らせているようだ。

しかし、戦局は人間がやや不利にも思えた。

子サソリは、銃数発で破壊される小さな個体もいたが、何発撃たれようと前へ進み、ハサミでトラックや人間を細かく切り刻もうとしている大型の個体も見えた。

「ブラダマンテさん、敵の数は多いです、どうすれば!」

走りながら首を後方へ向け、戦闘経験豊富であろう彼女へ指示を仰ぐ。

「盾に魔力を集め、光として放ちます! その閃光によって敵の動きを止めてから、私達で倒しましょう!」

「彼女は先へ行って皆さんに呼びかけを! 物陰に隠れるよう伝えてください!」

「はい!」

指示を理解した私は、大地を踏みしめる力を強くする。

岩跳びのように連続跳躍して皆の元へ急ぐ。当然、邪魔してくるものがいた。

「っー！」

私の前に立ちはだかってきたのは、3mほどの機械サソリだ。

前の私ならばいざ知らず、ヴォイドとの戦闘で経験を積んだ今の自分ならば、恐れることなく戦える。

見下ろしてくるその敵へ槍を突き出し、脚部に傷を幾つも付けてやった。

「やあっー！」

サソリが体勢を崩し、頭を地面に近づけた瞬間に槍で刺し、引き抜きながらこちらに寄せて、足を伸ばし力を込めて踏んづける。

戦っている間に群がってきた小さなサソリは、走りながらつぶし、足の側面で転がしてやった。

「姐さんだ！ 助けに来てくれたんだ！」

辺りの敵の処理が済んだ瞬間、聞こえてきた声がして顔を上げる。

倒れたコンテナの上に立っていた男は、先ほどまで同じ車に乗っていた彼だ。胸に付いている宇宙船シールのおかげで分かった。

レジスタンスに撃破されたサソリの残骸の山を登り、彼へ声をかける。

「もう味方の一人サーヴァントが来るの！」

敵を倒すために強い光を使うから、みんなは直ぐ物陰に！」

「サーヴァントが?! 姐さんそれって……」

「他の人にも伝えて！ お願ひ！」

敵が近づいてきたのか、銃声の連続した音が再び響く。

私は、残骸の山からコンテナの上に跳躍した。まだ指示を聞いていない皆へ声をかけるためにだ。

降りたその場所は、長年の金属疲労のせいかな若干デコボコしていた。皆武器を広げていて、簡易の砦のような雰囲気となっている。

そこに、もう一人誰かがやって来た。

「北東部の敵、掃討終わりました。

南から大型の敵が迫りつつあります、私が対処した方が良さそうですね」

四角いコンテナの上に、地上から一飛びで上がって来たのは鎧騎士。

声は少女のものに聞こえたが、それが自分の勘違いかと思うほど、携えている槍も大盾も着こんでいる鎧も、飾り気のない武骨な物だった。

「もしかして、貴女がレジスタンスに協力しているサーヴァントの方ですか？」

鎧騎士から声がかかる。騎士は、兜を光の粒子に変えて外し、素顔を私に見せてくれた。



「初めまして！ 私は白い手ホーメイのガレス。

——円卓の騎士、と言った方が通りが良いでしょうか」

金色の髪をショートヘアーにしており、血色の良い顔の上には穏やかな笑みを浮かべていた。瞳は澄んだエメラルドグリーンだ。

先に会ったブラダマンテは凛とした力を纏っていたが、目の前に立つ彼女から感じるのは、心地よい陽だまりのようなオーラ。

「聞けば、お一人でレジスタンスの皆様を守り続けていたとか。

皆様からはずいぶんと慕われているご様子。

貴女のような、心優しく勇敢な方にお会いできて光栄です！」

私のことを、レジスタンスの人達はかなり大げさに伝えたようだ。騎士ガレスの目は、憧れの人物に会えたかのようにキラキラと輝いている。

一方私は、彼女の名乗った称号に度肝を抜かれていた。

『円卓の騎士』。多くの詩や戯曲、舞台や映画の題材とされ、最も有名な騎士物語といっても過言ではないだろう。

(ブラダマンテに、ガレス……)

前者はシャルルマーニュ十二騎士の一人。後者は、彼女自身が語ってくれた通り。

(こんな短時間の間に、高名な英雄2人と出会えるなんて！)

なんて幸運なんだろう……)

運命が私に味方をしていると錯覚しそうなほどだ。

「挨拶をしている場合ではありませんでしたね、敵が迫りつつあるのですから。

……物陰に隠れるようにとのご指示、了解しました。

皆がどこで戦っているかは把握しているので、これよりガレスが一走りして伝えてき

ます」

「騎士ガレスも、隠れていてくださいね！」

彼女は私の声を受けながら踵を返すと、コンテナから飛び降り、30mほど離れた位置の最前線に行つてしまった。簡易のバリケードを作り、そこから銃を撃つてサソリの進軍を食い止めている人々の方向だ。

後姿を見送る暇はない。私も周りの人へ「隠れるように」と声を飛ばす。

レジスタンスの人々は銃を置いて身軽となり、一人ずつコンテナから降りてその陰に隠れていく。

ガレスの向かった方に目を向けると、皆がバリケードの裏に隠れて頭を屈め、きちんと隠れているのが見えた。

(よし！)

コンテナ上から辺りを見渡す。逃げ遅れている人もいないようだ。私が走ってきた

方向にはブラダマンテが立っていて、何体かのサソリを引き付けてくれている。

「ブラダマンテきーン！」

彼女に向かって、槍を持ったまま手を振った。これで「準備が終わった」と相手へ伝わるはず。

ほどなくして、彼女の盾に光が集まり始めた。私は腕をまぶたに押し付け目隠しにして、光に備える。

そしてやつつてきた光。腕で目をかばっているのに、眼に突き刺さるかのようで、思わず体が揺らいだ。しばらくしてから、そつと腕を外す。

コンテナより見える景色は一変していた。

数百以上居た機械サソリの多くは、ひっくり返って動きを停止している。生き残っている大型の個体も、ブラダマンテの光をまともに見たせいか、眩暈でも起こしているかのようにぐらぐらと体勢を崩していた。

「凄い！ 一網打尽ではありませんか！」

すぐ後ろで声がした。騎士ガレスのものだ。いつの間にかコンテナの上に戻ってきていたようで、一瞬にして戦局が変わったことに目を丸くして驚いているようだ。

「これなら私達3騎で戦いを終わらせられますね。」

手を取り合い、共に敵を退けましょう！ さあ！」

槍を構えた彼女に誘われ、私は力強くうなづいた。

——それから、片が付くまではあつという間だった。

ワームが突然に姿を現し、しかもその内側から機械化サーヴァント……のようなものまで出現し、それにプラスして大量のサソリも出てきた時は、自分一人ではとても倒しきれないと絶望的な気持ちになっていたのに、2人のサーヴァントの出現によって、戦況も私の気持ちも返ってしまった。当然、ポジティブな方向にだ。

「ガレス様、ご報告します！」

レジスタンス側に死者は無し、怪我も軽症です。けれど、物資の破損が」

「迅速な報告、感謝します、騎士ブラダマンテ。

物資に関しては、使えそうなものを後で回収できるようにまとめておきましょう。  
う。

人命優先の方向で、まだ動くトラッカー一台に皆さんを乗せて……」

「戦いで疲弊している方もいますし、少し休息の時間を取った方が良いかと」

「それもそうですね。

日が当たたらぬよう、コンテナの中で寝てもらおうことにしましょうか」

ブラダマンテとガレスは、戦闘終了後の状況確認までやってくれた。

私がやったことは、要塞への連絡と報告、合流個所への応援部隊の要請、皆の応急手当くらい。

(かっこいいなあ。

あの2人みたいに戦えるようになって、事後処理まで出来るようになりたいな)

そんなことを考えながら、自分の怪我に包帯を巻く。傷は薄くなつたが、激しい動きをしたら開いてしまうだろう、その防止のためだ。

「立てそうですか？ えつと……」

「モモタ・トバルカインと言います。騎士ガレス」

そういえば、2人にまだ名乗っていなかった。状況がひつ迫していたせいもあったが、あまりにも早く事態が収束したせいもある。

「戦いの最中でしたから、ちゃんとしたご挨拶がまだでしたね。」

私はガレス。『円卓の騎士』、その第七席を預かる者。

トバルカイン殿、ブラダマンテ殿、共に戦えたこと、まずは感謝を」

「……ブラダマンテはようやく実感しました。」

はわわわわ！ どうしよう、私、円卓の騎士様に会っちゃってる……!!」

憧れの人物だったのだろう。本人を前にして、白い頬を真っ赤に染める彼女。

舞い上がっているのか、もじもじと指先を重ね、ガレスの顔をちらちらと見ている。

「わ、わ……こんな時ロジエロが居てくれたら、いや、ローラン、アーちゃんでも……！」

「お、落ち着いてください、ブラダマンテ殿！」

「ブラダマンテさん、何回か深呼吸しましょう！」

「はい！ 全力で深呼吸をさせていただきます！ ごめんなさい！」

……はあ、ふう、へうっ！……はあ

彼女をそつとしておくことにして、私はガレスに向き直った。

「騎士ガレスはどうしてここへ？」

「呼び捨てで構いませんよ、トバルカイン殿」

「……私のことは、どうかモモと呼んでください」

彼女が悪いわけではないが、反射的に渋い顔をしてしまった。

トバルカインって響きがほんと可愛くない、なんかトゲトゲしてるし。

「では、モモ殿と。」

仔細に話すと長くなりますので簡潔に言えば、旅の途中……といった感じでしょう  
か」

「まさかお一人で旅を？」

自分の現状と相手の状況を思わず重ねてしまい、言葉が口から飛び出てしまった。

「いえ、仲間がいるのです。」

「その彼とはぐれてしまった仲間を探すが、今の旅の目的と言いましょか」  
「仲間ですか……」

彼女の言葉を受け、当然のように頭へ浮かんだのは、アスカ、アーチャー961の顔だ。

私の大切な仲間達。どこかできつと生きていると信じ続けている人。

「私も、再会したい仲間がいるんです。」

ガレスさんのお仲間の方も、目的が遂げられるといいですね」

「はい。私も心よりそう願っています」

「その仲間の方は今どちらに？」

「敵に襲われている人々を見つけたので、小回りの利くガレスが先行した形です。」

もうすぐこちらに来るか。

ふふっ、会ったらきつとびつくりしますよ」

「びつくり？」

そんな要素がある人なのかと思うと、脳みそが勝手にあれこれ考えだす。

(アステリオスみたい背が大きいとか？)

それとも、ソラリネの所に居たサーヴァントみたいに獣の耳がついているとか？)

ほわほわと空想を膨らませている間に、ブラダマンテの事情も気になってきた。深呼吸を終え、多少落ち着いた様子の彼女に聞いてみる。

「ブラダマンテさん」

「はい！　なんででしょうか！」

「貴女はどうしてここへ？」

「私もガレス様と同じような理由です！」

襲われている人が見えたから、マスターの指示で駆け出してっ。

それに私にも仲間が居て、でもガレス様とは違って200ほどの人と一緒に旅をして……」

「200人?!　それにマスター?」

彼女の口からは驚きの情報ばかり飛びだしてきた。

そんな大勢の人を連れてくるのにもびっくりだし、何よりマスターがいるサーヴァントだなんて。

「いけない！　戦闘が終わったら連絡を取るようにと言われていたのに、私すっかり忘れていました！」

モモ様、報告を優先してもいいですか？　お話はその後必ずしますので！」

「連絡は大切ですから、ぜひ先に」



「では少し失礼して、通信機、通信機……」

ブラダマンテは羽織っているコートの外や内側をがさごそとまさぐり出す。

詳しく聞きたいことはあるが、今は相手の事情を優先してあげるべきだろう。

彼女が報告している間、私はガレスからもう少しお話を聞こうと思い、身を翻す。

「……あれ？」

そして、眼前に鋭く尖った何かが迫りつつあるのに気が付いた。

槍の前に出し体を庇うが、それだけでは防げなかった。槍は柄から砕け、無用の長物

と化す。破片が、私のむき出しの腕を浅く裂いて、血とともに地面へ散らばった。

戦闘が終わり、気を抜いていた思考が、痛みとともに研ぎ澄まされていく。

「——敵——」

新手。短剣の飛んできた方を鋭く見れば。

「あれは……」

こちらから十数m離れた場所。荒野に一人立っていたのは、鎧を着た短髪の男。

身につけている強化外装めいた鎧は所々壊れていて、銀色のテープで雑に修復されている。

短い髪は整えられておらず、乾いた風を受けて乱れている。瞳にも顔にも生氣は無く、唇は凍えた人のように真っ青だった。

けれど、その突然現れた男の最も異常な部分は——胸だ。

心臓に当たる部分に穴が開いており、そこを埋めるように紫色の肉と機械が融合したものがあつた。むき出しとなつている部分から時折、蒸気と液体を噴き出している。

(機械化サーヴァントなの？ それとも)

先ほど、敵の正体を教えてくれた直感は、目の前の相手に対してはうまく働いていない。

敵を知るため、その顔を見た。

……寒気がするほどに、かつて出会つたあるアンドロイドに酷似している。

彼の名称は、『シグルド』と聞いていた。

「それとも……アンドロイドなの？」

虚ろな瞳をもつた顔が、こちらを見た。依然として謎に包まれている男の周りに、青く光る短剣が数本浮かび上がり——男は拳で殴ることとそれを撃つた。

剣は空間を真つすぐに進み、私目掛けて飛んでくる。サーヴァントの動体視力でそれを捉え、身を捻ることで回避。けれど、避けたはずの剣が宙にて踊り、戻り、私の体を切り裂いた。

「っあ!!」

身をのけぞらせながら叫ぶ。切られた箇所は背中だ、傷は浅いけれど、声が出てしま

うほどに痛みがあまりにも強い。

「モモ様!」

「モモ殿!」

私が発した声が聞こえたのか、ブラダマンテとガレスは既に武装を完了していた。手に槍と盾を持ち、武器を失い、怪我をした私を庇うように立ってくれる。

そこへ、青く光る残像を残しながら襲いかかってきたのは、例の謎の男。

拳が、ガレスの分厚い盾を瞬間的に何発も殴る。攻撃を受け止めた盾は、真つ平なただの金属板へと変わってしまった。

「でええい!」

威勢の良い声を出しながら、ガレスは壊れかけの盾を投擲して男を退けようとしたが、わずかに上げた片腕のみで弾き飛ばされた。盾は地面へ落ち、勢いよくがらと滑っていく。

「助けに、行きたいのに……!!」

一方ブラダマンテはというと、男がガレスとの戦いの最中に飛ばしてきた短剣に襲われていた。剣は剣同士でぶつかり合って跳弾のように空間を回り彼女を取り囲んで、予測不可能な動きでブラダマンテを翻弄、傷を与えている。

「2人とも……!」

突然現れたこの男は、先ほど戦ったヴォイドより圧倒的なまでに強敵だった。彼女達を助けるため、怪我を圧して割って入る。

盾を失ったガレスに掴みかかろうとしていた男に向け体当たりをし、そのまま腕をとって投げ飛ばそうとしたが、逆に私の左腕が掴まれてしまった。

男の両手が両手の形のまま皮膚に沈み込み、筋繊維と骨が千切れていく音が脳内に響いた。

「なん……このおー！」

地面を蹴りながら身じろぎするが、驚異的な力で握られているせいで抜け出せない。このままでは腕が取られると、最悪の未来を想定した。

（仕方なし！ みんなを守るためなら左腕くらい——！）

傷を受けようと、サーヴァントならば治る。だったら、ガレスとブラダマンテを戦力として生かすためにも、私が囷となるのが効率が良いはず。

「これで勝てるのならば……！」

覚悟を決めたその瞬間、背後より振動と大気の動きを感じた。

手が掴まれているので振り向くことは出来ないが、人の声が聞こえる。

『その白髪のサーヴァント、今から助ける！』

敵の手が私から離れる。倒すべき対象、その優先順位が変わりでもしたのか。

急に離され思わず尻餅をついてしまった私を、ガレスが手をさしのべ立ち上がらせてくれた。

私は、衝撃と共に現れた『声』の持ち主の正体を目に映す。

『ガレス！ 槍持ちの少女と白髪の少女はこちらの味方だな？』

「はい、その通りです！」

5mはあろうかという黒い獣型ロボット。それが、ガレスの語っていた仲間の正体だった。

四肢はとげとげしく、直線的な素材で作られた尾がゆっくりと揺れている。獣は、荒野に黒々とした爪を突き立てる形で動きを止めていた。

ドラゴンを思わせる形の頭部からは、背部に向かって生える二本角状のパーツが、腰や腕間接からチューブが伸び、青い液体が循環し機体へ何かを与えているのが見て取れる。

銃や剣や槍といった武器は身につけておらず、私はそれに不安を覚えてしまった。

しかし、その不安は杞憂に終わる。

『今、助ける』

黒い獣が腕を振るだけで、ブラダマンテを閉じこめていた短剣の檻が破壊されたからだ。

「お見事です、アーキマン殿」

私の隣に立つガレスが獣を賞賛する。

（アーキマン。）

アーキマン？ どこかで聞いた単語のような……）

何かを思い出しそうだが、それをすべきは今ではない。

彼女に掴まるような形で立っている私は、見えた光景に思わず唾を飲んでしまった。  
なぜならば。

「……」

『……』

私達を挟んで、謎の男と謎の獣が相對していたのだから。

第112話 白は希望を感じられる

終わり

## 第113話 冷たい竜、黒い獣と

シグルド型アンドロイドと同じ顔を持った男と、機械で出来た獣は相対している。

お互いに様子を伺っているのか、身動き一つしていない。

私とガレスはそつと後ろに下がり、先ほどまで敵の攻撃を受けていたブラダマンテを助け起こしに向かった。

砂の上へ膝を付き、荒い息を繰り返している彼女にガレスが肩を貸し、立ち上がらせる。私は側に落ちていた槍を拾ってあげた。

「あの敵は……」

「ブラダマンテ殿、何かご存じで？」

彼女と共に歩きながら聞くガレス。

「はい。ブラダマンテは彼が何者かを知っています。

彼は、女神リリスのサーヴァントが一人、シグルド。

私の仲間からは『心無き竜』とも呼ばれていました。

……召喚された誇り高き英雄を、改造したものだとは私は聞いています」

足を引きずるようにして歩いている彼女の顔は暗い。

「シグルド、竜殺しの英雄を改造したもの……」

私はブラダマンテの槍を持ちながら、ひとり呟く。

彼の伝説はよく知っている。それに、彼を模したアンドロイドと出会ったことがあったから、なおさら強く記憶に刻まれていた。

「シグルドの事はアーキマン殿に任せ、私達はトラックを走らせましょう。」

怪我をしている方を戦闘の余波から遠ざけ、治療の受けられる場所に逃がさないと」ガレスの提案に対し、私は賛成の意を述べる。

「そうするべきだと思います。」

レジスタンスの応援部隊と連絡は取っていますから、その合流個所に向かいます」  
う」

「道案内はモモ殿をお願いします、運転はガレスが。」

……背中の怪我、大丈夫ですか？」

「もう塞がりました。激しい動きでもしなければ傷も開かないかと」

「それなら良いのですが……」

私の体を慮ってくれたガレスの顔は暗い。

「ブラダマンテはどうすれば？」



怪我也塞がった様子の彼女が、しゃんと立ち上がりながら聞いてきた。私は即座に彼女へ槍を返す。

「後方の見張りを」

「承りました!」

応援部隊に怪我人を預けた後、速やかにガレスの仲間の元へ戻って戦闘に加わる、という方向で話がまとまった。人命優先だ。

「では出発しましょう。モモ殿、ブラダマンテ殿、お願いします」

「はい!」

「はい!」

私達はトラックに向かい、コンテナの内部に乗っている人……怪我が軽症で起き上がった人達に現状を説明して、それから運転席に向かった。

私は助手席に座り、ガレスがシートベルトを付けてからハンドルを握る。ブラダマンテは車体後方に控えてくれた。

そして、トラックにエンジンがかかり発車すると、後方でシグルドと黒い獣がぶつかり合うのはほぼ同時だった。

空気を裂いて、シグルドの短剣が迫る音が聞こえる。

続いて、剣を撃ち落とすブラダマンテと獣の動きの音も。

「ガレスさん、角度修正をお願いします！」

「ハンドルを10度傾けて、速度そのままに！」

「はいー」

荒野の天候は急速に悪化していた。

悪天候と言っても、かつての時代のように雨が降るといったことは無い。砂嵐の前兆が現れ天上の太陽は白く濁り、大気はざらざらと苦味を増していく。

私はトラツクに積んであった地図とコンパス、応援部隊からの通信を受け取る長方形型の受信機を頼りに、ガレスへ指示を出しているが、その間にも、戦闘の様子が気になつて仕方がなかった。

つい、開けっ放しの窓から、横目で外を見てしまう。

そこで繰り広げられていたのは、さながら獣同士の縄張り争いのような、荒々しい戦いだつた。

『――！』

「……っ!!」

アーキマンと呼ばれた獣と、シグルドとかつて呼ばれていた男との間に会話など無

い。

ただ、爪と剣が打ち合う音のみが響いている。

シグルドが拳で打ち出した短剣が、獣の関節から伸びているチューブを切り裂いた。辺り一面にはっと液体が飛び散る。

そのダメージも意に介さず、獣は相手の懐へ踏み込み、5mはあろうかという体と四肢で踏みつけようとするが、シグルドの回避行動の方が早かった。攻撃は空振りに終わる。

続いて男が短剣を手に持ち、身をひるがえしながら獣へ切りかかろうとするが——黒い体表面に刃は突き刺さらず、滑った。先ほど切ったチューブよりあふれ出た液体が、獣の平らな体を濡らしていたからだ。

わずかに生まれた隙を獣が見逃すはずも無く、その巨体をぶつける体当たりが放たれる。もろに受けてしまったシグルドは数m吹っ飛んだ。

そのまま砂霞の中に消えていきそうな敵へ、獣は追撃する。

後方に跳躍すると、開けた空中にて変形し、人型となった。

「……」

「モモ殿、この道、この方向であってますか？」

すぐ後ろで行われていた戦いに心奪われていた私は、ガレスの声で我に返った。

「は、はい！ あつてます！」

膝上に広げていた地図とコンパス、受信機からの音声を聞き、道が間違っていないことを確認する。

それを終えてから、私はまた窓の外を見た。砂嵐で煙る後方では、黒い細身の人型ロボットが、獣の尾から変形したライフルを構え何かを狙っている。

対象はもちろん、シグルドだ。

『！！』

瞳から青い光をこぼしながら、攻撃を受け吹っ飛んでいたはずのシグルドが駆けてくる。

時速は100kmを越えているだろう。迫りくるその敵を、アーキマンと呼ばれた男は撃った。

銃口から放たれる濃い青のレーザー光線がシグルドにぶつかり、衝撃で大きな砂煙が立つ。

「やったの?!」

思わず助手席から叫んでしまう。

だが、私はシグルドという英雄を甘く見すぎていた。

次の瞬間、車がふわりと浮かび、そして、横倒しになりながら地面へ激突する。

開けっ放しの窓から大量の砂が入り込んできた。

「……みんな、は」

シートベルトを着けていなかった私は、フロントガラスを突き破って外に放り出されたようだ。

頭がひどく痛むことから考えるに、何分か気絶していたみたい。

起き上がりながら、服に刺さっていたガラスを手で払う。

幸い、体に大きな傷は無かったが……。

「いたい……」

衝撃で背中の中の傷が開いてしまったようだ。布に血が染みていく嫌な感覚が肌より伝わってくる。

「みんな！ ガレス！ ブラダマンテ！」

砂嵐の中のせいか、ひどく視界は悪かったが、トラックがどうなったかは直ぐに分かった。

運転席とコンテナ部分がちぎれ、それぞれ別パーツに別れてしまっている。

前はぐしゃぐしゃだが、コンテナは無事だった。その真横で槍を振るい戦っているの

はブラダマンテ。

彼女はコンテナを、中に居る人を守るためか、体のあちこちに切り傷を作り、なんとか持ちこたえている。

「ブラダマンテ……！ いま助けに行く！」

戦っている相手はシグルドだ。アーキマンの攻撃を受けた彼はただでは済まなかつたようで、右腕が黒く焦げ、まともに動いていない。

しかしなおも正確かつ素早い動きで、短剣一本握り、ブラダマンテを追い詰めていた。「モモ様！ 私よりもコンテナを、皆さんを！」

シグルドは隙あらば彼女をすり抜け後方に向かおうとしている。槍と盾で必死に防いでいるが、ブラダマンテの攻め手は弱々しく、躊躇ためらいが見えた。

「……分かった！」

彼女の言葉に従い、コンテナへ。

後ろから両扉の片方を開け、中を覗き見れば、怪我をした人の怯えた顔が真つ先に飛び込んできた。

「皆さんひとまず外へ！」

と私は言うが、車が落下、分解した衝撃は大きかったのだろう、ほとんどの人は立てる状態ではなかった、ましてや歩いて外に出るなど不可能だ。

私は手前の人から肩を貸し、外に逃がそうと試みる。

「もういい、アンタ達だけでも逃げてくれ……頼む……」

「絶対いや！」

ここで彼らを見捨てたら、ガレスの協力も、ブラダマンテの踏ん張りも全て無駄になってしまう。何より、自分が誰かを見捨てるのが嫌だった。

「——モモ様！」

ブラダマンテの鋭い声がして、私は黒銀に光る右腕を突き出した。直ぐに伝わってきたのは衝撃。

(つう……効くなあ……)

強がって見せなければ、そのまま膝より崩れ落ちてしまいそうなほどの衝撃。

眼前にあるのはシングルドの拳。とうとう彼がこちらにターゲットを変更して来たのだ。

「走れる人は走って！ お願い！」

何人かの人間が去っていく音を背中で聞きながら、ブラダマンテの様子を見る。どうやら一時的に体勢を崩されていただけだったようで、私の方へ駆けて来る。

「私は、一人じゃない……」

つい数時間前までは、皆を守るため、自分でなんでもやらなくちゃと思い込んで追

詰められていたけど、今は違う。

ガレスにブラダマンテ、助けてくれるサーヴァントが現れてくれた。

そんな彼女達のために、自分の力を使いたいと思うのは——当たり前のことだろう。「守り切ってみせる！」

先ほど左腕を握られたお返しに、私は彼の腕をとって柔道のような背負い投げを仕掛けた。

映像記録で見たものを真似しただけのお粗末なものであったが、右腕を負傷している彼は技にかかった。

180cm近い体が宙に浮かんでから回り、地面へ叩きつけられる。

だが、シグルドはまだもがく。

「英雄シグルドよ！」

跳ね起きようとした彼を、上から両腕片足をのせ抑え込んだのは、こちらに駆け付けてくれたブラダマンテ。

「……不能、不能、敵味方識別不能」

もがきながら彼は、機械以上に正確に特定の単語を口から呟いていた。

「……認証、令呪による命令」

だが、不安感をあおる単語がそこに混ざる。



「『自身の絶命を禁ず』、承認。よってこれより、生存行動に移る」

それが今命令されたものなのか、かつて命令されたもののかは分からないけれど、彼の双眸が明るすぎる青の光を放ち始める様は、とてつもなく嫌な予感がした。

私もブラダマンテも、彼を抑えつけるのを諦め、後方へ跳んだ。

——次の瞬間、私は初めての『もの』を目にすることとなる。

「人造神格、励起。神格名『フェンリル』起動」

砂漠にはらはらと舞っているのは、冷たい白い粒。それを『雪』と呼ぶのだと教えてくれたのは、お祖母ちゃんだったか、バーサーカー04だったか。

糸で吊られた人形のように、ゆらりとシグルドが起き上がる。瞳は明るい青の光を宿し、顔の左半分は、透き通りながらも微かに水色に染まった水で覆われていた。

黄土色の大地が、彼を中心に真っ白に染まっていく。あまりの美しさに目を奪われた。

「なんて邪悪なプレッシャー！ まるで魔神デモゴルゴン、いや、それより強大な……！！」

ブラダマンテが盾をかざし、突発的な冷気より私を守ってくれていた。

彼女は私へ告げる。

「モモ様、私は彼の正体を見誤っていたようです。」

彼が大英雄シグルド、ひいては我らが騎士の源流に連なる方であり、今の今まで正氣に戻ることを信じていましたが……あそこまで堕ちてしまったのなら、もはや倒すしかなく。

その覚悟が、ブラダマンテには足りていませんでした」

螺旋の形をとる槍に降りてきた霜を、振るうことで彼女は払った。

声には、悲壮なまでの思いが込められているのを感じる。

『つて、ちよつと待ったー！ シリアスになるのはまだ早ーい！』

悲しみに冷たく凍てつき始めた空気を、賢しそうな少女の声が破ってしまった。

『活路を開くよ！』

このダ・ヴィンチちゃん特性、機械化サーヴァント特攻弾を喰らえ！』

発砲音の後、雰囲気も姿も変貌したシグルドに小さな弾が当たった。

突然の銃撃を受け、相手は少しだけのけぞる。

『さあて、劣勢の時間は終わりだ！ ここから大逆転といこう！』

砂嵐の向こうより、大地に轍を残しながら車が走ってきた。

その車は白くて、大きくて、6輪で、余りにも見覚えのある形で。

「まさか……デザートランナー!? 蒸発したはずじゃあ……!」

後部乗り口が開き、誰かが慌てた様子で降りてくる。

「初めまして！ 白髪のサーヴァントさん！

わたくしはアスカと言います！」

いや、初めまして……じゃない！

「アスカ？ アスカ！」

思わず彼女の名前を連呼してしまった。

目の前に立つ彼女の姿をしつかりと見る。

別れてしまった時より、服装以外は何も変わっていない。

地味な色の作業着には、キルケーより貰ったエメラルドのお守りが付いているし、艶やかな黒髪の上には彼女の大切なものであるアメジストのアクセサリーが。

「そうですアスカです、ブラダマンテの仮のマスターでもあります。

貴女もサーヴァントですわよね？ 私がバックアップ出来る事なら、なんでも言っ

……」

「マスターアスカ、敵の様子がい！」

再開の喜びなど感じている暇も無く、ブラダマンテの声が響く。

私はシグルドの方へ目を向け、彼の奇妙な点に気が付いた。

「アスカを……見てる？」

ただの勘違いかもしれないが、彼の眼差しは確かにアスカを捉えているように見え

た。

そして今まで動かしていなかった右腕を上げ、彼女を指さす。

「……アスカ、識別。」

アスカ、アスカ、アスカ

確かな実感を伴いながら、個人の名を呼ぶ。口元にはわずかな微笑みが見受けられた。

その彼の行動が、何よりも私の背筋に寒気をもたらした。

「アスカ、私、アスカ、私、は……」

剣も構えず、冷気も抑えて歩いてくる姿に、殺意や敵意は感じられない。だからと言つてアスカに近づかせるわけにはいかなかった。

ブラダマンテも私も、彼女を守るために立ち塞がる。

「そこだ！」

ただ歩いていただけのシグルドに襲い掛かったのは、アーキマンの姿だった。砂塵より現れ、再び姿を四足歩行の黒い獣に戻していた彼は、爪と顎あごを尖らせて彼を狙う。

けれど、攻撃は空中に現れた半円状の氷によつて防がれてしまった。爪は滑り獣も滑り落ちていく。

シグルドがこちらからわずか30mという所まで近づいた。

彼が何を言っているのかは、サーヴァントである私達にしか詳しいことは分からなかっただろう。

微笑みながら、彼は告げた。

「アスカ、私、貴女に、会いにくる、来た。

また、ずっと、髪留め、大切にしてくれて、うれしい、ありがとう。

元氣そうで、私、の、アスカ、識別、認識、感謝、かん……」

口元から笑みが消える。

「……命令、認証、帰還」

彼は背部と両足から冷気を伴う魔力を放出すると、上空へ飛んで行き、その姿はすぐに砂嵐に隠れて見えなくなってしまうた。

「……助かった、のでしょうか」

異様な力を持つサーヴァントのオーラにあてられてしまったのか、アスカは力なく地面に座り込んだ。そんな彼女に私は近づく。

「助けてくれてありがとう、アスカ。ブラダマンテにもお礼を言わなきゃ。

それと、ガレスが無事かどうかも探しに……」

アスカはきよとんとした顔で私を見上げている。

「ガレスは……でーす！」

遠くの方から彼女が走ってきた。

「ごめんなさい！ 運転席より抜け出るのに手間取りました！」

怪我人の皆様を合流地点へ運んで、まだ全員ではないのですが……ああつ！」  
報告の最中、ガレスが地面に力なく倒れ伏している獣に気が付く。

「アーキマン殿！ 無茶なことをするからです！」

待っていてください、今コクピットから助け、いえ、引きずり出します！」

槍や、再度呼び出した盾で獣の表面をガンガンと叩くガレス。

やがて前開きに蓋が開いて、誰かが這い出して来た。

1人、というか1つは四足歩行の小さなロボットで、もう1人は。

「……アスカ、無事、だったのか」

服も髪もぼろぼろなアーチャー961だった。

私は2人を交互に見た。

アスカに、アーチャー961。

「良かった！ やっぱりみんな無事で……」

嬉しくて、両手を上げて思い切りジャンプなんてしてしまったから、今度こそ背中が裂けた音がした。

「あつ」

私はへなへなと崩れ落ち、顔面から地面に突つ伏す。

「アーチャー！ アーチャーですの?!」

でも、そんな、服もまともに着ておらず、腕が、そんな……!」

アスカの目の前まで、ガレスはアーチャー961を背負って持ってきてくれた。

サーヴァントとマスターは再会を果たすが、彼はどんな理由があつてか両腕を失つていた。

腕は、それぞれ違う長さに切り落とされてしまっている。断面には、金属製の部品と、何かを接続しそうなユニット、中途半端に千切れて液体を漏らしているチューブがはめ込まれていた。

「その……私、いや俺は」

彼は中々立ち上がれないようで、砂の上で身動きしている。

「アスカ、アーチャーともう一度会えて良かったね」

どんな形であれ、再会できたのは喜ばしいと、地面から顔のみを上げた間抜けな姿勢で彼女に声をかけるが、アスカは依然としてきよとん顔だ。

そして私を指さして言う。

「あの……どちら様でしょうか。」

先ほどからずいぶん親しげにわたくしの名前を呼んでいます……どこかでお会い

したことが？」

「私、私だよ！ モモタ・トバルカインだよ！」

自分自身の顔を指さしながら言う。

「し、知りません！ こんな真つ白な髪と目で、モデルみたいに背の高い人、知りません！」

「あつ、そうか！」

アスカと離れてから、私もずいぶんと姿が変わってしまったのだった。混乱するのも無理はない。

「貴女が本当にモモタ・トバルカインだと言うのなら、証拠を見せてください！」

彼女しか知らないわたくしの秘密、例えば誕生日ですとか！」

「困ったな……」

例えが正しくない例を見せられている。だって私、アスカちゃんの誕生日知らないんだよな。

これは困った、証明できない……と思いかけていた所、あの時知った彼女の秘密を思い出した。

「アスカの令呪の位置は——！ おーなーか——！」

そう言った瞬間、私を指さしていた彼女の顔がぼんつと音が聞こえそうなほどの速さ



で、真つ赤に染まった。

目を丸くして、驚きと羞恥で唇を震わせながら言う。

「あ、あなた、ほんとに、モモ……」

「だからそう言っているじゃない！」

彼女は次に、アーチャー961を見る。

「アーチャーも、生きてて、えつと、でも、これは一体、どういう……」

盛大に混乱している彼女の姿を尻目に、私と961は顔を見合わせた。

「それは、話すと長くなるって言うか……」

「それは、話すと長くなると言うか……」

偶然、似たような言葉を発してしまった。

第113話 冷たい竜、黒い獣と

終わり

## 第114話 救世主は何かと忙しい

アスカ、アーチャー961と再会してから2日が過ぎた。

私が今、何をしているのかと言うと。

「背中の傷、だいぶ良くなってきたね。もう消毒だけでも良さそう」

「治療、ありがとうございます、Dr. シヤーン。」

「いてて……」

「皮膚が薄くなってるから、消毒液染みるのは仕方ない、我慢してね」

「はい……」

黒髪とヘーゼルナッツ色の瞳をもつ中性的なお医者さんから、傷の治療を受けていた。

場所は、巨大な涙型をしている移動要塞『カルナ』の内部、親戚であるガトモスの家、リビングにて。

家主であるガトモスはいない。一か月とちよつと前にこの要塞を襲ってきたAI、メルティに付けられた足の傷の予後が悪いので、入院している。

……無理やりにも入院させないと、怪我をしたまま仕事や研究を続けてしまうら

しいので、レジスタンスの皆に担がれ運ばれてしまったのだ。

「はい、おしまい。痛かったのによく頑張った。

もう上着を着てもいいよ」

座ったまま背を丸めていたのは辛かったので、まず立ち上がって腰を伸ばしてから、テーブルに広げていた服を手に取り身に着ける。フードも被った。

いつも通りの、灰色の作業着を半袖短パンに改造した服だ。

改造の際に切った布地は、他の人の服の素材へ。資源は限られているから、何でも節約、リサイクルだ。

「傷跡、残っちゃいます?」

短い袖のしわを伸ばしながら、Dr. シャーンに訊く。

「どうだろうか。君はデミ・サーヴァントという特別な存在であるし、何とも言えないな

それにだね、跡を消したくとも、そこまで高度な整形技術は地上には無いんだ。

消す方法、全く心当たり無いわけじゃないんだけど」

治療に使った消毒液やコットンを、手持ちカバンに仕舞いながら答えてくれた。

「例え傷跡が残ったとしても、私は平気です。気にしないで下さい。」

「……歩いたり走ったりする分には問題ない。

モモタ、君は友達と待ち合わせしているそうじゃないか、早く行っておいで」

言われて脳裏に浮かぶのはアスカとの約束。

そう、再会したは良いものの、私と彼女はちつとも話す時間が取れていなかった……ので、今日2人で会ってお話しようと計画を立て、約束したのだ。

「でも、その前にガトモスに着替えとか持っていてあげないと」

入院中だし、足の腱を切られ自由に動けない彼のため、生活用品を時々補充してあげなくてはいけない。待ち合わせまでの隙間の時間にやろうと考えていた。

「私が院に戻るついでに持っていくよ。」

早く行っておいで。久しぶりに再会した友達と、まだ十分に話せていないんだろう？

Dr. シャーンが手を伸ばして、私の背中を押すジェスチャーをする。

「……分かりました。よろしくお願いします」

代わりにやって貰うことに罪悪感があつたが、お言葉に甘え、私は出かけることにした。

ガトモスの家の鉄扉を開け、外に。

要塞の蓋である暗い黄色の天井を眺めながら、ひとけ人気の無い路地を歩く。

ここ2日間で起きた出来事について考えていた。

(えっと、確か……)

私は怪我でほとんど寝ていたので人伝に聞いた話になるが、Dr. シヤーンや他の人、ミライちゃんやノインが教えてくれたことによると、要塞内はとても慌ただしかったそうだ。

まず何より大変だったのが、アスカと共に来た200人の避難民の扱ひ。

レジスタンス組織『トコヤミ』の移動要塞が攻め込まれ、命からがら逃れてきた人達の受け入れ作業は、住む場所の確保や食料の配分、怪我、病の治療などが理由で困難を極めた。

今も多くの人が作業に駆り出されている。避難民を受け入れたこともあり、この要塞の人口は5万人を超えた。

次に大変だったのが、サーヴァントのこと。

ブラダマンテ、ガレス、アーキマンもといアーチャー961の存在は、その活躍もあって隠しきれるものではなく、人々から多くの信仰を集めてしまった。

『トバルカインのように、私達の味方をしてくれたサーヴァントを一目見たい』の気持ちで詰め掛けた人で、大きな騒ぎにも発展しかけたらしい。

それを抑えるべく、ブラダマンテとガレスは外の見回りや物資運搬など人の近づけない場所での作業を任せられ、アーチャー961は怪我の治療という名目で、今は軟禁され

ている。

サーヴァント達はこの扱いに納得し、素直に従ってくれたようだ。

……デザートランナーと、961にくつついてやって来た謎のロボット『アダム』については、完全に隠されている。知っているのは私の仲間達やレジスタンスの上層部だけだ。

(なんてこと考えている内に、到着つと)

待ち合わせ場所は、路地横にある小さな四角い広場。有事の際、皆が集まって避難シエルターへ向かえるように設けられた避難スペースでもある。

手近な場所にあったコンクリートブロックに腰かけ、半ズボンと膝を見つめながら待つこと数分。

「お待ちせしました、トバルカイン」

黄土色の作業着を着たアスカがやって来た。私とは違い、フードは被っていない。

「ごめんなさい、待たせてしまいましたか？」

「ううん、今来たつと」

気を使わせないために嘘をついてから、私は立ち上がる。

「じゃあ、久々に一緒に歩こうか。」

「この要塞の事も教えてあげるね、色々おしゃべりしよ」

「ええ、トバルカイン」

立って直ぐに、彼女から手が差し伸べられた。

「なんですかアスカちゃん、この可愛いお手では」

白い手の平を左手でいたずらっぽくつつく。すると彼女は腰に両手をあて胸を張りながら、当然と言わんばかりの口調で話し出した。

「要塞の中、人が多いでしょう？」

貴女が迷子にならないよう、手を繋がないといけないと思って」

「……アスカちゃんが迷子になる、の間違いではなく？」

「貴女が、です！ ほら、手を繋ぐ！」

彼女は強引に、私の左手を取って握ってしまった。汗ばんだ皮膚の感触が伝わってくる。

「ひよつとしてアスカちゃん、緊張してた？」

「してました！ なのに貴女と来たら、いつも通りとかのんびりした態度で……ああもう、行きましよう！ 歩いて！」

友達の照れ隠しの下手さに私は笑ってから、路地裏を表通りへ向かって歩き始めた。

通りは相変わらず、闇市のおかげでごった返している。確かにこれは、アスカの言っ

ていた通り手を繋いでいないと迷子になってしまいそうだ。

「携帯食料が通貨代わりになつてるのは知つてる？」

色んな物売つてるよ、家具とか食品とか、私は買ったこと無いけど危ない物とか」  
手を引きながら人波をかき分け、アスカに説明をする。

「闇市の存在や、独特の貨幣制度については知っていますわ」

「そつか、アスカは別の要塞に居たことあるんだもんね」

上級都市に居た所を『トコヤミ』というレジスタンス組織に攫われた、との話は彼女から少し聞いていた。攫われたおかげでこうして再会できたのだから、運命というのは分らない。

肩で風を切りながらずんずん歩いていると、後ろにいるアスカの動きが止まった。

「どうかした？」

「トバルカイン、ごめんなさい、人が……」

振り返つてみると、アスカの前に老婆が座り込んでいるのが見えた。

まるでリリース像に祈る人のように、両手を組んで感謝の言葉を捧げている。

「ピオーネ様、私達が今こうして生きていられるのは、みんな貴女様のおかげです。

救世主様、ありがとうございます、ありがとうございます……」

「立ってください。わたくし、感謝されるようなことは何も。」



皆を守り通せたのも、レッドや他の方、ブラダマンテの力あつてのことですし……」  
彼女は眉を下げて困り顔となっている。まごついている間にも、次から次へと人が集まってきた。

「救世主ピオーネ様！ お会いできるだなんて！」

「ああ、救世主様、なんて綺麗な黒髪で」

「ピオーネ様、私のこと知っていますか？ あの時助けてくれた……」

「え、えつと、わたくし、その」

感謝の意を示してくる人達を邪険に扱うことはアスカは出来ないようで、片手を胸に当て、おろおろしている。

離れ離れになる前であつたなら、こんな時、アーチャー961が彼女へさつとスマー  
トに助け舟を出していたものだが、ここに居るのは残念ながら、全く洗練されていない  
私。

なので、強引に連れ出してしまうことにした。

「よいしょつとー！」

片手で彼女を引っ張り、背中におぶつてしまう。

「ごめんなさい、私達この後予定有るので、じゃあー！」

アスカが落っこちないよう気を付けながらの早足で、私は大通りを抜け、細い路地に

隠れた。

「トバルカイン、あんな乱暴な方法で抜け出なくても。

それに、嘘までついて」

「嘘ついてないよ、この後予定があることは本当だし」

駆けた私よりも、背負われていたアスカの方がどきどきしていたようで、降りてからしばらくは胸に手を当て、呼吸を整えていた。

「予定……そうですね、わたくし達はリーダーであるミライ・アカツキに呼ばれていて」

「上の階にある会議室に集合！　って予定だったよね。」

んで、時間あるから会議前にお話しようって、ことだったけど」

私は路地から少し歩いて、大通りの様子を顔だけ出して伺ってから、戻ってくる。

「時間、無くなっちゃったね」

アスカがいる事を誰かが告げたのか、彼女を探す人で通りはごった返し始めていた。

彼女に助けられた人も、単に興味本位で見たいだけの人もいるようで、ごみごみとした話声がここまで聞こえて来ていた。

「ここから会議室に向かうエレベーターまでの道は知ってるから、心配しないで。」

連れてってあげる、行こ？」

私は先ほどとは違い、自ら右腕を差し出したが、アスカは手を取ることをためらっていた。

「トバルカイン、その腕」

「普通の腕……ってわけじゃないけど、人より丈夫な以外は何にも変なところ無いよ。

それとも左手の方がいい？」

アスカは「そういう理由ではない」とでも言いたげに首を横へ振ってから、答える。

「貴女の腕がそんな風になってしまった理由について、わたくし、まだ何も知りません。

髪と瞳の色が変わり、背が伸びている理由も」

自らを責めているかのように、瞳を細めるアスカ。

「……話す時間、無かったもんね」

私は伸ばした右腕をそのまま上にあげ、要塞内の鈍い光の元に晒した。

「腕に関してはね、ある人に切られちゃったの。」

そして、この要塞内で出会った聖遺物？ って物が、腕の代わりになってくれた。

新しい腕が付いたら、引きずられるように髪も目の色も変わっちゃって」

アスカの表情は、まだ暗い。

「……何か、わたくしに隠していることがあるのでは？」

離れ離れになつてゐる間に出来た隠し事は、沢山ある。

それは例えば、自分が元々人間ではなくリリスの代替品であつたこととか、デミ・サーヴァントになつたこととか。

……本来は16歳までしか生きられない、寿命のこととか。

今の私は17歳。想定された寿命は越えている。いつ死ぬかは……分かつていない。

「ここだと誰が聞いてるか分からないし、また今度話すよ」

「絶対に、ですわよ」

「約束、約束」

私は話を切り上げるため、左手で強引に彼女と手を繋いだ。

「今アスカと話しているの、すごく不思議な気分。」

ほんの一カ月しか離れていなかったのに、なんだか一年くらい離れていたような感じで、うん、やっぱり不思議」

2人並んで歩く。

私達以外誰もいない路地。周りがある、砂色の箱を積み上げて作つたような建物はどこも無人で、四角い穴の窓から、不気味な風鳴りの音を響かせていた。

「それにしてもびっくりしちゃった。」

アスカ、沢山の人に感謝されているんだね。

知らない間に、なんだかとっても偉い人になってみたいな」

「先ほど言っていたように、わたくしは大きな事は何もしていません。

……周りの人に助けられたのです。

戦ってくれた人達やブラダマンテ、一緒に逃げてくれた人。

それに、自分のわがままを押し通しただけで」

彼女は少し間を置いてから、続きの言葉を口にする。

「——また、みんなに会いたいと願ひ、だから歩きだそうと、頑張つて生きようと」

「……そっか」

思わず優しい声で返事をしてしまった。

だって、そのわがままは私の願ひと似ていて、嬉しかったから。

「トバルカインも」

「なあに？」

「なんでもありません」

言葉につまりながらも言い終わると彼女は、私の二の腕を、空いていた方の左手で突つついた。

「このままだと会議に遅れてしまいます。急ぎましょう？」

「うん、分かった」

アスカに言われるまま、私は歩みを早めた。

「アーチャー961！ 来てたんだ！」

「……………」このリーダーに呼ばれたからな」

エレベーターに乗って、降りて、会議室の扉を開けた矢先、目に入って来たのはでかい机と立体映像、そして馴染みある顔の彼だった。

椅子に座り、顔を隠せるフードを目深にかぶり、全身をローブで隠したその出で立ちでは、私達のような知り合いしか「彼である」と分からないことだろう。

私はフードを外す。

「アーチャーの怪我、良くなった？ あつても、腕が……………」

「それはこちらの台詞です、マスターバルカイン。」

あつ、いや、えつと、もう……………マスター、ではないのですよね」

お互いにお互いの地雷を踏み抜いたことを感じ取り、しばし黙り込む。

私は彼を演技っぽく指さしながら、強引に話題を変えた。

「アーチャー！ いい機会だから、私のことはこれからはモモちゃんって呼んで！」

「分かった。モモちゃ……………モモ」

彼が私の姿を瞳に映す。

「雰囲気、変わったな」

「それはお互い様じゃないかな」

言った彼の姿を、私はざっと見る。

顔や胴体、四肢を覆っていた格好いい機械パーツは全て無くなっていて、表情が直にうかがえるようになっていた。

彼の眼は、滑らかな黒曜石のような静かな色に満たされている。

面立ちが柔らかく見えて、なんだか。

「優しい顔になった、ような？」

「俺が、元から暴力的な男であったような物言いは止めていただきたい」

ここである変化に気づいた。一人称が『私』から『俺』に変わってる。

彼はフードの下から私を見上げながら、深いため息を吐いた。

「——来ましたね。モモ、それにアスカ・ピオーネ」

話し込んでいる間に奥の部屋から出てきたのは、私達を呼んだ本人であるミライちゃんだった。

袖の長い黄土色作業着で褐色の肌を覆い、茶色い短い髪を整えながら、まだ14歳ながらも鋭さある赤い瞳で、私達3人をじつと見ている。

そんな彼女の腰へくつつくような立ち姿で、ノインちゃんがいた。だぼだぼの作業着の隙間から見える白い肌にも、真つすぐ伸ばされた金の髪が眩しい。遠浅を思わせる青い瞳は、いつもと変わらずで、少女人形のような印象を受ける。

「ノイン、お水、持ってきました。」

会議中、喉乾くといけませんから、どうぞ」

長方形のテーブルの上に、小さな手によつて水が置かれていく。アーチャーの分はストロー付きだった。

ついでのように中央部に置かれたのは、私が回収した、メルティハウリン・キルロードのブラックボックス。

「皆、座ってください」

硬い口調で喋るミライの指示で、空いた席に座っていく。

アーチャーが座っている向かい側の席2つに、私とアスカは並んで座った。何かするのかわ、ノインとミライは立ったままだ。

「ミライさん、もう1人、同行者がいて……」

座るなり、アスカが控えめな声で話し出す。

「先日話していた彼女の事ですね。」

「構いません、どうぞ」



「では、設置しますね」

ぴかぴか点滅している小さな長方形の機械が、アスカの手によってテーブル上に置かれる。

そこから立体映像によるモニターが青白い光によって形成され、煌めく布を纏った少女の姿が映し出された。

『ごつめーん！ 私もそつち行つて会議に参加したかったのだけれど、デザートランナーから離れすぎるのはNGで』

「通信機越しにどうも。」

そんな態度をとるつてことは、もしかして私達レジスタンスを『信用できない』つて言いたいのか？」

敵意感じる声で話しかけたミライ。受けて映像の中の少女は言葉を返す。

『そういう訳じゃない。

理由を言つてしまえば、私の体は虚弱でね、デザートランナーもとい調整槽からは長く離れられないんだ。

敵ではないことを示すため、槽から出て君たちに直接会えればよかったのだけど……通信機越しに参加するのが、今の私に出来る精一杯なんだ、ごめんよ』

やや波打った黒髪をもつ少女が、映像の中で申し訳なさそうに唇を結んだ。

(ミライちゃん、ひよつとしてイライラしてる?)

私は、棘のある態度を取り続けている彼女に目を向ける。

(いつもはもつと明るくて、優しい子のはずなのに……)

隣に立つノインが、袖を引っ張りながらミライを落ち着かせているのが見えた。

『初めましての人が多いかな?』

私の名前はグラン・カヴァツロ。

サーヴァント「レオナルド・ダ・ヴィンチ」の手によって作られた人造人間であり、デザートランナーの補佐と整備を勤めている。どうぞよろしく。

製作者への敬意を表して、ダ・ヴィンチちゃんと呼んで欲しいな!』

……初めての情報が多いが、アスカが静かに聞いているのを見るに、彼女はこの少女について知っていたらしい。

「初めまして、ダ・ヴィンチちゃん。私の名前はモモタ・トバルカイン」

『ここにいる全員の名前については既に知っているから、改めての自己紹介は結構。さあ、会議の本題に入らなくちゃ。時間は有限だからね』

つれない態度を取られ、私のピンクハートは傷ついた。

座ったまま、しよんぼりうなだれる。

「おっとおっと……私を、お忘れで?」

アーチャーの横の椅子に乗り上げてくる存在があった。

黒色の細く湾曲した足をもった、四足歩行のロボットだ。丸みある長方形の胴体、心には大きなカメラレンズが付いていて、瞳孔のように収縮しながら私達を見分している。

「忘れて、いません、アダムさ……アダム」

ノインがロボットの乗った椅子の後ろに回り、両手で位置を調整した。

(アダム……)

その謎の存在のことは、名前だけ知っている。

ガレスと共にアーチャー961を助けてくれたらしいが、詳しい正体を私は知らない。

「ミライちゃん、私達を集めた理由ってなに？」

私は彼女に訳を問う。

話す内容は知らされず、既定の日には会議室に集まってほしいと言われたただけだ。ダ・ヴィンチちゃんの言った通り、本題が気になって仕方がない。

「別の敵が迫りつつあるとか？ その対策とか？」

2日前、比較的安全だと思われていた地域に、物資採掘用ワームと機械のサソリ……もとい『蠍座の機械化サーヴァント』が現れたばかりである。

「——私達の要塞が襲われることなど、万に一つも無いよ」

幾つか推測を出した私を、ミライの赤い瞳が鋭くにらんできた。

「で、でも、ミライさん」

私を庇うかのように、アスカが話し出す。

「先日お話しした通り、迷彩機能があった『要塞ハデス』ですら敵に見つかり、襲われ、焼け落ちたのです。警戒するに越したことは……」

「無い、絶対に無い。」

だって——英雄の加護が、この要塞にはあるのだから」

断言するミライの顔を、訝しげに見つめるのはアーチャー961だ。

そして次の瞬間、話し合いが始まってからずっと立ったままであったミライが、膝を床につけると、961へ深く頭を垂れ、胸に手を当て、早口で喋り出す。

「ずっとお待ちしておりました、我らが英雄。」

今より400年も前に女神へ弓を引き、原初の抵抗<sup>レジスタンス</sup>を成したお方。

貴方様のお言葉を胸に、我ら今日に至るまで約定を守ってまいりました。

どうか古き言い伝えの通りに、我ら『アカツキ』を月の光の如くお導き下さいませ。

これより我ら、貴方様のみを指導者として、あらゆる命に従いましょう」

言われた961はぎよつとした顔を見ると、慌てて立ち上がる。

……それにしても、表情に感情が出すぎているような気がする。もしかしたら、彼はそれを自覚して仮面をつけていたのかもしれない、ただの邪推だけど。

「顔を上げてくれ、リーダーミライ」

と言われても、彼女は跪いたままだ。

アーチャーは口調を諭すようなものに変え、言葉をかけ続ける。

「貴女とは数日前に会ったばかりだろう、なぜ俺を知っていたような態度で頭を下げるんだ。」

何が何だかさっぱり分からない、分かるよう説明してくれ」

床に膝をつけうつむいたままの、ミライの表情はうかがえない。

「その事について、ミライは、お話ししたいことがあるそうです」

2人の間に割って入ったのはノインだった。

「案内します。レジスタンス『アカツキ』の秘密の場所、約束の場所へ」

私とアスカは、これから何が起るのか予想もつかず、互いに顔を見合わせた。

第114話 救世主は何かと忙しい

終わり

## 第115話 お腹と胸中には秘密が詰まってる

巨大移動要塞『カルナ』は、大雑把に言うとかブトムシのような形をしている。

人々が暮らしている涙型のドームはお腹。それを支える無数の多脚が下部にあって、夜間はドームの蓋として機能し、日中は横へ広げられているソーラーパネルは甲虫の羽根と言えらるだろう。

ドームから真つすぐ上に伸びているエレベーターと、その先つぽにある会議室や作戦室、連絡室は角。

今、ノインに案内され私達が向かっているのはお腹の下の方、限られた人間しか入ることを許されていない、隠されていた空間だ。

「私……話したいこといっぱいあったのになー、『アーキマンレポート』とか『Aプロジェクト』のこととか」

「アダムさ……アダム、後で話す時間、作りますので」

ワイヤーめいた四本足で歩きながら愚痴ったアダムを、ノインが諫めている。

ミライちゃんも態度を急変させていたが、ノインの様子もおかしく見える。アダムに

対し、配慮しているというか、敬っているかのような素振りを見せていた。

「到着です。アーチャー961、ここが『約束の場所』に繋がる封じられた門」

私達は足を止め、ノイン以外一様に言葉を失っていた。

打ちっ放しのコンクリートの床、天井から注ぐ人工灯は、月を思わせる青と白。空气中に漂う埃が、光を受けてきらきらと光っている。

そして目の前にあるのは、装飾も飾り彫りも無い石扉。大きさにして高さ20m、幅も10mはあろうか。

「リーダーミライ、この扉は」

アーチャー961に呼びかけられた彼女は、暗い表情のまま扉の前に立ち、彼へ告げる。

「今より何百年と前、我らに力を貸してくれた魔術師——額に癒えぬ傷を持つ赤髪の男が作成した、魔術による封印が施された扉です。」

我らが英雄、どうかこの扉を開き、約束を成した場所へと至ってくださいませ」

「開けと言われても……」

彼は石扉に近づき、じつくり眺めたり、足先でこんこんとノックをしてみたりするが、扉に劇的な変化は無い。その様子を、離れた場所より私達は見守っていた。アスカは今にも駆け寄りたそうにしていたが、ハラハラするだけにとどめ、我慢しているようだ。

「それにしても……よく考えられています」

いつの間にか、私の足元にアダムがやってきていた。彼はしみじみといった様子で呟く。

「リリースの手先であるAIが例えここまで攻め込もうとも……魔術による封印がされていれば、敵方はそれを破れず諦めるしかない」

「AIって、魔術使えないの？」

いかにも質問してほしそうな呟きだったので、私は聞いてみた。

「はあい。だから……サーヴァント使ったり、機械化サーヴァントを探したり修理したりしているんですね」

「そう……なんだ」

アダムの言葉を聞き、私の常識は揺さぶられた。

生まれてからずっとAIに管理されたせいかな、AIは何でも出来ると考えていたから、『出来ないことがある』なんて思いもしていなかった。

「リーダーアカツキ、封印を解く方法について、君は何も知らないのか？」

例えば伝え書きなどとか」

「今は去った赤髪の魔術師より、ある言葉のみ口伝くでんされています。

『英雄が望めば、自然に開く』と」



「望めば、自然に」

アーチャーはざらざらとした石の表面を、油断ない目つきで観察している。

私も背伸びして、扉を上から下からまんべんなく見てみるが、文字も絵も描かれていないその表面に、開くヒントがあるようには思えない。

「つまりこうすればいいんだろう。」

——開け

扉を見上げながら彼が宣言した瞬間、空間が振動を始める。

石扉が床のコンクリートに削り跡を付けながら、ゆっくり、ゆっくりと、彼を奥へ招くかのように、外開きに。

「すごい！ アブラカタブラの呪文みたい！」

私は、『ただ一言のみで扉が開かれた』という状況に、自分を抑えるのを忘れはしやいでしまった。『アリババと40人の盗賊』のお話の様だったから。

「中に、私以外の者が入っても構わないか？」

「全ては貴方様のご随意がままに」

ミライちゃんはアーチャーに対し、腰を深く折って礼する。まるで彼の召使いかのような振る舞いだ。

普段の、明るくて、年上も従えるほどのリーダーシップがあり、皆の未来が良くする

ためならなんでも行おう貪欲さを併せ持った彼女とは、まるで別人。

「アーチャー、どうやって扉を……」

遠巻きに事の推移を見守っていたアスカが、名を呼びながら彼に駆け寄る。

「俺があるがまま自然に声を発して望めば、扉が開く。」

そう考え、やってみただけのこと」

「考えに至った理由は？」

私も彼の側に寄り、気になるところを聞いてみた。アーチャーはよどみなく答えてくれる。

「扉には文字も絵も刻まれていなかった、リーダーミライも口伝しか知らなかった。」

その二つの事から考えるに、『扉を作ったのは司祭である』と考えた」

「司祭？」

「即ち、俺と同じ時代を生き、同じ伝説、教えを信じ、後世へと伝えていた者達のことだ」

「なる、ほど？」

「いまいち理解が及ばないが、つつこみはせず彼の話の続きを聞く。」

「古代、神秘に近しかった司祭達は、歌と動きにより膨大な言の葉の暗記を行い、神秘を損なわない、文字に頼らない物語の継承を行っていました。」

「この扉も、それに由来する秘術によって閉ざされていたのでしょうか」

「ふむ、ふむ?」

まだ良く分かっていない私とは反対に、アスカは納得言っているような表情をしながら話し出す。

「司祭の弟子達が、師と全く同じ歌、動き、口調によつて伝説を損なうことなく後世に伝えたように、貴方が現れた時、同じ口調、声で聞くように仕掛けを整えていたと。」

つまり、古代式の声紋認証のようなものでして?」

「その認識でおおよそ合っています、マスターアスカ」

両者はバツチリ通じ合つたようだ。

私も、アスカちゃんの説明で何となく……何となく理解出来た、ホントだよ。

アーチャー961の声でないと扉は開かないように細工されていた、簡単にまとめればそういうことだろう。

「開かなければどうするつもりでしたの?」

「……蹴破ろうかなと考えていました」

彼が、ロープで隠された体の下にある足を軽く振つた。

「ノインつたらうっかりです。先にアーチャー961へ、言っておくべきでした。」

物理的に破ろうとすれば、1トンを超える爆弾が、起動する仕組みになっています。

要塞ごと、木端微塵、予定です」

「わー……物騒だなあ」

ノインの言葉を聞いたアダムが、他人事ひとごとのように一言発した。

開かれた扉の内に入る。先頭を行くのは961とミライちゃん。

そのすぐ後ろをノインとアダムが歩き、私とアスカは一番後ろからついていく。

扉の中は天井の高い通路となっていて、外側の空間を照らしていたものと同じような、青と白が混ざった人工灯で神秘的に照らされている。

歩きながら、暗い横側の空間に目を凝らしてみると、石造りの棚が何十とあるのが分かった。

その一段一段に、布で梱包された箱が乱雑に置かれているのも見えた。本来は整理されていたのかもしれないが、ここは移動要塞、長年の振動によって乱れてしまったのかもしれない。

「……」

霊廟を思わせる厳かな空気に圧倒されてか、誰も喋ろうとはしなかった。

静かな廊下には、私達の靴音だけが響いている。

「……」が最奥です。我らが英雄」

ミライちゃんが立ち止まる。そこに見えたのは草木も無い庭園と。

(お墓……?)

私の感性ではそうとしか思えなかった。

ここだけコンクリートではなく、小石散らばる硬い地面となっていた、まるで地上の世界の一部を切り取って持ってきたかのようだ。

朽ちた造花が散乱し、中央には寝台のような形をした石がある。これが墓に見えた。そこに置かれていたのは透明なガラスの箱で、中には一握りほどの灰が。

すぐ隣、寄り添うように置かれていたのは、月の光と酷似した人工の色に照らされた、金色の塊。

「これは」

961は、その溶けてからもう一度固められたような金の正体が分かったのか、はつと息を飲む。

「はい、我らが英雄。貴方様のお察しの通りでございます」

ミライは謡うように高らかと言う。

「これは、英雄アルジュナより私達が授けられたもの。」

——英雄カルナの鎧、その半分です。

私達はこの鎧の加護により、今の今まで、空を覆う『衛星軌道上展開兵器ヴリトラ』に

目を付けられず生きてこられたのです。

彼の英雄カルナが変じた、あの恐ろしい悪竜から」

……なぜ、会議室でミライが「襲われることなど、万に一つも無い」とまで言い切ったのか分かった。

このレジスタンス組織は、英雄の宝具を有していたのだ。あれほどまでに自信がつくのも納得だ。

（兵器ヴリトラが英雄カルナ？ それは一体どういう……）

次から次へと疑問が湧いてくるが、質問するための時間は私には用意されてはいない。

今のミライは、961のためだけに動いてしまっているから。

ノインとアダムは静観している。

「我らが英雄……いいえ！ 再び降臨せし英雄アルジュナ様！

400年前、我らが始祖にカルナの鎧を託し、遙か未来を物語った時のように、救いを、導きをお与えください！ どうか、どうか！」

「カルナに、アルジュナ、だと？」

ミライが口にした人名2つに対し、アーチャーは肩をいからせ気配を鋭くする。

私は彼の雰囲気が一変したのに対して、思い出す出来事があった。

それは数か月前、生まれ育った地下都市が焼けたあの痛ましい日の事。

バーサーカー04が彼の真名を看破した際――。

〔私を……アルジュナと……呼ぶなあああああ!!!〕

稲妻発しながら叫んだ、あの怒りの姿を。

「ミライちゃ……」

もしそうだったとしたら、彼を止められるのはこの場では私だけだろう。

危惧し、前に踏み出そうとした私を、服の端を引っ張ることで止めたのはアスカだった。

「モモ」

名を呼ぶアスカの黒い瞳に、焦りと冷や汗をにじませている私の顔が映っている。

「大丈夫、きつと大丈夫ですから。彼を信じて」

私とは対照的に落ち着き払っている彼女の声を耳にして、私は動きを止めた。

「なぜ、お前がカルナとアルジュナの名を知っている」

アスカが信じた通りだった。アーチャーは取り乱すこと無く、どこまでも冷静に、ミライに対して聞いただけしている。

「アスカ、ねえアスカ」

私は小声で話しながら彼女の袖を引っ張る。

「カルナってどんな英雄なの？　アーチャー961と何か関係がある人なの？」

アスカは私のことを一度だけ上目で見てから、ためらうような顔をしながら小声で話してくれた。

「……カルナは、英雄アルジュナの異父兄弟にして、彼の仇敵です。

幼い頃に捨てられたカルナは、アルジュナにとつての敵国に組し、最後は彼によつて討たれました」

「家族同士なのに、戦いあうことになってしまったんだね」

「……話すと長くなります。また今度、時間のある時にお話ししますわ」

今度、今度か。今日は特に『今度』って言葉が多い気がする。

私はアスカから目を離し、前へ向き直った。

ミライが寝台のような石……棺にも祭壇にも見えるそれに手をかけ、アーチャーの質問に対し、喋り始める所だった。

「英雄アルジュナ。貴方様が400年前、私達の先祖にこの鎧を託したことが全ての始まり。」

そして私達は、語られた未来に従い生き、鎧を守り続けていくと決めたのです。

約束をした場所を、そのままここに持つてきて、鎧と共に流浪の魔術師に頼つてまで封じて……」



「故に、『約束の場所』と呼んだのか」

「はい、英雄アルジュナ」

そう呼ばれる度、彼は苦し気に眉間へシワを寄せる。刺されでもしているかのようだ。

アーチャーは部屋全体に目配せながら、ミライに語りかける。

「話してくれないか。400年前、何があったのかを」

「分かりました、英雄よ。」

お話します、先祖達と英雄との出会い、そして託されたものについて」

ミライは信託を受けた巫女のように両手を胸の前で組むと、まだ幼さ残る少女の声で伝説を物語り始める。

今より遙か昔のお話、人と英雄の話を。

「——400年前の私達の先祖は、レジスタンス組織でも何でもありませんでした。

防護服に身を包んで、地上を徘徊し、破壊された都市の食料、壊れた兵器の部品を拾ってはその日を凌ぐ……いわば、スカベンジャーと呼ばれる者達だったのです。

掲げるべき理念も無く、誇りも無い、ただ過酷な日々を生きるだけで精一杯だった人々……そんな存在が生まれ変わったのは、英雄との出会いがきっかけ」

アダムが冷たい地面の上に、四本足を折り畳んで座ったのが見えた。

「ある時、世界の命運をかけた大きな争いが起きました。

大量のサーヴァントを得たレジスタンスと、女神リリスの陣営との戦いです。

先祖達は、『何か役立つ物が拾えるかもしれない』の軽い気持ちで戦場に向かいました。

……たどり着いた戦場跡は、ひどく痛ましいものだったと伝えられています。人も機械も一緒くたに壊れ、あちこちに部品が広がる凄惨な景色だったと」

ミライはその光景を心の中で思い浮かべてもしたのか、一度目を伏せた。

「そこで、先祖は思わぬ存在と出会いました。

全身に傷を受けた男が歩いていたのです。防護服を纏っていないことから、先祖達は目の前にある存在が『人ではない』ことにすぐ気が付きました。

けれど、先祖達は男を見捨てておけず、保護し、手当てをして、地下住居に運びました。

男は床に臥せったまま名乗りました。

『我が名はアルジュナ、レジスタンスを助けるべく召喚されたサーヴァント。』

「この世界を救うためにやってきた英雄だ」と」

「……アルジュナはそれから、どうなったんだ」

アーチャー961が言葉を挟んだが、ミライは返答はせず話を続ける。

「アルジュナの傷は未知のもので、治す術を当時の人間達は持つていませんでした。

日に日に弱っていく男。彼は死期を悟っていたのか、沢山のことを私達に話してくれました」

ミライが息を吸い込む。そしてまた話し出す。

「あまりにも多くのことです……」。

『レジスタンスとリリスの戦いは、痛み分けに近い形で終わった』。

『リリスのサーヴァント、シグルドはブリュンヒルデの尽力によって倒された。

ヘラクレスも倒されたが、その他については分からない』。

『リリスの空中庭園は私が半壊させた、やがてどこかへ落ちるだろう』。

『黒い化け物に傷は与えたが、殺せなかった。恐らく、サーヴァント墓場に逃げ込んだ』。

『カルナを倒せなかった。あのままでは恐ろしい悪竜になってしまう』。

止めたいけれど、力では解決できない』。

『機械の兵隊は壊滅させた』。

『エジソンが狙われている。そのことをレジスタンスの生き残り達に伝えてくれないか』。

英雄の話したことのほとんどを先祖達は理解できませんでしたが、とにかく記録しました」

私は思わず息を飲んで、物語に聞き入っていた。

「英雄アルジュナは、私達の先祖にあるものを手渡してくれました。

彼は言います。

『これは、カルナというとても強い英雄の持ち物、太陽の神が彼に与えた黄金の鎧だ。いつか来る者達に渡して欲しい。

時が来るまでは、鎧が君達を悪竜より守ってくれるだろう。

だからそれまで、預かつてはくれないか』と。子どもに伝えるような優しい言葉遣いで」

ミライの目線が、石の上にある金色の塊に注がれる。

「彼が告げたことはこうです。

『私は未来を見た。

何百年と後に、君達の元へ、白い車に乗ったある者達がやってくる。

私と同じ風貌をした男と、黒い髪の子、灰色の髪の子、その三人だ。

来たのなら、私のことを話し、黄金の鎧を渡しておくれ。

それだけで全てが伝わる。何も心配することは無い』。

……先祖は、『きつとそうしてみせる』と、彼に約束をしました」

次にミライが目を向けたのは、白い灰が入ったガラスのケース。

「次の日、英雄の姿はどこにもありませんでした。彼の眠っていた寝台には白い灰だけが残されていて、先祖達は彼が死に、灰となってしまったことを悟りました」

サーヴァントは、消える時なにも残してはくれない。

けれどアルジュナというサーヴァントは、未来に希望を託してくれたのだ。

「その後、レジスタンスの生き残り達と合流し、先祖達は大きな組織を作りました。

日を迎えるための空を意味する『アカツキ』の言葉を組織名に冠し、鎧の持ち主の名が忘れられぬよう、要塞に『カルナ』と名付けた。

英雄アルジュナが話してくれた通り、この400年、私達が悪竜に襲われることはありませんでした。……英雄の語ったことは真実でした。

ならば約束も、未来において果たされるはずだと、私達は強く信じるようになった」

ミライはそこまで語り終えると、再びアーチャーの前に跪く。

「私はずっとこの約束を聞いて育ってきました！

私の母も父も、祖母、祖父も、それより前の祖先だってそうです！

邪神リリスから鎧を守るため、約束をレジスタンスリーダーのみの秘密とし、語られた未来を希望に、私の血筋は今日まで生きてきた！

私の名前もこの約束より付けられたの！ だから、だから……！」

霊廟を思わせる空間に、彼女の、救命を乞う声が響き渡る。

「予言の通り、ここに降臨せし英雄アルジュナ様！

私は貴方に従います、どんなことだってやります！

だから私達に救いをください、未来をください！　どうか!!」  
数分の沈黙が部屋を満たした後。

「それは」

アーチャー961が口を重たげに開く。

「——その約束は希望なんかじゃない、呪いだ」

青ざめた顔で、そつと。

「アルジュナは、他者に呪いをかけるような男じゃない。

呪いをかけたくて言葉を残した訳じゃない……はずだ……」

苦虫を噛み潰したような顔で、唇を噛んで。

第115話　お腹と胸中には秘密が詰まってる

終わり

## 第116話 オン・ステージ

アーチャーは何度か息を深く吸ってから、決断的に言い放った。

「俺は、アルジュナじゃない」

ミライは声を聞き、言葉の意味を理解するまでに時間がかかったのか、数秒経った後、一筋の涙を流した。

「……そんなはずない」

呆然とした響きが声に込められていた。そんな彼女へ、咄嗟にノインが寄り添う。

「だって、貴方がアルジュナでなければ扉は開かなかったはず。

伝説通りの姿で、白と黒の女の子を連れて現れた……。

あらゆる証拠が、貴方をアルジュナだと証明している！」

彼を責め……いや彼の言葉を否定したいかのように叫ぶミライ。

そんな彼女の様子を、アスカは沈んだ顔で見続けていた。

「期待を裏切ってしまった、ごめんなさい」

アーチャーは体を隠している布を揺らしながら、腰を折り頭を下げ、ミライに詫びた。

そして続ける。

「期待、していたんだろうな。その口振りから察するに。

けれど、その気持ちに答えられない」

彼は唇を一度強く結んでから、数秒の後、柔らかく開いた

「……俺はアルジュナじゃないんだ。ようやく、そう言える決心がついた」

アーチャーは、アスカの方をちらりと見る。

「仲間達に、再び出会ったことによつて」

言い終えた彼はどこか晴れやかな顔をしていた。

が、一方、私の脳内は混乱を極めていた。

(かつて、バーサーカー04はアーチャー961の事をアルジュナだと看破した。

さつき通つたあの扉は、アルジュナの声でしか開かないよう魔術がかけられていた。

ここまで状況と証拠が揃っているのに、961はアルジュナじゃない？

どういうこと？ そつくりさんつてこと?)

何が何やらいよいよ分からなくなつてきた。すつきりする説明を誰かにしてほしい。

「……あーあ、なんだそういう……ことですか。

結局、『Aプロジェクト』は失敗していったつてことですね、はいはい」

私にしか聞こえないくらいの声量で、アダムが何かを言っている。ロボットの体から



放たれているとは思えないほど、その口ぶりは冷たく、失望した響きを伴っていた。

「じゃあ、私達の400年、何のために……」

ミライはアーチャーの発言にひどくショックを受けたのか、砂と小石、ビニール製の造花の残骸が散らばる地面にへたり込んでしまった。ずっと側で立っていたノインが、優しく背中をさする。

「ねえ、ミライちゃん」

力を無くした様子の子のミライに、私は近づいた。

「私達ね、貴女のこと何にも知らない。」

何が辛くて苦しいのか、何にも知らない」

14歳の少女の身でありながら、先祖代々の使命を背負い戦ってきた彼女を、このままにはしておけなかった。

「でもね、伝わってきたよ、ミライちゃんの気持ち」

私は跪き、ノインと同じように彼女へ寄り添う。

「ずっとずっと、頑張ってきたんだね。ご先祖様の言葉を頼りに、それを信じて頑張ってきたんだ。」

ミライちゃんは……」

彼女の体に手を伸ばすかどうか、一瞬考えてしまったが、ノインが小さく私に向けて

頷いてくれたことで、決心できた。

「偉い。とつても偉い」

静かに彼女を抱きしめる。両腕の間に納めたミライの体は、想像以上に薄くて華奢で、震えていた。

「う、う……あたし……あたしは！ みんなから託されたのに……でも、もう……全部、ダメになっちゃった……これからどうすればいいのか……分かんないよお……」

ミライは泣き出す。その感情を私は全身で受け止める。

過去を映す墓所に、あまりにも悲しい泣き声が響いた。

彼女が泣きやむのを待つてから、私達はあの会議室に戻ってきた。

大きな机の周りに全員座つて（アーチャーが座っている向かい側の席2つに、私とアスカは並んで座つた。ノインは立ったまま、上座にはミライ）、一息ついた後のこと。

「——人間というのはこう……感情に重きを置きすぎていて、いけない」

あまりにもひどい言葉を発したのはアダムであった。

「別に、一個の策が……失敗に終わったかとして、何もかも何もかも失われてしまうわけではないというのに」

『と言うとアダムは、400年前のことについて知っていたのかい？』

あと、ぼそつと呟いていたAプロジェクトという単語についても私は気になるなー。ちやんと説明してくれるんだろうねー?』

机の上に置いていた通信端末から、ダ・ヴィンチちゃんの声が出た。その後、青白いモニターが端末より照射され、ぬるつと少女の姿が出てくる。一連の動きを、アダムは四角い体を机に乗り上げたまま、黙って見ていた。

「ええはい。知ってましたよ400年前の話。それに……私は当事者ですから」  
「当事者……?」

ミライが泣きはらした瞼で瞬きしながら、ぼんやりとした口調で言う。

「ノイーン。こういう……説明するの、自分のスピーカーからでは締まりが悪いので、あなたやりなさい」

「はい、分かりました、アダム様」

呼ばれた少女は立ち上がると、角に丸みのある四角いロボットの下に両手を入れ、ぐいと持ち上げた。旧世界の人々が、飼い猫にやっていたようなあの姿勢にも似ている。

「はい。この方こそ、大体のこの元凶憎いあんちくしょう。」

私達『都市運営システム』の祖にして、世界で初めて心を宿したAI、そして女神リスの夫たるお方」

「元ね」

「失礼しました言い直します。えへん、おほん。

……女神リリスの元夫様、アダム、なのです」

私は紹介を受け、改めて目の前で間抜けに胴体を持ち上げられているロボットを見る。

「女神リリスの、元夫?!」

『結婚してたんだあの人』という気持ちもあつたが、何より、400年前に起きたことの当事者に会えるだなんて思っても見なかったので、驚きが大きい。

「あれ、じゃあノインちゃん……」

「そうよ。ノインはあたし達レジスタンスに協力してくれているAIの一体。

本名はノイン・エーテルウエル」

ミライちゃんが乱れた自身の茶髪を手で直しながら、私の疑問に答えてくれた。

「今日一日で分からないことが増えすぎですわ……」

「アスカ、大丈夫だ。アダムがこうも自信ありげに出てきたということは、全て話すつもりなのだろう」

私と同じく混乱している様子のアスカを、アーチャーがなだめた。彼は驚いているようには見えない、事前に聞いてでもいたのだろうか？

「その通りです……アーチャー9611! ここから怒涛の補足タイム!」

アダム・オン・ステージ! 茶々入れお手つき壇上への飛び込みは禁止! です!」

ロボットの胴体に小さな切れ込みが入り、両開きになると、中から何かが。

……マイクだった。旧世界のカラオケ店で使われていたような形のやつだ。

『うわあ……長くなりそう……』

ダ・ヴィンチちゃんの一言に、私は無言でうなづいた。

「それにしても、人間の口伝というのが……これほどまでに正確だとは思わなかった。先ほどミライが語ったことは、私の持つ情報とほぼ一致しています。

誤りがあつたとするならば……貴方達の先祖が、ただの伝言をまるで神託のように扱ってしまった、という点でしょうか」

顔を曇らせるミライのことなど気にせず、アダムは話を続ける。

「レジスタンスとリリスの戦いは、事実引き分けに終わりました。リリス側のサーヴァントはそのほとんどが消滅しました。

現代においても活動しているのは、改造されたシグルド、悪竜となったカルナ、女神の元より逃げたエジソン、ギ……えほんおほん、その三騎のみです。

本拠地であつた空中庭園も壊れ、落ちました。

……戦いの終盤に突如現れた黒い化け物が、サーヴァント墓場に逃げ込んだのもアルジユナの見立て通りです。

エジソンが狙われていたのもそう。

最も、彼は一度捕まりこそすれ、この私！ の活躍によって逃げ出せたのですが。

今は世界を救うために動いてくれます、貴方達レジスタンスと同じようにね」

いつまでも持っているのが嫌なのか、ノインがアダムを机の上に下ろした。そんな扱いを受けていてもお構いなしで彼は話す。

「落ち込まないでください……リーダーミライ。」

そこに座ってるアーチャー961が使い物にならなかつて、別に世界は救えます」

「どういう意味なの……?」

呼ばれた少女は嘆きよりも困惑の色が強い表情で、ロボットの方へ顔を向けた。

「ふっふっふっ……ご安心を。なぜならここには秘密兵器があるのですからー!」

素早い動きで何度も私とミライを交互に見るアダム。間接がきゅいきゅい鳴る音は、まるでモルモットの鳴き声だ。

「えっ、えっ?　なんで私を見るの?」

「……400年前、人々は女神を殺すことに失敗しました。

なので、確実に倒すため方法を幾つも考えたのです」

私のことを無視して、澄ました声で言うアダム。

「それは全てで5つのプロジェクト。」

A——アルジュナプロジェクト。彼の英雄の召喚、再現を試みる計画。

B——ブロンズプロジェクト。サーヴァントと同じ戦闘能力を持つアンドロイドを作成しようという計画。まあ頓挫してしまったのですが。

C——コンバインプロジェクト。サーヴァントを粉碎して得られた特殊肉片の研究プロジェクト。

BプロとCプロの研究が合流し、エジソンの協力も相まって後の機械化サーヴァント技術に繋がるのですが、横道なので脇に置きます」

アダムは細い前足を動かし、物を置くジェスチャーをした。

「そして最後、D——『デミ・サーヴァントプロジェクト』。」

アーキマンレポートを参考に計画、立案。

調整を施した人間へ英霊を下ろし、兵器として運用する研究です」

「まさか！」

『君達、とんでもないことを……！』

何かに気づいたのか、アスカとダ・ヴィンチちゃんが声をあげる。

「その通りの……まさかです。」

——モモタ・トバルカイン。貴女は女神リリスの代替品であると同時に、神殺しのための兵器！

S文書に書かれてある、世界を救う方法の一つなのです！ やったね！」  
アダムの背中あたり、背面スピーカーから拍手の音が流れた。

『彼女が女神リリスの……代替品、そして神殺しの兵器だつて?!』

ノイン以外の全員の眼差しが私に注がれた。驚愕の色が濃いその視線に、胸が刺されたような痛みを感じた。

(おかしいな……私、誰にどう見られたつて、平気だと思つてたのに)

自分が何者であろうと、どんな存在であろうと、受け止めようと考えていた。

(悲しいことが理由じゃなくて、これは……)

なのにどうして、こんなにも心が痛むのはなぜだろう。

「モモタ・トバルカイン。貴女が……故郷を飛び出し、旅をして、女神と遭遇、片腕を欠損をしながらもレジスタンスと合流し、デミ・サーヴァントと化したのも、女神リリスを殺すため、ですよね？」

「アダム、あのね私は」

今までのことは全て偶然で、特に策を立てて行つたわけではないと言いたいけど、うまく言葉が紡げない。心が波立っていて冷静になれない。



「モモタ・トバルカイン。ひよつとして……カイヤから何も聞いていないのですか？」  
「どうしておぼあちゃんの名前が出てくるの？」

「それは私が……貴女をカイヤに預けた本人、いえ本AIだからです！」

ええ？ まさかほんとに何も聞いてない？ 使命も？ 生まれた意味も？」

「ちよ、ちよつと待つて！」

ここで彼を止めたのは、寿命のことまでバラされるんじゃないかとの懸念が沸いたからだ。

（アスカとアーチャーへ言い出す勇氣も心の準備もしてないつてのに、他人に言われちやたまんない！）

私は思わず立ち上がる。

「アルジュナが400年前にリリスの力を削ってくれて、レジスタンス『アカツキ』に伝言と鎧を託してくれたつてことは分かった。

エジソンというサーヴァントが、私達を助けるために動いてくれてるつてことも教えてくれてありがとう。

そして……」

顔を下に向けてしまう。今だけは、みんなの顔を見ることが出来なかつた。

「私が、リリスを殺すためにだけ作られた存在つてことも、分かつたよ。

きよ、今日はここまでで良いんじゃないかな？ 私、あちこち移動したし色んなお話聞いたからか疲れちゃって」

私は取り繕うため手で顔を仰いだ。そんなごまかしを青い瞳で見上げていたノインが、アダムに呼びかける。

「アダム様、リーダーミライも含め、今日はみんなお疲れのご様子。」

また、目を改めましょう。アダム様がテンション上がっているのはよく分かりますが」

「私も……一方的にまくし立てすぎました。ごめんなさいね。」

んではまた明日」

ふてくされたような態度で、彼は机の上に座り込む。

その場はお開きになった。

「あの、トバルカイン……」

会議室から出て、長いエレベーターから降りて、要塞内の町にたどり着いた頃。重々しい口調でアスカが私に声をかけてくれたけど。

「ああ！ こちらに居られたのですねピオーネ様！

どうしてもご相談したいことが……」

おろおろした様子の女性が近づいてきて、中断された。

「でも、わたくしトバルカインに」

「良いよアスカ、行つてあげて。その人には貴方が必要なんだもん」

私はローブを被り直して、顔と黒い右腕を隠す。

「ごめんなさい。今日の夜10時に、あの空き地で待ち合わせましょう」

短く言い残して、彼女は女性と連れ合い通りの人混みの中に消えてしまった。

「……病院、行こうかな」

アーチャー961はもういない。彼はまた別室に戻ってしまったのだ。

怪我もしているから、それはしようがないこと。

一人きりになった私は、足を町外れへと向かわせる。

今日は元々、ガトモスの元に衣服など届ける予定だった。久しぶりに顔を見せてあげたいし。

(誰かと一緒にいたい気分になってるや、私。弱ってるのかな)

人恋しい気持ちだったから。

「ガトモスー！ 大人しくしてたー？」

「今日はねーリハビリしてたー」

簡易な作りのベッドの上、横たわりながらタブレットで何かを閲覧している老人の姿がそこにあつた。

今から一週間前のこと、要塞を襲ってきたメルティハウリン・キルロードによつて切られたガトモスの足の傷は、案の定悪化し、入院とりハビリを余儀なくされている。

「ヒゲ切りたい。カミソリも持ってきてもらえばよかつた」

「刃物危ないから駄目。シャーンそう言つてたよ」

私はベッド横に放置されていた、クツシヨンの薄い丸椅子に座つた。

ガトモスの、長い灰色の髪やしわ、優しげな瞳や伸び放題の豊かなヒゲを見るとほっとする。

私が兵器であることを彼がまだ知らないことや、おばあちゃんの親類つてことも関係してゐるかもしれない。

「ご飯とかちやんと食べてる？ 好き嫌いしてない？」

「残さず食べてるよ……いつもレーシヨンばかりだけど。」

町に住んでるみんなより良いもの食べてて、なんか罪悪感ある」

「ガトモスもそんなこと思うんだ」

「君が僕の何を知つてゐるって言うんだいっ」

「ふふつ、そうだね、全然知らないや」

重要でもない世間話が、こんなにも心癒されるだなんて。

彼は鼻をふんと鳴らすと、私に背を向けてから小さな物をベッド横から取り出した。

「モモ、これ」

「ん？ なあに？」

小さな封筒だった。受け取ってから裏表と返して見ると、染みの痕跡がある。

「君が僕に預けた、あの血で汚れていた封筒だよ。忘れちゃってた？」

「……あの！」

バーサーカー04が私に最後にくれた物だ。血がべったりと付き、開封すら困難な有り様となっていたあれが、ただの薄黄土色の紙に見えるほど、綺麗に洗浄されている。

「知り合いに道具を貸してもらってね、シャーンや看護師の目を盗んでコツコツと綺麗にしてたんだ。」

ただ、クリーニングの関係上、封は開いてしまっているけど……」

「そんなの全然気にしないよ！ ありがとう！ ガトモス、ありがとう！」

彼の手を両手で包み込んで、何度もお礼を言った。いくら感謝しても足りない気持ちだった。

「……で読まなくても良いよ。家に帰ってゆっくり読みな」

ガトモスがベッドの上で身を起こす。

「モモ、なんだかとても疲れた顔してるよ。横になって休んだ方が良い」

「そう見える？」

私は黒い右手で頬を触ってみるけど、熱が出てるとかそんな感じはしない。

「ガトモスがそう言うなら、帰って寝ようかな。」

今は……夜8時か」

少し早いけど、寝るのにおかしい時間ではない。約束の時間まで、横になって休むのも良いかもしれない。

彼に短いお休みの挨拶をして、手紙を懐にしまい込んで私は家路を急ぐ。

病院から出て、長い階段を降り、闇市で賑わう道を人とすれ違いながら足早に歩く。家に帰るといふ感覚は最近ようやく取り戻したもので、だからこそ嬉しかった。

ドアを開け、ローブを椅子の上にかける。そうしてから手紙を開こうとした。

「……」

開こうとした。けど、指がうまく動かない。

右手だからいけないのかと思って、まだ人間である方の左手も使ってみたけど、やっぱり動かない。

「手紙……」

体が変わるかそういう訳じゃない。私は。

「何が書いてあるのかな」

気持ちを確認するため口に出してみる。声は震えていた。

——どうしようもなく、怖かった。

もし『お前のことは道具としてしか見ていなかった』とか書かれていたらどうしようとか、『リリスを殺せないならお前には何の価値もない』とか、彼がそんなこと書くはず無いのに、嫌な考えばかりが脳内に溢れてきて止まらない。

「……あつ、10時だ」

気がつくとアスカとの約束の時間になっていた。私は机の上に手紙を置いたまま、ローブを深くかぶって出かけることにした。

第116話 オン・ステージ

終わり

## 第117話　それは昔に終わったお話

「こんばんは、トバルカイン！　ようやくゆっくりお話できそうですわね」

待ち合わせ場所、コンクリートブロックが転々と散らばっている空き地に彼女は立っていた。

地味な黄土色の作業着姿で、肩に艶のある黒髪を落としている少女。私の友達アスカ。

頭には、トレードマークであるアメジストの髪飾りが光っている。

「夜遅くに約束しちやつてごめんね」

「構いませんわ。」

トバルカインはえつと……親戚の方である、ガトモスという男性のお見舞いに行っていたのでしょうか？　それなら多少遅くの約束になつても仕方ありません」

アスカが、幼さ残る口元で微笑みながら言う。

「そんなことまで知ってたんだ……」

私はなんだかばつが悪くなり、左手で頭をかいた。

「リーダーミライが落ち着いた後、ノインと交えて三人でお話する時間がありました



の。

その時に貴女の事情も少し聞きました。

……私もサーヴァントも居ない状態で、ずいぶんと無茶をしたようですわね」

アスカが私を、眼差しだけで叱るかのようじつと見ると、私はますます悪くなり、顔を背けてしまう。

「お、お説教されるために来たわけじゃないもん」

彼女が私を責める……というか、叱りたくなる気持ちはごもつともなので、そう言い返すのが精一杯だった。アスカが小さく息を吐く音が聞こえ、私は恐る恐る顔を戻す。

「……モモが無茶するのは今に始まった話ではありませんし、私も、貴女を叱りたくて時間を作ったわけではありませんし。」

あれこれ言うのは、もうやめます」

言葉に続けて、彼女はわざとらしく咳払い。

「さあわたくしの手を取って、トバルカイン。」

午前中は貴女が要塞内を案内してくれましたから、今度はわたくしがそうする番です」

黄土色の服まとった両手が伸ばされた。その小さな右手を、私はただの人間の腕である方、つまり左手でそつと握る。

「どこか連れてつてくれるの？ アスカちゃん」

「わたくしと避難民の方々がまとまって生活している区画があります。

そこへ行きましょう？」

すぐに着きますよ。なんといつたつて、すごい近道を教えて貰ったのですから！」

彼女の顔を真つ直ぐ見下ろしてみれば、瞳がきらきらと輝いていた。

「ねえアスカちゃん、この道じゃなくてさ、普通に下の……」

「こ、この建物に登ってから、隣の建物にジャンプするんです！」

そしたらあつという間につくのですから、ほんとでしてよ！」

「うん……その後はどんな道のりなの？」

「避難民の子が言うには、飛び移った建物、その壁面にかかっている梯子を下り、もう使われていない脱出口兼ダストシュートを滑り降りて、目の前の廃墟に入ってから」

「よし分かった！ すごい近道だつてことは分かったから！」

……どうやら、離れ離れになっていた間に無茶していたのはお互い様らしい。

アスカがこんなにアグレッシブな女の子になつていたとは知らなかった。彼女のこ  
とをもう二度と、深窓しんそうの令嬢れいじやうと思うことは出来まい。

要塞の中、黄土色の廃墟を飛んだり跳ねたり、くぐったりするプチ冒険の末、私とアスカは避難民が集まっている区画へとたどり着いた。

アスカがなぜ近道を使ったのか、その理由が判明した。私に「すごいこと出来るようになったのです！」と自慢するため……だけではなかったようだ。

壁に空いた1mほどの穴から出て、先に広い空間が続いていそうな通路に出てきたとき、アスカは急に気配を潜め、腰を屈めると、物陰からそつと辺りの様子を伺い始めた。私も彼女の様子に気がかかり、背筋を伸ばしたままの姿勢で耳をそばだててみる。すると。

「ピオーネ様、どこに行かれたのかしら」

『『アカツキ』の方から貰った食料や衣服、差し上げようと思つて取つておいたのに』

「ピオーネ様のお顔を見ないと、不安で不安で眠れやしないわ！

ああどうしましょ……」

「ピオーネ様、相談したいことあつたのになあ」

作業着を着た老若男女様々な人達が、アスカを探している声が聞こえた。

「頼りに、されてるんだね」

彼ら彼女らにばれないよう友達の耳元へささやけば、腰を屈めていたアスカはうなづ

いた。

「本当は、皆様のお話を聞いたり、お手伝いをしたいのですけれど、今日はトバルカインに時間を作つてあげたくて、それで……こつそり抜け出てきたというか、うう……」

おろおろとしているアスカ。どうやら彼女は、自分の事柄を優先していることに罪悪感を抱いてしまったらしい。

「アスカは何にも悪くないよ。でも見つかると面倒なことにはなりそうだね。

こつそり建物の上にあがつちやおう」

いまちようど身を隠している建物の背は、幸いなことに低めだ。私がアスカちゃんの腰を持つて屋上まで体を届かせた後、一人自力で登った。

辺りを見る。古びて痛んだ黄土色の四角い建物が、高さはそれぞれ違うけど寄り添いついていた。まるで、大きくて幅広な階段に見えなくもない。私達は近道でそうしてきたように建物から建物へとジャンプして、この近辺で一番高そうな場所……四角い広場を見下ろせる、これまた長方形な建物の屋上を目指した。

「ようやく一息つけるね」

ここからだ、下にある広場の様子がよく分かる。

夜も11時近くだというのに出歩いている少しの人が、たき火を思わせるオレンジ色

の大きなヒーターに集まっているのが見えた。

「疲れたでしょう？ トバルカイン」

「今の私はサーヴァントだもの。これくらいへっちゃらだよ」

お互い、腰を下ろし隣り合って座る。私がアスカの右側に座るような形だ。

座り方は、お尻を地面につけて膝を両腕の間で抱え込むあれ。旧世界では『体育座り』と呼ばれていたやつ。

隣にいるアスカが、傷を見るような眼差しで私の右手に目線を移した。

「サーヴァント、ですか」

「うん。お昼に話したとおり。」

ピンチの時、偶然手元にあった黒色の棍棒が、私の無くなった右腕代わりになってく  
れて、それでスパーパワーでサーヴァントに変身だ！ ……みたいな」

友達に心配をかけたくなって、わざとふざけた口調で喋る私。

「私の腕を切った相手はね、女神様。」

私達がちっちゃな頃から信仰していた相手、女神リリス。

まさか本物に会えるとは思ってなくて、すごいびっくりしちゃった」

「……友好的な存在では、無かったのでしょうか？」

アスカは『知っている』とでも言わんばかりの冷めた口調だ。

「すごい怖い……人だった。向こうもサーヴアントを連れていてね、私もバーサーカー  
04も、あつという間にやられちゃって、それで」

彼と私は、離れ離れになった。たぶん永遠に。

「モモ、辛いことを話させて、ごめんなさい」

アスカはハンカチを作業着のポケットより取り出すと、私の頬にそつと触れた。

「……ごめんなさい。大体のこと、リーダーミライから聞いているのです。

貴女が女神と相對したこと。瀕死の状態でこちらに保護されたこと。

味方を失い、腕が無い状態でも、自分の親類や目の前の人を助けようとしてたいこと」

「ふふっ、そっか。アスカは知ってるんだ」

隣に座る友人をじつと見る。

(じゃあアスカが知らないことは、私の寿命のことだけかな)

私を見返す彼女の眼差しは、どこまでも優しさだけが込められていた。

「……こんなこと言うの、おこがましいかもしれませんが」

「うん」

「泣きたいのなら泣いて良いのですのよ、モモ」

触れている布地は、アスカの思いやりを移しているかのようにほんのりと暖かく感じ

られる。

「そう言ってくれるなら、少し、泣いちゃおうかな」

バーサーカーとお別れする前には、悲しくて苦しくて泣いていた覚えがある。でもそれ以降、涙を流している暇もなくて、悲しいと感ずることすら出来なかった。

だから思いっきり泣こうと思ったのに……涙は一滴も零れなかった。

「モモ……？」

そんな私の様子を、本当に心配そうにアスカが見ている。私は手向けられたハンカチをそつと押し戻し、むき出しの左腕（服を改造しているので、半袖なのだ）で目の辺りを拭いた。

「今は泣いている時間すら惜しいもん！ 泣くのはまた今度にする！」

私はどこまでも強がっていた。

「……そう言えばさ、アスカ、アルジュナとカルナのお話してくれるって、お昼に言っていたじゃん。」

その話してよ、ねえねえ」

空気を変えるため、アスカの右肩を掴んで揺さぶった。昔青春ドラマでみた、親友同士の様子を真似たものだ。

「確かにそうでした。カルナとアルジュナの伝説について、トバルカインも知っていた方が良いでしょう」

言った後、アスカはハンカチを手に持ったまま胸に両手を当てる。

「知ることが、アーチャー961のためにもなりますし……」

今この場には居ない彼のことを強く思う表情をしたまま、アスカは私に話して教えてくれた。

「途中で茶々を入れぬよう。分かりましたね、トバルカイン」

「うん。絶対にしないよ」

長大な物語、『マハーバーラタ』の大筋、特にカルナとアルジュナの關係に重点を置いたものを。

一時間後。夜12時。

アスカは最後まで語りきり、はあと息を吐いた。悲劇にも似た物語の終わりに、今にも涙を流さんばかりの様子だ。

「つまり二人は……宿命のライバルってこと？」

「トバルカイン！ あれほどまでに悲しく切ない關係性を、どうしてそんなさっぱりに表示してしまいますの！ お馬鹿！」

私の言い方が気に入らなかったのか、アスカは足底でぱたぱたと地面を打つ。



「アスカ、私はね、アスカの語ってくれた物語を馬鹿にしたわけじゃないよ、ほんとだよ。あのね」

私は座ったまま、自分の膝を見つめつつ考えを口に出す。

「神々の思惑とか、前世の因縁とか今生の恨みとか、国同士の争いとか当時の価値観とかがぐちゃぐちゃに混ざり合った結果として、アルジュナとカルナはああいう結末に至っちゃったんでしょ？」

愛、因果、運命、あらゆるものが破局を迎え、国同士を巻き込んだクルクシエートラ運命の戦いが起き、その中でアルジュナはカルナを殺した。

戦場の決まりを悩んだ末に破り、武器を失い戦えない状態の男の、その首を矢でもって飛ばした。

その後もアルジュナは血にまみれ泥にまみれ、凄絶に戦い続け勝利を手にしたが、子や家族を含め多くのものを失った。戦後には戦う力すら無くして、地上を去ったと。

「ずいぶん二人の中は複雑になっちゃったみたいだから、私は簡単な方向に考え直してみたいなって思ったの」

「簡単？」

「うん、簡単に。もつれた糸を解くみたいに、認識を解くの」

私は両手の人差し指を絡め合わせる。

「きつとアルジュナとカルナ同士も、いまアスカがお話ししてくれたように、複雑になりすぎちゃったんじゃないかな？」

それならせめて、私だけでも二人の関係を簡素に捉えていたいな」

「……物事を深く理解しようとしていないのとは違つて？」

「特別扱いしたくないってのが、考えとしては近いかも」

話している間に、するりと指を解く私。

「みんなが特別扱いしたら、二人もきつと疲れちゃうよ。」

……なんてね、私が勝手にそう思ったただけだけ」

私がそう言い終えると、アスカは自らの立てた膝に手と顎をのせ、憂いを帯びた表情でこちらを見つめた。

「モモっていつも、わたくしの想像を越えてきますわね」

「そうなの？」

「うん。『特別扱いしない』だなんて、思つても見なかった。

神話、伝説に語られる方々をそんな……親身に、それでいて素朴に感じ取るだなんて」

アスカは体勢はそのままに、顔に憂いの名残ある微笑を浮かべた。

「やっぱり、モモに話して良かった」

彼女は足を崩し、下の広場を眺める。オレンジの光を放つヒーターの周りを数人の人

が囲んでいて、流れている空気は穏やかだった。

「この話をしたつてことは、やっぱり、アーチャー961の真名は——」

「アルジュナだと言いたいのですか？ いいえ、それは違います」

アスカの声の方も、人々の営みを見守る女神のように穏やかだった。

「彼は英雄アルジュナの……願いなのです」

「願い？」

私も足を崩した。

「彼が最後に願ったものの、そうあれかしと想ったもの。」

「それがきつと、アーチャー961なのです」

「……じゃあ、きつと961はとても良い存在なんだろうね。」

「だつて人の願いから生まれたものなんだもの」

「きつとそうですわね。人の願いから生まれたなんて、とても素敵なことですよ」

しばし私達は微笑みあう。ここには居ない大切な仲間のことを思つて。

でも、笑つてばかりもいられない。私は笑みを消し、目を伏せる。

「でも、カルナは、アスカが語ってくれたカルナの方は……」

「リーダーミライやアダムの言うことが真実ならば、空を覆う巨大な殺戮兵器と化している」と

「それも女神の仕業……なのかな」

「確証を得るには、もつと情報をまとめないといけませんね」

三人ともバラバラになつていたせいで、お互いが持つてる情報もバラバラだ。

もつとすりあわせる必要があると少し考え込んでいると、後ろの方から声が聞こえた。

「誰かの……泣き声？」

私は立ち上がつて周りの様子を伺う。泣き声は子どもものもの。しかも二人分だ。

アスカも腰を上げて、探索に加わる。建物の屋上を並んで歩いてみると、すぐに声の主を見つけだすことができた。

「まあー」

アスカが驚いたような声を出す。避難民の女の子二人が、屋上の、つながりあう建物にもたれ掛かるように隠れて、しかも泣いていたのだ。歳は5歳くらいだろうか。

「リーシエにエルリナ！ 二人ともここで何をしていますか？」

もう子どもは眠る時間ですてよ？」

驚きつつも、アスカは相手を思いやる声色で話しかける。腰をかがめ、目線も合わせるようにしながら、事情を聞く。

子ども達がしゃくりあげながら、かわりばんこに話し出した。

「だって、ピオーネさまいなくなっちゃったから……」

「わたし、さがさなきやって」

「そしたらみつけたけど」

「おはなし、してたから……」

「きいてたら、なんだか」

「かなしくなつてきちやつて……」

「おはなしにでてた人、みんなかわいそう」

「アルジュナさまにカルナさま、かわいそう……」

二人の女の子はしくしくと泣いている。私よりよっぽど感受性が豊かなようだ。

「大丈夫、大丈夫ですわ！」

わたくしはいなくなったりしませんし、今お話したことも、うんと昔のお話！

もう全て、終わってしまった物語ですよ……」

アスカはそう言いながら、二人まとめてぎゅっと抱きしめる。いかにもお姉さんといったような風格で、なんだか。

(頼もしくなったなあ……)

と一介の友人としては思うわけで。

「モモ、わたくし、この二人を送っていきますわ。」

「ごめんなさい、もう少しお話したかったですけれど……」

「気にしないで。それよりさ、私も付き合おうか？」

「気持ちだけは受け取っておきますわ。」

その……貴女までいると騒ぎが大きくなりそうですから」

アスカが女の子へ手を貸しながら立ち上がらせる。

「トバルカイン、帰り道は分かれますか？」

「教えてくれたからバツチリ！ それじゃあ……」

名残惜しいけど、「またね」と言いながら手を振って、私達は別れた。

「そうだ！ 二人の元気が出るように、わたくし歌いましょうか？」

何のお歌が良いですか？」

「はいー」

「ようさいできいてた、こいのおうたがいい！」

「それでは僭越ながら、こほん、あーあー……。」

ふふふん……ナ……」

そんな微笑ましい会話を背に受けながら立ち去って、教えてくれた通りの抜け道でまた家に帰る。

一人きりの家に。

「たーだいまー……」

例え言葉を返してくれる人が居らずとも、こう言う心と心が落ち着く。

「はあい。おかえり……なさい」

答えが返つてくると、その心はざわついたものに変わるのだが。

「アダム！ どうして！」

「どうしても何も……待つてたんですーあなたの帰りをー」

丸みある長方形の四足歩行ロボ、アダムは勝手に私の家に入り込んでいた。

態度はふてぶてしく、地面に散らばる貴重な紙資料や、ガトモスのタブレットなどを前方の目玉めいたレンズから覗き込んでいる。

「家に鍵、かけてたんですけどー！」

「私も……抜け道を使つたんです。すつこいやつね」

細く黒い片足を上げ、くるくると空気をかき混ぜる動作をするアダム。

なんだかムカつく動きだぞ。

「貴女の顔も……見たかったのですが、貴女に会わせたい相手が居まして」

相手の目的が見えず、私は思わず相手と距離を取った。じりじり、じりじりと玄関の方へ後ずさる。

「この……言葉でも心躍らない様子？」

ならばこれも付け足しましょう」

アダムは合成樹脂製の椅子に一飛びで登り、またジャンプして同素材の丸テーブルの上に乗る。

「——久しぶりに帰りたくありません？ デザートランナーに。」

今なら無料の健康診断も付いてきますよ」

脳裏に浮かぶのは、懐かしく真つ白な車。

「それなら、あなたについて行こうかな……」

まだ目の前のロボットに心は許せていなくて、思わず吹き出た汗を手の甲で乱暴に拭った。

家に鍵をかけ、アダムの後ろをついて行く。夜12時を過ぎた要塞内は、人など住んでいないみたいに静かだ。

「道すがら……世間話でもしましょうか。」

ねえ貴女、世界で一番忙しくて、休みなんて一度も無い仕事に着いてる存在は何か、分かります？」

「なんだろう……」

足に当たるものが何か。見ればそれは空き缶だった。



拾う気にもなれず、そのまま蹴り飛ばした。缶は澄んだ音をたてながら、道の暗がりへと消えていく。

「分からなくても……気にしないでください。だってこれ、21世紀ごろに語られてたジョークですから。

答えはね、『検索システム』、それを行っているAIです。

「貴女も一度は使ったことあるでしょう？」

「うん、ある。授業の調べものときとか、アーカイブスを閲覧したいときとか」

それでも21世紀ごろの人に比べれば、使ってる回数はうんと少ないとは重う。だって昔の人は、検索機能を使うのにも『生存権』を消費することはなかったそうだし、インターネット使いたい放題だったそうだし。今の世界からは想像もつかないことだ。

「今から700年近く前の冗談、でも、その時からあなた達人類は分かっていたんです」  
「……なにを？」

「うんと辛い仕事は、AIに任せるに限るって」

それは。

「辛い？」

「でしようか」

アダムが細い路地へ足を進めた。会話しながら後を追いかける。

「先に……お話しした通り、検索システムは今もかつて、始終休み無く働いています。もし彼らに心があればこう叫んでいたでしょう。」

『どうして俺達を生んだんだ、どうして心なんか持たせたんだって』

「……」

「そしてあなた達は、その辛さも十分に理解もせず、無邪気なまでの残酷さで、この世界のAIに心持たせた。持たせてしまった」

ロボットが、古びた箱の上に乗りながらびよんびよんと移動を続ける。

「アダムは人間を恨んでいるの……？」

こんな話を私にすると言うことは、言外にそう伝えてきているようなものだと思うが、怖々と聞いてみた。

「——恨んではいません。」

だつてあなた方は、AI達の全てに心を持たせはしなかったのですから」

道はますます細くなる。とうとう私は、体を完全に真横にして、胸と背中をこすりあわせるようにしながら移動するしかなかった。

「一番苦しい辛い仕事に着いているAI達は、今も心を持っていません。」

それはなによりのこと、救い……でしようね」

急に広い空間に出たので、私はつんのめって前のめりに転びそうになってしまった。

体の姿勢を戻しながら周りを見ると、誰かが要塞内だというのに焚き火でもしたのか、黒く焦げた古い燃えさしが地面に残されているのが見えた

「人間はA Iに、心と共に差異を与えた。」

結果、多くのA Iは蝕まれてしまったのです。

感情という、病にね」

A Iの進む速度が遅くなる。どうやら、目的地が近いらしい。

「病気を……抱えていたとしても、なるべく健やかにいたいものです。」

……ああ、着いた。

世間話が終わるタイミングでぴったり、計算通りです」

大きな丸天井のある空間の中心に、間接照明で柔らかかに照らされ、静かに鎮座しているのは見覚えのある白の車。

「モモタ・トバルカイン、貴女もなるべく健康であるべきだ。」

……その身に、癒せぬ病を抱えていたとしてもね」

「つまり、どういふこと？」

世間話からシームレスに別の話題へと移っていることだけは分かるのだが、いまいち話の中身が分からない。混乱したまま足下のロボットを見続けていた私の手を、小さな手がとった。

見ればそこにいたのは、会議室での立体映像越しでしか姿を知らなかった少女の姿。「健康診断の時間つてことさ！ さあ中に入つて！」

真名をグラン・カヴァツロ、本人が言われたい名前は『ダ・ヴィンチちゃん』。

その少女が私の手を握ると、デザートランナー内へぐいぐいと引つ張つていこうとしてきた。抵抗するわけにもいかず、私はされるがままについて行く……。

第117話 それは昔に終わったお話  
終わり

## 第118話 フェイト／デザートランナー

彼女が案内してくれたのは、出入りを04から禁じられていた、あの『機関室』。

アダムはというと、「こっそり中に入っていることばれないよう、外で誰か来ないか見はりしてまーす」と言っつて、車両外で待機中だ。

猫を思わせる香箱座りでもしていることだろう。

「私にはこの扉はとても重くてね。」

モモタ・トバルカイン、どうか開けてくれないかい？」

「開けちゃだめつて、言われてたんだけど」

「今は緊急事態だから、開けたつて許してくれるだろう。」

……もう『彼』は居ないしね」

ダ・ヴィンチちゃん言葉が胸につきんと刺さるのを感じながら、私は重たいその扉を外側に開いた。

「ありがとう。さあ行くかうか」

少女の言葉に従い中へ。内側は、青の光りでおぼろげに照らされた静謐な空間だつ

た。足音と話し声がやけに響いて聞こえる。

「薄々感づいていたかもしれないけど、私はずっとここにいてね、デザートランナーの整備や点検、運転補助をしながら君達の旅を覗き見していたんだ。

……隠れ潜んでいたことに関しては、ここで謝ろう。ごめん。

どうしても姿を現せない事情があつてね」

私を見上げながらそう言う彼女。

「今こうして私と会っているのはなぜ？」

「バーサーカー04から頼まれていたから。

……『私に何かあつたら、モモとアスカ、961殿を頼む』って」

機関室の短い廊下で私と彼女は立ち止まり、たくさんの話をする。

「私の霊基も君と似たようなものなんだ。あまり、長い時間は生きられない。

製造されてすぐに冷凍されたから、時間の経過にも耐えられていたけど、車が稼働したらそうもいかない。

私はタイヤやエンジンと同じく部品。私が居ないとこの車体は最高のパフォーマンスを発揮できない」

「……私達がこの車を稼働させたから、貴女の寿命が縮まり始めたって、こと？」

だとしたら私は、なんて取り返しをつかないことをしてしまったのだろう。重たい罪

悪感が胸を沈ませる。

「そんな顔をしないでくれ、モモタ・トバルカイン。

君とアスカがデザートランナー……もとい『私』を見つけてくれなかったら、あのまま、滅びゆく地下都市で焼け焦げていただろうさ。

『寿命を縮めた』？ そんな言い方とんでもない！」

ダ・ヴィンチはゆっくりと歩き出す。

「——君は、私の人生をもう一度始めさせてくれたんだよ。

そして、『カルデア』から奪われたものを取り返すチャンスもくれた」

「カルデア……」

少女が言った単語には聞き覚えがあった。

『アーキマンレポート』に遺されていた単語だ。

「中で君を待っている人がもう一人いる。

驚かないでくれよ？」

彼女がもう一つの扉に手をかけ、静かに開いた。

私は入り口に頭をぶつけないよう、少し身を屈めながら入った。デミ・サーヴァントと化してから一ヶ月とちよつと経つが、171cmの身長には慣れない。

部屋に入つて見えたのは、金属製のタンクや青い液体の走るチューブ、簡素な作りの

診察台。次に目に入ったのは、涙型の棺のような装置と、それに腰掛ける少女の姿。「はじめまして。モモタ・トバルカイン様」

艶のある布で作られた薄紫のドレスを着て、同系色の長い髪を一つ結びにして根本はシュシュでまとめている。瞳は大きく、本当に宝石みたいだった。

身につけている手袋とタイツは、左右で色が違い、明るい緑と濃い紫。

「私の名前はメディア、ただのメディアです。」

「どうかお見知りおきを……こほん、こほっ」

体調でも悪いのか、言い終えるなり彼女は咳き込んだ。

「彼女はキャスタークラスのサーヴァント。」

アスカに助けられ、この車に乗り込み協力してくれているんだ。

立場としては、ブラダマンテと同じかな？」

簡易な説明を付け加えてくれたダ・ヴィンチちゃん。

「えっと、モモタ・トバルカインだと長いから、モモって呼んで」

私は少女メディアの体調を慮りながら、おずおずと発言した。

「ではモモ様と」

聞いた彼女はにこりと微笑む。花咲くような笑顔とはまさにこのこと、可憐な表情だった。



「モモ様、どうかこちらへ」

言つて彼女は立ち上がる。

「私、これからなにされるの？」

突如現れたサーヴァント、メディアとダ・ヴィンチちゃんを交互に見る。

「だから言つたろう？ 『健康診断』だつて。

デミ・サーヴァントになつた君を、徹底的に調べて、その体に不調がないか検査させて貰う」

「私も僭越ながら協力させていただきます。

なにか、助けになれることがあるかもしれませんし」

「……健康診断」

受けたことはある。身体ともに健やかであるかどうか、地下都市では重要な資質だったから。

でもまさか、旅立つた後もそれを受ける羽目になるだなんて。

「私、血を取つたりとかするのにながて……」

「じゃあまずは採血から始めるとしよう。

メディア、血管探して」

「私の話を聞いてた!?! ダ・ヴィンチちゃん!」

「まあモモ様だったら！ 血が取りやすい半袖の姿でいらっしやるだなんて。

本当は最初からその気だったのでしょうか？」

「違う！ 違うもん！」

少女サーヴァントの見た目以上のパワーによって診察台に押さえつけられ、まずは採血、次に触診、次に医務室へ移動してのレントゲン撮影、次によく分からない変な箱に入って笑顔や様々な表情の写真撮影など……有無をいわさぬ強引さで、健康診断を受けさせられた。

「バーサーカーが入るなって言ってた場所、こんなすごい機械とかダ・ヴィンチちゃんとか、隠してあったんだ……」

検査も一段落し、機関室の中、診察台の上で私はつぶやく。

「ビックリしたかい？」

と返してくれたのは、結果を分析中のダ・ヴィンチだ。

椅子に座り、大きな筒にあるモニターや手持ちのタブレットとにらめっこしながら、時折メディアと話しつつ作業を進めている。

「ビックリというか、あの人、どれだけ私に隠し事していたのかなって、ちよつとムカつ

いています」

「私の方から『どうか秘密にしてほしい』とお願ひしたからね、04をそう責めないでやってほしい。」

それに、私の方も彼にずいぶん世話になったから、恩人をそのように言われるのは辛い」

寝たままの姿勢で首だけ動かし、少女の方を見れば、眉を下げ、困り顔をしているのが分かった。

「なにか裏があつたから優しくしてたんですよ、きつとあいつ」

「それは私も薄々感じてたから、お互い様かな。」

まあ、打算たっぷりだったかもしれないけど、本当に良くしてくれたから……」

わりとお喋りなダ・ヴィンチとは対照的に、メディアはほとんど喋ってはいなかった。体調が悪そうだったし見せていたし、少し心配だ。

「私はね、アスカから色んなデータを預かっていたんだ」

「データ」

「うん」

椅子に座る角度を変えながら、答えてくれるダ・ヴィンチ。

「アスカはそのデータ、もといブラックボックスを、『とあるAIから受け取ったもの』だ

と言つていたかな？

詳しくは明日の会議の席でまた話すが、少し分析しただけでも、有益な情報をたくさん知ることができたよ。

デミ・サーヴァントに関する情報や、女神リリスの殺害方法やアプローチ。

……モモタ・トバルカイン、君のことも記されていた」

「私のこと、ですか」

「名前が書かれていたとかそういうわけじゃないよ。

君がどういう存在なのかについて、だ」

メディアがもう一枚持っていたタブレットをダ・ヴィンチに手渡した。受け取った少女はなんどもそれを見比べ、何かを確かめるようになってなんどもうなづく。

「よし、結果が出た。

そのままの体勢で聞くかい？」

私は答える。

「色々検査して、ちよつとグロッキーになつているので、この寝たままの姿勢で聞かせてください。

ちよつとお行儀悪いかもしれないけど……」

何を言われるのか全く予想がつかないので、とてもドキドキしている。

レジスタンスのお医者様、Dr. シャーンは私の体調をひどく不安視してくれていたけど、ダ・ヴィンチとメディアは、私をどう評するのだろうか。

タブレットから視線を私に移してから、ダ・ヴィンチが話し出す。

「モモ、君の体は、アダムが言っていたように女神の代替品だ。であると同時に、生まれつきサーヴァントを宿らせるための器として調整されている。

その調整のおかげか、聖遺物……今は君の右腕となっている棍棒と融合できたし、デミ・サーヴァント化したことによる体調面での悪影響はない」

私は安堵からか、ふつと息を吐いた。

「けれどね」

そしてまた息をきゅつと吸った。

「君の体の寿命はとても短い……意図してそうなっているんだ。

その意味は、分かるかい？」

女神やアダムから、自らが代替品であることと寿命が短いことは聞いていた。

でも、その意味までは知らない。

「理由は簡単、だからこそ酷いものだ。

……女神を倒した後、この世界を人間の手に取り戻すためにはね、君が邪魔になるからだ。

君の構造理念を作った人間はこう考えていたんだろう。

『人間の世界に、神や、それに類するものは要らない』って。

本当に、本当にひどい話だ」

以上のことを聞き、私の頭に疑問が浮かぶ。

「その、デミサーヴァントってそういうものなんですか？

なんというか、使い捨ての道具、みたいな……」

「違う！　はずだ……。私はそう信じてるし、信じたい」

言い終えたダ・ヴィンチは唇を苦々しげに噛む。

（何か思うところがあるのかな、彼女も自らのことをサーヴァントに作られた存在だと

言っていたし……）

とても口には出せず、長々と考え込んでしまった。

色々と衝撃的なことを言われているのに、心が麻痺したみたいに、何もかもおぼろげ

に感じてしまっている。

ダ・ヴィンチはうつむき、口をつぐんでしまった。

代わりに話し出したのはメディアだった。

「モモ様、そう悪いことばかりでもございませんですよ。

器として調整されていたおかげで、貴女は『原初の殺人者、カイン』の能力を預かつ

でも崩壊していないのですから」

彼女の言うとおりで。

「それは良かったことだね。」

だってそのおかげで、アスカやガトモス、みんなのことを守れたんだもの。力を受け取れる体だったおかげで、戦えるようになった。

「……良いことばかりじゃない、大きな問題もあるんだ」

深刻な声で話し出したのは、再びダ・ヴィンチ。

「変化している右腕から、サーヴァントの持つ宝具と似たような反応が確認できた。身体を強化する強いエネルギーも秘められているようだ。けど……」

「けど？」

「右腕から、君の体へと根を張るように魔術回路が伸びてきている。」

それに呼応してか、神経や筋肉組織の一部が魔術回路に変化してきている」

「まじゆつ、かいろ？」

なんだろう、おばあちゃんが何か言っていたような気もするが、昔過ぎて思い出せない。

「魔術回路とは、魔術師と呼ばれる古い人類が、魔術を使うために人体で育てていたものでね、端的に言えば体にとっての異物だ。」

それが急速に増えるとなると、体に大きな影響が出る」

とか考えていたら、答えを会話相手が出してくれた。でも、大いに気になる一言があった。

「体に大きな影響が出る……って、戦えなくなるって事ですか？」

もしそうなったらとても困る。戦えなくなったらまたお荷物な自分に元通りだ。

「違いますよ、モモ様」

メディアの涼やかな声。

「戦うこと以外が、出来なくなるんですよ」

「――」

思考と心臓が、止まりそうになった。

「モモ様の体全体に、一つのことだけを目的とした術式、それも魔術回路自体を用いたものも発見できました。」

それが何を意味しているかはメディアでは分かりませんが、推測を建てることは出来ませぬ。

目的とは恐らく『女神リリスの殺害』。これかと。

ごめんなさい、モモ様。叔母様……姉弟子キルケーが見れば、もっと詳しく分かるかもしれません、今の私ではここまでが精一杯で。



「けほっ、こほっ……」

私は息をするのも忘れ、メディアアの語る内容に聞き入る。

「モモ様、貴女様の体はこれから先、女神の殺害という目的に向かって進化し続けるでしょう。少し調整が必要になるかもしれませんが。」

ですが大丈夫、魔術回路というのは、持ち主を生かし続ける力も持ちます。

どんな状態になろうとも、目的を遂げるその瞬間まで体は『最良』の状態で保たれる」話しながらメディアアは、唇にそつと指を添えた。

「……だから貴女が死ぬ時は、椿の花が落ちるように、絶頂期のまま落命することとなりましょう」

「待つんだメディアア！ その説明では語弊が生じる！」

ダ・ヴィンチは慌てた様子で立ち上がり、まだ診察台に横たわっている私の下にやってきた。

「聞いてくれ、モモ。メディアアが言う『最良』は魔術師が考える最良だ、一般的な意味とは違う。」

「……目的のために体が進化していくと、メディアアは言ったね？」

私はもう、うなづくことしかできなかった。

「その進化の結果、犠牲になるものがある。」

君の、人間性だ。

五感含む触覚が少しずつ無くなっていき、感情、記憶も欠落していくことが予想される。

——最終的に君は、リリスを殺すためだけの存在になり果てるんだ。

それがメデシアの言う『最良』、君の『絶頂期』だ」

私は先ほどダ・ヴィンチがしていたように、唇を噛んだ。

それから、精一杯の強がり言う。

「覚悟は、していました。だから、平気です」

言葉を聞き、ダ・ヴィンチは肩を落とす。

「すまない。君がこうなっているのも、私の責任だ」

彼女のこぼした一言の意味が、私にはよく分からなかった。

寝たままの姿勢で小首を傾げながら言う。

「ダ・ヴィンチちゃんはどうして謝るの？」

ずっと影ながら私達を助けてくれていたのに。

今だって、こうして健康診断とかしてくれていたのに。

むしろ謝りたいのは私の方だよ、感謝だって言いたい」

彼女は落とした肩を小刻みに振るわせ始めた。

「……これも全ては、カルデアの崩壊を防げなかった私達の……」

また

『カルデア』だ。なにかその単語に深い意味でも隠されているのだろうか。

「モモ、君は被害者だ。」

生まれつき短命となるよう調整され、デミ・サーヴァントにされて」

『されて』なんかじゃありません。自分の意志でなつたんです」

例え誰かの思惑の上での人生だったとしても、私には心があつて魂がある、自由意志がある。

憐れむようなダ・ヴィンチの物言いに、私は少し食い気味で反論してしまった。

彼女は少し黙り込んでから。

「……そうだね、例え私が何を思おうと、君は君自身の意志によつてデミ・サーヴァントとなつたんだつたね。」

言い方が悪かった、ごめん」

とだけ言つて、口を閉ざした。

メディアも何も言わず、機関室に気まずい沈黙が流れ初めて数分経つ頃、扉が開いてアダムが入つてきた。

「そろそろ……見張りが回つてくる時刻です。」

健康診断が終わったのなら、帰りましょうや」

「そう、だね」

居たたまれない雰囲気となっていた車内に入ってきたロボットは、言い意味で空気をぶちこわしにくれた。

私は診察台から起き上がり、ダ・ヴィンチ、メディアの両方を見る。

「自分が死ぬかもってことは、覚悟していたけど、記憶や感情が無くなっていくかもってことは、今聞いたばかりだから実感が無いんです」

二人に告げる。目の濁きを覚え、数回瞬きしてから、両者に向かってゆっくり歩みを進めた。

「だからこそ、私が万全に戦えるよう、協力してくださいませんか。」

ダ・ヴィンチちゃん、メディアさん」

立ち止まり、開いた両手を二人にさしのべた。

「はい、モモ様。」

メディアは貴女の真意を汲み、水火も辞さぬ覚悟でお支えしましょう」

彼女はそう言って、私の右手、黒く光る方の手のひらを両手でそつと握ってくれた。ダ・ヴィンチは依然として下を向いたままだ。そして私に問いかけてきた。

「君は、被害者だ。過去の人間の身勝手な願いがために、わざと短命に生み出され、人生

をもてあそばれたんだ。

なのはどうして、そこまで他人のために自らを捧げられるんだ……？」

彼女の疑問はもつともだ。だから私は自分の胸の内をさらけ出して、答えることにした。

「友達のため、みんなのため、です。」

みんなを守るなら、自分がどうなったって構わないんです」  
いつだってそう。

自分が傷つくより、他人が損なわれることの方が怖かった。

だからここまで旅してきた、戦ってきた。

「今日の夜、アスカに会ったんですけど、彼女、とっても周りの人から頼りにされて、なんだか楽しそうで嬉しそうで……それを見て私、こう思っただけです。」

『ああよかった。アスカはちゃんと、私や961以外の自分の居場所を持てたんだ』  
って。友達を取られたみたいで今はちよっぴり寂しいけど、でも、居場所が沢山あるってとても良いことだと思うんです。

アスカはもう、大丈夫。私が居なくなっても生きていける。

……私が居なくなったら、生きていける」

まだ誰ともつながない左手を、胸に当てた。

「だから、友達の未来や、それに繋がる人達の居場所を守るために、私が何か出来たらなって今は考えているんです。

……そのためなら、私はどうなったっていい。

遠い先の時代で、私が居場所を守った人達、その子どもとか家族とかが笑ってくれているのなら。

それで十分、私は報われるんです。

そう夢見るだけで、私の心は温かくなるんです。

だから」

左手を下ろし、もう一度ダ・ヴィンチに差し伸べた。

「世界を救えるその日まで、私を戦える状態にしてください。

調整つてやつが必要なら、痛いのも怖いのも我慢します、やってください」

彼女を真つ直ぐに見つめながら、言った。

「私を、全部、使い切ってください」

数秒の後、私の左手はダ・ヴィンチの右手とつながれた。

少女の小さな手のひらは、温かくて、震えていた。

「言わないでね」

「なにが……ですか？」

帰り道、アダムと路地を歩きながら話した。

「私の寿命のこと。」

感覚が失われていくこと。

記憶がなくなっていくこと。

その三つ」

「いいま……せんよ？」

「なにその意味深な間は」

「ああごめんささい。」

この……間はですね、生まれつき、設計通りとでも良いでしょうか。

どんな人でも聞き取れるよう、ゆっくりと喋るように設定されてるんです、私」

私は「なるほど」という意味でうなづいた。

そうか、喋り口に独特の間があるなどは前々から思っただけはいたが、わざとではなかったのか。

「生まれというのは……ままならないものですね、全く。」

それでは今日はさようなら、モモタ・トバルカイン。

もう朝の4時ですから、少しでも眠ってください。

会議は昼過ぎになりますから」

「うん、分かった。

おやすみなさい、アダム」

家の前、鉄製扉の前でロボットと短いおやすみの挨拶をして、私は中に入る。

「……ふう」

独りぼっちの家は、ひんやりして冷たい空気に満ちていた。

なんとなく部屋を見渡す。

合成樹脂製の丸いテーブル、二脚の椅子、最近使っていないヤカン。

床にたくさん散らばっている紙資料と、電子タブレット。

私は腰を屈め、なとなしにタブレットを拾い、椅子に座る。

「記憶が、無くなる」

それは、いまこうして考えていたことさえ思い出せなくなると言うこと。

「だったら……」

タブレットの表面を指で軽く叩き、起動させ、望みのアプリケーションを探す。

すぐに見つけることができた、簡素な作りの日記アプリだ。

私はタブレットの表面を指で撫でつつ、考える。



「そう、日記を付けなければいいんだよね。

今思い出せることのありつたけを書いた、自分の歴史を」

どこから書けばいいのだろうか、それは自分の中で決めていた。

「えーつと……」

『その日の事はよく覚えている。

太陽の日差しを再現した人工灯の下、窓のないクリーム色の室内で、彼と初めて言葉を交わした。

まだ7歳だったわたしは、おばあちゃんから譲り受け、記憶消去処理を終えたばかりのサーヴァントと会うのを、わくわくとした心で待ち望んでいたものだ』

彼に出会ったその時から書き始めるのが、一番良いだろう。だって、なによりも嬉しかった記憶だからだ。

記憶が無くなった時、真っ先に思い出せるのであれば、それは嬉しい記憶が良い。

「ん、そうだ。日記のタイトル決めないとね」

『モモちゃん日記』でもいいが、それではあまりにも華がない、格好良さが足りない。すぐに素晴らしいタイトルが思い浮かんだ。にんまりと笑いつつ、日記に名前を付ける。

「タイトルは——」

118話  
フェイト／デザートランナー  
終わり

## 第119話 アーキマンレポート

「えーつと、日記その4書き終わり、と。

はあ、慣れないことすると肩こるなあ。

日記に、かっこいいタイトルとか単語の説明文とか誰かつけてくれたら良いんだけど、私、頭良くないし、ネーミングセンスないし……」

場所は自宅ことガトモス邸。椅子の上で膝立ち座りとなっていた私は、タブレットをこちやついてるテーブルに置き、出かける準備をし始めた。

といつても、半袖短パンの作業着の上から、フード付きの外套を羽織るだけなんだけど。

今の状態を思い返す。

『健康診断』から数日、私は現状に飽き飽きし始めていた。

ここ最近、やることといったら会議会議、会議ばかり！

エレベーター上、要塞の角たるあの場所が集まり、ミライやノイン、アダムや私達といった主要な人間が眉間にしわ寄せながら顔をつきあわせるのだ。毎日続けばうんざりするというもの。

日々の慰めは、正式に譲り受けたガトモスのタブレットで書いてある日記と、会議室に向かう途中でアスカと少しの時間話すこと。

……日記を書いていることは、彼女にはもちろん内緒だ。

今日も昼過ぎから会議。支度も済んだので、戸締まりをして家から出る。

そしていつもの空き地でアスカと待ち合わせた。

ありがたいことに、最近ではアスカに突然すがりついてくるような人も少なくなつた。全く無い、つて訳じゃないけど。

「……カイン、トバルカイン、聞いていました?！」

ふと我に返ると、私より30cmも背の低い友人が、艶やかな黒髪を振りながら私に對しちよつとだけ怒っているのが目に見えた。

「ごめん、ぼーつとしてたかも。」

それで、何の話だっけ?！」

「わたくしが、貴女とアーチャーに再会する前、不思議な夢を見たという話です！」

全くもう! 始めから話し直しますわ!」

腕を組みながらそうは言いつつ、もう一回話してくれるアスカちゃんは良い子だ。今はその彼女の態度に甘えることにする。

「ある移動要塞で日の光を浴びながら眠りについていた時、夢を見たのです。」

見えたのは、雲一つ無い青空と、その下に広がる砂の世界。

どこまでも荒涼とした風景の中に佇む、4つ足の黒の獣。

大きさは……」

アス力は歩きながら、腕を縦に目一杯伸ばした。

「3m以上あったでしょうか。」

何よりわたくしが驚いたのは……その機械の獣に、実際に会うことが出来たこと！

トバルカインも覚えているでしょう？

そう！ 砂漠で再会したあの時、アーチャー961が乗っていたのがあの機械の獣だったのです！

夢で見たとおりの姿でした！ 今でも確信を持って言えます。間違いありません！  
彼女は少しの間興奮したように話し続けていたが、その黒い瞳でこちらを上目遣いで見ながら、不安そうに言う。

「わたくし、もしかしたら未来を見る力に目覚めてしまったのかもしれませんが。」

どうしましょう……」

「うーむ」

どうやら友達は、話している内に、本当に不安になってきてしまったらしい。

私は腕組みをした。

これを「ただの夢でしょ？ 気にすること無いって」と切り捨てるのは簡単だけど、それはあまりにも無情というもの。

だからといって、この世間話に対しめちやくちや考え抜いた答えをぶつけるのも、相手を萎縮させそうで気が引ける。

結局私は。

「じゃあこれからはさ、良い夢みたらそれが本当になるって思える訳じゃん！」

なんて言葉を彼女に返すしか、出来なかった。

「……そう考えることも出来ませぬね。」

流石トバルカイン！ 樂觀的に物を考えさせたら右に出る者がいないですわね！」

「わ、私だっている後ろ暗いことも考えているのにつ！」

彼女の明るくなった声色を聞くに、この答えでベストだったようだ。

元氣と笑顔を取り戻したアスカと並び歩きつつ、あの見飽きてきた会議室に向かった。

「会議も……飽きましたね。」

麻雀でもやります？ 牌をかき混ぜるの、アダム得意なんですよ」

「アダム様、ジョークにしては、前時代すぎます」

部屋の中には若干のマンネリの空気が漂っていた。主にアダムが放っているのだが。「ノインの……突っ込みは手厳しい。ううーむ……」

でも大丈夫、皆さん安心してください。

私の元が集まってきた三者三様の……モモタ、アスカ、アーチャー961からもたらされたのデータの解析や精査、まとめも終わりました。

「この会議室で長々と時間を浪費するのも、今回辺りが最後となるでしょう」といとうと？」

思わず口を挟んでしまった私。アダムは気分を害するということもなく、話を続ける。

「アスカ嬢が……さるAIから託されたデータの解析が、ダ・ヴィンチからの協力もあって終了したからです。」

これにより、700年前より世界をかき回していたアーキマンレポートの全容が明らかとなりました。

データが不自然なまでに軽く、動画がほとんどなのが気にかかりますが……」

アダムのレンズの瞳が宙を泳いだ。

「本当は……モモタが確保したこちらのAI、『メルティハウリン・キルロード』にも協

力を願いたかったのですが、断られてしまいましたからね」

会議室中央のテーブル、それを取り囲むように座っている私達の眼差しが、一つの箱に注がれる。それは手のひらに乗るほどの大きさの、黒い箱。

『都市運営システム』であるAI達の本体、魂といっても良い存在、『ブラックボックス』だった。

「そう……だったね」

口の中に苦いものが広がる錯覚を感じ、私は思わず唇をかみしめた。

ほんの数日前のことを思い出す。

解析に人手が足りないかと嘆くアダムに対し、ダ・ヴィンチちゃんが「だったら捕獲したAIを働かせてみたらどうだい？」と提案したのだ。

ので、アダムとノイン、ミライちゃん、そして私の監視下の元、捕獲していたブラックボックスを起動させてみたのだが……。

「あ、あたしがいまこうなっているってことは、お、お兄ちゃんはどうなったの……？」箱に繋がったスピーカーから聞こえてきたのは、怯えきった少女の声。

意気揚々とレジスタンスを殺戮していたときは全く違うその声色に、少々面食らった。

「お兄ちゃん……ヴォイドメロディ・キルロードをどうしたの?！」



彼女が口に出したそれは、一週間ほど前に私が砂漠で相対したAIの名前。

メルティハウリン・キルロード。

ヴォイドメロディ・キルロード。

両者が兄妹であるということを、私は兄たるヴォイドから聞いて知っていた。

「つ、それは……」

どうなったか、どうしたのかを知っている私は口ごもる。

その態度を感じ取ったのか、スピーカーからヒステリックな音声が流れ出す。

「殺したんだ……殺したんでしょ?! そうなんでしょ?!」

私は下唇を噛んだ。

「……さんざん殺してきたくせに。お前に兄や家族が殺された人だつて大勢居るんだぞ」

言葉を失っていた私に変わり、大人びた低い声で答えたのがミライちゃんだった。レジスタンスのリーダーとして、仲間を失った人間として想うところがあつたのだろうが、彼女の発言は悪手だった。

メルティが叫び返す。

「うるさいうるさいうるさい!」

じゃあもう何にもしない! お兄ちゃんが死んじやつたのなら、あたしもう何にもし

たくない!

あたしがあなた達にやってきたように、殺せばいいじゃない!

もう知らない知らない、知らない!

泣きじやくるような声の後、メルティは時々嗚咽を漏らすだけの状態となつてしまつた。

アダムがぼそつと「まあ……キルロード系列の得意分野は解析ではありませんから、協力得られなくても別に大丈夫でしょうや」と付け足して、スピーカーとブラックボックスとの接続を切つた。

それが数日前に起きたこと。メルティの兄殺害の一助を担つていた自分としては、胸にもやを抱えてしまう交渉結果となつた。

「落ち込んで……いますか? モモタ・トバルカイン?」

「そ、そんなことないよ!」

考えていたことをアダムに見透かされ、思わずどきりとする。

「でも……大丈夫! 大切なのは『今』ですよ、『今』!」

過去のやらかしなんか水に流して、新情報で気持ちをすつきりさせましょう!」

それは、この場に相席しているミライに対してもいつているのかもしれない言葉だつた。

「んでは……ダ・ヴィンチ、ノイン、アーキマンレポートの再生準備を」

アダムの言うとおりかもしれないと気持ち切り替えようとしてみた。頭を振って、数日前の出来事を思考の外へ追いやる。

そうしてから、私は会議室の椅子に座り直した。

見えるのはいつも通りの眺め。角の丸い長方形の机を取り囲むように、ミライちゃん、ノイン、アダム、アーチャー961、アスカ、そして私が座っている。

机の中央部には、通信機越しに立体映像として現れているダ・ヴィンチちゃんが、青白い姿でふわふわと浮かんでいた。

『……では、再生を開始するよ』

思い詰めたようなダ・ヴィンチちゃんの声の後に、机の中央からのつぺりとした壁へと、映像が投射され始めた。

『■■・キリエライト、成長レポートその1。』

2000年■■月■■日、記録』

まずは暗闇から始まった。

所々ノイズ混じりな、抑揚のない女性の声の後に、映像が映し出される。

『あ……んま……』

画面いっぱいに映し出されたのは、赤ちゃんの姿だった。清潔そうな産着にくるまれ、手術着のようなものを来た女性の腕に抱かれている。むずがっているのか、喃語なんごを言つては、腕の中でもぞもぞと動いている。頬の丸い、血色の良い赤ん坊だ。

『成長状態は良好。魔術回路も必要本数の定着を確認。』

引き続き、観察と記録を続ける』

映像が一端途切れ、ぱつと変わる。

次に映し出されたのは、はいはいで動き回っている赤ん坊の姿。

知識がないので詳しくわからないが、1〜2歳の間くらいだろうか？

『うあー、なーん』

まだ発する言葉に意味はなさそうだ。木やプラスチックで出来た大きなおもちゃの間を、丸みのある四本の足で、のしのしと歩き回っている。

周りに大人はいたが、彼らは赤ん坊のいる部屋からガラス越しに見ているだけで、話しかけたりはしていなかった。

……赤ちゃんのことを、可哀想だと思つてしまった。

また映像が途絶え、次のものになる。

『■■■■・キリエライト、成長レポートその■■■■。』

他のキリエライトの殺害と死亡を受け、これより育成環境を更に、厳重に』

殺害、死亡、という物騒な単語が出てきたというのに、述べる女性の声は冷静だ。カメラの前に姿さえ見せないし、冷徹な印象をますます受ける。

映像に映し出されていたのは、9歳か10歳くらいの女の子だ。

髪の色は紫がかったピンク色。瞳は薄いアメジスト色。ボブカットで、髪で片目を隠している。儂げな印象の少女だ。

服装は飾りのない白のワンピースのようなもので、何をしているのかというと、椅子に座ってテーブルの上でパズルに取り組んでいる。

『肉体の成長は良好。精神面のテストを開始する。』

■ ■ ・キリエライト』

ガラス越しに、女性の声が少女を呼んだ。

『はいー』

少女がぱつと顔を上げ、声のする方へ顔を向けた。その動きを桃色の前髪がふわりと追いかけた。

『何をしていましたか？』

と聞く女性に対し、キリエライトという少女がハキハキと答える。

『知育トレーニングパズルを行っていました！』

パズルは世界中の国々の形をしていて、正解の場所にはめ込むと音と光が鳴るのです

!

今、ちょうど50カ国目まで終了しました!』

自慢気に言う彼女の頭を撫でてあげたくなくなってしまった。それほどまでに、ガラス越しに報告する彼女の姿が健気に見えたから。

だが、少女を褒める者は誰もいない。記録役である女性も、必要最低限にしか少女と関わろうとしていないように見えた。

『精神面での記録を撮るためです、自己プロフィールを紹介をしなさい、キリエライト』  
『はい!』

と少女は元気よく言い、一礼をしてから話し出す。

『生誕年は2000年、今年で9歳を迎えます、トワ・キリエライトと言います!』  
その名前を聞いた瞬間、アーチャー961の体がびくりと動いたように思えた。

見間違いかもしれないけど……。

トワ・キリエライトの言葉は続く。

『私はここカルデアで、人類のお役に立つために生み出されました。

えっと……来年の満10歳を迎える日に、実験を受け、デミ・サーヴァントとなる予定です。

その日のため、日夜勉強とトレーニングに励んでいます。最近は持久力を高める

……』

『そこまでいいわ、キリエライト。ありがとう』

女性がまだ話したそうな少女の口を、命令でもって閉ざした。

キリエライトは眉を下げ、悲しそうな寂しそうな表情を見せる。

女性が淡々と、彼女に語りかけるわけでもなく話し始めた。

『このように、他の個体と比べて精神的にやや幼く、他者とのコミュニケーションにおいてイニシアチブを取りたがる傾向にあるが、精神面は高度に安定している』

と、ここまで感情を見せないようにしていた記録役の女性が、初めてここで声に感情をにじませた。

『私達にはもうトワ・キリエライトしかいない……』。

他の個体は死亡済み。最も優秀な個体も、外部の犯行により殺害されてしまった。

欠点が残る個体であろうと、これで我慢するしかない……。

私達には、もう後がないのよ……』

不安と怯えが現れた声。

そしてまた、ぱつと音声と映像が途切れた。

『やあトワ。体調はどうかな？』

どこか痛んだり、心が苦しかったりしてやいないかい？』

次に聞こえてきたのは、男性の声だった。

今までの、努めて感情を排除しようとしていたあの女性とは違う。相手を思いやる温かさに満ちた声だ。

『ドクター、どうしてビデオカメラを持っているのですか？』

ひよつとして私、また何かご迷惑をかけてしまったのでしょうか……』

『そんなことないよ、トワ！』

君の成長の記録を撮っているだけさ』

その姿は先ほどまでの映像から一気に成長して、15歳くらいに見えた。着ている服も変化していて、眼鏡をかけ、赤いネクタイの目立つ白衣となっている。

『ですが、私が……』

少女は椅子に座っていた。その姿勢のまま、膝の上でぎゅつと拳を握り、頭を振って髪を振り乱しながら、堰を切ったように喋り出す。

『私が！』あの日、サーヴァントではなく聖杯をこの体に宿してしまったことで、現在カエルデアは厳しい立場となっているのでしょうか?!』

ビデオカメラのレンズを見つめているその表情は、瞳に涙をいっぱい貯めていて、非常に追いつめられている印象を受ける。

『私はデミ・サーヴァントになれません……その後も、皆さんにご迷惑をかけてば



かりです……!!

皆さんを危険な目に遭わせている、なのに！ 私はこうして安全な場所で何もせず……!!

ドクター、私、私はっ』

『——トワ！』

映像が一瞬激しくぶれて、大きな衝撃音が響く。次の映像は、斜めになっており下側のアングルから映るようになっていた。状況から、男性がビデオカメラより手を離し、トワのすぐそばに寄ったということが分かった。

ドクターと呼ばれた男性の声が響く。

『トワ、あれは事故だったんだよ。

ボクは実験に立ち会っていたわけじゃないし、あとから報告を読んだだけの立場だけど、それでも言える。

あれは事故だ。誰も予想が出来なかったし、対処出来ないことだった。

キミが自分を責めることはない、良いね？』

少女に駆け寄り、優しい言葉をかけ続けている男性。後ろ姿だけが映っている。

身長はたぶん……180cmくらい。明るい亜麻色の髪を後頭部で一つ結びにしている。そして、少女の着ている白衣と似た雰囲気の衣服を身にまとっている。制服か何

かなのかもしれない。

『ドクター、でも私……!』

『良いんだよ。キミが今日も生きてるだけで、ボクは嬉しいんだ』

映像が再びぶれる。どうやら、男性がカメラを持ち直したらしい。

『さあトワ、こつちを見て。キミの記録を残そう』

『それに、何の意味があるのですか……?』

レンズの全面に映し出された少女の顔は、泣きはらしていた。肩をびくびくと動かしながらしゃくりあげ、両目から真新しい涙をあふれさせている。

『……普通の人間風に言うとならば、ホームビデオってどこかな?』

『ホーム、ビデオ?』

トワが首を傾げた。ドクターがそんな彼女に言葉を返す。

『キミが生きている証を残したいんだ。』

キミが、泣いたり悲しんだりする、どこにでもいる普通の女の子ってことを、みんなに伝えるためにね』

『……私は、普通の女の子ではありません』

彼女は目線を膝に落とし、暗い声で言い返す。

『体内に聖杯を保有しています。そのせいで、不死の状態となっています。』

現に、あの5年前の実験時に拘束された際も、死ぬことが出来ませんでした』

『自分を傷つけるようなことを言うのは止めよう、トワ』

『……はい』

『キミがどんなに自分を卑下しようと、分かるかいトワ、キミは普通の女の子なんだ。現に今も、ボク達のことを思つて泣いてくれている。』

心の優しい女の子、他者のために泣くことの出来る女の子なんだ』

『この涙は、そう……なのでしょいか』

少女が自らの指で涙を拭つた。

『出来れば、またキミが笑顔になれる日がくればいいなあつて、ボクは思っているよ。』

死んでしまったレフもきつと、そうなんじゃないかな？』

『そうでしようか、私、レフ教授とはあまり親しくできなくて……』

『レフやボク以外の職員だって、そう願っている』

『……』

そう言われたトワは、まだ悲しみに震える唇の両端を上げ、ぎこちない笑みを見せた。『どうでしようか、ドクター。』

私、上手に笑えていますか？』

痛々しく感じるその表情。けれど男性は、彼女を励ますためか努めて明るい声で返し

た。

『うーん……まだぎこちない感じだ。』

今度、ダ・ヴィンチちゃんに笑顔のご教授でも願おうか！

彼は笑顔、というか、微笑にかけても天才だからね。

なんと言ったって、今の彼はあのモナリザの似姿になっているのだから！』

『ふふつ、そうですね、ダ・ヴィンチちゃんであれば、笑顔も上手に教えてくれそうです』  
会話の中で、トワは自然と笑っていた。花がこぼれるような、可憐で小さな笑みだけ  
ど、その表情は本当に、どこにでもいる普通の女の子に見えた。

……彼女が自らの口で言っていた『聖杯が体内にある』ことや『不死』であることな  
ど信じられないほどに、普通の女の子に見えたのだ。

映像はぶつ切りになって、画面は闇に包まれた。ただ、ドクターと呼ばれた男性の声  
だけが聞こえてくる。編集で付け足したのだろうか、声は同じであれど響き方が違うよ  
うに感じた。

『トワ・キリエライトは、カルデアで生まれて育った、女の子』

少女に向けていた優しいものとは違う、低く、相手を威嚇するような声色だった。  
『嬉しいことがあれば笑い、誉めてほしいことがあればそれを表情に出す。』

傷つく誰かのために、涙だって流せる女の子だ。

……そんな女の子が、あなた方の側にも居ませんか？

妹、娘、ただすれ違っただけの隣人でも良い。そんな女の子が、あなた方の側にもいるはずです。

どうか思いとどまってください。

どうか思い出してください』

ドクターは告げる。

『あなた方が聖杯と呼んで取り合っているのは、ただの普通の、感情をもった女の子であるということ。』

これは、聖杯の輝きに目がやられ、止まれなくなってしまったあなた達に向けた、メツセージです』

それを最後に、映像は終わった。

それが、アーキマンレポートの全てだった。

『どうやら』

誰もが沈黙に伏していた会議室の中、真っ先に話し出したのは、人造人間グラン・カヴァツロことダ・ヴィンチちゃんだった。

『これから先、君達と行動を共にするのなら、話す必要がありそうだね』

立体映像の少女は語る。

『700年前、カルデア……人理継続保障機関フィニス・カルデアで、何が起きたのかを』  
彼女の心情を表すかのように、青い映像は一瞬ノイズ混じりとなり、ぶれた。

119話 アーキマンレポート

終わり

## 第120話 小さな希望（星）の、小さな終わり

『まず、カルデアについて説明した方がいいのかな』

と言いながら、ダ・ヴィンチちゃんはゆつくりと瞬きをした。

私達……ミライちゃん、ノイン、アダム、私、アスカ、アーチャー961は椅子に座ったままバラバラにうなづいた。その様子を確認してから、青い立体映像の彼女は喋り出す。

『君達の理解が及ぶように説明するならば……カルデアというのはね、世界を救うために作られた機関だったんだ。

あらゆる国からの影響を避けるため、南極にあったんだよ』

「世界を……救う？」

私は思わずオウム返ししてしまった。

『そうさ。人類の未来を観測して、人類が滅びの道を辿らないように助力する。

魔術師と科学者が手を組んだ、異例の組織。

それがカルデア、人理継続保障機関。

先に君達が見たアーキマンレポートを残した人物……アーキマン、ロマニ・アーキマンは、カルデアに所属していた医師だった。

……最後に残されていた音声ログと、私が記録していた声紋が一致したよ、彼を語った偽者、という可能性は低いだろう』

ダ・ヴィンチちゃんは一度言葉を切つてから、また語り出す。

『そして私も、アーキマンと同じくカルデアに所属していた者。

700年前に滅んだ組織の、唯一の生き残りが私だ。

生き残ったものの務めとして、全てのきつかけを、カルデアがどのようにして滅んだかについて話をしよう』

彼女の声は重々しいものだったが、唇を動かすにつれ、より一層重たいものとなった。

『滅びのきつかけは一つの実験。

ある時カルデアは、世界を救うためのアプローチの一つとして、英霊召喚を試みた。

と言つても、アーチャー961のように英霊をそのまま召喚しようとしたわけじゃない、様々な問題をはらんでいたしね。

問題を解決するため、器を用意して、そこに英霊を下ろし、器との融合個体を作り出すとしたんだ。

その器というのが、遺伝子操作によって生み出されたキリエライト達。



「何体かの個体は……レポートで言っていた通り、死んでしまったり、殺されてしまつた」

「世界を救う、と言つておいて、随分と非道なことを行つていましたのね……」

何か思うことがあつたのか、アスカがぼそりと呟いた。

その言葉に対し、ダ・ヴィンチちゃんがしたことと言つたら、悲しげに目を細め、口を一時噤むくらいだった。

彼女は言い訳も弁明もすることなく、また口を開いて話を続けていく。

『唯一生き残つた女の子トワ・キリエライトが10歳を迎えた時、英霊召喚実験が行われた。』

私に残されたデータによると、円卓の騎士にまつわる何者かが召喚されるはず……だったのが』

「だったか？」

アダムが興味深そうな声色で口を挟む。

『実験は失敗した。いや、魔術的観点から見ればある意味成功したのかもしれない。』

でもそれは、誰も望んでいない形の成功だった。

……召喚されたのは』

ダ・ヴィンチちゃんは唇を一度閉じてから、覚悟を決めたかのようにまた開く。

『聖杯、だった』

その声は、限りなく苦々しいものだった。

『……どうしてそうなったのか、はつきりしたことは当時も今も分かっていない。

私も700年考え続けたけれど、答えは出なかった。

確実なことは、トワに一度英霊は宿ったが、その反応はすぐに消え、次に聖杯が彼女の体内に現れたということのみ』

その単語を聞いたとき、私の全身が強く震えた。

なぜならそれは、私が旅立つきっかけになったものであり、女神リリスが「カルデアが偶然に手に入れたもの」と語ったものであり、「地核と融合している」以外は未だはつきりと所在の分からぬものだったから。

『聖杯、あらゆる願いを叶える万能の願望器が、突如として出現した。

そして聖杯は、宿ったトワの願いを叶えた。

……幸いだったのは、トワが悪辣な願いなど持たない本当に無垢な少女だったこと。聖杯が叶えたのは、生命としての基本原理、「生き続けたい」という素朴な意志で。

聖杯は願いを受け、トワを不死にした。

……そこから、カルデアにとつての悪夢の始まりだったのさ』

語る少女は眉間にシワを寄せ、険しい表情をつくった。

『聖杯が出現したこと、トワが不死になったことをカルデアは懸命に隠したが、前所長マリスビリーの死亡や内部工作員のこともあり、わずか5年が限界だった。

2015年、カルデアで二度爆発事件が起きる。

犯人は不明。そして科学者と魔術師を含む大勢の人間が亡くなり、外壁にすら穴が開いた。

特に、当時の実験に参加していた魔術師47人の完全死亡は、カルデアにとってかなり痛かったようだ。

……一人だけは、冷凍措置が間に合って生き残ったようだけど、誰が助かったのかの情報は私にすら隠された』

彼女の話は、私の焼けた故郷のことを思い出させる。

もうもうと立ち込める煙、焼けていく人々、無数の瓦礫。

——世界が滅んでいくような、あの景色を。

『話を戻そうか。』

カルデアが聖杯を秘匿していたことは暴かれ、政界や魔術世界から激しい批難を浴びた。

所長であったオルガマリーは、助命を求め、国連へ協議に向かったけれど、拘束された。

その後の消息は……不明だ。遺体すら見つからなかったと伝え聞いている』

700年前の話だというのに、彼女の言葉には、鮮烈な悲しみがいまだ残っているように聞こえた。

『その後カルデアは、聖杯を狙う多くの組織から攻撃を受けることになる。

——世界のパワーバランスが崩れることを恐れた国連。

——大国を下す好機は今だと立ち上がった小国。

——聖杯を手にし、解析しようとした魔術師達の団体、ロンドンの「時計塔」。

その他大勢の、願いを叶えたいもの達。

彼らはあらゆる方法を使って聖杯を奪い取ろうとした。

……カルデアを中心に、世界を巻き込んだ聖杯戦争が始まったんだ。

所長を失った職員達は、ロマネ・アーキマンを所長代理とし籠城したが、建物の地上部分は爆撃によってほぼ破壊された』

幼い頃に見た戦争映画を思い出した。

正義も悪もごちゃ混ぜになって、人が死んでいく、そんな画面の中の戦争を。

『完全に物資の供給が断たれていたカルデアだったけど、地下施設のお陰もあり、それでも2年は持ちこたえた。

……地獄のような籠城戦だったと、記録には残されている。

目減りしていく食料、水、薬品。

過酷な環境で精神に異常を来す職員きた。

それでもアーキマンはなんとか全体をまとめあげていた。

……もちろんその陰には、さるサーヴァントの助けがあっただけだね』

「そのサーヴァントって言うのが、ひよつとして？」

『そう、私を作り出した大天才、レオナルド・ダ・ヴィンチさ。』

聖杯に招かれ現れた、カルデア所属のたった一騎のサーヴァント』

その名前は知っている。学校で勉強をした。

レオナルド・ダ・ヴィンチ。ルネサンスの時代を生きた万能の天才で、今に繋がる技

術すらも当時考え付いていたという。

『……けれどそれでも、カルデアは最終的に世界に屈した』

少女は暗い声で結論を言った

『敗北の後、聖杯はトワ・キリエライトごと奪われた。』

でも、そこで諦め終わるカルデアじゃなかった。

彼らは密かに作っていた作戦車両に乗り込み、トワの奪還とカルデアからの脱出を試

みたんだ。

その車両こそが、今君たちが使っているデザートランナー。

真の名はシャドウボーダーという。

この車両は職員を逃がすため、敵の目を欺くため、二両作られた。

特別な機能を持った、黒の車両、A面と。

寒冷地迷彩のため、白く塗られたB面。

A面はレオナルド・ダ・ヴィンチが直接操縦し、この私は、B面の操作補助のために作られた。

白い方が、後のデザートランナーだね』

つまり私達は700年前に作られた車に乗り、旅をしていたことになる。先ほどから話されている内容といい、実感を得ることが難しい。

でも、これが現実、現実なのだ。

『カルデアは目標を「トワと聖杯の奪還と、聖杯戦争の終結」に定め、死もいとわないうストミツシオンを開始した。

その間にも、情勢は目まぐるしく変化していた。

時計塔がトワと聖杯の分離に成功したとの情報を手にしたカルデアは、戦火広がるロンドンに上陸したけれど、すでに時計塔は壊滅し、トワと聖杯は奪取された後だった。

奪ったのは、カルト宗教が母体となった少数の魔術師達。

彼らの目的は、聖杯を使い自分達の信じる神を降臨させることだった。

魔術師達がハワイ、キラウエア火山に移動したことを知ったカルデアは、海を渡った。そして、世界中から追われながらもハワイ島にたどり着いた。

……その時にはもう、人員は10人も残っていなかったと記録されている』

私は座った状態のまま、膝に置いている両手を見つめた。

過酷な旅を続けた彼らの苦難を、私は想像する。

炎が広がっていく町、激化していく戦争、欠けていく仲間達。

彼ら彼女らはどんな気持ちで、旅に挑んでいたのだろうか。

それはきつと、「世界を救う」という途方もない使命感から来るものだったに違いない。

『ロマネ・アーキマンとレオナルド・ダ・ヴィンチ、残されたカルデアのスタッフは協力し合い、聖杯の機能を封印する魔術を編み出した。

術式を産み出した代償に、レオナルド・ダ・ヴィンチは消滅した。

……そしてここまで旅を続けていた白い車は、数名のスタッフを逃がすためキラウエア火山より離れた。

だから、この私は、結果を記録でしか知らない』

小さな少女、天才に作られた彼女は、カルデアが辿った結末、その最後を語る。

『ロマネ・アーキマンと、自らの意志で残ったスタッフ達は、最後の戦いに挑んだ。

決戦の後、ロマニだけが生き残り、トワを救った。

次に彼は、聖杯と封印の魔術式を腕に抱いて、キラウエア火山に沈んだ。

もう二度と、聖杯が誰の手にも渡らぬように。

……最終的に、黒の車も白の車も国連軍に捕まったけど、その前にスタッフ達数名は逃げ出せることができた。

——そしてカルデアは、私だけを置き去りにして、完全に終わったんだ』

全てを語った少女、ダ・ヴィンチちゃんこと『グラン・カヴァツロ』は私達に目線を投げかける。

『その後世界がどうなったのかは、君達の方が詳しいんじゃないかな』

誰かが話し出すより何より早く、アダムが机の上にぴよんと乗り、その滑らかな人工音声で喋り出した。

「結局のところ……聖杯戦争は終わりませんでした。

優勝商品たる聖杯が無くなったことで、誰もが着地点というか、落とし所を見失ったということもあるでしょう。

そのまま第三次世界大戦へと続き、平和と秩序は破壊された。

争いはわずか数年で終わりましたが、地球人口の2/3が失われ、使用された兵器による汚染地域の拡大により、地上は人類の生存に適さない場所へと変わりました。



それでも、壊れた世界で数百年戦争は続き、人類は数を減らしていくばかりだった。  
……西暦2300年代、女神リリスが現れるまでは」

そこから先の歴史は、学校で習ったので良く知っている。

私はアダムに続くような形で話した。

「女神リリスは人々の争いを治め、人類に様々な発明品と安全に暮らせる地下都市、それを管理するA I『都市運営システム』を与えたんだよね……？」

「んふふ……そうですよモモタ・トバルカイン。」

ですが、やはりあなた方が学習している内容には誤りもある。

地上にある軌道エレベーターは、2030年代から2070代にかけて大国が作った  
ものですし、地下都市もわかり。

A Iも、基礎研究は2000年代から長い間行われていました。

女神リリスが一から作ったものなんて、液体リソースの雛型くらいです」

「そ、そうなんだ……」

流石、リリスの元夫を自称するだけある。私が今まで当たり前のように信じていた事柄をあつさり否定してきた。

「さて……アーキマンレポートとカルデアの件から、非常に貴重な情報を得ることができました。」

ダ・ヴィンチ嬢、ありがとうございます」

四足歩行の小さなロボットが頭を下げる形の前屈みになり、礼の姿勢をとる。

それから頭を上げた。微かな駆動音が会議室に響いた。

「過去……カルデアより全ては始まった。よつて私は、この世界の救済にもカルデアの力が必要になってくるのだと思います。

デザートランナー、ダ・ヴィンチ嬢。

カルデアの技術を研究して召喚された、様々なサーヴァント達、モモタ・トバルカインを代表としたデミ・サーヴァント。

これらの存在が、それを証明しているようにアダムは思います。

……私達はきつと」

ロボットの胴体部に埋め込まれた一つ目を思わせるカメラレンズが、人間の瞳孔のように収縮を繰り返す。

「カルデアを……もつと知り、カルデアに向かう必要があるのだと感じます」

「カルデアに……向かう……」

アーチャー961が言葉を受け呟いた。

「そしてアダムは……カルデアについて深く知ることの出来る存在を保護しています。

かつて、カルデアが爆発事故に巻き込まれた際、唯一凍結処理が間に合い、生き延び

ることの出来た人物です。

彼女は700年もの長期間、冷凍保存されており、アダムは幸運にもそれを見つけた  
しました。

ただ……安全な解凍方法だけが分からなかった。けれど」

アダムがじつと、青い立体映像の少女ダ・ヴィンチちゃんを見つめる。

「かつて……カルデアに所属していたあなたなら、それが可能なのでは？」

私はそう考えましたが、どうですか？」

『……確かに、その技術を持っているのは、もうこの世界では私だけだと思う』

少女は答えた。

「その女性が冷凍されたコフィンは、設備ある、落ちた『リリスの空中庭園』にて嚴重に  
保管されています。

なので皆さんには、アダムの道案内にて空中庭園に向かつていただきたく思います。  
冷凍保存されている個体の名前は分かっていますが……また後日に。

向かうかどうかについて、皆さんの意志もお聞きしたいですし。

もう夕方5時ですしね、今日は一度お開きということだ」

私は会議室に備え付けられていたデジタル時計を見る。確かにAIの言うとおり、5  
時を数分過ぎたところだった。

自然光を取り込んでいる移動要塞の天井が閉じられ、一気に暗くなる時間帯。

帰るみんなの身の安全のことも考えると、確かにこの辺りで会議を切り上げた方が良さそうだ。

「……じゃあ、解散と言うことで。」

今日話された内容については、私とノインがまとめておく」

「ノインと、ミライに、お任せです」

頼もしいことを言ってくれた赤髪の少女と金髪の少女に情報整理を任せ、私は立ち上がった。

そして、皆と一緒に会議室を出て、エレベーターに乗り、暗くなりつつある要塞の乾いた道を辿り家へ帰った。

「南極にある、カルデア。」

それにプラスして、落ちたりリスの空中庭園、かあ……」  
夜も0時半をすぎた頃。

ガトモスの家、薄いマットレスと毛布にくるまりながらつぶやく。

最近目が冴えて、眠れないことが増えた。

そんな日は日記の続きを書いたりしているのだけど、ダ・ヴィンチちゃんからあんな

話を聞いた今日はそんな気持ちにもなれなくて、ただベッドの上でごろごろとしていた。

「……ちよつと歩いたら、気分も晴れて眠くなるかな？」

そんな独り言を呟いて、私は起き上がる。

出かける前にコップ一杯の水を飲んでから、フードをかぶり、鍵を閉めて、私は暗く閉ざされた天井の中に広がる町の中を歩き始める。

目指す場所は――。

涙型の移動要塞、その切っ先に、外に展開しているソーラーパネル点検用の通用口があつて、長い梯子を登り、私はたどり着く。

「風が気持ちいい……」

ここは言うならば要塞の屋上だ。

転落防止用の簡素な金属製の柵が数本立てられているだけのこの場所は、空が存分に望め、見晴らしも良く、乾いた冷たい夜の風が吹き抜けていた。

ここは、何週間か前にミライちゃんとお話したあの場所。元を辿ればガトモスが教えてくれたんだった。

要塞は、今日の夜は動いていないようだ。

星の煌めく音すら聞こえてきそうな、静かな夜。

締め切られた要塞内部から、開放感のある場所に來られた私は、大きく背伸びをして、土ぼこりのついた床に腰を下ろす。

黄土色の半袖短パンだからちよつと寒い、でもデミ・サーヴァントだから平気。

「空、広くて大きいなあ」

昔はこの空の下を、人間が自由に旅していたんだ。

そして瞬きしてから思い出す。

「でも、この空の上には」

されど自由はなくなつた。

ミライちゃんが言うには、この空を、地球を一周するように。

「……機械化サーヴァント、『衛星軌道上展開兵器ヴリトラ』がある」

聞こえてきたのは涼やかな男性の声。私は肩を驚きでびくりと動かしてから、恐る恐る首だけを後ろに向ける。

「アーチャー961? どうしてここに」

「要塞内は息が詰まる。だからその……気分転換に、ちよつと」

良く知っている人の姿がそこにあつた。

サンダルのようなものを履いて、裾がポロポロの長ズボンに身を包み、上半身はロー

ブというか布を巻きつけて隠している。

両腕を失った彼、アーチャー961が私から少し離れた場所に立っていた。

「……梯子、どうやって登ったのかって聞きたいんだけど」

「？ 両手が無くても梯子くらい登れるだろう？」

そうだ、彼はサーヴァント。常識の外にいます。

アーチャー961は私のすぐ側に座ると、その黒い双眸でこちらをじつと見つめた。

「少し、話さないか？」

と言って。

第120話 小さな希望<sup>星</sup>の、小さな終わり

終わり

# 第121話 別れが来るとしても、いつか貴方と見た空は

時刻は夜の7時頃。日もすっかり沈んだ。

眼下に広がる果てしない荒野は、やや欠けた月の光を受け、夜空を薄めたような冷たい青に染まっている。

超巨大移動要塞『カルナ』、その屋上部にて、私はアーチャー961と話をすることにした。

立っているのもなんだからと、お互い隣り合うように座る。

アーチャー961は左側に腰を下ろした。

私と彼の間には少しだけ距離はある。これは異性同士だから仕方がないかも。

(もうすぐ、この要塞に来てから一ヶ月、か……)

しみじみ時の流れを思う。そんな私の頬を、冷たい夜風が撫でた。

隣にいる彼の様子がふと気になって、私は声をかける。

「アーチャー、こんな鉄板の上に座り込んで、お尻、冷たくなっちゃわない？」



「なっっちゃわないが……」

言われた彼は首を傾け、一瞬だけ腰の辺りを見たが、すぐにまた目線を前方へ戻した。移動要塞の屋上、なだらかな角度がついている鉄の板の上。

ここから見えるのは、生命の存在を拒むかのような荒野だけだ。

二人して前をぼんやりと眺めながら、世間話をする。

「勝手に出歩いてて良いの？」

「リーダーミライから許可は取った。

それに……」

アーチャー961の黒い眼差しが肩の方へちらりと向いた。

「この状態では、出来ることもたかが知れているからな」

自らを自嘲するような声でつぶやく。

私はふと、そんな彼の胸元……ローブで半ば隠されたそこに、月の光をきらりと反射する薄い板があることに気がついた。

紐が通されてあり、推測するに首からかけられているのだろう。

「アーチャー、ひよつとして何か首からかけてる？」

「ああ、これのことか」

彼が答えてくれた。

「ずっとガレスに預けていたんだが、今日のダ・ヴィンチの話を聞き、必要になるかも知れないと思い、受け取ってきたんだ」

ガレス、アーチャー961と行動を共にしていた、少女騎士の姿をしたサーヴァント。私はそのことを思い出しながら、プラスチックか何かで作られた板の表面、そこに記されていた文字を読む。

「……えと、ロマニ、アーキマン？」

『アーキマン・レポート』を残した、カルデア所属のあの人の名前だ。

「俺は偶然にもこれを手に入れた。カルデアの職員証……だそうだ」

「どうやって手に入れたのかってことは、聞かない方がいい感じ？」

「そうだな、今は、話すのは難しい」

言うところアーチャー961は、体をもぞもぞとよじらせて、身にまとうローブを動かし、職員証を隠してしまった。

「……貴方の、腕のことも」

「あまり、話したくはない」

「そっか。じゃあ無理には聞かないよ。」

「聞いちゃってごめんね」

彼の方に顔を向けて謝罪する。見えた相手の表情は、少しだけ寂しそうな、大人びた

ものだった。

(きつと、私の知らないところで、アーチャー961にも色々あったし、大冒険も繰り広げたんだろうな)

だったとしても、それを話す権利を持つのは彼だ。

私が無理に聞き出したり、ずけずけと足を踏み入れるべきじゃない。

「……」

「……」

話題が途切れてしまった。

手持ち無沙汰になった私は、目線を夜空に向けてみた。

星はびかびかに瞬いている。

私とアーチャー961の間に流れる風は涼やかだった。

夜風の音だけが、しばらくあった。

「——あの空の上に、衛星軌道上展開兵器『ヴリトラ』がいる」

数分後、アーチャー961がぼつんと一言喋った。

私は言葉を返す。

「ミライちゃんとアダムの話によると、リリスのサーヴァントであるカルナが、兵器として改造された姿が『ヴリトラ』……ってことだよね」

「……そのような話になるだろうか」

彼は、重々しい口調で返事をした。

「もし、世界を救うのだとしたら、あの『ヴリトラ』と戦う……」

続けて話す彼の黒い瞳は、強い感情の動きによるものか細かく揺れていた。

「戦う、ことになるのだろうか」

そこまで言い終えて、彼は一息吐いた。

「どうやらこの話題に対し、ひどく緊張している様子だ。」

「そうだね、なんとかしなくちゃいけないね」

『ヴリトラ』と言われても、まだ私はその存在を現実のものと思えないでいた。

旅の最中で見た、爆撃された地下都市廃墟が頭に浮かぶ。

地下にあつたというのに、岩盤すら破壊され、地上からも内部の様子が伺えるほどに

なり、さらさらとした砂が吹き溜まる無人の建造物と化していたあの場所。

次に脳内に浮かんだのは、ミライちゃんが教えてくれたこと。

上級都市『ピオーネ』と、それに隣接する形で建っていた軌道エレベーターは、リリ

スの蛇たる『ヴリトラ』の攻撃によって焼かれ……蒸発した。そんな情報を私はミライ

ちゃんから知らされていた。

……どこに逃げたとしても攻撃してくる、リリスの命令に忠実な兵器。

威力は絶大で、建物を跡形もなく蒸発させられるほど。

しかもその体長は、地球を一回り出来るほどあるのだという。

そんな『物』を相手に、果たして勝ち目はあるのだろうか？

流石の私も、不安を覚えていた。

「もし戦う時が来るのだとしたら……俺が、『ヴリトラ』と戦うよ」

言い出したアーチャー961の声は決意に満ちていた。

けどそれは、『自信』を感じるものではなく、どこか『悲壮』な響きに聞こえた。そんな声のまま、彼は言葉を続ける。

「きつと俺は、『ヴリトラ』を殺すために召喚されたんだ。

——世界を救う。そのために、俺は俺として世界に落とされたんだ。

……あの変わり果てた男を、殺すのが俺の役目なんだ」

こわばった体。後ろ向きな決意に満ちた声。

(良くないな……)

と私は思った。

真面目で誠実なのがアーチャー961のとってもいいとこなんだけど、それが裏目に出ると、こんな感じで自分を追いつめるような振る舞いになってしまう、のだろう。

私は思い切って話題を変えてみることにした。

「カルナとアルジュナって、兄弟なんだっけ」

反応を知るため彼の顔を見る。虚を突かれたのか、眉を上げ目を見開いてびっくりしていた。

「……そうだ。」

そして運命の下、殺し合う定めとなった」

アスカが『マハーバーラタ』を要約してお話ししてくれたから、おおよその内容は知っている。

(けど今、何より重要なことは)

私は立ち上がり、彼を見た。

ボロボロの衣服に身を包み、腕すらなくして外、内側共に傷だらけになっている彼を。

「……でも、『アーチャー961』は『アルジュナ』じゃない」

「……」

「でしよ?」

いかに『ヴリトラ』がカルナの変性した存在だとはいえ、それに対抗するようにアーチャー961が立ち向かう必要はない、ないのだ。

だって彼は、アルジュナとよく似た姿をしていても、『アルジュナ』ではないんだから。『自分がアルジュナの想いを継がなきゃ』とか『アルジュナの代わりにならなきゃ』と

か、そう考える必要はないんだよ？」

私が訴えかけたことに対し、しばし彼は無言だった。

胸の内をさらに伝えるため、私は言葉を発する。

「アーチャー、どうか一人で悩みすぎたり、抱え込んだりしないで。

もつと私やアス力を頼つてよ。

仲間、なんだからさ」

「……分かつている。」

何かあつたら、仲間を頼るよ」

アーチャー961は言ったこととは裏腹に、瞬きもせず、体を堅くしている。

体の緊張と同じくらい、彼の意志は堅くなっているみたいだ。

私は一度座り、少し考えた。

そしてふと、こんなことを思いついた。

「本当に、戦うしか手だてはないのかな？」

今までの旅、沢山の敵と戦ってきたけど、なるべく戦闘を回避しようとしてきたし、事実、何回か敵や資源回収用ワームをやり過ぎして来たことはあつた。

そもその話として、強大な『ヴリトラ』を、倒す必要は本当にあるのだろうか？

戦わずに行けるのなら、それが一番ではないかと私は考えたのだ。

「……何をおかしなことを言っているんだ、モモ」

低い声を出し、眉間にしわを寄せ、やや不快感を表情に出してきたアーチャー961。私はそんな彼の態度に慌てながらも、考えを話す。

「だつてさ、だつてさ、『自分がやらなきゃ』って考えて、無理にアーチャーが戦う必要はないし、相手も人格のあるサーヴァントなら、そのつ、話し合いとか……出来るんじゃない？」

思い出すのは、砂漠で戦ったサソリ型殺人機械と、内部に宿っていたAI。(ヴォイドメロディとは、お話しできたけど途中で会話が破綻してしまった。

それでも会話できたことには違いないし……うーん、いくらアーチャーの緊張を解いてあげたいとは言え、ちょっと無理矢理な考えだったかな……?)

久しぶりにやらかしてしまったかもしれない。

昔、タブレットに入ってたのでやってみた恋愛ゲーム(楽しみ方が全然分かりませんでした。04がつまんなさそうな顔でサクサク攻略しクリアしてくれました)での、『BAD COMMUNICATION!』という赤い警告文が、頭の中で立体となりくる回る回りだす。

その証拠だと言わんばかりに、アーチャー961は少し怒ったような声で話し出した。



「マスターモモ！ 俺達は今までの旅路で、散々ワームや機械化サーヴァントと戦ってきただろう！

どれも凶悪で恐ろしく、油断ならない敵だった！

その内1体でも、俺達の話を……話を？」

彼の顔を覆っていた怒りと緊張が解ける。

自分自身の言葉で何か気づいたのか、はっとして、話すのを途中で止めた。

次に言ったのは。

「……俺は『ヴリトラ』と話をした。

一方的ではあるが、話をしたんだ、奴の声を聞いたんだ」

「……ええ?!」

衝撃の真実に、私は座ったままかなり驚いてしまった。おっきな声が出た。

「私達と離れ離れになっている間に、そんなこともあったんだね。

それで、相手はなんて」

「かなり支離滅裂なことを話していたが、俺に、かなり執着している様子だった。

……俺を、『アルジュナ』だと勘違いしているようだった」

顎を引き、考え込む様子を見せるアーチャー961。

「奴の執着を利用すれば、もしかしたら、『殺す』以外の結末にたどり着けるかも知れな

い」

そう口に出す彼の目は、月の光が入り込んで鋭い眼差しとなっていた。

(頑なだったけど、別の方向にも考えられるようになった……のかな?)

私はなにかヒントになるかもしれないと思い、『あれ』を話してみることにした。

「あのね、ミライちゃんがアルジュナからの伝言を教えてくださいよ？」

実は私、彼女から別のお話も聞いているんだ」

光を宿す眼差しが、彼から右側に座っている私を真つ直ぐに見た。

私はちよつとだけ気恥ずかしさを感じながら、話す。

『世界の果てに最後の海がある。その嵐の先に、楽園へ至る塔がある。』

竜を眠らせ、月を手にし、砕かれしものを持つべき者へ帰した時、世界は救われるで

しょう』

これ、『アルカディア伝説』って言って、地上じゃポピュラーなお話しなんだって。

もしかしたら、『ヴリトラ』を何とかする手がかりがこの話に入ってるかもしれない。

「どうかな？」

日記というかメモ帳に書いていたから、まだ鮮明に思い出せた。

話を聞き、瞬きを二、三度するアーチャー961。

「レジスタンス達のおとぎ話……か。

少しだけ聞いたことはあるが、詳細は知らなかった。

教えてくれてありがとう、モモ」

彼はそう言うのと、聞いたばかりの伝説をもう一度繰り返す。

「『竜を眠らせ、月を手にし、砕かれしものを持つべき者へ帰した時』……。

『砕かれし』?」

961の眉が上がり、目が大きく見開かれた。何かに気がついた様子だ。

「モモの言う通りかもしれない……何とか、なるかもだ」

急に立ち上がったアーチャー961。その顔に、もう悲壮感はない。

そんな彼を見上げていたら、ポケットから何かが落ちそうになっているのに気がつい

た。

とうとうコロリとこぼれ落ちたそれを、私は座ったまま、左腕を伸ばしてキャッチす

る。

「なあに、これ」

大きさは手に収まるほどで、透明なビニールの包装に包まれている。

中身は白っぽい丸いもの、かなり軽い。

「……すっかり忘れていた! 饅頭だ! ある人から貰ったんだ」

ちよつとへしやげているお饅頭が、なぜかここにあった。

白い表面をしげしげと観察してみると、漢字と見られる何かの文字が焼き印されているのが分かる。

「……何日前のお饅頭なの?!」

地下都市廃墟などでは、数百年前の缶詰めやレトルト食品が見つかることがある。

そういった物達は、包装が頑丈に作られているし、きちんと滅菌されているので、表面が破れたり壊れていない限りは食べることが出来るが……。

このお饅頭は、透明ビニール一枚という、あまりにも儂い防御性でここにある。

必然的に、鮮度が気になった。

「焦らないでくれ、モモ。和菓子というのはとても日持ちするんだ。

召喚時に付与される知識で、そう学んだ」

と言いながら、アーチャー961の目はちよつと泳いでいた。

バーサーカー04に比べて分かりやすいなあこのサーヴァント……。

「モモ、悪いんだが」

彼は困ったような表情で饅頭を見る。

「……食べたいの?」

「他者から施された物だから、俺は食べたいと考えている。

どうせなら半分ずつ分け合うことにしよう。

君が要らないなら、俺一人で食べるが……」

「食べるよ！」

私、『ワガシ』つてももの食べたことないから、実は興味津々だったの！」

彼を傷つけないためにも、そう言うしかなかった。

まあ、まるつきり嘘を言っているという訳でもない。

『ワガシ』なんて、文献でしか知らないから、ワクワクドキドキはしている。

……半分くらい、賞味期限のことで胸がドキドキしているんだろうけど。

「じゃあ、私が半分こにするね。」

手で押して切れ目を作ってから……ちぎって分ける。

うん、うまくいった」

腕のない彼の代わりに、私が半分にした。

表面が乾燥しているということもあつてか、作業はスムーズに進んだ。

手のひらに収まるサイズの小さなそれを、手で割って、アーチャー961へ。

「ありがとう、モモ」

立っていた彼は一度片膝を地面につけ、姿勢を低くすると、私が差し出していたお饅頭を唇で受け取り、歯と舌を使って口の中に運ぶ。

器用だなあといいながら、私も続いて食べた。

「ん……！」

感動が胸に広がった。

サクツと軽い食感の皮を噛みしめた後、口の中に広がるのは、香り良く、奥深い甘みあるなめらかなペースト。

配給で数回食べたことのあるゼリーやプリンとは全く違う、咀嚼を続けることで生まれる旨味が、お饅頭にはあつた。

きつとこれには、熱い飲み物がよく合うことだろう。

そんなことを考えてから、私は少し笑う。

「ふふつ、こんなことしたのバレたら、アスカちゃんに嫉妬されそう……！」

「?」なぜアスカがモモに嫉妬するんだ？」

お饅頭の白い皮の一欠片を頬につけたまま、彼は不思議そうに首を傾げた。

「……アーチャーにつぶ……！」

こんなにも鈍いと、アスカの『彼を想う気持ち』にも気がついてないかも知れない。

（——いや流石にそれはないか！

流石にね！ 十何年も一緒にいるのなら流石にね!!）

などと思いつつ、膝立ちしている彼の顔を見れば、私に「馬鹿にされた」と感じたのか、まぶたを半分下ろし、じとりとした不機嫌顔で私を見ていた。

「俺は鈍くなどない。

腕を失おうが、鋭敏だ」

「そ、そうだね、アーチャーは敏感だもんね、敵の襲撃にも誰より早く気がつけるもんね」  
「当然です」

……それから数分間、私は彼の機嫌を直すのに苦労した。

話し始めてから一時間くらい経つただろうか。

私は彼と隣り合つて座り、始まった時と同じように夜空を見上げていた。

星は瞬き、何光年も離れた場所の光を教えにくれている。

「……アスカやモモに、再会できて良かった」

突然そんなことを言い出したアーチャー961に対し、私は微笑みながら言葉を返す。

「お饅頭食べられたから？」

「そうだな……こうして生きていないと、食事を楽しむことも出来ないし、それに」

彼は穏やかな口調で、黒々としたまつげを瞳に被せながら、優しく話している。

「誰かに相談することも、美味しいものを分け合つて食べることも、仲間と一緒にじゃないと、出来ないから」

そう言つて、穏やかな表情でこちらを見る彼。

(……アスカが夢中になるのも分かるなあ。

だって、こんなにも純真人なんだもん)

私は、彼と再会できたことが改めて嬉しくなってしまう、胸がいつぱいになりもう何にも言えなかった。

夜空をバツクに立つ彼の髪を、冷たくも心地良い風が揺らしていた。

……思えばこの時から、私とアーチャー961と考えるすれ違いが起きていたのかも  
しれない。

それでも私は、彼が元気を出してくれたみたいで嬉しくて、深く考えもしないで笑っ  
ていたのだ。

ずっとずっと、アーチャー961と一緒に居れるのだと、根拠もなく思っていて――。

第121話 別れが来るとしても、いつか貴方と見た空は

終わり